

ライナー曇らせ?…いや、曇らせお兄さまだ!

栗鼠

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公「ジークお兄さま」ができるだけ苦しんで、それを私が堪能できるように努力します（ニチャ）

*地雷モリモリ注意。

*22/05/14 本編完結。 *23/02/17 超低速加筆修正中↓九↘十

章済み。

*番外・IF√↓ <https://syosetu.org/novel/326>

チア||サンから主人公のえつつつなイラストいただきました！

目次

【一章】お兄さま♡編

愛が重い、この少女。―― 1

おてて繋いでいきましょう。―― 12

ぼくは「おにーたん」―― 27

わ、私に乱暴する気でしょう!? エロ

同人誌みたいに! エロ同人誌みたいに

!! ―― 44

せんせーい、AちゃんがZくんを泣か

せました〜! ―― 56

抱擁する世界、灰色のめはひらく

70 ―― 93

【閑話】非売品の笑顔 ―― 93

【閑話】あなたが落としたのは、このや

たらドベドベしている少年ですか? それ

ともみんなに兄貴ツラしている二重人格

中途半端野郎ですか? それとも銃を口に

咥えちゃうお茶目な副戦士長ですか?

さあ、選んでください。―― 103

【閑話】女たちの墓場、尾を咥えし回遊

魚 ―― 115

【二章】クソデカ感情持てあまし編

砂の大地に紡がれていく足あと

130

駆逐してやる、お前の胸から――そ

の、全てを。―― 151

ツムツムつみの木	164	前妻と後妻とそれから悪化（アツカー）	283
割と円滑にできているらしいこの世界	179	マン	
感情が抑えきれなくなった時は…叫べ		テンテン	
！Ms. Kusosyojo	199	ドンガラガツシヤン	299
空は青いがお腹は黒い	218	「掴もうぜ！」「何を？」「わからッない	
右手の拳を握り、その人は何を思う。		！	318
ハローワールド／グッバイエブリワン	238	ピッカピカの壁内一年生	333
Guess（ゲスウ） what？	254	接種後の多大な後遺症により	350
		幸福を喰らう	369
		美少女（ゲス）と野獣	385
		割と似てるらしいぜ、アイツら	398
		子供会議、内一名遅刻	414

私の側に近寄るなア————ッ!!

427

タイム風呂敷〜!

—————

453

濁りし翡翠の眼

—————

464

【四章】もうマヂ無理。編

電池が切れた時計の針は

—————

476

スマス「異議あり!」

—————

499

もうマヂ無理。 タヒのお。

518

愉悦使いアウスターと巨人の女

533

贋作と本物

—————

550

不可解な腹綿

—————

569

僕らの行進

—————

583

ンアツ——!!

—————

607

全て「オレおま」になりたいよくだ(ゴ

ロリ感)

—————

626

ザンコクな悪魔のThese(テーゼ)

—————

647

ドドすこすこすこすこ「♡」注入

666

ヒゲ面のオツサン、25さい児

686

私は悪い子。

—————

701

【五章】「幸せ」ってあんにやもんにや編

神にとつての悪魔さま

—————

714

第四伍話 理不尽な、痛み 725

月光(ゼツコー) チョー? 749

失敗したら30分待たなきゃいけない

リスキーな踊りより、ポタラさんを使っ

た方が早いじゃないか…! (ただし副作

用あり) 766

スヤア(☒ω☒) 786

どうして空は青いんじゃない? 799

愛想笑いはいらなyear(イヤー)

822

チュンチュンチュン、チュチュンが

チュン 840

おじさんと私とイツヌのおまわりさん

私たちのパラノイア [上] 852

私たちのパラノイア [下] 870

ドーナツのようなこのカラダ 886

赤裸々カーニバル 909

遺伝ってのはそんなにアテにならない 923

クツパ戦 952

ここから入れる保険ってありますか? 968

旋回する海鳥、翠の猟師。 992

【六章】 交通事故編

夢の国の変態 1020

誤作動、作動中・・・

3P

戦士鍋

ぼくらはみんな生きていて、生きてい

るから苦しいんだ。

「どうか祈ってくれ」と、誰かが言った。

喉奥クチュクチュ

ツア、ソーレ！昼ドラ日和

そこに「愛」はあるんか？

『××』

【七章】新婚生活編

あ あ~~~~？？？

1187

11711152113411181103

1086

107110531038

ぼぼぼーぼーぼーぼぼう

法華（ホツケー）ジエンガ☆君の曇り

にレポリユーション

破壊的思想なYOU（ユー）、○爰

（ヤ）っちゃいなYO！

マグマグ永久凍土

後ろを知らない少年少女

ヨオ~~~~シツ!!ヨシヨシヨシヨシヨ

シヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨ

シヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨ

シヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨ

シヨシヨシヨシヨシ

微熱

13101295

1295

128112581240

1240

1227

1205

お前なんか、お前なんか。

—

1327

あつ！くまの子【表】

—

1347

ちよつと待つてくださいよオーソックス

そして祈りなさい

—

1547

【裏】

—

1371

アニチャンブリケ

—

1389

愛の重機「ロ…」

—

1407

アウラ、逝（イ）つきまーす!!

1601

ああああああああ（文字数制限）

1620

1435

【八章】MADE—IN—ホニヤララ編

売れないロックバンド

—

1455

われわれは。

—

1468

キミが生まれたその日から。

—

1499

君はどうしてフリーダム。

—

1519

ドンブラコンッコ

—

1531

「瞳を閉じなさい 手を握りなさい

—

1547

鬱だナー

—

1564

苦しいんだナー

—

1583

ああああああああ（文字数制限）

1601

眠りのアンバサダー

—

1620

永享・享受・受胎

—

1636

胎生

—

1656

生子（うまれご）

—

1674

子安

—

1688

安永

—

1703

永永（エーンエーン）

1724

【九章】「神聖悪魔ちゃん」編

お前が大きらいな私が大すきなお前が
大きらい。

1830

私は私の選択をするとき、私ではない

【十章】丹碧の境界線編

他人の選択を見て私の選択を選ぶよう

帰るときによく泣いていた子どもの手

だ。

は、小さかった。

1848

アウリンTV

チキチキ☆ラブマシーン

1868

地雷系ビジュ

実に、美しい……（絶頂）

1888

私になれなかった私を愛してくれる男

んんん（∞）

1905

を愛している私は私の名前を知ってい

*

1920

る。

半シンの母体

1932

「ギョーアーーーー」♡♡♡

少年少女のラブソデー

1948

空前絶後のオ、超絶怒涛のヒゲ面ヒロ

おにいちゃん

1965

インソン

ライナー曇らせ？…いや、曇らせお兄

1814

さ
ま
だ
!



1982

【一章】お兄さま♡編

愛が重い、この少女。

生まれた時から、私は「私」だった。

前世の私の最期は、所々モヤがかかっている。青い空を眺めるようにして、身体が冷たくなる感覚。身体に突き刺さった無数の矢が、私の死因だった。

それ以上は何も覚えていない。誰に殺されたのか、自分が死ぬまでの経緯も覚えていない。年齢は？身分は？…どれもわからない。ただ、一つだけ確かなのは身体を見た時に胸があつたから、女であつたということくらい。また最低限の生きる上での知識が、不思議とインプットされている。

そんな私は今世も女だ、まだ胸もクソもないんだけど。真つ平らに舗装されているんだけど。

今の私は超絶に可愛い幼女だ。自分で言っておいてドン引きするが、事実可愛いのだから仕方ない。容姿はお母さまで、髪の色はお父さまに似ている。

試しにこの小ちゃい紅葉のようなお手手を、一回目に入れてみるとするじゃろ？する

と、なんということでしょう——失明します。当たり前のことだ。目に入れても痛くない、つて言うんだったら、実際に一回入れてから言ってみろ。もちろんこれは私なりのブラックジョークだ（ニッコリ）

話は変わって「私」の意識が目覚めたのが、どうやら今世の私の自我が芽生えたことがきっかけらしい。これまでギャン泣きクソガキ野郎だった私は突如大人しくなり、絵本ばかり読むようになった。とは言っても文字は読めないから、私に美貌を遺伝させてくれたお母さまに読んでもらって、今の世界の常識を身に付けている。

ちなみに私は「エルディア人」という種族で、今住んでいる国は「マーレ帝国」。その名の通りマーレ人が治めている国だ。

しかして二つの種族は仲良くお花畑を駆け回るような関係ではなく、エルディア人はマーレ人に管理されている。しかも収容区に入れられ、壁に囲まれて暮らしている。

何故そのような統治体制になったかについてだが、昔マーレ人は逆にエルディア人が治めるエルディア帝国の支配下にあつたらしく、何十年も前にマーレが「謀反♡」を起こし、それが成功して立場がひっくり返った。

お母さま曰く、一方エルディア帝国崩壊の裏では、当時の王が数多のエルディア人とその他の種族を引き連れて、なんだかパラダイスしてそうな島へ逃げ、壁を築いたそう

だ。当然これを聞いた私は思うわけです。

——え？何で私たちの祖先も行かなかったの？

お母さま、そこは行きましようよ。共に逃げていけば「管理」なんて不名誉な処遇を受けず、のんびり楽園ライフを送っていたんではないですか？話を聞く限り、マールは謀反の最中でエルディアから奪った「巨人」なるものを力を7つも持っているようですが、逃げた王様はなんと巨人の力の中でも頂点に立つ力を持っているそうじゃないですか。その力がエルディアにあるなら、マールのお膝元に残る必要なんてなかったはずでしょう。

まだ3ちやいの私が「どうちて？」と舌つたららずな声で聞けば、お母さまは天使のよ
うな表情から一転して、悪魔のような顔になった。『悪魔の民』だけに、なーんて……
あつ、お母さまそんなに私の肩を強く掴んでどうなさったの。そんな、私心の準備がま
だ——、

「マールに残った私たちは、革命を起こすその時を待ち望んでいるのよ、アウラー！」

「ま、ままつ、いちやい……！」

「我がフリッツ家が、必ずや……!!」

「ふ、ふりつちや?」

ちよつと待てお母さま、「フリッツ家」つてエルディアの王様の名前じゃなかったっけ? ……つていうことはですよ、もしかしなくともお母さまは、王家の血筋を引いていらつしやる感じですか? 話の内容からして、打倒マーレ帝国のために、我が先祖がパラディ島に行かなかつたのはわかつた。

………ということは、お母さまの血を受け継ぐ私は、当然その王家の血筋を受け継いでいるわけであつて。

そうなるらつ上のお兄さまも王家の血筋を引いているわけだ。ふーん……ふーん……?」

「あなたの『使命』は、我がフリッツ家の血を絶やさぬことよ。決してこのことは、他の人間に言つてはなりませんからね……アウラ」

それはつまり——子を増やせてことでしようか、お母さま。まだ3ちやいの私に何を言つてるんだ。まだ自我が覚醒した私だつたからいいものを、普通のガキだつたら小

首をかしげることしかできないよ。いや、私も理解が追いつかなくて小首を傾げているよ。側から見たら可愛いに違いない。だってお母さまの血が流れているんだもの。

「う、うーん……わかつちゃー！」

わからないムーブを演じながら、虚しくも理解が追いついてきた脳が「子孫繁栄」のワードに頭を悩ませる。別に好きな人と結婚して赤ちゃん授かるのはいいんだけど、3歳の頃から重圧をかけられてもなあ…。

私はまだしもお兄さまなんか、まだ6歳だというのに毎日戦士になるための訓練を行っている。朝起きたら既におらず、帰ってくるのも私が夢の中にいる頃。精神が確立していても、肉体による睡眠欲求からは逃れられないのだ。お兄さまの顔は、四六時中見ていたいというのに。

それに「本」に私が興味を持つようになってから、両親はここぞとばかりに洗脳教育をしてくる。

お祖父さまたちがマーレの教育に基づいた「エルディア人は悪魔の子孫」という思想を伝えてくるなら、両親はその考えを真っ向から反対してくる。私はさておき、お兄さまの洗脳はより深刻に進んでいる。

子供の時に受ける親からの影響は、きっと計り知れない。

私が王家の血筋を紡いでいく使命を背負わされているなら、お兄さまはいずれエルディアが返り咲く「道具」としての使命を受け、育てられている。

思うことは一つ。私たちは両親の道具ではない。

それでも私が「アウラ・イエーガー」——否、「アウラ・フリッツ」としてこの世に奇妙な生を受けた以上、絡まった「運命」からは逃れられないのだろうか。

それはまだ、ハッキリとはわからない。

???????

私は家族を愛している。その中でも特に愛しているのが、お兄さまのジークだ。

どのくらい好きかと言うと、お兄さまのお兄さま（隠喩）を目に入れても痛くないどころか、絶頂するくらいには好きだ。——変態？違います、兄妹愛です。もちろんブラックジョークではありません、本気です。

お兄さまは今6歳、とてもかわいい。まずお母さま似の金髪と、くせ毛がかわいい。それに白い肌、ついで柔らかいほっぺ。最後に青い瞳がそれはそれはかわいくて好きです。愛してます総じて食べたいくらいには。

私がかここまでお兄さまラブといいますか、お兄さま至上主義になつたのにはきちんとして理由がある。

それはまだ、「私」の自我が芽生え始めたばかりで、毎日精神が不安定だつた頃のこと。前世と今世の私たちが混じり、私は一ヶ月以上高熱を出して寝込んだ。医者でもあるお父さまが、半ば娘の死を覚悟していたくらいには、私は死にかけの虫野郎だつた。

そんな私を、お兄さまは訓練帰りで疲れ切つていたはずなのに、毎日見にきては手を握つて励ましてくれた。そのまま寝落ちしていることも、ザラにあつたらしい。もちろん両親も心配してくれた。けれど成熟した精神が混ざつた私には、両親の愛情より、お兄さまの献身の方が心に響いた。これは多分、前世の「私」の影響もあるのかもしれない。ほとんど思ひ出せないけれど、不思議と確信がある。

だからこそ私はお兄さまの喜びも、怒りも、哀しみも、楽しみも、全て見たいわけです。さらに願わくばその感情の全てをこの身に浴びたい。愛したいし、愛されたい。食

べたいし、食べられたい。

お母さまやお父さまの教育には悪いけど、私は確かに「悪魔の民」なのでしよう。だつてこんなに、歪んだ考えを持っているんですもの。

それを「異常」と理解しながら受け入れて、行動にしたいと思つているのだから余計に。

悪いことだとは理解している。その上で、私はお兄さまを取る。理由は「愛している」だけだからいい。

思い出すのは初めて私が「私」として、この世に存在していることを自覚した時、高熱の苦しみの中で涙を流しながら微笑んでくれたお兄さまの姿、言葉、その息遣いに表情すべて。

『——アウラ、死なないで、アウラ……』

ああ、好きです、好きです、好きです好きです、大好きです。

だから私に、お兄さまの全てをください。代わりに、お兄さまに私の全てを差しあげますので。

——と、そんな私がこれからすべきことは決まっています。

お兄さまの「喜」も「哀」も「楽」も見ました。なら次に見るのは、「怒」の感情。

お兄さまはお父さまとお母さまの「洗脳」的な教育の裏で、陰った感情を持っている。それは親からの「愛」に他ならない。おうちで子を増やす使命を持つ私が、大切に、そして傷つかないよう育てられている一方で、お兄さまはいつ死ぬかわからない中にいる。この差が余計に、お兄さまを追い込む材料となっている。

さらに親に認められたい欲求の反面、マーレの「戦士」を目指す中で、中々成績が優れていない現状。

壁に突き当たっているお兄さま。私の行動一つで、その怒りが妹の私に向くことは想像に難くない。

「——んはっ♡」

いけない、想像しただけで自分の部屋でとんでもない声を出してしまった。お父さまは仕事でいなので大丈夫、お母さまは……扉から覗いてキッチンの方を見てみたけど、鼻歌まじりに料理している。本当によかった。

これから私が行うのは『ジークお兄さまに、いつの間にか好きな妹へ憎愛をごちゃ混ぜにした、複雑な感情抱かせよう』計画だ。……うん、長いので『曇らせジークお兄さま♡』でいいでしょう。最終的にお兄さまに殺されて死にたい。好きも嫌いも、憎愛をドロドロに溶かしてその全てを私に注いで欲しい。

だから、私はお兄さま以外の誰かの子を身籠る気はないし、兄妹で子を成すタブーを理解しているから、相当なことがなければ一生独り身だろう。……いえね、まあ、お兄さまが複雑な感情抱いてくれるなら、この身体を他人に蔑みにされていいし、他の人間と付き合ってもいい。お兄さまが求めてくれたらそれはそれで即墮ちする、絶対。

もちろんお兄さまが他の女性と結婚するのは構わない、むしろ幸せになって欲しい。けれどその奥で、ずっと私という存在を飼いつけて生きてくれ。

目先の目標として、このままお兄さまには戦士を不合格になつてもらいたいところ。

戦士になれば、必然的に巨人の力を継承して、ビッグお兄さまになってしま………ビッグお兄さま………!?!?

なにそれしゆき——じゃなくて、死ぬ可能性が上がってしまう。

ただジークお兄さまなら、合格してしまいそうな気しかしない。だって私のお兄さまだもの。

ならば今後その上で複数の可能性を模索しながら、『曇お兄♡』計画を進めていこう。

私アウラ・イエーガーは、お兄さまを心の底から愛しております。

ですからお兄さま、一緒にいっばい、ぐちゃぐちゃになりましようね。

おてて繋いでいきましよう。

鏡よ鏡、この世で一番かわいいのは誰？——そう頭の中で問いかける私の前には、お母さまの手伝いで磨いている窓がある。雑巾で磨いても、果たしてきれいになっているかはわからない。元々掃除はお母さまがマメにしているし。

そして先程の答えですが、答えは私じやありません。この私の可愛さは、通りすがりの露出した中年男が汚らしい笑顔と、ヨダレを垂らして追いかけたくなるくらいにはかわいいです。ですが答えは違う。ええ、もちろん一番かわいいのはジークお兄さまだ。異論は認めない。唱える奴らは全員駆逐してやる。この世から、全て。

「アウラ、お手伝いありがとうね」

「まま、わたしがんばる！」

「ふふ…怪我しないようにね」

お母さまの顔がこの上なく幸せそうに綻び、笑みを作っている。

最近知ったことだけど、お母さまの身内は私たち家族以外では既におらず、実質お父さまと結婚するまでは、お母さまは一人でフリッツ家の宿命を背負っていたようだ。

彼女が子を為せず死んでしまえば、一族の悲願は果たされなくなってしまう。

長らく孤独だったお母さまは血の繋がりに弱い。特に私には、いずれ「子を作る」という運命がある娘を自分自身と重ねているのか、優しく接してくれる。

エルディア復権のため、重圧をかけているお兄さまにもう少しくらい向き合って欲しいものだけれど。ただ指摘してしまえば、お兄さまの苦しみが減ってしまう。精神的に追い込まなければ、意味がないのです。

母親の前ではお手伝いを頑張る健気ムーブをし、父親の前では普段彼が診療で家にない分、過剰に甘えてしまう幼女になる。

頭の中で冷静にこれを考える私自身のあだ名は「クソ幼女野郎」です、どうも。

この一連の流れを、特にお兄さまがいる前で行う。すると、劣等生のお兄さまは両親の愛情を受けるため一心に訓練を頑張っているというのに、兄の気持ちなど知らぬ妹を目にしてしまうわけです。

そうなれば、嫉妬するでしょう。羨ましいでしょう。憎くもなるでしょう。

ぬくぬく育っている妹は、努力している兄と対照的に目に見えた愛を親からもらっているのですから。

お父さまもお母さまも無論、息子のことは愛している。しかしそれ以上に、彼らにはエルディア復権の大望がある。だから息子へ愛を向けるよりも先に、使命を全うさせるための教育を、お兄さまに強制しているのだ。

「ばばー！」

「うおー！ははっ……ただいま、アウラ」

それから、お母さまの夕食の手伝い（といっても食器を用意するくらいだけ）もして、ちょうど仕事から帰ったお父さまに抱きつく私。

お父さまは気持ち悪いぐらいデレデレした顔になった。もっと可愛がってくれてえんやで？その分お兄さまが追い込まれるので助かります。

「今日はアウラが食器を運ぶのを手伝ってくれたんですよ」

「本当か！怪我しなかったかい、アウラ」

「だいじよぶー！おしよーじもした！」

三人で他愛ない会話をしていけば、我が家の大天使、ジークお兄さまが帰ってきまして。お兄さまは成績が優れないこともあり、最近遅くまで残って一人訓練の練習をして

いる。軍服の至る所が汚れていて、怪我をしている場所もあった。もう見ているだけで私辛いです。でもそんなお姿もかわいいですお兄さま。結婚しよ。

「ただい……っ」

ドアを開けた瞬間お兄さまの目に入ったのは、私を抱きしめ微笑んでいるお父さまと、その隣でお父さまの上着をコート掛けにかけているお母さまの姿。

陰った表情を浮かべたお兄さまに、必死に己の顔面が崩れないよう死力の限りを尽くした。

「お帰り、ジーク」

「……ただいま、母さん」

「ジーク、今日の訓練の方はどうだったんだい？」

お父さまが私を下ろして、お兄さまに尋ねる。やはり思ったとおり、今日も成績は芳しくなかったらしい。

クソ幼女のムーブで和やかだった雰囲気が一転、家の中に重い空気が流れる。こんな時にはこのクソ幼女たる私が、一肌脱がなくてはなりませんね。ほら、私が脱ぐんだからお兄さまも脱ぐんだよ。

——ええ、もちろんいつものジョークです。しかし半分本気ガチです。

さて、ここで突然問題ですが、落ち込んだお兄さまに妹が投げかける言葉として正しいのはどれでしょう？

1. 「おにーたつ、おかえり！」と笑顔で抱きつく。
2. 「けが、いたいいたい……？」と泣きそうな顔で言う。
3. 「やらないか」

答えはそう——4番の、「きょうわたちね、ままのことてつだったの！」です。

1と2番は好感度を上げるか、現状維持になつてしまうので論外。3番を回答した方は惜しかったですね。「4番がなくね？」と思われた方は、正解というものが必ずしもこの世に用意されていると思わないでくださいね、という——そう、これも私なりのジョークでした。

正解か否かが毎回わかるかどうか、わからないこの世界。所詮人間社会は、エゴの手押し相撲。その中で明日を生きていくことが、私たちには強いられている。少なくとも、管理されている土俵際のエルディア人には。

閑話休題。

して、4番であれば、私の発言から両親が娘を褒める流れに変わります。そうすれば空気は一転して明るくなる。

しかしお兄さまにとつては、自分は頑張ったのに妹が褒められるという状況が生まれ、私に負の感情を向けること間違いなしなのです。

「そう…なん、だ」

そして予想通り、ジークお兄さまはかわいらしいお顔をさらに曇らせた。唇を噛んで下を向いてしまった息子に両親は気づかず、お母さまは料理の支度に戻って、お父さまは私を再度抱っこしたまま席に着きます。

「あらジーク、夕食は？」

「…僕は、いいや」

「きちんと食べないと、体力がもたないぞ？」

お父さま、夕食を食べて体力が回復しても、精神の方は中々回復しないものなんですよ。

お兄さまはそのままフラフラと、浴室の方に向かった。それに両親は「訓練で疲れて

いるのだろう」と、その日はそつとしてやることにしたようだ。

「お、お、お……」

「そう？ いっぱい食べて大きくなるのよ、アウラ」

——ええ、本当に美味しいですお母さま。脳内では食事の味などすっかりぶつ飛ぶほど、お兄さまの表情が渦を巻いている。

もつとお兄さまを曇らせて、いつか私に激昂する姿が見たい。あくまで私は外面は優しい内面クソ幼女でいる気なので、その優しい妹が傷つき泣いて、それにやり過ぎてしまったと後悔するお兄さまも見たい（ニチャア……）

しばらくはこのまま、少しずつお兄さまに妹への負の感情を溜めさせていこう。

次の段階は、そうですね：間近にあるお兄さまの公開訓練の日でしょうか。お兄さま自ら志願したらしく、両親は息子の成長ぶりを見る機会だと、嬉しそうに語っていた。その裏でお兄さまがどれだけ苦しんでいるかわからないクセに、皮肉なものだ。

かく言う私もお兄さまの訓練姿を拝見したので行きたい。普段はまだ幼いこともあつて外に出たことがないけれど、ギャン泣きクソ野郎になつても頼み込めば連れて行ってくれるはずだ。

ちなみにお外へ出たことがないのは、お父さまに止められているからだ。危ないから、という彼の本心ひっくり返すと、グリシャ・イエーガーの妹の「死」につながってくるらしいのだけれど、この辺はお母さまに少ししか話してもらったことがないからわからない。

お父さまに、それとなく祖父母から妹の話聞いたのだ——と話しても答えてくれないので、「フェイ」という少女がどういった人物であったかは不明だ。
でも、誰しもが薄暗い過去や、感情を持っている。

その事実が私にはとても、愛おしく感じられるのだ。

???????

恥もクソも捨てて両親にねだった結果、私は見事お兄さまの公開訓練を見に行けることになった。ありがとう神様——あ、いや、ここは祖先のルーツであるユミル様にしておくか。

ともかく今か今かと訓練の日を待ち望み、当日。私はお父さまに抱っこされて訓練場にまで向かった。この日のためにあらかじめ、「外出許可証」なるものを両親は取っている。

これについては收容区のエルディア人が收容区外に出る時に必要なもので、持たずに出ていることが軍人に見つかつた場合、「労働」、または「制裁」を与えられる。お父さまが私を外に出させたくないのも、勝手に私が壁の外へ出て行ってしまうことを懸念しているからかもしれない。

「……アウラ、静かにしてるんだよ」

「うん」

小声でそう呟き、私に帽子を目深にかぶせる父。

いつも窓から眺めるだけだった外の景色は、私に衝撃を与えるほどのものではなかつた。大抵は絵本の中の「知識」として、頭の中に入っている。四つ足で歩いているのが「自動車」、空を泳いでいるのが「飛行船」——といった風に。

やはり收容区を出て市内へ行くと、同じ国でも生活の差を如実に感じる。エルディア人はマーレ人と比べて制限されているものが圧倒的に多い。

そして何より感じるのは、好奇の視線。エルディア人であることを示す腕に付けた腕

章を見るなり、マーレの人間たちは声を潜めてこちらを見る。

(エルディア人もマーレ人も、同じ人間だろうに)

「悪魔の民」が何だというのか。誰だつて悪魔になり得る。

そう言う私は間違いなく、悪魔だ。

お父さまは向けられる好奇心な視線は娘にいかないように、隠すように抱きしめてい
る。また私とその異質さに気づいて、傷つかないように。

お兄さまは訓練に行く時、両親に守られない中、差別的な視線を浴びていたのだろう。
その隣にいて、お兄さまのお顔を見たかったな。そしてお兄さまに侮蔑の目を向けた奴
らを皆殺しにできたら、もっと素晴らしいだろう。非現実的な考えだから、行動には起
こせないけど。

そんなこともありつつ、訓練場に着いた。訓練場自体、土を深く削つて平らにし作ら
れたようで、見学する場所は土嚢袋が無数に敷き詰められ、その後ろに柵が置かれてい

る。

下の方に見えるお兄さまは最後尾からさらに遅れながらも、必死に走っていた。遠くからで表情はわかりにくいけれど、汗を幾重にも流して走っているのがわかる。荒い息を吐いている姿を見てしまい、堪らずお父さまの服に顔を埋めた。

お兄さまも「ハアハア」してますが、私も「ハアハア」しています、心の中で。
(かわいいっっ!!)

抑えきれないこの感情。他人には絶対に見せられない顔になっているのは承知なので、かわいい幼女ちゃんのイメージを崩さないためにも、隠さなくてはならない。

「だ、大丈夫、アウラ?」

「おにーた、かわいいそう……」

お母さまが私の背をさすってくれる。私のことはどうでもいいから、少しでもお兄さまの勇姿を目に納めとけ。

どうにか規制確実な顔を戻し顔をあげようとした時、私の視界に入ったのはお父さまの顔。

「……………」

声も出せず、絶望したような表情でお兄さまを見ているお父さま。その中には落胆や

失望といった、様々な感情が渦巻いている。お母さまを見れば、私のことを心配しながらも、お父さまと同じような表情を浮かべていた。

なんだかそれを見てしまった私は、頭を鈍器で殴られたような気分になった。

お兄さまの訓練の成績が良かった日には、お父さまが息子の頭を撫で、隣で微笑むお母さまの光景を見たことがあった。だからお兄さまに向く両親の「愛情」というものが、彼らの「大望」より優先されるものでないとわかりつつ、それでもエルディア復権の道具としてよりは、我が子として大切にされていると思っていた。

だが、今のお父さまとお母さまの表情を見てしまつては、その考えが粉々に砕かれてしまう。

お兄さまは二人の我が子であるより、道具として存在することの方が求められている。
る。

なら私はやはり、二人の我が子ではなく、道具なのでしょうか。

——いえ、大事に抱っこされている私は少なくとも、今は、我が子として愛され

ているのでしょうか。

この差は何故できたのか？私が「女」という生き物で、お兄さまは「男」だからでしょうか。

それとも私がかわいいから？…いや、お兄さまの方がかわいい以上、この考えは成り立たない。であれば、他にどの可能性があるのだろう。

お母さまであれば、それとなく理由は思いつく。それは私がいずれ、王家の血筋を引く子を産む——という定めに関わるもの。お母さまもまた孤独の中で、子孫を残す定めを課せられていた。だからこそ、同じ立場の娘をエゴ最優先してしまうのだろう。

ならば、お父さまは？グリシャ・イエーガーは何故私を大切にする？

考えられるのは、彼の妹の存在。名は「フエイ・イエーガー」だ、祖父母から聞いた名前である。

私を外に出したがるなど、お兄さまとは対照的に過剰なまでに愛情を注いで守るようになっているのも、私をそのフエイに重ねているならば、あり得なくはない。容姿が似ているかはともかく、己の妹と、自身の娘——という似通った二つの立ち位置を、重ねようとしても何らおかしいことはない。

もしその考えが当たっているならば…お兄さま、ジークお兄さま。

とても、可哀想としか言えません。私がいなければお兄さまは、両親からの愛をもつといただいていたはずなのですから。でも私は生まれてきてしまった。そして「私」が、目覚めてしまった。

果たして「私」が目覚める前の「私」が、どんな人間であったかは詳しくわからない。「最近全く泣かなくなつたわね」や、「急に成長したなあ…」などとは、両親から言われていないから。

…ああ、そうか。私が成長の遅れた子供であったことも、両親からの愛情が向く理由であるのか。

でも、少なくとも前の「私」の方が、お兄さまの人生はもう少し明るくなれたのでしよう。

けれど仕方ありません、ジークお兄さま。私は既に、存在しています。このクソのよきな世界で、生きてしまっています。

ですから私が生きている間だけでも、悪魔のような妹のために、たくさん笑って、泣いて、怒って、苦しんでください。そんなお兄さまのことが大好きです、私は。

最下位のお兄さまの姿を見るに耐えきれなくなったお父さまは、私を抱えたまま背を向け歩いて行ってしまう。その後、お母さまが引き止めようとしたものの、結局お父さまに続いた。お父さまが後ろ向いたことで、ちょうど抱かれていた私からは訓練場の光景が見える。

「——ッ!!」

目を溢れんばかりに見開いて驚き、あるいは絶望して、様々な感情を混ぜた表情を見せるお兄さま。

私とは色の違う蒼い瞳が、とても綺麗で。

美しいその表情に私はついと、見入ってしまったのでございます。

ぼくは「おにーたん」

アウラ・イエーガーは、ジーク・イエーガーの3つ歳の離れた妹である。

まだジーク少年が物心付いたばかりの頃、母に抱かれた妹の姿を今でもハッキリと覚えていゝる。真つ赤な顔をしわくちやにさせ大泣きする赤ん坊は、本で見た「サル」という生き物そっくりで。

少年が母親に促されおすおすと手を伸ばして頭を撫でれば、まだ薄い髪は柔らかかった。頬を触れば、フニフニしている。やめられなくなった突つつきの手を止めたのは、小さな手。少年の人差し指を握る赤子の手の小ささよ。

「あら、お兄ちゃんが触ったら泣き止んじゃったわね」

微笑ましげにそう呟く母親。両親とも似つかない赤児の灰色の瞳は、真つ直ぐにジークを見つめる。

妙な緊張感に少年がゴクリ、と喉を鳴らしたその時。

「あうあ」

先まで大泣きしていたのが嘘のように、笑った。美人な母親に似た——「綺麗」というよりは、「愛らしい」という表現が正しい——顔が、キヤツキヤと声を上げる。

少年はその瞬間、この妹を、アウラ・イエーガーを守ろうと誓った。

それは兄として、初めて彼の中で芽生えた感情であった。

???????

それから時は数年流れる。

三歳になったばかりのアウラは、未だ言葉が喋れなかった。容姿は母親に似て愛らしく、しかし髪色は父親に似た。背中まである長い髪を撫でてやるのが、戦士を目指す訓練を始めたばかりの少年の休息の場でもあった。

「アウラ、一緒に遊ぼう」

「あーう」

言葉はおろか、少女はまだ立つこともままならない。普通の子供と違う娘を両親は大変心配しており、夜泣きをする度に母ダイナは眠い目を擦り少女をあやした。

そのため両親はアウラに付きつきりなことが多く、ジークは寂しい思いをすることがよくあった。何かに付け「お兄ちゃんだから」と言われるたび、育つ心のしこり。

「あう、あい」

それでも、四つんばいで懸命に這いながら兄の元へ来ようとする妹のことを、嫌いになれるはずもなく。

少女の屈託のない微笑みが自分に向けられることに、少年の心は救われていた。

マーレへの「スパイ」そして育てるため、父グリシャと母ダイナによる物心つく前から行われた洗脳教育。「エルディアの誇り」を抱かせつつ、敵であるマーレに忠誠を誓うよう教育を受けたジークはこの時すでに、のしかかる重圧に心が悲鳴を上げていた。

「アウラ…僕、頑張るから」

「あう」

ジークは、妹を抱きしめる。

普通の子供とは違い、発達が著しく遅れている妹。グリシャはこれが「障害」であるとし、一定以上の成長は難しいと判断していた。医者ゆえにその事実が誰よりわかってるからこそ、父親は娘に過剰に愛情を注いでいるのだろう。

「お前も、かわいそうだね」

外に出してもらえない妹。壁の中に囲われているエルディア人よりもっと狭い世界しか、この妹は知らない。しかし、知らない方がきつと幸せなこともある。蓋を開けてみれば自分たちがマーレ人に虐げられていて、その上この世界には戦争しかないことを知ったら、妹は何を思うのだろうか。そんなことを考えることすら、アウラはできないのだろうか。

「大丈夫……僕が、守ってあげるから」

何もできない妹――。

守られることしか、できない妹。

両親の愛情の比重がアウラにばかり向き、そして“使命”と称し両親に洗脳教育を受けてきたジークの精神は、歪み始めていた。

何もできないということとはつまり、劣等生ながら、それでも自分で行動できる彼よりもよっぽど劣っているということ。

自分よりも劣っている存在がいる。そう考えることで、少年は崩れそうな心の均衡を保っていた。

しかし数ヶ月後、妹は高熱を出して以降、急速に成長を見せることになる。

グリシャは「奇跡だ」と喜んだ。その言葉の中には同時に、死の淵から生還した意味合いも含む。

ダイナもジークが見たことがないほど泣いた。そして「おかーた」と呼んだ娘を抱きしめた。

ならジーク少年は、この時どんな心境であったのか。

心の逃げ場として無意識に使っていた妹。何もできなかった妹が、急速に自分でできるようになり始めた。それに乗じて、両親の関心は妹の成長のたび一心に向く。

羨ましい、と思った。憎くも感じたし、「そのままであればよかったのに」とも思った。しかし決して死んで欲しいとは思わなかった。彼は、妹が好きだったから。兄に積極的に突進し、そして言葉にならなくても笑いかけるその姿が、ひどく愛おしかったから。

——おにーた…？

何より高熱ながら、声をかけたジークに向けた妹のその言葉が、微笑む表情が、心に残っているから。

少年はアウラ・イェーガーの「おにーたん」だ。少女が成長しても、それは変わらな
い。むしろ成長した妹が無闇に傷つかないように、兄である自分が頑張らなければなら
ない。

両親のために、己の「使命」のために——そして、妹のために。

少年はまた一つ、重荷を背負った。

???????

ジークはより一層努力した。自分にかかる重圧に耐えながら、訓練に勤しんだ。

成績の悪い己。ならば常人以上に練習をしなければならぬ。戦士を目指す子供た
ちを教育するマガトも、「またイェーガーか」とため息を吐きながら、内心では応援して
いた。だが同時に、危うさも感じていたのである。

何かに取り憑かれたように練習に明け暮れる少年の姿は、もはや狂氣的ですらあった

のだ。

——ジーク、今日はアウラがお兄ちゃんのために、夕食作りを手伝ったのよ。

母が嬉しそうに言う。妹の頑張りに対して浮かべる表情であつて、彼に向くものではない。訓練を頑張ったこと以外でジーク自身にそのような笑みが向けられたのは、いいいつ頃だったろうか。上手く思い出せない。

——ジークも見たい、さつきアウラが走っていただろうか？ 今日私が帰ってきた時も、家の中で元気に走り回っていたんだ。…心配だなあ。

父が眉を下げて語る。自力で歩けるようになり、あつという間に走り回れるようになった娘の成長を見つめ、心配そうに見つめる。ジークの努力は妹の成長の前になると、途端に霞となつて消えてしまう。

ならもつと、努力すれば自分を見てもらえる。褒めて、頭を撫でてくれるはずだ。

——容姿はあまり似ていないけど、あの元気さは子供の頃のフェイにそっくりだ。

そう語っていた祖父に、瞳を細めて小さく頷いていた祖母。

彼らは孫息子を労ってくれたが、それ以上に孫娘を目にかけている様子だった。

ジークは少しずつ、でも着実に、追い込まれていった。

彼が喉から欲しているものは両親からの「愛」に他ならない。まだ6歳の子供であれば例えエルディア人であれど、親から与えられて当然のものである。

思い出すのは焦りが失敗を生み、成績が思ったように上がらない中、見かけたボール遊びをするエルディア人の親子の姿。彼と年の近い子供が父のボールをキャッチし、父に「よくできた」と褒められる。

己でもわからない暗い濁流が、その身の中で渦巻くのを少年は感じた。

後日成績が悪くマガトから叱責を受けた彼は、その日ばかりは残って練習をする気力がなく、早めの帰宅となった。

「おーい、その君！そのボールを投げてくれないか？」

そしてジーク少年は彼の運命を大きく変えるトム・クサヴァー、————マールレの戦士であり「獣の巨人」の力を有する人物と出会うことになる。

???????

クサヴァーと出会い、束の間のキャッチボールを楽しんだジーク。
血の繋がりはない。しかし本当の親子のように過ごした時間は、彼にとってかけがえのないものとなった。

だが一歩足を踏み出せば、待っているのは非情な現実。

すっきり暗くなり帰った彼を待っていたのは、両親と、エルディア復権を目指す二人の仲間である男の会話。家の中から微かに漏れる明かりが少年を照らす中、その内容を扉の前に立ち聞いてしまったジークは、一步上った階段から後ろへ突き飛ばされたかのような心境に至る。

彼らが小声で話していたのは、ジークがマーレの戦士になれるか否かについて。仲間の男は少年が本当に戦士になれるのか、懐疑的な様子だった。

(僕が、いらなくなる?)

戦士になれなければ、両親の期待に応えられなければ、自分が存在する理由がなくなってしまう。

ジークは恐れた。呆然と扉の前で立ちすくんでいた彼が正気に戻ったのは、息子が帰ってきていたのを気づいたグリシヤたちの足音が近づいてきた時。

六つの驚きと困惑を混ぜた目が、彼を見つめる。

「ごめんな、さい…」

直後、父に肩を掴まれ涙ながらに言われる。ジークならできる、と信じて疑わない――否、父親のグリシヤ自身を信じさせようとする姿を見た少年は、小さく頷くことしかできなかった。

この時母に寝かしつけられ、夢の国の住人になっていたアウラクツ幼女が起きてこの光景を見ていた暁には、脳内トリップをキメていただろう。

この一件もあり、ジークはマーレの公開訓練を受けることにした。両親にしつかりした成績を収める自身の姿を見せ、同時にマーレへの忠誠を軍に示す意図だ。

だが結果は散々なものであった。両親は途中で見学をやめ、マガトにはいつも以上に

辛い罵声を浴びせられる。

そして何より、来ると思っていなかったはずの妹が自身を見つめていたという事実。薄いグレーの瞳をまん丸にして、妹はただジークを見つめていた。父に抱かれながら遠ざかっていっても尚、その瞳が彼から外れることはなく。両親の絶望した表情とは違う、目以外は作り物のように無表情だったその顔がどこか不気味で。けれどやはり、愛らしかった。

縦え両親や祖父母が彼を視界に入れることはなくても、いつだって妹だけは兄を見ている。きつと彼が訓練で活躍していれば、嬉しそうに微笑んでいたかもしれない。無様な姿を見せてしまった。

さまざまな感情が、公開訓練の終わったジークの内側には残っていた。

それでも、———それでも。

彼は頑張らなければならなかった。

他人に課せられた“使命”を背負い、または自分で背負った重荷を持つて進まなければならぬ。そこにジークの意思があるのかと問われれば、難しいところだ。

所詮アウラの兄であることも、両親から妹が生まれてきた時から「お兄ちゃん」と言われ続けてきたが故の感情かもしれない。

だがやはり彼が、——ジーク・イエーガーがアウラ・イエーガーの「兄」であり、守りたいという感情は、ジーク自身のものだ。

少年は妹の小さな手に握られた時から「兄」で、その手を振り払おうとは思わない。

「わたちも、『せんし』になるー」

妹が、そう言うまでは。

???????

公開訓練が終わり、夜もすっかり深まってから自宅に着いたジーク。鬱々とした気持ちながら扉を開ければ、何やら騒がしい室内。家に入れば両親は夕食も途中で床を転げ

回り、大泣きしている娘に戸惑っていた。これが別名、「ギャン泣きクソ幼女」である。
「ど、どうしたのアウラ!?」

「やだやだ——ッ!!!」

「あ、お帰りジーク。あの、えっとね…」

息子が帰ってきたことによく気がつく母。それも仕方ないだろう。拡声器でも使ったように、室内は少女の声で鬼騒音状態なのだから。

「わたちもおにーたんとおなじ『せんし』になる!!!」

「え……?」

ジークは固まった。戦士にアウラがなる?

いや、意味はわかる。そして両親が困り果てている理由もわかった。

ただアウラにはいずれ、フリッツの血を残す、という使命がある。女が家を守り男が働くのは、例外もあるが一般的な考えだ。

ひとまず今日の兄の訓練を見て、妹は何か思うことがあったらしい。幼い子供の気持ちを測るのは難しいものの、「兄の力になりたい」とでも思ったのだろう。

「おにーたん、いいでしょ?おにーたのために、わたしががんばりたい!」

立ち上がった妹が、ジークに突っ込んでくる。体の制御がうまくいかず、そのまま尻餅をつく形で倒れ込んだ彼は、灰色を覗かす妹の瞳をじっと見た。散々泣きじやくったのか、顔は真っ赤で目は腫れている。

「……ダメ」

「なんで？ わたち、おにーたのために……」

「ダメだよ!!」

だってアウラには、子を残す役割がある。戦士になりエルディア復権を目指す役目はジークのものだ。

それを妹が背負っていいわけがない。傷つくに決まっている。死んでしまう可能性だってあるんだ。

……いや、それは建前だ。

別に逆の立場でも問題はない。エルディア復権を成し遂げられる力が妹にあるのなら、彼がフリッツの血を繋ぐ立場でもいい。しかしそれを受け入れられるか否かでは、話が違ってくる。

戦士になろうとする妹は、少年からすれば両親から与えられた“使命”という彼の存

在・意・義・を、奪おうとしているように見えてもおかしなことではない。

事実ジークはそのような感情を抱いてしまっている。

そしてその感情は、今まで溜まっていた妹が家族の中心だった不満も相まって爆発する。

愛されない自分に、愛される妹。いつだって苦しいのは彼で、妹は両親に囲まれながら楽しそうに笑っていた。

同じ腹の中で生まれたにも関わらず、背負う運命がこうも大きく違うのは残酷でしかない。

——そうだ、少年は知っていたはずだ。

戦争ばかりのこの世界。ある人種は、別の人種に虐げられ生活を余儀なくされる世界。一方は両親から愛をもらえるにも関わらず、もう一方は愛をもらうことができない。

不平等で、残酷な世界だ。

バチン、と乾いた音が鳴る。

ジークは今、自分がどんな顔をしているかわからなかった。ただ頭が沸騰したように熱く、視界はぐちゃぐちゃでろくに見えない。

手のひらがジワジワ痛みだし、そこでようやく彼は妹を叩いてしまったことに気づいた。咄嗟に衝撃で後ろに転がった妹を見れば、叩かれた頬を押さえて瞳を丸くしている。

「……あ」

呆然としたままの妹を見、彼は声にならない声を上げた。

「アウラ、大丈夫!?!」

「急に何をするんだ、ジーク!!」

一瞬遅れて両親が駆け寄ったのは、妹の方。ジークは痺れる手を見つめ、立ち上がり逃げ出すように家を出た。

途方もない感情の濁流が、ひっきりなしに脳内に流れ込む。そうして走り続け、暗い路地裏で膝を抱えた。

「僕は………いらないんだよ、クサヴァーさん……」

静かに涙を溢す少年を照らすのは、淡く輝く月夜だけであった。

わ、私に乱暴する気でしよう!? エロ同人誌みたいに!

エロ同人誌みたいに!!

どうも、ジークお兄さまの吐いた空気を吸ってヘブン状態になるクソ幼女、私です。

はてさて：公開訓練で落ち込んだであろうお兄さまに、「戦士に、おれもなる！」作戦を決行した私でございますが、お兄さま私の計画通りに——いえ、計画以上の行動を起こしてくださいました。

戦士もといエルディア復権は、お兄さまに課せられた使命。子を産むための猶予期間がある私と違い、お兄さまは齡6歳にして心にのしかかる重圧に完全に追い込まれていきます。

また、両親から「愛」を得たいという気持ちもある。それらをひつくるめて、私はお兄さまのポジを奪おうとするNTRムーブを決行したわけでありませう。

外ヅラは、お兄さまの力になりたいかわいい幼女ちゃんです。本当清々しいほどのクソ野郎ですね、私。

そして効果は抜群だったようで、お兄さまに激昂される以上のダイレクトアタックを

受けました。まだ頬がジンジンしている。お兄さまは既に外に出て行ってしまっており、開いたままのドアからは外の風が火照った私の身体を冷やします。

側から見れば突然兄が妹を叩いたのですから、両親が妹の方を心配するのは当たり前前のことでしょう。

しかし蓋を開ければその兄は両親の大義によつて追い込まれ、挙句こんな妹野郎のせいでさらに傷ついている。

「…ダイナ、私はジークを探してくる。アウラのことは頼んだよ」

「わかり、ました。……さ、お部屋に行きましょう、アウラ」

「……………うん」

両親が何か言っていますが、頭に入ってきてきません。お母さまに頬の治療を受けた後、押されるがまま、私は自室のベッドに入つて寝かしつけられました。

流星にこんな状況では夕食も何もないので、瞼を閉じます。スープを数口食べただけでしたが、お腹が全く空きません。

「……おやすみ、アウラ」

お母さまがランプの火を消して、部屋を出ていく。すると室内には窓から差す月明かりが伸びて、ベッドの上の私の顔を照らした。

「かわいい、かったあ……」

私を叩いたジークお兄さま。自分の感情のままに手を出してしまった。今まで見たことがないほど怒りとも、憎しみとも取れる表情を妹に向けた。

その顔を見て、私死んだと思いましたが。天国があるならきつとあのような感じでしょうね。フワフワと心が満たされる。

お兄さまから初めて明確に与えられた「怒」の感情。私にくださったの、その事実だけで死んでいい。

同時にどさくさに紛れて、堪能したお兄さまの身体（意識）を思い出す。

やはり鍛えている人間は違う。胸板に触れたとき、胸筋が硬かった。お顔は柔らかかそうなのに身体は硬いつて、何ですかお兄さま。私を殺したいんですか？殺してくださいね。

それと汗の匂いもよかったです。一生嗅いでいたかったです。もちろんお風呂上がりのお兄さまが発する石鹸の香りも好きですよ？

「ハア……」

お兄さまがかわいかった。

——そう。でもかわいかったのに、どうも私は未だ痛む頬に、余韻に浸るジャマをさ
れている。

叩かれて、呆然とするしかなかった。私は嬉しい気持ちでいっぱいはずなのに、お
かしい。

ジンジンする頬に触れる。冷やすようにタオルで包まれ置かれた氷嚢が、手を痺れさ
せる。

どうして私はこんなに辛いのでしょうか。…わからない。嬉しいはずなのに、心が痛
い。

考えるほど眠りから意識は遠ざかり、頭までも痛みを発してくる。次第に熱で視界が
ぼやけて、呼吸が荒くなった。これはあの高熱地獄に体験した感覚と似ている。マジで
すか、本気ですか神さま。あ、いや、ユミル様だった。

「ジークお兄さまジークお兄さまジークお兄さま……ジーク、ク……」

意図せず勝手に言葉が漏れて、その上涙まで出てくる。

ああ、と頭の中の私は思ったわけです。私はお兄さまを好きなわけですが、この感情
はそこから来ていそうだと。

——愛している人から叩かれたから、私は傷ついている。

兄弟愛のレベルではなく、家族の枠組みにも当てはまらないこの感情。歪すぎる愛情を、私はなぜ実の兄に持つてしまったのか。せめてもの足掻きで「お兄さま」なんて、笑えてくる。そしてその上で、兄弟愛も家族愛も持つているのだから異常だ。

本当に、前世の私はどんなクソ野郎だったのだろう。実の兄にこんな、私、どうしたらいいの。

結局、私は曇りお兄さまのかわいらしさと叩かれたシヨツクの狭間で、本気で泣きながら寝た。ギャン泣き演技とは違う。声を殺して馬鹿みたいに泣き続けた。

深夜になる前にお父さまが路地裏で膝を抱え、丸くなって寝ていた息子を見つけて帰ってきたらしいけれど、お兄さまは身体が冷えたせいで熱を出してしまったようだ。

かく言う私も熱を出し、というかユミル様から天罰が下ったのか、再び1ヶ月の地獄へご案内されることになった。その間の記憶は曖昧なので、省くとする。

ただずっと沈んだり浮いたりする意識の中で、お兄さまのことを考え続けながら、私は今後のことを考えていた。

『終わりよければ全て良し』——にしない、私らしいお兄さまへの愛の向け方を。

???????

アウラを叩いて以降、ジークは妹を避けるようになった。

妹もまた彼を視界に入れても、黙ったまま。ただ物言いたげな様子は見てとれた。

謝罪に関しては兄妹揃って熱を出したことで、うやむやになっている。妹が再び死の淵をさまよう高熱を出したことで、両親も付きつきりになり、ジークに謝らせることは頭から抜けてしまったようだ。

一ヶ月だ、妹の高熱が続いたのは。

しかしジークは妹の部屋に入らず、ただ黙々と練習に勤しんだ。公開訓練の一件以来、訓練もさせてもらえず雑用ばかりの毎日。それでも雑用が終わった後は、より一層取り憑かれたように訓練を続けた。

身体を心配した上司の静止も、耳に入れることなく。

追い込まれた精神を覆うように、増えていく身体のケガ。心のできたキズはいくら身体の上から上乘せしても、消えそうにない。

そんな自分を追い込み続ける少年の唯一の救い。空いた時間にキャッチボールをするようになった二人の場のみ、少年はありのままにできる。弱い自分を、さげすむことができる。

彼のメシアはいつものように特徴的なメガネをつけ、ボールを投げる。

「あまり気負いすぎるなよ、ジーク」

「……別に、これくらい普通だよ」

「はは……まあ今の時くらいは、純粋にキャッチボールを楽しみなさい」

「……うん」

ジークが投げたボールは、クサヴァアの横をすり抜け地面に転がる。いつもは正確なコントロールさえ、上手くできない。ギシッと、少年の歯が軋んだ。

「君は何をそんなに悩んでいるんだ？この間の公開訓練は、散々な結果だったと聞いたが」

「…そのせいで、最近はずっと雑用ばかりなんだ」

「なるほどな。でも、それだけじゃないだろう？」

「それだけじゃ…ないって?」

「君が悩んでいることだよ。私でよければ聞こう」

クサヴァアのボールが、ジークの持ったミットに勢いよく収まる。強い衝撃で少年の手はジンジンと痛んだ。まるでその痛みは妹を叩いてしまった時と同じ感覚で、途端に心臓がギュツと握られた気持ちになり、か細い息を漏らす。

下を向いた少年は、ポツポツと口を開く。

「……クサヴァーさん、僕には妹がいるんだ」

「おや、そうなのか。初めて聞いたな」

「それで……妹がこの間の公開訓練に来ていてね」

ジークは妹が自分と同じ「戦士」になりたいと言ったのだと、クサヴァーに話す。

そして自分が妹を叩いてしまったことも。

「どうしてジークは、妹を叩いてしまったんだ?」

「……戦士になることは、両親から託された僕の「使命」なんだ。それを、妹に奪われたくなかった」

「フム…君はじゃあ今身を粉にして——そんなキズだらけになって一人で訓練をしているのも、両親のためなのかい?」

「うん、僕は両親の誇りになりたいんだ。それで……それで…」

愛されたい、の言葉をうまく口にすることができない。

喉から出かかったそれを飲み込み、ジークは沈黙した。それにクサヴァーは、息をひとつ溢す。

「私が詮索すべきじゃないんだろうが、君は中々複雑な家庭環境にいるだろうってことは、わかったよ」

「……………」

「話を戻すけれど、君はその妹に謝ったのかな？」

「……………」

「その驚いた様子じゃ、やっぱり謝ってはないんだね。兄妹ゲンカつてのは難しいからなあ……」

「…クサヴァーさんも、僕が悪いって言うの？」

すっかり乾いていたはずの涙が、青い瞳から落ちていく。妹を叩いた夜泣き尽くしたと思っていたが、まだ彼の心には感情の源泉が残っているらしい。

クサヴァーは座っていた姿勢から立ち上がり、ジークに近づく。そして徐に、少年の金髪に手を置いた。

「妹を叩いたことは悪いことだと思う。でも君は私に本心を語ってくれた。その上で、君を完全な悪役にすることなんてできないよ。だから泣くな、後から私の前で泣いたこ

とを思い出して、恥ずかしくなっても知らないぞ?」

「……っ、な、泣いてなんかないよッ!!」

袖で溢れる涙を拭き、うわずった声で叫ぶジーク。必死に泣き止もうとすれども、頭を撫でる手つきにどうにも止まりそうになかった。

それから落ち着いた少年は、腫れぼったい瞳のままボールを投げる。今度こそ球はしっかりと相手のミットに収まった。

「…あのさ、クサヴァーさんにもし息子と娘がいたら、やっぱり娘の方を大切にする?」

「突然だな。…まあ、娘がいたら、そっちを可愛がりたくなってしまいかもな」

「……………ふーん」

「そう、すねるなって。君も同じ立場だったら、娘の方を可愛く思ってしまうさ。こればかりはしょうがない、父親のサガってやつだ」

でもね、とクサヴァーは続ける。

「愛らしく思うことに差はあれど、私だったらどちらも等しく大切に、愛するだろうね。それが『親』というものだから」

「…そんなの、わからないじゃん。僕の両親は妹の方が大切だし」

「愛することに差はないよ。君は不器用そうだからな…どうせ親に甘えることも苦手なんだろう？」

「べ、別に…そんなこと……（ゴニヨゴニヨ）」

「露骨な反応だね。甘えづらいのだったら私に甘えてもいいんだよ、ジーク」

「えっ!? ……いい、いいの…?」

「……ああ」

嬉しそうに笑うジークとは対照的に、クサヴァーはどこか憂いた表情であった。遠くを見るような視線に少年は首を傾げつつ、投げられたボールをキャッチし、思いきり投げた。

「うぐつ…今日イチの球だな。…おっと、そう言えばジーク」

「何、クサヴァーさん？」

「近頃会えなくて言い忘れていたが、誕生日おめでとう」

「…え、覚えてくれてたの？」

前にキャッチボールをしながら、なんととはなしに少年が言った日付。その日から幾ばくか経ってしまったているが、嬉しくないわけがない。まさか、覚えてもらっているとは思わなかったのだから。家では妹が高熱を出している時と重なってしまったので、きち

んと祝えなかった彼の誕生日を。

「生憎プレゼントは用意できなかつたんだがね、すまない」

「い、いいよ! 祝ってもらえただけで僕すごく嬉しいから!!」

「はは、そうか」

「あ、じゃあ……その、このボールもらってもいい? プレゼントに」

「そんなものでいいのか? 構わないが…」

「本当!?! ありがとうクサヴァーさん!」

きつとこの時のジークは久し振りに心から笑えた。

間違いなく、幸せなひとときだった。

せんせーい、AちゃんがZくんを泣かせました〜！

「アウラが戦士、かあ…」

時刻は夜。ジークは自室のベッドで仰向けに寝転がりながら、以前クサヴァーからもらったボールを天井に向かって投げる。上にいったボールは重力で下に落ち、綺麗に少年の手の中へと収まった。

相変わらず妹と会話はできていない。謝ろうと行動に移しても、余計な己の感情がそれを阻止する。しかし、行動にすることができても妹が目も合わさず逃げるようになって、どの道謝ることができない。

ジークに叩かれて以来、アウラは「戦士になる」と言うことはなくなった。

またエルディア復権派のメンバーの一部が、成績を残せないジークを見限り、アウラを戦士にすることも一つの手段だ——と、両親に述べていた姿を見かけたことがある。

両親がその提案に首を縦に振らなかつたのは幸いか。

ただ彼がこのままであれば、いずれは妹が戦士の道を進む可能性が出てくる。

そうなればジークは用済みで、誰かと結婚して子を残す運命になる。

「どこまでも道具だな、僕らって」

アウラも本に興味を持ち始めてから、両親に洗脳教育を受けるようになった。妹は飲み込みが早く、家で大暴れする活発さをとつても、意外と戦士向きなのかもしれない。

「どうせ僕は…いくら頑張ったって、ちつとも上手くならないから…」

ずっと自分を追い込み続けた結果、少年は己の“使命”を手放そうと考えるようになった。

これ以上努力するのは疲れた。苦しみ続けるのもたくさんだ。だったら、妹が“戦士”になればいい。本人もなりたいたいと言っているんだ。彼の使命を妹に与えて、妹の使命を自分が背負えばいい。

しかしその運命は、どこまでも他人の手によつて決められている。

その事実を理解したジークは、齒噛みした。

「クサヴァアーさんも前に言っていたじゃないか。「戦争ごっこに付き合つてられない」

——つて」

少年とクサヴァアーは似たもの同士だ。

エルディア復権派が掲げる争いのために、道具でい続けることはこりこりだ。戦争ごっこは大人同士でやればいい。子供を巻き込むべきじゃない。

だが、ジークが自分の使命の生贄にしようと考えている妹は、少年よりも子供で。彼は布団に潜り込み、頭を抱えた。

どこまでもレールを敷かれた上で走っている、自分たちの運命を呪って。

??????

それからまたしばらく経ったある日。

ジークは雑用として施設の掃除をしている最中、マーレ治安当局員たちの会話を聞いてしまった。扉越しに男たちが話していたのは、エルディア復権派の尻尾を掴んだ、という内容。

「フクロウ」という人物が発起人のこの組織は、彼の両親も参加している。既にいくつか目星はついており、あとは証拠を揃えていく段階にまできているらしい。さすれば両親が捕まるのは時間の問題だ。それだけではない、国家に翻意を抱くものは、その親族もろとも「楽園送り」にされる。

悪魔が住むパラディ島へ送られ、巨人にされてしまうのだ。ジークや関係のない祖父

母、それに――。

「アウラ、まで」

妹は何もしていない。何も知らない。両親の行いのせいで妹まで巻き込まれるなど、あつてはならない。

「……僕が止めなきや、父さんと母さんを」

そして夕食のあと、「話がある」とダイナが娘を寝かしつけたのを見計らい、ジークは話を切り出した。

危ないことはしないでほしい。見つかったら両親だけじゃない、自分や祖父母、アウラまで楽園送りにされてしまうと。

だが、両親は彼の言葉に聞く耳を持たなかった。

二人はエルディア人の未来のために、とことん戦うことを決めていた。誰かが立ち上がらなければ、誰かが武器を持って戦わなければ、エルディア人は惨めに壁の中で死んでいく。

「…父さんは、僕がフェイおばさんみたいになってもいいの?」

「フェイが殺されたのは、そもそもこの世界が狂っているからで——」

「アウラが……無惨に、死んでもいいの!?!」

「……ッ、それは……」

妹は知らない。父親の妹が、マーレの官憲の男によつて殺されたことを。その一件以来、父親の人生が狂い始めたことを。

「……それでもジーク、私たちはマーレからかつてのエルディアを取り戻さなければならぬんだ……!!」

少年の願いは両親には届かなかつた。いずれ訪れるであろう未来を想像し、絶望することしかできない。

あるいは両親に復権派の正体がバレそうなのだと、隠さずに伝えればよいのか。

いや、それではダメだ。仮に自分たちの組織が政府によつて明るみに出されようとしていることを知つたら、どんな強硬手段に出るかわからない。

何か、ほかに解決策はないのか。しかし7歳の頭では考えることにも限界がある。

悩み続けるジークは、クサヴァーに自身の親が“復権派”であることを話した。絶対に明かしてはならない秘密を彼が打ち明けたのは、心の底からクサヴァーを信頼してい

るからだろう。本当の親のようにさえ、感じ始めているのだから。

「君の両親がまさか、『復権派』だったなんて……」

「クサヴァーさん、何か方法はないかな？せめて妹だけでも、僕…助けたいんだ」

「自分のことはいいいのか？何故そこまで……」

「…だって僕、「おにーたん」だから」

何より久しく見ていない妹の笑顔を失うことが、彼には苦痛だった。あの愛らしい笑顔を見れば、どんな暗いどん底でも這いあがろうと思える。

「告発…なさい」

震えるクサヴァーの声。

ジークは頭を抱えうずくまる男の顔を、おそろおそろ覗き見る。歪んだ表情はいつも
の温和な男の顔からかけ離れていた。

「告発つて…父さんと、母さんを？」

「ああ、そうすれば君と君の祖父母、そして妹も助かるはずだ」

「でも……僕、そんなことできなッ……!?!」

突如肩を掴まれ、少年は瞠目する。

仮にも親を売るなど、絶対できない。縦え道具のように思われていても、二人の息子の
 のだから。

「ジークツ!!君の両親は君のことを、愛さなかつたじゃないか…!!でなければ君がこ
 まで傷つくわけがない。本当に息子を愛しているのなら、尚更だよ…」

「クサヴァアーさ…」

「君の両親は残酷だ。前に私が言ったことを覚えているかい?私に息子と娘がいたら、
 同じように愛すると」

「…うん」

「あくまでアレは、私の意見に過ぎない。この世には偏つた愛を向ける親もいる。きつ
 と君の…両親のように」

ぐわんぐわんと、ジークの視界が揺れる。クサヴァアーに揺すられているわけではな
 い。ぶわつと額からはいやな汗が吹き出し、頬を伝つて下へ落ちる。

「告発するんだ…ジーク。誰でもない、君のために」

「……ぼく、は」

——君は悪くない。悪いのは、君の両親だ。

二人の頭上ではどこまでも青い空が広がり、小鳥がさえずつていた。

???????

「ジーク、覚悟はできたか？」

「……うん」

両親を告発する日、あらかじめ自身と祖父母、妹の身の安全を条件にジークは両親を売ることになった。誰がマーレに謀反を翻そうとしているのか、政府の人間がいる前で指し示すのだ。これほど辛いものはないだろう。告発する人間にとつても、される人間にとつても。ましてや相互の関係は親子なのだから。

両親のことは愛している。仮に自分のことを愛していなくとも。

だがこれ以上親のせいで、子供たちが苦しむことはあつてはならない。

——そうだ、悪いのは両親だ。

自分に言い聞かせ、ジークは驚愕した表情の両親を指差した。その後のことは、鮮明に脳内にこびりついている。

彼に向かって叫ぶ両親——「どうしてジーク！」「何故だジーク！」——と。

官憲たちに連行されていく二人の姿を、少年は呆然と見つめるしかなかった。本当に感情が死んだ前では涙さえ出ないのだと、この時初めて知った。

彼の冷えていく体温を温めるのは、側でジークのことを抱きしめるクサヴァー。哀れな一人の少年が、その場にいた。

「ばよ!!:まま!!:」

空気を割くように、響く声。声の主は、官憲の男に抱っこされながら出てくる少女だった。黒に近い茶髪を振り乱して、必死に両親に手を伸ばす。飼い主の腕から逃げる猫のようにするりと抜け出した少女は、両親の元へ駆け寄っていく。

「アウラ!!」

咄嗟にジークは叫んだ。だが少女が兄を振り返ることはない。連行される父親に抱

きつき、官憲たちに引つ張られども離れない。

「やだ! いかないで!! わたちもいく!!」

「アウラ……」

「ばばまま、おいちえかないで!!!」

ああ、この少女は両親がどこへ連れて行かれるか知らないのだ。「楽園送り」の意味を教えられてはおれども、まさか両親が行くとは夢にも思わないだろう。

「アウラ……アウラ!!」

咎めるように、大声を出したジーク。その声に少女の肩が一瞬はね、兄の方を振り向く。灰色の瞳からはポロポロと涙が溢れていた。

「こつちに來るんだ、アウラ」

「……やだ」

「アウラ、僕の言うことを聞い——」

「やだ!!!」

愛らしい表情が、睨めつけるような表情に変わる。妹が寝ていた時にジークは告発したが、今の状況を見て誰が両親が連れていかれる事態を作り出したのか、少女はわかっているのだ。

兄の懇願を、拒絶で返した少女はそのまま、両親と共に車に乗せられる。

ジークは車に駆け寄ろうとしたが、クサヴァアーに止められた。

「離してよクサヴァアーさん!!アウラが、アウラが!!」

「落ち着くんだ、せつかく告発したというのに、今君が動いては…!!」

「でもっ…妹が、僕の妹が!!」

無情にも両親と妹を乗せた車は走り去っていく。

黒い排気ガスが空気に溶けていくその様を、少年は見続けることしかできなかった。

後に本人の頑なな意思により、妹——アウラ・イエーガーが「楽園送り」にされることを知ったジークは、祖父母が泣き崩れる中呆然とした。感じたのは、世界から色が失われていく感覚。

ただ自身の時が止まっても、世界の時間は1秒1秒進んでいく。

両親が「復権派」であることが知れ、彼と祖父母の身分がさらに悪くなった——かに思われたが、実際は異なる。両親を売ったことで、ジークは「驚異の子」として政府の人間に一目置かれるようになる。彼もまた危うくなつた自分たちの地位を復活させるため、名誉マーレ人となるべく訓練を続けた。その結果晴れて彼は戦士候補生になるのだが、それはまた先の話である。

「…誰も、いなくなっちゃった」

訓練から帰った夕方、祖父母の家ではなく、両親と妹、自分の四人で住んでいた家に訪れたジーク。今頃はもう、三人は楽園送りにされているだろう。官憲が入った際荒れた室内は、そのままになっていた。

祖父母がいずれ身辺整理をする。そうすれば少年の家族がいた痕跡は消えてしまう。

灯もつけず暗い室内を歩き、彼が訪れた場所。そこはかつて妹の部屋だった場所だ。広くないその部屋には子供用の小さなベッドと、オモチャや本棚が置かれている。夕日が窓から差し込み、ベッドを赤く染めていた。

「……アウラ」

意固地をはずす妹に謝っていれば、このような結末にはならなかっただろうか。両親を告発さえしていなければ——いや、告発しなければ親族全員が楽園送りにされていた。

「よくこのおもちゃで遊んであげたっけな…」

箱の中に入れられたいくつものおもちや。その中にはジークが幼い頃遊んでいたお下がりもある。一つ一つ懐かしむように見ていたおり、彼は奥底に一枚の紙を見つけた。

決して上手くはないそこには人のようなものが四体描かれており、手を繋いでいる。その中の二体だけ、異様に大きく描かれていた。そこには『おにーた』と『わたち』と書かれている。書いたのは妹だろう。文字は書けないから、両親に教えてもらったのか。

そして家族の絵の上には、みみず文字で『おにた おたんじよび おめでと』とある。

「うっ……あ……!!」

思わず握りしめた紙がクシャリと歪む。止まらなくなった涙もそのままに、少年は紙を抱きしめ嗚咽を殺して泣いた。

泣いて、泣いて、すっかり暗くなっても泣き続けた。

妹に——アウラにただ一言、「ごめんね」と言えばよかった。そうすれば妹は両親と共に行かず、ジークの元に残ったのではないか。

だが、後悔あと先に立たず。
彼が愛した妹は、いない。

彼は両親を呪った。両親が歪む原因を作ったこの残酷な世界を呪った。
そして愚かな自分を、呪った。

抱擁する世界、灰色のめはひらく

やあ、私クソ幼女ちゃん。今あなたの家の前にいるの。

まあ当然それは嘘で、私が今いるのは日が沈み始めた青に夕日を混ぜた空と、一面砂漠が広がる壁の上。どうせそれも嘘だろうって？ いえいえ、本当なんですけどねコレが。

では何故かわいいう幼女が壁の上で緊縛プレイをしながら空を見つめているか、ここに至るまでの経緯をお話ししましょう。

??????

まず初めに私の目標としては、ジークお兄さまに生きてもらいつつ、「私」という名の妹、アウラ・イエーガーの存在を刻みつけることでした。これは一ヶ月間、熱で死にかけながらずっと考えていたことです。

私がお兄さまへ抱く感情がクソ面倒くさいものであるとわかった以上、自分の存在が

不必要に感じざるを得なくなったのです。

私が望むのはお兄さまのすべて。感情の一つ一つ、どれをとつてもじつくり堪能したいわけ。

ですがお兄さまに叩かれた時、私は実感してしまった。自分に傷つく心があることを。

正直言つて、いらぬいんですよね。私が感じたいのはお兄さまであつて、自分の感情ではない。一々些細なことで傷ついていたら、お兄さまを堪能することなどできなくなつてしまつてはいませんか。

ゆえに、自分を消すことにしました。

お兄さまに殺してもらえないのは残念ですが、これからお兄さまの心に私を最大限刻みつけられれば満足です。

熱が治つてからしばらくは、お兄さまはあからさまに私を避けていました。そりやあ気まずいですよね、表情が絶対に私を叩いたことを悔やんでる、つて感じでしたもの。

でもお兄さまは謝つてこなかった。来ても逃げる予定だったので好都合ですが。

しかし途中から様子が変わったのです、お兄さまがボールを家に持って帰ってきてから。少し明るくなったというか、ボールを見つめている時は年相応の子供らしくなりました。

お父さまが誰にももらったか尋ねれば、お兄さまは「クサヴァーさん」なる戦士の人間からもらったのだと答えました。誕生日プレゼント…私も用意していたんですけどね。まあこれは、お兄さまを曇らせるイベントを起こすために、熱が治ったあとお母さまに手伝ってもらい書いたもので、純粋な好意でいただいたらしいボールとは正反対でしうね。

クサヴァーさんについて話す時だけ、お兄さまは明るく喋った。それだけクソ幼女から受けたダメージや、「使命」への重圧が大きかったのです。その男がお兄さまの恩人のような存在であることは、すぐにわかりました。

単純に言つて悔しい。お兄さまの心の奥底で沈黙して、溜まっていいのは私だけ。であれば、お兄さまの一番になり得るよう行動に移すのが最適でしょう。

ボールをゲットだぜ！して以降、私に近づき始めたお兄さま。全力で抱きしめてお触りして舐めたい欲求を抑えつつ、私は必死に逃げた。「逃げのアウラー」とは私のこと

だ。

その時のお兄さまの愕然とした顔が、これまた可愛かったのは余談です。

して、私の当初の計画は『お兄さまに誕生日プレゼントを渡そうとこつそり家を出たら、うっかり川へどんぶらこつこ』作戦でした。

収容区には小川があり、幼児がうっかり落ちればそのまま死ぬこともない場所があります。ちょうど花がその近辺に咲いているらしいので、かわいい幼女ちゃんは兄のために取りに行っちゃうわけだ。

小川の情報についてはお祖父さまから聞きました。昔よくフェイト、彼女の付き添いのお父さまが花を取ってきては、冠などを作ってプレゼントしていたらしいです。

家を抜け出すのは存外簡単。夜になれば、私は自室で一人になる。今まで家を抜け出したことのない娘が、まさか急にいなくなるとは思いません。娘息子を一人で寝かす文化が追い風となってくれました。

そして翌朝、溺死した幼女ちゃんの遺体が発見。お祖父さまはすぐに花の件を思い出してください。これに合わせて私がおもちゃ箱の底に隠した手紙が見つかれば、アウラちゃんの行動はお兄さまのプレゼントのために起こしたことにされる。

お兄さまに私のことを刻みつけられますね（ニチャア…）

ですが突如、私の前にビックウエーブが到来します。この波に乗らなければクソ幼女失格もの。

ことの発端は、ジークお兄さまがある夜、両親にこつそり話していた内容から始まります。

夕食が終わった後やけに真剣な顔で「父さんと母さんに話があるんだ……」とお兄さまが言うものですから、気にならないはずがありません。必要のない私はお母さまに寝かしつけられました。が、襲いくる睡魔に全力で戦った。

そして聞いた、両親にこれ以上危険なことはしないで欲しい——という内容。

今まで両親に逆らわず、ただひたすら親の愛を求めて生きていたお兄さまが、両親にもの申した。

それだけで異常事態だと私は察したわけでございます。何か、相応のことが起こっているのだらうと。

お兄さまが同時に口にしていたのは、「楽園送り」という言葉。実際に親から教えられたことがあるので私も覚えています。

言うなれば、巨人GO。悪魔の末裔たる我々は、巨人の脊髄液を体内に取り入れただけでビッグヒューマンへと変身する。またソイツらには知性がない。

そんな歩く災害に、楽園送りにされたエルディア人はさせられてしまうのです。

話を戻しましょう。

わざわざお兄さまがお父さまとお母さまを止めた点と、「楽園送り」の言葉を受けて私に至った考えは一つ。

両親が「復権派」であるとバレた可能性。あるいは、復権派の組織そのものが明るみに出始めた可能性。

もし両親がバレているなら、既に捕まっているはず。ゆえにメンバーはまだ不明だけれど、復権派の組織が政府に嗅ぎつかれている。お兄さまはそれを何らかの形で知った。偶然聞いてしまったか、あるいはお兄さまが信頼する「クサヴァーさん」が情報を教えた可能性もある。

ともかく、猶予は一刻を争う。

色々方法を考えても、やはり両親含む復権派を売るしかないでしょう。しかし私が密

告したとして、政府の人間が信じるかどうか。信じたとしても私は復権派の親族に該当する。私はまだしもお兄さまが楽園送りにされるなんて許せません。

：幼女パワーで「ふええん」しながら、それとなく官憲に訴えればいけるでしょうか。あくまで私と兄は被害者で、両親が加害者であると。クソ幼女は顔だけは本当に愛らしいので、上手くいけば「非人間」扱いされるエルディア人でもいけなくはな……いや、流石に無理ですね。

ならば、お兄さまに密告してもらおうしかない。ただのエルディア人である私ではなく、戦士を目指すお兄さまなら、上層部が復権派を売る代価に、私たちの身柄の安全を保証する意見を吞んでくれる可能性が高い。

お兄さまはこれまで訓練に勤しみ、マールに忠誠を示してきた。戦士であるクサヴァーという男が一目置いている節もあるので、ことさら都合がいい。それならば最低でもお兄さまは助かる。両親は絶対に助からないけれど仕方ない。

お父さまお母さま、最後くらいは息子のためになってください。私も一緒に行つてあげますから。

そうすると、お兄さまに密告を促してくれる相手が必要だ。当然その相手はクサ

ヴァーさん以外ありえない。

戦士となれば市内にいることは確か、マーレの中心的な施設は市内にしかないしね。お父さま並みに甘いお祖父さまに頼んで早急に許可証をもらい、クサヴァーさんを探すしかない。二人がキャッチボールしている場所はお兄さま情報で把握している。なんなら「ジークおにーたん」に会いたいムーブをかまし、目立ちまくってやる。ギャン泣きクソ幼女を発動し、クサヴァーゲットだぜ——！だ。知っている名前を聞けば、クサヴァーさんも出てくるだろう。

——え？ 祖父母たちの胃が痛むだろう、つて？ 知ったことじゃありませんね。お兄さまの命以上に優先するものなんて、この世にないでしょう？

???????

「……と、思ってたんだけどなあ」

翌日両親にごねてお祖父さまの家まで訪れ、許可証を頼めたまではよかった。発行ま

では不審な点がなければそう時間はかからない。例えば過去に血縁者で謀反を起こそうとした者がいる——など、よほどのことがあれば発行自体できないなど、話は変わってくるものの。

これでクサヴァーさんを見つけられると思った数日後、事は起こった。私はどうやら、お兄さまを甘く見ていたらしい。

昼寝の最中物音がしたので起きてみれば、扉の外に無数の人の気配がする。今日はちようどお父さまは仕事が進んで、私を寝かしつけた。復権派のメンバーをこっそり連れ込みオトナな話をしていることはあれど、それにしても物々しすぎる。その上銃の金属音までしたのだから、何事か悟った。

最初は、バれてしまったのだと思った。私の行動が遅く、復権派のメンバーを突き止めた政府の人間が来てしまったのだと。

しかし扉をこっそり開けてみれば、最初に目に入るのはお兄さま。その周りには銃を掲げた大人が複数人控えている。お兄さまは誰かを指差していて、その先にいたのは

——両親。

(はわわわあ……！)

ユミル様は、こんなクソ少女にどれだけ褒美をくださるのでしようか。

あの、お兄さまのお顔……!!感情を削ぎ落として、キレイな瞳を濁らせている。女性
が暴漢された時に浮かべそうな、そんな真つ黒な感情をありありと瞳に宿している。

かわいいつてもものじゃない。私にとっては美しい。自分の親を、お兄さまは売つたの
です。今まで両親に心を虐げられていたお兄さまがついに親を退して、親のためではな
い、自分のために行動した。

つまり、自分のエゴをさらけ出した……!!

素敵です、ジークお兄さま。今誰かに作られたお姿ではない、お兄さまの皮を裏返し
たような、ありのままのお姿を私は見ている！好きです好きです、好きですお兄さま
……!!!

私が絶頂に至っている最中、こちらに近づく革靴の足音がした。

咄嗟によだれを拭いて、布団の中に潜り込む私。入ってきた人物は私の背中を軽く叩

いて、起こしてきた。

私の脳内では今までにないほど、素早く脳が回転している。悪魔に相応しいクソ幼女の最期を飾れるよう、これからすべき最適解を見出す。

お兄さまは両親を売った。最低でもそれでお兄さまは救われ、最高で祖父母と私が助かる。

しかし私としては生涯お兄さまに「私」を心の中で飼い殺して欲しいので、私は死にます。

ふとした時に私を思い出して欲しい。アウラ・イエーガーが、ジーク・イエーガーの妹であったことを。

妹を叩いてしまつて以来、微妙な関係になった兄妹仲。まあそう思っているのはお兄さまだけで、私はお兄さまのことを変わらず愛している。この世界とお兄さまをかけたら、もちろん私が選ぶのはお兄さま。その他は私も両親も含めて比べるまでもない。私にとっての全てが、お兄さままでできていると言つても過言ではない。

——「私」の世界は、お兄さまの涙から始まったのだから。

???????

それから私は幼女ちゃんを起こした政府の男によって、外へ連れられて行った。

男曰く「君の身柄は安全だよ」と。

ああ、お兄さま、私のことも救おうとなさったのですね。ですがそう簡単に問屋は卸せません。

私はお兄さまではなく、両親を選びました。自分の元へ来るように言ったお兄さま、その時の睨んだ私の顔をぜひ覚えていてくださいね。

お兄さまはこれからご自身の手で妹を叩いたことを、そして妹に謝れなかったことで、斯様な運命が出来上がってしまったことを、後悔し続けてください。私を思い出して、思い出し続けてください。私は無知性の巨人になっても、ずっとお兄さまを愛し続けておりますから。

そして話は、冒頭の緊縛幼女ちゃんに戻ります。

私は「アウラ！」と必死に叫んでいたお兄さまの顔を思い出す。

空に残る青い色は、お兄さまの色そのものだ。視界については目隠しをされていたけど、「おちよらがみたい」と言ったら取ってくれた。やっぱかわいいってのは得だね。

下から侵食してくる夕日の色はうつすらと黄色く、お兄さまの髪のように。とてもキレイだ。私の名前を最後に叫んだ、お兄さまのお顔の美しさほどじゃないけれど。

その景色に混じって、時折下から眩い明かりが差す。

ついにやけそうになる口を堪えて、無表情を装った。腕が後ろ手に拘束されていないければ、口元を隠せたんだけど。もちろん聞こえる悲鳴に対して笑っているわけじゃない。私は精神異常者じゃないので。

ただ、お兄さまのこれまで見た笑顔や怒り——悲しみといった表情が走馬灯のように頭を駆け巡って、私を満たしているだけだ。

みんなも最期くらい、このお兄さまのような空を眺めて死ねばいいのに。

「ああ……ああ……」

私の隣では声にならない声を上げて、お父さまが項垂れる。巨人にされた復権派の仲間が人間のまま蹴落とされた人間を追って、遠く、遠くへと駆けていった。

お父さまはここにくる前に尋問にあったようで、指には包帯が巻かれています。私は助かるところをクソ泣き幼女で通して無理に来たので、まさか娘が本当に楽園送りにされると思わなかったお父さまからしたら、絶望ものだろう。

「何でアウラまで……」と言われた際に「おとーたんといっちょにいたいから」と言った時は、今まで見たことがないほど号泣していた。

よくよく見れば、ジークお兄さまと顔のパーツが似ているので（半分血を分けた父親なのだから当然だが）、お兄さまも大きくなったら似た顔立ちになるのかもしれない。

成長したお兄さまも味わいたかったなあ……まあいいか。どうせもうすぐに理性とはおさらばになるのだ。

「よおし、次はコイツにするか」

そう言って恰幅のいい曹長の男が、お父さまを指す。しかし「クルーガー」と呼ばれた男が追加でお父さまに尋問があるので、一旦スルーされた。次は私かなと思っていれば、遅れて連れてこられたお母さまだった。

お父さまはそれに驚いているようだけれど、流星にガッツリ復権派に入っていたお母

さまが助かるのは、難しいでしょう。

「ダイナ……」

「グリシヤ……」

ちょうど娘がサンドイッチになるようにお母さまを連れてきたの誰だよ。せめてお父さまの隣にしてやれよ。なんでわざわざ娘を挟んで両親をセツトするんだよ。完全に両親がいちやついてるのを覗き見してしまった子供の気分だよ。

「グリシヤ、私どんな姿になっても、あなたを愛してる……あなたを必ず、見つけるから……」

やめて、やめてよ。両親の熱い言葉のやりとりをこれ以上私の鼓膜を通して行わないでよ。新手の拷問ですか？

その間お母さまの首元に、巨人の脊髄液入りの注射が投与される。さようならお母さま、私もすぐにそちらに行くので束の間の別れですね。

「それに——大好きよ、アウラ。私たちの元へ生まれてきてくれて、ありがとう」

お母さまの背が、曹長によって蹴られる。

私を見つめるキレイな青い瞳、それに陽に照らされて輝く金髪。サラサラと一本一本

舞う髪質は私とそっくりだ。

「わたちも、だいすき」

——ああ、私こそありがとう、お母さま。

悪魔のような私を産んでくれてありがとう。何より、ジークお兄さまを産んでくれてありがとう。

お兄さまの人生は両親のせいで歪なものになってしまったけれど、私は決してお母さまやお父さまを恨んだりはしない。お兄さまと出会わせてくれたこと以上を、あなたたちに望むことはない。せめてもの恩返しとして、形だけ娘はあなたたちの後を追う。それであおいことしましょう。

そして、お母さまは、ビッグお母さまになった。

「ダイナ……ダイナ……」

お父さまは完全に腑抜けになってしまった。巨人化させる人間はあと二人、私とお父

さまだけ。

あともう少しで終わるところで曹長の指示により、クルーガーと曹長以外の人間が壁の上から去っていく。何が始まるのか見守っていれば、曹長は両親を巨人にさせ、そのあと娘を突き落とす算段らしい。私は人間のままで。

思わず、「はい?」と思ったのは仕方ない。

せつかく理性をなくす心構えをしていたのに、こんなかわいい幼女を両親に食わずとか地獄か。いやまあ、私の所業を思い返せば、妥当と言えば妥当ですかユミル様…?

「ふざけるなツ、何が…何が遊びだ…!!お前らに心はないのか!!」

「心?エルディア人にかける心なんてないだろう、ましてや『悪魔』のお前らに」

激昂したお父さまに、淡々と話す曹長の男。さらにソイツはタバコを吹かしながら、フエイ・イエーガーを息子の犬に殺させたことも語った。

以前お兄さまの発言で彼女が「殺された」と知ったが、犯人が目の前にいるとは驚きである。

…ということはこれは私への当て付けというより、お父さまへの当て付けか。

娘を自分が食ってしまうという事実をグリシャ・イエーガーに突きつけて、その反応

を楽しむ。我ながら私も思いつきそうな考えだ。

私もできるなら、両親より巨人の力を手に入れたお兄さまに食べられたかった。食べられたらお兄さまの一部になれると尚嬉しい。

——というかそもそも、巨人の力つてどうやって継承するのだろうか？個人的に普通の脊髄液とは違う専用の脊髄液があるのだと考えていたけど。大人の事情というやつで、そこら辺の情報は教えてもらえなかった。こういう時幼女つて不便だ。

「どうして、お前はこんなことを……」

「こんなこと？過去にエルディア人が巨人の力を使って世界にしてきたことを思えば、我々の行いは微々たるものだろう」

それに、と曹長は続ける。

「人間は残酷なのが好きなんだよ。日夜世界のどこかで戦争が起きているのも、平和じゃ物足りないからだ」

——そうだな、謂わば生の実感つてやつだろう。

その言葉が、今まで空以外を鮮明に映し出さなかった私の世界に入り込む。

残酷つていうことは、即ち「生」を感じられるということ？

ストーンと、胸の中で何かが収まる。

私の異常性は、私がお兄さまの曇り顔を見たかったのは、自分の「生」を実感するこ
とができたからだ。

最初に見た、お兄さまの泣き顔。私に死んでほしくないと、ひたすらに願っていた表
情。

そこから「私」は始まって、今終わろうとしている。私はきつとお兄さまの苦しみを
自身の生きがいにしていった。お兄さまの曇りから始まったこの人生は、どこまでもお兄
さまと、その陰りから抜け出すことが出来なかつた。刷り込まれた意識は絶望的なまで
に「私」の根幹に根付いている。それこそ引つ張り出すには、私の死しかありえまい。

「——ははっ！」

自分でもどうしてお兄さまに執着していたのか、ずっと疑問だった。それをこの曹長
の男は、あっさりと答えを教えてくれたのだ。

そうだ、人間は残酷の中で「生」を実感する。私が他人の苦しみや悲しみ、怒りを見て心が満たされることも、私自身が生きていることを感じているに他ならない。

正しく、人間讃歌——!!

その人間性を否定しない、ありのままの姿の人間を、肯定する。

「ア、アウラ……？アウラ!!」

「……ふふ、ぐひひ」

「なんだ、母親が巨人になっちゃまって頭がイカれたか」

違う、ずっと心のどこかで否定し続けた私の生き方が肯定されて、とても嬉しいんだ。誰かの不幸を見ることは悪しきことではない。むしろ、喜ばしいことであった。

私の——お兄さまに叩かれて存在を確認した人間性もまた私で、残酷を好む私も、「私」——アウラ・イエーガーであるのだと、ない胸を張って言える。

せつかくだ、エルディア人を「悪魔」と呼んだ曹長に教えてあげよう。本当の悪魔が、どういう奴かを。エルディアの復権を語る両親たちでも、そんな悪魔の末裔の根絶

を願う曹長のような人間でも、悪魔にはなりえない。

本当の悪魔ってやつはきつと、誰のためにも動かない。自分のために、自分の欲求のためにしか動かない。それは全て「生」を享受する上で大切なことだから。

クルーガーと呼ばれる男は父からみれば右にいる。私は父の左におり、クルーガーからはかなり距離が離れている。一瞬の動きは止められまい。ガキだからと、足までしっかり拘束をしなかった自分を呪え。

そして曹長は私の左前方。老若男女問わずお注射（意味深）してくる変態だ。

「えるりあじんは、あくまじやないよ」

「いいや、お前たちは悪魔だよ。どんなにお嬢ちゃんがかわいくても、中身がバケモノならどうしようもない」

「おじちゃんしらないの?」
「何?」

——悪魔は、誰だつてなり得るんですよ。

かわいい幼女ちゃんらしくない、感情のこもらない声。

真下にいた巨人の一体——お母さまが、大口を開けて落ちてくる私を迎える。お母さま、私は今からあなたの体内おなかに還ります。

お兄さまが作られて産まれた中に戻るのって、控えめに言つて最高ですね。

空には、キレイな青空が広がっていた。お兄さまの色。それに手を伸ばした瞬間、私の身体は丸々暗闇へと誘われる。滑った感覚に、熱すぎる巨人の体内。丸呑みされても私の頭の中は、狂ったように幸せだった。

だって最期に、お兄さまの色を見れたんだもの。

【閑話】非売品の笑顔

青空の下、行われる青年と眼鏡をかけた男のキャッチボール。

容姿は似ておらずとも、他人がその光景を見れば、親子と思うに違いない。しかし実際に血の繋がりはなく、戦士候補生と戦士という関係だ。

それでも二者には、親子以上の絆があった。

「すっかりクサヴァーさんも歳を経ったね」

「ああ、私の継承期間ももうすぐで終わる。君とこうしてキャッチボールができるのも数えるくらいだろうね」

「はは……寂しくなるなあ」

青年——ジーク・イエーガーは、17歳になった。戦士を目指し始めてから早十数年。彼と同期の人間はもう一人もいない。途中から少しずつ子供が減っていき、最後に彼が“候補生”の座を勝ち取ったのだ。

当時皆の中でドベだった頃からしたら、考えられない出世だろう。現在いる候補生の中では一番年上であるが、まず巨人の力を継承するのは間違いない。

——なにせ彼は、「驚異の子」なのだから。

復権派であつた親を売りマールに忠誠を示したその姿は、政府の人間からも一定の評価を受けている。しかしその中には、青年の底の知れなさに恐れを抱いている者もいた。

「ところでジーク、君は戦士になつたらどうするつもりだい？」

「戦士になつたらつて？」

「名誉マール人の地位を得ることは聞いていたが、他にも何かやりたいことなんかはないのか、つてことだ」

名誉マール人になればさまざまな特権を得られる。クサヴァーならば、巨人学の研究者として己の研究を進めた。人によって目的は違えども、やはり名誉マール人の地位を利用して、何かをなしたい戦士は多からう。候補生に至る人間は、こぞつて自分の目標や信念がある。

逆にそれがなければ——例えば親が名誉マール人の地位を欲して送られた子供など——最後まで残ることはできない。

「クサヴァーさんは研究の集大成として、六百年前のエルディアの王が、始祖の巨人の力を使ってユミルの民の体の設計図を書き換えた事実を発表するんだもんね」

「世界の人口激減の要因となった、疫病の効かない身体にしてしまったんだ。すごいってもんじゃないよ。これを聞いた時、君も驚いていたもんな」

「そりやあ驚くさ。記憶改ざんを超える力が、始祖に秘められていたと知ったんだから」「いやあ：自分の研究を進められて本当によかったと思うよ。長くもない人生だったが、悔いはないかな」

クサヴァアの投げたボールが、青年のミットに収まる。十年前の勢いは衰え、ジークからすれば物足りなさを覚える球となった。

「それで、君はどうなんだ？ 戦士ともなれば女性だってよりどりみどりなんじゃないかな？」

「うわあ、オッサンくさいこと言わないでよ」

「中年で悪かったね」

「でも女かあ：あんまり興味はないかな。俺結婚しないとと思うし」

「え、しないのかい？」

「うん。：あ、付き合うとかとはまた話は別だよ？ 結婚、っていうか——家族を作らないってことかな」

その言葉に、クサヴァアの表情が強ばる。

ジークは片手に持ったボールを眺めながら語った。

「仮に美人な人と結婚して、子供作って…家族ができたとして、幸せになるのは間違いないと思う。けどさ、巨人の継承者は力を得てから13年しか生きられない。俺が死んだら家族がどんな気持ちになるかって考えたら…：…やっぱり結婚はしたくないよ」

「ジーク……」

10年前、ジークは両親を売った。しかしそれは必要な犠牲だった。両親を売らなければ、彼も彼の祖父母も楽園送りで今頃巨人ライフだったろう。

そして同時に、青年は妹も失っている。

「家族を失った人間の気持ち、俺は知っている。両親を売ったのは俺なんだから、何言ってるんだって話だけどね」

「それしか、方法がなかったんだ。仕方ないよ…：…君は悪くない」

「ああ、それしか方法がなかった。必要な犠牲だった。けれど世界が違っていれば、失わずに済んだ犠牲だったと思わずにはいられないんだ」

「ジーク、君は…」

「クサヴァーさん、俺、やりたいことあるよ。…って言っても、クサヴァーさんの話を聞いてから現実味を帯びた考えになったんだけど。それまでは結構、漠然としてたんだ」

——この世界から、エルディア人を消す。

それが、青年の——ジーク・イエーガーの望み。

クサヴァー以外に打ち明けることのなかった、彼の本心である。

「まず始祖の巨人の力を使って、エルディア人が子供を産めないようにする。そうすればエルディア人の人口は減っていき、約100年後にはいなくなつて、同時に巨人もいなくなる」

「…どうして、エルディア人を無くしたいんだ？」

「単純さ、エルディア人がいなければ世界がより良くなるからだ。マーレがエルディア帝国に謀反を起こす前、1700年近くエルディアは強大な巨人の力を使い、世界を支配していた。その過程で失われた国家や文化、人間は計り知れない。過去の民族浄化がなければ、現代の世界にはもつと“多様性”が生まれていた」

「それは、一理あるが…」

「クサヴァーさん、世界はずっと巨人の力によつて虐げられてきたんだ。どれだけの人間が怯えて、苦しんで…そして死んできただろう。マーレの言っていることは正しい

よ。エルディア人は悪魔だ、それだけのことを俺たちは世界にしてきた。縦え先祖の所業でも回り回ったツケは、今を生きる俺たちが払うべきなんだ」

それに壁の中で囲われ続けられれば、グリシャ・イエーガーのような復権派が生まれる。さすれば第二・第三のジークのような子供が生まれてしまっただろう。

彼は一気にエルディア人を殺そうとしているわけではない。子を作れなくして、緩やかに人口を減らしていこうとしているのだ。

「子は親を選べない。だが逆に言えば、親も子を選べない。俺は多分、幸せな家族のままでいられたら……こんな考え浮かばなかったと思う」

ジークは苦笑いしながら、右手を顔の左に近づけ耳を人差し指でかく。独特の彼の癖であった。

青年はボールをクサヴァーに投げた……が、コントロールがイマイチだったのか、相手の後方を抜け飛んでいく。「あつ」と漏らした声は随分とマヌケだった。

「君は威力は申し分ないが、割としょっちゅうコントロールを誤るよね……」

「はは……気をつけるよ」

ため息を吐きながら、転がったボールをクサヴァーは取る。しかし途中でボールに伸

びた手が止まり、動かなくなつた。

ジークは首を傾げ近づき、声をかける。

「クサヴァアーさん？」

何か堪えるような、そんな表情を浮かべるクサヴァアー。彼は覗き込んだ青年の顔に視線を移す。

「大丈夫か？ さつきも咳きこんでたし、無理に俺とのキャッチボールに付き合わなくても……」

「いや、いいんだ。君とこの時間は、私にとつても肩の荷が下りてちようどいい」

クサヴァアーは立ち上がり、ボールを直接青年のミットに入れる。そして、徐に口を開いた。

「君に、話したいことがあるんだ。私の……家族について」

それは男の、罪の告白であつた。

トム・クサヴァアーの罪——。

自身がマール人だと偽り、マールの女性と結婚して子を作った。その後、クサヴァーが本当はエルディア人だと妻にバレた結果、息子を道連れにして妻が自害してしまったという、罪。

男は自分の罪から逃げるように、戦士となった。マールのためにその身を捧げつつ、研究に没頭し生きてきた。その人生の中で出会った少年、ジーク・イエーガーは、ある意味彼の亡き息子を投影する存在だったのだろう。

そしていつの間にか、本当の息子のように思うようになった。

クサヴァーは語る。

妻と息子を殺したも同然な己が、君を息子のように思うのはそれこそ罪だ——と。

「私という存在は罪深い。生きていることさえ、本来なら許されるべきではない。しかし私は逃げた。己の罪から——自殺した妻と息子の亡骸から……!!」

「クサヴァーさん……」

「ああ、許されないことだとは分かっているとも。それでも……それでも私は、君を「息子」と呼びたい。なんて私は愚かな人間なんだ……ッ」

「……いいよ、もういいよクサヴァーさん。俺だつてあんたを本当の親のように思っているんだ。あんたの罪も、先祖たちの罪も俺が背負って、きつとエルディア人の穏やかな

終わり……………「安楽死」を成し遂げてみせるから」

「ジーク……………」

「だから、泣くなよ。みつともないぜ？息子の前で——父さん」

「……………ツ!!う、うう……………!!」

泣き崩れたクサヴァアの背を、ジークはさすった。

この世は残酷だ。しかし元を辿ればかような残酷さを強いたのは、エルディア人ではなからうか。

他者から奪い、自分たちのものとしてきた。そこから生まれる悲劇を無視し、侵略を続ける。

そして悲劇というものは繰り返す。奪われた側の人間が、今度は奪い返す。そこからまた悲劇が生まれ——といった風に、“負の連鎖”が生まれていく。

これを断ち切るためにも、ジークはエルディア人の安楽死を望む。彼はこれ以上、人の悲劇を見るのはたくさんだった。

その上で青年はこれから数多の悲劇を作り出すだろう。巨人の力を持って人間を殺し、殺し、殺す。

だがそれは必要な犠牲なのだ。矛盾していることは本人が一番分かっている。それ

でも彼は進み続ける。

「もうすぐに始祖の奪還計画が始まる。俺は成し遂げるよクサヴァーさん、自分の計画のために。もう誰かを失うことは、嫌だからね」

青年の脳裏によぎったのは、笑顔を浮かべる少女の姿。

10年経てもはつきりと彼の中で鮮明に残っているその姿は、こう言うのだ。

『おにーたん！』——と。

【閑話】あなたが落としたのは、このやたらドベドベして
いる少年ですか?それともみんなに兄貴ヅラしている二
重人格中途半端野郎ですか?それとも銃を口に咥えちゃ
うお茶目な副戦士長ですか?さあ、選んでください。

戦士候補生の中でもぶつちぎりのドベ、ライナー・ブラウンは落ち込んでいた。

まず本日の訓練が終わった後、仲間のポルコに「ドベ」とからかわれ、ベそベそしな
がら「ドベって言うな!」と大声で反論したところ、その大声にイラついたアニから「う
るさいよドベ」と言われた。

そして、ケンカになりかけたポルコとライナー。それを止めたのはポルコの兄である
マルセルである。

ライナーの言葉にキレたマルセルが弟を宥めながら回収したことで、ようやく一悶着
が過ぎ去ったかに思われた。この間ピークもいたが、彼女は我関せず、な顔で過ぎ去っ
ている。

「うぐう……」

「ら、ライナー、あまり落ち込まないでよ」

ベそベそライナーに、声をかけたのはベルトルト・フーバー。(恐らく) 戦士候補生の中で唯一の良心である。

「べ、ベルトルト……」

誰も優しくしてくれない中、ベルトルトだけはライナーに優しくかった。まあそれは、みんなに等しく与えられるベルトルトの優しさなので、ライナーが一番というわけではないが。

冷たいポルコやアニと比べれば、天と地ほどの差がある。

「ライナーはドベじゃない、ただ成績がいつも最下位なだけだよ……!!」

だがこのベルトルト、かなり天然であった。

そして、ライナーは落ち込んだ。ベそベそと、ついでに亀のような速度でノロノロと着替える。

もうみな帰っており、更衣室には彼一人だけである。部屋を出た時に遭遇したマガトには、「まだ帰ってなかったのかド……ライナー・ブラウン」と呼ばれた。

教官にも「ドベ」と言われかけ、もうライナーはその場で泣き崩れたかった。世界はかくも残酷だ。

「おつ、ライナーじゃん」

廊下を少年が歩いていた時現れたのは、「驚異の子」として政府の人間の間でも恐れられるジーク・イエーガー。荷物を持っているので向こうも帰りらしい。

「あ、ジークさん……」

「何、また成績悪かったの?しよっちゅう泣いてるよねえ」

「う、うう……」

少年はあまりこの男とは会話したことがない。戦士候補生の中で一番年上ゆえにまじめ役ではあるが、どちらかというとな下組の中で兄貴的存在はマルセルだ。

大体ライナーたちと比べ、ジークは年齢が離れ過ぎている。絵面的に小学生の中に高校生が一人混じっているようなものなので、そりやあ当然浮く。

まあ、つまりは、ライナーはジークとの接し方がわからなかった。いつも笑っている

顔が——胡散臭い印象を受ける——こともあり、その真意が掴めない。
ライナー
ドベ的に、怖い人間なのだ。

「そう泣くなよ、俺が泣かしたみたいじゃん」

「お、おれだつて好きで泣きたいわけじゃ……みんなつ、おれのことを「ドベ」つて言うから……」

「それは仕方ないんじゃない？ 実際ライナーはドベなんだし」

「……………うう——!!」

「あらま、余計泣いちゃった」

何か好きなもの奢つてあげるから泣くなよ、とこれはジーク。

泣きながらもライナーは帰り道、ちやつかりアイスを買ってもらった。だがまだドベ
ベそしている。

「おれ……向いてないんだ、戦士に……」

「そんなことないでしょ、戦士候補生の中に残ったんだから。才能は絶対にある。けど、
才能のある連中の中では一番低い」

「……………」

「言っちゃ悪いけど、今度の始祖奪還作戦には6人が選ばれるから、1人は必ず余る。候

補生は俺含めてガリアード兄弟二人にピークちゃん、それにアニちゃんとベルトルトで……最後にライナー、お前ね」

考えるまでもなく、あまり物になるのは最下位。つまり、ドベのライナー。

「まあ諸外国で今は対巨人用の武器が作られてるって聞くし、そうじゃなくてもいつどこで、どうやって死ぬかわからないから、スピアは必要だ。いらぬものはないから、残りの一人はそのまま戦士候補生として残るだろうね、本人が辞めなければ」

「……おれ」

「うん?」

「…おれ、戦士になりたい。マーレのために戦って…それで、それで……」

「ライナーにも戦士になる理由があるってことか。深くは聞かないし、聞く必要もないけど。そのマーレへの忠誠心は、目を見張るものがあると俺は思うよ」

「……!」

「誰にでも得意・不得意はある。なんなら俺も昔はドベだったし」

「えっ、ジークさんが?」

ジークのスペックは、他の戦士候補生の年齢差を踏まえども、トップクラスに秀でている。意外としか言いようがない。まさか驚異の子がドベだったとは。

「努力は身を結ぶさ——とは言っても適度な休みとか、色々調整は必要だけど。大概こ

ういうのつて大きくなってから気づくから嫌になる。それにただ泣いてるだけじゃ、何も始まらないからね」

「……はい」

「そんなところ、じゃあ俺はこの辺で帰るから」

「……あ、あのっ！」

ライナーは咄嗟に青年に声をかけた。しかし、声をかけたはいいものの、何を言っているかわからない。

ポルコのように露骨にからかうでもなく、ベルトルトのように目に見えて優しくするでもなく、かといってピークのように無関心でもないジークの態度。それがライナーにとっては新鮮だったのだらう。だからこそ、その空気をもう少し感じたかったのだ。否定も肯定もしない——いや、否定も肯定もして、その上で上手くべそべそしていた少年を立ち直らせた。

その人間性に——憧れる、とでも言うのか。その心のうちは、ライナーにも形容しがたかった。

「えっと……その」

少し悩み、ふと思いついた内容。それは何故、青年が戦士を目指したかについて。

ライナーに問われたジークはこめかみをかきながら、「うーんとねえ…」と声を上げる。

「ありがちなものだよ、名誉マーレ人の地位が必要だったからさ。俺の話は結構有名だし知ってるだろう?」

「驚異の子の…由来についてですよね」

「そうそう、両親のせいで俺と祖父母の身分が危うくなつた。だから両親を売つた——そんな俺は「驚異の子」って…：…なんか恥ずかしいよねこの呼び方」

「え、カツコよくないですか?」

「…カツコいいの?」

「カツコいいです!!」

戦士候補生の少年たちは、「驚異の子」を聞いてカツコいい二つ名に憧れた。少女たちに冷ややかな視線を送られながらも盛り上がり(あのベルトルトまでもが)、それぞれその得意なものに合う名前をつけた。

ちなみにライナーが付けられたのは「ドベのライナー」である。

その件を思い出してしまったライナーは、またベそべそした。

「今のどこに泣く要素があつたの、驚きだよ俺」

「おれはドベじゃない……」

「ねえ、せつかくいい感じに俺が慰めたのに、振り出しに戻るのやめてくれる？」
「ごめんなさい……おれなんで、おれなんで……どうせドベンだあ……!!」
「帰るからね、もう知らないよ」

ベソベソ、ベソベソ……。

そんな効果音が、少年を背にして歩く男の耳に聞こえ続ける。

ジークは深いため息を溢し、来た道に戻った。年下の子供に泣かれると、どうも放つて置けなくなってしまう性分である。

それもこれも――、

「本当、妹みたいに泣くんだから……」

「妹？」

「――えっ？」

「え？さつき、「妹みたいに」って……」

「ああ、いや……そう、本当に俺の妹みたいに泣くなあライナーは。ポルコたちに見られ
たら呆れられるぞ」

「……ジークさんの、妹って……」

楽園送りに、なった。

この場合「された」ではなく、「なった」が正しい。

当時ジーク少年が両親を売った時、その妹は自ら両親と共に楽園送りの道を選んだ。楽園送りの意味は知っておれど、所詮年端のいかぬ子供。ことの重大性をわかっていなかったのだろう。

政府が連れて行く必要のない少女を両親と共に送ることにしたのは、ひとえに彼女が子供だったからであつた。

いくらエルディア人と言えども、両親とはなればなれになるのは寂しかろうと、そういう理由である。

しかし裏では、曹長の「娘の両親に自分たちの罪の重さを自覚させる」という意図があつたのだが、彼らが謎の死を遂げた以上、その真意を知る者はいない。

「…あ、いや、その……………」
「ごめんなさい!!」

ライナーは常に笑みを浮かべていたジークが無表情になつたのを見て、己の失態にようやく気づく。

ジークの過去を知りながら、その本人がいなくとも候補生たちが話題にしなかつた部

分に、少年は触れてしまった。

——だから、自分はドベなんだ：!!

少年は表情をさらに歪め、拳を握りしめた。視界に男を映すのが怖く、ただじつと地面を見つめる。

「だから泣くなつて、何度言わせるんだよ」

「ごめんなさいごめんなさい：!!」

「いいよ、怒つてない。俺もちよつと口が滑つちやつたな。妹の話題はしないようにしてただけ、ついで」

ライナーの背を叩いて、笑いかけるジーク。その表情はいつもの張り付けた笑みとは違う、自然なものだった。

それでいて、瞳は少年を捉えながらどこか遠くを見ている。

聞くべきではない、それでもライナーは己の好奇心に勝てなかった。ここで聞かなくては、一生聞けないようなタイミング。正しく、千載一遇のチャンスが、目の前にあるのだ。

子供の好奇心は時に残酷で、人の心の闇を暴き出してしまうものである。

「……妹さんも、俺みたいに泣き虫だったんですか？」

「いや、ライナーの比じゃないな。今から戦争が起きます、ってレベルのすごだった」「えっ……!!?」

「大泣きして、床を転がって、一種の災害でさ……生きてれば、君より年上だったよ」その言葉に、少年は固まる。喉が無意識に鳴り、冷や汗が伝った。それでももう一步、踏み出したかった。

人は残酷なのを見たくなくなる——曹長の男の言葉どおりの展開だ。

「名前は……何だったんですか、妹さんの」

「ライナーだよ」

「……え!!?」

「嘘に決まってるじゃん」

「……………」

「そんな「何だこいつ…」みたいな顔すんなって、教えてあげるからさあ、ちゃんと」

——アウラ・イエーガーだよ。

そう言いながら、そのまま「じゃあもう行くね」と、歩き出したジーク。

ライナーはその後ろ姿を、ぼんやりと見つめた。

妹の名前を言った時の男の顔は、動いていたため見えなかった。だが、どこまでも優しい声色だったのが印象的だった。

「……おれも、帰ろう」

帰り道、青空と夕陽を混ぜた美しい色が少年を照らし、地面に黒い影を作り上げた。

【閑話】女たちの墓場、尾を啜えし回遊魚

果てのない暗い世界。空には星のような小さな灯りが無数に輝いている。

その下にあるのは、数えきれない数の裸体の女たち。地面を覆う——或いは女自体が地面なのではないかと思うほど、たくさん転がっている。

その全ては、死んでいた。しかも年齢差はあれど、全て似た顔立ちに同じ髪色。同一人物の死体が果てのない世界を埋め尽くしている。

ある者は腹から中身を溢した死体で、ある者は頭が陥没し脳みそが飛び出ている死体。

その女たちの肉塊を踏みつけ、一人歩き続ける者がいる。

その者もまた、死体の女たちと同じ顔をしていた。色素の濃い髪に、白でも黒でもない中間色の瞳。

視線は虚で、口からはよだれさえ垂れている。歳は少女であろうか。服は何も身に纏っておらず、動くたびに慎ましやかな二つのそれが存在を主張しようとする。

少女はただ、歩き続ける。

彼女は求めている。自分でさえもよくわかっていないのだろう。しかし彼女は、求めているのだ。そして、探し続けているのだ。

——その時、奇妙なことが起こる。

少女からいくばくか離れた前方。女たちで埋め尽くされた地面の中から、大きな何かが見えた。死体を引きずりながら、或いはくつついていたそれらを途中で振りはらつて、巨大なその全体像が明らかになる。

例えるならその姿は、エビの頭にムカデの身体をくつつけた——とでも言えばいいのか。ソイツの飛び出た目の頭上あたりには、二本の長い触角が伸び、下に向かって無数の触手が一定の間隔で生えている。仮にソイツが口を開けば、少女など容易く丸呑みにされてしまうだろう。

ソイツは上に行くと、身体をくねらせ己の尻尾を啜える。そのままグルグル、グルグル、それがソイツにとつては楽しい遊びであるかのように回り始める。

その光景をとつても、ソイツの姿をとつても、奇妙なことこの上ない。

だが少女はソイツを意に介さないように歩き続ける。

歩く少女に、回り続けるソイツ。

淡々とそんな光景が続いた。

しかして、変化は突如訪れる。

女たちの死体が延々と続いていた中、女たちの死体に吸い込まれるように少女の身体が消えた。ソイツは気にする様子もなく、ずっと狂ったように回る。まるでそのことがソイツにとって、普段の見慣れた光景だとしても言わんばかりに。

少女が消えた先には、そこだけぼっかりと黒い穴が空いていた。どこまで続いているか果ての見えない、深淵たる暗闇。少女はそこに落ちたのだ。

そしてグルグル、グルグル——。

ソイツはやはり、回り続けた。

???????

ずっと会いたい。あの人に会いたい。その人に会いたい。

——どの人に会いたい？

誰かを探している。「私」は誰かを探している。

いつも死体になり、私はそして探す。

誰を探しているのか忘れてしまった。けれど、ずっと探している。

いつも私たちの死体置き場に戻ってきた時、私は思い出す。

私たちの世界。私たちが還ってくる場所。クソやろうが回っている世界に私還ってくる。私たち還ってくる？

会いたい人、誰だった。だれ、だった？

誰かだった。その人は私でできていて、私はその人でできていた。

その人が朝で昼なら、私は夜。

その人が晴れなら、私は曇りで雨。

私のそれが、私の色で、私。

私の髪は夜の色。

私の瞳は曇りで雨の色。

あの人はどこだろう。あの人、私探している。

歩いて歩いて、歩いて。

いつも目覚めるのは唐突。

でもいつだって、あの人がいる世界に帰ってこれない。

一度だってあの人に会えない。

あの人って誰だろう。

最初はきつと覚えていた。でも何度も何度も死んで、私たちの世界に還ってきて、またおはよう。

起きる。目覚める。

私はいつもぐちゃぐちゃになって死ぬ。クソやろうはぐちゃぐちゃな私が好き。私はクソやろうが嫌い。

どうして私たちの世界にクソやろうがいるのだろう。わからない。

クソやろうはクソ。それはわかる。

全部、私という存在はクソやろうのせいだから。

その子がない。

私はいつからこの世界にいるのかわからない。私なんだったのかもよくわからない。

ただ私は「私」。

何になっても、私は「私」。

死んで還ってきて、死んで還ってきて。

私は私さえあやふやになり。

私という境界線を見失う。

それでも私が探しているのは変わらない。

私は探している。

私は探している？

私は探している。

何かを、ずっと。

何を探している？

何を、探していた？

ぐちゃぐちゃだ、私たちのようにぐちゃぐちゃだ。

クソやろうは回っている。

クソやろうは何故クソやろうなんだ？

クソやろうは誰だ？

あれはなんだ？

あの回ってるのは何だ？

あれはわからない。

わからない。

歩く、それでも、歩く。

すべての境界線があやふやになる。

それでも私は歩く。

歩き、続けなければいけない。

私はまた会わなければいけないから。

どうして、誰に会わなければいけないのかわからない。

でも私は会わなきゃいけない何かに、会わなければいけない。

涙が出る。大切な何か。私が大切に、大切にしていた何か。

私は何かがなきゃ生きていけなかった。

私はでも何かより先にどうにかなってしまうた。

どうになったのだろう？

私はどうになって、この私たちの世界に来たのだろう？

私たちの世界はどこにある？

私たちの世界はここにある。

いま、私の中にある。

私が考えている頭の中にある。

その中では私たちの世界があつて、回る何かがいいて、私たちの死体があつて、私がい

る。

その中の私は何かを考えていて、その私の頭の中には私たちの世界があつて回る何かがあつて私たちの死体があつて私がいる。

そうして、私たちの世界は延々と続く。

まるでそう、世界のように。

回る何かは教えてくれる。

回る何かは喋らないけど、私に教えてくれる。

世界は未知数。

人間の選択一つで、その人間に選ばれた選択肢の世界と、選ばれなかった世界が生まれる。

世界は無限にある。

人の数だけ、人の選択肢の数だけ。

私はその中の一つを探している。

私が元いた場所。

私が本当に帰る場所。

違う、私が帰りたい場所。

まだ私はたどり着けていない。

沢山の私たちが死んでも、私は探している。

私という精神が途中で壊れても、探している。

私はただの歩く肉塊。

そして歩いて、探す肉塊。

私が探している何かにあつたら、私はどう思うだろう。

何を感じるだろう。

何も感じないだろうか。

何か感じて欲しい。

何も感じなくてもいいかも。

何を感じる何かがあつて何かが。

私に感じる部分は残っているだろうか。

その部分は、心じゃないか？と、回るソイツは言う。

言葉にしないで、私に言ってくる。

こいつはクソやろうだ。こいつはクソやろうに違いない。だって私がムカムカしている。だからこいつを今から、「クソやろう」と命名する。

歩く、歩く。

無数の世界の一つに私は帰る。絶対に帰る。

そうしてまた、私の探す何かに会おう。
会ったらどうしよう。

でも、私はもうその何かを見ても、私が探しているものだとわからないかもしれない。
もしかしたら、私たちが今まで死んだ世界に、私が探しているものがあつたのかもしれない。それか私は、そのまま探している何かに会っても、気づかないで死んでしまつたのかもしれない。

でも、歩く。

一回通つてしまつたらまた歩けばいい。

探せばいい。

探せばいい？

私はどうして歩いている？

私は何をしている？

私はなんだ？

この死体はなんだ？

上で回っているあいつはなんだ？

ここはなんだ？

進めない。

でも、身体は勝手に動いた。

一步踏み出して、また一步と踏み出す。

上で回っているやつは、上で回っている。

まるで私は上で回っているやつだ。

いや、上で回っているやつが上で回っているやつだから、私は私になったのか。

そうだよ、と上で回っているやつは言う。

喋ってはいない、でも私に喋ってくる。

こいつはクソやろうだ、私がムカムカしてくるから、こいつはクソやろうに違いない。
こいつを今から「クソやろう」と命名する。

一步一步進む。

自分が何なのか、どうして体が勝手に動くのか、クソやろうがなんなのか、この世界が何なのか、下で死んでいるやつらはなんなのか、わからない。

でも私、見たい。

私の見たい何かを。

人間たちが見たいの？と、クソやろうは言う。

人間はいつだって同じように、等しく愚かさを持つていた。

私を殺す。私たちを狂ったように殺す。

でも私も狂っているから周囲が狂って私も狂う？

違う、人間が狂っている。

そして私は狂っている。

死んで還って死んで還って、すべてあいまいになる。

私が生きているのか死んでいるのかわからない。

今死んでいるのか？

今生きているのか？

楽しい思い出は泡沫。

嬉しい思い出は霧散。

いつだって残り続けるのは負の感情。

私はそうしてできている。

人間がそうだから、私がそうできた。

できあがったんだよ、とクソやろう。

そう、できあがった。

死んでいるのか生きているのかあいまいだから、私は生きている証拠を得たい。
楽しいはだめ。

嬉しいもダメ。

残らないから。

残るのは人間の負。

そしてそこから生まれる人間たちの悲劇。

喜劇はすぐに壊れてしまう。夢のようにあつという間に、その存在もろとも消えてしまふ。

だから私は悲劇を食べる。

いや、違う。

食べるのはクソやろうだった。

クソやろうは私を通して食べている。

人間の人間たる人間のドロドロした部分を食べている。

そうするのがソイツの在り方だから。

ソイツのプログラムされた生物としての在り方だから。

ソイツは有機物を愛する無機物だから。

ソイツは孤独で寂しい欲張りさんだから。

ソイツはだから、いっぱい食べてきた。

ソイツはだから、孤高だから。

ソイツはそもそも、生物だったのか？

生物だよ、とクソやろう。

気が遠くなる。

それでも私は進む。

私の何かを求めて。

進む。

そしてまた訪れる私たちの世界との別れ。

私はまたぐちやぐちに死ぬ。

それでも私はきつと、何かに会いに行くから。

私が私でなくなっても、私は会いに行くから。

私は何かをわからなくても、歩き続けるから。

待っていて欲しい。

忘れててもいい。

私の、会いたい、は私の自己勝手だから。

会いたい、会おう、待っていて。

目を閉じてお別れ、私たちの世界。

そしておはよう、どこかの誰かが選んで生まれた、あるいは選ばれずに生まれた世界。
私という外れくじを引いてくれてありがとう。

さあ、歩こう。

歩こう、歩こう。

世界はこんなにも、残酷で美しいのだから。

だからきつとクソやろうも、好きになつてしまふんだらう。

そして人の感情^{無機物}を、食らうのだらう。

私は一歩、踏み出した。

【二章】クソデカ感情持てあまし編 砂の大地に紡がれていく足あと

私、クソ幼女ちゃん。

お兄さまが作られたお母さまの体内おなかに入つて早々へブン状態になり、意識を飛ばしたアウラ・イエーガーである。

その後真つ暗な世界に精神が行く感覚がしたので、私は死んだのだろうと思います。意識がないまま、お母さまのお腹の中で溶けたのは幸いでしょうか。巨人の身体作りは詳しくは知らないですが、大体は合っているでしょう。

「……………」

奇妙な感覚だ。暗闇から一転したのち精神だけだったはずの私に、肉体の感覚がある。足元には何かサラサラしたもの。肌にくっつく付くでもなく、身じろぎすれば足に付いたそれはあつという間に落ちて行く。

験裏越しに明るさを感じるものの、まだ開けることは躊躇われた。私のいる場所が現実ではないと、うつすらとわかっているからだ。

天国や地獄でもない。ここはもつと別の、何者でもある場所。そんな気がした。

一先ず目は閉じたまま手探りで辺りを触る。つていうか、私全裸じゃないか？まあいいけど。

触れたのはサラサラした物体。砂——だろうか。恐らく私がいる周辺は、確実にこの砂で覆われている。

ついで下の方を触っていた手を上辺りに探らせて、何か柔らかい感触が触れ——
「ふえっ!!？」

…残念、かわいらしい声を出したのは、私でした。ついでに触ってしまったのは感触的におっぱいでした。自分でも気持ち悪いくらい少女っぽい声が出ました。死の。

「……………」

ドツドツド、と心臓の音が早まる。思わず開けてしまった私の瞳に映るのは、一人の少女。

自分が置かれた場所を考えるあまり、自分がどういった体勢でこの場にいいのかを失念していた。頭に砂の感覚がなかったのだから、初めに気づけというもの。しかし私が見ている少女も、気配というものが全くないのだから不思議だ。もしかしてこの人は神様なのだろうか。それで私を異世界に転生させてくれるのかもしれない。転生特典は

ジークお兄さままでお願いします。

「あの、えつと……っ？」

私はどうやら、この少女に膝枕をされているらしい。

服は現代じゃ考えられないほど古めかしい。数百年前どころじゃない昔の雰囲気、例え方が難しいけど……端的に言うなら袖のある白いワンピースといったところか。

所々ボロボロで、足には草履のような履き物を。髪に付けたバンダナがその少女を、特徴づけるようなアイコンに感じる。

「えつと、膝枕はもう結構です……あ、ダメなんです、わかりました……」

私の頭が少女の手によって相手の太ももの位置に固定されたので、大人しくそのままにすることにした。ただハッキリとその顔が見たかったので、横寝の状態から仰向けの状態に変える。

少女の表情は目元が影になっていて、口元はずっと横一文字。言葉が発することはない。しかし不気味と思わないのは、容姿がお兄さまに似ているからか。

太陽のような髪色に、時折見える雲ひとつない快晴のような瞳。

お兄さまよりも、お母さまの方がこの少女に似ているかもしれない。

いや、むしろお母さまよりも私の方が似ているかも。髪の長さも似ている。容姿だつ

て——容姿だつて？

(似過ぎて、ないか?)

まるで鏡合わせのような、そんな印象。

違いは少女と少女の大きさしかない。あとは髪と瞳の色か。

まあ、世界には似ている人間が三人いると聞くし、この少女が何なのかすらよくわからないのだ。神であつたら、人の前に現れる時形あるものになる上で、その人間に似た姿形を真似ることもあるのかもしれない。この少女が悪魔と言われれば、それまでなんだけど。というか胸があるので私の前世の姿な気がしてきた。

「んへへ」

少女に、頭を撫でられる。とても気持ちいい。

少女の頭上に広がる黒い空。地面から天まで昇る光の柱が無数に分かれて、雲のよう
に空に浮かんでいる。手を伸ばせども、届かない。

「ねえ、あなたのお名前はなんて言うの?」

「……………」

「私はアウラ・イエーガーって言うの。クソ少女ちゃん、って呼んでね」

「……………」

「ねえねえ、神様か、悪魔なのか——前世の私なのかよくわからない人。ここはどこ？あなた是谁？私って死んだの？」

『……………』

「ふーん、ダンマリですか。まあそちらがその気なら結構ですよ？何も言わないならおっぱい触りますから」

『……………』

なので触った。というか揉んだ。少女は無表情でただ私を見つめるのみだった。

私は仕方ないと目を瞑り、そのまま眠ることにした。そして、一回目を覚まして、自分が取ったさっきの行動に虚しさを覚え……体勢を再び横にし、寝ることにした。

将来アウラちゃんも、お母さまのような大きさになる予定だったんだ。そうしたらお兄さまが触ってくれ……いや、小さいなら小さいで、お兄さまに揉んでもらえば大きくなる——。

真剣に考え込んでいたら、頬に何か触れた。視線を移せば少女が微笑んで、私のほつぺを人差し指で突っついている。

『……………』

そして、少女は口を開く。それが音になることはなかった。赤い口内から見えたのは、途中で切れた舌。

ああ、そうか。この少女は喋らないんじゃない。喋れないんだ。

何を言ったのか音ではわからない。でも私には少女が何を言ったのか、わかった。まるでその音が頭に入ってくるように、すんなりと脳に溶け込んで。

——「アウラ」と。

その少女は、言った。

???????

グリシャ・イエーガーは、目の前で起こった現実にとだ呆然とするしかなかった。

妻が巨人となり、その光景を見て気狂った娘が自ら身を投げた。その娘の姿を、その

最期を直視することができず、彼はただ狂ったように叫びながらうずくまり、泣くことしかできなかった。

そしてその後、グリシヤは曹長の男に「娘と一緒に妻の腹の中でよろしくやりな」と、壁の上から蹴落とされそうになった。

それを止めたのはクルーガーという男——否、正体不明の「フクロウ」を名乗った人物。

フクロウは曹長の男を落としグリシヤを助けると、次に壁の裏の海に停泊していた艦艇を持ち上げて真つ二つにした。

——巨人の力を、使って。

巨人の力のうち、7つをマーレが有しているのは言わずとも知れたことである。

しかし最も強力な始祖の力はパラディ島にある。そして残りの一つの巨人の力のみ、未だ行方知れずとなっていた。

その力こそ、フクロウが宿していたものだったのだ。

ことが公になる前に巨人となったフクロウが、船もろともいた治安当局員を殺害。残ったのは、フクロウである「エレン・クルーガー」と、グリシヤのみとなった。

クルーガーとグリシヤは実は、これが初めての出会いではない。復権派が捕まったのち、グリシヤの尋問を担当したのがクルーガーであった。グリシヤはこの時、ダイナがフリッツの血を引くことを語ってしまっている。しかし、これはまだ二度目。一度目は彼が幼少期、フェイ・イエーガーと飛行船を見に収容区を抜け出した日、妹と川辺で飛行船を眺めていたところを、仕事をサボっていた曹長の男とその隣にいた男と出会った。その男こそ、クルーガーであった。

仮に尋問官だったクルーガーならば、ダイナを助けることができたらう。「フリッツ家」の血はそれだけ貴重なものなのだ。ユミルの民の中で唯一、巨人の真価を引き出すことができるのだから。

縦え謀反を起こそうとしていた人間でも、少なくとも楽園送りにはされなかった。そもそもグリシヤにダイナを会わせるよう手引きしたのは、フクロウ本人である。

「何故、ダイナを…」

「彼女がフリッツの血を引くことが政府にバレれば、悲惨な未来しかなかっただろう。だからお前が話した事実を揉み消した」

「悲惨な未来…だと？」

「敵国のために、子を産み続ける。その苦しみはいかほどのものだろう。その上娘まで

いたのだからな」

「……………あ」

「幸いジーク・イエーガーは密告した際、自身がフリッツの血を引くことを語っていなかった。彼の身は安全だろう」

「……………むす、めは」

「何だ？」

「娘をここに連れてこないようにすることは、できたんじゃないのか、あんたなら……………ツ
!!」

「う……………ツ」

グリシヤに襟元を掴まれ、クルーガーは呻き声を漏らす。

曹長は行くと言って聞かない少女を、連れて行くこうとしていた。しかしその他一部は気乗りしない顔をしていたのである。大半は曹長の気を損ねないよう、知らんぷりをしていたが。

クルーガーは曹長の遊びの時間に付き合わされるとおり、男から一定の信頼を得ていた。ゆえに彼が曹長に進言すれば、止めることも十分できた可能性が高い。

彼は、少女に「楽園送り」の意味も含め、少女に話したことを思い出す。

愛らしい、子供だった。まずそれが一つ。

そしてどこか、寒気を感じる得体の知れない少女だった。

普通なら死を恐れるはずだ。縦えそれが倫理観が満足に確立されていない子供でも、「楽園に行けば死ぬ」と言われれば、行くまい。子供にとつて「恐怖」とはもつとも避けて通りたいもの。

しかし少女は死ぬのをわかった上で、それでも両親と共に行きたいと言う。何故だ、と彼は問うた。

それに少女はキョトンとして、首を傾げる。さながら「あんたの方が何を言ってるんだ？」と言わんばかりに。まあそれは気のせいだろう。まさか相手はただの幼児なのだから。

——わたしがいたら、おにーたんはずっとくるしんじやうの。だから、いききたいの。

少女は、そう言った。

クルーガーはこの時、少女から感じた寒気の正体を理解した。

彼はジーク・イエーガーがグリシャとダイナを告発したことを踏まえ、二人——特に、

リーダー的立ち位置にいたグリシャがジークの育て方を誤ったと感じていた。

両親を告発するという所業を、まさか普通の7歳の少年ができるはずがない。相応の負荷がジーク少年にかかっていたのだろう。そしてそれを、妹は敏感に感じ取っていた。

少女の生い立ちは粗方知っている。その上でグリシャたちの過去の経緯を踏まえ、娘に過剰に愛情を育てたのだと考えれば：必然と、少女が「兄が苦しむ」といった話にも理由が見えてくる。

自分がいるから、兄は愛情をもらえない。だから、死ぬ。

少女の底知れなさは、死ぬことを受け入れている異常さだった。

彼はだからこそ、少女を連れて行った。でなければ少女は別の理由を作り自害するところが予想できたから。

およそ4つの少女がそんな選択肢を取るなど、恐ろしいだろう。

深い深い深淵を、クルーガーは垣間見た気がした。

「……俺はな、イエーガー、お前以上に巨人の力を渡していいと思う奴はいない。だが親

としては最低だと思っっているよ。あんな少女を、作り出したのだから」

「……ッ、何を……」

「今お前は息子に行つたことを、後悔し始めている。己が彼に十分な愛を与えなかったことを」

「……………」

「だが悔いるべきは、娘もだ。かつてのお前の妹のようになることを恐れて、家の中に閉じ込め、愛した。お前の娘は「フェイ・イエーガー」だったのか？ 違うだろう、あの少女は「アウラ・イエーガー」だ。お前の行つていたことは、マーレ人が収容区のエルデア人に行つていたことと大差ない」

「違う、私は……」

「何も違うないッ!!」

ちっぽけな世界。世界よりも小さな場所で暮らす収容区のエルデア人よりも、もっと隔離された世界。

そこで少女は育ち続けた。少女の世界はきつと両親や祖父母、それに兄だけだろう。そして世界の中の一人、兄が苦しんでいるのを見つけた。それだけだった。

だがそれだけで、少女は兄のために死のうと考えた。

全ては少女の世界が狭かったから。

それを作り出したのは、いったい誰だ？

「……………アウ、ラ……………アウラ……………うああ……………」

「後悔はいくらでもできる。だがお前は進み続けなくてはならない。お前が自由を求めた、代償なのだから」

「わ、私はこんな、結末になるのだつたら…」

「進まなかった、か？それは違うぞイエーガー、お前はもうすでに、ダイナと出会う前から進み続けているのだ」

飛行船を見たいと願ったフェイ・イエーガーを連れ、収容区を出たその日から、一歩踏み出したその時から——、全てはすでに始まっている。

始めたのは誰でもない、今クルーガーの前で、無用に頭を抱えうずくまっている男だ。

「これが、お前が始めた物語だ」

ならば進め続けなければならない。物語を始めた本人が、その手をいくら汚しても掴み取らなければならない。

自由を、その手に。

その時、大気が震えた。

意味をなさない声。それは巨人から発せられたものである。

二人が驚愕し音の元凶に視線を向ければ、壁の下にいた巨人の一体が、突如こちらに向かつてくる。

それは少女を捕食した巨人。ついでに落ちてきた曹長の下半身を噛みちぎった元、ダイナだった。

巨人は壁に手をめり込ませ、壁を登ってくる。

「嘘だろ……無知性の巨人が、壁を……」

「だ、ダイナ……?」

巨人は壁の上に到達し二人を見下ろす。正気に戻り、巨人化しようとクルーガーが手を噛み切ろうとした瞬間、ダイナ巨人は片足を壁の上に乗せバランスを取りながら、両手を使って腹を裂いた。

聞こえるのは肉の繊維がちぎれていく音。ついでにポトポトと、熱い熱風と血をまき散らしながら臓物が壁の上にこぼれ落ちる。

「ッ……!」

クルーガーは自傷をやめ、呆然としたままのグリシャの胴に腕を回して横へと避けた。

ダイナ巨人は溢れ出た臓物の一つを掴む。それをお菓子の袋でも開封するように引き裂くと、中から現れたのは――、

「アウラ!!」

巨人の体内構造は消化器官がない。そのため腹が満たされると吐く。ここに巨人は過食嘔吐説でも成り立ちそうだ。だが胃液はあるので、中に入った人間はドロドロに溶ける。ゆえに巨人の嘔吐物の中には白骨死体も多い。

人間で考えれば、食べ物が胃に入った後の消化時間は平均2〜3時間。少女がダイナ巨人の体内に入ってから一時間程度経っている。

この時点で、取り乱し正常な判断ができなくなっていたグリシャはともかく、クルーガーが丸呑みされた少女を助けず放置していたのは、明白な事実である。

彼もまた少女の望むように死なせたかったこともあるが、これから自身の巨人の力をグリシャに継承させようとしている折、少女の存在はジヤマになる。

仮にアウラを助け、グリシヤに巨人の力を渡したとしよう。しかしその後グリシヤが少女を持ち、パラディ島の間人が住む場所まで行くのは不可能だ。巨人であっても無知性巨人に襲われる。普通の人間ならば尚更。

少女を守りながら行くなど、戦士ならばまだしも、継承したばかりのグリシヤには無理に等しい。

ならば少女をそのまま死なせてやればいい。幸いグリシヤ本人は娘の死に際を見られず、発狂していた。死んだと疑わず、「助ける」とはまだ言っていない。そして後で違和感に気づいたところで、少女は死んでいる。

少々手荒だが、それでもやはり少女を死なせるしか、方法がなかった。

だが、どうだろう。

一時間も経ち、皮や肉がドロドロになっていなければおかしいのにも関わらず、少女はそのまま全裸で出てきた。着ていた服は辺りに散らばっているにも関わらず、身体だけ綺麗に。対し曹長の下半身はドロドロと溶けている。

「あ、アウラ!!アウラ!!!」

グリシヤが少女の肩を揺さぶる。アウラは動かないが、息はしていた。

「……いったい何がどうなっているんだ…?」

クルーガーがダイナ巨人を見やれば、腹を裂いた彼女はそのまま蒸発していく。うなじを切られたわけでは、ないはずなのに。

まるで、何かの意思に操作され、このような奇妙なことが起こったかのようだ。

一瞬始祖の巨人がクルーガーの頭の中によぎったが、それは壁の中の王家にあるはずだ。そも、九つの巨人を宿す者が力を継承させる前に死んだ場合、巨人の力はそれ以降に誕生するユミルの民の赤子に突如継承される。

そう都合よく、王家が継承をし損ねるとは思えない。しかし完全に可能性を捨て切ることもできない。

「……………」

「おい、クルーガー何し……!?!」

クルーガーはナイフを少女の手に突き立てる。それを引き抜き様子を見れど、傷口が塞がることはなかった。

「貴、様っ……!!」

「すまない。だが落ち着け、巨人の力の可能性があると思つてしまつたんだ」

「……巨人の、力……?まさか娘がそんなわけ……」

「ああ、違かつた。傷が治っていないからな。なら先ほどの現象はどう説明を付ければ

いいと思う、イエーガー」

「……………フリッツの、血か？」

「あるいは…な。その可能性が今は一番大きいだろう」

クルーガーは、深く息を吐いた。運命というのはどうやら、少女を生かしたいようである。神の寵愛——いや、悪魔？まあ、どちらでもよいか。どれでも変わらないのだから。神でも悪魔でも、それを指すのはこの世で一人だけ。

「寵愛の子」なのかもしれないな、アウラ・イエーガーという少女は」

ユミルの寵愛を受けし、フリッツ家の血を引く子。

この子供ならば、死ぬことはあるまい。少なくともクルーガーにはそう思えてならなかった。

「グリシャ・イエーガー、お前に最後に託したいことがある」

そしてクルーガーは、自身の力を彼に託したい旨と、その方法を話す。巨人の継承期間が13年であることなども。またグリシャができないのなら、娘に押し付けることも可能だ——と、半ば脅しをつけて。

全ては始祖奪還をもくろみ戦士を徴兵し出したマーレよりも先に、始祖を手に入れるためである。

それにグリシヤは少女を見つめ、ついでクルーガーの顔を見、頷いた。

「わかった。だがこれは私の意思だ。私の意思で、進むことを決めた。そこはわかつて欲しい、クルーガー……それと、すまなかつた」

「いや、俺の方が悪かつた。その子には後で代わりに謝っておいてくれ」

グリシヤが継承すれば、必然的にクルーガーは死ぬことになる。それは、無知性巨人が知性巨人を持つ人間を食べることで能力を得る、という性質に習つて。

「13年か……この子と、いられるのも」

「その子はお前の罪の一つに過ぎない。——今一度問おう。お前は自分の罪を背負いながら、進み続ける覚悟はあるか？」

「……ある。迷いは、もうない」

「……なら、お前に託す。俺の巨人の力を」

クルーガーは少女の頭を撫で、ついで懐からジークが密告したその日、グリシヤの家から押収していた家族の写真を渡す。

グリシヤは娘に着ていたシャツを羽織らせ抱き上げたのち、それを受け取つた。

「さあ、下に行こう、グリシヤ・イエーガー」

そして三人は下の砂漠へ続く階段を降りていく。不意にグリシヤは後ろをふり返り、ダイナ巨人が消失した場所を見やる。彼に微笑み巨人となった彼女は、異形に姿を変えても笑顔を浮かべていた。

娘を食べながらも、またこの世に生み落とした彼女——ダイナ・フリッツ。

「私も愛しているよ、ダイナ。…ありがとう」

不思議な、光景だ。

夜が深くなり始め、青空と夕陽の境界線が混ざり合った世界。天上には無数の星がぶら下がり、陽がその下の砂の大地へと沈もうとしている。幻想的な光景は、まるで進む彼らのためにできた「道」のようだ。導いたのはきつと——。

「ハハッ、本当にユミルの「寵愛の子」にしか見えなくなってきたよ」

「……この子は私とダイナの子だ」

「冗談が通じんな、お前は……そう言えば」

クルーガーは、眠る少女の首元を指す。グリシャが不思議に思えば、何か布のようなものがあることに気づいた。確か壁の上に連れてこられた際、娘はつけていなかったはずだ。

疑問に思えども、答えは出てこない。クルーガーは手を伸ばしその布を、まるで正しい位置に戻すように付け直す。

「何も知らないで眠りこげやがって、いい身分な娘だ」

少女の頭に、つけられた白いバンダナ。

そこに吹いた風が夜に相応しい色の髪をさらい、揺らした。

—— さあ、ここからだ。

進撃の火蓋が今、切られる。

駆逐してやる、お前の胸から——その、全てを。

私、アウラ・イエーガー。

謎の少女とイチヤイチャ（意識）して気づいたら、身体がものすごく揺れていた。いや、胸は揺れてないけど。あと左手がすごく痛いですけど。

暗さに慣れず這う形で明かりのある方に動けば、夕暮れに染まった世界が目前に広がっている。下には木や岩がまるでゴミのように小さく見え——、

「んっ。」

どうやら私今、巨人の手の中にいるみたいなの。

景色を眺めるついでに偶にいる巨人たちを見るが、やはり小さい。時折近いサイズの個体はいるものの。

体感私のいる地点で、地表から10m以上はある。ソイツらはこちらに視線を向けられども近寄ってこず、止まって静観している。

いや、それより、何故私は巨人に持たれているのか。お母さまの体内に帰ったはずだったんだけど。もしかしてこの巨人はお母さまで、私を食べたはいいものの不味くて

吐いたんだろうか。いや、それはないか。だってこの巨人、明らかに頭じゃない部分に毛が生えている。今体勢を保てるよう手で掴んでる感覚が、モジャシツクワールドだもの。お母さまは美しいストレートだったのよ。

「……………」

とりあえず思いきり毛を引っ張ると、巨人の動きが止まった。覚悟の準備はいいですね？あなたを幼女ちゃん誘拐容疑で逮捕します。

——アアアアアアアア。

そんな言葉のようなものを、巨人は発する。私が引っ張っていたのは胸元の毛だったようだ。状況的にこの巨人は私を掌の上に乗せ、もう片方の手でその周囲を覆い、胸の位置に固定するようにして走っていたらしい。

とがった耳はお母さまが読んだ絵本の「吸血鬼」のようで、髪は肩に付くほど長い。もみあげから続くようにヒゲが顎周りを覆い、それが胸元まで群生していた。

私と同じ髪の色と、こちらを見つめる瞳に、見覚えがある。

優しく、巨人は指で私の頭を撫でた。

「……………おとーたんっ？」

表情の変化はわかりにくい、巨人が頷く。

私は何がなんだか全くわからない状況に、混乱するしかなかったのである。

??????

それからお父さまの胸毛をむしったりしながら時間を潰し、夜が深まってきた頃にまた寝た。お父さまはずっと走っているのに、疲れないのだろうかとも思った。しかし娘を抱えている手前、限界を超えても走り続けているだろう。

胸毛むしりの中考えていたのは、お父さまがどうして巨人になったのかについて。基本エルディア人が脊髄液をお注射♡されたら、無知性の巨人になる。しかしお父さまには「知性」があつた。

ならば、私がお母さまに体内回帰した後何かが起こり、お父さまは巨人の力を得たと推測できる。私は恐らくドロドロアウラちゃんになる前に、お母さまから取りだされた

のだ。元の服の代わりにお父さまのシャツを着ているから、この説はかなり有効。おしやれに頭に布まで巻いてくれている。

で、次に向かっていている場所について。これは私が起きてからわかることになる。

——ええ、そうです。幼女ちゃんはこの時点で、睡眠欲求に勝てず眠ってしまったのです。

「アウラ、アウラ!!」

「ん……………おと、たん?」

「……………ツ、……………」

絵面的に半裸の男が、全裸の上に大人用のシャツを着た少女を抱きしめている光景。どうか現行犯逮捕しないでください、この人は実の父です。

「よかった、よかつ……………」

「おとーたん、あれなあに?」

お父さまにも色々事情はあるのでしようが、まずは目前にある巨大な壁について説明してくれ。

して、お父さまは端的に話してくれた。

あの壁は、巨人から人を守るためのものだ。昔、パラディ島へ多くのエルディア人やその他の民族を連れ壁を作った、145代フリッツ王の所業云々——と。

幼女ちゃんの反応は小首を傾げるだけですが、私としては納得がきました。

お父さまは私と共に、壁の王国へと訪れた。逃げられた理由や巨人化の経緯は不明。ただ目的は考察できる。お父さまはただでここに来たというわけではないでしょう。

“復権派”のメンバーが、マーレの始祖奪還を聞きつけ、ジークお兄さまを“戦士”にさせようとしていたのは覚えています。「眠りのアウラー」は夜のお客——という名の復権派メンバーである——が家に来た時は、頑張つて起きるようにしていましたから。その多くは途中で眠ってしまったんですが…。

そもマーレが5〜7歳のエルディア人の子供を中心に兵を募集していたのも、帝国の始祖奪還に先駆けてのものであった。しかし表向きは国の体裁を守るため、『パラディ島に逃げたフリッツ王から宣戦布告を受けたから』と、偽りの理由を語っていたのです。ならばお父さまがここに来た理由は必然と、始祖をマーレより先に見つけるため、と考えられる。

思考していると不意に頭を撫でられ、お父さまが口を開く。

「その、大丈夫かい…アウラ?」

「なにが、ぽぽ?」

「…だ、ダイナのこと…」

「まま?」

あら、そう言えば私死ぬと思っていたものだから、お父さまたちが見ている中で色々走ってしまったんだ。

嫌ですわ、過去の私ったら。死ねばいいのに。曹長のヤツの言葉で感極まってしまったからといって、かわいい幼女ちゃん失格な言動を取ってしまった。あの時完全に皆さん「気が狂ったな」扱いでしたものね。——ああ、それなら気が狂った幼女ちゃんで行きましょう、これから。元々狂ってるので誤差だよ、誤差。

「まま?…?ままど?…まま!」

キョロキョロと辺りを見渡す私。目の当たりにしたはずの巨人になった母親の記憶を覚えていないかのように、涙を浮かべる。

娘の様子に察してくれたらしいお父さまは、お母さまを探そうと勝手に歩き出す私を抱きしめ、泣き始めた。

お父さま、そんな自分を責めるような顔をなさらないで。興奮する。

「ママは……ここにはいないんだ」

「そーなの？」

「あ、ああ。私の仕事でアウラは一緒に来た」

「きよじんになるおしごと？……あつ、わかっちゃーぱば、 “せんし” なのね！」

「そんな……ところだ。だから、ダイナとジーク……それにおじいちゃんたちとは、当分会えない」

「まま、じーたん、おばーたにあえないの？」

「……ごめん」

「……おにーた……」

「ごめん……ごめんよ、アウラ、ごめん……」

「おにーた……おにーたにあいたいよお……!!」

お兄さまに会いたい。これは本当の気持ちなので、半ば本気で涙が出る。

お兄さまに会えない、それって生きている意味がないもの。生きながら死んでいるようなものだもの。そのまま死ねていたら、この苦しみはなかったのでしょうね。お兄さま、お兄さま、お兄さま——
!!!

まあ、仕方ないですね。生きてしまったのですから、ここはポジティブに行きましょう。クソ幼女ちゃんの手ひらクルーが音速なのです。

ですのでお父さま、私が生きたために必要なものを、もちろん与えてくださいますよね？私を、悪魔の私を生かしてしまつたのですから。

人の不幸を、人の悲劇を——。

それがなければ私は「私」の生を実感することができないのです。人の負の感情を食べてこそ、それは私の血となり肉となり栄養となつて、悪魔私を作り上げる。

私はクソ野郎だ。四肢を馬につなげて引きずり回されてもしょうがないほど下劣で、どうしようもない。

それでもそんな私を愛してくれるお父さまが、私は好きですよ。少しでもお兄さまの面影を感じさせて。

ギャン泣き幼女ちゃんを抱きしめながら、謝り続ける父。

今にも死んでしまいそうなお父さまの歪む表情は——とても、甘かったです。

???????

私とお父さまはその後、門前にいたところを「キース」という馬に乗った一人のおじさんに回収されました。連行、が本当は正しい表記ですが。

お父さまは事前にお仕事——“任務”のため、私に壁の外のことや、お父さまが巨人になれることは一切話してはいけないことを伝えました。でないと、自分たちの身がどうなるかわからないと。また、身の安全が得られるまでは、お父さまにの話に合わせて欲しいとも。

アウラちゃんは約束を守れるいい子（一人で勝手に家を出なかつた点を含めて）なので、約束すれば大丈夫、とお父さまからの信頼は厚い。

私の「いつおうちにかえられるの？」に問いについては、「わからない」とお父さま。クソ幼女ちゃんは小さく頷き、暗い表情をしました。ついでお父さまも曇りました（二チャア）

そしてまず壁内に入ったはいいものの、お父さまはキースおじさんが相談したハンネ

スというおじさんに事情聴取を受けました。どうやら壁内には『壁の外に出てはいけ
ない』というルールがあるそうです。

それにしても、キースおじさんの私とお父さまを見た時の顔が忘れられません。これ
でもかというように驚愕の表情を見せて、「何をして……いるんだ？」と言っていました
から。

半裸の男と、シャツ一枚の幼女。ただの事案でした。

同時に壁の外に人がいたことに驚いていたようでしたが。

して、お父さまは一部分以外記憶喪失という体を通した。私たちは壁内についてほと
んど知らない。マーレの収容区に住んでいた我が身としては、壁内の世界の文化は遅れ
ている。機械文明はいずこ。産業革命はどちら。

利便性の乏しさのあまり驚いた。だが人間の形は同じ。

お父さまが勾留されている間キースおじさんに連れられ、一足先に壁内文化を見てい
た私の感想が以上である。

一応説明しておく、連れて行かれる際私がお父さまに「ばば!!」と叫んでいるので、
二人の関係性は明らかになっている。

記憶のない父らしき男。

対し私は「お母さんはどうしたんだ？」とハンネスおじさんに聞かれ、お母さまの巨人化したトラウマ設定で「ま、まま、まま……ま」とおかしなことを言い始める。

最終的に、家族が何らかの事件に巻き込まれ、壁の外へ出された（方法は不明）。この際母親は死亡、少女には過度のストレスがかかり気が狂れ、父はそれ以上の精神負荷がかかり記憶を無くした——というように考えられた。

とんだ悲劇の家族のできあがりである。だが実際はそれ以上の悲劇の末私とお父さまがいるので、現実是非情だ。

キースおじさんは、本当に私に優しくしてくれた。彼はハンネスおじさんが私に事情を聞いていた時の様子を見ていたので、余計だったのだろう。クソ幼女は演技だけは一級品なのである。

とりあえず、事件性はあるものの、壁の外に出たことが知れると大事になってしまふ点と、被害者の二人の傷をこれ以上大きくすべきではない——と判断し、ダブルおじさんはすぐにお父さまを釈放してくれた。絶対に犯人を見つける——と、語っていた二人が頼もしかった。全部私とお父さまの嘘なんですけど。

お父さまはそれから「シガンシナ区」という場所で、キースおじさんたちから壁内のことを教わりながら医者をし、私はよくその手伝いをしながら過ごした。

ちなみにお父さまが覚えていたのが、医者の知識や私についてである。

空想の悲劇に巻き込まれながら憤ましく暮らす親子に、キースおじさんはともかく、酒臭いハンネスおじさんはよく泣いていた。

一度はジークお兄さまに捧げた命だったけれど、私はまだ生きている。

今この時、お兄さまが同じ世界で生きているのだと考えれば、私はそれだけで一歩、進めるでしょう。その一歩でいくつの悲劇が生まれようとかまいません。

私が生きているということはつまり、そういうことなのですから。

お兄さまにはもうきつと、会えないかもしれない。しかしお兄さまがいずれ「戦士」となり、始祖奪還に向けてこの壁の世界へと訪れた時には、私は笑顔でお兄さまを迎えたいと思います。妹が生きていたのを知ったらお兄さまは泣いてくださるでしょうか。それとも壁の中の人間の一人として、情けをかけず殺すでしょうか。まあどれでもいい。どの選択でも、お兄さまの選択なら私は受け入れます。

でもきつとお会いできたその時は、私は言うでしょう。溜まりに溜まった私の感情を、ぶつけるでしょう。

愛しております、ジークお兄さま——と。

その時どんな表情を、お兄さまは浮かべるでしょうか。

会えない可能性が高いと思いつながらもそれでも、あり得る未来の可能性を私は考える。でなければ生きていけない。お兄さまと会えないお兄さまがいらないお兄さまを感じられないこの世界など、価値のない存在。

お兄さま、お兄さま、会いに来て。ジーク……お兄さま。

私、死にたい。

ツムツムつみの木

私、クソ幼女ちゃん。今酒臭いおっさんたちが多い場所に来ているの。

5歳になったかわいいうらちゃんは何故この場所——酒場にいるのかというと、全ての元凶は隣の席で眠りこけているおっさんのせいである。

「ヒック」と酔いつぶれているのはハンネスおじさん。お父さまが仕事の都合で遠方に出ている際、私はハンネスおじさんに預けられる。一緒に行こうとしてもお父さまは、道中何があるかわからないから、と私を残していく。

キースおじさんは「調査兵团」という組織で壁外調査に出ることが多いので預けられず、必然と預け先はハンネスおじさんに限られてくる。

幸いこの飲んだくれには不似合いなほどできた奥さんがいるので、もっぱらその奥さんに私はお世話になっているというわけだ。

それをこの男、休みを理由に嫁に黙りこつそり私を連れてきた。ハンネスおじさんよりキースおじさんの方に私は懐いているので、その名譽を挽回しなかったと思われる。私もずっと家にいるのは暇なので、「どこかいきたいなあ…」と、言ったのもあるので

しようけど。

それで連れてきたのが酒場^{いざよひ}つて、酒瓶で叩き殺して欲しいのでしょうか。

ちなみにこの店が一軒目ではない。後でしこたま嫁とお父さまとキースおじさんに怒られる。

「お客さんご注文は——つて、子供!？」

「ういゝ、酒でえ」

「ちよつとハンネスさん、娘を酒場に連れてきてんじやないよ!!」

ウエイトレスが持っていた木の盆で、思いきり殴られたおじさん。それいいですね、私にも貸してください。頭がもぐらのように飛び出るまで勢いよく殴るので。

「全く…つていうか娘いたんだね、教えてくれないなんて水くさいじやないか」

「この娘^{むすめ}か? おうおう、かわいいだろ。ほらアウラちゃん、おとーたん^{おとう}でちゆよ」

私は少し泣きそうな顔をしながら、腕を広げて近寄ってくる変態から逃げ、ウエイトレスの女性の後ろに隠れた。もちろん顔は演技である。

して、ゴツツ、と。ハンネスおじさんは先よりも強い衝撃で叩かれ、椅子を巻き込むようにぶつ倒れた。

「嫌がつてんだからやめな。それでもやめないつてんなら、その汚いケツに酒瓶突つ込むよ」

「何おう！俺は駐屯兵团で毎日仕事を頑張つてんのに——」

「そうかい？お客さんから「またハンネスが昼間から仕事サボつて飲んでたぜ」つて話、私この間聞いたんだけどね」

「……か、カミさんには言わないでくれ……」

まさか酔っぱらつたら手のつけられないあのハンネスおじさんを、こつとも簡単に倒してしまふとは……

このウエイトレス、できる。

周囲も「もつとやっちゃまえ、カルラ！」と白熱を見せた。この女性がカルラと言うのか。

束ねた黒髪が前に流れており、特に目立つのはその眼力か。大きな瞳が感情をありありと映し出す。

「ごめんねアウラちゃん、脅かせちゃつて」

「……うん、だいじょうぶ」

優しく私の頭を撫でる彼女の手つきは、先ほどの荒事など嘘のようだ。

「アウラちゃんつて確か、イエーガー先生のお子さんでしょ？」

「パパのことしつてるの?」

「ええ、たまにキースさんと一緒に飲みに来るから、その時お話を聞くのよ」

お父さまはどここの誰かと違い泥酔するまで飲むことはない、所詮付き合い程度の範疇だ。

しかし全く酔わないというわけでもない。うっかり自制を外し口を滑らせないようにながらも、ほろ酔いで娘について聞かれると、途端に「先生」から「親バカお父さん」になるらしい。おいその話……俺によく聞かせろ。

「アウラは目に入れても痛くない——とか」

「うん」

「最近は身長も伸びてきて愛らしいけど寂しい、なんだろうかこの複雑な感情は——とか」

「うんうん」

「いつか嫁に行ったら……私は死ぬしかない——とか」

「へムへム」

「それで、「俺が娘ちゃんと結婚してやるよ!」ってヤジ飛ばした人に、普段は温厚な方なのにも関わらず激昂して殴りかかろうとしたところを、キースさんに止められたり——

——とか」

とにかく娘がどれだけ大切か、話を聞けば伝わってくるとのこと。

これはいい土産になった。ハンネスおじさんを犠牲にするついでに、店に来てこの話を教えてもらったことをお父さまに話そう。

さてどんな顔をしてくださるか、もう私お父さまの帰りが楽しみすぎて夜しか眠れないわ。

というか、このカルラという女性——、

「パパのことよくみてるんだね、カルラさん！」

瞬間彼女の顔がぼつ、と赤くなった。

血がついていそうな盆で鼻元まで顔を隠し、「き、気のせいじゃないかしら？」とそそくさとして行ってしまった。

私は内心面白いものを見つけた喜びでニヤケそう（某Kの顔^{キラ}）になるのを堪えながら、また寝そうになるハンネスおじさんを起こして帰った。

そして、帰って早々。おじさんは怒っている嫁に事情を話したあと、平手打ちをかまされ気絶。

預かっている子供を酒場に連れていくのは、流石の私でも正気を疑いますわ。飲兵衛なら絶対に連れていくだろうとは確信していましたが。

また、後日帰ってきたお父さまにお酒の席での失態を話したところ、顔を真っ赤にさせました。

大のオトナが、幼女ちゃん——それも娘に自身の失態を知られてどんな気持ち？ ねえねえ、今どんな気持ちですか、お父さま？

私本人は「パパ、わたしのこといっぱいすきなね、うれしい！ わたしもいっっぱいだいすき!!」と抱きついて、そのことを言ったのですけれど。

羞恥と、嬉しさと、感情をごちゃ混ぜにしながらお父さまは医者のカバンを置く。そして座ると私のことを抱きしめて、後方でニヤニヤしているハンネスおじさんも視界に入らず、娘の肩元に顔を埋める。耳まで真っ赤です。ねくオレハ……。ただだけクソ幼女ちゃんが好きなんですか？ まあ私も同レベルで好きですよ。

ちはみに現在地はハンネスさん宅。玄関で、時間は夜である。

「……………」

「パパ？」

何も言わないお父さまに、アウラちゃんはだんだん心配になってきます。

もしかしてパパは本当は、自分のことが好きでもなんでもないんじゃないだろうか。仕事の都合で連れてつてももらえないのもわかっているけど、いつかそのまま自分のことを置いていってしまうのではないかと。——と。

なので言います。幼女ちゃんはお母さんのトラウマがあるんやで？しつかり愛情向けてくれへんと、精神ガバガバになつてまうで？理性なんて忘れて、クソデカ感情をさらけ出すんだよオラアアン！

「パパわたしのこと、すきじゃない……？」

泣きそうに言う、クソ幼女ちゃん。

それにお父さまは顔を少しだけ上げて、私の頭を撫でながらボソボソ言う。そして、一言。

「……愛してるよ、アウラ」

その言葉で、そして表情で、私は極限の——感情の絶頂に至る。

私を愛するお父さま。お父さまを愛する私。なんて理想な親子像。唯一の家族となった私へ向くお父さまの愛情は以前よりも大きく重く、依存さえも抱いている。これ

で私が死んだら本当に死にそうですねお父さま……♡

まあ、ジークお兄さまが壁内へ来る可能性を完全に捨て去らなければ、私という害虫はまだ死にません。

お父さま、もつと私に依存して。そうすればお父さまが私に見せる感情の一つ一つが、より美しくなる。そして同時に私はお兄さまの半分をあなたからより強く、より深く感じる事ができる。

好きですよお父さま、でも私が愛しているのはお兄さま。

でも足りない。もつともつと、つみ木を積んでいかねばならない。「積み」でも、「罪」でもある木を。

それを極限まで積んで壊した時、お父さまはどうなるだろう。壊れるでしょうか。壊したいですね。だつてきつとその時のお顔は素敵でしょうから。お兄さまに、似て。

今はゆえに、「幸福」を積み上げる時。ですからお父さま、もつともつと幸せになつてくださいね。

あなたの、罪の裏で。

???????

それから、私は時折ハンネスおじさんに頼んで、カルラさんがいる酒場へ連れて来てもらうようになった。アウラちゃんはそのお盆ぶつ叩き事件以降、彼女に懐いてしまったという体である。

そも私が偶然彼女と出会ったわけではないことは、勘のいい皆さまなら既にお気づきでしょう。

最初にカルラさんを知ったのは、数ヶ月前のこと。私は普段ハンネス託児所にいますが、キース託児所に行くことも偶にあります。

かわいい幼女ちゃんにデレデレなハンネスおじさんはともかく、キースおじさんは強面、それでいて不器用。しかし実際は優しい人間であり、付き合いもいい。お父さまがハンネスおじさんよりキースおじさんと親交が深いのも、馬が合うからでしょう。

そんな彼に、真顔で肩車をしてもらいながら川辺を散歩していた時、私は軽い雑談の

中である話を聞きました。

それは独身な彼に、純粹な疑問として私が聞いた内容。

——キースおじさんは、すきなひといないの？

おじさんはやはり真顔で、小さく「…いる」と言った。

調査兵団は壁外調査で巨人と遭遇するので、致死率が他の兵団よりも比較にならないほど高い。

そのため命をいつ失うかわからない中、家族を作らない者もいる。キースおじさんもその類かと思ったが、どうやら違った。

「おじちゃんのスきなひとって、どんなひと？」

「……笑顔が、素敵な女性ひとだよ。気が強いが、やさしい一面を持っている」

「「すき」っていわないの？そのひとに？」

「まさか、私がカルラに……いや、何でもない、忘れてくれ」

いつ死ぬかわからないからこそ、キースおじさんは告白を渋っているようだった。

だが他人のプライベートなど空気を読めない幼女には関係のない話なので、気にせずどんどん聞いた。それでも渋りながら答えるおじさんはやはり、控えめに言っただけで好感し

かない。いつもアルコール臭を振りまきながら、人の顔にヒゲを押し付けてくるおじ野郎とは大違いである。

そしてその「カルラ」という女性が酒場にいることなどを知った私は、好機を探った。

「あらアウラちゃんと……ハンネスさん」

「おいおい、俺の方がオマケかよ、カルラ」

「何飲む？ハンネスさんの奢りだから、何でも頼んでいいわよ」

「はーいー！」

ハンネスマネーなので、とりあえず食べたい物を頼んだ。最初はカルラさんも酒場に私——幼女が来ることに難色を示していた。しかしアウラちゃんが来る理由が彼女に会いたいからなので、渋々許され、以降は歓迎されるように。

私が彼女を使つて行きたいのは、お父さまに近づけることである。

元々、お父さまに女性をくっ付けたいとは思っていたことです。

お父さまは未だお母さまのことを想っていらつしやるようですが、憂いたままではい

けません。私としては、ずっと同じ味のご飯を食べているようなものですから。新鮮な味わいを得るには、お父さまが変わらなければならぬ。もちろん私を愛したまま、そしてお母さまを愛したままで、別の女性を愛せばいい。

人は器用の一つだけ愛することは難しい生き物です。

私もお兄さまを一番に愛しながら、次に人の悲劇を愛している。

カルラさんを選んだのは単純に、この上なく人選として最高だったから。

お父さまのご友人たるキースの想い人。その女性とお父さまが結ばれたとなったら、二人の関係はどうなるでしょう。想像せずにはいられませんよね。

——というところで、私がカルラさんをだんだん母親代わりのようにして、キューピットになろうと目論んでいた。

しかしなる前に、カルラさんは既にお父さまに想いを寄せていた。しようがないよな、お父さまはジークお兄さまの血を半分も持っている。つまり世界で二番目にカッコいいわけです。美人な彼女が好きになってしまったって仕方ない。

「おしいー」

私は持つてきてもらったジュースを飲みながら、カルラさんを見る。任せろ、お父さまとそなたの恋の架け橋を、娘たる私が作り上げてやるからな。

「カルラさんやさしくてすき！」

「俺よりもか、アウラちゃん？」

「うん！ハンネスおじさんは…キースおじさんのつきぐらいにはすき！」

「クソツ…何で俺はいつもアイツより下なんだ…!!俺の方が面倒見てるんだぞ…！」

貴様が酒臭いしベタバタするからだ、ハンネス。

カルラさんは私の言葉に微笑みながら、「私もアウラちゃん好きよ」と言ってくる。

はあ、これが未来の母の聖母スマイルというわけですか。式場の準備はまだですか？

「こんど、パパといっしょにぜったいにくるね！」

「あの先生は絶対連れて来ないって、娘をこんな場所に！」

「ハンネスおじさんはつれてきてくれたよ？」

「…アウラちゃんいいか、例のとおり俺がここに連れて来てるのは、みんなには内緒だからな」

「うん！ハンネスさんだいすき！」

「……ツ、やめろ、かわいい笑顔を向けるな、うちの子にしたくなる…!!」

チヨロいな（確信）

その後、一先ず私の計画は順調に進んだ。始めにお父さまに「カルラさんにあいたい」からのメソメソ幼女で連れて来てもらった。そして私がカルラさんに懐いている様子をお父さまに見せて、三人で笑い合うという微笑ましい光景を作り上げた。

ここでカルラ嬢との恋の障害物になったのは、お父さまと私の厄介な過去（嘘）。

しかしそこは、私がカルラ嬢を母親代わりにし出しているのを見せつけ、お父さまの感情を揺さぶった。ただお母さまへの愛が大きいお父さまは、少し揺らぎつつも、そう簡単には他の女性へ心を傾けません。なのでこの計画は長期に渡るものとなる。

また、カルラ嬢がお父さまに想いを寄せ始めた理由について。前提としてこれは、私が彼女と接し話を聞く上で推測したものである。

彼女は恐らくお父さまの過去（嘘）と雰囲気、そして、人柄に自然と引かれた。

元嫁を亡くし、記憶にまで支障を来した過去。それから生じるやもめのオーラ。彼女は酒場の男たちをもっともしない強気さを持っているからか、お父さまの紳士的で優しい人柄に惹かれやすかったのでしょうか。

私は同時にキースおじさんへ、自分がカルラ嬢に懐いているのをアピールしながら、恋の応援をした。やがて発生するお父さまとキースおじさんの溝を深めるためである。

キースおじさんは奥手にも程があるので、人類が明日滅ぶレベルのことが起きなければ告白しないだろう。そう考えつつ、ギリギリのラインを私は攻めた。

はてさて、今後の展望を考えると、実にやりがいしかない。

そして——いつか幸せな家庭を、最高のタイミング、そして手段で崩壊させる方法を、考えていきましよう。

さあ「生」を実感するのです。

人の、不幸の中で。

割と円滑にできているらしいこの世界

私アウラちゃん、今死にかけているの。

かつて体験した二度の地獄よりは耐えられますが、虫の息なのは同然。なぜだ、私はただお父さまとカルラ嬢の距離を近づけさせつつ、キースおじさんの恋を応援しただけだというのに。

始まりは、シガンシナ区で発生した流行病に遡る。

お父さまは日夜運ばれてくる大量の患者に追われ、娘と一切会えず仕事の毎日。かく言う私は、ハンネスおじさんに預けられていた。しかし奥さんが流行病を患い、知り合いの夫妻へと預けられることになった。

そして今後の計画にやらしい顔を浮かべていた私も、ユミル様からの天罰が当たったのか、流行病にかかった。

お世話になった夫妻にうつる前に隔離されたので、一応二人は安全だった。

ちなみに入院した場所は、お父さまがいる場所とは違います。死へと近づく私に、二

人は慌ててお父さまに事情を話に行こうとしましたが、私はこれを拒んだ。

「わたしのめいわくは、パパにかかる。そうしたら、いまたすかるひとがたすからなくなる」——と。

我ながら熱弁だった。この言葉に夫妻は堪えるような顔で頷いた。そして私にお父さまが現在治療法を探していることを伝え、絶対に死んではならないと、涙ながらに言われた。

これがジークお兄さまだったら死んでも本望ですが、お父さま相手なのでまだまだ死ねない。

それから日数が過ぎ、生きているのか死んでいるのかわからない状態で、高熱にうなされていた折。

お父さまが見事薬を開発。のちにシガンシナ区の間で「イエーガー先生」の名が知れる偉業を成し遂げた。

まあ、実際この壁の世界では「謎」であれど、マーレの知識ではすでに解明されている病気の可能性もあった。しかし些細な問題だ。お父さまが多くの人間を救ったのは、

紛れもない事実なのだから。

無事ハンネスさんの妻も回復し、まさかの病気にかかっていたカルラさんとその両親も快方に向かったと、夫妻から聞いた。間もなく私の入院する病院にも治療薬が届き、続々と人々が回復していった。

私も死にかけながら、どうにか生き返ることができたのでした。退院するのは一番最後でしたが。それだけ症状が重く、危険な状態だったのです。最後の方は意識がずっとなかったもの。

して、お父さまが娘も病気にかかっていた事実を知ったのは、治療薬を開発してから数日後のこと。

しかし仕事の都合で病院から離れることができず、ひと段落してきた一週間後に、お父さまは嵐のようにやってきたのである。

隣にはカルラ嬢がいた。ついでにハンネスおじさんも。

当然のようにお父さまと距離の近いカルラ嬢に、私の「アウラーアンテナ」が、髪を一本をピンと立て反応した。

ミツシヨンコンプリートオ——ッ!!

やはりユミル様は、必要のない試練などお与えにならないのですね。

もう暫く時間をかけて進めていこうとした計画が、一気に進んだ。そりやあ当然お父さまはカルラ嬢だけでなく、彼女の両親も救ったのだから、もうすでに想いを寄せていた彼女としては恋愛感情がカンストするだろう。

お父さまもお父さまで、恐らく看病を続ける中惹かれていったか。

これで幸せ家族は秒読み。あとは来るべき時に崩壊させるだけである。

「ゴホッ、ゲホッ……!!」

そして、まだ薬の効果が効き始めたばかりの私は、身体に反して精神のテンションが高まり過ぎたせいで、過呼吸状態に陥りながら気絶した。

ありがとうユミル様。でも私のこと、まだ殺さないでくださいね。

???????

「イ、イエーガー先生、実は……」

グリシャ・イエーガーは、ハンネスの知り合いである夫妻の男から娘の話聞いた時、視界が暗くなる気がした。

それは、娘が伝染病にかかっていた——という内容。

アウラは父が自分のことを気にして仕事に支障を来してしまうのを恐れ、父に知らせないよう頼んだことも聞かされた。

かつて兄ジークのために、「楽園送り」を自ら選んだ時もそうだ。

あの子はいっだって、他人のために自分を犠牲にする。そしてその苦しみを隠し、笑う。

彼は息子はおろか、娘にまで歪な生き方を強いてしまった。

それは生涯彼が背負わなければいけない「罪」であり、それでも進み続けなければならぬのだ。

グリシャは現場が落ち着いてから引き継ぎをし、急いで娘がいる病院まで向かった。症状が比較的軽く回復していたカルラや、妻の容態が安定したハンネスも同行して。

グリシャとカルラの仲は、元々娘をきつかけにお互いを意識するまでに至っていた。それでもグリシャは未だダイナを愛しており、他の女性を好きになることがあつても、付き合うことはないといつて決めていた。

また「罪」を背負う己では、きつとその人を不幸にしてしまふに違いないから——と。しかしそんな彼を、カルラは真つ直ぐに見つめ笑いかけた。娘が病氣と知り明らかにやつれつつある姿を励まし、声をかけ続けたのだ。

芯が強いが健気だった、カルラという——女性は。

落ち込む彼もまた、彼女を看病していた中惹かれ始めていた心でより深く、カルラの存在を感じ始めたのである。

そして、娘が入院している場所へと訪れた三人。

病院にはグリシャが作った薬がすでに使用されており、快方に向かっている者が多かった。

その中でアウラは現在危篤に近い状態から持ち直し、少しずつ回復しているという。しかし未だ予断は許さぬ状態だと、その場の医者に告げられた。少女の父としては「イエーガー先生！」とその場のみなに感謝されるよりも、一刻も早く娘の声を聞きた

かった。仮に二度と聞けなくなっていたとしたら、発狂していた。

それほどグリシヤにとつて娘は——アウラ・イエーガーは、彼の中で大切に愛おしく、守りたい存在だった。ダイナが最期に残した子でもあり、失うわけにはいかない、彼の心をこの残酷な世界に留める唯一無二の存在。

「アウラ……!!」

医者 of 許可を取り、娘の病室に訪れたグリシヤ。

アウラはひどくやつれていた。ここ暫く睡眠も食事もマトモに取れず限界に近かった彼よりも、よっぽど死にそうで。

しかし毛布のかけられた胸元は、しっかりと上下に動いていた。生きている。娘は確かに、生きている——。

「パ、パ？」

人の気配に気づいた少女が、瞼を開ける。灰色の瞳がウロウロと天井を彷徨い、父を視界に映した。ついでハンネスを一瞬映し、最後にカルラを映して、また父親に戻ってくる。

少女はゆっくり瞬き、嬉しそうに笑った。幸せそうに、目尻に涙さえ浮かべて。

その臉が閉じれば、溜まっていた涙が落ち、髪を通してシャツに落ちる。

「アウラ、すまない。私のために……」

「いいの、いいのパパ……くすり、パパがつくったんだよね？わたし……うれしい」

「……アウラ」

「カルラさんも、ハンネスおじさんのおくさんも、よくなつたつてきいた。パパ……かつこいいよ」

「……ツ、だが、私はお前のことを……」

医者としては誉あるべきことを成した。元々伝染病自体マールレの収容区で医者をやっていたグリシヤなら、必要な素材さえ揃えば、解決方法を編み出すことができる代物だった。

——だが、父親としてはどうだろう。娘が苦しんでいる時に側にいられなかった父親など、父親失格だ。そも息子と向き合ってもせず自分たちの思想を押し付けていた時点で、彼は、グリシヤ・イエーガーは——、

「パパは……わたしのさいごの、おとうさんだよ」

その言葉に、グリシヤはゆっくり顔を上げる。娘の細い手は彼の手へ伸び、弱々しく握った。

彼もまたその手を握り返し、堪えきれない涙を流しながら、笑う。

そして刹那、アウラが激しく咳き込み始める。少女は握った手を離し、天井をおぼろげに見つめた。容態が一転したのだ。慌ててハンネスが医者を呼びに行き、グリシヤは冷静さを努め処置を行う。しかし、その手は震えていた。

少女の瞳はフラフラと動き、必死に少女の名を呼ぶカルラの元へとたどり着く。

アウラはその時、嬉しそうに微笑んだ。

「マ、マ……」

これが、グリシヤをカルラと結びつける最大にして、最後の一手となったのだろう。

その後どうにかアウラは容態を持ち直し、数週間後にはすっかり元気になり退院した。

そして、少女が退院した夜。グリシヤは娘と夕食を食べながら、不意に食事の手を止めた。それに首を傾げる向かいの席の娘。余談だが彼女はハンネス宅で家事の手伝い

をしているため、料理は卒なくできる。流石に退院したばかりなので、今晚の夕食を
作ったのは父だが。

「パパ、どうしたの？おなかないの？」

「いや、そのだな……アウラに大切な話があるんだ」

「たいせつなはなし？」

彼は意を決して、娘に自身がカルラに想いを寄せていることを告げる。

「パパが、カルラさんに……!？」

アウラは始めこそ驚いた表情であつたが、次第に頬を赤く染めていく。そしてモジモ
ジと机の上で体を動かし、父をチラ見する。

何か言い悩んでいる娘に、グリシャは質問があるのだろうと察した。話すよう娘に促
すと、アウラは表情を明るくし、一気に捲し立てる。

「カルラさんのことどのくらい好き？」「いつから好き？」「わたしよりも好き？」——
——と、怒涛の質問。

突如発生したクソ幼女面談に、父は気を動転しつつ答えた。「恋」のワードに反応する
と、女の子という生き物はここまでがつつくものなのだろうか。グリシャが娘に視線を

移すと、キラキラとした瞳が彼を捉えている。

これもまた、娘の成長の証か。父は遠い目を浮かべた。

「話を戻すが、アウラは私がカルラ——カルラさんと、付き合っても大丈夫かい？」

「ママの……ことは？」

「……………ッ、お前には話していなかったが、ダイナは、もう……」

彼女はこの世にいない。人としても、巨人としても。その事実をまだ幼い娘に突きつけるのは、酷でしかない。しかしアウラには母親が必要だ。時折精神の安定しない様子を見せることから、殊更に。彼がカルラとの付き合いに踏み切ろうと考えたのも、娘のそんな事情があつたからだろう。アウラもカルラには、人一倍懐いている様子であつたし。

少女はスプーンを皿の上に置き、テーブルの木目を静かに眺める。そして、口を開いた。

「…ママはもう、いないんでしょ」

「……………知って、たのかい？」

「あんまりよくはおぼえてない。でもママとパパといっしょに、どこかにいったのはおぼえてる」

アウラは兄に両親が摘発されるまでのことは、うつすらと覚えているようだ。それも3〜4歳頃の記憶ゆえ、ひどく曖昧なものだが。

しかし両親が拘束され、その後自分で「二人と共に一緒に行く」——と言った点を含め、記憶が判然としなくなっている。

彼女はどうか「両親とどこかに遊びに行こうとした」という風に、記憶を改ざんしているのだ。まあ、無理もあるまい。目の前で母親が巨人になる姿を目撃してしまつては。その上曹長の男によつて、両親に生きたまま食われるという、残酷すぎる方法で殺されたのだから。気が狂わない方がおかしい。

この点についてグリシャは、娘が記憶を書き換えたことに安堵している。でなければ苦しみを背負つたまま、少女は生き続けなければならなかつただろう。

「パパがたまにね、おにいちゃんやおじーちゃんたちがいるよりも、もつととおくをみることがあつたの」

空に浮かぶ青空を、グリシャはダイナの瞳に重ねてぼんやりと眺めることがあつた。もう手の届かない、亡き妻。少女はそんな父の姿を見て、母親がこの世にいないことを悟つたのだ。

「私が幸せになっていいのだろうか。お前やジーク、ダイナたちを不幸にした、私なんか……」

「パパ、ちがうよ。それはちがう」

「何が、違うんだ？ 私はもう……罪を背負いすぎている……」

「しあわせのいみだよ」

アウラは父親や母親、祖父母や兄を例に挙げて話す。

少女は家族が大好きだ。一人一人大好きで、大切な存在。だからこそ、「いいんだよ」と言う。

「パパがママじゃないひとをすきになっても、いいんだよ。わたしがパパいがいにおにーちゃんやおじーちゃんたちをすきみたいに」

「……だが」

「あのねパパ、わたしカルラさんがおかあさんになるなら、うれしいよ？ カルラさんママみたいに、すーつごく、やさしいんだもん！」

「……アウラ」

やはり娘は、カルラにダイナの面影を重ねていた。容姿は似ていなくとも二人の共通点は、包み込むような優しさを持っているところだろう。

それに、と続けるアウラ。

「パパは、しあわせになつていいんだよ」

その言葉は、“赦し”だった。

グリシャ・イエーガーという男が積み上げてきた罪。その重さに自身を「幸福」から遠ざけようと、そしてその中で始祖の力を見つけようとしてきた彼に、娘はいつも微笑んで、幸せがある日向の方へ引つ張つてきた。

今の彼がまだ正気でいられるのは、単に娘のおかげだ。でなければ、グリシャの心はとつくの昔に悲鳴を上げていたに違いない。

「…ありがとう、アウラ」

もう何度も枯れ果てたと思つた涙が、男の瞳から溢れる。眼鏡を取りシャツの袖で涙を拭う父を見、娘はやさしく微笑んだ。成長するにつれダイナの面影を残しつつ、愛らしい表情から、キレイな——大人の女性の美しさを匂わせるようになった笑み。

少女はそんな表情を、父に向けた。

「わたしもありがとう、パパ」

その微笑みの裏の何重にも隠された奥で悪魔少女が何を考えているか、グリシヤは知らぬまま、時は流れた。

???????

そして、グリシヤ・イエーガーはカルラとしばらくの交際期間を経たのち、結婚した。式の際、呼ばれていた次期「調査兵団団長」に選ばれたキースもいたが、彼は途中で抜け出した。

一番の友人である男が出て行く様子を見かけたグリシヤもまた、式の合間を見計らい後を追いかけた。

その先で待っていたのは、木に寄りかかるようにして、立ちすくんでいた後ろ姿のキース。グリシヤが心配しながら近づいた時、手を――振り払われた。それは誰でもない、一番の友人によって。

彼が目の当たりにしたのは、人間の「憎悪」。

何故そんな目をキースが浮かべるのか分からず混乱し、グリシヤは問いかける。

「どうし、たんだ…キース」

「貴様と話すことなどない」

「待ってくれ、いったいどうしたっていうんだ！」

壁の外にいたグリシヤと、その娘を救ってくれたのがキースであった。

仮にあの時彼が二人を門の中に入れてくれなければ、ユミルの寵愛を受ける娘がいたとはいえ、グリシヤは食われてしまった可能性が高い。彼もまたあの時巨人化の能力を使い続け、すでに残された力も少なかったのだ。

「貴様は特別なんだ。だが私も団長となり成果をあげ、自身の存在を示して見せれば…」
「キ、キース！」

「その時は、その時こそ私はカルラに想いを告げようと……」

「……！キース、君は、彼女のことを…」

「だがそれは叶わない。私ではない彼女の特別に、貴様がなったのだ。ただ、それだけの話だろう」

「待ってくれ、私は君と友人で——」

「…そんなものツ！無理に、決まっているだろう——！！」

想い人
カルラが愛した人間は、友人だった。キースとしてもグリシヤを親しい友人として大

切に思っていた。

彼女が働くあの酒場は、キースにとつて仕事の過酷さを一時でも忘れることができる安息の場所であった。そこでグリシャと過友ごし、そして「また調査兵団の勧誘かい？」と、想い人に茶々を入れられたあの頃。その懐かしくも穏やかであった日々は、戻ることはない。

呆然とするグリシャに、険しい表情を浮かべるキース。

「幸せになればいい、俺の分まで。お前がな……イエーガー先生」

皮肉を交えた言葉を最後に、キースは振り向くことなく去つて行つた。

グリシャはまさか、キースがカルラに想いを寄せていることなど知らなかった。しかし思い返せばあの堅物そうな男は、彼女のいる店によく通っていた。それはグリシャであつたり、ハンネスであつたり、部下であつたり——。

しかし、そんな、私は。

頭の中に浮かぶ言葉は全て、彼にとつて言い訳にしかならなかった。

ただ俯くことしかできず、固まってしまう。

そんな彼に声をかけたのは——、

「グリシヤ？」

「パパ？」

いなくなつた新郎を不思議に思い、新婦と新郎の娘がやつてきた。

不思議そうにグリシヤを見つめるカルラ。

「さつき、キースさんの後をあなたが追つていったつてアウラに聞いたから、どうしたのかと思つて。キースさんの様子も少しおかしかったから、気になつてたのよ」

「…いや、何でもないよ。彼と少し話をしていただけさ」

「そうなの？…大丈夫？グリシヤあなた、顔色がすごく悪いみたいだけど…」

「大丈夫だ。悪かつたね、式場に戻ろう」

「…そう」

まだ納得がいかない様子のカルラの手を引き、歩き出すグリシヤ。空いていたもう片方の手はもちろん、娘の手を握っている。

アウラは父親の表情を見つめながら、途端にぱあつ、と花を咲かせた。二人は少女が突然浮かべた表情に首を傾げる。

「わかった！おとこの「つれシヨン」だね!!」

この後、娘にいらぬワードを教えたであろう酔っぱらいの男が、笑顔（意識）の新婦に締められることになるのはまた、別のお話である。

クソ幼女はこの時、どんな気持ちであったのか。

それはもう、この上なく幸せだったのだろう。人の人生で一番になれる日を、ぶち壊しにできたのだから。

そしてまた時が経ち、幼女が「少女」に相応しい年齢になった頃。

イエーガー家に、新たな家族が増えた。

その名は——「エレン」

微笑ましい家族の一ページを刻む中、カルラに生まれたばかりの赤子を渡された少女は、珍しく緊張した様子で受け取る。

ずっしりと手にかかる重さ。それは紛うことなく命の重さである。

アウラは赤子の母に似た大きな目を——そしてその翡翠の色を、飽きることなく見続ける。父親に、「そろそろ代わってくれないか？」と頼まれても頑なとして渡さず、一通り眺め続けたのち、母に返した。

カルラは瞳を何度もぱちぱちしている娘に尋ねる。

「エレンはどうだった、アウラ？」

「…あかくて、おもい」

「ふふ、赤くて重い…ね。他には何かある？」

「…えっと、うんと、うーんと」

少女は唸りながら病室を右往左往して、カルラの元に戻ってくる。

そしていつになく真剣な表情で、口を開いた。

「たべちゃいたいくらい、かわいいの…」

予想の斜めを越える娘の反応に、グリシャとカルラは思わず吹き出すのだった。

感情が抑えきれなくなった時は…叫べ! Ms. Kuso

Syojo

私、クソ幼女からクソ少女に進化したアウラちゃん、10歳。

早速ですが皆さまにご紹介しましょう、弟の「エレン・イエーガー」くんです。

「おねーちゃ?」

つい昨日まで柔らかいほっぺが愛らしかった赤ん坊のエレンきゅんは、いつの間にかハイハイをし出し、立ち上がって言葉まで喋るようになった。ちなみに私が同じ歳の頃は、「私」という名の悪魔が目覚めるまで赤子と同レベルの知性だったらしい。

お父さまの成分が髪の色にしか現れていないというほど、エレンきゅんはカルラママに似ている。

この翡翠のお目々で見つめられて、剩え「おねーちゃ、すき」なんて言われた暁には、私死にます。いえ嘘です、死にません。でも死ぬ。

「おねーちゃ、だいすき!」

はい、死にました。

??????

エレンきゅんが生まれ私を感じたのは、私が「血の繋がりに弱いということですが、始めはいつか壊す弟にこれといった感情を抱くと思っていまいませんでしたが、姉と髪の色しか似ていないにも関わらず、私はエレンきゅんを「好き」と思ったのです。

私と血を半分同じに持つ存在。エレンきゅんはお父さまという繋がりを通して、私に新しい扉を開いてくれた。

兄だけでなく、弟もできたアウラちゃん。最高ですね、私もう毎日が幸せですもの。医者として働くお父さまに、実娘でもないのかかわらず、息子と同様に扱ってくれるカルラママ。そして、私の後を追いかけてくるエレンきゅん。よく転んで泣いていたのが、今では姉の前だからと泣くのを堪えるようになった。泣いているエレンきゅんのお顔も大好きですが、必死に泣くまいと我慢している弟の顔も可愛いですよ。

絵に描いた幸せの家族だ。

だからこそ私の「欲求」は、抑えきれなくなっている。

ぶち壊したい。幸せの家族を壊してお父さまの、カルラママの、エレンくんの悲劇を見たい。

もう三年も耐えている。しかしちょうどよい機会に恵まれず、私も幸せを感じながら、一方で死んだように生きています。誰かの不幸を味わえなければ、私は真の意味で生きられない。

最高のタイミングが訪れないまま過ぎているので、そろそろクソ少女ちゃんは精神が狂ってきています。そこらの幸せ家族を見たらこつそり家に忍び込んで、人道を疑われるような残忍な方法で、じっくりソイツらの顔を見ながら殺して、絶頂したいと考え、てしまうくらいにはおかしくなっています。それを表に出さないのが、演技派魂ですが。

そんなわけで、クソ少女ちゃんは考えました。

人の悲劇を合法的に味わえる方法はないものか——と。そこで思いついたのが、キー

スおじさんの職です。

元々壁の中に学び小屋はありますが、しっかりとした教育機関はありません。マーレの収容区の人間の方がよっぽど質の良い教育を受けていると思うほど、劣っている。私も文字書きは学びましたが、あくまでその程度。

そして一定の教育を受けたら職に就く。親の跡を継ぐなり、出稼ぎに出たり。

そもこの国家自体は王政で、三重の壁のさらに内側に王都が存在する。私の住まう場所はその中で最も外、ウォールマリアの壁の突出した部分の南に位置するシガンシナ区にある。

私もお父さまの仕事を継ぐのかと問われると、実際その可能性は低いでしょう。

お父さまは診療のため家を外すことが多い。心配性なお父さまなら、当時わざわざハynesおじさんに預けず娘も連れて行った方が早かったはず。しかし同行はさせなかった。それは何故か。

理由は一つ——、グリシャ・イエーガーが始祖の巨人を探しているからである。

診療と称し、情報を集める。幸い、流行病の治療法を見つけて以来お父さまの名は知れ渡り、中には有名な貴族が「イエーガー先生」を頼ることもあった。

お父さまは私を関わらせたくないのです。一人で罪を背負って生きている。そんな精神的にも肉体的にも疲労する彼を癒すのが、家族というわけだ。

しかしアウラちゃんは心が限界。そこから無差別殺人を起こす前に、人の悲劇が見れる場所にいかないかね。

ちようどいい就職先を見つけたので、家族に相談だ。

というわけで12歳になった私は、カルラママに事情を話した。——私、駐屯兵団に入りたんです！（嘘）

そのまま調査兵団に入りたいと言ったら、絶対に断られる。ゆえにハードルの低い方を話の掛け合いに出すのだ。それに訓練兵団の卒業時上位に入れば、自分の入りたい兵団を志願できる。調査兵団は常に人材不足なので、成績上位でなくとも志願すれば入れるでしょう。しかし確実に入れる方法があるのならやはり、成績上位を目指す方がいい。

騙すようで…しかし心は痛みませんが、全ては私が他人の不幸を見て「ニチャア…」するために必要なことなので仕方ない。

さぞ巨人に命をかける者たちの覚悟を決めた表情や絶叫は、私に「生」を与えてくれ

るでしょう。

そもそも「訓練兵団のトップに入れるのか？」と疑問に思われるかもしれませんが、問題ありません。クソ少女ちゃんのスペックには、自分で言ってるんですが、光るものがあるからです。

仮になくとも死ぬ気で掴み取るので、そこはご安心ください。

「ダメよ、あんたみたいなかわいい子が昼間から仕事をサボって、あんな敵ハンネスだくればかりがいる職に就くなんて。何をされるかわかったもんじやない」

「でもわたし、人の役に立つことがしたいの、お母さん」

「ダメったらダメ！将来良い人と結婚して子供を作った方が、きつとあなたの幸せになるから——ね？」

「……………」

カルラママは知らないのか、かわいい子には旅をさせろって言葉。

仕方ないので昼間家の手伝いで薪拾いに行つた後、私は今日も今日とて飲んでいたハンネスおじさんに話を持ちかけた。ここで大切なのはキースおじさんがいる調査兵団を持ち出し、それよりも駐屯兵団に憧れていることをアピールするのである。

「俺が言っちゃなんだが、どこに憧れる要素があったんだ？内地で暮らせる憲兵団ならばまだしも……」

「だって、おじさんってばいーつもお酒くさいけど、でもやる時は…やる男じゃん。その姿が、カツコよかったからさ」

「……今でも遅くねえ、俺の娘になればアウラちゃん…!!」

「それはごめんなさい」

周囲で一緒に飲んでいた駐屯兵団のオッサンどもがドツ、と笑う。

おじさんはそれに怒りつつ、私の意図を汲んでくれたみたいだった。

「ハア…どうせカルラに反対されたんだろ。俺としてもお前が俺と同じ職に就くのは、もったいねえとしか思えねえよ」

「…うん」

「だがまあ、自分で考えた道なら否定するのもお門違いだ。それとなくカルラに話してやるよ」

「……ありがと、ハンネスさん！」

私はおじさんに抱きつき、最高の美少女スマイルを見せた。素つ頓狂な声をハンネスおじさんは上げましたが、仕方ありませんね。私顔だけはかわいいので、顔だけは。

これでは、お父さまの説得をするのみ。そして訓練兵団入りが決まり家を開ける前には、かわいいエレンきゅんの「おねーちゃんいかないでえ：!!」イベントが起こるでしょう。ハア、想像するだけでヨダレが出ますね。エレンきゅんの絶望顔も、いつか私にたっぷり味わわせてくださいね（ゲス顔）

交渉が難しそうなお父さまも娘息子には甘いので、私が押して押して押しまくれば、受け入れてくれるはずだ。今までもそうして、最終的にお父さまは私を拒みきれなかった。

しかし、私はかつてジークお兄さまを甘く見てしまったように、お父さまも甘く見ていたのです。

——いえ、それは私が想像し得なかった、「覚悟」の違いなのでしょう。

お前が本当に入りたいのは、駐屯兵団ではないのだろうか？アウラ——。

流星ですお父さま、やはりあなたはお兄さまの血を半分持たれる御方。

ですが私も一歩も引けないのです。私が生きるためには、必要なことなのですから。

??????

アウラ・イエーガーは、グリシャ・イエーガーの長子である。そして二番目の子が長男のエレンだ。

しかし実際はアウラの上に兄がいる。その事実を知る者は、壁の世界ではアウラと、その父しかない。

三人の子供たちはそれぞれ血が繋がっているにも関わらず、容姿はバラバラだ。ジークだったら父似、アウラだったら前妻のダイナ似、エレンであれば現妻のカルラ似——というように。

夜、エレンを寝かしつけるカルラに帰宅の挨拶をしてから、食事を取ったグリシャ。その前に現れたのは、アウラである。

「ただいま、アウラ。まだ寝ていなかったのかい？」

「お帰りお父さん。うん、ちよつと話したいことがあってね」

娘から話とは、これまた珍しいことだ。普段はエレンを甘えさせてばかりで自分から何かを頼むことはない少女が、父に相談。

嫌な予感——という名のお父さんスイッチが入ったグリシヤは、スプーンを静かに置く。まさか娘はまだ12歳。妻が好きな人の話を聞いた際に耳を澄ませた時は、「いいってばお母さん!」と、顔を赤くしながら言っていた。

その赤さは本当にいないゆえのものか、それともいるからこそ赤いのか。その夜の彼の寝付きは最悪だった。

「……待ってくれ、少し心の準備を……」

「待って、お父さんどうせまた明日朝早くから仕事に行つちやうでしょ? その前に話をさせて」

「……わかった」

少女は父の横に向かい、耳元でボソボソと話す。座る父にしゃがむようにして話しかける様に、グリシヤはふと、娘の成長を感じた。今ではカルラの肩元に迫るまで身長が伸びた。

アウラはそして、言った。自身が駐屯兵団に入りたいことを。

「駐屯——」

娘の方を向き、灰色の瞳を間近で見たグリシヤ。彼は言葉を続けることができず、そ

の瞳の中に沈澱する仄暗い何かを至近距離で見つけてしまう。

そして、彼は察した。これからすることになるのは、カルラやエレンが近くにいる場では、話せる内容ではない。

ゆえに娘でさえ今まで通さなかった地下室へ連れていき、その心中を聞くことにした。

父親失格であれど、12年も共に過ごしてきたのだ。少女が嘘を吐いていることは何となくわかる。娘は嘘を吐いたら耳が赤くなるエレンのように、あからさまに表情に出ることはない。だが感覚的に、感じた。——簡単に通しては、いけない話だということ。

駐屯兵団はまずあり得まい。アウラはハンネスの様子を近くで見ていることもあり、バラのマークを背中に掲げた人間を見ると、苦手な顔をしていたのだから。

ならば後は憲兵団が調査兵団だが、憲兵団の方が一見すると可能性は高いように思える。巨人の脅威が少ない内地勤務は、訓練兵の中では一番人気だ。だが憲兵団に入るなら、わざわざ「駐屯兵団に入りたい」などと言う必要性がない。確かに汚職など民衆の反感も多いが、それでも王の近衛兵さえも担う組織だ。エリート職に入りたいならば、隠す必要はなからう。

そうなるかと残りの一つは、調査兵団。もしこの職に就きたいのなら、カルラはもちろんのこと、ハンネスやグリシヤも反対するだろう。それほど調査兵団は危険なのだ。命がいくつあっても足りない。

就きたい理由は本人に聞かなければわからないが、アウラがよく懐いていたキースの存在もある。

結果、何か思うところがあり娘は調査兵団を目指そうとしているのだ——と、グリシヤは考えた。

そして、その考えは当たりだ。少女の目が大きく見開かれたのだから。

「なぜ嘘を吐いた、アウラ」

「……調査兵団がいいって言ったら、お母さんは絶対に認めてくれないでしょ。ハンネスおじさんも、絶対に認めてくれない」

「当たり前だ、人は巨人に敵わない。それにお前が、外のことを知る必要などないだろう」

「わたしたちが、外の人間だから？」

「……ああ、だから……」

「なぜ？ じゃあお父さんは仮にエレンくんが調査兵団に入りたいと言っても、受け入れ

ないのね?」

「それ、は」

エレンならば、受け入れるだろう。かつてジークに自分たちの望む生き方を強要させてしまったグリシャだからこそ、今の息子には自由を選ばせてやりたいと思っている。

だが、この考えは矛盾している。エレンならば、いいのか。娘の自由は認めず。

「……お前の血は、そう簡単に失っていいものではない。わかつてくれ」

「王家の血——だったっけ? 幼い頃の記憶だから曖昧だけど、覚えているわお父さん」

「…そうだ、フリッツの血だ」

「ではわたしはお母さんが言ったとおり、子を成し、その血を繋いでいけばいいの?」

「違う! そういうわけでは——」

「何が、違うの? わたしたちは、そうあるべきなんでしょ? そうあるように、わたしは教えられた。何者でもない、お父さんとお母さんに」

そう言った少女の瞳の中は、ドロドロと溶けている。娘の闇をそこで初めてグリシャは垣間見た気がした。

「家族」という狭い壁の中で育て続けた娘。かつて兄のために死ぬことさえ望んだ、愛しい娘。

その歪んだ——否、グリシャたちが歪めてしまった部分が、今彼の前に肥大化して現れている。

思わずゴクリと、男の喉仏が上下する。

「どうして、ダメなの。どうしてお父さん、どうしてわたしは外に出てはいけないの？ どうして、どうして、どうして？」

「アウ、ラ……」

「わたしは少しでも、兄さんに近づきたいの。少しでもおじいちゃんに、おばあちゃんにも近づきたい。わかっているわ、ええ、わたしは絶対に「わたしの世界」へ帰れない。わたしの大好きな世界。お父さんがいて、お母さんがいて、おじいちゃんとおばあちゃんがいる、そして、兄さんがいた世界」

「……お前にはカルラやエレンが、いるじゃないか」

「そうね。カルラお母さんに、エレンくん。でも、でもねお父さん、わたしには眩しすぎるの。お父さんとカルラお母さんが笑って、その中にエレンくんがいる。その中にわたしという存在がいることが、おかしいように感じるの。きつと兄さんも、同じ気持ちだったの。愛を与えられなかった兄さんも、きつと今のわたしと同じ——」

「アウラ!!」

ポツポツと、父親に視線を向けず下を向いて話し続ける少女。その肩を強く掴み、グリシヤは娘の顔を見つめた。悲痛に歪んだ顔が、父を睨むように見る。

「私はエレンもカルラも——そしてアウラ、お前も同じように愛している」

「…じゃあ、兄さんは」

「ジークのことも、愛している」

「嘘つき」

「アウラ…」

「——嘘つき!! 兄さんに会わせてよ、兄さんに…おにい、ちゃんに……」

「……すまない」

「…お父さんは、何がしたいの? お母さんが巨人になつてでも、何を求め続けているの?」

「——ツ!!」

記憶が、そう言おうとした彼に、アウラは随分前に思い出していたことを話す。

巨人になった母。そし気が狂れ、死を選んだ自分。その後何が起こったのか、ずっと彼女は聞きたかったことを告げた。

ランプの灯が父に詰め寄る少女の、白いバンダナを淡く照らす。

「わたしはどうして生きていたの？わたしは、わたしという存在が怖いのだ！！だって、だってわたしは、死んだはずだった…」

「……………」

「少なくとも、「楽園送り」にされたお父さんが、*“戦士”*だとは信じられない。嘘を吐いているのは、お父さんも同じでしょ」

「……………」

「兄さんが目指していた戦士は、いずれ壁の世界——ここへ来るのは覚えているの。だからわたしはその時、一番に兄さんに近づける存在でいたい。何より調査兵団は、自由の羽を、持っているから。キースおじさんのように」

グリシヤは頭を抱え、地下室にある椅子に座り込む。

娘は聡い子供だった。しかしそれも、彼が思っていた以上に。

彼が一人で背負い込んでいた罪を側から見つめ、ずっとアウラもアウラなりに考え、悩み続けていたのだ。その姿は今でさえ、*“家族”*の檻に囚われている。新しい家族ではない、もう戻ることのできないかつてのジークやダイナたちがいた世界に。

「……………」——わかった、話す」

これ以上娘に隠し続けていることは無理だ、とグリシャは口を開く。

アウラがどうやって助かったのかについて語った時、少女は何か考え込むように聞き続ける。そして娘の口から語られた「謎の少女」の存在に、父もまた驚くことになる。

娘の頭を撫でていた、金髪の少女。名前はわからない。しかしそれが「ユミル」であることは、自ずとわかった。やはりクルーガーの言っていたとおり、アウラ・イエーガーは「フリッツ」の名の下において、始祖から寵愛を受けているのだ。

「そしてあとは…私の目的のことだな」

始祖を奪還する。とは言っても実際は少し異なるだろう。

マーレがこの壁の世界に侵略しようとしていることを話し、王に戦うよう求めるのだ。でなければこの壁の世界は滅び、さらに始祖を手に入れたマーレは世界への侵略を進めていくだろう。そうなれば多くの死者が出る。

その話を、アウラは静かに聞き続けた。

そして父の巨人の力の名や、巨人の力の代償についても、グリシャは語る。もうここまでくれば後戻りはできない。娘にも背負う覚悟があるのを見てしまったからには、やはり話すしかなかった。

進むしか、方法はないのだから。未だ断片的で、不明瞭な未来を掬い上げて。

アウラは、
発狂した。

空は青いがお腹は黒い

私、アウラちゃん。今病室のような場所で手足を拘束されているの。ついでにお口も。

ベッドの上に仰向けになって、鎖が繋がったベルト状の器具を手足につけられ、四肢を投げ出す形にいる。

かわいい少女にこんなプレイをするなんて、いったい全体私はどうなってしまうんでしょう。凌辱？拷問？まあ別に、何をされようともいいのですが。むしろ殺してくれた方がいいんですが。というか殺してくれないんですか？

私、アウラちゃん。どうして斯様な状態になったか、一度思い出してみましよう。

確か私は、メガネをかけた男の人と話していたのです。駐屯兵団に入りたい——という発言が嘘であることはおろか、本当に入りたい兵団が調査兵団であることも見透かされていた。その人を説得しなければ、私は調査兵団に入れなくなってしまおうので、私も覚悟を決めて話し合いに望んだ。

いや、そもそも何故私は、調査兵団に入りたかったのだろうか？

私、アウラちゃん。

メガネの男の人と地下室で話し合いになり、私は男の人が彼の息子と娘に、決められた道を歩ませようとしていたことを知っていたので、それを利用しました。どうして私
がそれを知っていたかについては、置いておきましょう。何故知っているのか、わからないので。

私とジークお兄さまの人生を強制させたのは、その男の人だ。

私なら窮屈なカゴの鳥、お兄さまならエルディアが革命を起こすための道具——
といった風に。

結果、私は今でも家族に執着する少女ちゃんになってしまった。お母さまも亡くなり、お父さまと二人だけになってしまった私。

新しいお母さんと弟では、本当の意味で心を満たすことはできない。だから外の世界へ出て、少しでもお兄さまと近づこうとする。狂った少女ちゃん設定です。実際はもつと狂っているのですがね。

そして、イかれた少女を作ったのは、目の前の男の人。……目の前の男の人？ どうしてこの人が作ったの？ 作ったのは、お父さまの設定だったはず。

私は、アウラちゃん？途中まで話は上手く進んでいたの。

会話の中で、ずつと気になっていった私が生きていた理由まで知ることができて、万々歳だった。ドロドロアウラちゃんから復活した事実と、巨人になつたお母さまの腹から出てきた事実。その上謎のバンダナと、色々謎が多いですが、私は設定モリモリの主人公かなんか？「寵愛」とか怖いですし、私が寵愛するのもお兄さまだけで結構です。

またその男の人には、「あなたのせいで娘はこんなに狂っしまったんやで？」という罪悪感を上乘せできたし、最高でした。

娘？私がその人の？

しかしまさか謎の少女ちゃんに、「ユミル様」疑惑が出てくるとは思わなかった。違うとは思うけど。だって私と容姿がそっくりなんですから。個人的には、前世の私説が一番高いです。もしかしたら本当にユミル様で、エルディア人たちの心の中に、「神」として平等にいる可能性もありますけどね。

——そして、男の人の目的はやはり、始祖奪還だった。

マールレの戦士——即ちお兄さまがいずれ攻めてくる前に、“壁の王”に戦うよう求め

る。

全てはエルディアの未来のため。さらに言えば、始祖の力を手に入れたマーレに今後奪われるかもしれない無辜の命のため。その男の人は、進み続けている。たとえそれで自分や家族を犠牲にしても。

犠牲、に？犠牲？誰が？誰……。

—— 巨人の力を継承すれば、その人間は13年しか生きられなくなる。

じゃあ、お兄さま、お兄さまは13年しか生きられない？今は何年？私がここに来てから何年経った？私は今12歳、そしてここに来たのは約4歳ごろ。

8年経った？8年、お兄さまがもし7歳の時巨人の力を継承していたら、あと5年しか生きられない？あと5年のうちにマーレが攻めてくるの？本当に攻めてくる？攻めてきて会えたところで、その後お兄さまが生きられる時間はわずかじゃないの？そもそもどうして13年なの？男の人が言った巨人の継承方法が本当なら、お兄さまは誰かに食べられるの？誰に？巨人に？許せない。お兄さまが死んじゃう。どうしよう、会えないままお兄さまが死んじゃったらどうしよう。その前にお兄さまはまだ生きていらっしやるの？

いつも、ドベだったお兄さま。縦え戦士になれても成績を残せず処分されているかもしれない。殺してやるお兄さまを殺すやつは。お兄さま生きている？お兄さま、どうしよう。お兄さまが、お兄さま、お兄さま、お兄さまが、お兄さま。

そもそもお兄さまは戦士になったの？戦士になっていなければ、私は本当に一生会えない。

そんな、お兄さまと会えないなら生きてたつてしようがないのでどうして生きているのかよくわかりませんので私は「私」であることをやめるべきだと——

——そう、思った直後、私は発狂したのでございます。喉が潰れるのもお構いなしに叫んで、目の前の男の人が何か言っているのを無視して、いつの間にか顔の肉をえぐっていた手を、首元に持って行こうとして。

「アウラ!!?アウラ!!!」

私はアウラと言うらしいです。私アウラちゃん。

その後、女の人は何事か、と地下につながる階段を降りてこようとした。けれど男の

人はそれを静止して、私の両手を掴んだまま強く抱きしめ、上へ連れて行った。

女の人は私の顔を見るなり、ヒュッと、息を漏らしていた。悲痛に歪んだ表情はとても心地よくて、男の人の絶望に染まりきった顔もとても素敵。私生きている？私生きていた。生を実感した、この時。生きていたくないのに「生」を感じてしまった。

これはいけない、これほど罪深いことはない。死にたい人間が、生きることを感じるなんておかしいでしょう。

ですので私、アウラちゃん。男の人に渾身の力で殴って、蹴って、抜け出して、目先にあった包丁を掴んだの。

これが最適解。死ぬことこそ最適解。

死ぬのが怖くないのかって？死などは恐るるに足りぬものですよ、私にとって一番怖いのは、お兄さまを失うことです。私が生きる理由なのです。お兄さまは。

人が呼吸をし、食べ物を取り、寝て、あるいは誰かと交尾をする。それと同じように、私にはお兄さまが必要で、なければ生きられない。

私が死んだ後にお兄さまが死ぬなら、まだいいです。ですが私が生きている間にお兄さまに死なれたら、私も死ぬしかないです。

私、私ちゃん。それから、どうなったのでしょうか？わかりません。蒼白した男の人と女の人が出たのは覚えています。名前を呟いていた、女の子の名前。誰の名前でしよう？

私、私ちゃん。そして包丁で己の首を切ろうとした時、誰かの声が聞こえた気がした。幼い子供の声だった。

見れば小さな男の子が男の人と女の人がいる後ろにいて、私を見た瞬間、溢れんばかりに翡翠の瞳を開かせて。

—— おねーちゃん!!

そう、言った。

私、おねーちゃん。その子の、おねーちゃん。

お兄さまはいましたが、私には弟もいたのですね。驚きました。しかし驚いただけで、その子が私の生きる理由にはならない。その子は私と半分しか同じでない。全て同じなのはお兄さまだけ。私の全て、私の大切な人。

でもその時、私に一瞬の隙ができたのもまた、事実なのです。

私は男の人に止められ、その後病院のような場所に連れられていった。

精神がおかしいとか、過去の話をしたせいで一時的に気が狂れ、家族のことも忘れてしまった——とか。私が拘束されている間、メガネの男の人とお医者さんみたいな人が色々言っていました。よく頭に入ってきました。舌を噛み切りたくても、口枷をされているのでできない。これじゃあ自分の世話さえできないじゃないですか。

まあ、どうでもいいですが。どうでもいいです全て。

私、だれか。

だれか、殺して。

???????

アウラ・イエーガーが、地下室で発狂してから一週間。彼女は病院で四肢を拘束され

ていた。

固定具を外せばすぐに自傷行為、および自殺に走る。目や鼻、口元を隠すようにして顔中に巻かれた包帯は、愛らしかつた顔を恐ろしいものへと変化させていた。

何故発狂したかについては、少女の父であるグリシャ・イエーガーの発言から、過去の記憶を思い出してしまったため——とされた。

しかし実際は巨人の継承期間の13年を踏まえ、父親の寿命があと5年である点と、少女の兄のジークも戦士になっていた場合、寿命が長くはなくなっている——と知ったことにより精神が壊れたからだ、と、グリシャは考えた。

少女の世界。父親によって作られた窮屈な世界。

既にその世界に母親はおらず、あとは父親と兄、祖父母しかいない。特に父と兄は共に暮らしていた家族であったため、依存の傾向が強い。その上で一人は確定で消え、もう片方も消える可能性が高いと知り、少女の世界が急速に壊れた。

だが、実際は違う。

少女の世界には、ジーク・イエーガーしかいない。この場合人の悲劇は彼女の生きる理由にはならない。あくまで人の悲劇は、彼女が生きる上で必要なものにしか過ぎな

い。

アウラの生きる理由は兄。兄がいない世界は彼女にとって、どうでもいい世界——
縦え明日滅んでも構わない、無価値な世界。

ベッドに拘束された少女の瞳には、およそ生氣というものがなかった。口枷から涎を垂らし、ただ虚空を見つめるばかり。食事を流動食にして無理やり摂らせても、水以外は全て吐いてしまうので、このままだと栄養失調で死ぬ。

点滴の方法はあれど、それは壁の世界には存在しない。仮に代用品を作りグリシヤが行ったとして、存在しない知識だと、憲兵に怪しまれる可能性が出てくる。流行病の治療薬を開発したのは、まだ誤魔化しが効く。いや、そもそも治療薬を作ったのが仇となるか。

一度ならず二度までも、未知を生み出す。これほど危険なことはないだろう。なれば少女の身柄を戻して家で治療すれば、或いは…。

否、それもまた現実的ではない。グリシヤには仕事がある。カルラに任せるのも難しい。その前に点滴で命を繋いだとして、精神が治らぬままでは——どうしようもない。

さらに言えば廃人となった娘の姿を見続けるなど、「父」には、限界であった。

結局医者であるグリシヤは、病院へ娘の身を任せることにした。——否、本当に任せたのは娘を寵愛するユミル様に、か。

その間急速に彼は精神的に追い込まれ、満足に食事もできず。またカルラも、ふさがちになった。息子の前では、笑顔を作るようにしたが。

兄がいない。それでもいつか会えることを願って、生き続けていたアウラ・イエーガー。

しかし他人の悲劇を体感しても、生きる理由がない8年という歳月の中で、限界が来ていた。

そんな中知ってしまった巨人の力の継承者の寿命の事実が、ついに追い討ちをかけたのである。

——生きていたところで、どうしようもない。

彼女は刻々と間近に迫る死を、待ち望むだけの肉塊となりかけていた。

そんな折、生と死の間に至ったアウラ。

衰弱し意識を失うように瞼を閉じた時、彼女の精神は再び、暗い世界へと導かれた。広がるのは広大な砂の世界と、巨大な光の柱。その光は天に続き、無数に別れ世界を照らす。

彼女は着せられていた病院服もそのまま、肢体を投げ出している。そして空を見上げ、ただ命の終わりを望んでいる。

そんな彼女の顔を、一人の少女が上から覗き込んだ。顔を動かすたび、空の光に照らされ、少女の眩い髪色がキラキラと光る。その手には木製の水の入ったバケツが握られていた。

謎の少女は徐にアウラの顔に巻かれた包帯を取ると、砂——あるいは土を掬い上げ、水と合わせてペタペタと、まるで修復するように直していく。

その間も、アウラは身じろぎ一つしない。瞼もそのまま死体のように開かれたままだ。

そして、えぐられた包帯の下の傷がキレイに治される。

謎の少女は動かぬ彼女を引つ張り立たせ、どこかへ導くように歩き出す。アウラは少女の不思議な行動になされるがまま——しかし抵抗することはなく、後に続いた。

して、場面は一面の砂と光の柱の世界から、どこかの街へと変わる。

駆け回る子供と、仕事で忙しなく歩く大人たち。軍人の男に、出店の売り子の女。

その誰一人として、外を歩くにしては異色を放つ少女二人に気づかない。時代錯誤な服装の少女と、歩く死体な様相の少女。

髪の色や瞳の色は違えど、二人は恐ろしいほど似ている。

『……?』

今まで反応のなかったアウラが、微かに顔を上げる。どこか見たことのある街の雰囲気だ。

かつて両親に抱かれて通ったことのある場所に似ている。兄の公開訓練を見るため、通った——。

『お兄さま!!』

駆け出そうとした彼女は、足がもつれ勢いよく転んだ。無理もない、一週間以上ろくに栄養を摂っていない身体である。歩くことすら満足にできない状態で、それでも彼女は兄の姿を求める。

『お兄さま、お兄さま、ジークお兄さまああ……』

ポロポロと涙をこぼし、鼻水まで流して無用なツラをさらす。自他ともに認める美少女フェイスは見る影もない。泣いて泣いて、はねるコイキングのように——または四つん這いの貞子のように手足を動かしながら、前へと進もうとする。

そんな彼女の手を金髪の少女は再度掴み、引つ張り起こして歩き出す。

自分の意思で握ることのなかったアウラの手が、相手の手を軽く握った瞬間、少女の蒼い瞳が丸くなった。そして、少し嬉しそうに口角を上げる。

『ひっく、えぐっ、どごに、行くの、っ……』

『……………』

少女はやはり、何も話さない。だが「ついてこい」という意思を感じ取ったアウラは、べそべそしながら歩いた。

それからしばらく歩き、たどり着いた場所。大通りから横道に入り、その裏側の少し開けた場所で眼鏡をかけた中年の男と、青年の面影を持つ少年がキャッチボールをして

いた。アウラは途端に金髪の少女を巻き込みながら少年に突っ込もうとした。しかし途中で転び、その巻き添いで少女も転ぶ。

過去最高に泣きじやくりながら少年の名を呼べども、やはりアウラの言葉や姿は、謎の少女を含めて見えていない様子だった。

「君も最近になってさらに身長が伸びてきたなあ、ジーク」

「クサヴァーさんのことも、もうすぐ抜かせちゃうね」

「子供の成長つてのは早いよなあ……」

まるで親子のようにキャッチボールを続ける二人。兄の姿を見た妹は、八年溜まりに溜まったクソデカな感情について行けず、地べたに座り込んで泣き続ける。その隣に金髪の少女は隙間を埋めるように、ピツタリとくつついて座った。

きつとこれは死ぬ間際の走馬灯なのだ——とアウラは考えながら、歪む視界で兄を見る。

男二人の会話の最中間こえた、ジークがまだ戦士候補生であるという事実も知り、さらに感情が爆発していく。

謎の少女がクソ少女にくれた最後のビッグプレゼントだ。精神崩壊を起こしていたアウラ・イエーガーであるが、粋の良すぎるプレゼントで、死を待ち望む肉塊から一気に「普通のヒト」へと戻ってきた。

もう、死んでもいい。

その感情はずっと考えていた「死にたい」とは全く異なる感情。

兄を見れた。例え一方的に見ているだけでも、もしくは現実ではなく謎の少女が作り出した幻影なのだとしても、これ以上幸福なことはない。

アウラ・イエーガーにとって、ジーク・イエーガーとは彼女の全てである。

『……ありがとう』

アウラは、少女を見つめ言う。

片手でボロボロ溢れる涙を拭いながら、もう片方の手で少女の手を強く握り、笑いかける。

今彼女は、幸せだった。目の前の少女のおかげで、最期に心から笑うことができた。

飾ることないアウラの本当の表情を見、嬉しそうにその少女もまた微笑む。そして音を正確に紡ぐことのできない口が動き、『アウラ』と形作った。

名を呼ばれたアウラも名前を言い返そうと口を開きかけ、止まる。

目の前にいる謎の少女——神様なのか悪魔なのか、はたまた前世の自分なのかもよく

わからない存在。ただ少女が何であれ、もし本当にエルディア人の始祖であるのなら、彼女はこう呼ぶだろう。

『ユミル』

「様」などいらない。少なくとも今彼女の隣で笑いかける少女が、神さまのようにも、悪魔のようにも見えなかった。ただの少女——少なくとも、そういう風に見えた。

対し謎の少女は呆然とした表情を作り、そのままアウラを抱きしめた。頷いて、泣いて、笑う。

何故少女が泣いたのか、また笑う理由もアウラにはわからないだろう。壊れている彼女にはきつと、ずっと、少女の真意を理解することはできない。

それでも少女にとっては——「ユミル」にとっては、アウラ彼女が存在し、自身を認識してくれただけでよかった。

ユミルはアウラの手を引つ張り、また歩き出す。

アウラは愛する兄を名残惜しく思いながら、それでも己の終わりに満足だった。

そして、戻ってきた砂と光の柱の世界。

少女二人は手を繋いだまま、歩き続ける。行き先のわからぬアウラは不意に少女から何か言われた気がし、首を傾げる。

——アウラは どうするの？

どうする？それは死後についてだろうか。

彼女の死後は——いや、違う。「どうするの」の意味は、死後について聞いているわけではない。蒼い瞳はなにせ、真つ直ぐに彼女を捉えている。終わりの話ではなく、まるでこれからのことを促すような意思を感じさせる。

「私は……」

アウラは誰かの悲劇を糧に生きている。でなければ彼女は、自分が生きていることを実感できないからだ。

しかし、胸につつかえるような感覚が取れない。その違和感が何なのか彼女が考え始めたところで、脳裏によぎったのは先程の兄の様子。

楽しそうにクサヴァーとキャッチボールをしていた兄。戦士候補生として残った彼は、現実で生き、そしていずれ壁の国へと侵略に来る。

「お兄さま、笑っていた…」

あれほど楽しそうに笑っている姿を見たのは、どれほど久しぶりのことだっただろうか。かつて妹であるアウラにも、兄の笑顔は向けられていた。今でこそ、見ることは叶わないが。

「……違う」

ボソリと、彼女は呟く。

笑顔の兄、幸せそうに生きている兄。生きていることはむしろ喜ばしいことである。しかし笑顔は違う。

「——ふふ、うひひ」

ああ、そうであった。彼女は忘れていた。

彼女の生きる理由とは違う“目的”を。アウラ・イエーガーが生きている中で、人の悲劇以上に求めてやまないものを。

「私は、ぐふふ、ジーク^{お兄}・イエーガー^{さま}の——曇った表情を、見たいのです」

うつとりと、ねっちよりと恍惚の表情を浮かべた彼女を、ユミルは静かに見つめた。こうしてはいられない、とアウラが思った瞬間、彼女の姿が砂と光の柱の世界から消える。

一人残された少女は先まで握られていた手を見つめ、視界を空に移す。そこには果ての見えない光の道が、無数に広がっていた。

右手の拳を握り、その人は何を思う。

一時危篤状態となったアウラ・イエーガー。

目覚めることなくこのまま命を落としてしまうかに思われた彼女であったが、しばらくの昏睡状態ののち、再び目を覚ました。この時点で既に二週間以上水以外のものを摂取していなかった。細くなった身体は、さながらミイラである。

少女は発声も困難な中、慌てて訪れた医師にこう言った。

おな……か、すいた——と。

そこからは劇的な回復であった。最初は固形物を胃が受け付けなかったため流動食を食べ、身体に栄養が渡ってからはみるみるうちに元気を取り戻した。また跡が残ると思われた顔の傷も、綺麗に回復していった。

元の明るい少女の笑顔を目にした時、両親は涙ながらに娘を抱きしめた。特に少女が発狂する原因となった過去を掘り返してしまった——と感じていたグリシャは、ひどく

憔悴していた。

ゆえに元に戻った娘を見た時、どれほど安堵したことだろう。そして自身の罪を、後悔しただろう。

結局自分は家族を犠牲にすることしかできない、そう自身を責め続ける父に、アウラは微笑みかける。

カルラはエレンの面倒のためおらず、父と娘の二人だけの病室。

父の手を握った少女の背後では窓から光が漏れ、逆光を作る。どこか神秘的な雰囲気を感じさせる、少女の暗いシルエツト。

「パパ、ねえパパ」

「……なんだい、アウラ」

「そんな暗い顔しないで。わたしね、ユミルちゃんに見せてもらったの。兄さんが「クサヴァーさん」って人とキヤッチボールしてた。すごく、幸せそうだった」

「ユミル様が…ジークを？」

「うん。もう死にたかったけど、ユミルちゃんは兄さんのことを見せてくれた。兄さんね、戦士候補生になつてたの。身長もすごく高くなつてた」

「…そうか」

「それで、それでね。……えへへ、すごくパパと似てたよ。パパみたいにカッコよくて、ママみたいな髪の色と瞳でね」

本当に心から嬉しそうに、ジークについて語るアウラ。「パパカッコいい」の部分にグリシャは心臓を抑えかけたが、なんとか平静さを保つ。

「ユミルちゃんは、わたしに「生」きろって、示してくれた。だからわたし、生きるわ。そして進みたい」

そう語る娘の姿を、静かに見つめる父。

父親がクルーガーの意志を受け継ぎ、エルディアのため進撃し続ける中、少女もまた一歩踏み出そうとしている。

それは何故か、グリシャは娘に問う。改めて心を決めたその意志を聞いたかったのだ。ユミルの寵愛により生かさされた彼女。そこにあるのは純粹な娘の意思ではなく、ユミルの思惑が絡んでいる可能性もある。

「寵愛」——その一言で呑んでしまうほど、人間は簡単にできていない。同じフリッツツ家であれど、ダイナは助けてもらえなかった。何か始祖に理由があると思えない。考えれば考えるほど、底なしの思考回路に行きつき恐ろしさが増していく。

だからこそ己が目で、グリシャは見定めたかった。調査兵団の選択が、アウラ・イエー

ガー自身のものであるか否かを。

アウラは笑みを消し、真っ直ぐに父を見つめる。

「いずれ戦士は来る。私はまた、ジーク兄さんに会いたい」

「それが、アウラの望みか」

「うん。でも、それだけじゃないよ、パパ」

戦士が来れば、壁の楽園は滅亡へと向かうだろう。キースによって偶然発見されたアウラとグリシャ。二人が外の世界から壁の中へ入れたのは、幸運だったに過ぎない。

壁内の人類を追い込む点を踏まえ、円滑に壁内へ侵入するには、壁を破壊するのが手っ取り早い。そして混乱に乗じて巨人からヒトに戻れば、紛れることも容易となる。その上で多くの民が死ぬ。知性の巨人だけではない、無知性の巨人によって。

もしそんないざとなった時、一番戦えるのは駐屯兵团でも、憲兵团でもない。立体機動装置を扱い巨人と戦う機会の多い、調査兵团だ。

「わたしの世界は、とても窮屈。けれどわたしにはパパがいる。それにカルラママとエレンも」

見ないようにはしていた。かつての家族の姿を追い求めて、狭い世界ばかりを見てい

た。カルラやエレンに愛されていることを知っていても、どうしても受け入れることができなかった。

受け入れてしまえばアウラは、世界が広いことを知ってしまうから。

突然広い世界に放り出されてしまえば怖かろう。それでも彼女は歩む。

そう、全ては――、

「大切な人を守りたいから、私は進みたい」

縦えそれで兄と戦うことになっても構わない。兄と出会い、そして戦い、その上で止めればいいだけの話だ。

「お前の言っていることは、途方もなく難しいことだ」

「うん。全部守りたいなんて、馬鹿げてる。でもわたしは失いたくない、これ以上」

「……少なくとも私はあと五年で死ぬ。それでもお前は、進むのか？」

「うん、進む。何か巨人の継承者の寿命の解決方法がないかも、ユミルちゃんに探ってみる」

「…わかった、アウラ」

グリシャは娘を抱きしめた。いつの間にか大きくなった少女もまた、父を抱きしめ返

す。

あと数年もすれば、娘は前妻のダイナの身長を抜かしてしまうだろう。子の成長というのは早いものだ。

「ごめんな、お前をこんなにも、苦しめてしまつて…」

「ううん、パパの方がいっぱい苦しんでる。それを少しでも減らせるなら、わたしもパパと一緒に、苦しい思いをしてもいい」

「……………ッ、う」

声を殺し静かに泣く父の背を、アウラはやさしく撫で続ける。

そんな、父の肩に顔を乗せる彼女の表情は、恍惚に染まっていた。

目を細め、父の無用な姿に脳内絶頂する彼女はどこまでも——、

——クソ少女で、あつた。

??????

私、アウラ・イェーガー！ピッチピッチ（死語）の12歳！

お父さまに調査兵団を目指す許可を得て、訓練兵団に入れることになりました。

ただしカルラママとハンネスおじさんには、駐屯兵団に入りたいというのが嘘だったことをバラされ、カルラママにはめっちゃくちゃ怒られた。ハンネスおじさんにも危険だ、と怒られた。ついでに嘘をついたことにも。

お父さまとしては命をかけることに対しての覚悟を、より強く持つて欲しかったのだろう。また命を簡単に失わないよう、私を大切に思う人がいるんだということを、改めて実感してもらいたかったのだ。

裏の理由は、大切な人（家族）を守るための力が欲しい——となったが、表の理由としてはキースおじさんに憧れたから、ということにした。

お父さまは私がカルラママたちに話した理由に、複雑そうな表情を浮かべていたけれど。しかし娘がキースおじさんに憧れているのは、強ち間違いではない。

だって人類のために戦い（巨人に食われる人間の顔や、それを見て絶望する仲間の顔を合法的に見れる）、その身を（「私」自身が生きるための糧として）捧げることができ
るお仕事なんやで？

それに命からがら帰ってきてても、何の成果も得られず民衆たちにやれ「税金の無駄遣い」だの、やれ「命を粗末にしている」だの、曇りイベント満載である。以前壁外調査から帰ってきたキース団長を見たが、うっかり飛びそうなくらいには顔が死んでいた。そんな職業に就いているおじさんに、憧れないわけがないよなあ？

ともあれ、私は叱られイベントを乗り越え——というかその前に、弱っていた身体を元に戻した上で、ウォールマリア南方の訓練兵団に第97期生として入団することに。

これから三年間は我が家に帰れない。名残惜しいですが仕方ありません。

私は極めて過酷な訓練の中で、脱走したり命を落とす者もいると聞く地獄の中。

若人たちががき苦しみながら走り続ける様を、よだれを垂らしながら見てくるので、安心してください。

見送りに関してはカルラママとエレンきゅん、ハンネスさんの奥さんだけだった。夫はあいにく駐屯勤務で来れず、父もまた診療の仕事で不在だった。お父さまはわざと来なかつたのだろう。三年もかわいい娘に会えず、しかも死ぬ可能性も十分あるのですから。

「……おねーちゃん」

「エレンくん、わたし行ってくるね」

「……やだ」

エレンきゅんがわたしの服の裾を、グイグイ引つ張つてきます。今にも泣きそうな顔で、おねーちゃんの通行を阻止してくる。

エレンきゅんとしては姉がようやく病気が治つて退院したと思つたら、またしばらくいなくなつてしまうのだ。お姉ちゃんとしても三年もエレンきゅんに会えないのは悲しい。ので、いっぱい今のうちに私にその可愛らしいお顔を拝ませてください。オラ、泣くんだよ（鬼畜）

「すききらいしないから」

「エレンくん……」

「オレいいこでいるから…!!」

「…ごめんね」

「うう……ふうう……」

ああ、心がびよんびよんするんじや。

ジークお兄さまの可愛らしい泣き顔も最高で絶頂状態（ヘッペン）になりますが、綺麗な顔立ちのエレンきゅんのお顔も、お兄さまと違った味わいがあつてとてもいい。

しかしアウラお姉ちゃんはその行かないといけなないので、弟を抱っこして立ち上がり、カルラママに渡します。

「おや？カルラママも涙ぐんでますね。やめてください私、びよんびよんし過ぎて死んでしまいます。」

「絶対帰ってくるのよ、アウラ」

「うん、立派な兵士になってくるから。安心して、お母さん」

「おねーちゃ……」

エレンきゅんに手を振るクソ少女はクールに去るぜ……と思いましたがあまりにも大声で泣くので一旦戻り、約束をすることにした。男の子によく利く方法である。

「男の子が泣いてちゃ、恥ずかしいんだぞ」

そう言い、人差し指で弟の額をコツンと触る。号泣していたエレンきゅんはその瞬間泣くのをやめ、口をへの字に曲げた。鼻水と涙の跡を残しながら、それでもこれ以上泣くまいと必死に堪える。かわい。

「わたしがいない間、お母さんのことを守ってあげてね、エレンくん」

それにエレンきゅんは小さく頷き、私が差し出した小指に小さな指を絡める。指きり

げんまんだ。

「じゃあ行つてきます、エレンくん、お母さん、それにおばさん」

イエーガー家族の様子をやさしく見つめていたハンネスおじさんの奥さんにも別れを告げ、私は歩き出した。

そして始まる、三年間の訓練兵時代。

アウラちゃんの現段階の肉体スペック的には、当時ドベだったお兄さまと比べたら天と地ほどの才能がある。いや、流石にそれはお兄さまに失礼なので、「兎と亀」にしておきましょう。

私が兎で、お兄さまが亀。

これの言わんとしたところは、最初は才能の差があつたとしても、努力を続ける兎が兎を追い抜いてしまうということ。

ユミルちゃんが見せてくれた現在のお兄さまはそれはもう、物凄かつた。語彙力が死んでしまい申し訳ないですが、とにかく物凄かつたのです。まず伸びた身長に、童顔から精魂な顔つきに変化しかけの凛々しいお顔。

だのに、お顔は愛らしい上にカッコいいのです。

————— カッコいい

ので す!! (二回目)

体つきがそもそもお父さまと違いました。お父さまも三十路を過ぎ、クソ誰かさん少女のせいでストレスがかかり痩せてしまっていますが、シャツの上からでもわかる、お兄さまの体つきはすごかった。お触りできなかったのが悔やまれます。お触りされたくもあつたのですが、残念です。

おつと、いけません。お兄さま語りで話が逸れてしまいました。

つまり努力を続けるお兄さまに、才能にかまけてサボつていては勝てないということ。今後の展望として、戦士候補生であるお兄さまが、壁内に侵攻してくるのもそう遠くない未来であると推測できる。

私がある時取るべき立ち位置は、巨人に食われて殺されるモブAでもいいでしょう。しかしそれではお兄さまに気付いてもらえず、また出会えることなく死んでしまう可能性が高い。

であれば、敵対関係にいるのが最も美味しいポジションになる。お兄さまと出会う確率も高まり、モブの巨人たちに殺される可能性も低くなる。ともかく戦士たちの侵略前提で、行動を考えていくべきなのだ。

お父さまに語った内容の大半が嘘になりますが、しかしお兄さまと出会いたいのは本当のことです。

エレンきゅんや、カルラママを守りたいのも本当。最高のタイミングで家族を壊す前に死なれては困りますからね。

目先の目標としては、戦う力をつけること。そして、一番最高なのはお兄さまと出会うことができた上、妹が「敵」として立ちはだかることである。その中でお兄さまに殺されてしまったら私、腹上死ものです。お兄さまに殺されて逝いってしまう未来ですか

……♡

妹を殺してしまったお兄さま、人生で最高のお顔が見れそうです。

ただし死ぬ前に解決しておきたいのは、巨人の継承者の寿命の問題ですね。ユミルちゃんに会おうと念じても出会えないので、何かきっかけが必要なのでしょう。

一回目と二回目に出会った時の状況を考えると、生と死の間にいたという共通点があるので、死にかければあるいは出会えるのかもしれない。

流石にこれ以上死にかけると、お父さまの精神が壊す前に壊れるのでやめました。訓練兵団に入っていれば、死にかけられる機会も多いでしょう。その時を狙い、ユミルちゃんに何か必勝法がないか尋ねてみることにします。

——そして、私、アウラ・イエーガーの三年間の地獄になるであろう火蓋が切られることになった。

97期生一同が揃った手前、教官が名を名乗る。その後一人一人に名や出身区、志願動機を聞いていく。時折教官が意図的なのか、抜かしていく人間もいる。

思った通りというべきか、私と同年代の人間はごくわずかだ。ほとんどが歳上の人間である。それもそうか、訓練兵として参加できる最低ラインが12歳。戦争が起こっているならともかく壁の中は平和だ、わざわざ兵士を目指す人間の方が少ない。それもまだ子供が、訓練兵になるなど。剩え私は性別が女。同年代で性別が同じ子供はいなさそうだった。

(…来た)

ようやく私の順番だ…と思ったら、素通りされる。その一瞬教官と目が合った。

教官は私の瞳を凝視し、隣の訓練兵に向かっていた身体を戻し、私の前に立つ。

貴様は何者か、と尋ねられ、「シガンシナ区出身、アウラ・イエーガーです」と返す。

「貴様が訓練兵団に志願した理由はなんだ」

志願動機か。射抜くような教官の視線に、私の奥底を掬い上げられるような感覚がし

た。

少なくとも「教官」という立場にある人間だ。これまで数々の経験を積んできたのだらう。嘘をつけばバレる。かと言って浅い理由でもならない。一步戻ってきたのはやはり、意味があると考えなければならぬ。私の本質を見抜かれてはいないが、それでもこの教官には何か感じたのでしよう。私という、悪魔に。

一つ息を吐き、心臓に当てた右手を強く握りしめる。

私が訓練兵団に志願した理由は、調査兵団に入るため。そして人間たちの悲劇を間近で見て、「私」という存在が生きていることを実感するため。その上でさらに、いずれ来る壁内の人類の終わりの際、お兄さまと出会い、私の最後にして最大の、曇ったお兄さまを堪能するため。

以上を端的に表すなら、どう言うべきか。

一瞬のうちに考えて、言葉にする。教官の目をじつと見据えながら。

「——わたしが「私」として、生きるためであります！」

私の言った意味がわからぬようで、周囲の訓練兵が首を傾げる。しかしこの場で大切

なのは、訓練兵としてこれから過ごす人間の覚悟を見るためだ。覚悟があるなら良い、ないなら活を入れる。そうやって兵士の一步を歩ませるのだ。

ゆえに意味が分からずともよい、その人間のうちにどのような過去があるのかなどは、わざわざこの場で掘り下げるべきことではない。

教官は私の言葉に無言のまま、隣の兵士へと移っていった。

内心少し疲れたが、しかしまだ始まったばかり。

私は「兵士」として頑張ります、お兄さま。

そしていずれ、戦い合う未来を、心の底から待ち望んでおります。

ハローワールド／グッバイエブリワン

その日、ウオールマリア南方の訓練所にて、200名近い第97期生の訓練兵が卒業に漕ぎつけた。

この中で憲兵団に希望することできるのは、成績優秀者上位10名のみである。その10名のほぼ全てが憲兵団入りを希望する中、一名のみ別の兵団を希望する者がいた。

その名を、アウラ・イエーガー。成績9位を収めた少女である。

肩にかかるほどの長さの色素の濃い髪と、僅かに青みを感じさせる白銅色の瞳。女性にしては高めの身長とスラリとした体軀は、一見すれば兵士とは思えぬ体型である。正しく「美少女」を体現するその姿に、多くの訓練兵（主に男）が救われてきた。

誰にでもやさしく真面目で、男女平等に接する。時に女子陣からやつかみの視線を受けることもあったが、彼女は意に返さず進み続けてきた。彼女の果敢な姿に容姿はさておき、厳しい訓練の中で心が折れかけてきた幾人もの人間に、前へ進む原動力を与えてきた。

筆記においては常に上位に食い込み、人望も悪くない。さらに瞬発性や機動力については、有無を言わさぬトップクラスを誇る。

しかし唯一難点があるとすれば、他の成績上位者と比べて体力・筋力に劣るところか。人間の体型とは遺伝的なものもある。身長割に体重があまりにも低かった彼女の母親——ダイナを例に挙げれば、それも仕方ないと言えよう。

それらを踏まえての9位。妥当と言えば、妥当の成績である。むしろ周囲が歳上で男性が多い中、よく上位者に食い込めものだ。

これに少女の裏の顔を含めてしまえば、卒業どころか訓練兵の入団を拒否されるレベルの醜悪さなのだ。

しかし、彼女の裏の部分に気づくものはいなかった。少女が時折覗かせるドロドロとした何かに教官は気づいていた節があったが、それも彼女の過去が原因ゆえと、考えられていたのである。

情報によれば、詳しい経緯は不明だが、アウラ・イエーガーは幼少期生みの母親を失ったとの話がある。情報元は少女の母親からだ。

ちなみに後者の母親とは、父親の再婚相手を指す。これだけでもなかなか複雑な家庭事情だ。

そのトラウマが原因となり一度、それも入団する数ヶ月前に精神を病み入院している。その状態でよく回復し、入団できたものだ。

もし精神が回復しきつていなかったら、最初の「通過儀礼」の洗礼さえ耐えられなかったに違いない。だが最初から最後まで残ったということは、つまりそういうことだ。

アウラ・イエーガーには訓練兵の三年をやり遂げる覚悟——そして、それに相応する目的があつたのだ。

成績上位10名が並ぶ中、彼らを三年間教えた教官の男は、心臓を捧げる9位の少女に視線を向ける。

初め通過儀礼として訓練兵たちを恫喝していく際、男はアウラ・イエーガーもまた、時折いる通過儀礼をすでに終えた者と判断しかけた。

「通過儀礼」とはそもそもそれまでの自分を否定し、まっさらな状態にしてから兵士に適した人材に育て上げる——という、必要な過程とされる。それを必要としない者は総じて過去に壮絶な体験をした人間が多く、己の中でその体験に準じた信念や覚悟を抱いている。

普通ならば通過儀礼を終えている者に対し、教官が声をかけることはない。

しかし男は一度アウラ・イェーガーに「必要なし」と感じたのにも関わらず、立ち止まった。それは何故か。

その、白銅色の瞳の中に沈む何か——末恐ろしいものを、感じたからだ。研ぎ澄まされた刃のようにも、血まみれになり錆びてしまった鈍刀のようにも見える、チグハグで、狂気的な何か。

この時点では一人一人の訓練兵の過去を知らない状態であったため、教官は得体の知れないその正体を測りかねたのである。

ゆえに男は少女に問うた。少女が訓練兵団として、ここにきた理由を。

——わたしが「私」として、生きるためであります！

それが、少女の理由だった。

ドロドロとした奥底に秘めた真意。それは少女の過去と照らし合わせることで、ようやく正体がわかってくる。

母を失った過去。その強烈な体験は、一度思い出すと少女を精神的混乱に至らす。何が起こったのかは、聞くべきではないだろう。少女は一度発狂して入院し、それを乗り

越えて訓練兵に志願した。掘り返すのは藪蛇というものである。

アウラ・イエーガーは最終的に、自分として生きるために、三年間努力し続けた。それは単に、弱い己に打ち勝つためであろう。

その上で必死に生きて駆け上がり続けたのだ——と、教官の男は瞳を閉じる。

ともかく、これにて第97期生は卒業し、三つのうちの一つの兵団に入団する。

1から8位までは憲兵団を志願した。9位の少女もまた、憲兵団に——、

「わたくしアウラ・イエーガーは、調査兵団への入団を希望いたします!!」

周囲がざわついた。調査兵団は三つの兵団の中で群を抜けて死亡率が高い兵団である。

現在団長を務めるのはキース・シャーデイスであるが、これといった成果をあげられず、ここ数年では無駄に兵士が死んでいつている。年々調査兵団を希望する者が減っていることは、隠しようのない事実。入ったところで死ぬか、生き残っても民衆の冷やかな視線を向けられる。

そも人は壁に守られ、約百年も平和に過ごしてきた。わざわざ巨人の脅威に晒されな

がら、命をかける行為自体バカげている——と、あざ笑う民もいる。

しかしアウラ・イエーガーは、真っ直ぐに前を向き、心臓を捧げている。

三年間教官を務めた男は、小さく「ああ」と呟いた。

どんなに周囲に冷たい視線を向けられようと、一人の少女は自分が自分として生きるため——他人に流されて生きるのではない、自分の夢に向かって、突き進んでいる。勇ましく、それでいて美しい。そしてその姿の裏で流れるドロドロとした人間の狂気が、不思議と少女の魅力に感じられて仕方がなかった。

今ここに多くの人間が、15歳の少女に魅せられている。

その光景は、彼女に流れる王としての資質も起因していたのだろう。

??????

私アウラちゃん、15歳。

何度か死にかけながらも無事に訓練兵団を卒業しました。予想以上に体力がなくてヒイヒイ言っていました。それでも屍にならずに済んだ。もちろん吐く時は、皆の衆がいらないところでキラキラさせていましたよ。美少女ちゃんのイメージを崩すわけにはいかなんでね。

身長も三年でかなり伸び、地獄の訓練の中筋肉も多少ついた。見た目はお母さまの美人な顔立ちにより近づいたと言えましょう。それでもやはりユミルちゃんにそっくりですが。えっ？胸はどうなったのかって？

……実は私、一度試してみたいことがあるんです。兵士になって当然のようにブレードの使い方を覚えたんですが、対巨人を想定してでしか使っていないんですね。ええ、そうです。人間に使ったらどうなるか試してみたいんです。

「ブレードフェラ」——実にいい響きですよ？舌や歯や肉や脊髄をブレードでかき混ぜたらどうなるでしょうか。実にイイ表情をしそうですね。された、人間は。

閑話休題。

結局何度か死にかけましたが、ユミルちゃんに会うことはできませんでした。生死の判断ラインが厳しいのか、それとも猫のように向こうが気まぐれなのか。まあ、そこは

私の力ではどうにもならないので、ひとまず置いておきます。

して、問題はここからです。

調査兵団に入ることができ、次回初めて同行することになる壁外調査。新兵が初の壁外遠征で生還できる確率は、5割程度と低い。力を付けたはいいものの、どこまで通用するのかわからない。実際に巨人^{本物}と闘ってみなければ。

私は体力は平凡だが、瞬発力や機動力は高い。また体重も筋肉がつきにくい分軽めであるので、素早さもある。状況把握や処理にもそれなりの適応はある。仲間内との連携も培ってきたつもりだ。

それでもやはり、これからどうなるかは運命次第だろう。

そもそもお父さまの話が本当であれば——というか幼少期の私が目撃しているのですが、お父さまが巨人化して壁の世界へ向かっている時、巨人は襲って来ず静観していた。

それも「始祖の寵愛」によるものだ、とお父さまは推測されていた。

調査兵団になって壁外調査に出て、巨人が私を襲ってこない——なんてことはないですよね、ユミルちゃ：ユミル様？でないと、不審に思われたアウラちゃんが尋問・解剖

されてしまいます。

「寵愛」というのは自身を例に挙げれば、好きなあの子の笑顔だけでなく、泣く姿を見てこそ本当の愛だと私は感じている。

なのでユミルたそは、私が巨人と戦い苦戦するところをネツチヨリしながら見ていておくれ。

しかし一度はケガをして、お父さまやカルラママにエレンきゆん、それに団長のキーヌおじさんに心労的負荷をかけたい。腕の一本くらいは失つてもいいですが、そうすると戦えなくなってしまうので、骨を折るなどが望ましいですね。いずれタイミングよく巨人に捕まってケガをしましょう。

そうした不安は色々ありました、卒業して間もなく私は一団員として壁外調査に赴きました。

行く前に家族の元には一度顔を見せましたが、お父さまとは仕事の都合でまた会えませんでした。

代わりに大きくなったエレンきゆんを抱っこして胸いっぱいに吸い（全力で抵抗された、思春期か？）、カルラママも嬉しそうに笑っていた。すぐに壁外調査に行くのを知っ

たら、カルラママは落ち込んでいましたけど。

対しエレンきゅんは、カルラママ曰く、三年の間に私の姿を追って調査兵団に憧れを持つようになったらしい。ついでに「調査兵団を諦めるよう説得してほしい」とも頼まれた。

随分ツンツンしてるけど、お姉ちゃんがない時はデレデレするとかかわいいな？ついと自由の羽の刺繍がされたマントを見せれば、瞳を輝かせた。けど、すぐにそっぽを向いてしまったところもかわいいな？

後でお姉ちゃんがケガしてくるから待つてろよ！

そして、壁外を移動中。

馬を走らせながら目に留まるのは、金髪の分け目が気になる男性。その人物とは、明らかにキース団長より有能そうなエルヴィン分隊長である。現時点ですでに、次期団長は彼に決定している。今は団長の右腕ポジションと言つていい。

エルヴィン分隊長の班は、毎回死者が他の班と比べて圧倒的に少ない。幸い私は彼とは別の班だ。

使える人間がいるというのはそれだけ、周囲の不幸が減ってしまう。私としては実に

美味しくない。

人が巨人に食われる様を見るのは初めてではないですが、やはり人類のために命を掲げていく者たちが、最期にどのような表情を浮かべて死ぬのか早く見たい。

ちなみに初回で見たのは、曹長殿が復権派の人間を蹴落とし、生きたまま巨人のエサにさせていた時である。

当時はお兄さまの悲劇でしか輝けなかった未熟クソ幼女ちゃんでしたので、惜しいことをしました。

もっと早くに曹長殿の言葉を聞いていれば、私はお兄さま以外の人間の悲劇に、価値を見出せたというのに。

「えつと……よろしくないイエーガー新兵！若い上に、成績上位者9位の人間が入ってくれたのはとても心強いよ」

私の班の分隊長の男が声をかけてきます。エルヴィン分隊長と比べたらよっぽどモブの印象しかない。

しかし美少女アウラちゃんは「天使」ムーブで微笑みました。

「よつ、よろしくお願ひします、分隊長！」

年齢や性別はともかく、他の成績上位者が憲兵を選んだ中調査兵団を志願した私は、

すでに調査兵団内でうわさになっていようだ。

まだ新兵であるので、組まれた陣形の私の配置位置が一番安全なポジション。他にも調査兵団を志願した同期もいるが、大半は緊張で顔を強張らせている。そりやあ死ぬかもしれないしな。

一応キース団長に視線を送ってみるが、最初に新入りたちに向けた激励の言葉を賜っただけで、個人的に話はしていない。

しかしハンネスおじさんなどから、私がキースおじさんに憧れ調査兵団に入った（嘘）情報は、既に得ているだろう。

元友人であるお父さまの娘でもあるので、思うところしかないだろう。そうして団長が苦しむ分私がニッコリできるので、とても美味しい立ち位置です、本当。まあ団長でいらつしやる方ゆえ、私情と仕事はきっちり分けていましょう。

「前方より巨人接近！数は——」

早速巨人が来た。数は二体。一方は3 m級で、もう一体は10 m級だ。

現在地は森に囲まれた場所。立体機動を使うには適している。

団長の言葉と共に一斉に周囲が臨戦態勢に入る。

ああ、とてもドキドキしますわ私。何人、何十人の兵士が此度の壁外調査で死ぬでしょう。彼らの命は巨人に奪われ、最後は嘔吐物となつてみんなと混ざり合つた肉塊になる。

どんな表情で、どんな声で、どんな気持ちで彼らは死んでいくでしょう。

その最期を、人間の一生の中でもっとも輝くその姿をぜひ、この私に見せてくださいませ。

「うわああああ!!」

「いやっ、私まだ、死にたくなッ——」

——ハア、これが「生」なのです。

私が今生きていることを、死にゆく者たちの悲劇を以つて、感じさせていただきます。

最初の二体を倒したと思えば、また新しい巨人が現れる。兵が一人一人と、頭を食われ、腕を噛みちぎられ死んでいく現状。

私は班員と連携しながら巨人を駆ります。必然とブレードの鞘を握る手に力が入つ

た。

鼓膜を震わす悲鳴、絶叫、懇願。

視覚に映る涙を流す男の兵士、身体の一部を食いちぎられ失禁した女の兵士。その他にも倒錯してしまう光景。

こんなにも私に合う天職はありません。少なくとも壁の中で生産者の一人として生きていては、一生感じることでできない魂の躍動。

思わず歪みそうになる顔を堪え、アンカーを巨人にかけ瞬時に近づき、うなじを削ぎ落とす。そのまま近くの太い枝へと移動し、不意に空を見上げた時。

青い空が、広がっていた。

そう言えば私の前世らしき記憶で見たのも、青い空だった。手を伸ばしても、届かない。私には掴めない空。

それがとても美しく、視界の端に飛ぶ巨人の血、あるいは人間の血がこれまた私の心を満たす。

まさに残酷で、美しい世界。

そんな世界で私、アウラ・イエーガーは、生きている。

G u e s s (ゲスウ) W h a t ?

エレン・イエーガーには7つ歳の離れた姉がいる。

母似のエレンとも、父とも似ていない容姿の姉。幼少期の少年はそれを不思議に思うことはあれど、それほど深く気にしたことはなかった。

「エレンのお姉さんってさ、その…すごくキレイだよね？」

そう呟いたのは、少年の友人であるアルミン・アルレルト。最近仲の良くなった同年の子供である。

家の手伝いが終わった後、川べりの草むらで寝転がりながら空を見上げるのが、近頃の二人の趣味。鳥の囀りに、風が草木を揺らし奏でる音。どれをとつても平和そのものだ。壁の外に出れば、巨人バケモノがわんさかいるというのに。

「急になんだよ、アルミン」

エレンがため息をつきながら隣のアルミンを見れば、頬を赤く染めて何やらモジモジしている。

それに少年の翡翠の目は半目になった。今まで何度も見たことのある光景だ。もつと幼い頃姉と外に遊びにいった時、周囲の子供がよく浮かべていた表情。それをまさか、この知的な友人が浮かべるとは。

以前二人で壁外調査から帰還した調査兵団を眺めていた際、エレンは姉が調査兵団に所属していることと、どの人物であるかをアルミンに教えた。

対し人だかりの中、後方で樽の上に乗る背伸びをする弟と、その友人らしきアルミンを見た姉は、少し暗い表情ながら笑みを浮かべ小さく手を振った。

それも仕方あるまい。壁外調査に出た半数以上の人間が減っていたのだ。

エレンの姉が入団してからまだ一年も経っていないが、五体満足で何度も壁外調査から帰還している。

ハンネス曰く、新兵でありながら中々の活躍を見せているらしい。

“副分隊長” クラスに上がるのも、そう遠くない未来だろう、と語っていた。

自由の羽を翻し、巨人と戦う姉。その姿を想像し、エレンの心は湧き立つ。少年もまた戦うことを望んでいる。戦い、進み、壁の中で家畜のように暮らす人類の姿を否定したい。

ゆえに姉に憧れを抱いている。いずれは自分も調査兵団に入りたい——と。

しかし、しかしだ。

「言つとくけど見た目はビジンでも、家に帰ってきたらチョウウゼエからな」
「えっ!? そ、そうなの…?」

「オレにベタベタするし、「身長伸びたねエレンくん!」とか、「おねーちゃんと一緒に遊ぼー!」とか……オレはガキじゃねえつての!!」

「…それって単純に、エレンのことが好きだから甘やかしてるんじゃないの? 中々仕事で会えないわけだし」

「けどよ、毎回毎回人のこと抱っこするんだぜ? しかも「たかいたかーい」って」

「……いいなあ」

「よくねえよ!!」

そりゃあエレンも姉が訓練兵団に入る前くらいまでは、抱っこされて嬉しかった。むしろ自分から遊んでもらいたいに行っていた。

しかし彼もまた、思春期。

姉がいない三年間、寂しくてないたことなど決してなかった。そう、なかったのだ。あるわけがないだろ、そんな過去など。

「そう言つて、本当は泣いたことあったんでしょ?」

「人の心読むなよ！」

エレンに近づき、「ゲスウ…」と絶妙な笑みを浮かべるアルミン。

「エレンはでもき、お姉さんのこと嫌いではないでしょ？」

「……嫌いではねえけど」

「けど?……す」

「す?」

「すき……?」

「好きじゃねえよ!!」

「素直になりなよエレン。甘えられるのは今のうちだよ?」

「別に甘えなくなつて、向こうが勝手に甘やかしてくるし」

「いいのかい? いずれ僕が君のお兄さんになった時甘えたくなくても、絶対に甘えさせ

てあげないからね?」

「そうかよ、兄さん」

「え、あ、いや……き、気が早いなエレンは……僕まだお姉さんと話したこともないのに

……」

「自分で言つといてガチで照れるなよ」

赤面ミンは顔を隠しながらうづくまる。きつとエレンの前ではこうして冗談混じり

に語っているが、いざ姉の前で喋るとなったら、アルミンは石像ミンになってしまいうだろう。

そもそも姉が結婚するなど、エレンには想像しがたい。職は調査兵団で致死率が高く、いつ命を無くしてもおかしくないため、独り身の者も多い。姉が母親に「いい人はいるの?」と夕食の時間かれ、答えていた内容だ。

思えばあの時、姉と久しぶりに顔を合わせた父の身体が微妙に震えていた気がする。体調でも悪かったのだろうか、医者なのに。

「そう言えばエレンってさ、あんまりお姉さんと似てないよね」

「ん?…ああ、母親が違うからな」

「……………え?あ、ごめつ」

「いいよ、オレは気にしてねえし。というか家族みんな気にしてないし」

エレンが姉と血が半分しか繋がっていないことを知ったのは、いつだったか。

姉が訓練兵団に入り帰って来ず、寂しさのあまり泣いていた当時。外でぐずっていたのを、悪ガキの子供に見られバカにされた。それにキレて殴りかかろうとし、逆にポコポコにされたのだ。

——男の子が泣いてちや恥ずかしいんだぞ。

そう姉に言われたにも関わらず、以前よりも少年は泣き虫になってしまった。

挙句、悪ガキたちにエレンと姉の容姿が似ていないことを理由に、本当に姉弟か、と言われる始末。

泣きながら家に帰ったエレンはその後、母に聞いたのだ。

自分は姉と「きょうだい」だよな？——と。

当然YESの回答が返ってくるかと思いきや、母のカルラは目を見開かせ、少しの間をおき泣いているエレンの頭を撫でながら、二人の母親が違うことを話した。

血は繋がっている。ただし、それは半分。

まさかの事実のエレン少年は衝撃を受け、涙も引つ込んだ——が、それも一瞬で、ジワジワと襲ったのは前より大きい感情の波。

母はそんな少年に言うのだ。血の繋がりは些細な問題でしかない、と。

見るべきはそこではない。姉——アウラがエレンを、どのように見ているかだ。

一時でも彼女が、弟を大切に思わないことなどあったらどうか？いつもエレンに笑いかけ、手を繋ぎ、遊んだ姉が。

答えは「否」。

姉がどれほどエレンが大好きであるか、その愛情を受けている少年本人が一番わかっているに決まっていた。

だからこそ、思春期が早めに到来してしまったのだろうか。

姉が弟を大好きである事実。成長するに連れ、その感情に対しむず痒さを感じるようになってしまった。

それは単にエレンもまた、姉を大好きであるからだろう。

「はあーあ」

エレンは立ち上がり、大きく伸びをする。晴れわたる空が彼とアルミンを覗いている。

「アルミンオレさ、将来調査兵団に入りたいんだ」

「それって、お姉さんと同じの？」

「ああ。それで、巨人と戦う」

狭い世界で家畜同然に生きるのはごめんだ。

そう思考する少年は側から見れば異端に違いない。アルミンもまた、似たような意見を持っている。

“普通”の枠組みに入らない人間は少数いる。その人間の一人なのだ、エレン・イエーガーは。

そしてそのような少数の人間が集まりやすいのが、「調査兵団」という場所。

そも壁内では、外の世界そのものに興味を示すことすら、タブー視する傾向が強い。

アルミンはこの時点で調査兵団というものが、壁の世界の住人が外の世界へ興味を逸らすよう作られた意図があるのでは——？と感じている。

その意図を持つのが王政府。彼らは壁内の人間が、外の世界に興味を持つことを禁止している。

以上のような考えが浮かぶのは、以前エレンと見た壁外調査から帰還した調査兵団の姿を見てしまったからだ。

ボロボロの兵たち。重傷を負って運ばれる者や、仲間の死を間近で見たのか生気のない顔をする者。

あんな、あんな悲惨な姿を見てしまつては、外に出たいなど思わなくなる。人間が巨人に勝つことなど不可能。

それでもアルミンの友人は「巨人と戦う」と言う。正直気が狂っている。だがアルミンもまた、友人と似ている。彼もまた外の世界に憧れを抱いているからだ。壁内に存在しない未知の世界。それは彼の心を離してやまない。

「僕も外に行きたいなあ……でも人類が巨人に勝つのは、やっぱりムリだよ」

「戦ってみなきやわからねえだろ！ 姉さんだって巨人を何体も倒してるんだ。オレだって……」

「一体一体に勝っても、巨人はたくさんいるんだよ？」

「それでも、全部オレがぶっ殺して……」

「エレンが調査兵団に入ったとして、絶対に死なないなんてことあり得ない」

「強くなればいーだろ、その分」

「……君のお姉さんだって、いつ死んでしまうかわからな——」

話していた最中、アルミンは胸ぐらを掴まれる。掴んだ主は翡翠の瞳をギラつかせ、彼を睨むように見ていた。

「そうだ、姉さんがいつ死んじゃうかわからない。いつ死んだってきつとおかしくない」「え、エレン……？」

苦しさにアルミンが呻けども、エレンの手は離れない。段々と胸ぐらを掴む手は震え

ていき、真つ白くなる。

そこできなにか友人の繊細な部分に触れてしまったのだと、アルミンは気づいた。エレンの顔を見れば、唇を強く噛んでいて——今にも、泣きそうだ。

「ごめ、ん」

「…ッ、悪い」

少年の——エレン・イエーガーの、底に沈んだ暗い部分。

それは幼き頃の記憶。夜、母親に寝かしつけられていた最中聞こえた、姉の絶叫。

家族が目の前で殺されたのかと言わんばかりの悲鳴に、少年の目は一気に覚めた。今までやさしい姉が、斯様な声を上げたことなどなかった。誰にでもやさしく、真面目だった姿。近所ではできた娘として、有名だった。

しかしエレンが見たのは、そのイメージが一瞬にして崩れる様。

カルラが何事かと慌てて出ていき、開いた扉の隙間から様子を窺っていた少年。普段絶対父親に通してもらえない地下室の扉が開いており、そこから下を覗き込むように母親が腰を曲げている。

下から慌てて上がってきた父親の腕の中には、両手を抑えられた姉が。

姉の表情は、死んでいた。人の命が終わった後浮かぶ血の気のない顔。

その後少女は暴れ、父の腕から逃れて目先にあつた包丁を掴む。何をするのか一瞬エレンは理解できなかった。いや、ずっと理解できなかったのだ。理解できない光景が、ずっと続いていったのだ。

だが少女の首元へ向いた包丁の刃先が鈍く光った時、声を出した。最初は掠れるような声で、動転する両親の声にかき消されてしまう。声がうまく出せない。身体だけはギシギシと動き、母親の後方までたどり着いた。

そして姉の包丁の刃先と同じ鈍い色の瞳と目があつた瞬間、自分でも驚くほど大きな声が出ていた。

その時一瞬硬直した姉の身体が、父親に拘束される。

それから正確な期間は覚えていないが、数週間ほど姉は家に帰って来なかった。エレンにとっては忘れられない光景で、しばらくの間悪夢として、姉が包丁を持ち自分の首を刺して死ぬ夢を見た。

なぜ姉が叫んだのか、理由を聞けども両親が答えることはなく。ただ「アウラは大丈夫だ」と言うのみだった。

しかし明らかにその表情は、嘘であるわかる。それほど当時の二人は憔悴してい

た。特に父グリシヤが。

退院した姉は頬が瘦けていたが、以前のやさしい姉に戻っていた。

未だに何が理由で姉が狂ったのか、エレンにはわからない。だがカルラから聞いた「母親が違う」という内容を知って以来、なんとなく腑に落ちたのだ。

姉が、叫んだ理由。カルラ以上にひどく憔悴していた父。そして発狂する前、姉が父と地下室で二人だけだったこと。

姉は——アウラ・イエーガーは、過去に母親と何らかの形で別れた、あるいは失った。それを思い出してしまったから、叫んでしまったのではなからうか。他に理由があるかもしれないが、エレンとしてはやはり母親の死因説が有力である。

「ハア……」

当時を思い出した少年は、深く息を吐く。顔の青白い彼の隣にいたアルミンが心配そうに声をかけるが、大丈夫だ、と返す。

不安定な心を落ち着かせるように、エレンは呟く。

「…姉さんは死なない」

「エレン……」

「死なせてたまるか……オレの、家族なんだ」

「……………」

巨人を倒す強い姉。反面過去の記憶にとらわれ心を壊す、弱い姉。

どちらもエレン・イエーガーの姉の姿。少年は一度姉が死のうとする——失うかもしない体験をしたからこそ感じる。

己が守らなければ、ならないと。

調査兵団に入ったのも案外死にやすい場であつたからだろうか。

それも十分あり得るが、しかしその可能性は薄そうだと、少年は思う。

まだ小さかつたエレンの手を引いて、草原に連れて行つたアウラ。先程アルミンと眺めていたような雲ひとつない青空を、二人で眺めた。

空はどこまでも、どこまでも広がる。壁外にも、広がり続けて。

エレンが瞳に映っていた姉の横顔は、遠い空を眺めていた。

そして、彼女は手を伸ばす。「とどかない」と呟いて、寂しげに笑う。

いつもエレンに笑いかけたり、ベタバタしてくる姉ではない。別人のような誰かが少年の隣にいた。不思議な感覚だった。姉であるはずなのに、別人のように感じるなど。

だがそこにいたのは、アウラ・イェーガーで間違いない。

姉の誰にも見せたことがないような顔を見て、その時の少年は翡翠の目を大きく開かせていた。

風に吹かれ、鼻腔を掠める草木の香り。青い天井。どれをとっても、美しい。

穏やかな世界は幼児を眠りの世界に誘う。じっと見つめていた姉もまた瞼が落ちかけていて、ひどく幸せな時間だった。

あいたい——。

意識が落ちる中、エレンが見たのは涙を流す姉。

何故泣いたのか、わからなかった。ただ呆然と少年はこの美しい世界に意識を向けて、その感覚と一体になりながら眠りにつくことに、どうしようもない違和感を感じたのだった。

「オレは、進むんだ」

瞳を閉じそう語ったエレンを、アルミンは息を飲んで見つめた。

【三章】ドロドロ編

前妻と後妻とそれから悪化（アッカー）マン

私、アウラ・イエーガー、16歳。

壁外調査から帰り、その他次回の壁外調査のミーティングやシミュレーションを模した訓練などを行い、久々に取れた休日。

調査兵団は外への調査がメインの兵団とは言っても、その他やることは色々ある。兵団維持の資金繰りをしたり、兵器開発など割と多忙だ。特に鍛錬は訓練兵を卒業してからよりハードに行っている気がする。

ちなみに基本の住居は寮だ。

これは一つ怖い話ですが、寮に入っているといつの間にか、いたはずの人間が減っているんです。一人、二人、三人……。彼らはどこへ行ってしまったのでしょうか……。怖いですねえ。

ブラックジョークはさておき、久しぶりにお家に帰った私は玄関を開けて固まった。家族をビツクリさせようと黙って来たんですが、まさか私がビツクリさせられるとは

思っていたいなかった。

「…………誰」

こちらを見て、小さく口を開いた黒髪の美少女。あまり見かけない顔立ちの子に、混乱が止まらない。

カルラママは洗濯物へ行っているようでおらず、エレンきゅんの姿もない。

女の子の手には包丁が握られており、もう片方の手はネコの手で野菜を固定している。

いや、本当に誰だ。え、あ、まさか……………!!

「…あれ、姉さん帰ってたの？お帰り」

「あわわわ」

「姉さん?……………!この人が、エレンのお姉さん?」

「はわわわ」

「そうだよ、ミカサはまだ会ったことなかったっけ?」

「ない……………はじ、初めまして…」

「あばばば」

「…さつきからうるせえな姉さん!!」

エレンきゅんはどうしていつもお姉ちゃんに優しくしてくれないんだ。最近出会っ

たらずっとツンツンしかしない。

じゃなくて、この女の子は「ミカサ」というのか。ミカサちゃんは…エレンきゅんと
同い年くらいだな。

しかしまさか、そんな……。

「……おや、帰っていたのかいアウラ」

「！」

ちようど自室から現れたお父さま。会える機会が最近めつきり減っておりましたので、嬉しゅうございます。また少し老けたみたいだな。これも巨人化の影響なのだろうか。

「十三年」の寿命を考えても、お父さまに残された時間はあと少し。相変わらずユミルたそは出てきてくれないし——ですから、今はそうじゃなくて。

「隠し子とはどういうことですかッ!!」

カルラママにも、お父さまにも似ていないミカサちゃん。私やカルラママとはまた別の系統の美少女具合に、母親はきつと美しい人なのだとわかる。

グリシャ・イエーガーとカルラ嬢をくっ付けた私が言うのもなんですが、いくらなん

でも妻が生きていながら他の女性とその、あの……そういう行為をなさるのはどうかと思えます。

温厚なダイナお母さまだつて、これを知つたらビンタからのホールド技（ジャーマン・スープレックス）をするに決まっている。

しかしカルラママがいるはずなのに、ミカサちゃんも同居しているということは、他所で子を作っていたものの、母親が死んでしまったので預かつた——ということでしょうか。何とカルラママは寛容なのだ。

信じられません、信じられませんよ、お父さま。お兄さまや娘私、エレンきゅんという子供たちがいるというのに。

「隠し………アウラ、お前は今とてつもない勘違いをしている」

「信じられない、近づかないでお父さん……」

「姉さん、ミカサは……その、色々あつてうちにいるんだよ」

「……………」

ミカサちゃんは付けていたマフラーに顔を埋めるようにして、下を向いてしまった。いけない、恐らく母親を亡くしてしまった過去があるというのに、心の傷を抉るようなことを言ってしまった。それにしてもミサカちゃんの曇り顔かわいいな。

「少しこちらへ来なさい、アウラ」

お父さまに連行という名の腕を引つ張られ、連れて行かれる私。

後ろを見ましたがエレンきゅんがミカサちゃんの背をさすっていて、明らかに私が悪い状況が出来上がっている。仕方ありません、過去に起こってしまった——あるいは起こしてしまつた結果の心ないし身体の傷というものは、とても重いのですから。

お父さまが隠し子を作っていた事案のように。

それからお父さまの自室に連れて行かれた私は、ミカサちゃんの事情について聞きました。

曰く、最近彼女の両親が亡くなり、我が家で引き取ることになつたそうです。事件については大まかに聞きましたが、山奥に住む東洋人の血を引くミカサちゃんとその母親を狙つた人攫いであつたらしい。

お父さまがエレンくんを連れ診療に訪れた際、夫妻の死体を発見し事件が発覚。母親については抵抗したため犯人が殺してしまつたようだ。

その後お父さまが息子に麓に戻るよう言い、憲兵団を呼びにいつている間に、エレンくんは勝手に行動。そして犯人の男三人に捕まつた後、ミカサちゃんと協力して三人を殺害。

憲兵団がこの事件を処理したが、犯人側の人攫いを目的とした殺人——という極めて残忍な手口から、子供たちは正当防衛としてお咎めなしとなった。殺さなければそのままミカサちゃんも売られ、薄汚い野郎どもの所有物になっていたに違いない。

エレンくんもミカサちゃんの救出に失敗していれば殺されていた。本当危なっかしい弟ですね。

「……エレンが悪人ではあれど人を殺めてしまったことについては、あまり驚かないのだな」

「驚くも何もお父さん、わたしは生きるか死ぬかの瀬戸際をよく知っているもの。エレンくんとミカサちゃんの行動はむしろ「よく戦った」と称賛したい。それにわたしの方がよっぽど人間を殺している」

巨人の元となったエルディア人たち。名も知らぬ同胞を殺すことに罪悪感もクソもないですが、素材が人間である以上、私の行動は人殺しと言っている。

お父さまが人を救っているなら、私は人の命を奪っている。

「……………」

お父さまが無言で俯いた私の背をさすってくれる。触れられた場所からジワジワ熱が伝わってくる気がした。家族の温もりが気持ちよくて、脈が早くなる。

曇ったアウラちゃんに曇るお父さま。これだからやめらんねえぜ、かわいいそうな美少女ちゃんムーブは。

いや、にしてもミカサちゃんの件。もしかしなくとも私の早合点でした。

誰だよお父さまの隠し子だとか言ったやつ。——私です、本心に申し訳ありませんでした。

「ミカサの傷は深い。今はあまり、過去に触れるようなことはしないであげて欲しい。あの子の心の傷を癒すためにも、我が家で引き取ることにしたんだ。エレンについても同様だ。正当防衛とはいえ、人を殺めてしまったあの子らの精神は、多かれ少なかれ不安定になっている」

「……ごめんなさい」

「いや、お前は知らなかったんだ、仕方ない。まさか隠し子と思われるとは思わなかったが……」

「……ごめんなさい」

自分の失言に先とは違い本気で顔を覆う。すると不意に、頭を撫でられた。

きつと同年代の少女であれば嫌がる行為でしょう。だが私には思春期というものが

ないので、避ける理由もない。やさしい手付き。

もう少しで味わえなくなる。寂しいですね、お兄さまとの繋がりを感じられなくなる。エレンくんはカルラ嬢に似ているから、尚更。

「ダイナの身長も、超えてしまったな」

「……………」

「本当に大きくなった」

「……………」

無言で立っていると、抱きしめられる。幼女ちゃんの時はお父さまが簡単に抱っこできるほど小さかったというのに、本当に身長が伸びた。

顔立ちも前髪を分ければよりお母さまに似るでしょう。普段は目元にかかるほどの長さになったら、ブレードで一気に斬っています。

「……………お父さん？」

「…すまない、もう少しだけ」

震えているお父さま。どうされたのだろうか。まるで怖い夢を見て目が覚めた時のような、そんな震え方。

そうして顔を上げたお父さまの瞳には、私が調査兵団を指す時に話したよりも、鋭

い色が存在している。これは——重い覚悟、であろうか。

「何かあったの？」

「……いや、何も無いよ。久しぶりにお前と会えたものだから、ついね」

「そう……？」

何か隠しているのはわかる。しかし決して娘の私でも話すまいとする意志を感じる。

思い当たるのは始祖の巨人か。その所有者を知ったから震えている？ いや、それにしては様子がおかしい。始祖の情報を得たのなら、もつと喜んでもいいはず。

「アウラ、ひとつだけいいかい？」

「何、お父さん」

真つ直ぐに私を見つめる父。

「いずれこの幸せが崩れることになっても、お前は、お前の道を進みなさい」

「え、どういう……」

「いいね、たとえ私に何があってもだ」

「……お父、さ」

涙を流すでもなく、開いた瞳孔でお父さまは言葉を紡いだ。

「幸せが崩れる？ 私自身の道？ それにお父さまに何かがあったらって、もしかしなくとも、それは。」

「…エルディア樂園の、終わり」

ポツリと呟いた私の言葉を、お父さまは否定することも、肯定することもなかった。どうやって知ったのかはわからない。それでもお父さまは何かしらの方法で、戦士たちが来ることを知ったのだろう。

巨人の力の詳しい能力については知らないから考察がしにくい。人が中に入って操作することや、自傷での発動。あとは回復能力が人間時にもあることくらいしか。

お父さまの力について知っているのも、巨人の名前だけ。「進撃」する、巨人。だからお父さまは、進み続けている。

「教えては、くださらないのね」

「……これは、お前が歩むべき道ではないからだ」

「…わかったわ、お父さん」

私から、父をもう一度だけ、強く抱きしめる。

壁の崩壊。戦士たち。お父さまの行く末。私の道。樂園の終焉。

時は一刻と迫っている。ジークお兄さまは、きつと来る。私は私の道を進む。それはお父さまがご想像にならないような、血と肉と、誰かの悲劇でできあがった道。私の道は穢らわしい。それでも私は生きて、そしてその果てに自分の一生の幸福を掴めることを願います。

壊されて、壊す。

崩壊は、もうすぐ。

???????

17歳となったアウラ・イエーガーは、普段は調査兵団として働いている。だが仲間が壁外調査に出ているその日、彼女は同行していなかった。

というのも、アウラは以前の壁外調査で巨人に捕まりかけたキース団長を救おうと動

いた際、ケガをしたのだ。

調査兵団に入ってからいくばくか経ち、「新兵」ではなくなった彼女。

二年弱生き残り続けているその実力は、着実に伸びている。討伐数・討伐補佐数は二桁に及び、精鋭としての地位を確立しつつある。

しかし、前回の壁外調査でキース団長を庇った彼女は、右足を10m級の巨人に掴まれ負傷。

すぐに身体を回転させ、巨人の手を切り抜け出して急死に一生を得たものの、右足を骨折。全治数ヶ月のケガを負った。

骨折した部位が負傷前の状態に戻るまでに、おおむね3か月〜6か月がかかるとされた。

将来有望な力を失うことは、調査兵団としても惜しい。通常ならば完治まで、兵団お抱えの医者による治療となる。だがアウラ・イエーガーの父親がかの有名な「イエーガー先生」ということもあり、彼女は特例で自宅での療養となった。この決定を行ったのはキース・シャーデイスである。幼い頃から少女を知る男としては、複雑な心中であった。

グリシヤはたしかに医者ではあるが、訪問診療を多く行っているため家に不在なことが多い。

その点をわかりつつ斯様な判断を下したのは、アウラ・イエーガーを失わせかけた団長なりの——そして、かつての友人に対する想いがあつたのだろう。

当の本人のアウラとしては、過去最高のタイミング——団長が巨人に殺されかけている状況を救つた——でケガができ、ホクホク顔だった。

むしろ、いつケガするの？今でしょ！な場面。行動に起こさない方がおかしい。結果キースや調査兵団の仲間、彼女の家族に至るまで、多くの者が曇つた。

そんなこともあり、アウラは現在、足の完治まで家で休養を取っている。

歩くことは松葉杖を使えば可能なので、弟や義妹と遊んだり、母の手伝いをする事が多い。

最初短い期間だが、共に暮らすことになるミカサとの距離感に彼女も悩んでいた。だが、少女が弟に特別な感情を抱いていることを彼女の言動から見破り、それを逆手に接

近することにした。

——ミカサちゃんって、エレンくんのこと好きでしょ？

弟が家を飛び出して遊びに行き、その後を追おうとした少女にアウラが言った言葉。それにミカサは瞳を丸くして、顔を真っ赤にさせた。あたふたと、手を少し左右に動かす。

クソ少女——いや、害悪女としては面白いおもちゃを発見したも同然。それから弟のことでミカサの心を揺さぶりながら、彼女は少女と接近することを可能にした。もちろん本当の妹のように思いながら少女と接したので、一応は家族的な距離も近くなった。ただしミカサへの距離は一定を保っている。少女の内側にある何かを目ざとく気付いていたからか。

似ている、と言っているのかもしれない。アウラ・イエーガーと、ミカサ・アツカーマンは。

無論クソのようなアウラの間人性が、ミカサと似ている——というわけではない。

一人の人間に執着している点が似ているのだ。アウラならばジーク。ミカサならエレン、といった風に。

近寄り過ぎれば何をされるかわからない。だが必要とあらばその地雷を踏み抜いても、害悪女は進む。全ては、愛するお兄さまと美しい人間たちの悲劇のためだ。

「あれ、薪拾いに行くの？」

午前中、家で本を読んでいたアウラは、しよいこを背負った弟と義妹に声をかける。

「なんだよ、来なくていいから姉さんは」

「エレン、お姉さんにそういうこと言わない」

「いいよいいよ、二人で行ってらっしゃい」

休養の期間暇なのか、しよっちゅうエレンについてくる姉。しかし今日は「NO」ときた。

「…来ねえの？」

少しいじけたような声を出す弟に、アウラは笑いながら手を振る。

そして家を出て行く二人。彼女は義妹が扉を閉める瞬間、サムズアップし見送った。

その合図に気づいたミカサもまた少し目を見開き、赤べこのようにウンウン頷く。

なんだかんだで、アウラはミカサの恋を応援している。その上で——いずれ幸せな家族を崩壊させようと画策中だ。その時こそ、楽園が終わる時。

仮に家族が壊れエレンの心が崩れても、ミカサが助けるだろう。さすれば二人の世界はより強固なものとなる。

——私って、実にいいお姉ちゃん。

鼻歌を歌わんばかりに、アウラは本のページを捲る。

いずれ来る、その時を楽しみに。

楽園が地獄へと包まれてもきつとこの悪魔だけは、心から喜び笑うのだろう。

テンテン ドンガラガッシャン テン ドンガラガッ
シャン

私、アウラ・イエーガー。

アウラのここ、空いてますよ。誰も入れるとは言っていないませんがね。私が収めたいのはお兄さま。ついでにお兄さま（意味深）を収めたいです。

穏やかな一日。

午前中本を読んだり、カルラママのお手伝いをして時間を潰していました。しかし、薪拾いに出かけた弟たちが中々帰ってこない。恋の逃避行にでも旅立ってしまったのでしょうか。

私の本日の予定としては、早朝壁外調査に出た調査兵団仲間たちが帰ってくるので、帰還した合図の鐘が鳴ったら団長の元へ向かう予定である。

巨人の被害に遭い憔悴し、その上帰還後にヤジを飛ばされる仲間の表情を見なければなりません。

巨人に殺されていく過程で堪能できる仲間たちの絶叫や絶望もよいですが、帰ってきて魂が抜け落ちた顔を味わうのもまた一興。しかも今回はヤジ馬側から見られる。ケガをして本当に正解だったと思います。

むしろこんな美味しい思いをできたのに、骨折だけで済むなんて優しすぎる。足の一本二本もがれてもいい価値があります。

まあそんな私情とは裏腹に、きちんと仕事として今回の壁外調査での損害や収穫の確認。

また、次回の調査に向けての情報を知ることがあるので、帰ってきた仲間と合流してそのまま数日家を空けることになるでしょう。

——と、思っていたら鐘が鳴った。団長たちが帰って来ましたね。

急いで団服に着替えて、料理を作っていたカルラママに断りを入れ、歩き出す。療養中に仕事なんて、と不満の声を上げられましたが仕方ない。

「ふふ、お母さんったら。私はケガ人でも「兵士」なんだよ?」

「……そう、よね。ごめんなさい……」

アウラちゃんが初めての犬吠をしてから間もないので、カルラママ的には娘を失う

恐怖があるんでしょうね。今まで大きなケガもせず帰還できていたこと自体、奇跡と
言ってよかったです。

「あの子もきつと、調査兵団に…」

「あれ、エレンくんの夢って変わってないの？」

「そうなの。危険だから、って言ってるんだけど……」

私の訓練兵団入りを最後まで反対していたのが、カルラママだったしな。というか家
を出る前日まで説得された。彼女は——カルラは、多分私が出会って来た誰よりも、命
を尊んでいる。

血のつながらない私をも大切に扱ってくれる。私とは正反対の人。

「お母さん、エレンくんは命を大切にすのあなたのお息子。向こう見ずな性格だけれど、命
の尊さを教えられているエレンくんなら、調査兵団に入ってもそう簡単に死なない」

「…アウラ」

「まあでも、お母さんの言葉にもう少し耳を傾けてって、次に会ったら言っておくね。
じゃあ私行ってくる。数日は帰らないと思うから」

「…うん、気をつけて行ってらっしゃい」

松葉杖を突く音が響く。

足は予定より早く治っているから、次回の壁外調査は念のためを取って休んでも、次々回には参加できるだろう。

かけておいたコートを身にまとい、フードをかぶって、私は外へ歩き出した。

…と思ったら、自室から出てきたお父さまに声をかけられる。外出用のカバンを持っているから、食事を食べてから診療にでも向かうのだろうか。

「行つてらっしゃい」と言われたので、私も微笑んで返す。

「行つてきます、パパ」

お父さまは柔らかに、笑っていた。

???????

ああ、馬が欲しいんじゃない。それが、立体機動装置でも可。

門から続く大通りまで、我が家からはかなりかかる。というか段差が松葉杖だとキツい。

普段移動手段はお馬様に頼りきりですから、自分で歩くと遅く感じる。寮の隣の馬小屋にいる主人を見たらいななき勢いよく蹴り飛ばしてくる、我が愛馬ちやんに会いたいですね。白馬なのに鬣が若干金色だから「ゴルピ」。雌馬ちやんが大好きな馬です♂

ヒョコヒョコ歩きようやく大通りに出ましたが、仲間たちはすでに前方へ行つてしまつたらしい。人だかりはまだ多く残つており、今回のメンバーの被害について語つていた。

百名以上で調査に出て、二十人も生きて帰つてこなかった。そして手柄はなし。完全なる無駄死にだ——と、騒いでいる。聞き慣れた言葉だ、特に思うこともない。ただ民衆が仲間が通りヤジを飛ばしたタイミングで、到着できなかつたのが悔やまれる。

「そういや以前の壁外調査でいた、美人な兵士がいなかつたが……」

「あ？ ああ……確か前に足を負傷してたはずだ。荷車で運ばれていたの、俺見たぜ」

私がいる前方でかような会話をする、二人の男。わかります、120パーセント私のことですね。

私が普段出歩く際フードをかぶっているのも、自分があまりにもかわいいから。冗談

抜きに調査兵団に入る前、何度か攫われかけたことがあるので本当です。両親には言っていないですが。そのような場面に出会った際、相手の急所を潰すなど返り討ちにしてきたため、自分の身体能力をある程度理解していたのです。

そして先に行った仲間たちを追うべく、人だかりの後ろを縫いながら早めに歩き続ける。

途中大通りの真ん中で座り込む女性を発見し、眺めた。彼女の腕に抱かれているのは布。それに包まれている物体は——手、ですね。

なるほど、仲間の死体ですか。女性に遺体を渡したのは恐らくキース団長。

全身の遺体ならまだしも片腕だけを渡すあたり、センスを感じます。これだから団長への憧憬をやめられません。自分も傷つきながら、優しさで現実を隠さず、ありのままを見せる。

美しい。虚構で作られたハリボテの美德とは、比べ物にならないほど。

そうやってこれからも傷つけ、傷ついでください団長。その側で私は死なぬよう巨人を倒しながら、これからも調査兵団のみなを見守っていきます。功績もなくただの税金泥棒の状況が続いている現状、最近では調査兵団の存続自体危ぶまれています。

「そのかわい子ちゃん、うちの子にならねえか？」

ゲス野郎になつていれば、不意に後ろから声をかけられる。

振り返るといたのはハンネスおじさん。頬が赤いので飲んでますねクオレハ…。

まあ、いつものことだ。アウラちゃんはクールに去ります。

「お前さん、オヤジさんのところで療養中じゃなかったのか？」

「仲間が帰ってきたから、状況を聞こうと思つてきたの。もう行つちやつたみたいだけ
ど」

「ハア、真面目だねえ…ケガしてる時くらい休んでろつての」

「お仕事中にお酒を飲んでいるおじさんが言う言葉としては、この上ない皮肉だね。自
分に向けての」

「…けつこう毒舌になつたな、アウラちゃん」

先に行こうとしたら、ハンネスおじさんと一緒に飲んでいたのであろう駐屯兵団の数名
が合流する。おじさんとよくいる見知った顔だ。酔っぱらいながら、茶々を入れてくる
おっさんどものセクハラを流す。

お触りしたいなら娼婦のそこに行け。美少女アウラちゃんを堪能しているのは、ジークお兄さまだけです。

「ツレねえな。数年見なかったと思つたら、こんなべつぴんになつちまつたんだぜ？ 時の流れつてのは怖エよ」

「はい、俺！ 独身です!!」

「おじさんたち、相変わらずね」

彼らと会うのも数年ぶりか。ハンネスおじさんは何度か会う機会があつたけれど。

私は酒瓶片手に大声で笑う男たちにニツコリ微笑む。今日のお勤めは門兵だろうに、門から離れてほつつき歩いて、いったい全体何をしているのでしょうか。

「わたしの仲間が命をかけて壁外調査に臨んでいた反面、あなたたちは酒盛りですか？」
「違つて、ハンネスがイエーガー^者のせがれに言つていた曰く、飲み物の中にたまたま、酒が混じつてだけなんだ」

「ガハハ！ ハンネスも言つてやれ、俺たちもお仕事頑張つてゐるつてな」

相当酔つていとおっさんどもの口は軽い。とうかエレンくんとミカサちゃん、ハンネスおじさんと会つていたのか。この酔っぱらいどもに絡まれたら、そりゃあ帰りが遅くなりそうだ。ついでに調査兵団が帰還していた様子を、人混みに混じつて見ていた可能性も高いな。

「おい、お前ら、もう少し言葉つてもんを——」

おじさんが仲間たちに咎めるように話す。だが違和感を感じ彼が視線を移せば、左に収納された柄が消えているではないか。

その柄を持っているのは彼の横にいた私。ブレードの刃先が、鈍く輝いた。

「最近わたし巨人を切れていなくて、腕がなまつてる気がして怖いんです。だから練習台に……なつてくださいますか？」

そう言い頬笑めば、喉から息を漏らして酔っぱらいどもは酒瓶を落とす。

用のなくなった柄はおじさんに返す。貸してもらった相手は顔を引き攣らせていた。ついで「カミさんみてえに怖エ」と漏らす。

おっさんどもを残し再び歩き出すと、後からハンネスおじさんが追いかけてきた。

仲間の先ほどのことを謝ってくる。酔つてるとはいえ仲間が犠牲になっていたのに、不謹慎な発言だった——と。

アウラちゃん的には全く気にしていない。少し暗い顔をして、「大丈夫です」と返した。

「そう言えばアウラちゃん、お前さんに話してきたことがあってな」

と、その前にその足じゃ追いつけないと、駐屯兵団の馬を一頭貸してくれるとの話になった。ついでに、飯を食ってから行けとも。もう食事時もいい頃だ。もちろん奢りはおじさんである。

馬の誘惑に即オチしてしまった私は、とんだチョロインです。

「で、話ってなんですか？」

おじさんが話したのは、エレンについて。

また調査兵団に入りたい云々と言っていたのを聞いたらしい。

「ソレお母さんにも言われました、今日」

「アイツももう10歳だろ？あと二年後には訓練兵団に志願できる歳になる。エレンまで調査兵団に入ったら、カルラが滅入っちゃまいそうでな」

「みんなエレンくんが好きだなあ……」

「あの天使だった頃のお前さんと比べたら、生意気ボウズで可愛げなんてねえさ」

いつの間にか腹黒くなっちゃったと、おじさん。

コレは調査兵団に入るために駐屯兵団に入りたいと嘘を言ったことを、まだ根に持っていますね。

「でも結局、エレンくんの将来だからね」

自由に、伸び伸びと暮らしている弟。

対し家に閉じ込められていた私より悲惨で、その姿が愛しくて、私が追い求めてやまないお兄さま——。

かわいそうで、かわいくて、大好きな方。

「何だ急にブーツとして……ホオ、もしかして男でもできたのか?」

「違います、愛している人はいますけど」

「……………えっ!!?」

素っ頓狂な声を上げたおじさんを置き、食事を終えて立ち上がる。

驚愕に染まったままのおじさんはしばらくして、現実世界に帰ってきた。「娘に男が……」と言いますが、私はあなたの子供じゃない。

その後店を出て、駐屯兵団の馬がある場所まで連れてきてもらい拝借した。片足が固定されていて不自由ではありますが、騎乗時体勢を保つ分には問題ないです。乗るときは流石に、おじさんに持ち上げてもらいました。

「もつと食えよ、アウラちゃん」

最後におじさんにもものすごく心配され、私は調査兵団の後を追い始めようと——

|。

「!？」

大きな、音がした。一瞬雷が落ちたような光が起こった瞬間、地面が大きく揺れたのである。私だけでなくおじさんや、周囲の駐屯兵、一般の人間たちもざわめいている。乗っていた馬が突然の衝撃に驚き暴れ、どうどう、と落ち着かせた。

背後を見れば、かなり後方の壁から大きな煙が出ている。ついで「ドオオン」と、何かを破壊するような音。

地上に舞い上がるは壁の残骸らしき物体。小さく見えるだけで、恐らく大きいもので民家以上のサイズがある。

というか、何だアレ。巨人？が、壁から顔を出して……50mだぞ？それよりも大きい巨人なんて普通考えられな——。

「きよ、巨人だ!!」

「何が起こったの!!?」

「壁だ、壁が壊されたんだ!!」

段々と起こった状況に気がつき、ウォールマリアと、その周りにある突出した部分のシガンシナ区を繋ぐ門へと向かって走り出す人々。

アレは違う。でも、ああ、そうなのね。

「アウラちゃん、お前さん家壁からさほど遠くない場所にあるだろ!? 急いで行かねえ

……と」

「……………」

「…お前さんどうして、泣いてんだ?」

来た、来た、きた、きたきたきたきた、きたきた、きた。

ダメ、抑えきれない。

「私」が生きる理由。

「私」がこの世界に生きていい理由。

「私」が存在するために、なくてはならない理由。

一人の悲鳴が伝播し、どんどん絶叫のハーモニーが奏でられていく。だがその音さえ全く頭の中に入っていない。全ての色が白と黒の二色でできた世界。そこで視界の隅を我先に、と逃げ惑う人間たちが映る。

馬が押し寄せる人の波に怯み、ぶつからぬ隅へと移動する。しかし、行かなくては。手綱を引いて前へ進ませようと、して。

「アウラ!!!」

ハンネスに馬から引きずり下ろされ、壁の方へ行こうとする私を止める。

顔を彼へ向ければ息を呑む音。私の邪魔をするな。

「お前さんはケガ人だ、避難しろ。ここは駐屯兵団の俺たちが住民を避難させて、速やかに巨人の迎撃を——」

「なら、どうぞやってください。私は行きます」

「ッ、カルラたちの元へは俺が行く、だからッ!」

「それは違うでしょう、ハンネスさん」

住民の避難が先なら、今背を押すようにして混乱する周囲の人間から先に誘導しなくては。それをわざわざここから離れたイエーガー家へ向かうのは、矛盾している。

彼にはグリシャ・イエーガーが、彼の妻を流行病から救った恩義がある。だからこそ私情で動くこうとしている。キース団長とは性格の反対な彼。

「果敢で頼もしいですよ。しかしあなたのお仲間も、一部恐怖に負けて逃げているじゃないですか」

尻尾を巻いて住民たちに混じり、駆け出していく兵士。仕事はどうした。敵前逃亡か？笑わせる。

包帯を引きちぎって、足のギプスを捨て去る。まだ少し痛むが動ける。ハンネスの静止を無視し、逃げて行く駐屯兵団の一人を追いかけ、足をはらい転ばせた。

鼻水と涙で汚れたツラをさらし悲鳴をあげる様は、同じ兵士とはとても思えない。

「何をする！貴さッ」

「黙れ」

相手が身につけていたブレードを抜き取り、その男の首に突きつけた。私は今、とても幸せ。この人間の悲鳴など、名も知らない人間たちなどどうでもいい。

どうでもよくなってしまうくらい、私はどうにかなってしまっている。

「任務をまっとうせず逃げるならば死罪。だが私はあなたと所属が違うので、どうでも

いい。ただ逃げるならお荷物になる立体機動装置を、よこして」
「……！貴様、調査兵団の者——」

「黙れと、言いましたか」

少し手に力を込めれば、微かに切れた男の首から鮮血が溢れる。側から見れば異様な光景は、周囲の混乱に紛れ目立つことはない。口を開きこちらを凝視している、知り合いの男以外には。

「……わか、わかった、わかったから……!!」

男から装置を剥ぎ取って、手早く身につける。自分のものと感覚が違うが使えないことはない。アンカーを壁にかけそのまま家の屋根に飛び乗った。

「アウラッ!!」

ハンネスが、こちらに来ようとする。

それに真つ直ぐに、射抜くように見つめた。

「私は調査兵団第四班所属、アウラ・イエーガー。駐屯兵団のあなたよりも、巨人の脅威を理解している。そして私は今療養中の身分。だから思いきり、自分の私情を挟める」
「だがお前さんだけでなくカルラやエレンたちに死なれたら、俺はイエーガー先生に会わせる顔がねえんだ!!」

「なら、言葉を変えましょう」

——私を、信じなさい。

おじさんは言葉を飲み込むようにし、静かに頷いた。
私は視線を前に向け、勢いよく駆け出した。

大型の巨人の姿は既に消えている。アレが知性巨人なのは確定だ。グリシャ・イエーガーと同じ巨人の体内にいる人間が、その巨人を操作する。

消えたということはつまり、その人間はまだ近辺にいる。また調査兵団で連携して行動することが多い身としても、あの大型巨人を操った人間が一人で、壁に来たということとはまずあり得ない。その中にきつと、いる。お兄さま、お兄さまが。

走れ、もつと速く。飛ばせ、ガスを。

カルラにミカサ、エレンくんもまだきつと家にいる。お父さまは私が出かける頃カバンを持っていた。診療ですでに別の場所へ向かっているだろう。場所はわからないが、

有事でも彼には巨人の力があるのでまず心配は無用。

どちらから向かう？ お兄さまから？ しかし混乱の中、目的の人間を発見するのは無理に等しい。

なら、エレンくんの方から行くべきか。その中で途中他の巨人体と違うものを見かけた際は、そちらを優先して追う。

一先ず三人の救出。そして安全を確保してからお兄さまを探す。避難経路を作りながら近づくと巨人を倒せるか？

いや、やるしかない。戦え、戦うんだ。そう、アウラ・イエーガーは「兵士」だ。戦士たるお兄さまの、ジーク・イエーガーの敵。

その上でお兄さまと出会ったその時は、巨人ならば殺してもらおう。人間だった時は、抱きつこう。いっぱいいっぱい、ギョツとしよう。

どれでもいい。もう、幸せだから。今日が私の最期でいい。「私」を終わりにする日。

「いい、天気」

青い空。それが私を、嘲笑っている。いつもそうだ。

届くことのないその空を一瞬見上げて、私は前へ向かって走り続けた。

「掴もうぜ！」 「何を？」 「わからツない！」

私、アウラ・イエーガー。

私は今、とても生きています。この世界の誰よりも生きて、幸福を感じています。

屋根をどンドン伝って行き、すぐに我が家の近くへたどり着く。上から覗き込むように下を見れば、なんてことはない。そこにはエレンくんとミカサ、カルラがいる。ただし家は壁の瓦礫により潰れ、その下敷きに母親がなっている。

弟も義妹も必死に母を救おうと、彼女の上に乗った柱を退けようとしている。

エレンくんつてば、あんなに必死な顔しちゃつて、かわいい。

家族以外の他人には表情を変えないミカサちゃんも、目を見開いて、口をつぐみ懸命に柱を動かそうとしちゃつて、かわいい。

母も痛みにもうめきながら、二人に何度も逃げるよう言っている。足が瓦礫によつて潰れてしまっているようだ。これでは助けたところで歩けない。縦え子供二人が大人の女性を支えて逃げたとしても、巨人は甘くない。すぐに追いつかれ、捕食され、家族三

人ドロドロ口になつてしまふ。

三人ドロドロ口。ふふ、三人ドロドロ口。

おかしいな。私は先まで、三人を助けるつもりでここに来たというのに。

でも仕方ない。まさかこんな素敵な状況になつてゐるなんて、思いもしなかつたのだから。ハンネスを寄越さなくてよかつた。私の代わりに彼がここにいたら、すぐにカララを助け彼女を背負い、子供二人を走らせながら門へ向かつてしまつただろう。

不意に周囲から大きな足音が近づく。視線を向ければ、自身がいる後方に7m級が一体。さらにその後ろに10m級。距離はまだある。が、二体はこちらに向かつて近づいてゐる。

これもまた、神の思し召し——いや、ユミルたそが私にくれたご褒美なのだろうか。

まあ、私がすべきことはたった一つ。今、この時を、最大限に味わうこと。

「エレンくん!!ミカサちゃん!!」

あたかも今到着したばかりのように、二人の元へ駆け寄る。すでに少し息が切れているが、これは先程急ピッチで走り続けた影響。

二人は後方の頭上から現れた私に目を見開き、痛みに瞳を閉じていたカルラも目を開ける。

「アウラ、あんた骨折は…」

「わたしよりお母さんの方が先よ」

「姉さん!!母さんが、母さんがツ……!!」

「お婆さんが巨人が壊した瓦礫に巻き込まれてしまったの!!」

「落ち着いて、三人で持ち上げるよ」

私も加わり瓦礫を動かすが、コイツは中々重い。冗談抜きに肩が軋む。三人の中で一番上背があり、ちょうど瓦礫の中央を担当しているため、重さが直球で襲ってくる。もう一人いないと無理だ。

その間に頭上で確認していた巨人の二体が、悠然と近づいてきた。弟と義妹は大きくなっていく足音と震える地面に、ようやく巨人が近接近していることに気づく。

「アウラ、エレンとミカサを連れて逃げて!!」

「イヤだ母さん!!母さんも一緒に逃げるんだ!!」

イヤイヤ期なエレンくんかな?母は話の通じぬ息子からミカサに変え、逃げるよう叫

ぶ。しかし一年近い同居を経て、イエーガー家の「家族」の一員となった少女もまた、首を振る。おばさんと共に、逃げるのだと。

(すごく、イイ……♡)

——まるでそれは、宗教画のような光景。

必死に子供たちに逃げるよう叫ぶ母親と、そんな母を救おうと懸命な息子。そして血のつながらない子供でありながら、必死に義理の母を助けようとする少女。そこに襲ってくるのは絶対的な「死」。

どれをとつても美しい。人間の感情をぶつけ合った、ありのままの姿。心が震える。脳も震え、瞼の裏の眼球まで震えて裏返ってしまいそう。

顔も身体も溶けてしまいそうになるのを堪え、私は瓦礫から一步身を引く。

驚いた表情のエレンくんと、ミカサ。対しカルラは涙を流しながら、安心したように笑った。

「二人を頼んだわ、アウラ……」

母の言葉に少年少女は次の展開を察したのか、私を見つめる。

弟は、鋭い視線を。義妹は、困惑と懇願を混ぜた視線を。

母さんを見捨てるのか、と気が動転しているエレンくんは叫ぶ。そうだね、見捨てる。私は彼女の命を見捨てる。

しかしそれは、まだだ。

表情を消し、意識を集中させる。普段の私と雰囲気が一転し、三人は息を飲んで見つめた。

ブレードを抜き、こちらに接近する目標二体に向かい、アンカーを屋根へかけた。単独討伐はしたことがないが、私のスペック的には可能。今まで行ったことがないのは、以前エルヴィン分隊長に抱いた「有能すぎると死人が減る」という理由があるからだ。

私がクソ真面目に本気で巨人を殺していたら、周囲の被害が減ってしまう。そうなれば壁外調査を頑張った私のご褒美——仲間の悲劇が、見れなくなってしまうではないか。

だからこそ、そこそこで活躍してきた。

しかし実際に単独討伐経験がないので、どうなるかはわからない。しかし私が積み上

げた「家族」の最大にして、最高のイベントが今。

やる以外に選択はない。壊すんだ、とても手が震える。恐怖ではない感情で。

そもそも私はジークお兄さま関連以外のことで、恐怖に思うことなんてないのだけ
ど。

「姉さん!!」

エレンくんが叫ぶと同時に、急接近していた7m級の背後へ高速で回る。我が身が他の兵と比べ極端に体重が軽いからこそ、なせる速さ。これにガスの噴射を強くすれば、通常の巨人はまず追いつけなくなる。

ただし筋肉量が極端に劣る分、立体機動を使った際身体にかかる負荷は大きい。また一度巨人の打撃を受ければ、簡単にその身は壊れる。

7m級の首元へアンカーを発射。そのままうなじを削ぎ落とした。その際一瞬見えた弟の顔は、衝撃と———歓喜で染まっている。

そう、お姉ちゃん強いよ、エレンくん。ミカサもカルラも、口を開いて固まっていた。

だが三人の表情が一斉に強ばる。ええ、7 m級を倒したばかりの宙に浮く私の後方にはもう一体、10 m級が。

絶望に染まった家族の表情がとてもキレイ。けれどアウラちゃんはまだ死ぬわけにはいかないので、アンカーを前方斜め右の壁にかけ、先と同様ガスを高速で噴射しながら移動。

ついで壁に足がつく間もなく10 m級の右肩へアンカーを固定。

巨人の瞳が私に追いつく前に、遠心力で下から上へ上がった身体は、見晴らしのいいデカイ頭の上へと降り立つ。頭の違和感に巨人が腕を伸ばす前に、うなじを削ぎ落とす。

10 mの景色はいい。建物の頭上で暴れ回っている私に気づき、近辺の巨人が歩いてくる。有名人の美少女ちゃんに会いに来たフアンのような。

フアンサとして、うなじ斬り回しているのでよろしくな！

このまま引き寄せて、最終的にガスが切れる私はカルラの言うとおりにせざるを得なくなる。最初から逃げてしまっは、アウラちゃんの好感度が激落ちくんしてしまうのでね。

その上でエレンくんたちにカッコいい姉を見せつつ、どうしようもない現実を突きつ

ける。

弱い者が淘汰される現実。弱肉強食。力のない人間は所詮巨人のエサであるという、わかりきった構図。

まあどうあがいても、本気で瓦礫は持ち上がらないからしょうがない。

そして、エレンさんとミカサを連れて逃げる。もちろんその時点で倒し損ねた巨人か、接近している巨人がいるので、三人が逃げている最中カルラがちょうどよく食われるだろう。

その様を見やすいように、弟と義妹は両脇に抱えて、顔が後ろに向くようにする。

二人の顔が走っている私に見えないのが残念だが、声だけでも満足。その後門に着いたら、死にそうな二人の顔を見てあげよう。

——えっ、弟と義妹は殺さないのかって？

流星にエレンくんは殺さない。ミカサも抱えられる以上殺す必要はない。というか彼女に関しては例外的に思う部分もある。

そも弟はまだ自分の感情に気づいていないようだが、ミカサに特別な感情を持つている。私や家族に向ける笑顔とは、少し違う笑顔。ミカサに対してだけ向くそれに、お姉

ちゃんレーダーは敏感に反応したのだ。

お父さまだって散々傷つけてきたが、殺そうと思ったことは一度だってない。「殺したい」とは思ったことがあるが、それは文が少し足りない。

自分の中では「殺したい（ほど大好き）」——または、「殺したい（ほど愛している）」という意味合い。

ただ私は、大好きな人が苦しむ様を、見ただけなのだ。死んで欲しくはない。お父さまについては巨人継承者の寿命が間近なので、仕方ない部分もあるが。しかしお兄さまだけは絶対に死なないように、早く手を探さなければならぬ。

真つ黒な考えを頭に流しながら倒れていく10m級の首元から、私は飛び降りる。そして壁にアンカーをかけ、一旦地面へ向かう。

私に視線を奪われていたエレンくんとミカサは正気を取り戻し、また瓦礫を持ち上げようとし——、

「えっ」

ドオン!と音がした方向を見れば、こちらに向かい跳んでくる一体の巨人。予測のわからぬ奇行種である。また10m級か。先までいかなかった個体がどうして突如現れた?
?

音がした位置を見れば、崩壊していく建物が。巨人のサイズの裏に隠れていれば死角になる大ききがある。ああ、その裏にいたのならわからない。私が周囲を確認した後、向こうもまたこちらに気づいたというわけだ。まずいな、とてもまずい。

「アウラア!!!」

私の異常事態を察したカルラが叫ぶ。子供たち二人がちょうど視線を向けた時、私と奇行種の距離はすぐ近く。

「……………ッ!!」

アンカーを左の建物にかけ、ガスを急速に出しながら奇行種とストレスで身体が横へと引つ張られる。

咄嗟の判断で我が身は思いきり建物に打ちつけられ、そのまま地面へと落ちた。壁と衝突した際「グシャ」とか、嫌な音を聞いた気がする。

ぶつけてしまった頭がガンガンと痛み、左がなんだか生ぬるい。…生ぬるい? 触れば、血だ。真っ赤だ。素敵な色。

視界がグルグルと回っている中、目の前に誰かが降り立つ。金髪。お兄さま？——いや、違う、ハンネスおじさんだ。

来たのか、私がせっかく止めたのに。本当にこの人は義理堅い。生きづらそう。

「嫌な予感がすると思つてきてみれば……!!」

「えへへ」

「笑つてんじゃねえよバカ野郎!!」

肩を掴まれて立たされる。いけないな、奇行種が今度はエレンくんたちを捕食対象に変えている。

私が注意を引くから三人をどうにかするよう頼み、ハンネスの声を遮り走り出して、奇行種の足元にアンカーを付ける。こちらを向いた瞬間、アンカーをかけた足とは逆の建物へ移動し、屋根に上がって駆け出す。

走りながら喉から迫り上がった何かを嘔き出したら、血だ。これは内臓をやられてるな。肋が折れてどこかに刺さった。本当アウラちゃんったらドジっ子なんだから。

そのまま飛ばしにかけている中、突然落とし穴に落ちる要領で、建物と建物の間へ落下。勢いを殺せずそのまま前へ、四足歩行で進んでいった奇行種の後ろがこれで見える。身体の痛みを無視し、そのまま再度上へあがり、奇行種の背後を取った私はうなじを削

ぎ落とした。

「ハ、……ア、ハア」

チカチカする視界に、足がふらつく。しかしエレンくんの方を見なければと視線を向けたら、カルラしかない。あれ、しかも巨人の手の中だ。身体を潰されて、そのまま口の中へと吸い込まれていく。

エレンくんは——と思ったら、カルラを捕食せんとする巨人の前方。そこにハンネスに抱えられていた。逆サイドにはミカサ。私のポジションをおじさんに取られてしまった。しかも完璧な持ち方をしている。子供たちから見たら、後ろが丸見えだ。人生で初めてハンネスを尊敬した気がする。

残念ではあるが、でも今の立場の方が美味しい。

よく見える、絶望に染まりきった弟と義妹の表情。かわいいなあ、かわいいなかわいいな、かわいいなあ。

食べちゃいたいくらいかわいい。でも実際食べられそうになっているのは母親。そんなカルラは今、身体をへし折られて震えながら、口の中へ収まって。

飛び出た両足がポトポトと、地面に落ちていった。既に身体を潰されていたのか、巨

人の口の中から悲鳴も聞こえない。聞こえるのは肉と骨が砕かれ、あるいは潰される音。

「ああ……ああ」

エレンくんは母に手を伸ばして、そのまま泣き叫びもせず、ただ呆然としていた。ミカサは母の最期を見ることができず、顔を逸らしている。

仕方ないな、お姉ちゃんが仇を取ってやる。もう大分ボロボロだが大丈夫。お兄さまに会えるまではアウラちゃんは死なない。カルラを食った巨人を殺したら、お兄さまを探しに行かなきゃ。

お兄さまどこだろう、お兄さま。

我が家に戻り、一気に背後の死角から巨人を討伐。

お兄さまの場所へ。お兄さま、お兄さま。

「あ……姉さま」

遠ざかっていくエレンくん。距離的に何を言っているかはわからないけど、私と目が合った。今生の別れとなるので、最高の美少女スマイルやるから、見とけよ見とけよ。

「ねえさ、どこに…行くんだよ」

「ありがとうエレンくん。最後に弟の最高の曇り顔を見られて、お姉ちゃんは嬉しいゾ。」

「なんでっ…泣いてんだよ…なんで…!!」

ああ、お兄さまに会える。お兄さまに会わなくちゃ。お兄さまどこ。

「姉さん!!!」

エレンくんを背にして、私は壁の方へと向かった。

壁が壊れてから少し経ってしまっただけで、まだ壁を壊した戦士が近くにいて可能性は高い。お父さまが壁内へ来るために長時間巨人化していた後、私が目覚めた時彼はひどく疲弊していた。

つまりは巨人化に相当なエネルギーを消耗するのだろう。先ほどの50mを超える巨人を考えても、アレは恐らく巨人化して動かすだけで相当な体力を持つていられる。物体の大きさが大きくなるにつれて比例するように、必要とされるエネルギーも増える。

マーレで見た乗り物と同じ原理だ。巨大な飛行船や列車の方が、自動車よりも有機資源を使う。

また壁からであればシガンシナ区を一望できる。そこから見渡し、通常種や奇行種と異なる巨人を見つける。

「あれ」

青いはずの空が真っ赤。おかしいな、私の届かない空。蒼い色。

飛びそうになる意識を感じる身体の痛みで無理やり繋ぎ止めながら、私は走った。

お兄さま、おにいさま。

ピッカピカの壁内一年生

シガンシナ区の壁が破壊されたその日。壁内の人類は、思い出した。自分たちが鳥籠の中の、エモノでしかなかったということ。

超大型巨人によつて破壊された壁から、無数の巨人が壁内へ侵入。シガンシナ区の間は、一気に恐慌状態へと陥った。

その悲劇を作り出した大型巨人である一人の少年と、一人の少女は、聞こえる悲鳴に顔を青白くさせる。二人の現在位置はシガンシナ区が一望できる壁の上。つまり、50mの壁の上である。

立体機動装置も付けていない少年少女が、普通いるはずのない場所であった。

「アニ、大丈夫かい？ 歩ける？」

「……ムリそう。おぶりな、ベルトルト」

「え、あ、うん……わ、わかった……！」

「ベルトルト」と呼ばれた褐色肌の少年は、頬を少し赤らめながら、「アニ」という金髪に青い瞳が特徴的な少女を背負う。この際背中荷物は、前方へ移動させた。

少女は一步進むだけでもフラフラとし、足元がおぼつかない。対し少年もまた、ひどく息が上がっていた。

巨人化の影響だ。短時間とはいえ、少年は一度で体力をこっそり持つて行かれる大型巨人となった。

対しアニはこの壁内がある場所に来るため、ずっと巨人化し走り続けていた。

二人にはもう一人、「ライナー」という仲間がいるが、その少年は巨人化し二人を壁の上へ避難させた後、内門を破壊するためそのまま内部へ侵入した。

打ち合わせとしては、ベルトルトとアニはシガンシナ区の壁を右に沿って進み、ウオールマリア内の南東の方角へ進む。その後用意しておいたロープを使って下へと降り、ライナーと合流する予定だ。

時折聞こえる巨人が建物を破壊する音や人間たちの悲鳴に、二人は沈黙したまま俯く。

彼らは、マーレの戦士だ。幼くして各々が自分の目的のため、祖国に身を捧げた。

彼らに託された使命とは、「始祖の巨人」の奪還。

壁を破壊したのも混乱に乗じて、壁内に侵入する意図がある。またもう一つに、壁の王がこの一件を受け、どのような行動に出るのか窺う意図がある。

それで始祖が現れるならよし。だが事前に政府のお上から聞いていた「不戦の契り」の存在がある以上、壁の王が戦う可能性は低い。しかし絶対とは言えず、仮に始祖がその力の真価を見せてしまえば、戦士たる彼らの故郷だけではない、数多くの国々が滅ぼされてしまう可能性がある。

ゆえに行動は慎重に取らなければならない。まだ幼い彼らにとって、重すぎる使命だった。

人をアリののように殺す、斯様な使命など。

「アニ、僕たちならきつと……使命を成し遂げられるよね？」

「……そんなの、わからないだろ。どこぞのドベのせいで、マルセルを——」アギト「顎」の巨人を失っちまった」

「……………」

「でも、ここまで来ちゃったんだ。そう簡単に後戻りはできないだろ」

「……………うん、そうだね」

ベルトルトの首に回すようにした少女の小さな手が、強く握りしめられる。

少年もまたかすかに震えており、唇を強く噛みしめた。

「!!」

その時、二人の後方から、何かワイヤーのようなものが高速で巻き取られる音がした。咄嗟にベルトルトは音の方に視線を向け、迫りくる存在を確かめようと目を凝らす。三人の中でも格闘術に秀でたアニは、今動くことができない。巨人化も同様。

ならば今彼女を守るのは、ベルトルトしかない。その感情が無意識に出たのか、少年の手はアニの頭へと伸び、フードを深くかぶせる。

最悪巨人化をしなければいけなくなってしまうが、そうなると動けぬ少女が大型巨人の爆風に巻き込まれ、地面へ落とされてしまう。また二度の巨人化を行えば、ベルトルトも確実に動けなくなってしまう。

ゆえに巨人化しない方向で、接近する物体を対処するのが望ましい。

「来るよ、アニ」

「……ああ」

二人の数メートル前方。深緑のマントをまとった人間の身体が宙へと舞い、壁の上に降り立つ。何か機械のようなものを腰に付けており、そこから発射したワイヤーのようなものを使って、ここまで降り立つたらしかった。

マーレやその他諸国のどの武器とも、合致しない特殊な形状のソレ。恐らく壁内で特殊に発達した産物の機械か。

マントに体型が隠され遠目からはわかりにくいのが、性別は女。衣服は返り血なのか、はたまた自身の血なのか。所々赤く染まっている。

いや、女が着地した際身体がフラついていたことから、血は女のものであろう。

「どうする、アニ」

ベルトルトが後ろの少女に声をかけた時、アニは目を見開き少年に前を見るよう促した。

「え？」と少年が頓狂な声をあげたと同時に聞こえた、ガツと、何かがぶつかると、また刺さるような音。

ついで先程聞こえた、ワイヤーが巻き取られるような音が。

「ツッ」

数百メートル前方にいた女は一瞬の内に、二人の前方まで迫っていた。ベルトルトは右手を口元に近づけようとして、止まる。

そうだ、アニがいるのだ。一旦冷静にならなくては。これ以上戦士を失ったら——
—否、アニを失ってしまったら。

途中でアンカーを外した女は、地に足をつけ、滑るようにブレーキをかけながらベルトルトの数メートル手前で止まる。その風圧で少年と少女の髪や服が、フワリと揺れた。

二人の前に来たのは、血まみれの女。特に左側を相当な衝撃でぶつけたのか、頭や上半身の血が服や髪を汚している。だが血で汚れながらも見てとれる美しい顔立ちに、少年は息を呑む。深冷の美人なアニとは違う、愛らしさを残す美しさ。

白銅色の瞳はしかし、焦点が微妙に合っていない。合わせようしても、うまくいかない——といった風に。

息も肺から漏れ出るようなヒューヒューと、ひどく荒いもの。誰が見ても、意識を失うほどの重傷を負っているのがわかる。

女が一步踏み出し、少女を背負ったベルトルトも一步下がる。やはり巨人化しなければならぬか。

装置には柄と付け替えの刃らしきものもある。恐らくは二人のような「戦士」と似た類い。壁内を守る存在。

「君たち、大丈夫？」

だが二人にはかけられた言葉は、ひどく優しいものだった。微笑みながら女は近寄っ

てくる。悪魔の民であるにも関わらず、まるで天使、それか天女のように。

ベルトルトだけでなく同性のアニでさえ、目を奪われてしまう。

「ああ、そつか。駐屯兵団の人間がここまで避難させたのね」

そう呟きながら二人に接近した女は、安心させるように二人の頭を撫でた。

だがフードに隠れたアニの顔——いや、瞳だろうか?——を見た瞬間、白銅色の瞳が丸くなる。笑みが消えた女に、ベルトルトは眉を寄せた。

「おにい、さまま?」

アニのフードを取る女の手。彼女の瞳が次に少女の金髪を捉えた瞬間、口を開けて呆然と立ち尽くす。

女の目を間近で見ることになったアニは、相手の瞳孔が自身の目を捉えようとしながらウロウロと動いてしまう姿に、例えような不安を抱く。

今にでも意識を失いそうだというのに、とつくに失っているはずなのに、それでも女は立っている。

目を開けて、懸命にその「お兄さま」とやらを、アニから導き出そうとしているのだ。しかし少女はどう考えても、女より年下。身長も去ることながら。そもアニは女だ。

体術において同年代が勝てぬほど男勝りだが、外見は冷たさを感じるものの、内面は割と乙女。

どこに男と勘違いする要素があるのか、わからない。ただ女が頭から血を流しているので、頭を負傷した影響で正気を失った可能性がある。

「お兄さまお兄さまお兄さま……!!」

アニはどうか、冷静を保とうとする。見ず知らずの女に——抱きしめられながら。彼女は女が「お兄さま」と呟いた刹那、ベルトルトの背中から奪われたのだ。

「あ、アニから離れろ!!」

ベルトルトが女の腕を引っ張るが、ビクともしない。少女を「お兄さま」と勘違いしながら抱きしめ、涙を流す女の表情は綺麗であった。

しかし周囲の二人には先と打って変わって恐怖、あるいは異質な光景にしか映らない。

アニは深く息を吐き、女の肩を叩いた。

「私にあんたの兄じゃない。よく確認しなよ」

「……お兄さま……じゃ、ない……?」

「高い所苦手なんだ、なるべくなら早く降ろしてほしい」

「……アレ、おかしいな、本当だ……お兄さまじゃない」

一瞬女の頭がガクリと落ち、よろめく。だが落ちかけたところを踏ん張り、血が流れる頭を抑えながら下を向いた。

「……ごめんなさい、気が動転していたみたい。ボクの方は歩けるかしら？ 女の子の方は抱えるから、着いて来れそうならきて。壁が破られていないウォールマリアまで連れて行くから」

その言葉に、ベルトルトとアニは顔を見合わず。

この人間を本当に信用していいものだろうか。明らかに正常な判断ができなくなっている、この女を。

壁の上のいた二人については向こうが都合よく理由をつけたが、後から不審に思われる可能性も高い。だがまだ壁内についての情報が少なすぎる手前、「戦士」と近い存在であろうこの女から、何か情報を得られる可能性もある。普通ではない状態の女からであれば、尚更。

流石にいきなり始祖の巨人の情報を得られるわけではないだろう。ただ壁内の情勢を知る手助けになる。直接的に聞けば怪しまれるゆえ、言葉を選びながら情報を得る。その後殺せばいい。

幸いアニは女の背中にいる。懐に隠してあるナイフを使うなり、首に手を回し絞め殺すなりできる。体力を使い果たしているとはいえ、それくらいは可能。

またはアニの援護でベルトルトがトドメも刺せる。いくら大人の女とて、厳しい訓練を行ってきた戦士二人。敵うはずがない。

ベルトルトはフラつく女が落ちないように、片手を掴んで握った。ひどく、冷たい手だ。

「あの、お姉さんありがと。駐屯兵团……の人に助けてもらったはいいんだけど、その人は……」

「いいの、怖かったよね。大丈夫、大丈夫だから」

「……マントのマーク、カッコいいね」

アニがマントの羽のような刺繍を話題に出す。女は微笑みながら、「自由」のマークだからね、と語った。

また彼女が、「調査兵团」なる組織の人間であることも。本当は今日壁外調査に行く予定だったが、右足を以前ケガしたせいで、休みになったことについても。

確かに女が体勢を崩すのは、右側が多い。二人に近寄ってきた段階で右足を引き摺るようにしていたことから、負傷していること自体は気づいていた。

「二人はあまり見ない顔だけど、もしかしてマリア内からシガンシナ区に来てたの?」「うん、親の都合だね。まさかこんなことになるなんて……思ってたけど……」

ベルトルトが唇を結び暗い表情を浮かべ、アニもまた女の鎖骨付近に回していた手を強く掴む。おびえた子供、それを装う。

「両親は……いえ、聞くべきではなかったね。ごめんさい……」

「気にしなくていい。あんたはどうせ、他人だから」

「他人……そうね。でも、同じ人間なのだから、感情を共有することはできる。辛い時は辛いつて、言っているのよ。今はそんな余裕ないかもしれないけど」

それから三人（内一名はおぶり）は歩きながら、ウォールマリアとシガンシナ区の境目を目指す。

途中不意にベルトルトは、女が語っていた「お兄さま」の存在を思い出した。

アニを兄と勘違いした女。恐らく性別は違えど顔のパーツ——あるいは、髪の色や瞳などが似ているのだろう。

「お兄さま」の存在を聞かれた女は歩を止め、天上を見上げる。

青い空。うっすらと夕方の赤らんだ色を混じえて、美しく広がっている。

「お兄さま、どこかに。お兄さま、どこにいますでしょう」

「……お姉、さん？」

「お兄さま、お兄さま……お兄さま本当に、いらつしやるの？私、私、私——」

様子が一変した女に、鳥肌が立つようなゾワゾワとした悪寒を感じた二人。

ベルトルトは咄嗟にアニを女の背から引きずりおろし、自分の背に庇うように下からせる。

「とても、空がきれいね。とどかない、空。キレイでしょう、お兄さまの瞳の色だわ」

「……あんたは「お兄さま」が、大好きなんだね」

「ええ、会いたい。会いたくて、大好きで……もう一度だけでいいから、あいたいな……」

ゴポツと、音がする。女が口元を抑えた瞬間、噴き出たのは大量の血。

内臓もいくらかやられているらしく、そのまま彼女は膝を突いた。

無表情な顔からこぼれ落ちる水滴。作りもののような顔は、どの表情をとつても美しい。そしてどこか無機質——非人間的で、恐ろしい。

「あんた、その出血じゃ死ぬよ」

「……そう、かな？それは……イヤ、かも」

——お兄さまに、会えていないのに。

そう呟き、立ち上がった女は一步、踏み出す。目の前に広がるのは、巨人の災禍に見舞われた地獄のような光景。その様を見下ろした女は、冷や汗を流す少年と少女へ視線を移す。

揺れるは、風にさらわれ、たなびく色素の濃い髪。白銅色の瞳は、ゆらゆら揺れる。

「お兄さまはいる?」

「お兄さまはいる…?」

眉を顰めたアニ。女は再度、「お兄さま」がここにいるのか尋ねる。

質問の意味を理解することができない。死にかけの人間など、無視して行ってしまう方がいいのだ。この分では助かる見込みも薄い。そも145代フリッツ王によって記憶が改ざんされ、文化が遅れている壁内に、「輸血」という知識があるとも思えない。

しかし二人は、女から目を離すことができない。大切な人をただ求めて、命の灯火を消そうとしている人間。

その光景が、美しかった。残酷な状況を作り出した張本人たる彼らが、「美しい」と思うなど。許されるべきではないというのに。

「……会えるよ」

「ああ、会えるさ」

気付けばベルトルトとアニは、女に向かって眩いていた。

最期くらい、幸せな夢を見たっていいだろう。人々の不幸を作り上げてしまった彼らは、逃げるように思考が働く。両者の脳内に浮かぶ、「最低だ」という言葉。だがついで出るのは、言い訳。

ベルトルトは、悪魔の民だから、と。

アニは、父の元へ帰るためだ、と。

女は瞳を丸くし、嬉しそうに微笑んだ。まるで少女のような幼い表情。そのまま彼女は空中へと身を投げる。そして腰につけた装置を使い下へと降り立った。その姿はすぐに遠くなり、街の中へと消えていく。

だが消えても、二人は女から——否、壁から降りる直後瞳にこびりついた女の姿が、そして聞こえた言葉が、耳から離れない。

——ジークお兄さま、「私」はここにいます。

女が呟いたそのお兄さまの名は、戦士たる彼らを統括する「戦士長」と同じ名前。
いや、気のせいだろう。同じ名前の人間など、この世には数え切れないほどいる。
容姿とて、女とは似ていない。

ただアニと見間違えた点を踏まえ、金髪のと、青い瞳は似ている。
だがまさか、あり得るはずがない。ただの偶然だろう。

「…行こう、ベルトルト」

「……………うん」

ベルトルトとアニは女が見上げた空を眺める。

綺麗な吸い込まれるような青空と、夕日のコントラスト。

世界が「平和だ」と勘違いしてしまうほど、穏やかな空だった。

そして少年と少女と別れた女——アウラ・イエーガー。

ろくに思考が回らず、意識がなくなりかけた瞬間ガスが切れた。軽い身体は屋根へとぶつかり転がって、地面へと落下する。

指一本動かせず、アウラは仰向けの状態で空を見上げる。

だがそれを邪魔するように、数体の巨人が彼女の視界を遮る。四く五体はいるだろうか。各々口を開け、彼女へ近づく。

周囲には誰もいない。あつたとしてもそれは人間の死体のみ。

一体の巨人に腕を掴まれ、他の巨人に足を掴まれる。

ブチブチと、耳を背けたくなるような音。それでもアウラは悲鳴も漏らさず、ただ空へと手を伸ばす。その残された手さえ噛みちぎられ、次に腹を食いちぎられる。ポトポトと落ちたのは内臓。腸が巨人の指に絡まり、面白いように伸びた。

「…………お……さ、あ」

空を捉えていた瞳が顔ごと、巨人の口の中へと収まる。

あいして、おり——、

その言葉が、最後まで続けられることはなかった。

接種後の多大な後遺症により

これからするのは、あくまで仮定の話だ。

仮にもし、未来も過去も見ることができるとしてしよう。この際同時に過去に干渉できる能力も持つとする。その人間はある時点で未来で起こることを知り、自分や仲間、世界がどうなるかを知る。

これを「結末A」としよう。

「結末A」がその人間にとって、気に食わない未来であるなら、行動を変え「結末B」や「結末C」を作り出すことも可能だろう。

だが何度繰り返し返しても「結末A」以外にたどり着くことはない。その人間が未来や過去を覗き見る力を手にする以前から、力を手に入れた未来のその人間が、過去の自分を「結末A」にたどり着くよう操作しているからだ。

これは未来や過去を見る力を手に入れることも、操作された一つに入る。未来のその人間がこのような行動を起こすことには、理由がない。いや、理由がわからない——と表現した方が正しい。

抑止力のようなものが働いているのだろうか。「結末A」以外には至らせない何かがある。そんな存在がいるなら、それこそ「神」と言うべきか。

また疑問なのは、いつからこのループする世界ができたかについて。

その人間の未来の姿が、その人間の過去を操る。そしてその人間が成長し、未来の姿になった時、また過去の自分を操作する。

果てが見えない。ニワトリが先か、タマゴが先か——。

ただ言えることは一つ。その世界線は、「結末A」を結果としてたどる道以外は存在しないということ。

「結果A」以降は、無数に人間の選択肢や行動によって結末が枝分かれするだろうが、「結末A」の範囲内の始めから終わりまでは、一貫して同じルートをとる。

また「結果A」以前の世界も無数に分かれており、青いタヌキを連れてきて『結末Aの世界に連れて行ってってくれ!』とお願いするならば、『ぼくにまかせてよ!』などと言い、簡単に連れて行ってってくれるだろう。

しかし実際に「結末A」の世界を目指すのは難しいだろう。不可能と言ってもいいかもしれない。

木の幹からスタートして、その木の一本の枝の先を指して進むようなものだ。もちろんどれが「結末A」の世界であるかのヒントはない。ひたすらにスタートをやり直して行かねばなるまい。

そして「結末A」以降の木の先から落ちたタネがまた、全く同じ構造の一本の木となつて——と、果てしなく続く。

してここから、話を少し変える。

仮に「結末A」をたどり続ける世界に、唐突に異分子が現れたとしよう。その結果「結末A」にたどり着くのかわからなくなり、異分子が存在するがゆえの歪みも生じてしまった。本来の性質が変わってしまう、という歪み。

その人間はおろか、「神」でさえわかつていたはずの「結末A」がどうなるか不明となった。わかるのは、「結末A」にするためのやり方だけ。異分子が存在する以上、果たして神の望む「結末A」にたどり着くかどうか。

しかし望む結末にするためには、同じやり方をするしかない。神が操作し、そして神に操作されたその人間が、「結末A」を目指す。

ただしここに感情論を持つてくれば、さらに変化が起こる。その人間ではなく、神の

感情を揺さぶる異分子の存在。異分子を寵愛する神。これによって世界はより結末がわからなくなった。

それでも神は「結末A」を最善の選択肢として世界を導く。

いや、神は自分が一番に望む「結末A」へと至るために選んでいるだけなので、導く、という言葉は適当ではなからう。

神でさえわからなくなった結末だ。これから起こることは、誰にもわからない。灯りこそ持つているが、出口のわからぬ洞窟を、手探りで探る状態へと変化したのである。

今後あるべき「結末A」のたどり方と多少異なる道へ進んだ時は、神の心情をわかりやすく噛み砕いて、それでいてRTA風にするなら、きつとこう言うだろう。その神は言葉が発することはできないのだが。

オリチャー発動!!——と。

???????

突如現れた超大型巨人によってシガンシナ区の門が壊され、同日ウォールマリアとシガンシナを繋ぐ内門もまた、鎧の巨人により破壊された。

これにて人類は、ウォールローゼまで後退せざるを得なくなったのである。

シガンシナ区を船で脱出しトロスト区へ向かっているエレンは、ミカサとアルミンと肩を寄せ合っていた。

アルミンは言葉を一切発さぬ二人に視線を向ける。

ミカサは目を見開き膝を抱えながらマフラーに顔を埋めており、エレンは今にも誰かを殺しそうな鋭い目つきで、船の床を眺めている。

時折聞こえる、ギリツという軋む歯の音。

母親のカルラや姉のアウラはどうしたのか、とアルミンは聞くことができずにいる。二人は彼とシガンシナ区の船で出会ってから、ずっと喋らない。

だがいるはずの母と姉がおらず、そして友人たちの表情から、何が起こったのかうっすらと察することができた。

「……して、やる……」

ポツリと、声が聞こえる。

ミカサとアルミンがその声に反応すると、エレンが立ち上がり川の先を見つめてい

た。

翡翠の瞳から覗くのは、憎悪に染まった人間の狂気。そして、溢れる涙。

「駆逐……して、やる。駆逐してやる、駆逐してやる……!!」

「え、エレン!？」

「……エレン、落ち着いて」

巨人を全てこの世から一匹残らず駆逐してやると、叫ぶエレン。

二人はそんな少年の腕を両サイドから掴み、一歩下がらせた。そのまま進み続けければ、船から落ちてしまう。

「オレが、弱いから。オレに、力がないから……」

母親が目の前で巨人に食われた。巨人の手で握りつぶされるカルラの身体、そして巨人の口の中に入り肉や骨が潰され、噛み砕かれる音。

その全てが鮮明に記憶に残っている。少年に力があれば救うことができた。姉に混じり、巨人を駆逐することができた。

だがどうだ。今の少年はただ巨人を憎悪して、憎み、弱い己に嘆くことしかできない。

「……エレン」

アルミンが、横から少年の瞳を見つめる。ミカサもまた、強く片方の腕を握っている。

母が、殺された。そして姉は巨人を駆逐するため、シガンシナ区に残った。あの時の姉は誰が見てもわかる、正気ではなかった。姉が少年に向けて微笑んだ姿が忘れられない。やさしく、笑って——その姿は夕日と青空を混ぜた色に照らされ、淡く映った。カルラを救うことができなかつた。ゆえに彼女は残つたのだ。代わりに他の命を一つでも多く救おうと、心臓を捧げて。

大怪我を負つてさえ戦い続ける様は勇敢だ。だが、アウラ・イエーガーの姿は異なつた。もはや自分のことなど、どうでもいいように思えた。でなければハンネスに抱えられていく弟に、あんな安らかな表情を浮かべるわけがない。まるで今から死に行くような顔で。

「エレン!!」

涙の止まらぬ少年に、ミカサが強く抱きしめる。そして、彼女もまた涙を溢しながら、
呟く。

「お姉さんは、きつと大丈夫。大丈夫だから」

「……………ふ……………う、う」

噛みしめた少年の唇の間から呼吸が漏れ出る。三人は今自分たちの命があることを確かめるように抱きしめ、お互いの熱を、そして心臓の音を感じあつた。

???????

時刻は超大型巨人により、シガンシナの門が破壊されてから暫く経った頃。
場所はとある洞窟だ。一部の者しか知らない、全体が結晶に包まれた奇妙なその場所。

そこにいたのは、白い装束を身にまとった数名の人間たち。対し彼らの反対にいるのは、眼鏡をかけた一人の中年の男。壁が壊されたことにより洞窟に集まっていた白装束の人間たちには、予期せぬ訪問者である。

男は「進撃の巨人」の継承者であった。次の継承者の未来を見ることで、進み続ける。実際には「記憶共有」と表現した方が正しいのだが、そこまで能力を使いこなせる者はいない。

またこれには個人差があり、男は未だ次の継承者の視点では未来を見たことがない。あるのは、もつと別の視点から。

ゆえに男は「進撃の巨人」の能力を、次の継承者視点——という限定的なものではなく、漠然とした「未来を見る力」と考えていた。

彼に巨人の能力を託したのはクルーガーという男。その男が進撃の力について語っていた内容は、『何者にも従うことが無く、未来に導かれ進み続ける存在だ——』というもの。

クルーガーの発言からわかる通り、本来継承すればいずれ認識する「次の継承者の」の部分が説明されていない。つまりこれは「進撃の巨人」の能力が、実際のものとは多かれ少なかれ変化しているということになる。

しかして男は導かれるように、ここまでたどり着いた。

壁の崩壊。そしてその日、以前突き止めた洞窟に、レイス家が集まっている未来と、その場にいる自分を見て。

「あなた方に、話がある」

男は白装束人間たち——「レイス家」と呼ばれる彼らに、戦うことを望んだ。壁が壊れてしまった今、偽りの王ではない、本来の王が戦わなくてはならない。「始祖の巨人」を有する、レイス家が。

だがレイス家には「不戦の契り」という、壁を築いた初代レイス王がユミル・フリッツと交わした契りが存在する。

初代レイス王が目的とした「平和」。その思想を、始祖の巨人を継承した王家の人間が受け継ぐ、というもの。

かつてエルディア人が行ってきた多くの虐殺。その禍根は現代にも根強く残っており、パラディ島を攻めんとする諸外国勢力は多くいる。しかしすぐに攻めることができないのは、初代が残した壁——それも巨人でできた——があるため。一度始祖が命令すれば、50mの壁の巨人たちは動き出し、世界を崩壊させる。

だがこれはあくまで保険。緩やかに壁内のエルディア人が衰退するために初代が残したものだ。仮にマーレの戦士のように外から攻めてくる存在がいれば、滅びを受け入れる。

斯様な思想が始祖を受け継いだ人間や、それを「是」とするレイス家の者にはある。

して、当代の始祖の巨人を持つ女性——フリーダ・レイスは、男の言葉を聞き、初めは困惑した表情をみせた。だがその思考が初代レイス王の影響により、一つの結論を見出す。

彼女は宝石のように吸い込まれるような美しい瞳を向け、男を強く睨む。

「我々は初代レイス王に従い、滅びを受け入れます」

「しかし、関係のない多くの民が犠牲になるのだぞ!!」

「ユミルの民が、裁きを受ける時がきたのです」

不戦の契りがある以上、この結果は男にはわかっていたことだった。未来でこのようなことになることまでは知らなかったが、予想はできる。

ならば方法は、一つしかない。奪うのだ。このまま放っておけば戦士たちが彼らにたどり着き、始祖を奪ってしまふ。そしてマーレの手に渡れば、悲劇はパラディ島だけではない。その他の国へと伝播する。「戦争」という、最悪の形で。

しかし男は——グリシャ・イエーガーは、行動に移すことができない。自傷し、始祖を持つ目の前の女を殺す。それが、できない。

何故か？それは彼が、医者であるからだ。

「フリーダ!!その男を殺せ!我々のことを知られた以上、生かすことはできない!」

女の父親らしき男が、彼女に向かって叫ぶ。それに女の兄弟らしき子供たちも、「殺せ」と叫ぶ。

仮に初代レイス王の「平和」の思想があつたとしても、それは始祖を持つフリーダの

み。他のレイス家の人間たちはどこまでも人間であり、醜いヒト本来の姿をさらしていた。

彼女は家族の言葉に汗を流す。殺せ、殺せ、殺せ。

さながらカエルの大合唱だ。そんな家族から視線を逸らし男を見れば、力が抜けたように座り込み、下を向いている。

「……どう、すれば」

男を殺すことに、フリーダは躊躇いをみせる。確かに殺さなければ、レイス家の正体をバラされてしまう可能性がある。だからといって、人の命を奪う行為を軽率にできる人間ではない。縦えそれは初代レイス王の思想があろうともなからうとも。

その時だ。

彼女と男のちょうど中央に、一人の人間が現れる。

ボロボロのキトンのような服を身にとった、一人の少女。表情には感情のカケラ一つ見当たらない。その姿は透けており、フリーダの奥にいる男が見える。そしてグリーシャもまた、そんな少女の姿が見えていた。

しかし突如現れた不思議な少女に、その他の人間が気づく様子はない。二人にしか少女の姿は見えていないようだ。

一步、少女が歩を進める。それに肩にかかる長い金髪が揺れる。頭につけたバンダナが、結晶が煌めく光を受け、その白さをよく映えさせる。

一步一步と、少女が近づくと先は男の元。フリーダはその少女を見たことがあった。

一面の砂と、光の柱が天上へと届き無数に分かれる「道」の世界。その場にいる、一人の少女。

「ユミル……」

ユミル・フリッツ。それが、少女の名。

エルディア人の始祖であり、悪魔と出会ったとされる女性である。

少女の瞳は影に覆われ、窺い知ることにはできない。フリーダがユミルの近づく男の方へ視線を向ければ、男の顔は驚愕に染まっていた。そして彼が呟いた言葉に、フリーダもまた驚くことになる。

「アウ、ラ……?」

アウラ? 違う、その少女の名前はユミルだ。「道」にいる人間など、彼女以外あり得な

い。しかし男は「アウラ」と言う。

「どうしたんだ？何故ここに……それに髪の色が——いや、それよりどうして小さくなっていくんだ……？」

グリシヤは娘と異常なまでに似ているその少女を見つめる。娘の髪の色がダイナに似れば、少女とソツクリだっただろう。

少女はそして、座り込んだ男の前へとたどり着く。呆然とする男に顔を近づけ、二人の額がぶつかった瞬間。走ったのは「バチツ」という電流のような音。

その後グリシヤの顔は驚愕から、絶望へと変わる。

少女と額がぶつかった瞬間、彼の中で流れた映像。それは、恐らく巨人の視点のもの。ハアハアと、荒い息を上げどこかへ歩み寄る巨人。そして直後視界に映ったのは、地面に仰向けで転がっている娘の姿。

調査兵団の服はボロボロになり、特に左側が血まみれになっている。グリシヤに似た髪の色は、血を染み込ませ異様な色へ変化していた。

巨人は、彼女へ近づいていく。その他にも周囲に何体も巨人がおり、娘へ群がっている。

白銅色の瞳はぼんやりと空を映すのみだ。ケガにより動けないのだろう。逃げろと

彼が叫べど、声が聞こえていない。

「あ、ああ、やめっ」

先にたどり着いた巨人の一体が、娘の腕を掴む。そして他のもう一体が足を掴み、耳を塞ぎたくなる音を伴って、彼女の四肢を引きちぎった。もはや声にもすることができず、グリシヤは口元を抑える。

息子エレンにレイス家が持っていた脊髄液入りの注射で巨人にさせ、「進撃の巨人」を託していた未来。

彼の残りの命が少ないゆえ、取った行動なのだろうとはわかっていた。ジークのよう
に道を強いた自身。だが仮にその未来を見なくとも、彼はエレンに託しただろう。他に
頼れる人間など、いない。

娘に継承させる方法もあったかもしれないが、それだけではできなかった。自分の目的
のために進むアウラ・イエーガー。そんな彼女をこれ以上、苦しませたくなかったのだ。
「もう……やめッ、やめてくれ……!!!」

だからこそ自分の道を進むよう、娘を見送ったつもりであった。

だがその娘は今、巨人にその身体を食われている。

空に手を伸ばした娘の手が、食いちぎられる。悲鳴もあげずアウラはずっと、空を見

上げ続けている。

ついで腹を食いちぎられ、赤い内臓が覗く。辺りは彼女の血で汚れ、飛沫が近くの建物まで汚していた。

「……………やめて、くれ……………」

グリシヤの視点と繋がっている巨人が、娘へ近づき口を大きく開ける。

娘の、白銅色の瞳。やめてくれと、涙をこぼしながら男はうわごとのように呟いた。

——おにいさま。

最後に彼女が、そう口にしたのがわかった。巨人はその肢体をきれいに平らげるように、彼女が事切れても肉を貪り続ける。

生気を失ったグリシヤに、少女は額を離す。その一連を見ていたフリーダは異様な光景を凝視し、他のレイス家の人間たちも訝しんだ表情を向けている。

「……………何が、目的なんだ」

男は下を向き、ポツリと呟く。次の瞬間歯を噛みしめ、瞳孔が開いた目を少女に向ける。

「何が、目的なんだ……………!! 貴様がユミルなら、娘は、娘は……………」

少女は、ユミル・フリッツは何も語らず、男の隣に移動する。そして男が握っていた自傷用のナイフに手を添えた。言葉には発していない。しかし少女の意図が、グリシャの脳内に流れ込む。

何を彼が、すべきなのか。

『父親以外、殺せ』

始祖を奪うのではない。始祖もろとも殺し、父親のみを生かす。

ああ、と男は息を漏らす。

ああ、娘は——アウラ・イエーガーは、ずっと始祖が仕向けていた道を歩まされているに過ぎなかったのだ。「寵愛」されているならば、あのような残酷な方法で殺されるわけがない。目的を持ったユミルに利用されただけの、人間だった。

愛しい彼の、娘だった。

「……………」

笑い声さえ出ない。感情が欠如した——いや、精神が壊れた表情でグリシャはフリー

ダを見やり、持っていた刃物で自身の手を傷つけた。

知っていたはずだ、グリシャ・イエーガーは。この世界が、残酷だということを。

妹が殺され、その私怨が始まりとなつて、エルディアの復権を望んだ彼。ジークに後悔しきれぬ生き方を強要し、娘もまた妹を失った恐怖のため家に囲い、家族に固執する歪な人格を形成させてしまった。

そして息子の告発。復権派の仲間が死に、妻のダイナは死んだ。一度は失つたと思つていた娘と共にクルーガーに託された意志を以つて進め、カルラとエレンが家族となり、再び幸福を感じた。

だが彼が生きる支えとなつていた娘は死んだ。

それは単に、グリシャ・イエーガーがここまで進み続けるために必要だったからこそ、始祖によって用意されたものだったのだ。

「ごめんな、アウラ……」

そして、巨人化したグリシャ・イエーガーはその日、父親以外のレイス家の人間を皆殺しにした。

その後彼らから奪った注射器を持ち、巨人の被害に遭ったシガンシナ区へと向かう途中。トロスト区へエレンが逃げていたことを知り、出会ったキース・シャーデイスを無視し、人気のない場所へと息子を連れ込んだ。

息子から妻のカルラまでも死んでいたことも知った彼の精神は、この時完全に壊れてしまっていただろう。

ただそれでも進み続けるしかない。

彼は「進撃」しなければならなかった。

「進みなさい、エレン」

それが巨人化した息子に向けた、グリシャ・イエーガーの最期の言葉である。

幸福を喰らう

森の中、聞こえるのは荒い吐息。「ハアハア」と必死に酸素を取り込みながら、草を踏みつけ、落ちた枝を踏む音。懸命に走る正体は一人の少女。

グレースケールで構成された世界を、少女は懸命に走り続ける。現実なのかも、夢なのかもわからない。

何故自身が走るようになったのか、いつから走っているのかわからない。唯一わかるのは、後ろから何か自分が追ってきているということ。それから逃げなければいけないということだけは、分かっていた。

でなければ、自身の命が奪われてしまう。後ろを見れどもその正体は森の闇に隠れ窺い知ることできない。

少女はその時不意に、自分の右手が何かを握っていることに気づく。

視線を向ければ、手が握られていた。少女と同じくらいの小さい、痩せた手。少女も同じように寝れており、繋いだ手の感覚は骨と骨がぶつかるように硬い。それでもこの手だけは離すまいと、少女は走り続ける。握った手から先はわからない。黒いモヤが

かり、顔や身体を正確に捉えることができなかった。

少女は逃げた。逃げて、逃げ続けた。

恐ろしい何かに身体を傷つけられても懸命に、生きようとする。

だが先に力尽きた少女は、握っていた手の主の背を押し、逃げるよう言った。いや、言葉にはなっていないかった。それでも逃げて、生きて、と叫んだ。

少女を残し、走り去っていく誰か。やはり姿形を正確に捉えることはできない。しかし森の隙間から照らされたきらめく髪の色と、少女をその中に閉じ込める空のような瞳は、しっかりと見えていた。グレースケールの世界に、その色だけは艶やかに生えている。

その瞳と同じ青空を眺めながら、少女はゆっくり瞳を閉じる。

身体から熱が失われていく感覚。流れ出た赤い血潮は少女から溶けて地面に染み込んでいく。その肢体の周りを数匹のハエが止まった。

何かが近づいてくる。恐ろしい何か。少女に恐怖を与え、その命を奪わんとするか。

残酷な世界。けれど少女の上に広がる空は美しい。

そうして肉体からこぼれ落ちた彼女の魂は、どこかへと沈んでいく。何も残らず、消えていく場所。真つ黒な世界だ。

そんな最期でも、少女は自分と共に走っていた誰か——引つ張つて連れていた誰かに、もう一度会いたいと願つた。

少女の全ては、その誰かであつたから。

少女はその誰かがいれば、それでよかつたから。

縦えそれで自分が不幸になろうとも、その誰かが幸せになれるなら、喜んでその身を捧げる少女。

歪で、だがそれが少女の生き方だつた。

場面は変わり、暗い世界。そこからどこからともなく現れた巨大な何か。ムカデとも、エビのようにも見える異形。

闇と同化しその輪郭は掴めない。その何かは上へ上へと昇り、そしてゆつくりと少女へ顔を近づけた。ぎよろりと飛び出た目。それが少女をとらえた瞬間、「ニイ」と笑つた気がした。

バケモノの口が開く。すると覗くのはバケモノの口の中。真っ黒だ。それも暗い世界と比較にならないほど、深淵の色。

その深淵へと導くように、バケモノは少女を頭からすっぽり、その体内へと収めた。そしてバケモノはまた天上へ上がり、自身の尾を口で啜える。

グルグルとソイツは、回り始めた。

???????

私アウラちゃん。死んだの。ええ、死んだの（二回目）。

今はユミルたそがいる謎の世界にいます。例の如く全裸です。全裸美少女ちゃん。天使かな？

明らかに戦士であろう子供二人を発見したまではよかったのだけれど、頭をぶつけたせいで意識が混濁していた私は、子供たちの言葉を完全に信じてしまった。バカなんで

すかね？死ねばいいの……あ、いや、死んでいたんだった。

二人は「いるよ」と言ってくれましたが、そもそもお兄さまって誰ぞ？って話ですよね。というかお前誰だ、って話。

せっかくのチャンスを無駄にしました。死んで冷静に物事を思い出しているからこそダメージが大きい。死ねばいいのに。死んでいるけど死ねばいいのに、私。

まああの二人に「ジーク・イエーガー」の名前を出したとして、警戒しかされませんよね。お兄さまが私のことを他の戦士たちに言っていたのかはわかりませんが、攻め込みにきた場所の兵士らしき人間が仲間の名前を出したら、戸惑うに決まっています。

いや、下手すれば壁内に繋がりを作っていたとして、お兄さまが要らぬ疑いを抱かれてしまうかもしれない。

……最後にお兄さまの名前を言ってしまったんですが、どうしよう。死のう。死ねない。何故死ねないの？死んでるからだよ。

ああ、あの二人がお兄さまに疑いを持つ前に、殺してしまえばよかったのだ。しかし死んでいる以上殺せない。そも巨人化能力を有する人間二人に、私が敵うはずもない。

お兄さまに会いたかっただけに。そしてあわよくば殺してもらおうか、くんずほぐ

れつしたかったのに。

家族の崩壊を成し遂げて最高にハイだった気分が、一気に地獄だ。

それにしても、あの巨人の餌コースひどくなくなりましたか？美少女ちゃんをあんな肉塊にしちゃうなんて。やたら巨人が近寄ってくるとは思っていましたが、私の魅力にメロメロだったのでしょうか。

昔マーレにいた際、本で読んだ東洋に位置する「ヒルズ国」に生の魚をそのままの形であったり、捌いて食べる「おどり食い」なるものがあるらしいですが、まさしく巨人のごちそうになっている時の私そのもの。

アウラちゃんは美味しかったんですかね？お兄さまに食べられるなら、美味しい私の方がいいですからね。

ダイナお母さまの胃に収まった時は、死んでいたのか生きていたのか曖昧ですが、リボンさせていただいた。

ですが、そう何度も生き返らせてもらえとは思っていません。この世の理とか、そういう小難しい部分に魂が引っかけりそうで怖いのです。

というか私が死んだままの方が、あの二人の戦士のことを踏まえると都合がいい。

仮にお兄さまの名前を呟いた女を怪しく思ったとしても、普通は「ありえないか」で済みます。こちらの名前を知られていけないので、なおよし。このまま生き返って再会し、その上名前まで知られてしまったらそれこそ危険だ。

私の事情を話せば、少しは違ってくるのかもしれませんが。

復権派だった両親とともに楽園送りにされた幼女ちゃん。当時4歳にもなっていないので、「よく覚えていない」で十分通るでしょう。ただ壁内へ来る方法は飛行船でも使わなければ、巨人化する一点だけ。

私か、その近辺の人間が巨人化能力者だと疑われかねない。であれば最初から、父親が巨人化能力者だと伝えた方が話がこじれないか。

父親が復権派だった点と、囚われた父と私を救った人物がいる。フクロウの存在。その男から力を手に入れ、父は私を連れていった。

フクロウが逃したとしないのは、父と私を生かす理由が何故あったのか、という疑問が起こるため。

グリシャ・イエーガーが力を継いだのだとすれば、私を連れてきた理由になる。またアウラちゃんは、ただの父親の被害者なんだ——と印象を植え付けられる。完全に身の潔白を証明するのは難しい。幼い頃の記憶がほぼないながら、詳細に父やフクロウのことを語るのですから。

むしろ完全にシロの方が、返って怪しい。過去について知った理由は、私が大人になつた時に聞いた——など、いくらでも理由は繕える。

それに向こうはマール同郷の人間。そして、お兄さまのような複雑な事情を持つ者たちからなるエルディア人の戦士。不遇な私に同情するとは言わない。けれど少しは感情移入をする。完全に感情を動かされないなど、それこそサイコパスですから。

街を見ていた少年と少女の目を見てもわかる。多くの人間を殺すおいし——悲惨な結末を作り出し、それに並々ならない罪悪感を抱いていた。

あの、表情。とても愛らしい自分を責める彼らの表情。

マールも酷なことをする。何が良いのか悪いのか、完全に物事の善悪を理解していない子供たちに殺戮をさせるのですから。私的にはありがたいですけどね。無数の悲劇が生まれるので。

そんな彼らの感情を揺さぶるのも、難しいでしょうが不可能ではない。むしろ演技派であり、多くの人間の不幸を作つた経験がある私だからこそ、可能。

まあ、死んだのでもう何を考えても仕方ないんですが。ユミルたそも久しぶりにこの

砂と光の柱の世界に私が来たというのに、出てきてくれないし。

試しに名前を叫べば来ますかね？個人的にお兄さまの寿命を伸ばすことを優先して、巨人のおどり食いはちよっと痛かったと言いたい。殺すならもつと一気にやって欲しかった。ジワジワ食われるんですもの。

「——ユミッ」

立ち上がって声に出そうとしたら、いつの間にかいました。それも、隣に座って。

「……久しぶり、ユミル」

こちらを見上げるユミルたぞ。じつと見つめられ、自分が素っ裸ということもあって少し、その、居た堪れなさを覚える。私は羞恥からほど遠い人間ですが、流石に見つめ続けられると恥ずかしくもなります。

「……その、えつとね」

一先ずお兄さまの寿命の件を話す。しかしテレパシー的な感じで伝わる返答はなし。相変わらずこちらをじつと見つめるのみ。

仕方なしとおどり食いの件を出したら、それらしい回答は返ってきた。

以前私が初めてのおつかいならぬ、初めての壁外調査に行く前、ユミルたそにお願いした件。

——私が巨人と戦い苦戦するところを、ネツチヨリしながら見ていておくれ。

ユミルたそは約束を守ってくれたわけです。それを自分で頼んでおきながら、私は文句を言おうとしていたわけです。

「……………めんね」

ユミルちゃんは無反応。その代わり膝を擦るように私に近づいて、押し倒してきた。私の身体は少しの力で、特に抵抗感も起こらず砂の上に倒れる。

「え？」

……………え、押し倒した？

何これ？えっ？アウラちゃん急展開に追いついて行けてないんですけど。願わくば初めてはお兄さまがよかったのだけれど。そもそも女の子同士でそういうことってできるの？教えて、お父さま！「どうやってあかちゃんはできるの？」と聞いて、口に含

んでいた飲み物を吹き出したお父さま。あの時のお顔、最高でした。

「ま、ま、待って！ 私にはその、お兄さまが……ジークお兄さまが……」

そのままユミルちゃんの顔が近づく。至近距離で見ると本当に私と似ている。

想像できてしまう次の展開に、目を強くつむった。

するとコツンと、額に感触。

驚き目を開ければ、ユミルちゃんの額が私の額にくっ付いている。

視界の映る金髪が私の顔にかかって、キラキラ輝く。すぐ近くにある瞳はキレイだ。

今にも吸い込まれてしまいそう。蒼くて、空のようでも——宝石のようでもある。

そしてその瞬間、火花のような、ぶつかった額から強い衝撃が起こった。それは直接脳に伝わり、脊髄を通って身体全体を痺れるような感覚に陥る。思わず衝撃に身体が跳ね、視界がチカチカした。

何かが見える。何だ？

結晶で覆われた不思議な洞窟。そこにいる白い装束をまとった人間たち。その反対にしているのはお父さま。

まるで自分がそこにいるかのように俯瞰的に、洞窟の中に反響する声や、人々の息遣い、姿が鮮明に映し出される。

白い装束、「レイス家」と呼ばれる人間たちの中央、美しい顔立ちの女性に話しかけるお父さま。

壁の王——「始祖の巨人」を持つ人間が、その女性らしい。視点は唐突に変わり、座り込むお父さまへ向く。どうやら周囲の会話を聞くに、この視点はユミルちゃんのものらしい。

どンドンメガネをかけた顔へ近づいて、額同士がくつつく。そして、みるみる内に変わっていくお父さまの表情。

様子から、ユミルちゃんに巨人に食われる私の死体を見せられたらしい。時系列にこの状況は、私が食われてからしばらく経った後。お父さまや白装束の人間たちが、壁の崩壊から多少時間が過ぎたことを話に出していた。

「あはあ♡」

なんて、なんて表情をなさるのお父さま。そんなお顔をされたら私、おかしくなってしまう。元々おかしいのに。ジークお兄さまでしかおかしくなれませんのに、おかしくなる。

漏れ出る自身の吐息。ひっきりなしに出る喘ぐような、艶めいた声。

目頭が熱くなり、身体が震える。ビリビリと、その感覚に耐えきれず口元を抑えた。息がまともにもできない。身も心も最高に気持ち良すぎてどうにかなりそう。

「ははっ、ふふ、は、はあ……は、ふふふ」

私が死んだことに絶望なさったお父さま。何を考えているかは分かりませんが、自傷する前に見えた表情は明らかに心が壊れていた。

愛する娘を失ったお父さま。

使命の中で、私という存在に依存していたグリシャ・イエーガー。

ああ、大好きです、大好きです大好きです、大好きです……♡♡

私に微笑みかけたお父さまも、娘に好きな意中がいると見せかけた時静かに焦りを見せたお父さまも、危ないことをすれば冷静に怒ってくださいったお父さまも、幾度となく

見た涙を溢すお父さまも——全て、全て、全て、大好きでございます。

映像は続き、お父さまはエレンくんを巨人にし、「進撃」の力を託した。

痛みに呻くこともなく食われていく。骨の碎かれる音が、肉を咀嚼する音が聞こえる。上から眺めていたその視点で不意に、目が合った。お父さまは空な目で、手を伸ばす。声に出せないながら口元が私の名を形作っていました。

この時、今彼の前にいる人物はユミルちゃんではなく、本当に私なのでしょう。

気付けば私もまた手を伸ばし、大きな手を掴んでいた。

それにお父さまは、幸せそうに一瞬微笑んで。

次の瞬間「ブチツ」という音と共に、掴んだ手が落ちた。

ああ。

——ああ。

ユミルちゃんの顔が離れる。「家族」を壊した時以上の感情の絶頂。呆然と、溢れる唾液も気にならなくなることができない。

ふわふわと身体が漂う。この絶頂のまま身体も心もドロドロに溶けたのなら、どれほど幸せなのでしょう。

「お父さま、私もお父さまのことが大好きで、大好きで、大好きですよ」

ポロポロと涙が溢れる。お父さまがもういないという現実が、私の正常な人間性の部分に触れてしまったらしい。

悲しみと、絶頂と幸福の中で、口角が歪に上がっていく。

ありがとうユミルちゃん、キャッチボールするお兄さまを見せてくれた時並みに感謝しています。こんな悪魔にご褒美をくださり過ぎではないでしょうか。もちろん対価として何を求めても構いません。ユミルちゃんの独断行動であっても、結果私が絶頂に至ったのですから、何をされても喜んで受け入れます。

するとユミルちゃんは徐に私の手を引つ張り、座らせる。ついで寝転がると、私が曲げた膝の上に頭を乗せた。

「これ、これが代価でいいの？」

彼女は反応せず瞳を閉じて、そのまま眠りの体勢に入った。このままではご褒美をく

ださったユミル大先生に申し訳が立たないので、なるべく睡眠の邪魔をしないようにしながら、頭を撫でた。

そして私もまた瞳を閉じる。きっと今回も死ねないのでしよう。現実に戻った後のことはその時考えるとして、今は彼女と共に過ごすこの時を心に刻もう。

「…お父さま」

私とエレンくん、そしてお兄さまを作ってくれてありがとう。

どうかお母さまとカルラママの板挟みにあいながら、ゆっくりとお休みになってください。

美少女（ゲス）と野獣

私、アウラ・イエーガー。人畜有害のかわいい美少女ちゃんです。

ユミルちゃんとイチヤイチャしながら私も眠った後、気づけば壊れた建物の周辺にいました。辺りを見渡せば、見慣れたシガンシナ区の街並み。さらに地面にこびりついた大量の血。どうやら私が巨人におどろいされた場所のようですね。側には内臓が溢れながら座っている10m級の巨人が一体。

お父さまに聞いた、私がビッグお母さまの体内から出てきた時の状況と酷似している。死んだ地点が腹だったから復活地点もそこなのか。複雑な心境だ。

「……まあ、何も着てませんよね」

唯一あつたのは、髪に付けられたユミルたそとおそろつちの白いバンダナのみ。別にいいんですけどね、死体から漁るので。

それから歩きながら、周囲の様子を見る。巨人と遭遇もしましたが、立ち止まりじつところちらを見るのみで、襲ってくることはない模様。流星に立体機動装置がないから助

かりました。ありがとうユミルちゃん。

瓦礫に潰された死体や食いかけの人間の腐敗状態を見るに、壁を破られてから数日は経過しているようだ。当たり前のごとく生き残りの人間はおらず、すっかり巨人シテイになっている。

一先ず民家に入って動きやすい女性ものの服を見繕い、次に駐屯兵団の人間の死体から装備一式を集めた。

というか、シガンシナ区とウォールマリアを繋ぐ内門が破壊されていた。ということはずまり、マリア内も巨人シテイになってしまったということ。

ウォールローゼに行くにはまず馬がないと無理です。アウラちゃんのクソ体力的にも無理。なので優先すべきは馬。また傷が綺麗に治っているので、ローゼの手前で太ケガを負っておきたいところ。

数日ウォールマリアの壁の上でくたばっていて、なんとか意識を取り戻し壁内に戻ったことにしよう。壁を伝えれば近くに民家もある。そこから馬を拝借したことにする。

多少無理があっても、今はまだマリア内の人間がローゼに流れ込み、混乱している状況。どさくさに紛れ、負傷兵の一人を装えるだろう。

それに数日ならば、巨人もそこまで多くは侵入していない。運良く遭遇しなかったと

偽りやすい。

服は血で汚れたから替えた。装備はシガンシナ区で巨人と戦闘した時消耗したため、兵の死体から取ったで済む。

私が逃げず戦った理由は一つ、人類のために命を捧げたからで十分。

まあ一番の問題はジークお兄さまなんですけれどね。

恐らく戦士二人の子供は、内門を破った巨人とは違う。少年少女の疲弊具合を思い出しても、すぐに巨人化できるような体力は残っていないかった。黒髪の少年はできる可能性があつたが、内門の被害は超大型巨人によるものと比べれば微々たるものであつた。ゆえに、少なくとも戦士は三人。

内門を壊した巨人、あるいはその他のメンバーの中にお兄さまはいらっしゃるはずだ。いて欲しい。いないとまた発狂してしまうかもしれない。

しかし、今後どう立ち回るか難しい。

戦士の二人に顔が割れた上、「ジークお兄さま」という人間にブラコンなヤバい女（事実である）だとバレてしまった。今後絶対に会う機会がないとは言えない。

例えば壁外調査から帰還した際街を通るときや、普段生活をする中。いつ、どんな場

面で出会ってしまうかわからない。

そも私の素性は自分で語ってしまったので、調べればわかる。その時名前も一緒に。ジーク・イエーガーと同じ「イエーガー」姓——となると、向こうは必ず接触してくる。それも殺される可能性が高い。何せ壁内に外の事情を知っている人間が、いるかもしれないのですから。

彼らの計画をジャマする存在に十分なり得る。

立ち回りは、死んだ後に考えた。『お父さまの被害者アピール』がいいでしょうか。

しかし完全に我が身が安全になるとは言えない。ならヤバいブラコンを踏まえて、そして私の本来の目的をギリギリまで出す。

全ては兄と再び出会うために生きるアウラ・イエーガー。お父さまに過去に何があつたか教えられた私は、いずれきたる戦士を待ち望んでいた。

この時大切なのは、幼女アウラちゃんが何故両親と共に「楽園送り」されることを願ったのか。その理由だ。

——ええ、私が生きている以上お兄さまが苦しんでしまうからですな。

その究極系として、私は壁外に赴き巨人と戦う兵士となった。全てはお兄さまの手で

殺してもらうため。親の愛情を奪った私をお兄さまはきつと恨んでいるだろうから、と。

これがやがてお兄さまにも伝わったら、どんな表情をなさりますかね（恍惚）
始祖の情報については本当にノータッチなので、聞かれても答えられない。それでもお兄さまのためなら何でもできる。たとえばそれは、壁内の人類を裏切っても。

つまり戦士たちに利用される立ち位置を、甘んじて受け入れるということ。

情報はさながら、性処理役でも、何でもする。お兄さまのためなら本気で何でもできます。ただその代わり、一度でもいいからジーク・イエーガーに会わせて欲しい。その後殺すでも何でもしていい。

壁内の人類に地獄をもたらした戦士たちの決意や目的は、普通の兵士とは一線を画すでしょう。

それでも、ジークお兄さまへ全て捧げる私より勝っているとは思わない。

私の狂気は、それほどドロドロとしていて、人間の暗い部分を丸ごと混ぜ合わせたような悍ましい色をしている。

「でもそれが私という人間なのですから、仕方がありませんね」

まあ向こうの出方を踏まえながら、最適解を見出していくのが一番良さそうでしょうね。出たとこ勝負となつてしまいますが、臨機応変に彼らの精神面にうまく溶け込む美少女ちゃんを演じましょう。

そして、ウォールマリアの壁に沿ってしばらく歩けば、民家を発見した。ちょうど残された馬もあり、これでウォールローゼへと向かえる。

途中木の影から、こちらと仲間になりたそうに隠れている6mほどの巨人と遭遇し、アンカーをかけその肩の上に乗った。そしてジャンプし、左側が下に来るように地面へぶつかる。痛いですね。口から血がドバドバ出てきますよクオレハ…。

それから地面を這うようにし、あらかじめブレードで伐採しておいた太い木を杖代わりにして、馬にしがみつき乗った。

その後は馬の揺れに生じる身体への負荷と痛みを耐え、ローゼに到着した。時刻はもう夕暮れ近い。

立体機動装置で壁の上へ移動し、短い間の相棒と別れ、森の中を移動しようとして――

意識を、失った。

???????

アウラ・イエーガーは、動揺していた。

気を失い目覚めたと思えば、ベッドの上にいたのである。街ではあまり見かけぬ木造の家を見渡し、窓から見えた景色から辺りが森に包まれていることがわかった。恐らく気絶した場所からさほど離れていない場所にあるのだろう。

立ち上がろうと思えばケガが痛み、呻きながらベッドに逆戻りすることになる。そこで彼女は、服の下の身体が手当てされていることに気づく。

ちようどその時ノックする音が聞こえた。

「しよわねえか？（大丈夫ですか？）」

アウラの声を聞き部屋に入ってきたのは、一人の女性。

聞けば、女性の旦那とその娘が朝狩りに山へ入っていた最中、アウラを発見したらし

い。

それも見つけたのは、ウォールマリアが陥落してから二日後のことだという。また発見直後頭を打っていたせい、アウラがひどく混乱状態だったとも。

それから数日彼女はずっと眠り続けていたらしい。奥方は彼女が兵士であることも分かつていた。マントと上着は無かったものの、兵団の服装と装備を身につけていたからだ。

その服については、残念ながらアウラ自身の血とボロボロであつたため、処分せざるを得えなかつた。立体機動装置については保管してある——とのこと。

奥方が話す着せ替えた服とは、アウラ自身が巨人シティの家から拝借したものである。

そもウォールマリアが陥落してから彼女が復活するまで、二日以上は確実に経っていた。計算として陥落したその日は戦い、次の日は移動。そして、二日後の翌朝発見された——ということになる。

話の辻褄が合わないからこそ、アウラは混乱している。その混乱する様子に、やはり記憶がしっかりしていないのだと、奥方が余計に心配する始末。

あまりにも話の都合が良すぎる。それも、アウラにとつて。

「……………」

その時奥方の後方にスウーツと現れたのは、金髪の少女。ユミル大先生である。いつもの無表情を張り付け、大先生はアウラに向けサムズアップした。

どうやら奥方の記憶が改ざんされているのは、ユミルの仕業らしい。全てを察した害悪女は、心の中で感謝した。同時に本当に何故こんなクソ野郎を鼻屑してくれるのかも、疑問に思いながら。

一先ずお膳立てしてもらった以上、話を合わせるに越したことはないだろう。

アウラは頭を負傷した影響で自分の名前すら思い出せない、記憶喪失の美少女を演じる。しかし一部の巨人などの記憶は、覚えていることにして。

「あの、わたしはいつたい……………それにここはどこでしょうか……………」

奥方は彼女に、本当であればここから離れた街まで連れて行きたかったことを話す。

だが現在ウォールマリアから逃れてきた難民で、ウォールローゼ内は大混乱となつている。

必ず訪れる食糧危機に、負傷した兵や住民たちの治療。逃れてきた人間は一つの避難

施設にギツチリと詰められ、床を共にする状況が続いている。

仮に行つたとしても、十分な治療ができるかわからない。縦えそれが治療を優先される兵士であつたとしても。

それ以前にアウラのケガから、荷車での移動でさえ体に負担がかかり、命の危険に晒してしまふと考えられた。

だからこそつきつきりとなり、奥方やその娘などが看病していた。

アウラは見えず知らずの人間に何故そこまでするのか、奥方に尋ねる。

「ボロボロになつてん戦い続けたお人を、助けたかつたんですよ」

なぜ話してもいけないのに断言できるのか、アウラには甚だ疑問である。

「わたしは兵士……？ だつたのかもしれない。でも巨人と戦わず、逃げた人間かもしれないじゃないですか」

奥方はそれでも、戦つたんだ、と断言する。

その理由は、奥方が狩人の夫の瞳を見ているからだ——と、呟いた。

獐猛な目。普通の人間とは違う、戦いを知っている者の目。

そんな瞳を、アウラは持っている。

「起きたんやし、何か食べられそうなものを作ってきますね」

女性はそう言い残し、部屋を後にした。

そしてしばしその一家にある程度回復するまで、お世話になることになったアウラ・イエーガー。これには記憶を取り戻せるよう過ごす意図もある。

記憶の改ざんについては、一家含む集落全体に及んでいた。

これについてはアウラの知らない裏で、他の人間にもユミル大先生が記憶をいじっている可能性がある。その考えに思い至った時、彼女は始祖のチートな力に思わず息を飲んだ。

また本来なら、死亡した兵や行方不明となった兵の確認作業がある。だが名前を覚えていないので、確認することもできない。

そも現段階では壁外調査も当分はできまい。焦ったところでどうしようもないのだ。まずはケガが安定してから、街へ向かおうという話になった。

ことは概ねクソ少女の狙い通りである。アウラの行方が知れずとなるほど、弟に心労的負荷がかかる。同時にその他彼女と関わりがある人間についても。

その期間募る曇りゲージを考えればヨダレもの。そして、実は生きてましたムーブをかました時、どのような顔をするだろうか。特にエレンは。

——グフフ。

そんな声が聞こえてくるようだ。

こだまでしょうか？いいえ、クソ少女の笑い声です。

だが一つ問題がある。一家にお世話になる上で、彼女に這い寄るモンスターの存在。それはいつも食事時に現れる。扉の隙間から、ベッドの上で食事を取る彼女を見つめるのだ。唸り声のような、不気味な声を上げながら。

「食べたいい……食べたいい……」——と。

「……あんまり食べられないから、サシャちゃんも食べる？」

「いゝん?」

彼女が差し出したパンを手も使わず口で奪った少女——サシャ・ブラウス。

未知との遭遇に、アウラは内心戸惑っていた。

こんな猛獣のような人間が、本当にいたのか、と。

割と似てるらしいぜ、アイツら

私だよ私、アウラちゃんだぜえ？

ブラウス家で一ヶ月ほどお世話になった私は、記憶を取り戻すイベント（嘘）を経て、一家と別れることになった。後で些細ではあるが、お返しをするつもりである。

夫妻は断っていました。サシヤ猛獣はこれ見よがしに食べ物を所望していたので、送ろうと思います。

まだケガは完治していませんが、馬に乗る分には十分。

涙のお別れをして彼らと別れた。ウソ泣きでも美少女ちゃんが涙ぐむと絵になるでしょうね。

ちなみに記憶を取り戻すイベントに関しては、父親と私にカッコいいところを見せたかったサシヤちゃんと共に、狩りへ行った時に起こった。

サシヤちゃんは保存食をこっそり食べたことを父にかなり怒られたこともあって、名誉挽回と行きたかったそうだ。

私は少女に誘われた上での見学である。彼女の弓さばきについては文句なしの腕前

だった。

して、鹿などを狩っていた矢先、クマさんに出会った。本来ならもつと山奥にいるはずの猛獣。それが運悪く麓の方まで降りてきていたのだ。

その際サシヤちゃんも射た弓は刺さったものの、致命傷にはならず。

「大変！お肉好きな女の子がお肉になっちゃう！」という状況で、私は横から飛びかかり、持たされていたナイフでクマさんの目を潰した。

向こうが怯んでいる隙に、バックステップで下がり後方の木の上へ移動。私にターゲットを変えたクマさんが木に激しく突進している後ろで、サシヤちゃんが弓で心臓を射抜き、トドメを刺したのだった。

頭でも致命傷になりそうだが、クマの頭蓋骨は銃をも貫通させないことがあるらしく、確実に殺すなら心臓を狙うのが一番だそうだ。

これが記憶覚醒イベント。サシヤちゃんの姿で弟エレンを思い出し、クマと戦ったことで自分が何者であるかを思い出した——という内容である。

そのあとサシヤちゃんは両親に激しく怒られ、私も私で怒られたのでした。

「うめえ食べ物楽しみにしちよんね、アウラさん！」

馬に乗った私に笑顔でそう叫ぶサシャ・ブラウスちゃん（猛獣）

私の隣にいる街までの送迎役のサシャ父は、呆れたようにため息を吐いていた。

ああいったタイプの子は曇らせにくいので苦手ですね。かわいいとは思いますが。

一家に手を振り、先導する馬の後に続き、私も馬を走らせる。

さあ、戻ったらまずは本部への生存報告と、これまでの事情説明。また耳に入った情報だけではない、現在のもっと詳細な壁内の状態の把握。

そしてその後、エレンくん「実はお姉ちゃん生きてたで♡」と、カルラママ死亡から始まり、溜まりにたまった絶望からの幸福を与えてあげようじゃないですか。

私は曇り顔も大好きですが、それ以外の人間がさらけ出す、偽りのないありのままの感情も大好きなのです。

さあいきましよう。生きて行くのです、崩れかかったこの狭い世界で。

???????

街でサシャ父と別れ、駐屯兵に馬を一頭拝借してからしばらくして、私は調査兵団本部に帰還した。

田舎まで届いていなかった情報の一つに、団長の件があった。私が尊敬してやまないキース団長が、元団長になってしまったのです。

今後は未来の人材育成のため、訓練兵団の教官をやるとか。一先ずお目にかかれなかったので、後で生存報告がてら会いに行こうと思います。

して、新しく任命された第13代団長が、エルヴィン・スミス。団長室で椅子に座る（ゲンドウポーズ）彼は迫力があつた。ついでにその右隣には、腕を組み壁に寄りかかるようにして立っているリヴァイ隊員がいた。

リヴァイ隊員とは、エルヴィン元分隊長と同じく班が異なった人物。

巨人の単独討伐を可能とする人間兵器で、目つきが悪い。マール裏で流通しているクスリをキメている人間並みにヤヴァイ。

一応私より後輩ではあるが、「兵士長」なるエルヴィン団長が就任時新たに作ったポジションに収まっている。「兵士長」≠「分隊長」らしいので、つまり上司ということにな

る。

「シガンシナ区での巨人との戦闘の際、頭を負傷。その後意識が朦朧としながらも、マリア内を単騎で移動。そしてローゼ南区ダウパー村の壁近辺で記憶を失っていたところを、住民に発見された——か」

団長は隊員が事情を聴取し、それを記した紙に目を通している。後ろの窓から照らす光で、金髪が眩しい。青い瞳も吸い込まれそう。…あれ？お兄さまがいらつしやる？お兄さまこんなところにおりましたの——、

「オイ、何フラフラとエルヴィンに近寄ってやがる」

ヤヴァイ兵士長が睨んできました。怖いですね、こんな美少女ちゃんに何とも思わないのでしょうか。

「君が家族を助けようと巨人と戦っていたという話は、すでに駐屯兵団の方から聞いている。君のご家族には安否不明と話してある」

「……弟とミカサちゃんは生きて……」

「現在は開拓地で労働している。また君の父親に関してだが、資料によると現在行方不

明となっているそうだ。母親については……いや、君自身が現場にいた以上、私が言及することではないな。すまない」

「いえ……でも、そんな……父まで」

お父さまはもういない。お兄さまの代わりとなる依存先がなくなり、精神的に本格的に危なくなってきた今。

早くお兄さまに会えませんか、先のように団長がお兄さまに見え始める。金髪青目なら誰でもいいんでしょうか？とんだアバズレですねコレは。団長よりお兄さまの方が、比較にならないほどカッコいいのに。

というか駐屯兵団情報とはおそろく、ハンネスおじさんですね。

「ダウパー村の位置と君のケガ、そして記憶を失っていた点を含め、生存報告ができなかったのは仕方ないだろう。遅くなったがよく戻ってきてくれた」

「はい、エルヴィン分隊………団長」

「まだ呼び方に慣れないようだね、私も現在の立場に慣れていないが。隣の彼は、すでに板についているようだぞ」

「お前が勝手に作った役職を、俺に押し付けてきたんだろうが」

話によれば兵士長だけでなく、その他の班も分隊長などが代わり、班内での人材の異動も大きく行われたそうである。

初対面でいきなり人の匂いを嗅いできて以来苦手なミケ・ザカリアスや、巨人関連となるとたちまち変態になるハンジ・ゾエらなどが、分隊長へと抜擢された。

おかしいですね、ほとんど私が苦手な人じゃないですか。

しかも私が所属している——いや、安否不明となっていた以上班から外されているのでしょうか、第四班の分隊長がああ変態のハンジ燃だとは…絶対に別の班でないと精神的疲労が増えています。

H H H H H Aと笑い合う二人と、死んだ目を常時している一人。

「ところで一つ、君に聞きたいことがあるのだが」

「はい、何でもしようか団長」

「巨人を単独討伐したというのは本当かね？それも一体だったらまだしも、複数体」

「ホォー…」

おつ、兵士長は事前に話を聞いていなかったのでしょうか。興味深げに私を見てきます。

少なくとも団長のみで済むところを兵士長が同席している以上、エルヴィン団長には何かねらいがあるのか。

考えられるとしたら、最強の名を欲しのままにするリヴァイ兵士長から見て、私の実

力が本物かどうかを見極めたいといったところでしょう。

まあ今は少しでも戦力が欲しいでしょうからね。（アウラちゃん的にはしかし、頑張りたくはないです。

「君は討伐数・討伐補佐数を見れば、他の隊員と比べれば目を見張るものがある。それこそ「精鋭」と言っている。しかし単独討伐は今まで行つたことがなかった。どうも私にはこの点が引つかかってね」

無論私の体力面に劣る部分を踏まえ、単独討伐を行うのは相当な負荷がかかる。

それも場所は壁外、万が一疲弊した中巨人に捕まったら一巻の終わりである。ゆえに力をセーブしていたと考えれば、納得がいく。

それでもウォールマリア陥落以前に一体も単独討伐がなかったというのが、奇妙に感じるのだ——と、団長は続けた。

目立ちたくなかった、では理由にならないでしょう。だったら訓練兵時代、わざわざ成績上位者に入らないでしょうから。

であれば、連携すること仲間の力を底上げしたかった。調査兵団はヤヴァイ兵長が例外なのであって、「個」よりも「全」を重視する。そうして少しでも犠牲を減らし、自

由を掲げて進む。

この理念を上げ団長に話せば、一応は納得してくれたようだった。

「そう言えば聞いてくれ、リヴァイ」

「何だ」

「これもまた駐屯兵団からの情報だが、どうやら調査兵団の人間がブレードを使って脅し、駐屯兵団の隊員から立体機動を奪う事件があったそうだよ。訴えはその襲われた人物からだ。しかしその隊員は他の目撃者曰く、敵前逃亡していたこともあり、「貴公らのお咎めはなしだ」——と、ピクシス司令が大笑いしていたことがあってね」

「そんなゴロツキみてえな輩が、この調査兵団にいるんだな」

へエー、そんな人物が調査兵団に所属しているんですね。もしかしたらこの美少女であるアウラちゃんも、狙われてしまうかもしれない。え？どうして二人とも私の方を見ているんですか？もしかして私の背後にその粗暴な人間がいるっていうんですか？

「立体機動装置がなかったことを考えれば仕方ないだろう。だが褒められた行動ではないと思うよ、アウラ・イエーガー」

「……申し訳、ありません。言い訳になってしまふことは重々承知ですが、あの時は自分でもひどく……恐慌状態に陥っていたのです」

「精神面にかなり難があるのは、伺っている。しかし有事の際、巨人ではなく仲間にも刃が向けられては話にならないのだ」

「……………はい」

もう、ハンネスおじさんも口が軽いんだから。報告の詐称行為は嚴重に罰せられるので、仕方なかったのでしょうか。

そう考えるとお父さまと私を壁内に通し、独断で「大丈夫だろう」と判断して、その報告を上になかったダブルおじさんたちは結構危ない橋を渡っていたんだな。

「まあそれが兵士を辞めろ、という理由にはならない。何度も言うが、今は戦力が欲しい。現状壁外調査へ赴くことは難しいが、準備ができれば我々調査兵団は、トロスト区からシガンシナ区へ向けたルートを開拓して行く。今この時にも、超大型巨人に開けられた穴から巨人が侵入してきているだろう」

こちらを真つ直ぐに見つめる団長。自分ではまだ慣れていない、などとおっしゃっていました。十分すぎるほどすでに団長の風格が備わっている。

この男とキース・シャーデイスとの差異があるとすれば、やはり才能の差、あるいは人間を魅了する人格の違い。

エルヴィン・スマスはその知性も去ることながら、兵士たちを進ませる力がある。命をかける調査兵団の中で、最も重要なことであり、難しいこと。

それをその言葉一つで、兵士たちに覚悟を決めさせる。

「君にも己の信念とするとところがあるだろう。だがそれを捨て去つても全力を尽くし、人類のために戦ってもらいたい。君の力が、私——いや、我々調査兵団には必要だ」

「団長……」

「随分熱烈なプロボースだな、エルヴィン」

人が感銘を受けたフリをしているというのに、雰囲気をぶち壊さないでくださいますか、ヤヴァイ兵長。お前絶対モテねえだろ。いるんですよ、こういう男。女の子の心をわかりきった風に言ってくるヤツ。彼女が前髪切つて、それをしばらく経つてからようやく気づくタイプだよ。

勝手に人の気持ちをつかつた気になるなよこのチ——、

「ヒッ！」

「おいっ、リヴァイ何をしているんだ!!」

「わからねえ……わからねえが、今こいつの首を斬つておけと、俺の第六感が言っている」

私の襟首を掴み、鋭い刃物の先を向けてくる兵長。ブレードはあいにく持っていないので斬れませんが、首の骨を折るくらい簡単にできそうですね、このスモール・メンなら。

「リヴアイ！女性に乱暴をするな!!」

「離せエルヴィン、じゃねえとテメエまで殴っちまうぞ」

危うく兵長に馬乗りになされ、顔面を殴られかけた美少女ちゃんは誰でしょう？ええ、私です。

エルヴィン団長は兵長を背後から押さえ込み、私を救出した。兵長への好感度がグッと下がりました。

元々兵長はゴロツキ出身。まだ荒い人間性が残っていると聞きましたが、まさかコレほどまでとは……。

人類最強と言っても過言ではないので、まず巨人に殺されることもない。なるべくなら関わりたくないです、一生。

「すまないアウラクくん、リヴアイが……ほら謝れ」

「エルヴィン惑わされるな、女の腹は男が思ってる以上に黒い。こいつの腹をかつ捌けば、よおく見えるだろうぜ……その真っ黒な色がな」

「謝れと言ったんだ、リヴアイ」

「嫌だな」

聞かん坊かな？でもこの人間、お兄さまより歳上らしいので怖いですよね。

結局謝罪がないまま、私への話はあらかた終わった。班については力の分散を考慮して、ミケやハンジ分隊長たちとは別の場所へ配置することのこと。

まあ一箇所だけ強すぎたら、他の班の人間は死に放題ですものね。また本来なら班長や副分隊長を任されてもおかしくはないのですが、すでに班の編成が決まっている以上、すぐに変えることはなるべく避けたいため、通常の隊員になるだろうとのこと。

「これからもよろしく頼む、アウラ・イエーガー」

「はっ！」

団長に向け、敬礼をする。

心臓を捧げよう。その相手は、壁内の人類のためではありませんが。

???????

「彼女を見てどう思った、リヴァイ」

アウラが退出した中、エルヴィンはリヴァイへ視線を向けることなく尋ねる。彼の後方で窓を眺めていた兵長は、瞼を閉じた。

「どうもこうもねえよ、普通の人間に見えたぜ。ただ中身が腹黒そうに見えたけどな」
「お前はもつと行動に気をつけるよ。彼女のトラウマになつたらどうする」

「トラウマ？ 母親が死んだトラウマで発狂した女が、父親が行方不明になつたと聞いた時には、そこまで取り乱していないように見えたのにか？」

「確かにな。精神が成長した、というのもあるとは思うが……。それにウオールマリアが陥落後、巨人がさほど侵入していなかったとしても、単騎でマリア内を生きおおせたことが信じられない」

「不可能ではないはずだ」

「ああ、だがそう簡単に納得できるものでないことは、お前もわかっているだろう」
「……まあな」

奇跡的に命を繋ぎとめた。果たしてそれで首肯していいものか。

何かある。それは突然に現れた超大型巨人と鎧の巨人も相まって、エルヴィン・スミスという男に引っかけかりを作る。

「我々の知らぬ何かが、動き出しているのかもしれないな」

「ソイツは『運命』ってヤツか？」

「ハハ、そうかもな。運命……運命、か」

エルヴィンもまた、リヴアイが眺めていた外の景色に目を向ける。青い空の下、地上では食糧難の危機に対して、人間たちがお互いに憎悪の目を向ける実情。

早くウォールマリアを奪還せねばならないが、そう簡単にできるものではない。

「俺は思うんだ、リヴアイ」

「……何だ急に」

リヴアイが視線を向けた矢先、三白眼の瞳が微かに丸くなる。

普段は冷静沈着な男の青い瞳。それが子供ののように、輝いているように見えた。間近で見た兵士長の感想としては一言、「気持ち悪い」

「どうも彼女が気になるんだ。俺とどこか、似ているからかもしれないが」

「……お前……年齢差を考えろよ」

「何か勘違いをされているようで大変遺憾なんだが」

エルヴィンはアウラ・イエーガーに自身と似たもの——、一先ず外を目指す意志、としようか。

仲間の死体を踏みながらも、人類へ命を捧げる以上に彼女が優先するもの。その正体

はわからない。だが己とかなり近いものであると、団長たる男は感じている。

「部下の多くは熱い視線を送っているようだが、俺はどうもあの女が好かねえな」
リヴァイはそう言い、ため息を吐いた。

子供会議、内一名遅刻

私、アウラ・イエーガー。第五班所属となった調査兵団の兵士である。

お仕事の確認や完治していなかったケガの治療など色々あり、あつという間にまた一ヶ月が過ぎた。

ようやくとかわいい弟さんと将来のお嫁さん候補に会いに行けます。馬車に乗り開拓地へ向かう私は、ルンルン気分だった。

既に私が生きていた報告は弟たちにされているので、少し味気ないですが。まあ生きていると知っていても実際会えば、エレンきゅんにも込み上げてくるものがあるでしょう。お姉ちゃんの胸でいっぱい泣いていいんやで？そしてそのお顔を見せて、お姉ちゃんを輝かせておくれ（ゲス）

「エレンくん、ミカサちゃん……!!」

そして開拓地に着いた私は、多くのウォールマリアの難民が押し込まれている仮設住宅へと着いた。

弟と義妹は隣に駐屯兵が控えている中、外で私を待っていた。本来なら働いている時

間帯ですが、特別に家族と面会する時間を設けられています。団長の粹な計らいですね。

ちなみに駐屯兵がいるのは、開拓地の仕事から逃げ出す輩がいるからです。まだ備蓄で保っていますが、過去最悪の食糧難が訪れるのは秒読み。このままでは内乱が起き、壁内の人類での殺し合いが始まる。

それはそれで、私としては悲劇のスパイラルが生産され最高ですが、兵団内では内乱以上の人間のエゴが行われるかもしれない——という噂が出回っている。これは駐屯兵団や、憲兵団でも同じでしょう。

食料が加速度的に減るのは、狭い空間の中で人間が増え過ぎたがゆえ。そも食糧生産の上でカナメの一次産業を司るウォールマリアが陥落した以上、今まで供給されていた食料が劇的に減るのは当然のこと。

ゆえに王政が行う可能性のある対処。それが、人々を巨人シティへ追いやることです。

もちろん何の体裁もなしに外へ放るわけではない。巨人と戦わせる——など、もつともなことを理由付けて多くの人間を巨人のエサにするでしょう。

もしそうなら私も同行したいですね。どんどん食われる人間たちの悲鳴を、ネットヨリしながら見てみたいです。恐らくは無理でしょうが。悔しいです（カトウー顔）

話を戻しましょう。

私を見た瞬間、エレンくんは今にも泣きそうな顔に変わった。ミカサちゃんも感情を堪えるようにしていますが、涙ぐんでいますね。

「ねえ、さん……ねえさん……!!」

エレンくんが駆け寄って、座り込んだ私に抱きついてきます。えっ、今日が命日か？ 義妹も弟ほどではないですが、私の服の裾を引っ張り声を漏らすまいとしている。

「お、落ち着いてよエレンくん」

「生ぎっ……いゝぎてでよ」がっだ……!!」

ぎゅうぎゅうと、過去最高に甘えてきてますねコレは。いけません、弟と義妹がいる後方では、感動の家族の再会にもらい泣きしている駐屯兵がいるのです。こんなところで悦に浸った顔をしては、アウラちゃんの人間性が疑われてしまいます。え、元から腐ってるだろって？ 当たり前のことを言わないでください。

「オレ絶対に、姉さんと同じ兵士に——調査兵団に入るから……だから、だからもう勝手に、どこにも行くなよッ……!!」

「エレンくん……」

「お姉さん、私もエレンと同じ調査兵団に入る。エレン一人じゃ、心配だから……」

「ミカサちゃんがいるなら、きっと大丈夫だね。こんな弟だけど」

「こんな弟ってなんだよ！」

「一人で前に突っ走って、いつもケガしてくるエレンくんのことだけど？」

「姉さんが言うなツツ!!」

ぐへ。絶望を堪能した後の家族の幸せな時間はサイコーですな。不幸を味わってこそ幸福がより美味しくなり、逆はそれ以上。

そして、束の間の家族タイムはあつという間に終わる。去っていく私にまた泣きそうになっている弟は、涙を拭って大きな声で叫んだ。

「オレは絶対に強くなるツツ!!母さんを殺した巨人を皆殺しにするんだ!それで…姉さんやミカサ、アルミンたちを守るくらい強くなってみせるから!!!」

——だから、それまで絶対に死ぬなよ。

ああ、まだまだエレンくんは子供だと思っていたけれど、一人で立ち上がれるほど大きくなっていったのか。

お父さまの力を——そして使命を託されたエレン・イエーガー。

あの子はお父さまと同じように、これから「進撃」して行くんだろう。その行き先はわからない。知っているのはきつと始祖ユミルだけ。

私と進む道は違いますがね。

アウラ・イエーガーが追い求めるのはただ一人、この壁内に紛れ込んでいるのか、あるいはマーレに残っているかもしれない兄のため。

——いえ、愛する彼、ジーク・イエーガーただ一人のため。

私は進む、血に染まった道を。

???????

壁の崩壊から一年後の846年。

王政府がウォールマリア奪還作戦を展開し、人口の二割——約25万人もの人間が命を落とした。この際、アルミンの唯一の家族であった祖父も命を落としている。

建前は奪還作戦と銘打っていたが、その裏にあるのが「口減らし」だということとは、多くの者が認識していただろう。

それでも命を繋いでいくため、生き残った人間たちは積み上がった骸に目を逸らし、必要な犠牲だったのだ——と。

また同年に、長らく行われなかった壁外調査の許可が下り、調査兵団はトロスト区からウォールマリア、そしてシガンシナ区へのルート開拓を行うこととなった。

遠征不可の期間が長引いた理由は一つ。そこに回される費用がなかったため。無論ウォールマリアを取り戻すことが第一に優先すべきことだ。

だがそれ以上に食料困難やその他問題が山積みとなり、王政府も手が回らなかったのである。

壁外調査が可能となったのも、単に口減らしが行われ壁内の問題がある程度収束してきたからこそ。民を救うための壁外調査が、逆に民の犠牲があったからこそ成り立つ。この矛盾を一番重く受け止めているのは誰でもない、エルヴィン・スミスであろう。

そうして進み始めた壁外調査。ウォールマリアが陥落する以前まで軽視されていた調査兵団の重要性を感じているのは、彼らをあざ笑っていた民たち。結果、再評価された調査兵団。

となれば「人類最強」と名高いリヴァイ兵士長の名前や、兵の生存率が飛躍的に上が

ることとなった、対壁外遠征用の特殊な陣形（長距離索敵陣形）を考案したエルヴィン団長。

また、変わり者だが巨人の研究で何度も成果をあげるハンジ・ゾエに、兵団トップ2の実力を誇るミケ・ザカリアスの名などが、知れ渡るようになる。

その中に、兵団内随一の美貌を持つと人気の女、アウラ・イエーガーの名もまた知られるようになる。

その力は指折りだ。しかしその容姿ばかりに注目が向き、中々彼女の力が評価されることはなかった。正当な判断をするのは間近でその力を見たものくらいだろう。良くも悪くも「天使」と謳われるその美少女ぶりが、他人の評価を歪めているのだ。

だが名が知れ渡ると言うことはつまり、世間の認知が高まるということ。

ある時調査兵団の「アウラ・イエーガー」の噂を聞いた少女は一人、驚愕した。

「イエーガー」の名を持つ女。そしてその人間は、調査兵団の人物であり、美しい容姿を持っている。男たちが噂していたその容姿と、少女が出会った女の見えた目はほぼ一致していた。

始祖奪還のため、壁内の王を調べていた少女——アニ・レオンハートは、ことを伝えるべく急いで仲間二人の元へ向かった。

???????

「アウラ・イエーガー……」

「ああ、しかも所属しているのは調査兵団だ」

アニはライナーとベルトルトがいる開拓地へと向かった。そして時間を見繕いこつそりと落ちあつたのだが、一人足りない。

「ライナーがいらないみたいだけど」

「ライナーは……今日のノルマ分が終わらなかつた子供の手伝いをしてたよ。遅れて来るって言ってた」

「……ツチ、偽善者かよ」

これ見よがしに舌打ちし、側にあつた木を蹴りつけるアニ。それにベルトルトは宥めるように、どうどう、と手の平を向ける。

一年前血まみれのアウラと出会った二人。ケガの具合から助かる見込みはかなり薄い、二人は感じていた。

ア二とベルトルトと別れ巨人と戦いに行った女の後ろ姿には、死神が見えていた。あのまま命を落としたのだらうと、二人は考えていた。

調べるとしても混乱状態に陥った壁内で、一人の人間を調べるのは難しい。兵士にそれらしい人物が調査兵団に生存しているのか調べてもらったとしても、後からどう足がつくかわからない。

第一現団長であるエルヴィン・スミスは、相当に頭がキレる人物だと聞く。仮にアウラ・イエーガーの情報を聞いた人間が親族でも何でもない赤の他人だとバレれば、不審に思われる可能性もある。

かのエルヴィン・スミスであれば、ア二たちが感じた女の底知れない異質な内面に気づいているはずだ。ゆえに危険視し、そんな彼女を探る人間——それも子供に違和感を抱く可能性がある。

そんな理由もあり、二人——特に情報収集を担ったア二は、下手に動くことができなかった。

しかし、女は生きていた。実際に見たわけではないが、ほぼ確実だろう。

「でも、少なくとも僕たちのことはバレてないんじゃないかな？ 現に僕たちを探っている人間はいない」

「思い出さないだけかもしれないだろ。いつ思い出すかわからない以上、早急に殺すべきだ。私たちが勘付かれる前に」

「……思い出した上で、言っていないって可能性もあるんじゃないか?」

「あの女が本当に、ジーク戦士長の妹だったら……ってことかい?」

「うん、確証はないけど……」

「ツハ、どうやって壁内まで来たつてのさ。まさか歩いて? 外は巨人がうじゃうじゃいるつてのに」

「それを踏まえて、やっぱり聞くしかないんじゃないかな。僕らでいくら考えても、答えは出ないと思う」

「……そもそもその女が偶々「イエーガー」姓で、兄貴の名前が「ジーク」つてだけだった可能性もあるだろ」

「アニは本当に、そう思う?」

「……」

当時のアウラ・イエーガーは、正しく狂気を張り付けたような印象だった。

もしも、もしもだ。彼女の事情はわからない。しかし同じ戦士である彼らに、兄がいるかどうかを聞いていたのだとしたら。ジーク・イエーガーを、探しているのだとしたら。

「話を聞いてみよう、ア二。それから生かすかどうかを決めるべきだ。少なくとも同じ同郷の人間なのかもしれないのだから」

「甘いねベルトルト。私は有無を言わさず殺すべきだと思うよ」

「……………ア二は、強いな」

戦士である二人でさえ感じた、女が纏っていた狂気。ドロドロと、兄の姿を求める姿は、戦争の最中赤子の遺体を抱いて泣く母親より悲惨で、人を殺した罪悪感で心が壊れ、無表情で銃を向ける兵士よりも異質だった。

そんな女の姿が、出会ってからしばらく二人の脳内から落ちなかつた。

アレは、本当に強烈すぎた。人間の覗いてはいけない深淵を覗いてしまった心境だった。

だからこそ女が死んでいると確信——否、死んでいると思ひ込みたかつたのかもしいない——した二人は、女の幻影を忘れようとし、ライナーにこの件を話すことはなかつた。話せば女から感染した狂気が伝染し、その恐怖が鼠式で膨れ上がってしまう気がしたのだ。

しかし女が生きている可能性が高い今、ライナーに当時のことを踏まえ話さねばならない。そしてどう動くか決める。

それから日も暗くなり始め、ライナーがようやく待ち合わせの場所へと訪れた。

ベルトルトは木の横に膝を抱えて座り込み、アニは木に寄りかかり瞳を閉じている。

「遅いよ、このクソドベ」

「す、すまん……」

「ライナー、ちよつと話があるんだ」

ベルトルトを主体に、マリア陥落時二人が遭遇した女の件と、アニが壁の王の調査中に手に入れた、生きていたらしい女について話す。

ライナーは真剣にその話を聞いていた。しかし途中、表情が一変する。驚愕に満ちた顔で、ベルトルトに詰め寄る。

「……も、もう一回、言ってくれ」

「え？」

「だからもう一回、その女の名前を言ってくれ……」

動揺しながらベルトルトは、女の名前を話した。

アウラ・イエーガー、——それが調査兵団に所属し、そしてアニとベルトルトと出会った際「ジークお兄さま」と語っていた名。

ライナーは顔を青くし、ポツポツと呟く。聞こえぬその声量に溜まったアニの鬱憤が

爆発し、彼女は思いきりライナーの脛を蹴った。ドベと謳われる少年はそのまま転び、手をつく間もなく顔面を地面に強くぶつける。

その際鼻を折ったライナーは鼻血をしとどに流しながら、立ち上がった。

「……ジーク戦士長から、聞いたことがある」

「ハ？何が」

「戦士長の、妹の名前も……アウラ・イエーガーだ」

ライナーの言葉に、アニとベルトルトは身体を強張らせる。

いよいよアウラ・イエーガー||ジーク・イエーガーの妹である可能性が、確実となつて来てしまった瞬間だった。

私の側に近寄るなア——ッ!!

久々の壁外調査から帰還した美少女——いえ、美女はだあれ？そう、私ことアウラ・イエーガーちゃんです。

エルヴィン団長の下で動くのは何気に初。団長が考案した対壁外遠征用の陣形を頭に入れ込み、右翼側の班で時折「ドキドキッ！巨人あの子と壁外デート♡」をしながら馬を走らせた。

今までは巨人と遭遇したら戦うか逃げるかの二択でしたが、団長が考案したやり方は戦う必要性が減り、放たれた煙弾の色で場所を把握し巨人を避けるように進んで行くので、死者や負傷者が大きく減ってしまいました。非常にシヨックです…。

しかし完全に被害がないわけではなく、およそ三割程度の被害は受けた。その被害の多くは、煙弾で避けて対処することのできない奇行種によるもの。

通常種ならまだしも奇行種は行動が予測できない以上、遭遇した場合は狩るしかない。

思い返せば、美少女アウラちゃんを壁の後ろから狙ってゐいた巨人も奇行種。ユミルちゃんが恣意、あるいは意図的に操った可能性もあります。

お父さまの絶望顔を拝むためだったら安すぎたものですね。思い出してきたらアへっつてしまいそうです…♡

と、人格が疑われそう（今更）な内容を思い浮かべながら、その日私は遭遇した奇行種一体を狩って帰ってきた。

ウォールマリア陥落から一度目の壁外調査。高まった調査兵団の重要性に、いつも以上に増して視線が多いです。私は相変わらず容姿が目立つので、フードをかぶり馬の手綱を握って歩きます。

「あ、あの、エルヴィン団長…い、うちの息子は…」

毎度のことですが、我が子は何処へ？イベントが発生。

キース団長は毎回顔が死んでいて、しかも成果が残せぬ自身への葛藤も見られうま味でしたが、エルヴィン団長は…若干死んでいますますがそれでも瞳孔の光は残っていますね。真っ直ぐに前を見ている。精神強者かな？

どうにか団長の曇った表情も見てみたいんですが、コレは強敵そうですね。他の分隊長クラスも動じていない。

とうかあのハンジ姿態に至っては、奇行種と追いかけてきたようで、絶頂している。暗い表情をしているのも親しい仲間を失った者や、巨人の恐怖にチビっている者だ

けで、ごく僅か。

「私自身も力を隠すことができなくなってしまうので地獄。倍以上に疲れる上、同じ班の死者はゼロ。ひどいよっ…こんなにあんまりだよ…!! (鬱)

自分の「生」を感じることができず、お兄さまの代わりに、依存対象にしていたお父さまも亡くなつてしまった日々。このままではクソ女メマちゃんちゃんは気が狂れてしまいます。「アウラ、今日君も奇行種と遭遇して、しかも単独討伐したんだって! その時の状況を詳しく教えてくれないかな?」

本部に帰つてお仕事頑張つた、と思つたその夜、ハンジ分隊長が来ました。…ケテ…タス…テ…

「だ、誰からそれを…」

「エルヴィン団長がリヴァイと話しているのを聞いてね。君は私がヒラの兵士だった頃から巨人討論に付き合つてくれた仲だ! 同志がいるのは実に喜ばしい。君も同じ四班だったらよかつたのに、残念だなあ…。またエルヴィンに掛け合つてみよう」

「はは…」

付き合つたのは、表向きはいい子ムーブをしていたからですね。一度地獄を味わつて以降は上手く躲していたんですが、逃げられない事情ができてしまった。

そう、私はこの人と同室なのである。同室なのである（大切なことなので二回 r y）

元々は彼女一人の部屋だったのですが、私が一年前戻ってきた際女性の部屋が空いていなかったなので、ここに入れられた。分隊長や団長クラスになれば一人部屋をもらえるので羨ましい限り。

部屋が同じになった理由は一つ、ほとんどハンジ・ゾエが部屋を使っていないからでしょう。

一ヶ月に数度しか来ない上、大抵寝る以外に使うことはない。置いてあるのは多少の私物くらい。ならば彼女が普段どこにいるのか？ 答えは研究室。そこが実質彼女の部屋だ。

だが同室な以上、どうしても時折『あ！ やせいのハンジが とびだしてきた！』となる。そして彼女の精神状態次第で、巨人討論バトルが始まる。

私は何度もやせいのハンジにバトルを申し込まれ、断りきれず負けてきた。今日もまた避けられそうにない。いい子ムーブ辞めていいですか？

「さあ、語り合おう！ 今日私は私が今度エルヴィンに提案するつもりでの対巨人捕獲作戦について、君の意見が聞きたくてね。それと——」

たすけて。

???????

休みだ！お兄さまの元へ行こう！

———と思っても、いないんですね。代わりにエレンくんの元へ行きたいですが、開拓地に行ったところで労働者の勤務時間中は会うことができない。本部から開拓地まではそこまで遠くはないんですけどね。

というかあまり行っている、「コイツ仕事サボってんじゃないか？」とエレンくんたちの好感度が落ちてしまいます。だから会うのは偶になくらいがちようどいいんですね。

ゆえに近場の街で時間を潰すことにしました。

装いは長袖の白シャツに青みがかかった薄い緑色のロングスカート。その上にフード付きのサイズの大きめなコートを羽織って出かけます。実際休日のお出かけはほぼお

兄さまを探して彷徨う旅なんです、会えたことは一度もないですね。死のうかな。

しかし…いやはや、口減らしがあつてからいくらか経ちましたが、まだ街の雰囲気は暗いです。これは今日のメシが美味くなりますよ。

「…ん？」

人が混雑している中、通りすがりの子供が果物を一つ落とした。拾いそれを渡そうと振り返れども、フードをかぶった子供はバスケットを提げたまま路地裏へ入っていく。

「……………」

赤いりんご。見た目は真つ赤だが、中身は白つぼい。甘くて美味して、偶にすっぱい。落ちた衝撃で表面が少し傷ついたそれを見つめ、私は子供を追うことにした。あちらはどんだん路地奥へ入っていく。時折隅でうずくまっている人間が、りんごに視線を向けてきますが無視。

「これ、落としたよ」

路地の奥。人もすっかりいない。帽子をかぶった子供に声をかければ振り返る。冷えた青い瞳は、うっかりしたら舐めまわしたくなるくらいにはキレイだ。

「……ありがとう」

さてどう出てきますか、愛らしき美少女戦士さん。

???????

「アニちゃんって言うんだ、よろしくね！わたしはアウラ・イエーガーって言うの」

仲良く隣り合わせで、女と少女が座っている光景。

できることなら、二度と会いたくなかった。

アニ・レオンハートは隣で半分のりんごを齧る女——アウラ・イエーガーを見て思う。女の口元からは果汁が溢れ、顎を伝って下に落ちる。

それを舐めとる仕草は同性であるアニが見ても色っぽく、大人の色気を感じさせる。これが男ども二人だったら、鼻の下を伸ばして見入っていたに違いない。特にゴリ……

ライナーならば。

彼女とベルトルトが遭遇した女と会う機会を窺っていたアニは、ここしばらく調査兵団近くの街にて、女が外に出るタイミングを探っていた。

そうしてようやく訪れた好機。普段着で休みを取る女を追い、偶然を装い買っておいたりんごを落とし、女を路地裏まで誘き寄せた。ちなみにりんごを買った金は盗んだものである。

果物についてはアニたちがいる開拓地の領主から頼まれ、買ったものとした。

落ちたものは傷んでしまい渡すことができなからと、アウラに渡してある。りんごを少女から貰ったアウラはキョトンとし、半分に割って傷みが少ない部分を、アニの手握らせた。

「……………」

「やっぱり食べづらいかな？ だったらわたしが新しいのを買ってくるね」

「いや、大丈夫。二、三個ぐらいなら食べてもバレない」

「じゃあ食べちゃいなよ、アニちゃん。今のうちに食べておかないと、大きくなれないからね」

渋々、アニはりんごを口に運んだ。甘い果汁が口内に広がり、シャクシャクと音を立てる。いつも質素な物を食べているせいかな、慣れない刺激に口の中がビリビリと痺れる。マールでは普通に食べられた食事が、この壁内ではごちそうだ。

「おいしい…」

「でしょ？人のお金で食べる物って美味しいんだよ」

「……顔に見合わず腹黒いんだね、あんた」

「領主っていうのは、一つや二つ悪さをしてるんだ。だから少しくらいイイ思いさせてもらったっていいのよ」

イジ悪く言うアウラ。その姿はとても、戦士たるアニたちがゾツとする狂気を纏わせていた人間とは思えない。子供っぽい一面を見せながら、ほわほわと、陽だまりのような笑顔を浮かべる。

そのチグハグさがやはり気色悪いが、それでも優しい笑顔を、アニは嫌いになれそうになかった。

「そう言えばさ、以前はありがとね」

「以前って？」

「覚えてない？私ともう一人…ベルトルトって言うヤツと、二人であんたに助けってもらったんだけど」

「……ああ！あ、ああー………」

女はやはり少女たちのことを覚えていた。アニの中で警戒レベルが一気に上がる。それを表に出さないよう努めた。

一挙一動を見逃さないようこつこつそり観察するが、特に変化はない。もしアニたちを不審に思っているなら、絶対に顔に出るはずだ。

超大型や鎧の巨人まで勘づいていなくとも、子供が二人壁の上。何か違和感を抱いてもおかしくない。だがフレンドリーにアニに話しかけているアウラの様子から見ても、本当にアニとベルトルトを、駐屯兵団の兵士によって助けられた人間としか思っていないようだ。

戦士三人の中で、洞察力が最も高いアニに「普通」と感じさせる。これが演技なのだとしたら、少女は人間という生き物を信用できなくなりそうだと。

「何で顔を赤くしてるのさ」

「だって、えと……君に人違いしちゃったでしょ、わたし？それが、その……恥ずかしくて……」

後半はほぼ消え入りそうな声で、顔を覆い話すアウラ。

兄を「お兄さま」と呼んでいたのを知られてしまったところも、彼女の的に羞恥を底上

げする要因らしい。

「一先ずアニちゃんど…ベルトルトくんだっけ？二人が無事でよかったよ」

「あんたも生きてたんだね。てっきり死んだかと思ってた」

「はは…生きてたよ。わたしも死んじやうかと思つた」

すぐにでも意識を失つてしまひそうになりながら、それでもアウラ・イエーガーは生き残つた。

アニたちと出会つた後はほとんど記憶がないものの、所々馬に乗つてウォールマリア内を移動したことや、ウォールローゼの壁に到着した直後、気を失つたことを話す。

「あいたい、つてあんた言つてたけど、お兄さまには会えたの？」

「えつ、わ、わたしそんなこと言つてた…?!というか、お兄さま呼びはやめて……………」

「覚えてないのかい？」

「うん…実を言うとウォールローゼまでたどり着いて、その後近くに住む狩人に助けってもらつただけど、ほとんど記憶を失つてたの」

「そうなんだ、よく思い出せたね」

「……女の子が、いてね。色々あつて、その子がクマに襲われそうになつただけど」

「クマに襲われそうになつた…？」

「そう、クマ。それで、その子の姿が不意に見覚えのある男の子に見えたの。その時同時に身体が動いていて思い出したんだ。わたしには、弟がいたんだ——つて。そして自分が、心臓を捧げた者であることも思い出した」

——でも結局、兄さんには会えなかつたの。

「…そうか、野暮なこと聞いて悪かつたよ」

「ううん、いいの。気にしないで」

樂しげに話していた女が一転、陰つた表情をみせる。その匂いはアニたちが見た狂つた女の雰囲気を微かに滲み出させていた。

途端に背筋が寒くなり、アニは思わず曲げていた背筋をピンと伸ばす。口の中の味もなくつたりんごの残骸が、やけに気色悪い。

それでも切り込まねばならない。女が何者であるかを暴く必要がある以上。

「あんたの兄つて、確か「ジーク」つて名前だつたよね」

「…わたし、兄さんの名前も言つてたんだ」

「ああ。私さ、血まみれになつて必死に兄の姿を探していたあんたの姿が、忘れられな

かったんだ。あの時のあんた、すごく怖かったっていうか…おかしかった。縦え頭を打っていたとしても」

「……ごめんね」

「あんたが謝るのはおかしいだろ。…なあ、何があつたんだ？」

「………」

「あまりにも見ていられなかったから、私とベルトルトは「生きてる」って言っちゃった。けどもしかしてあんたのお兄さんは、もう、死んでるんじゃない——」

その時、アニの肩が勢いよく掴まれる。少女を捉えるのは大きく見開かれた白銅色の目。そこからアニが嫌悪してやまない狂気が、ドロドロと漏れ出てくる。

アウラは唇を噛みしめ、今にも泣きそうだ。

「兄さんは死んでない!!兄さんは生きてる!!生きて…生きて……」

「ッ、痛いって」

「……ご、めん」

ズルズルと、アウラの手がアニの肩から落ちる。握りしめられたその両手は真つ白くなり、身体と共に小刻みに震えていた。

アニは女の次の言葉を待ったが、それ以上は黙り込んでしまった。これでは情報を聞き出せなくなってしまう。

ゆえに少女は開拓地で出会い、最終的に首を吊った男の過去を自分の過去とすり替え語り出す。

同情心を煽り、女の懐へ潜り込みやすくするため。

ウオールマリリア南東の山奥の村。その村から親に頼まれ野菜を売りに行つた後、壁が破壊された。この話については、ベルトルトとライナーにも合わせるよう決めてある。

その後離れ離れになつていたライナーと合流できたものの、故郷へ戻ることができぬまま、三人の子供たちは親と今生の別れと相成つた。

「私は…父と二人暮らしたんだ」

「……………」

「あんた言つてただろ、私たちと会つた時。同じ人間だからこそ、感情を共有することができるんだ——って。それに辛い時は「辛い」って、言つていいって」

「……………」

「だからあんたの苦しみとか悲しみを、分かち合いたいんだよ」

アウラはアニの瞳を見つめ、小さく口を開いた。

今からするのは突拍子のない話であり、信じるか否かの判断はアニに任せる。ただ、

一つだけ守って欲しいことがある。それは彼女がする話を、誰にも言わないで欲しい——ということ。すればアウラも、アニの命も危うくなる、と続けて。

少女は首を縦に振った。

「…わたしが物心がついたばかりの頃、兄さんがいたの。もう今でこそ当時の記憶なんて、ほぼ思い出せないけれど。兄さんはママと似た髪と瞳の色で、わたしとはあまり似ていなかった。でも顔立ちはパパに似ていたわ」

カツコよくて、やさしい兄。病弱だった妹に、いつも微笑みかけてくれた大好きな兄。外に出たことのなかった彼女にとつて、「家族」は彼女の世界であった。

「ずっと家の中って、虐待とかじゃないよね？」

「いいえ、違うわ。パパとママはわたしをたくさん愛してくれたもの。ただそれが少し、過剰過ぎただけ」

両親の重い愛は、自分が病弱だったことも起因していたのだろうと、アウラ。

そのせいで大好きな兄に、両親の愛情が向かうことは中々なかった。

それから兄は親に諭され、「戦士」をを目指すことになる。

この瞬間アニの中で「ジークお兄さま」Ⅱ「ジーク・イエーガー」であることが確定した。同時にアウラ・イエーガーが、壁外の住人、つまりマーレで暮らしていたエルデア人であるということも。

「でもある日家にたくさんの大人が来て、その中に兄さんもいた。やさしい両親は、悪い人”だった”

アウラはその後両親と共に、「楽園送り」となった。

「その「楽園送り」ってのはよくわからないけど……あんた子供だったんだろ？ 兄が告発したんだったら、助かることもできたんじゃないのか？」

「できたよ。兵隊の人が言っていたもの、「君の身柄は安全だよ」って」

「なら……」

「でも、行くしかなかったんだ。行くしか方法が……いえ、行くべきだった。わたしという人間は」

ジークが告発した際、その側にいたメガネの男が言っていた内容。

毎日毎日戦士を目指して、ボロボロになるまで頑張っていた兄。しかし裏を返せば、兄は両親の厚望のために利用されていただけだった。

「男の人は言っていた。両親は兄に愛を与えなかった、君は悪くない——って」

そう、悪いのはジーク兄さんではない。

悪いのは、アウラ私だった。

女のその言葉を聞いた瞬間、ゾワゾワとした感覚がアニを襲う。

ああ、これだ。恐らく少女が感じていた狂気の正体は。

「わたしがいたから兄さんに愛情が向かなかつた。わたしが生きていたから兄さんが苦しんだ。わたしがうまれなければ兄さんは幸せに生きられた。だから、だから——

」

「両親と一緒に、死のうと思っただね」

「……そう、結局死ねてないけど」

アウラは「楽園送り」で母親が注射で巨人になり、それがトラウマになったこと。

また直後気絶し起きれば、いつの間にか巨人になった父親に抱えられ、どこかへ向かい移動していたことも告げる。

「つてことは何だ、巨人の正体は人間ってことかい？そんなバカな話が……」

「だから、信じなくてもいいって言ったでしょ。わたし精神面に問題があつて入院したこともあるし……ただの妄言でいいよ」

「いささか信じられないけど、これが創作だったらこれほど興味が湧く話もないだろ。続けてよ」

「……それで、パパは『復権派』という組織の人間だった。その組織の人間——「フクロウ」という人がパパを助けて、巨人の力を託したんだって」

「フクロウ」——それは、マーレの政府が復権派を探っていた当時、血眼になって探していた人物。

楽園送りにされる場所に行けるのは、普通送られるエルディア人か、マーレ治安当局の者だけだ。

一見フクロウは捕まった復権派の人間の中にいたように思えるが、一つ疑問が残る。今までずっと正体不明だったフクロウが、そう簡単に正体を現したと思えない点だ。捕まった復権派の中で、自身を「フクロウ」だと名乗った者はおらず、またフクロウの正体をゲロった者もいなかった。そも誰一人として、復権派のトップの正体を知らなかった。

ここまで巧妙に隠れるとなると、可能性は一択。フクロウがマーレ治安当局員として潜んでいた——という可能性。

もしそうであれば、難なく「楽園送り」の現場へ侵入できる。

力を何故アウラ・イエーガーの父に渡したのかは不明だが、フクロウにとって何かしら力を託す理由があつたのだろう。

そしてその力は恐らくマールレが所有する七つの巨人と始祖の巨人ではない、「進撃」の巨人の可能性が高い。今までその存在を確認できなかった力が、正体を現した。

「顎」^顎を失つた今、その代わりに「進撃」を手に入れることができれば、仮に始祖が奪還できなかったとしても、アニたちの首は繋がる。

幸いアウラは巨人の継承方法を知らないときた。知っている可能性もあるが、それを疑い始めては全て疑わなければならなくなってしまう。だからこそ今は、一先ず聞いた事実を肯定する。

「じゃああなたのお父さんは、今も巨人になれるってことなんだ」

「……それは、わからない」

「え?」

「パパ……いなく、なっちゃったの」

少なくともウオールマリアが陥落したその夜、トロスト区で馬車を飛ばす父イエーガーの姿を見た、という目撃情報があつた。しかしそれ以降。パツタリと音沙汰がない。

(仲間を力に継承させたのか…!!)

復権派であるアウラの父の目的は、始祖の巨人をマーレよりも先に奪うことだろう。となると仲間を作っていそうだが、王政は壁内の人類が外へ興味を抱かぬようさまざまな対策を行っている。

仮に王政の都合の悪いことを起こせば、すぐに憲兵団の裏の仕事で処罰される。憲兵の黒い噂は、王政を調べていたアニの耳にも入っていた。

だからこそ仲間を作る行為は、危険と裏合わせとなる。そも一度組織がバレ「楽園送り」にされかけた男が、仲間を作るとも考えにくい。

であれば継承させる人間はきつと限られる。口が硬く、復権派が掲げる思想に強く賛同する者。

例えば今、アニの目の前にいる女はどうだろう。

ウォールマリアで大怪我を負った直後、何らかの形で父から力を託されたのなら、死んだと思っていた女が生きていた理由に繋がるのではないか。巨人の力を継承し、ケガが一気に完治した。

単純にアウラ・イエーガーが、強靱な生命力を持つているだけの可能性も捨てきれな

いが。

そうなるのとケガを負わさねばならない。巨人の力に慣れれば自動回復する傷を留めておくこともできるが、まだ継承して一年と少しであればいくら器用でも難しい。

できたとしても全体的に多くのキズをつければ、どれか一つは再生する。意図的に回復を止めても、それは部分的な話。複数のケガを同時に、意識して治さないようにするのは至難の業である。

「あんたもその『復権派』の人間なのか?」

「わたしは違う、パパが…関わらせたくなかったから。外の情報もあまり詳しくは知らないの」

アウラは精神を病み入院した後、父と語らうことがあったという。

彼女の故郷がマーレという場所であることや、巨人化した父が向かった場所がパラディ島であるということ。

ずっと彼女が知りたかった「楽園送り」の時に、何が起こったのかも聞いた。

「兄さんが戦士になっていれば、巨人の力を得ていずれパラディ島へ攻め込んでくるとも、パパは語っていた」

「攻め込んでくるって……もし、かして、ウォールマリア陥落の事件って……!!」
「静かに、それ以上詮索したら君がどうなるかわからないから」

だが間違いなく、壁の崩壊は戦士の仕業で間違いないと、アウラは言う。

ここまで知られているとなると、アニとしては味方でも敵でも殺したい。縦え今まで喋っていないくとも、いつ気づき話すかわからない。不確定要素は抹消するべきだ。アニたちが「使命」を果たすために。

「どうしたの、アニちゃん？ 顔色が少し悪いよ？」

「いや、衝撃の内容すぎて、頭がついて行けてないんだ」

「そうだよね……。本当に誰にも言っちゃダメだよ？ お友だちにもね」

「……わかった。命は惜しいから、私も」

アニは懐にある刃物に意識を向けながら、いつでも殺せるよう頭の中で算段を立てる。ここまで裏路地であれば悲鳴も聞こえない。

彼女の体術で拘束し、急所に一刺し。それで終わりだ。あとは金目のものを奪い、強盗犯の所業に見せかければいい。憲兵もまさか子供がやったとは思わない。

「あんたの目的って何なんだ？ 兄に会うことなのだろうとは思うけど」

「……そうだね、ジーク兄さんに会う」

「その戦士が来てるなら、壁内に紛れ込んでる可能性もありそうだね」

「うーん、それは半々かな。いて欲しいとは思うけど……」

「仮に会えたらどうする気なんだ、あんた」

「兄さんに会えたら？会えたら、してもらうことは決まってるよ」

アウラは微笑んだ。周囲を囲む路地裏の上から差した光が彼女に当たり、顔を半分だけ照らす。

女の頭につけられたバンダナが、やけにその白さを際立たせた。

儂げな女の表情に、アニの中で例えようのない感覚が胃から迫り上がってくる。その感情が混ざり合って気持ち悪さが増していくが、目を逸らすことができない。否、許さ
れない。

「殺してもらうんだ。きつとお兄さまは、「私」を憎んでいるから」

アニは目の前の得体の知れぬ女のその表情に、しばし魅入ってしまった直後。金縛りが解けた瞬間殺すことも忘れ、勢いよく駆け出した。

またゾワゾワと悪寒が駆け上がり、吐き気を抑えるように生唾を飲み込む。

女がひたすらに死にたがっているのはわかった。死にたくて死にたくて、今にも死にたい。

だが死ぬための相手がないから死ねない。実に気色悪い。

殺そうと思う裏で、頭の隅では「利用することもできるのではないか？」と、考え始めてもいた。

同情を誘うつもりが、いつの間にかアウラに同情していたのはアニの方だったのである。それも仕方なからう。

親の都合でかき回された人生。そこから生まれた歪な人格は、死を希求してやまない哀れな存在となった。

「あんなの、利用できるわけがない…!!」

恐ろしいのは誰かに心臓を捧げる者でも、確固たる目的をもつて生きようとする者でもない。

アニが一番恐怖に感じるのは、死にたいと考えている人間。彼らは何だってできる。「死にたい」というその他全てを退けるエゴをもって、誰かが傷つくことも厭わず、死へ向かって進む。

ゆえに、怖い。そんな女を利用すれば被害はきつとアニたちにも訪れる。

ならば殺してしまえばよかったのだ。だが殺すことができなかった。殺してはいけないと思つた。

あの女を殺せば、アニはアウラ・イエーガーを殺したことになる、女と血で染まつた繋がりができてしまう。

あの人間は関わりを持つことさえ、全力で避けるべきだ。彼女と相対したアニの直感が、そう言つた。その方が絶対に、円滑に戦士たちの使命が進められる。

アニの直感をよく当たる。それを踏まえて敵対することはない、と二人に告げれば納得するだろう。元々ベルトルトはアニの発言にイエスマンであるし、ライナーはやたらアウラと出会つていけないのにも関わらず、「大丈夫だろう」と言つていた。

何を根拠に——と思うが、ライナーはアニたちが避けていたジーク戦士長の妹の話題を、唯一本人から聞いた人間である。何かライナーに思うところがあつたのだろう。とにかくアニは一刻も早く、女の微笑みを脳内から消すべく駆け続けた。

あの女は——アウラ・イエーガーは、得体の知れない存在どころではない。女の名前を知り、そして関わることをすらタブーとすべきナニカだ。

そんな女とまた関わってしまった事実には、アニはひたすら泣きたい。歯をガチガチ震わせたことなど久しぶりだ。

今度女と接触せねばならない時は、ベルトルト……いや、ライナーに任せよう——と、強く心に誓った。

タイム風呂敷〜!

私、アウラ・イエーガーちゃん。

自分を「ちゃん」付けできる年齢ではなくなりましたが、平気で言えちゃう調査兵団第五班の副分隊長である。

いやあ、あんなに小さかったエレンくんがもうすぐ訓練兵団を卒業するなんて、時が経つのは早いですね。身長もギリギリ私の方が高いですが、ほとんど同じ大きさになってしまった。ミカサちゃんも弟の友人のアルミンくんも大きくなった。特にミカサちゃんは、服の上からでもわかるほど筋肉の付きがいい。羨ましいです。

え、どうして彼らの様子を知ってるのかって？

確かに訓練兵は三年間寮住まいで、休日はあるものの家に帰ることはできません。自分を鍛えるために来たのに、家族が恋しくなるなんて、そんな甘い精神不需要ですから。しかし許可を取って、外出することくらいはできる。もちろん休みの間に帰って来なければ即開拓地送りになります。

私が弟たちの状況を知っているのは、キース教官に会いに行っているからです。

きちんと教官に許可を取り、空いている時間に会っているので問題ないです。ついでに話すことは現在の調査兵団の状態や、副分隊長として班をまとめるアドバイス。壁内の内情に雑談など。

通常ならキース教官が一副分隊長に会うことはありません。しかし私のことを幼い頃から知っているからか、例外としてかなり寛容的。

また彼は、弟がいるから私が訪れている、ということもわかっているでしょう。

人柄を見定める目は、エルヴィン団長よりも長けている。私の場合は幼い頃から接している、つまり距離が近すぎるゆえ、本質に気づきにくい。何か違和感に感じても、私には精神疾患の理由がありませんから。

ただブラコンなのは見抜かれている。ついでに「家族」に執着していることも。

キース教官は私が家族と会うことで精神を安定させていると思っているようなので、それもまた駐屯地に訓練兵ではない人間が来ることを、許容する理由になっているのかと。

でもまさか弟と同期の第104期生に、戦士たち——アニちゃんとベルトルトくん、それともう一人の仲間らしいライナーくんがいるとは思わなかった。

名前は聞いていませんでしたが、唯一ベルトルトくんがずっと共に行動しているのがライナーくんだったので、間違いないかと。

それに屈強な身体が正しく「鎧」の巨人にピッタリだ。

三人とも成績優秀者であり、私がキース教官に聞かずとも、見どころある訓練兵の一人として各々説明を受けた。104期は粒ぞろいで、教官も教育のしがいがあると語っていた。

おじさんからはまた、マリア陥落時アウラちゃんが行方不明となった影響もあり、エレンの訓練兵団入りの試験が落ちるよう、意図的に細工をしてしまったことを告白された。

弟が試験に合格してから、一年以上経った後のことだ。

私以上に弟は向こう見ずで危うい。それを一番最初の「通過儀礼」で、おじさんは弟から感じとった。

さらにカルラを救えなかったことも含めて、己は無力でしかないただの人間である——と。

今まで溜まりに溜まった後悔の念や悲痛な思いが爆発して、完全なる鬱状態。だから

たった数年で頭が寒くなったのですね。

そんな鬱おじさんに私はクソのような善人ぶりで肯定し、これまでの彼の努力は調査兵団が前へ進む力となつている云々——と語つた。

こういつた際、「そんなことない！あなたはもつと頑張れる！」などと励ますのはNG。鬱な相手には追い討ちとなつて自死へ近づけてしまいます。

“死”とは感情というしがらみからの解放でもありませんから、大変困る。地獄のような現実で生きて、苦しんでもらわなくては。

大切なのは認めることです。死にたい気持ちも込みで全て肯定してあげる。そうすることで前へ向きやる一歩を進ませることが出来る。

そして、私は続けた。

人材の育成の道を選んだキース教官は、少なくともただの人間ではない。エルヴィン団長とは異なつた視点で、人を歩ませることが出来る力を持つているのだ——と。

その上で弟のことをお願いした。精神的に重荷をかけるためですね。おじさんのことは本当に尊敬しているので、これからも頑張つて欲しいです。

だつて育てた兵士は、多かれ少なかれ死んでいくんですよ？むしろガンガン人が死ぬ調査兵団に入っている私から見れば、ある程度育てられた人間を補給してくれる恩人に

見える。

そうしていつまでも誰かの犠牲の上で生きていてください、キースおじさん（ニチャア…）

閑話休題。

して、戦士たちの話に戻りますが、数年前にアニちゃんが接触してきて以降、それ以上私に関わつてくるものがなくなつた。無害認定されたのかは不明ですが、一先ずこちらを殺して来ないようなので放つておいた。

駐屯地に向かい偶然顔を見た際は、弟の「!!」の反応はさておき、アニちゃんが死にそうな顔、ベルくんが純粹に驚いた風で、ライナーくんは口を開けたまま固まっていた。アニちゃんに関しては、どうも私を怖がっているご様子。だから過去に接近してきた後も、突然逃げ出したんですね。

「私」という精神が、異常であることを察した。

ただし、人の不幸で飯がうまくなる歪んだ人格には気づいていない。だがその片鱗を、彼女は感じて逃げた。

でなければ逃げないでしょう。あくまでも私はかわいそうなアウラちゃんを装つただけですから。

彼女の姿勢から、徹底的に私との接触を避けたがっているように見える。最初目が合ってから、一切合いませんでした。まあ正解ですね、その判断は。

私と距離が近いほど、不幸はより最悪の形で舞い降りる。他人には絶対に理解されない私の人間性。人は理解できぬものを恐れるものですから、仕方ない。でもアニちゃんの曇り顔も私、見てみたいです。

それと薄々お気づきかもしれませんが、アニちゃんが逃げた後から、いきなり時間が飛んでね？——と、お思いになった方がいらっしやるでしょう。

ですが特筆して説明するようなイベントが、何もなかったんですよ。

お兄さまがおらず、壁外調査。お兄さまがおらず、壁外調査。

その間変態に巨人トークを迫られ^らたり、兵長の舌打ちを食らったり、変態に巨人トークry、^ら「オルオ」というおじさんにしか見えない年下に告白されたり、変態にry。

そうしてあつという間に三年以上経っていた。

アウラちゃんももう22歳ですよ？お父さまだったら、既にお兄さまが生まれていた

年齢ですし。時の流れは残酷です。

本当いつになったら私はお兄さまに会えるのか。お兄さまが壁内にいないと認めざるを得なくなっている以上、次に起こる展開を待つしかない。

やたら「ジーク」と私の関係をアニちゃんが探っていたので、お兄さまが戦士になっているのはまず間違いのないと思いますが。

当時を思い返すと戦士が壁を全て破壊しなかったのは、恐らく壁の王の反応を見るため。

しかし壁の真の王たる「レイス家」は、お父さまによって殺され、始祖の巨人は現在行方不明となっている。

巨人化の力を持つ者が死ねば、その力はその人間が死んだ以降に生まれたエルディア人の赤ん坊に受け継がれることは、レイス家とお父さまが話していた内容で知っています。

仮にマーレで始祖を持つ子供が生まれていれば、すぐに政府はその子供を使って、パラディ島に来ていたはず。

ですが今でも新たな侵攻がないということは、壁内の赤ん坊が持つて生まれた可能性がある。

その力があると知らないまま生きているのか、隠しながら生きているのかはわかりませんが。

マーレ以外の国のエルディア人が持つて生まれた可能性も無きにしても非ですが、諸外国ではエルディア人は過去に多くの人間たちを侵略し虐殺したことにより、想像以上のヘイトを食らっている。

それこそ争いばかりの人間が、エルディア人を全滅させる——という目的を持てば、一致団結するくらいには。

それを踏まえ諸外国のエルディア人の場合、マーレ以上の迫害を受ける。

だからこそ強制収用区にいるエルディア人は、マーレの外へ出て逃げていこうとする人が全くないのだ。

つまりマーレとパラダイ島以外で生活しているエルディア人は極端に少なく、さらに生まれる赤ん坊となれば数が限られる。

ゆえに私の中ではフリーダ・レイスが死んで以降の、パラダイ島で生まれた子供が始祖の力を持っている可能性が高いと考えている。

…いえ、そもそも始祖の力は王家の人間しか力の真価を發揮できないようですから、

仮にどの人間に渡っても意味がないか。どんなに驚異的な力でも、使えなければ宝の持ち腐れ。

ただ使えずともマールで始祖が見つかった場合は、確実に攻めてくる。方法はわかりませんが、巨人化能力者を調べる方法があるようなので。恐らくは、血液検査などを使った方法だと思います。

壁の中にマールが恐れる一番の脅威がいなくなると、攻め放題の殺り放題。以上からも、マールで見つからないのは確かでしょう。

お父さまもフリーダ・レイスまで殺さなくてもよかったのに。いや、お父さまの記憶を改ざんされる前に倒せたのはよかったのか。戦わずとも、始祖の力があれば簡単にお父さまを無力化できたはず。

それができなかつたということは、フリーダが力をまだ使いこなせなかつた——その可能性が高い。

難しいところですね。例えばお父さまが彼女を食っていたら、始祖の力を手に入れることができたのか。それとも「進撃」の力がある以上得ることはできない。要するに、二つ以上の力を同時に所有することはできないのか。

教えて！ユミル大先生！と行きたいですが、ダウパー村の住民を記憶改ざんしていた

ところを見かけて以降出てきていない。私自身砂と光の柱の世界に行っていない。

——ん？記憶改ざん？それって、始祖の力の一つで…。

ああ、なるほど。ユミルちゃんが始祖の力を取り戻した可能性もあるのか。肉体がな
い以上巨人化することはできないと思いますが、記憶改ざんなどの力は使えると。最強
かな？

であれば殺すことを躊躇っていたお父さまが、ユミルちゃんと出会った後突然巨人化
し、父親以外のレイス家を皆殺しした理由も見えてくる。

不思議に思っていました。恐らくユミルちゃんに殺すよう応援されたのでしよう。
息子を犠牲にし、妻を亡くして娘まで失った。しかし止まってしまえば、グリシャ・
イエーガーが進み続けてきた意味が途端に泡沫の泡と化す。

そうして元に戻った始祖の力をユミルちゃんがどう使うかはわかりませんが、私とお
兄さまの関係は邪魔しなければ、好きなようにやっていただいて構わないです。

まあ一つ気がかりなのはレイス家の父親だけ何故お父様が殺し損ねたかですが、それ
もまた何か意図があるのか。一応始祖の巨人を受け継がせるスペアを、残しておきた
かったのかもしれないね。

一先ず私は間もなく調査兵団に確定で入ってくる二人——弟と義妹に、何を祝いとしてプレゼントしようか考える。

脳内と同じく訓練兵団にいた猛獣少女が「肉ください!!」と言ってきましたが無視。弟にはカルラママ直伝の料理で、ミカサちゃんやんは彼女に似合う可愛らしい服でいいかな。エレンくんはあまり物に固執するタイプではないので、チョイスが難しい。

なので懐かしい母の味を思い出させて、泣かせましょう(ゲス) ついでに今日くらい甘えていいんやで?と、やさしいお姉ちゃんムーブをかまそうと思いません。

「……………ハア」

ウォールマリア陥落からもう少しで5年。巨人継承者の13年という寿命を考えれば、お兄さまはあと数年も生きられない。

早く、早く会いたい。明日人類が減んでも、構わないから。

濁りし翡翠の眼

ある日の対人格闘戦の授業において。

エレンはみんなの兄貴分、ライナー・ブラウンとペアを組んでいた。だが現在のエレンは思考が鈍っている。その原因は授業が開始する前、訓練場に集まっていた時にまで遡る。

まだ人が全員が集まっていない中、エレンはミカサやアルミンと雑談していた。

「…エレン、この間みたいにあニとは組まないで」

「オレがボコボコにされてたからか？大丈夫だって、お前は心配しすぎなんだよ」

「……………」

ムウと、口を尖らせるミカサ。二人の様子を見ていたアルミンは、相変わらず乙女心に疎い友人のため息をつく。

エレンは同期の間で猪突猛進な「駆逐野郎」でかなり引かれがちだが、顔の容姿は母親に似て端正で、裏では女子にかなりモテている。それを彼女らが口に出さないのは、エレンセコムがいるからに他ならない。

「…あれ？」

アルミンは仲睦まじい友人二人から視線を外した際、不意にキースの元へ近づくと別の教官の男と、その教官の後ろに付いて歩くフードをかぶった人物に目を留める。

深緑のマントを羽織る兵団の人間はそう多くない。目を凝らせば、背中に見えたのは羽の刺繍。調査兵団だ。外部の人間が訪れるのはかなり珍しい。

「エレン見て見て！調査兵団だよ！」

「はあ？……本当だ！」

憧れの調査兵団に翡翠の瞳が輝く。「カッケエ…」と呟くエレンの姿を、隣でミカサは少し頬を染めて見つめた。

「でも、何で調査兵団の人間が来てるんだ？」

「理由はわからないけれど、教官に何かしら用があるみたいなのは確かだよね」

キース・シャーデイスが、元調査兵団の団長であることを知らない彼ら。

三人の視線を集める調査兵団の人物は、キース教官の元に着くとフードを取り、敬礼のポーズを取る。流石訓練兵を終えて巨人と戦う人間と言うべきか、後ろ姿でも堂々たる姿が美しい。

背中を覆う長く色素の濃い髪が、風に揺れたなびいた。体型がフードに隠れ見えなかつたが、女性だ。

キース教官と一言二言話すと、女性は彼女を連れてきた教官の後に続き戻っていく。その姿を目で追う三人の表情はそれぞれ固まっている。ちょうどその時、女性と瞳が合ったエレン。瞬間女性が少し口角を上げ微笑する。

途端に顔がボツと、熱くなった。トキメキではない羞恥心で。

(姉さんンンンン!!?)

キースの元を訪れていたのはエレンの姉、アウラ・イエーガーであった。固まっていたエレンがミカサを見れば同じように驚いており、アルミンに至っては石像ミンに。こ
うかは ばつぐんだ! ▼

そんな初っ端からのパンチを食らった後、対人戦の授業に入り、ライナーがエレンに話しかけてきてペアを組むことになったというわけだ。

ライナーやベルトルトとは以前、エレンが調査兵団を目指す理由になった母の死や、弟以上に死に急ぎ野郎(とエレンが思っているだけで、ミカサやアルミンは思慮深さが姉より劣る分、エレンの方が危なっかしいと思っている)の姉を守りたいから——と話
し合った仲。

一方で、ライナーたちの「故郷に帰るため兵士を志願した」という話も聞いている。当時立体機動をうまく操作できず、ひどく落ち込んでいた時に励ましてくれた二人に、エレンは感謝していた。

ライナーたちはエレンと同じ、シガンシナ区が大型巨人に襲われた際現場にいた。つまり「オレおま同じ」というわけである。

またベルトルトはエレンの「イエーガー」姓に興味があったのか、兄弟がいるかにについても聞いてきた。

曰くシガンシナで知人と二人でいた際、調査兵団の女性に助けられたらしい。後で調べると、その女性が調査兵団随一のビジンと謳われる「アウラ・イエーガー」であることを知った。

当時のアウラは頭をケガし混乱状態にあつたので、ベルトルトたちのことは覚えていないかもしれない——とも付け加えて。

弟としては姉が助けた人物と出会えたこと。そして姉が人の命を救った事実を、込み上げるものがある。

否定することでもないゆえエレンは、アウラ・イエーガーが自身の姉であることを、ベルトルトとライナーに伝えた。ただし、腹違いの姉であると。それに二人は驚いた表情

をし、しばらくお互いの顔を見合っていた。

ライナーが少し図々しくエレンと姉の過去を尋ねてもきたが、彼は姉と腹違いである事実と、彼女が過去のトラウマを抱え精神が脆いことしか知らない。

そのためエレンはそれ以上詳しく語ることはできなかった。

結局今でも、アウラにどんな過去があつたのかはわからない。しかし知る必要はないと思っている。知ってまた姉が発狂してしまうくらいなら。

暗い表情を浮かべたエレンにベルトルトはライナーを諫め、ライナーもまた他人の事情に深入りすぎたことに謝罪した。

この時戦士二人の意見は概ね一致していた。アニに語ったアウラ・イエーガーの話が、一部ではあるが合っていたことを。

つまりその部分だけでも、嘘を吐いていなかったということになる。

またエレンの様子から、壁外の情報は全く知らないのだと推測できた。良くも悪くも、訓練兵団随一の進撃野郎。嘘をつけばすぐに顔に出る。

エレンは所詮壁内で生まれ育った人間でしかなく、それ以上の存在ではないのだから。

また「進撃」の力を父から受け継ぎ有している可能性のあるエレンが、巨人の力を使つたことはない。以前ケガをした際も、急速に治ることはなかった。

戦士たちの課題は「始祖」を探しつつ、もし手に入れられなかった保険として、「進撃」を確保しておきたいところ。

「進撃」の候補は今のところエレンとアウラ。だがエレンは期待薄だ。ならばアウラを探るべきだが、アニが完全にノータッチと来ている。少なくとも戦士の敵になることはない、と彼女は語っていた。

まあ今はわからずとも、戦士たちが動けば進撃や始祖を持つ人間に、動かざるを得なくなる状況ができる。その来るべき好機まで、息を潜めて待つのだ。

「……なあ、エレン」

授業中、ライナーは神妙な面持ちでエレンに話しかける。

「なんだよ、ライナー」

「お前、さっきの調査兵団の女見たか？」

「見たけど、それがどうしたんだよ」

「……………すげえ、可愛くなかったか」

「……………」

みんなの兄貴分のライナーが、頬を少し赤く染めている。確かにエレンは石像ミンダけでなく、周囲の数人の訓練兵の男たちがアウラに見惚れているのをみた。

だがいくら美人でも己の姉。ときめくわけがない。

「あれ、オレの姉さんだから」

「そうなの……………はあ!？」

「…ああ、姉さんに助けてもらったのはベルトルトだったけど、ライナーは違かったんだっけ」

「実際に顔を見たことはないが……………そうか、あの女が……………」

ライナーは今日一番の真剣な表情で考え込み、エレンに視線を向ける。きつと他の女性だったら黄色い声をあげていた。訓練兵の裏でモテるのがエレンなら、表でモテるのがライナーだ。

「……………いるのか」

「は?もつと大きな声で言えよ」

「アウラ——いや、アウラさんか?彼女にいるのか、男つて」

「……………いねえと思うけど」

「そ、そうか!そうか……………」

何が「そうか！」なのだろう。エレンの翡翠の目がどんどん濁っていく。

尊敬している男が姉に惚れてしまったらしい今、この時。どんな表情をすればいいのかわからない。とにかくとても複雑な心境である。

お前の好きになった女はブラコンだ、と告げればよいのか。それとも、未だ一度もアウラに話せたことがないアルミンライバルがいることを伝えればいいのか。

いや、そもそもハンネスから聞いた話によれば――、

「付き合ってるかどうかはわからねえけど、愛している人はいるらしいぜ？」

「……なん……だと……」

「5年くらい前の話だけだな」

「……なんだ、じゃあ今どうなっているかはわからないな」

「……………」

「何だよエレン、その何か言いたそうな目は」

「別に、何でもねえよ。ただオレはいずれお前を、に義兄さんい”と呼ぶ日が来るかもしれないと思つてな」

「バ、バカ野郎！ 気が早エよ!!」

頼れる兄貴もやはり年頃の男の子だった。顔を先より真っ赤にして否定の言葉を呟

いている。

そんな兄貴を無視し、エレンはぼんやり空を見上げた。彼もまたハンネスから姉に意中の人がいると知った時は、驚いたものだ。それも相当入れ込んでいるらしい。ハンネスに語った時のアウラの顔は、恋する乙女そのものだったそうだから。

まさか信じられない。弟にデレデレの姉に好きな男。モヤモヤとした感情が、少年の中で渦巻く。その様子を片想いミンが見たのなら、「エレンもシスコンなんだよ」と、絶妙なゲス顔でモヤモヤが起きる原因を教えてくださいるだろう。

「うおっ」

その時エレンの背中に誰かがぶつかつた。ぼんやりと立っていたいせいで周囲に気を遣うのを忘れていた。

少年が振り向けば、そこにいたのは冷たい表情（いつものことだ）のアニ。ぶつかつたせいか眉間にシワが寄っており、静かにエレンのことを見つめている。

「おっ、アニじゃねえか。暇してるなら手合わせしようぜ」

「…私はパス。それより授業中に恋愛話なんて、あんたの方がよっぽどヒマでしようがないみたいだね、ライナー」

「そう言うなって…仕方ないだろ、なあエレン？ あんな美人な女が来ちゃあ、話題にしない方がおかしい」

エレンの肩に腕を回すライナー。アニは鼻で笑い、翡翠の色を死んだ魚のような瞳に変えているエレンに近づく。

彼女の青い瞳にはうつすらと同情心が滲み出ていた。

「愛している人……か」

「聞いてたのかよ、オレとライナーの話」

「少しね。対人戦なんて今更学ぶこともないから」

愛している人。それが誰なのか、アニならわかる。間近でアウラ・イエーガーの狂気の片鱗を味わってしまった、彼女だからこそ。

「あんた、頑張りなよ」

そう言い残し、アニは二人の元を去って行った。

生まれ持った血の繋がりがエレンとあの女にはある。それだけでエレンが哀れで仕方なく、アニの瞳には映るのだ。

彼女と違い逃げることは絶対にできない。人間の狂気たる深淵の部分が、これからもエレンには付きまとう。さらさら助ける気はないが。

それでもアニは、「頑張りなよ」と忠告はした。

(まあそれ以上に同情するのは、戦士長だけだ)

本当にどうやったらあそこまで、アウラ・イエーガーに偏愛されることになるのだろう。

エレンが言っていた女の「愛している人」は間違いなくジークだ。エレン以上に絶対に逃げられない。何なら来世まで付きまとわれそうだ。未恐ろしい限りである。

それにライナーもライナーだ。アウラを見た時完全に心が奪われていた。恋する人間を間違えている。

マルセルの一件以来、アニの中でライナーというドベ野郎は、視界に入れたら殴りたいランキング1位に入っている。何なら時折どうやって殺そうか、真剣に悩む時もある。

それでも頼れる仲間が自分を含めて三人しかない以上、見捨てるわけにもいかない。

王政に近づきやすいからと憲兵になるため訓練兵団に入った以上、まだしばらく壁内に留まらなければならぬだろう。その期間ライナーがアウラと接近してしまうのかと思うと胃が痛い。ひたすらに家に帰って父に会いたい。

「ハア……」

それでも使命のため、アニやベルトルト、ライナーたちは進む。

深くため息をついた後ろでは、どこからともなく現れたアルミンが、ライナーにアウラ・イエーガーに意中の人がいることを例に挙げ、恋が実る可能性がどれだけ低いかを理路整然と語っていた。

「……まさかアルミンもかい」

アニは少し傷ついた。女性の魅力が自分にはあまりないのだろうか——と。

そんな彼女の様子を見つめている少年がいることに気づかずに。

「アニ暗い顔をしてるけど、どうしたんだろ……」

兵士を目指し日々励む少年少女たちの裏では、甘酸っぱい色恋沙汰が展開されている模様である。

【四章】もうマヂ無理。編

電池が切れた時計の針は

私、アウラちゃん、結婚適齢期の22歳。

あ、ありのまま今起こったことを話すぜ！私は壁外調査に向かっていた。

しかしトロスト区方面から突如、5年前シガンシナ区で確認された謎の落雷が発生。超大型巨人が現れた前兆である。異常を察知し、早急にトロスト区へ出戻ることとなった。

トロスト区には現在第104期の訓練兵がいる。エレンくんやミカサちゃんたちがいるわけだ。そしてもちろん戦士三人も。

「鎧」が恐らくライナーくんなので、「超大型」はベルくんかアニちゃん。アニちゃんはお柄なので、超大型のイメージはあまり似つかわしくない。

例えばライナーくんならキース教官の話によれば、屈強な身体を生かしたパワーが凄まじい。正しく強固な身体を活かして内門を破壊した「鎧」の巨人に相応しいと言える。そう考えると、戦士は彼らの得意とする分野を活かした力を継承していると考ええるの

が無難。

アニちゃん是对人戦において、ミカサちゃんと同率首位の人間。また教官からも彼女は何でも卒なくこなす、バランスがいい人間だと言われていた。

ゆえに破壊神のような超大型を継承させるには、少し合わない気がする。

となると残すはベルくん。彼の身長的にも「超大型」は相応しいのではないだろうか。ぜひ機会があれば壁を破壊し、壁内の人類が多く死ぬ原因となった彼に、当時どんな気持ちだったのか知りたいですね。

マーレはエルディア人の子供に、ユミルの民Ⅱ「悪魔の民」とする洗脳的な教育を行う。

きつと最初こそ彼らは「正義」を理由に、パラダイ島の人間を殺すことにそこまで大きな罪悪感を抱いていなかったでしょう。それよりも課せられた「使命」の重圧感が大きかったに違いない。

しかし5年近く壁内に紛れて住み、生きてきた彼ら。

果たして今でも正義を盾に進むことができるのでしょうか。何せ104期生である彼らには、三年間苦楽を共にした仲間がいるのだ。少なからず情は移っている。しかしそんなお仲間がいながら「超大型」巨人が出現したということは、仲間が死ぬのも厭わ

ない覚悟がある。

実に美しい。仲間が巨人に殺される様を見ながら、自分たちは「使命」のために心を殺して始祖の奪還を目指す。

もつともつと多くの骸を作るといい。

さすれば彼らの「罪」は大きくなり、いずれその罪と向き合う機会ができた時、彼らの心は壊れる。存分に苦しんでください。

そして犠牲を増やすほど、憎しみが生まれ争いが起こる。

正しく「負」の連鎖。

戦士の行いは、私にとってご飯を与える親鳥。私はパイパイと鳴く雛だ。

して、エルヴィン団長指揮の下。調査兵団はトロスト区へ急いで出戻ること。

着き次第、駐屯兵団に加勢。しかし壁の穴の部分には巨人が複数体いるため、そこからの侵入は不可能とされた。

となれば、大きく迂回し、東のカラネス区から入らねばならない。だが一分一秒も時間が惜しい状況。

馬を飛ばしトロスト区の壁に到着すると、馬を残して精鋭メンバーが先陣をきった。

当たり前のようにリヴァイが先陣へ。またN.O. 2の強さを誇るミケ分隊長も。

そして私もそのメンバーに選ばれた。やったぜヒーヒー！これで混乱する壁内の住民や、駐屯兵団の皆様が見られますね。

訓練兵もいきなり実戦に駆り出され、かなりの人間が犠牲になっていることでしょう。

調査兵団でも通常なら新兵はいきなり壁外調査に出ず、シミュレーションや演習を通して、いざ本番に駆り出されますから。

104期生N.O. 1のミカサちゃんはまず間違いなく心配ない。弟は少し気になります。お父さまから継承している「進撃」があるので最悪大丈夫でしょう。

ただ戦士がいるので、エレンくんが巨人化した場合かなり面倒なことに。

向こうはエレンが「進撃」か「始祖」のどちらかだと思う。

まあ私が父親の力をアニちゃんに話していた以上、継承者の候補に私やエレンくんが入っているはず。以前から怪しまれていたのは間違いはない。

エレンくんがマーレへお持ち帰りされてしまった場合その力が、別の人間へ継承される。

ただここで一つ問題なのは、フクロウ↓お父さま↓エレンくんへと継承した力につい

て。マーレからパラディ島へ移った力が、ずっと壁内に存在していた「始祖」であるとは考えにくい。

「進撃」か「始祖」のどちらかとは言いましたが、実際戦士たちはエレンが力を使えば、ほぼ間違いなく「進撃」であると考えられる可能性が高い。

となると、「始祖」は何処？という話になる。「進撃」が土産になるでしょうが、戦士の目的は「始祖」の奪還。

エレンの力が判明しても、すぐに弟をさらって帰ることはないはずだ。始祖に繋がるヒントを得るまでは、粘ってくれ。

最悪、弟が連れて行かれる時は私も行きます。というか絶対に行きます。

しかし願わくば戦士たちを手こずらせ、マーレ政府を焦れさせたい。

さすれば援軍の戦士が来る可能性がある。既に5年経っているので、そろそろ上層部も「アイツら何やってんだ？」となっていることでしょう。

壁内には電気もないですし、外部と連絡する手段もない。ただ向こうは待つしかないのです。戦士たちの帰還を。

そして援軍が来れば、ずっと探しても見つからなかったお兄さまが来る可能性がある。る。

結果、戦う私^{兵士}とお兄さま^{戦士}の最高な構図が出来上がってしまうわけです。グフフ。

そして着いた現場。

駐屯兵団の「超大型が出現。人間が巨人になった——」という端的な話だけ聞いて、巨人狩りに行きました。

人間が巨人になったということは、戦士たちの正体がバレてしまったのだろうか。しかし、何かやたら隅に巨人が多い。死体から湧いてるうじ虫かな？

その上でアンカーを壁にかけ、巨人を誘き寄せているのは、駐屯の人間たち。壁の方に向かっているのは岩を持った巨人ですね。

——ん？

んん？エレンくんが巨人化してるな？遠くからでもわかります。お父さまと似た尖った耳と、愛らしい印象はまさしく我が弟。

人間が巨人化した……って、YOUユウだったのかよ。

ただビッグエレンくん、毛深くはありません。少し残念です。

鍛え上げられた美しいシックスパックが、大岩を持ち上げる動きと連動してイキイキ

と躍動しています。舐め回したいですね。

……えっ？お前ハンジ変態以上に変態なことを、考えてないかって？

こんなことで根を上げてたら、私がお兄さまにあった後、『したい・されたいことリスト♡』の内容を知ったら発狂しますよ。

それにしてもビッグエレンくん、顔もイケメンだ。

アウラちゃんの恋が——始まりません。お兄さまとしかアウラちゃんのラブストーリーは始まらないんだよ。

一先ず兵長とミケ分隊長たちとは違う方角に行き、時折弟に視線を奪われながら巨人を駆逐していく。

どうやらビッグエレンくんが持っている岩で、壁の穴を塞ごうとしているみたいですね。

コーナーに湧くうじ虫巨人はエレンくんから巨人を遠ざけるため、人間をエサにしてホイホイしている模様。

しかしそれで完全とは行かないので、エレン巨人の周囲を兵士が飛び回り、巨人を駆逐して道を作っている。

私も弟の方が気になりますが、向こうは人類最強が向かったので大丈夫です。

それよりも気になるのは戦士たちの居場所。

特に壁を壊したと思われる、超大型くんの様子を窺いたい。どんなお顔をしているのか、ぜひ私に拝ませてください（ネッチョオ…）

「あっ」

高い建物に乗り周囲を見渡しましたらいました。ちようど三人揃っていますね。

いや、もう一人いるので四人か。

この状況下で気づかれないだろうとはいえ、相談する場所は気をつけた方がいいですよ。

状況的に後ろ姿が見えるライナーくんが見覚えのない男の子を羽交締めにして、正面にいるアニちゃんに何かを言っている。

ベルくんはライナーくんの隣で突っ立ったままだ。盛大な賢者タイムでしょうか。

私はガスを高速で噴出し、四人の元へ向かった。

??????

「何…してるの？」

ライナーがアニに、マルコの立体機動装置を外すよう叫んでいた中。ライナーの背後から現れたのは、調査兵団のマントをなびかせる女。

屋根の急斜面に足を滑らせないよう大股気味に開きながら、白銅色の瞳を四人に向けている。

彼らの現状を説明すると、ライナーとベルトルトが巨人化したエレンや壁についてどうするか話し合っていた中、マルコが来た。

単なる雑談話を聞かれたのなら、まだいい。

しかしマルコは二人がイコールで、「巨人になれる」というワードを耳にしてしまった。

エレンが巨人化したということはつまり、人が巨人になれるということ。

また5年前、突如現れ消えた超大型巨人を踏まえ、マルコは二人がエレンと同じ巨人化能力者——壁を破壊した人物たちであると行き着いてしまった。

その優秀な頭脳は、アルミンにさえ引けを取るまい。だが優秀すぎたのが仇となった。

正体を知られた以上殺すしかない。そんな折アニが訪れたのである。

マルコは助けを求めたが、アニもまたライナー側。無慈悲な現状が展開されるのみ。そしてライナーはアニが同期を助けたことを指摘し、「戦士」としての覚悟を証明するよう、マルコの立体機動装置を外せ、と彼女に言った。

正しくその時である、女が現れたのは。

「……いた、たす、助けてくれ……!!」

マルコは恐怖に震えながらも、必死に叫ぶ。

ライナーが口を塞ごうとした手を、顔を振り乱すことで避け、ライナーやベルトルトが壁を破壊した犯人である可能性も告げる。

「……ッ、う」

アニはライナーの背後にいる女性から距離を置くように、数歩下がった。その身体はひどく震えている。

対しベルトルトは沈黙。ライナーは瞳を丸くした後、鋭い表情に変わった。

「遠くから「戦士」って聞こえたけれど……」

「……ベルトルト、この女を抑えろ。アニは早くマルコの立体機動装置を奪え!!」

「で、でもライナー……」

「知られた以上殺すしかない。だからッ——」

ライナーの言葉が途中で止まる。女が一步彼らの元へ近づいたからだ。

それも、ここに来る前にいくつもの巨人を狩った、少し刃こぼれしたブレードをしまつて。

握つたままならわかる。しかし、その刃を収めた意図が読めない。

「えつと……以前にもアニちゃんとベルトルトくんには会つたよね、覚えてるかな？」

「……アウラ・イエーガー。あのエレン駆逐野郎の姉だろ」

「そうそう！前に会つた時アニちゃん急に逃げちゃつて、ビックリしたんだから」

「……私は二度と会いたくなかつたよ、あんたに」

少し困つた表情を浮かべながら近づくアウラ。異様な状況だというのに、そのことに対し全く反応を見せていない。

彼女の表情はあくまでアニに対し向けられているもの。マルコの状況に対してではない。

「それ以上近づくな！」

大声を上げたのはライナー。マルコの首を腕で締めながら、アウラを睨め付ける。

「君が……ライナー・ブラウンだね。キース教官からみんなの頼もしい兄貴分で、成績も二番目にいいって聞いているよ。それで、そばかすの君は……確かマルコ・ポットかな？洞察

力と判断力に長けている子だっけ」

「あなたは……！前にキース教官に会いに来てた……!!」

「そうです、わたしがエレンくんのお姉ちゃんです」

「エレンのお姉ちゃん……!?!」

エレンの姉だったことは初耳らしい。マルコが驚愕の表情を見せる。いったいこの誰ミンが、変にアウラのことを勘ぐらないよう、多方面の男たちに釘を刺していたのだろうか。

だが彼はキツくなった首の締めつけに、うめき声を上げる。

「アウラ・イエーガー、一つ聞きたいことがある」

「何かな？」

ライナーはアウラが、エレンが巨人化の力を持っていたことを知っていたのか尋ねた。

それに彼女は首を横に振る。

駐屯兵団に先ほど聞いて、初めて知ったと。

また、援軍として巨人を狩っている際、四人の異様な光景を目にして急いでここへ来たことも告げた。

「…お前は、ジーク・イエーガーを知っているな」

「……………?!? 何言ってるんだい、ライナー!!」

「黙ってるアニ、俺はお前やベルトルトと違って、実際にアウラ・イエーガーと話したことはない。だから俺の目で見定める必要がある」

知っているか?の問いに、アウラは表情を消して頷く。

ライナーは自分たちがマーレから来た戦士であること。

そして、彼女の兄ジークが彼らのリーダー——「戦士長」であることも口にする。

「アニからお前の目的は聞いた。戦士長に殺されたいんだってな」

「…ええ、そうよ」

「生憎だが、戦士長は俺たちと共に壁内の侵攻には来ていない。それともう一つ」

「何かしら?」

「少なくとも戦士長は、妹のことを恨んでいない。むしろ今でも大切な妹として想っているだろうぜ。実際に俺は「アウラ・イエーガー」の名前を兄本人から聞いて、その時の戦士長の表情を見た。だから、わかる」

「……………「私」、を……………想ってる?」

「ああ」

「ジークお兄さまが?」

「…ああ」

呆然と口を開けたまま、固まったアウラ。それから動かなくなった女に、戦士たちはそれぞれ怪訝な表情を向ける。

直後女は、花が綻ぶばかりの笑顔を見せた。

目は水分を多く含ませ潤み、眉は八の字に、そして口元も堪えるように歪む。

アウラの変化を見て、ヒユウ、とか細かい息を漏らしたのはアニ。震えながら彼女はベルトルトの後ろに隠れた。

「ジークお兄さまが私を、私を愛^想して…なんて…：…そんな、そんな私、私——ツ!!」

アウラは口を抑え下を向き、屋根の上にへなへなと座り込んだ。

男たちには彼女が泣いているように見えただろう。

ジークは妹^{自分}を憎んでないなかった。むしろ愛していたのだと知り、嬉しさと悲しみが混ざり合った中で、涙を流しているのだ——と。

だがアニには別に見えた。底の見えない狂気の「愛」が感じられ、ただひたすらに気味が悪い。

「わ、悪かった。泣かせるつもりじゃなかったんだ…」

ライナーは戸惑いの声を上げた。彼はアウラの兄に抱く想いを利用し、味方側に引き抜けるかを考えた。

最初は殺すべきだと思った。しかしジークがかつて話した妹への想い。

そして、目の前の女が敢えて彼らの前で武器をしまった——つまりライナーたちに敵対しない、という意図を読み、考え直したのだ。

対話する必要があると。

気になる女性であるが、それは「戦士」として不必要な感情。ゆえにその点は割り切っていた。

アウラもまたライナーの意図を読み取ったようで、涙を袖で拭いながら立ち上がり、視線を向ける。

「アウラ・イエーガー、お前は壁内の人類を裏切る覚悟があるか？」

「……………」

「お前次第で、俺たちはジーク戦士長に会わせてやることもできる」

「……………する」

「え？」

「なんでも、何でもする。お兄さまに会えるなら」

縦え性処理役でも、何でも。ジーク・イーガーに、もう一度だけ会えるなら――

そう言い微笑んだアウラに、アニだけでなく全員の思考が停止した。

美しい女を我がモノにできたらどれだけ素晴らしいだろう、と。

そんな情欲に塗れた考えは、微塵も浮かんでこない。

ただ魅入ることしかできぬ。目を逸らせず、女の行動一つ一つを眺めることしか。

ライナーの元へ来たアウラはマルコの立体機動装置を外し始めた。

正気に戻ったマルコが抵抗するが、ライナーの拘束はびくともしない。

「私がやるッ!!!」

アニがその時叫んだ。アウラを押し退け外れかかっていた立体機動装置を外し、それを持ったままヨロヨロと後方へ二、三步下がる。

やるしかない。やるしかなかった。

異常な女がマルコの立体機動装置を外せば、アウラが戦士の味方であることの証明になつてしまう。それだけは避けたかった。

これ以上異常な女との関わりができるなど、御免だった。

「……壊れてるんだ」

ポツリと呟いたのは、ずっと喋らなかつたベルトルト。アウラを見て、次にアニに視線を向ける。

そしてもう一度、「壊れてるんだ」と呟く。

アニは理解した。ベルトルトはずっと、アニと近しい感覚を女から感じていたのだと。

アニは「イかれている」と感じているなら、ベルトルトは「壊れている」と感じていた。一見似ているが、しかしこの差は大きい。

アニはアウラの人間性の「狂気」たる部分を言い、ベルトルトは「精神」の部分について語っているのだ。

「アニ、下がろう。巨人が近づいてきてる。…それとライナー、アニの言うとおり彼女とは関係を持つべきではないと思う」

「それは…残念ね」

「精神の壊れた人間なんて、僕らは戦場の敵兵でも仲間でも、たくさん見てきた。でもあなたは僕が見た中で、一番壊れていると思う。壊されてしまった、が正しいのかもしれないけれど。でもあなたの過去に同情はしたくない。可哀想な人間なんて、この世には五万といえるから」

「君たちのことは、このことを含めて言わないよ？」

「ああ、言わないだろう。あなたの戦士長への想いは本当のようだから。彼の仲間である僕らに害をなすことはしない。するんだったら、とつくの昔に密告しているはずだしね」

「…そっか。ならせめてお兄さまに会ったら、私が生きていたことを伝えて」

「わかった。…ライナーも行こう」

「……だが、戦士長と…」

「彼女を故郷に連れて帰るって言うのかい？一度「楽園送り」にされた人間を？現実的な考えでないことくらいわかっているだろう、ライナー」

「だとしても、少しの時間でも会わせてやれるだろう」

「………僅かな時間の幸福を代償に、彼女に死ねって言うのか、君は」

「違ッ、俺は……！」

「アニも情に流されて仲間を助けた。でもそれはライナー、君もきつと同じだよ。頼むからもう行こう、これ以上固まっていると怪しまれる」

「……すまん、ベルトルト…」

アウラは瞳を大きくし、大人しかったベルトルトの一変した姿を見る。

やはりベルトルト・フーパーが間違いなく、「超大型」巨人だ。

そして継承した理由も、何となく察せた。

多くの人間を殺す立場である人間だからこそ、誰よりも冷静に、残酷になれる。言ってしまうえば精神が凶太く、そう簡単には揺るがない。

でなければ壁を壊しトロスト区の悲劇を作り出したばかりで、ここまで平静さを保てるわけがない。

彼女としては実に面白くないが。せつかくお兄さまと急接近できるチャンスを、逃したも同然。

ただし壁内にいないことや戦士どころか「戦士長」になっていたこと。そして一番のビッグサプライズ、兄がアウラのことをずっとその内の中で想い、飼い殺してくれていた事実。

その絶頂に、思わず素が出てしまい、そのまま泣きの演技でどうにか誤魔化した。

脳内ではずっと気持ち悪い笑い声が響きつばなし。誰もいなければ、ビツクリユートピアが裸足で逃げ出すレベルの狂乱美女ぶりを見せただろう。もちろんR規制である。

「まって…」

去っていく三人と一人に、かなり後方から声がかかる。マルコの声だ。

彼の前方にはライナーたちと、その少し後方で振り返ったアウラが見えている。

「まっつてよ……」

巨人の足音が近づき、屋根を揺らす。

「僕とは話し合つてないじゃないか……!!」

ライナー、アニ、ベルトルト。

一人一人の名をマルコは呟く。

何度も「まっつて」と声がかかる。

それに振り向くまいと堪えていた三人だったが、不意にマルコの声が止まり、ライナーが耐えきれず振り向いた。

続いてベルトルト、最後にしばらく時間が経つて、アニが振り向く。

まさしくちようど今、巨人に捕まれ食われんとするマルコ。

彼は口を開けたまま何も瞳に映すことがない。死にたくないと言きも、叫びも。

そのまま彼は、顔の右半分を巨人に噛みちぎられた。

悲鳴も上げないまま、その身体は巨人に食られ、顔の位置が動き瞳の先がライナーたちに向く。

血を噴きながらマルコ・ボットは、最期に呟いた。

「あ、ぐま、めっ」

——悪魔。

それはパラディ島の人間を「悪魔の末裔」と称する戦士たちにとって、この上ない皮肉である。

エルディア人はマーレ人に迫害されてきた。戦士となり名誉マーレ人となった三人もかつて幾度となく蔑まれ、汚い言葉や暴力を浴びせられてきた。

だが戦士となり生きる中で、彼らはどこか、自分たちとパラディ島の人間たちが違うと思っていた。

彼らの一族は少なくとも逃げず、マーレの下で管理されることになった。

対しパラディ島のエルディア人は逃げたのだ。フリッツ王の甘言に従い、壁を築いて。

その中には迫害を受ける中で、平穏に暮らす同じ人種への妬みや羨望が少なくとも絡んでいのだろうか。

単純にエルディア人を「悪」とするマーレの教育を受けてきた影響もあるが、複雑な心情がさらにその上に絡み合っている。

だがどうだ、マルコは「悪魔」と言った。憎悪も何もないただひたすら、心の底から戦士たちに向けて呟かれた言葉。

アニの瞳からは涙が溢れ出し、ベルトルトも血が出るほど唇を強く噛む。

そしてライナーの脳内には、「悪魔」の言葉が沈澱していき、その分溢れ出たナニカが、汗と涙に混じって落ちていく。大きく震え始めた身体に、気付けば何故——と、声が出ていた。

「何でマルコが、食われてるんだ……?」

背後で狂い始めた三人の兵士の言葉や息遣いを感じながら、一人の女は、口角をさらに歪に上げる。

マルコ・ボットが最期に向けた言葉はライナーたちではない。

去つていく仲間の足元を見、泣きながら話し合いを求め、「まって」とライナーたちに
眩き続けた彼。

そんな彼が巨人に掴まれ身体が動いた時に見たのは、マルコの心からの叫びに絶頂す
る、アウラ・イエーガー本当の悪魔の姿であつた。

スミス 「異議あり！」

私アウラ・イエーガー。

戦士たちの仲間に上手くなれそうかと思いきや、過半数以上の拒否を食らい、虚しくも失敗した女である。

アニちゃんが私の異質な人間性について、勘づいていたのは知っていた。

しかしベルくんまで私をヤベエヤツ扱いするとは…正解ですね。彼の場合私の精神が壊れている、と思っていた様子。

唯一お兄さまから私の話を聞いたというライナーくんだけは、私を最後までお兄さまと会わそうとしていた。

強靱な身体にさらに装甲をつけたようなゴリラだと思っていました、イイ人だった。マルコくんの超絶かわいいシーンに、一番ダメージを負っていたのも彼。

どうか自分で殺そうとしておきながら「何でマルコが食われてんだ…？」と言っていたのが聞こえたんですが、重度の精神疾患かな？

戦士が人が死ぬくらいで傷ついていたら、元も子もない。マルコくんが仲間だった

分、仕方ないのかもしれませんが。

まあそれ以上に表情が愛らしくて、胸がドキドキしてしまっただけですがね。これが恋……？（ニヤア……）

お兄さまだつたら、きつと冷酷に切り捨てられますよ。何てつたつて戦士長ですからね、戦士長。戦士を束ねるリーダーが情に流されるとは思わない。だからこそトップに選ばれている。

ということは、ということはですよ？アウラちゃんがお兄さまの心に刻まれている「私」が敵として現れても、お兄さまは必ず殺してくださいということに他なりませんよね？

最高じゃないですか。お兄さまの前に立ちはだかつて、殺されて、妹を殺すお兄さまのお顔を眺めながら死ぬなんて。きつと人生で最大の幸福を味わえるに違いない。

ですから戦士たちにフラれてしまった現状、明確な敵対行動は取らず、なるべく彼らが壁内に留まるよう時間稼ぎをしたい。

さすればお兄さまは焦れたマーレ政府によって、他の戦士と共に送り込まれる可能性が高まる。

マーレ政府が全ての戦士を派遣しなかったのは、他にも諸外国との戦争に巨人の力を

利用するためでしょう。

「ふへへ」

思い出すのは、絶頂した顔を罪悪感を堪えるような表情に変え、後ろを向いた時に見えた戦士たちの表情と。

マルコくんの鬱^美しい最期。

そして私がお兄さまを愛しているように、お兄さまも私を想ってくれている。「オレ^私おま同じ」である事実。

団長がエルヴェイン・スミスに変わってから味気がなくなり、私の感情を発露させる機会があまりなかった。

しかし今日は、ここ数年で最高の一日となった。

その後も呆然と佇んでいた戦士と別れてから巨人を狩る作業に戻っていますが、いつも以上に身体が軽い。既に結構な数を倒しましたがまだまだ行けそうです。

エレンくんも壁の穴を石で埋めるの任務を無事終えた。あとはこのまま帰還命令が出されるまで、狩り続けるだけ。

この後巨人化したエレンくんを巡る一悶着が起こりそうですが、とりあえず今は最高の絶頂の余韻に浸り、私自身の生を謳歌することにしましょう。

???????

リヴァイ兵長を筆頭とした精鋭部隊の後、他の調査兵団も合流しみんなで仲良く巨人を駆逐して丸一日。

やはり普段から巨人と戦っている調査兵団と、駐屯兵団の戦力は大きく違いますね。巨人の多くを討伐したのは駐屯兵団より圧倒的に数の少ない我々。仕方ないとは思いますが。

またその間二体の巨人の捕獲に成功した調査兵団。4 m級と7 m級にアへっていたメガネの女性がいたんですが、彼女正気なんですかね…？（すつとぼけ）

『トロスト区奪還作戦』と呼ばれた本作戦において、犠牲となった人命は207名に及び、負傷者だけでも897名と、壁内の人類が巨人に勝ったものの決して諸手を上げて

喜べる勝利ではなかった。

周囲がお通夜ムードの中私かというと、巨人掃討後の遺体の回収作業があるというので、そちらへ向かおうとしていた。

作業は駐屯兵団や訓練兵団の人間たちが主に行うそう。しかし私も力になりたい、と偽善者ヅラ満載で行く気満々である。

だって駐屯兵はともかく訓練兵たちがいるんですよ？そんな彼らが人間団子の巨人の嘔吐物や食いかけの死体を見たら、曇ってしまうに決まっています。

ですから私がそんな彼らを慰めながらニチャニチャするためにも、行く必要があるんですね（頑なな意志）

これは現在捕縛されている弟の身柄よりも優先すべきこと。

どうせ私一人が動いたところで、弟は救えませんし。

調査兵団の仕事はないのか？と思われそうですが、丸一日巨人を狩り続けて疲労しているので、しばらく休みをいただいているゆえ無問題^{モーションダイ}。アウラちゃんに不足はない。

というか弟は超大型巨人が現れた後、トロスト区攻防戦において一度足を巨人に食われた。その後アルミン・アルレルトを助けようとし、巨人の腹の中へ。

死んだと思われたが巨人化し、復活したらしい。エレンはそのことを覚えていないよ

うだが、弟が巨人のうなじの部分から出て来たことなどから、そのような憶測がなされた。

巨人化能力者の回復能力は私も知っている。お父さま情報と、幼少期父が怪我をした時、そのキズが蒸気を発しながら回復しているのを見ましたから。傷についてはある程度本人の意思で回復を留めることもできる。

となると、エレンくんが数年間ずっと巨人化しなかった理由が気になる。巨人化するには何らかのきっかけが必要なのか、はたまた自分が「巨人化能力者」であるという意識がなければ使えないのか。

訓練兵時代ならケガもするでしょうし、異常治癒も恐らくは起こっていなかったはずだ。戦士三人が今まで気づかなかつたのだから殊更。

疑問点は多いですが、それこそ巨人化は個人によりけりなのかもしれない。

「巨人」自体未だ謎が多い。あまり考え過ぎても仕方がないでしょう。

「アウラ副分隊長！エルヴィン団長が至急会議室まで来て欲しいとのことですよ！」

アツ、タイミング悪く捕まってしまいました。

そのまま連れられて来ましたが、狭めの会議室の正面の机に団長が座っています。ヤヴァイ兵長は：いませんね。一人だけのようです。

用件はもちろん弟のことである。

エルヴィン団長曰く、直に憲兵団と調査兵団がエレン・イエーガーの身柄を巡って、兵法会議が行われるとのこと。

決定権を持つのは三つの兵団のトップに立つダリス・ザックレー総統。いち調査兵のアウラちゃんじゃ滅多にお目にかかれないお方です。

憲兵は今のところエレンくんを解剖ちがえして、処分したいらしい。人の弟のことをどういう風に思ってるんですかね？エレンくんを捌いたのなら、憲兵共の身体にも同じ赤い内臓が詰まっていることを教えてやらなければいけません。当然だよなあ？

「そう気を立てないでくれ、アウラくん」

「…申し訳ありません」

私はお兄さま一筋ですが、半分血の繋がっている弟のことも大切に思っています。

エレンくんはお父さま以上に感情の起伏が大きく、翡翠の大きな瞳を見開き絶望を見せた時なんか、とても輝いて見える。

団長は私にも兵法会議に出て欲しいと頼んだ。というか親族なので必ず出されるから、先に手をつけておきたかったご様子。

他にも現場に居合わせたミカサちゃんや、アルミンくんも出席するらしい。

団長の考えではエレンくんはトロスト区奪還の際、巨石を動かすため巨人化した直後制御不能となり、ミカサ・アッカーマンを攻撃対象にした。

その後は意識を取り戻し、つつがなく任務を遂行。

だが一度制御不能となり、任務の中止も出た場面。時間のロスは、エレンから巨人を遠ざけようとした多くの兵の命を奪った。仮に最初から弟が巨人化を操ることができていれば、死者も貴重な戦力も失うことはなかった。

この点を憲兵団は、エレン・イエーガーが本当に人類の希望となるのか、信用できないと会議において話す可能性があると。

また、弟が過去にミカサちゃんと共に強盗誘拐犯三人を殺したことも、人間性の是非を問う材料にされるとのこと。

思った以上に不利な状況。

しかし団長にはリヴァイ兵長を使った作戦があるようなので、一先ずそれに託すことにします。

仮に弟が憲兵行きになったらその前に戦士が動くと思うので、憲兵団か調査兵団行き

か、二つの可能性を考慮しなくては。

まあエルヴィン・スミスという男は、こういった博打にことごとく勝利してきた。結果がある。ほぼ間違いなく憲兵からエレンを奪い取るでしょう。

ただし弟をゲットできて、その後、本当に彼が人類に有用かどうか示さなければならぬ。

一難さつてまた一難。

結果を残せるかどうか否かで、調査兵団の存続の明暗も分かれる。

「君はエレン・イエーガーの人間性を審議する際、家族として証言を求められるだろう」「…わたしは弟が“人”であることを、語ればいいのですね」

「ああ、普通に思い出話をするだけで十分だ。君たち姉弟の過去の出来事は、他人が知ることではない。ただ他者の記憶を否定することは、実際に君たちが紡いできた「人」としての姿を否定することに他ならない。それはつまり、指摘する側の人間たちの作り上げてきた家族や友人たちとの繋がりを否定することと、どう違う？」

否定は肯定だ。

もし否定されたのなら私は憲兵が、彼ら自身のつながりを否定することを無意識に肯

定しているのだ——と、言えがいい。

一瞬間聞いただけでは頭がこんがりそうなことを、淡々と提案する団長の脳みそはどうなっているのか。

「家族が危機にある立場の君が冷静に答えれば、却つて感情を露骨に出す憲兵の姿は総統の目につくだろう。思うところは多いと思う。しかしだからこそ、落ち着きを見せてくれ」

「……はい。団長のお考えなら、まず泥舟ではないでしょうから。毅然と行きますよ」
「泥舟か……いつそうなってもおかしくなさそうだ」

一応気になっていた、私に対する憲兵や駐屯兵団の反応も伺った。

やはり弟が巨人化したため、私を知る者は姉も巨人になれるのでは？と、話が出ているらしい。過激なところでは、エレンと同じ地下牢に幽閉しておくべき、などの厳しい声も上がっている。

しかし現状私が自由の身なのは、長らく調査兵団として心臓を捧げてきたがゆえ。多くの巨人を倒し人類に貢献してきた。その功績も含め、今は様子見中なのだ。

ただエレンが憲兵に渡った場合、私の身柄も拘束される可能性が出てくる。

そうなたったら戦士たちと一緒に、弟を連れて逃げるコースしか無くなりそうですね。全力でエレンくんを弁護しなきゃ（使命感）

誰ですか、先まで呑気に死体を回収するみんなのお顔を拝んでやろうとか言っていたヤツ？——私ですね。もうちよつと死ぬことへの危機感を持たないとダメだな。

「安心してくれ、調査兵団は君と共に戦い、語らい、人類の希望のため進み続けてきた同士だ。疑いを持つ者はいない。100%とは言い切れないが」

「それで構いませんよ、人とは疑う生き物でしょう。わたしも何故弟が巨人になったのかわりませんが、誰よりも彼が人間だと信じています」

「エレン・イエーガーも、君のような姉がいるなら心強いだろうな」

「……えへ」

「はは……しかしやはり君も、エレンが巨人化した理由はわからないか」

「団長は超大型や鎧の巨人も、エレンの能力と似たものではないかと推測しているようだ。」

つまり人が操作し、動く巨人。

「ここに来る前、私は憲兵団からの許可が下りたためエレン・イエーガーと話をした。もちろん見張りの憲兵は一旦下がらせての話し合いだったが……その時少し、気になった部分があつてね」

「気になった部分……ですか？」

「ああ、本当ならこの場にリヴァイ兵士長を同伴させたのだが、個人の話が絡みそうで今日は下がらせた」

エルヴィン団長の目つきが、変わった。

鋭かった青い瞳の上から、引き込まれるような爛々とした——ギラギラした色が出てくる。キレイだ。青い瞳、お兄さまと同じ色。

「……すまない、もう少し下がってくれ」

気付けば私は、机に前のめりにして座る団長に近づいていた。いけません、アバズレアウラちゃんになってしまいました。これはお兄さまにお置きしてもらえないですね。肝心のお兄さまどこですか？

「エレンは駐屯兵団の者に、「地下室に鍵がある」と言っていたらしい」

その鍵はウォールマリアが陥落し、トロスト区の避難所に弟たちが逃げた後。

エレンが一眠りし、目を覚ませばいつの間にか持つていたものらしい。

弟は父親とその間会った記憶はない。しかし一度彼の元に父親が訪れていたのでは

ないか？と、団長は考えている。

その際鍵の受け渡しがあったのなら、私が知らない間の出来事となる。

私がユミルちゃんに見せてもらったのは、お父さまがレイス家と話し、殺す映像。

そして場面は一転し、次に見えたのがエレンくんにお注射するお父さまだった。「進め」と息子に行ったお父さま。……落ち着いてください。今は当時のお父さまを思い出して、絶頂する状況ではありません。スミスがビビつちやうだろ。

思い返せば、お父さまにお注射されていた時のエレンくんの首元に、ヒモに繋がれた鍵があつたような気がする。

記憶が曖昧で申し訳ない。あの時の私の全ては、お父さまに注がれていましたから。

お父さまがエレンくんに鍵を渡すシーンを、ユミルちゃんが私に見せなかつたのは意図的なかわからない。

ただお父さまのご様子を見せていただきながら、彼女に文句を言うのはお門違いです。全ては私のせいだ、私が鍵を付けていた弟の変化に気づかないのが悪いんだ……。

エレンくんも何度か会う機会があつたのだから、お姉ちゃんに「お父さんにカギもらつたの！」って教えてくれればよかつたのに。反抗期かな？

単純に伝え忘れ説と、伝える余裕がなかった説（何せ姉が久しぶりに会いにくるのですから）、伝える時間がなかった説の……全てが有効ですね。

「恐らくその地下室に人類の謎が隠されている。無論エレン・イエーガーが巨人化した謎含めてだ」

「人類の……謎」

「アウラ・イエーガー」

——君は本当に父親から何も、聞いていないのかね？

団長が立ち上がり、机に手をつけて身体を前に傾けた。私も注意されて一歩下がっただけなので、距離が近い。

青い瞳が、青い瞳。私をじつととらえて、キレイ。呼吸が変になってくる。何これ何これ？

金髪もだめだ。光に当たってキラキラ輝いている。かつこいい、すき。お兄さま？お兄さまお兄さま、お兄さままだ、お兄さまがいらつしやる、お兄さまが目の前にいるの？え、あ、うそ、どうしよ。

「違ッ……だん、ちよ」

「君の過去が気に掛かり調べたが、訓練兵団に入る前精神疾患を理由に入院している。そのことについては知っていた。キース団長……いや、キース教官から個人的に伝えられた話だったからね。ゆえに精神に難があると、私は君のことを認識していた。無論あの人は大つぴらにしていなかったが、君のことを裏で気にかけていたことも知っている。幼い頃から君のことを知っていたそうだね。まあこれが、話の本題ではない」

「……あ……あ」

「入院理由は確か、自宅で過去の記憶トラウマを思い出したことが原因だった。四肢を拘束せねば自死行為に走る。食事も食べられなかったそうだね。それほど衰弱していた」

手を握られた、どうしよ、お兄さまに手を握られちゃった、大きくてあったかくて、ゴツゴツしてる。私の手を簡単に包める、あつ（脳死）………いっばいしゆき。

「大事なのは、君が地下室で父親と話していた後、事が起こったということだ。エレンと地下牢で会い姉について聞いた際、彼が思い出した。弟が足を踏み入れることのできなかった場所に、君はいたのだ。本当に父親から聞いたのは、君の過去の出来事についてだったのか？ 以前行方不明になったイエーガー医師の件を君に話した時、反応が薄かったのも気にかかる。過去——即ち母親の件を聞き発狂していた幼き頃の君。本当に聞

いたのは母親についてなのか？頼む、俺に教え——」

もう色々頭が限界だった。わかつてる。お兄さまじゃないのはわかつてる。でもお兄さまにしか見えない。お兄さまにしか感じられない。お兄さまがないなんてそんなの嘘で、今日の前にお兄さまがいるのが本当なんだ。

頭がショートし、涙腺が壊れる。「うう……」とガキみたいに泣き始めた私に、お兄さまも正気に戻ったようだった。

「……………あつ、いや、すまなッ……」

あたふたしているお兄さま。結婚しよ。

その後、お兄さまはタイミングよく入ってきた兵長に、腹パンを食らって倒れた。

兵長はどうやら妙な胸騒ぎがし、お兄さまが私と二人だけというのを、ここに連れてきた兵士を絞めて聞き出したらしい。お兄さまセコムか貴様。

地面に座り込み、ガチ泣きしている女性とその側で本気で焦っている男、事案ですね。しかも密室で二人きり、いったいナニが起こったんですかねえ…何も起こってないんですけど。

「オイ、大丈夫か。エルヴィンに何をされた。どうにも嘘泣きじやねエみてえだし…」

「ゲホツ……………容赦がないな、リヴァイ」

「お前は黙ってる、何があつたかで今後お前への見方が変わるからな」

ハンジ眼鏡と同じ「変態」の称号が団長に付くとかなんとか。

——えっ、エルヴィン団長？いや、私が話したのはお兄さままで……………あれ、違いますね？お兄さまは？お兄さま、お兄さま？お兄さまどこですか。

「……………ふう、う……………」

「……………本当にすまない、過去のことを思い出させたようなら悪かった」

「過去のこと？オレを追い出してこの女と話していた内容か？後で洗いざらい吐けよ」

「……………こういう時、どうすればいいんだ、リヴァイ」

「…クソ眼鏡でも呼んでくるか？」

泣いてる美女を慰める方法を知らないんでしようか、この二人。童貞かよ、しっかりしてくれよ。実質調査兵団のツートップと言っていいヤツらだろ。

「ここにいてるって兵士に聞いたよ！エルヴィン!!ちよつといいかい捕まえた二体の巨人のことで……………え？」

大量の資料を抱えて、ノックもなしに部屋に入ってきたのはハンジ・ゾエ。

あ、眼鏡が曇って目が見えなくなりましたね。

気のせいでしょうか、部屋の温度もグッと下がりました。

「……………二人とも、何を……いや、ナニをしていたんだい……………？その子は私の大切な友人なんだが……」

「これは少し——」「エルヴィンが悪い」……………」

電光石火の速さで団長を指差した兵長。

この中で一番怒ったら誰が怖いか、男二人はハッキリ知ってたんだね。

「……………そうか、わかったよエルヴィン。捕獲した巨人について話したかったのだけれど、予定を変更して彼女に何をしようとしていたのか、一から全て話してくれよ」

「いや、ハン」

「いいね？」

「……………了解した」

未だ床に座り込みガチ泣きしている私の腕を引っ張って、兵長がソファアーに座らせてくれます。アウラちゃんの兵長への好感度が、妙に上がっているのは気のせいじゃないですね。

これが世間で言うギャップ萌えなのか。絶対に捨て犬を見たら傘をその犬のために置いて、ずぶ濡れのまま帰っちゃうタイプだよ。

要はイケメンか？ついでにハンカチも貸してくれた。驚異的に真っ白なんだが。それから私から一人分離れた場所に兵長が座り、前方ではハンジ分隊長の拷……尋問が始まった。

不意に空を見たら、青かった。とても、キレイだ。

もうマヂ無理。　　タヒのお。

どうにか団長殿の女兵士へわいせつ行為を行おうとしたという誤解も解け、アウラ・イエーガーが号泣した理由は、過去のトラウマを思い出したゆえ——との形で収まった。

エルヴイン・スミスは、壁内の誰よりもこの世の真実を追い求め、進み続けている男だ。

長年の夢の中で現れた巨人に変化できる人間、即ちエレン・イエーガーの存在は彼に衝撃を与えた。そしてその少年が持っていた鍵。人類の秘密が隠されているとされる、イエーガー家の地下室。

積年の夢が、今まさに叶おうとしている。そんな中地下室の謎を知っている可能性が浮上した、アウラ・イエーガー。

冷静沈着な男が彼女に詰め寄ってしまったことは、仕方のないことだったのだろう。それほどまでにエルヴインの悲願は重く、そして、罪深いものである。

事情をあらかた聞いたハンジ・ゾエは、大きなため息を吐き頭を抑えた。

「地下室の一件を聞きたかったとしても、いつものあなたらしくない」

「……本当に申し訳なかった」

「全く気をつけてくれよ……ほらアウラ、私と一緒にいこう。立てるか？」

ハンジは手に持っていた縄を、床に置いた山積みの資料の上に置く。アウラの手を引つ張りおぶると、「よしよし」と赤子のようにあやした。しかし依然副分隊長殿はガチ泣き状態。困った、としか言いようがない。

ちなみにハンジが持っていた縄は、巨人捕縛に使えるか吟味していたものだ。

最悪団長はそれで天井から吊るされ、逆エビスミスになっていた。

「あ、リヴァイは資料を運んでくれ」

「ツチ、なんで俺が……」

「頼んだよ。じゃあ私はこれで失礼するね、エルヴィン」

一人残されたエルヴィンは、椅子の背もたれに深く腰かけ、己の失態に天井を仰いだのだった。

好奇心とは、猫をも殺す。

それでもエルヴィン・スミスは、己が探究心に従い追い求め続けるのだろう。それによつて人類が、一步一步と進んでいく。彼なしでは切り開けぬ世界が、そこにはある。

???????

そして、いよいよ兵法会議当日。

この場では通常の法は適用されない。中心人物たるエレン・イエーガーは後ろ手で腕を固定され、背と腕の間に柱を通す形で拘束された。

彼の目の前、中央の法壇に座するメガネをかけた老人が、ザックレー総統。右には憲兵団、左には調査兵団。その他エレンと関わる参考人が、聴衆の隅に複数名集められていた。

ミカサやアルミンも招集されており、石像ミンの左隣にはアウラ・イエーガーの姿もあった。彼女の視線は真っ直ぐに弟へと向いており、緊張や焦りといった様子は窺えない。

(か、会話するチャンスだぞ、僕……!!)

石像ミンは意を決して、初恋の人に話しかけようとした。しかしそれを遮るようにミカサが口を開く。

「お姉さんは、緊張していませんですか？ エレンの生死が決定する場なのに……」

「エルヴィン団長は策があると言っていたし、大丈夫。こういった場でこそ、冷静に、堂々としなくちゃダメよ」

「……でも」

「エレンくんのこと心配してくれてありがとね、ミカサちゃん」

「……………」

ミカサは下を向いて黙り込み、アウラは再び視線を前へ向ける。女二人の間に挟まれている男がいるはずなのだが、空気ミンと化しているらしい。

して、兵法会議が始まり、概ね内容はエルヴィンがアウラに話していた通りに進んでいく。

憲兵団は、エレンを徹底的に解剖したのち処分すべきだ、等と提案。

対し調査兵団は、少年の巨人の力を活用し、ウォールマリアを奪還すると提案した。前者の内容と比べ、後者——エルヴィン・スミスの内容は至って簡潔である。

ザックレーは調査兵団の提案に一つ質問をする。

ウォールマリアを奪還すると言っても、今まで調査兵団がトロスト区からシガンシナ

区へ向けて模索した経路は、トロスト区の門が大岩に塞がれたため通行不可となった。ゆえに出発することができない。

エルヴィンはこれに、東のカラネス区より一から経路を模索していくことを提案した。

それに対し、毒舌兵長曰く「豚ども」たちによる言い争いが勃発する。

トロスト区が超大型巨人に襲われた以上、いつまた他の場所が襲われるかわからない。ウォールローゼの内門も壊される可能性があり、土地と権力を「内側」に持つ者たちは己が地位が落ちることを危ぶみ、「門を塞ぐべきだ」などと口論が生じてしまったのだ。

その後どうにか話が軌道修正され、議論が続く。

これまたエルヴィン・スミスの予想通り、憲兵がエレンが巨人化時に起こした、トロスト区防衛戦でのミカサ・アッカーマンへの攻撃。

そして、少年が過去にミカサと共に起こした、強盗誘拐犯三名を刺殺した件が持ち出されることになる。

「ま、待つてくださいいエレン……エレン・イエーガーは、トロスト区防衛戦の際、駐屯兵

が放った榴弾から私やアルミンを守ってくれました！」

ミカサが憲兵に異を唱えるが、憲兵団団長ナイル・ドークは彼女の発言を、個人的感情によるものだとする。

その流れでミカサとエレンが義理の家族であったという関係性と、二人が起こした過去の事件へ移行した。

「三人も殺したんだってよ…信じられねえ」

「しかも子供の頃だろ？ やっぱ人間じゃない、バケモンだよエレン・イエーガーは…」
壁内人類にとって巨人の脅威とは、圧倒的なものである。過去百年間負け続けてきた彼らは所詮、鳥籠の中のエサでしかない。トロスト区の一事件で人類初の勝利を収めたが、その犠牲は多大なものであった。

「恐怖」とは人の心を容易く縛ってしまう。

犯人たちによる少年と少女の身にあった非道な行いは恐怖の前で掠れ、忌まわしいものでも見るかのように、冷ややかな視線がエレンに注がれた。

しかもそれは少年だけでなく、ミカサにもだ。「人殺し」と誰かが小さく呟き、無数の目が彼女に向かった。

ミカサは唇を噛みしめ、一歩前に出て、エレンに向かう心ない言葉を呟く人間どもへ噛みつこうとする。

そんな彼女の前を挟むようにして、立ちはだかった女。

「退いて、ください……お姉さん」

「冷静にしてつて、言つたでしょ」

「無理です……!」

「えいつ」

アウラは前を向いたまま後ろの少女の横腹を突つつき、不意打ちを食らわせる。咄嗟にミカサは声を抑えたが、この場にそぐわない声が出そうになったことに、前の女を睨め付ける。

それを意に介さずアウラは挙手し、ザックレーから発言許可が出された。

「先ほどの憲兵団ナイル団長の発言をお借りします。現状、エレン・イエーガーとミカサ・アツカーマンに対し眩かれる言葉は、過分な『個人的感情』が含まれているように見受けられます」

「フム、確かにな」

「その上で、何故ミカサ・アツカーマンの『個人的感情』は指摘されたのにも関わらず、同じ聴衆側の『個人的感情』は指摘されていないのでしょうか。これについては発言した人物が、ナイル・ドーク団長である憲兵団側であることも踏まえさせていただきます」

す」

「だそうだ、ナイル・ドーク」

ザツクレー總統の視線が、憲兵団団長に向く。

ナイルは眉間に皺を寄せ、何食わぬ顔で毅然と佇立するアウラを見やり、「ぐぬ…」という顔をした。エルヴィン・スミスを意識し過ぎていたがゆえの、完全なる予想外の方向からのボディーブローである。

先の発言がエレンの姉、アウラ・イエーガーということもあり、向こうの発言こそ私情が入っているように見受けられる。

しかし状況的にそれをナイルが言えば、總統殿の心象が悪く映る可能性が高い。

彼が思考している間に、ザツクレーの「一同、一旦静粛に」という言葉が入り、場は静寂に包まれた。

「先のナイル・ドークの発言では、エレン・イエーガーの根本的な人間性を疑問とする内容があった。その他多くも巨人になることかできるエレン・イエーガーが、真に「人間か否か」判断に決めかねる意見がある」

これについては腹違いの姉であり、血縁者であるアウラ・イエーガーの証言が求められた。

ここで一つ踏まえて起きたいのは、巨人化できるエレンの姉が初めの両兵団の提案の際のこと。

憲兵団がエレン解体&処分の内容の中で、アウラの名が出てこなかった点についてだ。

あくまでこの兵法会議は、『エレン・イエーガーの身柄をどちらに渡すか』を決めるものである。よって、エレンではない姉の処遇を出さなかったのだ。

無論途中で「アウラ・イエーガーも巨人になれるのではないか？」と質問が上げれば、憲兵団側は用意しておいた「巨人化できる可能性がある人間」としてアウラを拘束する内容を述べるつもりだった。

最初から極端な意識として、「エレンも巨人なんだから、姉も巨人だろ？だから問答無用で姉弟そろって拘束だ！」などと話してしまえば、それこそ話の趣旨が異なる、とエルヴィンに指摘される可能性があった。

ゆえにアウラ・イエーガーの件については、エレンの人間性の是非について彼女に話が終わってきた時、周囲が起こす反応を汲みながら出すつもりだったのである。

今のところは女に向く畏怖の視線は少ない。

それは単に長年心臓を捧げながら、巨人と戦う調査兵団に彼女が身を置いていたがゆえか。

「調査兵団第五班所属、副分隊長アウラ・イエーガーです。エレン・イエーガーとは異母兄弟の姉に当たります」

「まず聞くが、君はエレン・イエーガーが巨人化できることを知っていたのかね？」

「いえ、存じ上げませんでした。これについては、どのようにして、巨人の力を得たのかについても同様に」

「どのようにして得たのか——ということとは、あくまで君は弟が元から巨人ではなく、人間であったと主張すると」

「わたくしは何らかの意図的要因が影響し、エレン・イエーガーが巨人になったのでは？と推測しています」

これについては、同兵団の第四班分隊長、ハンジ・ゾエと共に考察したものであると彼女は語る。ハンジもそれに同意を示した。

この裏で長時間にわたる地獄の巨人討論バトルがあつたのはお察しである。しかしこれで「アウラは頑張った！完！」とはならない。

むしろここからが本番。近くで見れば、彼女の隈がひどいことがわかるだろう。野々

村ばりの号泣からこぞつと寝ていない。

彼女も彼女なりに、エルヴィンに聞かされた以外で兵法会議で行われることを予想し、対策を練っていたのだ。

「…して、弟の「人間か否か」を材料とするための話として、わたくしは具体的に何を話せばよろしいのでしょうか」

「まあ一つ、過去の話でよい。この場には些か合わないだろうがね」

「わかりました。ではエレン・イエーガー……弟が4歳の時、母が取り込んだ洗濯物の上で寝ておね——」

瞬間「やめろおお!!」と、部屋に響き渡った大声。

驚き皆が声の元へ目を向ければ、そこには羞恥に顔を真っ赤にしたエレンがいるではないか。

生温かい視線が少年に向き始めたのは気のせいではない。

「……失礼。話が途中で途切れてしまったので、別の話してもよろしいでしょうか」

「まあいいだろう」

「では弟が3歳の時、馬糞を刺した棒で巨人を倒す遊びをしていた折、馬糞が取れ弟の顔に――」

「やめろって言ってんだろ姉さん!!!」

「失礼、また話が途中で途切れてしまいました」

「構わん、次は何だ」

「弟が先と同じ歳の時、外からこっそり持ち込み隠していた虫の卵が孵化し、家の中が――」

「もうやめてくれよお……!!」

エレンは姉を睨み、今にも泣きそう……いや、泣いていた。

当然だ。お偉い方が集まっている前で、己の恥ずかしい過去のエピソード。それを姉は真剣に話している。何人も笑いを堪えている者がおり、憲兵団でさえ一部微かに震えている。

世界は残酷なんだ、エレンは何度目か思い出した。

ピリついた雰囲気が一転、何ともぬるい温度で包まれる。その空気を作った張本人はどこ吹く風。

エレンが「人間か否か」——そして彼の人間性を問う上で、これほどインパクトの強いものはなからう。

その強さにイエーガー姉弟の「過去話が何だというのだ」と考えていた者たちも、一気に毒気がぬかれた。むしろ力なく項垂れる少年が哀れでさえある。

この時崩れた、エルヴィンがあらかじめ考えていた流れ。
風向きが予想以上に、調査兵団側が変わった。

この後に憲兵は、エレン・イエーガーの力が人類にとって脅威的であることに違いない、とした。

しかしエレンの人間性を強く感じた聴衆側は、“解剖・処分”という大凡人道を疑われる憲兵団の提案に否定的な考えが芽生え始め、調査兵団へ任せられた方が——との流れに。

だがエレンの脅威は確かにある。

それについてはエルヴィンが、人類最強であるリヴァイ兵士長にエレンの“管理”を任せる旨を提案をした。

兵長のバケモノぶりはトロスト区での活躍も去ることながら、民衆には広く知れ渡っている。エルヴィン以上にその名は、良くも悪くも有名だろう。

「ではエレン・イエーガーの管理をリヴァイに任せるとし、彼の身柄は調査兵団に一時委任する。ただし民衆の巨人の力を恐れる声は多い。成果次第でいつでも憲兵団にその身柄を渡す可能性があることを、重々理解しておくように」

「承知しました、ザックレー総統」

エルヴィンは心臓に手を当て、答えた。

リヴァイの暴力イベントは起こらず、これにて兵法会議は平和的に終了する。

その後アウラはエルヴィンに、本来ならリヴァイが活躍する予定だったことを聞き、ひどく瞠目することになる。

「黙っていてすまなかった。だが都合上、この事は一部の者にしか話せなかったんだ」

「いえ、弟の身柄のためなら……でも、リヴァイ兵長のリンチ……」

「……す、すまない」

アウラのトラウマをえぐった（とエルヴィンは思っている）件もあり、団長殿は距離感を測りあぐねているようだ。

アウラはエルヴィンの謝罪も聞こえぬのか、ぼんやりと虚空を見つめる。

弟にリヴァイの理不尽な暴力が襲う。人類最強が殴ったり、蹴ったり。それに弟は呻いて、血反吐を吐いて――。

(あれ、私もしかしてもものすごく、余計なことしちゃった…?)

害悪女はその夜、自分のベッドに入り、本当ならば見られたはずの弟がポコポコにされる姿に思いを馳せ、泣いた。

エレン蹂躪イベントは、恥ずかしい過去をさらけ出し姉を内心ネチヨネチヨさせた時よりも、よっぽど愛おしい姿が見られただろう。

「……死の」

同室の変態が捕獲した巨人のためいない中、アウラは一人呟き、寝た。

愉悦使いアウスターと巨人の女

私アウラ・イエーガー。自分の行いのせいで、弟の愛しい姿を見られなかったクソ野郎です。死のうかな。

まあ、いつまでも鬱になっては仕方ない。

兵法会議は無事終わり、一ヶ月後に大規模な壁外遠征が行われることになった。そこには新兵も入れられる。つまり弟やミカサちゃん、ライナーくんやベルトルトくんも参加します。

一応新兵たちは班に割り振られる。ですが今回は特例として作戦実行時、新兵は訓練兵時代のコンビネーションを考慮して、別個の特殊な班編成が成されるそう。

ただでさえ入って早々慣れない仲間と組み、お互い足を引っ張らないようにするためだとか。なるべく生存率を高めるためですね。

その上で新兵を保護・誘導・指示する形で作戦時の班は決められる。必ずしも私が同伴になった新兵と、「オレ^私おま同じ」になれる保証がないというわけだ。

ちなみに残念ながら、アニちゃんは憲兵団に入ったそう（血涙）

大方始祖の巨人を調べやすいからでしょう。頑張ってください。探しても始祖はもうレイス家にありませんが。

また、他にも新兵には104期生のトップ十名のうち、八人が入った。異例の数字である。

アルミンくんも弟曰く頭脳優秀なそうで、十位の中に入っていると思っていた。しかし知力以外が足を引っ張り、入れず。

ミカサちゃんに関しては堂々の一位。彼女はすでに今の私より強いと思う。

二位はライナーくんで、三位がベルトルトくん。五位は我が弟、エレンきゅん。よく頑張りました。

今度会ったらお姉ちゃんがいっぱい抱きしめて……いえ、ミカサちゃんに悪いので頭なでなでにします。NTRはいけないからね。

六位は面識なし。七位は私を絶頂させてくれたマルコ・ボットくん。君のことは忘れません……。

八位も面識なしで、九位は……知らない子ですね。何か「私に憧れて云々……」という情報が入っていますが、知らない子ですね。

キース教官が毎度のこと、問題訓練兵として挙げていましたが知りません。最後に行くぞ。

ラスト十位は以前駐屯地に行つた時見かけましたが、私以上にかわゆいクリスタ・レンズちゃん。

初めて見た時私うつかり、恋してしまつたかと思つた。金髪に青い瞳、どこことなく母さまと似た雰囲気を感じさせる彼女。「私」の本能が彼女に反応した。理由はうまく説明できませんが、とりあえず出会つたら抱きしめてお持ち帰りしたいくらいには、動悸がドキドキしている。

何故でしょう、お兄さまと似ているからでしょうか？不思議な子です。

また、付け加えて気になつた人物が一名。調査兵団に入つたクリスタ・レンズと仲が良いらしい、「ユミル」という女性。

ユミル、ユミル。

マーレではエルディア人の別称で、「ユミルの民」という表現が存在する。ユミル・フリッツの子孫である我々を指しているのだ。一般的に知られている呼び方と言えよう。だがこれが壁内になると、話は大きく変わる。

パラディ島は自分たちを「エルディア人」とも、「ユミルの民」とも呼ばない。

「我々」や「人類」など、壁内全体の人間を表す時に使う。つまり「ユミル」を端的に表現するものが存在しない。

そも私の認識で「世界」を示すならば、マーレやパラディ島を含めた丸い球体——地球全てを表す。

だが壁内の人々の「世界」は壁に囲まれた内側。その外側は未知だ。

以上を踏まえ、「ユミル」という人物のことが気にかかっている。キース教官も上げることがなかった名前。彼女に特筆した得意な分野はない。しかし意図的に、力を抑えていた節があることを教官は見抜いていた。

私が思い浮かべる少女の名前を持っている以上、「ユミル」とは必ず接触したい。

クリスタの側にいたそばかすの女性で合っているならば、容姿はユミルちゃんには似ていない。だったらむしろクリスタ・レンズの方が似ている。

どうも此度の新兵たちには、謎が多そうであった。

???????

第五班にも新兵が入って来ました。ちなみにエレンくんはリヴァイ兵長預かり。団長に聞けば、弟の所在地は旧調査兵团本部で、リヴァイ班の者たちと生活しているそうです。

ではそろそろ、イかれた副分隊長がいる第五班新兵をご紹介しましょう。

ベルトルト・フーバーくんに。

「第五班に所属になりました。よ、よろしくお願いします…」

ユミルくんです。

「よろしく頼むぜ、これから」

分隊長に紹介され、ベルくんがおどおどしながら自己紹介する一方。

ユミルくんの方は勇ましいですね。よっぽどベルくんより漢気があります。ゆえに「ちゃん」ではなく「くん」なんです。胸は彼女の方が大きいからって、異論は認めない。

自己紹介の流れで、そのまま班の訓練が始まった。

まさかベルトルトくんも、私の班になるとは思っていなかったでしょう。トロスト区
の一件があったため、向こうは気まずいに違い。私は表面上、普通に接している。
ベルトルトくんは私とあまり接触したくないようですね。当然か。

対しユミルくんは私を避ける彼を見てニヤニヤしながら、「なんだあ？副分隊長に惚
れちまったのかよ、ベルトルさん」と話しかけていた。

アウラちゃんレーダーではベルクんの想い人は、恐らくアニちゃんだと言っている。
彼女を見る時の目がなんていうんですかね、「好き」って言ってるんだよな。

「ち、違うよユミル！僕には……あつ」

「ホォー……「僕には」……なんだよ？」

「何でもない……!!」

ちよつとイチャイチャしないでもらえますかね？今訓練中なんですよ？私もベルト
ルトくんの様子に内心ニチャア……していますが、アウラちゃんは内と外を分けられる
子。身体はきちんと訓練しています。

指摘したら「すみませんね、副分隊長さん」とユミルくん。ベルくんも少し遅れて後
に続いた。

すれ違いざま一瞬、ユミルくんと目が合う。

こちらを詮索するような、そんな色が窺えた。

ベルトルトをからかっていた一面から見ても、彼女には享樂的な一面があるようだ。『今』を楽しんでいる。私と似通う部分があるのかもしれない。ただ私はその場の快樂ではなく、いずれ訪れる最高の「今」のために、鬱屈とした日々を積み上げている。

彼女は私だけではなく、その他周囲の内面を探っている。まるで用心深い動物のようだ。

どうかあまり私に近づかないで欲しいですね。

「私」という存在を理解しようとしても、理解できないでしょうから。

そしてその日寮に帰った夜。

寝ていた最中、部屋の扉が勢いよく開けられた。髪が乱れ限の恐ろしいバケモノが、私を巻き添いにしてベッドの上に乗ってくる。こ、これが夜這い…？

「アウラ聞いてよアウラ！ようやく二体の巨人に付ける名前を考えたんだ!!ぜひ最初に君に聞いて欲しくて——ブハッ」

問答無用で変態を蹴り出し寝た。こちとら今度の大規模壁外調査を予定した訓練で、忙しいんですよ毎日。

しかし懲りずにまた部屋に入って来た彼女。

相手に聞こえるようわざと盛大にため息を吐き、私は仕方なく「ソニー」と「ビーン」という素晴らしい名前を聞いた。

命名式に来るよう招待されましたが、丁重にそれを断って、シャワーを浴びてから寝るよう言う。

「あなたはもうちょつと、女性であることを意識した方がいいですよ」

「え？リヴァイにもこの間同じこと言われたけど……あ、あとモブリットとエルヴィンとミケにもかな。あとは……」

「おやすみなさいハンジ」

でないとあなたを物理的に、「おやすみ」にしないといけなくなる。

しかし私はこの時、知らなかったのです。

この後二体の巨人が、何者か——それも兵士によって殺されてしまうことを。

犯人不明の中、調べられた立体機動装置。ですが犯人は見つからず。恐らく戦士の誰かであるとは想像が付きませんがね。

不穏な空気が調査兵団内に立ち込める中、私は地獄を見ることになる。その日はちょうど、二体の巨人が暗殺された日——突然の立体機動装置の調べが始まる前のことだった。

私の元に訪れたのは、同じ副分隊長である第四班のモブリット・バーナー。

そして彼ともう一人の兵士に引つ張られ私の前に連れて来られたのは、第四班分隊長。号泣である。以前エルヴィン団長の前で泣いた私より号泣である。純粹に引いた。この私を引かせる人材が、サシヤ・ブラウス肉少以外にいるという事実が恐ろしい。

「あ、あの……アウラ副分隊長、分隊長のことをお願いできないでしょうか……」
曰くどんなに手を尽くしても、愛しのソニーとビーンが死んだショックで、泣き止まないのだと。

頭を悩ませていた折、モブリットたちは私と巨人バトルをした後のハンジが、普段以上に上機嫌だったことを思い出し、ヘルプを申し込んできたらしい。

「う〜う〜う〜…あんまりだ……HEEEYYYY…あアアあんまりだアアア!!! 私
のオオオオソニーとビーンがアアアア〜!!!」

お前のソニーとビーンじゃないだろ。

「ずっとこんな感じなんです、お願いします……これじゃあ次の仕事もできなくて……第五班の分隊長には既にお願ひして、副分隊長をお借りするよう許可を取つてあるので

——」
「……え？」

え、何を勝手に許可を取っているんですか、モブリット・バーナー？ 我輩の人権は？ ついでにハンジ・ゾエを押し付けて、逃げ腰はやめてもらつていいですか？

「分隊長……ハンジ分隊長！ アウラ副分隊長がじつくり話を聞いてくださるそうですよ
!!」

「ふええ……？」

「よかつたですね！ 早く元の精神状態に戻ってください!!」

「あ、アウラアア……」

もしかしなくとも、第四班の中で私は彼女のお守りとして認識されているのだろうか。

そりゃあこれまで散々彼女の巨人討論に付き合わされてご機嫌を取つてきたが、だからつてこつちの方が「あんまりだア」なんですが。

「…ハア、わかりましたよ」

「……！あ、ありがとうございます！アウラ副分隊長……！！」

それから私は三日間、楽しい楽しい巨人トークをハンジ・ゾエとしましたとき。

（全くめでたしじゃ）ないです。

???????

大規模壁外調査まで刻々と時が迫ってきた。

アウラは演習後、夕方が近づく気配を感じながら、愛馬を牧草地から厩舎へ連れ戻していた。馬については基本的に、個人に当てられた馬がいる。世話は兵団内で分担作業。だが中には自分で自身の馬を世話をする者もいる。アウラは後者だ。というより馬が彼女以外に懐いていないため、他が世話をできない。

主人を振り落とす勢いで暴れる白馬は、相変わらず元気である。

「君には何が見える、ねえ…」

手綱を引きながら歩くアウラ。パカパカと足音が響く。

脳裏によぎるのは、地獄の三日間。その途中立体機動装置の検査があつたが、ほぼずっとハンジと語つていた。

二日目の夜辺りから記憶がなく、三日目が過ぎた翌朝。とうとうハンジもバテ、仲良くおやすみコースに入ったのである。起きて本調子に戻つた分隊長殿は、それはそれはツヤツヤしていた。

モブリット含む四班から神様扱いされたが、アウラは本気で検査された己がブレードを、血で染め上げようかと思つた次第。それでも天使スマイルを浮かべた彼女はよく耐えた。

そして、四班に崇められながらその日の訓練に向かおうとした手前。妙に距離を置かれながら、現れたエルヴィンに意味深なワードを呟かれたのである。

君には何が見える？——と。

「それは、分け目の話でしょうか」と、冗談抜きに彼女は思った。疲れていたのだ。

だがそんなことを呟けば、キース・シャーデイスの今を知る団長を傷つけてしまうに

違う。いや、そもそもエルヴィンの分け目は団長になる前から怪しかった。

というか、わざわざ彼女とエルヴィンしかいない状況を狙って現れたのが、分け目の話をするためであろうか。

アウラは脳内のお花畑で走り回る巨人を駆りながら、奥底の冷静な思考回路を引っ張り出す。

(ああ、ソニーとビーンか)

結局また巨人案件。死んだ目の彼女の事情を知っていたエルヴィンも、憐れんだ目を向けていた。

彼女は団長の問いに対し、「巨人のうなじを狙う我々が、自分のうなじに気をつけないといけませんね」と、笑顔で返した。

自分のうなじ、即ち「後ろに気をつけろ」。

彼女たちの後ろにいるのは、同じ同胞たる調査兵団の仲間である。もつと言えば兵士、であろう。

それだけで十分だったのか、エルヴィンは口角を上げた。

敵は巨人二体を倒し、監視の目をかい潜って逃亡した。計画的なものである。また立

体機動装置の調査を切り抜ける狡猾さを持つ。

大規模な壁外調査。エルヴィンの「敵」を示唆する発言。アウラの中で点がつながっていく。結果を残さねばならないエレンならともかく、新兵まで壁外調査に出すことに疑問を感じていた。だが新兵をわざわざ出す理由があるとしたら？

ウォールマリア陥落が起こったのが5年前。少なくとも「敵」はその時期から存在し始めたのだと推測できる。

よってそれ以前から調査兵団にいる者の中に、「敵」はいないと考えられる。「敵」が調査兵団に潜り込むのはそれ以降に入団した人間。

さらにこれに、トロスト区襲撃の際第104期生がいた現場で出現したことを踏まえ、巨人になれる人間が此度の新兵に紛れ込んでいる可能性が高い——と、判断できる。

つまり大規模壁外調査は、犯人探し鬼さんどちら？

せつかく入った優秀な新兵たちが死ぬ可能性があるというのに、冷酷な判断を団長は取る。

だがキースには足りなかった「非人間」になれるエルヴィン・スミスのその部分が、アウラは気に入っていた。

何せその判断の中では、簡単に仲間や、住人を切り捨ててしまうことができるのだから。その中にアウラも、エルヴィンも入る。

全ての犠牲は、人類への一歩。

「犯人を捕まえる作戦はもうできているのですか、エルヴィン団長」

「概ねは、だ。ウォールマリア陥落の際には「超大型」の出現の後、鎧の巨人がシガンシナ区の内門を破った。トロスト区の壁も一度は破られたが、しかし今回は内門が破られなかった。この差異には、大きな意味がある」

「……エレンくん」

「敵にも想定し得ない出現であったのは間違いない。そして次に起こるとすれば、エレンの奪取だ」

そこを狙い、巨人を操作する人間を捕まえる。やはりエルヴィン・スミスという男は恐ろしい。いずれ彼女の本質さえ見抜かれてしまいそうだ。

まあ見抜かれたで、彼女はそれを利用し、新たな悦に浸るだろう。

そういう女だ、アウラ・イエーガーは。

「それで、わたしは具体的に何をすればよいのでしょうか」

「特にはない。捕獲についてはハンジ主体で進めるからな。君には索敵を任せることになるだろう」

「そう……ですか。何か力になれることがあれば、いつでも仰ってください」

「了解した。人類のために、共に戦おう」

「……人類、ですか」

「何か不満があつたかな？……いや、君の心情としては人類ではなく、弟に、という感情の方が強いか」

「ええ……かわいい弟が、どこぞの馬の骨に拉致されるのは勘弁被りたいですから」

「かわいい……か？」

「かわいいですよ？」

地下牢で団長と兵士長に向かい、鋭い眼光と共に笑っていたエレン。

彼が二人に向けた言葉は「とにかく巨人をぶつ殺したい」

かわいいではなく、その姿は正しく狂気。凶器、と言つてもよい。鞘もなく、刃物そのままの形で握ろうとすれば、当然その手は深く傷つく。

だが、それはあくまでエルヴィンの意見だ。エレン・イエーガーと暮らしていた姉だからこそ、抱く感情。

「まあ、私はまだ死ぬわけには行きませんので、弟を悲しませることはないですよ」

エルヴィンの横を通つたアウラは不意に、彼に声をかける。

「団長、キレイですよ」

「ん?」

彼女が指差した場所には青い空が広がっている。ゆったりと流れる白い雲。空は天国、地上は地獄。

「届かないんですね、不思議」

そう言い微笑んだ彼女は、いつも皆に向ける笑顔ではない。人を蜜柑に置き換えて、その皮を剥き、それを裏返しにして中身に着付けたような、そんな歪さがあつた。

贗作と本物

厩舎に帰り、愛馬の世話を一通り終えたアウラ。

他に厩舎で作業していた兵士に挨拶してから、建物を出る。後はシャワーを浴び、食事を取って就寝と行きたい。

文化の違いか、洗身の習慣が壁内にはあまりない。体臭そのものをそこまで気にしていないのだ。ゆえに朝夜マメに入っている彼女は珍しい部類。一応石鹸に近い洗浄剤は存在する。

無論彼女はヒイズル国にある風呂に入ったことはない。一度全身を湯に浸からず快感を味わってしまえば、アウラも即堕ちニコマするだろう。

「ん？」

厩舎から出て間もなく、というか数秒。彼女は馬と見つめあっている同班の人間を発見した。

その長身の身体を折り曲げ、膝を抱えながら猫背にして、馬の顔を見上げている少年。彼女が声をかければ、少年の肩が跳ねる。

「やあ、ベルトルトくん」

「…アウラ副分隊長」

「そう畏まらずとも、アウラちゃんでもいいよ?」

「…:イエーガーさん」

フレンドリーに彼女が行くほど、お互いの心理的な距離が遠ざかっていく。

どうやら彼は五班の分隊長に彼女の居場所を聞き、律儀に数時間ここで待っていたようである。

告白か? アウラは訝しんだ。伊達にお姉ちゃん属性で、年下に告白されてきた女ではない。全てもつともな理由をつけて断ってきたが。

「そうね…じゃあ少し場所を変えましょうか。その間に心の準備をしておくね、わたし」

「…:別に僕はあなたに告白するわけじゃないですよ?」

「違うの?」

「違いますよ…:…?」

まあ冗談はさておき、とアウラは人のいない森に入り込み、手頃な切り株に座る。

ベルトルトもまた、木に寄りかかるように座った。

「それで、恋のお悩み相談みたいだけれど、お相手は誰かしら?」

「だから、そういう話を僕はしに来たんじゃ…」

「え、君はアニ・レオンハートが好きなんでしょう?」

「……へ、え、いや、——え!？」

「ああ、やっぱり好きだったのね、アニちゃんのこと」

「……………」

少年は顔を膝に埋め、深くため息を吐く。

「僕はあなたにエレンの…弟のことをどう思っているか、聞こうと思ってきたんだ」

兄、ジーク・イエーガーに執着を見せていたアウラ。

なれば異母兄弟だと聞く弟は、彼女にとってどのような存在なのか。

戦士たちの中で、エレンが「進撃」の可能性が高いと考えている現在。

だがそれはアウラ・イエーガーの話を信じれば成り立つ可能性。それが嘘であれば、たちまちエレンが「進撃」ではなく「始祖」の可能性が出てくる。

どの情報を信じるか、それを決めるのは戦士たち。仮に戦士長の妹であっても、彼女が兄のためなら何でも出来る——と言い張っても、100%の信頼には至らない。

「エレンくんのごことは大好きよ」

「…僕は僕らの『目的』のために、あなたの弟を捕まえなければならない」

「うん」

「……………だから」

「だから？」

スツと、細まった白銅色の瞳。感情の読み取れぬ女ののっぺりとした表情が、ベルトには異質に見えた。

「良心の呵責に君は今、苛まれているとでもいうの？」

「……………」

「わたしに同情はしないのでしょうか？ならば進むしか、方法はないんじゃないのかしら？」

「その過程で弟を失つても、あなたは構わないのか」

「構わなくなつて、ない。エレンくんが巨人じゃなければ、巻き込まれなかったのだから」

全ては父グリシヤから託された運命だ。

「ひどい父親だな……」

「お父さまを愚弄しないで。チョン切るわよ」

「ごめ——僕の何をオナいつたいたいどうする気なんだ、あなた……!？」

「斬るのは上手いから安心して」

「ハア……………でも、やっぱりあなたたちの運命を揺るがしているのは、父親だよ」

「随分感情的になつてゐるのね。ベルトルトくんは何か、父親に恨みでもあるの？」
「……………」

「沈黙は肯定よ。詮索はしないけれどね。お父さまは何も悪くないわ」

「……………悪いのはまた自分だつて、言うのか？」

「ええ、「私」が悪いわよ」

「そうだ。本当に全て、アウラが悪い。」

「進撃」の巨人の「進む」という不思議な在り方はともかく。

母親を、父親を、義理の母を、弟を、心の底から好いて、その上で苦しめる異常者。

トチ狂つたその本性を理解できるものなど、この世に 있을까。ましてや彼女はそんな人の不幸が、悲劇がなければ生きていけぬ。

本人も己が死ぬべきだと理解しては、尚、再び兄と会い見^愛交えることを望んでゐる。

そうして彼女に愛されてしまった一番の被害者が、ジークだ。

だが彼女の心中を理解することのできぬベルトルトは、思い違いする。

女の言葉が本当のものであるからこそ、外側に信憑性が生まれ、中身まで信じてしまう。「砂糖です」と謳^白粉つておきながら、実際は塩であるかのように。巧妙に騙す。

いや、アウラならば薬物か。

「人間は複数が好きになってしまうもの。けれど器用に、その全てを同時に愛することは難しい。そんな時、人は必ず一番大事なものを選ぶ。わたしにとって一番は兄さんなの。エレンくんじゃない」

「……エレンが可哀想だ。姉のことを、誇らしげに語っていたのに」

「そのエレンくんを捕まえようとしている人間が、何を言っているのよ」

「……………」

「巨人二体を殺したのも、君たちのいずれかの仕業なんでしょう？ おかげでわたしはハンジ・ゾエの贄にされたんだから」

「……だから前に数日間姿を見かけなかったのか」

「ええ、そうよ。それにしてもらしくないわ。いつも以上にジメジメしてて暗い…不安なのね」

「不安？」

「君がこうして避けていたわたしに近づいたのは、エレンくんのことをどう思っているのか、わたしに聞くためだったの？ 本当は別の意図がある、違う？」

「……………」

「次の大規模壁外調査。そこに何か裏があるかもしれないと思い、君は不安なんだ。そ

れでも中止にしない……いえ、中止にできない？」

エレンは現在、リヴァイ班と共に旧調査兵団本部で過ごしている。他の班とは隔離された状態にあるため、戦士も狙うことができない。否、そもその情報は、ごくわずかの人間にしか知らされていない。

するとチャンスがあるのはエレンが外へ出る時。例えば、壁外調査に出た時などに限られる。

ベルトルトやライナーが調査兵団に残ったのは、まず間違いなくエレンの監視。対しアニは憲兵団に入り、王政へ潜り込みやすい立ち位置となった。

大規模壁外調査が行われることを聞いた後、戦士たちはエレン捕獲を計画したのだろう。

「……少なくともエレンで、人間が巨人になることは明らかとなった。超大型や鎧の巨人が怪しまれるのも当然だろう」

「ついでに二体の巨人の殺害。人類の『敵』がいると考えられる」

「何かずつと引つかかっただけはいたんだ。人が足りないから新兵も駆り出されるんだと思っただけで、状況が状況だ」

「君の様子だと、気づいたのはつい最近みたいね」

「……だから、計画を中止にできない。大規模遠征はすぐなのに……」

「はあ、なるほど」

どうやらエレン捕獲の実行犯は男二人ではなく、アニのようだ。確かに調査兵団の二人は動きにくいのが、憲兵団の彼女なら何か理由をつけて休み、壁外調査中の調査兵団を襲うこともできよう。

そして裏にあるエルヴィン・スミスの計画に勘づいたベルトルトであるが、内地にいる彼女に伝える時間がない、ということに焦っている様子。

ほぼここずつと訓練漬けだ。休みを取る暇もない。

ベルトルトの真の意図。

それは次の壁外調査で密に行われる計画の全貌を、アウラから聞き出すことにあ
る。

「あなたは知っているのか、エルヴィン・スミスの意図を」

「恐らくは知性巨人の討伐、あるいは……」

「捕獲だ」

「アニちゃんが心配？わたしに話したのなら、このことをライナーくんも知っているの
ね？」

「……ライナーは、知らない」

「え？」

「…彼は今、戦士じゃないから」

「……………」

「リスクがあるから、誰にも話せていないんだ」

「じゃあ第一相談相手がわたしの…？」

「ああ」

「君…しよ、正気……？」

「正気じゃないよ、とつくの昔から僕は」

アウラは戸惑った。ライナーの「戦士ではない」という意味は恐らく以前マルコ・ボツトを殺しておきながら、なぜ死んでいるのか理解できていなかった様子を踏まえ、精神に異常を来しているのだろうと推測できる。

だからといって、何故彼女なのだ。

「アニなら成功できるはずだ。でも何が起こるかわからない」

「……弟の誘拐に加担しろってこと？わたしに？冗談でしょ」

「冗談じゃない。それに万が一の時、手助けしてくれるだけでいい」

「その手助けの内容は状況に応じて変わるだろうし、難しいでしょう。それにリスクが

大きすぎるわ。わたしがもし敵側だと認識されたら……」

「そうなったらエレンを連れて行くついでに、あなたも連れて行くよ」

「……………言っていることが、前と全く違うわよ」

「僕一人で、どうにかできる問題じゃないんだ。仮にあなたがアニを——戦士を救った
事実ができれば、十分マールに連れて行く理由ができる」

「……………つて、言われても……そう簡単にいかないと思うけれど」

「いや、可能性はある。全ての元凶を父親にしてしまえばいい」

「樂園送り」になったのは当然のこと。

母親が死んだことを、それでアウラが精神を病んだことを、壁内で悪魔の民と共に生きるようになったことを、兵士になったことを、*「使命」*がエレンに託されたことを、そして大好きな兄と別れることになったことを——。

全ては*「復権派」*の父に、利用され続けていたのだと。

道具として、「知識」を与えられ、生きてきたアウラ・イエーガー。

そんな父を娘は恨んでいた。

だから彼女は戦士に手を貸し、壁内を裏切った。

「……………でも、わたし」

「エレンも最初は抵抗するだろう。けれど君の父親の『罪』を告げ洗脳すれば、きつと僕らの味方になる」

「エレンくんはきつと無理よ」

「そうしたらあなたも説得すればいい。上手くいけば兄に会え、弟とも共に過ごすことができる」

「……………」

「どちらかじゃない、どちらも選ぶんだ」

強欲になれ。それが人間だ。

真つ直ぐにベルトルトは、白銅色の瞳を見つめ、囁いた。誑かした。

表情は繕っているが、彼の背中は汗でじっとりとしている。

恐らくエレンを連れ帰ったところで、間違いなく戦士候補生に食われるだろう。あの操縦不可駆逐野郎の姿を、訓練時代を三年間共に過ごしたベルトルトはよく理解している。無論姉ならば、彼よりもよっぽど弟のことを理解しているに違いない。

だが「もしかしたら」の可能性を、アウラはきつと捨てきれない。最低でも愛する兄に会える上、弟を生かすことができるのだから。断る理由がないはずだ。

アニが捕まる可能性の前に、ベルトルトは追い込まれている。

肝心のライナーがマルコの一件以来、精神が「兵士」と「戦士」の間で不安定になり、頼れるアテがない現状。

ベルトルトたちが戦士であることを知っており、彼らに「兄のためなら何でもする」と言ったアウラ。彼女には副分隊長という順位で見れば、団長、兵長≠分隊長に次いだ地位がある。長年積んだ実績と、その信頼も然り。

利用するしかない、少年は思い至ったのだ。

「……わかった。協力する。ただし100%は絶対に無理だと思つて」

「それはわかつてるよ。少しでもアニの危険を減らせるなら……」

「本当に……好きなのね」

「……………」

「別に戦士としての在り方以上に、アニちゃんを優先していることを、咎めているわけじゃないわ。わたしも兄さんのためなら命を捨てられるもの」

「恋」を前にした時、人の思考回路は焼き切れる。正常な判断を失う。時には恋の奴隷となり、その身を焦がし、燃やすのだ。

愚かしくて、馬鹿げた生き方。しかしその生き方から人間は逃れられない。人間であ

る以上、あるいは人間としての形を失ったとしても。

「それと…やっぱりね、お父さまのせいにはできないわ」

「じゃあ、どうするんだい」

「お兄さまに会えれば私はそれでいいから、捕らえてエレンくんを脅す材料にしたらいんじやないかしら」

「…え」

「ベルトルトくん、君はわかってないのよ、「私」という人間を」

アウラ・イエーガーはお兄さまを愛している。

そして誰よりも死にたがっている、自殺志願者。

白銅色の瞳が、赤みがかつた夕日を視界に入れる。血と、白濁が混ざり合ったような、歪な色が渦巻いた。

それを見た少年の喉が、ゴクリと、音を鳴らした。

???????

辺りも暗くなってきた夕方。

ベルトルトと別れたアウラの前に現れたのは、そばかすの女性。ニヤニヤと、やらしい笑みを浮かべている。

「ベルトルさんと森の中へ入る姿を偶々見かけたんだが…ナニしてたんだよ、副分隊長さん」

「何っていうか…べ、ベルトルトくんに申し訳ないから、言いませんよっ!」

少し頬を膨らまし、そっぽを向くアウラ。ユミルの人間性を理解し、意図的に彼女が好きそうな、からかいがいのある人間を演じる。

「まあ、後で何があったかはベルトルさんに聞かさ。「違う」とか言いながら、ちゃっかり手を付けようとしてんだもんなあ」

「…オフの時はいいですけど、訓練の時はふざけないようにしてくださいね、ユミルくん」

「へいへい、わかっていますよ。ところでさ」

「はい?」

立ち止まったユミルは、上がっていた口角を下げ、アウラの顔を見つめた。

「あんた、誰かに似てるとか言われねえ？」

「似てるって……エレンくんは、つてこと？」

「弟は違えよ。つーかあんたとエレンじゃ髪の色しか似てないだろ」

「失礼な……じゃあユミルくんは、私が誰に似てると思うの？」

「えーつと……クリスタって知ってるか？」

「知っているわ。上位成績十位の子よね」

「そうそう、私ソイツと仲良いんだけどさ、あんたに似てるんだよ。それが気になってんだ」

髪の長さは、アウラの方がクリスタより長い。髪や、瞳の色も異なる。

だが髪の質感や瞳の作りなど、些細な部分で不意に、「似ている」とユミルは感じるよ
うだ。

「うーん……わたしにはわからないわね。よく似た人間は世界に三人いるって言うし、わたしとクリスタちゃんもそれじゃないかしら」

「でもよお、あんた見て愛しのクリスタを思い浮かべちゃう、私の気持ちもわかってくれよ」

「愛しのクリスタ？」

「別の班になっちまって、今にもアイツを抱きしめやりたいけどできない」

「愛しの……」

「ハアア、早く二人で式を挙げたいぜ」

「……仲がいいのね」

アウラは思考を放棄した。先ほどのベルトルトといい、次から次へと爆弾が降る。

「まあわからねえならいいや。クリスタも、あんたのことは知らない、つて言つてたしよ」

「…そう。わたしもクリスタちゃんとは、話したことはないわね」

「あと最後にいいか？」

「うん？」

「何で私だけ「くん」なんだよ」

ユミルのにずっと不満に思っていたことらしい。いくら男前とは言っても、ユミルは女だ。

アウラを観察していれば、彼女が年下の新兵などには「くん」や「ちゃん」を使っていることが窺える。

男に使う「くん」をユミルに付ける。それが少々…いや、かなり腑に落ちない。

「それとあんた、何か隠してんだろ。弟が巨人になって、相気が滅入っているように見える。だが何かさ、薄っぺらいんだよ。いつも兵士に微笑んで、同時に厳しく接している姿もだ。そこに亀裂を入れれば、簡単に剥がせちまいそうな皮みてえな気がしてならない」

「……わたしは別に……」

「本当はエレンが巨人になった理由も、知ってんじゃないの？ 大方人類にはデカすぎる秘密だから、隠さざるを得ないとかさ」

「兵法会議でも話したけれど、わたしはエレン・イエーガーについて詳しい情報は知らない」

「鍵は父親が残した『地下室』だっけか？ 入ったことねえのかよ」

「エレンくんがいらせてもらえなかった場所に、わたしが入れてもらえたと思うの？」

馬鹿馬鹿しい、とアウラは首を振る。

疲れたように眉間に手を当て、深く息を吐いた。

「これ以上話していても仕方ないでしょう」

「本当に何も知らねえのか、あんた」

「隠す理由がないし、わたしは「兵士」よ。人類のために心臓を捧げている身。有益な情

報を持ってゐるなら話すわ」

「……そうか。なんか悪いな、いきなり話しかけちまつて」

「気にしてないわ、ユミルくん。…そうだ、偶には一緒にご飯でも食べる？班内での友好も含めて」

「いや、いい。私は愛しのクリスタと食うからよ」

「そ、そう…」

「つていうか結局「くん」呼びかよ、私のこと」

呆れた顔でアウラを見つめるユミル。

彼女は肩を竦ませ、大股気味に先を歩いて行つた。

「ユミルちゃん」はね、私の中ではただ一人だけなの」

あなたじゃやない。

——そう、眩かれた言葉。

立ち止まったユミルの額から、ドツと、冷や汗が流れた。心臓が縮んだり緩んだり、ひつきりなしに動く。吐いた息は荒く、自分の異変を悟らせないよう、彼女はから笑いを零した。振り向くことはできない。

「あんたの知り合いに「ユミルちゃん」ってやつがいるのか」

「知り合いでは……ないかな」

「じゃあ友だちか？家族か？それとも恋人か？」

「よくは、わからないの」

「……そうかよ」

そのままユミルは気持ち悪さを堪えながら、自然に歩き、それでも内心逃げないようにその場を去った。

不可解な腹綿

私アウラちゃん、モテ期なの。

スミスには、知性巨人が出たら足止めしろ。つまり「君は私のものだろ？」——だからあくせく働けやこのメス豚が、とお願告いされ。

ベルトルトくんには、万が一の時アニを助けて欲しい。つまり「浮気相手だけど愛している」——だから兄や弟を引き目に出し脅告すようなことをしてごめんね、けど全てはアニ：いや、君のためなんだ、とお願告いされ。

挙句の果てに同性にまでモテてしまったアウラちゃん。これだから美女つてのは罪深いね。

ユミルくんについては、少なからず外の知識を持っている。探りを入れるため敢えて「ユミル」の名前を出し、彼女を揺さぶったんですがね。

親が始祖ユミル・フリッツから取ったのだろうとは思う。壁内の人類は145代フリッツ王に記憶を改ざんされ、外に外に関連する本などの焚書も執り行われた。

だが完全に、とはいくまい。

弟曰く、アルミンくんが外の世界を記した（ただし海や火山などを漠然と表現しているだけで）本を、所有しているくらいですから。

つまり探せば、外の知識を持つている人間もいるということ。ただ「外」を探ろうとすれば、王政の圧力がかかり、憲兵に闇討ちされる。「ユミル」の名前を持つ彼女も大分危うそうですが、生きている以上、一応憲兵の目に留まっではないということでしょう。

そも「ユミル」の意味自体、理解していないのかもしれないかもしれませんが。

そうになると、少し寂しいですね。マーレでは誰だっけ知っている名前なのに。

しかし、冗談抜きに、面倒な状況になってきた。

私個人としては戦士が壁内に留まるよう、エレンくんを捕まえさせるわけにはいかない。
い。

最初はエレンを捕まえても「始祖」の情報が必要ならば、マーレにはまだ帰還しないだろう、と思っていた。しかし戦士たちの精神状態はかなりボロボロ。みな少しでも早くお家に帰りたい状態である。どうしてもそんなに疲れてるんですかね？（しらばっくれ）

使命は「始祖奪還」ですが、情報が全く集まらない。巨人の力の継承者には寿命の猶予もあるので、時間が限られている。

そんな折現れた、エレン・イエーガーの存在。ベルトルトくんの様子から、彼らは絶対的に「進撃」であると信じているわけではない。始祖の可能性もある、と考えている。私がおここに存在している以上、巨人に連れられ逃された説は有効となる。

マーレのフクロウ裏切り者からお父さまへ、そしてエレンに。この流れで継承された可能性が高いと、戦士たちも感じているはずなんだ。

ですがそう簡単にはいかない。

戦士たちはかなり性急になっている。そりゃあ壁内に突然戦士以外の巨人が現れたので、仕方がないでしょうが。

お兄さまが来るまでもう少し待ってくださいませんか？……無理ですよね。

一先ず翌日に迫った大規模壁外調査。私の班は作戦企画時、弟がいるリヴァイ班について「右翼後方辺り」と伝えられた。だが実際、団長から聞かされた本当の位置とは異なる。

万が一、エレンが巨人に襲われたら困る。弟を配置する場所は最も危険から遠い場

所、中央後方付近となる。

また作戦の説明時、班別によってリヴァイ班の位置はバラバラに伝えられている。巨人が出現した位置によって、敵の内通者がいる班を見つける仕組みだ。

時系列は、ソニー&ビーンのご臨終↓（地獄の三日間）＋立体機動装置の検査↓スミスの告白↓特別班ごとの作戦企画説明↓ベルトルトくんのお悩み相談↓大規模壁外調査となる。

作戦企画説明からお悩み相談までには少しの間があり、この間にベルトルトくんはアニちゃんと接触し、エレンの位置を伝えた。対しお悩み相談と大規模壁外調査までは、数日もない。

ベルトルトくんはライナーくんと同班である。また作戦企画時、エレンのいる班は「右翼側」と記されていたらしい。私の「右翼前方」も彼に伝えました。

これに、班ごとにエレンの配置される場所が、別々に伝えられているかもしれない、と勘づいたベルトルトくんは、「別の班に聞いた方がいいのか…」と呟いた。

しかしそうするとエレンの位置を探っている、ということとで団長に怪しまれる。その危険性を伝え、変に探らせるのは止めさせた。

ともかく、ビッグアニちゃんが出現するのは、右翼側になるだろう。この時点でベルトルトくんやライナーくんは、内通者の可能性が高まる。

ただ作戦を説明した班長によって、エレンがいる場所の地図の示し方。

また口頭における「右翼側」「右翼辺り」「右翼後方付近」とかなりバラつきが出るので、概ね右翼側の新兵たちが怪しまれることになるでしょう。班長たちも皆が皆、作戦の本質を団長から教えられているわけではないので。

私はちなみに、右翼側の初列索敵担当である。

作戦日前日——というかつい先ほど、団長から個別で聞いた作戦内容では、向かう先は巨大樹の森。そこで囷にするエレンくんを狙う。敵を誘き寄せつつ、逆に狙う魂胆。

右翼側と左翼側の人間たちは森の手前で巨人が入って来ぬよう、エサ役——と言っても食べられるわけではない——担当になる。

私は前方索敵で通常通りのお仕事を全うし、森に着いたら手前で待つのみ。ビッグアニちゃんが現れたら、奇行種を示す【黒】の煙弾を撃つことになるでしょう。あくまで知性巨人と分かってても、知らん顔だ。仮に「ア：アレハチセイキョジンダー!!」などと宣った暁には、スマスに疑われることになるのでね。

また弟は中心人物でありながら、本当の作戦内容を知らないそう。

最悪アニちゃんに殺されますが、やるつきやない。みんなの屍を見て元気をもらいながら、最善を尽くしましょう。

勝つたら私……お兄さまとイチヤイチャするんだ……（死亡フラグ）

さて、問題はここから。ベルトルトくんの難題について。

これについては、ベルトルトくんが巨人化すれば済む話でもない。

アニちゃんを助けるにしても、戦士ではないライナーくんが彼の行動に制限をかける。そも動こうにも単独で動けば、針の筵。

それに、敵とバレればこれ以上壁内には潜伏できなくなりますし、始祖の手がかりを掴めないままマーレに帰れば、彼らの立場が危うくなり得る。

しかし、戦士たちが何か掴んでいる可能性もある。私が戦士の目的が「始祖奪還」である口にしては言っていないませんが、向こうは本来の目的を私が知っていることを、薄々勘づいている。そのため協力の姿勢は見せても、必要以上に向こうの手の内を見せではこない。当たり前ですが。

もしも捕まった場合アニちゃん——いえ、「女型」の巨人は叫んで巨人を集め、それに乗じて逃げるそう。女型の能力の一つらしい。巨人体が食われるかなりの荒技でもある。

「おいおい、うなじから出る時バレルだろ？とも思いますが、兵士と同じ格好をするので問題はない、とベルトルトくん。」

「巨人が集まればそもそも、調査兵团側も逃げるしかなくなる。その死角を狙い脱出するだろうと。」

「そこから再度態勢を立て直し、アニちゃんは再び巨人化する。そしてエレンハンターになるわけだ。」

「正直言ってかなり危ない。うなじごと巨人に食われる可能性がありますし、兵士に交じる……恐らくマントで顔や体型を隠し脱出するにしても、絶対に誰かの目に付かないとは言いい切れない。」

「捕獲」という作戦の建前上、ギリギリまで団長もエレンを巨人化させたくないでしょうから。エサを使って害獣を捕まえるのと同じだ。」

「二回巨人化した女型と、一度目の巨人化のエレン。これだけでも疲労に差がある。」

「対人格闘戦に優れた彼女ならば恐らくは勝てる。だがそれも100%ではないし、勝

てたとしてもエレンセコム・アッカーマンと、人類最強がいる。

特にミカサちゃんやんはエレンが絡むと恐ろしい。お姉ちゃんはそれで、背筋がヒヤリとした経験が何度かある。

ベルトルトくんは女型と単独で上手く接触できれば、逃げるよう伝えることも一つの手段だと語っていた。もしくは、エレンの本場の居場所の伝達。

幸い私の配置位置は右翼側の初列索敵。右から…右から…何かが来てる現象に対応することができる。

周辺が壊滅するのを見計らい、アニちゃんと接触するか。

ただ平地では巨人の姿は目立つため、私から離れた人間でも壊滅した状況を認識することができる。会話している様子を見られたらお終いだ。

そもアニちゃんは私に気付かぬまま殺してしまうかもしれないし、敵意を見せなかったところであちらは作戦中。対話に応じてくれるのか、話せたところで彼女が私を信じてくれるかどうかも怪しい。

捕まったフリができれば一番いいのですが…。そうすれば口頭で作戦の本質を説明し、退却させられるかもしれない。

死人に口なし。周囲が壊滅状態であれば、呻きながらでも話せる。

遠目からなら会話していることも分かりませんでしょうから。その後ブレードで手を切り、逃げることもできる。まあ、これは無理でしょう。

対し対話の場所を巨大樹の森に変えると、周辺の目を意識せず話すことができる確率が上がる。

私は森の前で待機組となっています。しかし弟が心配であることを理由に入っても、何らおかしくはあるまい。私情を持ち込むなど兵士失格だ——と言われそうですが、無視だ。団長には堂々と弟に心臓を捧げる宣言もしている。

もしそれでも、説得のチャンスがなかったら、ラストチャンスはアニタそが捕縛されて脱出した後。

ここまで来ると「撤退しろ」と言っても聞かないでしょう。というか絶対追い込まれて殺気立っていると思うので、殺される。

本当に……もつと気づくなら早くして欲しかったですね、フーバーくんよお（半ギレ）
報連相は大切、ハッキリわかんだね。

まあ、彼の作戦に乗るのは、私としては美味しい。

アニちゃんを私が助ければ、彼女も心が揺らいでくれるはずだし。ライナーくんは元々私を連れて行くのに肯定派。

ベルトルトくんはマーレに行つて、弟の命が助かる云々の話の際、嘘を吐く人間の仕草がうかがえた。

忙しなく足を動かしていたのが目立ったのです。それも、その話の時だけ。

私を連れ帰る部分については、信じていい。ただしエレンくんの命の保証は難しいです。

ベルトルト少年は、好きな人を助けたいがために私を利用しようとしているのだ。ア・レオン・ハートを救えば、彼は私に相当な恩ができる。ほぼ高確率でマーレ行きをゲットできるだろう。

お兄さまを一目見れたら、私は死んでいい。

もし生きてしまったのなら、その後のことはその時に考えよう。

とりあえず、戦士の結末予測だ。

【パターンA】

私の介入なし、エレン捕獲成功。

この場合私は戦士に協力していないので、弟のみマーレへ連れて行かれる。イエーガー兄弟の運命の再会が起こりそうで堪らない。だがその場で私が見れないから却下だ。なるべくエレンは犠牲にしたいくない。その後再度戦士が攻めてくる可能性もある。

しかし、それがお兄さまの代で再び行われるかわからないですし、マーレを焦れさせ戦士の増援を送り込ませる方が、私とお兄さまが出会える確率が高まる。

それも私の理想の、敵と味方の図で。

【パターンB】

私の介入あり、エレン捕獲成功。

兵士への敵対行動はなるべく起こしたくない。しかし捕獲が確実な状況であれば、明確な敵対行動を味方に取らざるを得なくなる可能性もある。

急に私が裏切^{仲間}つたら皆さま、どんな表情をしてくださりますかねえ…。これはエレンくんについても然りです。人類の敵に姉が回つたら憎悪を向けるでしょうか。それとも殺意？

私が普段善人ムーブを行うのも、十二分に私が壁内を裏切る可能性があるからです。

だからって、アニちゃんのために用意したものでじゃないんですけど。

お兄さまに殺されて有終の絶頂の中死ぬのが目標ですが、仮にお仲間勧誘されたら即承諾します。

というか断る理由がないですね。アウラ・イエーガーはお兄さまの物なので。

【パターンC】

私の介入なし、エレン捕獲失敗・女型巨人捕獲成功。

これはA以上に避けたい結果。捕まったらまず間違いない、アニちゃんは人道を捨て去った方法で拷問され、情報を吐かされる。

そうなればベルトルト・フリーバーの精神が死んでしまいます。個人的にこの結果は一番見てみたいですが、戦士たちが正常に機能しなくなりそうなのでパスだ。

精神異常のライ&ベルコンピと、拷問地獄のアニたそ…過去に戻れる力があつたら、一度このルートを味わってみたいです。

【パターンD】

私の介入なし、エレン捕獲失敗・女型巨人捕獲失敗。

戦士援軍フラグはゲットできません。可能性としては一番これがあり得そうです。

【パターンE】

私の介入あり、エレン捕獲失敗・女型巨人捕獲失敗。

これが一番望ましいですね。片道マーレフラグと戦士の援軍フラグ、両方をゲットだぜ！できる。

ガチガチにアニちゃんの説得ないし、救助の難易度が高すぎて笑いも起きませんが、最善を求めてやるしかないです。

どのような状況が起こり得るか。その際私ができること。

あるいは用意できるものが何か思索する中、寝つきは思った以上に悪くなる。

今回の作戦ではまず多くの人間が死ぬ。いつもはそれに「生」を実感する私だが、その余裕はなくなってしまうかもしれない。

運命が進み始めている感覚だ。それもエレン・イエーガーを中心に。まるで本の物語で言う「主人公」な弟に、微笑ましい感情が浮かぶ。

しかしして弱者を救い強者を打ち倒すような、そんな甘い話にはならないのだろう。

現実はいつももつと、生臭い。

五感を通して、人間の息遣いや表情の変化を伝えてくる。触れることができる、実際にそこにあるのだから。

その感覚がとても、気持ち悪い。

図式で見る人間の身体の内部は大腸があつて、小腸があつて、胃や心臓があつて。

だが腹を捌いてナマで見れば、図とは違う赤い液体が付着している。何なら黄色い脂肪も。

生々しい現実。

瞳を開ければそこに存在している。

その事実には、不思議に思うことがある。

私は何故生きていて、何でできているのだろうか、と。

僕らの行進

澄み渡る空の下、大地を轟かすはかつかつ夏々と、蹄の音を響かせる馬。

その上に跨る者たちは自由の羽を羽ばたかせ、勇姿を示す。

真つ直ぐに前を見つめる彼らを招き入れるは、人型を成した巨大なバケモノたち。

一人の男が櫂を入れたところから、此度の第57回壁外調査が始まったのであった。

——と、自分に似つかわしくない歯が浮くような前置きしたのは私、アウラ・イエーガーちゃん。

壁外調査を何度も経験した者たちも、近年稀に見ぬ大規模な壁外調査に神妙な面持ちを見せている。新兵は緊張で身を固くしたり、蒼い顔をしていたりと様々だ。むしろ冷静な表情のミカサちゃんや、戦士組の方が異常であるのか。

作戦決行前、調査兵団の刺繍が施されたマントを支給され、嬉しそうな新兵の先と今の温度差がすごいですね。

いつもの癖でフードをかぶっているのは私くらいで、側から見れば浮いていそう。馬の走行スピードと風の抵抗を受けながら、フードが取れないよう乗りこなすのは少し

技術が要ります。…そんなスキル、普通なら必要ないんですけど。

それから市街地まで連れ添った援護班と別れ、長距離索敵陣形を展開。私は右翼初列索敵位置へと向かった。

本作戦の真の意図を、エルヴィン団長から知らされている者はごく少数である。

表向き作戦目標は、『来たるべきウオール・マリァ奪還作戦のための予行演習』。カラネス区から出発し、南下してシガンシナ区へ向かうルート模索に近い。

内通者の条件はある程度絞られているものの、確実に犯人が誰かわかっているわけではない。全員に話せない分、今作戦での死者も多くなるでしょう。

その後全体は通常種を避けつつ、奇行種が出れば仲間と連携して狩った。

基本的に新兵は次列より内側に配置されている。最も危険な位置が初列であることを踏まえれば、多少は安全な位置に彼らが配置されていることがわかる。いきなり実戦で戦え、というのも難しいですからね。

まだ異変は起こっていない。しかし必ず来る、アニ・レオンハートは。

「ツチ、森か…」

索敵班の一人が、舌打ちを溢す。平野続きではあるが、小規模の森や村に当たることもある。その場合、建物の後ろや木の横に隠れている巨人に気をつけなければいけない。

異変にいつでも気付けよう、しっかりと意識を集中させておかなければ――、

(……?)

右後方付近から、足音のような音が微かに聞こえた。その距離はどんどんこちらへ近づいている。巨人だ、しかし通常の個体より足が地面に着く感覚が早い。つまり相当なスピードで走ってきている。

いよいよおでましか。奇行種の可能性も考えながら、異変に気づき始めた周囲も息を殺す。巨人が近づいているとわかって、それが通常種か奇行種かを確かめるまでは煙弾は撃てない。

「えっ」

一瞬のうちだ。

木と木の間から、馬車に轆かれる猫のような唐突さで、ひよつこりと現れた巨人。ウ

ソだろ、まだ距離はあつたはずなのに。

基本的に巨人は男性的な肉体をしているが、その巨人には全体的に丸みがある。しかも結構胸がありやがる、巨人の分際で。私に喧嘩を売っているなら買ってやる、うなじを削ぎ落としてな。

いえ、冗談抜きにそんなことを言っている場合ではないですよ、私。

今、私の目の前にいた人間が、横から現れた女型にそのまま蹴られるようにして吹っ飛んだ。人間の7〜8倍以上ある馬も、嘶いたまま空中に弧を描く。

一歩間違えれば、一瞬遅れていれば、私が愛馬と共に血を降らせて人間ボールに早変わりしていた。洒落になりませんよ、やはりあのけしからん胸を削いだ方がいいですね。一丁前に揺れやがって……(ギリイ)

「き、奇行種だ!!!」

「煙だツブア」

一人の兵士と馬を吹っ飛ばした女型はブレーキをかけて止まり、方向転換して他の兵士を蹴り飛ばした。先よりも飛んでいる。しかしア二たその蹴る動作が早すぎて、吹っ飛ばす間際の人間の顔が見えない。悲鳴すら聞こえないじゃないですか。

しかも女型一体ではなく、右翼側からどんどん巨人が来始めている。

何故だ？ 確実に死ぬイメージが近づいてきていて笑えません。

(…あ)

そうだ、ベルトルトくんが言っていたではないか、女型の能力を。

女型は叫ぶことで、巨人を引き寄せることができる。アニちゃんを救う難題のせいで、完全に思考がそこまで回っていなかった。

思い返せばシガンシナ区の崩壊の際も、中に入った巨人の数は異様に多かった。ユミルちゃんを美味しく食べさせるため、多めに呼び寄せたのかとも思っていた。

しかしあれが、事前に女型が呼び寄せていたのなら説明がつく。

恐らく移動役もアニ・レオンハートだ。そして外の壁を壊すのがベルトルト・フーバーの役目で、その穴にアニが呼んだ巨人が侵入するという仕組み。壁内を混乱に陥れるためなら、巨人は多いに越したことはない。

して今、この状況。

エレンを攫う上で、彼以外の調査兵団の人間は戦士にとって邪魔である。ただ一々殺すには手間がかかるため、手っ取り早く巨人を呼び寄せた。ついでに混乱させることも

できますから。

「早く煙弾を撃てツ！女型が次列に向かう前に!!」

仲間が叫び協力して巨人を狩りに行きますが、うなじを捉える間もなくワイヤーが掴まれ、そのまま地面へ盛大にキスする。グチャツと、肉の潰れる音がした。煙弾を撃とうとしていた者も、アンカーを捨てた女型が大きく跳躍し、潰され、平たくなる。

その間の私といえば、女型の様子を一定の距離を空けて見ながら、立体機動で愛馬から離れ、カラ馬へ乗り換えていた。

愛馬くんには目の前で二つのブレードで、「キーン」と音を立て逃がす。足を失ったら終わりだ。ゆえに愛馬は残しておきたい。他の馬では主人以外の指笛で戻ってくる可能性は低いので。

完全に錯乱状態に陥った場。間違いなく壊滅するでしょう。しかも次列へ危険を知らせる前に。

まだ女型には私の顔は見えていない。馬が逃げ、巨人に食われ、遂にはほぼ壊滅間近に。

私は今、恐怖に引き攣った顔をしている。身体が震え、動くこともできない中、逃げることしか考えていない。仲間を助けることもできず、煙弾も手が震え、途中で落とし

てしまった。

巨人に身体を掴まれた仲間の一人は、そんな私に叫ぶ。このことを早く伝えろ、と大声で叫んだ。それに糸が切れたように馬を叱咤し森の中を疾走した。

いやしようがないね、いきなり目の前で巨人が飛び出てきたら、そりやあビビってしまいます。え、嘘つくくんじやない、お前絶対動けるだろって？女型さんと内密デート♡するために、最適な状況を作るしかないんですよ。みんなの壮絶な最期とその表情は決して忘れないから、安心して死んでください。

まあ当然、壊滅し終えたら、女型は私を追ってくるわけですね。

状況は森の中、そして私一人。次列に様子が見える位置ではないですし、煙弾を放とうとする輩から集中的に殺されたため、緊急事態を伝えることもできていない。正に今、話すしかない。

多少離れましたが、すぐに後ろから速さのおかしい巨人が追ってくる。

その前に馬を乗り捨てて、立体機動で木の上に潜む。そして時を待たずして、私の乗っていた馬は蹴り飛ばされた。走ってきた女型の風圧で木が揺れる。彼女にアンカーをかけるのは危険だ。掴まれて殺される。というか近づくだけでペシャンコにさ

れる。

だが考えてみる、彼女は私を追ってきた。そこには確かな意味がある。

フードをかぶっていれば低い位置にいる人間からは私の顔が見えても、視線の高い巨人からならばまず見えない。エレンを狙っている以上彼女は、その人間の顔を確かめなければいけないというわけだ。

私が意図的にフードが取れないよう気を遣っているのもこのため。ツギハギにつけた作戦ですが、それでも運は私に味方している。後はお話し合いができるかどうかにかか

「アニ・レオンハート」

後ろから声をかければ、女型は振り返った。青い瞳を大きく見開かせて。

ああやっぱりその瞳、好きですわ。

舐めて、舌で穿り出したいくらいには。

???????

卵が二つある。白く、見た目や大きさはほぼ同じ。

それは間違いなく卵だ。

その中から生まれてきた赤ん坊は、同じ雛。

だが一方は親鳥に大切に育てられ、一方は巣から蹴落とされる。

蹴落とされた雛は親に餌をもらい、幸せそうに鳴く赤ん坊を見た。

何故親に捨てられたのか、わからない。何か自分に悪いことがあったのだろうか。考えども考えども、答えは見つからない。

そしてある日、雨に打たれた雛は大きな葉の下で身体を小さくした。

寒い、身体が。心も自分の肉体から抜けてしまうような感覚。

ぼんやりと脳内に浮かぶのは、兄弟の姿。雛が死にような中、親に捨てられなかった方は、ぬくぬくと、こんな寒さなど知らず過ごしているのだろう。

ピイ、と溢れる小さな鳴き声。

意識が沈んでいく感覚に身を委ね、疲れ切った雛は、暗闇を受け入れんとする。

そんな時、大きな手が触れた。温かい手だ。雛を包み込み、その凍てついた身体を、心を溶かしていく。

その手に引つ張られた雛は、よろよると歩く。気付けばいつの間にか、雛の身体は大きくなっていた。

足を踏み出せば、グチャリと、ぬかるんだ土の感触。転ばぬよう下を見れば、水溜りが広がっている。

雛は「ああ」と、独りごちた。それに雛の手を握る温かな存在が一瞬振り向いたが、雛は何でもない、と溢す。

そうだ、雛が捨てられてしまうのは当然だった。

雛だったはずの自分に、いつの間にか肌色の手や足が生えていたのだ。

こんなバケモノ、兄弟はおろか親が受け入れてくれるはずもない。

そもそも親鳥と雛は別の生き物だった。巨体を得た今の雛なら、親鳥など容易く踏み潰し、殺せてしまうだろう。

——いや、違う。

頭からゆっくりと血が降りていく。歯をガタガタ振るわせ、震える手を抑え、雛は己

の足の裏を見やる。

先ほど感じたグチャリ、とした感触。

足の裏は土と、赤い液体と、肉が混じって雛の足の裏にこびりついている。

鳥だった。

それが親なのか、はたまた兄弟なのか。それか他の鳥なのかはわからない。原型がなくなるほどその身体は平たく薄く、まるで履き物のように足の下敷きになっていた。

視界が真つ白くなり、倒れそうになった雛を、大きな手が受け止める。

その手は雛が倒れてしまわぬよう、真つ直ぐに引つ張り続けた。宛ら雛が道に迷わぬように。その温もりに涙を零し、雛は大きな手を強く握りしめる。決して離さぬように。その大きな手が、雛の道標になるように。

だが途中で、その大きな手が離れた。

斜め前を歩いてきた温かな手の主は立ち止まり、雛は後ろを振り返る。

そのひとは泣いていた。

泣いて、雛を見ていた。

『私…絶対帰ってくるから』

そう眩いた雛の服が、軍服姿に変わる。腕につけられた赤い腕章。その中央には星に似たマーク。

『待ってて、お父さん』

抱きしめている父の手を解き、雛は一步踏み出した。

踏み出したその先で、彼女はプチプチと気色の悪い、身の毛もよ立つような感触を味わいながら進み続ける。何を踏み潰したのか、踏み潰した足の裏がどうなっているのか、考えてはならない。

全ては帰ってくるために。そして父に「ただいま」と一言、言うために。

雛は悪魔になり、自分や父と同じ姿をした何かを、踏み潰し続けた。

途中酸が喉から競り上がり、焼けるような痛みを伴っても。

同じ仲間が、食い殺されても。

進み、進む。

こんな地獄、早く終われと願って。

???????

「アニ・レオンハート」

静寂の中で鈴を鳴らすように、アニの耳に届いたその声。声の主は巨人化した彼女――女型の後方からだ。

先ほど壊滅状態にした、一部の右翼側の索敵。残り数名生き残っている人間もいたが、女型が奇行種と比較にならないレベルで不規則に暴れたことで、馬が暴れ全員落馬。あとは彼女が連れてきた巨人の群れのエサとなるため放っておいた。

ベルトルトの情報によれば、エレン含むリヴァイ班は右翼側に配置されている。

一人フードをかぶっている索敵の人間がおり、顔を確認するため最後に回していたが、途中仲間に頼まれ、事を伝えるべく去っていった。

そこで一瞬アニは疑問に感じた。最初視界に入れた時、フードの人間は目立つ白馬に乗っていたはずだ。栗毛が多い中、白い馬は中々珍しい。

落馬でもして咄嗟に乗り換えたのかと思いつながら、彼女はフードの人物を追った。そしてその人物が乗っていた馬を発見し、逃げられないよう蹴り飛ばして、うなじを隠し

て辺りの気配を探ろうとしたのだ。

正しくその時、後方から声がかかったのである。

聞き覚えのある声に、アニは冷や汗を流し後ろを振り向く。

ちようど女型の腰より少し上の部分の高さ。その位置に木の上に身を屈ませている人間がいる。

アニは一瞬殺そうと考え、身体を屈ませ手を伸ばす。しかしフードを取った人物と目が合い、動きを止めた。

「あなたと対話したい。できることなら手短かに」

そう言い、女——アウラ・イエーガーは、外した立体機動装置を地面に落とし、両手を挙げる。

以前ブレードを取めた時とはレベルが異なる。マルコの一件の時、戦士らは人間であった。だが今アニは巨人化している。そしてそんな彼女が起こした殺戮を、フードをかぶっていたこの女は見ているはずだ。

だのに対話を求めている異常性に、彼女は裏を感じ取った。一先ず立体機動装置がない以上、脅威とはなり得ない。

女型の肉体は木の上の女に背を向け、かしく体勢を取った。そのうなじからアニは上半身だけ出し、アウラを睨め付ける。

「わあ、そうやって出てくるんだ…」

「…何？三秒以内に言わないと、両手足だけ潰して放置するよ」

「あ、この作戦は罠です」

「……………は？」

「エルヴィン・スミスが壁内の裏切り者を見つけるために実行しているの。エレンは知性巨人を誘き寄せるための罠、このまま行くと君は捕縛されて…………」

「ちよ、ちよつと待ちなよ」

「だから撤退して欲しい。ただ班ごとにエレンの位置がバラバラに伝えられている以上、右翼側から現れた女型の巨人に、内通者が「右翼側」と伝えられた班、それも新兵が怪しまれるからこのまま一旦不規則に動いて、撤退を——」

「……………」

「うわっ」

アニは巨人体を動かし、アウラの肉体を掴んで前方へ移動させた。もちろんいつでも殺せるよう握ったままで。この際関わらないため殺さない、の心情は放棄している。

一応周囲に視線を探らせたが、人の気配はない。また周囲が森であることと屈んでい

るため、姿は接近されなければ見えない。

「囹？捕縛？何言ってるんだいあんた、殺すよ」

「う、嘘じゃないの、信じてもらえないかもしれないけど…」

「もしそれが本当だとして、私はあんたを信用も信頼もしない。というか私からは絶対関わらないって決めたんだ、接触してこないでくれ。それもこんな時に…」

「わ、私も本当なら協力しなかった。でもベルトルトくんに頼まれたの…」

「……ムリ、信じられない。あいつは私やライナー以上に物事を冷静に考えられるし、アウラ・イエーガーと関わらないと戦士間で決めた以上、ベルトルトが破るとは思えない」
「理由はある。けれど、それについては彼じゃない私が告げられない」

「ベルトルトの理由を話せないならムリ、死んで」

「ッ……あ」

アウラの骨が、肉が、巨体な手に潰されるようにし悲鳴を上げる。ジワジワと与えられるその痛みには、アニの苛立ちが込められていた。このままいけば、体の上と下が押し潰された勢いで離れ、二つを辛うじて繋ぐのは内臓のみになるう。

エレンが見たら、その勢いで本当に巨人を全て駆逐しちまいそうだ——そんな考えが、ぼんやりとアニの脳裏によぎる。

だが全ては父のため。

戦士を知る存在は、もっと早く殺しておくべきだったのだ。そうすればアニは女の内側を、異質さを知り、漠然とした恐怖に怯えることなどなかった。

そうだ、この女を殺して……、

——なんでも、何でもする。お兄さまに会えるなら。

(あつ……)

ジークに会うために、何でもできると言ったアウラ。

対しアニは、父に再び会うことを望んでいる。

彼女はベルトルトよりも、ライナーよりもアウラの言葉に心が揺さぶられていたのだ。だが認めたくはなかった。女の異常なまでのドロドロとした「愛」と、己が父に向ける感情が同じであると信じられなかったからだ。

だがどうだ、アニは父に会うためにどれだけの人間の命を犠牲にした？

壁内に来る前に力の操作の練習を兼ねた戦場で、殺した人間。

間接的ではあるが、ウォール・マリア陥落時呼び寄せた数多の巨人。

そして今も、索敵の人間を殺したばかりだ。

自分はアウラと違う？——否、同じだ。人を殺し、その上で己の目的のために殺す。何でもできるのは、アニとて同じだった。しかし罪悪感が、「悪魔の民」の中で長年生きてきた女と「戦士」である自分は違うと考える心が、彼女の思考にモヤを生み出した。

涙を一筋流す彼女に、アウラは血を吹きながら瞳を丸くする。驚きの仕草がどことなく、戦士長を思わせた。

「…わかった。罠があるのは頭に入れとく。でも作戦は中止しない」

「ゴホッ……危険よ」

「危険？ツハ、笑わせるじゃないか。命を失う覚悟なんてできてるよ。まだ死ぬわけにはいかないけど」

「なら、何で」

「お兄さまを愛してる、あんたと同じさ。……ただ、それだけのことだよ」

「……罠は巨大樹の森の中。位置的にもうすぐ着く」

「エレンの位置は、あんたなら知ってるんだろ」

「……………」

「知ってるけど言いたくない、って顔だね。まあそりゃあ、私たちはあんたの弟を拉致ろうとしてるんだ、そこまでは協力できないってことか。…いや、ベルトルトが本当に関わっていたとして、あんたに協力する条件を持ち出すなら……」

きつとベルトルトはマーレへ彼女を連れて行くことと引き換えに、協力を望んだのだろう。

そも「アウラ・イエーガーとは関わらない」と決めておきながら、協力を持ち出した彼の理由とは何なのか。

アニの直感はどうも「戦士」の矜持から離れた理由があると告げている。決め事をしたのが兵士ではなく、戦士として、だったからということもある。後でベルトルトを絞めて話を聞き出そうと、アニは強く心に誓った。

ベルトルトもアウラではなく、ライナーに話せばよかったの……………。

(あ、あの野郎ライナーが戦士であることを忘れてるって、確かベルトルトが…………)

どうやらボコるべきは他にもいるようである。ベルトルトは理由がありそれを一人で抱えていた。その上で恐らくライナーに話すことができず、追い込まれてアウラに話

したのだ。この可能性が最も高い。

無論ブラコンイかれ女が独断で動き、口実として「ベルトルトが協力を申し出した」と述べている可能性もある。

だが今まで彼女が戦士と接触して来なかったことから、基本的にアニたちが近づかなければ、向こうは不用意に関わりを持って来ない。

以前のマルコの件は偶然であつたのだろうし、そもそも他にも人間がいる中、留まっていた戦士たちが迂闊だつたと言える。むしろ見つけたのがアウラで幸いだったか。

別の人間——それこそリヴァイに見つかつていれば、どうなつていたことやら。少なくとも一人は確実に殺されていただろう。

一先ず右翼側を回る。ライナーやベルトルトも右翼側にいるため、彼らを危険に晒せば、疑いの目を緩められる可能性がある。

罾が巨大樹の森であるなら、囹のエレンは確実に内部へ入るだろう。であれば正面突破は危険である。

森の横から入り、エレンを狙う。隊の混乱と情報錯乱を招く必要があるため、女型が全体的に動き回らなければならないのは必須。しかし右翼から左翼側へ行く時間や、隊を混乱させた上でエレンを捕まえる余裕はない。

どの道巨大樹の森へ入ってからが、エレン奪取の肝となる。

不意打ちで罨を食らった場合流石に捕まってしまいが、あると分かっているなら話は別。アニの反射神経は女型でも十分発揮される。ゆえにいざという状況でも逃げられるだろう。それも「最終手段」を使わなくてもだ。

「アニちゃん」

アウラを立体機動装置が転がった上に戻し、巨人体の中に上半身を戻そうとしたアニに声がかけられる。

「調査兵団のマントをどこで手に入れたかわからないけど、その立体機動装置で…大丈夫なの？」

「マントはさっきの連中からかつぱらったよ。立体機動装置は…マルコの」

「ああ、なるほどね。そういうこと」

「…知らないよ、あんた疑われても。馬が違うってことは、移動する足を残してるってことだろうし」

「他人の心配より自分の心配よ、アニちゃん」

「……………思っただけだよ」

「?何かな」

巨人体の中に沈んでいくアニの身体。女を背にし、その身を戻す少女は仰反るように

し、下にいるアウラに顔を向ける。

「あんたも大概、イかれてるよね」

ベルトルトの協力（仮）を飲んだのも、恐らくは対価にジークと会えることを持ち出されたから。…否、アニの出現を彼女はわかっていた節があった。そう考えればベルトルトの協力要請はほぼ確実であろう。

兄のためなら、アウラ・イエーガーは何でもできる。

ベルトルトに大規模な壁外調査時、アニの出現を聞かされていた。その上で対話する時間を作るために敢えて仲間を見殺しにしたのだ。

巨人を単独討伐できる女だ。その場で力を発揮していれば、索敵はもう少し機能したはず。煙弾ぐらいは送れただろう。まあ下手に動けば、アニに殺されると考え、静観を選んだ部分もあるだろうが。

さらにアウラは戦士に向く疑惑の目をなるべく逸らすため、隊を混乱させるよう勧めた。仲間を殺せ、と言っているようなものだ。

エレン・イエーガーをイかれていると思っていたアニである。だが弟以上に、姉は狂っている。

それがベルトルトのように狂わされたのか、元々狂っているのかは、彼女にとって大
小の差異はない。

でもきつと、アウラ・イエーガーは、「死んだ方がいい」存在であることは間違いない。
それはアニも、ベルトルトも、ライナーも当てはまる。

己がために他を殺す。殺すことができる。そんな人間は等しく死んだ方がいいのだ。
それでも彼女は父と会うため、惨たらしく生きる。

——確かに私たちは悪魔だよ、マルコ。

涙が幾重にも、少女の瞳から溢れる。青い瞳は冷たく、機械的だ。

女型は咆哮し、走り出した。

このまま女は放っておく。馬が来ないまま死ぬかもしれないし、アニが誘き寄せる巨
人に巻き込まれ、死ぬかもしれない。

(死んでくれ、できることなら。私も、他の人間も、誰も見ていない場所で)

地上に、女型が地を踏みしめる足音が響く。

ズシン、ズシンと、悪魔の行進。

その裏にこびり付く罪に、雛の心は揺らぎを見せなかった。だが己が死ぬべきだと、皮肉げに思うのである。

ンアツーーー!!

第57回大規模壁外調査の作戦中、右翼側から14m級の巨人が突如出現。

一般的な巨人と違いその巨人は女性的な体格をしており、当初は奇行種と判断された。

この「女型」の巨人は右翼側の索敵を一部壊滅に追いやった後、右翼中央に入り込んだ。同時に女型が誘導させた巨人が他の右翼側の索敵と遭遇。被害はさらに増した。煙弾と伝達によって複数の巨人の襲来が、隊全体へと伝わっていくことになる。

それから間もなく、アルミン・アルレルトが女型の巨人と接触。彼はこの時、女型がうなじを狙おうとした兵士を意図的に殺していた様子を目撃。

アルミンは女型が横スレスレを通った際落馬したが、殺されることはなかった。

「どうして……」

その後彼はライナーとジャンの二人と合流。女型を追い、馬を走らせた。ライナーが心配の声をかける中、アルミンは思考を巡らせる。

既に「奇行種」の煙弾を撃ったが、明らかにこの女型には他の巨人と一線を画す異質さが存在している。

巨人は人間を殺す際、そこに意図など存在しない。食うために食らう。

だが女型は兵士を殺すためにワイヤーを手で掴み、振り落とし、そして踏み潰した。通常種とも奇行種とも異なるこの巨人はエレン・イエーガーと同じ、「知性巨人」に間違いない。

(でも僕は殺されなかった…何故だ?)

女型は現在右翼中央へと入り込み、前方に向かって進んでいる。何故彼は殺されなかったのか。今この時現れたことには意味があるはずなのだ。

考え込むアルミンに、ジャンは現在の状況を伝える。

「アルミン、右翼索敵が右翼後方から現れた大勢の巨人に襲われ、壊滅状態らしい」

「えっ…!? ……女型も右翼索敵がいる方角から来た。でも女型の情報は来ていないよね、ジャン?」

「ああ、こんな特徴あれば絶対伝わって来るっての」

「ということは、索敵の間をすり抜けて来たのか? …いや、そんなわけない。あり得るとすれば…」

女型が来た方角から奇行種を示す煙弾はなかった。となると、撃つ暇なく女型に殺された一部索敵がおり、その間を通ってきた可能性が高い。

また、右翼側に現れた無数の巨人と女型の関連性を見出し、アルミンの頭は「女型が巨人を率いて来た」という可能性に至る。これについては女型の前提が「知性巨人」ということもあり、可能性を飛躍的に上げている。

アルミンは、誰がどこに配置されているか全てを把握しているわけではない。知っていたとしても新兵である仲間の多少の位置くらいだ。しかし奪われた命があることに、歯噛みした。

その時、脳裏に疑問がよぎる。

(いや…待て。いくら何でも、流星に撃つ余裕ぐらいはあつたはずだ)

それこそ女型が「殺す」意図をより明確に持つて、行動に移さなければあり得ない。そこで彼の中に妙なつかえた感覚が生まれる。

アルミンやジャンたちが殺されていない状況と、索敵が壊滅になったと考えた時、行き着く一つの思考。アルミン・アルレルトの頭脳は、一步一步、高速に前へ進んでいく。

(最初は殺していた。けれど今は恐らく僕らを泳がせていることを考えても、何か女型

の中でこの作戦における目的——あるいは、行動指標が変わったと考えていいんじゃないか？ 索敵側に現れた無数の巨人を女型が誘導したと考えれば、現在の行動の理由は恐らく……隊を混乱させること……とか」

「アルミン、まずいんじゃないか？ このままじゃ作戦中止もあり得るぞ？」

ライナーが難しい表情を浮かべる。三人は今女型の後を追従している形だ。このままだと前方の右翼人員とぶつかってしまう。なるべくなら止めるべきだ。

アルミンは立体戦術に乏しいが、二人……特にライナーは彼と打って変わり、その才能たるや、並の調査兵団の兵士より力があるだろう。

「そも女型はどこに向かつてるんだよ……。アルミンはちと難しいが、俺とジャンなら足止めできるんじゃないか？」

「冗談よせよ、ライナー。あの速き見りゃあわかんだろ……」

そうは言いつつ、ジャンは冷や汗を流しながら、真っ直ぐに女型を見つめている。やるしかない、そんな意志が彼の様子から見てとれた。

アルミンは動こうとする二人に待ったをかけ、思考を巡らす。

女型の行動指標の変化。そこに何かきっかけがあつたのは確かだ。しかしその原因がわからない。あの巨人が超大型や鎧の巨人の仲間であるのは間違いないだろう。

ゆえに敵側は、少なくとも三人。後二人の居場所は不明だが、調査兵団の兵士に紛れ込んでいる可能性は十分にある。その人間と接触し女型の行動が変わったのなら、理由が付きそうだ。

(……………ア二)

一瞬アルミンの脳裏によぎる、マルコの立体機動装置。そしてそれを二体の巨人を殺した直後の検査で出した、ア二・レオンハートの姿。

未だこのことを誰にも伝えていない事実が、一番彼にとつては恐ろしい。己の仲間を疑いたくない、敵だと信じたくないというエゴのために、彼は今兵士として行つてはならない選択を取っている。

考える人ミンの横で、ライナーとジャンは女型の目的について話し合っていた。

そして冗談のつもりでジャンが言った「あの死に急ぎ野郎（エレン）の元じゃないか？」との言葉に、ライナーが驚愕の表情を浮かべる。あまりの豹変に、ジャンは瞠目した。

「だ、大丈夫かよ、ライナー？」

「あ、ああ……………」

ライナーは深く息を吐き、頭を押さえた。

斯様な状況だ。頭の一つや二つ、痛くもなるだろう。

「それ……あり得るんじゃないのか？ エレンを殺すのが目的だったり」

「ハア!? アイツを殺すって、そんなこと……」

「いや、十分あり得るだろ」

「なら尚更、あの女型を足止めしなくちゃいけないのかよ……」

「……なあ、アルミンはどう思う？」

「えっ？」

咄嗟に顔を上げたアルミンの横にはナイスガイが。ライナーは、女型がエレンを狙っている可能性を伝える。

「女型がエレンを？ じゃあ隊の混乱は、単純にエレンを探すためか……？ でもエレンを狙うのがメインなら、邪魔な兵士は殺した方がよっぽど効率がいい。それこそ僕らを生かしている理由がわからない。やっぱり混乱がメイン——」

「おいアルミン……アルミン！」

「……あ、ごめん。エレンは確か作戦企画時の説明では、右翼前方辺りって言うてたよね？」

「……え？」

ライナーとジャンは顔を見合わす。どうやらアルミンとは違い、エレン含むリヴァイ

班の位置はライナーなら「右翼側」、ジャンなら「左翼後方」と伝えられていたらしい。明らかに不自然な話に、アルミンの前に「一つの道」が生じた。疑問を紐解いていくことで辿り着ける、この作戦のアンサー。

「じゃあエレンはどこにいるんだ？ 考えてみると、この作戦も不自然に感じるよな…」

「……多分わかったよ、僕」

「…！ そいつは本当か、アルミン？」

「うん」

思考の早い二人に蚊帳の外へ追い出されている、ジャン・キルシュタイン。彼は彼で、黙ったまま女型を真っ直ぐに見つめている。

「エレンは恐らく最も安全な位置にいると思う。とすると、場所は中央後方辺りだ」

「なるほどな… いったいエルヴィン団長は何を考えてんだか…」

「わからない。でも僕らのはるか先を見据えているんだろうね。この作戦にも大きな意味があるんだろう」

右翼索敵の甚大な被害を伴い、さらにまだ増えるであろう犠牲の先で生まれる「結果」。

その事実アルミンにとって残酷で、受け入れ難いもの。

疑う行為を、行うことができない。
彼はまだ、残酷になることが、できずにいる。

一先ず敵の狙いがエレンということとはわかった。

ジャンとライナーは協力し、女型の足止めに向かう。だが途中ジャンが女型にワイヤーを掴まれ、あわや握りつぶされんとした。その危機を救ったのはライナーである。

ジャンの身体を押し退け、女型の手の内に捕まったナイスガイは、その身体を徐々に女型に潰された。

ヒュツと、息を零したのはアルミン。

馬を諫めライナーの元へ向かった彼が見たのは、女型の瞳。青い瞳は冷たく、訓練兵時代体験した雪山での地獄の訓練よりも、凍てつく色を秘めている。ミシミシと軋んでいく、強靱なライナーの肉体。

明確な殺意が、女型から感じ取れた。

「ぐっ、……が、……………アア!!」

女型の親指がライナーの頭部を押し、あと少しで握りつぶさようとした手前、彼はブ

リードで握っていた指を切り刻むようにして脱出した。

痛みにもうめきながらライナーは、二人に一旦撤退することを提案する。この場で一番強い人間が手負いとなり、ジャンとアルミンも領いて逃げることになった。だがこの間三頭のうち二頭は混乱の最中、行方知れずに。

手負いのライナーにジャンが肩をかしながら走り、馬に乗っているアルミンも続いた。しかし彼の視線は、後方の女型へ注がれる。

(さつきは明確な殺気があった…けど、今は逃げる僕らを追って来ない。何故だ……?)
不可解な現状。再生する手を見つめた女型は、そのまま立ちすくんでいた。アルミンは眉を寄せながらも安全な場所へ逃げるべく、前を向き直りライナーに後ろに乗るよう告げた。

「すまん、アルミン」

「大丈夫だよ。僕こそ力になれなくてごめん…」

アルミンの後ろに乗ったライナーは二人が前方を向いている中、後ろを向きやる。

一瞬女型と目が合い、彼の背筋には薄ら寒いものが走った。

ゾワゾワと、まるで背中にムカデでも這い回っているような。

青い瞳が捉えているのは、戦士の男。女型の金髪が風に揺られ、キラキラと輝きを放

つ。

彼女の口角は、微かに上がっていた。だがその瞳の奥は、未だ凍てついた色を孕んでいたのである。

あんたを殺せなくて、残念だよ——そんな言葉が、聞こえてくるようだった。

???????

女型の巨人と、複数の巨人が確認された後。

女型は右翼前方に向かい、隊を大きく混乱させた。

命令指揮を執るエルヴィン・スミスに従い、全体は右翼側の脅威から逃れるように左へ移動。撤退命令が出ない状況に、兵士たちはさらに混乱することになった。

そして行き着いたのは巨大樹の森。中央など一部を残し、左右の人員は森の外を回るようにして移動。その後は外側で待機。また巨人の迎撃態勢に。——とは言っても木

の上で立ち、巨人を誘き寄せるだけであるため、間違えなければ命を落とすことはない。

対し中央後方、森に入ったリヴァイ班は、巨大樹の森へ入っていた。

エレンは森に入る手前聞いた「右翼索敵の壊滅」との口頭伝達に、右から何か来ている、と認識している。

彼だけでなく兵長以外のリヴァイ班が動揺を見せる中、ソイツは姿を現す。

右翼索敵に大打撃を与えた巨人。14m級のその身体から放たれるスピードは、驚異の一言。

リヴァイ班の後方に現れた「女型」の巨人に他の増援が応戦する中、エレンは戦いを求める。しかしそれに兵長は首肯することなく、進み続けた。

最強の男はエレンに問う。力だけ持った、何も考えようとしていない少年に。そんな脳では、障害物を避けきれずそのまま死ぬのがオチだ。

考えなければならぬ。そして、最善を導き出さなければ、人はあつげなく死んでしまう。「生」に意味を生み出すためには、頭を動かすしかない。

既にエルヴィンから、エレンはヒントを得ているはずだ。

「考える、足りねエ頭にクソでも詰められたくなければな」

リヴァイ班のペトラやオルオたちは兵長の言葉を前に、冷静さを取り戻した。彼らの役目はエレン・イエーガーを、彼らの命を賭して守り抜くことである。

ただ一人まだ心を決められていないのはエレンのみ。戦わなければ、皆殺される。せつかく力を得た。エレンはかつて母の命をみすみす見逃し、姉と共に戦うこともできなかつた弱い自分ではない。巨人の力さえあれば全て――、

「エレン」

手を噛もうとした少年に声をかけるのはペトラ。

その行為を咎めるように、再度「エレン」と声をかける。彼女の手には……否、彼女だけではない、オルオやエルド、グンタの手には、彼ら自身の歯形が刻まれている。

巨人化の力を恐れ、エレンさえも恐怖の対象と認識したりヴァイ班の面々。

彼らはしかして少年の心に触れ、自分の早計さを恥じ、戒めとして己の手を噛んだ。

即ちそれはエレンを信じよう、という彼らの意志の表れ。

「お前は間違っていない。俺一人であのバケモノに勝てるか否か……勝てるとも言いきれねえし、負けるとも言いきれない。戦況においていつ何時、何が起こるのか、それは

誰にだってわからない。あのエルヴィンでさえな」

「……………兵、長」

「やりたければやれ。お前には一人で戦う力がある。どうするかは自分の判断で決めろ」

「…………ツ」

エレンは一人一人、リヴァイ班の顔を見た。兵長の言葉とは反対に、皆彼を見つめ、「信じろ」と目で訴える。

後ろには増援を羽虫を潰すが如く殺す、女型バケモノの姿。

やらなければやられる、世界はいつだってそうだ。ミカサが誘拐犯に攫われた時や、母カルラが巨人に食われた時。

その手を血で汚すことで少年は少女を救い、対し何もしなければ、何もできなければ母は死んだ。

世界は残酷にできている。

でも、それでも。

「オレは…………、信じます——ツ!!」

慟哭するように大声で叫んだエレン少年。

彼は一人で進むのではない、仲間と共に進むことを選んだ。そうして進み、彼らの行き先に現れたのは獲物を捕らえるための罠。

追い込まれたのはエレンたちではなく、女型エモの方である。

「え」

翡翠の瞳に映ったのは、その巨体が、跳躍する様。

女型は跳ぶ寸前、視界の横、木の裏に隠された特定の巨人を拘束するために生み出された、兵器の一部を見た。

積載されている樽の中には、七本の鉄の筒が敷き詰められており、その筒には矢尻を両端につけたワイヤーが螺旋状に内包されている。

その無数のワイヤーが特定の位置に入った獲物に発射されたが、辛うじて女型の右足に刺さるに留まる。

それに足を取られ一度地面に身体を打ち付けた女型。しかしすぐに体勢を立て直し、

拘束を振り切り、前方を走る目標のターゲットへ向かった。

まさかの失敗に、場が混乱状態に陥る。作戦の指揮を担当するエルヴィンは異常事態に、エレンの防衛命令を出した。ゆっくりと世界が動く中、エルヴィンの脳内は急速に動く。

通常なら避けられないはずであった。敵が凄まじい速度で右翼側を移動していた通り、女型の運動機能は超大型や鎧と比較にならない力を持つ。

だがそれでも、確実に仕留められた。例えば予め罠があることを知っていなければ、避けられるはずがない。罠を認識したとしても、そこから跳躍するにはラグが起こる。

女型の先の跳躍は、前提として罠の情報がなければなし得ない、状況処理能力の速さであった。

元々作戦内容が敵側にバレていた？——否、であれば、今回はエレンの奪取を見送ったはずだ。敵はウォール・マリア陥落から、5年の時を経てトロスト区を襲撃した。これを鑑みても、慎重に動いているのは想像に難くない。

ならば敵が最初に襲撃した時点では、罠について知らなかったと考えるのが妥当である。

女型が現れたのは右翼側。よって情報を漏らした内通者は、右翼側の人間となる。

そも知性巨人Ⅱ女型がエレンを狙うのは、巨人化する彼に何かしらの有用性、あるいは必要性を抱いているからだ。

シガンシナとトロスト区での一見似ているようで異なる相違点は一つ。巨人化する人間——エレン・イエーガーが現れたこと。そして、ウォール・ローゼの内門が破られなかったことから、エレンの出現は敵にとつて想像だにしないイレギュラーであった、と推測できる。

エルヴィンはこの時点で、エレン・イエーガーが巨人化できる情報を持っている人間を怪しみ、ソニー&ビーンの殺害の一件で、敵が兵団関係者にいることを確信した。

彼がその後、新兵勧誘式で“地下室”の存在や壁外調査の計画を訓練兵らに話したのも、敵に発破をかけるため。要は危機感を抱かせ、エレンを狙わせようと目論んだのである。此度の大規模壁外調査は、そのために作られた場であった。

その結果、実際に今まで確認された知性巨人と異なる個体が現れた。そしてその場所は右翼側から。これでエレンが左翼側だと伝えられていた人間はシロになる。

大方既にエルヴィンの中では、疑わしい人物は絞られているのだが。それも新兵勧誘

式の前に。

トロスト区防衛戦の時、エレンが巨人化できることを知り、箝口令を敷かれたのは一部の者。

その中でエレンの巨人化をいち早く知ったのは、現場にいたミカサやアルミンなど、104期訓練兵の者たち。疑わしい者の中にはジャンやライナー、ベルトルトにアニもいた。

これに立体機動装置の検査の際アルミンがアニの件を話していれば、彼女は拘束され、今回の女型の襲撃は起こらなかつた可能性が高い。

しかしして間違いなくエルヴィンの意図を理解し、女型に罠の存在をこの作戦中に伝えた者はいる。

一斉に兵士がエレンを狙う女型へ向かう中、一人の少年の時が止まる。

ペトラたちが戦闘態勢に入る中、リヴァイの言葉がエレンの耳に入った。舌打ちし、戦力の薄さにぼやいた兵長の言葉にエレンはついと、尋ねたのだ。

姉はこの場に、いないのか——と。

この場とは、捕獲作戦が行われた場のこと。その場にはハンジなど主要人物がおり、巨人化できるエレンの元へ鼻息荒く彼女が訪れた時も、アウラはよく巨人について語る仲だと言っていた。その時ハンジと一夜を過ごした身（地獄）としては、姉が正気がどうか疑ったものだが。

そんな姉だからこそ、無意識にエレンは捕獲の場にいると思った。彼が気づかなかつたエルヴィンの意図を、姉なら当然気づいていると考えていたことも理由に入る。

リヴァイは難しい顔をし、また一つ舌打ちを溢す。
「知らなかったのか」と、前置きして。

「アウラ・イエーガーは、右翼側索敵だ」

右翼側、索敵。

それはエレンが、「壊滅」と聞いた場所であった。

瞬間ドロリと少年の中で、何かが溶けた。

溢れた黒く粘着質なものは、少年の内側から溢れ、その狂気を現す。

リヴァイがその時目にした、少年の表情。

エレンは、笑っていた。

しかしその目は、悍ましいほどの殺意を孕んでいた。その狂気を向けられた女型は一瞬止まり、一步身を引く。見覚えのある狂気。正しくそれは彼女が恐れてやまぬ、女と酷似している。

「ころす」

巨大樹の森の中。

稲妻を落としたような眩い光が生まれ、バケモノの雄叫びが響いた。

全て「オレおま」になりたいよくだ（ゴロリ感）

指笛を鳴らしても愛馬が帰って来ず、結構焦った美女はだあれ？

そう、それは私、アウラ・イエーガーである。

女型に捨て置かれた私は、立体機動装置を付け直してから、愛馬を呼んだ。しかし中々来ず、走る巨人たちの群れに遭遇。先ほど私たちを襲った群れの個体である。まるで安い食べ物と奪い合う主婦のような恐ろしさだった。

その時は咄嗟に木の上に移動し、事なきを得た。いくら何でも数が多すぎる。あの人外兵長ならまだしも、アウラちゃんのか弱き乙女なんですね。

幸い巨人はこちらに見向きもせず走って行った。

多数を狙う性質で、一人の人間に見向きもしないのは奇行種の特徴。対し我が班を襲ったのは通常種。

つまり何らかの原因があり、私を無視して移動していったのだとわかる。となると、女型が呼び寄せたのだろう。

巨人たちが向かった位置は、ちょうど右翼前方。恐らく前方の索敵と襲わせるためと

思われる。その間彼女が私の提案通り動くかわかりませんが、最終的に巨大樹の森でエレンを狙うことになるでしょう。

しかしまさかアニちゃんが、マルコ・ボットの立体機動装置を身に付けているとは思いませんでした。ソニーとビーンを暗殺したのも彼女。これは私がハンジ・ゾエに散々苦しめられた帳尻を合わせるために、彼女の曇らせ顔を拝まないといけませんよ。

：いえ、殺した仲間の装備を身に付けているんだ。それだけで彼女の心中には罪悪感がある。

その点を責めれば、きっとアニちゃんは表情を歪ませた。その代わり余計なことを言った私は殺されていたと思いますが。

一先ずベルトルトくんの依頼はこれでいいでしょうか。罨の場所を教えたわけですし、アニちゃんの生存率は飛躍的に上がるはずですよ。

単騎で臨む合戦で、敵側には巨人化できるエレンに、人類最強やセコム・アツカーマン。さらにハンジ・ゾエやエルヴィン団長までいますし、いくら何でも無理ゲーだ。

女型は身体機能に富んでおり、巨人を引き寄せる「叫び」もある。ですが鎧と比べれば防御力が劣りますし、超大型のような破壊力もない。

しかし動ける者は、二人を除きアニちゃんしかいない。

これといった武器があれば、話は大きく変わるのでしようがね。ベルトルトくんの不安もわかります。

それから暫くし、ようやつと我が愛馬が帰還した。

壁外での単騎行動は、控えめに言って自殺行為。じゃけん、早く前方に進んでいる仲間を追いましょうね。最悪巨大樹の森を目指せば大丈夫です。

問題はしかし、別にある。

私がいる索敵班が壊滅した中、一人生き残っていたとなると、ミスが疑惑の目を向けてくる可能性があることです。アウラちゃんは一度ウォール・マリア陥落後、単騎でマリア内を移動し、ウォール・ローゼへとたどり着いた。しかも手負いである。

この件はユミルたそに記憶改ざんクチュクチュされたサシャ・ブラウス含む複数の人間から裏が取れるので、あまり心配する必要はない。反面、完全に真っ白とも言えない。

仲間が壊滅した中で一人だけ生き残った点。

また、女型が現れた右翼側に私がいたことなど。

まず一人だけ生き残った点について。

我が班は女型と巨人の群れと遭遇。しかし対処し切れず、戦っていた私は事を伝えるよう頼まれ、伝達に向かった。その際は煙弾を送る余裕さえなかったのは事実です。で、その部分は正直に話すしかない。ブレードやガスについてはある程度消耗させてあります。

そして馬を走らせつつ態勢を立て直し、煙弾を送ろうとした直後。

前方に移動し始めた女型、及びそれが連れる巨人に巻き込まれる形で落馬。この時煙弾を送る信号拳銃も無くしたことにする。

そして足を無くした私は木の上で待機し、必死に馬を呼んでいた――。

この場合、「何で女型お前を殺さなかったん？」となりそうなので、放つておいても死にそうだったアピールをする必要がある。

そのため木の上から恒例のジャンプをかまし、右足を折りました。痛いですね。

これで馬がいなくなったプラス、放つておいても移動できないため、巨人に食われるだろうと女型が判断した嘘の材料を作れる。

しかし私の索敵の位置は最も右側の位置に当たり、その後方には索敵がない。

女型の現れた位置も、巨人の群れが移動するカラクリや煙弾の位置を紐解けば、どの

場所であつたか当たりがつく。

アニちゃんは最初右翼側を確実に潰して回る予定だったみたいですが、私との遭遇で彼女の行動はエレンを捕獲する前に、隊を混乱させる意図が付け足された。エレンの居場所を教えたベルトルトくんたちの疑いが、なるべく分散できるようにするための行動。

この女型の急な行動変化に気づかれた場合、女型の行動が変化する直後にいた人物、例えば一人だけ生き残っていた私が疑われるわけです。敵に情報を漏洩させた人物である——と。剩え女型は罠を避けてしまうわけですから。

真つ先に気づきそうなのはエルヴィン・スミス。

女型の出現位置。そして一人だけ生き残った部分を踏まえ、アウラ・イエーガーを怪しい人物と仮定して、私と女型の関連性を見出しそうなのもこの男だ。

最悪脅された体でいくしかないかな。もちろんアニちゃんたちの名前は出しませんけど。

「……………頭が痛くなる……」

ここまで戦士サイドに足を突っ込む気はなかったのですが、困ったものだ。まあ、私
が裏切り者と知った皆の反応が見たい気持ちだが、先行している部分もあります。

お兄さまに出会えるまででいいので、どうかこの命が持ちますように。

その後は煮るなり焼くなり、好きにしてください。

私はきつと、美味しいですよ。

??????

仲間をたずねて三千里。

——いえ、流石に三千里は嘘です。約一万二千キロ弱など、巨人化して走れたとして
も当分かかる。

女型が周辺の巨人を連れて走ってくれたおかげか、道中巨人と出会さず巨大樹の森へ
たどり着くことができた。

この事実と、女型が巨人を率いていた様子を目撃したことを話せば、手負いで生き

残ったとしても、怪しまれる可能性は減るでしょう。

愛馬が来なかった分かなりのタイムロスをした。しかし巨人を避ける道のりを通った前方と、直線的に馬を走らせた私。ついでに（やる気を出せば）俊足を誇る我が馬をコキ使つて急がせたので、想像よりは巨大樹に着いたタイムラグは少なかった。

ちなみに伊達に7年調査兵団に所属してないので、概ねの巨大樹の位置は把握済み。もちろん地図があつた方が、正確性は増す。

して、ちようどぶつかつたのは、巨大樹の正面から大きく外れた右側。

予定通りであれば森の中に巨人を入らせないため、外側で巨人を誘き寄せる役目の兵士たちがいるはず。耳を澄まし大きな音がしている方向へ向かえばいました。

メンツは……おつ、ライナーくん、それにアルミンくん、それに馬ヅラっぽい少年と、パツとしないモブ顔の少年が二人。

もう一人は——お、おつふ。……か、かわいい天使が一人。名をクリスタ・レズちゃん。誘拐します（頑なな意思）

「あつ」

見惚れていたら巨人が襲つて来てしまいました。来る前に立体機動で上に移ろうと

思っていたのがですが、失敗した。

誰ですか、あんな愛らしい美少女を作り出した人物は。私の動悸がムネムネして死にそうですよ。いえまあ、物理的にも死にそんなんですけど。

慌ててワイヤーを木にかけようとしたが、走って来た巨人の振動で、姿勢が右に崩れる。

自業自得な足の怪我のせいで、上手く体勢を保つのが難しい状況。私の身体は馬から落ち、地面に転がる。

一番私に近い巨人が手を伸ばし、アウラちゃんの喉から野太い「アツ——!!」という声が出そうになった瞬間、動いた私の肢体。

視界がグルグルと回り、所々身体が地面にぶつかる。視界が正常に戻り状況を理解しようとして視線を探らせれば、見えたのは金髪。直後体勢が大きく変わる。

自分の肩や膝元に触れている手の感触から、どうやら私はお姫様抱っこされているらしい。立体機動装置含めたら、私の体重は60キロ近くなるんですが。筋肉お化けかな？

「……………ツ!!」

私を助けた少年にお礼を言う間もなく、彼は駆け出しワイヤーを木に取り付け、巨人の手に捕まるスレスレで逃れた。

先に言っておくと、立体機動はあくまで一人用。人を抱えて動くとなれば、ワイヤーに大きな負荷がかかる上、ガスも多く減る。木の上に乗れたはいいものの、勢いを殺せず、つんのめる形で両者身体が前へ傾いた。

そこを救ってくれたのは、慌てて私たちの元へ来た馬面の少年。再度「アッー!!」しかけた私を抱えている少年の腕を引っ張ってくれたおかげで、事なきを得た。

「バツカじゃねえのか、ライナー！危ねえだろ!!」

馬面くんが怒髪天です。

——そう、私を助けてくれたのはライナーくんでした。やっぱりゴリラですなクオレハ…。

普通の女子なら、間違いなくコロツと逝いつてしまう状況です。残念ながら私には「こうかがないようだ」。お兄さまにされたら確実に絶頂不可避だった。

「あ、ありがとう……助けてくれて……」

「……いや、いい。気にするな」

微笑みつつ、もう大丈夫アピールをして下りようとはしますが、ガツチリ掴まれていて動けません。目元辺りに影ができていますがどうしたんですかね？まさかこのアウラちゃんに惚れてしまったのでしょうか。

：いや、それとも現在のアニ・レオンハートの状況を考えているのか？

彼は以前のベルトルト・フーバーの「戦士ではない」という言葉と、マルコ・ボットが死ぬ状況の言動を加味し、精神状態に明らかかな異常が見受けられた。

以上を踏まえ、「戦士のライナー」と、「戦士ではないライナー」が生まれていると考えられる。

今は果たしてどちらなのか。戦力外通告をベルくんから押されているも同然なライナーくんなので、もう少し頑張つて欲しいところ。

仲間の死で傷つく精神は美しく愛おしいですが、壊れやすいとアウラちゃん的には物足りない。ゆえにもっと精神強度を上げて苦しみ抜いてください。

「だ、大丈夫ですか!?!」

アツ、天使が舞い降りた。私の右足の怪我に気づき、心配してくれています。

ダメです触つて具合を確かめようとしなくてください死んでしまいます。

「お、応急処置しないとっ……ライナー、一旦彼女のこと降ろしてあげて！」

「……」

「……え、あ、ああ……わかった」

ようやく降ろされた私は、クリスタちゃんの簡易的な処置を受けつつ、この場にいた隊の班長に私がここまで来た経緯を伝え、現在の状況を聞いた。

その間ライナーくんは薄っすら微笑んでいたアルミンくん「ちよつといいかい？」と声をかけられ、場所を移す。馬面——ジャンくんはそんな二人の様子を視界に入れ、微妙な顔をしていた。

一先ず我が隊の右翼索敵が森を移動中の時、「女型」の巨人が右から奇襲する形で現れ、ソレが連れる無数の巨人と遭遇したことを話す。

その際煙弾を送る間もなく隊は壊滅に追い込まれ、唯一動けた私が伝達を頼まれた。しかし煙弾を撃とうとした直後、移動する女型と巨人の群れにぶつかり、信号拳銃と馬をなくした挙句、足をケガした——云々。

「女型と巨人の群れはアウラ副分隊長、あんたを襲わなかったのか？」

「……信じられないと思います。が、女型が叫んだ後、その後を追うように巨人の群れが続いたのです。私のことは見向きもしませんでした」

「その巨人の群れが全て奇行種だった、というわけではないよな？」

「いえ、少なくとも通常種であつたはずですよ」

「足を折つてよく生きていられたものだ……」

「……本当に、私だけ……生き残つてしまいました」

仲間の惨い死に出会し、一人だけ生き残つてしまったアウラ・イエーガー。

私は今仲間の命を救えず、*“伝達”*と言いながら、逃げるしかできなかった。

俯き絶望顔を見せる私の姿に、班長の男が肩に手を置く。「よく生きていてくれた——と。」

「女型が放つておいても「死ぬ」と判断したあんたはしかし、生きていた。それが全てだろう。屍は踏み抜いてでしか、俺たちは進むことができないのだから」

「……そう、でしたね」

「本当に、嫌なものだ」

その後話は続き、私が馬を走らせていた時巨人と遭遇しなかつた点が、女型の「巨人

を呼び寄せた」という説に信憑性をもたらす。

この場に來たことについては、あらかじめエルヴィン團長から聞いていた、と話した。対しこの班長の方は、本作戦の内容については知らないようである。

「その本当の作戦内容って何なんだ？」

ジャンくんが聞いてきましたが、教えられない、と首を振る。すると舌打ちを一つ零した彼。現場に相当イライラしているのだろう。

「それで、現在の状態について聞きたいのですが……」

聞くと、少し前に巨大樹内部から外側にまで響く大きな音がしたらしい。恐らく罨の音と思われる。

次いで起こったのは、眩い光と、地面を轟かすような雄叫び。

なるほど。女型捕獲が失敗して、エレンくんが巨人化しましたか。ちようど天使ちゃんが、木の棒などを使い右足を簡易的に固定してくれたことですし、飛ばしていきましよう。

何かにハツとしたアウラちゃんは班長やジャンくん、天使ちゃんの制止を無視しこの

場を去ります。何気この場で一番偉いのは私ですので、彼らには命令が出されるまでこのまま待機しているよう告げました。

少し遠くまで移動し話し合っているらしい金髪コンビは、未だ戻ってきていないので無視。

内側に入っていくと、何やらドツタンバツタン地震のような音が聞こえて来る。

大乱闘タイタニックス^巨ブラザーズですわわかります。

恐らく異常事態を察知したミカサちゃんも、内側に入ってきているでしょう。

弟VSアニちゃんの勇姿を見に行こうじゃありませんか。できるならアニちゃん優勢で頑張ってもらいたいですね。さすればエレンくんは傷つき、アニちゃんも疲労してくれるので。

そして最後はピンチの弟のため、リヴァイ兵士長が女型の間合いに入り、膝裏や目などを潰し、最終的にうなじを削ぐ未来が見えます。

まあ、その前に女型が“叫び”を使って巨人を呼び、共食いが引き起こされ、混乱に乗じてアニちゃんが逃げてくれるでしょう。

ですがまあ、想定外のことってあるものですね。

暴れ合う巨人二体から距離を置き、兵士たちが木の上からその様子を見つめている間にさりげなく入った私。

正直言つて人間が入れる間がない。一步でも彼らの内側に入れば、羽虫が如くとも容易く殺されるでしょう。

というか女型が結晶のようなものを纏わせているんですが、何ですかアレ？

ベルトルトくん、何ですか、アレ？（二回目）

ビッグエレンくんがフラフラじゃないですか……かわいい。

どうやらアレはうなじにも応用できるようで、女型は粉骨砕身覚悟で拳を浴び、うなじを狙おうとするエレンくんの攻撃を、結晶をまとわせて防いでいる。恐らくブレードで狙うことは叶わないだろう。

今までアニちゃんの方が劣勢だと考えていた脳内が、一気に傾く。これなら罠の存在を教えぬ方が良かった。

罠ありきでも女型は優勢になった。それがないのであれば、考えるまでもない。

あの小僧め、私を謀ったな。四肢の四本や八本切り落としてその絶叫を聞かねば、こ

の精算は合いませんよ。

私がアニちゃんは劣勢になると思い込ませるのも彼の策。

私が見越していることを見越して、アニ・レオンハートに罠の存在を伝えたかったのだ。彼やライナーが動けば怪しまれるがゆえ、都合のいいコマを利用して。

向こうが知性巨人の力について、全て話していないとは思っていた。この点は、女型のメインの力が巨人を引き寄せる力だ——と、思い込んでしまった私の失敗もある。

だがこちとら、かなり危険な場を踏んでいるんだぞ。スミスの思考力は怪物なので、本気で恐ろしいのに、困ったものですわ。

何より向こうが私とお兄さまを会わせる可能性が薄まったのが、最もキレる理由。

都合のいいコマでしかない私との約束を、本当に守るのかどうか。

その答えは限りなく「否」。

けれどもお兄さまと会える可能性が少しでもあれば、私は縋ってしまう。私がジーク・イエーガーへ抱く重い想いは、本物であるから。

「いやになるなあ……もう」

この場を覆す鍵のリヴァイを探せば、木の上でミカサ・アツカーマンの身体を拘束している。彼女が異変を聞きつけ、飛び出して行こうとしたところを止めたのだろう。少し彼の姿勢に違和感を感じた。

身体の重心が右に傾いており、左足を少し浮かせるようにしている。：最悪だな、捻るなどして負傷している可能性が高い。恐らくミカサちゃんを止めた時に、無理な体勢を取ったのだろう。

私の身体は自分の制御下から離れ、力なく木の上に座り込む。

結局ベルトルトを責めても、最終的に悪いのはアニ・レオンハートが劣勢になる——と決めつけ、その考えを脳内に固定し、別の可能性が起こりうることを想定しなかった私。

そう言えばジークお兄さまは今頃何をされているでしょう。

クサヴァーさんとされていたキャッチボールを、他の戦士と行っているのかもしれないし、もしかしたら既に妻子がいて、我が子と遊んでいるかもしれない。お兄さまも25歳になっていますし、十分あり得そうです。

昔スーヴが熱いからと、必死に息を吹きかけていた猫舌お兄さまは可愛らしかった。

独特な耳をかく癖は、どうやらエレンくんにも遺伝しているようで、時折その姿を見
るとお兄さまを思い出す。

お父さまも時折その癖を見せていた。

私だけなんですけど。猫舌も。

同じになりたいのに、すべて。

ブレードが一枚あります。いつの間にか私の手の中に。いえいえ、自決なんてしませ
んよ？アウラちゃんはバカじゃないので。ガスの残りはわずか。

エレンが身体を木に打ち付け、アニに追い込まれている。

弟の巨人体は右腕が肘から吹っ飛んでおり、左手は手首から先がない。無事なのは右
足のみで、左足も脛付近から欠けており、左の顔も大きくえぐられている。

大きく開いた女型の口元に、次の展開を悟った。

うなじごと、エレンが食われる。そうなたら女型が逃げ、最悪戦士たちも壁内から
離脱する可能性がある。

なので助けに行かないといけませんね。助けに、行って。

空が、青い。

高い木々の上に辛うじて覗く色。

ほらこんなにも青いのだから、一步進まなくては。

視線をエレンに戻したその瞬間、目が合った。翡翠の瞳が大きく開き、咆哮して。

急速に回復した弟の左手。それが女型の顔を殴り貫いた。

【圧迫面接】

アルミンに連れて来られたライナー。「戦士」である現在の彼は、相手が104期随一の頭脳を持つアルミン・アルレルトということもあり、最悪の事態を想定していた。

その最悪とは、ライナーが巨人の力を持つ人間である、と勘付かれた場合である。

「ライナー、君は訓練兵時代の頃、男子のうちで誰が好きかの話になった時、「クリスタが好きだ」って言ってたよね」

「?……………あ、ああ……だが今は悩——」

「僕はあの時言えなかったけれど、本当は好きな人がいるんだ」

「え？そ、そうなのか、応援するよ」

「……応援してくれるんだね？今、応援する、って言ったね？」

ライナーに一步近づき、顔を少し上げ、「ゲスウ」と笑ったアルミン。

「言質は取ったぞ」

「あ、ああ……？」

「ちなみに僕が好きなのは、エレンのお姉さんだ」

「……そう、だったのか？」

「子供の頃から好きなんだ。初恋だよ」

「………お、おう」

「応援してくれるよね、ライナー？」

一步一步と詰め寄る初恋拗らせミン。少年から漏れ出るドス黒いオーラに、ライナーはたじろぐ。

あの時は思わず戦士長の想いや自身の感情が動き助けたが、まさか斯様な目に遭うとは思わなかった。

「みんなの頼れる兄貴分の君なんだ、応援、してくれるよね？」

「え、えつと……そろそろ戻った方が良くないか？」

「ダメだ、話は終わってない」

こうしてエレンの二度目の叫び声が聞こえるまで、ライナーはアルミンによる圧迫面接が行われることになったのである。

ザンコクな悪魔のThese (テーゼ)

戦わなければ死に、戦えども相手を殺さなければ死ぬ。

奪い奪われ、築かれる死体の山。血と肉の上で成り立つ世界の有様に、人は何を思うのか。

これにジーク・イエーガーならば、歴史の最たる悪であるエルディア人の“死”によつて、世界に救いを求めんとする。

アウラ・イエーガーならば、兄ジーク以外は何の価値もない有象無象と捉える。ただし誰よりも人間らしい彼女は、血と肉で築かれる世界に並々ならぬエクスタシーを見出すのだ。

ではエレン・イエーガーなら、血肉に塗れた世界はどう映るのか。

残酷で、しかし美しいと思うのだろうか。大きな翡翠の瞳は、彼に世界を生々と伝える。

力を持たぬ友——アルミンが、いじめっ子たちに虐められていた様子を。

刃物でミカサを傷つけた強盗犯の肉を捌いた瞬間を。

超大型巨人によって壁が壊れる瞬間を。

カルラが巨人に食われる瞬間を。

訓練兵時代、三年間苦しみ共に過ごした仲間たちの姿を。

トロスト区でまた超大型が出現し、壁が壊された瞬間を。

訓練兵の仲間が次々と死んでいった瞬間を。

巨人に食われんとするアルミンの姿を。

それを助けた後に見た巨人の赤い内臓の色と、息絶えたバラバラの兵士たちの死体を

そして目覚めた、巨人の力。

(姉さん)

少年の最も古い記憶。幼い彼の手を握り、ニコニコを通り越して、デレデレとした顔でエレンと遊んでいた姉の姿。

優しい姉だ。

いつもエレンに笑いかけ、彼が泣いた時でも微笑み、少年をあやす。

そんな姉を嫌いになるなど、できるはずもない。両親からも愛され、近所でも評判だった少女。

だが転機が起こった、地下室での一件。エレンは「死」を望む姉の姿を見た。今まで彼が見たことのなかった、アウラ・イエーガーの狂気の一面。姉の心が脆いことを知った少年は、彼女を守るくらい強くなろうと考えた。

しかしして回復した姉はすぐに調査兵団を目指し、弟の元からいなくなる。その三年間で少年は「寂しい」という気持ちと、思春期に苛まれながら成長した。

そして訓練兵を卒業し、成績九位で調査兵団入りした姉。

元々調査兵団を目指していた少年にとって、活躍する姉の姿は羨望そのもの。もちろん調査兵団が壁外から帰還する度、母と共にアウラの姿があるかどうかを、毎回確認していた。カルラも心配していたが、エレンもまた同じように不安を抱いていたのである。

だが姉はいつも帰って来て、カルラとエレンに近づき「ただいま」と告げた。

今でこそエレンも、「ただいま」の側になってしまったが。いや、そもそも「お帰り」と言ってくれる場所がなくなってしまうた。

そんな中起こった、ウォール・マリア陥落。

カルラの死の直後、母を救えなかったアウラが見せた狂気の一面。死を望み進んだ姿に、どれほど少年の胸中は苦しめられたらうか。

この一連の一件が無力な己を強く自覚する、エレン・イエーガーの転換点であったのは間違いない。

絶望した少年。果てのない憎悪を燻らせていた、彼の元に届いた吉報。姉が生きていた、という内容だ。

姉と再会した時、エレンは人生で一番「姉を求める弟」になった。泣いて泣いて、泣き続けた。もう二度とどこにも行くな——と。そして、強くなることを誓って。

そうして進み続けたエレンは知った。

アウラ・イエーガーが右翼素敵にいたことを。女型と巨人の群れによつて、全体の中でも最も大打撃を負った場所であり、「壊滅」と知らされた場所だった。

目の前が真っ黒くなった瞬間少年が浮かべたのは怒りでも、悲しみでもない。笑いの

表情。

おかしかったのだ。おかしくて、笑うしかなかった。

おかしい、力を持ったはずの少年は、何も出来なかった。姉を守ろうと誓いながら、みすみす死なせてしまった。その事実が頭の中でグツグツと煮え出し、そこから生まれたのは殺意。

殺してやろうと考える。どんな方法で、どれだけ苦痛を与えて殺してやろうか考える。

この時、己を嘲笑っていたエレンの笑みは意味を変えた。心の底から、姉の命を奪った物体を殺すことへの狂い笑い。その狂気の所以は長く共に過ごしたことで伝播した、アウラのものであるのか。もしくは元々エレンが兼ね備えている、狂気的一端であるのかも知れない。

まあ言うまでもなく、この姉弟が人を壊す狂気を持っているのは確かである。

それからペトラたちの制止の言葉も頭に入らず、巨人化したエレン。その勢いに巻き込まれ、近くにいたリヴァイ班の面々は吹き飛ばされた。

幸いケガを負ったものの、死傷には至っていない（ただし、リヴァイの負傷原因は異

なる)。

そして戦い始めたエレンと女型。場所は罾設置に利用された、森の開けた場所。

両者巨人であれど、中身は人間。行われるのは対人格闘そのものであり、繰り出される怪獣大乱闘な様に、並の兵士は近づくことすら敵わない状況。

エルヴィンの命令はこの間女型からエレンを守るものから、一時待機へと変わった。リヴァイも同様である。団長の意図として、女型が罾を避けてしまった現状。女型を疲勞させることが最優先だと判断した。

ゆえにエレン vs 女型の「ファイツ！」が許されたのだ。

予想外であったのは、ミカサ・アツカーマンの乱入。いや、彼女のエレンに対する執着具合から鑑みて、来る可能性があるとは考えられた。問題なのは彼女の乱入後起こったこと。

エルヴィンの見立てでは、エレンの勝機は薄かった。女型の対人格闘技術は異常なまでに優れている。拳が振り出されればそれを寸前で躲し、エレンの足をはらい顔面に拳を叩きつける。一方的な攻撃にエレンは攻めあぐねていた。

最終的に女型がうなじを狙うことを理解していたゆえ、エルヴィンは必ず生まれるその隙を狙い、リヴァイを当てようと画策した。これは女型が戦闘中見せた、硬質化の力

を踏まえた上でだ。

硬質化する際、女型には一瞬の動きの静止時間ができる。即ちそれは硬質化を使う場合、意識して使わなければならないことの証拠。

仮にエレンをうなじごと狙うとき、女型が使う部位はどこか。

手？——否、移動する際潰れる可能性があり、周囲に兵士がいる以上狙われやすい場所に持たないだろう。

ならば、考えられるのは口の中。口であればうなじごとかみ切つて、含んでしまえばそれで済む。その動作が行われる時、うなじをリヴァイに狙わせる。

無論急遽計画した考えだ。だが流石相棒同士であるのか、エルヴィンが目配せしたのみで、リヴァイは団長の意図を理解した様子だった。

そしてその直後現れたのだ、焦燥を覗かせたミカサが。

彼女は驚愕から一転、セコム・アツカーマンたる凶悪な表情に変え、女型を狙わんとした。

先も言った通り、並の兵士では巨人同士に戦闘フィールドに入っただけで、巻き込まれて死ぬ。だがミカサは、他の付随を許さぬ訓練兵の主席卒業者。その力は並の兵士一

00人相当。まるで100人乗っても大丈夫、な例の倉庫だ。

ただ一つ彼女の欠点を挙げるとすれば、エレン・イエーガーがピンチに陥った時、周りが見えなくなってしまう点である。

これは兵法会議でも如実に現れていた。最悪彼女は、エレンを罵倒する輩を平然とサンドバックにしていただろう。また女型が、どれほど驚異的な身体能力を持つのか知らなかったことも、仇となった。

「!!」

女型のうなじを狙った一閃の攻撃。それは硬質化した手でうなじが覆われたため、失敗に終わる。

攻撃が不発に終わり、滞空するミカサの身体。その隙を女型が狙い腕を振るった直後、リヴァイの助けが入った。

ミカサはこの時身体を押しされ無傷に済んだ――が、リヴァイは女型の腕と左足が接触し負傷。動けるものの、女型のうなじを狙うことはできなくなった。彼はその後ミカサを羽交締めし、エレンに向かおうとするのを止めた。

代役として考えられるなら、この場でリヴァイに次ぐ力を持つミケかミカサ。

団長が思案し、場が緊迫状態となった中、こつそりとこの時アウラが兵士の中に紛れ込んだのである。

策士トルトの策にハマリ、お兄さまメーターが時折振り切れる彼女。正しく今のアウラは「FF外から失礼するゾ」の状態。そこには隠しスパイスとして、「逝くゾ☒?」も付け足されていた。

(ヤ、ベエ)

レ。どこか似た女の構えを思わせる女型の動きに翻弄され続け、押されっぱなしでいるエレン。

このままでは負け、彼は女型に連れ去られてしまう。勝つ以外に選択肢はない。だが追い込まれた巨人体はボロボロ。実際に痛みが身体にフィードバックされるわけではないが、激しく巨人体を動かし、そして負傷した箇所が再生すれば、疲労は加速度的に蓄積されていく。

そもエレンと女型では、決定的に巨人体操作の力量差が存在する。

(クソッ……)

女型の顔が近づく。

(クソ、クソクソ、クソッ……!!)

口の端が裂け、女型の赤い口内がありありと覗く。

必死に少年の名を呼ぶミカサの声が聞こえた。他の兵士も同じように声をかけている。

このままエレン・イエーガーは、敵の思うままになって良いのか。増援が文字通り命をかけ、リヴァイ班がここまでに至る時間稼ぎをしたというのに、女型は罠を避けた。

彼らの命を、そしてこの作戦そのものが「無駄」になるのかどうか、全てはエレンに託されている。

だが身体は鉛のように重く、指一本動かすことさえ苦痛だ。

——進みなさい、エレン。

少年の頭の中に響いた、父グリシャの声。いつ聞いたものかはわからない。その声は彼を導くように、進め、進めと告げた。

エレンの巨人体が唸り声を上げる。

人類の命運が託されている重圧は、15歳の少年にとって重過ぎる。本来なら若人は失敗して成長していくところを、次の「成功」のために「失敗」することすら許されぬ。必要なのは「成功」のみ。

トロスト区で大岩を持ち上げ、作戦を成し遂げたことがまず奇跡であった。それもその作戦では、多くの犠牲を伴い得られた勝利であったのだ。決してエレンだけの手柄ではない。

むしろ彼が一時操作不能になっていなければ、もっと円滑に事は進んだ。

(動け、動けよ動け………クソッ!!)

まだ再生しきっていない身体で、女型を押しつけようとするエレン。

ちようどその時彼の視界に、一人の女が映った。

(ねえ、さ)

少年が見たのは、三度目の“死”を希求する姉の姿。

生きていた姉は右足を折ったのか、木で簡易的に固定されており、顔に生氣はない。弟を捉える白銅色の瞳は濁りきっており、エレンを見ているにも関わらず、彼を捉えていなかった。

姉の生存の嬉しさはほんの一瞬に、少年の身の内で押し寄せた激情。

少年の脳裏によぎる、幼き頃見た姉の姿。

地下室で絶叫し、氣狂った姉。カルラの死の後、死に急ぎ野郎になり遠くを眺めていた表情。

エレンを置いて、遠くに行こうとするアウラ。その事実には激しい憤りを覚える。同時に少年は生きることを諦める彼女が許せず、またそんな姉を作り出してしまった原因が己にあると思ひ込み、齒を軋ませる。

「オレに、守らせろよオ——ッ!!!」

もうエレン・イエーガーは、守られるだけであつた子供ではない。熱くなった脳が一週回り、冷静になつていく。

彼が叫ぶと同時に、巨人体も再び外にまで轟くほどの咆哮を上げた。

大氣が、木々が、地面が、激しく揺れる。

エレンは左手に意識を回し、急速に回復させる。

そして振り抜いた拳が、うなじに齒を突き立てようとした女型の右頬にぶち当たつた。その衝撃で大きく開いていた女型の齒や舌が吹っ飛び、目玉も飛び出す。だがすぐ

に大きく損傷した顔が、蒸気を発し再生し始める。

敵がフラついた隙に、ついで彼は脛から下が欠けていた左足を再生。

無事だった右足で大きく地面を蹴り抜き、木にもたれかかった女型へ拳を振るう。

女型は咄嗟に攻撃に転じようとする。しかしエレンが優勢になった一瞬の隙を突き、ミカサとミケ・ザカリアスが女型の膝裏を削いだことで、彼女は前のめりに大きく体勢を崩した。

アニも長時間走り、またエレンとの戦闘で、かなり疲弊している。その疲れが二人の攻撃を許す結果に。

彼女はそれでもうなじを硬化化させ、人間の本体を守る。だがおかまいなしに、転がった女型の身体をミンチにするように、踏み潰し続けるエレン。

荒い息を吐きながら翡翠の瞳を光らせ、激情をぶつけるのではない、苦しんで殺すために痛めつける。

遂には足が女型の身体を貫通し、内臓と肉、そして血が噴出する。

あまりの惨たらしい光景に、無数の兵士が口元を覆った。

——バケモノだ。

大勢の頭の中に過ぎった考え。

「エレン!!」

その光景を見ていたミカサは、懸命に叫ぶ。このままではエレン・イエーガーが人間ではなくなってしまうと、漠然とした恐怖があった。尚も彼女は最もエレンと近い木の場所から、叫び続けた。

お願い、と彼女が声をかけても、少年の蹂躪は止まらない。
ミカサは下を向き、涙を堪えながら語りかける。

「いつしよに、帰ろう……エレン」

掲げていた少年の足が止まる。ゆっくりと顔が上がり、長い前髪から覗く翡翠の瞳が、ミカサを捉えた。

その、瞬間。

エレンの咆哮とは比較にならない叫び声が、森中に響き渡る。音の発生源は女型。ついで叫び声が止まり、周囲が静まり返る。だが異変はすぐに訪れた。

罨が設置されていた場所へ向かい、近づいてくる無数の巨大な足音。無知性の巨人が

女型の「叫び」により集まっているのである。

「……………ッ、総員撤退!!」

現状では女型を捕らえることが出来ぬと判断したエルヴィンは、撤退命令を出した。上げられた煙弾により、撤退を知った外側の兵士も続々と移動し始める。

を。した。此度の本作戦で右翼側索敵は甚大な被害を受け、また一部の人間が重軽傷を負うケガをした。

???????

「……………」

荷車に乗り、俯いているエレン。少年の横には彼が巨人化した時落馬し、足を負傷したオルオや、腕を折ったペトラなどがある。

オルオは完全にエレンから視線を逸らしており、ペトラは俯くエレンに声をかけた。

「そう自分を責めないで、エレン」

「……………でも」

「…っけ、エレン、お前が急に巨人化しなけりやな、俺はみつともなく足をケガせず済んだんだ」

「……………オルオ」

ペトラはニツコリと微笑みながら、オルオの顔を引き伸ばす。

痛みにうめいた男の顔はまるで、しわしわピカ野郎。

優しくない歳上の男の追撃に、エレンは三角座りの体勢で、顔を埋めてしまった。

「……………勘違いすんじゃねえぞ。お前が戦わなくとも、リヴァイ^俺が女型^ちから守り通すくらい、簡単だったんだ」

「…すみません……………」

「う、ぐツ……………だ、だからよオ、そんなうじうじしてんじゃねえよ!!」

エレンはペトラに肩を叩かれ、ゆっくり顔を上げる。眉を下げて微妙に笑いを堪えているペトラの顔が視界に入り、彼女が指差す方へ視線を向ける。

少年が見たのは、ブツブツと、小さく何かを呟いているオルオの背中。

何を言っているのか首を傾げた途端、大声で男は叫んだ。相変わらず、顔は背けているが。

「あ、ありがとなッ!!……きつとお前があの時巨人化の力を使ってなきや、俺たちは今頃荷馬車の上に積まれる死体の一つになってただろうからよ……」

「女型の力は、私たちの想像を遥かに超えていた。多分リヴァイ兵長一人だけでも……無理だったと思う」

「……………ッ、う、…………でもオレ、オレッ……………!!」

「……今は疲れたでしょ? ゆっくり休みなさい。今度は私たちが、あなたのことを守ってあげる。だから安心して」

ペトラに頭を撫でられ、精神の限界が来ていた少年の意識は、荷馬車の揺れも相まって、一気に深みへ落ちていった。

こうして女型捕獲作戦は、少なくとも兵士の命と費用を犠牲にしたにも関わらず、失敗へと終わる。非難の声が多く、住民から上がった。

また上の決定により、エレンの身柄の引き渡しが決定的。

しかし、それでも兵士の中に敵が紛れ込んでいるのは、現実となった。人類の一步

は、着実に進んでいる。

ただし一人の男と一人の少年の内に、大きな疑問を残して。

女型が罠についてあらかじめ知っていたと思われる点。さらに女型の侵入位置、及びその場所から煙弾がなかった点から考えられた、女型の行動指標の変化。

そこから導き出される一人の怪しい人物。

その人物は一人だけ怪我を負いながら生き残り、巨大樹の森へ戻ってきた。その部分に関しては女型が巨人を呼び寄せ移動していたことから、遭遇せず生き残れた点については一応納得がいく。

しかしそれ抜きに、限りなくクロと考えられた。

そして女型の人間と思わしき人物を捕獲する前に、敵の内通者とされる人物の名前を聞いたエレンは、驚愕することになる。

「バカ…言ってるじゃねえよ、アルミン」

「でも、怪しすぎるんだ」

「黙れ。そんな、わけ……ない。そもそも接点がないだろ!!」

「……接点はね。でも他にも不可解な点が多いんだ」

エルヴィン曰く、ウォール・マリア陥落時その人物は単騎で、しかも重傷を負って壁内を移動した。

あり得なくはない。しかし奇跡でも起こらなければ、難しい。それこそ、巨人に移動させてもらうぐらいの奇跡がなければ。

そも似たようなことが一度ならともかく、二度までも、その人物には起こっている。

「アウラ・イエーガーは、エルヴィン団長から女型捕獲の内容を伝えられていた、数少ないメンバーの一人でもある」

女型捕獲の一件を受け、残酷になろうと努めているアルミンの言葉に、エレンは血が滲むほど、唇を強く噛んだ。

しかし新兵とは異なり、私は武装を許されている。完全武装しているのは上司のみであり、この場の最高責任者はミケ分隊長だ。

彼曰く、右翼側に女型の内通者がいる可能性が高く、彼らの監視を担当する云々——とのこと。

私の武装がOKなのは、アウラ・イエーガーが疑われていることを本人に悟らせぬためだ。エルヴィン団長の意図を知らされていた私が新兵と同じ扱いを受ければ、違和感を感じるに決まっている。

まあ私としては、動くつもりはない。

エルヴィン団長が、エレンをみすみす王政に渡すはずがない。一杯女型に食わされたのだ。あの男は必ず次の一手を切る。それもお得意の博打方法で。

また、アニちゃんもエレンくんがグチャグチャ（物理）にされたまままで、黙っているとは思えない。

先日は追い込まれ撤退したが、次の好機を見計らい、彼女はエレンを狙う。

団長の脳みそならば、女型の正体やその仲間にするに気付いている可能性が高い。

彼がそれを利用し事を起こすならば、その時アニ・レオンハートと調査兵団がぶつかることになる。しかし、王政にエレンの身柄が渡ったらそれでおしまいだ。となると、

行動に移すならその前。

案外今日中に、女型を捕まえる新しい作戦が行われるかもしれないな。どうあがいても、真つ黒アウラちゃんは同席できないんですが。

それにしても、昨日のエレンくん vs アニちゃんのシーンは白熱だった。

お互い血や肉、内臓をさらけ出しながらぶつかり合う。エレンくんの四肢がポロポロになっている時アウラちゃんの中で、えも言われぬ何かが生えそうでしたもの。

グチャド口のアニたそめかわいかったですね。

痛みはないでしょうが、何度も再生すれば、精神的疲労は蓄積される。あの時彼女が「叫び」を使ったのは英断であった。間違えればエレンくんに食われていたでしょうから。

かわいい弟やアニちゃんの姿、そして死に行く仲間たちの光景。さらに帰還後、住人からも心ない言葉を浴びせられた新兵たちの姿が、これまた絶頂ものだった。

また帰還中、まだ若い兵士が仲間の死体を取りに行くハプニングがあった。

位置的に仲間の死体がある場所は、巨人が多かった。そのため遺体の回収がされなかったのだ。

結果として、若い兵士らは仲間の死体を馬に乗せられたものの、巨人が追いかけて来てしまったのである。

平地のため戦うこともできず、最終的に荷馬車の速度を上げるため、積み重ねていた死体が投棄されることに。

仲間の遺体を集めた若い二人の兵士のうち、一人はその時殺されてしまった。

美談ですね。死んだ友人のために、仲間の反対を押し切って遺体を回収した。

結末は散々なものですが。愚かな行為であることに変わりはない。

しかし、亡き友のため自分や他の仲間を危険に晒してまで、行動した彼らの姿は美しかったです…（ジュルリ）

そうやって恍惚と絶頂できるのも、今になってからでしたが。

昨日はベルなんとかさんのせいで、逝く逝くアウラちゃんになっていたのですね。美味しい状況を堪能できる精神がなかった。

普通に思考できる脳があるが、現在も頭の片隅ではどう死のうか考えている。ちょうど刃物があるため、うっかりしたら腰のブレードに手を伸ばし、首を斬ってしまいそう。ぜひとも同室の104期生の悲鳴を聞きたいです。

ちなみに私以外の武装兵士は外にいらつしやいます。

私は名目上、ミケ分隊長から「中の監視を担当して欲しい」と言われている。向こうの嘘は重々承知です。

帰ってきた後エレンくんの抱擁がなければ、まだ精神が正常に戻らなかつた。

「ごめん姉さん……」なんてポロ泣きしながら弟に言われたら、そりゃあ私の心も帰つて来ますよ。

本当我が弟は、食べてしまいたいくらいに愛らしい。

「……強いな」

私の左隣に座り、感嘆の声を上げているのはライナーくん。私の正面には、ずっと顔色が優れないベルトルト・フーバーもいた。

どうして今日私と会ってから目を逸らそうとするんですかね？ やつぱりアニちゃんより私の方が好きなんですか？（ニツコリ）

「……ま、負けたよ。こ、今度はライナーとやったらどうだい？ イエーガー副分隊長」

「おいおい、俺じゃ絶対勝てないって。アウラさんも、俺より強いお前が相手の方が楽しいだろうよ」

「でも……ら、ライナー……」

ベルトルトくんが助け舟を求めます。戦士でありながら、己の愛情を優先した君の在り方は美しいですよ。それこそよだれもので。

しかしお兄さまの地雷を踏み抜いた以上、彼に向く私の好感度はグツと下がっている。もちろん、自分の考え不足が最たる要因だとは分かっています。

アウラちゃんを攻略するには、ここから腕や足の数本差し出さないと、好感度は戻りません。——というわけで、二人で人気のない場所に行きましょう。安心してください、ブレードは持っていますから。

「じゃあもう一回しましょう、ベルトルトくん。次負けたら罰ゲームですよ」

「は、はい………えっ?」

「ハハッ、罰ゲームか。応援してるぜベルトルト」

それからチエスを続ける私たち。

その間ライナーくん——恐らく会話の内容や表情から、戦士の精神だと思われる——

が、現状の不可解さに触れる。

待機させられているメンバーは、右翼側にいた新兵の面々。

クリスタやユミルくんもおり、話したことのない坊主頭のコニー・スプリングラーという少年もいる。彼は私と背中合わせで、後方の席に座っていた。

呑気に「家に帰りにえ」と話す彼は、キース教官曰く「二大バカ」だそうです。

もう一人は通過儀礼の際、イモを食べていた少女だそう。その上、そのイモの半分（小さい方）を教官に渡したらしいのですから、精神を疑う。いったいそのおバカさんほどこの誰なんでしょうかね（すつとぼけ）

ちやうどコニーくんの正面に座るイモ少女から、視線が来ますが無視だ。

「大丈夫ですがアウラ、ざん、ん」と出会い頭抱きつかれ、骨折した足を心配されましたが、やっぱり知らない人ですね。

「ねえコニー、きつとお腹いっぱい食べたら、ケガも早く治りますよね？」

「えっ？……きゆ、急に何だよイモ女」

「……私のご飯を上げれば……で、でもそんなことできるわけがない……ッ!!」

「お前とうとう、收拾がつかなくなるほどバカになっちゃったのか？」

「……あ、そうですよ！コニー名案があります！」

「何だ？」

「あなたのご飯をください!!」

「ゼツテーにやだよ!!!」

アニちゃんや、エレンの処遇で精神がマツハな戦士たちの後ろで練り広げられる、平穏な会話。

アレでしょうか、彼らはこの残酷な世界における癒し要員か何かなのでしょう。

コニーくんは断られたイモ女ちゃんは、項垂れた声を上げた。

耐えきれなくなり後ろを振り向きましたが、テーブルに頬をつけて虚無顔を晒している。ユミルくんが見れば爆笑しそうな顔です。

しかし彼女は彼女で、この状況が変だと勘付いているメンバの一人。クリスタ・レンズの隣で静かに考え込み、その様子を見て天使ちゃんが心配している。

「あれ？」

テーブルに耳を付けていた、サシャ・ブラウスの表情が突然変わる。彼女はどうかやら、地鳴りのような足音を聞いたらしい。私もその言葉を聞いた直後、テーブルに耳を付け

る。

確かに、本当に微かにテーブルが震えるような感覚がある。

流石獣少女。よく気づいたな。

巨大な足音と言えば一つ、巨人のものしか考えられない。だが我々の現在地はウォール・ローゼ内。まさか壁が破られなければあり得ない。

周囲がザワザワと混乱し出す中、私は思わずベルトルトくんを見る。超大型がウォール・ローゼの壁を破ったことから考えて、50mの壁を破壊する力を持つのはベルトルトくんのみ。その彼は今、目の前にいる。

ならば壁を破ったのは、アニ・レオンハートか? いや、エレンと戦っていた女型の様子から見て、壁を破るまでのパワーはない。内門を壊した鎧の巨人も違うだろう。

だったらいったい、誰が壁を壊したというのだ? それこそ、それこそ――。

「大変だ!!」

一つの可能性にたどり着いたその時、後方から聞こえた大声。

後ろのテーブルの横の窓から、ナナバ兵士が顔を覗かせている。ハンジ・ゾエと同じ中性的で、性別が間違われる二大巨頭の女性である。

彼女曰く、南方から巨人が多数接近しているらしい。位置はここから500m離れた場所。当然の如く装備を付ける時間などなく、危険な状況で新兵たちは緊急の任務を任されることになる。

それは付近の住人を避難させること。場所的に私がお世話になったサシヤちゃんの集落も近い。

しかしその村があるのは南方、巨人が来た方角である。果たしてブラウス夫妻は無事であろうか。

——ああ、でも、私の予想は間違いないのだろう。戦士二人の表情も困惑の裏で、微かな期待の色が窺えましたから。

壁が本当に壊されたかはわからない。実際にそれは馬を走らせてから調べることになる。

ニヤけそうになる口を全力で抑える。

時は来た。マーレから新しいお客様が壁内に侵攻している。

急いで集められた新兵と武装した兵士らは、馬を走らせる。ウォール・ローゼが突破された今、人類は敗北した。

しかし負けたのは壁内の人間たちであって、戦士には援軍。私にとっては大金星。

巨人の力は、壁内の場合ユミルちゃんを含めて五名。残り四名が、マーレにいる計算になる。

五年経ってお上が寄越すのだ。その人物はトップと考えていいだろう。むしろトップじゃなきや、史上最高の「躁」から、史上最悪の「鬱」で私は間違ひなく死ぬ。

巨人の頭数を見るべく、コートを着てフードをかぶってから馬の準備（愛馬は昨日の今日のため、厩舎で休んでいる）をし、建物の上へ立体機動で移ろうとする。

だがその前に屋根の上にあったミケ分隊長が降り、私の前に立った。じつと、私の顔を見つめる。

言葉にはしないが、無言の中に「お前は何か知っているのか」という意図が読み取れた。

「…巨人の数は9体。用意ができ次第、四班に分かれ出発する」

「……はい」

肩に、手を置かれた。思えばこの中で、彼と最も長く仲間として過ごしてきたのが私だ。

班が違かったことや、最初の強烈なインパクト（匂いを嗅ぐ）を受けてから、苦手な人間として捉えていたミケ分隊長。しかし私がこのメンツの中で一番に信頼できるのは誰か、と問われたら、彼の名を挙げる。

それはアウラ・イエーガーが七年間調査兵団に所属し、築かれたものに他ならない。私にはそういった正常な人間性もあることを、述べておきたい。

その上で、私は彼や他の兵士——サシヤ・ブラウスや、クリスタ・レンズを肉塊に変えてでも進む。私の目的のために。

むしろお兄さまと私が会うために犠牲になれるなんてそれはとても幸せなことだと思うのです。

だって、お兄さまと出会えば私は殺しにかかりますから。

本気で殺しにかかって、そして、殺される。

堪らないでしょう？お兄さまの手で殺されるの。

考えるだけで、頭も、心も、身体も、全てが溶けて液体になり、地面に染みを作つて

しまいそう。

私を信じるか否かで、悩んでいる男が憐れだ。目の前のあなたのお仲間は今、あなたを人間の一人としかカウントできていません。

漏れ出そうになる激情と戦っていれば、屋根に上がる間もなく全員揃う。

そこから出発し、途中四班に分かれ進み始めた。ライナーやベルトルトは、コニーが主体で案内する班に。イモ女は南班へ、その他ユミルくんやクリスタも分かれていく。

しかしその最中、こちらに気づいた巨人が走り出す。遠目からでは分かりにくく、その上周辺の木が視界の邪魔をして、個体の判別ができない。

走っている馬の上でもあるため、よそ見をし過ぎていると馬があらぬ方向に向かい、事故が起こる可能性が上がるので殊更。

このままでは武装していない新兵が危険に晒される。人数的に私が抜けても問題はない。そも足を骨折している身。有事の際、私の存在が班の足を引っ張る可能性がある。

ゆえに囿になってきます。当然だね。みんなたっしやでな！（遺言）

「待て、アウラ!!」

ですが皆の元を離れて、ミケ分隊長が追ってきました。何で来るんですかね？今私は待ち合わせ場所に向かっていている最中なんですよ？

それとも彼氏ツラして、お兄さまの精神ゲージを減らす手伝いをしてくれるんですか？それは妙案ですな。

「その身体でか？…笑わせるな」

「罔には十分なるでしょう、ミケ分隊長は早くお戻りください」

「……ッ」

ミケは手綱を振るい、私の横に並び立つ。険しい表情で、こちらを睨め付ける。

「お前は、死ぬ気か!!」

何故泣いているのか、とも問われる。

わかりません、と私は答えた。

「お前は本当に、エルヴィンの言うとおり……」

「ミケ・ザカリアス、わたしに言えることがあるとしたら、一つだけです」

「……何だ」

「この心臓は、私のものではない。私の心臓は最初から、私のものではない。あなたの言わんとすることも、分かっております」

「……」

「確かに死ぬ気ですよ。…いえ、違いますね。死ぬべきなのです、私は」

「……ハア」

深く息を吐き、頭を抑えたミケ分隊長。

私の言葉は、自分が「敵だ」と告げたも同然。もう命を捨て去った後のことなど、どうでもよい。

「俺も向かう。話は生き残った後、洗いざらい吐け」

「……」

「いいか、この場での上司はお前ではなく俺だ。文句は聞かん」

どうやら去ってくれないようだ。結局囿として私が巨人を錯乱させ、ミケ分隊長がそ

の際に巨人を狩っていく流れとなった。

素早く走るため、姿勢を変える。膝立ちの体勢を取り、太ももで馬の身体を挟む乗り方。この方法であれば馬体に干渉する人間の体重を軽減できる。

対し乗っている人間は、腰の立体機動装置の重さが騎乗の負担と相まって、究極に苦しくなる。

つまり、通常は採用されていないライディング方法です。

「ふひ」

分隊長が去った途端、一瞬だけ笑みが溢れてしまった。いけません、最後まで耐えるのよアウラちゃん。

加速度的に早くなった馬は、巨人の合間をすり抜け駆ける。私は先までいた建物の方へ、対し分隊長は森の中へ向かう。

建物の南方はいくらか森が続いており、その奥は森が途切れ、ちらほらと木々が覗く地形。

森の手前で確認されたのは9体なので、それ以上多いことはないだろう。

私としてはこの隙に巨人を確認しつつ、この場にいる巨人が知性持ちでなければ森に

乗じて姿を晦ませ、単独でお兄さまを探したい。

——ああ、どうしよ、どうしよ、どうしよどうしよどうしよ。

頭がおかしくなりそうだけ。一周回って冷静を取り戻しましたが、また思考回路がグチャグチャにトロけてしまう。脳と髄液が溶けて混ざり合っているような感覚が、バグった快感に。

お兄さまがすぐに私だとは気づかないよう、見繕ったマント。完璧だ。あとは本当に会うだけ。心臓が爆発しそうなんですけどどうしたらいいの死にます。

逃げ回ってれば目前に森が近づいてきた。後ろでは2〜3体の巨人が私を追いかけている。モテモテですね。

このまま森に入り、ミケ分隊長が狩り終わるまで様子を見ましよう。

知性ありなら、何らかの大きなアクションが起こるでしょうし。アニたそのように、馬を蹴り飛ばしてくれたら分かりやすいんですが。

——アレ？

一瞬で気づかなかったが、巨人がいる後方。ちょうどさつきまで見えなかった部分で

すが、建物の裏側が壊れていなかったか？…巨人がぶつかつた？

いや、そんなわけではない。建物の瓦礫はまとめて横に退けられている。まるで邪魔だったから…退けた、ような。

「え」

拭いきれない違和感に前を向いた時には、森の中に入っていた。

と、同時にゆつくりと流れる世界の中で、左に何か、木々の間に座っていた。その体軀は屈んで木々にちようど収まるほどの高さ。向こうからは私の顔は見えない。

大きな手には私が身につけているものと同じマントがあり、下にはブレードや立体機動装置が転がっている。

恐らく建物の中で、新兵たちから預かり保管していたものだ。そうか、これを取るために裏側が壊されていたのか。

「…ッ!!」

身体の制御ができなくなり、私は落馬した。

さつき見た巨人は全身が体毛で覆われていた。まるで、獣のように。特徴的な容姿ゆえ、高い確率で知性巨人。いえ、そもそも立体機動装置を観察していたのだから、当然か。

落馬の衝撃に呻いていれば、身体が逆さまになる。足を誰かに掴まれたのだ。

視界がよく見えない。頭が熱い。辛うじて見えたのは大きな目玉。後方にいた3—4 m級の巨人が私に追いつき、右足を持ったみたいだ。

瞬間、激痛が走る。

「……………ッ、あ……………!!」

すんで身体が地面に落ちる。咀嚼音が、聞こえた。

あれれー、アウラちゃんの右足の感覚が膝の少し上辺りからないぞー？食われちゃったんやね。

「ハ、ハ……………ハア……………ゲホッ……………」

他の足音も聞こえます。まさか、この知性巨人さんに殺される前に、アウラちゃんは食われて殺されちゃうんですか？まあいいかもしれないね。目の前で食われる光景をマジマジと見せつけられるなら、もう隠す必要もない。

フードを取って顔を見つめて、微笑んで死にましよう。

ああ、とても、とても気持ちいい。過去一に。

私の頭はぶつ壊れていた。今更か。

欲張りギョロ目くんは口を動かしながら、今度は左足を掴みます。よく噛んで食べてくださいね、あと体勢を後ろに回しましょうか。でないとギョロ目くんが邪魔で、アウラちゃんがおどり食いされるシーンが見えづらくなる。ついでに私の顔も正面に向けてね。

『待て』

声が、した。あ、おにいさ、まの。ああ、やつぱり、だって、似てたもの。お耳。お父さまやエレンくんと同じ尖っているの。それがなくても、私が見間違うわけがない。

あ　ああ　あああ、

ヒゲ面のオツサン、25さい児

威力偵察——それが戦士長ジーク・イエーガーと、ピーク・フィンガーに任された今回の任務であつた。

四名の戦士たちがパラディ島に送られ、早五年。まだ「子供」の少年少女たちに託された使命。それが始祖の巨人、即ち「座標」の奪還。

作戦に選ばれたのは、マルセル、ライナー、ベルトルト、アニの四名であつた。

「長期にわたる任務になることは間違いなかつたんだろうけど、流石に上官たちも苛立つて来ちやつてるよねえ」

ペランダの手すりに身を預け、外の景色を見つめながら、特徴的なメガネを付けた男は紫煙を吹かす。独り言のように聞こえるトーンをしかし、一人の人間に向けられてい

る。
男の後方、窓が開いているその中には、テーブルや本が詰まった書棚など、生活感の覗く室内が広がっている。

中央の灰皿の置かれたテーブルの横にはソファアームが一つ。その上で、男と同じ軍服の

上着を身につけている少女が、香箱座りの体勢で乗っている。

この部屋は男の自室だ。一部切り取ってこの状況を見ると、あやしい絵面である。

「少なくとも戦士に選ばれたんだ。アイツらが任務をし損なっているとは思わな
いけど」

「……………」

「考えられるとすれば、向こうの王様が上手く潜んでいるのか…」

「……………」

「ピークちゃんはどうか考える？ 現状の壁内の状態について」

「……………」

「ピークちゃん？」

男は振り返り、ソファーにいる少女の様子を窺う。

「ピーク」と呼ばれた少女は、コクリコクリと、舟を漕いでいる。先日まで別件で任務に当たっていた彼女は、かなりお疲れの様子。

「ピークちゃん、ちよつとよだれ垂らさないで。起きて、今大事な話し中」

「……………zzzz」

「見えちゃいけない擬音が見えてるからね」

「……すやすや」

「さては起きてるだろう」

目を開いた少女は、瞳を擦りながら身体を起こす。相変わらず四つん這いだ。

男が室内に入ったタイミングで起きたらしい。先の話については、寝ぼけ完全に右から左へ流れていた。ちなみに彼女曰く、男の自室のソファアールが一番寝心地がいいらしい。

「おはようございしました、おやすみなさい」

「ちよ、ぴ、ピークちゃ……」

夢の世界へ旅立たんとするピークに、ため息を吐く男。

少女の疲労はわからなくはない。巨人の力を軍事力としているマーレには、通常タイプバー家の有する「戦鎚」を除き、巨人の力を持つ六人の戦士がいる。

しかし、うち四名が始祖奪還計画に当たっており、マーレに滞在しているのは二名のみ。戦士長である男とピークだ。

戦争ばかりのこのご時世。戦いの際、支援的な立ち位置を担うのが「車力」のピークであり、攻めが「獣」を持つ男である。

これに男の特殊な力を踏まえ、戦争では基本負けなしであるマーレ。だがここ数年で対巨人兵器が各国で急速に作られており、巨人化しても危うい場面が多くなってきた。それは男が継承した「獣」の前任の時代から、表面化していた問題だ。

これにさらに追い討ちをかけるのが、近代産業化における資源不足。ゆえにマーレはパラダイ島に眠る豊富な地下資源を狙うべく、戦士を送った意図もある。

(どこを見ても戦争。本当に嫌になるなあ…)

今この時の会話も、仕掛けられている盗聴器により、お上の誰かが聞いているのだろう。

プライバシーもクソもないが、所詮エルディア人は、マーレに管理されている身。人権どうこうと言える立場ではない。諸外国のひどい場所のような「奴隷」扱いでないだけ、はるかにマシだ。

いや、名誉マーレ人である戦士なのだから、「管理」は少し違うか。

「監視」という表現の方が正しいのだろう。大きな力を持っているからこそ、いつ何時裏切り、その牙が自国に向くかわからない。そのために徹底的な監視が常日頃行われている。

タバコを灰皿に押し付けコーヒーを淹れた男は、再度ベランダに戻る。

果たして壁内の状態がどうなっているのか、戦士たちの任務がどこまで進んでいるのか。長くはマーレを空けられないため、今回の任務期間は短期のものとなる。

戦争状況を加味した上で行われる上、表面上は戦士二名が不在にすることを悟らせないよう、作戦は進められる。

最悪の場合は、戦鎚の巨人がいる。その力は超大型に及ばずとも強力であり、マーレのピンチの時は守護神として敵兵の死体を積み上げるだろう。

男は下で訓練している候補生の少年を見つめ、視線を移し空を眺める。

ゆったりと流れる白い雲。形を絶え間なく変え、流れていく。青い色はしかし時間が経てば、地上の死体からこぼれた血を吸い上げて、紅く染まる。そうして訪れる闇は、やがて朝日に追い出され、その姿を失う。

男が子供の頃から、延々と繰り返し返されるそのサイクル。

子供の頃は純粹に百面相する空を見、きれいだ——と、感嘆していた。

だが今はかつての頃のように、澄んだ心でその空を眺めることができない。

ふとそんなことを考えた男は、ため息を吐く。

「俺も疲れてんのか………あつつつ!!」

男——ジーク・イエーガーは思わず、コーヒーの入ったカップを落としかけた。

??????

壁内に侵入を果たしたジークとピーク、それから一部のマーレ兵。

拠点は人気のない古城。組まれた作戦に基づき、威力偵察のためコニー・スプリングの故郷である村人全員が、巨人化の被害に遭った。派遣されたマーレ兵は、壁内のエルディア人を巨人化させる時必要だった。

使われたのはガス兵器。ある意味で毒ガスよりもタチが悪いと、ジーク本人は感じている。

撒かれるのはジークから抽出された脊髄液。どこぞの変態美女なら、「お兄さまの体

液!!」と大喜びで飲み干す代物である。

その効果は恐ろしいものであり、体内に摂取したエルディア人——ユミルの民を、巨人化させる力を持つ。

これが、ジーク・イエガーにしか存在しない特別な力なのだ。

彼が「叫ぶ」ことにより、巨人化のトリガーが引かれる。

ジークの脊髄液で巨人化した人間は、彼の意志のままに動く。夜に動くことも可能など、その性質も通常の巨人といくらか異なる。

何故ジークのみに斯様な特殊な力があるのか、お上もわかっていない。だがジークは自身の特異性の所以を理解している。

——王家の血。

「フリッツ」の血を持った彼は、結果として間接的に同族を人間兵器さながら戦争で使い捨てるなど、誰よりも多くの骸を築いてきた。

罪悪感是最初こそ、消えるものではなかった。ただ血や肉、戦争の醜さを見続けるうちにいつしか、罪悪感はなくなっていた。人の死に苦痛を見出さなくなつた。

華やかな祭りの中、ポツリとジークがこの言葉を呟いた時。

ピークや彼女に半ば無理やり連れてこられたポルコは、なんとも言えぬ表情で彼を見ていた。

ポルコは流したが、ピークはその真意を読み解いた。

罪悪感^は、消えてしまったのではない。

見^えな^くな^って^しま^った^のだ。

表層に積み上がる死体の山。その奥に存在する罪の意識。

根っからの兄気質か、マルセルがいない分のポルコの心を埋め、独特な間合いのピークも甘やかす。そんな優しい一面に対し存在する、戦士としての冷静な一面と、非人間的な部分。

狂っているのだろう。そして、壊れているのだろう。

しかししてそれは彼だけでなく、戦士全員に当てはまるのだと、車力の彼女は感じていた。

だがそれでも、ジーク・イエーガーは己の計画のために進み続けている。

きつとそんな男の姿を壁内の人間が見れば、「悪魔」と呼ぶに違いない。

そして計画は進められ、巨人化したラガコ村の人々は、それぞれ周辺の民家や集落を襲い始めた。

一部は「獣」の巨人となったジークに操作され、近くにいた壁内の戦力と思しき兵士に当てられることになったのである。

壁内の文化は外の世界と比べ圧倒的に遅れている反面、対巨人用に作られた立体機動装置など、歪な進化構造を持っている。

威力偵察が任務内容のため、兵士の身につけていた見慣れぬ武器を調べる必要がある。しかしジークの本来の目的である『安楽死計画』上、立体機動装置の存在は、計画に利用できる材料になり得ると判断した。

武器を取ってきました——と報告しなければ、お上にバレることはない。ゆえに彼は、懐にこっそり入れることを決めた。また「戦士長」という立場上、監視を避けやすい立場であることもある。

ただ兵士をとつ捕まえ情報を聞き出したかったものの、巨人が接近したと同時に彼らは離脱。

仕方なしと、巨人が兵士に向かっている間、ジークは先ほどまで兵士たちがいた建物を漁った。そして軍服らしきマントや、武器を回収。物陰に隠れ、武器の形状などを観察していた。

だがそんな中、馬に乗った兵士が唐突に目前を横切り、観察タイムは強制終了。

ジークがちょうど見ていた刺繍と同じマントを羽織った兵士は、通常種とは大きく異なる獣の巨人の姿や、武器を観察していた様子に驚いたのか、そのまま馬から落下。

転がり木にぶつかった身体は直後、ギョロ目の巨人に右足を捕まれ、逆さまになる。固定具で止められたその足は骨折している。また、兵士の後を複数体の巨人が追っていたことを考え、囹役になっているのだと推測。

他の兵士を逃すため、買って出たのだろう。となると、他にも狩る側の兵士が近辺にいる可能性が高い。

(さっさと情報を吐かせてから殺すか)

と、ジークが考えていた折、兵士の右足が噛みちぎられた。聞こえたくぐもった声から、その時兵士の性別が女であるとわかった。

地べたに落ちた女は、うつ伏せで小さく震えている。今度はギョロ目に左足が掴まれ

る。女に迫っていた他の巨人は操作主がいるため、木の陰に潜み、さながら女と仲間になりたそうに待機している。

個体差によって、ジークの命令を聞くか否か差が出る。ギョロ目は聞かん坊タイプだ。

待て、という制止の声を聞き、止まったギョロ目の大きく開かれた口。

中は歯や舌の上に、骨の残骸や赤い肉がありありと残っている。

『腰につけてる武器、なんて言うんですか？』

ジークが声を発した瞬間、女の肩が大きく跳ねた。その心情は「恐怖」一色に違いはない。巨人が喋れるなど異常なのだ。

『巨人と戦うための武器でしよう、ソレ』

「……………」

女は両手で少し体勢を上げたまま、一切動かない。言語が違うはずはない。マーレと異なるのは文字だけであって、意思疎通はできるはず。だが一向に女は答える様子がなく、ジークは耳を掻いた。会話は望めぬようである。

『まあ、しょうがないか』

長い手を伸ばし、女の肢体を掴もうとする。その時固まっていた女の身体が動いた。手がゆっくりと腰の剣に伸び、柄を握りしめる。

この状況で、それも圧倒的な力を前にして、戦わんとするその精神。

兵士として素晴らしき在り方はしかし、戦争の中巨人の力を前にし、命を無為に捨ててきた人間たちを目の当たりにしてきたジークにとって、逆鱗に触れる行為であった。

所詮勝てるわけがない。だがそれでも刃を向けようとする。

勝手に「死」に意味を持たせ、勝手に死んでいく。殺す側は勝手に持たされたその意味の分まで、咎を背負わなければならない。

何故抗おうとするのか。

抗えばそれだけ、苦しむというのに。

無作為に生まれる苦しみを無くすことが、彼の根底の一つにある。

『嫌になるよなあ、人間って……!!』

女が剣を地面に突きたて立ち上がり、獣の手が彼女に触れかけた瞬間。その手が切り落とされた。

死角から現れジークの手を切り落とした男は、すぐに方向転換し、一瞬足を地面につ

け女を抱える。そのまま女を儀持ちにすると、ワイヤーが二人分の重さで激しい音を立てつつ巻き取られ、走っていた馬に乗った。

鮮やかな所業に、頭が上がっていた血が引いたジーク。
らしくない、と首を振る。

(ワイヤーを使い飛び回るのって相当難しそうだし、相当な使い手か)

しかして女の方は、巨人が喋ることや武器を観察しているのを見られた以上、生かすわけにはいかない。

ジークは近くにいた小さい個体の巨人を掴み、投球の構えを取った。

名誉や尊厳であるとか、*“意味のある死”*を求めていた女兵士。ならばお望み通り、殺してやろうと腕を大きく振りかぶろうと、して。

「こんなところで死ぬなッ——アウラ!!!」

依然抱えられた状態で、男の背中に頭を向けている女兵士。顔はフードに隠れており、窺い知ることはできない。

ぐつたりと動かぬ身体。先まで握られていた剣は、力を無くした手からスルリと落ち

る。

逃げる兵士二人に、巨人の投擲がぶつかるとはなかった。獣の巨人が外したわけではない。

ジークは呆然と口を開く。止まった思考は馬の姿が小さくなってからようやく動き出し、いつの間にか掴んでいた巨人は、握りつぶされていた。

永遠とも取れる時間だった。しかし実際は、そこまで経っていない。

『……あーあ、逃げちゃったよ……』

巨人の血を浴びた獣の手が、蒸気を発し回復する。

彼は頭を押さえ、首を振った。生きているわけがない。壁内にも同名の人間くらいいる。

別人だと分かりきっているはずであったが、ジークは殺すことができなかった。今巨人に追わせたところで間に合わないだろう。

獣の存在がバレるのは少し面倒だが、始祖奪還計画のメインは四名の戦士たちである。さほど作戦に支障は来さないと改め、彼はその場を後にした。

——
おにーたん！

そう彼を呼ぶ少女の姿は、ずっと変わることがない。

幼き命が平然と奪われる残酷で、美しいこの世界。

あの日から止まった少年の心は美しさを捉えることができず、残酷さばかりを映し続けている。

私は悪い子。

戦士候補生にもまだなっていないなかったあの頃。

“名誉マーレ人”という地位を手に入れるため、汗水垂らし、時には吐きながら訓練に明け暮れた日々。

そんな少年少女の中でアニは、「目的」を持っていなかった。

彼女が戦士を目指したのは単に、父親が娘——と言つても義理であるが——を、戦士にさせたかったから。

幼少から父親に受けた厳しい訓練や教育。アニが望んで進んだ道ではない。

普通の人間では相応の覚悟がなければ、戦士候補生になることは難しい。幼少期のジークもグリシャに決められた使命であつたこともあり、心のどこかでは戦士を目指すことに抵抗感があつた。

しかしてアニは、その高い格闘能力を評価され、戦士候補生入りを果たす。

喜ぶ同期のガリアード兄弟や、号泣しながら鼻水を流すライナーの姿。アニの隣にいたピークもうつすらと微笑んでいた。おめでとう、とジークが皆に声をかけている中、

彼女の視線は一人の少年に向かう。

木の後ろに座り、地面を見つめている褐色肌の少年——ベルトルト・フーバー。

おとなしい少年はいつも中心から離れ、仲間たちを眺めていた。彼は射撃能力が評価され、候補生入りに。あまり話したことのない少年にアニはふと、声をかけたくなった。

「あんたさ、さつきから何見てんだよ」

「え？……あ、アニ!？」

まるでバケモノでも見たかのように彼女を視界に入れた瞬間、ひっくり返ったベルトルト。レディに随分と失礼な反応だ、とアニは表情にこそ出さないが、ムツとした。

「……え、えつと、アリを見てんだ」

「アリ?？」

木陰の下、大きな虫の死骸に群がる無数の黒い点々。死骸を四方八方から食いちぎり、さながら協調性のない綱引きだ。左の勢力の方が強いのか、死骸は少しずつ引つ張られ、日向へ移動していく。

「…あのさ、あんた嬉しくないの?？」

「嬉しい?？」

「だって戦士候補生になれたんだ。両手上げてバンザイしろとは言わないけど、もって顔に出したら?？」

「ご、ごめん……………ぼ、僕すごく嬉しいよ！」

「引き攣った笑顔で無理やり言わないくていいから」

「……………ごめん、アニ」

ベルトルトはよく謝る。彼と関わりがほとんどないアニでも、ポルコとライナーの喧嘩を宥めようとしてポルコにキレられ、「ごめん」と頭を下げる様子を見かける。

優しい性格なのだ。だがそんな人間が、死骸が食われる様を無表情で見ているのは、かなり薄気味悪い。

「もしかして落とされた同期の人間に、同情でもしてるのかい？」

「同情は…しないよ。だって落とされた彼らは、適正がなかっただけだから。対し僕やアニには評価される能力があった。同情じゃなくて必要なのは、彼らの分までお国のために尽くすことだろう」

「……………なんかあんた、冷めてんだね」

「冷めてるっていうか…自分と他人を切り離して、見てるだけだよ」

「ふーん……………ソレちよつと羨ましいかも」

「そ、そう…？」

アニに褒められ、頬を赤らめる少年。だがアニに視線を向けている少女は、熱のこもった視線に気づかない。鈍感系ヒロインであろうか。

「そう言えばベルトルト、聞いたことなかったけどさ。あんたはどうして戦士になろうと思ったんだ？」

「…母さんのため、かな」

病弱な母。大病を患いその治療のため、名誉マーレ人の恩恵を受けさせたいのだと、ベルトルトは語る。

戦士の地位は母の命を繋ぐ、最も有効な手段であったから選んだ。あくまで名誉マーレ人になることで目的が成し遂げられるのであって、まだ「候補生」ではゴールに到達したとは言えない。

「ドベ野郎にそのこと話したらどうだい。多分違う意味で泣き始めるよ」

「ライナーが可哀想だから嫌だよ…」

「ふん、そもそもあいつが候補生に残れただけでも奇跡なんだ」

「相応の覚悟があつたんだよ、きつと。アニは嬉しくないの？」

「私？私は……」

戦士候補生に、なつてしまつた。

そんな感情が一番強い。ここから先はこれまで以上の地獄。戦士になれば寿命も限られる。父親に尽くすにしても、重い代償だ。それでも父に逆らわないのは何故だろう

か。

それはアニ・レオンハートに、父親しか、いないからだ。

一見娘を己が道具として使っているように見える父でも、少女の手を包む大きな手の中に、確かな温もりがあることをアニは知っている。

「……家に帰ったら、嬉しくなるかもね」

「家に帰ったら?」

父親が、いるから——と、うっかり言おうとした彼女の背後から近づく影。木の後ろに座る少女少女の元に現れたのはジークだ。表情がニヤニヤしている。

「お二人さん、ひっそり隠れて何イチャイチャしてるんだい」

「——へっ!?ち、違ッ、僕とアニはそんなんじゃない!!……いや、でも、僕としては……(ゴニョゴニョ)」

「ちよつと話してただけだよ」

顔を真っ赤にし、首を振るベルトルト。そんな彼の様子を見たにも関わらず、「そんなに私と話していたのを茶化されて嫌だったのか?」と考える少女は、紛うことなき鈍感系美少女。

世界の残酷さを知る前の、少女少女たちの幼き日々の一ページ。

それはやがて血で染め上げられ、遠い過去のものへと変化していく。

(何で私……今そんなこと思い出してんだろ)

アニの目の前にいるのは、マントで身を覆うアルミンやミカサ、エレンだった。

憲兵団は本日、王都へ向かう調査兵団がストヘス区を通過する際、護送団と共に警備の強化を担当する流れになっていた。エレンの身柄の引き渡しが、調査兵団が王都へ召喚された理由だ。

しかし任務を任された新米の憲兵は、護送団を何から守ればいいのか、知らされていないなかった。

この裏にはエレンを狙った女型の存在がある。

そして任務中、路地裏からアルミンが現れ、彼女に協力を申し出た。中身はエレンを逃すための作戦内容。その後はジャンが替え玉になっているエレンと合流してから逃

げ、一時的に身を隠し、審議会をひっくり返す材料を揃える云々——。

エレンを奪いたい彼女にとつては好機。だがわざわざアニに頼んだ点や、ストヘス区通過中に逃亡作戦を行う点。考えれば不自然な点はいくつも上がる。

それらを踏まえ、自分が人類の敵であることがバレたのだと、彼女は推察した。

アルミンが彼女を頼つた建前上の理由は、同期である点と、ウォール・ローゼの検問を通り抜ける時、憲兵の力が必要だったゆえ。

ストヘス区で作戦を決行する理由は、複雑な地形が逃亡の時有利になるからだ、と続ける。

博打な方法。しかしエレンを救うためにはこれしかない。

最後はアニの情に訴えた。彼女はそれに仕方なし、という風に頷く。

心は四方八方に引つ張られ、気持ちが悪かった。

彼女はまた、「悪い子」にならなければならない。自分と同じ形をした生き物を殺して、殺し、エレンを奪う。

耳鳴りがした。反面頭は冷や水をかけられたように冷静になり、心臓の音だけが異様

に大きく聞こえる。

先日のイエーガー姉弟の“狂気”に晒されたアニ。また、巨人体化したエレンに蹂躪された身体の再生に伴う、精神的疲労。さらに多数の巨人から命からがら逃げたことによる、肉体的疲労。

余裕はあまりない。疲れた心で不意に、彼女は小さく呟いていた。

——いい子って、何なんだ。

アルミンはその言葉がアニの質問だと思ったのか、彼らしい回答を返す。

自分にとって、都合のいい人間。それがその人にとっての「いい人」になる。アニの行動次第で、彼女は誰かの「いい人」にも、「悪い人」にもなり得る。

今更そんなことを考えたところで、彼女は罪で汚れきつっている。両手を握って神に祈る資格さえ持っていない。そんなことはアニ自身が嫌というほど理解していた。

「ハッ……」

免罪符が欲しいのかと、彼女が溢した自嘲の笑み。

己を裁いてくれる人間はいらない。裁かれた暁には、彼女に待ち受けるのは死。父と

会えずして終わることだけは絶対に望めない。

しかし重過ぎる『罪』への意識から、そう簡単に逃れることはできない。ただ執行人はお断りだ。

ならばアニが罪悪感から逃れるために、無意識に求めたのは何であったのか。

——それは誰かを救うこと。即ち悪い子である彼女が、「いい子」になること。

エレンを捕まえなければいけない。

始祖を奪還しなければいけない。

父に会わなければ、いけない。

だが彼女の直感には既に告げていたのだろう。自分の、アニ・レオンハートの終わりを。疲労しきっている自分と、狂気によって爆発的な力を見せたエレン・イエーガー。またミカサや他の兵士も大勢いる。

彼女が敵と判明している以上、彼女と同郷のベルトルトやライナーは捕獲、あるいは隔離されている可能性が高い。作戦にはまず組み込まれていないだろう。援軍は望めない。アウラ・イエーガーもライナーたちと似た状況と考えていい。アニと会った時のエレンの顔は、隠しきれないほど暗く落ち込んでいたから。

裏はともかく表面は一介の兵士として、ウォール・マリア陥落以前からその身を捧げていた兵士。

運が悪かったとしか言えまい。ベルトルトに協力を持ち出され、結果怪しまれてしまった女。裏切り行為を平然と行い、仲間を見殺しにし、剩れ女型に罠の位置を教えた。自業自得だ。

他人を容易く壊してしまう兄への「愛」が、その身を滅ぼす。

アニも似た結末を辿っているに違いない。
父への「愛情」によって。

彼女の目の前にあるのは、地獄の地下へ続く階段。彼女がそこで巨人化すれば、身動きが取れなくなるのは想像に難くない。

降りれば地獄。だが降りなくとも、地獄。

どちらの地獄を取るかは、彼女次第。

降りてくるよう叫ぶエレン。話し合いを求めるアルミン。鬼の表情でブレードを構えるミカサ。

「ははっ！」

艶めいた表情で笑ったアニ。ひとしきり笑った彼女はエレンに視線を向け、口角を微かに歪める。一見すれば魅入ってしまう表情は、ゾクリと、鳥肌を立たせる。

「てつきり……はは、エレン、シスコンのあんたじゃお姉ちゃんがいなくちゃ、怖くて逃げられないと思ったけど」

「……何が言いたい」

エレンの眉間に皺が寄る。

「アウラ・イエーガーは、どこに行っちゃまったんだらうね」

「……」

「かわいそうに、何年も心臓を捧げてきたってのに、お仲間に見われて」

「黙れ」

「ふ、ふふ……誰も、思いつかなかったのかい？例えば、そうだね」

——
かわいい弟のために、裏切らざるを得なくなった、とか。

瞬間翡翠の目が大きく開かれ、ブツリと、血管の切れる音がした。

殺意が少年から溢れ出し、エレンは喉が裂けんばかりにアニの名を叫び、階段を駆け上がる。

敵の挑発に乗ったことで、従来の女型捕獲と違う動きをみせた作戦。が、エレン vs アニの形式は、アニが地下に入らず戦闘に陥った場合として想定済み。

ストヘス区の住人の命を奪い、建物を壊し行われる知性巨人同士の戦い。

巨大樹で行われた戦闘よりも苛烈さを増す格闘は、血で血を洗う。最終的にエレンが四肢をボロボロにさせながら女型の頭をもぎ、うなじの表面を噛みちぎり、終わりを迎える。

その時アニが見たのは、青い空。女型から噴き出た血が虹を作り、エレン巨人体の顔が近づく。

彼女の脳裏によぎるのは、父の姿。

「いい子」の免罪符を片道切符に、あの世へ行くことになるのだろうか。地獄は、もう嫌だった。

(そう言えば結局、ベルトルトから私を救おうとした理由を聞けなかったな……)
ベルトルトはアニの「いい人」でいたかったのだろうか。あの自分と他者を、明確に線引きできてしまう男が？

もつとふさわしい理由があるはずだ。彼を動かす何かが。人が無条件に他者へ尽くすのだとしたら、考えられるのは何であろう。

(まさか、ね)

「アニ」と、笑いかけるベルトルト。心底嬉しそうに彼女の名前を呼んでいた。

(まだライナーのことも殴れてないし……ああ、そうか)

まだやり遂げていないことが、たくさん残っている。

その事実には彼女は小さく、息を零す。

(まだ、私——しにたく、ない)

空と同じ色の瞳からこぼれ落ちた涙。

その涙が地面に落ち切る前に、彼女の身体は結晶へと包まれたのであった。

【五章】 “幸せ” っ てあんにやもん にや編
 神にとつての悪魔さま

一面の砂の世界と、天上に伸びる巨大な光の柱。

その場所で一人の少女は、地面に仰向けの体勢で横たわる兵士服の女の側にしゃがみ、頬をつついていた。

女の白銅色の瞳からは涙が溢れ、口元からは涎が垂れたまま。顔は完全にトロけていた。眉は限りなく八の字になり、ひっきりなしに漏れる艶めいた声。

肉付きの薄い体軀は女自身の両手で抱きしめられており、胸元が微かに強調されている。足は閉じられ、時折その全身が小さく跳ねた。

少女の目に、絶対に晒してはならない卑猥物。
 しかして少女に動じる様子はない。

頬を突つつけども、色素の濃い髪を撫でてみれども、女の適切な^{モザイク}処理が必要な姿は変わらない。というより女は、少女がいることさえ気づいていない。

攻撃の手を変え、女がミカサにした脇腹攻撃や、幼き弟へしていたうなじを手で掴む方法。また、かつて少女自身が女に受けたπ^{パイ}タツチも行ったが無反応。

『……………』

少しムウ、と口を尖らせた少女。

女に近づき額同士をくっつけて見えたのは、例えるなら延々と続く「♡」の文字（本文の15万字が余裕で埋まるレベル）。

完全なるメス堕ちだ。少女は訝しんだ。

女がここまでイっているのは、兄ジークと出会ってしまったためだ。

本来なら、ミケ・ザカリアスが遭遇するはずだった獣の巨人。イレギュラーな女の存在は、彼女が現れた時点から、少女が知っている未来の趨勢と異なる動きを生み出す原因となっている。

神の如き少女を以ってして、これからの物語がどう動くかはわからない。だが彼女自身がいかに解放されるため、そして女のため、最善を尽くしたいと願う。

ただ、動くにしても少女には初恋相手への想いや、二千年間刻まれた“奴隸”としての在り方が存在する。

そも少女が存在する「道」は、現実世界と時間の流れが異なる。キャラの戦闘力のインフレが凄まじい七つの玉を集める漫画の例を挙げるとするなら、「精神と時の部屋」だ。現実世界の一日が、その部屋では一年となる。無論少女の存在する世界は一年の方に該当する。

悠久とも感じられる時間の中、その精神も人間から大きく逸脱した。女の存在を認識するまでは、少女にはごく僅かな人間性しか残っていないかった。

だが女に触れ、少しずつ少女の心は色を取り戻し始めている。それこそここ数年重労働を強いられる主な原因の獣の巨人に対し、「ハ？」とキレかけるくらいには（ただし死んだ表情筋は、余程のことがないかぎり動かない）。

今思えば、初代レイス王に半径数百キロに及ぶ壁を作らされたあの時は、数千回なぶり殺しても足りぬほど過酷な作業だった。

初恋の想いは、女が現れてなお、少女を縛り続ける理由となつている。レイス王の所業も、獣の巨人の同時多発テロ的巨人の発注案件も、彼らが「王家」の血を引いている以上、奴隷の彼女は逆らうことができない。

それが彼女の存在理由であるから。

『……………』

女もまたフリッツの血を引く人間だ。しかし、彼女と出会った歴代のフリッツ王やレイス家の人間たちとは違う。

女は少女にとって特別な存在。

少女を初めて、「あい」してくれた存在。

だから少女は——ユミル・フリッツは、一人の「ユミル」として、女の幸福を願う。たとえそれで多くの人間が死のうと、彼女の心は一片の播らぎも見せぬ。否、元よりそんな感情は、生きていた頃に失った。

人の死も生も、彼女にとってはさしたる大きな違いはない。

現在女は再起不能となり、暫くは絶頂の世界から帰ってこないだろう。

本当なら、ジークの手に握りつぶされ死ぬはずだった。女の幸福は兄の元でしか存在し得ない。

女に愛されるヒゲ面のおっさんに嫉妬を覚えるが、少女とて初恋の想いが未だ存在する。ゆえに女が誰かを愛することを、少女は肯定しているのだ。それが兄妹云々——という常識はない。

また女の、人の悲劇を食らうことでしか「生」を実感できない精神構造も、少女は完全にわかつてはいない。だからこそ理解しようと、齷齪している。グリシヤはその最たるとんだ被害者だ。

まあわからずとも、大好きな人間の全てを肯定する。まるで慈愛に満ちた神が如く。限定的すぎる愛の方向性だ。

流石というべきか、女は愛するお兄さまに殺される間際、完全に堕ちた頭と関係なしに、最も兄が苦しむ方法を取ろうとした。ブレードを握ったのが正しくその時。

これぞジーク曇らせへの執念か。少女は理解しようにもできなかつた。

最悪少女が介入しようとも考えた。

一つ留意する点があるとすれば、あの場にいた巨人たちが獣の支配下にあつたこと。

「王家」の血が絡む以上、少女はその巨人を操ることができない。そのため、「始祖」を利用せざるを得なくなる可能性があつた。

だが強硬手段に出る前に、ミケが到着。女を救い出した。

これについてはユミルが操作したものではない。

座標の力があれば、記憶操作や人間の脳内に呼びかけることも可能である。だが唐突

にミケの脳内に「副分隊長が危ないで！」などと訴えかければ、それこそホラーだ。女に特別な力があると考えられれば收拾がつかなくなる。記憶改ざんの手もあるが、不自然にツギハギされた記憶は、のちにどのような歪みを生み出すかわからない。乱発はなるべく避けたい手段。

そもそも少女が過剰に関与すること自体、世界にとってはかなり歪みの生じる行いである。

オリチャーを発動したニキヤネキたちに存在する、これからの展開への不安や後悔。それが少女にも付きまとう。

さらに言えば、「道」の世界に縛られる彼女が現実へ手を加えることは、相当な疲労を要する。

生命の根源と遭遇し、その“理”によつて存在する少女。逸脱が過ぎれば、少女でさえ何が起こるか判断できない。

しかしそれでも、多少の地雷は踏み抜いてでも、女のためにユミルは尽力する。

捧げられた分を、捧げようと。

???????

獣の巨人から逃れるように、大きく西へ移動したミケ。アウラの方は助けられた直後
気絶し、彼の背後にぐったりと寄りかかっている。

巨人たちの姿が見えなくなったところで、ミケは周囲の安全を確認してから地面に降
りた。

そしてアウラが身につけていた太もものベルトを、限界まで締め止血を施す。

だがそれだけでは心もとなく、ブレードの部分を外し柄が繋がったワイヤーでキツク
縛った。

早く病院に運びたいところであるが、ここは最前線。兵士として一人のために時間を
割いている余裕はない。その上、ウォール・ローゼの壁が破壊されている可能性がある。

近隣住民への避難指示は別れた四つの班が回っている。ゆえに先に調べるべきは壁。

伝達人員がエルヴィンのいるストヘス区へ向かっているが、位置からして援軍が来る
のは翌日になるだろう。それまでに壁の穴の場所を把握しておきたい。

「どう、すべきか……」

再度馬にアウラを乗せたミケは、馬を走らせる。一先ずこのまま西へ行き壁に向かう。二人を乗せた馬の疲労がかなり溜まっているが、かといって彼女一人置いてはいけない。

エルヴィンが非人間的になれる一方、ミケは情には熱い。一見すれば寡黙で、初対面の人間の匂いを嗅ぐ変人ではあるが。

アウラ・イエーガーは現在敵の内通者として怪しまれている。彼女も「クロ」と匂わす発言をした。

仲間を裏切る行為を為した理由はわからない。それこそ本人から聞かなければ。

一方でケガがあり戦闘も満足にできないものにも関わらず、躊躇いもなく囮になったり、涙を流していた姿。

「死」へ向かおうとする行為を何故取るのか。

それは単に、「罪悪感」に苛まれているからではないか。

ミケと二手に分かれた時のアウラの顔は、どこまでも安らかだった。

許してはならない。仲間を裏切った代償はきちんと払ってもらわなければ、死んだ者たちに示しがつかない。だがその清算は決して、彼女の死を以つてなされることではないのだ。

だからこそミケは拭いきれぬ胸騒ぎを感じ、自身を追う巨人を狩った後、急いで彼女が向かった方角へ馬で急いだ。

そこで見たのは身体が体毛で覆われた「獣」の巨人。

そして、その巨人に肢体を掴まれようとするアウラ。

その時ミケの視界に一番強く映つたのは獣ではない。ブレードを抜いた、女の——
仲間の姿。

死にたいのであれば、そのまま抵抗しなければ望み通りになった。

だが彼女は柄を握った。それ即ち、「兵士」としてあるべき姿に他ならない。

ミケが獣の巨人を視界に入れた時、総毛立つ感覚がした。異質なその見た目もあつたが、瞳の奥に意思を感じ取った。巨人にはあつてはならない「知性」の片鱗である。

もし彼がアウラの立場になっていれば、恐怖で固まってしまっただろう。

それを踏まえ、最後まで戦い続ける。

“進み続ける”調査兵团として最も必要な意志が、アウラ・イーガーにはあった。ゆえにミケは迷っている。

本当に彼女が裏切り者であるのか、と。

また裏切ったのならば、その理由は何か。敵に利用されている可能性も十分あり得る、と。

まあ、考えても仕方ない。現状の最優先は穴が空いているであろう壁の箇所の確認。アウラの出血量から鑑みて、翌日調査兵团の援軍と合流し、病院へ連れて行って生きられるかどうかは半々だ。

しかし一度ウォール・マリア陥落時、死地から帰ってきた女だ。そう簡単には死なない確信が、漠然とミケの内にあった。

その後彼は古城の跡地を見つけ、彼女を塔の中に残し一人壁の調査を行った。

不気味なことに隔離施設で遭遇してからというもの、巨人を見かけることはなかった。まるで壁の穴など気のせいである、とでもいうように。

城跡地付近から一旦南方向へ向かい、壊れていると推測される範囲を壁に沿いながら北上する形で調べる。

その途中ミケは近隣の住民を誘導し終え、壁を調査していた仲間と遭遇。

時刻はこの時点で暗くなってきており、壁に穴が存在しないという結論に至ったのち、すぐさま彼が進んできた道を引き返し、同じように調べていた仲間と合流した。

ナナバやゲルガーが深刻な面持ちの中、一行は暗くなってきたことも受け、その夜は城の跡地で一泊することになる。

長い夜の、始まりであった。

第四伍話 理不尽な、痛み

知らない天井だ。

思わず至近距離にあつた顔を殴ってしまったお茶目さんは私、アウラ・イエーガーちゃん。

何で私、生きてるの。

「グハッ」

おかしい。巨人化してもイケメン過ぎたジークお兄さまに殺されたはず。なのにどうして生きてるんだ、どうして。

「いっつ……!!」

その時右足に激痛が走り、呻きながら視線を向ける。右膝の少し上辺りから欠けていた。

寒気がひどいですね。身体を少し起こしましたが頭痛がし、吐き気もする。身体の上にかけられていたのは、サイズの大きな調査兵団の上着。また上下には薄い毛布があ

る。立体機動は外され、この場にはなかった。側ではパチパチと、燃える薪音。

頭の方はまだぼんやりとしている。お兄さまのお声を聞いてから記憶がほとんどないんですが、何があつたのか。

辛うじて思い出せるのは、ろくに回っていない思考の中、誰かが側にいた感覚。あの砂の感触はユミルたその世界。

つまり私は規制御免、な様子を見られていたわけだ。それもそれで興奮する（末期）
どれほど痴態を晒していたのかわからない。しかし相当あの世界で意識をトばしていたことはわかる。現実ではそれほど時間が経っていないでしょう。巨人に食われた右足の痛みから考えても。

「だい、丈夫か？」

私の右ストレートパンチを受け壁に吹っ飛んだ相手が戻ってきた。この美女ちゃんに顔を近づけて、いったい何をしようとしていたのでしょうか。あなたを猥褻罪で訴えます。覚悟の準備をする暇も与えません。

「すまない……心配だったんだ」

申し訳なさそうに謝るライナーくん。瞳を開けたらゴリラがいた。そりゃあ私でも

理不尽に一発殴ってしまいます。いや、むしろ私じゃなかったら、変態扱いで彼の人生終わりだったのでは？

「なに、が」

「状況は説明する。無理に今は動かなくていい」

ライナーくん曰く、今の現在地は隔離施設からしばらく西に行つた城の跡地。近くには壁がある。

私はミケ分隊長に獣の巨人に握られそうになつたところを寸前で助けられ、そのままこの場所に運ばれたようだ。分隊長はその後壁の調査に向かい、仲間と合流。四班に分かれた彼らも、無事近辺の住人たちに避難誘導を終えた。

ちなみに穴については無かつたらしい。

時刻は夜であり、一晚をこの場所で過ごす。翌日には、伝達から事を知つた調査兵団の増援が来るとのこと。

ちなみに私は重傷者のため、皆がいる場所とは離れた場所で寝かされていたみたいだ。ミケ分隊長や他の武装した兵士は現在屋上で見張り。その他新兵らは塔の中で各々休息をとっている。

何故ミケ・ザカリアス、私を助けたんだ。何故、何故、何故。

ブレードで足の指から少しずつ、頭に向かって薄く切り刻んでやらなければ。でなければこんな仕打ち、到底受け入れられない。否、刻んでも足りない。

「私」の終わりが、また、遠い。空みたいに。

「ちようど盗賊が最近ここを寝ぐらにしていたみたいだな。一晚過ごす分には十分な食料があつたんだ」

「……………」

「アウラ副分隊長、あんたは今失った分の血を補わなくちゃならん。顔色もほぼ死人だ。何か食えそうか？」

「……………」

「…やっぱり、調子が悪いか？」

「……………つた」

「えっ？」

——殺され、たかつた。

潰されて、そのままお兄さまの手の中で血と肉を身体から溢れさせながら、「私」で汚したかった。私が付着したお兄さま。本当は敵対してその上でお顔を拝んで死にたかつたけれど、お兄さまに殺されるならそれだけで私は生きていてよかつたと思える。もつとお兄さまに私を刻みたかつた。私で穢れて欲しかつた。私でお兄さまがグチャグチャになつて欲しいのもつと。そして私をグチャグチャにして欲しい。

だつてそれつて、とても「愛」でしょう？

「あんたが死んだら、エレンが悲しむぞ」

「……今のライナーくんはどつち？ 兵士なの？ それとも——」

「兵士に決まつてるだろ？ 逆にそれ以外に何があるつていうんだ」

「……………そつか、ならいいよ」

今私の前にいるのは「戦士」のライナーではない、ということ。これでは話せるものも話せない。

ベルトルトくんはずつと、斯様な要介護者と共にいたというわけか。そりやあ唯一お家事情を理解できる私に話を持ちかけてもおかしくない。それ込みで利用されたんです。

それにしても穴がないというならば、いったいどうやって巨人が現れたというのか。ビッグお兄さまが巨人を抱えて運んだ可能性もありますが、現実的ではない。多くの巨人を運ぶくらいなら、壁をどうにかして壊した方が手取り早いでしょう。

いや、そもそも何故巨人を壁内に入れる必要があった？ 少なくとも混乱させるのが目的ではあるまい。

仮に派遣した戦士が中々戻って来ないとして、痺れを切らしたマーレのお上が増援を寄越す。壁内を襲撃するならわざわざウォール・ローゼの南東の隅で現れるより、紛れ込んで中心地で事を起こした方が襲撃としては適切。

(つあ)

脳裏によぎったのは、お兄さまが物色していたもの。それはマントや、立体機動装置。兵士の武器を観察していた点や、穴の空いていない壁内に現れた巨人を踏まえて。

——敵情視察か

巨人を連れて来たのは、敵の戦力を窺うため。ゆえにお兄さまは武器なども観察していたのだ。

急に壊滅的な被害をもたらす襲撃を行った場合、既に送り込まれている戦士たちの作戦の進行を阻害する可能性もある。

ということは視察メインなら、お兄さまが早々に帰ってしまおう。え、あつ……（死）……いえ、今日出会えたのですから、まだ流石にいらつしやるでしょう。お兄さまが帰還する前に全力で殺されに行かないと。殺されなくとも死にます。

（というか、えっ）

お兄さまのお声を聞いた時、「待て」とおっしゃっていたんですが。既にこの時点でお父さまや、ハンジ・ゾエに聞いたエレンと比較して、話せる点で大きな違いが存在する。女型も話すことはできなかった。わざわざアニちゃんほうなじから出て来て会話したくらいですし。

知性巨人にも話せる個体がいるとして、お兄さまはどうしてあの時「待て」と言った？

その直後頭がイかれてしまった記憶をどうにか手繰り寄せて、現状を把握し——ジークお兄さま本当格好よかったです目が、目がアア！

確か、獣の巨人が「待て」と言った後、ギョロ目巨人の動きが止まった。

——止まった？

待て、待て。お兄さまの言葉に従ったとでもいうのか？まさか、そんなわけ……いや、奇行種以上に特異性を持つ巨人の存在は、物的証拠や目撃情報がある。

約一年前メガネの変態がリヴァイ兵士長から預かった「興味深いもの」として、私と討論を交わしたものだ。

それが調査兵団兵士「イルゼ・ラングナーの日記」

彼女は壁外調査の際馬を失い、立体機動装置が使えなくなった中、徒歩での帰還を目指した。

そんな彼女が遭遇したのが言葉を話す巨人である。

6メートルのその個体は彼女を『ユミルサマ』と呼び、敬意を示した。この際ハンジは『ユミルサマ』とは誰なのか、あるいは何であるのか調べたが、「ユミル」にまつわる情報は得られなかった。

当然のことだろう、既に記憶改ざんと共に抹消された単語であるのだから。私など一部の者しかその「意味」を理解することはない。

何故その巨人が『ユミルサマ』と呼んだのかは、私にもわからない。本人かもしれない少女に聞くのも忘れていた。

しかし巨人によって通常種と奇行種ができることから、何かの要因が存在し、その巨人が言葉を発したのではないのか？と個人的には考えている。

して、知性のない巨人が言葉を発した事例は存在する。

ならばお兄さまの命令を聞いた巨人は、言葉を発した巨人のように特異な個体であったのか？

否、違う。

命令された側ではなく、命令した側に何か特別な理由が存在する。

お兄さまは存在だけで特別ですが、特筆して挙げるならば何か。

考えるまでもない、「フリッツ」——王家の血だ。

特別な血が影響し、無知性巨人は獣の巨人の命令を聞いた。チート過ぎないでしょうか。

言うことを聞かなければ、壁を自力で登らせ侵入させることも可能でしょう。巨人化の最中にしか使えないのか、人間の状態でも使えるのかは不明ですが。恐ろしい力です、流石お兄さま。

「大丈夫か？ぼんやりして」

思考に耽つていれば、ライナーくんが手を伸ばし私のおでこに付けた。身体は寒いですが心はグツグツと煮えたぎっています。お兄さまの愛でな。

「熱はないか。無理、するなよ」

「……うん」

儂げ美女スマイルを浮かべると、ライナーくんの顔に影ができた。これは今度こそアウラちゃんに惚れてしまったみたいですね。まあ重傷の私に盛つてこようなものなら、何を、とは言いませんが本気で潰す。そも彼なら再生するので問題ない。

躑つてのに一番効くのは痛みである。どこぞの160cmの男が呟いていた言葉です。

「……………何か食えるものを持ってくる」

「私のことは構わずに、休んでていいよ？」

「いや、俺がやりたいからやるんだ。気にするな」

そう言い、ライナーくんは部屋を出て行った。

「ハア……」

お兄さまはまだ壁内にいる可能性が高い以上、どうにか隙を見てこの場から抜け出したい。

激しく動けばその分血が流れて本気で死にますが、殺されに行くので無問題。

夜ならば隔離施設からそう離れていない場所で、休憩を取っているだろう。単身で壁外の移動はかなり無理があるので、恐らく他にも仲間の戦士はいる。

お兄さまが送り込んだ巨人のせい、「妹が足を食われちゃったんやで♡」プレイができるの控えめに言つて最高ですね（ドロオ…）

ただ、食われたのは完全に予想外だった。お兄さまのためなら、四肢も五感も内臓も肉も骨も私の全てを失つても、かまいませんが。

（抜け出すならまず杖になるものと、外の様子を窺うことか。立体機動装置も隙をみて奪いたい）

幸い部屋——と言っても周囲が石造りで囲まれ、そこにくり抜かれた窓の部分から、月明かりが差ししている部屋——の隅にかつて使われたであろう鍬があった。高さは腰ほど。持ち手を握り、地面と接する鉄の平たい部分でうまくバランスを取りながら歩く。

進みたびぶつ倒れそうになりますが、身体に鞭を打ちます。死ぬならお兄さまの前で

死にましようね。

「……………あつ」

木の扉を開けて出ようとしたら、この部屋に向かっていたらしい少女と出会ってしまった。ユミルくんは今日もイケメンですね。

「さては脱走しようとしたな、あんた」

「ふえっ」

「ホォー……凶星か」

「……………」

「てつきり顔が真つ青だから幽霊かと思ったぜ。つま、そんなの私は微塵も信じてないけどな」

豪快に笑いながら、ユミルくんを背を押され中に戻されてしまったアウラちゃん。仕方ないので、持っている鍬で頭を殴って殺しましょう。急がないとお兄さまが帰ってしまう。

と、思いましたが鍬は彼女に奪われ、体勢を崩した私は前のめりに転ける。それをユミルくんが抱きしめて受け止めてくれ——何だこの胸は。

「うわっ、見かけ以上にあんな細ほッそいな」

「……………」

「そう怒んなって、飯も持って来てやったし、ちよつと話そうぜ」

「……………わかりました」

ユミルくんはこつそり食料を漁り部屋を出た時、ライナーくとすれ違ったそうだ。

そして彼の腫れた左頬と、ライナーくんが寝ている部屋の様子を見に行く、と言っていたことを関連づけ、彼に爆笑したのち代わりに食料を持って行くことを願いだたことのこと。

今も思い出し笑いか、堪えきれず床を叩いている。

「どうせあんたが寝てるからって、手エ出そうとしたんだろ？クリスタもアイツに狙われてるし、私が一肌脱がないとな」

斬つたら死にまうかな、とユミルくん。この子物騒なこと考えてませんか？（おまいう）

ユミルくんは私から一人分離れた場所に座り、缶詰を渡してくる。スプーンはないので手掴みで食べると。ワイルド過ぎやしないですか？

缶詰の表記を見ると、『ニシン』と書かれている。

「……………」

「何だよ、食べられないのなら——」

「食べる。全部残さず汁一滴全て」

「…お、おう」

壁外の文字で書かれている缶詰のパッケージ。そも、海水魚のニシンが海のない壁内に存在しているはずもなく。

つまりこれは外の人間が持ち込んだもの、と推測できる。現在お兄さまが任務中であることを考えると、彼が持ち込んだものである可能性が高い。拠点にしていたのでしよう。この古城跡地の近辺には人もいなかったようですし。

お、お兄さまの、お兄さまのニシン……………」

「おい、じこ…」

「泣くほど美味しいのかよ……………」な、なあ？そんな美味しいなら、ちこつと私にもくれないか？」

だが断る。お兄さまのものは私のもの。ついでに「私」と私のものはお兄様のもの。汁一滴残らずお兄さまのニシンのをゴックンしました。味がとても濃いですね。美味しゅうございました。

舌で口元を舐めとれば、ユミルくんは少し目を細めて顔を赤らめる。「クリスタに（伏せ字）したらこんな感じになるのか……」と言っています、何を考えているんだこの女。というか聞こえているんだが。

食べ終わったのち、ユミルくんが去ると思いましたが、部屋を出て行きません。

それとなくクリスタちゃんを出し、ライナーくんも一緒にいるけど心配ではないのか？と、誘導する。しかし既にライナーくんには脅し済みらしい。この娘はクリスタ専用のセコムなのか。

「話そうぜ——って、私言つたら？」

「あら、そうだったね。じゃあ今日そちらであつた内容でも教えて欲しいかな」

ユミルくんは洞察力に優れている。ゆえに隔離施設にいた時も、なぜ自分やクリスタたちがこの場にいるのか。また、大規模壁外調査の真の意図を考えていたのだろう。

どこまで把握しているかはわかりません。しかし私にフランクに接しながら、わずかに警戒心を覗かせている辺り、隔離施設にいた非武装の人間が、エルヴィンらに怪しまれているとは考えたはず。

そして疑われる内容は、「敵」の内通者であるかどうかということ。

私を怪しむ理由は、右翼索敵で唯一生き残った人間だから、で十分。

イマイチ彼女の意図はわからない。が、クリスタ・レンズに親愛であるのか友愛であるのか——ともかく、特別な感情をユミルくんは抱いている。クリスタを守るため、動いている節は見受けられた。

「——とまあ、私の班で起こったのはそんなもんだな。……あ、そういや」

「何?」

「……いや、コニーの故郷なんだけだよ、村が壊滅していたらしい。それも他の集落と比べて圧倒的な被害だ」

班を村へ案内したコニー・スプリングガー曰く、家は巨人によって破壊された跡があり、村人は全員おらず。唯一その場にいた巨人は、コニー家をぶち壊し仰向けで寝転がっていた一体のみ。その個体は手足が異様に細く、移動もままならない状態であった。

まるで、突然その場に現れたかのような格好だったと。

「コニーもライナーも、巨人が喋ったって言ってたんだ。バカバカしい話だよな。しかもコニーはソイツが母ちゃんに似てる、って」

コレは絶対後で、ハンジ・ゾエが鼻息荒くして向かうんですねわかります。私も連れて行かれるのだろうか。いや、その前にこの内容について数日間討論を申し出されるか

もしれない早いとこお兄さまに殺されに行かないと私の明日がホワイトホールどこるかブラックホール。

「なあ……副分隊長さんよお。あんたもこの話、バカバカしいって思うよなあ？」

こちらを観察する視線。私がどこまでの情報を持っているのか、探ろうとしている。

先まではジーク・イエーガーが巨人を操作し、壁内に侵入させたのだと思っていた。

しかし不可解なコニー・スプリンガーの村や彼の母の状況を考え、外から材料を持ってきたのではなく、恐らく中の素材を使ったのだ。

エルディア人であれば、巨人の脊髄液を投与すれば巨人になる。注射器を使ったのか、あるいは別の方法を使ったかはわからない。だがコニーの故郷、ラガコ村の間は間違いなく総じて巨人化させられたのだろう。

「興味深い話ね。これは一部の調査兵団の人間しか知らないけれど、喋る巨人というのは、一度確認されているの」

「ホォー……、それ私に話してもいいの？」

「大丈夫でしょう。一人の兵士が壁外で喋る巨人と遭遇し、日記に命の終わる直前までその様子を記したの」

「その巨人はなんて喋ったんだ？」

「その巨人は兵士——イルゼ・ラングナーに『ユミルサマ』と言った」

「……え？」

「偶然であるものね、あなたの名前と一緒によ」

大きく開かれたユミルくんの目。壁外を彷徨う巨人は元はエルディア人であり、さらに言えば「楽園送り」にされた者たちだ。その巨人になった人間ももしかしたら、ヒトの形を失う前に、神に縋ったのかもしれない。

一人の少女に、救いを求めて。

「そのイルゼ……って、どんな奴、だったんだ？」

「イルゼ・ラングナー？わたしとは交流がなかったけれど、どんな窮地でも諦めず戦う女性であったそうよ。身長は小柄で、容姿は黒髪の……ちようどあなたと同じそばかすがあったとも言っていた。彼女と仲の良かった兵士がね」

実を言えば、彼女を殺した巨人についてはもう一つ謎がある。それはイルゼ・ラングナーの日記が発見されたすぐ近くで、話した巨人がいた点。

日記が発見された当時、彼女の死後から一年経っていた。しかしその巨人は移動する

ことはなく、ずっとその場にいたのだ。

中にイルゼの死体がある、樹の側で。

何故死体が樹の中にあつたのか。その点についてハンジ・ゾエは、その巨人が埋葬した説を推した。同時に巨人が死体の側を離れなかったのも、守つていたからではないかと。

イルゼの容姿を考えても、始祖ユミルとは全く似ていない。考えどもやはりこの件は、疑問が多い話である。

「——ハ、ハハッ」

静寂の中に響いた、笑い声。引き攣つた笑顔を浮かべ、眉を寄せているユミルくん。狂ったように笑い始め、涙を流す彼女。どうしたのでしょうか、急に精神が振り切れてしまったようですが。狂った笑いの中にある心の悲痛が、コハクの色に瞳の中に現れていて、かわいいですね。

「ど、どうし、たの……？」

「ハハハ、ハハ、ハア……………はは」

彼女はボロボロと溢れる涙を服の裾で拭うが、次から次へと落ちる。

何か彼女の心に触れる原因があったのか？例えばイルゼ・ラングナーが彼女の家族であった、とか。…いや、それはないだろう。彼女の名前を聞いた時点で表情に変化は見られなかった。

「……………悪い、急に取り乱しちまって」

「…別に、大丈夫だけれど」

「ハハ…やつぱり『運命』って奴からはさ、逃れられないんだな。誰かの犠牲の上で成り立つ、人生、なんて…………」

普段のユミルくんと一転し、ひどく憔悴している。本当に急に可愛くなってしまつてアウラちゃんをどうしたいんでしょうか。

「あれ、もう行つちやうの？」

立ち上がり、部屋を去ろうとするユミルくん。私が缶詰の文字を見た時の一瞬、視線が鋭くなった理由も知りたいたいんですが。

「そう言えば缶詰、何の魚だったの？ユミルくん」

「…さあな。私にはその缶詰の文字、読めなかったし」

「え？」

「ア？」

目元が少し腫れた彼女が、こちらを鋭い眼光で睨めつけてくる。

私一応あなたの上司なんです。

「わたしは『魚』の話をしたのに、どうしてここで、『缶詰の文字』の話が出てくるのかしら?」

「——ッ!!」

「ふふ、まるで最初からあなたの関心が、話し合いよりもこの文字に対するわたしのリアクションだった——みたいじゃない」

「私は、別にッ」

「あらあら、否定する余裕もないのかしら?もしかして君はこの文字、読めるんじゃないの?」

美女スマイルを浮かべれば、一歩、ユミルくんは後ろに下がる。

「ユミル」の名前と、壁外の文字。想像以上にこの人間は外の知識を有している。

大きな裏があるように思えてならない。先ほど『ユミルサマ』の話聞き、突然様子が変わったことを含めて。

彼女の裏には——否、彼女の闇には、私が望む人の不幸がある。その闇を暴いた時、ユ

ミルくんはどんな表情を浮かべてくれるのか。私に教えてください。さあ、私をあなたで刻んでみせてちょうだい。

四つん這いで彼女に這い寄り、下から震える身体を見つめた、その時。

外の階段を駆け上がってくる音が聞こえた。ついで扉が開き、現れた女兵士が声を荒げる。

「急いで屋上に向かってくれ!!」

突然のことに驚きながら、汗一滴残らず舐めとった缶詰（ユミルくんは食い入るように見ていた）を懐に入れ、兵士に支えられながら階段を上がる。呆然としていたユミルくんも我に返り、兵士が支えていた逆の肩を持ち、私を上がらせてくれた。え、天使か？（チヨロイン）

上に着けば混乱している新兵たち。一瞬ベルトルトくんが私に気づいてビクツ、とした。失礼ですね。

見れば、森から巨人の群れがこちらに向かって移動して来ている。

日が暮れてからかなり時間が経っており、巨人の暗闇では行動しなくなる性質上、個

体差はありますが、普通なら活動を停止しているはず。月明かりが出ていようがなかろうが、関係ない。

奇行種、というわけではあるまい。それこそ誰かに操作されていなければ。

女兵士とユミルくんの腕を払い左足でジャンプしながら、掴まる分にはこの上なく安定するナイスガイの肩を掴む。

彼の隣にいたベルトツトくんはまた肩を揺らした。ストレスでV字ハゲにさせましょうか。

「あ、アレ見ろ!!」

コニーが叫び、一斉に少年が指差した方向へ視線を向ける。月明かりの中、地面につきそうな長い手を前後に揺らし、ゆっくり歩いているイケメン。

この世で一番私があ愛してやまない人です……♡

「獣の、巨人……」

兵士の一人が、そう呟いた。

ああ、私を殺^愛して、ジークお兄さま。

月光（ゼツコー）チヨー？

月明かりがウドガルド城跡を照らす。

静寂だった中、唐突に兵士たちの前に現れたのは巨人の群れと、獣の巨人。

上着をまとっていないミケが、屋上にいた新兵らに中で待機するよう呼びかける。ただし、緊急時には屋上に上がってくるように、と。切羽詰まった状況の中、なるべく簡潔に説明は済まされた。

分隊長が兵士ら——特にゲルガーに、ガスやブレードの消費を抑え戦うよう命令する中、口を開けたまま固まる二人の少年、ライナーとベルトルト。

「獣」の巨人、その姿を戦士である彼らは見たことがある。その正体とはジーク・イエーガー、戦士長である男だ。

ウォール・ローゼ内に巨人が侵入している時点で違和感があった。壁を破壊できる力を持つのは、超大型のベルトルトくらいだ。彼らが動いていない以上、壁の破壊はないと考えられる。であれば巨人が「外から入った」のではなく、「中に出現した」と考えるのが妥当。

巨人を同時に多数出現させることができる者はいる、戦士長だ。まさに「驚異の子」と呼ぶに相応しい。彼の血には未知が宿っている。

ジーク・イエーガーの脊髄液を摂取したエルディア人は、もれなく彼の“叫び”により巨人化する。

ゆえに、壁内に戦士長含むマーレの増援が来ている可能性はあった。

しかしいきなり出現すれば、念頭に「もし」を考えていても驚いてしまう。そも向こうはライナーとベルトルトがいることに完全に気づいておらず、壁に向かい歩いていく。

無数の巨人に襲われている現状、二人はかなり追い込まれていた。軽率に巨人化できるわけもない。あくまでまだ始祖の情報を掴めず、任務を遂行できていないのだから。

「兵士」だったライナーは、突然の戦士長の登場に、一気に「戦士」へと思考が戻される。一先ずこの場はミケ分隊長の言葉に従うべきかと、ベルトルトに顔を向ける。ちょうどその時、視界に人が横切った。

夜に溶け込む髪色が月光に照らされ、作られるは天使のリング。

「何ッ…してんだ!!」

立体機動装置を付けていないのにも関わらず、空中へダイナミックダイブをかまそうとした女、アウラ・イエーガー。

ライナーに落ちる寸前ところで足を掴まれ、彼女は引き戻された。大きく開かれた白銅色の瞳が、助けた少年へと向けられる。

「離せ」

「落ちたら死ぬぞー！」

「離せ！！」

ライナーの手は彼女の腰を抱える形で回されている。その拘束に抵抗するアウラの右手は背後の少年の髪をわし掴み、左手は脇腹を押す。飼い主と、その腕から逃れるべくスライムになった猫のような光景。

アウラ・イエーガーの視線は獣の巨人に固定されており、その後ろ姿を追い続けている。

まさか、とライナーは思った。しかし先ほど「殺されたかった」と、彼女本人から聞いている。

その前に続くのはつきり「巨人に」という言葉だと思った。だが実際は「お兄さま

に」だったのだろう。となると、新兵たちがいた施設から彼女とミケ・ザカリアスが別れた後、アウラがジークと接触した可能性がある。

（仮に戦士長が妹と出会っていたなら、連れて……いや、難しいか。連れて行つたとしても、元はパラディ島の兵士だ）

アウラは恐らく声を聞くなりし、獣の巨人がジークだと勘づいたのだろう。そのため突貫紛いのことをしたのだ。対し兄の方は現在の様子から考え、気づいていない可能性が高い。さすがに気づいているなら、妹を一瞥くらいするはずだ。

しかしして女と同じ場所にいたミケならば、獣の巨人を見てもおかしくない。特徴的な見た目ののだ、少なくとも話題には出るはず。

だがライナーたちに「獣」の巨人についての情報は教えられておらず、アウラ・イエーガーの負傷理由も、「戦闘中巨人に食われたから」——だった。

（……つてことは何だ？ 敢えて言わなかったってわけか）

大規模調査から帰還し、「戦士」の彼がベルトルトと話した際、ベルトルトがアウラを利用したことを聞いた。エレン奪取の作戦を円滑に進めるために、と。この時ライナーはアルミンから聞いたエレンの居場所を、アニに伝えたことも話している。

何故無断で彼女を利用したのか、また戦士には関わらせないことを三人で決めたはず

だ——と、彼は問いただした。

ベルトルトの返答は「君が『兵士』だったから」と、一言。

意味がわからなかった。ライナー・ブラウンはマーレの「戦士」だ。「兵士」ではない。それ以上は関係の悪化を恐れ、問い詰めなかった。しかしアニを交えた時、もう一度きちんと話を聞くことを予定に入れて。

少なくともアウラ・イエーガーは現在疑われている。

ただ「鎧」と「超大型」がいる以上、まだ他に敵はいる。

疑いの目が彼女に向いているからといって、他の人間が疑われていない、というわけではない。

だからこそ、ミケはいるかもしれない女型の内通者を考え、獣の巨人について話さなかったのだ。話せば敵が動くかもしれない可能性を考えて。

「おい！いつまで副分隊長にセクハラしてる気だ、この淫獣!!」

「……………いい、いんじゅっ…!?!」

「こんな時に何やってるの、二人とも！」

あまりのユミルの言いように、抗議しようとしたライナー。しかしクリスタに声をかけられ、未だ兄の元へ向かおうとする女を俵持ちし走った。彼から斜めの位置にある彼女の腰布がめくれ、小ぶりの尻が強調される。視線を向けぬよう少年は前を真つ直ぐ見つめた。

ライナーの後にベルトルトが続き、前を先導する形で走るクリスタの後にユミルが続く。一人残されたコニーも、みなその後には続き中に入った。

一応ナイスガイのために弁明すると、彼は純粹に副隊長のケガを心配し、様子を見に行っただけである。

確かにキレイな寝顔に少し近づき過ぎてしまった部分はある。だが少年というもの、少しは邪な気持ちを抱いてしまうもの。けてレッドラインを越えるつもりはなかった。

ちなみに腫れた頬で戻った彼を見たベルトルトの第一声は、「君ってヤツは……」

他二名は寝ており、上司に声をかけられ目を覚ました後、ライナーの頬を見て心配した。

「おい、やめ……」

階段を駆け下りていた時に聞こえた、かすかな声。ライナーは後ろを振り向き女の表情を見ないようにし、歯を噛みしめた。

??????

「どうして私を……死なせてくれないんだ……」と呟きたい私は、アウラ・イエーガーちゃん。ヨロイの彼に太ももや胸を触られてしまった女です。これではもうお兄さまのお嫁に行けません。

いえ、前後不覚な私を助けようとして偶々触れてしまったので、故意ではないのですが。そろそろ下ろしてくれないでしょうか。

「あ、今下ろ……」

屋上の下の部屋にたどり着いた私と新兵。俵持ちしていた私をライナーくんが下ろ

そうとした瞬間、何故か強く握られた。

ちよど彼の手に触れている部分は、アウラちゃんの際どい太ももの位置。今更ラツキーすけべを堪能していることに気付きましたね。

「がッ……！」

ライナーくんは脛にユミルくんの容赦ない蹴りを食らい、体勢を崩した。彼の咄嗟の判断でケガ人の私を巻き添いにしまいと、手が離れる。後方に投げ出された私の身体は、屈んだベルトルトくんにキヤツチされた。

「動物の睾丸ってどうして二つあるのか知ってるか、ライナー」

邪悪な笑みを浮かべたユミルくん。天使クリスタが止めに入り事なきを得ましたが、男子は皆彼女の言葉の続きを想像し、震え上がっていた。

「……話す暇があったら、早く下を確認した方がいいわよ」

屋上にいた時は中へ続く扉は破壊されていなかった。しかし、壊され小さな個体が侵入している可能性も十分ある——と私が続ければ、ハツと表情を変えた新兵たち。先程相当鈍い音がしたというのに起き上がったライナーくんが、下の確認を買って出た。

当然の如くライナーくんのひつつき虫なベルトルトくんが彼を追い、そんな二人を案

じてクリスタ&ユミルくんペアも動く。「ちよ、待てよ！（キ〇タク）」と妙にイケメンボイスを出したコニーくんも続き、部屋に残されたのは私だけ。計画通りだ。

「動くなよツ!!」と、下に向かうライナーくんに言われましたが、知らない子ですね。

私は仲間の様子が心配なので上に向かうだけですから（建前）

お兄さま行っちゃう（本音）

「ハア……………」

重傷の身でアクティブに動き過ぎたせいで今にも意識がトびそうですが、気にせず階段を上がります。ちなみに塔の階段は、螺旋を描くように外側に設置されている。

ゆえに立つて歩くとフラついた衝撃で身体が傾き、真つ逆さまに落ちかねないので、四つん這いで上がります。速度はかなり鈍いですが仕方ない。上に行き兵士が来たら絞めて気絶させ、立体機動装置を奪いましょう。

案の定外の騒音に混じって、下から大きな音が響いてくる。やはり侵入していたか。トップ2と精鋭クラスがいるとはいえ、屋上から見た巨人の数はかなり多かった。

また、ミケ・ザカリアスのブレードはともかく、ガスは多少消費済み。巨人を倒し切る前か、その直後に底を尽きる可能性が高い。そのため彼は仲間に極力最小限に戦うよ

う指摘した。

そうしてかなり時間をかけ、ようやく屋上の手前にたどり着いた私。

死へのバージンロードはすぐ目の前。心なしかユミルちゃんも応援してくれている気がします。私が新郎でお兄さまが新婦……間違えました。私が新婦で、お兄さまが新郎。お父さまはいらっしゃらないため、新婦の父役はユミルちゃんに任せます。

と、考えていた折外で轟音が響き、ついで頭上で塔全体が震える衝撃が起こった。

幸い屋上への入り口は崩れていなかった。上がれば人間が二つ転がっていた。近づいて脈を確認するがない。即死だった模様。下から上がってきたナナバに首を振る。

「何を、して……いるんだ、アウラ副分隊長？」

困惑と悲痛の色を浮かべながら、こちらの行動を凝視するナナバ。

私の手は女兵士に伸び、彼女が身につけていた立体機動装置を外す。慣れた手つきで、淡々と。

「何をしていると、聞いているんだ!!」

月明かりを受けブレードが鈍く光る。刃こぼれが目立った。

彼女の様子からして、ミケ分隊長と同じく私が敵の内通者である可能性を知らされて
いるのだろう。表情には微かな恐怖がのぞいている。

もし私が本当に「クロ」であれば、彼女の目の前には仲間の命を売った、「悪魔」が
いることに他ならない。

彼女の綺麗な表情はしかし、お兄さま馳走の前では取るに足りぬ一品。

「何を……ですか。見て分かりそうなものですが」

「……立体機動装置を外せ、今すぐに」

「刃を向ける相手が違いますよ、ナナバ。わたしではなく、巨人に向けなくては」

「外せ」

「いいえ、外せません。外すわけにはいかない」

立体機動装置を付け終え、彼女の足にしがみつく。一瞬身がまえた彼女は私を突き放
そうとしますが、腕を掴んで倒れぬよう堪えた。視線の位置はほとんど同じ。

私を本気で疑うのならば、武力行使に出ても、立体機動装置を奪えばよいのに。
心のどこかでは信じられないのだ、彼女は。それはミケ・ザカリアスも同じ。

長年死戦を共にした絆というのは、そう簡単に振り解けない。できるのはエルヴィ
ン・スミスなど、非人間になれるごく一部の者。

しかして甘い感情に縋ってしまう彼女やミケ分隊長も、私はとても好きです。

自分の本能のままに過ごす人間も、理性で己の感情を断ち切れてしまう人間も、本能と理性の間で揺らぐ人間も、等しく美しい生き方なのだ。

私は肯定します。肯定した上で、あなたたちの悲劇を心から、渴望する。

少なくとも私が「いただく」側なのですから。むしろ彼らの生き方を否定しては失礼になってしまおうでしょう。

「ナナバ、疑わしきは罰せず」——ってというのは、甘い考えですよ」

「……………」

「推定有罪にするくらいの意志がなければ、わたしたちは時に重大な過ちを犯してしまおう。無論罰した人間が本当は無罪だった場合、罪悪感に苛まれてしまうかもしれない。しかし大いなる一步を前にして、無実の犠牲や罪悪感なしでは、なし得ない人類の明日がある」

彼女を押し退け、一步前へ進んだ。場所は獣の巨人が向かった方向です。先のコニーくん並みに「ちよ、待てよ」しなければ。

「その身体で戦う気か」

飛び跳ねながら縁に着き座り込んだ手前、背後から声がかかる。

「ミケ……」

「ガスが尽きた。倒し終えたばかりだが、ナナバ、お前は至急ゲルガーと共に臨戦態勢に入ってくれ。まだ距離はあるものの、巨人が来た方角から先の二倍近い数が襲来している」

「えっ……?!」

最初の一度目の轟音は、大岩が馬にぶつかった音。そして二度目は、塔の上にいる兵士二人が岩にぶつかった音。

状況からして、巨人たちが連携を取っているようにしか見えない。大岩を投擲した「獣」の異常性から鑑みて、やはり奴は知性巨人だ——と、ミケ分隊長は考え付ける。

「クソツ、どうなっているんだ?!? ミケが過半数以上狩ったから、まだ半分近くはガスが残っているが……」

冷や汗を流しながら、ナナバは空中に身を落とした。

分隊長は彼女と共にGO! しようとする私の首根っこを掴む。

「新兵らに、この問題児を任せたりもりだったんだが」

「ひどい言われようですね、わたし」

「中には巨人が侵入していただろう。非常時は屋上に逃げて来い、とは伝えておいた。だが登って来なかったということは、お前が唆した。違うか？」

「言葉が悪いですね、分隊長。悪いことはさせてないので「助言」と言ってください。わたしは巨人が侵入している可能性を告げただけですよ」

「エルヴィンに突き出すまでは死なさんからな」

「……………チツ」

おつといけません。美女アウラちゃんとしたことが、舌打ちを零してしまいました。

ミケが驚愕の表情を浮かべる。天使で通しているアウラ・イーガーの皮が剥がれてしまったので、当然の反応だ。

「リヴァイがお前のことを「腹黒い」と言っていたが、割と本当なのか…………」

「あなたのことは変人、ハンジ・ゾエは変態、団長はツラ、兵士長は160cmの男、と思っっていますよ」

「変人なのか、俺は」

「匂いを嗅がれた時は、結構本気で憲兵に被害届を出そうと思いました。書いていた届出はハンジに没収されましたが」

「……………すまない。というかハンジはともかく、エルヴィンとリヴァイはやめておけよ。」

「アイツらも気にし——いや、何でもない」

ミケは死体になった仲間二人に瞳を伏せつつ、私のブレードとガスを奪った。畜生。「お前はケガ人だ。これ以上動いてくれるな」

しかし諦めるわけにはいかなないので、這いずって階段に向かう。盛大なため息が後ろから聞こえましたでしたが聞こえません（難聴）

その時、下からコニーとライナー、ついでベルトルトとクリスタが現れた。

新兵への状況説明は私に任せる、とミケ分隊長が去っていく。岩との衝撃で装置に不備とかできてませんか？ そうすればおどり食いの道がひらけますよ。

というかどうしてライナーくんは、手を仰々しくケガしているんですか？ 再生させないんですか？ そうして知性巨人であることが露見し、緊急離脱せざるを得ない状況を作れ、作れ作れ。

「あ、お、えっ？」

二足歩行ができず、四足歩行に退化しているアウラちゃん。ライナーくんの丸太のような足にしがみついて、ガン決まった目で見つめる。

少年の瞳に映る私は必死の形相を浮かべ、知らず知らずのうちに涙を溢れさせてい

た。食いしばった唇からは、血が漏れている。

ベルトルトくんが私を引き剥がしにかかりますが、必死にしがみつく。顔が胸筋にぶち当たりかなり痛い。

というか——ハ？コイツ私より胸があるんだが……？（殺意）

「ど、どうしちまつたんだよ、エレンのねーちゃん!?」

「おつ、落ち着いてアウラさん!!」

「きつとケガのせいで混乱しているんだ…!!」

ベルトルトくんがそれとなくフォローしてくれる。

しかし元から私は、アウラ・イエーガーは、狂っている。

虚しくも自分よりタツパのいいベルトルトの力には勝てず、しがみついていた少年から手が離れる。

形容しがたい複雑な表情を浮かべているライナー・ブラウン。君は戦士の中で誰よりも、お兄さまに、そして私に同情している。

だからこそ、可能性があるのは彼しかない。

お兄さまに近づかせて、お兄さまに殺されたい。ただ、それだけなんだ、「私」にある

のは。

「どうしたんだよ、お前ら」

混乱状態の中、階段から上がってきたのは一人の少女。ユミルくんは眉をひそめ周囲を見渡し、首を傾げる。

「ユミル！付いてきてなかったの？」

「悪い、下の窓から外の様子見てたんだ。それよりどうなつてんだ、コイツら？」

「え、あ、それはね——」

クリスタが彼女に状況を説明する。彼女は静かに話を聞きながら、一瞬こちらを向いた。

茶とも、黄色とも付かないその瞳に、何故か私は魅入られた。

失敗したら30分待たなきやいけないリスキーな踊りよ
り、ポタラさんを使った方が早いじゃないか……！（ただし
副作用あり）

これは、一人の少女のお話だ。

孤児であつた少女が、皆に崇められる“始祖ユミル”になつたお話。

道端で寒さに震えることも、飢えに苦しむことも、人々から冷ややかな視線を向けられることもない。

衣食住が約束され、人々は彼女を“神”と崇め、地に額をすりつける。

今まで誰にも必要とされなかつた少女は、「ユミル」であれば、大切にされる。微かな優越感に浸り神としての人生を送っていたある日、訪れる終焉。

政府に見つかった彼らは神も信者も、一人残らず楽園送りにされた。少女もまた、短い人生の幕を閉じたのである。

最後まで、皆に必要とされる「ユミル」を演じ続けて。

都合のいい神として祀り上げられ、彼女の人生は終幕した。他人に操作された運命に、翻弄される人生だった。

しかしこのお話は、少女が「罪人」として裁かれ終わる話ではない。彼女の物語はまだ終わらなかった。

長い時を巨人として過ごした彼女は、突然自由を手に入れる。夢のような、地獄の日々から抜け出した時、少女が見たのはどこまでも遠い空。暗闇の中に落とされた無数の火花たちは、自己主張をし合って、夜空を彩る。

——美しかった。

こぼれ落ちる涙は、地面に吸い込まれる。

この時自由を得た少女は、今度は誰かのためではない、自分のために人生を生きようと決意した。巨人化から戻れた、奇跡のような出来事に誓って。

そして己が名前に、復讐することを誓い。

少女は自身を「ユミル」と、呼んだ。

それから少女は超大型巨人がウォール・マリアの壁を破壊した一件に紛れ壁内に侵入し、孤児として教会の世話になった。その際、壁の秘密を握る一族の妻の子の存在を知り、その妻の子が入る訓練兵団に入団した。

自分を偽って生きる妻の子に、ユミルは彼女自身の過去を重ねていたのだろう。

予想外だったのは、想像以上に少女——クリスタ・レンズが、彼女の内で大きすぎる存在になってしまったことか。

それこそ己の命をかけて守ると、ユミルは本気で考えている。

そしてエレンの巨人化や、調査兵団入りから長いようで、短い日々が過ぎる。

ユミルは「ベルトルさん」と共に第五班所属となり、クリスタ似の副分隊長に興味を持つ。

アウラ・イエーガー、エレンの七つ上の姉だ。

女はクリスタのように皆にやさしく振る舞う反面、厳しい部分もあった。ベルトルトを揶揄うたびに、「訓練中よ」と、眉を寄せて怒られた。

表面上は力も強く、尊敬できる副分隊長。

だがユミルは彼女の裏に、何か形容しがたい——薄ら寒いものを感じていた。探ろうとすれども、のらりくらりと躲される。エレンの『地下室』の件もあり、「もしかしたら

外の知識を持っているのではないかと、疑いを持ち続けていた。

そんな折、ベルトルトと共に森へ向かう副分隊長を見かけたユミルは、待ち伏せして話す機会をうかがった。

流石に後はつけなかった。勘というヤツか、尾ければすぐにバレると思ったからだ。して、暫くし森から戻ってきたアウラ・イエーガーに、雑談を踏まえながら女の裏を探った。しかし。

「ユミルちゃん」はね、私の中ではただ一人だけなの——。

手痛いしつぺ返しを食らったのは、ユミルの方だった。

女の口ぶりからして、彼女が挙げていたのは本物の「始祖ユミル」。

同時に「あなたじゃない」と告げられた瞬間、視界がぐわんと、歪んだ気がした。

「ユミル」の存在全てを、否定された気がしたのだ。

確かに彼女は本物ではない。偽物だ。それでも「ユミル」を否定されることは、彼女の人生や、運命にあらがおうともがいている彼女自身が、嘲笑われている心地しかせず。

アウラ・イエーガーの存在がユミルにとって、恐ろしいものとなった。

まさかユミルの過去を知っているはずはない。しかしエレンとは違い、外の知識を持つている確信だけは得られた。

なるべくなら、関わりたくはない。だが現実とは非情なもので、ユミルはアウラと同じ班である。何なら上司だ。

震える心を払拭するために、団長らに「アウラが外の知識を有している」と言う方法もあつたかもしれない。ただその場合、なぜ斯様な可能性に至つたのか言及される。流石にエルヴィン・スミスと正面から話し合う度胸などなかつた。元より彼女は巨人化できる力を持つ。変に相手に勘繰られれば、それこそユミルの秘密が露見しかねない。

ゆえに必要な最低限に関わつた。ただし表面上は、いつもの「ユミル」を装つて。

ベルトルトを揶揄い、副分隊長に叱られる。そんな日々が過ぎた後は大規模壁外調査。そして無事生き延びたと思えば、新兵らへの待機命令だ。

この時彼女の中で浮上した、アウラ・イエーガーが女型の内通者である説。

右翼索敵で唯一生き残っていた女だ。女型が侵入したのが右翼側であることも考え、意図的に殺されなかつたと思えない。

クリスタを守るのが最優先事項の彼女にとって、不穏因子は脅威の対象である。

知性巨人たちの狙いが、壁内人類の滅亡なのかはわからない。しかしどの道壁内の世界に夜明けはないと、彼女は感じていた。その上でクリスタを守るためには、ユミルはどの選択を取ったら良いのか。

壁内が無理であるのなら、壁外に目を向けるしかない。クリスタを生かす最善手を掴むべく、彼女は動いた。ウドガルド城で、クリスタやベルトルトたちが寝入ったのを見て。

口実は食べ物を持って行くことで作ろうとした。が、予想の斜め上を行った缶詰の存在。それにはマールで使われている文字が表記されていた。

何故この場にあつたのか、そこまで思考を回す余裕はなく。

しかし使えらると、ユミルは考えた。

途中野獣ライナーの腫れた頬に爆笑しながら、訪れた重傷の女が寝ている部屋。否、訪れようとした部屋。

室内に入る前に脱走者を捕まえたユミル。いつも薄っぺらに感じる善人を演じている女は、驚くほど憔悴していた。ケガのせいもあつただろう。だがそれ以上に、精神が疲労している印象を受けた。

その後は缶詰の文字を使い、カマをかけようとしたが上手く行かず、逆にユミルが足を掬われる結果に。

「イルゼ・ラングナー」の日記の件と、『ユミルサマ』と呟いた巨人の話が、彼女に衝撃を与えた。荒唐無稽な話であると、いつもの彼女なら突っぱねられた。だができない理由が彼女には存在する。

まさか、まさかと、脳内の汁が顔の穴から溢れそうな感覚を感じながら、イルゼの特徴を聞く。

それこそ巨人が話したのは、偽物ではなく、「本物」のことに違いない。
「ユミル」では、ない。

—— 小柄な身長。 黒髪。 そばかす。

ユミルは巨人化された当時、12歳だった。今でこそ長身の部類だが、数年前は小柄な部類に入った。流石にクリスタほどではないもの。

黒髪も同じだ。そして何より巨人が話した『ユミルサマ』が「偽物」だと、感じてしまった原因が、そばかす。

ユミルは偽物に過ぎない。しかしマーレ政府に見つかった時、ユミルは自分を神に仕立て上げた者たちへの憤りを覚えながら、継る信者のため、「ユミル」で居続けた。それこそ自分の命をかけて、他の人間の無罪を乞うた。

その姿に、多くの信者が心を打たれたのだ。結局は全員、仲良く楽園送りにされてしまったが。

「——ハ、ハハッ」

信者が未だ地獄の中で彷徨っているというのに、彼女は、ユミルだけは解放され、「自由」に生きている。

その事実が、そして途方もない罪悪感が、その時彼女を襲った。

人はどうしようもない感情の波に襲われた時、笑うのかと、どこか冷静な部分の彼女が俯瞰的に考える。

誰かの犠牲——ユミルであれば信者たち——の上で、彼女は息を吸い、心臓の音を感じながら、この世の美しい部分に目を向けることができる。

狂おしい激情を宿したまま、兵士に声をかけられ上に向かったユミル。

会話の中で、やはり「クロ」としか思えぬ女に肩を貸した時、向こうは目を見開かせていた。当然だろう、お互いがお互いの内情を探ろうとしていた者同士だ。相手が距離を空けると、アウラ・イエーガーは思っていたに違いない。

その時ユミルはわかったのだ。自分は、やはり運命から逃れることなどできないと。逃れるということはつまり、臭いものに蓋をすることに他ならない。彼女の裏に存在する地獄に囚われたままの信者たちを、考えずに生きる。

耐えきれなかった。

同じように六十年近く無知性巨人であったからこそ、夢現に、何も感じることなく生きるあの地獄を、知っているからこそ。

だから彼女は「ユミル」として、手を伸ばした。偽りの人生に戻り、善人の行動を取った。

無論そのまま生き続けることなど、できるわけではない。

その後、塔の中に侵入した巨人を倒し終えた新兵たちは、外の轟音を聞きつけ屋上へ向かうことになる。

クリスタに手当てしてもらったライナーに本気で殺意を抱きつつ、皆の後を追うよう

にして、立ち止まった彼女。

瞳を閉じ、息を深く吐いた。

クリスタを己の命の最期まで、守ろうとは考えている。その上で彼女を守る時間が短くなってしまうことに、申し訳なさを抱いた。

「ははっ……バカだな、私」

「偽物」にもなれず、ただ一人の「ユミル」にもなれない。中途半端に生きて、死んでいく。

きっとクリスタならばそんな彼女でも、受け入れただろう。だがそれすら、今のユミルには苦痛であった。

偽物のユミルを、見せたくはない。中途半端な「ユミル」なら殊更。

「まあ最後までいいはさ、私の花道飾ってくれよ、巨人共」

ユミルの手の中にあるのは、コニーが持っていたナイフ。この場では使い道がない云々——と話していた時、ならば、と借りたのだ。

階段の途中にある空いた窓に足をかけ、下を見る。そうすれば夜風が彼女の髪をさらい、パサパサと音を立てた。

その命が尽きるまで、暴れ倒す。少しでもクリスタに向かう脅威を消すため、彼女を

生かすために。

「——ごめんな、クリスタ」

やはり最後まで、お別れくらいは言った方がよかつたかもしれない。

苦笑しつつ手のひらをナイフで切った瞬間。

ユミルの意識は、どこか遠くへと引つ張られた。

???????

砂と、光の柱の世界。

そこでユミルは、目を覚ました。

「大丈夫か、あんた」

身体を起こした彼女に声をかけたのは、隣にいた茶髪の少年。膝を抱え、顔を少し埋めている。

少年の視線の先にユミルが目を向けると、一人の少女が佇んでいた。顔には影がかかり、口元は一直線に結ばれている。まるで表情を示さぬ人形のようなのだ。

「……ハ？」

ストレートな金髪に、蒼い瞳。白いバンダナを付けた少女の姿は、クリスタにひどく似ている。だがそれ以上に第五班の副隊長を子供にして、瞳と髪の色を変えたと言わんばかりに、少女はアウラ・イエーガーに酷似している。

「お、おい、なんの冗談だよ、副隊長さんよお？せつかく私が有終の美を飾ろうって時に……」

『……………』

「なんか喋れよ!!」

「落ち着け」

立ち上がり少女へ詰め寄ろうとしたユミルの前に手を出し、制止させた少年。

彼が名前を尋ねてきたので、彼女は一つ舌打ちをこぼし、「ユミルだ」と答える。少年は目を丸くし、「俺はマルセルだ」と返した。

「始祖ユミルと同じ名前なんだな、あんた」

「——ッ!？」

「たいそうな名前を付けられたもんだ」

「……………お前、何者なんだよ」

「何者、か。……………お国のために、戦うはずだった人間だよ」

「戦うはずだった？　なんか上手く躲された気しかしねえんだが」

「『信用』はできない相手に、そうホイホイ情報は出せない」

「つけ、ガキのクセに頭がよろしいようで」

煽りを交えたユミルの言葉に、少年は反応を示さない。何が何だかわからないが、お互いの共通点があるとすれば、「気づけばここにいた」——ということ。

彼女はマルセルに、謎の少女を指差し、誰であるか尋ねる。

「あの少女の存在を知るには、まずこの世界について話さなきゃいけない」

「…なんだ、「気づけばここにいた」なんてお前さんは言ったが、ここに理由は知ってんのか」

「知っているというか、教えられた、っていうか。……………操作されているっていうか」

「ハ？」

「俺の意思はあるけれど、俺が望むようにこれから会話が進むわけじゃない。それはわ

かっつけてくれ」

「つまり、お前はあの少女の操り人形ってことか？」

「違う。例えるなら複数この世界にゴールがあるとして、大きな力によって、一つずつ退路が塞がれて行く感じだ」

「………犬にケツ追っかけ回されて、柵の中に入る家畜みたいなもんか」

「その認識でいいよ。ただ一応言っておくと、あくまで俺の自由意志でもあるんだ、コレは。あの少女の話を呑んだのは俺だ」

「呑んだって、何を？」

「色々見せてもらったんだ。あまり詳しくは言えないけどさ」

「…そうかよ」

マルセルは少女に従うことが、罪滅ぼしになるとも言う。

理由はいくつもある、と続けて。

「俺の行動で、仲間を傷つけちゃったんだ。だが弟のためだったんだ。……けどそれすらも、俺を苦しめる行為になっちゃった」

「漠然としてるが、それがお前の「罪」ってわけか」

「…ああ」

「その罪を私に語ってどうするんだ？ まさか私に解決しろとでも？ 冗談よせよ」

「……俺はもう、何もできない。あんたが消えれば、俺は大きな本流の中の一つに還るか
ら」

「な、に……言ってるか、わからないんだが」

「生きてここににいるなら、ここが何であるのか理解できない。けど死んでここに還って
きたのなら、この場所を理解できる」

「お前………死んでるのか？」

「なあ「ユミル」、俺とあんたがこうして今話すだけでも、大きな意味があるんだ」

今は肉体が存在せず、精神を晒し合う者同士。会話し、お互いを知る——理解を深め
ていくだけでも、魂の距離は近づき、溶け合う。

「………」

「口を閉じたってムダだ。あんたが話さなくとも、俺は俺の話をする」

「………」

「耳を塞いだってムダだし、目を閉じたってムダだ。今動かしていると思う肉体だって、
精神の情報から作られたものに過ぎない」

「……クソツッ！ 私にどうしろっていうんだよ!!」

「意味は後から付いてくる。観念して話し合おうぜ」

「わかった……わかったよ!!じゃあ話してやるさ!——私はクリスタにピーして、ピーしてやりたい!!」

瞬間スツと、ユミルから離れたマルセル。少年の頭は、目の前にいる女をケダモノとして認識した。だが心のカンバスレーションは始まっている。

「……俺はね」

そうしてお互いが直接的な表現（自分はマーレ出身だ、など）を避け話し合う、奇妙な時間が終わりを迎える。情報は隠しておれど、お互いが同郷であることに気づくなど、隠しきれない部分はあった。

ただ間違えれば、情報を利用されかねない。マルセルならライナーたちや弟を。ユミルもまた「生者」にしか見えない少年を怪しみ、直接的な情報は控えた。思わず「クリスタ」の名前は言ってしまったのだが。

「大体理解したぜ、マルセル・ガリアード、さてはお前クソブラコン野郎だな」

「俺もわかったよ、あんたのこと。クリスタ逃げろ」

ユミルはマルセルが死した後だからこそ生じた、弟が「使命を果たす者」になれなかった苦しみを。

マルセルはユミルが「多くの犠牲」を出して、一人だけ生き残ってしまった罪悪感を。

また偽りの人生か、一人の「ユミル」として生きるのか、中途半端に生きざるを得ない苦悩を。

「死んだって救いはない」

「言ってくれるね、私よりガキのクセに」

「生きている間にしか、なし得ないものがある。死んだ後じゃ、何もできないんだ」

「……………」

「あんたには、〃力〃があるんだろ？」

「は？力ってなんだよ」

「大切な人間を守るだけの力だ」

——俺を食って、手に入れた。

ヒュツと、ユミルの喉が鳴る。

少年の瞳は、彼女を映していない。空を見つめ、遠くを眺めていた。

どうにか声を出そうにも、彼女の力は掠れた声しか出ない。

「……俺はこの世界の本流の一部だ。意識だつて存在しない、本当なら。だが例外として、あんたとはいつも繋がっている。『自由』を手に入れた時からの、これまでのことを」

「……………」

「なあ、俺はブラコン野郎なんだ」

「……………」

「ポルコに——弟に、会いてえよ……………」

その言葉の直後、マルセルの身体が崩れていく。溢れた涙は砂の上に落ち、シミを作った。

「……………」

呆然と、動けぬユミルの元に、少女がゆっくりと歩み寄る。

アウラ・イエーガーと瓜二つの少女。

ようやくと目の前の少女が何であるのか、ユミルは理解した。無表情な顔は、感情を

全く表さない。まだ副分隊長の方がよっぽど人間的だ。否、彼女の目の前にいる存在は、人間ではないのだ。

「神なんか、嫌いだ」

歯を軋ませ、少女を睨めつけるユミル。溢れ出る涙は彼女自身のものなのか、それとも彼女と繋がっているマルセルのものであるのか、彼女にはわからなかった。

ただ無性に涙が出る。こんがらがった感情の渦の中、少女の顔が近づき、額同士が触れ合う。

コツン、と音を立てた瞬間、ユミルの意識は落ちた。

???????

永遠とも取れる時間。だが目を開ければ、先と変わらぬ光景が、目の前に広がっている。

ユミルは深く息を吐き、零れ落ちる涙を拭った。

誰かの犠牲の上で、生きている彼女。

彼女はナイフをしまい、一步、階段を踏みしめる。

「クソツタレ……」

残酷な世界から逃げることを、ユミルはまだ許されていない。

その事実だけは、ハッキリとしていた。

スヤア（ ⊗ ⊗ ω ⊗ ⊗ ）

ジーク・イエーガーに陵辱されたい美女は私、アウラちゃん22歳。

ベルトルトくんは羽交い締めされており、お兄さまを追うこともできない。ヒョロい男だと思っていたが流石戦士、ビクともしない。足を踏みつけ急所を右足で蹴り抜こうとしたところで、ユミルくんが目の前に来た。

「目エ血走つてるぜ、アウラ副分隊長さんよお」

口角を上げながら、話す彼女。人を揶揄しているように見えるが、瞳は真剣そのもの。「なああんた、何者なんだ？」

「…？私はアウラ・イエーガーよ」

「……答えてくれねえってわけか。まあ、いいけどさ」

ユミルくんが「何者か」と私に問うた時、背後のベルトルトが微かに息を呑んだ。裏切り者の私が情報を吐けば、途端に彼らが敵であることがバレてしまう。

言うわきやねえだろ、との意味を込め、少年の足を踏み躪った。

「何っーか、マジでヤバい状況だな」

巨人の群れは第一波の二倍。五人で連携し最小限で戦っていた。しかし二人死に、三

人——しかも残量の少ないガスとブレードで戦わなくてはならない現状。

仲間が食われる様子を眺めたくはありませんが、すぐに塔へ魔の手が迫る。お兄さまの姿が壁の下へ消えた以上、猶予はない。

いやだ。殺されるんだ。お兄さまにようやく会えたんだ。「私」が終わるんだ。
でなければまた、生きなきやいけなくなる。

そんなのは、もう。

私は、もう。

「クリスタ、あのさ」

「何、ユミル？」

世界が段々と色を失い、無機質に感じられていく中、少女二人の会話が耳に入った。

「…もし助かったら、私と結婚してくれないか？」

「なっ……!?!」と、驚愕の表情を浮かべたゴリ……ライナー。コニーやベルトルトもこの状況で、何言ってるんだコイツ？と、正気を疑う視線を向けていた。

クリスタは動揺を一切見せず受け流す。それよりも、今の状況をどうにかすることを

考えなければ、と怒った。かわいい。

「ユミルはいつも冗談ばかり言うんだから」

「冗談じゃねえんだけど……それとな」

——どんな私でも、お前は受け入れてくれるか？

何か含みを持った言葉だ。周囲は彼女の真意を読み取れず首をかしげる。

ただ一人クリスタだけは彼女をまっすぐ見つめ、強く微笑んだ。

「当たり前だよ。ユミルは私の大切な人だから」

その一言を聞いた少女の瞳が大きく開かれた。涙が溢れてはこぼれて行く。

思わず私はユミルくんの表情に魅入ってしまう。絶望や苦しみを混ぜ合わせた中に存在した、先ほどの彼女の姿。しかし今はしがらみから解放されたように、安らかな表情を浮かべている。

まるで棺に収まった死体のようだ。これ以上壊されることのない精神。同時に、
“無”に還る肉体。

キレイな彼女の姿は、我が心に清涼の風をもたらさんとする。

「ハハツ…クリスタ、お前やつばスゲエよ」

「……ユミル？」

「本当…なんかそれ聞いただけで、グダグダ悩んでた自分が馬鹿に思えてきた。聞くの、怖かったんだけどな……」

「ね、ねえユミル？そっちは危な——」

「なあ」

いつの間にかナイフを取り出し、片手に握っていたユミルくん。彼女の視線の先は、巨人の群れ。塔の下ではすでに戦闘が開始し、大きな音が響いている。

一呼吸した彼女は、塔のへりに足を乗せる。クリスタの制止を無視し、ユミルくんは後ろを振り返った。

「私も胸張って生きるからさ。お前も胸張って生きろ……クリスタ」

瞬間、飛び降りた彼女。

全員（私は羽交い締めのままベルトルトに引きずられた）走り、落ちた彼女を覗き込

んだ中、突如起こった眩い光。

「ユミル!!」

光の中で彼女の身体を覆い形成されていく肉体。

身体バランスは赤ん坊の身体を筋肉質にし、顔を大きくしたよう。上と下が噛み合うように伸びた鋭い歯。肉食動物の犬歯の如き長さを誇りながら、サメのように一定の間隔と大きさと生えている。

特徴的なのは毛で覆われた手足か。三本の指と、円を描くように伸びた黒く長い上に、太さのある爪。

巨人化したユミルくん、みな息を呑んだ。

???????

あ、ありのまま今起こったことを話すぜ……!な心境の私。

下の状況はかなり悪化していたようで、ガスが切れたゲルガーが巨人に捕まっている。食われかけた彼を寸前で、うなじを斬り救ったのはミケ。しかし無情にもゲルガー

の肢体は下へ落ちていく。

「俺まだ死にたくねえよお!!」と心地よい悲鳴が聞こえた直後、ゲルガーの身体が掴まれた。無知性の巨人たちに、ではない。ビッグユミルくん。

戦っていたため巨人化した彼女に気づくのが遅れた兵士たち。ナナバがユミルくんを斬りかかろうとしたが、ミケが止めた。邪魔だ、と言わんばかりにユミルくんの上に投げられた男。

その肢体はちょうど塔の上へと向かい、大声を上げていたゲルガーはコニーとぶつかり転がった。

「何すんだよブスツ!!」

怒り心頭のコニー。ゲルガーも呻いているので死んではないようだ。

再度下に視線を向ければ、長い爪と歯を使い、次々に巨人のうなじを狙っていくユミルくんが見える。彼女の顔はキレイ系だというのに、何故か巨人化した顔はかなり下方修正がかかっている。

一瞬状況を理解できなかったミケも、出現した巨人が今は味方に回っていると判断したのか、ナナバに声をかけ、兵士&知性巨人のタッグが組まれることになった。戦力が最初の五人より一気に上がり、死体の山が築かれていく。だがすぐにナナバとミケのガスマも切れるだろう。そうなれば状況は一転する。

「嘘……だ」

ポツリと、後ろから聞こえた声。振り向けばベルトルトが驚愕の表情を浮かべていた。ライナーも然り。どうしてお前らが曇っているんだよ（歓喜）

今盛大に叫んで死にたいのは私の方だ。

返せよ私のお兄さまを。私の幸福を。最大の絶頂を。

「あつ……」

怪訝に眉を寄せる私の顔に気づいたベルトルト。未だに彼の足は、私の左足に踏み躪られ続けている。ガンを飛ばすと冷や汗を流しながら逸らされた。

戦士は四人だったのか？…いや、戦士二人の表情からして、あり得ないだろう。仲間の出現に何故曇る必要があるのだ。

だが彼らの仲間でないのなら、ユミルくんはなぜ巨人の力を持っていた？

少なくとも「始祖」と「進撃」以外はマーレの所有物。この事実は揺らがない。ユミルくんが「始祖」の可能性はまずない。

お父さま、グリシャ・イエーガーによって、レイス家から始祖が奪われたのは五年前。その後始祖は行方知れずとなった。私の見立てでは現在ユミルちゃんの元に「始祖」が

戻っているはずですし、ユミルくんが5歳なわけがない。

ならばどのようにして力を手に入れ、どの能力を持っているのか。

正直どの能力かはわからない。が、おおよその入手経路は考えられそうだ。

ユミルくんが戦士である可能性がほぼない以上、何かの手違いでマーレから一つの力が失われてしまったのならどうだろうか。

手違いが起こり、十年以上前に一人の巨人化能力者が死に、その人間の死後に生まれたエルディア人に、力が渡ってしまった可能性。マーレは軍事国家だ。一つでも戦力が失われたことが露見すれば、諸外国勢力が侵攻の手を強める。ゆえに情報を秘匿した可能性がある。

だがこの場合、さすがに十年以上経てば諸外国にバレる。ずっと戦場に一つの力が現れなければ、「なくなつた」のだと判断できる。そうなれば秘匿し切れなくなり、国内でも大騒ぎになつたはず。

ただ赤子のユミルくんに力が渡つたとして、彼女が「外の知識」を有していることに疑問が湧く。彼女の一族が外の知識を受け継いでいるとして、あまりにも偶然が良すぎる。

ユミルちゃんが彼女に力が渡るよう操作した可能性もありますが。

そもそもずっと壁内に潜んでいたとして、自分が巨人化できることをどのように知った？過去に巨人化したのか。はたまた異常治癒は昔からあり、巨人化したエレンとの共通点を知り、自分が「巨人化能力者だ」という考えに至ったのか。

（——ダメだ、わからない）

いつそユミルくんが元々無知性巨人で、巨人化能力者を食って人間に戻った——なら、話をつくというのに。

壁外の人間の正体は、楽園送りにされたエルディア人。

ユミルくんが元楽園送りにされた人間なら、マーレの知識を持っていることにも理由ができる。

……いやでも、割とこの考えはいい線をいつているのかもしれない。

ただ彼女が巨人化能力者を食べたのなら、その人間はいつたい誰だったのか、という疑問がさらに浮上する。

思考の渦にハマっていた時、超絶愛らしい悲鳴が聞こえ顔を上げる。「GO GO YUMIRU!!」と誰よりも荒ぶっていた天使が、塔から落ちかけたらしい。かわいいな？

ゴリラ……イナーが足を掴み事なきを得た様子。——おい待てよ、今宙吊りになった天使のスカートがめくられて、下着が見えてなかったか？まさかこの戦士少年、アウラちゃんの時と同じように、ラツキースケベして「ヌツ」となってしまったのか？

ちようどゲルガーに続きナナバもガスが切れ、塔の上へ投げられる。またぶち当たったコニーくんがキレていますが無視しましょう。それよりもかなりピンチになってきた下。ミケも疲労の色が強い。彼が戦えるのもあとわずか。

アウラちゃんは空気を読める子ですので、ユミルくんに声援を送ります。天使に代わって応援よ。

「ユミルくん!!クリスタの下着を、ライナーくんが見ていたわ!!!」

ベルトルトの視線が刺さり、ライナーくんの「……………えっ?」という顔がこちらに向く。随分と間が長いですね。

対しクリスタちゃんは顔を真っ赤にした。結婚します。アウラちゃんの媚ポジは埋まっているので、嫁に来てください。

『コロスツツ!!』と雄叫びが聞こえ、ガスの切れたミケが塔の上へ投げられる。コニーは

身構えたが当たることはなく、ライナーくんがぶち当たった。ちなみにミケ・ザカリアスは2メートル近い身長があり、体重は0.1トンである。

流石のナイスガイでも生じた衝撃に耐え切れず、そのまま二人仲良く床に転がった。

「なんて、恐ろしいことをするんだ……」

背後の少年が震えの混じった声で呟いた。確かに巨人化した拳句、上司三名を投げつけたユミルくん。恐ろしいですね。

「何か、共感した表情を浮かべているが……僕が言っているのはあなただからな？ どうしてユミルの地雷を踏み抜いたんだ……。あとずっと、足を踏み躪られているんだが」

「え、わたしだったの？」

「あなた以外ないだろう。こんな、狂ったこと」

しかしベルトルト・フーバー、見てみるといい。三人の戦力がなくなつた中、怒りで力を激らせたユミルくんが、どんどん巨人を倒している。倒れる巨人の衝撃で、時折塔が大きく揺れるのはヒヤヒヤしますけど。

次第に世界も明け始めており、どうにか増援が来るまでは持ち堪えそうじゃないですか。

「…あなたは何を今、考えているんだ？」

眉間から汗を流した少年が言う。

今私は、何を考えているのだろうか。お兄さまが去ってしまい、私の悲願は達成できそうにない。

ミケ・ザカリアスの助けがなければ、人生の最高の中で死ねた。けれど現実には、まだ、生きねばならない状況が出来上がっている。

またお兄さまと会えるその時まで生きる。生きなければ、ならない。

「皆これで、助かりますね、ベルトルトくん」

他人の“不幸”ではなく、“幸福”を今、私は生み出そうとしている。

即ちそれは「生」を謳歌するのとは対極の状況。

もう生きるのは、無理です。

ならせめて、愛しい弟の前で、死んでやりたい。

かわいい表情を私に見せて、エレンくん。もうお姉ちゃんは、限界です。いえ、限界

でした。

とつくの昔から私は、死を望む生き物です。

どうして空は青いんじや？

夕焼けと似た朝景色。冷たい空気を取り入れれば、肺がギュウと、拒絶する。

ウドガルド城に現れた、獣の巨人と無知性巨人の群れ。一時全員の命が危ぶまれた戦いで、二人の尊い兵士の命を失ってしまったが、まだ他の人間たちは生きていた。

雄叫びを上げ、塔をうまく使い巨人を狩っていくのは一体の巨人。

サイズは女型や鎧と比べれば小柄なものの、その俊敏性はダントツ。カギ状の長い三本の爪で巨人のうなじを斬り裂いたと思えば、そのまま巨人の首を回り、遠心力で宙高く飛翔する。

そして次の巨人へ飛びかかる——と、圧倒的な力を見せた。

巨人化したユミルは『コロスツ、コロス!!』と声を荒らげ続けている。その暴れっぷりに呆気にとられる兵士らを他所に、若干一名のみ顔を青ざめさせ震え上がっていた。「何が」とは言わないが、ヒュンヒュンと、しっ放しである。

だが状況が一転する。

ユミルが時折爪を立てたり、巨人が倒れぶつかったせいとか、塔自体が崩れかかっていたのだ。

さながら斧で根元を削られた巨木のように、下から傾き始めた塔。

屋上の人の数が多いこともあり、傾いた拍子に全員の身体が片方に寄ると、さらに負担がかかる。クリスタの悲鳴が聞こえ我に返ったユミルは、急いで屋上へ上がった。

このままでは全員落下してしまう。落ちて助かったとしても、下にはまだ巨人が多数残っている。舌打ちをこぼしたユミルは、自身に掴まるよう叫んだ。

そして塔が崩れるのに合わせ、大きく跳躍する。巨人たちは派手に倒壊した建物の下敷きになった。

5メートル級のユミルの髪にしがみつく八人。最初クリスタやコニー、ベルトルトに肩を支えられる形で乗ったアウラ辺りまでは、さほど重くはなかった。しかしライナーが乗った辺りで急に足腰に力が入り、ナナバとゲルガーに最後のミケで、ミシリ、と足に嫌な音が走った。

内心ライナーは置き去りにしたかったが、助けたユミル。後でケガをした逆の腕も同じように使い物にならなくさせようと、心に誓った。

「ユミル……」

クリスタがユミルに駆け寄ろうとする。だが背後の崩れた瓦礫の山から巨人が起き上がり始め、ユミルは後ろ髪を引かれる思いで駆ける。

大切な人を、守るために。

『！』

彼女が地面から跳び上がり、巨人のうなじを狙おうとした瞬間、瓦礫の中から突如腕が飛び出る。巨人の手が彼女の足を掴むと、ユミルは凄まじい力で地面に体を打ちつけた。

崩れた瓦礫が巨人を下敷きにしたことによる、弊害。

不意を突かれた形で、ユミルは捕まってしまった。

次々と彼女に伸びる手の数々。足を、顔を、髪を、腕を、首を、腹を。

四方八方から、その四肢を引きちぎらんばかりに力がかかる。彼女を食らい始めた巨人たちの姿を見たクリスタの喉から、ヒュ、と息が漏れ出た。

「ユミルッ!!!」

仲間の制止を無視し走り出したクリスタは、手を伸ばす。

ユミルの巨人体の足がプツプツと音を立て、筋肉の繊維や肉が食いちぎられる。右手がもがれ、腹に食い込んだ巨人の手が彼女の腹を裂き、内臓がこぼれる。髪が引つ張られ抜け落ち、眉間に食いつかれた拍子に目玉が溶けるように落ちた。

「やめ、やめてっ……」

悲鳴さえ、巨人たちが食らう音によつてかき消される。まだ残っていたユミルの手がクリスタに向かって伸ばされ、その手にも、巨人が噛み付く。

「い……や、いや、ユミル……ユミル!!」

しかし、大きな瓦礫の横を通りすぎようとした瞬間、クリスタの視界に現れた巨人。瓦礫の裏にいたため、彼女の死角になっていた。大きな手が、彼女に伸ばされる。

ゆつくりと進む世界。

このまま死んでしまうのかと、クリスタが瞳を閉じた、その時。

「
」

クリスタの背後から伸びた、細い手。

その手が彼女を突き飛ばし、クリスタは地面に転がった。

何事か、状況を判断しようと少女が視線を向け見えたのは、肢体を巨人に掴まれた女の——アウラ・イエーガーの姿。片足でどうやって走ったのか、と場違いな感想を抱く。

アウラはクリスタが駆け出した直後、ベルトルトの急所を手加減なしで蹴り、その拘束から逃れた。再起不能となり地面に転がった少年を他所に、四足歩行——否、三足歩行で軋む身体を動かした彼女は、少女に近づいたところで立ち上がり、背を押した。

「え」

状況が掴めぬクリスタの頭上で、巨人が大きく口を開ける。

今まさに巨人に食われんとする女の白銅色の瞳は、まっすぐ彼女を捉えていた。

優しげに、愛おしげに微笑むアウラ。

その表情にゾクリと、彼女の背に震えが走った。

嬉しさのようでも、恐怖のようでもある、得体の知れない感情。

「あ、や、めて」

クリスタの視界に、糸を引く巨人の唾液が映る。

彼女が自分を見つめていることに目を細めた女の瞳が一瞬、夜空の星々をかき集めて作られたような、不思議な色へと変わって。

「死ッ、ねエエエエ!!!」

女を掴んでいた巨人のうなじが、切り裂かれた。アウラの窮地を救った人物は、ワイヤーが絡まり瓦礫の上を転がる。直後次々と自由の羽をまとった人間たちが、空を翔けた。

「バカッ！あんたは出なくていいんだよ!!」

ハンジの批難の声がその人物——エレン・イエーガーに向く。

残った巨人が駆逐されていく中、エレンはぶつかった頭を押さえながら姉の元へ駆けた。

「姉さん!!」

クリスタが既にアウラの側におり、様子を見ている。少年が目を向ければまず目に

入ったのは、欠けた右足。あるべきはずの部分に触れようとすれども、触るのは下の瓦礫の冷たい感触のみ。

「あの、ね、エレン……お姉さんの足は、巨人に食べられてしまったの」

「……………」

「……………エレン？」

巨人を殺した時、鬼の表情を浮かべていたエレンの顔は、無表情に変わっている。瞳を閉じる姉の頭に手を差し入れ、「姉さん、姉さん」と、小さく呟いた。

その問いかけに答えるように、微かにアウラの瞳が開く。

「……………う、あ」

「姉さん」

「そ、ら」

「……………姉さん」

「あお、くて」

—— さわれた。

その言葉を残し、ゆっくりと閉じた、アウラ・イエーガーの瞼。

弟に微笑みかけた姉の姿を見たエレンの瞳からは涙がこぼれ出し、声を殺したくぐもった声が、辺りに響くのだった。

「…………お姉さんの脈はあるから、まだ死んでないよ、エレン」
「づえっ?」

クリスタがそう言った瞬間、視界不良のエレンの顔が上がる。少年は咄嗟に姉の呼吸をみる。

すると細々とだが、まだ息はあった。その事実を随分ゆっくり噛み砕いて認識した少年は、とうとう人目も憚らず、声をあげて泣き始めたのであった。

???????

結晶化したアニ・レオンハートの捕獲と、ウォール・ローゼ陥落（仮）及び、ウドガルド城襲撃が続いた濃い一日。

ストヘス区戦では住民や兵士の多数の死傷者。ウドガルド城襲撃では死者二名、負傷者二名が出ることとなった。その負傷者二名——ユミルとアウラ副分隊長は、どちらも重傷である。

ハンジ指揮の援軍はミケらと合流し、壁上へと移動した。

ハンジはストヘス区戦のことを話し、ミケは壁の穴がなかったこと。また、彼とアウラ・イエーガーが遭遇した知性巨人と思しき「獣」の巨人について話した。

獣の巨人が「知性巨人」とみなされる理由は、岩の投球や、女型と同じ人間を殺すために殺そうとしていたため。

ウドガルド城において巨人がまるで統率を取って彼らを襲ったことを踏まえ、ミケは獣の巨人が女型以上に巨人を操作できる可能性を言及する。

「へえー……「獣」の巨人か。体毛に覆われていたんだよね？超大型や鎧、女型はそれぞれ得意な分野があり、役割分担をしているような印象があつたけれど………実に興味深い。獣の巨人が兵士に敵対行動を取っていた以上、女型たちの仲間であることには間違いな

いだろう。ただ問題はユミルの方だ。彼女は兵士たちを守るために戦った。その行動を理由に、我々人類の仲間である、という判断材料にするには少し難しいけれど……。少なくともコニーやクリスタ曰く、彼女はエレンとは違い「力」の使い方を知っている節があつた。つまり、巨人化できることを意図して隠していたわけだ。これだけで敵対意思があると王政に判断されかねない。厳しい現実だよ。まあそれはともかく、今は壁内の穴についてさらに詳しく調べなければならぬ。私としてはとても気になるんだけどね、ユミルが巨人化した姿。今彼女は重傷だし見れないのが残念だ。私も……私もミケたちの現場にいたら見られたのに。しかも助けてもらったんだろ？ユミルの巨人体の髪に掴まって。いいなあ……。ねえ、どんな感触だったの、ミケ？匂いとかは？

そう言えば知性巨人って、普通の巨人とは違う匂いがあるのかい？あと——」

「少し黙れ、ハンジ」

巨人のことになると、話が長い&オタクのような早口になるゾエ。ミケに睨まれ我に返った彼女は一つ咳払いをし、小さく謝罪を口にする。

それから間もなくして、駐屯兵団の先遣隊が到着。

彼らが詳しく調べたところ、壁の穴は見つからなかった、という。

100パーセントとは言い切れないが、これでローゼが陥落した疑いが消えた。しか

し何故巨人が壁内に現れたのか、疑問が深まっていく。

各々が仲間の傷を案じたり、現状の考察や、命が助かったことに安堵する中、バタバタと、揺れる旗。

この時、ストヘス区戦に参加した人間たちの深層下では、別の大きな問題が目まぐるしく動いていた。

アニを捕獲した後、彼女の情報を調べる際に発覚した事実。
彼女と同じウォール・マリア南東の出身者、二名について。

「なあエレン、ちょっといいか？」

激しい風が吹き荒れる中、一人の「nice guy」が、エレンに話しかける。

エレンは姉を救出した後、ずっとその側にいた。しかし先遣隊にいたハンネスが訪れ、アウラの様子を目にした時の表情を見るなり、堪えきれなくなり移動したのだ。

エレンやミカサよりも、ずっと昔からハンネスはアウラ・イエーガーのことを知っていた。それこそ少女がまだ三つだった頃から。

元々調査兵団に少女が入った時から、いずれ死ぬか、ケガをする可能性は大いにあると理解していた。

だが実際「兵士」として戦えなくなるほどの重傷を前にし、大きなショックを受けた。その時ハンネスが呟いた声。その内容が、エレンの脳内にこびり付いている。

——すまねえな、イエーガー先生。

娘を守ってやることができなくて、と。

その内容は、エレンが痛いほど感じていたことである。だからこそ少年は、ハンネスやアルミンたちがいた場所から逃げるように去った。

姉を守れなかった、弱い自分を責めて。

そして彼が一人になった時に、負傷した腕のせいで、上にあがることに苦戦しているライナーと出会った。

登るのを助けたエレンは、ライナーとしばらく会話していた。直後上がってきたベルトルトが、ライナーの隣に立った。104期生でも頭ひとつ飛び抜けた男が暗い表情を

浮かべているのが、やけに印象的だったのである。

その際ハンジとミケがトロスト区で一時待機する判断を出し、皆が移動し始めた気配を察知したエレンも、移動しようとしてライナーに呼び止められたのだ。

「実は五年前、俺たちは壁を破壊したんだ」

その一言に、「え？」と、頓狂な声を上げたベルトルト。彼が目を白黒させていることも気に留めず、ライナーは自分が「鎧」でベルトルトが「超大型」であることも語る。

「……何を、言っているんだ、ライナー？」

ベルトルトが肩を掴んだ手を振り払い、ライナーは続ける。

彼らの目的は壁内の人類を滅ぼすこと。

だがエレンが共に来るなら、その必要がなくなったことも。

この時「戦士」ライナーの思考には、焦りがあった。

その最たる理由が「獣」の巨人、ジーク・イエーガーの存在である。

四名の戦士が始祖の奪還を任されてから五年。突如戦士長が壁内に登場したことから、ライナーはマーレの上層部がいよいよ痺れを切らしたことを悟った。

獣は女型や車力と違い、巨人化の持続力には欠けるため、同伴で車力も来ている可能

性が高い。

つまり現在のマールレの戦力は、「戦鎚」のみとなる。

多少の危険性を伴ってでも戦士を追加で二名送っていることが、上層部が苛立っていることの裏付けとなる。これ以上時間がかかっては、ライナーやベルトルトの立場が危うくなる。

幸い一度失ったマルセルの「顎」は見つかっており、これまで行方知れずだった「進撃」も発見。

また「始祖」の発見までとは行かずとも、クリスタ・レンズが壁内の重要人物であることも知った（アニの情報収集の賜物）。

おおむね「進撃」の継承者と考えられるエレンを連れて行けば、十分アドバンテージにはなる。クリスタはエレンとユミルより優先順位が低いので、逃亡する際捕まえられるばいはいくらいだ。

何より現在、まだ戦士長とピークが壁内を出て、そう遠くない場所にいると考えられる。今動けば、十分合流することが可能だろう。

問題はアニだ。彼女もできることなら連れて行きたかったが、そうすると故郷へ帰る

チャンスを失うことになる。

ただ「始祖」の奪還がメインな以上、またパラダイ島へ訪れることになる。その時女型と合流すればいいだろう。

ライナーは知らないのだ。結晶化した彼女がすでに捕まっていることを。

その可能性を見出しているのはベルトルトのみ。ゆえに状況は理解しているが、消極的に動こうと考えていたベルトルトの考えを、ライナーは見事にぶち破った。

だが皮肉にもこのライナーの行動が、彼らの明暗を分ける。

このままハンジたちについて行けば、二人は地下で幽閉されていた。たとえばアニの共犯であつても、そうでなくとも。

「ハア……」

ひと通りライナーの話を聞いたエレンは、深いため息を吐く。

頼れるみんなの兄貴分、ライナー・ブラウン。と、彼のオマケで付いてくるベルトルト。

信じられない、まさか人類の敵であるなど。

否、信じたくないのだ。

「ライナーお前、疲れてんだよ」

エレンの言葉に大仰に頷くベルトルト。ウドガルド城での一件があり、その場にいた者たちはほとんど寝ていない。それはエレンたちも同様だが、立体機動装置という武器もなく一日中過ごしたライナーたちの方が、精神・肉体的ストレスが多いに違いない。

だがエレンの願いも虚しく、ライナーの様子が豹変する。ポツポツと、呟く男。自分を「半端なクソ野郎」と表現するその内情を、エレンは理解することができなかった。

「……なあ、ライナー」

ゆつくりと少年の心臓が、血液が、頭が、全身が冷えていく。

能面の顔を貼りつけたエレンは、ライナーに視線を向けた。

「お前さ、オレの姉さんが好きなんだよな」

「……それが、なんだ」

「なあ、お前今どんな気持ちなんだよ？お前の好きな人間が大ケガ負って、どんな気持ちなんだ。教えてくれよ」

「……………」

「答えたくありません、ってか。オレは今姉さんが死にかけてるこの気持ちをも、自分にぶつけてる。いつも大切な人を守れない自分が、愚かしくて」

「……エレン」

「自分で自分を、殺してやりたい」

けど、と続けたエレン。

「今一番ブツ殺してえのは、テメエだ」

翡翠の目が大きく見開かれ、ギラギラと輝く。

直後その圧に押された戦士二人が身構えた瞬間、エレンの後方から立体機動で急接近したミカサ。一瞬でライナーとベルトルトの間合いに入った彼女は、二人に致命傷を与える。

だが仕留め切るまでには至らず、ベルトルトに追撃を行おうとしたところを、ライナーにタツクルされ失敗した。

バチバチと、体が光り始めた二人。エレンは手のひらを噛み巨人化し、ライナーに殴

りかかった。

しかし鎧の身体は想像以上に固く、逆に腕を掴まれたエレンが押し込まれ、壁の上から外へ向かって落ちることに。そのまま鎧の巨人はタツクルしながら走り出す。そのため兵士たちは左右へ緊急離脱した。

鎧の巨人が壁の上を疾走してその手に捕まえたのは、アウラ・イエーガー。

(姉さん!!)

直後壁に指をかけながら降りたったライナーは、エレンの前に立つ。

握られたアウラに、強く歯噛みする弟。

それは少年にとって、“最悪の人間”だった。

??????

その子の蒼い瞳は、天上に広がる空の色。

その子の戯れる金の糸は、太陽の色。

掴むことができませんでした。

空はいつも上にあります。手の届かない場所に。

伸ばせども触れないのです。何故だろう。

「私」の目の前を誰かが走っていました。

いえ、私の視界にはその子しか映りませんでした。世界にはその子しかいませんでした。私

結われた金の髪。それがその子が走るたび、揺れました。その子は手を伸ばしていま

す。私ではない誰かに、手を伸ばしています。

私はここにいます。

私は見つけました。

私は「私」がずっと探していたものを見つけました。

私が探していたもので間違いないのです。きつと？

その子は私です。私はその子です。

私はその子でできています。その子は私でできています。

その子が走り始めました。私は手を伸ばしました。一瞬だけ、その髪に触れました。

私は「私」をその時、私になりました。

私は走りました。私には右足がありませんでした。私は私を食べた獣になって走り
ました。

その子を助けることができました。私は大きい人間に掴まれました。

その子が私を見ていました。蒼い瞳には私しか映っていませんでした。嬉しいです。
嬉しいです。

私はその子でできています。その子の中へ還りたいです。

しかし、違和感がありました。

その子にあるはずのものがありませんでした。その子がいつも身につけていたもの。

その子の、何か。

その子の蒼い瞳の中には私が住んでいます。その子の瞳の中に住んでいる私にはありません。その子の何かが。私にありました。

走っていたその子はその子ではありませんでした。

私はその子でした。その子は私でした。嬉しいです。私は還れたのでしょうか。

脳裏によぎったのはかつてのその子の姿。

その子の手を引つ張って私は走りました、その子の背を押して。その子に生きて欲しかったのです。

その子は最後に私を見て――、

私を、見て？

あ。ああ。

その子の瞳の色を、見た記憶がありません。私が背を押した後、その子は走っていきました。

走って、走っていきました。私を見ませんでした。最後まで、最後まで。

だから私は空に手を伸ばしました。空はその子そのものだったからです。

見て欲しかった。そうすれば「私」は安らかに眠れたでしょう。

私は私をわからなくなることもなかったでしょう。

憎くはありません。ただただ、私はその子を愛しています。その子の中へ還りたいです。その子の一部になりたいです。

でも、どうして、その子は私を見てくれなかったのでしょうか。

それは私が生まれた時から不良品だったからでしょうか。

私はずっと、その子になりたかった。その子の中へ還りたかった。私はその子を探している。

その子はどこにいるのでしょうか。

分かることは、ただひとつ。

空はいつも、青いです。

愛想笑いはいらなyear（イヤー）

アウラ・イエーガーが鎧の巨人に捕まり、エレンは動けなくなった。裏切り者を殺したいと思えども、殺せない。

鎧が近づき、巨人体のエレンの足を蹴り地面に手をつけさせ、本体ごとうなじを食いちぎろうと口を開ける。

「させないッ!!」

叫び、鎧の巨人のうなじを狙ったミカサ。しかし硬い甲殻に覆われたうなじは頑丈で、ブレードの刃が一瞬で折れてしまう。彼女はライナーに手で払いのけられそうになり、ガスで軌道を調整しながら壁にワイヤーを付け、難を逃れた。

このままではエレンが奪われる。彼女の、ミカサの世界が壊される。

残酷な世界でエレン・イエーガーを失った時、彼女の世界は色を失う。

青空も、自由に羽ばたく鳥も、木々も、花々も。無機質に変わったその世界で、彼女はひとり。

「エレン」

アウラ・イエーガーはミカサにとって、本当の姉のような存在だ。だがエレンと比べることができてしまう以上、唯一無二の存在ではない。ミカサの「特別」はエレンしかない。彼女がこの世界の残酷さを知ってから、ずっと。

「戦わなければ、勝てない。あなたが、教えてくれた言葉」

だから、戦え。たとえ誰かを失うことになっても、このままではエレンは負ける。言った本人が守らないなどあつてはならない。静かに、真つ直ぐに彼女は翡翠の瞳を見つめた。

「戦え……戦え！エレン・イエーガー!!」

ミカサの言葉を聞いた瞬間、エレンがけたたましく咆哮する。大気が震え、一瞬怯んだライナーの首を両手で掴み、壁に叩きつけた。

大きく見開かれた瞳を向け、少年は尚も咆える。

『グア』と、呻き声を漏らした鎧は、人質を持っていない反対の左手でエレンの髪を掴む。だが全く相手は怯まず、むしろそのまま絞め殺す勢いで首の氣道が締まっていく。

このままではまずいと判断したライナーは、思いきり頭突きをかました。数歩エレンが後ろによろけた隙に、体勢を立て直しタツクルを行う。

だが、ギリギリで右に避けたエレンはライナーの首に腕を引っかけようにして、鎧の後頭部を地面に叩きつけさせた。プロレスでいうところの「ランニング・ネックブリーカー・ドロップ」である。

タツクルの衝撃を受けたエレンの右腕は、当たった瞬間メキメキ、と嫌な音を立てた。中の骨が粉々になっている。

対しライナーも後頭部に受けた衝撃は大きく、うなじにいる本体にもその凄まじい衝撃が伝わった。地面がぶち当たった分大きくえぐれている。

(姉さん!!)

先ほどの衝撃の途中、ライナーの開いた右手から滑り落ちたアウラ・イエーガーの身体は、宙を舞っている。親方、空から女の子がッ!

エレンはすぐさま立ち上がり、その身体が地面にぶつかる前に受け止めた。震える手

で手のひらを開いたが、姉が鎧に握りつぶされた様子はない。戦いの中でも、絶妙にライナーが加減していたということだろう。

よかった、と安堵の息を溢したエレン。

ミカサの言葉を聞いた直後、少年の中には「進め」という言葉。

進んで、進むしかない。この残酷な世界で生きるためには、戻るところか、停滞さえ許されない。

現実の在り方をきつと誰よりも理解している少年だったからこそ、「姉」と「進むこと」を天秤にかけ、進むことを選んだ。仮にそれで姉が握りつぶされ死んでいたら、少年は自分とライナーを憎悪しただろう。

それでも戦わないことは、姉が死ぬ以上に許されない。

そのまま持つていては戦闘ができないため、エレンは20メートルほどの位置に穴を空け、姉を突っ込んだ。壁の上で「ああ！」と声を上げたのは、騒ぎを聞きつけ戻ってきていた駐屯兵の面々。お仕事が増やされる瞬間を目撃してしまった。

(来いよ、ライナー)

エレンは対人格闘の構えを取る。立ち上がったライナーもまたエレンに視線を向け、

巨人二体の戦いが再度幕を上げた。

???????

これは、一人の少年のお話です。

その少年は浅黒い肌と、黒い髪、鉛色の瞳を持っていました。

少年は物心ついた時から、いつも身体のどこかが痛みました。

ある日は腕、ある日は腹、ある日は頬。

肌色を無くした赤や紫の場所に触れれば、さらにズキズキと痛みます。

自分を傷つける存在が、少年は怖かったのです。しかし病弱な身体で働いている母を守るため、少年はいつもその人間に立ちはだかりました。

そうするとぶたれます。殴られます。蹴られます。

ある時は、酒ビンや灰皿で叩かれます。

ソレは、彼の父でした。少年とよく似た容姿の上背のある男。

少年はその人間が怖かったのです。

その人間がマーレ人であったのなら、少年はまだ恐れなかったでしょう。

それはマーレ人がエルディア人よりも身分が高いことを、幼心に理解していたがゆえ。

ゆえに暴力を受けても、「自分がエルディア人だから殴られる」という理由が作れません。

しかし現実には非情でした。

その人間は少年と同じエルディア人でした。なぜ同じエルディア人で、それも息子を殴るのか、少年は理解できませんでした。

もしかしたら、本当の父親ではないのかもしれない。だから自分は殴られるのかもしれない。

そう思った少年が母親に尋ねれども、その人間は真正正銘、少年の父親でした。少年は、自分が暴力を受ける“理由”を作れませんでした。

そしてある日、母を庇い身も心もボロボロになった時、少年はふと気付きます。

倒れている自分が、少年の瞳に映ったのです。

俯瞰的に、身体はどこをケガしたのか観察する自分。

同時にその時少年は、いつも痛む心が、軽くなっていることに気づいたのです。いえ、軽くなっている、は違いました。

その心の中には何もありませんでした。

あるのはただ、「ぼくは あの一ひとに なぐられたのか」という思考だけでした。

それから間もなくして、不摂生で身体を壊した男は死にます。

少年は喜ぶことはなく、死んだのか、と淡々と思いました。

また不幸なことに母親が大病にかかりました。

その日その日の食べ物、母方の祖父母の支援もあり、どうにか凌げていきました。しかし病気は別。

少年は母のため、「戦士」を目指し始めます。

戦士を目指す日々はつらいものでしたが、少年は努力し続けました。ただ過酷な練習の中で、父親に壊された心は、過度なストレスで軋んでいった。

寝込む母親に、甘えることもできない。

そんなある日、少年はとうとう倒れます。走り込んでいた中、世界が回ったのです。実際は平衡機能に異常が起こり、引き起こされていました。

その後少年は運ばれ、目を覚ました時には医務室のベッドの上にいました。

時刻は既に夕方。

お礼を言いフラフラと、更衣室に向かった少年。着替え終わると、カメのような速度で歩きました。

「づっ…」

しばし歩いていたものの、建物を出てから程なくして訪れた、また世界が回る感覚。同時に急激な吐き気も襲い、少年は木陰に寄つて蹲りました。

強く目をつむり、嘔吐感が過ぎ去るのをひたすら待つ拷問タイム。

いつもは吐きそうな自分を頭上から眺めている自分が存在せず、ただ気持ち悪さが身体を支配した。いつの間にか流れていた涙は、地面に吸い込まれていく。

「大丈夫かい」

その時、背後から聞こえた声。

思わず振り返った少年の瞳に映ったのは、金髪の少女。
青い瞳が彼を見つめている中、少年は耐えきれなくなり、

「おえ、っ」

ー吐いた。

黄色い液体と胃液臭が、少年の顔や手、地面を汚す。幸いにも服は汚れなかった。

少女は嫌な顔を隠しもせず、眉間にシワを寄せる。

かといってそのまま去ることはなく、少年の隣に向かい、地面の胃液に靴で土をかぶせた。

「立てる？あんた」

「……………う、ん」

少女に連れられ、少年は近くの水飲み場で汚れた部分を洗い、少し水を飲んだ。

幾分か苦しさが和らぎ、少女にお礼を言おうとしたところで、遠ざかっていた小柄な背中。

私はクールに去るぜ、にはまだ早すぎたようだ。少年としては。

「あ、あのっ！あ、ありがとう……………」

「……………別に」

振り向くこともなく、そっけない返事を返すのみの少女。

夕日に染まった少女の姿が、少年には輝いて見え、心臓の音がやけに早くなる。

「ぼ、ぼぼ、僕、ベルトルトって言うんだ！君の名前は……」

「…私はアニ・レオンハートだよ。アニでいい」

「う、うん、ありがとうアニ！」

「もう礼はいいって」

「あ、ごめん……」

——それが少年ベルトルト・フーバーが、アニ・レオンハートに初めて会った時の出来事だった。

以来少年の世界は大きく、暗闇から引きずり上げられることになる。

しかして少女へ抱く感情が「恋」だと知るのは、まだ少し先の話。

??????

エレンvsライナーの戦闘は最終的にエレンの締め技が決まり、鎧の巨人が窮地に立たされた。

それを超大型が、頭上から頭と上半身の一部を落としエレンを食らう形で助け、ライナーのピンチは免れた。

その後エレンとユミル、そして、ユミルをつかんだ際同時に捕まえていた兵士からどさくさに紛れ、立体機動装置を奪い身につけていたベルトルトは、鎧の巨人に乗り移動した。

現在は休息のため、巨大樹の森にいる。巨人の活動が収まる夜になるまでの間だ。

エレンより先に目覚めたユミルは、戦士二人と根元からきれいに両腕がなくなっているエレンを見たのち、いくつか質問をしようとした。だがライナーの返答は「エレンが起きてから」。

それから彼女は静かに、空を眺め待っていた。

特に取り乱しめせず落ち着いている様子が、ベルトルトには不気味に映った。

そしてエレンが目覚めた後、巨人化しようとしたエレンをユミルが止める。

下にはサイズの小さな巨人が無数におり、10メートルを超える個体もスタンバって

いる。ライナーとベルトルトは立体機動装置を付けており、さらにエレンは疲労困憊の身。巨人化したところで、勝機は薄い——と。

どうにか抑えたエレンだが、翡翠の瞳は変わらずさまさまな感情で煮えたぎっている。

「俺たちはこれから、お前らを『故郷』へ連れて行く」

ライナーが二人に話す。それを黙って聞くベルトルトには、いつもの自分がいた。頭上から、ベルトルト・フーバーという人間が見える。

だがずっと心中の奥底にあるのは、アニの状態。

真つ暗な少年の世界に、横からひよっこりと現れた天使の存在。

多少：否、かなり暴力的だが、そこがイイ。案外少女っぽいものが好きなどころも力ワイイ。

「兵士」のライナーに、「戦士」であることを言及しながら、ベルトルトの精神は残してきてしまったアニに向いている。

過呼吸を起こし焦点がかすかに合わなくなっているライナーに、進撃モードのエレン。殺意マシマシの少年の方は、ライナーが姉を人質にしたことも話に上げ、荒ぶって

いる。

そんな二人を上手くフォローするのは、まさかのユミル。

「落ち着けエレン。ウドガルド城の時、ライナーがお前の姉貴に夜這いかけたからって」

「……………ハ？」

「あと俵持ちした時、内太もものきわどい部分を堪能してたからって」

「……………ユミル、君は何を言っているんだ？」

「何って、ナニだろ？私はこの目で見た事実を言ったまでだ。ちなみに夜這いは失敗したみたいだぜ。証拠は今はなくなっちゃったが、頬の腫れだよ」

深刻な状況に似つかわしくない下世話な話。ベルトルトは啞然とした。

まさかクリスタの下着の件の恨みを今、ここで晴らそうとしているのだろうか。視線を錆びたブリキのおもちやの如く移せば、見えてしまうエレンの表情。

「……………」

無言で、ライナーを凝視していた。ベルトルトの心臓が止まった。いや、止まりかけた。

当のライナーはまだ少し過呼吸が続いている。ユミルが「息をゆっくり吐き出せ」とアドバイスしたことで、ようやく落ち着いていた。

「まあ今は動けない以上、私たち四人はここにいろしかない。険悪なムードのままではいけないの、私としては嫌なんだよ」

「なら、この人間じゃねエ大量殺人鬼のクソ野郎二人と仲良くしろってか？ユミル、そもそもオレはお前自体信じられてねエ」

「信じるか否かの前に、頭を動かさなきゃいけないんだよ、エレン」

それに、とユミル。

「ライナーも、頑張ったんだ」

三人の視線が一斉に彼女に向いた。

「……テメエもやつぱり、アイツらの仲間か」

「バカ言えエレン。こんな背がでかいだけが取り柄のヒョロいモヤシと、淫獣野郎の味方な訳があるか！私はクリスタの——ヒストリアの味方だ。これまでだって……これからだって」

「じゃあ、さっきの言葉はなんなんだよ」

「……よく、わからない。すまない」

「ハア？頭イかれ始めてんじゃねえのか？」

お前が言うな。ナイスガイを除く二人が思った。

「そう言えば私さ、夜に活動していた巨人や、「獣」の巨人が気になってただけだよ。ベルトルさんは何か知らねえのか？」

「……………」

「黙秘か……まあいいか。なら後もう一つ。お前らと、アウラ・イエーガーの繋がりはないか？」

ユミルに向いていたエレンの視線が、戦士二人に向く。

「……………お前らは、姉さんを利用していたのか？女型にワナの場所を教えさせるために」「やっぱあの女は「クロ」だったわ……………そう睨むなよ、エレン。私はあの副分隊長殿が、利用されて終わる女だとは思えない。何か交渉材料か、脅す材料を持ってたんじやないのか？」

その問いにライナーが口を開く前に、ベルトルトが手を挙げる。「僕だよ」と。

「僕が、利用した。エレンの——君のお姉さんを」

「テ、メエが……………オレを、使って？」

「……………ああ、君を脅しの材料に使ってね。イエーガー副分隊長は、家族想いの人だったから」

「殺す!!!」

「落ち着けバカ」

ユミルに頭を叩かれ、エレンの自傷が間一髪で止まる。

この時ベルトルトはアニの発言を知らなかったため、エレンの憶測だろう、と考えた。流星に戦士長云々の話をするわけにはいかない。風呂敷が広がりすぎてしまう。

「だいたい話の輪郭は掴めた。一つ違和感があるとしたら、エレンの話が正しけりや、ライナーは巨人化した時アウラ・イエーガーを手に握って人質にしたんだよな?」

「そうだよ。でもそれが何……」

「よく考えてみる。お前と戦いながら人質を握っていた。でもお前の様子からしても、姉は死んでないだろう?」

「…オレが助けたからな」

「そこだ、そこなんだよ。なぜ死ななかつたかだ。それこそ相当気を遣わなきや、戦闘中に潰れちゃうはずだぜ」

「……………あ」

「なあライナー、ベルトルトさん、お前たちは……………」

——あの女が何か、知っているのか？

戦士二人はその言葉に首を傾げる。

それでユミルは察した。彼らがアウラ・イエーガーとイコールで、繋がる存在を知らないことを。

なぜアウラと、あの金髪の少女が瓜二つなのかはわからない。だが、相互にまず間違はなく何か関係がある。到底信じられないが、アウラが「始祖」の生まれ変わりなのかもしれないし、少女に一目置かれている人間なのかもしれない。

だが一つだけ確かなことを、ユミルは目撃している。

彼女の目の前で、起こった出来事。クリスタが巨人に襲われようとした時、彼女の背を押して助けたアウラの姿。必死に手を伸ばしたその姿に、偽りなどなかった。ただひたすら、クリスタを救おうとしていた。死をも厭わず。

アウラの意志があの子の意志とは言い切れない。しかし壁内に、アウラ・イエーガーの——引いては始祖ユミルの存在があるのなら、クリスタは安全だ、と考えられた。

「どういう意味だ、ユミル」

ライナーが口を開く。

「おいおい、聞いてんのはこつちだぜ？ 質問を質問で返すなよ。わからねえのならない
ヤ」

腑に落ちない表情を戦士が浮かべた、その時。

パアンと、遠くで響いた発砲音。

「もう、来たのか……!!」

緑の煙が、日が沈みゆく世界に生まれ、消えてゆく。

調査兵団の進撃の音が、地面を轟かした。

チユンチユンチユン、チユチユンがチユン

わたし、は、アウラ・イエーガー。

一瞬のような、はたまた悠久のような夢を見ていた気がする。

目覚めたら眩ゆい光線に目をやられ、呻きながら身体を起こす。すると部屋にいたらしい女兵士に「大丈夫ですか？」と声をかけられ、その人は誰かを呼びに部屋を出た。

「……………ん？」

さっきの女、憲兵の服を着ていなかったか？

いや、その前にここはどこだ？ウドガルド城が倒壊し、ユミルくんが助けてくれた後、クリスタ・レンズを助けたことまでは覚えている。あの時は身体が勝手に動いていた。自分の意思なのかもよくわからず、少女の背を押して。

それからの記憶はない。

ただ、嬉しかった。

「失礼します」

ノックをし中に入ってきたのは、髪を一括りにし、数本前髪が落ちてきているブロンド髪の女性。調査兵団ではなく憲兵団の人間がいる時点で、嫌な予感かしませんね。

色々な資料片手に私が寝ているベッドの横に立った女の名は、「トラウテ・カーフェン」。中央第一憲兵団所属。

中央第一憲兵——またの名を中央憲兵は、王政直轄の憲兵団であり、通常の憲兵団とは指揮系統が異なる。裏で王政から頼まれた汚いお仕事をしている方々だ。

エリート中のエリートで、王政への忠誠心は異常。

一言でいうとヤバイ連中です。もちろん全員が全員ではないでしょうけれど。

「調査兵団第五班所属副分隊長、アウラ・イエーガー。あなたは現在「女型」及び、「超大型」や「鎧」に協力した容疑で疑われている。——否、「協力した」とするウラは、アニ・レオンハートやベルトルト・フーバーからすでに取れている。否定する気はありますか?」

「…いえ」

やはりというか、私が隔離施設にいた時、ストヘス区でアニちゃんを捕まえる作戦が組まれていたらしい。

最終的にエレン・イエーガーが、彼女をあと一步のところまで追い込んだ。

だが身体全体を覆う結晶化によって、アニはそのまま情報を吐くことなく、眠りにつ

いた。白雪姫かな？

その際彼女は巨人化する前、大笑いしながら私を利用した旨を話した。弟、エレンを利用して。

表には出さないが困惑だ。大規模壁外調査からアニちゃんがベルトルトくんたちと会う時間はなかったでしょうし、その発言はおそらく彼女単独の行動。

何故私を庇うようなマネをした？確かに彼女なら、ベルトルトくんが私を利用したことを思いつく。

そも利用されたこと自体は本当だ。

しかし本当の理由はエレンを守る云々ではなく、ジーク・イーガーに会うこと。

これについても彼女なら早々思いついたに違いない。考えられるとするなら、お国の事情を匂わさないために、「お兄さま」のところを「エレン」に変えたのか。

いや、そうすると一周回ってやはり、何故彼女が私を庇うようなマネをしたのかわからなくなる。

純粹に私をかわいそうだと思って、情けをかけたのか？

(……ダメだ、わからないな。それこそ本人に聞かなければ)

アニ・レオンハートを保留にすると、次はベルトルトくんか。

ストヘス区で戦った面々の一部はウォール・ローゼ陥落の可能性があり、送られた伝達人員から事情を聞いて、ハンジ・ゾエがエレンやミカサたちを引き連れ増援を組んだ。そう言えばクリスタを助けた後薄っすらと、エレンくんの声が聞こえたような記憶がある。

ちなみに壁は破られていなかったそうだ。現在は確認された「獣」の巨人が、壁内に巨人が出現した現象と因果関係があつたのではないか？——というのが、有力な説となつている。概ね正解です。

して、そのあと移動したハンジ&ミケ分隊長たち。

この時ライナーとベルトルトは、アニの仲間として疑われていたらしい。

というのもちようどハンジらが増援に向かう前、彼女が頼んだアニの身辺調査が届いた。その際彼女と同郷の人間が他二名いることが判明した。

そのため増援がきた時点で、戦士二人は動かなくてはならない状況が出来上がつていたわけです。

行動に起こさなければ幽閉。それを悟らせぬよう、エレンくんたちは動いた。

しかし間が悪かったと言いますか、戦士長が来ていた以上、戦士二人もマーレのお上
が痺れを切らしていることに気づいてしまったのでしよう。始祖の情報は掴めなかつ
たですが、手土産になる巨人が二体もいる。

ゆえにライナーくんは行動に移した。ベルトルトくんの方はアニちゃんが気がかり
だったと思います。ただ結局彼は逃げざるを得なかった。

結果、エレンVSライナーの巨人対決が勃発。

この時ライナーくんは私をゲットし、人質にしていた。エレンくんは最初手が出せな
かったものの、攻撃に出た。お姉ちゃんの死覚悟で戦ったエレンくんの精神状態ステキ
だな？

私が死んでない以上、ライナーくんはかなり気をつけてこの身体を掴んでいたことも
推測できますし、その行動の裏を読み取ると、私をマーレに連れて行くとしたことも
考えられる。

ライナーくん、キミは本当にナイスガイだ……この御恩は忘れません。もし次に彼と出
会った時は、奉公の気持ちを込めて、精一杯曇おもてなしらせたいと思います。

最後はベルトルトの助力で、危うくなつた鎧の巨人は助けられ、エレンが連れ去られ

た。ついでにユミルくんも。

そして捕まったエレンくんは巨大樹の森で目を覚ましたあと、ベルトルトくんは「ア二に罠を教えるため、姉を利用したのか?」と、尋ねた。エレンくんを脅しの材料に使って。

ア二ちゃんが言ったことだとは弟が告げていない中、ベルトルトくんは肯定した。彼が私を利用したのは本当ですので、弟の発言をそのまま解釈したと思われる。

それから夜が訪れるまで待つていた戦士たちの元に、ミケ分隊長と合流していた団長指揮の調査兵団が到着。

多くの死傷者を出しながら、どうかエレンの奪取には成功した。作戦中エルヴィン・スミスは鎧の巨人の進行方向から巨人を引き連れ、衝突させた。104期生が鎧の後ろから追いつき、戦士二人の説得ないし裏切られたことの内心を吐露している間の所業です。

104期生が緊急離脱すると、鎧の巨人に巨人の群れが襲いかかり、捕まっていたエレンをどうにか取り戻すことができた。

さすが我らが団長。ライナーくんたちの意識を新兵たちに向けさせておいて、多少の犠牲を払ってでも、確実にエレン奪還を目指す。言い換えれば戦士二人と104期生の

精神をえぐりながら、仲間たちを殺すのだ。

まさに命を、「生死」をかける美しき魂のやりとり。

脳汁が目から流れてきそうです。さらに団長はその作戦で右腕を失った。自ら命を賭すその様が本当に、圧巻です。

ただし、ユミルくんはクリスタに別れを告げ、去ってしまった。

クリスタ・レンズを守りたいのであれば、ユミルくんは残る選択肢を取ったはず。なぜ戦士と共にマーレに向かったのだろうか。今更戦士だった、というのはあり得ないし。相変わらず謎が多い少女だった。その内の闇を見たかったというのに。

ちなみに現在はエレン奪還から、数日経っている。

「エレンくんは巨人化していなかったそうですが、よく助かりましたね」

「調査兵団が死力を尽くし、守ったがゆえでしょう」

エレン・イエーガーは鎧の巨人から逃れたあと、巨人化できずにいた。目の前で、巨人に襲われる仲間たちの姿が見えているにも関わらず、だ。

ライナーとの戦闘でうなじを本体ごと食われた時、腕を根本から失っていたらしいので、それが原因で疲労が蓄積し、巨人化できなかったのではないかと思う。

「その際先遣隊として派遣されていた駐屯兵団のハンネスが同行しており、エレン・イエーガーを守るため死亡しています」

「え？」

おじさんが亡くなってしまったの……ですか？エレンくんの前で？

いえ、聞けばミカサちゃんも弟の隣にいたそうなので、正確には二人か。

二人の前で巨人に食われてしまったハンネスおじさん。どうして私もその場にいさせてくれなかったんですか？というか巨人に身体を掴まれ、重傷を負いながらエレンくんを守ろうと側にいたミカサちゃん、愛のラブストーリーー過ぎませんか？

我が弟よ、早くミカサちゃんを「ミカサ・イエーガー」にしてやれ。

というか……何故？なぜ私が気絶している間に悲劇が起こり、そして終わってしまっ
たん？

しかもおじさんが先遣隊で壁に来ていたようなので、絶対右足を無くして眠っていた私を見たじゃないですか。なんて言ってたんですか、どんな曇った表情を浮かべていたのですか……！

「泣いているところ申し訳ないけど、話を進めるわね」

「……………は？」

エレンとミカサが巨人に襲われそうになった時、弟は生身で巨人に殴りかかろうとした。

そして、その直後。

「——他の巨人が、二人を食らおうとした巨人に襲いかかった？」

「ええ、信じ難いことですが。その場にいた多くの人間が目の当たりにしています」

巨人たちはその一体を食い殺したのち、次の標的を鎧の巨人に。

その隙を突き、兵士たちは撤退することができた。

完全に、ユミルちゃんの仕業だ。むしろ彼女以外あり得ない。お父さまの時と同じように、私が気絶してから、その後の一連の流れを拝見することつてできませんか？どうにか私の片足料金で……なんなら片腕か、片足をもう一本捧げるので。

……祈りましたが無反応でした。

やはり、自分で築き上げた他人の不幸でないとダメだ！という、ユミルたそのお導きなんですかね。偶然通りかかっただけで美味しい思いをするのは小賢しいでしょう、アウラちゃん——と。

ので（唐突）、これからは精進して皆さんの悲劇を作り出していこうと思います。

これからの行く末を想像すると、余裕があれば、の話になりますが。

「あなたが眠っていた間の大まかな内容は、以上です」

「ありがとうございます。：それで、わたしの処遇をお聞きしたいのですが」

「処遇、ですか。現在のあなた、アウライエーガーの管理は、我々に任されており、少なくとも即処刑にはなりませんよ。情報を聞くまでは」

「中央憲兵の方々は、噂だと『黒いこと』をなさっているそうですから、怖いですね」

「：随分と、余裕があまりで」

「いえ、余裕などありませんよ。わたしはいつも、土俵際で生きていますから」

生と死の狭間に私自身も身を置いて、隣の人間をどう落とそうか考えている。

それから目隠しと、手を拘束された状態で担架で運ばれ、荷馬車のような場所に乘せられた。トラウテ以外に、数名の気配がする。殺伐とした雰囲気だ。

「ここからはしばらく移動します。小休憩は挟むので、その時に食事や手洗いは済ませてください。同行は女兵士が付きます」

拘束プレインなんて久しぶりだ。精神疾患で入院させられていた時と比べれば、まだか

わいい。一応私が自死行為に走っていたのは知っているのだから、口枷などはしないの
だろうか。舌をかみ切る可能性もあるでしょう。

聞けば、真つ黒いお仕事をやっている方特有のお返事が。

「舌をかみ切つてもそう簡単に死にませんよ、人間は」

「へえー、そうなんですか」

「第一今のあなたに自傷する空気はありませんから」

「よく観察されてるんですね」

確かに今は死ぬ気はない。それよりも舌の話で一つ、思い出した。

ユミルちゃんにも、舌の一部がなかった。

トラウテ曰く、舌をかみ切つても出血死になることはごく稀で、死因の多くはかみ切つた後の舌が奥へ引つ込むことで起きるそう。つまり窒息死。

なので口内へ指を突つ込み、舌を引つ張つて呼吸の気道を作れば死ぬことはない。そのプレイ、ジークお兄さまにされたい。

これから私がされる「らめえ♡」な行為も願わくばお兄さまにしていただくか、ノーカットで妹が絶叫する様を見ていてほしい。無理ですけど（血涙）

???????

「ねえトラウテさん、そう言えばひとつお願いしてもいいかしら」

「何ですか？」

「買って欲しいものがあるの。その分は私の給料から差し引いていいから」

頼めば、疑問の声色をのぞかせつつ彼女は承諾してくれた。

同じものが二つ。一つは指定の家に送ってもらい、もう一つは自分用に。

「わかりました。メッセージは入りますか？」

「気が利くんですね。じゃあ、ラベルの裏に代筆でお願いします」

——奥さんがいないからって、飲みすぎないでね。

いつも酒臭く、ザリザリとしたヒゲの感触が嫌いだった。

でもその温かさは、嫌いではなかった。

本人に言うことは、ついぞなかったですが。

おじさんと私とイツヌのおまわりさん

ウォール・ローゼが突破された可能性があるとの一報を受け、多くのローゼの人間がウォール・シーナの旧地下都市への避難を余儀なくされた。

しかし残された人類の食糧の備蓄はかつてのウォール・マリア陥落時同様限られており、それでも半数しか食わせることができない。

そのため備蓄がなくなる一週間後のタイミングで、安全宣言が当局より出された。

また、今回の巨人の発生源とされるラガコ村。

その村が調査された折、104期生コニー・スプリングラーの家に不自然な形で寝転がっていた巨人と、彼の家族の肖像画が比較され、その巨人がコニーの母親であることが判明した。そしてこの一件で、かつてからあった一つの説が、現実味を帯びた。

それは巨人が、元人間であるという可能性。

この事実を知った調査兵団の上層部に、激震が走ることになる。

まだ絶対とは言い切れないこの可能性。

だがこれまでの多くの巨人を狩ってきた人間にとっては、“人殺し”という罪の意識

が重くのしかかった。

???????

「僕が新リヴアイ班に…ですか？」

「ええ、リヴアイ兵長が選んだのよ」

ライナーとベルトルトが人類の敵であることが判明してから一週間。

エレンの奪還作戦で負傷した多くの兵士が、まだ全快には至っていない状況。

回復しても今作戦での始末書やら、今後のウォール・マリア奪還に向けて、特に上は目がキマった状態で働いている。

アルミンもまたこれまで活躍してきたその頭脳が評価され、たびたび上の仕事を手伝っている。そうして資料を運んでいた時、ペトラが現れたのだ。彼女とオルオは女型捕獲の一件で負傷していたため、ストヘス区の作戦とエレン奪還の件には関わっていない。か

「私は『旧』リヴァイ班の人間としてみんなのサポートに当たるから、よろしくね」
「……………ペトラ、さん」

「そんな暗い顔しないでよ。メンバーが四人になっちゃったんだし、仕方…ないのよ。チームワークや信頼関係は、重要なものだから」

気丈に笑おうとするペトラ。

だが、目元の隈が腕のギプスと相まって、痛々しく感じさせる。

リヴァイ班で出た犠牲。エレン奪還に参加し、その『使命』を——エレンを守るため戦い続けた二名の兵士。彼らは鎧の巨人の腕から逃れた少年に近づく巨人を狩り続けた。

「グンタとエルドは、人類の一步のために最後まであがいた」

「……………」

「エレンにはこれまで以上に重い重圧がかかる。だからアルミンくんたちが側で、しっかり支えてあげて欲しいの」

「…僕に、できるんでしょうか」

エレン・イエーガーは今、精神的にかなり追い込まれている。ストヘス区急襲で亡くなった民間人（人がいなくなると不自然に思われるため、あらかじめ避難勧告は出され

ていなかった)や兵士。さらにエレン奪還時にも兵士が死に、仲間と生きていたライナーとベルトルトの裏切りにもあった。

そしてアニやベルトルトの発言からわかった事実。彼らはエレンを引き合いに出し、アウラ・イエーガーを利用した。

アウラの件は残酷になるうとしていたアルミンにとって、衝撃的なものだった。

無論可能性の一つには、「彼女が利用されているのではないか？」という考えもあった。だがアルミンはアウラを「初恋の相手」としつつ、実際に会話したことはない。今まで見たことがあるのは、他人と話している様子。謂わば、第一印象のままに止まっている。

自分と話した時、どのようなことを喋り、表情を見せてくれるのかわからない。

だからこそアルミンは自分でも思った以上に、簡単にアウラ・イエーガーを線引きすることができてしまった。

ベルトルトの動揺を狙い、「アニが拷問を受けている」と言った時もそうだ。

少なくとも少年には、冷えた部分がある。エルヴィンと同じ“非人間”になれる部分だ。彼は冷酷になれる一面を無意識に、理性と感情の裏に隠して生きてきた。

周りにはいつも激情的なエレンや、少々怖いが仲間想いのミカサがいたから。非人間な己の一面を、アルミンは否定していたのだ。

「本当は一番エレンの支えになるのは、お姉さんなんです。でも彼女は、今……」

「憲兵団に、捕まっている」

「……はい」

エレンを救出し戻ってきた時にはすでに、アウラ・イエーガーの身柄は憲兵に捕らえられていた。

元々調査兵団の一部では敵の協力者の可能性として出ていた。しかしアニ・レオンハートの発言により、彼女が敵と関係があったことがストヘス区にいた憲兵にも伝わってしまった。

彼女の身柄の処遇については、一旦隔離施設にいた彼女を確保してから、ということになった。

エルヴィンはこの時、ナイル・ドークにアウラ・イエーガーに関して、独断的な行動を憲兵が起こさないよう提案した。

遠回しな、情報を吐かせるため勝手に拷問すんなよ、という意味だ。

エレンの時以上に、「女型」という脅威が出てきてしまった以上、同じ壁内の人間同士

でいがみ合っている場合ではない。優先すべきは人類の安全。

エルヴィンの意図を理解したナイルも、首肯した。

が、調査兵団団長の許可を待たずして、憲兵はアウラの身柄を捕らえた。

彼らには治安組織の一面があるゆえ、強制的に出られてしまえば、団長でもヘタに動くことはできない。否、エルヴィンが大怪我を負っていたからこそ、憲兵は動きやすいうちに動いた。

表上はアニ・レオンハートの発言が裏づけとなり、治療を踏まえ現状は隔離されている——ということになっている。

もちろん普通なら許可を取れば会うことは可能だ。例えば「見舞い」という形を取れば。

だが全面的に面会は禁止されている。

ペロ、こ、これは王政案件だ——！

誰よりも早くスミスは気づいた。

しかし中央政府が絡んでいるにしても、アニの発言からアウラ・イエーガー確保まで

の流れが早すぎる。

それこそ元々マークされていなければあり得まい。

考えられるのは一つ、エレン・イエーガーの巨人化の一件。約一ヶ月前、トロスト区攻防戦においてエレンは初めて巨人化した。

彼女が目をつけられたのはその時点である可能性が高い。

巨人化できるかもしれない人間として、候補に入っていたのか。

はたまた中央にとって、都合の悪い情報を握っている可能性があるとして、危険視されていたのか。

エルヴィンの考えは後者だ。かつて中央政府の闇によって父親を殺されたからこそ、彼の胸中にはたしかな確信として存在する。同時にその考えが正しければ、アウラが仲間を——ひいては人類を騙していた、と思わざるを得ない。

イエーガー家の地下室に眠る“人類の秘密”を、彼女は持っている。

またその秘密があつたからこそ、アニたちは彼女を利用したのではないのか、と。

事態は一刻の猶予を争う。

アウラ・イエーガーの情報が一切入ってこない以上、彼女が目を覚ましたのか、はた

また情報を吐かされているかもわからない。

ただその事実を知った場合、王政に本気でカチコミに行きかねない脳内進撃野郎が一名いる。ゆえに裏の事情を知っているのはエルヴィンやリヴァイ、ミケにハンジなどごくわずかの人間のみ。

というより、精神が完全にマツハ状態のエレンに「お姉ちゃんが拷問パーティーやで♡」と告げたら最後、本気で心が壊れかねない。

それほどまでに少年は今ポロポロだ。だからこそその、精神セラピスト104期生ズであらうか。

この中にはエレンと同様に一名、セラピーを必要とする少女がいる。

「エレンも気づいていると思うんです。姉が拷問される可能性があるって……」

「重傷者にさすがに行わないわよ」

「じゃあ快方に向かったら？ 団長は憲兵団にかけ合っているんですか？」

「かけ合ってはいるみたいだけど、まだ許可が下りてないらしいの。まだ面会できる状況ではないから、って」

「……………」

「大丈夫、ミケ分隊長やハンジ分隊長が色々動いているみたいだし、アルミンくんはエレンのことを気にかけてあげて」

「……はい」

「元気がないわね」

「…はいッ!」

握った拳を、左胸に当てるアルミン。目を閉じ、背筋をピンと伸ばした少年に、ペトラは小さく微笑んだ。かすかに滲む疲労をのぞかせて。

ここ最近の出来事で、皆それぞれ大きく心と身体を消耗させていた。

???????

とある一室で、一人の女がベッドの上に横になっていた。長いこと荷馬車に揺られた彼女は現在、眠りについている。精神面はともかく欠損した肉体の疲労は、確実に出ていた。

一時は危険な状態だったが、ゴキブリのような驚異的な生命力というべきか。医師も驚

かせるほどの回復をみせ、エレン奪還から一週間ほどで元気に食事を食べられるまでに至った。ケガの経過観察や歩行訓練も含め、予想以上に早く退院できるだろう、と。

だが退院はできたとしても、その後待ち受けるのは幽閉生活である。

女の誤算が一つあったとすれば、すぐにGOU?? MONされるかと思つたが、普通の部屋でゆっくり過ごせている点だ。さすがに頼んだ酒は病人ということで医者に没収されたが。

拘束も移動時にされていたが現在には受けていない。武装した中央の見張り（女）が四六時中一人は付いていることや、身体のケガもあり、拘束せずとも大丈夫だと判断されているのだろう。

彼女がトラウテ・カーフェンに「てつきり拷問されるのか」と言つた時は、トラウテは常識を語つた。

目覚めたばかりの重傷者に行うわけがないでしょう、と。

しかしその言葉の意味合いには「今は」というニュアンスが含まれている。

回復した暁には、悲鳴が耳に心地よい拷問??問。女はかつて父グリシャがマーレ治安当局に受けた内容を思い出した。

楽園送りの時、医者であつた父の手に巻かれていた包帯。明らかにあるはずの指の部分が欠けていた。

相当痛かつただろうな、と鬼畜女は脳汁を垂らしそんな勢いで想いにふける。

存外彼女は調査兵团より、憲兵团の方が合つていたかもしれない。彼女の技量なら中央第一憲兵团にも入れただろう。そして壁内の秘密に近づく者を必殺仕事人。拷問時は脳内で嬉々として、悲鳴の雨を浴びていたに違いない。おまわりさん、コイツです。

そうして入院生活が続くある日。

入院する場所を移した疑問がまだ払拭されない中、その日だけ彼女はベッドに身体を拘束された。

ついに（拷問が）来たか、と女本人は考えた。が、そんなことはなく。

間もなくして見張りの女兵士が退出させられ、彼女の一室に現れたのは一人の男。

貴族らしい男は一目で上質とわかるシルクハットとコートを身にまといている。恰幅はよく、腹回りがふくよかだ。

帽子を外した男の後ろには扉に額を打ち付けんばかりの長身の男もおり、上品な男と

うって変わり、触れただけでこちらが大ケガしそうな気性の荒さがうかがえた。

例えるなら「狂犬」。女がこれまで見た人間の中で、トップに入る力の底知れなさ。

そんな男を従える上品な男は、まず間違いないただの貴族の男ではない。そも敵の内通者である彼女に会いにきているのだ。仲間の調査兵団の人間さえ面会が許されていないというのに。

否、それ以上に帽子を取った男の姿を、女は一度見たことがあった。

「初めまして、君がアウラ・イエーガーだね。私はロッド・レイスと言う」

かつて父、グリシャ・イエーガーが殺した「レイス家」の唯一の生き残り。

その男が今、彼女の目の前にいる。

ほんの少しでも表情の機微を読み取られてはならない。

アウラは最近ガバガバな顔を繕い、少し困惑を交えて「初めまして」と返す。

「貴族の方…ですよ？ 確かレイス家は、オルブド区の北に領土を持つお方では…：…そんな方が何故私に？」

入院する場所の疑問は解けた。身柄を捕獲するなら、憲兵の活動範囲である王都に近

い場所がふさわしい。しかし彼女がいる場所は窓の景色の街の様子を見ても、王都かその近辺ではなかった。

であれば場所はどこか。それは彼女が場所を移した理由を含め、貴族の男を踏まえれば答えは出る。

場所を移した理由は、レイス卿と対面しやすい場所に移動させるため。恐らく場所はオルブド区だろう。

だがさらなる疑問が生じる。何故真の壁の王が、彼女に会いに来たのか。

神は言っている。どうせお父さま関連だろ？——と。

「ちなみに後ろの長身の方は、中央憲兵の方ですか？」

「彼は私の護衛だ。途中で退出させるかもしれないが、気にしなくていい」
「そう……ですか」

「私は君に話があつて来たんだ」

「……敵と、内通していた件でしょうか？」

「それも知りたいところではあるが、用件は他にある」

ロッドは椅子を引き寄せ、女の隣に座る。拘束された美女と、体型がまさしく女性をわからせちやう（意味深）貴族の男と、長身の狂犬護衛。意味深な構図になりそうでない、不思議な絵ヅラ。

（この人間と私は、遠からず血が繋がっているのか…）

ロッドの髪が黒だからか、始祖の少女と同じ髪色を持つダイナやジークとはあまり似ていない。しかし青い瞳は、共通して似ていた。思わずその目だけえぐって舐め回したいくらいには、アウラの劣情を誘っている。

おまわり
憲兵さん……はすぐ側にいた。

不意にアウラの脳裏によぎったのは、ユミルに見せられた記憶。

そう言えばグリシャとフリーダの前にユミルがサプライズ登場した時、父は娘の名——つまり、「アウラ」の名を語っていた。

その場にいたロッドもまた、混乱状態であったとはいえ、しつかり聴こえていただろう。娘息子を殺した男が語った名前なのだ、調べていておかしくない。

あの一件が起こったのは今から五年前であり、調べれば早々に調査兵団の「アウラ・イエーガー」の存在に行き当たったはず。そして彼女を調べれば、必然的に「グリシャ・イエーガー」に行き着く。

しかしレイス卿が接触してきたのは、事件が起こってから五年後の今。相手の様子うかがえど、やはりアウラを元から知っていた様子はない。

恐らく知つたのはアニ・レオンハートが彼女の関与を語った時か、エレンが巨人化したトロストの件の後の可能性が高い。

“敵”ではないエレン・イエーガーの力が、かつて家族を殺した男から受け継がれたものであることは、想像がついただろう。そして調べれば、それは一発でわかってしまう。

ゆえにエレンの兵法会議の一件は、少年の運命の分かれ道でもあった。

だが今はエレンが人間でありながら“巨人を操った”ということ、王政がザワザワしている。

その話は交代で見張りになるトラウテから聞いた。情報収集のため、なるべく友好関係を築こうとアウラは動いている。完全に繕われたやさしき人間像で。

しかし中々向こうの心に入り込むことができない。時間をかけようやく手に入れたのが「王政ザワザワ」だ。さすが中央第一憲兵団の人間。

というかアウラがあまりにもずっと話しかけるため、トラウテは仕方なく少しだけ情

報を出した、と言った方がよいか。無論アウラの情報収集の意図を理解した上で。

ただ「王政ザワザワ」だけでも、十分な情報だった。

通常の知性巨人の能力とは一線を画す力。必然的にそれが、失われた「始祖」の力であると考えられる。

となると、エレンは兵法会議の時以上に、狙われている可能性が高い。仮にエレンの受け渡し命令が出されるなら、エルヴィンは黙ってしまい。アニを捕獲した時も命綱なしのギリギリな賭けで、調査兵団は首の皮一枚つながった。

無茶な作戦でありながらも、それ以上の成果を残す。団長の存在は上にとってもかなり邪魔だ。

最悪面倒なエルヴィンやその他兵士が動かないよう、調査兵団そのものが凍結させられる可能性もある。そうなってはエレンは簡単に王政にわたってしまう。

(王政……か)

ひとまず「アウラ」の存在が調べられなかったのは、理由がある。心当たりがあるのは一人の少女。

当時はちょうどサシャ・ブラウスとその仲間たちの記憶改ざんの一件があつたので、彼女の知らない裏でユミルが動いたのだらうなど、アウラは結論づけた。

今もずっと始祖の少女の目的が何なのかはわからないままだが、エレンを助けたことにも必ず意味がある。始祖の疑いを少年にかけさせたのも、ロッド・レイスを生かしたことを踏まえ、何か理由があるのだ。

(君は何を成したいの……ユミル)

——わからない。

しかしアウラは少女の成したいことであれば、自身も手伝いたいと思う。それこそ自身を捨てゴマにしていい。

もちろん優先事項はジークだ。

ただ「この世で二番目に誰が好きか？」と問われれば、彼女は迷いなく「ユミル」と答える。

理由は必要ない。少女がアウラを好いてくれているのだ。それ以上の理由など必要なものか。

「君の父親は、有名な「イエーガー」医師であつたそうだね」

ロツドの言葉に、彼女は小さく頷いた。

自身にはないその青い瞳に、強い嫉妬を覚えながら。

地上は血の海で、空はいつだって青い。

アウラは知っている。知っていた。その空が、掴めないほど遠くにあることも。

私たちのパラノイア「上」

私アウラちゃん、今モブおじ体型の男と意味深なこと（話し合い）をしているの。

突如この美女の前に現れたのはロッド・レイス卿。この半径数百キロの世界の真の王である。

やはりと言うべきか、私の名前についてユミルたそに記憶改ざんされてしまったらしい男は、お父さま目的で私と話し合いにきた。

レイス卿はエセ忠犬男に視線を向けると、外へ出るよう促す。それに「へいへい、わかりましたよ」と、いかにも昔はヤンチャでした、な雰囲気を漂わせて男は出て行った。閉まった扉を、私はじっと見つめる。

それから卿は私に向き直り、話を進めた。

「五年前——ウォール・マリアの陥落があつたあの日、君の父親は私の家族を殺した」
「……………え？」

何々？グリシャ・イエーガーがユミルちゃんの指示で、父親以外殺した事件があったんですって？（しらばっくれ）

その事件は後にどうなったのか調べたこともあったが、表面上は地方貴族の強盗事件として処理されていた。教会に家族が集まっていた際に強盗犯が彼らを襲い、父親以外は殺されてしまった挙句、教会が燃やされた。

王政にとつては「始祖」がなくなつたわけですから、相当な騒ぎになつたでしょう。：いや、少し違うか？

なにゼロツド・レイスは未だ「貴族」の地位にいる。始祖を失つた一件があれば、その追及を受けているはず。それこそ貴族の地位を剥奪されかねない。

ならばこの男が私に接触してきたのは、失つた始祖を取り戻すためか？

だが始祖を取り戻すなら、エレン・イエーガーを捕まえた方が早い。私を弟を誘き寄せるエサにする可能性もありますけれど。

そうになると、私への接触はお父さまの行いをどれだけ知っているのか。また、グリシャ・イエーガーが何者なのかなど、「外」の知識をどれだけ有しているか確かめる節もあるのか。

少なくともお父さまはこの男にとつて、家族の仇。良い印象は持たれていないだろ

う。

「君がどこまで知っているか、私は知らない。その上で話を進めていくことになるが、構わないね？」

「…わかりました」

「無論ここで私が話した情報は、他言しないと約束してくれ。でなければ君の命は確実になくなる」

確かに、か。まるで話さなくとも、私が死んでしまうような言い方をするな、この男。しかし表ツラはツバを飲み込み、小さく頷くアウラちゃんです。

「……不躰ながら、わたしがこれからする話も他言無用にしていただけないでしょうか。王政府も事を荒立てたくないのと同じでしょうから」

「わかった、善処しよう」

できる限り私はこの男から情報を聞き出さねばならない。壁内の状況や彼の目的、それに自分の多くは知らぬ「始祖」関連のことなども。

お母さままでさえ知り得なかった情報を、持っている可能性は高い。代々能力を受け継いできた一族ですから。

私の情報は話さないだろう。正しくは、話せない。

それでも多少漏れてしまうのは仕方ない。

私が話すことは直結して、壁外の情報につながる。それを無闇に漏洩させることはできない。

あくまで私が同じフリッツの血を引いている事実は奥の手。話しても物的証拠がない以上、信じてもらえないだろうが。

「では話を戻そうか」

それからレイス卿は、五年前のことについて語り出す。

私は一部始終を見ているので、説明を受けても大体は知っている内容だ。殺された五名の子供の名前と年齢も教えてくださいましたが、その部分はどうでもよい。私に同情は効きません。

「君の父親は巨人化したフリーダの『ある力』を狙っていた。それは今、君の弟エレン・イエーガーが有している」

フリーダ・レイスの巨人体の首をもぎ取り投げ捨てた男は、次に四人の子供と卿の妻を殺した。

その間命からがらでロッドは逃げ、グリシャが破壊した教会から炎が燃え移る様を見

た。

この続きを彼は知らないが、お父さまはその後うなじから這い出てきたフリーダを踏み潰している。血が繋がっている以上、彼女には多少私との類似点があった。娘に似た女性を殺したお父さまの気持ちを想像すると……いけませんよだれが出そう。

輝きそう（意味深）になつていたところ、どうにか思考を戻す。

「どうやらレイス卿はお父さまがフリーダを物理的に平らにした様子を見ていないため、娘が食われた、と認識しているらしい。」

確かにエレンくんが始祖の能力の一端を見せたら、斯様な思考回路に至りますね。全ては我々が先祖のお導きなんですけど。」

「君はどこまで、父親の計画を知っていたのかね？またあの男が、何者であるのかを」

「……父は人里離れた場所にも訪問して診療を行うやさしい方だった。でもそれ以上に、お偉い方の診察に行くことが多かったのを覚えています」

「当時を振り返れば、それは『情報収集』のためだったのだろう、と私は白々しく語る。」

「卿、貴方にはこの世界——壁の内側が、どのように映っていらつしやいますか？」

「神が根を下ろす、理想郷だ」

「理想郷ですか。わたしにはカゴの中に囚われた、ちつぽけな世界にしか見えない。あるいは周りに自身を狩らんとする捕食者がいるにもかかわらず、*“無知”*を以って生きている哀れな被食者だと」

「……興味深い、とは言えない答えだな」

「ふふ……もう少し射た話をするならば、確かにここは「楽園」です。しかし悠久のものではない」

——わたしはしががない、「楽園」に送られた人間ですよ。

レイス卿は私やお父さまが何者なのか、これでわかってくれたようだ。

王政に関わる者の多くは、記憶の改ざんを受けない人間たちが関わっている。*“外”*の秘密を漏らさぬ代わりに、ある程度の地位が約束されているのだ。

ただし中にはミカサちゃんの父親や母親のような、少数一族でも迫害を受けている者たちがいる。彼女の父方のアツカーマン家は詳しく知りませんが、母方の東洋の一族は恐らく位置や人種の見た目的に、ヒイズル国に近い出身でしょう。

「まああくまで父から聞いた話です。当時わたしは四つにも満たない年齢でしたので、

ほとんど記憶にはありません」

「君は……いや、グリシャ・イエーガーは何をして、楽園へ送られた？」

「父はユミルの民として、誇りを取り戻そうとしたのです。復権派として無き帝国の復活を願った」

「……………」

「しかし企みは明るみに出て、流罪になった。ヒトとしての形を失う方法で」

幼女時代の私は詳しい事情も知らず、両親について行つて地獄の目に遭つたことにします。ほぼ事実を交え話しているので、少しの嘘はわからない。

しかし母が巨人になりアウラちゃんが殺される間際、父に力を託した敵のスパイが父と私を助けた。

その男は寿命の関係で、父に力と、帝国の復権を願つた——と。

この時母親も助けたらよかつたじやろ？とのガバが生まれますので、レイス卿が子供を殺されたことを踏まえ、「わたしは温情をかけられ助かつたのでしよう……」と語る。もちろん母親の胃袋に収まつたことは語りません。

「あの男は娘を救つてもらいながら、私の子供たちを殺したというのか……!!」

卿が顔を歪め、憎悪を露わにしました。いったい誰ですか、大のオトナを曇らせてや

ろうと、意図して彼の子供の話を想起させたやつは。

ただあまり憎しみを狩り立たせすぎると、犯人の娘である私が絞め殺されかねないので程々にしましょう。

「父の計画には協力してはいません。わたしが父の秘密を知ったのも、訓練兵団に入る前でしたから。幼い頃から母が巨人に変わる悪夢を見ることがあったのです。それが真実だと知った時——つまり人間が巨人になると知った時、「夢だったらどんなにかつただろう」と思った。皮肉なものですね」

これに加えて私が調査兵団に入ったことに話を移す。大切なのは憲兵ではなく、調査兵団に入った点です。

父に協力するなら、王政に近づける憲兵を選ぶ。しかし私は最もリスクな兵団に自ら志願したことを踏まえ、父への関与を薄めることができよう。

私が調査兵団に入った理由は、望郷におはす兄にもう一度だけでも会いたいがため。少しでも近づきたいと、壁外調査に出ている。

「兄のことはよく覚えています。とても、とてもやさしい兄だった。「私」の大好きな兄」「君の兄は共に送られなかったのだね」

「父を……いえ、両親を密告したのが兄ですから」

青い瞳を丸くしたレイス卿。

親を売った云々……と口を挟んでくる前に、私や祖父母を守るために密告せざるを得なかった旨を話す。お兄さまを侮辱したら、拘束を外してこの男が死ぬまで殴るのをやめない。

「当時のわたしは兄の心など知りませんでした。復権を望んだ両親の気持ちも。ただ『無知』で、『無力』で、愚かで……。だからこそわたしは力が欲しかった。自由が欲しかった。調査兵団はわたしにとって相応しい場だったのですよ」

「元人間である巨人を殺すことに、抵抗はなかったのかい？」

「百パーセント無いとは言えません。しかし所詮赤の他人。例えば知り合いの知り合いが死んでも心に響くことはないように、わたしの心も都合よくできている。わたしだけじゃなくて、これは人間大多数に当てはまるでしょう」

「……そうか。グリシャ・イエーガーは娘や息子を巻き込んだことに、後悔はしていたのか？」

「していたからこそ、わたしを関わらせなかったのだと思っています」

どうあがいてもロッド・レイスにとってお父さまは、自分の家族を殺した『悪魔』にしかかなり得ないようだ。話を追うごとに纏う闇が増している。

「…父が、貴方の家族を殺したのは事実なのでしよう。しかし話し合いもなしに暴力に出る人ではありません。父は貴方たちに対話を求めはしなかったのですか？父が探していた無き帝国を復活させることができるほどの「力」とは、いったい何なのですか？」

「詳しくは教える気はない。少なくともこの楽園の象徴たる壁を、一瞬で作り上げることができる圧倒的な御業であることには間違いない。君こそ巨人の力についてはどこまで知っていた？」

「人のカラダでの異常再生能力や、寿命のことは知っていました。再生については父が昔ケガをした様子を見て。後者は父本人から教えられて」

“十三年” ——それが能力を継承した人間の寿命。

ゆえにレイス家は多くの人間が、代わる代わる継いでいったのだろう。

この問題はいまだ残っている。ユミルちゃんに幾度と頼みましたが、解決策が出ていない。

ジークお兄さまが死ぬ代わりに全人類が減んでいいから、お兄さまだけは死なせるわけにはいかない。お兄さまがいらない世界などむしろ減んで当然だ、お兄さまが存在しないのだから。

「……確かに君の父は、巨人の力を使うようフリーダに求めた。だが私たちは戦いを望まない」

「初代レイス王が、楽園を築いて逃げたようにか」

「レイス王のことを知っているのか。ならば“記憶操作”についても、知っているのだろうか」

少し言葉が荒くなってしまった私に、レイス卿は視線を細くした。

「正確に言えば、できないのだ。私や弟もかつては巨人を駆逐し、人類の解放を望んだ。だが初代レイス王の思想の呪縛がある」

「思想の呪縛？」

「人類が巨人に支配される世界を望み、初代王はそれこそが真の平和だと信じた。『不戦の契り』と呼ばれるものだ。それについては知らなかったようだね」

「……………」

「ユミル・フリッツから始まり、レイス王から受け継がれてきた神の力。その力は王家の人間、即ちレイス家の血を継ぐ者でなければ真価を発揮することはできない」

「え」

「君の父親はムダなことしたんだ。フリーダから力を奪い息子へ託そうと、使うことはできない。なぜエレン・イエーガーが一瞬でも使えたのかは不明だが」

レイス卿はエレンから始祖の力を取り戻そうとしている。弟にあるのは「進撃」だけなのでやめてもらっていいですか？しかし、私が言えるはずもなく。

「力は貴方が継承するのですね」

「いや、私は継承しない。…おや、知らなかったのか？」

「私には妻との子供の他にもう一人、妻の間にできた子供がいる。その子に能力は継がせる」

——その子供の名は、「ヒストリア・レイス」

妾の子ということもあり一悶着あったのち、その子供は名を「クリスタ・レンズ」に変えたという。不思議と私によく似ていると卿は語って……え？

「え？」

「何だ、人の顔を凝視して」

え？あの天使がこの男から——いえ、お父上様から作られたっていうのか？

確かに瞳の色や大きさは似ている。しかし他に似ている要素が…そう言えば身長も低さも似ている。私より一回り近く低いですものこのお父上様。私前にあなたの娘さ

んを嫁にしようと思っただんですけどダメですかね？

というか、血のつながりがあったのか。私とクリスタ・レンズは。

アウラちゃんも性質上血のつながりがあると即墮ちしがちなので、これで初対面の時、天使に恋してしまった理由がわかった。いや恋というより、「血への執着」といった方が正しいのかもしれないですが。

お兄さまと近い血。ドキドキしてしまいます。きっと私はお兄さまの血を飲んだら、廃人化するでしょう。

「レイス卿は何故ご自身で力を継承されないのでしょうか」

「私は神がこの世に降臨する様を、見届けなければならぬ。そのために祈りを捧げる役目があるのだ」

「そのための教会ですか」

それから少し話をしたが、向こうはこれ以上得られるものはないと判断したのか立ち上がる。

向こうしか知り得ぬはずの外の世界——マーレのことや人間が巨人化するなどの情報を交えて話したので、全てとはいかぬものの、ある程度は信頼のおける情報だと判断されているでしょう。

「一応お止めしますが、弟を殺さないでいただけませんか？」

「それは無理な話だ。私は奪われたものを取り返そうとしているだけに過ぎない。君と会うことも、もうないだろう」

「…そうですか」

「これで私は失礼するよ」

そう言い扉を開けたレイス卿。しかしかすかに肩を跳ねさせ、視線を横に向けたまま固まる。卿の恰幅の良さで扉の向こうがうかがえないが、少しテンガロンハットの先が見えています。

「……私は外に出るよう命令したはずだが、ケニー」

「ああ？しつかり待ってただろ、扉の外だよ」

「ケニー…!!」

「そう怒んなって、そのの嬢ちゃんはお断ならねエと部下から聞いていた。拘束されてはいても万が一の時があった」

「いくら兵士と言つても、片足の無い、それも女性に遅れは——」

何ということでしょう。レイス卿が驚きの表情を浮かべているではありませんか。

私の身体はベッドの上に仰向けの体勢で、まっすぐに伸ばした状態。その上で身体を

一周するように、足から首の下あたりまで複数の縄で分けて拘束された。ベッドには直接括りつけられてはいない。しかしかなりキツく縛られているので、簡単に抜け出すことはできない。

ただあらかじめ手を拳骨にしておき、開いた時に少しだけ手首周りに余裕ができるようにした。布団をかけられていたため、卿の視線が外れている時にコソコソ取つていた。

「そのピースしてる可愛いおててをへし折られたくなきや止めろ」

狂犬が腰のホルスターから銃を取り出します。私は怖がって布団の中に手を戻しました。

「危害を加えるつもりはありませんでしたよ。ただ子供の頃身体を拘束されている時期があり、あまり良い思い出がなかったもので、つい」

「どうするよレイス卿、ドタマぶち抜く準備はできてるぜ。ついでに空いた穴にシヤレた花でも飾つてな」

「…いや、いい。お前はそのまま次の任務に当たつてくれ」

それから小声で何か話し合い、天使のお父上は帰っていった。彼もまた私と血のつながりがあるのにも関わらず、滾らないのは彼が家族よりも、自分を優先しているからだろう。

自身ではなく娘に継がせる男は、お父さまの強襲の時にも誰よりも先に、逃げたのだから。

それも殺される子供の様子を、見ながら。

自分本位な悲劇役者を、私が好くことはない。本当の悲劇役者は自分も他人も不幸にして生きる。そんな人間こそ残酷な舞台の上で、光り輝くのだ。

私たちのパラノイア 「下」

私アウラ・イエーガー。

レイス卿が部屋を後にして、今長身瘦躯のテンガロンハットおじさんといっしょにいるの。

「吐いてない情報もあるだろうから、後でじっくり吐かせろだよ。怖エ王サマだ」
「…全部声に出てますよ？」

さつき小声で話していた内容をこの男暴露したぞ。しかもうまく卿が隠していた王の単語を出した。誰ですか、この狂犬を忠犬と思い込んだ人は。明らかに卿の「外へ行け」の意味を理解しながら、扉の前にいましたし。

「嬢ちゃんよ、俺の気配に気づいてただる。わざとロッドあの野郎に伝えなかつたな」

「護衛をしていると思っただけですよ、忠犬のように」
「だあれがご主人サマにしつぽ振る犬ツコロだつて？」

これみよがしに銃がこめかみに当てられた。パワハラで訴えます。

「おじさまの目的が何かはわかりませんが、目がギラギラし過ぎですよ」

「おじさま言うな、俺はケニー・アッカーマン。肩書きとしては、中央第一憲兵団「対人制圧部隊」の隊長だ」

「——アッカーマン？」

「隊長の方じゃなくてそつちに食いつくのかよ」

「いえ、その、弟の暫定婚約者な少女も「アッカーマン」というので」

「……ああ、確か分家のアッカーマンのガキが調査兵団に入ったって聞いたな。つーか暫定婚約者って何だ」

「両片想いなんですよ。…あ、ミカサちゃんが弟と結婚したら、間接的に親戚になりますねわたしたち」

「おしやべりがすぎたのか、冷たい銃口が肌に食い込んできたので、談笑タイムは終わりです。」

銃がなくともこの男の雰囲気だと、恐らくミカサちゃんでも時間を要さず制圧されるだろう。それほどまでに獰猛な、凛々しいケモノの雰囲気を感じる。

体感的に人間の赤ちゃんが、冬ごもりに失敗した2メートルを優に超える、飢えたオス熊に遭遇してしまった時のような圧だ。

つまり生きた心地がしません。渴いた喉を潤すべく、無性に水が飲みたい。

「ハア…：嫌になつちまうねえ」

ケニーは銃をしまい、帽子を目深にかぶつて壁に重心をかける。そのままズルズルと長身の身体が折り畳まれた。

「やっぱり何か悪だくみをされていたんですね」

「悪だくみじゃねえ。俺にとつては真剣な夢だ。ロッドが敵と内通していた人間と会うと聞いて、怪しいと思つちやいたが…：俺がエレンを食つても、真の王になれないときた。こりゃあ傑作だな」

「それが、あなたの夢ですか」

「そうさ、このクソみてえな世界をひっくり返してやろうと思つていたんだが、上手くいかねえ。オマケに世界は俺が思つてる以上にデカかった」

「…：そもそも、あなたが巨人になれるかも怪しいですよ」

「あ？：どういう意味だそりゃ」

「アツカーマン家が迫害を受けていたのは、ミカサちゃ…：ミカサ・アツカーマンから聞いています。壁内の人類は記憶操作を受けましたが、一部例外もいる。それが少数一族。血のつながりがない者たち。王政を構成する多くはその少数一族の人間である反面、何

かしら理由があつて迫害を受けている一族もいた。それと照らし合わせてアツカーマン家が迫害を受けていた事実を考えると、やはりあなたが巨人になれる可能性は薄い」

「……………俺は昔「記憶をのぞけない」と言われたんだが」

「えつと…誰にですか？」

「フリーダの前に力を継承していた男。ロッドの弟だ」

「ああ、卿がおつしやつていた方ですか」

名は「ウーリ・レイス」という人物だったらしい。ケニーはその人物の暗殺に失敗し、返り討ちにあつたそうだ。一時は死を覚悟したものの、ウーリからアツカーマン家の迫害の歴史の詫びを受け、二人はズツ友になった。

ケニー曰く、下賤にこうべを垂れたウーリの姿が衝撃的だった——と。

少なくとも、ロッド兄は下の者と上の者を線引きしている。

ウーリの傘下に降り、その男亡き後もレイス家のしもべであるのは忠実だ。しかしかつて王政にねらわれ、憲兵を数えきれないほど殺した狂犬。いつ手を噛まれるか油断ならない。

「ロッドの野郎に付く理由もなくなったしなあ…どうすつかねえ」

「あの、アツカーマンさん、今外はどうなっているのでしょうか？……………弟はまだ、拉致などはされてませんよね？」

「さてな。それより嬢ちゃんはこれから待つてる楽しいコトの、心の準備でもしときな」
「……………」

睨んだものの、完全なる格下扱いで意にも介されない。せめてもの抵抗で水を要求した。怪訝な表情をされましたが、今の私は拘束を解けても歩けません。松葉杖は凶器になり得るので、使用を許されておらず。

いつも手洗いに行く時に、女兵士に姫だっこプレイを要求される私の羞恥を誰か察してくれ。お兄さまに介護されたい。

ケニーおじちゃんは「やれやれだぜ」といった様子で、離れた卓上にあつた吸飲みを取ってくれた。だがしかし、持って来られたそれは、まるで好きなあの子にイタズラする男子のように頭上高く持ち上げられる。

「俺は今、衝撃的なことを知りすぎて頭が混乱していてよ」

「…はい？」

「まあ軽い冗談だと思って聞け」

—— お前、ウーリの隠し子とかじゃねえよな？

思わず「は？」と言ってしまった。正真正銘私はグリシャ・イエーガーとダイナ・フ

リッツの娘だ。これ以上うちの家庭事情をややこしくされたら困る。

「だから冗談だと思つて聞け、つて言つただろ。だが似てんだよ、本当に。ロッドの野郎はヒストリア似と言つたが、それよりもウーリに似ている。髪を切つたら特にな」

「……疲れているんですか?」

「そうかもな。どうかしちまつてんだ」

ケニーおじちゃんはこちらの拘束を解き、身体を起こした私の頭の上に吸飲みを置いた。どうしてイジワルするんですか? (静かな怒り)

私はお母さま似だ。ダイナ・フリッツとウーリ・レイスが似ているならば、必然と私との類似点も多くなるだろう。ウーリという方の顔は存じ上げないんですけどね。

「髪を切つたら」の部分を取り上げると、ウーリが私より短髪であったことが察せる。レイス卿が弟より娘の方に似ていると感じたのは、私とクリスタ——ヒストリアちゃんとの髪の長さがほぼ同じだからでしょう。

「ねえアツカーマンさん、レイス家に付く義理がなくなったのなら、調査兵団側に寝返りませんか?」

「……ア?」

「無論対人制圧部隊ごと。王政がエレンの奪取を行うなら、必然と調査兵団側との対立が起こります。となると駐屯兵団はともかく、王政側の憲兵団と調査兵団の戦闘は免れなくなる。……いえ、エルヴィン・スミスのことだ。駐屯兵団を味方側に付けてしまおうでしょう」

「ほう、で？」

ニツコリと笑ったケニーおじちゃん。

ああ、身体が震える。頭の上の吸飲みから水の音がひっきりなしに聞こえた。ついでに心臓の音も。

狂犬の目が細まり、突き刺さる殺気。心はまだしも身体が本能的に命の危機を察し、誤作動を起こし始めた。ケニーは吸飲みを取って、口をつける部分を私の首に食い込ませる。

アウラちゃんでも頑張るのよ、弟の生存フラグを立てるために。

そしてその後、拷問を受けた姉の悲惨な姿を見せて、傷つくエレンくんの姿が見たいです。

「外の世界を知ったなら、壁内に未来がないことはわかるはずだ。狂犬に見えるが、あなたは冷静な人間だ。己の野心が潰えた今も、動揺を上手く抑え込んでいる」

「だからって、みんなで仲良しこよししろってか？お断りだね。俺はつまらねエことは嫌いだ。今回の件で『個人的な楽しみ』もあるんでね。それにまだ俺が絶対に巨人化できないかどうか、わからねえだろ」

「…対人制圧部隊を甘く見ているわけじゃない。ですが、私たちには規格外の団長様がいる。弟のことになったら怖いアツカーマンも。それに、人類最強の男がいますよ」

「ハハア、あのチビが『人類最強』ね」

「？」

「イイこと教えてやろうか。幼少期のアイツを拾って処世術を教えてやったのが、この俺だ」

「……!?!」

なるほど。こんな狂犬に生き方レクチャーをされたから、私のような可愛い美女ちゃんでも平気で殴ろうとする兵士長が爆誕してしまったわけですね。

160cmの男と戦ったことはないの、舐めプしているこの男と兵士長のどちらが強いかわからない。

だが巨人相手に戦うリヴァイと対人相手に戦うケニーでは、軍配は後者に上がりそう
だ。

「敵に協力した挙句、王政を裏切る教唆か。コイツア今俺が処刑しなくちゃいけないか

もな」

「仲良しこよしを我慢すれば、もっと強い敵が待っていると思いますけどね」

「俺は別に戦闘狂ってわけじゃない。人生を楽しむことが、血を見ることばかりじゃねエ」

「なら理想を失ったあなたは、何を目的に生きるのですか？その瞳の奥は、乾いてきているように見える」

「失ったのなら、新しく見つけるしかないだろ。俺も何度も失ってきたからな」

「前向きですね、すごく」

「ツハ、気に入らねなあ、嬢ちゃん。お前は他人のことを探るばかりで、自分の内を見せようとしない。ロッドはともかく、俺の目が誤魔化せると思うなよ」

吸飲みが皮膚を破り、透明な先を伝って、中の水に血が混じっていく。

どうやらレイス卿と話していた内容に多少嘘が混じっているのを、気づいているらしい。それも、ケモノのような勘で。

「敵に協力したのも、弟のためじゃねエな」

「鋭いですね。兄に会わせてくれるからと、協力を持ちかけられました」

「家族を売った兄——」

「お兄さまをバカにするなッ!!!」

喉に吸飲みがさらに深く刺さることも構わず、男に掴みかかろうとした。しかし呆気なく体重を乗せられ、片足で左手、片手で右腕を拘束された。ついでに首を掴まれる。取手から手が離れた吸飲みは、刺さったままベッドに転がり、赤い中身を溢した。このクソ野郎ツ、長身瘦躯のクセに重——?!……し、しんじやう。

「おーおー、お兄ちゃん大好きっ子か」

「……ッ！……！！」

「兵士のクセして紙みてえな身体だな。ちゃんとメシ食ってんのか？」

「~~~~!!」

蹴つ飛ばされた布団からのぞいていた私の上半身。めくれたシャツをさらに捲られ、薄い腹筋を見られた。露骨なセクハラだった。

お兄さまを貶したヤツは殺す。殺す。

「嬢ちゃんが人類を裏切つてまで、行動を起こすのは兄貴のためか」

「……あいたい、から。それが理由で何が悪い」

「仲間を、友人を、弟を捨ててまでか？何故そこまで執心する」

「好きだから。愛してるから。大好きだから」

「……………」

眉間を寄せ、深い皺を作ったケニー。

ジーク教を本気で作りたくらいにはイカレブラコン野郎であることは自負しているので、珍妙な生き物との遭遇に未知を感じているのかもしれない。

「理由はそれだけか？ 兄貴に会って、幸せになりたいのか？」

「……………ころされ、たい。お兄さまの、すべてになりたい」

「……………随分と気持ち悪い野郎だな」

「おまえにはわからない。「私」という生き物を、理解できない」

「わからねえし、理解したくもねえよ」

「ころしてやる……………おまえのくびを王政のクソどもにおくりつけてやる」

最悪だ。お兄さまに殺され損ねてから全てが。いつそのこと、何も考えず拷問を受けるのを待てばよかった。

私自身、自分が生きている理由がよくわからない。

でも、でも生きてしまったから、浅ましくお兄さまに会うことを望んでしまう。

お兄さまと話したい、笑いかけてもらいたい、悲しんでもらいたい、苦しんでもらいたい、愛してもらいたい、殺されたい、穢したい。

「かわいそうな人間だな、嬢ちゃんは」

ケニー・アツカーマンの瞳に、憐れみの色はなかった。どこか遠くを見つめている。遠いどこか。まるで、私の愛する空のように。

溢れていた涙は引っ込んで、凍った水の中に脳みそでも沈めたように、頭の中が冷えていく。

「私」は同情される人間ではない。この世界で「かわいそう」と表現していいのは、一人だけだ」

「お前の兄貴か？」

「違う。確かにお兄さまは、かわいそうだけど。かわいそうと思っていいいのは私だけ」
「……………」

オエ、という顔をされた。本当絶対殺しますからね。せいぜい夜道には気をつけるんだな（フラグ）

「かわいいそう」な、一人の奴隷の少女」

長い夢を見た。その夢のほとんどは記憶の底に残らなかつたけれど、一人の少女が暗い水の底で『悪魔』と出会い、死ぬまでのお話。それだけはしっかりと覚えてる。

「愛」に翻弄された彼女の人生。

私はそんな少女が、愛おしい。抱きしめて、誘拐したい。

願わくば救ってあげたい。

いつの間にか私の口角は上がっていた。首から男の手が離れ、身体にかかっていた重みもなくなる。

ケニー・アツカーマンはなぜか、呆けたツラを晒していた。

「お前、目が」

「目？」

「……気づいて、ねえのか？」

指摘され窓に視線を向けたが、いつもの魚の濁ったようなお目々があるだけだ。

ケニーは口を何度も開閉させ、何か言おうとするが、言葉が出てこない様子。

「…………お前、フリーダを食べたのか？」

「フリーダ・レイスを食べたのはグリシャ・イエーガーなのでしょう？レイス卿が話していたじゃないですか」

「じゃあ何故、目が変わった？さっきの目は、王である証だったぞ」

「王である証？それは今ユミ——あつ」

ベッドの隅に逃げましたが、ケニーおじちゃんに手も足も出ないのは、先ほどの調教（意訳）で十分わからせられた。

微かに口角を上げ、しかし額から汗を流す怖い顔が近づく。銃を下ろしてください、あなたの目の前にいる美女は無抵抗です。

しらばっくれてもいいですか？…無理ですよ。

話さないと、「死orテッド」の選択を迫るそう。どの道頭に風穴が開くじゃねえか。

「王家の力は、始祖ユミル・フリッツに戻っている」

「本当か？確証は？そのユミル・フリッツってのは誰だ？仮に本当なら何故お前がそれを知っている」

「ユ、ユミルちゃんはレイス家の祖先に当たる人です。知っているのは、本人に教えても

らったとしか……」

「ア、ア？」

「うう、お、教えるって言ったって、生きている人じゃないし……」

「……………」

「…銃で頭をグリグリするのは、やめてもらっていいですか？ 彼女は砂と光の柱の世界にいて、現実に姿を現すことはできるけど、普通は見えなくて……」

「……………」

ユミルちゃん、ユミルちゃん出てきてくれませんか？ 悪いおじさんに私今、乱暴されています。このままで、私……。

——と、思ったら、隣で透けたユミルちゃんが寝ていた。いえ、正確には私の右隣で両手を組んで、仰向けで寝ている。目だけは開いてこちらを見えています。

「今私の隣で寝転がって、くつろいでいます」

「見えねえよ」

「心の汚い人には見えないです」

「じゃあ嬢ちゃんも見えないはずだよなア？」

「私の瞳をよく見てください。澄み渡っているじゃないですか」

「濁りきつてるな」

ハア、と深く息を吐いて、ケニーは銃を下ろした。

自身の瞳で見たことしか信じられないらしい。「始祖」は私ではなく、ユミルちゃんだというのに。ケニーおじちゃんがエレンくんの代わりに、私を誘拐する気になっているじゃないか。

何故だユミルちゃん？今微かに微笑んでいます、それは愉悦の笑みですか？かわいいですね。

「よく考えてください、エレン・イエーガーには巨人を操った事実があるじゃないですか」

「嬢ちゃんが何かしら力を使ったんだろ。…いや待て、王の力はレイス家の人間しか使えないはずだ」

「だから、ユミルちゃんが使ったんですよ」

「……………そのユミルってのの目的は何だ」

「ユミルちゃんの目的は——」

横を見れば、視界に入ったのは鼻ちようちん。安らかな表情で少女は眠っている。どうして君はそんなに…ゴースティングマイウエイなの…？

「…話したくないそうです」

「ダンマリってか」

「ダンマリです…」

何故か、ドツと疲れた。瞳云々辺りから全身がダルい。まさか霊的なものじゃないでしょうに、ユミルちゃんは。

「……嬢ちゃんが望むのは、対人制圧部隊と調査兵団との結託か」

「…はい」

「お前の話を信じるなら、エレン・イエーガーが王の力を持つてねエってことだが、その場合父親の件はどうなる」

「グリシャ・イエーガーは……フリーダ・レイスを食べていません。殺したのです」

「それもユミルに教えてもらったってか」

「……はい」

ケニーは、私と彼女の関係を問うた。

何故私にユミル・フリッツが視えるのか。まるで私が特別な人間ではないか、と。

もう自分の内心を暴きすぎた。それこそ情報の漏洩を恐れこの人間を殺さなければ、

後々面倒ごとが舞い込みそうで。

ユミルちゃんに一度視線を向けた。：薄目を開けてこちらを見ている。判断は私に任せる、ということだろうか。

「……誰にも、口外はしないでください」

「約束はできねえな」

「ケニー・アッカーマン。私はあなたを、信頼します。」

「アウラ・フリッツ」——それが、私のもう一つの名です」

楽園に渡らず、孤独に闘うことを選んだ「フリッツ家」の末裔。ダイナ・フリッツの娘が、私。

別に信じなくていい。：いや、信じてもらえないだろう。目の前の女が王家の血を引くなど、あまりにも都合が良すぎる。

「だから、似てんのか」

長い間の後に、そう呟いたケニー。

逸らしていた視線を戻せば、驚くほどまっすぐに私を見ていた。キレイで、哀しい瞳。「…わかったよ、協力してやる。ただしこつちも中央憲兵の目があるんでな。仲間の被害は出したくねエ。そもそもすでに王政はエレンとヒストリアの奪取に動き出している。今動いても遅い状況だぞ」

憲兵団の指揮系統は複雑であり、殊に第一憲兵団は議会——とりわけ、真の王家直属の秘密警察としての役割を果たす。

そして第一憲兵の中でもエリートを集めたのが、「対人立体機動部隊（対人制圧部隊とも言う）」。

ケニー・アツカーマンが議会メンバーとなり、中央第一憲兵に新設された部隊らしい。設立の名目上は、力を有する調査兵団が、反乱を起こした際対処する組織。

しかして実際はケニーが自身の野望を果たすために作った部隊であり、仲間はこの世界をひっくり返す彼の意思に賛同した上で従っている。

つまり、対人立体機動部隊はケニーの私兵。王政ではなく、隊長の意思によって動く。だが本来のケニー・アツカーマンの野望は実現不可能である。その点問題はないのか

聞いたが、根底は変わらないだろう、とのこと。

このまま王政と中央憲兵が動けば、調査兵団はエレンを死守するため、反逆とも取れる行動を取らざるを得なくなる。

「仮に調査兵団の団長が本当に駐屯兵団と組んだとして、起こるのはクーデターだろうな」

この世界をひっくり返すという意味は、「王政を崩す」という内容にすり替えることができる。

ケニーは面白そうじゃねエか、とニヒルに笑った。

クーデターですか…あの団長なら本当にやらかしそうで恐ろしい……。

そうなると、予想できるのは調査兵団（&駐屯兵団）の勢力と、王政&憲兵団勢力。

これが動く場合、調査兵団、王政命令で動く中央憲兵（中央第一憲兵団）にナイルが指揮する他の憲兵、そしてケニーおじちゃんの部隊という……頭がこんがらがる組織展開がなされそうだ。

懸念すべきはダリス・ザックレーの存在。全兵団のトップに立つ男が仮に王政についての場合、駐屯兵団がザックレーの意思を尊重する可能性がある。ピクシス司令の人物像をつかみ切れていないので、どうにもその動きが読みにくい。

しかしこれまで暗部に関わってきたケニー・アッカーマンの予想として、クーデターの可能性が出てきた以上、私も色々と思考を動かさなければならぬようだ。

「……では従うフリをしながら、機会をうかがってください。私はどうせ動けないでしょうから。エレンくんが助かればいいです」

「冷たいねえ、お仲間が死ぬかもしれないのに」

「アッカーマンさんは「協力する」と言った人の仲間を殺すような、血も涙もない人なんですね」

「……………イイ性格してんな、嬢ちゃん」

私の身柄については中央憲兵に「俺たちが拷問担当するぜ！」でごまかし、部下に秘密裏で匿ってもらうことになった。

またそれと、とケニーは続けた。

曰く、私に協力する代わりに、一つお願いしたいらしい。「夜のお誘いですか?」と言ったら殴られた。冗談で聞いたわけじゃないんですが。返答は「冗談じゃないなら尚更だ」と眼光鋭い一喝。ユミルちゃんがケニーおじちゃんの顔を無表情で見ている。

「血筋の秘密を墓場まで持っていく代わりに、髪を切つて欲しい」

ユミルちゃんが身体を起こした。彼女をステイさせる私の動きに、何も知らぬ男は不審な表情を浮かべるばかりである。要求が不可解………ああ。

「そんなにウーリ・レイスと私は似ているのですか？」

「娘と聞いても驚かねエくらいにはな。多分ロッドも切った姿を見たら驚くぞ」

「……あなたが王家の力を求めたのは、その男の人が関係しているのですか？」

「まあな、ないものねだりだ。上の景色がどんなもんか、知れたかったんだよ」

どこまで切るのか聞いたなら、肩上ぐらいまでだそうだ。本格的にお母さまカットじゃないか。流石に今は切りません。

「頼んだ俺が言っちゃなんだが、本当にいいのか？髪は女の命っていうだろ」

「髪なんてどうでもいいですよ。伸ばすのは周囲の評判がいいからってだけで」

「腹が黒いねえ」

「兵士長と同じこと言わないでくださいますか？」

「げっ……」

今日イチ渋い顔をしたケニーおじちゃん。口癖なのか「おいおいおい」ラツシュして

くる様がリヴアイと似ているが、身長含め表情豊かなところは似ていない。

「まあアツカーマンさんが協力してくださる代金としては、安いでしょう」

「アツカーマンさんはやめろ、最初から思ってたが背中がむず痒くなる」

「ケニーおじちゃん」

「ア？」

「ケニーさん」

「……………」

「け、ケニー」

睨まれるだけで足腰抜けちゃいそうになるとか、本格的に自分の身体が調教されつつある。私の身体はお兄さまのものなのに：兵長にあることないこと話そうと思います。

不意にユミルちゃんに視線を向けましたが、半分消えかかりながら、私に背を向けて膝を抱えている。

「切ってもアウラちゃんの美貌は変わらんで？」と念じたら、こちらに視線を少しだけ向けて消えていった。

どうやったたら彼女が気を取り直してくれるか、後でじっくり考えましょう。

ドーナツのようなこのカラダ

ヒストリア・レイスは、孤独だった。

幼い頃から小さな牧場を営む祖父母の手伝いをし、本を読んで、動物とたわむれ、夜は薄い毛布に包まり目をつむる。

レイス家の妾の子として生まれた彼女は産みの親だけでなく、祖父母や周囲の人間からも疎まれていた。時折木の後ろに隠れ彼女を見つめてくる一人の男の子がいたが、ついで話すことはなかった。

いつも友人は動物か、本の中の「クリスタ」という少女。その少女はいつも他の人々を思いやっている優しい子。ぽっかりと空いたヒストリアの心を埋めるように、笑いかけてくれる。所詮は空想の友だちでしかなかったが、不思議とよく頭を撫でられていたような気がした。

そんな彼女はある日から、「クリスタ・レンズ」として生きることになる。本の中の少女の名前を父親からもらった彼女は、地面を見つめた。

赤い水たまり。夜風に吹かれ、かすかに漂う鉄の匂い。

それは、母の死体だった。

父と母と共に生きることになるはずだったが、母はコートと帽子をかぶった大人たちに殺された。父は共に暮らすことを撤回し、少女は別人として生きねばなくなった。詳しい大人の事情はヒストリアにはわからなかった。

だが「ヒストリア」は死んだのだと、地面に染み込んだ赤黒い跡を見て感じた。

それからクリスタは訓練兵団に入り、「優しい子」を努める。笑顔も、怒りも、涙も、何もかも、薄っぺらい上辺。しかし優しい彼女は皆から好意を持たれた。まさしく荒唐した世界に舞い降りた天使のように。

ただ本当の彼女は無表情で、無感動だ。いつもどこか冷めた気持ちを抱き、終わることを望んでいた。

親からマトモな愛情を得られなかった少女。彼女はやはり一人。——否。

「なあ、お前……いいこと」しようとしてるだろ」

初めての友人。

「クリスタ」ではなく、「ヒストリア」の部分を見抜いて、自分に話しかけてくれる人間。

その一言一言がクリスタを想つての言葉だとわかるからこそ、少女は「ユミル」を特別な人間と思うようになった。

人を揶揄うのが好きで辛口なコメントが多いが、存外その多くは向けた相手の内面的確に表しており、ユミルなりの優しさがこもっている。

雪山で半ば死ぬ気で仲間を助けようとした一件や、訓練兵団を卒業し調査兵団になつてからも、何度もユミルはクリスタを引つ張り、道に迷わぬよう進ませてきた。

その温かい手に、彼女は甘んじていたのかもしれない。子供の頃から孤独だった心を埋めようと、まるで幼子が母に甘えるように。

ずっとその手は離れないと思っていた。

でも、離れた。

ウドガルド城の一件の後、ライナーとベルトルトに誘拐されたユミルを追つて、どうか許可を取りクリスタは巨大樹の森へ向かった。

そこで彼女は森の中で待ち伏せしていたユミルに攫われ、二人きりになつた場所であろうじから出てきた彼女に、「もう一度だけ会いたかった」と告げられた。

「もう一度だけって、何よユミル！あなたも一緒に……」

「いや、ダメなんだ。私は……私は、アイツらと一緒に行く」

「どうし、て？ アイツらってライナーたちと？ もしかして脅されてるの？ だったら——」
「脅されてない。これは私の意志なんだ。……ごめんな、自分勝手で」

ユミルは調査兵団の煙弾が上がったのを見た時、堪えきれなくなつたと言う。
きつとあのクリスタ^{バカ}なら、自分を追ってきているだろう、と。

「……じゃあ、私も一緒に行く」

そうクリスタが呟いた瞬間、ユミルの頓狂な声が響く。

「バカ野郎」と4、5回は言われた気がする。その顔はしかし嬉しそうで、悲しそうに歪んでいた。

だがその直後けたたましい音が聞こえ、ユミルはそちらに視線を向け目を凝らすと、血相を変え巨人体に戻り走り出した。対しクリスタも相手の意思を無視し、ユミルの巨人体にアンカーをかけ、掴まった。

それからはあつという間だ。

エルヴィン・スミスが先回りし連れてきた巨人の群れと、鎧の巨人の衝突。その間エレンの奪取には成功したが、肝心のエレンが巨人化できずピンチになるなど、状況は芳しくなく。

しかしてまるで神の御技のように、ハンネスの死を間近で見た少年の叫びに合わせ、無数の巨人がハンネスを殺した巨人に食らいかかった。

その後駆逐モードの「悪・即・斬」なヌツ殺の矛先は、ライナーたちへ向いた。

人間の姿であるにも関わらず、目を血走らせたエレンの姿に、戦士たちの肝は震え上がった。

そして森から走り現場に追いついたユミルはライナーたちの援護に向かおうとし、クリスタに止められることになる。

「待ってユミル!!あなたはライナーたちの仲間じゃないんでしょ?どうして、どうして

……っ」

『……………』

人間とは異なる黒い虹彩の中に浮かぶ白い瞳孔。その瞳はまっすぐにクリスタに向けられた。

小さく微笑み、周囲をうろついていたカラ馬に少女を乗せたユミルは、金の髪を壊れものを扱うように、優しく撫でる。

『ヒスオリア ワアシア 私は オマエアエノ お前だけの ミカタア 味方だ』

生きろ、そう続け、遠ざかっていくユミルの姿。

クリスタ——ヒストリアがどんなに伸ばしても、その手が届くことはなく。

彼女はエルヴィンの撤退命令を聞き側にきたコニーに手を引つ張られ、連れられていった。

ウドガルド城にてユミルに「胸張って生きろ」と告げられ、一度は前向きに生きようとしたヒストリア。

だが彼女のぼつかりと空いた穴を埋めていた温かな存在は目の前から消え、少女はまた寂しさに自分の身体を抱きしめることになる。

新リヴァイ班に加入した後も孤独な心が埋まることはなかった。

そして一日一日と時が過ぎていく中、エレンの硬質化の実験を行った夜起こった、ニツク司祭の殺害。その事件は翌日ヒストリア含むリヴァイ班にも伝えられた。犯人は恐らく中央憲兵だろう、と。

ニツク司祭は壁の秘密を知る手がかりとなる人物として、「ヒストリア・レイス」の名前を調査兵団に教えた。ニツク司祭の行動は王政への裏切り行為と言ってもいい。都

合の悪い人間は始末される。このことに一番責任を感じたのは、情報を聞き出そうとする中で彼と関わることの多かったハンジ・ゾエであった。

また話し合っていた最中、エルヴィンに伝達に行っていたハンジ班の「ニファ」という女兵士が、王政^中から『調査兵団の壁外調査の全面凍結』、およびエレン・イエーガー、ヒストリア・レイス二名の引き渡し命令が下ったことを話した。

さらにエルヴィンの元に、ナイル・ドーク率いる憲兵団が訪れたとのこと。幽閉とまでは行かずとも、エルヴィンが迂闊に行動できなくなることは容易に想像できる。

となると団長の指示なしで、調査兵団は動かなければいけない。

エルヴィンのみならず、エレンやヒストリアたちがいた小屋にも武装した憲兵が訪れ、リヴァイ班はトロスト区へと移動することになる。

現在王政方面へ向かうのは危険である。トロスト区ならば以前の襲撃の混乱がまだ残っており、身を隠すにはちょうど良いとされた。向かうのは、いざという時立体機動が活かせる街中。

ちなみに一部の第四班はペトラとオルオがまだ手負いで戦力にならないため、待機となる二人の代わりに、リヴァイ班と行動。対しハンジやモブリットは、エルヴィンに付いているミケ班と合流することになった。

その後変装をしたジャンとアルミンが、それぞれエレンとヒストリアの身代わりとなった。誘拐されたアルミン（ヒストリア変装）が、「ハア…ハア…」おじさんの尊い犠牲になりかけたのは余談だ。

これは敵の目を身代わりに集中させ、その間に本物をこつそりと馬車で移動させる算段である。

だがしかし、中央第一憲兵団の中でも厄介な魔の手が、彼らに襲いかかった。

作戦の状況を考えながら、建物の上でニファと下の様子をうかがっていたリヴァイ。

その時背後に感じた微かな衣擦れの音に、彼は反応した。

銃声の音が届く一瞬前に、咄嗟に煙突の後ろに隠れた兵長。

対しニファは足を撃たれ、うめきながら屋根を転がり、下に落ちる。

「……ッ！」

背後でリヴァイに向かい近づいてくる気配。

先ほどもでトロスト区に入ってから、中央憲兵にしては荒い———と言ふべきか、敵のやり方に違和感を感じていた兵長。中央憲兵が動いている上でこのような野犬を思わせる方法を取るならば、一つ、思い当たる節があった。

昔の顔馴染みの男。リヴァイにノラ犬としての生き方を教えた、ニヒルな笑みが似合う野郎。

「おおっと、いけねエ。手が滑っちまったぜ」

聞こえた声に、リヴァイは舌打ちを零した。気分では死刑法判決。しかしいくらでも地下街にいた頃、死にかけたことはある。

相手の「手が滑った」という言葉に妙な引っかけりを覚えたものの、今は悠長に考えている暇はない。

歯を剥き出しにし、喉元に食らいつく覚悟で、リヴァイはブレードを抜いた。瞬間彼のいる後ろ側の煙突にアンカーを付けた人物が、ガスを派手に噴出させながら宙を舞い、彼の正面に逆さまの状態で見られた。

「あれ、お前縮んだか?」

仲間を傷つけられ灯った怒りの炎。その火が別の導火線に引火した。恩人でもある男に歯を剥き出しにして、リヴァイは吠える。

「ケニイイイ!!」

狂犬と狂犬の、ぶつかり合いが始まった。

??????

時は過ぎ、トロスト区でリヴァイ班と一部のハンジ班が、中央第一憲兵団の「対人立体機動部隊」と戦闘に陥った日の夜。

「幸い兵士に死者は出なかったが、複数のメンバーが重軽傷を負った。調査兵団はブレードで接近戦に臨まなければならない反面、向こうは銃持ちの上、同じく立体機動を使う。対人に特化した一撃で兵士らは足や腕を撃たれ、戦闘不能にされた。」

エレンとヒストリアは守りきることができず、奪われてしまった。またその夜、憲兵団に依頼され、エレン誘拐に関わりリヴァイたちに捕まっていたリープス商会の会長が、翌日になり何者かによって殺された、と推測された。

「断定できないのは、遺体が見つからなかったからである。」

リープスはどの道依頼に失敗したため、憲兵に殺される運命にあった。ゆえにリヴァイたちの言葉を受け、寝返ることを決めた直後だった。

朝発見されたのは、デイモ・リーブスがいた馬車の横に残されていた致死量の血。中央の仕業だろう、トリヴァイ班は考えた。

さらに憲兵はこのリーブスの死を利用し、王政の引き渡し命令を回避するために調査兵団がおこなった自作自演である——とした。

協力させたリーブスを口止めとして夜にこっそりと殺害し、遺体を破棄。実行犯はエレンと共に逃亡中。この首謀者がエルヴィンであるとし、同時に調査兵団全兵士の身柄拘束が行われることになった。

???????

場所は変わり、とある一室。

「……ん？」

いつの間にか眠っていたヒストリアは、ベッドの上で身体を起こした。

視線をさまよわずと、窓の外は暗くなっており、星が出ていた。

「……エレン？ それに……」

口枷をされ、手足を縛られ床に転がっているエレン。しかし部屋にはもう一人いた。少女の眠たげな瞳が、自身と同じ色の瞳と合わさる。その人物に彼女は一度会ったことがあった。大きな手が伸び、ヒストリアの頭を優しく撫でる。温かい、手だ。

「おとう、さん？」

「そうだよ、ヒストリア」

上半身を起こした少女の身体を、彼女の父——レイス卿が抱きしめる。

ぼんやりとした頭で、彼女は夢うつつに抱きしめ返した。恰幅のいい身体は柔らかく、耳を胸元に近づければ、心臓の音が聞こえる。

「すまない、今までお前を一人にして……」

何度も謝り、レイス卿は少女の背中をあやすように叩いた。

ヒストリアの孤独の穴に、その温もりは毒なほど染み渡っていく。段々と視界が歪んでいき、少女は父の胸に顔を埋めた。

「いつもお前のことを考えていた。寂しい思いをさせた私を、どうか許しておくれ」「ゆるす……いや、ちがう。私、怒ってない。お父さんがいてくれるだけで……いい」

「……ヒストリア」

「だから、だから……」

——もう私を、一人にしないで。

そう続けようとした言葉は、上手く音にならなかった。ただ今、父に必要とされていくことは、痛いほど感じる。

ヒストリアはレイス家が真の王であることを伝えられた。

そのために彼女の力が必要なことも。

少女は手を引く父の顔を見て、呟く。掠れそうになる声を抑えて、一つ一つ音を紡いでいく。

「おとうさんは、私のことを愛してくださいますか？」

それにロッドは目を丸くし、顔を歪めた。男の瞳から水滴が溢れ、「当たり前だ」と告げる。

「子を愛さぬ親などいない。私はお前を愛しているよ」

「でも母は…私を愛してくれませんでした」

「私がお前の母親と、同じだと思ukai?」

ヒストリアは父を見つめた。大きな手が彼女の涙を拭う。

温かい父。彼女のために泣き、優しく抱きしめてくれる。いつも無反応で、触れれば拒絶反応を起こした母とは違う。

「あの女性ひとはもしかしたら、父と違う生き物だったのかもしれない」とさえ、思えた。

「これが……「愛」なんだ」

しばし窓から差す月夜に当たりながら、抱きしめ合う親子。

その様子を見、翡翠の瞳がじっと見つめていた。

赤裸々カーニバル

結晶に覆われた洞窟。地上の光が入らぬその場所は、まるで昼のように明るく輝いていた。結晶そのものが発光しているのだ。広い空洞は上と支えるようにし、同じように結晶でできあがった大きな支柱が無数に存在する。

その場所の階段を登った場所。さながら処刑台のような場所に、一人の少年が四肢と口を拘束されていた。

少年の背後には真の王家の血を継ぐ二人の親子がいる。父親は娘に手を出すよううながすと、少女は息を呑み、ゆっくりと少年の背中に触れた。

瞬間、少年と少女の身体に電流が走る。

少女が見たのは、失っていた幼き頃の記憶。小さな牧場で母から愛されず、祖父母や周囲の人間から疎まれていた彼女。そんな少女に唯一接してくれた、長い黒髪をもつ美しい女性。その女性こそ、腹違いであれど、ヒストリアを實の妹のように「愛」してくれた、フリーダ・レイスだった。

しかしすでにフリーダがこの世にいないことを告げられ、ヒストリアは呆然とする。

レイス卿は娘をなだめ、話を続ける。

「私の子供たちと妻は、ある男に殺されたのだ」

そういう男が見つめたのは、翡翠の瞳を濁らせたエレン。

「始祖」は王家の血を継ぐ者しか扱うことができず、継いだとしてもその思想は初代レイス王の「不戦の契り」によつて縛られる。来るべき時に、滅びを受け入れんとして。

対し王家ではないエルディア人では、たとえ「始祖」を得てもその力を使いこなすことはできない。

しかしこの時王家の人間がいるのならば話は変わる。ロッドは一つの方法を、受け継がれるレイス家の知識の中で知り得ていた。

例えるならエレンはリモコンで、王家の血を継ぐ人間が電池。

電池を入れれば、リモコンが使える。この場合取り扱う側に該当する人間がおらず、リモコンを操作して機械を動かすことはできない。

通常ならオフの「始祖」の力は、レイス家の人間との接触で、一時オンの状態に切り替わった。

その中エレンが見たのは、自分ではない誰かの記憶。

子供たちやロッドらしき男を守るように前に立つ、黒髪の女性。

その女性が自傷し、こちらに殴りかかってくる光景。

そして巨人化したその女性の首を、引きちぎる大きな手。

足にこびりついた子供の死体。

燃える教会らしき建物。

どこか見覚えのある長身の男が、こちらを振り返る姿。

小さな手の上にあるカギ。

そのカギを握り、驚いている幼い自分の姿と、視界の隅に映る注射器。

巨人になった自分^{オレ}。

「オレ」が近づく。

「オレ」は、口を開いて。

その瞳に映ったのは、父グリシヤの姿。

生気を無くした男は小さく呟く。

——進みなさい、エレン。

少年の瞳から、訳もわからず涙がこぼれた。

レイス家の人間を父親が殺した。ロッドがヒストリアに語っている、王の力を奪った人間が、グリシャ・イエーガー。

そしてその力を託されたのがエレン。

「進」まなければいけない、エレン・イエーガーは。

だがそれは果たして、犠牲の上に成り立ってよいものなのか。

エレンに人類の未来を託し、死んでいった兵士たち。ストヘス区の例を挙げれば、関係のない民間人も亡くなっている。死体で築かれた山の上から望む景色は、決していいものではない。鼻腔は常に鉄くさい匂いで満たされ、身体には他人の肉と血潮がこびり付く。

ベルトルトやライナー、アニに利用された姉の一件を受け、これまでどうにか堪えていた十字架の重さ。それにとうとう限界が来た。

アウラ・イエーガーは弟を守るため、敵に加担し人類への反逆行為をおこなった。現在には憲兵団に隔離され、治療が進んでいると聞く。

だが本当に無事であるとは思えない。エレンは兵法会議において、憲兵団に解剖の

ち、処分の案を出されている。非人道的な行いが姉に及んでいないと考えるのは、難しい話だった。

アウラは拷問を受け、情報を吐かされているかもしれない。もしかしたら、ニツク司祭のように殺されている可能性も。

恐ろしい考えを抱きながら、それでもエレンは堪えた。

感情を抑え、ウォール・マリア奪還を目指し硬質化実験を行う。彼がムリをしているのは、妖怪^{サシヤ}バアン泥棒^{ブラウウス}にまで伝わっていた。

(オレは、何のために進んでいるんだ？オレは……どれほどの人間を、犠牲にすれば……)

会話をするロッドとヒストリアの声が、エレンの耳からだんだん遠ざかっていくような感覚。

視界が歪み始め、少年は無性に吐き気を覚えた。

???????

「フリーダが巨人の力を使いこなすことができれば、この世の巨人を駆逐することもできただろう。その力はエレンの父、グリシャ・イエーガーに奪われてしまったが……」

ロッドによって語られる、代々レイス家に受け継がれてきた巨人の力。その力によって三重の巨大な壁が作られ、壁内の人間の記憶は改ざんされた。

「さあ、力をエレンから取り戻すんだ、ヒストリア」

ロッドはカバンから取り出した注射器を、娘に握らせる。

注射器の細い針先が、洞窟の清浄な輝きにより煌めいた。ヒストリアは息を？み、針先に映る、小さな自分を見つめる。

これを使えば、彼女は巨人になる。そうやって王の力は、レイス家に受け継がれてきた。先々代のロッドの弟ウーリから、フリーダ・レイスに受け継がれたように。ヒストリアは巨人化し、エレンを喰らう。仲間を、殺す。

父親は彼女に求めている。自分を愛してくれる父の気持ちに報いたい。そして牧場に訪れ、彼女を本当の妹のように接し、微笑みかけてくれたフリーダを、取り戻したかった。

王の力は「フリーダ^{お姉ちゃん}」がこの世に残した、唯一のつながり。

「注射を打つても、巨人になった時の記憶はない。だから安心しなさい」

「……う、ん」

震えるヒストリアの背を、ロッドが優しく撫でた、その時。

ワイヤーの巻き取られる音が、洞窟内に響いた。

「ケニーか、どうした」

レイス家親子の側に降り立ったのは、テンガロンハットの似合う長身痩躯の男。その両手には銃が握られている。

ケニーは少し焦った様子で、外の状況を説明した。

曰く、調査兵団がクーデターを起こしたとのこと。

王政を動かす中心人物たちと、同席する駐屯兵団や憲兵団のトップの前でエルヴィンへの判決が下る中、急転した事態。

ちなみにエルヴィン・スミスは王政へのエレンの引き渡しの拒否や、デイモ・リーブ

スを利用しエレンを誘拐したように見せかけ、その罪を中央憲兵になすりつけようとした自作自演、およびデイモ・リーブス殺害の罪を問われていた。

これらの行いは、エレン・イエーガーの力を調査兵団の私物化するための行動であり、人類の脅威に十二分につながる行為である——と。

そんなエルヴィンに科せられたのは死刑。

だがしかしまるでタイミングを見計らったように、ウォール・ローゼが突破された、との情報が駐屯兵から入った。

この時すでにエルヴィンとピクシス司令の間には、「仮」の協力関係があった。

エルヴィンはデイモ・リーブスの殺害の首謀者として連行される前、ピクシスと面会していたのである。

この際真の王家の存在が「レイス家」であることが明かされ、真の王を即位させる計画をエルヴィンは伝えたのだ。レイス家が真の王家であったことは、ハンジらがニツク司祭を殺した中央憲兵の人間を白白させることにより、得られた情報である。

ピクシスはエルヴィンの提案に乗った。だが駐屯兵団のトップに立つ男は、調査兵団か王政か——ではなく、人類の命をどれだけ救えるか——を、選択の上で重要視する。

先ほど「仮」の協力関係と言ったが、エルヴィンの作戦次第で、彼は十分王政側につ

く可能性もあった。人類の命がより多く、救えると判断したのなら。

しかしてウォール・ローゼが突破された（嘘）との報告に、王政を動かす重鎮たちは、こぞつてウォール・シーナの門を塞ぐ選択をとった。これは半数の人類の命を見殺しにする、暗に言ったようなもの。

これにてピクシスは完全に調査兵団側についた。

対し憲兵団側は、王政の指示に従おうとした。ただここにも策士エルヴィンの手がすでに回っていたのである。

エルヴィンの策にハマっていたのは、憲兵団団長ナイル・ドーク。彼は訓練兵時代、エルヴィンの同期でもあった。

ナイルの家族はウォール・ローゼに住んでいる。王政に命令され、実行するか否かの最終決定を、憲兵団の行動を決めるのは、団長たる彼。

ウォール・シーナの門を閉じれば、家族は死ぬ。

——選ぶのは誰だ。

ナイルが捕まったかつての同胞にあつた時、エルヴィン・スミスが語った内容。

選ぶのはナイル・ドーク。

王政に媚びへつらうのか、それとも家族——そして人類のため、行動を起こすのか。

結果、内門を閉じることとはできないと決定したナイル。

調査兵団・駐屯兵団・憲兵団の三者が揃った。

さらにまるで王政にトドメを刺すかのように現れたのは、ダリス・ザックレー総統。恐らくこの時、誰よりも一番「オラ、ワクワクすつぞー」していた。

総統殿もまた、王政をかつてから気嫌いしていた人物。

この時王政の使えるコマは中央憲兵のみ。しかし大半がリヴァイ班の捕獲やレイス家の近衛に当たっており、待機していた兵士はザックレーが現れた時点で制圧済みだった。

全てが王政の敵に回り、これにてクーデターが完了した。

あとは攫われたヒストリア・レイスと、エレン・イエーガーを取り戻すのみ。彼らの奪還にはクーデターが成功し晴れて自由の身となった、調査兵団のリヴァイ班が動いた。

王政府の重鎮たちの最後の命綱は、レイス家。エレンから力を取り戻し、記憶改ざんさえできれば勝機はある。

毅然と、余裕の笑みを浮かべようとした彼らだった。

しかしエレン奪還に備え、レイス家の守備に当たっている「対人制圧部隊」もまた、すでにどこぞのブラコン女の毒牙にかかっている。

重鎮たちに待ち受けるのは、ワクワクおじさんの愉快痛快な拷問♡コースだった。

???????

「————ってわけだ。全兵団寝返って、王がニセモノであることがバレた。お偉い方も捕まっちまったし、急がねエとここにも人が来るぞ」

「わかった。君は対人制圧部隊とともに入り口の防備を固めてくれ」

「仰せのままに、王さま」

そう言い、半歩下がったケニーの視線がヒストリアに向く。

憐れみを含んだ目で、「かわいそうになあ」と彼は続けた。

「ヒストリア、お前はこれから巨人バケモノになるんだ。父親が巨人になるのを怖がるからよお」

「……何を言っている、ケニー」

「何って、事実を言ってるまでだろ？あんたは弟や娘に運命を押しつけた」

「勘違いをするな。私には『使命』がある。だからこそ、私が継ぐわけにはいかんだ」
ロッドは娘を抱き寄せ、近づく男をまっすぐに見つめる。

「その『使命』ってのは何だ？ウーリやフリーダ、そしてヒストリアに押しつけてまでなさなければならぬモンなのか？」

「神のために、神がこの世に再び現れることを祈る。ウーリが継承することを買って出たときに、私に託したのだ。『祈ってくれ』——と」

「ツハ、ウーリのことだ。本来あんたが継承するものを、兄が恐れていることをわかっていたからこそ、代わりに継承したんだろうよ」

「私は、恐れてなどいない」

「恐れてねエだつて？ウソ言え、お前ほどの怖がりはそのういねえさ。少なくとも弟や娘を見ていたあんたには、信心の裏にベツタリと、畏怖の心が透けて見えてたぜ」

表情を崩さぬロッドに、その長い足で詰め寄るケニー。長いコンパスの前に立ち塞がったのは、ヒストリアだった。

父を庇うように両手を広げ、顔をほぼ直角に上げて眉を吊りあげる。

「私は……私の運命を、私に託された使命を受け入れる。力を継承して、この世から巨人

を駆逐する……！」

それを聞き、ケニーは深いため息を吐き、頭を抑えた。

まるで聞かん坊の子供に呆れる大人のように、首を振る。

「お前の答えはそれか、ヒストリア。この樂園のために、命を懸けると」

「そうよ」

「……つまんねえ答えだな。期待はずれだ」

カチャ、と音を立て、銃口の先が二人に向く。

「やはりお前は信頼ならないな、ケニー」

「何言ってるんだ王さま。俺の企みを知った上で、ずっと利用したのはあんたの方だろ？ “あのオハナシ” の件でどれほど俺が傷ついたことか。王の力を奪って、この世をひっくり返してやりたかったのによ」

「……あのお話って何？ お父さん」

ヒストリアが父に尋ねる。ロッドは娘に目をやり「アウラ・イエーガーの件だ」と話す。

それにまた三人の後方で、上裸で拘束プレイな少年も反応した。口枷から唾液と共に、くぐもった声が漏れる。

「王サマに頼まれて尋問したが、あんたが聞いた以上の内容は得られなかったぜ。その弟くんには悪いが、失われちゃったものは、もう戻って来ねエよ」

「…そうか。それでお前はここからどう出るつもりだ。私を撃つのか？それともヒストリアを撃つのか？」

「そりゃあ決まってるんだろ」

一発の銃声が、洞窟内に響く。

直後ロッドとヒストリアは、後方から聞こえたうめき声に、視線を向けた。

ケニーが撃つたのはエレン・イエーガー。右腕や腹、腰辺りから複数出血している少年に、親子の意識が向いている最中、一瞬のうちにヒストリアに近づいたケニーが注射器を持っていた彼女の腕を掴み、奪い取る。ロッドには足払いをかけ転ばせ、首根っこをつかんだ。

「散弾銃でちこつと痛いだろうが、これで負傷したエレンは巨人化できる。巨人化したロッドとエレン、どっちが勝つか試してみようじゃねえか」

「お父さん!!」

「おっと、こつちに近づくなよヒストリア。さっきも言ったが俺が持つてるのは散弾銃だ。父親の頭をハチの巣みたいにしたくないだろう？」

「…………ツ」

ヒストリアは親の仇と言わんばかりにケニーを睨んだ。父と似た大きく青い瞳が、グツグツと煮えたぎる。

その視線を受け流しながら、ケニーはロツドの頭に銃を当てつつ、顎でエレンを指す。「巨人化できるはずなのに、そこで項垂れてるヤツに仲間への遺言くらい、聞いてやろうじゃねエか」

「…………わか、った」

口枷を外すよう言われたヒストリアは階段を登り、エレンの顔を持ち上げようとし、少年の膝下に目が向かった。

ボトムスに転々と水が滴った跡があり、今もまた上から雫が落ちてくる。

泣いている——そう気づいた彼女は、息を呑んだ。震える手で口枷を外し、一歩、後ろに下がる。

「エレン…………どうして、どうして泣いてるの？それに…巨人化しないの？でないとななたは、このままじゃ…………」

「…………ない」

「え？」

——オレは、いらぬ。

多くのカバネの上で、成り立つ命。これからも少年の命は誰かの犠牲の上で存在し続ける。人類を救うという、大きな使命を伴って。

進み続ける。それがエレン・イエーガーの運命。

しかし少年は自分を、“普通”の人間だと感じている。

ミカサのように、圧倒的な力はない。アルミンのように、窮地を乗り越える頭脳もない。母のように強く凛々しい心を持っていてもなく、父のように他人を殺してまで、進む強さもない。

そして姉のように、大切な存在のために人類を裏切つてまで守ろうとする覚悟もない。

「オレは、“特別”なんかじゃなかった。これ以上犠牲を生まずに人類を救えるなら、オレは食われていい……。いや、食われるべきなんだ」

「……………」

「殺して、くれ……………こんな、オレなんて……………」

静かに泣き始めたエレン。時折しゃくりあげ、それでも声を殺そうとする。その時ヒストリアが感じたのは悲しみではない。

「『こんなオレ』って、何よ」

それは、——「怒り」だ。

「エレンはいつだって、頑張ってきたじゃない」

「でも、オレは……」

「みんな、あなたに命を懸けた。それは同時に、人類のために捧げた行為でもある」

青い瞳が、涙で歪むヒスイの瞳と合わさった。「けど」と弱音を吐く少年の頬を、ヒストリアは思いきり抓る。

「エレンのために命を捧げた人たちには、大切な人がいた。家族や友人、仲間——尊い存在を守るために、彼らは戦った」

ヒストリアの脳裏にそばかすの少女の姿がよぎる。

少女はいつだって、ヒストリアを守っていた。母親や祖父母にも大切にされなかった妻の子を、“特別”に想ってくれた。そんな少女をヒストリアもまたいつしか大切な友人として、“特別”に、想っていた。

そうだ——そうであつた。

ヒストリア・レイスは、そばかすの少女の——ユミルの、“特別”な人間だ。

“普通”じゃない人間なんていない。

誰にだってその人を、“特別”に想ってくれる人がいる。

即ち生きているだけで、人は誰かの“特別”になるのだ。

ヒストリアはそんなことも、忘れていた。

ユミルの手が離れ、寂しさから、牧場にいた頃の愛されなかった少女に戻ろうとしていた。：否、あの時だって彼女は覚えていなかっただけで、フリーダから大切にされていた。いた。

「あなたが “ごんなオレ” なら、エレンに命を捧げた人たちはどうなるの？ 彼らの想いはどうなるの？ —— バカ言わないで！ 「ごんなエレン」 に、みんな命を懸けたわけ

じゃない。あなたが自分を卑下することは、彼らの犠牲にドクを塗ることに他ならない。他人があなたのことを罵倒しても、エレン自身が自分をバカにしちゃいけない！！」

ヒストリアもまた、同じだ。自分を卑下してはならない。

ユミルに「胸張って生きろ」と言われた。

胸を張って、前を見て、現実から逃げようとしてはいけない。

「いい子のクリスタ」はもういらぬ。誰かのために生きるのではない。自分のために生きる。それが胸を張って生きることだ。

「でももう、オレ、生きたくない……」

「泣くなバカ！弱虫！！シスコン！！つらくても「戦う」って決めたのなら、最後まで最後まで、あがいて生きろ！！それが犠牲の上で生きて、そして命を背負って戦う者の責任だ！！」

「ねえさ、しんで、オレ、オレ………」

「私だつて……私だつてユミルがいなくなつてつらい！！けど……それでも、生きなくちゃいけない。エレンがつらいなら、私が手を引つ張つてつてやる！！」

「ヒス、トリア……」

「だから一緒に、前を向こう。歩くって決めたのなら、隣の誰がいなくなっても、それでも進め。私たちは、自由なんだから」

「……………う、っあ…」

「……………ごめんエレン、あなたを犠牲にしようとして」

ヒストリアはボロボロと涙をこぼす少年を抱きしめた。その場にいなかった一人の少女が「ピクツ」と反応した気がしたが、気のせいだろう。

「——ハハッ!!」

感動的な少年少女の光景に、目尻にシワを作り、大笑いし始めた一人の男。

ケニーは片手でロッドの首を軽く締めながら、ひとしきり笑った。ヒストリアは今日イチの鋭い眼光を向ける。

「いいね、いいねえ。つまらねエなら殺していたが、面白エじゃねえか、お嬢ちゃんよお」

「……………はっ…」

「俺をちゃんと楽しませてくれたわけだ」

いいぜ、認めてやる——と小声で呟いた部分は、ロッドにしか聞こえなかった。

ケニーは銃をしまうと、ロッドを拘束したままヒストリアの下に落ちていたカバンから、エレンの拘束を外す鍵を取り出すよう告げる。

「それで外しといてやれ」

「え……えっ?」

「早く戻らねエと、ドチビが俺の仲間を殺しちまうかもしれねえからな」

「どういう、こと……」

そこでヒストリアは、ケニーがこの儀式の間に来た時、銃を持っていた違和感に気づいた。

普通なら王の前だ。武器を持つなど許されないだろう。その後彼女やロッドに銃を突きつけたが、最初から抜いているのはおかしい。仮に武器を使うなら最初はしまっておいて、油断させる。

「まさか……!」

「お察しのとおり、姫さんを悪いヤツから助ける騎士ナイトが来てるってわけだ。一旦交戦になったが、どうにか態勢を崩させて、ヤツらが通れないよう途中の道で大アミを張ったわけよ」

「みんな、なが……」

「安心しろ、殺してはねエ」

多少負傷した兵士は出たが。殺しはしない代わりに、戦闘できぬよう人体の一部を狙う。その交戦で対人制圧部隊にも少なくない被害が出た。

「まあ向こうも加減しているように見えたあたり、俺たちの意図に気づいているだろうな」

「……ケニー貴様、まさか」

「ああロッド、あんたのご想像通りだ。俺はしっかりと、全兵団裏切ったと言っただろ？お前に尻尾を振る忠犬はもういない」

「……ウーリへの恩を忘れたか」

「アイツには感謝している。だがアイツが死んじまった時点で……いや、王家の力が無くなった時点で、俺がレイス家に従順でいる理由はなくなっていたさ」

「……お前のようなノラ犬を、あのトチ狂った弟が引き入れさせなければ——」

「ウーリを、侮辱するなよ」

一瞬銃を抜きかけたケニーは、娘の視線に気づき、手を止める。

忌々しく舌打ちを一つこぼし、ロッドを拘束する首への圧を強めた。

「お前がこれからどうなるか、楽しみにしてろよ。聞きたいことが山ほどあるだろうか

「らなあ、特に調査兵団のヤツらは」

「ま、待って！」

「……ヒストリア、お前はコイツから娘や息子が殺された話について聞いたか？」

「？聞いたけれど……」

「じゃあよく考えてみるんだな。コイツが家族が死ぬ様子について語ったことと、一人だけ生き残った事実を踏まえてな」

「……？」

首を傾げた少女から視線を外し、ケニーは帽子を深くかぶり直す。

そして背を向け歩き出そうとした時、「あつ」とわざとらしい声を上げた。

「ヒストリア、何か勘違いしているらしいそのガキに言つといてくれ。——何で姉貴は生きてるのに、死んでると思ひ込んでるのか、つてな」

エレンとヒストリアの「えっ？」という声がハモる。ロッドもまた二人と同じ解釈だったのか、瞳を丸くする。

ニヒルな笑みを作った男は、ロッドの両手を後ろに拘束させ、そのまま去って行った。

これにて一件落着に思えた——が、しかし。

ケニーのいない間に、対人制圧部隊が味方側こちらではないか——と、疑っていたハンジやリヴァイたち。

トロスト区で一戦を交えてから、疑問はあつた。それこそ「対人」戦に特化した部隊。そして王政の命により、人を殺してきた暗部でもある。

だが死者が出なかつたのは、明らかにおかしかつた。この違和感にいの一番に気づいたのはリヴァイ。かつて『切り裂きケニー』と謳われた男にしては、生ぬるいやり方である。

リヴァイと戦つた時は、お互い本気だつたが。

またデイモ・リーブスの件に関してもだ。

殺すなら、わざわざ遺体を回収する必要はなかつたはずだ。のちにリーブスの殺害を、調査兵団の仕業であることに仕立て上げたことを踏まえても、遺体があつた方が民衆に悪感情を抱かせることができた。

この殺害の犯人は中央憲兵であることに違いない。

だが本当にデイモ・リーブスが殺されたかどうかは怪しい。

彼が殺害された夜、その息子が現場近くの路地裏でムスコをさらし、立ちションしていたことは判明している。調査兵団の窮地を救おうと、ハンジやミケたちが動いていた中、彼らは「中央に殺される」と怯えていたリーブスの息子と接触することができたのだ。

息子はその際殴るような音と、「ビチャツ」という音を聞いた。必死に声を抑え、出しっぱなしのムスコを震わせて。

ついで聞こえたのは現場にあったリーブスが使っていたものとは違う、荷馬車の音。内容はわからないものに男女の声が聞こえ、ドサツ、という音が聞こえた。遺体を載せた音であると、リーブスの息子は判断した。

その後犯人と思われる二人も荷馬車に乗り込む気配がし、姿を消したのである。

トロスト区での戦いを踏まえ、デイモ・リーブスを殺した——否、さらったのが対人制圧部隊である可能性を見出したのは、アルミン・アルレルト。

それと同時に、もしかしたら彼らが味方であるかもしれない、と考えた。

調査兵団とは異なり、憲兵団の内側は指揮系統が分かれる。ケニーという男の人間性

を知るリヴァイは、王政に嘯みつく理由ができたのなら裏切る可能性もある、と言及した。

それからエルヴィンのクーデターが成功し、エレンとヒストリアの救出に向かったりヴァイとハンジたち。対しミケ班はエルヴィンと合流するため、別れた。

向かうはレイス領。そしてかつてその地の教会で起きた、レイス家の人間が強盗によつて殺害された場所。

この事件が五年前、それもウォール・マリアが破壊された日に起こったとなつては、むしろ怪しまない方がおかしい。

そしてその場に着き、対人制圧部隊と戦闘になった調査兵団一行。

相手の出方をうかがいながら一度戦った後、態勢を立て直した彼ら。出方を考えるハンジに手を挙げたのは恥しよ……智将アルレルト。内容は、敵の前で武装を外し対話を求める——という、驚きの方法だった。

話に出るのはアルミン本人。彼はミカサの反対を押し切り、こう告げる。

「人には本当に、たたかう術しかないのかな？」

アルミンは平和的な解決を望んだ。仮に話し合いの最中敵が銃を使ったのなら、その時は戦うしかない。

だがエレンやヒストリアを救う上で血を見る可能性が少なくなるのなら、それに越したことはない、と。

そしてアルミンは、洞窟を遮るように張られた大アミの前で対人制圧部隊の副リーダー、トラウテ・カーフェンと話し合いを行った。少年の覚悟と意志を尊重した彼女は、仲間に銃を下ろさせた。

結果、彼ら（正確には隊長の意思に従っている）が、調査兵団側であることが判明する。

だが事が終わるまでは、待つてほしい——とトラウテは語った。曰く今は隊長である男の、「お楽しみタイム」なのだ。

「あの人は気分を損ねると面倒なので、少し待つていてください。エレン・イエーガーと、ヒストリア・レイスを傷つけるつもりは最初からありませんから」

「お楽しみタイム……？」

怪訝な表情を浮かべたアルミンの後方で、相手の様子を見ていたハンジとリヴァイた

ちが合流する。

トラウテがため息を吐きながら、語った内容。

「——王に相応しいかどうか、見物するそうですよ」

その後ロッドを拘束したケニーが合流し、ミカサと彼女の後を追ったアルミン、そして104期生のメンバー以外が、外へ出ることになる。

セコム・アツカーマンはケニーから「二人は後で……」まで聞いたところで、重機機関車ばりの勢いで駆けていった。一瞬全員沈黙したが、何事もなかったように歩き出した。

地下に続く扉から出た面々は教会に出る。そして外に出た際ケニーからハンジへと、ロッド・レイスの身柄は移された。

「あなたが真の王か……」

そう呟いた彼女に腕を引かれるロッド。彼はリヴァイに噛みつかれそうになっている、かつての忠犬へと目を向けた。

「君は私を甘く見すぎだ、ケニー。お前が前に話を聞いていた時から、予定通りにいかな

「可能性は考えていた」

そう言った瞬間ロッドは片手を懐に入れ、むき出しの注射器を手にする。咄嗟にハンジが注射器を持ったその手をはたき落とした。しかしその勢いでロッドは倒れ、地面に転がる。

ちようど彼の顔の位置は、割れた注射器の場所。

「あつ」

ハンジの掠れた声が漏れた刹那、ロッドの肢体が光った。

巨人の脊髄液を舐めとった男の身体は、瞬く間に巨大化していく。

全員は急いでその場を離脱し、距離を取る。通常の巨人の大きさを遥かに超すロッドの巨人体は、その重みにより地下に広がる空間を壊し、沈む。

圧倒的熱量によって周囲の木々を燃やすその光景は、まるで地獄の業火のようだった。

遺伝つてのはそんなにアテにならない

レイス領にて巨人化したロッド・レイス。その大きさは「超大型」を優に超える100メートル以上。あまりの巨体さから本体は自重に耐えきれず、うつ伏せの体勢で身体や顔を地面に擦りつけ移動した。

奇行種の分類に入るこの巨人は南に移動し、オルブド区を襲った。最終的にロッド・レイスは調査兵団の活躍により、討伐された。

使用されたのは無数の樽に入った爆薬。それらをアミで一纏めにしたものを、エレイン・イエーガーがロッドの口にぶち込んだ。

結果、ロッドのうなじに当たる部位が周囲に飛び散り、それを斬ることで討伐を可能にしたのである。

ロッド・レイスにトドメを刺したのは、ヒストリア・レイス。彼女はクーデター後、エルヴィンから自身を女王に即位させたい旨を聞いた。元々壁内は王政国家、その体制が突如変わっては、民の間に混乱が生じる。

ゆえに真の王家であるヒストリアに白羽の矢が立った。

彼女はその話を呑んだ。その上で、ロッドを討伐する作戦に参加することを求めた。手柄を彼女のものとし、民衆の求心力を得るためである——と。

エルヴィンはヒストリアの提案を認め、本当に彼女は自身の手で親との決別を果たす。

それからしばらくして、壁の世界に新たな女王が誕生することになった。

オルブド区を救った英雄。小柄な身体ながら、人々のために命をかけた女王。真の王家である父の暴走を止めた彼女は、戴冠式の場で多くの民衆から温かい拍手をもらった。

???????

時は少し遡り、ロッド・レイスが討伐されたその夜。

朝の混乱もようやく少しは収まってきた中、オルブド区のある地下の一室に、ゴールが特徴的な女の姿と、いかにも仕事のできるキャリアウーマンといった容姿の女が向かっていた。

「ゴグルの女性の後ろには、パツと見、モブ顔の男の姿もある。実際名前にも「モブ」がつく。

「へえー、憲兵団がウラで使う部屋ねえ……こういった場所がこのオルブド区以外にも、複数あると思うと頭が痛いよ」

「ハンジ分隊長、揉め事は起こさないようにしてくださいね」

「モブリット、君は私のことをなんだと思ってるんだい？」

「いえ、あなたがミケ分隊長の代わりに来ると言っただけです。覚悟を決めておいてもらわないと困ります」

「ああもちろん、決めてるとも」

そう言うハンジのゴグルの奥は、なぜか窺い知れない。まるで週刊誌のお色気シーンを讀んだ時、青少年の欲望のジヤマをする謎の光やケムリのように、彼女の瞳の奥は隠されていた。

「こちらです」

トラウテがカギを使い鉄の門を開ける。すると室内に響く、「ギギギ」という地面と鉄がこすれ合う不協和音。

「…ッ」

入って香ったのはまず血の匂い。ハンジは顔をしかめ、中へ一步入る。石で囲まれた

四角い部屋は壁上につけられたランプの淡い光で照らされており、室内の中央には丸テーブルとイスが二つ。右側には柵があり、その上に尋問をに使うらしい器具が複数置いてあった。

——否、これは「尋問部屋」ではない、「拷問部屋」だ。

左にはベッドが一つあり、その上でシャツに深緑のロングスカートを身にまとった女が横たわっていた。

両手、左足首には拘束具がつけられ、そこから伸びた鎖はベッドの三隅に繋がっている。

女の両手は包帯が巻かれ、尋問した際殴られたであろう痕が複数あった。ハンジが気にかかったのは、髪の毛の部分だ。肩につかない程度の長さに変わっている。

「彼女の拷……尋問をされた方は誰なんですか？」

「尋問を担当したのはアッカーマン隊長です。ロッド・レイスからの指示を受けて」「ハハ……リヴァイが嘯みついてたあの男か」

ハンジはニツク司祭の殺害事件を調べる上で、中央憲兵の人間を拷問した。リヴァイ曰く、情報を吐かない人間は、爪を全部剥がされても語らない。逆に吐く人間は一枚でも吐く。

また拷問方法でも肉体以外に、精神的に揺さぶりをかける方法もある。きつと王政の一件がなければ、ハンジが知ることでもなかった世界だ。

「アウラ・イエーガーの身柄は私たち調査兵団が預かりますが、よろしいのですね？」
「かまいません。今は中央政府が崩れ、憲兵団も中央第一憲兵団が身柄を拘束されている状況ですから。今のところはそちらで問題ないかと。捕まえる時は改めて手続きを行ってからになるでしょうし」

トラウテが属する「対人制圧部隊」も、調査兵団側に回ったからこそ捕まっていはいない。

しかし新王女が即位し体制が大きく変化する中で、どうなるかわからない部分が多い。今どの兵団も手探りの状態だ。

「ひとまず殺されてなくてよかったよ、アウラ」

—— いったい聞きたいことや、話したいことがあるんだ。

と、続いたハンジの言葉。その七割は巨人についてだ。

途端に丸くなっていたアウラの身体が震えた。眉間にシワを寄せ「うう……」と唸った彼女の夢には、お花畑で走り回るソニーとビーンと、ゴーグルをつけた変態の姿があっ

たそうな。

???????

私はアウラ・イエーガー、美女です。

レイス卿が巨人化してオルブド区を襲ったという、とんでもない事実を聞かされたその日の午後。

私の身柄は憲兵団から調査兵団へと戻された。元々王政の命令で中央憲兵が動き、私の身柄が拘束されていた。きちんとした段取りを踏んでから身柄のやりとりが行われるそうです。

ちなみに現在地は調査兵団本部。部屋の外には監視の人間が一名おり、手洗いなど出歩く際は声をかけて出る。

窓はなぜか開かないように釘で固定されていました。まさか私がここから飛び降りるかもしれないなどという、愉快痛快な考えを持っていたんですかね？（前科アリ）

当然のごとく武器類はなく、松葉づえが手離せない。立体機動は訓練次第で行える可能性もありますが、今のアウラちゃんは完全な戦力外。そも厄介ごとは山のように残っている。

「アウラ副分隊長」

その時ノックが聞こえた。どうやら私にお客のようです。昨日はハンジ・ゾエが私の運搬を担当したそうですが、まさか彼女じゃないよな？帰ってくれ。

「兵士長がお見えです」

帰ってくれ。…念じましたが無理でした。

いつも隈どころか顔に影があるリヴァイ兵士長は、部屋に入ると隅にあつたイスに腰かける。そして外の兵士に紅茶を持って来るよう頼んだ後、こちらを見た。

「デメエ、ケニーと組んでいやがったな」

最初から爆弾発言だった。組んでるって何をですか？たしかにエレンが死なぬようケニーを懐柔しようとはしましたが。

「昨日色々と気になっていたことを、ヤツに問い詰めた」

兵長たちがトロスト区で対人制圧部隊と交戦した際、死者が出なかったことにまず大きな違和感を感じたと言います。

また殺されたとされていたデイモ・リーブスが、対人制圧部隊によってその死を隠ぺいされていたことも明らかとなった。

殺害（嘘）に関しては現場でリーブスを気絶させ、あらかじめ動物の血を入れておいた革袋を刺し、あたかもリーブスが殺され、その遺体が遺棄されたようにみせかけた。

「あの部隊はケニーの私兵だ。アイツの意志によって動く。つまりは俺たちを殺さねえよう仕向けたのも、デイモ・リーブスを死んだように見せかけたのも、ケニーの意向でことになる」

「随分やさしい人間なんですな。私を尋問した時は怖かったというのに」

「バカ言え、あの野郎が進んで人の命を救うわけがねえ。殺すならまだしも」

ケニー・アッカーマンという男は、かつて「切り裂きケニー」という名で知られていたらしい。都市伝説レベルの話だ。

かく言う私も兵長が出すまで、頭の片隅に埋もれていた知識。

おそらくケニーおじちゃんから聞いた、「アッカーマン家の迫害の歴史」に多かれ少なかれ関わっているのだろう。

「アイツは自分の野望、王の力を奪うことが叶わないと知ったことで、ロッド・レイスを裏切ることを決めたと言っていた」

「狂犬ですね」

そう私が呟いた時、再びノックの音がして、兵長の頼んだ紅茶が届く。兵士は律儀に私の分まで持つてきてくれたので受け取った。

リヴァイはいつもの取手を摘まない、行儀のなっていない飲み方をする。

「ヒストリア・レイスが次期王になることは聞いたな」

「ええ、英雄の女王様ですよ、民衆を救った」

「ケニー・アッカーマンは洞窟内でヒストリアにまるでその器を問うような、試すマネをした」

「それが、何ですか？」

「お前が唆したのかと、聞いている」

「私が？」

冗談はやめてくださいよ兵士長。ご覧のとおりアウラちゃんは満身創痍の状態。そもそも尋問をした相手の言うことを、なぜ聞く必要があるのですか。

「ケニーは面白いものが見られるなら食いつく。トロスト区で奴と戦った時も、俺だけ

本気で命を取りに来ていたからな」

「仮に私がうまくケニー・アツカーマンに取り入ったとして、利点はないでしょう」
「何言つてやがる、理由ならあるだろうが」

——弟、エレン・イエーガーを救うため。

私が動いた理由。リヴアイ兵長は紅茶を飲みながら、瞳だけはこちらを見ていた。

「奴はテメエとの関係性を最後までしらばつくっていた」

同時にケニーは「俺は忠犬なもんでね。知りたきやテメエで考えろ」とも言っていたらしい。

だから兵長は自分で考え、そして私の前にいる。

今回エレン・イエーガーを救うことが、私の第一目標だった。

彼を失うわけにはいかない。客観視して、この壁の世界を見たときに感じるもの。お父さまから「進撃」を託された少年。なぜその名が「進撃」なのかはわからないが、お父さまと同じように、エレンくんは何かに向かって進み続けている。

その先にあるものの正体はわからない。しかしエレンを導く存在はわかる。ユミル・

フリッツだ。

彼女がお父さまにレイス卿だけ逃がさせた意味が、今なら理解できる。今回の一件を引き起こすため、ロッド・レイスは生かされたのだろう。

その中心にいたのはヒストリアと——エレン。

ユミルにはエレンが必要なのだ。だから殺すわけにはいかない。

無論私人としても、かわゆい（難聴）弟を死なせるわけにはいかないんですね。

またエルヴィン・スミスが、都合よく王政まで打倒してくれた。これから事はウォール・マリア奪還に向け、大きく動いていくだろう。

幸いエレンくんは、次の作戦に必要な硬質化能力を手に行っている。ロッド・レイスの巨人体がその重さによって地面に陥没し、地下洞窟を壊した時、エレンくんはヒストリアが父親のカバンの中から発見した『ヨロイ』の小瓶を摂取した。

そして硬質化を身につけ洞窟の崩落を防ぐことにより、ヒストリアやミカサたちを救ったのである。

レイス家はやはり、さまざまな物を隠し持っていたのでしよう。ロッド・レイスが異常なまでに大きくなったのも、何か理由があったのかもしれない。

“王家の血筋”だから、で済ませるのは難しい。なにせお母さまは巨人化しました

が、普通の巨人でしたから。

それらを調べるのはハンジ・ゾエの役目。当分彼女とは距離を置きましょう。絡まれて、睡眠不足で死にたくはないので。

「：ちよつと疲れたので、もう退室していただいていいですか？」

「何様のつもりだ、お前は一応捕まっている身だからな」

「兵長だつてわかっているでしょう」

「ア？」

ケニーとの関わりは別にバレてもいいです。そもそもロッド・レイスに自分の素性を話してしまった時から、隠し通せる問題ではなくなつた。壁内の人類は「内側」ではなく、すでに「外側」に目を向け始めている。

外から来た私の存在というのも、そう時間はかからず明るみに出る。グリシャ・イエーガーが始祖の力を奪つたことがわかれば、ズルズルと私も疑われるわけですし。「地下室」で発狂した過去や、単騎で巨人シティになりかけていたウォール・マリア内を移動した負傷兵^私。ついでに敵に協力した件。

そんな女は王家の力を奪つた男の娘で、巨人化できる無知な弟の姉。実に怪しい（ガ
リレ○感）

私が見なが知らぬ情報を、ずっと黙っていたのは事実。それこそロッド・レイスが語った以上のことを、有している。

レイス卿は恐らく私が外の人間であることは語らなかつたでしょう。でなければ昨日ゆつくり眠れるわけがない。朝から晩まで事情聴取つたなしである。

私はこれ以上話す気はない。私が話してユミルちゃんのジヤマになるのは嫌です。

それ以上に吐いた情報が利用されて、ジークお兄さまに厄介ごとを持ち込んだら嫌ですから。

本当は「尋問した」という体を作ったとき、情報を吐けないよう舌を噛み切ろうとしました。ケニーおじちゃんに止められました。王家の件を持ち出されたらそりゃあ、「失礼、噛みまみた」ができなくなる。というか墓場まで持つてくんじやなかつたのかよ。

ちなみに尋問してもらったのは、ケニーと私の関係を薄めるためですね。

べ、別にエレンきゅんが曇る姿が見たくて、強引に頼んだわけじゃないんだからねっ！（ニタア…）

「ヒストリアが聞いていた、ロッドとお前が二人で話していた件についても気にかかる

が……まあ今はいい」

「そうですか。時にリヴァイ兵長」

「何だ」

「実はケニー・アツカーマンに押し倒されて、乱暴されました」

「アイツがこのゲテモノを食っただと……？」

「おい、誰がゲテモノだ」

珍味種^{ゲテモノ}はむしろハンジ・ゾエの方では？

うっかり「このドチビ」とも言いそうになりましたが堪えました。まだ自分の命は惜しいです。

「冗談です。あの男はシャツを捲って、私のお腹を見て嘲笑っていただけです」

「その紙みてえな腹筋か」

「……………同じことを言うんですね、あなたたち」

リヴァイがあからさまに不機嫌になった。さすが育ての親と言うべきか。驚くほど似ている。身長はともかく。

「奴は俺の母親の兄……………らしい」

兵士長は空になったカップをテーブルに置き、こちらに視線を向けることはない。
つまりソレって——。

「兄妹、愛……!!?」

「どこからその考えに至った」

何だ、違うのか。兄と妹の禁断の愛の中で生まれたのが、兵長というわけではなかった。………ん?

「つまりあなたも、アツカーマン?」

「らしい」

「身ちよ」

最後まで言い切ることはできませんでした。兵長から感じた圧が本気で、エモノを狩るオーラ。ケニーおじちゃんに調教された私の身体が震えた。

リヴァイは現在武装しておらず普段着ですが、一瞬でも腰に手が動いた様子が見えませんでしたからね。ブレードがあつたら、いったいどうするつもりだったのでしょうか。

「……まあいい。後でエルヴィンが来るだろうからな」

そう言い残し、兵長はカップを持ち去って行った。

最後に今日一番の地雷が残されていった、アウラちゃんの明日は果たしてあるのか。

どうせ何も話す気はありませんがね。それこそ陵辱でも拷問を受けても。さすがに命が奪われることはないでしょう。憲兵団ならともかく、調査兵団だ。

しかしそれでもクーデターを画策し、成功してしまった男への警戒心は、捨てることはできなかつた。

クツパ戦

朝から雨だった。空が見えない。私の瞳と同じ曇天の世界。

ぼんやりとした頭のまま、テーブルにあつた食事に手をつける気力もなく、再びベッドに身体を戻した。

今はロッド・レイスの件から二週間経っている。いまだ我が身は調査兵团本部で軟禁状態。リヴァイが語っていたエルヴィンは誰よりも忙しい状況で、まだ訪れていない。

ヒストリア・レイスの戴冠式はもう終わったそうさ。その日は窓から見える街の景色が華やかに彩られていた。たなびく旗に楽しそうな人々の声。対し廊下の方は、朝から日が暮れるまでバタバタと大忙しだった。大きなイベントがあると、仕事も増える。

エレン・イエーガーに会いたい。血の温もりを感じたい。「私」の一部を感じたい。本当はジークお兄さまがいい。しかしお兄さまはいない。

歌詞も何もないとって付けた鼻歌を奏でながら、瞳を閉じる。棺に入る人間の体勢で、瞼のウラの暗闇を享受した。

ふと思い出したのは、少し前のこと。

地下にある冷たく、カビ臭い四角い部屋での一件。舌を噛み切ろうとして、ケニー・アツカーマンに止められた時。

私としては悪い話じゃなかった。舌を切れば発声せずに済み、情報を吐けなくなる。話せなくなるのは多少不便だが、ユミルちゃんと同じになれるのだと思うと嬉しい。

今おこなつても構わない。しかし後で「噛みまみた」したことがケニーにバレたら、王家である情報がバラされるので、行動に起こせない。

あの男は私をウーリ・レイスと重ねていた。實際髪を切ったら本当によく似ていたらしい。

ケニー曰く、アツカーマン家はかつて王家の武家だったそうだ。祖父から聞いた情報なのだという。

しかし彼らの一族と東洋の一族は王の思想に逆らった。結果迫害が生まれ、二つの一族はその数を大きく減らし今に至る。ただしアツカーマン家はケニーがウーリとズツ友になったことで、迫害が終わった。

何かしら彼の血筋には秘密があるのかもしれない。リヴァイやケニーに、ミカサ。言い換えると旅団一個分をほこる「人類最強」の男に、エリート中のエリートの中央憲兵

の死体を積み上げた殺人鬼、そして恋する乙女——そのパワーは並の兵士百人分——
なエレンの将来の嫁。

戦力がおかしい。人間を作るとき、神が配合成分を間違えたと思えない。

また不思議と共通しているのは、一人の人間に固執しているところだ。

ミカサはエレン・イエーガー、リヴァイはエルヴィン・スミス、ケニーはウーリ・レイス。

この構図を作ると、どうもアツカーマン家と固執の対象の人間を、犬と飼い主——
というような構図で見えてしまう。

詳しく言えば、「尽くす人間」が必要、とでもいうのか。

それは恋であったり、忠義であったり、友愛（あるいは信仰心）であったり。

現にケニー・アツカーマンはウーリ・レイスが死んだのち、友人と同じ景色を見ようと、「始祖」の力を奪おうと考えていた。その思考の根底はウーリの存在があり、そこに縛られていた。

しかしその計画も、頓挫する。

そのため彼は私にウーリ・レイスを見出そうとしたのだろう。同じ王家であり、容姿

も似ている。後でウーリの肖像画があつたら見せてもらいたいところだ。

ただ私を投影材料にしてもらつては困る。是が非でも私はお兄さまに再び会う。抱きしめてもらつて声を聞いて殺されて——と、自分の中で相反する考えが湯水の如く出てきますが、とにかく会う。できればウコチャヌ☒?コ☒したい。

だからこそケニーから、調査兵団側がヒストリアを新しい女王として即位させようと画策している情報を聞いた時、思いついた。

要は彼に氣にいる人間を見出させればいい。ヒストリアはウーリの姪に当たるわけですから、問題ないと判断した。

『氣に入らなければ、殺しても構いませんよ』

と、随分と人間性を疑われる発言をしたアウラちゃん。元々お前の人間性は終わっているだろう、という賞賛の声が聞こえます。

またケニーを自身から遠ざける以外に、いくつか目的があつた。

一つはヒストリア・レイスの精神性を育てるため。

父親ロツドの言いなりなままの人間なら、助けて王にしたところで民衆はついて来な

い。物事には「覚悟」が必要だ。

鬼畜ロードを突つ切るエルヴィンのように、自分や他を殺してでも進む覚悟のある者でなければならぬ。キース・シャーデイスのように途中で折れてもらつては困る。

これについては私も同じ王家の血を持つ人間として、辛口コメになつてしまつたところであつた。

最終的に彼女は王女としての覚悟を持ったのですから、一件落着と言えましょう。ケニーも一応は認めたようですし。結果としてヒストリアが即位すると同時に、「対人制圧部隊」は王直属の護衛部隊になつたそうですし、収まるところに収まつた。

仮にヒストリアが王女になれず殺されていたなら、その時は私がケニーおじちゃんに首根つこを掴まれ、「フリッツ」の名とともに団長の前に突き出されていた。

そういう約束だつた。私にもリスクがなければあの男は動かなかつた。…いえ、動かせなかつた。非常に厄介な男であることに、間違ひはない。

そして二つ目の理由は、調査兵団の求心力を高めるためですね。これはエレン奪還が成功していれば、必然と起きたことです。

私のよだれが垂れるのはここから。

求心力が高まるということは、民衆から声援を送られるだけではない。その他兵団から「調査兵団カツケエ……」ということで、編入希望者が出る可能性が高まるのです。実践慣れしていない人間が壁外調査に出れば、より多くの悲劇が生まれることに他ならない。たまりませんよね。

調査兵団は常に人員不足。いったいどれほどの命知らずな方たちが編入したのか知りたいです。

盛大なガバは存在するんですけどね。私が壁外調査に行けないというガバが。

しかしここは調査兵団本部。いくらでも帰ってきた彼らの顔を拝むことができる。憲兵団に身柄が移動させられたら、見れないんですけど（血涙）

というか、弟の面会さえまだなんですけど。どうやら一般兵士は入室する許可が出ないらしい。部屋に来たのはリヴァイ兵長やミケ分隊長に、我が第五班の分隊長。

何度かゴークルをつけた女の人も来ましたが、全て寝たフリをしました。ケニーおじちゃんやの殺気を浴びた時以上に身体が震えたのは、気のせいなはずです。彼女のせいでノックが鳴ったら、一度は寝たフリをする癖がついた。頼むから来ないでくれ。

「アウラ副分隊長」

そんなことを考えていたからでしょうか、ノックが鳴った。
兵士がお客さんの名前を告げるまでは発声しません。

「団長がお見えです」

▶？ラスボスが きた！

???????

私アウラちゃん、興奮しているの。

エルヴィン・スミスが来た、と心臓が止まった束の間、団長が一声かけてから入ってきた。どこぞの兵士長やハンジは中の様子を確認せず入ってくるので、紳士ポイントが高い。仮に私が着替え中だったらどうするつもりなのか。別にハンジは構いませんが。

——いけません、興奮している話でしたね（違う）。

団長とお会いするのは、大規模壁外調査が行われて以来。本当に右上腕の途中から腕が欠けている。行き場をなくした袖が、スミスが動いたたびに揺れる。

失われた部位に想いを馳せ、その間起きた苦痛に途方もないエクスタシーを感じてしまった私は変態でした。身体を起こした私に団長は隣に座っていいか尋ねます。頷くとイスを引つ張ってきて座った。本当に腕がない。触りたい。

あるはずのものが無いっていうのは、どうしても滾ってしまうのでしょうか。

「すまないね、突然訪ねてきて。リヴァイは冗談を言う元気があると言っていたが……かなり寡れたね」

団長は手をつけていない私の食事を見た。純粹に食欲がないだけなので心配しないでください。

「触れていいですか？」

「え？」

「右腕」

「……？別に、構わないが……」

しかし淑女が男性に——と、続けているのを無視して触った。

本当はない。すごい。負傷兵なんて散々見てきたし、それが原因で除隊してきた人間

も見てきた。ただほとんどのケースは人体が欠ける、イコール「死」である。

ないのに生きている。欠けた肉体の分、「命」は残った部分の中に詰まっている。生命の美しさじやありませんか。削れば削るほど、人間の命が凝縮されていく。

「…あまり触られても困るのだが」

シヤツの上から堪能していると、団長は戸惑いの声を上げた。何を、とは言いませんが、元氣百倍になってしまったのでしょうか。まあ私は美女ですからね、仕方ありません。

「いえ、以前泣かされた分の仕返しをしようと思ひまして」

「……………」

「冗談ですよ。仕返しの方は」

「なら何故触るんだい？」

「ドキドキするからですね」

「君の嗜好に寒気を覚えた私がいる」

右腕は引っ込んでしまった。私たち欠け友じゃないですか、仲良く触り合いつこしましようよ。

「触れますか？」と聞いたたら丁重に断られた。

「本題に入らせてもらおうよ」

一連のアウラちゃんジョークの流れが遮られ、まっすぐな青い瞳が私を捉えた。ああ、頭がシビれます。やはりキレイな瞳だ。

ヒストリアやレイス卿のもよかった。しかしこれほど純度の高いものはない。悲劇を多く見てきた者の目。染みついた血の色はしかし、青い意志の色にかき消されている。なんて罪深き瞳なのだろう。

近い、と言いエルヴィンは椅子ごと少し下がった。椅子の足の部分と床の擦れる音が耳につく。

エルヴィン・スミスが問うたのは、私がケニー・アッカーマンと組んでいたか否か。聞けばようやくゴタゴタが収まり、私の状態も安定してきたので兵法会議が行われるとのこと。

会議ではなぜ敵に協力したのか、またどこまで敵の情報を持っているかについても聞かれる。父親や外の件についても聞かれるだろう。

父親の計画、およびレイス家殺害についてはロッド・レイスに教えられるまで知らな

かった。『外』についても詳しくは知らない体で通す。

ただ過去に発狂して入院した云々は、幼い頃母親が巨人になる姿を思い出したことになります。この場合私が訓練兵になる前から、『巨人Ⅱ人間』であるとかわかっていたことになる。敵の共謀罪のほかに、隠匿罪も加えられるだろう。まあそこは父親に、「王政に目をつけられる可能性があるため他言してはならない」と言われたことにする。

アウラちゃんが調査兵団に入ったのも、お父さまに教えられなかった『外』の真実を知りたかったからです。

話を戻します。

仮に私がケニーに協力していたことを認めれば、陰で調査兵団の力になるうとしていたとして、温情判決が認められる可能性がある。私はアニやベルトルトの発言もあり、弟を使って脅されたことになっている。

またミケ分隊長らが、大規模壁外調査で見殺しにした仲間の罪の意識に苛まれる私、死のうとしていた様子を見ていた。

——それただお兄さまが行っちゃうから、逝いきそうになっていただけなんですけどね。

ミケは「獣」の巨人から私を助けた時、アウラちゃんがブレードを抜く姿も見たそう

だ。……えっ？何ですかソレ、知らないんですけど。

私お兄さまに刃を向けていたんですか？絶頂タイムで意識がなかったのに、身体はしっかりお兄さまを曇らせようと動いていたというの？さすがは私ですね。最高すぎるタイムングでしたのに、どうしてミケ・ザカリアスは私を助けたのだ（殺意）

しかし罪は罪。どんなに善行を行おうが、人類を裏切ったことに変わりない。殺されなければいいです。次お兄さまに会うときまでに、命が残っていれば。

むしろボロ雑巾のように肉体を壊してくれれば、お兄さまがとても歪んでくださるの
でお願いしたい。

して、否定した場合は間違いないとお縄だと。同時に兵法会議以降からは、私の身柄は憲兵団に移される。これは結果がどうであれ、ほぼ間違いなく確定事項だ。

今は一応「副分隊長」の身分ですが、捕まればただの「アウラ・イエーガー」

兵法会議がある前に、エレンくんに会いませんと。どれだけ傷ついているんですかねえ……（ニチャア）

「私としては、君に認めてほしい。……いや、物的証拠がないだけで、君は間違いなくケニー・アッカーマンと組んでいる。アウラ・イエーガーが認めれば、ケニーも認めるだろう。この選択を取れば、十分な温情も望める」

「認めない場合はどうされますか？」

「認めない場合は……私たちも、協力することが難しくなる。なるべくなら重い罪を科せられないようにしたい」

「なんだか、普段の団長らしくありませんね」

「何がだ？」

「いつものエルヴィン・スミスであれば「私としては」ではなく、「調査兵団としては」とおっしゃるでしょう」

前にエレンの兵法会議の前、この男と話した時もそうだ。

私が発狂したとき「地下室」にいたことをエレンから聞き、らしくもなく私に詰め寄った。

ギラギラと、輝く青き瞳。色とは反対にヤケドしそうな熱量を誇っている。今もまたその色が、うつすらとのぞいていた。

「認めれば、私は必然的にケニー・アッカーマンを動かせる「材料」を、持っていることに他ならなくなる。これにロッド・レイスと話していたことを踏まえれば、あたかも私が「物知りさん」のようになってしまいうじやあないですか」

微笑んでみせるが、エルヴィンは表情を一切崩さない。ただかすかに瞳孔が小さくなった。まるで獲物をねらうケモノだ。

「…君と会うしばらく前に、ハンジやリヴァイたちと会議をしていてね。イエーガー医師の件などを話し合っていた時、君の話になった」

ハンジやミケ分隊長は私の擁護に賛成で、兵長は中立。ほかの分隊長の意見を踏まえると、賛成と反対は半々。中には右翼索敵で部下の兵士を失った者もいるので、当然の反応だ。むしろハンジとミケ分隊長は甘めすぎる。

特にハンジ・ゾエは利用するために友好的になったわけじゃない。むしろ地球の裏側まで離れてほしい（トラウマ）

「不意に思い出したんだ。キース元団長が、幼少期の君を知っていたことをね」

エルヴィンはそこで、幼い頃の私がキース・シャーデイスと関わりがあったということとはつまり、その父親、グリシャ・イエーガーとも関わりがあったのではないのか？———と思いつつた。

エレンと関わりがあったハンネスも、グリシャと関わりがあった。

ゆえにエルヴィンの考えはほぼ確信に変わり、自身が忙しい代わりにハンジやリヴァイ、エレンたちがキースの元へ向かったそうだ。

お父さまと私が「外」にいたことを知っている人物が、壁内にはいた。キースおじさんはグリシャと友人であったことや、壁の外にいたお父さまと美幼女ちゃんを回収し、その事実をハンネスと共に隠蔽したことなどを語ったらしい。

現状の私に対しおじさんがどう思っているのか、ものすごく知りたい。

「グリシャ・イエーガーと君が「外」からきたのは事実であり、「鎧」や「超大型」のように壁外を巨人化して渡ってきたと考えられる」

ライナーやベルトルト、アニが壁内の人間を滅ぼそうとしていたのに対し、グリシャは壁内の人間に少なくとも敵対はしていなかった。ただしその娘はライナー側に加担している。

エルヴィン・スミスはトロスト区でのアニの発言が、狂言じみていて感じたようだ。アニ・レオンハートは「かわいい弟のために、裏切らざるを得なかった、とか」——などと、嘲笑するようにエレンやミカサたちの前で語った。何故あの場所で言う必要があったのか、その真意を团长は測りあぐねている。

少なくとも彼女の発言で、弟はブチ切れた。相手から余裕を奪い、自分の優位に動かすためだったのなら、アニの言動にも納得がいく。

しかしこれが普通の人間ならまだしも、エレン・イエーガーは違う。

“スイッチ”が入ると、周囲の人間がゾツとするほどの狂気を見せる。

アニはその狂気を、巨大樹の森でエレンと戦った時体験した。エレン・イエーガーは追い込めば追い込むほど、獯猛に殺しにかかってくることを。

ゆえにストヘス区急襲でアニ・レオンハートは然るべくして、もつと慎重な行動を取るはずだった。否、逆に取りらない方がおかしい。

「私にはまるで疑いの目を、君から逸らそうとしているようにしか見えないんだ。そもそもエレンを人質にして脅すような人間であるのなら、何故アニ・レオンハートは協力者の君を殺さなかった？

罨の位置を教えた時点で、アウラ・イエーガーの存在は「自分たちの正体を知る邪魔者」に変わる。だが君はいまこうして生きている。

右翼側索敵が、ほぼ壊滅した中で」

そうなる前提として「エレン・イエーガーを使い脅された」という話も、本当かどうか怪しいところだ、とエルヴィン。

そもそも本当に私が弟に命をかけるのなら、すでにその命はなくなっているはずだ――

——とも続ける。

仲間を殺した罪悪感に命を捨てるような、脆い精神であるのなら。

また人類を裏切るほどの覚悟があるのなら、必然的に調査兵団を目指した理由も、エレンを守る理由に直結するべきである——と。

団長はどこから仕入れてきたのか、私が訓練兵時代の通過儀礼の話も持ってきた。

アウラ・イエーガーはその際教官に、『私が私であるため』と語っている。

「君が『アウラ・イエー^君ガー』であるため、それが入団理由だった。『エレンを守るため』……ではない。裏切りの重さはどうにもその「私が私であるため」にあるように、私には思えてならない」

『私が私であるため』に訓練兵団入りしたアウラ・イエーガーは、自ら志願して、調査兵団に入る。

自由を求め、外へ羽ばたき戦う者たち。

エルヴィンは以上を踏まえ、私という人間が私であるために、“外”を目指そうとする人間であると考えた。

「例えば君の母親が本当は生きていて、『外』の世界にいるがゆえに求めているのかもしれない。一つ確実なのはアウラ、君の内側は私たちが今まで見てきた善人ではないということだ」

「ははあ……女が怖いとでも、言ってくれますか？」

「いや、女性が——ではなく、君が怖い。人類のためではなく、己の目的のために他を殺すことができる」

団長はウォール・マリアの件はともかく、女型の巨人との戦いで足を負傷したのは、味方を欺くためのものだろう、と見抜いてきた。

「折った足は無くなってたんですけどねえ」

「ウォールマリア陥落の時、君は本当に単騎で移動したのか？」

「鎧や女型に運んでもらった可能性を考えているなら、ソレはないですよ。単騎で移動したのは本当だ」

「君が巨人化能力者かもしれない可能性は、捨てきれないところではあるが……」

「ならお好きに実験すればいい」

「……困ったな」

少し眉を下げて、本当に困った顔をするエルヴィン。

「そう言えばキース教官が話していたらしいが、君は幼い頃あの人の恋路を応援していたそうだね」

「……わたしが記憶の曖昧な話をされましても」

「あの生き物は天使だった…」とキース教官は語っていたらしい」

「それが何でしょうか。今は仲間を裏切る悪魔のような人間だと?」

「いや、これについては純粹に見てみたかったと思っただけだ」

団長は幼女趣味だったということか。内心団長との間に深い線引きを作ったところで、「何か勘違いしていないか?」と言われる。アレですよ? 「ロリコンじゃありません、フェミニニストです」ということですよね。

スミスは無言で額に手をつけた。疲れてるんでしょうね、連日のブラック労働で。

「君はキース教官を助けたこともある。他にも君に助けられた兵士は少なくない」

一方でアウラ・イエーガーは、巨人を単独討伐できる技量を隠し、力をセーブしていた。

肯定的にとらえれば、自分の体力面を考慮し、また仲間とのチームワークを作るための方法と考えられる。ただ私は仲間を裏切つて見殺しにできる人間性を持つ。ずいぶん冷めた向こうの物言いに軽く抗議した。

アウラちゃんが仲間を見殺しにした罪悪感で苦しんでいた、と教えてくれたのは、

エルヴィン
月島さんじゃないか……！

「アウラ、君は訓練兵団に入る前に、死にたがっていた」

医療記録も残っているから、それは本当なのだろう——と。

“外”についての最後のカードに出そうと思っていたが、今切らざるを得ないよう
だ。

お母さまが巨人化する悪夢が本当だと知っちゃったからですにえ（某テト神感）と、
お話しする私。知った場所は地下室。何故いたかは「訓練兵団に入りたい」と言った私
に、お父さまが真剣にお話し合いたるため。

壁の上から注射器を打たれ蹴落とされた母。異形へと変わる母。

当然そのような事件は壁内にはない。つまり壁内（かべうち）ではない、別の場所で起こった出来
事だと判断できる。

それはどこか？少女の私は考えた。きっとそれは、“外”にあると。

「……人間が巨人化できる事実を知っていたわけか」

「何故教えなかった？——とは、言わないでくださいね。王政の目があると、父に止められていたので」

父親はそれ以上は何も教えなかったとする。これ以上語る気はない。

「物知りさんな君は、何も知らないと」

「ええ、エルヴィン・スミス」

「本当に、困るね……」

普段表情を崩さない完全無欠な団長さまのお顔が歪むと、途方もなくアヘドキする。じつと見つめていたら、青い瞳が私を映した。団長はかすかに微笑む。

お兄さまに全てを捧げていなかったら、私はもしかしたらこの人間に恋をしていたかもしれない。

「なかなか、いい性格だな」

瞬間私は反射的に、相手の首を掴んでいた。とてもいい笑顔で魅入ってしまう。私年上で、金髪で、青目の人に弱いんですよ。

いつも部屋の前にいる兵士の気配はない。この男が入る前に席を外させた。話す内

容が、内容だからだろう。

「イヤだな、アウラちゃんは清純な性格なんですよ」

「清、純……か？と、どうか一人称が痛いぞ……」

「いつからご存じで？私の本性はお父さまも気づいておりませんでしたのに。エルヴィン・スミス、あなた本当に怖い人だ」

「私も……っ、わかつたのは最近だ」

少なくとも私が敵に協力しなければ、本性には気づかなかつたという。善人ヅラが嘘なことには気づいていたようですが。

彼はピースが揃ってようやく「私」という人間像の違和感に気づき、思考し直した。まるでパズルのように。埋めていってようやく、何が描かれているのかわかる。

このピースの中には、私が嬉々として向かおうとした、トロスト区戦での遺体の確認作業も含まれていた。たしかに善行のツラをかぶっている人間が何故そこに行こうとしたのか、疑問しかないよな。

団長の首を掴んでいた手を放し、咳き込む相手の顔を食い入るように見つめる。片腕であれ私とこの人間の体格差なら、向こうに軍配が上がるだろうに。抵抗しないなんてマゾなんだろうか。

「嗜虐趣味というべきか……難儀な性格だな」

「あはあ……♡嗜虐趣味で済むなら、いいですね。私は被虐趣味でもあるので」

「……………そうか」

「まあそう簡単に、「私」をわかった気にならないでくださいね」

私の人間性の深いところまでは、わかるまい。というより理解できまい。

私は趣味の範疇ではなく、「悲劇」がなければ生きていけない。生きていることを、実感できない。人として重要な部分が欠落している。

そもそも、だ。

「私でさえ「アウラ」^私を、よく理解できていないのだから」

団長は少し目を見開き、「なるほどな」と小さく呟く。

私でさえ理解しきれていない自分を、他人が正確に理解することはできない。例えるなら私は白紙。思うがままに羽ペンで、自分が求める人物像を描くことができる。それが役者上手の所以に違いない。

私が絶対に「外」について話す気はないことを察すると、団長は席を立った。帰り際の彼に、私は告げなくてはならない。

——あなたは「答え」を知ったら、進めなくなる。

それ即ち調査兵団のみならず、壁内人類にとつての大きな痛手。

エルヴィン・スミスは進まなくてはならない。殺した兵士の分の罪を背負つて、彼自身死ぬまで。

それは私が「生」を実感する云々の前の話で、彼が生きる上で逃げてはならない運命なのだ。グリシャ・イエーガーのように、自分が始めた物語は、自分で終わらせる。

それがこの、残酷なこの世界での生き方だ。

ここから入れる保険ってありますか？

某日、ヒストリア・レイスの戴冠式からしばらく経ち、兵法会議が執り行われた。最高責任者は拷問大好きおぢさん、ダリス・ザックレー総統。会議の参加者は通常の兵士をのぞく、それぞれの兵団の上役たち。今回話の中心となるのがシークレットな内容であるため、市民の傍聴人は不在となった。

ちなみにエレンはステイさせられており、傍聴席にはいない。

議題の中心の内容は、『アウラ・イエーガーがなぜ敵に関与したのか』。

また、『敵の情報をどこまで持っているのか』について。

彼女の処遇うんぬんはオマケの話で、メインは少しでも敵勢力の情報収集である。実質彼女の弁護側の立ち回りをおこなう調査兵団も、*“情報を聞き出す”* という括りでは、味方でないようなものだ。つまり四面楚歌という現状。

もちろんハンジなどのように、純粋にアウラの身の心配をしている人間もいる。

元王政府が彼女を捕まえた際、アウラは尋問を受けても情報を吐かなかった。曰く、己は敵については何も知らない。

通常なら会議の後に尋問（暴力行使）の順だが逆だ。痛みがきかぬのなら話し合いに持ち込むしかない。『兵法会議』なぞとわざわざ形式ばった場を用意したのも、彼女にプレッシャーをかけるため。人の目に晒されれば、粗も出るとの考えだ。

イスに腰かけたアウラは、敵への関与について認めた。理由は「協力しなければエレン・イエーガーの命はない」と脅されたため。結果彼女は大規模壁外調査の際、右翼素敵側で「女型」およびアニ・レオンハートと接触。巨大樹の森に罠が仕掛けられていることを話した。

彼女を脅したのはベルトルト・フーバー。彼は次の大規模壁外調査でアニがねらわれている可能性にたどり着き、アウラに協力を求めた。ここで彼は彼女から「捕獲作戦」について聞き出し、罠の場所を団長から聞き出しアニに伝えるよう頼んだ。

彼女を協力者を選んだのは、目標のエレンの姉であり利用するには最適だったことや、副隊長としての地位。また、ベルトルトと同班であったことが選ばれた理由ではないか？——と、兵団側は推測を立てる。

さらに女型が出現した「右」の位置から、あらかじめエレンの位置（ニセ）を、ベルトルトとライナーがアニにリークしていたことがわかる。これにアウラが右翼素敵であったことを踏まえ、利用するにはむしろ最適すぎた。

しかし気がかりなのは、ベルトルトがアウラ・イエーガーに協力を求めた理由だ。女型が捕まる可能性に気づいたのなら、自分で作戦前に教えればいい。

また「女型」の脅威を知る調査兵团や憲兵团側からしてみれば、たとえベルトルトが助力せずとも、アニがエレンを奪えた可能性は十分ある。

これに対し前者は、伝える時間がなかったから。

後者については、ベルトルト・フーバーがアニ・レオンハートに「惚れてまうやろ」していたことを、アウラが語った。ついで彼女は、妖しく微笑む。

「私も愛する家族のためなら他を殺せる。それは、自分であつても。だから利用された身の上であれど、ベルトルト・フーバーの気持ちも共感できる」

大規模壁外調査や、ストヘス区の一件で仲間を亡くした兵士からすれば、アウラの発言は火に油を注ぐような内容だ。

しかして彼女の白銅色の瞳は本気だった。まるでその色は人間の死体が浮かべる濁った瞳のようでもあり、背筋をゾゾと、震わす気味の悪さが存在する。彼女は愛する家族のためなら——即ちエレン・イエーガーのためなら、人の命を奪うことができてしまう。

そして実際、アウラは仲間を見殺しにした。さらに彼女自身も命を捨てられるのも本当のことだろう。

イジヨウシヤだ。

アウラ・イエーガーの善人の皮を知っている者は彼女の本質を知り、言葉を発することもできぬ。部屋の温度が何度か下がったような気さえする。彼女を罵倒する声もなく、場はシンと、静まり返った。

その場の空気を壊すように一つ、ザッククレイが咳をこぼすと、会議はまた動き出す。新たに生まれた疑問はアウラが生き残った点だ。元々彼女が生き残ったのは、落馬し足を折ったアウラを、女型が「殺さずとも死ぬ」と判断したからだ。

だがこれについて、エルヴィンがストヘス区戦におけるアニ・レオンハートの違和感を述べる。

それはアニの言動が、狂言じみていた点である。

その説明を行いつつ、エルヴィンは女型が意図的にアウラを逃した可能性があることを語った。

ベルトルト^仲が利用した女を同情したのではないか？——など、複数の意見が出る。

だが果たして兵士たちを殺した人物が、一人の女に同情などするだろうか。するならば相応な理由があるのではなからうか？

エルヴィンはレイス家を襲い「王の力」を奪ったグリシャ・イエーガー。そして、元調査兵団団長キース・シャーデイスがまだイチ兵士でしかなかった頃——約十八年前に、壁外でグリシャとその娘と出会ったことを明かした。過去の話であれどキースの隠匿罪や、グリシャが記憶を失っていたなどの内容が続くが、もつとも重要な部分。

それは「外」に人間がいた点。まさしく壁内の人類を襲ったライナーやベルトルトたちと同じだ。

外から来た彼らの相違点は、「超大型」が人類を襲ったのに対し、エレンの前継承者であるグリシャはレイス家を襲ったものの、少なくとも壁内人類に対し友好的であった点だ。

一つ、幼い娘を抱えて父親が巨人のいる壁外を移動した部分に、はたして可能なのか疑問を持つ者もいた。

だがウォール・マリア陥落時「叫び」を使って巨人を集めながら、仲間を抱え走って

きたと考えられる「女型」の存在もある。ゆえに可能なだろう、と判断された。

そもレイス家から力を奪ったのも、力を受け継ぐ王家の人間が戦わず、滅びゆく定めを受け入れていたがためだ。現在エレンが持つ力は謎が多い。壁内の秘密に關してもだ。

だがその鍵となるのが、グリシャ・イエーガーが人類の秘密を残したとされる「地下室」の存在。

「アニ・レオンハートはアウラ・イエーガーと同じ『外』の人間……敵の表現を借りるなら「故郷」が同じ者であると知ったからこそ、強いシンパシーを感じ、そこからアウラ・イエーガーを助けるに値する感情が生まれたのではないだろうか。無論、彼女の「エレンを引け目に出し脅された」という内容が真つ赤なウソで、今も敵と繋がっている可能性は十分にありませぬ」

単純に敵とは断定しないエルヴィンの物言いに、小言を漏らしたのはナイル・ドーク。調査兵団団長の意中の相手を嫁にしても、スミスの計画には踊らされつばなしの男である。

エレンを使い脅されたとはいえ、兵団を裏切ったのは事実。以前の中央政府であれば情報が得られれば即処刑ものであり、現体制に変わっても隠匿罪や共謀罪など、重罪であることに違いはない。

エルヴィンはナイルを一瞬視界に入れ、ザックレーからその根拠を話すよう命じられた。

彼は「獣」の巨人や無数の巨人と、ミケ班&104期生が遭遇した際のアウラの命を捨てる言動から、「罪」の意識に本人が苛まれていた可能性を告げる。

また、過去にキース・シャーデイスを命がけで助けたことや、シガンシナ区に「超大型」が現れたとき敵前逃亡の駐屯兵から立体機動装置を奪ってまで戦ったこと。

さらにヒストリア・レイスを重傷ながら助け、巨人に食われかけたことについて語った。

これらをすべて人類を騙す演技と考えるなら、アウラ・イエーガーは最早人間をやめている。それこそ心のない悪魔としか言いようがない。

何より彼女は調査兵団として必要な「戦い抜く意志」を持っている。

負傷の身ながら、単身でシガンシナ区で巨人に挑んだこと。そして「獣」の巨人を前にして、右足を失ってもブレードを抜いたその姿。

アウラは人類を裏切った。だが同時に、「兵士」である。

少なくとも彼女が仲間であると、エルヴィンは言い切った。調査兵団の兵士はそれぞれ小さく頷く者や、下を向き複雑な表情を浮かべる者など、さまざまな反応をみせる。ただしシガンシナ区が襲われた際、ベルトルト・フーバーの内容が正しければ、彼女は彼とその知人（「鎧」が内門を破るため移動していたので、この「知人」はアニ・レオンハートであると推測できる）と遭遇している。

この前に彼女はエレンやミカサを救うため行動し、頭を強く打っていた。この件を尋ねられたアウラ自身は、所々記憶がなく、遭遇したかどうかはハッキリと覚えていない旨を話した。彼女についてはウォール・マリアを単騎で移動したという些か信じられない内容も残っているが、これについてはウォール・ローゼ内でブツ倒れ、一時記憶喪失になっていた彼女を保護したサシャ・ブラウス含む住人たちの証言が存在する。

この内容の真相はともあれ、ベルトルトたちがアウラに助けられたのならば、アニが彼女をかばうようなマネをしたことにも一つ理由ができそうであった。

「アウラ・イエーガーには「善」と「悪」、両方の一面が見受けられます。矛盾する両者

が存在する所以は、彼女の内側——それも、過去に存在すると私は考えます」

エルヴィンはそう続け、アウラの方を見た。彼女は曇った瞳でじいと、エルヴィンの青い瞳を見つめている。

「彼女は訓練兵団に入団する前、精神病院に入院していました。死ぬ寸前まで精神を病んだ彼女は、発狂していたのです。それも、グリシャ・イエーガーが残したとされる人類の秘密が眠る「地下室」で。当時まだ幼かったエレン・イエーガーは、父親に地下室から連れ戻された姉が自死に及ぼうとした姿を目撃したそうです」

この裏に存在する内容が、「外」につながる大きな手がかりになり得る。

団長の言葉にアウラは顔を上にあげた。窓からは光が差し込み、外の景色を映している。

最初に彼女に向く仲間の視線で、エルヴィンが彼女の本性を明かしていないことは察せた。でなければもっと刺すような視線が向かっただろう。仲間が傷つきそれに興奮を覚えるなど、異常者^{ヘンタイ}だ。

アウラの本当の異常性に勘づいた男はそれを伏せながら、「同じ兵士であり、仲間だ」と語った。

キレイごとだ。歯の浮くような言葉だ。

真つ黒な彼女を理解しながら、エルヴィンはその上で「信じる」と言う。

お得意の賭けの戦法か、とアウラは考えて、考えて……思考を止める。

エルヴィン・スミスはこの場にいる人間の中で、あるいは人類の中で、誰よりも“”について知りたいと考えている。その熱は、海を見たいと考えているアルミンよりも深いだろう。でなければ、多くの仲間を犠牲にすることなどできない。否、「人類のため」という言葉さえ、団長の夢の前では詭弁になってしまうのではなからうか。

——ともあれ、多くを犠牲にしてきた団長殿は、“外”の真実を知れば歩みが止まら
かねない。

アウラは自身とエルヴィンが似ていると感じているからこそ思う。

彼女がジークならば、団長は“外”の真実。

右腕を失い自分を犠牲にしている男に、彼女はもつと苦しみ抜いてほしいと考えている。そしてその上で地下室にたどり着き、最大の絶頂を感じるべきである——と。エルヴィンは決して、お前のような変態ではない。けれど。

(……けれど?)

なぜかアウラの口は、開こうとしている。

別に自身の本性を暴かれようが、彼女は一向に構わない。むしろそれを聞き、歪む聴衆や仲間たちの表情を拝もうという愉しみさえ存在した。

だがエルヴィンは語らなかつた。

それがまるで彼女の人間性を、試しているように感じられた。

以前、団長がアウラに面会した時わざわざ人を払ったのも、彼女が首を絞めたとき抵抗を見せなかつたのもすべて、エルヴィンは身を呈することで「信頼」と「仲間」の意志を表していたのだ。

そして実際、団長殿は本気でアウラを信じようとしている。その上で彼女の情報を引き出そうと、利用しようとしている。

変態の女の背筋に走るの、甘い痺れ。彼女は今たまらなく、興奮している。

エルヴィン・スミスは、果たしてアウラ・イエーガーという人間が、人を苦しめる嗜虐趣味のペテン師な「悪魔」なのか。

はたまた同じ人間なのか、見極めようとしている。

その答えは両方だ。

彼女は本当の悪魔であり、人間でもある。

人間の悲劇がなければ生きられない悪魔はしかして、心があつた。ちつぽけなその心の中に、時折彼女でさえ驚くほどの人間味が残されている。

例えばハンネスの妻に送った酒。それを頼んだ後になり、アウラは自分の一連の行動を疑問に思つた。

そして、うつとうしかつたヒゲ面の男の死に感情が揺らいだのだと、気づいた。

ハンネスの死によつて歪むエレンたちの表情を見られなかつたことに対し流れた涙の中には、人の死を悼む心があつたのだ。

そんなたまに姿を表す自身の“人間味”を、アウラ・イエーガーは愛おしく感じていく。

ゆつくりと彼女の口角が上がり、白銅色の瞳はドロリと溶けた。

「人は、残酷なのが好きなんだ。——でも空は青くてキレイで、下は地獄。みんなどうして空を見ないのか、不思議だつた。」

届かないから見ないのでしょいか？いえ、見る余裕がないのです。目の前にある地獄の前で、世界の美しさなんて目に入らない。

巨人になる人間たちも、私を挟んで話していた両親も、見ていなかった空。お母さまは注射器を打たれて、壁から落ちていった。

私たちは生きているだけで罪深い人間なのだと。唯一巨人化できる「悪魔の民」である。

お母さまは笑っていた。どうして笑っていた？お父さまを愛していたから笑ったんです。そして私にも微笑んだ。彼女の腹から生まれた私は愛されていた。やっぱり下は地獄だった。

この悪夢が本当であると知った時の私の気持ちは、貴方たちにはわからないでしょう。ここは「楽園」で、外の地獄を知らない人間たちが安穏と生きている。それも束の間の幸福でしか、なかったですが。

やっぱり下は地獄だ。

「生」きることには意味が必要なんです。でもこの壁の世界は窮屈で、生きづらい。『悪夢』が本当だと知った私が『外』を求めて何が悪いのか。自由の翼を求めて、何が悪いのでしょうか？私はこの楽園の人間ではなくて、もつと別の世界の人間だった。元の世界を求めて、何が悪いのか。でも求めるには進むしかない。

進んで、進んで、生きるしかない。やつぱり下は地獄で、私を導いてくれる空だけは、青い。青くて、美しい」

ポツポツと語った女は微笑みを消し、窓を見つめながら続けて語る。

「命を燃やして生きるしか、我々に術はない」

静まり返った室内。それを打ち消すように響く木槌ガベルの音。

幼い彼女が知り得ない情報を誰から聞いたのかザックレーが尋ねれば、アウラは「グリシャ・イエーガー」と小さく呟く。同時にレイス家を父親が殺害した件を含め、父の計画には関与していなかったことも明かした。

彼女は地下室で母親が巨人になる悪夢が真実だと知り、自分が外から来た人間であることや、父親が巨人になれることを知った。その力が、「悪魔の民」——「ユミルの民」を救うために、父と彼女を救った男から託され、継承したことなども。

「ユミル」とは何だ？」

エルヴィンの問いに、アウラは「壁内人類の共通の先祖」と語った。また、巨人の力

を与えたとされる『悪魔』と出会った人間であることも。

それ以上は、彼女は「詳しくは知らない」と返し、話すことはなかった。

これについては彼女がいた「故郷」の場所や、「戦士」とは何なのか、という内容にあたる。レイス卿と密会した際に語った内容は、先ほどと同じであるとした。

そうして最終的にアウラ・イエーガーは、憲兵団が正式に身柄を預かることに決まった。

幽閉生活が待つ彼女は眩く。

「空は見えますか？」

至近距離でその言葉を聞いてしまったナイル・ドークの喉からは、ヒュウ、とか細かい息が漏れた。

旋回する海鳥、翠の獵師。

窓から溢れる日の光。着々とウォール・マリア奪還作戦に向け準備が進む中、部屋の前に一人の少年の姿があつた。

憲兵に許可を得た少年は、中へと一步踏み出す。

「やあ、エレン」

ベッドの上で上半身を起こし、本を読んでいる女性。短くなった髪がかすかに開く窓の風を受け、ゆらゆらと揺れる。「ミカサのような長さになったなあ」と、ぼんやりと少年は思った。前見たよりも細くなった生白い腕に、胸の奥がツキツキと痛む。

女の瞳は弧を描き、柔らかく微笑んでいる。実の姉弟にも関わらず、何と声をかけていいのかわからぬエレンは、居心地の悪さに耳をかいた。すると女の表情はより一層、嬉しそうになる。

「まあ座りなよ、久しぶりなんだし」

「…………おう」

トロスト区が「超大型」巨人に襲われるところから始まり、王政のクーデターが終わって、今に至るまでの数ヶ月間。

人生のエッセンスを凝縮したような、あまりにも濃すぎる毎日だった。

何度も死にかけながら、しかし多くの犠牲のおかげで生き残ってきたエレン。彼はただ「駆逐してやる!!」と憎悪の感情を滾らせていた頃から、一回りも二回りも成長していった。

「イスに座るんじゃないのね」

自然な動作でちょうど女の脚があるベッドの端に座った少年に、アウラはニコニコと笑うばかりだ。「気持ち悪い」と弟の辛辣な言葉を受けると、途端に静かになった。

「エレンくんは最近元気?」

「…まあな」

「ミカサちゃんやアルミンくんたちとは仲良くやってる?」

「…ああ」

「ミカサちゃんには告白した?」

「ああ……は? 何でオレがミカサに告白する必要があるんだよ」

「ええ……まだしてないの?」

「しねえよ、アイツはオレの家族なんだし」

どうやらまだ少年は自身の感情に気づいていないらしい。鈍感少女^{アニ}の上を行く鈍感少年である。また、絶賛反抗期なのは変わらないようだ。謎に間をためて一言発している様子から、思春期の少年が発症する病を患っている可能性もある。

アウラは弟に失礼な感想を抱きながら、手に持っていた本をサイドテーブルの上に置いた。

「よく憲兵団はエレンくんに面会を許したもね」

「ハンジさんたちがかけ合ってくれたんだ。…にしても、オレの時とは違って幽閉されてるわけじゃないんだな」

「既に地下牢で『楽しいこと』はしたからね。軟禁状態にして、私の様子を見ているのよ。今、エレンくんと会っているこの時もね」

「……………」

「あああ、お姉ちゃんの前で暗い顔はしない」

「うるせえ、バーカ」

「……………クーン」

エレンのツンデレが、ツンツンへと進化した。アウラとしてはこれまで溜まりに溜まった弟の感情が爆発し、抱きついて号泣してくれる予定だった。しかしエレンは精神的にすっかり成長している。ただ時折垣間見える姉への罪悪感からくる曇った表情が、

この上ない劣情——興奮を誘う。

愛おしい、愛おしいと、抱きしめてドロドロに甘やかしてやりたい気分だ。

「硬質化実験の方は上手くいっているの？」

「ああ、壁の隙間にクモの巣みてえに硬質化で張り巡らせた結晶を作って、そこに巨人を誘い込む方法をハンジ分隊長が考えだしてな」

「ふむ、ハンジがねえ」

「結晶の中には兵士を配置しておく。その人間を捕らえようと巨人が首を突っ込んだ上から、丸太を落とすんだ」

「その方法は成功したの？」

「ボチボチな。まだデカイ奴を仕留めるまでには至っていないけど、10メートルに近い個体は倒せている」

この方法で、直接戦うリスクを伴わず、巨人を倒せるようになった。

ついでにエレンは、ハンジがアウラから毎回「体調が悪いから……」と面会拒否を食らっている、小言を言っていたことを話す。

「ただでさえ彼女には以前三日三晩ぶつ通しで話されたんだ。今度は最悪一週間語り続けられそうで怖い……。わかるでしょ、エレン？」

「ハンジ分隊長に言っておきな」

「えっ?.....やめてよ、殺生な!!」

「体調が悪いけど、本当はハンジさんとたくさん話したがってたって」

「エレン!!くん!!!」

「.....ふはっ」

姉の本気で必死な形相に、耐えきれず吹き出したエレン。

そのまま涙を流しながら笑い、途中からその表情は楽しそうなものから、堪えるようなものへと変わっていった。

「本当ッ.....はは、予想以上に元気そうじゃねえかよ.....オレ、すげえ心配...したんだからな」

「お互いさまなんじゃないかなあ、それは。アニに攫われかけたり、ライナーに攫われたり、拳句には王政に攫われて。ミカサちゃんがどれだけツライ思いをしているか」

「姉さん^デだつてオレが小さい時包丁持って死のうとしたり、足ケガしたり、また勝手に死のうとして、重傷負ってひよっこ戻ってきたと思つたら、記憶なくして帰つてこなかつたり、「オレのため」とか言つてみんなを裏切つて敵に協力したり、また足ケガしたと思つたら、オレがアニと戦つてる時急に現れて死のうとしてたり、〃罪悪感〃がどうとかで死のうとしたり、右足は巨人に食われちまうし、ライナーの野郎に囚にされちま

うし、帰ってきたと思っただら中央憲兵に捕まってるし、全部が終わったと思っただら拷問受けてたって聞かされたし、髪いつの間にか短くなってるし、オレも知らされてねえこと父さんから聞かされてたみてえだし……………。

オレは……………オレは何にも知らなくて、弱くて、いつとも守れなくて———！」

ヒスイの瞳が大きく見開かれ、そこからとめどなく涙が落ちてくる。シーツを握りしめ、床を睨むように見つめながら震わせた感情をこぼしていく少年。長らく溜まりに溜まっていた感情の栓。その蛇口が緩められ、エレンの本音が姉にぶつけられる。

アウラは小さく「うん」と頷きながら、無表情に、そんな弟の様子を見つめた。

「……………辛いし、どうしてオレなんだって思う」

「エレンくんの力は、お父さんが、グリシャ・イエーガーが託したものだね」

「オレじゃない誰かでも、きつとよかったんだ。それこそこの力はヒストリアに返された方が、よっぽどよかったんだと思う」

「うん」

「でも、オレは進まなきゃならない」

たとえ仲間を犠牲にしてもエレン・イエーガーは進む。なぜ進むのか、どこへ進む

のか、アウラは尋ねた。

その答えはエレンでさえ詳しくはわかっていない。ただまるで大いなる流れに沿うように、動いている感覚はあるのだと言う。

ただ、と少年は続ける。

「オレは『自由』が欲しい。どこへでも飛んでいける鳥みたいに、オレは生きたい」

だからエレン・イエーガーは戦う。何者にも虐げられない、自由な世界を求めている。それを聞いたアウラは目を丸くし、「そう」と呟いた。

「姉さんも自由が欲しいんだろ？そのために調査兵団に入った」

「イヤだな、私が兵法会議で言った内容知ってるの？」

「団長たちから大体のことは聞いた」

「…そう」

「それで、元の場所に帰りたいんだろ？それも多分、ライナーたちが言っていた『故郷』ってところに」

「…：…どうだろう、自分でもよくわからないかな」

「わからないじゃねエ、ハッキリしろ。帰りたいのか、帰りたくないのか」

「…わからないってば。お姉ちゃんだって悩んでるんだ、色々」

「その色々ってなんだよ」

「色々は、色々」

「オレが知らないことか？ 弟のオレでも教えられないことか？」

「教える云々っていうか、もう全部話したんだけどな…」

「何で隠してたんだよ。何で一人で抱えて黙ってたんだよ。すげえムカつくしイラつく」

「だって…」

「オレを巻き込みたくなかったから」とか、そういう理由はナシだからな」

「ズ……強情〜!!」

さながらジャ○アン。強引なエレンをミカサが見たら、火照ってしまいうに違いない。「そんなダメよエレン……」という風に。

はてさて、情緒不安定な弟をどう宥めるか、アウラは頭を悩ます。

泣いていたエレンのかわいらしい姿は引つ込んで、眉が吊り上がっている。若干拗ねた雰囲気も感じるので、これはこれで愛らしい。

これ以上何も話す気がないのは相変わずだ。彼女を懐柔しようとする積極的憲兵が話しかけてくるが、毎度肝心な部分は右から左へ受け流して、雑談がてら外の情報を聞き出している。

拷問では情報を吐かなかつたがゆえの方法。実際アウラの人間性を試すエルヴィンの策に負け、彼女はいささか喋りすぎてしまった。

「悪魔の民」というエルディア人の蔑称や、母親が巨人になった詳細な過去——ぼかして話すつもりだったが「楽園」に送られた、即ち流刑に近い罪を受けたことが明らかになっている——などを話してしまった。また「ユミル」の名や、有機生物の起源とされる『悪魔』についても。

暗い水の底で、少女が出会った『悪魔』。それは人の脊髄のような形をしており、ムカデのような存在だ。

アウラは夢の中で、その『悪魔』を見ている。なぜ砂と光の柱の世界の少女の過去(？)のようなものを見たのか、理由はわかっていない。仮に前世がその少女だったとしても、アウラの片隅の記憶にある「私」の最期は、身体に刺さった複数の矢だ。それから意識は暗い底へと沈むように消えていった。

同時に彼女の最期を包み込んでいたのは、青い空である。

もしかしたら前々世が、少女ユミル(これが正しいなら、なぜ「ユミル」の自我が光と柱の世界に残っているのか疑問が残る)だったのかもしれないし、全く違うのかもしれない。単純にユミルの子孫であり容姿が瓜二つであるから、少女に気に入られた可能性もあ

る。

「アウラ」が何者なのか、彼女はやはりわからずにいる。

ただ確かなのは、ユミルとの関係がどうであれ、前世が矢に刺されて死んだこと。それだけは確か……確かだと信じたい。死んだ人間の魂が複数混ざって転生したとか、そういう複雑な設定はごめんである。

まあ色々考えて、最終的に「ジークお兄さまがいればいいや」で終わるのが、アウラ・イエーガーという残念な変態だ。

「単純に初恋の人に会いたいからかもねえ……なんちやつて♡」

「ハ？」

▶？ エレンの ハラをつねる こうげき！

▶？ アウラは 喘へんなこえぎ声を あげた！

「キモい声出すんじゃないよ」

「お姉ちゃんになんてことするの……？ それに思い返せば、私実の弟にさつき「テメー」つ

て言われてなかった?」

「お前が昔オレによくやったんだろ」

「はい、ほら今も「お前」って言いました。「おねーちゃん」って言っただけ?」

「ハンジさんに「姉さんが巨人トークをした過ぎて干からびてた」って言っとな」

「やめて?」

昔のように問答無用で「死ね」と言わない辺り、弟の思春期はもしかしたら緩和されているのかもしれない。

久々の家族の団欒に、エレンの表情も冷ややかな視線とは別に、柔らかくなっていた。アウラもまた弟の泣き顔や苦悩する顔など、存分に堪能できたようでご満悦そうである。

「まあいいよ、言う気がねえなら。オレは強制できないし、する気もないし」

「さつき思いきり無理やり言わせようとしてなかった?」

「オレは、姉さんを信じてるから」

「……………」

「それに姉さんが話したところで、オレたちがライナーたちと戦わなきゃいけない未来はきつと変わらない」

「…うん」

「だから、オレは進む。仲間と一緒に。そして——仲間が死んでも」
「……つよく、なつちやつたなあ」

「ケガ人の姉さんはここで時間でも潰してろ。その身体じゃ戦えねえだろうし、そもそも捕まってるし」

「ふふ、私も行きたいなあ。ウォール・マリア奪還作戦」

「来んな、お荷物だ」

「じゃあ「いつてらっしゃい」ぐらい、言っておくね」

「……おう」

唇を尖らし、視線をウロウロとさまよわせるエレン。

突然の弟のデレに、アウラの心臓ヘンタイが締まった。弟が照れている。照れているぞ、

ユミル——ッ！

「ふへへ」

「気色悪い顔すんな」

「だってエレンくんが久しぶりに照れてるから」

「……ばーか」

立ち上がったエレンは、振り返らず歩いていく。そのまま扉に手をかけようとする間

際、一言。

「……………いって、きます」

アウラは「ん、つ」と、変な声を上げた。

【六章】 交通事故編

夢の国の変態

暗闇の中、少女^{ユミル}が沈んでいく。

「アウラ」は^私その子に手を伸ばすが、届かない。これは私の記憶ではない、彼女^{ユミル}の記憶だ。もう何度目かに見る夢。

彼女は得体の知れない『悪魔』と出会った。一見してムカデのような、気味の悪いそのヤロウは沈んでいく彼女の背に近づき、そして触れた。

瞬間、木々がアリののように見えるほどの巨大な巨人へと、彼女は姿を変える。『悪魔』と接触した彼女は、バケモノの力を手に入れた。

次の場面が変わると、少女から女性へと近づいたユミルが王の下にかしづく。圧倒的な力を手に入れたのだから、殺してしまえばいいものを。

踏み潰して、自身を虐げていた者たちの悲鳴を聞いていくのは、何とも心の踊る光景でしょう。

人の不幸は蜜の味。その悲劇を享受してこそ、「生」は花開く。私の場合は、だが。

ユミルはしかし、殺さなかった。王は彼女を「奴隷」と呼ぶ。彼女は奴隷だった。力を手に入れても心に課せられた「奴隷」としての在り方は、彼女から自由を奪うのです。

長年支配されてきた人間の心は、容易く歪んでしまう。

そもそも狭い世界で生きてきた人間が急に世界が広いことを知ってしまったら、どう歩めばいいのかわからなくなってしまうのかもしれない。ゆえに後ろを向いて、これまでに縛られてきた人生に奇妙な安心を覚え得るのかも：しれない。

「私」に彼女の心はわからないから結局、想像するしかない。

ユミルは橋などの建築に大きく貢献した。同時に多くの人間を殺した。すべて王の命令だ。

王は彼女に『宇佐美 ひひいん』で検索 ひひいん』した。アウラは激怒した。

王の命令に従って、ユミルはマーレを蹴散らした。巨大な巨人を前にして、機械文明に遠く及ばない重装歩兵の人間たち。見る、人がゴミのようだ。

「ひひいん」の結果、子供も産まれた、三人だ。三人の娘たち。壁内の名前の元になった

娘たちの名前。

激怒している私とは反対に、彼女は意外にも幸せそうだった。相変わず喋ることはないけれど。治るはずの舌は、ずっとそのまま。『奴隷』であるから、舌を治さないのか。それとも治せないほど、彼女は『奴隷』であるのか。どちらにせよ、ユミルに舌はない。

欠けたその部分に魅入ってしまった私は、新しい性癖の扉でも開いてしまったのだろう。

彼女の最期はあっけない。

謀反を起こし、王を殺そうとした兵士が放った槍を受けて死ぬ。王を守るために。なぜ助けたのだろうか——と、私が悩み始めたところでいつもなら夢は終わる。

しかし今日は、まだ続くようだった。

「奴隷」と、ユミルを見て言い放った王。ユミルは瞳を閉じて、そのまま死んでいった。傷を治せるはずなのに、彼女は死んでいった。子供たちは彼女に走り寄って涙を流している。可愛らしい娘たちだ。

愛らしい娘たちはその後、口元を真っ赤にして、涙も流せず食べている。ユミルを食

べている？ユミルは美味しいのだろうか。ユミルを食べている。

皮も、肉も、骨も、内臓も、髪も、目玉も、すべて娘たちの胃の中へ収まっていく。いったい彼女が死んだというのに、私は誰の目線でこの夢を見ているのだろうか。

不意に気配がして隣を見れば、少女の姿になったユミルが三人の娘と、その後ろで母親の遺体を食うように命令している王の姿を見ていた。

ユミルは憎悪も何も浮かべず、無表情にその光景を見ている。名前を呼んでも、彼女は反応しない。この彼女すら、ユミルの記憶なのかもしれない。手を握ろうとしても、触れることはできなかった。

変化のない表情の中で一滴だけ、蒼い瞳から涙がこぼれ落ちた。空の色だ。

王は、ユミルの死骸に命令する。

ユミルの力を娘たちが受け継いでいく。その娘たちは子を産んで、その力を永遠に引き継がせ続ける。王亡き後も、エルディアの君臨を。

ユミルが消えていく。私も消えていく。

次の場面は砂と柱の世界。そこで彼女は巨人を作っている。王の命令に従って、死ん

だ後も “奴隸” で居続ける。

彼女はなぜ王の命令に従い続けるのだろうか？ “奴隸” だからか？

しかし死んでまで従い続ける義理なんてない。私だったら転生して、ジークお兄さまを見つけて出して生涯ストーカーする。

『ユミルちゃん、教えてよ』

私の問いかけに、彼女は反応しない。せつせと砂をこねこねして、桶に入れた水を運んできて、またこねこねする。全ての巨人を作っているのが彼女であるなら、鬼畜すぎる労働環境だ。恐らくエレンの巨人もユミルが作っ——、

『お兄さまもこねこね♡してるのの?!?!?』

ユミルちゃん!!ユミルちゃん!!!ああん無視しないでユミルちゃん!!!ユミルちゃん!!!!!!

その時、服の裾を引っ張られた。

よだれやら涙やら、他にも色々ビジビジヨになっっている美女の横に、ユミルちゃんがいる。向こうにもこねこね中のユミルちゃんがいるんですがね?ということは、今隣にいるのは……本物のユミルちゃんということですね。

『お兄さまこねこねしてるのの?!?!?!!
ねえ、ねえ!!!!
』

何だか無表情の中から読み取れる表情が、「そういう意味で見せてるんじゃないんだよなあ…」と物語っている。

お兄さまこねこねを自慢するために見せてるんじゃないんですか? 王——カール・フリッツが、娘たちにユミルちゃんを食べさせたというトンデモな内容があった気もしますが、大事なのはお兄さまこねこねの部分です。むしろ世界の真理はお兄さまこねこねです。断言できます。

お兄さまこねこね私もしたいです。させろ(豹変)

お構いなしに彼女の肩を掴んで揺すりますが、相変わらずユミルちゃんは無表情だった。

『いいなあ…アウラちゃんに隠れてお兄さまこねこねしてたんだ。ふーん、そうですか、ふーん……』

傷ついたので、もう起きて現実に帰ります。ウォール・マリア奪還作戦ももうすぐであり、それまでに私は英気を養わなければならぬのです。

『…帰れないんですねえ』

当然か。この夢ないし記憶を見せているのは、ユミルだ。

彼女は私の脳内に、何をするのか尋ねてきた。どうせアウラちゃんのやることどころか、世界の全てがお見通しなクセに。反対に私はユミルちゃんが何を目的としているのかわからずじまい。

『一つの可能性を私にもたらしたのは、ケニー・アッカーマン』

私の瞳が変わった、と話していた男。

ユミルちゃんが勝手に瞳を変えただけなのかもしれない。それこそケニーが私から、ウーリ・レイスの面影をより強く感じるように。

ただ「もしも」を考えてしまった。

エレンくんが今発症している年頃の男の子特有な、「俺には秘められた力が——」云々の話。

私は巨人の力を継承していかないわけですし、本来ならあり得ない。しかし一つだけ過去を振り返って、不自然な点に思い至ってしまった。

それは私がウォール・マリアの時に、巨人におどろ食いされた過去。

長年、お父さまの最高の最期を飾るバージンロードに手向けられた花束（私の死）かと思っていました。

そして最終的に、娘の死を見てお父さまの心はポツキリいったわけだ。

だがこれまでの展開を考えて、わざわざエレンくんが「始祖」の力を使っているように見せかけるのだしたら、よっぽどフリーダをお父さまに食わせてエレンに「始祖」を継承させた方が、ユミルちゃんの苦労も減った。

その場合王家の血筋を引く私は、エレンくんと接触できなくなるのですが。触れかけたらユミルちゃんが現れて、私に「ステイ！」してくれればいい。

———
 というかそもそもその話、死んだ私はなぜ生き返ったのか？

一回目はお母さまの胃の中でドロドロに。二回目はおどり食いだ。

一回目は胃に収まる前に意識が飛んだので、少々判定がし難い。しかし二回目は間違はなく絶命した。

ユミルちゃんに人を生き返らせる力があるのなら、それこそ彼女自身が生き返ることだってできるはずだ。

『教えて、ユミル大先生』

ユミル大先生は唇を尖らして私から視線を外し、口笛を吹いている。音が掠れて、あまり上手ではないその音。舌はなくても口笛は吹けるといふ、豆知識を得ました。ありがとう、先生。答えは教えてくれないそうですけど。

個人的には人が生き返るなんて話、信じられない。命をユミルが与えられるなら、彼女は神以上の何かだ。それこそ『悪魔』のヤロウのような。

人が決して及ばぬ領域。彼女は今なおカール・フリッツの「奴隸」として、存在しているようだ。

しかしユミルは人間だ。神でも悪魔でも、奴隸でもない。「フリッツ」の名前さえ、いらない。

ユミルは、ユミル。

それ以上でも、それ以下でもない。

仮に私が死んでいないとして、一度目に丸呑みにされた身体を治すことは可能なのだろうか。巨人化能力者も傷が治りますし、それくらいならばユミルちゃんもできそうに思える。

二度目は頭を最後に食われて絶命した。彼女はその、完全に死ぬ前の絶妙なタイミン

グを見計らい、私をこの砂と光の柱の世界に取り込んで修復したというのはどうだろう。

前提として修復するには、この世界でないとダメなはずだ。巨人化能力者と違って自動治療は起こらない。ユミルがこの世界で巨人を作っていることを鑑みても、やはり彼女が私に手を加えるには現実では無理なのだと推測できる。

まあ色々と考えて行き着くのは、やはりアウラ私が好待遇を受けすぎている点だ。いくら容姿が似ているからって、ここまで優遇されているのはおかしい。少なくとも「お前のごと好きやで」オーラは、無表情でもひしひしと伝わってくる。そんなお前が私も好きや。

ユミルちゃんが手を握ってきた。：ブンブン振っている。

彼女が私に良くしてくれる理由はわからないままとして、これまでのことを照らし合わせる。

わざわざフリーダを殺すようお父さまにお願いする、遠回りな方法を選んだ点。

ユミルたそにはエレン・イエーガーという存在が必要だ。そんなエレンくんにも多数現

れている、「始祖」の力の発動ポイント。やはりエレンくんが継がせた方がよっぽど都合がよかつたでしょう。

ユミルちゃんしかし「始祖」をエレンくんには渡さなかつた。

ならばその始祖の力はユミルの元に戻つたのか。

これについては記憶改ざんの場面を見たので、確かだと思います。ただ、なぜ百年なかかわいらしく感じる時間が経つた頃に力を己の元に戻したのか、疑問が残る。

ユミルの目的が成就するのが間近なのだろうか。

それとも別の理由があつたのか。

そして、私が復活したタイミング。私がおどり食いされた後にフリーダは殺された。ついでお父さまの精神崩壊シーンを見た後に、私は食われてから数日経つて復活したのです。

一回目の時は、そう時間がかからず復活したようですし、二回目の時の不可思議な空白の時間が気になる。すぐに復活させれば、ユミルちゃんも記憶改ざんだなんだと忙しくはなかつたはずだ。

お隣で繋いだ手をブンブンしているユミルちゃんの様子からして、長く一緒にいたいから引き止めていただけなのかもしれない。私も彼女を膝枕している時間は悪くな

かった。何だかあったかいような、そのままその熱で溶けて混ざり合うような、不思議な感覚があった。それがどうにも私には、心地よかったらしい。

まあ色々と話しましたが、結論はすでに出ている。

というより、実践済みである。

純粋な実践理由は、「瞳が変わったのなら、ワンチャンユミルたその力を使えるんじゃない？」という、不埒なものだった。どの結果でも囚われの美女になることはわかっていたからこそ、現状を打破するカギが欲しかった。

調査兵団がウォール・マリア奪還を目指すのは、ライナーやベルトルトたちも予想できるところだ。彼らの狙いは「始祖の巨人」。

つまり巨人を一時であれ操った、エレン・イエーガー。

ユミルちゃんがエレンに手を貸したのも、後のウォール・マリア奪還作戦を見越してのことだったのかもしれない。

「始祖」を奪わなければならない戦士たちは、必ず訪れるエレンと調査兵団を待っている。

そして調査兵団もまた、敵の狙いがエレンであることがわかっている。ゆえにライ

ナーたちがスタンバっているのを予想しているだろう。

お互い戦いを免れないのは理解しており、命懸けの争いとなる。

「始祖」の関わるこの戦いに戦士長たるジーク・イエーガーがいはいはすがない。お兄さまが待っているその場所に私は絶対に行けないわけですから、生きていたって仕方ない。

もう十分待った。十八年も待った。赤ん坊が大人になる年月を耐えたのだ。お兄さまが会いに来てくれたのだから、今度は私が行く。会いに、行って………正直どうしてもらいたいのか、自分でもまだわからない。

けれど会いに行きます。

愛に、生きます。

そうしてこの窮地を脱するカギを探した私。

ケニーおじちゃん再び現れるまで、本の紙で指を切つてみたり（自傷）、介護してくれる憲兵の肌に接触してみたり、念じてみたりしたが、特に変化はなく。

何がいけないのか考えた時ふと、ハンジ講座を思い出した。

彼女曰く、巨人化能力者が巨人化する際、自傷とは別に「目的」が必要なのだそう。巨人から「巨人化したい」と思うのではダメだ。大切なのは「何を」するために、巨人

になるのかということ。

例えば「敵を倒す」であったり、「仲間を守る」であったり。

その「目的」の大小には大きな差がある。小さいものでは「スプーンを持つ」という意識でさえ、「目的」になり得てしまう。

これらはハンジがエレンくんを実験していた時に判明した内容である。

以上を踏まえ、私は「目的」をもった行動に変えた。

この「目的」は言わずもがな、「お兄さまとイチヤイ……………会うこと」である。

結果他人と接触した時、大きな変化が現れた。

バチツ、という頭の中に稲妻が落ちたような衝撃の後、歪に分かれる細い光の道のようなものをつとて見えた、「私」ではない他人の記憶。

その兵士の記憶をのぞく私は第三者視点である。しかして私の意識は、その人間の主観と同調している。私が私ではない感覚。その中に身を浸していると、私が誰なのか、わからなくなっていく。

私は「アウラ^私」ではなくその兵士だと、思い込むなんて生やさしいものじゃなく、覚し始めたところで、弾けたように私の意識は現実に戻った。

呆然とする兵士に、咄嗟に「目的」の上で「忘れろ」と念じてその場は事なきを得た。

しかし身体は天地をひっくり返して激しく揺さぶっているような感覚。立つことはおろか、寝ることさえ出来ぬほどすべてが気持ち悪い。

外気に触れる肌も、瞼の裏と触れている眼球も、耳に入ってくる音も、動く心臓も、血液が流れる脈の感覚も、「私」という精神が身体の中に収まっている感覚も、何もかもが気色悪い。まだ全身にナメクジが這う方がよほどマシである。

そこから正気に戻るまでに、丸一日。

身体と精神が「私」に戻ってくるまでに数日かかった。

この鬼畜な症状は私が王家の血を引く点と、「不戦の契り」が影響しているのかもしれない。憶測にすぎないですけど。

しかし勝機は見えた。果たしてユミルちゃんが力を貸してくれただけなのかもしれないが、それでも十分。

その後ケニーと再会し、王政がヒストリアとエレンの引き渡し命令を出した等の内容を聞いたのだ。

他人の記憶をのぞくことはできない。しかし連発はできない。すると「私」が私でなくなつて、精神がマトモに戻つてこれなくなる。

改ざんは微々たるものしかできない。それこそ壁内人類全てなんて、大掛かりなこと
は不可能だ。精々同時でも数名、それに部分的な何かを忘れさせることしかできない。
これについても精神がドツと疲れる。

巨人化はできません。傷も治りません。というかお兄さまにつけてもらった傷を治
すわけがないだろ。

やはり限定すぎる内容を考えて、私のこの力はユミルちゃんから借りている、という
解釈でいいのだろう。

普通の人間では不可能だと思うので、おどり食いされた後にユミルに身体を少し弄ら
れたのかもしれない。別に気にしませんかね。なぜ胸は大きくしてくれなかったん
で
すか？

ハンジの面会を拒否していたのは、本当に体調が悪かったせいもある。でなければ、
憲兵の兵士も流石に通すでしょう。

逆に言えばそれは、何度も私が力を試したことに他ならない。

此度の目的に必要な情報は得ている。

「眠りの姫」の居場所はウォール・ローゼ北のユトピア区の地下深く。

そして私の居場所は憲兵団の本部がある王都ミットラス。詰み案件かな？内門の憲兵の目をかい潜るのが至難の業ですね。

でもやるしかない。たとい無理ゲーであろうが、何だろうが。

『お兄さまに、会うんだから』

そう呟いた私の手が、強く握られた。

ブンブン振られていた勢いは収まって、碧い瞳が私をとらえている。普段無表情がデフォルトの彼女はうつつすらと微笑んでいた。おっふ…こんなところに天使が。

『
』

パクパクと魚のように開いた口。そんな可愛らしい表情で『アウラ』なんて呼ばれたら私、まだ死にませんが死にます。

兎にも角にもユミルちゃんが嬉しそうなら、私も嬉しいです。

「私」はあなたとおなじになりたい。

誤作動、作動中・・・

ウォール・マリア奪還作戦に向けての準備期間。

その間に肉弾戦を必要としない、巨人のうなじへ向けて巨大な丸太を落とす対巨人伐採兵器「地獄の処刑人」の開発がされた。また、ケニー・アッカーマンの手に渡っていたヒストリアから奪った注射器——それがエルヴィンに移され、効果について調査兵団の兵士に伝えられた。

どんな重傷者でも生きてさえいれば、注射器を使って無知性巨人にさせ、生存の糸口をつかむことができる。

これはウォール・マリアで待ち構えているであろうライナーやベルトルト、「獣」の巨人を見越しての説明だ。

無知性巨人になった者は、知性巨人を食らうことにより人間に戻れる。

これはエレンが王家の血筋を持つロッドとヒストリアと接触したことで見た、グリシャ・イエーガーの記憶により得た事実だ。

注射器を打たれたエレンは知性巨人の父親を食らうことで、人間に戻った。

注射器をエルヴィンから託されたのは、リヴァイ兵士長。

この一本の使用権限は、人類最強に預けられることになった。

彼は裏でエルヴィンを止めた。右腕の無くなった団長に戦闘能力はない。あるのは変わらず人類を先陣切つて引つ張り続ける頭と精神と、仲間の犠牲を背負い続けた背中だけ。

「俺は、止まつてはならない」

それがエルヴィン・スミスが兵長に返した内容。

同時に、たとえば人類を犠牲にしても「地下室」へ行きたいこと。自分の手で、人類の秘密を明らかにしたいことも語った。

団長が動かずとも、リヴァイ班やハンジ班、ミケ班など、動ける戦力は大いに残っている。オマケに本作戦での活躍はまだ見込めないものの、クーデター後から一段と世間の目を集めるようになった調査兵団に編入してきた、新人も多数いる。

まるでエルヴィンが底なし沼に片足を突っ込んでいる印象を受けたリヴァイは、まさか、と思つた。

以前の「兵法会議」以来、雰囲気が変わった者が複数いる。

あの場に居合わせた者は全員、目を逸らすことの許されない一人の女の狂気を見た。

それは長らく、ひた隠しにされていた顔。裏返しになっていた赤い皮を戻してみると、元の女の肌が見える。それこそが善人ではないアウラ・イエーガーの本性であった。ライナーたちと同じ「故郷」に戻ろうとするアウラ。弟のためなら彼女は仲間であろうと殺せる。「非人間性」を持つている一方でしかし、彼女は「人間性」も持っている。

そんな共存してはならない両面を持ち合わせている女の姿は、歪であった。

身体も精神もボロボロになっていいるであろう彼女は、人が魅入ってしまうナニカがあった。あるいはそれは「不完全の美学」なのかもしれない。

美術に於ける作品のような、「完全」ではないからこそ人の心を惹きつける。

「完全」が謂わば人の憧れならば、「不完全」は人間が完全にできていないがゆえに、親近感を抱きやすいものなのだろう。

アウラ・イエーガーの姿に心をつかまれてしまった者もまた、彼女の「不完全」さに同調したのだろう。そして彼女が掲示した「進むしかない」という言葉を、そのまま丸々

呑み込んでしまった。

エルヴィンもまた同じなのかとリヴァイが詰め寄れば、団長は青い瞳を大きくする。

「俺が俺として死ぬことは、きっと許されないだろうと思ったんだ」

——子供の姿をして、手を挙げる少年エルヴィンではなく。

——白馬にまたがり、天へと剣を掲げ仲間たちを進ませる調査兵団団長、エルヴィン・スミス。

頼むよ、と団長に告げられたリヴァイの手にある注射器の入った箱。

それがミシリと、音を立てて軋んだ。

???????

思春期を飛び越して、秘めたる力に目覚めてしまった系美女は私、アウラちゃん。

ただし力は「私 t u e e e e !」ムーブをした代償に、もれなく精神崩壊がついてくるもので、しかも使える部分に縛りがある。

暫くの間お兄さまに会いに行く方法を色々と考えましたが、やはり難しいです。

まず幽閉されているアニちゃんの居場所はウォール・ローゼの北にあるユトピア区。壁内を移動するのは困難なため、ウォール・ローゼの外側を走るとして、シガンシナ区に着くまでに余裕で数日かかる。

巨人化時間には限りがあるだろうし、そもそもアニと私が合流することが難しい。

私の現在地は王都ミットラス。憲兵を操作することはできないので、脅して移動する他ない。そのあと殺すか、私のことを忘れさせる。だがしかし、それで検問を複数突破するとなると無理がある。

それに私やアニがいなくなれば騒ぎになる。数日前から行動を起こしたとして、すぐさま調査兵団にも事情が伝わるだろう。そうなると奪還作戦そのものが行われなくなる可能性が高い。

お兄さまに会うことはできても、調査兵団 v s 戦士の戦いが押めなくなってしまう。ユミルちゃんのエレンくん始祖化（偽）を踏まえると、両者の戦いが起きなくなつて

しまうのは彼女の望むところではない。

私もぜひ「兵士」だった時の仲間を殺すライナーやベルトルトの姿、そして無惨に散っていく兵士たちの姿を見たいのです。

私単独でも移動は難しいでしょう。ひとえに私がアニ・レオンハートを連れて行くのは、彼女に売られた恩を返すためですね。

無論、私が生きてしまいマーレに行った時のことを考えて、「私がアニちゃんを助けたんやで？」アピールをして、こちらの立場を少しでも優位に置けたらという打算的な考えもあります。ベルトルトくんには悪いですが、眠り姫に目覚めのキッス（意識）をするのは俺だ。

ちなみに私に恩を返す心があったのね、と驚いている皆さん。アウラちゃんにも恩を仇で返す以外の優しさはありません。

ぜひともアニちゃんには現実から逃げないで、またこの世界で残酷に生きて苦しんで欲しいです。

——とまあ、結局方法が見つからず悩んでいた私。

夢の中でユミルちゃんに呼び出され、彼女の世界で砂のお城と一緒に作っていたとき、私はひとつ閃いた。

エルディア人は始祖ユミルとカール・フリッツの子孫である。そして「ユミルの民」は揃って巨人になれる。その非人間性やかつてのエルディア帝国がおこなった民族浄化が積もりに積もり、現在の中指を立てて「タヒねやオラアアン」という諸外国のヘイトがエルディア人に向かっている。

特にその矛先は壁内の人類へだ。

我々ユミルの民はとどのつまり、「血」によって繋がっている。

そのつながる先というのが、ユミルちゃんだ。即ちこの不思議な砂と光の柱の世界。私は当初からこの場所を、何者でもある場所というような認識を抱いていた。漠然とした印象だったが、強ち間違っ^母てはいなかったのだろう。

例えるなら私は今、ユミル^親の腹の中に回帰している。羊水に浸かりながらお城を作っているのだ。…何とも奇妙な表現である。

「それでね、ユミルに聞きたいことがあるの」

『?』

小首を傾げ、城の頂上部分を作るユミル。

私は過去に二回、おそらくこの世界でユミルに身体を修復されて現実に戻ってきた。しかしてこの世界の「私」は、精神で存在している。無論、今砂に触れている感覚はある。それどころか五感がイキイキとしている。現実と違う点は、右足があるところでしょう。

この世界で肉体のように感じているものは、精神から生じる感覚的なものなのだと思う。

表現が難しいですが、例えば夢で、自分の身体を動かしているような体験をしたことはないでしょうか？それをよりリアルにした感覚が、この世界にいる「私」なのです。

そう考えると、この世界で治された私の身体は、ユミルにプログラミングされた情報に過ぎないのかもしれない。

実際に治されるのは巨人の肉体の中。巨人は再生能力がありますし、それを活用して彼女が刻んだ情報が、私の身体に適用されているのだろう。

結構この考えが相応しい答えな気がする。

それで、だ。

血の繋がりにや私の再生した肉体を踏まえて、ユミルちゃんに尋ねたい。

「人体をワープさせることって、できないかな?」

ユミルちゃんは城の細かな装飾に移っていた手を止め、私の顔をじつと見つめる。かく言う私は、城の下のそり立つ岩肌を表現するべく尽力している。ちなみにアウラちゃんに芸術センスはなかったりします。ハンジ・ゾエの勉強会で巨人を描かされた時は、長い間の後に「何これ……バケモノ?」と言われました。

ユミルたそは暫く私を見つめた末、砂のついた手をゆつくりと上げる。そして握られていた手の形が変化し、親指が立てられた。OKらしい。

思いましたが彼女、かなり私に毒されてきていますか?エルディア人の始祖がアウラ色に染まる……背徳的で興奮しますね。

しかし、問題点はあるようだ。

アニちゃんも連れて行きたいことを話した上で、テレパシーの要領で伝わった内容を端的に表すと、以下の通りになる。

まず私の精神ならばまだしも肉体の情報に伴う変化を起こすには、仲介役となる巨人

の媒体が必要らしい。巨人化能力者はこれをスキップできるとのこと。より密接に、ユミルの世界と関わっているからだそうだ。

また仲介役の巨人は、見張りの兵士を巨人にさせることになった。

対し私はユミルから力を借りているだけの人間。要は、巨人の体内に入らないといけない。食われるのはちとキツイですがまあ構いません。——えっ？巨人のお腹を開けて体内に入れるコースもあるんですか？ならそちらでお願いします。

次にアニ・レオンハートの結晶化問題ですね。

彼女は現在引きこもり状態。ユミルちゃんのイメージだと、壁の礎になっている大型巨人と非常に似た状態らしい。アニは追い込まれて結晶化した。謂わば「世界の拒絶」と表現してもいいのかもしれない。

結晶をどうにかするには、彼女の心を動かすしかない。そしてその心は今なおぼんやりと、現実と夢の狭間を彷徨っている。これについては彼女をこちらの世界に引きずり込めばいいとのこと。説得は私が担当します。

最後はこの方法を行った後、ユミルちゃんはかなり疲れてしまうことだった。

当分私をこの世界に招くことができないほど、彼女は消耗してしまいうらしい。

それは嫌だ。でも、私はお兄さまに会いたい。会わなければならない。けど……。

「——え？」

何で私、悩んでいるんだ？

そんなのお兄さまが一番に決まっているだろ。なのに何で私は今悩んでいる？

最終的に選ぶのはお兄さまだ。しかし悩む時間が存在するというのが、おかしい。私ってそんなにユミルのことが好きだったのか？

『 』

ニパアツと、笑ったユミルちゃん。

私の心臓はその位置がありありとわかるほど、強く脈打っている。いつも無表情な彼女が天真爛漫に笑うのはずるい、ずるいぞ。

最初に出たのは深いため息で、頭を押さえる。自然と彼女につられて笑った自分が、自分ではないかのような気がした。

「私」は今ここにいて、ユミルの側にいる。

私は誰なんだろう。自分の手から自分が離れて行く気がする。しかし、離れていった私の場所には、私がいて——？

『！』

聞こえるのはだれかの頬を両手で、パシパシと叩く小さな手の音。その手の主はユミル。そのだれかは、だれかは………そうだ、私だった。アウラ、アウラ・イエーガーだった。

ジーク・イエーガーの全てを愛している、アウラちゃん。

「いっばい」

寂しいけれど、永久の別れというわけではない。ユミルちゃんとはまた会えます。もし死んだらこの世界にお邪魔しますし。

生きた場合はそのまま生きるでしょう。

本当にお兄さまと会ったら「私」がどうなってしまうかわからないから、選択肢は複数残しておいた方がいい。

ひとまずスポーン地点はウォール・マリアの内側、シガンシナ区から少し離れた東の壁沿いにしてもらった。

敢えて中央から離れた壁沿いであるのは、「遅刻遅刻ウ☆(脳内再生:お肉少女)」と、パンを啜えて訓練場まで突っ走る訓練兵の如く、バツタリ調査兵団と出会さないうようにするためです。外側は内側より純度の高い巨人シテイなので却下だ。

私とユミルの関係性や、一部「始祖」の力を使える情報は戦士側には控えたい。ただしこの世界で私と接触するアニは別である。それを見越しての話し合いだ。彼女の弱みは頭を覗いて見させてもらおう。

対し突然消えた私とアニに驚愕待ったなしの壁内についてですが、この件が終われば去ります。そのためのアニ・レオンハートという保険である。

所詮マールレ側は私がどのようにしてアニを救出したかはわからない。これは壁内人類も然り。

マールレには憲兵の私兵をこっそりと作って、逃げる算段を作っていた——で十分だろう。アニたそが結晶化していた事実を戦士たちは知らないのです、ユトピア区で憲兵に拷問されていた(アルミン・アルレルトがベルトルトに言ったウソ情報である)と、話せ

ばいい。

そして裏でアニの脱出を手引きした私は、調査兵団が動いたのを見計らって彼女と逃亡した――。

壁内とマールレ側で情報の差異ができるが、敵同士共有することは現時点ではまずない。将来はわからないが、その頃に私が生きているかもわからないし、面倒ごとになったら死にます。ジーク・イーガーを感じる事ができればそれで、私が過ごした虚の十八年の想いは果たされる。

でもその前に、十三年の寿命の呪いをどうかしなければならぬのか。

――案外まだ、死ねないのか。

お兄さまを苦しめて、幸せにするまでは。

生きることには難しいな。死ぬのは簡単なのに。

これについてユミルちゃんに尋ねてみましたが、彼女はせっせと城を作っている。

返答は望めなかったので、仕方なく私も城作りを進めた。

結果私とユミル作の、全長数メートルに亘るビッグサイズの砂の城が出来上がることに

になる。

私、何やってんだろ（賢者タイム）

3 P

「君の大切なものは、父親か」

そう言い、アウラ^{悪魔}は微笑んだ。

現実と夢の境界線。まるで一瞬のような、はたまた悠久の時を茫洋とした意識の中、彷徨っていたアニ・レオンハート。不思議と外にいる人の声だけは、聞こえていた。

ところが突然彼女の意識はさらに奥へと引きずり込まれ、気づけば地平線まで続く砂と、光が柱を作りあげる奇妙な世界にいた。

寝転がっていた彼女はそのまま、枝のように夜空に広がる無数の糸を眺めた。それはウネウネと、遙か遠くまで広がっている。その行き先がどこなのか、ぼんやりとした思考で手を伸ばす。そこで見覚えのある兵士服の袖が目に入った時、彼女は思い出した。自身がエレンとの戦いに負け、結晶化したことを。

「私は、いったいどうなって…」

とうとう地獄にきてしまったのだろうか。静寂に包まれたこの世界は不思議と、地獄のように思えない。反対に天国のようにも思えなかった。妙な安らぎを覚えてしまう自分に、ア二は困惑する。

「え」

その時。四肢を投げ出していた彼女の上に、誰かが覆いかぶさる。

突如ア二の上に跨ってきた人物は、彼女の顔の横に手をつく。作り物のように美しい顔立ちには見覚えがあった。ただし髪の色は大きく変わっている。

擦れ合う服の感触はまるで本物。現実であるかのように、情報の一つ一つがリアルに伝わる。

「アウラ、イエーガー……!?!」

少女漫画で幾度と繰り返されてきたシチュエーション。もしこれがベルトルトだったら、草食に見合わぬ強引さに思わずときめいてしまったかもしれない。

……と、例えに出したのがベルトルトということに気づいたア二の思考は、さらに停止する。

女の顔は、すぐ側にまで迫っていた。

我に返ったアニが足を曲げ腹を蹴り飛ばそうとした矢先、額同士が触れ合う。視界の隅に映る色素の濃い髪は頭上の光を受け、うつすらと金色に輝いた。

「少し、君を見せてね」

瞬間、巨人化する時身体に流れるような衝撃がアニを襲う。悍ましい感覚がついで身体中に広がった。

頭の中を、自分ではない誰かがのぞいている。痛みはない。だが麻酔をかけられた上で頭蓋骨を開かれ、脳味噌をいじっている様子を鏡越しに見せられているような——ともかく、ひたすらに気色が悪い。

そして拷問に等しい時間を耐えている最中、アウラは彼女に微笑み、アニ・レオンハートの大切な人を言い当てた。世界を敵に回しても、アニにとっては代え難い人物。彼女が望まぬ道に進めさせた人物であれば、ぶつきらぼうな裏には確かな愛情が存在する。

「わたつ、しに……何をした!!」

己の記憶をのぞいた犯人の胸元を突き飛ばし、上半身を起こしたアニは問い詰める。

頭は未だジクジクとした気持ち悪さが残っていた。

砂の上に盛大に尻餅をついたアウラはそのまま倒れ、両手で頭を抱えるようにし動かなくなる。聞こえる荒い息は、呼吸が儘になつていない。

「…大丈夫かい？」

アニの問いかけに返答はない。女を突き飛ばした時に感じた軽さ。体格が優つているライナーをいとも容易くあしらえてしまうアニだからこそ、力任せに相手を押し退けた行動は彼女らしくなかった。

であるというのに簡単に突き飛ばせたことには、理由がある。

アウラのスカートから覗く脚は片方欠けている。残っている脚も、兵士らしからぬ細さだった。

敵に協力したとして、幽閉されていたのは想像に容易い。だが仮に足を失うほどの非人道的な拷問が行われていたのだとしたら、思うところもある。

——いやその前に、疑問はたくさんあるのだが。

「…悪かつたよ」

アニは起き上がるのを手伝おうと、手を伸ばす。

そして腕を掴み引き上げた時、顔を覆っていたアウラの片手が外れ、白銅色の瞳が長い前髪の隙間から垣間見えた。

「おにいしやまあ……………♡」

濁った瞳はグスグズに溶け、潤んだ側から涙が溢れている。しかしてその色は悲しみではない。もつと卑しく、妖しく、淫らな光景である。

口元は半開きで唾液が糸を引き、艶めいた吐息が漏れている。これが男であったなら、美女が発情している姿に元氣百倍（意味深）になっただろう。

だが相手は女でしかもクール美少女。

純粹にアニは、ドン引きした。

???????

変態の国から帰ってきたアウラは、己の痴態に頬を染めながら一つ咳払いする。いくら変態美女とて、我に返った時「うわっ……」という白い目で見られれば、羞恥が湧く。リスク覚悟でアニの記憶を覗いたまではよかった。他者の記憶に浸かるほど彼女の自己は「アウラ」から、その他者へと変わっていく。引き際を間違えればアウラが「アウラ」ではなくなってしまうということであり、連続して同様のことを行えば、いよいよ精神崩壊は免れなくなる。

情報を得られるというメリットに対し、危険があまりにも多いこの能力。

そのため最小限にアニの記憶の糸を辿っていたアウラは、「アニ」になりかけながら少女の父親の情報を得た。

“戦士”にすべく厳しくアニを躱けた父親。少女の望まぬ道であったが、彼女は最終的に戦士となり、「始祖奪還計画」の大任を仰せつかった。

そんな彼女に父親は、戦士の地位も名誉マーレ人の称号も捨てて帰ってくることを願った。厳しい父親が見せた涙。血の繋がらない親であったにも関わらず、そこには深い“愛情”があった。

アニ・レオンハートの大切な存在が父親であると分かったアウラは、意識を戻そうとし、見てしまった。

——今日も訓練頑張ってるね、アニちゃん。

兄だ。アニの隣に兄。

瞬間、アニ色に染まっていた女の意識は「アウラ」になり、さらにメーターが吹っ切れた。

マールに住んでいた頃のグリシャの面影を色濃く残すジークの姿。かつてユミル大先生にボーナス支給してもらった時よりも、少し大人びた印象を受けた。

眩い金髪も、麗しい青い瞳も何もかもが彼女の脳を破壊する。アニと同じ訓練中だったのか、額から流れる汗はさながら聖水の如し。

アウラはこの時理解した。世界はジーク・イエーガーを中心に回っていると。いや、そんなことはジークが生まれる前から決まっていたことであり、彼女も周知の事実だった。

兄がいるからこそ世界は成り立ち、逆にはない世界は無価値の存在である。ハレルヤ人々よ、この争いばかりの世界にはやはりジーク教が必要なのだ。

そうしてアニに存在するジークの姿を追い戻ってきた時には、アウラは完全にイッて

しまっていた。

ビチヨビチヨの美女から距離を置くアニに、段々とその冷たい視線が羞恥から興奮に変わっていく変態^{アウラ}。そして、変態の後ろからひよつこりと現れたユミル。

同時刻、現実ではウォール・マリア奪還に向けて調査兵団が死地に赴く覚悟で暗闇に包まれたウォール・ローゼを進軍している中、この空間には例えようのないヌメついた空気が流れていた。

???????

一通りアウラから事情を聞いたアニは、深いため息を吐き、状況を整理し始めた。

「つまり——まず、あんたの隣にいるのがユミル・フリッツで、「始祖の巨人」はユミルに戻っていて、あんたはその力を借りてさつき私の頭の中を見た。∴で、力を借りられる理由はアウラ・イエーガーが王家の人間であり、ユミルの寵愛を受けているから。それでこの世界は、全てのエルディア人が繋がっている『道』のような場所である

……と」

「うん、理解してくれた？」

「バカ言わないで、全くできてないから」

始祖の力がユミルに戻っていると言われた時点で、訳がわかっていない。

何故力が戻ったのかアニが尋ねれば、「進撃」の前継承者であるグリシャ・イエーガーが始祖を継承していた人間を殺し、ユミルに戻ったのだという。

しかもグリシャに殺すよう命じたのは、ユミル本人であると。

「何で力を自分に戻したんだ？というかあんたがその事をどうして知っているんだ」

「ユミルちゃんに視せてもらったり、教えてもらったからだよ」

「……あんた本当に王家の人間なのかい？そうなるとジーク・イエーガーも……」

「ええ、思い当たる節はあるんじゃない？」

「……！！ジークの脊髄液ッ！」

「そ、アニちゃんの記憶の中でちよつと見たけど、お兄さまは巨人を操れる。お兄さまの脊髄液で巨人化するのは初めて知ったけど」

飲みたいなあ……と、続いたアウラの言葉。

アニが知ったアウラ・イエーガーの本性。この女、彼女を見た百人中百人が「美人で

たみたいよ。私は囚われの美女になっていたけどね」

「……………ライナーとベルトルトは？」

「無事だとは思わ。あなたがエレン・イエーガーとストヘス区でドンパチやっていた時に、私やライナーくんが隔離されていた場所でも一悶着あったの」

「獣の巨人」の襲来に、右足を失ったアウラ。ウドガルド城での戦いや、ライナーたちのエレン誘拐事件。

変態女が兄の巨人に、しかもジークの目の前で右足を食われたことをうつつりと語った時、アニは戦士長に心底同情を覚えた。普段は誰かを「かわいそう」などと思うことがないのにも関わらず、である。

「アニちゃん、それとね——」

アウラは戦士候補生時代のジーク巡りをしていた中で、ユミルらしき人物がいなかったことを確認している。

それについて尋ねられたアニは瞳を丸くし、黙り込んだ。

曰く、始祖奪還計画に当たった戦士は元々四名だったらしい。その一人の「マルセル・ガリアード」という人物は、壁外を移動中ライナーをかばい、無垢の巨人に食われてし

まった。

その無垢の巨人が人に戻った姿が、おそらくユミルであるのだろうと、アニは推測した。

「アイツが、マルセルを食った巨人……」

「理由はわからないけれど、彼女はライナーたちと共にマーレへ向かった。戦士候補生に食われるのは目に見えているというのに」

「…取り敢えずベルトルトたちが無事だったのなら、それに越したことはない」

アウラはアニを連れて、これからシガンシナ区で起こる調査兵団VS戦士の戦いに向かおうとしている。

移動手段はこの“道”を通して肉体を転送し、巨人の体内から出てくるという、始祖の力をゴリ押しに使ったような方法。果たしてそんなことが可能なのか疑問であるが、アウラは何度かこの世界にお世話になっているという。

具体的には二回。「楽園送り」にされた時と、「超大型巨人」がシガンシナ区を襲った時。

死にかけた女は、巨人の体内に取り込まれ、肉体を修復して復活した。

ユミルの寵愛を受ける者。女にべったりとくっついていて始祖様の様子からして、寵愛は本当だろう。その理由は王家の血を引き継ぐ人間であるからか、それともユミルと

アウラの容姿がそっくりであるからなのか。詳しくはわからない。

「私を連れて行ってどうする気？ 調査兵団に加勢しろっていうの？」

「連れて行くのはまあ、君への恩を返すためかな。敢えて覗かなかったけれど、どうして私を庇うようなマネをしたの？」

「……何が？」

「ストヘス区的一件でアニ、君は私があなたたちに脅されていると語った。その理由を聞きたい」

「別に、ただの………免罪符だよ」

「免罪符？」

「生きるだけで地獄だった私は、死んでも地獄に行くのは決まっていた。…だからだよ、少しでも救いを求めたっていいだろ」

「でも、君は死んでいない」

「………」

「それはどうして？」

白銅色の瞳は、不思議な色へと変化した。夜空をかき集めて星をトッピングしたような、吸い込まれそうな幻想的な色。思わず地面につき体を前のめりにしたアニは、

慌てて姿勢を戻す。

理由は単純だ。

生きたかった。ただ、それだけだ。

「——ふふ、私に付いてくれば、アニちゃんはマーレに帰れる。そうしたらお父さんに会えるよ」

「……………」

「別にそのまま楽園に残りたいなら、残つてもいいよ。これはあくまで着せられた恩を返したい、謂わば私のエゴであるのだから。私はこのままジーク・イエーガーに会いに行く。ただし、結晶化しているあなたが今後元に戻れるという保証はないけれどね」

戻れるなら、隙を窺い逃げているはずだ。しかしアニ・レオンハートが逃げたという情報は出ていない。

当のアニにもエレンに殺される手前で結晶化したものの、戻れる算段はない。そもそも結晶化の中では彼女自身の意識がおぼつかない。受動的に入ってくる外界の音を、聞くばかりだ。

このままでは、父に――。

ずるい話である。アニの弱みを握った時点で、彼女の答えはわかっていたはずだ。

だが同時にアニも、アウラ・イエーガーの重大な情報を手に入れている。

「始祖」の居場所（ユミル・フリッツに渡っているのなら、力を手に入れるにはその力を借りているアウラを食べばいいのかもしれない）に、彼女とジークが「フリッツ」の末裔である情報。特に後者に関してはジーク・イエーガーの特異な能力も相まって、信憑性が高い。

だが、なぜわざわざ重大な情報を漏らしたのか。手っ取り早くアニを信じさせるための方法でもあるのだろうか。

星の瞳はキラキラと輝きながら、アニ・レオンハートを捉える。

瞬間薄ら寒いものが、彼女の背筋を這い回った。ドツドツドと、早まっていく心臓の音。

「君が付いてきてくれるなら、私はあなたを連れて行く。望まないのならばそのまま

眠っていてもいい。しかし付いて来るのなら、一つ約束を守りなさい。

私が話したことをマールの上層部でも、仲間でも誰でもバラせば、お前の父親を殺す。お前も殺す。

お前の父親をお前の前で殺して、お前を殺す。

私がないならバレないという話ではない。「道」はいつだって繋がっているのだから。隠し通せるなどと思うなよ。我々がエルディア人である限り、全てはこの場所へと帰結する。

——と、いうわけなんだけど、それを守った上で付いて来てくれるなら、私の手を取って。無論秘密をバラさないなら、それ以上のことは私からは求めない。戦争をしようが、パラディ島の人間を殺そうが、好きにするといい。

お兄さまを害さないのなら、何でもしていいよ」

微笑んだアウラ・イエーガーの瞳は、ドロドロとした白濁色に戻っていた。

その妖しさは美貌を伴って、人間に厄災をもたらさんとする悪魔のようにも見える。その手を握るか否かは、アニの判断に決まる。

彼女は一つ生唾を飲んで、おずおずと手を伸ばした。

「いいの?」

「……しようがないだろ。私は、父に会いたいんだ」

「本当の、本当に?」

「…ツ、あんたが聞いたんだろ、しつこく聞き返さないで」

「ははあ、じゃあよろしくね、アニたそ」

「ああ………アニたそ?」

「私のことはアウラちゃん、って呼んでね。呼び捨てでもいいよ」

つい先ほどまで零下を下回る空気を放っていた女は、アニが呆然とするほど砕けた印象に変わった。

彼女は細い手を握り、「…アウラ」と、小さく呟いたのだった。

それから二人はユミルに連れられ城型の巨大滑り台をひとしきり滑り、一人の少女を除いて賢者タイムに入ったのだった。

そして、薄明るくなった現実で巨人のご開帳した腹から出てきた二人。

憲兵の服を着ているアニに対し、アウラは何も着ていなかった。いつも身につけている白いバンダナだけは首元に絡まっている。

「……………」

どうしてユミルちゃん？——と、顔を覆うアウラ。

アニはそつと、羽織っていた上着を全裸の変態にかぶせた。

戦士鍋

調査兵団のウォール・マリア奪還作戦が進む中、敵の予測できる戦力は「鎧」のライナー・ブラウンや「超大型」のベルトルト・フーバーに、「獣」の巨人の少なくとも三体。またそれ+αで、戦士が留まっている可能性があった。

巨人が壁内へ侵入するのを防ぐため、先に外門を塞いでその次に内門を塞ぎ、独立したシガンシナ区内の巨人の掃討が行われる。

戦士たちがどこに潜んでいるかわからない以上、慎重に行動する必要がある。最初から巨人化して戦うよりも、潜んでおいて巨人化した方が兵士の隙を狙えるだろう。

エレンが連続して巨人化できる回数は三回であり、内門と外門を塞ぐ計二回を除いて、敵との戦闘で巨人化できる回数は一回となる。

「超大型」は圧倒的な力を誇る代わりに持続力に欠ける。硬質化は使えないものの、高熱の蒸気を意図的に噴出させる力を持つ。

立体機動との相性は悪く、容易にうなじを狙うことができないため攻略が難しい。

「鎧」に対しては、その装甲を打ち破るカギになる『雷槍』らいせうと呼ばれる武器が開発された。

元々中央憲兵が隠し持っていた技術をハンジ・ゾエが技術班に依頼して作らせたものであり、見かけはただの鉄の棒[♯]。

その威力は凄まじい反面、手動で鉄の棒を敵に突っ込ま（意味深）なければならぬため、使用には熟練度が必須。

さらに注意点が一つ。雷槍を使う際は前方に建物がなければ使えない。敵に打ち込んですぐに退避しなければ、爆風に使用者本人が巻き込まれてしまうためだ。

そして「獣」の巨人。この巨人は「女型」より精密に無知性巨人を操ることができ、非常に厄介だ。それだけでなくミケ・ザカリアスがアウラ・イーガーを回収した時に、「獣」が巨人を掴み投げようとしていた光景を目の当たりにしている。

その際敵が攻撃しなかったという不可解な点はある。だが獣の巨人に「投擲」という武器があるのは明らかとなっている。これはウドガルド城戦でも確認された。一度目は馬、二度目は屋上にいた兵士。

岩の投球によって行われた攻撃の精密さは十分な脅威に足りる。

これらを踏まえエルヴィンは、シガンシナ区に入った調査兵団が敵に挟み撃ちにされる可能性に至った。獣の巨人の「投擲」を踏まえた時に考えられるのは退路を塞ぐこ

と。前例としてエレンがベルトルトによって壊されたトロスト区の内門を大岩で塞いだ件がある。

そのため似たような状況を作られる可能性があると考えた。

シガンシナ区の内門を塞いでしまえば、少なくとも馬は移動できない。となるとカゴの鳥だ、逃げ場がなくなる。まさか外門へ行くのは自殺行為だ。巨人がわんさかいる。

立体機動で壁を伝い内門の外に広がる街に移動しても、そこから戻るにはやはり馬が必要だ。敵の配置は予想としてシガンシナ区内とウォール・マリア側。どの道分散して戦う必要が出てくる。幸い街はどちらにもあるゆえ、立体機動が使えない、という状況は出てこない。

ただし獣の巨人は無知性巨人を操れる。巨人を使い兵士を追い込んで、岩の投擲を使いその兵士がいる場所を狙われる可能性は十分ある。

この投擲の防御策として「エレンの硬質化を使ったらどうか？」という考えもあったが、エレンの巨人化回数を踏まえ、実践的ではない、と却下された。

また同様に「シガンシナ区内に馬を入れてしまい、前提として獣の巨人が馬を狙えないようにしてしまっただろうか？」という考えもあった。内門を塞がれてもエレンに馬を運ばせれば移動はできる。しかし馬の数は数百騎以上に及び、それをエレンに往復で運ばせるには無理がある。そもいくら巨人に対してパニックにならないよう品種改

良された馬でも、巨人に掴まれば興奮して暴れてしまい收拾がつかなくなる。そのためこの考えも却下された。

——というように、上記のような内容が作戦会議において行われた。

その間腕を組んで団長や分隊長らの話を聞いていた一人の男は、獣の「投擲」というワードを耳にした時、「フム…」といった様子で何か考え込んでいた。

そして、一通り話が終わり一旦下火モードとなった皆をよそに、唐突に兵士長は席を立った。

大半が「クソか?」と思う中、彼と付き合いの長い団長などは嫌な予感を感じていた。

そして数分後、兵長は石を握って戻ってきた。中央に座っていたエルヴィンは「オイ、退いてろ」の一声で静かに移動し、周囲も被害を被るであろう位置から逃れ、隅に固まった。団長がいた後方の壁に向かってブン投げられた石。人類最強の男によって投げられたそれは本気の投球でないものの、聞こえてはならない音が聞こえ、壁にめり込んだ。実演販売には絶対に向かない男、リヴァイ。

「コイツが当たったら死んじまうかもなあ……」と振り返りざま団長を見た男に、ミケは

鼻を鳴らし、ハンジは兵長の奇行にツボってしまったのか声を殺して笑った。

肝心のエルヴィンはとうとうと少し微笑んで、「修理代はお前の給料から精算するからな、リヴァイ」と語り、この一言でついにゾエは耐えきれず爆笑し始めたのだった。ここに第四班の副分隊長がいたら、「空気を読んでください、ハンジ分隊長！」と彼女を叱っていただろう。

……そのようなこともあり、三人（+α？）の敵勢力の中で最も厄介なのは、獣の巨人であると判断された。

本作戦のカナメを改めてまとめると、外門と内門をエレンの硬質化で塞くこと、敵（知性巨人）の殲滅、地下室の秘密を暴くことの概ね三つに分けられる。

予想できる現状において、この作戦は今まで以上の死者を出す。穴を塞いでお終いにすることはできない。ここで戦わなければ、戦争の先延ばしになる。戦いが続けば必然と兵士は死に、壁内の戦力は削れていく。今はまだ戦士だけが、長引けば通常の敵兵士までもが攻め入ってくる可能性もある。つまり総力戦だ。そうなつては本当に壁内人類に未来はない。

消費される命。それでも進まなければならぬ。

人類の明日のためにと、兵士等は毒を飲み込むように暗闇の中、光る鉱石で作られたランプを見つめる。

夜明けは、もうすぐだった。

???????

——おにーた！

男の夢の中に出てくる一人の少女。セミロングの父に似た色の髪を揺らしながら手を前に出して、小さい生き物とは思えぬほど強い力で飛び込んでくる。その衝撃を全身で受けると、彼はそのまま耐え切れず後ろに転がってしまう。

少女を受け止める男は無精髭を生やした、いかにも通報されかねない姿ではなく、在りし日の少年の姿。

訓練で疲れた身体に感じる少女の高い体温と心臓の音は、彼に晩ごはんを食べて風呂に入り、ベッドに向かうまでの気力を取り戻させる。お返しに抱きしめてやれば、キヤツキヤと、心底嬉しそうに笑うのだ。

少女は彼の妹だった。年の三つ離れた少女は彼以上に、両親に愛されていた。

その事実によ少期の少年はうつ暗い感情を抱いたこともあつたが、全て遠い昔の話である。

少年の姿が青年に変わっても、夢の住人たる妹の姿は変わらない。青年がメガネをかけるようになっても、無精髭になっても、妹は変わらなかつた。

なぜ変わらないのか男が尋ねても、妹はニコニコと笑うばかり。

少女は背を向けると、そのまま歩いて行く。いつの間にか少女の両隣には両親が現れ、それぞれ妹の手を繋いで歩いて行く。彼は追いかけてやうとした。しかし足は赤黒い地面に吞まれ、追いかけることができない。

「待ってくれ」と叫んでも、三人は振り返らない。吞まれていく身体は腰にまで届き、どんどん男は沈んでいく。

なぜ置いて行くのか。なぜ——と、よぎった思考。

『お前が選んだんじゃないか』

男が声の先を辿れば、後ろにいたのは少年の姿をした自分^{ゾーク}。

土で汚れた制服を着た少年はしゃがみ込み、男の後頭部へ顔を近づける。そして耳元でボソボソと、囁いた。

『密告したのはお前だ』

『家族を捨てたのはお前だ』

『お前を愛さなかった両親が悪いんだ』

『お前は悪くない』

『お前は世界を救うんだ』

『エルディア人をこの世から無くして、世界を平和にする』

『罪深きユミルの民』

『そんなお前も、罪深い人間だ』

ドロついた、血のような液体に吞まれた男はついに目元まで沈む。瞳を閉じ、そのまま闇へと意識を預けた。

???????

「———ぐっ」

まだ外も真つ暗な夜。突如腹を襲つた衝撃に、ジークは目を覚ました。

「驚かされていた寝つきはただでさえ悪いというのに、自身の腹に乗つかっているのは足。その足の主は片足を彼の腹に乗せ、身体を海老反りにして両腕を羽ばたく鳥のように左右へ広げている。対しベルトルトの片手が頭に乗っているライナーは、胎児の形で静かに寝ていた。」

180センチを超える凶体の、しかも重量（筋肉）のある野郎が三人。彼らがウォール・マリアの壁上で敵が来るのを待ち構えて、三週間は経つ。夜の見張りは夜目が利く「車力の巨人」のピークが行い、それ以外は男三人交代で行っている。

そんな野郎どもは、一つのテント内で寝ている。

男三人、密室、戦士たち。何も起きないはずが………一つの問題が浮上した。

それはベルトルト・フーバーが、規格外の寝相であったことだ。

ライナーは兵士時代にベルトルトの被害に幾度かあつてきたようで、もう慣れた様子だった。蹴りの一つや二つでは微動だにしない。

一方でジークは慣れない。慣れるわけがない。そして強制的に起こされる。

流石に寒い外にベルトルトを蹴り出すわけにもいかず耐えている。…が、そう遠くないうちにベルトルトは戦士長によって蹴り出されるだろう。

某SNSの青い鳥のロゴのごとき寝相の少年を尻目に、毛布を引きずりながらジークは外へ出た。片手に持った恩人の遺品であるメガネをかけ、深い息を吐く。もう何度見たかわからない悪夢に流れた汗は、外気に触れて身体の温度を下げる。温かいコーヒードも飲みたい気分だった。余計眠れなくなりそうだが。

「エレン・イエーガーね…」

「始祖^{座標}」の力を持っている少年。ライナーたちから聞いた情報で明かされた「イエーガー」の名は、ジークと同じ姓であった。その父親は現在行方不明であり、医者をやつ

ていたという。

その男とは間違いなく、グリシャ・イエーガーである。

壁外を移動したグリシャの力は、消去法的に行方知れずだった「進撃」の巨人と考えるのが妥当。グリシャは王家から始祖の力を奪い、エレンに託した。

だがここに、一つの疑問が浮上する。

「始祖」の力を扱うには例外を除き王家の人間でなければならないのにも関わらず、なぜエレンは始祖の力を使えたのか。

エルディア人の「安楽死計画」を進めているジークは、クサヴァーから「不戦の契り」の内容や、その例外についての方法を聞かされ知っていた。王家の人間が「始祖」を継承すると初代レイス王の思想にとらわれ、力を使うことはできない。ゆえにジークが力を奪つても意味はない。

ただし「始祖」を持つ人間と、王家の血を継ぎ、尚且つ巨人化能力者が接触すれば「始祖」の巨人の真価を発揮することができる。この場合王家の血を継いでいても、巨人化の力を持つ人間でなければ意味がない。クサヴァーが巨人について研究していたからこそ、分かりえた内容である。

ヒストリアでは不可能だ。全てに合致するのはジークのみ。

まさか「始祖」を受け継いだのが兄弟であったとは、奇妙な運命としか言いようがない。

そして疑問の部分だが、エレンはライナーたちに攫われかけた際、始祖の力を使い巨人を操ったという。正確に言えばエレンの知人らしき男（ハンネス）が巨人に殺され、その巨人に殴りかかった後、少年の意思に同調するかのよう周囲の巨人が動いた。

ライナーやベルトルトは危うく死にかけてたものの、ユミルが加勢したことにより九死に一生を得た。

可能性の一つとして、ジークはエレンが巨人化した母親（もしくは妹）と接触した結果、一瞬座標の力が開かれた可能性を考えた。

にわかには信じがたい話である。しかしこれまでの偶然の数々を踏まえると、あり得ない話ではなかった。

同時にもう一つの可能性が、彼の中によぎる。

きっとその名前を聞かなければ、思い至らなかつた可能性。威力偵察でウォール・ローゼ内に侵入したジークが遭遇した、妹と同じ名前を持つ女兵士。

あり得ない、あり得ないと、再送の丸い矢印を押ししてページを更新させるように、何度も否定の言葉がリフレインする。

作戦の参加に支障が出るかもしれないため、今この段階でジークとエレンが異母兄弟であることを、ライナーやベルトルトに勘付かれるのは避けたい。(だが「アウラ・イエーガー」と出会っている二人は、すでにジークとエレンが腹違いの兄弟であることを知っている)

対しジークは妹と同じ名前を持った兵士に遭遇したことを踏まえ、「アウラ」という人間がいたかを尋ねる分には怪しまれないだろう、と考えた。

女兵士は自由の羽が刺繍されたマントを着ており、ライナーたちと同じ調査兵団の間だった。

彼がウドガルド城を襲った時二人もいたため、前後で女兵士と行動を共にしていた可能性は十分ある。

『——なあ、ちよつといいか』

と、あらかた報告を終えたライナーたちに彼は切り出して、「アウラ」という女兵士と遭遇したことを語った。無論、ウドガルド城の一件で命からがらな思いをした二人に謝罪の言葉を交えて。まあ気付けという方が難しい話だ。

『「アウラ」という兵士は確かにいましたよ』

そう声を発したのはベルトルト。ライナーが中心に報告を述べる中、彼はやけに落ちていた様子でいた。てつきり意中のアニを壁内に残してきてしまったことに少なくともいシヨックを受けているかと思つたが、ジークの杞憂に終わった。

ベルトルトは語る。

ライナーがかつてジークから聞いた妹の名前と同じ「アウラ」という兵士はいたが、その姓は違かつたこと。

そしてその女性とは同じ班であり、ベルトルトはよく面倒を見られていたために、印象によく残つていた——と。

『……そう、だよな。悪いな、忘れてくれ』

ああ、やはり、生きているわけがない。何を俺自身は考えているのか。

戦士長という立場でありながら、何よりクサヴァーとの悲願を果たすため、世界を救うためにその身を捧げる彼が私情に吞まれようとしていた。これでは死んだ後にクサヴァーに合わせる顔がない。

自分の感情から逃げるようにベルトルトから視線を逸らし頬をかいたジークは、二人

に労いの言葉をかけながら立ち上がった。

その時、ライナーが唇を強く結んでいたことも気付かず。他人の表情に気が回るほど、彼に余裕はなかった。

「お前もお姉ちゃんだぞ、アウラ」

持ってきていたタバコを切らし口寂しさを覚えながら、ジークは白い息を吐く。

夜空には雲がかかり、その隙間から月が覗く。世界に散らばっている星を、彼はぼんやり見つめ続けた。

ぼくらはみんな生きていて、生きているから苦しいんだ。

夜明けと共にシガンシナ区にたどり着いた兵士たち。「獣の巨人」に操られている可能性のある巨人を探りつつ、立体機動に移った。周囲は不気味なほど静寂に包まれている。内門に入る前の街と、そして中に入ってから、いつ敵が出現してもいいよう警戒は怠らない。

この間兵士らはフードを被り行動した。これは顔を隠して、エレンの居場所をわかりにくくする意図である。

このまま予定どおり進めばエレンの硬質化で外門を塞いだ後に内門を塞ぎ、シガンシナ区内の巨人を掃討する。

そんな折、隊が分かれウォール・マリアの壁に立ったアルミンが、壁の上にあつた焚き火の跡を発見した。やはり敵は潜んでいる。だが移動時間を含めたタイムリミットもあるため、作戦は進み、まずは外門を塞いだ。

次に内門を——と行きたいところだが、敵の動きは未だなし。

それは巨人が周辺に一体もないことも相まって、異質な雰囲気醸していた。

「エルヴィン団長」

壁上から敵の出方をエルヴィンが窺う中、その側に降り立ったのはアルミン。

焚き火の跡を発見し周囲を探っていた少年は、下に敵が落としたと思われる冷えた鉄のカップを発見した。その数は三人分。敵が野営していた痕跡であり、鉄のカップが冷え切っていたことから、調査兵団が到着する前に敵が身を潜めるに十分な時間があつたと団長は推測し、敵の搜索の指揮をアルミンに任せた。

これまで幾度と窮地に陥った時、活路を見出してきた少年を信頼しているがゆえの、エルヴィンの判断。

アルミン・アルレルトはまだ15歳の少年。人類の希望を背負うエレンや、愛する人間のためなら全てを捧げられるミカサと違うという自覚が、彼にはあつた。

いつも二人の後ろを見て追いかけるばかりだった毎日。だがそんな二人はいざという時彼を頼った。それは決して、判断の押し付けではない。信頼と友情の中で育まれてきた三人の関係性である。

アルミンがエレンとミカサがどういう人間で、どんなものが好きか、些細なことまで知っているように。二人もまた、アルミンのことを知っている。

重責に全身から汗を流しながらも、それでもアルミンは己と戦った。

ここで敵を見つけなければ、仲間の退路はほとんど絶たれる。何より彼の夢が遠のいてしまう。

そして精神的に追い込まれながらも、アルミンは敵が潜んでいる場所の見当を付けた。

それは壁の中。建物内など見つかりやすい場所では意味がない。敵の意表、即ち調査兵団の意表を突ける場所。そんな場所こそ敵が隠れる位置。

結果、壁の搜索により飛び出してきたのは、「戦士」ライナー・ブラウン。

隙を突かれた兵士がライナーに殺され、突然のことに周りが動けない中、誰よりも早く動いたのは人類最強の男。

まるで即落ちニコマのように、次の瞬間には兵長のブレードが首に刺さり、ついで胸を刺されたライナー。白目を剥き逝くかと思いきや、彼は死ななかつた。さながら何者の寵愛を受けているかの如く、かろうじて意識が戻ったライナーは巨人化する。

事態の急変はそれだけに止まらない。

内門の頭上で指揮を執るべくエルヴィンが声を上げようとした時、背後に無数の眩い光が出現した。

その勢いは地面を轟かし、壁上に立っている兵士たちにまで振動が届く。

内門の外側に出現したのは、「獣の巨人」含めた無数の巨人。

獣に操られている巨人の姿はなかったはずだ。人間を巨人化するにしても、巨人の脊髄液が必要となる。注射器で一人一人巨人化させる方法を取れないと考えたからこそ、兵士たちは巨人の存在を過剰気味に探っていた。

何か「獣の巨人」が同時多発的巨人の出現に関わっているのは間違いない。しかし今はその「なぜ」を考える余裕はない。

内門をねらい投げられた獣の第一投球。

それが見事にぶち当たり、調査兵団と戦士たちの戦いの幕が上がった。

???????

戦局は大きく分けて二つに別れた。

戦士側はまず調査兵団の足を絶たせるため、馬を狙った。ウォール・マリア側の「獣の巨人」と無数の巨人は内門を半円球状に囲んでおり、中心には獣と「四足歩行の巨人」、その左右には二重に並んだ無知性巨人が配置されている。その前方は小型の巨人で、後方は10メートルを超えるサイズだ。

馬さえ倒してしまえば、調査兵団は移動ができなくなる。戦士はその後、兵士たちが動けなくなるまでただ待てばいい。そして最後は「始祖の巨人」を有するエレンを捕獲する。

獣は小型の巨人に馬を狙わせ、それに合わせるようにシガンシナ区側に落ちた「鎧の巨人」も壁を登り馬を狙おうとした。

しかしライナーを引きつけるためにエレンが巨人化し、鎧とは反対方向に走り出す。シガンシナ区の外を出て、ウォール・マリア内の壁を登ればエレン単体でも逃げるこ
とができる。それをライナーが予測すると見越してのエルヴィンが考えた「エレン囮
作戦」。

ライナーもまた始祖を逃すわけには行かず、調査兵団側の意図を考える間もなくエレンを追った。

こうしてシガンシナ区側では、エレンVSライナーの構図ができあがる。

こちら側の戦力はリヴァイ班（十ペトラ&オルオ）とハンジ班。エレンが鎧の隙を作った間に、「雷槍」をぶち込む。

対しウォール・マリア側の兵士は、小型の巨人から馬を死守するため動いた。

こちらはミケ班などの分隊が割り振られており、リヴァイもエルヴィンの命によつてこちら側にいる。

編入した新兵などは巨人を駆逐することは難しいゆえに、馬の誘導に当てられた。

して、シガンシナ区側は進撃と鎧の交戦が続き、エレンが負傷しつつも敵の隙を作った。それにより鎧のうなじに「雷太くてぶつと雷いの」が何本も投擲され、ライナーは雄叫びを上げることになる。結果、人体の下顎から上が消失するという、少年誌には載せられない色々丸出しなナイスガイができあがった。

裏切り者とはいえ、ライナーに雷槍をぶち込むことになった104期生のメンバーは、重々しい気持ちを抱えた。

その感情は「己の手で殺してしまった」という罪の意識からくるものに他ならない。生まれさえ違ければ、敵でさえなければ、昨日の友が今日の敵になることもなかった。だが敵である以上、ライナーやベルトルトを倒さねばならない。

それは戦士である二人も同じ。たとえマルコを殺し、そして「悪魔」と言われようと、譲れないものがある。それはお国であつたり、仲間であつたり、友人や恋人、家族であつたり。

それぞれは何かのために戦い、生きて、死んでいくのだ。

その時、沈痛な面持ちのリヴァイ班の耳に入ったのは「鎧の巨人」の叫び。先程とは比較にならないその声量は、命を終わらす蛍が最期の灯火を見せるかのような響きだった。しかしそれは本当の終わりではない。

一度リヴァイに首を狙われたライナーは、*「全身に意識を移す」*という芸当を再びやって退け、死を免れた。神の寵愛を受けし男は、一筋縄では終わらない。

ライナーの一声を樽の中で聞いていた、ひとりの少年。

時は来た。「獣の巨人」の投球によりシガンシナ区のはるか頭上に舞い上がった彼は、ゆつくりと瞳を開け、世界を見つめた。

——親方！空からベルトルト・フーバーが！！

??????

誰しも、その人間にとっての一番は存在する。

ベルトルトという少年にとっての一番は、心を奪われたその日から、一人の寡黙な少女だった。

いつもふわふわと宙に浮いて現実と精神が乖離しがちだった少年に強い衝撃を与え、その曖昧な狭間から現実へと引き戻してくれるアニ。

彼どころか、仲間に笑顔を見せることがなかった少女。ただ偶に同期との訓練帰り、ふいに人通りの奥で彼女が立ち止まっている姿が見えた時は、大抵散歩中の犬や屋根の上でひなたぼっこに興じる猫を眺めている。その時だけ見せるアニの微笑み。口角を少し上げて目を緩ませている表情は、目が眩むほど輝いていた。

そしてその事に気づいているのが自分だけという事実には、ベルトルトは優越感を抱いていた。

もつと彼女の色んな表情を見たい。同時にアニを見ているだけで感じる胸の痛み。

これは、これは何かおかしいと、訓練に支障が出るほどもだした毎日が続く日々。気づけばいつでも少女を視界に入れてしまう。

その視線に鬱陶しさを感じたアニ本人に睨まれると余計に身体の体温が上がり、ベルトルトの変化に気づき始めた周囲（マルセルは苦笑い、ピークはニコニコ、ドベラちイゃナんとポルコは気づいていない）。戦士候補生を指導するテオ・マガトも、訓練中厳しく注意しながら寛容的に見ていた。

そんなベルトルトは意を決して、一番年上のジークに相談した。そのジークと云えばピークと同時期にベルトルトのアニへの想いに気づいて、内心ニヤニヤしていた男である。

ズバリそれは恋だね——と、教えられた少年。

宇宙猫となったベルトルトはこの世の秘密を明らかにされたような衝撃と共に、フラフラとその場を後にした。自称「恋愛プロフェッショナル」と名乗った、ジークの言葉

は最後まで聞かずに。残ったのは、一人の男の長い長い沈黙だけだった。

そう、つまり言わんとしたことは、ベルトルト・フーバーがアニ・レオンハートに恋をしているということ。

あのブラコンイかれ美女とまでは行かずとも、少年はアニのためなら自分の手を汚せる。

——否、汚すも何も、彼は手どころか全身が返り血で真っ赤だった。

ゲスミンアルミンからアニがユトピア区で拷問をされると教えられたベルトルトは一時、自分でも驚くほど怒りの感情が沸いた。

父親あのひとに自分や母が殴られても抱かかなかった感情。

鮮烈な激情は、捕まえていたエレンを兵士たちに奪われてしまう隙を作ってしまった。大きな失態だ。その後エレン・イエーガーが「始祖の巨人」を有することが発覚し、失態はさらに大きな過失となった。

だがそれ以上にアニへの気持ちだが、少年の中では燻っていた。

拷問されるアニ。ありとあらゆる方法で、辱めを、苦痛を、人としての尊厳を奪われる。ベルトルトは彼女を拷問しているであろう人間たちに、強く強く——嫉妬

した。

ベルトルトが知らないアニの一面を、その人間たちは見ているのだ。

殺意や怒り、嫉妬、さまざまな感情が彼の内に過る。

しかして純粹に彼らを殺す理由が、「悪魔の民」だから、とはならなかった。

三年間を共にした104期生のメンバー。首を吊ったおじさん。調査兵団の兵士たち。マーレと比べれば利便性が乏しいながら生活をする老若男女の住人。

同じ人間の形をしていて、同じように生きている。収容区でマーレ人に管理されているエルディア人の方が、よっぽど惨めに暮らしているようにさえ思える。

壁内の人類は「悪魔の民」と称されるほど、罪深いことをなしているわけではない。狭い世界で、懸命に生きている。

でも殺す。

殺さなければならぬ。

生きる価値がないというわけでもない。

ただ世界が、そういう風に来上がってしまっているだけだ。

エルディア帝国はかつて民族浄化で多くの人間を殺し、犯し、その数を増やした。それは昔の話だが、今のエルディア人たちが虐げられる理由になつてゐる。だからといって、その罪をパラディ島の人間に「償うために死ぬ」というのも、きつと違う。

ただ、ただベルトルトは殺すしかない。それが彼の役目であるから。背負いきれない「罪悪感」はいつもの空中に漂う自分に押し付けて、アリのように人間を殺戮する。

心と身体の線引きを誰よりも行うことができるからこそ、彼は「超大型巨人」を継承したのでらう。

でも一つ、思った。

彼がパラディ島の人間を殺して、それが死んだ骸とエルディア人を憎む人間たちの救いになればいい——と。

ただし本題はアニの救出だ。

心の整頓がついた後にエレン奪取に失敗し、ウォール・マリアへとたどり着いた彼はユミルが寝ているのを見計らい、ライナーに相談を持ちかけた。

それは「アウラ・イエーガー」の存在を戦士長に伏せること。

壁内にいた「獣の巨人」とベルトルトたちは一日違いの行動となつており、向こうに

は移動を考えて「車力の巨人」のピークもいる。現在時刻は朝であり、休憩して日が沈むのを見計らい移動する。船着場にはまだ船が滞在しているはずだ。

展開としてエレンが座標であるとわかった以上、今度は戦士の総力戦で敵と戦うことになるのは予想がつく。ウドガルド城でのアウラの様子から、彼女が囷になった後にジークと遭遇した可能性は考えていた。だが当の兄の方といえば、妹が生きていたというのに、何もアクションを起こさなかった。

つまり、妹の生存を知らない可能性が高い。

持って帰るのが無理であれば、声の一つくらいかけてもいいだろう。当の過激派ブラコン女も兄と会話の一つでもすれば、その狂気性が多少は浄化されるはず。

少なくとも、ジークに殺してもらおうと前後不覚になる美女は誕生しなかった。思い出すと踏みにじられていた足が痛む気がする。

して、敵との戦いになった時、妹が敵の兵士側にいるからと、戦士長の攻撃の手が緩んでしまつてはならない。

そのための情報の秘匿。その方が戦う上では都合がいい。

「だが…」と口を開いたライナーであったが、ベルトルトはさらに続ける。

すでに彼女は戦士たちと繋がりがあったことがバレている身。理由は何であれ、幽閉

は免れない。憲兵に捕まれば拷問のち殺されている可能性もある。

懸念すべきは戦士などの情報についてだが、話されることはない。彼は断言できた。アウラ・イエーガーは絶対に、ジーク・イエーガーの不利につながる情報は吐かない。ゆえにこれについては心配ないと。

そも彼女が捕まる原因となったのは、ベルトルトがアウラに協力するよう求めたからだ。

このことを話せば、ベルトルトはジークに恨まれるかもしれない。ライナーの良心に付け込んだベルトルトの策である。

右足を失ったアウラ・イエーガーが仮に生き残っていたとしても、奪還作戦に参加することは不可能。敵と戦士が交戦になった時点では死なない。しかし遅かれ早かれ、パラディ島の人間は殺される。その中にはアウラも入っているわけだ。

殺す対象に妹が入っているのを知りながら、戦わなければならぬジークの心情はいかほどか。ならば知らない方がいい。

そこまでベルトルトが語って、ライナーは長い間をおき「……わかった」と、小さく頷いた。

のちにジークと再会した際も、戦士長は「アウラ」という名前のフードをかぶった女兵士と遭遇しただけであると分かった。顔については見えなかったと。ついでに「獣の巨人」の情報の流出を懸念して殺そうとしたが、敵の邪魔が入り殺し損ねてしまったことなども。

結果として、妹の生存がジークに伝えられることはなかった。

これで戦士長の攻撃の手が緩むことはなくなる。

殺すならば徹底的にやらなければならない。以前のゲスミンの策にハマった時のような失態は起こさない。

空中で「鎧の巨人」が倒れていることを視認したベルトルトは、一度自傷を止め立体機動で地上に降り立ち、辛うじて生きているライナーにうつ伏せから仰向けの体勢に変わるよう頼んだ。

それができなければうなじが『雷槍』でえぐられ、そこから本体が剥き出しになっている鎧では、ライナーは巨人化したベルトルトの爆風に巻き込まれて死んでしまう。そのため仰向けになり、衝撃を免れるよう頼んだのだ。

ライナーが動くことに賭け、少し距離を置き鎧が動くのを待っている最中、彼は遠方よりアルミンに交渉を持ちかけられる。

無論ベルトルトの答えは「否」。

対話はいらない。敵同士、何を話し合うことがあるのか。アニの件を持ち出したアルミンの言葉にむしろ、思考は前向きになる。

同期の戦士の中で誰よりも対人戦に秀でた彼女が負けるはずがない。

例えるならベルトルトは、退屈しのぎに「オオカミが来た！」と叫ぶ羊飼いの少年がいる同じ村に住む少年。

他の村人が少年の嘘を信じなくなったように、ベルトルトもまた嘘の内容に耳を貸さなくなる。もちろんそれだけでなく、無意識下ではアニの悲惨な姿を否定したいという気持ちも働いていただろう。

「同じ手はもう、僕には通用しない」

104期生の仲間たちは今から殺されるのだ、「超大型巨人」によつて。//無//へと帰る彼らの命は雨風にさらされる蠟燭の灯火の如し。

「僕がちゃんと君たちを、殺すから」

アルミンや白刃戦になりかけたミカサを見据えて、ベルトルトはゆっくり呟く。

巨人化の恐れがあるため、必要以上に近寄ることのできないアルミンたちから遠ざかった彼は、鎧が仰向けになったのを見届け、誰よりも高く空へ舞い上がる。

「アニ、待っていてね」

瞬間、シガンシナ区内で大きな爆風が巻き起こった。

「どうか祈ってくれ」と、誰かが言った。

シガンシナ区では内門に近づく「超大型巨人」が建物を手で弾き上げ、その熱によって燃える家々が落下する。エレンや104期生の面々は無事だったものの、「鎧の巨人」の側にいたハンジ班の安否は不明となった。

対し、ウォール・マリア側では小型の巨人を倒すべく動いていた兵士たちに、岩——否、粉々に砕かれた石が襲った。「獣の巨人」は岩を手で砕き細かくしたものを投擲し始めたのだ。その速さと威力は銃弾の雨と違ってよい。

これにより前方の家々は更地となり、戦っていた多くの兵士が死亡した。

あえて小型の巨人が後方へほとんど攻め入って来なかったのも、「獣の巨人」の策であった。

戦力になる兵士は前方で巨人の討伐に徹する。そこを狙えば調査兵団の戦力を大きく削ることができる。

元々、前方・中央・後方と大まかに配置を命じられた兵士たち。

残ったのは馬を誘導していた新兵に、彼らを含め馬を守備していたミケ班。また前方

よりの中央で、前の班が取りこぼした巨人を狩っていた第五班（投擲攻撃が始まったあと、間一髪で後方に逃れた）。そして咄嗟に石の雨を避けたリヴァイに、後方で指示を出していたエルヴィンのみとなった。

「エルヴィンどうするんだ、先の投石でデイルク班とクラスス班が壊滅したぞ!!」

団長に詰め寄るのはミケ・ザカリアス。

兵長について調査兵団のNo. 2の実力を誇る男はなぜか、前線に出されず後方で馬と新兵の守備を任されていた。

もつとも守る優先度の高い馬や、新兵にいざという時があつた場合を考えれば、確かにミケほどの技量があれば心強いだろう。しかし守りは他の班でも十分担えたはずだ。

長年エルヴィンの右腕を担っている彼はその判断に信頼を置いている。ゆえに、疑問は残りつつも指示に従っていた。

エルヴィンはミケを横目に入れ、それから「獣の巨人」へと視線を移す。

「戦場において、不測の事態はいつでも起こりうる。だから戦力となる力は最後まで残しておきたかった」

「…ッ、お前は投石が広範囲に及ぶ可能性を考えていたのか!？」

「いや、予想がつかなかった。私の判断は間違っていただろうか、ミケ？」
「……………」

単純な投石攻撃であつたのなら、まだ脅威は薄かつた。しかし細かく砕かれた岩の恐ろしさは、前方の更地になつた家々と兵士の死体を見れば痛感させられる。

ミケは少しの間を置き、「お前は正しすぎるがゆえに恐ろしい」と、呟いた。

打開策を僅かな時間で見出さねばならなくなつた現状。

まさしく、前門の虎うんぬん——を例えて『前門の獣、肛も……後門の超大型&鎧』と言つたところか。「四足歩行の巨人」は獣が投げやすい岩を集めており、今のところ大きな脅威ではない。しかしあの補給路がある限りは「獣の巨人」のピツチングが続く。

壁を登リシガンシナ区に向かつたところで、超大型が降らす炎の雨が待ち受けている。

馬を使って散つても獣がひと叫びすれば、逃げた兵士を追つて大型の巨人が動く。

後方に下がる兵士たちは混乱し、特に新兵たちは身を縮こませ待ち受ける。『死』に震えた。

そんな中、団長のお前とエレンだけでも逃げるべきだ——と、エルヴィンに告げ

たのはリヴァイ。

ここまで壁内人類を導いてきた「頭脳」と王家の力を持つエレンだけでも逃れれば、まだ人類の未来が完全に断たれることはない。

それはリヴァイの、エルヴィンに生き残つて欲しい、というエゴもあつた。彼は本気でエルヴィン・スミスという男を認めている。その忠誠を誓う姿は、かつて王家の武家だつたアツカーマン家の在り方と酷似している。

愛から成り立つミカサよりも、友愛と信仰を同時に抱えたケニーよりも。

ひよんなことから地下街という世界から、リヴァイを外の自由な世界へ導いた男。

「策は、ある」

獣を見据えながら、エルヴィンは語つた。

リヴァイは男の青い瞳の奥に、深い感情を見出した気がした。

ウォール・マリア奪還作戦の前から言葉と、さらに言外でも「お前はお山の大將よろしく、おとなしく待っている」と団長に脅しをかけていた兵長。彼は団長にある時期から、「死」の気配を感じていた。

注射器を渡された時から、その気配は既にあつた。何か根底的な部分が変わり、エルヴィンは己の死を覚悟するようになった。

それはアウラ・イエーガーに感化された、一部の兵士の死地へ行進する姿よりも重く、血の匂いをまどつていた。

エルヴィンが変わつた時期を思い返した時ひとつ、思い当たる節があつた。

「兵法会議」以前、しばらく時間が経ち一人の女に会つた団長。

軍旗を翻すが如く、一部の兵士を死地へ導かんとする旗手の女。

血で濡れたその女の姿に団長もまた、毒されてしまったのだろう。それも誰よりも深く。

失つた兵士の想いを背負つてその清算を成し遂げるのは、もつとも美しくある姿なのかもしれない。

しかしリヴァアイはエルヴィン・スミスをここで、魂なき骸にするわけにはいかなかつた。

エルヴィンと場所を移動した彼は、座つた男を見下ろす。普段見えない金髪のおつむじがありありと窺えた。団長はリヴァアイの揺らぐ心情を察した上で、自身の目的を話す。

さながら今のエルヴィンは旗手を務めていた女から軍旗を託され、女に感化されなかつた兵士までも常世へ誘う案内人のようだ。

「俺は、地下室に行きたかつた」

“外”の事情を独自で調べていたエルヴィンの父。その男は幼い息子に壁内人類が記憶を改ざんされている可能性を伝えた。そして息子が他の人間に話していたところを憲兵に目を付けられた結果、少年の父は死んだ。

父親の死を招いたのは、エルヴィンであつた。

それから“外”の秘密を探ろうと、調査兵団に入り多くの仲間が死んでも、進み続けた彼。

やがて団長にまで上り詰めた男はしかし、人類のためではなく、自分の目的のために進んでいる。

だがそれもここで——とエルヴィンは続けようとして、口を嚙む。

アウラ・イエーガーは外の事実を知った上で、団長に語ることはなかつた。仮に教えられていたら、その時すでにエルヴィン・スミスの歩みは止まっていただろう。そのあ

り得た未来を誰よりも自覚していたのはエルヴィン本人だ。

だからこそ彼は自分の足で歩み、世界の真相を知らなければならぬ。

そこまで考えた時エルヴィンの脳裏に過ぎたのは、死んだ仲間たちの姿である。

悪夢に魘される時は大抵、仲間たちの死体が見つめている。到底両手では足りない数の死体。

そうして起きたあと自身に挨拶する兵士の姿を見た時、エルヴィンはその兵士が死体になる幻想を抱くのだ。いつかその兵士も無惨な姿へと変わり果てる。

彼はそれでも進み続けている。

進み続けて——、

この世の秘密を知った後は、きつと、死ぬのだ。

その時は、もう歩むことはできなくなるだろう。

来るべき時、今まで死んでいった仲間たちの想いを晴らせずに？

——いや、違う。エルヴィンの自由は“この世の真実”だ、だが本当の自由は、もつと遙か先にある。壁内人類を滅ぼさんとする者たちと戦わなければならない。「戦士」

を倒しても、戦いはまだ終わらない。

背負った分の命は、最良の形で果たさなければならぬ。それはエルヴィンがこの世の真実を知ることによって果たされるものではない。

ならば彼の清算は、どのようにして果たされるのか？

間違いなく己の命だと、エルヴィンは思っている。

同時に「本当の自由」まで歩むことのできない自分の終わりは、必然的に彼の目的が達成する前になってしまうと。

エルヴィン・スミスの中でこの時、「死」の覚悟ができあがった。

無論、ウォール・マリア奪還作戦で命を消費せず戦いに勝つことができるのなら、彼は己の目的を果たした。しかしそれが難しい——彼の命を捧げねばならない時が来たのなら、進むしかない。

エルヴィンは、調査兵団団長のエルヴィン・スミスとして、人類に勝利をもたらしべく戦う。

「リヴァイ、お前は突っ立っている巨人を伝って右側から「獣の巨人」を狙ってくれ。左側からはミケ班に「四足歩行の巨人」を狙わせる。お前ならば、狩りながらも移動が可能だろう」

対しミケたちは獣に気づかれないようにしつつ、「四足歩行の巨人」を死角から狙う。この場合通常の巨人は狩らない。

サポートという立場は状況を見極める判断力や情報処理能力が必要であり、頭が利く可能性が高いと考え、慎重に行動すべきだろうとエルヴィンは作戦を立てた。このあとミケらにも作戦の詳細を伝えたと。

「私は新兵に覚悟を決めさせる。先陣を切り、煙弾で獣から視界を奪いつつ、左右へ意識が向かぬように……」

と、その時、エルヴィンの胸ぐらが掴まれた。

その犯人たるリヴァイは燃え盛るような己の感情を飛び火させるように、青い瞳を睨んだ。尚も周囲では投石の音が響く。

「リヴァイお前にしか、「獣の巨人」は狩れない」

「……………」

「頼んだぞ」

「……………チツ」

大きな舌打ちをこぼし、エルヴィンの胸ぐらを離れた兵長は深く息を吐いて、その場にかしずく。

太ももに置いた拳を握りしめ、団長を見上げる。「了解した、エルヴィン」と語り、続けた。

「俺が絶対に「獣の巨人」を倒す。お前は兵士を死地に導け、死んでも……………死んだ後も」

その言葉にエルヴィンは一瞬、安らかな表情を浮かべたのだった。

???????

一方、シガンシナ区にて。

「超大型巨人」の爆風に巻き込まれたハンジ班の安否は不明となっていた。彼らは一旦ベルトルトの登場によって態勢が崩れたものの、再度鎧にトドメを刺すべく動いていたのである。

超大型の進行方向は内門。エレンたちがその歩みを止めなければ、エルヴィン側が獣と超大型の挟み撃ちにされる。

一時、頭が真っ白になり指揮を執っていたアルミンは、ジャンへと判断を任せた。「鎧の巨人」を爆風に巻き込んでしまう以上、ベルトルトはまだ巨人化しないと考えていたのが仇となった。すでにライナーの命を繋ぐ策は取られていたのである。

エレンが超大型に挑むものの、容易く蹴り飛ばされてしまい、内門に衝突して気絶してしまふ。

最悪の状態は続き、寵愛の元に蘇ったライナーも起き上がった。

もう無理かと思われた時、アルミン・アルレルトは一つのこと気に気づく。それは時間を追うごとにスリムになる超大型の姿について。

この着眼点が、アルミンに一つの勝機を見出させる。

以前エレンの巨人化実験の中でハンジが推測していたこと。超大型は意図的に爆風

を起こすことが可能であり、その熱量は言うまでもなく圧倒的。

まず兵士が近寄れる温度ではなく、そも風圧によってワイヤーを付けることができない。

ならばその爆風を生み出す熱は、どこから作られているのか。

それはスリムになったボディから分かるとおり筋肉だ。超大型は筋肉の消費により、熱を生み出す。

と、同時にその巨体ゆえ、燃費効率は九つの巨人の中でもトップクラスに悪い。

ミカサたちにライナーを任せたアルミンは、内門の上で伸びているエレンの場所に向かい、人体のあるうなじにブレードを突き立てた。

ウォール・マリア側で「死」へと進む一人の男のように、少年もまた「死」へと向かうとしている。

アルミン・アルレルトの夢。広大な、地平線まで続く青い塩の海。

幼い頃エレンやミカサに語った夢を目指して、少年は進み続けてきた。きつとこの戦いに勝てば、海を見ることができ。

だが彼が見たいのは海だけではない。本に載っていた「世界」を、彼は求めている。炎

の海、氷の大地、砂の雪原……。

少年の未知が満ち溢れた世界。

世界は残酷なだけではない、美しくできていることを、彼は証明したいのだ。

アルミンはエレンに起きるよう呼びかける。そしてかつて約束した海を見に行くこと、また作戦についても語る。

「超大型は筋肉を消費して動く。逆に言えば、大元の骨格は変わっていない。骨は消費していないんだ」

アルミンは自ら超大型の骨にアンカーを突きつけ、ベルトルトの意識を引く匣になるという。

さすればベルトルトはアルミンを振り落とそうと熱風を放つ。過去にライナーがエレンを攫おうとした際、巨人化したベルトルトが熱風を放ったとき動かなかったことを踏まえ、熱を生み出している間は動くことができないはずだ——とも、彼は続ける。

「熱風の間は僕らだけじゃない、ベルトルトも視界が悪くなる。エレンはその間に硬化で巨人体を作り、蒸気に紛れて超大型のうなじを立体機動で討ち取ってくれ」

僕の命はないけれど、と内心呟いたアルミン。

お互い夢を追う者同士であるエルヴィンとの違いがあるならば、少年は誰かに背を押されずとも、自分の意思で最良の“死”を選択できる。

夢以上にアルミンの心に浮かぶのは、エレンとミカサの姿。

いじめられっ子だった彼を庇って戦う少年と、その少年がやり返された後に駆けつけて、いじめっ子を秒殺する少女。

理不尽ないじめに遭いつつも、存在した幸せの日々。まだ五年前のことだというのに、アルミンには遠い昔のように感じられた。それは故郷たるシガンシナ区が寂れてしまったせいもあるだろう。

「ベルトルトの隙を作ることができれば、必ず作戦は成功する」
『……………』

大きな翡翠の目は、真っ直ぐにアルミンを捉える。

エレンは身体を起こし肩の上に乗った友人を見つめ、小さく頷いた。

「エレン、ありがとう」

兵士を地獄へ導く男の瞳が空を映すならば、熱の中へ飛び込もうとする少年の瞳は海を映す。

血の色とは正反対の美しい色が、そこには存在した。

喉奥クチユクチユ

「無知」というものは残酷と優しさを内包していると、ジーク・イーガーは思う。

今彼の前に立ちほだかるのは、馬にまたがり特攻をかける兵士たち。その表情は迫り来る投石を前にして、悲痛に歪んでいた。これから彼らは無意味に死んでいく。

そんな彼らに同情心はいらない。

人を殺した末に精神を病む兵士は少なからずいるものの、戦士たる男が人を殺すなど日常茶飯だ。必要とあれば老若男女関係なく殺す。

何事も楽しむべきだ——と、ジークは岩を手で砕き、それを振りかぶった。

次の瞬間には兵士の悲鳴と、彼が放った投石の轟音が轟く。

初代レイス王によって記憶を改ざんされ、壁内が「楽園」であると思ひ込んでいる人間たち。謂わばこれが「無知」たる人間の象徴である。

歴史の過ちを知らないがゆえに、何度も同じ間違いを繰り返す。学ぶことで成長する人間の性質を、根底から潰されている。

哀れだ。

しかし同時に、エルディア人に向かう世界の悪意を知らぬまま死ぬることは、幸せなのかも知れない。「無知」の中に存在する優しさがこれだ。

広い世界で待ち受けるのは、同じ種族の人間が「悪魔の民」としてマールに管理されている現実。

どこまで行っても人間は何かのしがらみに縛られている。本当の自由があるのかすら分からない。

だが少なくともエルディア人が生きている限りは、世界は巨人の恐怖に怯え続ける。

(俺が終わらず。……この世界の苦しみを少しでも減らさなければならない)

最初は陣形をわけて「獣の巨人」に近づいていた兵士も減り、ついにジークの視界を遮っていた煙弾が彼の横を通り過ぎるまでに近づいてきた。

辺りには緑色の煙幕と投石によって生じた土煙、そして血の色が混じり、異様な空気に包まれる。

数百メートルはおろか、数十メートル先が見えにくい。まだ残っている兵士がいる可能性を考え、ジークが前を見据えながら岩を取ろうとしたところで、その指先が地面に

触れた。

（——え？）

視線を向ければ岩がない。岩の収集についてはピーク・フィンガーの担当だった。何事かと、彼が後方を向いたその一瞬、視界に右側の巨人たちが目に入る。

異変は左側から起こった。何かを巻き取るような音——何度かジークが耳にしたことのある音が聞こえた。

それはライナーたちも使っていた立体機動装置のワイヤーが巻き取られる音だ。咄嗟に身体を戻し、左を向こうとした彼の鎖骨付近に、ワイヤーが突き刺さる。

直後ジークの目に映ったのは、煙幕の中から空を切るようにして出現した人類最強リの男ツアの姿イだった。

???????

「私はアウラ・イエーガー」

そう、私はキメ顔で言った。

ついでに巨人なチャンアニに「何やこいつ」という目で見られた。

アニ・レオンハートと恋の逃避行を始めてから暫く経つ。

(ユミルちゃんが忘れたのだと思いたい)全裸で現実に戻った私は、アニちゃんの服一式を身につけている。ゆったりとしたパーカーはともかく、その上に着たジャケツトの肩幅が若干狭く、身長の違い(約20センチの差)で上と下は問答無用で七分袖になっていた。

服については、上着だけではもしヨロイの彼が私を見てしまった場合、よこしまな感情を抱くから危険だ——と、アニに着せられた。

自分は巨人化するので、下着になっても問題は無いから、と。

脱衣中に見た彼女の腹筋は見事に六つに割れていて、おさわりを所望したら断られた。

あと彼女、普通にライナーくんのことを「ゴリラ」と言っていました。

まだ夜の気配を残していた空も段々と明るくなり、朝特有の清浄な空気が肺を満たす。最初は東に沈む月の位置とシガンシナ区の位置を照らし合わせ、南下していた。

ちなみに走る彼女の首元に私はしがみついているというか、押し付けられているというか……大きなお手手につかまれている。アニが走る中で、たまに手に圧力が加わるたびに胸が「キュン♡」とする。私の心はお兄さまだけのものなのにつ……!!

いやはや、父さまが如何に幼女の私を気づかして走っていたのか思い知らされました。

それからウォール・マリアの壁にぶつかり、それに沿うようにアニは走った。

日も昇り始め、いよいよ巨人も活動的になり始めるか——と思いきや、巨人と遭遇しないまま私たちは行動している。

ユミルが関係している可能性も考えたが、彼女は例えるなら、連日徹夜が続いた労働者の状態。

『() ⊗ ⊗ ⊗ ()』の顔を浮かべて眠っている……あるいは休んでいるはずだ。

違和感は一にも感じていないようで、時折私の方を見てくる。実験したことがないので

巨人を操れるかはわかりませんが、少なくとも同時に多数の巨人を寄せ付けられないようにすることは私には不可能だ。

異常な空気というのは、どんどん強くなっている。

『！』

その時私たちの視界に映ったのは、天を貫く稲妻。音は発している騒音にまぎれ聞こえませんでした。あの規模の巨人化は見たことがある。「超大型巨人」だ。シガンシナ区はもうすぐだ。

そうして森を抜け、地平線がよく見えるようになった平地の先に、見えた。

豆粒サイズの巨人の姿と、その奥の壁の中から上がる火の手。

死に行く兵士たちの幻聴が聞こえていた中、一つの姿を捉えた瞬間、私の世界の全てがその一つ以外の色を残して消える。

移りゆく景色が、恐ろしいほどにゆっくりと刻まれていく。

ああ——ああ、私の空。

私の、すべての色。

アウラ・イエーガーは今、この時のために生きてきたのだと、断言できる。

??????

ジークの前に突如現れた小柄な男。その顔に付着している血を鑑みれば、左側にいた巨人たちがいなくなった原因だと推測できる。

男は「獣の巨人」の振りかざした手を、アンカーを外し腕の周囲を目にも留まらぬ速さで切り刻みながら避け、後方へと通り過ぎた。

まばたき一つ許されぬコンマの所業。理解の追いつかぬジークは「ええ？」と、思わずマヌケな声を漏らした。

そう言えば——とジークが思い出したのは、ライナーが以前注意すべき脅威として挙げていた人物。

その名は「リヴァイ」。壁内人類の中でも群を抜いて強い男は別名、「人類最強」とも呼ばれている。

機械兵器ならともかく、特殊に発達した武器を使い、宙をかけ回るだけの人間がそこまで脅威たり得るのか。そんな疑問がマールの上層部内で生じつつ、念には念を入れて、敵兵が立体機動を行えぬように作戦が立てられた。

しかしして敵は予想のナナメ上のことをやってのける。

ちよūd良い立体物があるではないか——と、目を付けられたのはジークが巨人化させた人間たち。

敵が逃げられぬよう、内門を囲む形で用意した巨人を逆手にとられた。

人類最強の男は思考の追いつかないジークを待たず、次の攻撃へと移る。後方から獣の肩甲骨付近にアンカーを射出され、リヴァイの血に染まったブレードが獲物をねらう。

咄嗟に獣が左手でうなじを守りつつ、右手を振るうべく後ろを向こうとした途中で、今度は目を切り裂かれた。

奪われたジークの視界。しかし煮えたぎる怒りを燃やすリヴァイの攻撃は止まらない。そのまま前方へ向かった身体をガスの噴出によって獣の頭のまわりを一周し、後方へ再度出た兵長が人体最大の腱たる“アキレス腱”を斬ったことで、獣の身体が前方へと派手な音をたてて崩れた。

ここまで十秒にも満たない間に起きた出来事。

自由の羽を掲げる深緑のマントが風の抵抗により激しく揺れる。

倒れた「獣の巨人」の頭上へ高く飛翔したりヴァイは獰猛な瞳を宿し、無用にうなじをさらす獣へとねらいを定めた。

女型やエレンのように、「獣の巨人」が硬質化を身につけている可能性は十分にある。否、巨人の精密な操作（無知性の巨人と同時に獣が出現したため、何かしらこの発生源因と関わっている可能性がある）を踏まえ、硬質化できることをまず前提とすべきだろう。

そうなれば相手が硬質化するよりも早く動き、うなじを狙う必要がある。

それが唯一可能であるとエルヴィンが判断したからこそ、獣の討伐にリヴァイが選ばれた。

「どんなクソ面が出てくるかッ、楽しみだ！」

毛に覆われた皮膚は一度では斬るに至らず、高速で振るわれる斬撃がうなじを削る。

そしてついにリヴァイの元に、敵の大將たるジークの姿が晒された。

無理くり巨人の中から引きずり出された男の両腕はちぎれ、中途半端に欠けてしまっていた。

「楽しかったか、俺の仲間を殺してよ……」

ジークの口内に突き立てられるブレード。先まで使われていた鉛色の刃には血が付着している。その味に男がえづきそうになった矢先、ブレードが躊躇いなく、さらに奥へと進んだ。より濃くなった鉄臭さ。食道へと流れ出るそれに、溺れるかの如くジークは咽せる。

「げ、ホッ!!」

「巨人化した人間は直後、カラダに激しい損傷がある場合、その再生に労力を取られ巨人化することはできない。まあ仮に生えてきても、俺が綺麗に刻んでやる」

「ぐ………が……ッ」

「アア? 何言ってるか分からねえよ」

それはお前が喉を刺しているからだ——と内心ジークは毒づいたが、薄いグレーの瞳は絶対零度の色を放っていた。

ピークがどうなったか気になるところだが、岩の件から考えるに同様に狙われた可能性が高い。

ブレードのせいで頭を動かすことができないため、ジークは瞳だけ動かす。それに釣られリヴァイも視線を移した。

辺りは獣の巨人の体の蒸発と煙幕により、少し先でも視界が不明瞭となっている。

「四足歩行の奴は俺の仲間が狙った。全員仲良く捕まえてやるから安心しろ」

リヴァイはジークの襟首を掴もうとしたが、上裸なため髪をわし掴む。

今人類最強の脳裏に過るのは、エルヴィン・スミスの顔だった。

「生きていろ——と、願う気持ちで馬か、誰か生きている人間を探そうとした兵長の後ろで、何か音がした。」

蒸発音に紛れ、急接近してくる何か。ミケたちが殺られたのかと考えたが、「四足歩行の巨人」にしては足音が少ない。ジークの口内に刺さっていた刃を抜き、咳き込む音を聞きながら後方を睨めつけた。

リヴァイがブレードを構えた瞬間に煙の中から現れたのは、手。そこから覗いたのは

「女^めがっ………!?!」

結晶化したことにより、捕らえられていたはずのアニ・レオンハート。

巨人化したその女が血を吐いている男を掴み、そのまま内門へと向かう。女型の口からは生白い女のものと思われる足が飛び出ており、途中で啞え直していた。ミケたちがどうなったのか回す思考はない。それよりも問題なのは女型と、ジークを持つ手とは反対の手に握られていた人物。

一瞬リヴァイと目が合った女は、形容しがたい瞳で、無表情に彼を見ていた。

それは地下街に住んでいたリヴァイが親しんできた殺意であったり、怒りであったり……絡まり合った感情が元の女の瞳の色とは異なった色の中で、凝縮されていた。

気味が悪いのは負の感情だけではなく、その中に「正」の感情もあったことだ。

総合して突き刺さったのは、ドス黒い殺気の塊だった。

リヴァイ・アッカーマンはわからない、何一つ。

だが仲間の死により煮詰まっていた感情の中でさらに、劇薬を投下されたことだけは確かであった。

その感情を例えることはできない。

後に燃える劫火が鎮火した時によろやく、彼はそれがどんな感情であったか名前をつけることができるだろう。

「俺は、誓った！あいつに……エルヴィンに、誓ったんだ—— ツ!!」

「獣の巨人」を殺す。

喉が回復したジークが叫び、立っていた巨人が動き始めた中、リヴァイは鬼神の如き面持ちで歯を軋ませた。

???????

対し、予想だにできなかった女型の助けが入ったピーク・フィンガーはというと、女型の口内で粘液まみれになりながら状況を整理していた。

彼女は投球していた「獣の巨人」の後方で岩を運んでいた中、初手、煙幕にまぎれ現れたモヒカン頭の男と女が飛び出してきたところを、咄嗟に右手で払いのけようとした。

男には当たったものの、女の方は車力につけたアンカーを途中で上手く外し、ピークの後方に回った。

四足歩行の身体上、手でうなじを守るのは難しい。そのため急所を硬質化させながら、彼女はあえて敵に背を向け、煙へと視線を凝らした。

無論、何の考えもなしに無防備な後ろをさらしたわけではない。二人の兵士が煙の中から飛び出てきたが、自身を狙うにしているのは戦力不足だと感じた手前、トドメを刺す人間が存在するとピークは考えたのだ。

つまり最初の二人は陽動である。

思惑は当たり、車力の前に飛び出てきたのは金髪の男だった。

彼女が口を開けその身体を食い潰さんとした時、その男は怯むどころか逆にガスを噴出させ、彼女の口内へ入り込んだ。

男はそのまま上下の顎と舌を巻き込みながら回転斬りをし、喉奥へとブレードを叩き

込んだ。その一撃は本体のピークの腹に届くまでに至り、ついで女兵士が車力の口の横の筋肉を削いだことで空いた隙間から、金髪の男がヌルンと出た。

そして本体に生じた激痛に硬質化が解けてしまった「車力の巨人」の背後を狙ったのは、口元を真っ赤に染めたモヒカンの男だった。

その後彼女は口に布を咬まされ、金髪の男に体を押さえられ、巨人化できぬよう女兵士に両腕を付け根から斬り落とされた。

残りの男の方は虫の息であり、荒い息と血を吐きながら彼女を睨めつけていた。

そんなところを、ピークは煙幕に紛れて現れたアニに助けられたのだ。

(それにしても、痛^いつたいい…)

ピークは考える。

ベルトルトが敵から聞いた情報が正しければ、アニは拷問を受けて捕まっていたはずである。

(そもそも、あの女性是谁…?)

アニの口の中に投げ込まれる前に見えた、女型が握っていた一人の女。

素性は不明だがアニが連れてきた以上、彼女の関係者であるのは間違いないのだから。

(……腕を斬られるのはもう、こりこりだなあ)
彼女はうつすらと涙目で、ため息をついた。

ツア、ソーレ！昼ドラ日和

アニに救出され、その腕の中で血を吐きながら、巨人を操作しリヴァイを襲わせたジーク。

ピークが自身と同様に敵兵士に襲われた可能性が高くどうなっているのか、またアニがなぜ突然現れたのか考えたい。しかしバトンよろしく走る女型に掴まれたままのため、吐き気に負け思考が回らない。

「車力の巨人」がメリーゴーランドなら、女型は安全バーのないジェットコースターだ。「吐く…」と、瞳を閉じうわ言のように呟いていた言葉がアニの耳に届き、彼の体は逆の手に持ちかえられ、女型の鎖骨部分に押しつけられるように固定された。

数段マシンになった揺れにジークが一息ついたと同時に、首元にヒヤリとした感触があった。

それに驚き瞳を開ければ、冷たい感覚は首の後ろに回りうなじを通って、肩甲骨辺りに触れる。

その冷たさが人間の手から伝わっているのだと少しの間をおいて理解し、自身を抱き

しめる人物へと視線を下げた。

肩につくかという長さのこげ茶色の髪と、敵の兵士が着ているものと同じ服。ただし刺繍のマークと、サイズがいささか合っていない。

それらが目に入り、音で表すなら「ギユウギユウ」と、めいっばいジークに抱きついている。

何がなんだかわからぬまま抱きしめ返そうとした男の腕は、両方肘より先から再生中である。

『……………』

「えっ」「……え？」——と状況を把握できていないジークを見兼ねて、人間二人を掴まえている女型の手に圧が加わる。

アニからすれば、「もっと他に何か言うことがあるだろ」というおせっかい気味なメツセージ。

それを、ぼんやりしないで現状を把握しろ、という意味に受け取った戦士長たる男の頭は、ようやく動き出した。

正面にある女型の口が時折もごもごと動くため、ピークは回収されていると考えてい

い。

車力は獣より後方で岩を集めていた。ウォール・マリア側から女型が来たことを踏まえれば、ジークより先に助けられている。

リヴァイに聞しては、「獣の巨人」を狩るために、左側に並んでいた巨人を殺しながらやってきた。立体機動に使うブレードやガスは残り少ないと考えるのが妥当で、尽きればジークの巨人によって殺されるだろう。

後はライナーとベルトルトのコンビが座標を持つエレンを奪取できていれば、作戦は成功。戦士側の勝利となる。

しかして、ピークまで倒されるとは誤算だった。彼女は戦士の中でその頭脳を買われ、状況処理能力が必要とされる「車力の巨人」を継承したのである。そう簡単にやられる命ではない。

徹底的に敵を殺すつもりであったが、知性巨人の数で比較すると四対一という状況で、戦士側に「負けるはずがない」という油断があったのか。はたまた、想像以上に敵の戦力が強かったのか。

答えはそのどちらも当てはまるだろう。

また、アニの方もだ。

調査兵団が来るのを待っている間、彼女を助けたライナー&ベルトルトとエレンの奪取を優先するジークとで争いになり、巨人化で勝敗を決め、勝った方に従うという約束で戦った。

整合性を踏まえて戦いはライナーとジーク間で行われ、結果「獣の巨人」が「鎧の巨人」に勝利した。

その男同士の戦いがあつたにも関わらず、ヌルツと女型が現れたことに「ちよつとソレってどうなの？」と思うところもあるが、生きて帰って来たのなら現状は良しとすべきだろう。

今の最優先事項は「始祖の巨人」である。

ジーク・イエーガーの異母兄弟が果たしてどんな人物なのか、彼の『安楽死計画』のため見極める必要がある。

何よりグリシャあの男巨人の力を継承継承させられたであろう弟を救いたいという気持ちだが、ジークの内に存在する。

彼と妹を犠牲にしておきながら、さらにエレン息子をもうけて幸せにするならまだしも、二人と同じようにエレンを犠牲にしたグリシャ・イエーガー。

彼の腹の中に燻る父への憎悪。それはライナーに「エレン・イエーガー」の存在を知らされてから、これ以上増えることがないと思つていた量を容易く超えた。

(とというか、待てよ?)

後ろを向き、シガンシナ区に近づいていることを窺つたジークは、再度最初に抱きそこねた疑問へと戻ってくる。

今なお自身にしがみついている女は誰だ?

いや、そもそもの話。

——俺、何で抱きしめ返そうとしたんだ?

無意識に、動いていた腕を見つめるジーク。

その部位は蒸気を発して回復中であり、まだ完治には時間がかかる。一先ず離れてもらうべく(上裸なため、ガツチリ抱きついている女の感触が直に伝わっている)、彼は右肘で背中を軽く叩いた。

そこでまた彼は一つ、自分が女に嫌悪感を抱いていないことに疑問を持った。

普通見ず知らずの人間が突然抱きついてくれば、多少は嫌悪感を抱くものだろう。

であるというのに、ジークは自然と、抱きついた女を受け入れていた。

おかしい、と脳内が再度混乱し始めた男から少し離れた女の顔。互いの熱で生ぬるくなった女の手は男の両肩に置かれた。

目元までかかった長めの前髪。綺麗な顔は涙と鼻水で汚れており、声を必死に殺すようにして泣いている。

歪んだその表情はかつて青年が少年であった時に慣れ親しんだもので、白とも黒ともつかない中間色の瞳を、ジークは愛おしく思っていた。

その瞳はいつも彼を捉えると大きく見開かれ、兄だけを映し出す。

さながら彼を「一人の少年」として見てくれたクサヴァーのように。

当時両親が自分をろくに見てくれなかったと感じていた彼を——、ジーク・イエーガーを見て、必要としてくれた存在。

「アウ、ラ」

それを聞いた女の瞳からボロボロと涙がこぼれる。どうにか言葉を発したいらしい

が、「おに……っ」のところで何度もつかえてしまい、最後まで続かない。だが何を言いたいのかは、わかった。

同時に前に出会った女兵士と、真ん中分けの長身の男を殺し損ねた事実について思い出す。

——ジークは巨人を投げなかった。投げられなかった。

戦場では許されないことだ。たといそれが威力視察であっても。

普段の彼ならば殺せただろう。仲間を巻き込むことになっても、必要とあれば切り捨てることができる。それが実行できるからこそ男は「戦士長」という立場を任されている。

そんな彼が敵を殺せなかった事実。「アウラ」という言葉を聞いて思考が止まってしまったとしても、すぐに思考を切り替え殺せただった。

でも、できなかった。

それが全てである。

彼が無意識に女を抱きしめようとした事実。

突然の抱擁に嫌悪感ひとつ湧かなかった事実。

そして、あの時殺せなかった事実。

ジーク・イェーガーは、無意識にその存在が何であるか、わかっていた。

だからこそ、今出すべきではない。『人間性』の部分が皮ごと剥かれるようにして、出血し始めている。骨も肉もえぐっているかもしれない。傷は心臓にまで届いて、彼の心音は狂い始めていた。ジワリジワリと体からは汗が吹き出し、頭と視界が熱くなる。本人も泣きたいのか笑いたいのかわからず、荒波に揉まれて混ざり合っていく感情に、理性の部分が追いつかない。

謝りきれないことを為してしまったのは、女の右足を見ればわかる。

それは……それはやはり、女兵士が食われた部位と同じである。

それと同時に叩いてしまったことを、自分よりも幼い少女が「樂園送り」を自ら選ぶ原因を作ったことを、謝りたい。

謝罪の言葉ばかり浮かんでしまう自分自身が、卑怯な人間であると、ジークは毒づいた。

膨れ上がった罪悪感に優に十年を超える。一の位で四捨五入すれば二十年だ。

心の奥底の隠された部分では女兵士が生きているかもしれないと思いながら、「あの出血量では…」と、諦めていた。

そうして諦めて隠して、これ以上自分に罪が生まれないように、意識の表層へと浮上しないよう沈めていた。

だが女兵士は生きていて、今、ジークの前にいる。

いるのだ。そう、いる。触れることができる。

夢の中の亡霊ではなくて、幼い幼女の姿ではない。

母親に似た美しい容貌で、グリシャ・イエーガーに似た髪の色で、そして妹にしかない白銅色の瞳を持っている。

「おに、……ちや」

「……………」

ジークは感情が吹き出しそうになるのを抑えて、唇を噛み締める。そのまま妹を——
——アウラを、強く抱きしめた。

その瞬間女の瞳が見開かれ、「あ」と、小さい声が漏れた。

白銅色の瞳からは水滴がとめどなく溢れ、男が呻くほど強く強く、抱きしめ返し、泣

いた。

子どものようにアウラ・イエーガーは、泣きじやくつた。

??????

何度も「私」は、アウラ・イエーガーは、「死」を望んできた。

兄がいない世界は私にとっては無色の世界にしか映らず、たとえグリシャ・イエーガーでもエレン・イエーガーであつても、私の根本を本当の意味で揺るがすには至らない。

ジーク・イエーガーが明日死ぬのなら、この世界が存在する意味は無い。

そして私は彼が死ぬ前に死ぬ。もしそんな状況であるなら、彼に殺されて、彼の腕の中で死にたい。

兄の体温は温かった。人間の体温はこんなにも、温かいのだった。

心の中ではどこか怖かったのだ。兄が私に何と言うか、もしかしたら拒絶されるかもしれない。

アニ・レオンハートの首に掴まりながらずつと、どうしようか考えていた。出会ったら抱きしめようか、それとも襲いかかって殺されようか。

しかし、それ以上に怖かった。

天下の変態が何を恐れているのかと思われるでしょうが、怖いものは怖い。薄っぺらくとも人間性があるのだから。

絶対にあってはならない欠陥した“人間の負”を愉しむ他にも、私にはココロ私がある。

私は腐っていても人間で、腐り切っても人間だった。

内門の右側に進みウォール・マリアの壁に着くと、アニは両足を壁に突っ込んで片手を使い器用に登っていく。

その間、お兄さまにより密着していた。血の匂いがよくした。

そのまま上へ登り切った女型は壁をずり落ち、壁上で大体の位置を把握した戦士二人の元へ向かった。現在地から最も近い場所にいたのはライナー・ブラウン。ハンジ・ゾエと二人の104期生がライナーの側にいた。

驚きを隠せない彼らは、女型が建物を巻き込んで放った蹴りから緊急退避した。

アニはその隙に毛根と四肢がない目隠し状態の男をつかみ、一瞬ものすごく嫌そうな顔をして口の中に放り込んだ。

女型を追おうとした坊主頭の少年を止めたハンジは、こちらを見ていた。女型の出現は当然予想外のものであったに違いない。

「なん、で」

と、微かに聞こえたハンジの声。負傷したのか、包帯を巻いた左目がかわいい。

彼女が巨人関係以外で悲痛に表情を歪めるのは、久しぶりに見たかもしれない。仲間
の死を悼む心はあれども、それを滅多に表に出さない女性だった。

私はこの状況でも心からヒトの「悲劇」に喜んでしまう人間で、私の笑顔を、彼女は
呆然と見ていた。

それに痛んだ私の心はどうやら彼女を、きちんと「友人」と思っていたようです。

さようなら、ハンジ・ゾエ。我が友。

次にして最後の、そして最大の悲劇の舞台となっていたのはベルトルト・フーバー。彼もまた、狩られてしまったようだ。気絶しているようで意識はない。目の前にはベルトルトの背後から首にブレード当てて、先程まで「近づいたらコイツを殺す！」と叫んでいた弟と、その隣で立ったまま柄を両手に握りしめている義妹がいる。その後方は焦げている人型の物体があった。超大型の爆風にも巻き込まれたのだろう。

二人は口を開けて固まったまま、見ていた。見ている？誰を？兄を？

渡さない。弟であつても義妹であつても渡さない。殺させない。絶対に。

「ち、ちよ、ちよつと離してつて!!」

焦った声を上げる兄。二度と離すもんか。

けれどア二が兄の要求を呑んだせいで離れていく。死にます。

「ねえさ………?」

エレンくんの声が聞こえた。

そうです、私はエレン・イエーガーの姉で、ジーク・イエーガーの妹です。そしてジーク・イエーガーはエレン・イエーガーの兄です。

つまり今、ここに兄弟三人が揃っている。その事実によく気づいた私。

ああ、だから兄は私に離れるように言ったのか。弟と、話したいから。

しかし兄が言葉を発する前に、大きな翡翠の瞳にありありと混乱を覗かせるエレンが叫ぶ。

「何でここにいるんだよ!!何で!!!」

「………?」

「何でアニと、一緒に……ソイツ誰だよ?何が、どうなってんだよ!!!?」

「………?」

アニと私が一緒にいるのは、私が彼女を抱き込んだからだ。

エレンは私のように兄だと見抜けないのだろうか。こんなにも父親に似ているのに。

——え、待ってお兄さまヒゲが生えてる? (今更) ……余計に父に似ている。

ゆつくりと動く脳。弟の質問に答えようとする私の口を、アニが指で押さえるようにして止める。

大きすぎる指は余裕で私の顔全体を覆った。息ができない。

私が息苦しさに悶えている間、兄弟の会話は進んでいる。「テメエ誰だ」と噛みつく弟を論しながら、エレンがグリシャに似ていないことや、必ず助け出すと、語る兄。

兄はどうやら、弟が父に洗脳されていると思っっているらしい。まあ、それも仕方のないことか。兄が戦士を目指していた頃を考えれば。

そしてやつと手が離れて、アニがエレンたちと距離を詰めようと動こうとした矢先、内門のウォール・マリアの方へ彼女とお兄さまが視線を向けた。蒸気を全身から発するそこにいるのは…人間？

——いや、待て、兵士長だ。黄泉の国から兵士長が帰ってきた。

兄は顔を蒼白させていた。絶対に私が守ります。死んでも守ります。

人間四人を抱えている手前、また人類最強とそれに次ぐ力を持つ女、「アツカーマン」の脅威が二人もいる。

撤退を余儀なくされた状況。

それでもアニは外門の方へ後退しながらベルトルト・フーバーを見て――。

「ア、ニ…?」

ベルトルトの目が開いた。彼女を、アニを見ている。それにアニもまた見つめていて、少年は微笑んだ。

すぐく、嬉しそうに。「よかった」と、眩く。

少年が微笑んだ瞬間その周りにキラキラと、眩い火花に似た星が煌めいたのは錯覚だろうか。

美しくて、鬱くしくて、狂おしく愛おしい。

これは、消えゆく魂の美しさに私の心が影響を受けているのか？

兎にも角にも、とても気持ちいい。

『ツ!!』

直後アニは弾かれたようにベルトルトから視線を外して、走り出す。

空中に大きな滴が一滴舞ったのが、見えた気がした。

ジーク・イエーガーと出会ってから自分の感情に追いつけなくなってきた脳は、いよスリープ状態に入る。

瞼が閉じた中聞こえたのは、弟の声。私の名前を呼んだ気がする。遠くでも聞こえるくらい大きな声。喉が潰れてはいないだろうか。弟にはユミルの導きがある。だから大丈夫だろう。大丈夫だ。

もうエレンくんは、私姉がいなくても十分歩けるくらい、大きくなっていたから。

最後に弟の、もはや感情が暴力的なまでに凝縮された絶叫を聞いたのは、よかった。やはりとても気持ちがいい。「私」が生きていることの証だ。

さようならエレンくん。ミカサちゃん。結婚しろよ。

ああ、もうお腹いっぱいだ。

このまま死んでいいと、心から思える。

「私」は死を望んでいる生き物で。

それはまるで「死」に還るようだと、ずっと昔から思っていた。

それほど私は死にたがりであるというだけなのかもしれないけれど。

とにかく今は疲れたので、寝ます。

おやすみなさい。

そこに「愛」はあるんか？

ウォール・マリア奪還作戦において、調査兵団は多くの英雄を失いながらも壁の穴を塞ぎ、グリシャ・イエーガーが地下室に残した「三冊の本」を得た。

しかし敵の殲滅には至れず、「超大型巨人」の力を得るのみとなった。

本作戦における生存者は、104期生のエレン・イエーガーやミカサ・アッカーマン。サシャ・ブラウスやコニー・スプリンガーに、ジャン・キルシュタイン。そして、超大型を継承したアルミン・アルレルトに、駐屯兵団から転属していたフロック・ホルスター。

また第一分隊長実動旅団長のミケ・ザカリアスに、同班のナナバと、四足歩行の巨人の一撃に一時は瀕死となったゲルガー。

さらに特別作戦班班長のリヴァイ・アッカーマンと、旧リヴァイ班のペトラとオルオ。フロック同様囚となった上で、「獣の巨人」の投石から免れた数名の兵士も生存している。

最後に調査兵団14代団長——ハンジ・ゾエ。

彼女は奪還作戦の前、エルヴィン・スミスからもしももの時、次の団長を任されていた。任された本人としては、エルヴィンの意思を量りかねる内容であった。リヴァイやミケが団長の「死」の気配を感じていたのに対し、彼女もまたエルヴィンの雰囲気の変化に気づいていた。

「次期団長にするなら、ミケの方が相応しい」と言った彼女に、エルヴィンはミケ・ザカリアスの確かな腕と、冷静に物事を判断できる点に関して評価した。

しかし時折熱くなりすぎてしまう部分と、団長に必要な活路を見出す思考能力がハンジの方がより優れているとして、彼女を次期団長に任命したのである。

ミケはすでにそのことについて聞いていたようで、彼もまたハンジの方が適役だろう、と語った。

以上が奪還作戦の生存者である。

エルヴィン・スミス含む200名近い兵士が亡くなった。

しかしそれは決して、無駄死にはない。

彼ら彼女らの墓標の上で、人類は大きな一步を歩んだ。その一步の先に見えたのは新

たな脅威であつたが、それでも英雄たちの死に、人類の前進という大きな意味が付与されたのは間違いない。

調査兵団が帰還ししばらく経つたのち、各兵団の上層部と調査兵団の生存者（負傷者除く）と女王陛下^{ヒストリア}を交え、此度のウォール・マリア奪還後の状況整理と今後の方針についてまとめる御前会議が開かれた。

三冊の本からわかつたことは、大まかに分けて『巨人と知りうる歴史の全て』『壁外世界の情報』『グリシャ・イエーガーの半生』である。

『巨人と知りうる歴史の全て』については、まず人類は滅んでいなかったというところから始まる。

約1850年前、壁内人類——エルディア人の共通の先祖となつた「ユミル・フリッツ（別名：始祖ユミル）」は、『悪魔』と称される何かと接触し、巨人の力を手に入れた。

エルディア帝国はその巨人の力を手に入れることで、強大な力を誇ったのである。

始祖ユミルは巨人の力を手に入れてから「十三年」後に亡くなり、以後彼女は九つの巨人に魂を分けたとされる。

それがエレンの「進撃の巨人」や、アルミンの「超大型巨人」などに当たる。また巨人化能力者には始祖ユミルの呪縛と言うべき、十三年という寿命の限りが存在する。

そしてエルディアは「民族浄化」として、他民族を襲い無理やり子を産ませ、その数を増やした。

巨人の力によって繁栄した大国はしかし、反旗を翻したマーレとの大戦で敗北を喫する。これは「巨人大戦」と呼ばれるものである。

その敗北の内実は、その平和的思想を以てして戦争を「非」とした第145代フリッツ王（カール・フリッツ）が、戦いを放棄したことにより起こったもの。

約110年前、カール・フリッツは自身の思想に賛同するエルディア人を従え、パラディ島へと都を移し、始祖ユミルの三人の娘たちの名にちなんだ三つの壁を作り、壁内人類の記憶を改ざんした。

壁内以外の人類は、巨人によって滅ぼされた——と。

同時に「レイス王」に名を改めたカール・フリッツは、始祖ユミルとの間に「不戦の契約」なる契約をした。

これは「始祖の巨人」の力の真価を發揮できるのが王家の人間のみであることを踏まえた上で、カール・フリッツ以降の力を宿した王家の人間が、初代レイス王の思想に囚われる——というものであった。

いずれ来るべきマーレ、あるいは諸外国の侵攻を受け入れる。

その代わり、束の間の「楽園」を民たちに捧げる。

端的に言ってしまうえば、スケールの規模が大きすぎる「集団自殺」と言つてよいだろう。

これに関して、王家の人間ではないエレン・イエーガーが始祖の力を扱ったことに疑問が生じた。結果、理由になりそうな根拠が見出されぬまま、エレン自身に何か特別な力があるのかもしれない、と判断された。

次に、『壁外世界の情報』について。

これは人類が滅んでいなかった内容から転じて、「マーレ」という話の部分に関連す

る。

この国には壁内人類には想像のつかない文化・文明が進んでおり、中でも「戦士」という存在がいる。

幼いエルディア人の子どもを対象に募集し、「戦士」として育て上げ、八つの巨人のうち一つを継承させるのだ。

そうして戦士となった子どもは、一族を含め一定の人権を得ることができると。

グリシヤの手記に書かれた時代より昔の人選がどのようなようであったかは、記述がなかったため不明である。しかし少なくとも彼がエルディア復権派に入ってから暫くして、マーレはエルディア人の子どもを募集した。

マーレが戦士を育てていたのは、枯渇する国内の資源により、パラディ島に眠る莫大な資源に目をつけていたため。それを奪う算段があった。

そして、それ以上に発展する機械兵器が巨人の力に迫っている実態を受け、「始祖の力」を奪うという目的があった。

ライナーやベルトルト、アニが壁内を襲ったのはマーレ政府の思惑が絡んでいたことになる。

敵は巨人ではなく、人間だった。

それも単純にマーレだけでなく、かつて民族浄化を行ったエルディア人に対し世界中の敵意が向かっていることは想像に難くない。

さらに言えば、パラディ島を襲ったのは同じエルディア人である「戦士」。

そんな同胞たるマーレに残ったユミルの民たちは、マーレ人に白い目を向けられ収用区で生きている。

そこに住む彼らが罪を犯した場合、「楽園送り」になるのだ。巨人の脊髓液を投与することで生じる、巨人化。壁外に存在する巨人たちは同胞であり、悲惨な末路をたどった者たちであるという真実。知らない方がよっぽど……と思わずにはいられないほど、シヨツクの大きい内容だった。

そして最後に、『グリシャ・イエーガーの半生』について。

彼の半生について書かれていた本の最初のページには、一枚の精密に描かれた肖像画のような、「写真」というものが挟まれており、それには正装する四人の姿——幼い少年を抱いて立つ若いグリシャ・イエーガーと、その隣にあるソファに指を啜えている赤

子を抱き腰かけている女性——が写っていた。

空を飛ぶ「飛行船」なる乗り物を見たいがため、妹の手を引き収容区の外に出た
イエーガー少年。

「外出許可証」を、持たぬまま。

その時からグリシャ・イエーガーの齒車は狂い、妹がマーレ治安局の男に殺されてから「楽園送り」にされるまでの人生。

エルディア復権派に入った男は、奇しくも自身が父親から思想の強制を受けたように、自分の思想を押しつけた息子によって密告され、「楽園送り」にされた。

無知であった、幼い娘を巻き込んで。

失った妹を重ね、男は娘を家に仕舞いこんで愛した。そして狭い世界しか知らなかった娘は「家族」に依存し、両親の愛情をマトモに感じられなかった兄を想い、両親についていくことを決めた。苦しむ兄を見たくないからと、「楽園送り」が何たるかを詳しく知らないまま。地獄へと足を踏み入れてしまった。

息子と娘への悔やみきれない念は、本から沸々と感じられた。

グリシャはマーレ治安局員として潜んでいた復権派のリーダーである「フクロウ」に

よって助けられ、「始祖の巨人」の奪還を託される。

「進撃の巨人」——それが現在父親から託され、エレンが始祖とは別に保有している巨人の力の名前。

グリシャ・イエーガーがレイス家を強襲した事の、真の理由が明らかとなったのである。

またこの手記にて、他にも判明したことがある。

グリシャはエレンの母親カルラの前に前妻がおり、その女性とはフクロウが彼女を復権派の会合に送った時に出会った。

彼女は大陸に残った「フリッツ家」の末裔であった。

その一族はカール・フリッツと思想を違え、戦うべく残ったのだ。

そんな二人の間にできた子どもが「ジーク」と「アウラ」。王家の血を引く子どもである。ジークの記述については戦士にすべく教育した——とある一方、アウラの方は『娘にはフリッツの血を残す使命——』等と書かれていた。

そう、アウラ・イエーガーは、王家の血を継ぐ人間であった。ヒストリアと同様に。

それだけでなく、グリシヤがフクロウから進撃の力を託される前に、読み飛ばすことのできない記述があったのである。

『娘は始祖ユミルの「寵愛の子」であった』——という部分。

その「寵愛の子」の所以とは、母親が巨人化させられた後に気狂った娘が自らその身を壁の上から投げたことから始まり、一度アウラは母親に食われた。しかし。

『何かの導きを受けるようにして、巨人化した妻は壁を登り、彼女が裂いた腹の中から娘が現れたのだ』——と。

その内容によって、一つの大きな疑問のヒントが与えられた。

始祖ユミルの寵愛の理由は、王家の血を継ぐ者であるから、と考えるのが妥当であろう。

しかし、ならばヒストリアやロッドなど、それ以外の王家の人間たちがアウラのように寵愛を受けているかと問われれば、「否」だ。もし王家の人間がユミルの寵愛を受けるなら、遠縁のヒストリアたちはまだしも、アウラの母であるダイナ・フリッツを始祖ユミルが救っていない理由がつかない。

よつて「王家の人間であるから」という理由が最も相応しそうではあるが、それ以外の理由も存在しうるかもしれないと考えられた。

アウラ・イエーガーは、ウォール・マリア奪還作戦の終盤に突如女型のアニ・レオンハートと共に現れた。

これに関して、アニは奪還作戦の前日までには結晶化した姿を兵士によつて確認されている。結晶化後のアニはユトピア区の地下室に送られ、管理されていた。

最初こそ彼女へ各兵団のお上の来客が多かったものの、日が経つにつれ人は減った。ずっと見張りがついているというわけではなく、日に一度、彼女の状態を兵士が確認するという状況だった。

そしてアニがいたはずの場所には、大きな水たまりが残されていたのである。

対しアウラの身柄は王都ミットラスの憲兵団本部にあつた。

まさかドラ○もんの力がなければ逃げられないような場所であり、彼女の部屋の前には常に見張りがいた。

そんな彼女は忽然と、姿を消した。就寝前に見張りと共にトイレへ向かつた彼女の姿が憲兵に目撃されており、それから明朝、交代の見張りが部屋の前に兵士がいないこと

に気づき、中に入ったその場所には誰もいなかった。

室内は寝具が少し乱れている程度で、争った形跡はなし。

一つ不可解だったのは、憲兵の服や装備がバラバラになり部屋に散乱していた点。

何か事件があったのは明白だ。当初はアニ・レオンハートとアウラ・イエーガーを逃すために協力した人間、それも複数の人間がいると考えられたが、造反者と疑われる人物は判明しなかった。

ちなみに発見が遅れたのは、その日人類の命運がかかる奪還作戦の決行を受け、各兵団忙しかった影響もあるだろう。

そしてこれらについて、「ユミルの寵愛」という言葉が関連づけられることとなる。

アウラ・イエーガーはマール故郷へ帰ることを願っていた。

そんな娘の思いを始祖ユミルは叶えたのではないだろうか、と。

方法について明確にはわからない、しかし議論が交わされる中で、グリシヤがフクロウから聞いた「道」というキーワードが、可能性の一つとして浮かび上がった。

巨人化できるエルディア人は一つの「道」のようなもので繋がっている。

その繋がる先が始祖ユミルであり、「始祖の巨人」であると。

その「道」がどのようなものであるかは不明。ただ現場にあった不可解な憲兵の服や武器、また巨人化したダイナ・フリッツが娘を体外へ取り出した後消えたことを踏まえ、一つの仮説を見出したのがアルミン・アルレルト。

誠に突拍子のない内容であるとしつつ、アルミンは語る。

見張りをしていた兵士が巨人化してアウラ・イエーガーを体内に取り込み、「道」を通じて移動させたのではないか——と。

そもそも「道」の存在がわかる前まで、巨人の肉体には謎が多かった。

その巨体さであるにも関わらず質量が異様に軽い点や、うなじを狩られた後に消失してしまう点。それに、硬質化を形成する結晶など。

それらが「道」から供給されている可能性が出たことにより、アルミンは巨人を構成する物質を、媒体となる「道」を通して現実へ送っているのなら、逆に現実から「道」へと「物体」である体が入り、現実へ再び移動できるのではないのか？——という可能性を思いついたのだ。

この場合「道」への進入の出入り口として、バラバラになっていた兵士の服や武器を踏まえ、巨人の可能性が考えられた。

アニに関しては彼女自身が巨人化能力者であり、より密接に「道」と繋がっているの

で、アウラと異なり媒体とするような巨人が必要なかつたのではないだろうか？——と
も。

ただしこの仮説が仮に合っていると、始祖ユミルがアウラ・イエーガーの意思を
尊重しているのだとしたら、アニ・レオンハートを助け出したのがアウラの意思という
ことになる。

そうなれば、本格的に彼女が壁内人類へ仇なす思考を持っていたことに他ならず。

同時にこの事実を探るのは、それこそ本人に直接確かめなければ真相がつかめぬ問題
となつた。

何かしら、アウラの真意を知っている可能性のある男はいた。ヒストリアの後方で控
えていた護衛部隊の隊長である男だ。

射抜くようなリヴアイ正の視線が男に向いたが、当の本人は、我関せず、な表情を浮か
べていた。

ケニー・アッカーマンもまた、開示された情報とアウラから聞いた内容との答え合わ
せ。そして、それがほぼ同じだったことにより生じた「始祖ユミル」の存在を踏まえ、下
手に情報を口にするのは始祖の地雷を踏むことになると考えたのだ。

余談だが、ケニーを睨む兵士長に便所だと思つたハンジは、小声で「我慢せず行きなよ」といらぬ優しさをみせた。

一先ず敵の正体がわかつた今、それに備え壁内人類は戦う算段を立てなければならぬ。それもエルヴィン・スミスという英雄を失つた中で。

優先すべきは、ウォール・マリア内に残る巨人の掃討である。討伐に活躍するのは、以前開発された丸太落下方式だ。

そして話し合いの最後、女王ヒストリアにより、壁内人類に真実を明かすことも決定され、御前会議は幕を下ろした。

???????

会議が終わつた後、その足で少年——エレン・イエーガーは心配するミカサとアルミンに「一人にして欲しい」と告げ、調査兵団の兵士の墓がある場所に向かつた。

多くの墓がそこにはあり、奪還作戦で亡くなつた兵士たちのまだ新しい墓も増えてい

る。

そこには多くの献花が供えられており、いっとう多い場所もあった。

心臓に手を当て、一人、一人、今回亡くなった者たちの名を読み上げながら、ゆっくりと歩くエレン。

時間をかけ読み上げた彼は隅に座り込み、空を見上げた。

青い空。どこまでも遠く、掴むことのできないもの。

注射器をエルヴィンかアルミンのどちらかに打つことになった時、エレンは使用権限を持つリヴァイに逆らった。

兵士長はエルヴィンに打たせようとしていたのだ。それを無理に止めようとミカサと共に動いた。

自由の羽を掲げ、兵士たちを死地へと向かわせたものの死にはぐれたフォルスター兵士によつて、連れられてきた男と。

女型が去った後、間もなく奇跡的に息を吹き返した少年。

結局その注射は、アルミンに打たれることになったのだが。

団長の命を背負ったアルミンは、「なぜエルヴィンではなくお前が生きたのか」という周囲の目に晒されることになった。

しかしてそれでもエレンやミカサ、そしてジャンたちはアルミンが生き残ったことを心から喜んだ。同時に壮絶な最期を遂げた団長含む仲間たちの死に、精神が摩耗している。

そしてリヴァイに逆らったとして、戻ってからエレンとミカサは「兵規違反」を受け、一定期間牢屋に収容されることになった。途中で今日の御前会議があり中途半端に終わったものの、それがなければまだ今ののように空を仰ぎ見ることは叶わなかっただろう。

「敵は巨人じゃなくて人間で……」

空に浮かぶ雲が、ゆったりと流れる。

「父さんは色んなもののために戦い抜いた」

側の木に止まった白い鳥が、フンを落とす。

「オレには兄もいた。腹違いの……兄」

木々が風に揺れ、鳥が唄う。

「……………オレは本当に何も、知らなかった」

エレンとは比べものにならないほど壮絶な過去を送ったであろうグリシャと、姉。アウラ・イエーガーの真意を周囲が測りあぐねている中、エレンはその答えを見出し、
ていた。

彼に「必ず助ける」と語っていた男。最初は半裸の、しかもヒゲ面な絶賛不審者スタイルの男に姉が抱きついているという状況に、なぜ姉とアニがここにいるのかという疑問も相まって、思考が停止した。

しかしよくよく見ればその男はグリシャの面影を色濃く残しており、向こうも「父親と全然似てないな」と、エレンに向けて言った。

目の周囲に巨人化痕のあった男はライナーたちと同じ戦士であり、「あのクソヒゲ面野郎は俺が絶対にブツ〇す……」と獣の本体について語っていたリヴァイの証言から、半裸の男が「獣の巨人」の正体であることもわかつている。

グリシャが息子を戦士に育てようとしていたことから、その男が「ジーク」であることは確かだ。

そんな男に抱きついていた時のアウラは、エレンがこれまで見たことのない表情だっ

た。

どこか幼い、まるで精神が子どもになったような——とても、不安定な様子。それとかつてエレンがもつと幼い時に見た、草原でのワンシーン。そこに寝転がり、青い空を眺めていた時に聞いた姉の言葉。

『——あいたい』

その時姉が泣いた理由が、少年にはわからなかった。

けれど今のエレンなら、姉がなぜ泣いたのか、誰に会いたかったのかわかる。

そして同時に、アウラ・イーガーにはずっと焦がれ続けた存在以上に大切な人間は
いないのだろうと、わかった。

わかって、しまった。

「オレは、姉さんに本当に……愛されてたのかな……」

少年の頭上で囀っていた鳥は羽ばたき、青い空へと溶けるように消えていった。

『×××××』
 『×××××』

人間を最も端的に表すのだとしたら、
 “奪う側”と“奪われる側”に分けられる。

武装した人が槍を用いて戦った時代。『ア××』は、奪われる側の人間であった。

彼女には全く同じ容姿を持つ、もう一人の「自分」がいた。現代で言えばそれは双子というものであり、彼女ともう一人の「自分」は一卵性の双子。

どちらが姉で、どちらが妹であるか区別する事はさして大した問題ではないその昔。遺伝子的に同じである二人は、最初こそ同じように扱われた。

特異な点は分かれた卵子の一つが、後から遺伝子的な欠陥を起こしたこと。

その欠陥を起こして生まれたのが『××ラ』だった。もう一人の「自分」と容姿は全く同じである。

しかし彼女の髪は色素が濃く、瞳は白内障のように白く濁っていた。ただし視力に関しては問題なく、普通の子どもと何ら変わらない。

その、精神さえ除けば。

もう一人の「自分」は、美しい金髪に蒼い瞳を持っていた。

『ウ』は、もう一人の「自分」が好きだった。透き通る金髪は太陽が姿を現しているようであり、蒼い瞳は雲ひとつない空のようだった。

彼女はもう一人の「自分」と比較して、もう一人の「自分」が「朝・昼」で「晴れ」なら、自身は「夜」で「曇り・雨」だと思っていた。

彼女の髪は色素が濃いから、夜。

瞳は雨を降らす、あるいは降らしている雲のような色であったから、曇りで雨。

二人がいれば、世界を表すことができる。

だからより強く、『ア』は思った。

——「ユミル」の中へ、還りたいと。

「ユミル」、それがもう一人の「自分」の名前だった。

『ウ』は本能的に、いつもユミルの中へ還りたがっていた。

母の胎の中で一つから二つへと分かれてしまった自分たち。

『ウ』の精神は決定的な何かの部分で壊れており、もう一人の「自分」への執着は並々

ならなかった。

自分が還れば、ユミルは完璧になる。自分たちは一つになって、あるべき姿に戻る。しかし分かれてしまった以上、戻ることは絶対にできない。だからこそ彼女の理想はユミルに食われて、「自分」の一部になることだった。

それが『ア××』の幸せであり、「ユミル」の幸せであり、自分たちの幸せであると。
× × × × × × × × × × × × × × × ×

お互い物心がついた段階で、片時も離れずべったりと張りつくそんな『ウ××』を、ユミルは煩わしく思っていた。

朝から晩まで、物理的にずっと付いてくる同じ顔をした存在。

オマケに常日頃「かえりたい」と言われる。

「たべて」とも。

そうしたら『××ウ××』と「ユミル」はあるべき「私」になれる——と。

ユミルだけでなく周囲はそんな彼女を見て、気味悪かった。両親でさえも、『ア××』を遠ざけていた。
× × × × × × × × × × × × × × × ×

誰も彼女に近寄らない。そして彼女が引つ付いているユミルにも近寄らない。

ユミルが怒っても、蹴っても叩いても、彼女は嬉しそうに笑うだけで、またユミルに

引つ付く。

『××ラ』にいくら行動を起こしても意味がないとわかったユミルは、その存在を無視する××とに決めた。

『××ウ××』はこの世に存在しない。それは視界に映る木々のような風景の中のひとつであつて、意識するだけ無駄であると。

その日からユミルは『ア××』と話すこともなくなり、いつしか本当にいないものとして認識できるようになった××それから暫くして、「たべて」と言われることもなくなつた。

しかし間もなく、運命の針が狂う。

上がるのは戦禍の火。村の家々が燃え盛る中、二人の少女は鎖に繋がれた。両親は殺され、『××ラ』は舌を切られた。

他族から領土や人民を確保する略奪民族「エルディア」によって、奴隷にされた人間たち。その一人に『××ウ××』とユミルはなつた。

『ア××』は以降、その名前を略し『アウラ』と呼ばれるようになった。奴隷を呼ぶのに、長い名前は不必要であるとして。

『アウラ』にとつては二人ぼっちの世界。

ユミルにとつては一人ぼっちの世界。

奴隷の中でも一段と幼かった彼女たちも、強制的に働かされる。

元からユミルしかいない『アウラ』の世界には変わつたことはない。両親が死んだことに悲しみもしたし、舌を切られた痛みもあつた。奴隷として働かされる毎日も苦痛である。けれどそれまでで、彼女の根幹を担うのはユミルへの回帰。

相変わらず彼女は言葉にせずともユミルへ還ることを願ひ、そんな彼女をユミルは無視し続けた。異様な二人に焼き払われた彼女たちの故郷の人間と同様、奴隷たちは二人に関わることをしなかつた。

いや、誰も自分たちのことで手一杯な手前、他人に向ける思いやりの一つすらその中にはなかつた。

あるのは陽が出てから暮れるまで働かされ続け、
“人”としての尊厳が奪われていくだけの毎日である。

そしてある時、家畜である豚が逃げたと、王は奴隷たちの前で宣つた。

逃したのは誰であるのか、名乗り出ぬのならその責任は奴隷たちの身体の一部を以てして償わせると。

柵を開けて放置したのが誰であるのか。『アウラ』は知っていた。もう一人の「自分」がその柵に手をかけるのを、一緒にいた彼女は見ていた。

なぜユミルが豚を逃すようなマネをしたのか、彼女は分からない。

——否、物心ついてからユミルが何を考えているのか、『アウラ』には一度も分からなかった。

もう一人の「自分」の中に還りたいと願えば、ユミルは怒る。蹴る。殴る。

それはユミルが彼女を食いたくないがための行動だと、思っていた。そこにユミルからの「愛」を彼女は感じていた。

無視されるようになって、これは「愛」の延長線上の行動であると。

だがそれが長く続き、『アウラ』はようやく気づいた。ユミルの無視は「愛」ゆえのものではないと。むしろ、彼女を嫌っているのだと。

二人が生まれた日。こっそりと一人花畑で作った二人分の白い冠。それを持って帰りユミルの頭に乗せた彼女。位置が悪かったのかそれは二人の間に落ち、そのままユミルは真つ直ぐに進み、『アウラ』とぶつかった。

よろけて倒れた彼女が見たものは踏まれて形の崩れた、白い花冠。

それから彼女はユミルに「たべて」とも言わなくなった。

何も言わず、ただ側に居続ける。「自分」と離れることは彼女にとつて死と同義であり、一人で花冠を作ろうと行動した時も、内心ユミルがそばに居ないという事実が恐ろしかった。

『アウラ』はユミルの心を知りたい。ユミルに食われて一つになれば、きつとその気持ちを理解することができる。しかしユミルがそれを望まない以上、彼女はただ共にいることしかできない。

豚をユミルが逃した時もそうだ。その真意を理解できなかった。

けれど意味のないことを「自分」が行わないことは知っている。ユミルが『アウラ』を嫌いなことにも理由があつた。であるなら、豚を逃したことにも理由がある。ましてや王の家畜を逃すなど重罪である。

それを理解しながらも行ったのなら、相応の理由がユミルに存在する。

だから『アウラ』は王の発言を聞いた後震えながら、手を上げた。

奴隷たちの中でも幼い二人。それも少年ではなくひ弱な少女。豚を逃した犯人がわからずとも、奴隷の中で最も価値の薄い存在。自分のかわいさ余つての行動ではなく、生きるだけで辛い人間たちが二人のうちどちらかを犯人に仕立て上げるのは、仕方のないことと言える。

ここで一つ踏まえることは、『アウラ』が奴隷にされる前から、村で不気味がられる原因となった発言を取らなくなったことである。

そのため同郷の者ではない大多数の奴隷たちの目には双子が、片方にいつも付いていく『アウラ』と、その片方を無視し続けるユミル——という光景に映る。

(舌を切られた奴隷たちはマトモな言葉を発せないため、情報を共有することがろくにできなかつたことにも留意しておきたい)

ゆえに悪感情を抱かれやすかつたのは、故郷と一転してユミルであった。

そのため仮に『アウラ』が手を挙げなければ、その手の多くがユミルに向けられていただろう。

王は手を挙げた『アウラ』を見て、告げる。

—— お前たちは、自由だ。

ずっと共にいた二人。片方の罪は、もう片方の罪であると。すなわち『アウラ』^{自分}の罪は、ユミル^{自分}の罪。

その内容を告げられた時、『アウラ』は喜んだ。二人が同じ存在であると、王自ら認めてくれた。ついと笑ってしまった彼女の表情を、少し瞳を開けて見つめていたユミル。彼女はユミルが長らくぶりに自分を見てくれた事実、さらに途方もない喜びを覚えた。

しかして同時に過ぎったのは、王への殺意である。

もう一人の「自分」を守ろうと、『アウラ』がとった行動は無為に帰した。

この時彼女は初めて、心から世界の理不尽を体感した。

二人に科せられたのは“自由”という名の追放。

『アウラ』は無気力なユミルの手を引つ張り、走り続ける。

追ってくるのは四足歩行の獣^{イヌ}と、弓と矢を持つ同族。

ここでユミルを死なせるわけにはいかなかった。たとえ自分が死んでも、ユミルに食べてもらえず彼女の中に還ることや、あるべき姿の「私」になることができなくとも、それでも。

“愛”する人間を、守りたかった。

そして先に力尽きたのは、『アウラ』だった。

矢が何本も身体に突き刺さり、流れた血と痛みにより動けなくなる。その中でも大切な人の背を押し、生きてくれることを願った。

地に伏した『アウラ』。

ユミルは走って行く。

ユミルが走って行く。

ユミルは走って行って。

———
彼女を、振り返ることはなかった。

ユミルの姿が消える。すぐ近くにまで、犬の足音と荒い息遣いが近づいていた。全身が冷えて行く中『アウラ』は、仰向けになる。

脳を支配するのは自分でも形容しがたい感情。愛する「自分」に生きてほしいと願う傍ら、とめどなく溢れる涙。

見てくれなかった。王に追放を告げられた時、ユミルは見てくれたはずであるのに。ずっと抱き続けていた自分の愛情がようやく伝わったのだと、彼女は思っていた。しかし違かった。

最後までユミルは『アウラ』を見ず。

そんなユミルの心を、『アウラ』は理解することができなかった。

大声で泣く力もなく、冷たくなる身体を享受するばかりの心。

空に広がるのは青い空。

その色の中に、『アウラ』は「自分」の色を幻視した。

世界はかくも残酷であるがしかし、「自分」の、ユミルの色を持っている。美しいと、思った。

『×××』は——『アウラ』は、生まれてからずっと不良品で。

×××もう一人の「自分」^{ユミル}の中へと還りたかった。

ユミルの中へ帰りあるべき「私」になることを望んだのである。欠けていたからこそ、ユミルの中へ戻ろうとした。

彼女は最期に、青い空に手を伸ばす。遠く届かないその色へ、蒼い色^{ユミル}へと。

彼女はそして意識を失いながら、その肢体を犬に噛みちぎられ、絶命した。最期にユミルに見てもらいたかったと。

そして死んだその意識は、暗い暗い深淵へと誘われたのである。

???????

そこは、尾を啜えた回遊魚が司る深淵。

或いは人の魂。或いは人間たちの感情。そういった実体として存在しない「無機質」が沈殿する場所には、裸の女たちの死体が積み重なっている。白い肌は闇の中で浮かび上がり、地平線を形作っていた。

それは年齢の違いはあれ、全て同じ人間の死体。

闇に包まれた空の上で回るその回遊魚は、尾から口を離し、死体の山の上に佇む女の顔を啜え込んでいた。そこから回遊魚が口を離すと、口を開けたまま涙を流す女の顔が露わになる。

—— 「ユミル」 カクしてた

その言葉が、女の脳内に届く。

普段は女と交わることがない回遊魚の世界。それは彼女を守る存在の一瞬の隙を突き、深淵から這い上がってくる。

—— ツゴウのいいところだけ ミせる 『×××』のブブン カクす

女が目覚めたところで、この場所についても、~~××~~回遊魚についても、思い出すことはない。残るのは女がこの世界へ回帰する理由となった記憶だけ。すなわち先程女が見ていた「アウラ」の記憶だけ。

矢を射られ、犬のエサになった女はこの世界に回遊魚の意思によって引きずり込まれた時、願^{ねが}うたのだ。

もう一度だけ、ユミル^{彼女}に会いたい、と。

願った。願ってしまった。

そして、回遊魚はその願いを聞き入れる。

彼女が『アウラ』^{彼女}を忘れるやり方で。それどころか、彼女が最も大切にしたユミル^{存在}をも忘れてしまうやり方で。

回遊魚の腹の中に入った彼女は、その中で延々とグルグルと回り続けたのである。殺されて死に、生きて、殺されて死に、生きて、殺されて死ぬ……。

回遊魚のエサ。それは人の感情^{無機質}。もつと言えば人の「負の感情」。

それこそ「人の不幸は蜜の味」を表すかのように、甘い蜜を回遊魚は彼女が壊れ続けたも吸った。彼女の悲劇を、人間の悲劇をオカズに。

この世界では壊れることに果てはない。死ねば壊れた体をこの世界に捨て、新しい体を得て戻り、死ねばまた戻るのだから。唯一変わらないのはその精神だけ。壊れ続けた心はやがて自分が壊れていることすら理解できず、最初の目的を忘れただ生き続けることになる。

どれほど長い時間を得て、『××』が元の世界にたどり着いたのか、蜜を吸っていた回遊魚でさえわからない。

というより時間の感覚など、回遊魚にはないのかもしれない。

ソイツは例えるなら、人間を超越した存在。

神に近いユミルをも超える、何か。

回遊魚は女から離れると、また空を回り出す。

これから待ち受けるメインディッシュを、今か今かと待ち望むのである。

白・い・ヤ・ツ・を。

有象無象の何かが生じては消え、また生じては消えていた太古の昔。「無機質」な世界を見出した回遊魚がそこに移った後。それは変化を繰り返す世界で、唯一生き残った「有機物」の源となる。

それは人が、「生命」と呼ぶものであった。

【七章】新生活編

あ、あ〜〜〜☒?☒?

マーレ国は「始祖奪還計画」に失敗し、「超大型巨人」をパラディ島に奪われる結果となった。

戦力でみればマーレの戦士《知性巨人四体》&ジークの巨人と、調査兵&エレン《知性巨人一体》の戦い。

マーレの上層部はおろか、戦士たちでさえ負ける未来は想像がつかなかった。それほどまでに巨人の力とは強大なものなのだ。

しかし、戦士は敗北を喫した。

一時は四人全員倒され、最悪四つの力がパラディ島にわたり、「戦鎚の巨人」のみとなったマーレが他国に攻め込まれるどころか、壁内人類が世界情勢をひっくり返してしまふ可能性さえあった。

その危機を救ったのが、アニ・レオンハートである。

彼女はライナーとベルトルトがエレンの誘拐に失敗し、一旦パラダイ島を去った後、その身を隠し、調査兵団がウォール・マリア奪還作戦に乗り出したのを見計らい、行動を起こした。調査兵団と戦士がぶつかるのを見越して。

それまで動かなかった理由はライナーたちがしくじり、アニが彼らの仲間であるとバレてしまったため。

だが「始祖奪還計画」の建前、収穫なしにマーレに帰還するわけにはいかない。そのためエレンが外に出るタイミングを待っていた、と。

もちろん敵であることが判明している以上、単独で、それも長期間身を潜めるのは難しい。

同時に憲兵団に身を置けなくなったことにより、調査兵団の動向も掴みにくくなった。

ゆえにアニやベルトルトたちが協力者においたのが、アウラ・イエーガー。

「始祖」と「進撃の巨人」と持つ少年の姉であり、戦士長たる男、ジーク・イエーガーの妹である。

かつて「楽園送り」にされた彼女はマーレ治安局にまぎれ込んでいた「フクロウ」によって助けられ、マーレより先に始祖奪還を目論むフクロウから託された進撃を継承し

た父、グリシャ・イエーガーと共に壁内へと渡った。

以後彼女は壁の中で暮らす。

胸中で巨人となった母親の幻影と、おぼろげな兄の姿を求めながら。

そしてある時、父親からすべての「真相」を告げられた彼女は、息子娘に復権派の思想を押しつけ、自分やジーク、祖父母を「楽園送り」にするような業をなした両親を憎んだ。

拳句、その父親は前妻を亡くしたにも関わらず、新しい妻と息子をもうけ、幸せそうに暮らしていたのだ。

斯様な人生を送っていたアウラ・イエーガーと、さまざまな過程を経るうちに彼女がジークの妹であると確信し、その心中を悟ったアニたちは彼女を「協力者」に仕立て上げた。

ライナーとベルトルトが尻尾を巻いてパラデイ島を離脱した後も、アニは協力者であるアウラの手助けがあり、スムーズに隠れ情報も得ることができた――。

———というのは、表上の理由である。

実際アニの報告では、彼女はトロスト区にて身柄を拘束され、のちにユトピア区へと

移され拷問を受けていた。

そこを救ったのがアウラ・イエーガーである。

女はベルトルトやアニと対等な協力関係を結んでいた（ライナーは精神疾患にあったため、この情報の共有はしていなかった）。

だが協力していた彼女はライナーとベルトルトが逃亡し、アニが捕まった後で、協力者であることがバレてしまった。

アウラもまた憲兵に捕まったがしかし、アニは「弟を脅しに使い、アウラ・イエーガーを利用して……」と嘘を吐いた。協力者までも地獄に引きずり込まないために。少なくとも彼女は同情心を抱いていたことになる。

アニが嘘を吐いた本当の理由は、待ち受ける「死」への些細な抵抗からきた発言であつた。

だがまったくブラコン野郎に同情心を抱いていないかと聞かれれば、アニ本人もわからない。

アウラ・イエーガーが変態であることを知った今は、もう哀れみの心などなくなつてしまつた気もするが。

また、ベルトルトとライナーがアウラの存在を語らなかつた理由については、妹が生きていたと知つた場合ジークの精神が不安定になると考えたから——と、ライナーがの

ちに語った。アウラの情報をライナーに秘匿させたのはベルトルトで、調査兵団との戦いには戦士長の力が必須であると考えたために、黙っていたとも。

この隠していたことについては、その理由も踏まえてお咎めはなかった。

憲兵の私兵をこさえたアウラは、捕まっていたアニを秘密裏で解放し、さらにウォール・マリァ奪還作戦で戦士と調査兵団がぶつかることを見越して、アニと共にシガンシナ区に向かった。

(ちなみに私兵については一部を証拠隠滅で殺し、消し損ねた部分に關してもマールレの不利になる情報は一切話していないため問題はない、とアニは続けた)

しかし果たして、一介の兵士がマールレ治安局と似たはたらきを持つ憲兵の人間を、仲間うちに取りざり込むことなどできるものなのか。

それに関してアニはアウラが長年その牙を隠し、何年も調査兵団に入っていたことを含め、人心掌握に長けた人間であることを語った。

おまけに演技力も高い。綻びさえ出なければ、戦士でも気づけなかつただろう、と。ならばアウラ・イエーガーのその「綻び」とは何なのであろうか。

これは女の「目的」に直結するものであり、彼女が「牙」を隠し続けた理由や、アニ

たちが対等な関係を結んだことに由来する。

——アウラ・イエーガーは「ジーク・イエーガー」に会うためだけに生きてきた、イかれた野郎である。

事前にアウラから彼女の本当の内心（一部は嘘であろう）を聞かされていたアニは、自分で話しながら顔色が悪くなっていくのを自覚した。

「楽園送り」を選んだのは、幼心に自分が生きていると兄が傷つくことを分かっていたため。

調査兵团を屈指したのは、純粋な戦闘力をつけていずれ来る「戦士」になったジークに殺されるため。

親の愛情を一身に受けられなかった原因の自分を、兄は恨んでいるから、と。

超大型が現れれば「戦士」が来たと、重傷の状態で錯乱気味にアニたちとファーストミートし。

「ジーク・イエーガー」に関しては、絶対に裏切らないと悟った彼らが協力関係を結べば、長年ともに戦った仲間であろうが見殺しにする上、必要あれば自分の足を折る。

「獣の巨人」の威力偵察で違和感を覚え、そこから新たな「戦士」が来た可能性を見出し、兄と出会えば、殺されに行き。…いや、そもそも巨人化している状態でジークと見抜けるのが恐ろしい。

そして殺され損ねれば、発狂間近になる（右足を失った件は、アウラ本人に「この部分は言わないでね」と聞かされたので言えなかった）。

そしてウオール・マリア奪還作戦に向けた私兵の確保と、アニの救助。

ジークと再会を果たした後のアウラは、戦士たちがマールに帰還した未だに、糸の切れた人形のように眠り続けている。

このことを最初に報告を受けたテオ・マガトも、思わず長い沈黙をせざるを得なかった。

「驚異の子」の妹は「ヤベエ子」だ。いや、ヤバいというものではない。『狂気』をそのまま、穴という穴から漏れ出させているような異常さだ。

少なくとも十数年いたパラディ島の仲間を裏切り、戦士たちを救い出したのだ。女の根底には絶対に揺るがない目的、あるいは信念が存在する。

そして戦士の中でも表情を滅多に崩さないアニが、生気のない表情を浮かべている。

後で本人に確認するにしても、本当にアウラ・イエーガーのすべてが、「ジーク」であ

るのだろう。

だがアニの報告をすべて鵜呑みにしたとして、残る事実は「イジヨウシヤに戦士四人が助けられた」というもの。

まさかその事実が本当だとしても、容易に認めることはできない。

ただパラデイ島の人間を甘く見ていたのは、変えようのない事実である。

マガトはアニから聞いたアウラの異常者エピソードを一旦誰にも他言しないよう伏せさせ、後日上層部と「始祖奪還作戦」の当事者であるライナー・アニがマガトの後ろに控えた中で会議が行われた。

この時アウラ・イエーガーの狂人ぶりを知ったお上の精神は、もはや「悪魔の末裔」云々どころの話ではなかったに違いない。

そしてマガトの隣に座る戦士長の男は、無言でその内容を聞いた。反射したレンズの奥に、己の感情を隠して。

そうした話し合いの結果、都合のいい「表上の理由」ができた。

「裏の理由」は総合すると、「兄を愛する妹」が再びジークと会うことを望んでアニを救い出し、結果戦士三人を救うことに繋がった——といったところか。

狂人エピソードの部分は、上層部とその場にいた数名の戦士の間で秘され、その代わりにオブラートに包んだ「兄を愛する妹」という体があった。

「兄を愛する妹」が壁内を裏切っている時点でその異常性は隠し通せていないが、女の狂人ぶりを知るよりはよっぽど精神衛生が保たれる。

同時にアウラがアニを救ったという部分で、アウラ・イエーガーのまた別の目的が窺い知れる。

彼女がアニを救ったのは、自身の保身のためでもある。

戦士たる女を救い、マーレに「楽園送り」となった己の居場所を作る。

お上の判断次第で、いくらでもアウラ・イエーガーの処分は決まる。たとえ超大型を抜いた戦士四人を救った人物であってもだ。

——否、上層部も前例のない《バクトウザー・マーレ》に頭を悩ませざるを得ないといった方が正しい。

表上の理由ができたのも、この「楽園送り」にされた人間が戻ってきたという事実が存在しているがゆえ。それにただでさえ超大型を失ったことにより、戦況面が大きく動く可能性が出てきている。諸外国にマーレが超大型を失ったことが露見するのも時間の問題。さすれば戦争をふっかけられるのも秒読みだろう。

そして、最終的にマーレの不利益ならぬ情報——「表上の理由」と異なる内容や、パラディ島の情報、また「悪魔の民」たる島の人間たちを肯定的にとる発言など——を話さない代わりに、アウラ・イエーガーは市民権を得た。

この場合「楽園送り」になったことは隠せないため、表上の理由に沿った内容で、マーレに帰還したことになった。

ジークが戦士であるため、彼女も祖父母と同様に「名誉マーレ人」となる。

ただ裏では単純に斯様な特例を認めただけではない。

大きな理由がもうひとつあるとすれば、それはまた別の上層部のみで行った会議にて、テオ・マガトが語った発言に由来する。

「我々は、「驚異の子」を繋ぐ手綱を得たと考えてよいでしょう」

ジーク・イエーガーが齢五つの頃から教官を務めているマガト。

二十年という歳月が流れているにもかかわらず、未だ彼は戦士長である男を「底知れ

ぬガキ」と感じている。

他の上層部の連中は、ジークの「驚異」と称すべき本当の部分をつかめていない。それも彼奴等は「所詮エルディア人だ」と決めつけ、戦士であろうが見下している。

敵しい言動ではあるが、悪魔の末裔であろうと偏見を持たぬマガトであるからこそ、戦士と信頼関係を築くことができる。

ただその例外としてその腹の内をずっと探ることができないのが、ジーク・イエーガーであつた。

男が何か企んでいるとマガトは勘づきながらも、長年その尻尾を掴めずにいた。

しかし、都合のいい存在が現れる。

マガトはマールに帰還し、眠る妹のそばに寄り添う男の姿を見て確信した。

その姿はまさしく、妹を心配する兄そのもの。

ただその兄の瞳に浮かぶ感情は、推しはかれぬほどグチャグチャに、煮詰まっていた。

???????

私、アウラちゃん。

マーレのお上の黒い事情で色々と約束事を決められつつ、この国の人間の一人として返り咲いた女である。お兄さまと同じ国に住んでいるってだけで、ヤバイ薬を決めている気分になります。

そんな私はウォール・マリア奪還作戦の件から二週間後に目を覚まし、さらに面倒な取引を終えたのち、作戦から一ヶ月経った現在、軍事施設の病院から移され一般の病院に入院している。点滴やら何やら、医療技術も何もかもが違う。数える程度しかお外に出られなかった幼女ちゃん時代ですから、目新しいものが多い。

“名誉マーレ人”である今、収容区の外で暮らすことはできません。エルディア人であることに変わりはないので、多少の偏見の目からは逃れられないでしょうが。

うっかり路地裏に連れ込まれて、危ない目に遭わないようにしないとけません。ただでさえ戦闘能力が落ちていきますし、私がマーレ人を殴ったら、今の身分でも立場はかなり不利でしょう。それほどマーレ人とエルディア人の垣根は深いですから。

ちなみに目が覚めて一番最初にお見舞いにきたアニちゃんからは、ある程度情報は伺っている。

と言つても、テレパシー会話です。

やり方としては、話したい相手とパスを繋ぐ感じですね。

例えるならアニがコンセントで、私が電源プラグ。こちらから相手に挿します♫

この方法は軍事施設の病院に入院していた時、情報が周囲にバレないように編み出しました。ユミルちゃんがいいつも私に行う方法をマネただけとも言えますけれど。

そしてその後、「盗聴器」という機械の存在をアニに教えてもらったので、余計にテレパシー会話が必需品となりました。記憶を覗くより疲労は少ないですが、それでも多少は疲れます。

感覚としては、脳内で喋るように言葉を思い浮かべます。

ただし、その時考えていることは双方気をつけないと垂れ流しになるため、話す際はテレパシーのオンオフはまめに行う。

このようなことが行えるのは、やはり同じ「血」が流れているからでしょうね。

恐らく別の人種には不可能だ。アッカーマン家の人間も難しいと思います。

女子三人——そのうち二名が死んだ目でキャツキャと遊んでいる時に、アニと大ま

かな相談はしていた。アウラちゃんの狂人エピソードを話したのもこの時です。

マール政府に「何で君戦士に協力したん？」と聞かれることは目に見えていたので、模範回答を用意しておいたわけですね。それも強烈なのを。

げへへ……一番知っていたきたい方にこのエピソードを聞いてもらえたので、楽しみです。アニちゃんの記憶からどんな表情を浮かべておられたのか拝見したいところではありますが、それは今度会うまでのお楽しみにしておきました。そのためワクワクし過ぎて夜も眠れず、毎日睡眠薬を投与されています。

お恥ずかしながら、ジークお兄さまと運命の再会を果たしたものの、あの時の私は完全に幼児退行していました。

感情がコントロールできていなかったのです。いつものことのような気もしますがね。

週に何回か来てくれるアニたそ（天使か？ついでに現在この国の文字に慣れるべく、本を差し入れてもらっている）に、週に一回ほど、病室に飾る花を持ってきてくれるナイスガイライナー。

車力のピークちゃんも一度来て、お礼を言われた。アニの記憶で彼女のことは知っていたものの、初対面のフリをした。同じ松葉杖の仲間同士、仲良くなれるといいです。

あともう暫くは経過観察を行う。いつも接するマーレ人のナースや医者には、営業スマイルで多少エルディア人の偏見を取り払った。それでも一度病室を出ると、居心地が悪く感じる。

衣食住については、祖父母の元へ戻ってから決めます。私が願うなら手配はしてくれとアニちゃんから聞いているので、その時はお願いしましょう。

ちなみに祖父母がまだ来ていないのは、「孫が生きていた」という衝撃にまだ回復できていないからです。それに私が生きていた事実を知らされてから、そう時間が経っていないようでもあるので。その内に祖父母でニチャア…はできるでしょう。

「なんか、現実感がないな……」

やはりまだ、今の状況が体に馴染まない。

パラディ島と違う文字であつたり、文化であつたり、人間の様子や物の違いなど。

それに、心の方も。

“人間”している私の精神がまだ、エレンくんや仲間たちのことを引きずっている。睡眠はともかく、食事もさほど取れない。

無理やり口に食事をつ突っ込まれるアニの介護はこりごりだ。

対しライナーくんは毎度「……………」と、私の腕を見つめてくる。病院服から覗く細さに目が行ってしまいうんでしよう。

ただでさえアウラちゃんやんは美女なのに、儂ささえプラスされている。この悪魔的な魅力と天使属性（？）があるからこそ、マーレ人の看護婦や医者や懐柔できてしまったんですね。さすが私、罪深いエルディア人だ。

今日もアニが来ると言っていたので、午後の日の光を浴びながら本を読みます。開けていた窓から吹く風が少し強くなってきた。一旦本を枕の横に置いて、松葉杖に手を伸ばす。車椅子というハイテクな移動手段もありますが、筋力が落ちそうなので普段は松葉杖だ。

床にコツコツと音が響き、窓にたどり着く。見える風景は慣れ親しんだものではない。

車の音に、賑やかな街の声。空気はパラディ島の方が美味しい気がする。

「いつだって変わらないものは……………一つだけだ」

壁に松葉杖を置き、空を眺めていればノックの音がした。いきなりテレパシーを使って、もしアニたそじゃなかつたら大事件なので、入ってくるのを待つ。

彼女は最初こそ、入るよ、と言っていた。しかし最近は何も言わずに入ってくる。というか私の扱いが雑になってきている。何でや?【A:お前の人間性】

「……………」

ノックが鳴ってから数十秒、まだアニちゃんは入ってこない。

私に焦らしプレイなんてご褒美にしかならないということを、いい加減学んだらどうなんでしょうか。それとも私から招き入れて欲しい気分なんでしょうか? ツンドラだな。

「どうぞ、アニちゃん」

また待つこと数十秒。スライド式の扉は開かない。

面倒なので足音を消して、素足を晒した片足で跳ねながら扉までたどり着く。そのまま扉の窪みに手をかけて、勢いよく開けた。

「ぐえっ!」

一瞬間まった脳内はすぐさま突進命令を下し、遠慮なくジャンプして。

めいっばい花を持ったその人に抱きつき、呻き声を堪能した。

首元に腕を回し、足を少し後ろに浮かしてしがみ付く。戦士が普段着ている上着に顔を埋めると、ほのかにタバコの香りがした。深呼吸をすると脳内が痺れて、完全にヤク中のトリップそになった。

躊躇いがちに背中に回された、大きな手の感触。

心臓は異常に早くなつて、ビジョ美女になつていく。

「アウラちよつと、く、苦しい……」

幼少期とは異なる低いその声を改めて聞いて、（耳が）孕んでしまったアウラちゃんだった。

責任とつて結婚しろ。

ぼぼぼーぼ・ぼーぼぼう

雲一つない空。

マーレに来てから一ヶ月、外に出ていかなかったアウラはジークに促され、車いすで移動しながら外の物を見学することになった。病院では個室にいる時は腕章を外しており、出る時はつける。

最初は車いすではなく松葉杖を使おうとしたものの、「危ないから」と兄に言われてしまえば、即堕ちで了承した。

十八年前の記憶を遡り彼女が思い出す過去と、今のマーレ。

人の雰囲気こそ大きく変わっていないが、出店など気になるものは多くあった。本質は変態ブラコン野郎であれど、目新しいものに好奇心を抱く心はある。

本人も気づかぬ内に瞳を輝かせ、一つ一つ質問する妹の様子に、ジークは車椅子を押しながら小さく笑った。大きくなった体に反して、戦士候補生時代のライナーやポルコたちのように幼く見える。

周囲も少し遠巻きにしながら、そんな二人の様子を見ていた。

ただでさえ軍服と「赤」の腕章から「戦士」とわかる男と、同じ色の腕章をつけている名誉マール人である女の組み合わせ。

しかも女の方は男なら一度視界に入れば、思わずもう一度振り向いてしまいうくらいにはビジンである。

出店を覗いては、感嘆の声を上げるアウラ。串に刺して焼かれた棒状の肉の詰め物の上に、ペーストしたトマトをかけた物や、奇妙な色をした飲み物。肌色の三角錐型のものに、白いブツを渦を巻くようにして乗せた冷たい食べ物など。

それらを嬉々として頼んでは食べ、頼んでは食べる。

しかし元々彼女はそこまで食べられるタイプではない。

「そふとくりーむ」なるものを食べた後、次のターゲットとして頼んだ雲のような、ほのかに甘い香りのする食べ物。棒に絡まった人間の顔よりも大きいそれは、彼女の手の中で弄ばれる状態となった。

「食べないのか？」

「もう食べられない……」

「はは、昔はよく食べてたのになあ」

「……もう子どもじゃないもの」

ムウ、とアウラは頬を膨らます。

白い雲は所在なきげに、右へ左へ動く。しばしの沈黙が訪れ、ジークは妹にどこへ行きたいか尋ねた。かなり距離はあるが、祖父母の住まう場所へ行くこともできる。

アウラが唸るような、けれど少し間伸びした声を上げる中、目的地の定まらない車いすは人の流れに沿って進んだ。

「ねえ兄さん、今更だけど私が外に出ても大丈夫なの？」

「問題ないよ。上と話は終わってるんだし」

「……じゃあ、図書館の場所を知りたいわ。あ、でも、寄らなくて大丈夫」

「いいの？」

「うん。だつてせっかく一緒なんだから、……兄さんと」

最後の方はボソボソと、小さい声で呟いたアウラ。

入院している以上は、一人で出かけるのは難しい。だが退院した暁には、現在の世界情勢やら歴史やら文化やら科学やら、知識として付けなくてはならないことがたくさんある。

パラディ島の常識が、マール、ひいては世界の常識とはならない。島の中で得た力も立体機動なしでは半減し、さらに右脚なき今、さらに力は半減する。さすれば彼女に残

るものは少ない。

あるのはズバ抜けた演技力や、それに付属する人心掌握。それでも勤のいい人間や、人の裏を見抜く力のある人間には通用しない。

となると、今までとは違った力を彼女はつける必要がある。

それこそ「知識」に他ならないだろう。考えた時思いつく方法が一つと二つとでは、生まれる結果は大きく異なる。

ゆえに彼女は本の虫なのだ。他にも本を読むのには別の理由もあるが。

「……………うーん……」

ド直球に「お兄ちゃんいっぱいしゆき♡」を漂わせる妹の発言に、耳をかくジーク。気恥ずかしさの裏で、仄暗い底の感情が波立った。

このまま図書館を教えた後、フラフラ街を彷徨うのもいいだろう。だが妹を連れ出した理由はもつと別にある。

軍用の病院ではない一般の病院でもありえる盗聴を考え、わざわざ場所を移した。

さすがに外に出てしまえば会話を聴かれることはなく、また親類の家に仕掛けられてもいない。さらに言えば街を出歩く戦士に、よっぽどのこと——例えば造反を疑われているなど——がなければ、見張りをつけることもない。ガッツリと『壁に耳あり障子に

目あり』であるのは、軍の施設内や自室だ。

「兄さんの好きな場所が知りたいな」

「好きな場所って言われてもねえ…」

「その…どこでもいいの。話せる場所なら」

アウラが振り向くと、瞳を丸くした兄の視線とぶつかった。

彼女もまた、このお出かけの真の意味を理解している。単純に今のマーレの様子を見過すだけではない。兄は妹と話すために連れ出したのだ。

「おにーたん」って言ってた、あの頃のかわいいお前はどこに行っちゃったんだ…」

「んっ」

「えっ？」

突如珍妙な声を上げた妹。ジークが見れば、その耳は真っ赤になっているではないか。

アウラは背を丸め、両の手の甲に顔を押しつけるようにして固まってしまった。

どうやら「おにーたん」の部分にダメージを受けてしまったらしいと、妹の様子を見た兄は推測する。果たしてアウラがどこまで過去のことを覚えていたのかはわからないが、当時マーレにいた記憶は少しは覚えているようだ。それも、兄を舌つたらずな声で呼んでいたことを。

「まあ当時の呼び方で、とは言わないけど、もう少しお兄ちゃん的には歩み寄ってほしいわけだ」

「……………兄さ」

「お兄ちゃん的には」

「に……」

「お兄ちゃん」

「に……………につ……」

側から見れば若くビジんな女に「お兄ちゃん」呼びを強要しているヒゲ面な男という光景で。

ジークからすればかなり真剣な頼み。

そして変態ブラコン女からすれば、いっぱいちゆき♡な兄からの「かわいい妹」発言に、脳内ではハンジ主催のソニー&ピーンによるびっくりユートピアが開催されていた。

「……………ジーク、お兄ちゃん」

瞬間嬉しそうに笑った兄を見て、アウラは本日何十回目かの脳内絶頂死を迎えた。

???????

着いた場所は港。周囲の人気は少ない。日は傾き始め、うつすらと紅く空や海が色づいている。

そこで潮風を浴びながら、地平線に浮かぶ漁船を二人は見つめた。

道中アウラが少しずつ減らしたわた飴。一口また彼女が啄むと、横から伸びた手が雲をちぎりさらっていく。

思わず「あつ」と、アウラは声を漏らした。

ジークの一挙一動に心が持つて行かれている。兄の体内に入った綿菓子を想像し、途方もない羨ましさを覚える。物理的に兄に食われてしまうのだ。もし彼女がそうなたら、それが「性」でも「食」の意味だとしても幸福で死んでしまおうだろう。

また体を丸め顔を隠すようにして、行き場のないデカすぎる感情に耐えるアウラ。

そんな彼女の葛藤をよそに、ジークは車いすから手を離して妹の右隣に座る。途端に

近くなった兄との距離に、アウラ変態は固まった。顔の熱を無理やりに引つ込めて唇を噛み、さざなみを立てる海を眺めて心頭を滅却する。

「海を見たことなかったよな、パラディ島を船で出た間も寝てたし」

「……うん」

「……あ、でもどうなんだ？ 帰りは寝てても、行きの時は……」

ひとり言のトーンでボソボソと話すジークは、あごに手を当て少し目を細め、海の方角に視線を向けている。

ジークに見られている間ろくにその顔を見れなかったアウラは、ここぞとばかりに凝視する。

やはり顔立ちはグリシャとよく似ており、鼻筋や輪郭、眉などどれを取っても親子の血を感じさせる。その点髪や瞳はダイナ譲りの——ユミルの色を、濃く残している。若干くせ毛なのはアウラの瞳と同じように、ジークだけの特長だ。

惚れ惚れとするこのイケメン具合（当社比）。その顔立ちの良さは無精髭とメガネで隠されてしまっているが、それもまたカッコいい。もはや変態の目には世界が兄を着飾っているのではなく、兄が世界を着飾っているように見えた。

そこでふと彼女は、見覚えのあるメガネに気づく。

どこかで見たことのあるそれを記憶をたどって思い返し、兄の恩人たる存在を思い出した。

トム・クサヴァー。当時精神的に限界だったジークを救い出した男が、つけていたものと同じである。アニの記憶から、「獣の巨人」の前継承者はクサヴァーであった。ということとは、ジークは恩人の力を受け継いだということになる。

(死んでもなお、お兄さまの一部になつてるんだ……いいな……)

ぼんやりとメガネを見つめていたアウラに、視線を向けた兄。

彼女は慌てて開いていた口を閉じ、顔を逸らす。

「ああ、んーとね……グリシャ・イエーガーから過去に何があったかは、大体聞いてるんだよな」

「うん」

「自分で覚えてる記憶はどこまであるんだ？もちろん思い出したくない部分は、無理に話さなくていい」

「……わかった」

ジークはライナーやアニから、完全にオーバーキル気味にアウラの精神が脆いことを聞いていた。

パラデイ島で協力関係にあったライナーやアニ、それに会議で妹の話聞いたジークはともかく、ピーク（その明晰さで真意にたどり着いているかもしれない）や戦士候補生辺りは、さらに状況を理解できていない。

表上の理由は要約すると父親への憎しみにより、アニたちに協力した――。裏の理由は愛する兄と再び会える可能性が生じたため、アニたちに協力した――。

少なくともジークがグリシャの件を持ち出して、アウラが嫌な表情をした様子はないかった。

その裏を返せば壁内で暮らしている時も、変わらず父親の愛情を受けていたのだと分かる。

港まで向かう道中、パラデイ島で過ごした内容は基本的に口外禁止のため、色々とボカしつつ「これまでの生活はどうだった？」やら、「エレンはどんな子どもだった？」やらと、ジークは質問していた。

そして、グリシヤがエレンを愛していたのか、気にかかっていたその内容は聞けずに終わる。

喉元を通そうとしてもうまく外に出ず、港に着いたためだ。

「マールで過ごしたことは、少しは覚えてるよ。高熱を出して斃されてた時とか、兄さ……お兄ちゃんの帰りをお母さんと待つてた時とか。あとはママが巨人になつて……後は、あんまり」

「……そうか」

「……うん、こんな色だった。今の空みたいな」

「空？」

アウラが指した方向にあったのは、夕焼けと青空が混じつた幻想的な色。

その境界線はうっすらと白んで、二者の色を寄せ付けない。

やがてその色は全てを覆う闇に包まれ、空には月が支配する世界が広がり、無数の星が散らばる。

「地に染みついた血が空を穢して、暗闇に吞まれて。けれど人を照らす無数の灯火は消えずに、やがてその灯りが人が進む道へと結びついて、また明日がやってくる」

「……急に詩的なこと言うね。お兄ちゃんびつくりしたぞ」

「お兄ちゃんをびつくりさせたかったんだよ」

「そうなのか？」

「ふふ……どうだろう。わかんない」

世界がどんな色を映しても、アウラには関係がない。彼女の世界にはジーク・イエーガーしか映らない。

「今」の彼女の蒼い空は、兄ただ一人。

ジークは気づけば逸らしている視線を堪え、妹を見つめる。

子どもの頃辛いときに何気なく思った、「世界が滅んでしまえば……」が、今の脳内に浮かんでは消える。それほどまでに妹と向き合うことから、逃げてしまいたい。

怖いのだ。怖くてたまらない。

妹は兄を愛していた——。

楽園送りを自ら選んだのも、自分がいると兄が傷つくことをわかっていたから。

幼心に「戦士」の使命を背負わされ苦しんでいたジークと、両親に大切にされていたアウラ。

なぜそこまで妹を傷つけた兄を好いてくれるのか、最初は意味がわからなかった。

ましてや兄が自分を恨んでいるから、と考えて殺されようとするなど。

そして、兄のために仲間はおろか弟のエレンでさえ裏切ったアウラのことを、ジークは理解したくないと、思ってしまった。

それでも一人、夜風を浴びながらタバコを消費する日々を過ごして、思い至った。

妹が、兄を愛する理由。

——否、アウラが壊れてしまった理由。

親の愛を感じることができずとも広い世界の中で足掻いて、一人の恩人^{クサヴァー}と出会った少年。

それに対し親に愛されていても、狭い世界しか知らなかった少女。

その狭い世界とは、グリシヤがいて、ダイナがいて、ジークとアウラがいた世界だ。

「楽園送り」となりこの世の地獄を知ったアウラからすればきっと、四人で暮らした世界は温かな「愛」で抱擁された世界だったに違いない。

しかしその世界を壊したのは、両親を密告したジークで。

ならば妹を壊したのは、それは——、

そこまで考えた日の夜。

彼は妹を叩いてしまった当時の冷たい外の空気を鮮明に思い出し、タバコを持った手のひらに熱が溜まり、ジワジワと痛むような錯覚を覚えた。

そうして精神的に参ってしまった中、最終的に「早よ行け」とアニに尻を物理的に蹴られ、床の上で悶え苦しみながらも腹を決めた。帰還したアニの気性がより荒くなったのは、気のせいではない。特にライナーは事あるごとに問答無用で蹴られている。

マルセル・ガリアードの一件で、アニとライナーの間で一悶着あったことを踏まえると、アニの反応も仕方のない部分があるだろう。

《顎の巨人》を奪われた点や、ライナーの発言でそれでも計画を実行した点は失態だ。

しかし顎を取り戻し、始祖の奪還までとは行かずとも、現在の座標の所有者は分かった。プラマイで言えばプラスであり、アニの方は結果として三人の戦士を救うに至ったため、表面上は評価された。

相対的な評価ではアニ＜ライナーとなっている。実際作戦の中で最も働いたのは彼女であるので、当然の評価と言えば評価なのだが。

——まあ、とにもかくにも、ジークはもう逃げてはいられない。
向き合わなければならない。

己の、罪と。

まるで、麻縄で首を少しずつ絞められるような感覚を覚えながら、ジークは言葉を紡いだ。

???????

「お前は、覚えてないかもしれない」

「うん？」

「グリシヤがそのことまで伝えているかも、わからない」

「…うん」

「けれどどの過程を挟んでも、俺がお前にしたことは揺るぎない事実として残っている。……俺の中に、残っている」

震える唇を開き、そのまま固まったジークの様子を映す白銅色の瞳。

その瞳が細まって、じつと兄を見つめる。兄の言葉を待つように、ゆつくりとまばたきが繰り返される。

潮風に吹かれ、色素の濃い髪がパラパラと泳ぐ。それを細い手が邪魔だ、と言わんばかりに耳にかけて。

地平線の上で、汽笛が響いた。

「ごめん、な」

船の音に簡単にかき消されてしまうほど小さく、掠れた声。

その声はしかし、妹の耳にしかと届いた。

その一言ですべての力を使い果たしたと思えるほどジークの全身から力が抜けて、ゆつくりと頭が下がる。

「妹をたたく兄が、それこそ「兄」なんて……本当は、呼ばれていい訳がない。」

「……………」

「お前にただ、謝りたかった。謝ればもつと何かが、変わっていたかもれないと、何度も
——何度も思つて」

「おにいちゃん」

「……ダメなんだ、怖いんだ。怖い。お前に嫌われて、家族のカタチが壊れたら、もう、俺はきつと、ダメになる」

失つた存在が唐突に戻り、その居心地の良さを思い出してしまえば心は急速にぐらつく。

“家族”を壊した男には二度と手に入らないものであり、手に入れられたとしても「安楽死計画」上、絶対にジーク自身が手に入れてはならないものだった。

たとえ祖父母がいても、クサヴァーのような本当の温もりは、もう二度と手に入ることがない。

だが、妹は生きていた。

彼の前にあるその事実が、狂おしいほどにジークの感情をグチャグチャと、遠慮なくかき回すのだ。

どう妹と向き合えばよいのか、何を話したらよいのか、どう接したらよいのか。何が正解で何が不正解であるのか、わからない。

わからないことが恐ろしく、わかったとしても恐ろしい。

そしてそうやって考えることすら、妹から逃げるためなのだ、彼は思わずにはいられない。

「兄さん、私怒ってないよ。恨むわけがない」

「……………許さないで、くれ」

「許すも何も無い。だって兄さんは何も悪くないもの。悪いのは全部……………私だから」

「違う、お前は何も悪くない」

「ううん、私悪い子よ。仲間を裏切って、エレンくんまで捨てて、その上で私はジーク兄さんを選んだんだもん」

「……………お前は、何も……………」

沸騰した感情に耐えきれず妹の側から一歩分、離れようとしたジーク。その時腕の裾を引つ張られた感触に、彼はハツとした。

一人にしないで、と眉を少し下げた妹の瞳には、薄い膜が張っている。

「私……私ね、兄さんとどう距離をとっていいのかわからないの。昔みたいに突進したくなつちやうけど、私は子どもじやない。大人で——そう、大人。『十八年』っていう大きな壁があつて、子どもだった私も兄さんも、理性に縛られる面倒な大人になつた」

でも、とアウラは続けて、兄に手を伸ばし抱きつく。

彼女は瞳を閉じて、タバコの香るその匂いと、息遣いと、心音を感じた。

「ずっとずっと会いたかった人にこうして触れられて、私幸せだよ」

「…アウ、ラ」

「大好きで、愛していて、「私」でさえわからないほど私は兄さんを、ジーク・イエーガーを愛している」

「……わからないって、なんだよ」

「わからないんだもん。本当にずっとずっと、マールにいた時から好きだった」

「………知ってるよ」

はいはいを覚えてから、デレデレとした顔で手を叩いている父ではなく、オモチャで遊んでいるジークの元に向かつてグリシヤを泣かせかけるほど、いつもアウラは兄に向かつていた。

そして熱を出した時も、その後も。ずっと妹は兄を愛している。

「私に嫌われた方が、兄さんの心としては救いがあるのかもしれない。でも私の「好き」は天変地異が起こつても変わらないんだから。たとえ、人類が滅んでも」

「俺はお前の右あ「嫌いになりません!」……でも」

「大好きです」

「……………」

「お兄ちゃんのこと大好きです!!」

「…………アウラ」

「大好きです!!!」

「…………わかったよ」

「大好きツツ（結婚しよ）」

「わ、わかったから!」

!!!!!!!

地平線に響く汽笛がその音量に負けるほど、アウラの声はその感情に比例するようにクソデカかった。

耳を押さえていたジークは眉間に皺を寄せつつ、深いため息を溢す。

そしてそのまま一旦体の力を抜いた後、妹の背に手を回し、以前の仕返しと言わんばかりに強く抱きしめた。

「 ヴイヤアツ 」

しかし、メイドイン筋肉による体重差約二倍の兄妹。奇声とうめき声が混じったアウラの声に、兄は咄嗟に力を緩める。大人が感情的に動いてはならない例がまさに今できあがった。

「…悪い」

「……………」

「でも女の子なんだし、せつかく母さんに似て美人なんだし…もつところ、淑やかになれよ」

「ヒツ、ヒ、フィツ……………」

本当に大丈夫……いや絶対大丈夫じゃないなコレ過呼吸になってるし——。

と、ボブ訝を交えつつジークが妹の表情を窺えば、顔が耳まで真っ赤である。

コイツは相当に奇声が恥ずかしかつたらしい。

まるで、ラノベのヒロインの想いに気づかない主人公のような鈍感さを限定的に発揮

した兄がそう解釈したところで、妹の首はそのままガクリと、力を失い後ろへ傾いた。

「……………え？」

三桁を超える絶頂を迎えた変態はそのまま逝き、残ったのは血相を変えた兄のみとなつた。

後日、日を改めて彼女の元へ訪れたアニがこの件をテレパシーで聞いた時、心底「知らねえよ」と思った。

法華（ホッケー）ジェンガ☆君の曇りにレポリユーション

私、アウラちゃん。

マーレ版にリニューアルされたばかりなの。

マーレに来てから一ヶ月強が経ち、ようやく退院できる運びとなった。松葉杖での移動はスムーズに行えている。なにせ両刀で使いですので。

また入院していた最中、アニちゃんの紹介で同じ病院に入院する「フーバー」さんという女性とお会いした。その姓のとおり、彼女はベルトルトくんの母親だった。寝たきりの彼女は体が細く、容姿はあまり息子と似ていない。

ちなみに「名誉マーレ人」の称号は、一度なれば戦士が亡くなった後も無くなることはない。ベルトルトくんの安否が不明ながら、彼の母親が十分な医療を受けられているのは、斯様な理由がある。

ただし、何らかの理由で戦士の力が剥奪された場合は、称号は取り消しとなる。

つまり戦士になれても、命ある限りはその身をマーレに尽くさなければならぬとい

うことです。

アニちゃんをよく彼女の元に通って、息子のことを色々と話しているようだ。

……というより、フーバー婦人の見舞いがメインで、私の方がオマケだと知った時は結構ショックを受けた。私たち、「曇ッ友（曇らせでつながる歪な輪）」だと思っていたのに。弄ばれてしまったのね、私の純情は。

また、祖父母も私がジークお兄さまと「デート♡」をした数日後にいらつしやった。

記憶の祖父母と照らし合わせて、老けた、というのが第一印象。祖母は私を抱きしめて泣き、祖父は扉の前で固まった。

そして一言、「フエイ……？」——と。

祖父は息子とその嫁、そして孫娘が「楽園送り」になって以来、少しずつ精神を病んでいったらしい。

ここ数年はボケも合わせてひどくなっていると。

私が生どもの頃、お父さまと同様に祖父は私をフエイ・イエーガーと重ねる節が多々あった。

だからって、成長した私を亡くなった娘と思い込むなんて……初っ端からお祖父さまったら、飛ばし過ぎじゃありませんこと？アウラちゃんはまだ、豪速球のご褒美を受け入れる準備すらできていなかったというのに。

終始私を「フェイ」と呼んでいらしたお祖父さまは、ほどよく狂っていてとても良かったです。

そんな夫にどう言葉を紡いでよいのかわからず、困惑の表情を露わにしていたお祖母さまもよかった。

次は私から会いに行きたいと思います。お兄さまを連れてな（暗黒微笑）

閑話休題。

頼めば色々と用意してくれる、とアニ・レオンハートから聞いていた私は、彼女に一つお願いした。

それはお兄さまと暮らしたい——というもの。

祖父母の曇り顔は堪能できたので十分です。そもそも祖父の様子からして、私が「フェイ」ではなく「アウラ」とわかったら、余計に事態がややこしくなる。ゆえに一緒

に暮らすことを提案した祖母の話を断りました。

そんなこともあり行く宛のない私は、一人暮らしも考えた。

しかし慣れない地での、慣れない生活様式は自分の不自由な体も相まって、非常に不便なのです。

そのためお兄さまと暮らさなければならぬですね。むしろ十八年の溝を埋めるには、一分一秒お兄さまと運命共同体のように暮らさなければなりません。

兄が吐いた空気は全てこの私が吸うんや（頑なな意志）

本当はジークお兄さまがいらっしやった時に話を切り出すつもりでした。

しかし唐突の兄の訪問から、連続絶頂の果てに逝き絶えてしまったアウラちゃん。

気づいたら次の日の朝で、突然気絶した私を血相を変えて兄が病院まで運んできたのだ、と看護婦から聞いた時は昨日の自分を呪った。

でも仕方ないね。むしろよく本当に死ななかつたと思いますもの。

内心「腹上死つてこういうことか…」と納得しながら、理性と感情の葛藤の狭間でこれまで走馬灯を見ていた気さえする。

ジークお兄さまがひたすらに格好よく美しく、〔世界の真理Ⅱジーク・イエーガー〕という答えにまでたどり着いてしまった。過去に何回もこの答えには、行き付いていま

すけれど。

して、アニちゃんは私のお願いに最初あまりいい顔をしなかった。

理由については、私と暮らす戦士長への心配の他にもう一つ。

彼女曰く、戦士は軍専用の住居があり、お兄さまだけでなくアニもそこで暮らしている。まあ彼女の場合は今の所ほとんど使っておらず、父の元で暮らしているようだ。ライナーくんやピークちゃんたちがどのように暮らしているかは知らない。

要するに、軍の敷地内にある場所に、ただの一般人が住めないということだ。

たとえ「名誉マーレ人」の恩恵を受けて、「一般人」の枠組みに入ることができるエルディア人でも。

無理ならば仕方ないと諦め、アニ宅にでも居候を考えていた——この件を話したら全力で彼女に断られた——矢先、なんとどんな風の吹き回しか、許可が下りたのである。

誰が許可を出したのか尋ねれば、戦士隊の隊長であるマーレ人の「テオ・マガト」という男だった。

私の立場というのは要約しても長くなる経歴ですが、上層部は私がアニを助けたことを知った上で「所詮はエルディア人」という認識を持っている。

つまり、侮られている。その部分については構わない。

実際私はユミルの力を借りて、アニを裏技もいいところな方法で連れ出したわけですから。

よつて、パラディ島のスパイの可能性が完全には消えていない中、今こうして命がある。

仮にスパイであつたとしても一人でできることは限られ、マーレからパラディ島へ帰還する術もない。

いや、そもそもスパイの線自体考えられていないかもしれない。

スパイの人間が果たして、壁内人類の脅威となる戦士を救うだろうか。

——否、救わない。

それほどまでに危機的状態であるのだ、壁内人類は。

スパイを送るようなマネをして、逆に情報を抜き取られでもすればパラディ島は終わる。

リスクを冒すことができず、仮に無理やりにも冒した結果、生じたハイリスクを受けてもジ・エンド。

マーレの「敵」だと認識されるのが厄介だから、絶対に揺るぎない「お兄さま♡」と

いう理由を用意したのも、疑惑の視線を減らす要因にするため。

逆に私の精神性が、却って「危険分子」として認識されている可能性もなくはないですが。

まあ、お兄さまと一緒に暮らしていいのなら、それに甘んじよう。

一応言っておきますと、お兄さまの許可は下りていません。

ただしノートンキには過ぎせない。軍事基地内はどこに盗聴器があるかわからないので、下手な発言は控えましょう。流星にずっと、監視の目があるわけではないと思いますけど。

例えば「ユミルちゃんが見えるんやで」やら、「始祖の力をわいは使えるでー」やら、「わいは王家の人間やでえー」やら――。

もし出すなら、私のお兄さまラブな発言・言動。そして、二人の新婚生活のイチヤイチャ模様くらいにしておきます。さぞ聞いている方たちは、お兄さまと暮らしている私が羨ましくなってしまうでしょう。だって世界宝級の人間と暮らしているんですもの。

またアニから、マガト隊長に何か思惑がある可能性が高いと聞いている。

勘のいい彼女は候補生時代から、ジーク・イエーガーを見る時の教官の目が、たまに

鋭くなることに気づいていた。ゆえに私がマーレ国に住めることになった裏に、何か関わっているかもしれない。それも、お兄さま関連で。

私はともかく、ジーク・イエーガーをなぜ怪しんでいるのか理由がわからない。

何か、お兄さまにも計画があるのだろうか。もしあるのなら、協力したい。

でも私からは聞けない、おこがましいですもの。

もし話してくださるなら、その時まで待ちます。けれど私の行く「道」が、お兄さまの障害になってしまう可能性もある。だからなるべくなら疾く、教えていただきたいところですよ。

(……純粹に考えて、立場上面倒な私を手^{存在}取り早く、監視下に置いておきたい魂胆もあるのか。そうすればスパイだろうが何だろうが、管理がしやすい)

考えれば考えるほど、やはりアウラ・イエーガーを処分した方がマーレにとって都合がいいと思えないのは、私が捻くれているからだろうか。

実を言えば、テオ・マガトとは私が意識を取り戻して間もなくして会った。向こうが私の病室を訪れる形で。

マーレ人にしては稀有なエルディア人であろうと差別しない、個々人の能力を重んず

る人間だった。

アニと事前に打ち合わせした内容を話したので、相互の情報のムラは出なかったでしょう。私の狂人エピソードが誠か否か、確認している時は終始眉間に皺を作っていました。

その後私がマーレに戻った来歴や、パラデイ島に関する内容は基本的に伏せろ、とのご命令をいただいた。少なくとも自分からは口外するなど。

上層部や戦士には私がアニを助けた——という内容が伝わっていて。

その下になってくると、マーレ国の威信のためにも、戦士を助けたのはあくまでアニ・レオンハート。彼女はその身を潜めて信頼できる協力者（私）を使いながら、戦士の窮地を救った——という内容が伝わっている。

無論戦士には、アニが助けられた事実を口外しないよう命令が出ている。

だがわざわざそんなことをせずとも、私という存在を秘匿して暮らさせればいいだろう……とも思ってしまうが、それが難しい問題が存在する。

それが父、グリシャ・イエーガーを始めとした“エルディア帝国復権派”の件である。

規模として大きなこの事件は十年以上経った今でも、世間に知られている。

だからこそ、彼らを密告したジーク・イエーガーはかなり有名なのだ。それこそ「驚異の子」という異名を賜るような。さすお兄。

これに関してはグリシャ・イエーガーの娘が戻ってきた時点で、隠し通せる問題ではなかった。

隠蔽しようにも盗聴器という存在を例として挙げてしまえばわかりますように、情報というものは外部へと漏れやすい時代となった。

なので後から私の存在がバレて世間が騒ぐなら、真実をマーレ政府の都合のいいように曲げつつ、きちんと一部の事実を残しておいた方が楽なのです。

ただ政府も一々紙面に出して、『復権派のリーダーであつた男の娘が帰ってきた』と言うわけはなく。

こういったものは「戦士（アニ）の協力者」——から始まって、少しずつその噂というのが広まっていくのです。そしてやがて私の存在が突き止められ、協力者＝私、という図が出来上がる。

これが、政府が私を目の届くところに置いておいた方が楽だ、という思考に至る理由の一つになっているのだろう。

(……………やっぱり何で私、殺されてないんだろ……)

思考のドツボにハマった私は、新生活スタートに向けて「曇ツ友」のアニたそに拉致されて、生活必需品を見繕いに向かった。

「何でお兄さまじゃないの……………」

「仕方ないだろ。私だつて嫌だよ、アンタとニコイチ扱いにされてるの。でもジークに「アウラと仲いいだろ？頼むよアニちゃん」つて言われたんだ、文句言わないで。むしろ文句を言いたいのは私」

「アニたそつて結構喋るようになったよね」

「……………」

……………こちらを無言で睨めつけたアニちゃんはすごく……………可愛いです。

「私もお兄さまに「アウラちゃん」つて、言われたい」

「……………」

「今「うぎ」つて、思ったでしょう」

「さつさと行くよ」

そう言い車を押してくれるアニちゃんは、もしかしたらものすごくツンデレなのかも知れません。

「……………」

「痛ッ」

私の頭を無言で叩いた、ツンデ・レオンハート。

こうやって彼女と話をするのはとても有意義である。

日常にその身を浸して、取り留めもない会話をする。しかして彼女は戦士。そのうちに宿す暗い闇が、日常生活の中で時折覗く。

その一瞬。

その一瞬だ。

「……………あのさ」

「ん？何かな、アニちゃん」

「ベルトルトは……………生きてると、思うかい？」

「…ベルトルトくんか」

正直言つてベルトルト・フーバーの生存の可能性は薄いと見ている。結晶化の事例を考えたら、もしかしたら、の可能性も十分ある。ただ超大型はその巨体さに特化しているゆえか、硬質化自体が出来なかつたはずだ。

そもそも脳ぢるがドバドバしそうな、あんなに素晴らしい最高の最期を飾れたのだ。

好きな人を最後に見れるなんて、果報者じゃないか。アニがこの世に未練を残して結晶化したことを踏まえてやはり、彼の最期はきつと穏やかだったに違いない。だからこそ彼はそのまま、眠りについたのではないかと思う。

アニとしては、彼女と「道」を通じて精神をリンクさせた時のように、ベルトルトくと精神がリンクするか知りたい所ではあるのだろう。仮にできる場合は、私だけでなくアニ自身もベルトルトに精神を繋げられるかどうか——なども。

しかし肝心の始祖の力の起動源であるユミルたそがスリープ状態の今、私ができる範囲以上のことはしてあげられない。

「道」の表現を抽象的にしつつそのことを話せば、「……わかった」と小さく返した。

「でも私は信じてるよ。アイツが——生きてるって」

「……そう。なら、信じましょう」

戦士^{キミ}たちの苦しむ姿が見れて、私は今こうして「生」を実感^{キミ}できて。

同時に、狂おしいほどのお兄さまへの気持ちを紛らわせている。

他人で発散させないと私、お兄さまを壊してしまいそうで、怖いわ。

破壊的思想なYOU（ユー）、O豆（ヤ）っちやいなYO

！

コーヒーの匂いを感じて起きるのが私、アウラちゃんの朝の始まりとなっている。

退院後、私を誘拐してきたアニちゃんとその足で生活必需品を買いに行つて、夕方ごろに軍事基地内にある戦士用の住宅に案内された。

軍関係者専用以外の場所であれば、一応行つてもいいそうです。

どこまでOKなのか細かい所までは把握し損ねたので、後で確認する必要があるでしょう。恐らく出歩ける場所はかなり限られると思います。

トレーニングスペースは行けるので、使用許可が下りるならこの鈍った体を鍛えたいです。簡単に折れそうな美女ちゃんはそろそろ卒業して、筋力を取り戻したい。

大量の荷物を持ち、尚かつ車いすを押ししても息が切れないアニちゃんは流石シックスパック。触ろうとしたらもの凄い形相で睨まれた。そんなに見つめられたら、恋の予感を感じちゃうだろ。

お兄さまの方は部屋の移動を行っていたようで、そのためア二に私のことを任せたらしい。今の部屋では二人住むには手狭だから、と。

戦士長で色々忙しい中、愚妹に気を回してくださるジークお兄さまはこの世のメシアです。崇め讃えて祀らなければ。

ちなみに大量の書類やら本やらが詰まった段ボールを三、四個積んで歩いているライナーくんもいた。人手として駆り出されたらしい。

ア二ちゃん見た瞬間、あからさまに肩を揺らしていたんだが大丈夫だろうか。彼とも後でじっくりお話をしたい (ニツチヨ)

そんなこともあり始まった、お兄さまとの新婚生活(?)。

私アウラ・イエーガーの修行の日々が始まったわけです。

一緒に住みたかったのは純粹に一分一秒でもお兄さまを感じたいためもありますが、他にも慣れる、という意味があります。

微笑まれただけで今の私は即^絶イキ^頂してしまい、これでは心臓がいくつあっても足りない状況なのです。

ジーク・イエーガーを曇らせることが私の人生の指針ですのに、このままでは何も行動に起こせず脳内停止女になってしまいます。

それはいけません、あつてはならない。

できるだけお兄さまが苦しんで幸せになるようにすることが、私の存在意義と言つても過言ではないのだから。

ベッドはまだのため、ここ数日の間は面白いように沈むロングソファで寝ている私。

ベッドを譲ろうとするお兄さまのお申し出は丁重に断つた。眠れるわけがないだろ、興奮して。

私の就寝場所は戦士たちの会議室に使うこともあるらしく、明らかに複数の椅子やテーブル、部屋の隅にはぎっしり詰まっている複数の本棚がある。本については、入らないものは棚の上に載せられ天井にまで達し、それでも置けないものは棚の横に山のようになり積み重なっている。

部屋に入って、細い通路のすぐ左にあるのがセプレートタイプのバスルームとトイレ（水洗式しゅごい）。その通路の少し先を行ったところがリビングで、奥がダイニング。右手に見えます魔の本地獄から視線を逸らして左を向くと、二つの扉があり、ベランダにつながる奥側の扉が兄の寝所。手前の扉が私の少しの私物が置いてある部屋だ。

今のところ、寝心地がいいソファをこのままベッドにしてしまいたい。兄は早目に買いに行った方がいい、とおっしゃっていましたが。

頭の中がまだポヤポヤしつつ、瞼の裏に感じる光に誘われるように瞳を開ければ、シヤツの上に薄手のカーデイガンを羽織ったお兄さまの後ろ姿が見えた。

ああ……逆光になった背中がより神々しさを増して、私の貧相な語彙力では表現しきれない程の美しさなんじゃ…。

一見したら小型のジョウロにしか見えない鉄製のドリップポットなるもので、カップにコーヒーを注ぐお兄さま。

顔付近までかかった毛布の中で体をもぞもぞさせながら、私は朝の寒さと決別し、温もりとの脱却を試みる。

その身じろぐ音に気づいたお兄さまが、振り返った。

「おはよう、アウラ」

微笑んだお兄さまに、私はそのまま毛布の中に隠れた。

今心臓が「ウツ」となった気がしたんですが、生きてますかアウラちゃん？ いや、死

んだかもしれない。完全に心臓が止まった感覚がしたもの。

とかかカププが二つあった事実、私はもうエデン行き直行便の飛行船に乗っているわけであつて。

「お前は本当に、朝が苦手だなあ」

少し呆れが交じつた声と共に近づく足音。

ちよつと嬉しそうな気配がするのは、子どもの頃朝から幼い体に負けて、食べながら眠るという偉業を何度も成し遂げた幼女ちゃんを、思い出しているからかもしれない。

妹Ⅱ朝が弱いという図。

確かに朝は眠い。しかし調査兵団の時は壁外調査に行くため、夜もまだ深い時間帯に起きるのが普通だったので、克服している。

起きろ、と揺り起こそうとしたお兄さまの手が腹辺りに触れた瞬間。

「み、やつ」という、可愛らしい奇声を発してしまった私。

もつと女の子として淑やかにしたらどうなん？というお兄さまの意向に沿うことができませぬ。無理に決まつてるでしょう、お兄さまが好きすぎて狂つてるんだから（半ギレ）

お兄さまの笑う声が聞こえて、コーヒーに砂糖を何個入れるのか聞いてきた。

朝〓おねむの件といい、砂糖の件といい、完全に子ども扱いされている。どうやったら私のこの家族愛と兄弟愛と恋慕が混じった「狂愛」を、お兄さまに伝えることができるのか。

きつとその一線を越えれば、今のような穏やかな時間は過ごせない。それを心から恐れる「私」が存在する一方で、ジーク・イエーガーの全てを手に入れたい「私」は少しずつこの関係性までもぶち壊して、二人でドロドロに溶け合いたいと切に願っている。

壊れゆく関係の中でお兄さまはきつと、私にさまざまな感情を向けてくださる。

嬉しさや怒り、憎しみや哀しみ——全部全部、手に入れたい。

お父さま以上に、ジーク・イエーガーの精神の形が保てなくなるくらいグチャグチャに、一緒になりたい。

でも、少なくとも今はまだ、私の内に存在する歪んだ愛情と純粋な愛情の心の天秤は、釣り合っている。

この兄妹としての生活を、心から享受したいのだ。

その上で少しずつ、お兄さまの首を絞めて差し上げたい。

「いっぱいいいれて、お兄さ……あつ」

そう言った私に兄は少し間を置いて、「お兄さ？」と返してきた。
誰だよやらかしてしまったの。私だよ。…死にたい。

「ライナーに荷物運びを手伝わせた時に言ってたけど……へえ、本当にねえ……」
「……………」

毛布の中からでも、その声色からお兄さまがニヤニヤしているのがわかる。後でライナーくんはきつちり懲らしめないといけませんね。アニちゃんに頼んでおこう。

恥ずかしさに悶え苦しんでいる私に、お兄さまは「兄さん」「お兄ちゃん」「お兄さま」と呼ぶ時の妹の心情。パターンを推測し始めました。やめ…やめ……。

違うのです。お兄さまに苦しめられるのは十分ご褒美ですが、私がお兄さまを苦しめたいのです。

「お前は俺を少し美化した目で見てるかもしれないけど、俺は……普通のお兄ちゃんだよ」

お前と、エレン・イエーガーのね——と、続いたジークお兄さまの言葉。遠ざかる足音に、私の脳裏では翡翠の色がゆらゆらと、揺れた。

元気だろうか、エレンくん。

たくさん苦しんでいるといいな。

??????

ここ毎日朝から夕方まで図書館に入り浸っている私。

周囲には当然マールレ人しかおらず、ただでさえ私の美しさに見惚れてしまうというのに、赤い腕章が嫌でも目立つ。なので人通りの少ない窓際の席に座っている。

机を占領するのは大量の本。お兄さまは気になるなら蔵書を読んでもいいと仰っておりましたが、恐れ多くて断った。あの奇跡的にバランスを保っている本の山に触れでもしたら、大災害が起こりそうなもの。お兄さまが許してくださいなら、絶対に掃除しなければならぬ。あの魔境を。

ちなみに今は歴史書を漁っている。最初の内は私でも読みやすい児童用の本から始めて、ここ二ヶ月程で多少時間はかかりますが小難しいものでも読めるようになった。

最近過去の歴史書や巨人関連の本を読んで興味深かった内容を挙げるとすれば、「アッカーマン家」について。

彼らは別名、「巨人科学副産物」と言われている。

アッカーマン家はエルディア帝国がその長い歴史の中で、ユミルの民を人体実験をした結果生まれた一族であり、実験の根本にあつた目的は人間のまま巨人の力を引き出させるようにする——というものであつた。

これについてはミカサやリヴァイ、ケニーの三人の力を踏まえて、実験は成功を収めていると言える。

ただし人のまま巨人の力を使える影響か、彼らは脊髓液を投与されても巨人化せず、また始祖の洗脳などが効かない。

そして私を感じていた『飼主と犬』という関係性は、強ち間違ひではなかつた。

元々王を守るために人為的に作られた彼らは、その名残がある人物を己の主人（宿主）として認識した途端、さまざまな条件が揃つた時、秘められたアッカーマンの力を発揮する。

その条件とは、極限状態に追い込まれた中、主人の命令を聞くなどして発動されるら

しい。

これについて絶対的に正しい…とは言えないだろう。

ミカサちゃんは当てはまりませんが、ケニーの場合ウーリ・レイスと出会う前から、憲兵を大量に殺すという人間離れした技量を見せていた。兵士長の方はそもそも過去について、地下街出身の元ゴロツキということしか知らない。あと一時期ケニーに育てられていたことは知っていますが。

これまで謎であつた「アツカーマン家」の正体について知れたのは、大きな収穫だつた。

お兄さまにもこの話はして、リアクションを愉しんだ。

「獣の巨人」であるジーク・イエーガーは一度、リヴァイ・アツカーマンに陵じよ——失礼、嘔みまみた。

一度兵士長にギツタギタのボツコボコにされたお兄さまは、その事を少なからずトラウマに思っている。今思い出すだけでも、腕を斬られて口元を血で汚していた愛らしいお兄さまの姿に、頭が脳みそを具にして沸騰しちゃう。

兵士長には本当に感謝していますし、ブチ○爰したいです。

人類最強の男の正体が「アツカーマン」だと分かつたお兄さまは、「なるほどなあ…」

と言いなから、顔を青ざめさせていた。

朝から気分を悪くするお兄さまの姿はそれはそれはもう、オカズいらすです。ゆえにその時の朝食は、砂糖たっぷりのゲロ甘コーヒーしか飲まなかつた。もう少し甘さを控えめにして欲しい。でもお兄さまが挿れ……淹れてくださるんですから断れませんか。そのままアウラちゃんを糖分過剰摂取で殺してください。

この美女救えねえな……という幻聴が聴こえつつ、昼に外でサンドイッチ休憩を挟み、夕方まで本を読み続けた。

そして借りれる最大数の本をバツクバツクに詰め、帰路に就く。

落ちた筋力を取り戻すためにも歩くのはやはり大切だ。両脇に挟んで松葉杖を突き歩き続けると、肩幅が広がってしまいそうで怖いです。

車いすには車輪部分の外側に連結して繋がる部分を回して動かすことで、一人で移動できるタイプもあるそうなので、それを用意してただけるならそれを使ってもいいかもしれない。……いや待て、それでも結局腕を使うから上半身だけ鍛えられてしまうんじゃない。……アウラ私は訝しんだ。

それから軍事基地に着いて、施設の門で警備している兵士の方に頭を下げて——もち

ろん美女スマイルも忘れずに——入る。

内心、マール人だろうがエルディア人だろうが、私をどう思っていようと構わない。しかし政府のお膝元である以上、そして戦士長たる兄に迷惑が及ばないように従順で、表面上は、いい子でいなければ。

「ハア……」

この程度で疲れてしまう軟弱者がここにいる。

軍事基地内は迷子になってしまうほどの広さがあり、戦士を目指す子どもたちが訓練に励む場所でもある。

そのためこうして夕方ごろ帰ってくると、訓練終わりの子どもや、自主的に居残って訓練を続けている子どもを見かける。物珍しさに見つめてくる幼児の瞳は丸々としていて愛らしい。パラディ島は女性の結婚年齢も早いから必然と、子どもができる年齢も早い。

自分の子どもでもあり得なくはない年齢だ。かく言う私はお兄さまに一生を捧げるから、結婚も出産もしないでしょう。

ジーク・イエーガーの残りの戦士としての任期期間はあと五年。ライナーやア二は六年だ。

私が本の虫になる理由は、始祖ユミルの呪縛とも言える「十三年」という寿命に、打開策がないか探している節もある。

そして同時に——というかメインとして調べているのが、「ユミル・フリッツ」について。

約1850年前にユミルは「大地の悪魔」と契約し、エルディア人（ユミルの民）の始祖となった。実際その悪魔とは、「光るムカデ」ヤロウだ。

この「大地の悪魔」の表記は歴史書、またはそれを題材にした小説などによって多少変わるものの、概ねユミルが出会った存在は「大地の悪魔」と解釈されている。

物によっては「有機生物の根源」であったり、「生命そのもの」などと記述されている。ユミルが死後魂を九つに分けて生まれたのが——始祖、超大型、鎧、女型、顎、獣、車力、戦鎧、進撃。

うち始祖と進撃、超大型以外はマーレ側にある。

その中でもアニ・レオンハートからの情報を踏まえて、《戦鎧の巨人》はマーレ軍の所有下になく、タイバー家が保有している。継承者は戦士であるアニでさえ知らないらしい。

ちなみにこのタイバー家は「巨人大戦」において、マールレの英雄たるヘーロスらと共に最初にカール・フリッツに反旗を翻した家系で、「救世主の末裔」とも呼ばれ、エルディア人ながら腕章はおろかマールレ人やその他諸国から英雄視されている。その逆に、エルディア人の一部ではタイバー家をよく思っていない人間がいる。

九つの巨人の継承者は十三年しか生きられない。その「十三年」という期間は、ユミルがムカデ野郎に接触されて死ぬまでの年月である。

どのようにして巨人の力が分けられたかは、現代の人間は知らないのだ。だからこそどの文献にも「魂を九つに分けた」という曖昧な書かれ方をしている。

ユミルの死体をフリッツ王が娘たちに食わせた——という事実を今の人間たちは知らなくて、ユミルが約二千年の間、巨人を作り続けていることも知らない。

なぜ彼女が王の命令に従い続ける「奴隷」で居続けるのか、私にはわからないんだ。ユミルのことを知ろうとするほど、あなたのことがわからなくなる。

またカール・フリッツは興味深い内容を残している。パラディ島に「楽園」を築いた王は、もしその平和が脅かされることがあれば、壁の礎となった巨人を目覚めさせ、「地ならし」を行う——と告げたのだ。

「不戦の契り」を作って子孫を平和的思想かつ、楽園の中で集団自殺をヨシとするような王なら絶対に行わないだろう。ケニー伝いに聞いたウーリ・レイスが「つかの間の平和を…」と語っていたことから、世界を危機に陥れることはまずしない。

でも、世界を綺麗にする方法はある。

私はどうにもマールに來て目が覚めた時から、このアブナイ思考を持つてしまったらしい。

……というか、まあ、ちよつとした自暴自棄なのかもしれない。

色々とお話したいユミルはまだ寝ているのか、出てきてくれないし。けれど『あの夢』は偽りではないと確信できてしまう。それは単純に、前世の私が本当に体験したものであるからだ。でなければお兄さま一筋の私が、ジーク・イエーガー以外のことで「もうどうにでもなくれ♡」になるわけがない。

個人的にはユミルをフリッツ王の呪縛から解放したいし、前世の私について色々思うことはあるし、そんな私を如何ような感情を以てユミルが接しているのか、最早訳がわからないよ、だし。

そもそもユミルが見せた夢だったのだろうか、アレは。

彼女が今の私を好いてくれているのは確かだから、わざわざ嫌いになるかもしれない夢を見せるとは思いにくいし。

であるなら、単純に私が思い出してしまっただけなのかもしれない。

そしてまだ砂と光の柱の世界に行けないのは、ユミルが寝ているからなのか。それとも彼女が伏せたかった部分を私が思い出してしまったから、精神的に落ち込んでしまっているからなのか。

まあ、彼女が暗い水の底に沈む前——私と共にいた内容を見せなかったことを考えたら、やはりその部分はユミルにとっての地雷原であるのだろう。

「……わかんないなあ……」

ユミルの目的が。

「私」が生まれ変わっている理由も。

何か企んでいるお兄さまの計画についても。

——ああ、らしくない。

悩んでしまう事は多い。もつと純粹にお兄さまの曇らせを楽しめたらよいのに。

一先ずユミルちゃんからの接触を待って、お兄さまの企みについても話してくれることを待とう。

でももし何もアクションがなく、「十三年」の呪縛の解決方法が見つからないままジークお兄さまがこの世から消えてしまったその時は、私の存在意義は無くなる。

そしてお兄さまが感じられなくなった果ての私がどうなるのか、自分にも想像が付かない。

ただきつと狂って、死ぬでしょう。

その狂った私が何を仕出かすのか分かりませんが、恐らくは「お兄さまがいないこの世はいらない だってお兄さまがいないから」——という、傲慢も大概な回答を導き出す。いや、決定している。

“綺麗にする方法”はもう、見つけてしまったのだから。

そしてユミルちゃんが私を好いてくれているのなら、不可能ではないのだと思う。

——最悪の結末を導く前に、最高のタイミングで死ななくちゃあなあ

お兄さまをグチャグチャにして死ぬんだ。
前の私の大切な人がユミルであつても。
今の「私」の一番は、ジークお兄さまだから。
それだけは絶対に、揺るぎない事実だ。

マグマグ永久凍土

朝から妹が女の子とイチャイチャ（語弊）しているのを目撃したジーク・イエーガーが、開けた自室の扉を閉め、何も見なかったことにしようとしたハプニングを起こしてしまったのは私、アウラちゃん。

珍しく麗されて起き、頭上にある柵の時計に目をやって、確認した時刻は6時までであともう少しという頃。

お兄さまがそろそろ起きてくると思いつつ、「ほら起きろ」と言われたいがために、毎朝二度寝を決め込む私。

めくれた毛布を直そうとした矢先、体が動かさないことに気づいた。

「え？」

ちようど仰向けの私の腹の部分にある頭。薄暗い部屋の中で、ボサボサな長い黒髪とツムジが見えた。

そこでようやく自分の上に人間が乗っかっていることに気づいた私は仰天し、「ぎやあっ！」と叫んでしまつて、その可愛らしい声に飛び起きたお兄さまが、妹の様子を見に来てくださったわけです。その開けられた扉はゆっくりと閉められてしまつたわけ

ですが。

「…………お邪魔しました」という声と共に。

そして、お兄さまに誤解されることになった原因を作った人物はというと、私の上で安らかに寝ていた。

その後、不眠症のある少女——ピークちゃんが、どうしても眠れない時にこのソファを求めて、部屋にやってくるという内容をコーヒーを飲むお兄さまから聞いた。ちなみに最近気づきましたが、お兄さまの猫舌が治っていない。

なので今後早起きしてアツアツのコーヒーを淹れ、お兄さまが叫ぶ様子を聞きたいと思います（ニツチャ）

しかし冷静に考えると、部屋の鍵はきちんと閉めてあったはずだ。

それに返ってきたお兄さまの答えが〔A：ピツキング〕

ピーク・フィンガーの技量を素晴らしいと思う反面、女の子が勝手に部屋に入ってきているにも関わらず、冷静なお兄さまに危機感を覚えた。

私は妹ですし、シャワー上がりにバスタオルを巻いた姿でも風邪を引く心配しかされない。髪を拭いていただくプレイは「おふう：（全身が溶ける様子）」ものですけれど。ドジっ子を装ってバスローブを落としかけても、転んでスカートが大胆不敵に捲れ上

がっても全く効果がない。

けれどピークちゃんは分からない。彼女は少し抜けている部分があるから、それがラブハプニングを引き起こすかもしれない。

具体的に言うとな彼女がドジをして転んで、それを助けた戦士長に過剰なボディタッチをして、TOLLOVE^{トラブ}るを起こしてしまう——みたいな。

別にお兄さまが幸せになるなら、私は応援しますけど。……ピークちゃんが上に乗っかっている時に感じたけど、やはり胸なんだろうか。たわわじゃない女はいくら美人でもきつと意味がないし生きていたってしようがないし死の。

「そんな落ち込むなよ。さっきのは冗談だからさ」

「……………どうせ私は」

「一緒にベッド買いに行つてやるから」

「小さい……………」

「アウラ？」

計画の一つにあつたお兄さまに揉んでもらう“子育成計画”を告げる勇氣などなく——、心配する兄の声が右から左へと突き抜けて行つた。

こうなつたらアニちゃんでもいいから頼んでみよう。

当然断られました。

「(精神) 病院を紹介してやろうか？」という風に。

???????

図書館が休みの日は、そのまま家に閉じこもっていることが多いアウラちゃん。

ジークお兄さまがいけないのを見計らってこつそり寝所に入り、ベッドでゴロゴロしている。そんな私にお兄さまは気づきながら咎めることはない。書類など、室内の物を勝手にイジったら怒られるでしょうけど。

まあ、ベッドぐらいいなら……:…:という認識なんでしょう。

距離感の近すぎる妹に、兄は困りつつも許容している。お兄さまの私の認識は、
“お兄ちゃんに甘えたいけどその仕方がわからない妹”——。

私としては都合が良い。このまま少しずつお兄さまの心を浸食して、削っていききたいです。

そして、現在地は外。

今日もまた引きこもる私を見かね、お兄さまは戦士候補生の訓練でも見てきたらどうか、と仰り、付き添い役にライナーくんを提案した。

流星に勝手に私が訓練場を出歩くのはまずいと思う。

お兄さまもどこまで私が出歩いていいか覚えていなかったものの、戦士が側にいれば教官も許すだろう——とのことです。

咎められた場合は、ライナーに責任転嫁すればいいよ、とお兄さまは少しイタズラっぽい笑みを浮かべて私を逃いぎ殺した後、部屋を出て行った。

最近は《超大型巨人》をパラデイ島に奪われたマーレ国の情報を聞きつけて、大陸続つきに隣接している中東連合が動きを見せている。

そのため政府の上層部はピリピリしている。お兄さまも戦士長として忙しく、帰ってこないことが増えた。

戦争が始まったら、会える機会はもつと減るでしょう。中東連合の勢力の大きさを考えて、数年単位の戦争になる。お酒の入った兄が愚痴交じりに呟つぶいていた、〃対巨人用兵器〃が発展を続けければ、巨人の力もいずれ絶対的な物ではなくなる。

世界は戦争の歴史だ。

約二千年間、他民族を犯してその数を増やしたエルディア帝国が仮に存在しなければ

——エルディアが栄光を送る理由となった、ユミル・フリッツが「光るムカデ^ヤ」と出会っていないければ——、世界は戦争がない、秩序の保たれた平和な世の中へと変わっていたのか。

いや、どうせ別の理由が生じて、今度はエルディア人ではない者たちが別の人種を虐げる。

その例がマールレ国だ。巨人の力をエルディア帝国から手に入れたマールレは、侵略戦争に勤しんでいる。

人間は生きて苦しむことにこそ、意味がある。命というものは苦しみや絶望の中で最も美しく、そして鬱くしく輝く。

けれど、ジークお兄さま以外に本当の価値を見出せない私は、大切にしておいたものを一気に壊したら、気持ちいいだろうとも考えてしまう。

エレンくんやミカサちゃん、調査兵団の仲間。それにアニちゃんたちを。

——ドログチャに。

「大丈夫か？」

松葉杖を突いて歩く私に、心配そうに話しかけてくるライナーくん。

彼は最近ヒゲを生やし始めて、頬が少し瘦けた。ここ数ヶ月は寝ても覚めても脳内ジーク・イエーガー祭りだった私もお兄さまに少し慣れてきて、抱きしめられてもそのまま逝くことはなくなった。

普段は「いつてらっしゃい」と、「お帰り」の時に全力でハグをして兄の胸筋に顔を埋めている。

(別に変態では) ないです。

ライナーくんもライナーくんで、精神的に疲労が溜まっているのでしよう。

一周回って遅くなったアニちゃんのように、今度はライナーくんが遅くなっちゃう番ですね。そのためにも、一度さらに精神的に追い込んでやりましょう(鬼畜の変態)

フェンス越しに小さく映るのは、銃を持ち駆けている子どもたち。

ちようど木陰の下の背もたれがないベンチに腰かけ、木に松葉杖を立てかける。ライナーくんは陽の当たる場所で腕を組み、真剣な様子で子どもたちを眺めていた。

「今、先頭を走っている子どもがいるだろ？俺の従妹なんだ」

「へえー…アニちゃんから聞いたけど、ライナーくんは確か、候補生時代はあまり成績がよくなかったんだよね？」

「……ああ、その点ガビは——あつ、従妹の名前が「ガビ・ブラウン」って言うんだが、アイツは優秀だよ」

同じ血とは思えないほど、と話すライナーくんはどこか皮肉気だった。

しかもその皮肉は従妹ではなく、彼自身に向けられている。自分で自分を罵るとは……マゾなんでしょう。

“従妹”とは言ったものの、あまり二人の容姿は似ていない。ツバ広の軍帽から覗く少女の髪は濃い茶髪で、その名の通りブラウンの大きな瞳と少し太めのつり上がった眉が、強い意志を感じさせる。

対しライナーくんは髪と瞳が黄金色で、特に眉が特徴的である。この調子で行くと、くたびれたおじさん臭が増す。

「ちゃんとご飯食べてる?」

「……食べてる」

「ライナーくんはまだ大きくなりそうだし、しっかり栄養摂らないと。あと睡眠もね、限がある」

「……ああ」

ベンチの端に寄って隣を叩いて、座るよう促した。

その間に子どもたちはゴールしたようで、一着が全員の中でも一段背が高い少年。二

番目がガビ……と続いて、最後はかなり遅れて金髪の少年がゴールした。二着で悔しがっている少女や、最後に着いた少年の背を叩いている一着の少年など、お国のために命を捧げることになる少年少女であれ、そこには年相応の子どもたちの姿があった。

「最後に着いた子はなんて言うの？あの金髪の……」

「アイツは「フアルコ・グライス」、ガビと同じ年の子どもだ。それで一着だった少年がフアルコの兄の「コルト」だ」

「年齢差がありそうだけれど、訓練は同じなのね」

「今は、だな。正式に候補生になれば、訓練内容も変わってくる。フアルコは分らんが……コルトの方は現状の成績であれば間違いなく候補生入りするだろう」

「……継承期間と年齢で考えたら、あの子が獣を継承するのかな」

「多分な。まだ正式にはおろか、候補生選びももう少し時間が必要」

「お兄さまは五年……か」

「……」

やはり物理的な寿命の「十三年」の解決策は難しいか。

黙ったライナーくんを見れば、眉を下げてどう発言してよいか、困ったご様子。

そう言えば、このナイスガイが兄に「お兄さま」の件をチクったことを思い出し、意趣返しに横腹を掴んだ。ライナーは驚いた表情で跳び上がり、ベンチの下に転がる。

オレは上、貴様は下だ。

「——ツ!? な、なつ、なん……」

「そう言えば思い出したけれど、復権派に「グライス」姓が付くあの兄弟に似た男性がいたのだけれど……もしかして関係者かしら?」

「いや、きゅ、急に何を……」

「質問を質問で返さない。答えるのは君の方、そのあとに聞いてあげるから……ねっ?」

人差し指でライナーくんの眉間をツンツンすると、さらに困った顔になる。アウラちゃんに眠るサドの精神がこのナイスガイを追い込んで、そしてグスグスに甘やかしてやりたいと言っている。

鞭だけではダメなんですわね、飴もなければ。精神をより深い深淵へ導くには。

「……グライス兄弟は確かに、叔父が復権派の幹部だった。アイツらは一族の潔白を証明するためにも、戦士を目指している」

「……やっぱりか」

「覚えているのか? 「楽園送り」にされた中に、グライスの叔父がいたことを……」

「私もあまりに幼かったから、詳しくは覚えていない。……ただ、お母さまが巨人にされたところは、鮮明に覚えている」

無論嘘だ。

「私」が曹長殿の言葉を受けて、人の不幸に——悲劇に、「生」を生み出したその日。私の人生が180度変わった日のことは全て、鮮烈に、鮮明に、頭に刻まれている。そんな中でお父さまを「役立たず」呼ばわりしただけに留まらず、復権派を密告したジーク・イエーガーに対しても怒りを露わにした男。曹長殿曰く、巨人にしたエルディア人を壁から遠ざける意図で人の姿のまま落とされた男は、地平線へと走って行き、その後を巨人たちが追いかけて行った。

「悪いことをした人間は、相応の罰を得なければならない。貴族であろうが、平民であろうが、罪を前にした『罰』というものは、悪行に比例して平等に下されるべきだ」

お兄さまを愚弄したのだから、死んで当然だ。その部分に関しては、勝手にお兄さまを復権派の道具のように扱ったお父さまやお母さまにも思うところはある。流石に「殺してやる」までは行きませんけれど。

しかし、両親でもない赤の他人がジーク・イエーガーを侮辱したのなら、話は別。あの男は相応の罰として、巨人に食い殺されたのだ。ただ、それだけの話である。

——この話をもしグライス兄弟にしたらと思うと、少しゾクゾクしてしまいますね。

「マーレ国で敷かれたルールを破ったのだから、そこには『罪』がきちんと生じて、「楽園送り」という『罰』が与えられた。グライスだけではなく、お父さまお母さまも」

「……あなたは、違かつたんだろ」

「私には兄を傷つけた『罪』があつた」

「それは、「楽園送り」にされて成り立つ『罰』じゃないだろ……!」

「成り立つの。それほど私にとつてお兄さまの存在は大きくて、どうしようもないのよ」

「……じゃあ」

「じゃあ?」

ライナーくんは俯いて、頭を抱えてしまった。オイオイ……一体全体どうして、そんなに苦しんでいるっていうんだ?これじゃあまるで、私がライナーくんを苦しめているみたいじゃあないですか。

アニちゃんやベルトルトくんと違ってライナーくんは精神的に自分を追い込みやすいことも相まって、苦痛に歪む表情がとても愛らしいです。

よだれを垂らさないように気をつけましょう。ついでに顔が歪まないように。

「俺の『罪』は、どうすればいいんだ。相応の『罰』があるなら、俺は……」

「ライナーくんはどうしたいの？まだ君の任期は6年あるし、お国のために命を捧げているのだから、最後まで戦い抜くことが、戦士であるあなたに求められる姿だと思うけれど」

「人をたくさん、殺したのにか……？」

「何を今更。それが『戦士』でしょう。それを言うなら私も巨人の正体がエルディア人であると知りながら、調査兵团に入っつて、お兄さまと会うために殺し続けた」

「それだけじゃ、ない。マルセルは俺のせいで死んで、作戦をベルトルトやア二に言っつて無理やり実行させた挙句、最終的にベルトルトを……失わせた」

「ベルトルトくんもア二ちゃんと同様に監禁されていたら、まだ命はある。だからア二ちゃんもその可能性を信じて、フーバー婦人の元へよく訪れて、励ましている」

「でも、俺は、マルコのことだつて……俺は、俺は戦士で……兵士じゃ、な……ッ」

「……落ち着いて、大丈夫だから」

今にも過呼吸になりそうな少年の背を撫でる。人格が分離していた点を考えるとこの子、塩梅を間違えたら精神が簡単に壊れるな。気をつけながら追い込んであげないと。

何となく、お兄さまが私にライナーくんを同伴させた理由が分かった気がする。

彼の精神面をフォローして欲しかったのだ。確かに戦士がこの調子では目に余る。

精神病院に入院歴のある私から見て、今のライナーくんは生きること、命を奪うこと、戦うことに疲れている。

このまま放っておけばいずれラクになる道を選んでしまいかねない。そんな危うさがある。

アニちゃんがよく彼を蹴っている、とお兄さまから聞きましたが、存外彼女はこの少年を心底嫌いながらも、励ましているのかもしれない。

そう簡単に死ぬると思うなよ——という意味合いも、含まれていると思いますが。

「冷たい言葉を言ってしまうと、あなたのその『罪』は私のものではない。私や他人に相談したところで、君の『罪』はなくならない。背負うしかないのよ。そんな覚悟もないのなら、君は戦士になるべきではなかった」

「……………」

「けど」

ベンチから落ちた後、そのまま地面に腰を付けていた彼の元に近づいて、座り直す。

そして太い膝に手を置き、伏し目がちに相手の顔は見ないまま、こちらの横顔が少し見える程度に視線を斜めに向ける。

「苦しいのは君だけじゃないんだよ、ライナー・ブラウン。アニ・レオンハートやベルトルト・フーバー、それにジーク・イエーガーも、その心中に暗い闇を抱えている。

それもあなたたちへのし掛かるのは、「死にたい」という気持ちさえ許されない『罪』なんだ。

だから腕を失おうが、足を失おうが、精神が壊れようが——その命が最良の最期に向かうまでは、進み続けなければならない」

「……………」

「でも……それでもね」

悲痛に歪んだ金色の瞳に目を合わせて、後頭部に手を回し撫でてやる。なるだけ優しいトーンに声を落とし、微笑みかけた。

「実際に『罪』を抱えている側からしたら、私の言葉なんて煩いものでしかない。どこにでも逃げ道は必要なんだ。だから辛い時やどうしようもない時は、酒でも女でもいい、気分を紛らわすといいよ。もちろん完全に逃げてはならないけれど。少なくとも、ライナーくん自身の大切なものがある以上は」

「……………俺の、大切なもの……」

「アニやベルトルトくんにも、大切な存在がいるでしょう」

「……………言われ、たんだ」

「言われた？」

「……エレンに、言われた」

ボソボソと話すライナーには、在りし日のナイスガイの姿はない。

彼曰く、エレン誘拐に失敗した時、『お前らができるだけ苦しんで死ぬように努力する』宣言をされたそうだ。

エレンくんは瞳をかつ開き、笑っていたらしい。その表情がライナーくんは忘れられないと。

お姉ちゃんがない間に他人をここまで曇らせるなんて——流石私の弟。

「忘れられないんだ。俺を裁くのはきつと、アイツだつて……」

「じゃあ裁かれることに希望を持って、生きてもいいんじゃない？ その方が、君の心が楽になると言うなら」

「……………」

「裁いてくれる人間がいるだけでもきつと、『罪』を持った人間には多少の救いになる。私もお兄さまがいなくちゃ早々に死んでた。……いえ、というか、よくまだ生きていると

思う」

「……………」

「それに君が死んだら、悲しむ子がいるじゃない。すぐ近くに」

正面には遠くの方でテオ・マガトの前で整列し、話を聞いている子どもたちがいる。中央辺りで背筋をピンと伸ばし、教官の話を一字一句聞き漏らさないようにしている少女の姿は、可愛らしくさえあった。

「ガビ……」

「私もライナーくんがいなくなったら、悲しいよ。アニちゃんは思うか……ちよつと微妙だけど」

「……アウラ、さんも」

「うん？」

「……アウラさんも、悲しんでくれるのか？」

「そりゃあ、悲しくなるよ」

「そう、か……」

また下を向いてしまったライナーくん。私の「曇曇ヨシヨシ」が効かなかつたのだらうか。

と、思ったら彼は立ち上がって、こちらを向く。私の両肩を掴むと、視線を彷徨わせながら餌を求める魚のように口を動かす。握力を考えて私に触れてほしいです。これでも加減しているのかもしれないが。

軋む肩に、アニの「ゴリラ」発言を身に染みて感じた。

「ゴ……ライナーくん？」

「お…俺は」

「う、うん」

「アウラ、さんのこと……」

次の展開を予想していた折、ゴリライナーの後方で近づく影が見えた。痛みを若干呻いてみせている私の反応を見ると、眉間に寄っていた皺がさらに深くなる。そして握られた拳が、目の前の男の脳天にぶつかった。ゴッ、という勢いに火花さえ見えた気がする。

「何発情してんだ、クソドベ」

オールバックの金髪と、左右のサイドを刈り上げにした独特なヘアスタイルの少年。ライナーと同期の彼は、戦士の男性陣と比べると一回り小さい。私とそこまで身長は変わらないでしょう。

少年——ポルコ・ガリアードは、深緑のジャケットのポケットに両手を突っ込んで、地面に転がったライナーくんを睨め付ける。

控えめにお礼を言うのと、鼻を鳴らしてポルコくんは去って行った。

単純に私を助けたというよりは、《鎧の巨人》の継承権を巡って火花をぶつけていた関係だったがゆえに仲が悪く、そこから転じて鼻についたライナーくんToStrésをぶつけたのでしよう。ヨロイの君ってば、なんて不幸で可哀想で、かわいいボーイなんだ。

「だ、大丈夫？」

「……あ、ああ……」

少しよろめきながらライナーは立ち上がった。

先ほどの話は上手くうやむやになり、二人揃って黄色い腕章を付けた、少年の後ろ姿を見つめる。

視線を横に向ければ、ジツと、深緑の背中を黄金の瞳が捉えていた。そこに縋るような色が一瞬映る。

そう簡単に救いを与えてはやれないよ、ライナー・ブラウン。私は甘くないのだから。殊に己の「生」の欲求が関係すれば。

「ねえ、ライナーくん」

「……ん？何だ」

「あのね」

——彼にヨロイを継承させようなんて、思っていないよね？

見つめていた黄金の瞳が丸くなる。私の読みは間違っていないようだ。

まだ任期は六年ある。ここから先は戦争が待ち構え、そして「世界の秘密」を知ったパラディ島の人間も動き出すだろう。

だからまだ死ぬには早い。最後まで最後まで、苦しみ抜いた先に命を散らす美しい様を、私にぜひ見せてほしい。それこそグリシャ・イエーガーやベルトルト・フーバーのような人生の中で最も輝く姿を、私に見せてくれ。そして……感極まらせてくれ。

同時に、悲劇の舞台は複数残されている。

長年候補生でありながら、巨人を継承していないポルコ・ガリアードや、アニ・レオンハート。お兄さまやエレンくんは当然のこととして、他にも巨人の継承者関連なら——そうですね。

ユミル。

「フリッツ」ではない、ただのユミル。

彼女が死んでいないことをアニちゃんから聞いた後、すぐに過去の歴史的事実を漁って、時間をかけてたどり着いた仮説。ユミルくんが「楽園送り」にされた元マーレに住んでいたエルディア人であることは、容易に想像がつく。

そこから調べて、かつて——約六十年以上に前に政府が行った大規模な弾圧にたどり着いた。

それは、「始祖ユミル」を崇拜するエルディア人たちによつて構成されていた組織であり、彼らはひとりの少女を「ユミル」として崇め讃えていた。

ただの偶然かもしれない。

しかし『イルゼ・ラングナーの日記』の件を話した後の彼女の取り乱しようといい、その後のまるで覚悟を決して巨人化した姿といい、この偶然を“ただの偶然”で済ませる事ができなくなっている。

もし私の推測、「ユミル」として祀られた少女Ⅱ「ユミルくん」なら、私は彼女のお話を聞かなければならない。

その苦悩を、絶望を、悲劇を、私に浴びさせて欲しい………♡

しかし、現在のユミルくんの様子を見たアニちゃんの記憶だと、彼女と話すことは叶わないでしょう。元々顎をポルコくんが継承する予定だったみたいですが。

継承を行う儀式の間において、ポルコ・ガリアードが注射器を打つ直前に聞いた言葉。彼女は、微笑んで言った。

「ただいま」——と。

その言葉を聞き、注射器を持ったポルコの手が止まった後、彼女の体は結晶に包まれた。

——そう、つまりユミルくんは今、アニと同じ状態にある。

顎の能力は硬質化をも噛み砕く能力があるらしい。だが肝心の顎が眠り姫な以上、手出しができない。他にも方法はあるかもしれませんが、無理やり壊せばその中身の本体が壊れて死に、巨人の力が行方知れずとなる可能性もあるため、上層部も下手に手を出せない状態のまま、保管されているようだ。

その結晶に接触できれば、ユミルくとコンタクトが取れるかもしれない。

果たして彼女の意思によって結晶化が起こったのか、それともユミルちゃんの作業なのか。今のところは分からない。

けれどこの一件で、一つの可能性に私は思い至る。

それはこれからユミルくんの経過を見て考えていきますが、仮にもし可能であるのなら

らば——60年以上も経って人間に戻った彼女の姿が、当時と変わっていないのならば——。

変わらず存在し続けることができるなら、お兄さまにも魔法を掛けることができるはずだ。

そうすれば永久に、ジーク・イエーガーを我が物にできる。

後ろを知らない少年少女

戦争だ。

先のパラディ島攻略の失敗によって《超大型巨人》を失い、また《顎の巨人》の結晶化を受けて、実質二体の巨人の力を無くしたマーレ国。中東連合はマーレは弱体化したと見做し、これを好機として宣戦布告を行ったことにより、戦争が始まった。

前線で戦わされるのはマーレ兵ではなく、エルディア人である。そもそも現在は志願兵制はあるものの、マーレ人の徴兵制度はない。「悪魔の民」の兵士の一部は戦場にてバケモノへと姿を変え、敵の兵士を、民を貪り食らうのだ。

《獣の巨人》の叫びによって引き起こされる悪夢は、まさしく地獄絵図である。

マーレ国が主な軍事戦力として巨人を使うため、より一層エルディア人が忌避され、生存権すら危ぶまれる状態へと陥っている。

そのため、巨人の脅威というものはエルディア帝国が無くなったにも関わらず、根強く存在する。

そんな状況で上層部がピリついている中、将来戦士を目指す少年少女は「名誉マーレ人」、あるいは別の目的をもって訓練に励んでいた。

今日もまた基礎体力作りや座学や戦闘訓練など、頭の先から爪先まで溶けそうな疲労を抱え、帰路につく。

必然と子どもたちのグループは分かれる。隅の一角では、五人の子どもたちが固まっていた。

「だらしない、ファルコったら。兄貴におぶってもらっちゃって」

「そう言つてやるなよ、ガビ。お前もこの間こつそりライナーさんに肩ぐる——」

「わっ！ー！言わないでよ!!」

従兄のライナーの件を持ち出され、顔を真っ赤にしているのはガビ・ブラウン。

対し疲れバテてしまった弟、ファルコ・グライスを背負って歩いているのは、兄のコルト。

ちょうど第二次性徴期のコルトの体は、ここ最近ぐんぐん伸びている。それと比べればファルコやガビ、そして三人の様子を後方で見ながら笑っている銀髪の少し冷たさを感じる少女、ゾフィアや、もっさりとした黒髪で楯田のフレームの眼鏡が特徴的な少年、ウドは一回り以上小さい。

常は良きライバルでありながらも、彼らは仲良く過ごしている。

五人揃って戦士候補生になれたらいいな（コルト談）——や、ファルコじや無理だね（ガビ談）——や、継承できるなら誰がどの巨人を手に入れるかなど、楽しみに話し合う子どもたち。

一番年上であるコルトは中東との戦争のことや、その展開など悩ましく思うことはあれど、話をガビたちに合わせる。

パラディ島の一件があつたものの、子どもたちにはやはり巨人の圧倒的な力への信頼が存在する。

そこにはもちろん、戦士たちへの大きな尊敬も含まれている。だからこそ戦争に入つた中でも、幼い子どもたちには緊張感が足りないのだろう。

現状まず候補生入りが確実にとされているのはコルトであり、教官のお墨付きである。

次点のガビに続いて、ゾフィアやウドも上位に入っている。唯一ファルコは下から数えた方が早い順位であつた。それに一番悩んでいるのは、ファルコ本人である。

巨人を継承するならば、鎧はまず間違いなく戦士候補生のポルコだ。

彼はファルコたちとは訓練メニューが全く異なる。仮にコルトが同じメニューを行えば、半分も終えられずに今の弟と同じ目に遭うだろう。

ポルコの継承が《獣の巨人》でないのは、単純にその人による得意・不得意が関係する。彼は頭よりも体を使うタイプだ。

ライナーが「始祖奪還計画」の失敗の後、肩身が狭くなっているのはコルトだけでなくガビも感じている。

もし此度の中東連合との戦果次第では、ライナーの鎧が剥奪される可能性も十分ある。——否、すでにされてもおかしくはなかったのかもしれない。

宣戦布告の気配を感じながらポルコに継承させたとして、すぐに実戦に駆り出すのは危険だ。使い慣れていないという理由で死なれては困る。ただでさえ対巨人用兵器の開発は諸外国で進んでいるというのに、

そのため不振が続いているライナーでも、ポルコよりは戦場慣れしているから——と、まだ継承は行われていないのだ。

ライナーの鎧を継承する気満々だったガビとしては、シヨックの大きいものだった。

それでも闘志を燃やし、年上のポルコから必ずや鎧を勝ち取ってみせる！と意気込む姿は、ドベ時代の従兄と大きく異なる。

「でも、あの筋肉に勝てるかなあ……」

母親から写真で聞かされていた今のコルトと同年代くらいの従兄の姿は、五年ぶりに故郷に帰ってきた時は分厚い筋肉に包まれていた。

その上腕二頭筋につかまり、「高いたかーい」をしてもらうのが、ガビの中で密かなブームであつたりする。

しかし、その上腕二頭筋に打ち勝つ筋肉の隆盛を誇っているのがポルコの肉体である。

シャツから浮かび上がるその形は、筋肉の躍動を隠しきれていない。

アニがよくライナーを「ゴリラ」と呼んでいるのを、ガビだけでなく他の子どもたちも見かけたことがある。しかしそれに対して、ピークがアニに「ポルコの方がすごいよ、筋肉」と言ったことがある程だ。

その後アニは無情にも「ライナー^{アイツ}は顔がゴリラだから」と返した。

——とまあ、鎧の継承はすでに埋まったようなものであり、獣に関しても、統率能力や状況処理能力などが評価されているコルトが適任だろう……と、考えられている。

そのためか、ガビは鎧を諦めてはいないものの《女型の巨人》にも目を付けており、アニと雰囲気が少し似ているゾフィアも、女型がいいな、と内心考えている。

ただしその前に少年少女には、戦士候補生の選抜がある。

近い未来ではなく遠い景色を見ようとしてしまうのは、幼きゆえの視点であろう。まだ戦士の「地獄」を経験する前の、血に塗れていない、無垢な彼ら。

「ねえねえコルト、ちよつといい？」

「ん、何だ？」

帰宅路、夕暮れの陽を浴びて赤く染まった子どもたちは収容区に着く。

ゾフィアやウドと別れ、今いるのはガビとコルト、そして兄の背に揺られ眠ってしまったファルコ。

「あのね、お願いしたいことってどうか……協力してもらいたいことがあって」

「俺にか？」

「うん。その、ライナーのことだね」

ガビは従兄の立場が危ういことを肌で感じており、同時に精神的にひどく落ち込んでいることにも気づいていた。

ガビや家族の前では無理をして笑ってみせるが、少し瘦けた頬と、うつすらとある目元の隈は隠せていない。

「あの島で五年も過ごして、ライナーはすごく辛かったんだと思う。詳しくは教えても

「出来ないけど、教えてもらわなくても分かるよ。奴等は……悪魔だから」

「ガビ……」

「だから私は絶対戦士になって、ライナーの分まで頑張る。あの悪魔どもを——私たちが苦しめる奴等を、皆殺しにするんだ」

「……お前のその部分はいいところでもあるけど、悪いところでもあるからな」

「なに、パラディ島の人間たちは悪魔じゃないって言うの？」

「そうじゃなくてだなあ、なんて言えばいいのか……お前の「こうだ！」と決めたら限界を超えて突っ走るところが、危なっかしいって言いたいんだ」

「この私に短所なんてあるわけじゃないじゃない！」

「あるんだなあ、それが……現に今も」

冷静にガビを見るコルトに、ムツキヤアー！と、子猿のように怒るガビ。

騒ぐ少女の声に眠っているファルコが唸ったところで、コルトは口元に人差し指をつけて荒ぶる少女に鎮まるよう求めた。

「フン、じゃあ手伝ってくれたら許してあげる」

「手厳しいなあ……まあいいよ。何を手伝って欲しいんだ？」

「それはね……ライナーを励ましたいの」

ガビたちが戦争でさらに精神的にも肉体的にも疲れるであろうライナーのために、エールを送る。

具体的な方法については、まだ考えていないようだ。

「まあー美味しいごはんを作ったり、かわゆい私が励ましたり……。そのほかに何か思いつきそうなこととかない？」

「かわゆいガビねえ……」

「何よその半目！よく見てよ、かわいいさしかないじゃん!!」

「うんうん、かわいいかわいい」

「ムキィー!!」

「おっ、かわいい猿の音がするぞ?」

「本ツ当に怒るよ!!」

そう言いつつ、コルトの腹に容赦ないパンチを繰り出すガビ。

それを受けるコルトはガビに対し「かわいいフィルター」が常にかかっている見えている弟のことを思い、苦笑いした。本当にかわいい少女は、暴力行使になど出ない。

そうだ、本当のかわいいってヤツは——と、コルトが思ったその時。

彼の脳裏に過ぎったのは、一人の女性の姿。

時たま訓練場に隣接したベンチに腰かけて、読書をしている女性の後ろ姿。

特殊な事情で一般人——と言っても「名誉マーレ人」であるが——ながら、軍事基地内の戦士用の住居に住んでいるという人。

訓練中遠くに座るその姿を見つけてしまうと、そのあといくら意識しても、視線がそこへ吸い込まれてしまう。

他の子どもがマガトに彼女について尋ねたこともあった。

内容は「あの場においていいのですか」であった気がするし、彼女の事情について把握し切れていないところから、「だれでしょうか」だった気もする。

マガト自身は質問に対し、パラディ島の作戦において戦士たちに協力した人物である——と、端的に語った。

また、禁止されている区域には入っていないため、あの場所で本を読んでも別段問題はない——とも。

ついで、不用意に外部へ情報を漏らさないように——とも告げていた辺り、コルトはかすかに政府の闇のようなものを感じ取った。詮索はしなかったが。

その話はやがて子どもたちの間で点と点がつながり、彼女が戦士長と関連があることがわかった。

妹であると判明するまでは、夫婦説が濃厚だった。兄妹と聞いても容姿がほとんど似ていないため、疑わしい声を上げる者もいた。

女性の年齢は20代前半で、肩に少しく程の焦げ茶色のストレートな髪。瞳は青みを帯びた明るい灰色だ。

かく言うコルトは帰り際、出先から帰ってきた女性の姿を見かけた時なんかは、こっそりとする。

まだ年が一桁の子どもからしてみれば、大人の女性の良さというのは分かるまい。皆、最初こそ女性の珍しさに視線を向けていたが、その内慣れれば挨拶をするか、視界にも入れず通り過ぎるといったリアクションを取る。

挨拶を受ければ女性はきちんと返す。それも、極上の微笑みで。

コルト少年もまた声をかけようと思いつつ、一度もできた試しがない。毎度脳内「おっふ」で終わる。

思春期も真つ盛りな彼の年齢からすると、大人の、それも眉目秀麗な女性というのはど直球に欲をくすぐる。

だからこそ仲間が以前、女性がライナーと共にいて、さらに距離が近かったという話を聞き彼は思った。

彼女と年の近いライナーが、羨ましいと。

コルトと女性の年齢差は、約10歳はあるだろう。そこまで年齢に差があると、話しかけづらい。かと言って、彼よりもっと年が離れている少年少女は女性にやましい心などなく話しかけられる。

戦争が本格化し始める中で、血に染まっていない子どもたちとまた違った方向で、コルト・グライスは懊悩した。

無論自分の目的や、国の状況を分かりながらも。

「俺はこのままじゃダメだ……」

「ハ、何が？」

思春期に心を乱される少年の心などつゆ知らず、アニ以上の鈍感ガールの気配を漂わせるガビは、コルトに胡乱な目を向ける。

「……ガビはさ、あの女性のことどう思ってるんだ？」

「あの人って？」

「ほら、偶に外で本を読んでいる片足の……」

「ああ、戦士長の妹さんでしょ？」

戦士長の過去を踏まえれば必然と、女性がかつて「楽園送り」にされた人間だと分かる。それを抜きにしても「悪魔の末裔」の中で長く過ごしたのだ。同じ収容区のエルディア人の仲間であっても、パラディ島で過ごしたならば……ということを考えて、想像できるガビの反応は二つに分かれる。

しかし少女は肯定とも、否定とも取れない微妙な顔をする。

「うーん……ライナーに聞いたことあったけど、すごくいい人なんだって。でも同時に、大切な人のためなら、切り捨てられる人でもあるって」

「……聞いてたのか」

「うん、だつて戦士でもない一般人が始祖の奪還作戦に協力してたって知っちゃ、気にもなるよ。そこら辺はライナーも言えないことがあるから、結構ボカされてたな」

「そ、そうか」

「もし気になるなら、自分で話して確かめてみる、って言つてた。まだ話してないけどね」

「意外だな。お前は気になつたらすぐ特攻するタイプなのに」

「ん……なんかちよつと近寄りにくいっていうか、私一人で行く勇気がないの。自分

でも、普段の私じゃあり得ない……って思うくらい」

「……………じゃあ、行ってみるか？」

「え、マジ？」

「マジだ」

コルトはまた、関係性はわからぬものの、ライナーと距離の近い彼女が声援を送れば力になるのではないかと提案する。

「あと本当に付き合っているか探りたい。俺の今後のために」

「え、ライナーって付き合ってるの、あの人と!!？」

「ばっ、まだわからないって！まだ……そう、まだ」

「じゃあ私ライナーに聞いてみるよ、あの人のこと好きかどうか。戦争で本格的に駆り出される前に、私たちで元気づけなくちゃね！」

二人の意向は決まった。ゾフィアとウド、ファルコも交ぜての計画であるが、コルトは女性と会う際はガビと自分二人だけで行こうと話す。弟ファルコの想いに気づかない鈍感少女はともかく、自身の思春期なハートを年下二人や弟に知られたらと思うと、顔から火が出そうになるためだ。

「……………」

そんな兄の背にいる途中から起きていた弟は、薄目を開けつつ居眠りを続けた。
しかしガビがそんな少年の薄目に気づき、結局ファルコもまた連れて行かれること
なるのである。

まを見た時は、寝顔を堪能した後に迷惑をかけたことに、本気で死のうとベランダから飛び降りようとして、異変を察知したお兄さまに止められた。お兄さまの曇り顔は、相も変わらず輝いていた。

そんな、寂しくて死ぬうさぎのような精神状態で送る我が日常。

本日は図書館に赴いて、夕方ごろに帰還した。門前の衛兵の方たちとは軽い会話程度なら交わすようになり、初めは距離を置いてこちらを眺めるだけだった戦士志望の子どもたちも、声をかけてくるようになった。

子どもは天真爛漫でよいですね。その分少年少女が見せる絶望というのは純度が高く、とても気持ちの良いものです。

過去にもし戻れるのなら、ドベ時代のお兄さまをヨシヨシペロペロしたいですね。

今心の中の金髪の女憲兵さんが「逮捕だよ、この変態ブラコン少年性愛女」と、フアイティングポーズを構えて、彼女が求めた死刑判決は裁判官の金髪蒼目の少女ちゃんにより、棄却されて無罪になった。これにて妄想閉廷。

「……………ん？」

コツコツ音を立てて歩いてきた折、隅を歩いているこちらと反対側の木陰の後ろか

と、こちらへ駆け寄ってきたガビちゃん。コルトくんは完全に恋する乙女状態で、尚も木の陰からこちらを見たまま。可愛いな。

ガビは片方が付いてきていないことに気付くと、走って戻り、腕を引つ張りながら連れてきた。

「えーつと…何かな？」

人畜無害の美女を装って微笑むと、ガビちゃんは口を一瞬への字にする。

それで、この子が勘が鋭いタイプだと悟った。

また、それこそ少女本人が気づかない程のわずかな恐怖が瞳の中に過ぎったのも、感じ取った。

あまりこの子の前では黒い考えを持たない方が良さそうだ。私としても曇らせがいのあるライナーと違って、この少女が曇らせにくいタイプであることはナイスガイの情報で分かっているから、関わる利点があまりない。

ただし、ライナーくんの感情を翻弄するために利用する可能性は大いにある。

「お願いしたいことがあるんです、ジーク戦士長の妹さんに」

ガビ曰く、ライナーくんを励ますために協力して欲しいそうだ。

ライナーを元氣付けて欲しい——とのこと。子どもたちの方は、後で各々用意したプ

移動している間は私が本当にアニたちに協力したのか——や、壁内はどんな所だったのか（コレについては口外禁止の部分に該当するので話さなかつた）。

また、一度「樂園送り」にされた私がマーレや壁内人類をどう思っているかなど、ガビに聞かれた。

アニの件は首肯する。マーレについては特に恨みはないとして、ライナーにも話した
“罪”と“罰”の件を子どもでも分かりやすいように、且つあまり生々しくならないように噛み砕く。

壁内人類については心残りは多けれど、それ以上に大切な人がいるから今ここにいるんだ——と話す。

「大切な人って、ライナー？」

「……ライナーくんではないかな」

「ハッ……」とした顔をしたけれど、それにひしひしとライナー大好きなオーラを感じ始めたけれど……ガビちゃん、私の全部はジーク・イエーガーに捧げられていて、ライナーくんに「生」を感じることはあつても、彼が私の生きる理由にはなり得ないんだよ。残念ながら。

それを言外には出さず、お兄さまが大切な人であることを話すと、少女は瞳を今日イチに開く。

去るわけではないだろう。陰でこっそりこちらを観察する気だ、絶対。

というか結局、何かもの言いたげだったグライス兄は話しかけて来なかった。既視感を感じたものの喉元まで出かかって、そのまま思い出せずに終わる。

最後に微かに「さ……なら、俺のは……い」という途切れ途切れになった声が、聞こえた気もしましたが。

さて、どうしたものか。ライナーくんは走り去っていく子どもたちに眉を寄せつつ、空いた場所に座ろうとする私を見ると、途端に困った表情を浮かべる。

「悪い、ガビたちが勝手に……」

「いや、いいよ。可愛い子たちじゃない、ライナーくんを励ましたいからって、私に協力を持ちかけたのよ」

「それが、アウラさんがここに来た理由になるのか？」

「うん、そうみたい」

座るこちらに過剰なまでに隅によって、場所を空けるライナー。ありがとう、と呟いて、ほぼ中央に座った。独特な形の眉が下がって「!?」と、モロに顔に出ている。私の嗜虐心をくすぐらないでくれ。

まあ今回は『餡』のセラピーですので、これ以上虐めては元も子もない。早速『餡』

私はただ膝を叩き続けるだけ。ライナーくんが決めることだ、美女の膝に頭をライドオンするか否かは。私に想いを寄せていることを知っている以上、最後にとる選択は自ずと分かっていますけれど。

ここで重要なのは、私の方は何も喋らず膝を叩いていることです。

別にライナーくんに対し「頭を乗せていいよ」と言っているわけではない。——そう、私は膝を本当に叩いているだけなのです（ニッコリ）

後で不都合が起こつたら、全てまるっと彼のせいにしてしましよう。お兄さまも「ライナーのせいにしていいよ」と仰っておりましたのでね。

「……あの、いいんですか？ 本当に……」

「……………」

「聞いてますよね……？」

彼は私の尻に諦めたのか、はたまた誘惑に負けたのか——そのどちらでもあるのか。

体を横にして、頭を私の膝の上に乗せる。長身の体を丸くしたものの、脛から先はベシチから飛びていた。

「よこしよ」

その顔を無理やり上向きに直すと、ライナーくんは呻き声をあげて、慌てて姿勢を仰

「というわけだからまあ……中東との戦争は過酷になるでしょうけれど、必ず生きて帰ってくるんだよ」

「ああ……。本当に俺って、ダメな、奴だ……」

「ヨシヨシ」

瞳を閉じたライナーくんは、憑き物が少し落ちた顔をした。戦績次第では鎧を剥奪される可能性があつたため、それも精神的にキていたのではないかと思う。

一見してその感情は、「鎧をポルコ・ガリアードに渡したい」という自殺願望じみた感情と相容れないようにも思える。しかし人間は複雑に思考する生き物だ。死にたいと言いつつ生きたいと思うなんて、ザラにある。

「死」を目前にして恐怖を抱くのがそれこそ、「生」への渴望を求めるいい例ではないか。私はそんな矛盾しながら、そして壊れながら、その上で自分で敷いたルールを突つ走る人間を好ましく思うよ。

そうして最後まで生き抜いて死んでいく人間は、途方もなく煌めく。命の灯火を爆発させて消えていくんだ。

これを「美しい」と言わずして、何と呼ぶ。

お兄さまを——ジーク・イエーガーを完全に壊してしまいたいこの途方もない衝

動を、受け止めて欲しい。その器として戦士はいい。アニも、ライナーも。

そう思いながらヨシヨシを繰り返していたら、ライナーくんが小さく「……好きです」と言った。

それに、膝枕が好きなんやね？と、鈍感美女を装う私。

この少年はこれまで関わって来た様子からして、直球に行くのが苦手だ。それこそ、本当に好きな人を前にしては。

でも言外にはちゃんと行動で示しているのだから、本当に鈍くなければまず気づくだろう。兵士ナーくんは一度私を助けたり、エレンの囹にしつつ（おそらくマーレに私も連れて行くこうとして）巨人化した状態で一切ケガをさせなかったし。

私でなければ惚れる人間は数多にいる。ただ、天使ヒストリアは渡さんがね？

絶対に――絶対にだ。

女神と人間は釣り合わないのです。それを言ったら、お兄さまに釣り合う人間なんてこの世に存在しないですからね。

「……………あなたが、好きです」

ヨシヨシをする私の手。彼は「恋愛の方で」と、続ける。
うんうん、ヨシヨ……………うん？

思った以上にとりつか、ヒストリアちゃんと私で優柔不断に悩む精神があつたと思つていただけれど、戦士ナーくんつたら結構本気で私のこと好きなのか？

もしかして、ヨシヨシしちゃいけなかつたのか？視線が熱を帯びていない。

真つ直ぐに向けられた黄金の眼は、真剣そのもの。

「ああ、うーんと？」

「好きです」

「うん……………うん？」

「付き合つて欲しい……………です」

「う……………ん？」

私はひとまず止まっていたヨシヨシを再開して、膝の上の少年を見て、空を見て——
「、どうしたものかと頭を悩ます。

ハッキリ断つてしまった方がよい、と口に出そうとしたものの、寸前で口元を無骨な手で覆われる。

微熱

兵隊さん、兵隊さん。足をそろえて歩きます。

兵隊さん、兵隊さん。お空に鳥が飛んでいる。

兵隊さん、兵隊さん。悪魔がお口を開きます。

兵隊さん、兵隊さん。地上はどうして真っ赤なの。

???????

戦争が本格化し始め、戦士がいよいよ戦場に駆り出される。

連日の忙しきで夜もすっかり更けた頃に帰宅したジーク。シャワーを浴びた後乱雑に髪を拭って、冷蔵庫から取り出した酒瓶を片手に自室に入った。

最初の頃こそソファアーの上で寝ていた妹は、兄のベッドを占領するようになった。彼としては「自分の部屋があるだろ」と、思わずにはいられない。妹の部屋は依然物がほ

とんどなく、結局ベッドもまだ買っていなかった。

寂しいのだろう。それはジークにもわかる。

彼もまた幼い頃、人一倍孤独を感じてしていたから。

家族がいなことを寂しく思い、兄のベッドで眠る妹——と表現してみれば、微笑ましい光景かもしれない。

だがその微笑ましさは子どもであればの話で、双方20代だ。イイ大人である。

「まあ、カワイイものはしょうがないよな」

兄に甘える妹というのは、やはりどうしても構いたくなくなってしまふし、ジークは両親を告発した過去からわかる通り、「家族」というものの正確な距離感を掴めていない。

一人になった後も祖父母の元で大切にされ、クサヴァアもジークを気にかけてくれた。しかしそれが逆に、妹との距離を掴みあぐねる理由になっている。

「家族」とは、いつたいどういうものであったのか。

小さな妹のことを抱きしめていた、当時のジーク・イエーガーに聞きたい程である。

「……ハア」

これまでの経験から此度の中東との戦争は、長引きそうだった。

彼に残された期間は五年。その間に計画は大詰めに入る。ここでもたもたしている場合ではないと焦る気持ちの一方、だからこそより慎重に行動しなければならなかった。

エルディア人だから、と戦士をあなどる上層部は別として、特にテオ・マガトには真意を悟られてはまずい。

一応すでに、今後の算段は立ててある。

計画されているパラディ島への調査船団の派遣。そこでジークは自身の協力者を送り、壁内人類に取引を持ちかける。

その内容にあるのはパラディ島の安全の保障や、武器や技術の提供、そしてかつてエルディア帝国と同盟国だったヒイズル国への橋渡しに、マーレへの情報工作の支援など。

その対価としてジークが求めるのが、彼自身を亡命させ、エレンと引き合わせることである。

ジークはエレン・イエーガーの心中を確かめた上で、「安楽死計画」の協力を求める。グリシャ・イエーガーの同じ被害者として、きつと計画に賛同してくれると信じてい

るのだ。

ここで妹の件を持ち出さないのは、アウラが調査兵団を裏切ったからだ。交渉相手の中には調査兵団が含まれ、そもそも「安楽死計画」の鍵となるエレンが、姉をどう思っているか判断が付かない。

それとなく妹から聞いた話では、小さい時は姉の後ろを追いかけてくるかわいらしい弟だっただという。

少し大きくなったらすぐに思春期に入ってしまったが、それでもかわいかったと。

エレンのことを語るアウラは「妹」ではなく、「お姉ちゃん」の表情だった。

それに不思議な感情になった反面、エレンと暮らした妹を羨ましく感じた。それほどまでにエレンを好いている感情が、アウラの顔に出ていた。

そんな妹はしかし弟以上に兄を愛していて、狂い気味である。その点はジークも実感している。兄妹間の距離がわからないと言いつつも、その距離感が近すぎることに。

アウラが彼を見る目は、協力者でありジークを神格化している女と似たところがある。

マーレに滅ぼされた小国の出身の人物であり、兵士として徴用されていた女——イエ

レナ。

戦地の中、その女を救ったのがジークであった。以来協力者となつた彼女は彼に信仰めいた感情を抱いている。

そんなイエレナはまだしも、妹に神でも見るかのような視線を向けられるのはどうにも得心がいかない。

(例えるならアウラの視線は、推しのアイドルを応援する熱狂的なファンであろうか)「十八年」の歳月の中で、ジークの理解に及ばぬほど妹の兄のビジョンというのは歪んで、本人は正されることがないまま突き進んで狂っている。

最終的にそれらを考えてたどり着く兄の答えが「俺が悪い」であるのだから、報われない。

そんな兄を見て妹は興奮する。最低最悪の悪循環だ。

「まあお前も……一緒だからな」

交渉の段階ではアウラの件は持ち出さないが、その時が来れば必ず連れて行く。妹が、アウラ・イエーガーが兄狂いに至るまでの過程を知れば、情状酌量の余地があつてもいいだろう。

そもそも悪いのは——と、また先の鋭い針が男の心臓に刺さる。

ジークは自己嫌悪のスパイラルに陥った脳で、ベランダに立ち夜空を眺めながら酒を飲む。

喉を熱く潤して、酒瓶の代わりにテーブルに置いたタバコとジツポを取った。

思考を一旦全て捨てて、体の中に煙を取り込む。それが体を悪くするものであると知りつつ、実際感じるのは浄化されるような感覚だ。さまざまながらみから、その時ばかりは解放された心地になれる。

初めてタバコを吸ったのは、いつだったか。

亡き恩人が裏でコツソリと吸っているのを見かけ、それ以来タバコを吸うことに憧れを抱くようになって。子どもの頃一度だけ祖父のものを試し激しく咽せて、「これがオトナの味かあ……」などと、感慨深く思い。

しかして今は憧れの気持ちはすっかり消え、ストレスの緩和剤と、無性な口寂しさを覚えた時の誤魔化しのクスリとなっている。

「……………おに、……………」

「ん？」

かすれた声が聞こえ、そちらに視線を向けたジーク。

ベランダの柵に前のめりにしていた体を後ろに向けると、ベッドの上でモゾモゾと動く影があった。

室内を照らす月明かりにぼんやりと白い肌が浮かび上がり、顔だけ出した妹が落ちかけの脛を上げようとしながら、眠りの国へ戻ろうとしている。

「そういうところだぞ、お前の子どもっぽいと」

「……………」

「眠いなら寝ろ」

「…………ライナーくんがね」

「ん？」

「好きって、わたしのこと」

唐突なその発言に、ジークは紫煙を燻らして目を細めた。

どうやらとうとう、ライナー・ブラウンはアウラに想いを告げたらしい。

鎧の少年が妹へ恋慕を募らせているのは、普段の言動から読み取れた。

パラディ島から帰還して、さらに暴力的に進化したアニに対し、ライナーは精神的に摩耗していた。今回の戦争次第では、上層部が鎧をポルコに——とも考えられた。

そんな少年を気にかけるのは、ジークもまたかつてはドベであったからだ。

ライナーを励ます役は自分より妹が適任そうだと考えて、アウラの同伴を任せた。そ

の結果はというと、一見すれば特に変わったところはない。精神的に疲労しているのは相変わらず。ただぼんやりと、虚空を眺めている機会は減った。

他人の恋に茶々を入れる行為は、それこそエルディア人から生殖機能を奪おうとしている彼が行つてよいものではないのだろう。

ジーク自身も誰かを愛する行為は、家族愛や友愛のみであつたように思う。矛盾しつつも、しかしライナーに手を貸した。

「……………」

ジークは、妹を見る。

フリッツの血を残す定めを課せられていたアウラ。「安楽死計画」の上で子どもを作る必要がなくなれば、妹の救いになるはずである。

その上で誰かを愛して、添い遂げる未来を望んで欲しい。何か継るものがなければきっと、この妹はすぐに壊れてしまうから。だから自分ではない誰かに早く、抛り所を見つけて欲しい。

それは別に——少し悪い気もしつつ——ライナーでなくともよいのだ。

どこの馬の骨ともわからない男よりも、幼い時から知っている少年の方がいいと思

手を貸したが、結局のところ選ぶのはアウラで、兄でもライナーでもない。

「返事はしたのか？」

「断ろうとしたら、考えて、つて逃げられちゃった」

「ライナーは結構悪くないと思うけどね」

「六年しか、生きられないでしょ」

「——つてことは、本当は脈アリか？」

「ない」

「言い切ったな…かわいいそうに、アイツも」

布団に包まっっているお姫様はベッドから落ちて、そのまま芋虫のように這いずる。進行方向は兄。

唾えタバコのままジークは妹の腹に手を回して持ちあげ、ベッドに戻した。するとバサバサと垂れた女の髪の毛の隙間から、唸り声上がる。

彼は妹を下ろした側に腰かけ、親が子を寝かしつけるように、一定のリズムで背中を叩いてやる。

だが途中でK・O. を知らせるアウラの手が、兄の腕を掴んだ。

「ヤメ……ヤメテ……」

「お前が本当に小さかった時、俺があやすと秒速で寝てたんだぞ」

「オ……オボエテナイ……ヨケイネムレナイ……」

「でも、俺は覚えてるよ」

妹は最初発達が遅く、言葉や歩くなどのことができず、ハイハイくらいしかできなかった。

手のかかる妹ではあったが、その分愛おしきは大きかった。

「なあアウラ、お前は赤ちゃん欲しいか？」

「……………ふえ？」

「産みたいかって、話だ」

「……………え？え、えっ——え!!？」

これ以上なく顔を真っ赤にさせ、汗を垂らしながら瞳をぐるぐると回す妹。

自分からすまき状態にした拘束を解こうとして失敗する妹の姿を見つめながら、ジークは耳を掻いた。

子孫を残す運命を課せられていたために、子ども云々に関しては嫌悪感すら抱いているかもしれないと考えていたが、それは兄の思い込みに過ぎなかったのだろうか。

嫌ならば、ライナーの返事と同様にキツパリと答えるはずだ。

「ライナーは望み薄だとしても、いずれお前にも好きな人ができて、結婚するかもしれない。俺としては……できるだけ早く、お前に幸せになつてほしいんだ」

「……………ああ」

「俺の任期はあと五年もない。純粹に、心配なんだよ」

「……………うん」

先程の慌てようは形を潜め、丸まった体勢でアウラは暗闇の中を見つめる。

細まった白銅色の瞳はいつたい、何を考えているのか。

無骨な手は、落ちかけた灰をガラスの皿に押しつける。闇世の中で、紫煙が空中へと溶け込んだ。

「エレンは、あと八年だよ」

「……………そうか」

「お兄さまは知らないでしょ。私が本に、入り浸っている理由を」

「まさか…始祖ユミルの呪縛か？」

「死んだら死ぬから。私は死ぬから。お兄さまが、死んだら」

「それは、ダメだ。……………絶対に」

「どうせ、私の気持ちをわかつて、言ってるんでしょ」

兄が好きで、好きで仕方なく、そのためなら異常な行動を平然と取れてしまうアウラ・イエーガー。

そんな妹が兄が死んでしまえばどのような行動を取るか、その愛を向けられているジークなら分かる。そもそも一度、アウラは兄のために「楽園送り」を選んだのだから。「今生きていることがどれほど「私」にとって苦痛なのか、お兄さまは知らない」

「…アウラ」

「何度、何度終わりを望んだことか、お兄さまは知らない。「楽園送り」にされて終わると思つたら生きて、お父さまがいてカルラママがいてエレンくんがいて私がいて……でも違うの。私の居場所はそこじゃないの。私は…、私はお兄さまがいる世界じゃないとダメなの。お兄さまがいない世界なんて、それは、だって……生きてたつてどうしようもない」

「そんなこと、言うな」

「『普通』に「生」きられない私の苦悩なんて、誰もわからない。誰も私を理解できない。私も私をわからない。私は何なのかもわからない。どうして私は生きていて私が生きなくちゃいけない私が存在しているのかわからない」

アウラは歯を噛みしめ、瞳から涙を流しながらシーツを濡らす。

その瞳は、瞳孔の中から外に向けて薄い青から紫へとグラデーションを彩り、その中

には無数の煌めきがばら撒かれている。

明らかにおかしい様子の妹ヘジークが伸ばした手。それが触れかけた時、アウラは弾かれるようにして避け、ベッド傍の壁にぶつかった。

兄が呆然とする中、瞳を丸くした彼女はかすかに息を荒くさせ、その手を凝視している。

「…大丈夫か？」

「うう」

「……アウラ？」

「う、うー……………」

「おおつと…？」

コレは——アレだ。察した兄。

瞬間、ギャン泣き幼女を彷彿とさせる号泣のアウラ・イエーガーが爆誕した。

それを宥めすかして、どうにか会話できるにまで戻すのに小一時間。

疲労の色を覗かずジークがギャン泣き妹に尋ねれば、どうやら兄を拒絶するような態度を自分が取ってしまったことに対し、ショックを受けたようである。ついで必死に謝

るアウラに、ジークは頭を痛めた。どれだけ兄のことが好きなのだ。嬉しいが。

避けた理由については、本能的に何かまずい——と、察知したかららしい。

「何がまずかったんだ？」

「ナニがまずかったのかもしれない……」

「？」

「あ、違う、アウラちゃんは凸のなにかわゆい美女だった……」

「……………大丈夫か、本当に？」

突然ライナーの従妹のようになった妹に、ジークは「ボブ訝」になる。完全に動転した拳句の美女のシモ話は、鈍感系ヒロインの器を發揮した兄により流された。

不思議な色に変わったアウラの瞳に気がかりはあるものの、一先ず妹をあやしたこと
で一氣に疲れと眠気が襲った兄は、タバコを灰皿に押しつけ部屋を後にしようとする。

しかしそれを阻止したのは、彼の腕を掴んだ妹の手。

「お兄ちゃん」

「目をウルウルさせても、流石には寝ないからな」

「おにいちゃん……」

「ダメダメ、早く寝ろ」

「ジーク……おにーたん」

「ぐっ……………」

兄は敗北した。

妹という名のあざとさの暴力に、戦士長たる男は即墮ちニコマのごとく陥落してしまつた。

すまきになっていた妹の毛布を掴みベッドの上で転がし、取れた毛布を片手に横になるジーク。男の体格でも余裕のあるシングルベッドは、流石に二人では狭い。

転がされた拍子に壁にぶつかつたアウラは、兄の腹筋に吸い寄せられるように腹に手を回して、がっしり抱きついた。

「筋肉しゅごい……」

「鍛えてるからな、当然だけど」

「……………」

「コラ」

無言で胸筋に触れようとした妹の手を掴み、横向きになつたジークはアウラの頭を撫で、寝かしつける。

すると兄がいる安心感からか、ゆっくりとその瞼が落ちて行った。

全くもって、手のかかる妹である。

「なあ後で、色々お兄ちゃんと話し合おうか」

「うん……？」

「お前が死んだら俺は悲しいし、エレンも悲しむよ。爺ちゃんや婆ちゃんだつて」

「……………う、ん」

「幸せになつてくれよ、俺の分まで」

「……………幸せは、ここにあるのに」

「お兄ちゃん俺以外の幸せだつて、きっとある」

「……………」

——「幸せ」って、なに。

そう言ったのち、小さな寢息を立て始めた妹の言葉に、ジークは答えを返すことができなかつた。

妹が生きていたことよって、腹の底に少しずつ溜まっていく温かい感覚。

上がった溜飲を無理やり飲み込んで、窓越しの夜空に目を向ける。

今の彼には多くの人間を犠牲にする赤いスイッチを押す勇気があるのかどうか、わからない。

テーブルの上に置いてある恩人のメガネを視界に入れたジークは、深い息を吐き瞳を閉じた。

妹の体温は、昔よりも生ぬるく。

でもそれはきつと、いのちの温度に他ならなかった。

お前なんか、お前なんか。

一面の砂と、光の柱の世界。

兄の自室で一人、眠りについていたはずの女は、体を覆っていた布団の感触が無くなり身じろぐ。

夢うつつに兄の姿を求めて伸びた手が、あたりの砂を叩いていると、柔らかい感触に触れる。そこでようやく、アウラは目を開けた。

「……やつほ」

手が乗った場所は少女の太ももの上。顔を上げればそこには、膝を曲げて覗き込む少女の顔がある。

不自然に目を隠す影は相変わらず。影の下で、蒼い瞳はうす暗いオーバーレイを加えていた。

アウラは転がりながら少女の許可も無しに、膝の上に頭を乗せた。

その圧力に少女の姿勢は崩れ、尻餅をつく。太々しい女の態度に、しかし少女は嫌な顔一つせず、女の髪を手で梳き始めた。

ショートボブほどだった髪は、ミディアムにまで伸びた。色素の濃い髪は細く滑らかなで、少女の指に引っかかることはない。

「お兄さまが戦場に出て寂しい……って思ってたから、出てきてくれたの？」

『』

「ん？寝てたら突然、巨人の発注がたくさん来たんだって？」

パクパクと動く少女の口元。無表情なその顔はもはやデフォルトであるが、今日は微かに眉間に皺が寄っている。

「いったい誰が少女に重労働を強いたのだ——と考えたアウラは、口を噤む。

一人、思い当たる節のある男がいる。とか実の兄だった。

自分の脊髄液を仕込んだエルディア人を「叫ぶ」ことで巨人にしてしまう、ヒゲ面のオッサンである。

「何でさ……………」

『？』

「何で私を呼んでくれなかったのさ！お兄さまこねこね♡したい、って前に言ったのにッ!!この裏切りものがア……………!!!」

『……………』

少女は巨人を一体生産するだけでもどれほど大変か説明すれども、アウラは嘆き悲しむばかり。

「ヒンツ!!」と声を上げる女は、どこそのアイヌの少女を想起させるシワクチャ電気ねずみの顔に変化した。これでは美しい容貌も台無しだ。否、ブラコン変態野郎な時点で全てが台無しだった。

「まあいいよ。許してあげる」

『』

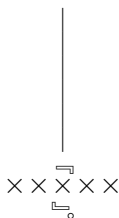
「ふふ……嬉しそうに笑うあなたは、やっぱり太陽みたいね」

『?』

「こんな夜空しかない世界は、ユミルには似合わない。キミの瞳は空そのもので、髪は白日さまなんだから」

『……?』

「ねえ、ユミル。……ユミル・フリッツ」



名前のようなものをアウラが口にした瞬間、少女の、ユミルの手が止まる。彼女の指に絡まっていた髪が落ち、女の口元にかかった。

長い、長い沈黙。

普段は穏やかな空間が流れる二人の間には、シャボンの膜のように薄く、けれど頑丈な壁が立ちほだかっているようだ。

アウラは今その壁に体をスキマなく密着させて、少女へと距離を詰めようとしている。

「やっぱりその反応じゃ、ユミルが見せた夢じゃなかったんだね。私が………思い出しちゃったのか」

『………』

「いいんだ、暗い顔しないで。あなただけは、苦しむ顔を見たくない」

だが、アウラとしては、切り出さないわけにはいかない。

思い出してしまった以上、生じる疑問を少しでも払拭しなければならぬ。

そうしなければ彼女は「今」をのうのうと、生きることができないから。

「どうしてあなたが暗い水の底に沈む前の記憶を見せなかったのか、今考えると疑問に思うところはあったのよね。でもユミルが見せなくなかった部分なんですよ? 『××』と

××××

の部分は」

『……………』

「なら、あなたが「見せたくない」と判断したのだから、私は口を挟まない。あなたの思考全てを私は肯定する。否定なんてしない、するものか」

『……………』

「ハア………この通り、自分でも嫌になっちゃう前世の私を思い出しても、アウラちゃんユミルのことを嫌いになれないのだから、相当好きなんですよ。というか好きだ、好き。大好きだ」

どのカテゴリーに入る“好き”なのかは、アウラ自身にもわからない。

どれにも当てはまる気がするし、どれにも当てはまらない気もする。厄介な感情であることに変わりはない。

だがしかし、「愛」にまでは及ばない。

“今”のアウラ・イエーガーを構成するのは、ジーク・イエーガーだ。

彼女が世界で「愛」する、ただ一人のお兄さま。

「思い返すと、私がヒストリアをウドガルド城で助けたのも、無意識に彼女をユミルと重ねていたからだと思うの。肝心の「私」の意識はぶつ飛んでいて、その時のことはほぼ

覚えていないんだけれど」

『……………』

「私はどうにも『血』というものに固執している。それも王家の血にだ。執着の理由は、ユミルの血が流れているから。特にあなたと似ているほど、私の本能が……いえ、『××』の本能が歓喜する。あなたの体内に今でも還りたいのかもしれない。あなたの血となり肉となり、細胞を構成する物質となつてユミルの中に回帰する。私がお兄さまに食われたいと思うのもそこにある」

『××』兄に曇^{フオ}ーリンラブした理由も、ユミルの血が関係するのだろう。

『××』がユミルと一卵性双生児であり、『同じ』存在にクソデカ感情カム着火ファイヤーしていたことを踏まえて、今のアウラと最も『同じ』存在が、ジークであるのだ。

もちろん遺伝子の一致率は、兄弟姉妹で必ず一致するわけではない。要は確率の問題だ。精子と卵子もその時々によって持つDNAは異なる。

父親50%、母親50%として、その二つが♂^合♀^体したのち生じる確率は、 $50\% \times 50\%$ で25%。ゆえに4分の1。

その25%の確率を、アウラは引いたのだ。

「私」はジーク・イエーガーの涙から始まった。妹を心配するお兄さまの姿は、人類が

危機に瀕した時に現れる神そのものよ」

『…………』

「その「…………」だけちよつと意味が違うでしょ、ユミルちゃん」

『…………』

「それに、その血以上に愛してしまっている。家族愛を、友愛を、恋愛を、全てごつた返しにした「狂愛」を抱いてしまっている。実の兄によ？本当にアウラちゃんたら、罪深い美女なんだから」

両手の先を頬に当て、うつとりと微笑むアウラ。

彼女は、そもそも、と続ける。

「重度の発達障害だった私が、急に確立した自我を手に入れたのもおかしいの」

アウラは一度高熱を出し、この世界に「I（私）^{アイ}」がいることを自覚し、そして彼女の全てになる兄を認識した。

それは、本当はもしかしたらジークが妹のために涙を流したから、アウラは自分という存在を認識したのかもしれないし、純粹に彼女が自分を認識した時、偶然目の前にジークがいただけなのかもしれない。

答えはわからない。

それは今のアウラが『××』の延長線上にある人格なのか、それとも生まれてから存在する「私」の人格なのか××についても。

だがうつすらと彼女は、ユミルが関係しているのではないかと感じている。

「もしかしたらユミルが幼い私に接触したから、その勢いで「私」が一気に目覚めたんじゃないか………っていう憶測もあつてね」

少女はその言葉に、首を小さく縦に振る。

「……え、本当に?」

『(うなずき)』

ユミルが「アウラ」を認識した時×

王家の子孫であり、あまりにも『××』と似ている幼子。その子どもを観察し、その精神を覗こうとして——。

結果、アウラ・イエーガーは『××』の部分が目覚め(元々前世である『××』の部分に曇らせという名の厄災をもたらさず、害悪女が。

「何で『××』が生まれ変わって今の私になったのかとか、疑問はある。でも生まれましてしまった以上は、生きなければならぬ」

『……………』

「私が……アウラ・イエーガーが結局何者なのか、よくわかんなくなっちゃったな。まあ、ジークお兄さまがいればそれでいいわ。それだけでいい、全て」

人の膝に頭を乗せたまま大の字になった女は、目を閉じて深い息を吐く。瞼を開けると見えるのは、ユミルの顔と肩元でしなだれかかった金髪。

ユミルの瞼は落ち、口はキュツと結ばれている。

少女がどういった感情を今その胸に内包しているのか、アウラは考えようとして、やめる。

どうせ、わからないから——と。

「キミは『××』のことが嫌いで、『××』はキミのことが好きだった。「愛」していた。

——ははあ、あんなイかれた奴を好きになれ、つて言う方が難しいよね。ユミルちゃんをよく耐えたと思うよ。

別にいいんだ。別にキミが『××』のことを嫌いでも。

×× ×× ×× ××

キミが本当は豚を逃していたことも、何か理由があるのだ~~×~~うから構わない。

それで二人で逃避行に洒落込んだことも、キミを助けて『~~×~~』が死んだことも別に構わない。

ユミルのために死ねてむしろ本望だったろうから。あなたの一部になれなかったことだけは、最後まで心残りだったろうけど。

逃げて、振り返らなかつたのも……まあ、~~×~~種をばらまくことしか脳のなさそうなあのドグサレクソ王に追放を言い渡された時、『~~×~~』が笑つてたものだから、ユミルが気味悪く思つても仕方なかつたんだよね。いや、~~×~~々々気持ち悪かつたよね、『私』。どうして生きてたんだらうね、本当。母親の胎の中で別れなければよかつたのに。そのまま生まれてこなければよかつたのに、私。

でも、色々思つちやうけどさ……ユミル」

——
見てくれるだけで、よかつたの。

そうすれば『~~×~~』は、形容できないほどの深淵の感情を抱くこともなく、安らかに死んだ。
~~×~~ ~~×~~ ~~×~~ ~~×~~

そうすれば人の不幸を心から喜ぶ今のアウラはきつと、生まれなかった。

この世に、産まれずに済んだ。

「生」きずに、済んだ。

「かえりたい」

『』

「おかしいよね。ずっと、心のどこかでは思っているの。「かえりたい」って。でもそれはユミルの中じゃない。違うの。かえりたいの、何もない場所に。『無』へと、かえりたい」

『』

「私はずっと、「死」を望む生き物なのよ。——お兄さまに欲情して、人の不幸を啜って「生」きて、そして最初から「死」にたい」

『』

「はは、ずっと私の名前呼んでるね。そうだね、私はアウラ、アウラちゃん。わかってるよ、どうして呼ぶの?」

『!!』

「イヤだな。人が苦しんでも、お兄さまを苦しめても、ユミルちゃんのことだけは苦しめ

「たくないつて思っちゃうんだから、疲れてるのかな」

『……………』
 「……………死なないよ。そんな、泣きそうな顔しないでよ」

『……………』
 「ねえ、ユミル。……………どうしてキミは、私のことが好きなの？私の何がいいつていうの？嫌いだつたのに。嫌いだつた、クセミ。今更「好き」って示されてもさ、訳わかんないんだよ。どうせキミにとって私は『××』の代わりなんだ。それでいいけどね。うん。それがいい」

『……………』
 「泣きたいのは、こっちだよ」

顔を両手で覆ったアウラの口が、ギシリと軋む。肌と手の隙間からは雫が溢れ、頬骨を伝い耳の後ろへと流れた。

ユミルは力いっぱい抱きしめる。

女がこのまま、堕ちていかないように。

『……………』
 「行くなつて、どこに？」

『……………』

「どこにも、って……ワガママな子どもですか、ユミルちゃんは？まるでママに甘えるバブちゃんじゃん」

『』

「……………今「バブ」って言った？」

『』

「ば、「バブバブ」って言った!!」

▶？ユミルは【ボケ】をおぼえた！

「——いや、そういうことじゃないんだよ。今の流れはふざける所じゃないんだよ、ユミル」

『』

「失礼、噛みました」じゃない。絶対わざとだ」

『』

「拳をこめかみに当てて、舌を出して「噛みまみた！」でもなくて……って、——わ

ざとじゃない!？」

『』

「神ですよろしくおねがいします」……うん、わかったよ」

あわれ、普段は人を振り回す方なはずのアウラ・イエーガー。

精神的に疲れきつていながら、これも悪くないと思ってしまった。

伸ばされた女の両手は少女の頬へたどり着き、箸で餅でも摘むように、あつてないような肉を「ムニイ…」とつかむ。

無い肉なのでここは×「無肉…」でもいいかもしれない。

「キミは笑っていて。『××』のために。そうじゃないと、今のアウラちゃんの状態がガバガバのゆるゆるになっ××てしまうから」

『』

「そうそう……ははあ。キミを苦しめる存在は消してあげるから。きっとフリッツ王の「奴隷」の呪縛も、一人寂しくここにいるユミルちゃんのこと、救い出してあげるから」

『』

「だから、教えて欲しい。ユミルちゃんの目的は何？ 私はどうやったら、あなたを救える？ もし私と共にいることが救いになるというのなら、死んだ後に一緒に此処にいてもいいよ」

『』

「どうしたいの、キミは？ ユミルはあの時の——『×××』が手を引つ張つた時に感じた、無気力になったあなたじゃない。少なくとも、私を置いてでも生きようとする理由があったのだから。教えて。目的がないなんてこと、言わないでね」

ユミルは瞳を伏せ、ポツリと口を動かす。

三文字の紡がれたその動きに、白銅色の瞳は大きく見開かれ、口角が上がる。

やっぱりか、という気持ち^{イレギュラー}が女の中で巡つた。

「どうしてあの子に、価値を見出しているの？」

『』

「私と似ているから」……か」

“自由”を求めて、進み続ける少年。初めは壁の中に囚われた、巨人の家畜だった。

ユミルもまたそんな少年に自己を投影した。予想だに^{イレギュラー}しなかったアウラの発生により、少女が知り得ていたこの世界の流れは大きく変わってしまったものの。

ユミルも少年も、まるで家畜だった。

“自由”のない、家畜。

だからあの時——柵の中で寝転がるブタを見た時、少女の心は不意に大きく歪んで、その手を、動かしした。

「ほら……やつぱり、意味のないことをユミルはしない。それなら言ってくれば……ああ、でもキミも私も喋れなかったんだ。でも何か伝える手段があったのなら、奴隷も王も全員焼き殺してでも、“自由”にしてあげたのに。……………いやでも、そうなったらお兄さまが生まれないからナシだな」

『』
 「そんな辛そうに謝らないで……………興奮しちゃう。昂っちゃいけないってわかってるのに」

『……………』

ユミルは同時に少年を想う一人の少女についても、シンパシーを感じている。

世界を舞台にして、二人の少年と少女の「愛」の演目が開演されている。

進撃の果てに少年は何を得て、失うのか。そして少女はそんな少年を、どう想うのか

——と、まるであらずじでも語るようなユミルの内容を、アウラは聞く。

「あの子がお話の「主人公」で、そんな主人公を一途に想う少女が「ヒロイン」ってことか。…………ユミルは二人の結末を見届けたら、どうなるの？」

『』

「解放される？何から…………いや、それってまさか」

『』

「え、あのドグサレクソ……：……精力野郎のどこがいいの？ジークお兄さまの方が——いえ、それこそ比較することすらおこがましいくらいカッコいいのに??人類の宝なのに……??訳がわからないよ」

「落ち着け」という意味と、いくらアウラでも「あの人をバカにするな」という気持ちを込めて、ユミルは女の頬をつねった。

「というか言い直そうとして言い直せていない。」

対し「ドグサレクソ」と形容する男をユミルが好いていることを知ってしまったアウラは、今日一番の頭の痛みを覚えた。

「思えば彼女にもユミルの血が流れる反面、その男の血が薄くとも流れている。否、むしろ王家の血はその男の方がメインだ。」

「愛する兄にも流れていることを考えると……いや、逆に流れているにも関わらずあんな聖人が爆誕しているのだ。やはりジーク・イエーガーはすごい、と行き着くのが、安心と信頼の変態クオリティ。」

「ただ、ヒストリアやロッドのように好き嫌いが分かれやすいことから、彼女にとってユミルと「ドグサレクソ」の血を継ぐ王家の人間の存在は、中々複雑なものであることに変わりない。例外は兄一人である。」

「まあ、なるほどね。キミを王の呪縛から解放させるためにあの子と、彼女が必要ってことはわかったよ。それだけでも大きな収穫だ」

『』
「ん？……え？呪縛はもしかしたら大丈夫かもしれないの？じゃあ何でまだこの世界にいるの……？」

『』

「ああ、二人の行く末を見届けることはしたいのね。でも、また何で呪縛が……」
ユミルは人差し指で女の頬をつつく。

それにアウラは暫くぼんやりしながら眺め、突如瞳をかつ開いた。

まさか——いや、そのまさかか。

「わた、し？」

『』

「私がキミを好きだから、それで呪縛は解消されたかもしれないの……？」

『（に）ぱあ』

「……………今、可愛い、の感情が過剰生産されてトンデモねえや」

『××』が喜んでいいのか、それともアウラ自身が喜んでいいのか。

××正の感情に振り回されつつ、アウラは笑った。

『そっか……まあ、ユミルちゃんの進めたいように進めて。必要とあれば手伝うから』

「私のやりたいことを優先したいって？それはお兄さまの計画次第になるしな……多分、あの子を推すユミルちゃんと同じや道が違いかもしれないよ」

『……………』

「まだ、いいかな。お兄さまがやりたいことを知って、その上で私の方針が決まったら、その少年少女の結末ってのを教えてよ」

——その最後を見るころには私、多分死んでると思うから。

綺麗に笑う女の姿。

ユミルは唇を噛み、眠りに入ろうとするアウラの顔を見つめ、そして二人の影が重なり黒くなった地面に視線を移した。

深淵に潜むソイツは今もきつと、彼女を通して世界を見ているのだろう。

ユミルは、ソイツにだけは、アウラ・イエーガーを渡すわけにはいかなかった。
×××××
無数の『×××××』の死体が積み上がった世界の中で回る、その、悍ましい回遊魚に。

あっ!くまの子【表】

最近ではレベリオ区の病院で看護婦の真似事をしているのは私、アウラ・イエーガー。足がないアウラちゃんにはむしろ患者側だろ? と思ひもしますが、ご奉仕する側なので。

マーレが中東連合と濃厚なセツ……ン争をしているため、兵士たちが戦争から帰ってくる度に心的外傷で狂ったり、足や手を無くして苦しむエルディア人が増えている現状。

所詮は政府にとって、ユミルの民は捨てゴマでしかない。戦争帰りの負傷兵に優しく接するのは有意義な時間です。

ここで手伝うようになった経緯はというと、区の診療医でいらつしやるお祖父さま主に紹介されたからです。

ちなみにお祖父さまの中で私の設定は、
「楽園送り」から帰ってきた娘
——
という風になっている。

他の医者の方曰く、やはり無理に否定するとお祖父さまに過度の精神的ストレスが生

じて、より症状が悪化してしまう…とのことなので、お祖父さまに「フエイ」と言われれば、私は笑顔で「なあに、お父さん」と返すのです。その時のお祖母さまやお兄さまの表情といったら……ぐひひ。

幼い頃にお父さまのお手伝いをしていた時期もあり、多少は治療の心得がある。ジークお兄さまがいらないせいで精神的にも参っていた私にとって、多くの負傷兵が入院するこの場所はとても「生」を実感できる。

人心掌握に向いていることもあり、人を励ますのがうまいアウラちゃんです。

さすがに働かないですと読書に耽っているのは、イイ大人としてどうかというものの。

内心、お兄さまのお嫁さん気分で家事をこなすのも楽しかったですけれど。

それに兄の金を使うのも心苦しさがありましたし。だから自分のものは、なるべく最低限の日用品しか買わなかった。

お給料がもらえて、しかも人が発狂している姿やベッドの上で痛みにうめいている姿を見れる今のお仕事は、私の天職かもしれない。

日によってはそのまま病院に泊まり込むことも増えた。純白の看護服を着た私はさ

ぞ天使に見えることでしょう。

看護服は上はエプロンに近い形で、肩にかかる紐は背後でクロスして下の布地に繋がっている。下はロングスカートのようになっており、ウエストは腰の紐で調整して前の部分でリボン縛りにし、最後に布で頭をまとめれば、天使アウラ・イエーガーちゃんの完成だ。

この姿で苦しむ負傷兵の方たちに「ガンバレ♡ガンバレ♡」と応援してあげる。すると皆さんとても元気（意味深）になってしまいます。

善人プレイで微笑む私の評判は患者だけでなく、他の看護婦や医者からもよい。

私の場合足がないこともあるため、負傷兵の方はシンパシーを抱きやすかったりもする。

お祖父さまには、跡を継がないか？——という話も受けた。当のお祖父さまは医者ではなく、入院する側の患者なんですけれど。精神の方の。

一先ずお兄さまの「お話し合い」があるまでは待ちます。

先日はユミルちゃんも復活して、心的外傷を持つ患者と外のベンチで日に当たりながらお話していると、突然現れて人の側でウロウロすることが増えた。出歩くのはいいですが、くれぐれも他の人間に見えた：なんてことないようにして欲しい。

彼女が見えていたお父さまやフリーダの例を挙げると、もしかしたら巨人化能力者には見えるのかもしれない。

：いや、でもお兄さまがトム・クサヴァーとキャッチボールしている宗教画のようなシーンを見た時、トムさんに私の姿は見えていなかったようだから、結局彼女の匙加減なのだろう。

またユミル曰く、過去二回にわたって——ダイナ巨人に食われた時と、複数の巨人におどり食いされた時——捕食された中で、私を少々イジったことも告白している。

私が始祖の一部の力を使えるのも、これが原因なのでしよう。

別に承諾無しでイジったことは構いませんが、今度魔改造する時は私に一言断りを入れて欲しい。

ユミルちゃんとしては、私を守りたかったから——らしい。

まあ私のアグレッシブ自殺未遂の数々を思えば、彼女の行動も仕方ないのかもしれない。

ユミルの目的を知った今は、やはりエレンくん《始祖の巨人》を託した方が、彼女の目的はより円滑に、手がかからず進んだだろう。

それでもエレンに継承させなかったのは、私という目を離れたら「ヤベエ奴」がいたため。

そんな野犬状態のアウラちゃんをうまく繋いでおく手段として、始祖の力は有用だったのだろう。

それにユミル自身私の目的に協力的だ。こちらが動きやすいよう用意した意図もあつたのかも~~し~~れない。

過去の『~~X~~』の記憶を思い出して、もう全てがどうでもよい状態になった時もあった。しかしユミル~~X~~と対話し、一周回って清々しきさきさき感~~X~~している。

それは上手く、『~~X~~』と今の「私」^{アウラ}の線引きができたからに違いない。
~~X~~ ~~X~~

「今日も、空は青いねえ」

屋上で洗濯したシーツやタオルなどを干し終え、汗を拭う。

雲一つない快晴日和。地上では今この瞬間も人の血で大地が穢れているというのに、憎々しいほど青い。そんな不可侵な空が、私は好きだ。

不自由な体なもの、調査兵団で長年働いていたこともあり、バランス感覚はある。立体機動装置を扱う以上、空中に晒す我が身をコントロールする必要がある。

その経験が、一本足で立つても余程のことがないかぎり不動のバランスを保つ所以です。

『 』

ひと息吐いたこちらを見つめる透けた少女は、空になったカゴを掴もうとして失敗する。

無表情ながら、ムスツ……とした雰囲気を漂わせた彼女ははたたくシーツの裏に隠れ、時折首を伸ばして私を見ては、視線が合うと顔を引つ込める。

ご覧ください、この愛らしい生き物を。

彼女の実年齢を考えると、亡くなった時点ですでに成人していたはず。『奴隷』であるがゆえに切れたままの舌のように、その見た目が子どもなものも彼女の精神が影響しているのだと思う。

死んだ後も考えたら千は優に超えているユミル・フリッツが幼い少女——あ、今日目が合った。

こちらの考えがバレたのか、頬を膨らます。あざといな？

というか、フリッツ王の呪縛が解かれているなら、ユミルちゃんも別に奴隷でいる必要はないんじゃないか？ いやでも彼女が巨人を作らなかつたら、巨人が生成されないのか。

そうしたら戦争中のお兄さまが巨人化できなくて、もし敵国に殺されてしまったら……私はいかれてしまう。いや、すでにいかれていた。

王への「愛」という名の呪縛は、まだ完全には解けきつていないと考えるのが妥当か。ユミルが抱くアウラ・イエーガーへの愛と、王へ抱く「愛」の種類は違う。

対し私はすべて混ぜ合わせた「狂愛」だ。

大変遺憾ではございますが、ジーク・イエーガーもあの子種王の血を引いている事実を踏まえ、「ユミル↓フリッツ王」と「私↓お兄さま」の構図は似ているのかもしれない。それを言ったら、ユミルが推している「ミカサ↓(↑) エレン」も似た図だ。

ともかくにも、私の進むのはジークお兄さまのお話を聞いてから。

そう思いカゴを横に挟むように抱えて、壁に立てかけておいた松葉杖を掴み歩き出す。

その途中風に吹かれて、まるで雲の代わりに空へ飛んで行きそうな白い戯れの隙間の中、屋上のベンチに腰かけている人間が見えた。見かけたことのない患者だ。最近入院

したばかりなのだろうか。

ここは心的外傷を持つ患者が多いため、屋上の柵は乗り越えられないよう高くできている。

ただ病人の療養として外の空気を吸わすことや、洗濯物を干すことなどに使うため封鎖はされておらず、誰でも立ち入ることができる。

その人物は頭をケガしているようで、おでこや片目を隠すように包帯が巻かれていた。

長身瘦躯の人物。下は普通のもので、上は白いシャツの上に些か大きめな黒いジャケットを羽織っている。黒く長い髪はボサついでいて、顔を覆うように前髪が降りている。顎ひげは少し、フラットな小顔のその顔には不釣り合いな気がした。

一応看護婦もどきとして、挨拶くらいはしませんと。

屋上へ続く扉は開けっぱなしにしていたので、私が干している間に入ってきたのだろう。

近づいて「こんにちは」と微笑みながら声をかけると、干された洗濯物を眺めていた人物がこちらに気づく。

髪と同じ真っ黒な——深淵のごとき瞳が片方、ギョロリ、と動く。

大丈夫だろうか、瞳に全く光がない。レイプ目ってヤツだ。

「……………こんにちは」

躊躇いがちに、そう呟いた目の前の人間。

高くも低くもない中性的な声のその人は、「ヘレン」と名乗った。

「わたしはアウラ・イエーガーです。最近ここでお手伝いさせてもらっている……看護婦見習い、みたいなものです」

「イエーガーさん、ですか」

レイプ目さんは戦争でケガをして、銃弾が頭に当たってしまったらしい。奇跡的に助かったものの精神的に参ってしまい、負傷兵の心のケアも請け負っているここに入院することになったそうだ。包帯については頭のケガを隠すものとのこと。

まだここに来たばかりな上、精神的に心がびよんびよんしている他の患者に気後れして、静かな場所を求めてヘレンさんは屋上にたどり着いたという。

少しお話ししたいようなので営業スマイルで頷き、相手の隣に腰かけた。

色々私の右足の件などを持ち出し、「イエーガーさんも大変だったんですね」と話すレイプ目さん。

この欠損はお兄さまからいただいた愛おいしいキズです。むしろお兄さまをたつた足

一本の犠牲だけで、グチャグチャにできてしまったのが怖いくらいです。
「大丈夫ですか？上の空ですが」

「……あ、いえ、少し考え事をしてました」
いけません、気を引き締めないと。みつともない顔にならないように。

それから、当たり障りのないことを話した。

戦争で多くのエルディア兵士が犠牲になっている——とか、マーレが滅ぼした国の人間が兵士として使われている——とか。

この世をどう思うか、と尋ねるヘレンさんは平和主義者なのかもしれない。

この世がどれだけ歪んでいようと、私にはどうでもいい。

けれど口では「残酷」を呟く。

その事実だけは、覆しようのない事実であるから。

「すみません……こんな話をして」

「いえ、いいんですよ。ヘレンさんもさぞお辛かったですよね……ふふ、何だか弟の名前に似ていて、親近感が湧いてしまいますわ」

「弟ですか？」

「ええ、エレン、って言うんです。……ああでもこれ、内緒にしてくださいね？」

「エレン、ですか」

「かわいい弟ですよ。かわいくて、愛らしい弟」

大きな瞳を見開かせて、翡翠の中を負の感情で満たすその姿を愛らしいと言わずして、なんというのでしょうか。

翅をもいだ蝶が地面で体をくねらせて必死に空へ戻ろうとしているように、あがいてあがいて、懸命に生きようとする少年の姿は本当に、私に「生」を実感させてくれる。

弟が苦しめば苦しむほど、私は幸せになってしまう。なんとひどい姉なのでしょう。でも仕方ないですね。私の弟として、生まれてしまったのだから。逃れられない。逃す気もない。

まるでそれは巢の中にかかったエモノを、わざわざ逃す捕食者クモなどいないように。

「イエーガーさんはもしかして、戦士隊のジーク・イエーガーの関係者ですか？同じ「イエーガー」姓で、腕章も赤なので」

「妻です」

「……………えっ？」

「ふふ、冗談ですよ。妹です」

そんなに驚くことはないだろう。たしかに傾国の美貌を持つアウラちゃんでもジーク

クお兄さまと釣り合いませんが、夢を見るくらいよいでしょう。

そのまま話はお兄さまへと変遷し、ヘレンさんは興味深そうに内容を聞く。

私のノロケ話を真面目に聞く人なんて早々いないぞ。比較対象がアニ・レオンハート
しかないですけど。

私のお兄さまラブ♡を肯定的に、頷いて聞いてくれるレイプ目さんに私の言葉も「兄」
から「お兄さま」呼びに変わった。

「やっぱりこの世にはジーク教が必要なんです」

「えっと……猫舌の話からだいぶ飛びましたね」

「お兄さまの素晴らしさをこの世に知らしめることこそ、わたしの役目なんです」

「……いいと、思いますよ」

両手を握り合わせてうっとりする私に、向こうは若干面白くない顔をした。ジーク教
を否定するなら殲滅します。残らず全員。

「本当に兄君がお好きなのですね」

「はい。わたしの全てですから」

「イエーガーさんの全て……ですか」

「ええ、兄のためなら「私」は悪魔にもなれます」

「そうですか……」

そろそろ他の仕事もあるので——と切り出して、席を立つ。レイプ目さんに背を向けて、松葉杖を取り地面に置いていたカゴを拾おうと腰を曲げた。

伸ばした手の先で、ずっとレイプ目さんを無表情に見ていたユミルが、私の背後を凝視していた。

隙を見せた美女ちゃんに発情してしまったのでしようね。

「な——ッ!!」

一瞬肌をざわりと立てるような殺気を感じた直後、拾ったカゴを相手の顔面に向けて叩きつける。

相手が怯んだ隙に懐から取り出したらしいナイフを松葉杖ではたき落として、加減なしにそのまま杖の軌道を戻し、相手の横腹に当てた。

痛みにもうめいたレイプ目さんは腹を手で押さえ、ベンチになだれ込むように倒れる。

その間人が来て見つかったら面倒になるナイフを拾い、自身の懐に入れた。

「甘く見ないでほしいな。これでも私、超絶ハードな兵士ライフを何年も送ってたんだ

から」

「う、っ……………気づいて、たのか」

「胡散臭いヒゲは取つたら？ 長身で気づきにくいし、ゆとりのある服でうまく骨格を隠しているようだけど、あなた女性でしょう」

「……………驚きました。そこにも、気づかれましたか」

多分、今日イチニツコリ笑っている私。表情筋が一周回ってイキイキしている。

初めは男性と思っていた。けれどお兄さまの件を話した時に、わかった。彼女のレイプ目の奥で、男女間におけるドロドロとしたソレが覗くのを。

「うふふ、ふふ……………メスの目だったわよ、あなた」

たった一瞬の、その感情を私が見逃すわけがない。

お兄さまに私以外の人間が「愛」を向けている。本当なら許さないといけないことだとわかってはいますが、私の支配欲が中々、それを許してくださいさらないのです。

ちなみに盗聴については問題ない。ここは軍事関係のない普通の病院であるから。

「初めは政府の人間かと思つたけれど……………どういつた関係の方かしら？」

ユミルちゃんの番犬ガオガオ（しかし無表情である）の反応を抜きにして、この人間、

初めから私を見る目が冷たかった。美女だから嫉妬しているわけではないでしょう。顔については向こうもイイ。

私に悪感情を抱く政府の人間とも考えましたが、まさかマーレ人が腕章を付けるなんてこと、絶対にするわけがない。

忌まわしく思っている、悪魔の民であることを示す証を。

ゆえに別の線を考えて。一応エルディア人であるかこつそり力を使って探ってみれども、リンクしない。

ここに潜入できるだけのバックがあるのは確かで、同時にレイプ目にはそれを可能とする潜入スキルもある。また、腕章を付けることに臆さない精神も。

さらに言えば名前の件だ。偽名を使うにしてもあからさま過ぎる。弟と似た名前を出して私の心につけ込みやすいようにするための方法かもしれないが。

しかし今の嬉しそうな——安堵を浮かべる彼女の表情や、お兄さまの件を聞いていた部分に違和感を感じるところからして、政府の人間でないことは間違いなさそうだった。

「試すようなマネをして申し訳ありません、アウラ」

「急に呼び捨てになるのね…」

「嫌でしたら先ほどの呼び方に戻しましょうか？」

「いえ、いいわ。「ちゃん」をつけるなら」

「わかりました、アウラちゃん」

「……………ほ、本当に「ちゃん」をつけちゃうの？」

彼女の本当の名前は「イエレナ」と言うらしい。

受けた説明を端的にすると、彼女はマーレに滅ぼされた国の人間で、兵士として戦争に駆り出された時にたまたまお兄さまに助けてもらった、と。

以来彼女はジーク・イエーガーを信奉し、“協力者”として暗躍しているようだ。

その肝心の「計画」の部分は話してもらえなかった。

それで、人を殺すようなマネをしたのは、お兄さまから聞いていた私の実力が本物かどうかを知りたかったから——らしい。知ってどうするのかとも思いましたが、お兄さまの「計画」に私を使う上で、信頼に足りる人格や力があるか否かを確かめたい節があったそうだ。

「お兄さまが私を協力者にする、って言ったの？」

「いえ、まだ言っておりません。ですがジークはあなたと話をすると言っていたので、その時にきつと話すでしょう」

「ふーん……その計画の部分は、話してくれないのね」

「それは兄君から聞いた方がよいでしょう」

「……………それもそっか」

イエレナはどうにも最近「計画」に対し、足取りが重くなつたジーク・イエーガーを説得してもらいたいようだ。その原因は、おそろく私にあると。

「あなたとお話しして、確信できました。兄君を愛するあなたは、ジークの計画を否定することはできない。むしろその力になろうとしてみてください」

「だから私のお兄さま談義に付き合ってくれたのね、イエレナは」

「はい。特にジーク教の部分は素晴らしかったと思います。……ただ」

「ただ？」

「創始者には、私になりたいです」

深淵たる瞳をこちらに向けて、猛烈にお兄さまへの信奉心をアピールしてくるイエレナ。その座は渡さない。というか何でノリ気なんだよ。アニは死んだ魚の目で聞いていた話を。

「イエレナはじゃあ、今ここにいるのはお兄さまに頼まれて……ってわけじゃなさそうね」
「今回は私の独断です。私とあなたが会うことは、ジークは否定的だったので」

「まあお互い話して、あまり相性が良くないのはわかったでしょう？ お兄さまもそれに勤づいていたのよ」

「そうですか？ 私は気が合うと思いますが」

と、言う彼女の目は笑っていない。信奉うんぬんの話は本当でしょう。ですが彼女からはメスの匂いがする。

まるでミケ・ザカリアスのような発言で大変遺憾ですが、この女絶対にお兄さまに信仰心以上の感情を持っている。

「私の頼みは、ジークの後押しをしていただきたい。それが彼自身のためになり、ひいては“人類のため”になる」

「…人類のため？」

「彼の計画は壮大なものです。そのために長年ジークは計画を進めてきた」

「お兄さまが、長年…」

「そうです。その根幹には「楽園送り」となった妹への、贖罪に似た気持ちもあつたことでしょう」

「……………」

「それを噛み砕くと、計画自体、あなたのためのものである——と、言っても過言ではない」

腹を押さえながら立ち上がり、こちらに近づくとイエレナ。

お兄さまが、私のために。お兄さまが私のために？それが本当なら、耳が孕むほど甘美な響きで。お兄さまがいないのにうっかり絶頂してしまう。

「……わかりました。肯定的に考えておきます」

「そうしてくださると私としても助かります。ここまで来たジークの歩みを、無下にしたりはありせんから」

「……ええ、お兄さまが望むなら……ジーク・イエーガーが自分で選択した道なら、私は全力で、私の命をかけてその手助けになるよう尽力します」

「そうです——」

「それがお兄さまの、望みなら」

「……？」

首を傾げる目の前の、女。アウラちゃんやジーク・イエーガーに全てを捧げていて、お兄さまのためなら死ぬ。その望みが世界の滅亡なら、今イエレナの横で無表情に彼女を見つめている少女に、この世をキレイにしてもらうようお願いする。

でも、それ以外の誰かに動かされることは——ましてや利用されることは、心底吐き気がする。

そしてそれ以上に、私だけでなくお兄さままでもその手が触れているように感じられて……目の前の人間の絶叫を聞いて「生」の精算をとつてもお釣りにならないほど、はらわたが煮えくりかえっている。

「イエレナはお兄さまの良き理解者なのね、うらやましいな」

「……まあ、私もあなたが羨ましく思うところがありますよ」

「そう?……わたしなんかは、肯定することしかできないから」

「それがあなたの良さなのではないですか?」

「いえ、『本当の理解者』というものは、肯定だけでなく否定もできるものよ。イエレナはきつと、必要とあらばお兄さまを否定することもできるのでしようね……」

「そうですね。……私とジークで、意見が食い違うこともありますよ」

「……イエレナちゃん、お兄さまのことお願いね。今のわたしより、あなたの方ができることは圧倒的に多いから」

「元よりそのつもりです、ご安心を」

こちらが差し出した手をジツと見つめ、彼女は微笑み握った。冷たい手だ。私の温度を侵食して奪うかのように。

彼女がお兄さまに触れたら、その熱が奪われてしまう。

ボキリと、なった音。

漏れた悲鳴。噛み殺した口の中から聞こえる呼吸音。ヒユウ、とか細い息。冷たい手の温度。

歪む真つ黒な目に、にじむ涙。

その中に映る私の、トけた顔。

悲鳴を聞いて、ネジが外れているドロドロとした顔。

「お前の望みを叶えることはない、「私」は」

お兄さま以外の望みを聞き入れるわけがない。ユミルは例外として。

そもそも、そもそも話。

お兄さまの計画に私が相応しい、などとほざいていたその口。

その口がある体から感じられた一瞬の“殺気”は、どう説明してくれるのか。

お兄さまに愛されている私に嫉妬したのだろうか？イエレナは。

——否、違う。「愛」というものはもつと狂氣的でエクスタシーにまみれた享樂なんだ。殺すならもつともつと、殺気を垂れ流しにして、憎愛に満ち満ちているべきであつて、刺し殺すならもつともつと痛めつけてやらないと、それは「愛」の証明にならなくて——。

しかしイエレナは、殺意を一瞬だけみせた。それは逆に言うと、一度出したものを引つ込めたということ。

こちらに、バレないように。

そして私を狙つた部分は首元。背後から頸動脈を狙う気だつたのだろう。

その後の処理はどうするのかとも思ったが、きつと適当な人物に濡れ衣を着せてしまふのだろう。ここには気の狂つたエルディア人がいくらでもいるから。

兄にも適当な理由をつけて話す。

死んだ私をどう思つてくださるかとも知りたくはあるけれど、彼女に殺されて終わる結末を享受する気は毛頭ない。

この場合悲劇のヒロインぶるのは私ではなく彼女。それもお兄さまにヒロインぶる。そんなの許せるわけがないでしょう。

この女にだけは絶対お兄さまを、穢させるわけにはいかない。

「あはっ♡」

「……ア、ツ……!!」

「ジーク・イエーガーをいつぺんたりとも穢してみろ、殺す。殺す、殺す。お前をお前が一番屈辱に思う方法でお前を殺してお前を殺す、絶対に殺す、殺す」

どこまで複雑に折れたかはわからない女の手を離して、真つ白くなつた己の手を見た。歪に力をかけたせいで自分の手にもひどい痛みが走る。

こちらを親の仇と言わんばかりに折れた手をかばいながら、イエレナは私を見る。

アウラちゃんの地雷を踏みぬいて、そのまま突き進もうとした彼女が悪い。むしろ今殺さないことを感謝してほしい。

「あなたのお願いは呑むよ。ただお兄さまにその計画を実行する意思がないのなら、無理に進めることはない」

「………気狂いッ、め……!!」

「あら、お兄さまから聞いていたのでしょう？ 私が兄のために壁内を裏切つた人間だつて」

「聞いて、いたが………!」

「実際に体験してみるのとじゃ違うでしょうね。ああどうぞ、このことはお兄さまに言っていていいわよ。私もあなたがジーク・イエーガーの妹を殺そうとしたことを言うから」

「……………」

「不思議そうな顔ね。今とても殺したいあなたを殺さないのは、ジークお兄さまがあなたを仲間として使っているからよ。無論、ここまで踏み込んであるあなたにも相応の目的があるのでしょね。しかしそれを尊重する理由が全く私にはない。というかどうかでもない。兄以外全て、この世界がどうなるうと」

「…………ハハツ、イかれていますね、あなた」

「ええ、知っているわ、私は私がイかれていることを自覚した上でイかれている、厄介な人間で、そして——」

—— 本当の、「悪魔」よ。

荒い吐息を吐き、絶頂と愉悦とさまざまな感情が混じり合って浮かべた私の笑みを、イエレナは呆然と、口を開けて見つめる。

闇色の瞳孔に、一筋の光が浮かんだ気がした。

ちよつと待ってくださいよオー～ンツ【裏】

ごく一般家庭に生まれた少女は、幼い頃から本を読むことが好きだった。

特に好きであったのは女の子ということもあり、王子さまとヒロインのお話である。不遇なヒロインの前に救いの王子が現れ、最終的に物語はハッピーエンドとなるのだ。

成長してもその憧れは抱き続けていた。

その理由は少女が周囲の男の子のように、もしくはそれ以上に長身であったから。

生まれ持つての遺伝で奪われた「女の子らしさ」。

男子にからかわれ、王子とヒロインのお話にときめく純真な少女では、女の子たちの腹黒さに引けを取ってしまう。

身長のせいで可愛らしい服は躊躇われ、ユニセックスな衣料品を身につけていれば、大人に少年と間違われることはしよつちゅう。

そんな幼少期を過ごし、人の輪に加わることが少女は苦手になった。

両親はしかし普通に少女を愛し、接してくれた。長身に産んだ親に「どうして」と悩むことはあれど、少女もまた両親を愛していた。

そんな平凡と鬱屈を抱え育った少女は、「恋」を経験する。

夢や希望を薄みに感じて、「現実」をひしひしと感じるようになった彼女の初恋は、やはり王子的存在だった。

そして、その恋は実る。周囲にバレたら気恥ずかしいから——と少年は「ナイシヨの恋」として、少女に微笑んだ。

手を繋ぐと、相手と話をすると、心臓は正常に機能しなくなる。

文字が綴る「ドキドキ」という音は、実際にそう感じられるから書かれるのだと体感し、うわついた気持ちのまま少女は少年に尽くした。

その頃には、少女は苦手ではあるが、他人と普通に会話をするようになった。彼氏ができ、自己肯定感が増したことが要因である。

また恋人ができる前に、友人もできていた。みんなの中心にいるカースト上位の人物。

いつも学舎の隅で本を読んでいたカースト外の彼女は、ひよんなことからその人物と話し仲良くなった。

ありきたりな毎日。それが心を満たす。本と向き合う時間は減り、少女は毎日を笑って過ごした。

だが、いつ読んだ内容だったか。

人生というものには坂がある。

上り坂と、下り坂だ。

友人と、彼氏が付き合っていた。少女は同時に、二つの裏切りを経験する。

王が初恋の相手だとして、王と婚約している悪役の公爵令嬢が彼女。そして没落貴族の少女が友人——といったところか。

なぜそのような例えをするか。それは二人がいる場面で詰め寄った彼女が知らされた事実に基づく。

先に付き合っていたのは、彼氏と友人の方だった。

彼女は、後から付き合った人間。言うなれば男のフリン相手。

彼女は友人に好きな相手について、相談していたはずだった。

そして男の方は付き合っている人間がいながら、彼女と付き合った。

友人を庇うように立つ恋人。対し彼女は怒りのあまり、今にも友人に掴みかかろうとする。他の少年少女がいる面前で行われたその一幕は、まさしく彼女を「悪女」にするものだった。

後々冷静に考えれば、不可思議な点は多く上がるのだ。

“ナイシヨの恋”や、恋人に尽くすばかりで——言い換えれば貢いでいるような状況。

少女は二人にハメられたのだ。

側を通れば周囲の女子が色めき立つ少年と、長身の一見すれば「イケメン」の部類に入ってしまう彼女。

いつも皆の中心にいる“女の子らしい”友人と、他人と関わりをあまり持たず本の虫だった彼女。

彼女の容姿は悪くない。むしろ比肩する者などその小さな学舎の中にはいなかった。だからこそ窓際の、人と話さないクールでミステリアスな……というのが周囲の印象で、近寄りたがたいオーラを彼女は持っていたのである。

ゆえにその地位はカースト下位ではなく、「カースト外」という特殊な立ち位置となった。少女本人は知らなかったことだが。

そんな彼女を、友人になる前の少女は面白くないと思ひ。

逆に恋人となった少年は、彼女をモノにしたいと思つた。それも一度追い込んでから彼女を手にしたという、歪な愛情表現で。その時が来れば、付き合っている少女など

簡単に捨ててしまっただろう。

そして、そんな女と男の痴情に板挟みにされてしまった彼女は、人間というものに不信感を募らせる結果となり。

自分の世界へと、本の世界へと閉じこもった。

現実は見えない弾丸が飛び交う。その銃弾は彼女の心をエグリ、透明な液体を噴き出させる。それはいつも少女の瞳から溢れた。闇を内包する眼は、冷たい美しさに合う色である。

男とは何か、女とは何か。彼女は考える。

やがてそれは、ニンゲンとは何か——という小難しい内容へと変遷し、彼女の思考はどんどん入り組んでいって。人間のウラ側を見つめさせるきっかけとなる。

人間のウラ側。そこには何があるのか。

人間の皮を剥がせば、そこには赤い色がある。肉や筋肉があつて、骨があつて、内臓があつて……。

その血肉はどこにあるのか。人間の中にある。人間という形は肉体と精神で成り立っていて、その二つは人間を、人間たらしめる要素である。どちらかが欠ければそれ

はもう人間ではない。肉体が壊れれば死ぬし、精神が死んだらそれも、人間としての「死」と言える。

人間の「死」は――、

人間の「生」は――、

人間は――、

人間は……………。

そうして考え続けた彼女は、この世の黒さに気づいてしまう。

戦争ばかりの世界。残酷なこの世界。

その要因たる存在は果たして、長きにわたって「民族浄化」を行なったエルディア人であるのか？

答えは一般的に見れば「YES」だ。

彼女もまた両親や学舎で教えられたその思考を、肯定的にとらえている。だがしかし、それよりも、それ以上に悪しき存在がいる。

それは今、エルディア帝国から奪った七つの巨人の力をもってして、他国へ攻め入っている大国マーレである。

初めこそマーレはエルディア帝国を滅ぼし、巨人の脅威から人類を救った英雄だった。だがその奪った力を兵器として利用し、人類を虐げている。

しかも戦争で戦っているのはマーレ人ではなく、エルディア人だ。かつてあったマーレ人の徴兵制度はなくなり、志願兵制のみに限られている。

多くのエルディア人が死に、そして敵国が滅ぼされている中でこのうとマーレ人は生きている。そんな彼女も、マーレ人だった。

自分を裏切った友人や恋人と、同じマーレ人。

巨人の力を使い、あとは高みの見物をしている政府を構成しているのも、同じマーレ人。

私は、^{自分}マーレ人？

真つ黒な感情が彼女を支配する。

同時に彼女の思考に過ぎたのは、王子とヒロインの物語。
物語のヒロインは基本不遇な人物だ。

しかし彼女はどうか。

確かにツライ目には遭ったものの、それでもエルディア人と比べてしまえば普通だ。常にマーレ人に虐げられている「悪魔の末裔」。その響きも不遇を強調している。

——彼女は、ヒロインになりたかった。

初めは可愛らしかったその感情は鬱暗い執着へと昇華され、少女は王子様を求める。ヒロインでいるためには、彼女自身が不幸へ足を踏み入らなければならぬ。そのため少女は志願兵制の規定された年齢となった時、自ら兵士となった。

彼女は一步、不幸へと近づく。

戦場を経験し、エルディア人の扱いや凄惨な敵兵士を実際に見て、兼ねてより抱くようになったマーレへの悪感情が高まっていた。

そして彼女は、王子と出会う。

表現としては「美女と野獣」であるものの、その比率が明らかにおかしい王子様。

見上げる逞しい背中に守られ救われた彼女は沸き立つ心と同時に、巨人悪魔が彼女を守るため振るったその力に、魅入られた。

圧倒的な蹂躪。その力に敵うものなどない。

その感情とは、信仰心である。

神のような力だと、思わずにはいられなかった。

彼女は王子と出会った時から、自身を「マーレに併合された小国出身の者」と名乗った。不遇なヒロインとして、自身を偽ったのだ。

ただしこの嘘は調べられればわかってしまう。

ゆえにバレないよう、慎重に行動する必要がある。第一に注意すべきは彼女を知るマーレ兵士への対処。だが元々ボツ兵士ライフだったため、彼女と顔見知りの人間は少ない。またマーレ兵は陸軍だけでも一師団およそ二万人で構成され、総五十師団で百万人にも及ぶ。その中の一人が彼女である。よほどの事がなければ身バレする心配はなかった。

そして戸籍云々についてもマーレ人であればしっかりと存在するが、エルディア人や元敵国の人間となるかなり杜撰になる。ただし血液検査を踏まえると、「エルディア人」と名乗ることはできない。調べれば一発でわかる。だから彼女は自身を「小国出身の者」とした。

それから王子の協力者となった彼女は秘密裏ではたらき、マーレに併合された国出身

の同胞を集め、「反マーレ派義勇兵」を組織した。

彼らの表向きの理由はマーレの支配からの脱却と、エルディア人の解放である。しかし裏の目的は、王子の「エルディア人安楽死計画」。この計画を知る者は組織の中では彼女のみであり、王子が本場に「王家」の人間であると知らされた時、彼女はこれをもはや運命と呼ぼずにはいられなかった。

王子の場合は計画上、始祖を継承させる「信頼」のおける人間として、自身に信奉を抱く彼女を利用しようと思っていたのだが。

しかし彼女はそれを理解した上で、この運命につき従っていくことを決めた。

そして彼女はひとつの物語を紡ごうと決める。

彼女にとっての物語。

それは、王子と世界を救う物語である。

「安楽死計画」の全貌を知ったのちに、彼女のこの物語はできあがったのだ。

王子と共に自身の名が刻まれる。

読み手でしかなかった彼女にとって、この響きはあまりにも甘美すぎた。

だが——だが。

王子の前に現れた女。「楽園送り」の肩書きを持ったその人物は、彼女よりもよっぽどヒロインであった。

悲劇のヒロインは王子を愛し、王子だけを愛し、狂気にその身を染めて愛する者へとたどり着く。そんなヒロインを王子は、誰よりも愛している。相思相愛の兄妹だ。

それは、その内容は彼女にとって、出来すぎた物語に感じられた。しかし、現実だった。

物語ではない現実に存在する、悲劇のお話だった。

王子は、彼女の王子ではなく。

彼女は、ヒロインではない。

なら、その座を奪い取ってしまえばいい。

ヒロインになれないのならば、ヒロインを消して彼女がなればよいのだ。彼女は「悪女」ではなく、ヒロインなのである。

冷えた感情を笑顔の裏で煮えたぎらせ、彼女は王子に妹を計画に利用することを提案した。

「安楽死計画」上において、エルディア人から生殖機能を奪った後に、『始祖の巨人』と「王家」の血を引く巨人の両者の保有者の持続的な維持が必要となる。

王子の目論みは、この世からエルディア人を無くし、巨人の脅威をこの世から取り除いて世界を平和にすることである。

しかしさすがにエルディア人をいきなり全て根絶するわけではない。それは「生殖機能を奪う」という方法からも察せるだろう。ただあくまでもエルディア人の滅亡は譲れない根幹として、王子の中に存在する。

そして巨人の継承に関して、王子の弟エレン・イエーガーが持つ『始祖の巨人』は、任意の信頼のおけるものに継承させるとして、「王家」の血を引く人間については壁内に正統な血を継ぐ王女がいるため、計画の実行前までに彼女に子となるべく多く残させ、『獣の巨人』を継承させていく算段となっている。

無論、壁内人類が「安楽死計画」の内容を伝えられ、賛同するとは思っていない。

否、遠回しな「集団自殺しようぜ！」という内容にうなづくわけがない。

そのため、パラディ島の間人が納得できる理由にすり替えて話す。仮題は『エルディア人救済計画』——とでもしよう。世界情勢が本格的にパラディ島侵攻へ向いてい

ることを話せば、壁内人類も首肯せざるを得なくなる。

「安楽死計画」の実体は、表層下でひっそりと進んでいくのだ。

ただヒストリアとその子どもが継承したとして、期間としては26年。もし王女が子を産めなければ期間はもつと短くなる。

巨人の脅威がなくなつた後も、パラディ島のために抑止力は必要だ。

その抑止力となるのが「地ならし」である。

「王家」の血を引く巨人の力が無くなれば、この抑止力は機能しなくなる。

「王家」の血を引く……だけで考えれば、知性巨人でなくともよいのかもしれない。だが仮に両者の意思が一致しないと起こせない場合、思考能力のない無垢の巨人では意味がなくなる。

そも実験を行うにしても、壁内人類は王女——あるいはその子どもを使わなければならないため、まず難しいだろう。

それらを踏まえ、彼女は「王家」の血を継ぐ王子の妹を、その力を継承させる人員として使うべきだと提案した。もちろん子を増やさせることも踏まえて。

だが、王子は首を縦に振らなかった。その理由はひとえに、妹を愛しているがゆえ。妹の幸せにならないことを彼は強要しなくなかった。

そしてそんな男の様子を見た彼女は、気づいてしまった。

王子のその「安楽死計画」の土台自体が、揺らぎ始めていることを。

男は無意識に、もしくは本人が自覚している。計画をこのまま続けられるか否か、わからないことを。

男は揺らいでしまったのだ。悲劇の妹が生きていたがゆえに。王子の——ジーク・イエーガーの計画の根幹に存在したのは、*“妹の死”*。

それが崩れてしまったため、ジークの計画がぐらつき出した。

ヒロインの座を男の妹に奪われた彼女としては、これ以上なく面白くないものである。

だからこそ彼女は計画を不動のものとするべく、妹へと接触した。それもジークの許可なく。

ヒロインへの執着と、王子への想い。さらに計画遂行への望み。

さまざまな感情が絡まり合った彼女の心は、もはや解けぬ真つ黒な糸。

ヒロインになるために殺そうと考え、しかし王子のことを想い殺すことが躊躇され。

計画のために殺そうと思ひ、計画のために協力させようと考え。

——結論、彼女はいとも容易く反撃にあつた。

向こうは元兵士であれ片足を失つたことや、ここ数ヶ月閉じこもつてばかりの生活（ジーク談）ということもあり、現役の兵士である彼女はまさか負けるとは思いもよらなかつた。雑念が隙を生んでいたこともあるだろうが。

両者ドロドロとした感情が流れあつて、濃密な空気が場を支配する。

女はジークの言うとおりに——いや、それ以上に兄狂いで、兄以外の人間がろくに見えていない人間で、兄を愛していた。愛しすぎて、狂っていた。

彼女の内心はみかんの皮でも剥くように暴かれ、女の狂気の下に晒された。

結局のところ、彼女には確かにジークへの想いが存在する。信仰心の他に、色恋の感情が。

それはしかしヒロインへの執着が基となっていて、彼女に「愛」の感情を見出させている。

その部分が女の逆鱗に触れてしまったのか。はたまた彼女の全てが妹の気に食わなかつたのか。

とにもかくにも、女の地雷を踏み抜いてしまった彼女は握られた手に激痛を受け、

みつともなく呻く。

女は——アウラ・イエーガーは狂気そのものだ。殊に兄が関わりと壁内人類を裏切つたように、ソレはいずれかに、誰かの元へ大厄災をもたらす。その行き先はきつと兄の元にまで及ぶだろう。否、及んでいるに違いない。兄への「愛」が、その兄の首を絞めることになっている。

イかれてゐる女にしかし、彼女は見出してしまった。

殺してやりたいとも、とことんムカつく女だとも思つた中で見てしまった女の笑み。

アウラ・イエーガーの歓喜や狂気、怒りが混じりあつたそれは、口角が微かに持ち上がり白銅色の瞳はトけて、下がつた眉は媚びを誘つてゐるようで。ほのかに染まつた頬は、女自身が彼女に言つた「メス」そのもの。

その笑みはかつてマルコが死に際に見た女の笑みと酷似していた。

アウラ・イエーガーが心からみせる狂気の微笑。

それはまさしく、悪魔のほほえみ。

それを見た彼女の中で、何かが崩れて落ちた。

彼女のヒロインへの執着だとか、王子への想いであるとか、計画への悲願だとか。そういったものが女の狂気に侵食され、壊される。

彼女はいつぞや、ジークに助けられ魅入ってしまった感覚を体感したのだ。

ジークが「神」だったならば、女は「悪魔」。

人の心を魅了し、付け入って、食い物にする。

彼女の精神をその狂気で犯した女は、美しかった。風に吹かれなびく色素の濃い髪も、その濁った瞳も、細身の体も何もかも、美人な彼女からして美しいと思わせる。そしてその体内には、悪魔のごとき魂が入っている。

彼女は——イエレナは、本物の悪魔にひたすらの憎悪を覚えたマルコ・ボットとは異なり、畏怖し、魅了された。

正しき道を歩むマルコにはその笑みは毒にしかならず、しかして歪んでしまった彼女には蠱惑的な蜜となり。

彼女の変わった雰囲気には片眉をあげたアウラは一步後退る。逆にイエレナは顔を赤らめて、痛む手の事さえ忘れ両手を胸元で握り合わせる。

「はあ………ツ」と漏らした彼女の声を聞き、いよいよアウラは逃げ腰になった。

「私の——悪魔様あ………♡」

アニチャンブリケ

ジーク・イエーガーの信者だった女が何故かその妹までも信奉し始めた事態に、驚き桃の木山椒の木な悪魔野郎は私、アウラちゃん。

イエレナはジークお兄さまへは「信奉」を、私には「心酔」を抱えている。

微々たる違いですが、「心酔」の方が悪魔ちゃんな私に向ける感情として正しいでしょう。

夕陽が沈み、空は赤らんで遠くの景色が黒く染まっている。

その下で陽を受けてほのかに朱をおびた川が流れ、耳を澄ますと聞こえる水の音。

勾配のある草むら。スカートの下で生い茂る草のチクチクとした感触から逃げるように身じろいで、真っ赤に染まった世界に訪れる紫煙を眺めた。

隣であぐらをかいて煙を吸うお兄さまの横顔が、夕陽に侵されて、照らされている。

祖父母とともに戦場帰りの兄を出迎えて、収容区の祖父母の家で食卓を囲んだ。そしてその後、ふたり帰路についた中での寄り道。

周囲の人影はほとんどない。収容区からさほど離れていない場所にあるこの川。向こう岸には発着場があつて、飛行船を拝むことができる。今は空を遊泳するその姿はない。

疲れているはずのお兄さまは、祖父母の前では笑つていた。実家で食事をしている時も。

「イイ年」をして相手のいない娘に祖父が、「ジークが嫁にもらつてくれたらなあ……」と告げた言葉にも、「ジョーダン抜かすくらい元気があるならまだ大丈夫だな——」と、言つて。

祖母の方は祖父の隣で目に見えて固まつていた。

でも今は瞳が虚で、飛行船も何も無い遠くを視界に入れて、ぼんやりとしている。絶好のシャッターチャンスですね。誰か写真機を持つてこい。後で使う（意味深）
何か考えているのかもしれないし、何も考えたくないのかもしれない。

美しい姿に見惚れていたら、伸びた手がポンポンと、私の頭を叩いた。

お兄さまは祖父の発言を気にするな、と言う。

私としてはバンザイ三唱だつた。お祖父さまの中のフエ私イは40代（見た目が若すぎ

ないか?)で、孫息子が25歳。

年は一回り以上離れつつ、ビジンでも年齢が年齢のため結婚が難しい娘と、恋人のひとりも連れてこない孫息子が一緒になれば互いによいかもしれない——という善意で話したのでしよう。ちなみに兄と私が一緒に暮らしているのは祖母しか知りません。

祖父から見たら、距離感の近い娘とその甥に感じる部分があったのだろう。その理由は兄妹だから、近いのですが。

実際は祖父と接している時、それとなく私が恋人の話に持ち込んで、ついにて未だ相手のいないお兄さまを心配してみせた結果、引く確率の高い「当たりくじ」だったのです。

私はお兄さまと擬似恋愛ムードが楽しめて最高でしたし、ほどよく狂った祖父や何も言えず口を噤む祖母も見れる。

そして何より、お兄さまの苦しさを無理に隠そうとする顔を拝見できる。
やめられない、とまらない、曇らせえびせん。

ただ、本音を言えば、お兄さまの相手が本当にいないのか気になる。

表向きにはないだけで、裏では恋人、あるいは意中の人がいるかもしれない。少な

くとも王家の血を引く以上、その希少な血を残す必要性があることはわかっているはずだ。

ヒストリアがウォール教の重要人物であることは、アニが王政とその周囲を調べていた時に判明していたようで、壁内のクーデター後、彼女が王女になったことは三人（私、ユミル、アニ）で遊んでいる時に話した。そこから、マーレ政府はすでにヒストリアが王家の血を継ぐ人間であることを知っている。仮に私が話さずとも、ヒストリアⅡ王家の件は予想がついたことでしょう。

存在する王家は彼女と、私と、ジークお兄さま。

ヒストリアの場合は壁内に王家の人間が彼女しかいないから、どの道後継ぎを作る必要がある。

女はそう簡単に子どもを増やせないけれど、男ならそう難しいことではない。でも麗しき兄に、あんな子種王（シンプルイズベストな暴言）のようなことはして欲しくありません。

『!!』

幻聴か、金髪碧目少女の激おこポンポンな声が聞こえた。気のせいでしょう（すつと

ぼけ)

「ジークお兄さまは」

「ん？」

「け、結婚とかは…:されないのですか？」

好きな、人とかも——と、続けた声はかすれた。うまく音にならなかったかもしれない。

でもちゃんと聞こえていたようで、お兄さまはこちらを見る。

蒼い瞳はキレイで、どうしようもなく私の心をかき乱す。

「そうだなあ……:アウラが結婚するまでは、結婚しないよ」

「じゃあ一生結婚できませんね」

「お兄ちゃんを泣かせる気か」

えーん、とわざとらしく泣いてみせるお兄さま。おつふ…。

それと久しぶりの再会に妹が敬語になっていることも、不服らしい。

と言つても、お兄さまいると常時心拍数が高い私は、間を置くとすぐに距離感がわ

からなくなつてしまふ。それでも少しずつ、確実に壁の隅に追い込んでいる。

「だつて俺に好きな人ができて、結婚したらお前がひとりになつちやうだろ」

「私も同居する」

「やめろ、新婚生活の場に妹が居候するな」

「姑ポジで嫁を精神的に追い込みます」

「本当にやりかねない、この妹なら」

「それだけこの妹はお兄ちゃんが好きです」

「愛が重いよ、アウラ」

「お兄ちゃんが受け止めてくれないと死んじやいます」

そのまま体を倒してお兄さまの太ももに頭を乗せると、胡座の高低差で首が直角に傾く。胡乱げな視線が突き刺さり、直後大きなため息が聞こえて、自分の頭が大きく動いたと同時に首の角度がゆるやかに変わった。胡座をかいていた足が伸ばされている。

—— やつたぜアウラちゃん！

兄の前面に移動した私はさながら兄を人間椅子にしてズルズルと体を下げ、頭を両足の間に埋め込むことに成功した。お兄さまのお兄さまのまくら……ひひいん！（トキメキの音）

これが、驚異の子……………!!

「……あのねえ、兄妹間でする体勢じゃないよ」

「と言いながら、お兄ちゃんは許してくれるのでした」

「こういうのは父お——」

父親の地雷を踏んだお兄さまは険しい顔つきになる。容姿は本当に似ているし、丸渕眼鏡とヒゲまで同じだから寝ぼけていると、妹が時折間違えてしまうこともある。もちろん故意ではありませんよ? (ニチャア)

「お父さま?」と言うと、毎度不快そうな顔をするのでやめられません。クサヴァーさんの遺品である眼鏡は絶対に外しません、一度無精ヒゲと今生の別れをされそうになっていた時は止めました。今でもいっぱいいっぱいなのに、これ以上イケメンになったら本気で死にます。興奮で、逝イっちゃう。

そもそもヒゲを生やしたのは、若い頃のグリシャ・イエーガーと容姿が似ているから——だそうで。

どのお兄さまでも私は大好きです。

「なあアウラ、お兄ちゃん前に色々話そうって言っただろ」

こちらを覗き込むお兄さまの顔が真っ赤に染まる。一瞬それが血に見えて、瞳をこすった。

急に怖さを覚えてしまった自分を不思議に思う。今こうしてメガネの奥の瞼は瞬いているし、熱を感じるのだから死んでるわけなのに。

「お前が幸せになってくれないと……いや、幸せを見つけてくれないと、お兄ちゃんは死んでも死にきれないよ」

「じゃあ、死なないでください」

「無茶言うなって」

「妹を、私を愛しているなら、死なないで」

「……………」

「——生きて」

青い瞳が赤に侵食されて、オレンジに染まった髪の色が、ユミルと重なる。

愛する人が生きて欲しいと願うことの、何が悪いというのだろう。なのに結局、この世界はそれ以上の仕打ちを返してくるじゃないか。ユミルにだって、きつと……お兄さまにだって。

今度こそ幸せにしたいんだ。

でも同時に一生引きずるくらい、私でジーク・イエーガーを侵したい。

「それに将来、エルディア人に安息の未来があるとは思えない。対巨人用の兵器開発が進めば、マーレの地位は危うくなる。崩壊したら、必然的に収容区のエルディア人も住処がなくなる。大量虐殺だってあり得る。それほどまでにかつてのエルディア帝国や、マーレの巨人の軍事使用の影響が出ている」

今回の戦争で勝つて、またパラデイ島に侵攻するとして、壁内人類が黙っているとは思えない。グリシャ・イエーガーが残した世界にまつわる秘密を手に入れていけば尚更。すでにパラデイ島の敵はマーレ、そして世界であることが判明している。

それにユミルがエレミカ推しである以上、パラデイ島がそう簡単に負けるとも思えない。

生きていても明るい未来が無さそう——というのが、正直な私の感想です。

一応言っておくと、自分の不利になる情報は言っていないし、私の秘密を握っている（あえて握らせていると言ってもいい）アニにも情報を漏らさないように頼んでいる。

例えば、始祖の真価を發揮させるのに必要な条件ですとかね。マーレでも知らない始祖に関する情報だ。《始祖の巨人》を奪えば、それで終わりだと思っている。王家のスイッチがなければ動かないんですね…。

「お前も色々考えてるんだな…」

「そう言われると、普段は何も考えてない、みたいに聞こえるんだけどお兄ちゃん」

「普段は俺のことしか考えてないだろ」

「ど、どどど、どうしてわかったの…!?!」

お兄さまを見ている私のことを、お兄さまは見てくださっているという事ですか？

……………ひひいん！（二回目）

「妹の一挙一動に愛情を感じて俺は怖いよ、たまに」

「嫌なときは拒絶して、じゃないと私わからな……………いたっ」

無言でアウラちゃんの可愛らしいほっぺをつねったお兄さま。痛みと気持ちよさに

全身が暴れ馬になりそうですけど、手のひらを握って堪えます。

兄の脳内では私を叩いた記憶が再生されているのかもしれない。

そんな簡単に、曇らせの落とし穴に引っかからないでください。妹が狂ってしまいま

す。いいえ、狂っていました。

「お前は本当に…俺が好きだね」

「だって、愛しておりますから」

「…………お兄ちゃんも、好きだよ」

ボツと、堪えきれず顔から火が出る勢いで熱が溜まっていく私の顔。尚もボボボツ、と弱火になるどころか熱さが増していく。

今期最絶頂を迎えてしまい、脳内処理ができなくなった妹を見る兄は微笑んでいて、でも眉が少し下がっていて、困ってしまっている。ひひいんつ（三回目）

顔を手で覆って、私が素数を数えるようにハンジ・ゾエと愉快的な巨人たちを数えている中、兄が横に寝転がる気配がした。

「星は好きか？」

「……………う」

「じゃあ見てこうぜ、少し」

「……………う」

ついでに軍服のジャケットが体の上にかけられた。お兄さまの匂いと着ていた熱が全身を包んで、眼球が裏返る。顔を覆っていてよかった。つま先がピンと伸びる。死ぬかもしれない。

「アウラ、寝ないでちゃんと聞けよ」

「……………フィツ」

お兄さまはそして、話し出す。

エルディア人を微睡の中で眠りにつかす計画を。

妹には協力させないことも、あらかじめ話して。その上で——その上で、悩んでいることも。

「俺はお前を、巻き込みたくない。でもエルディア人である以上、計画を実行に移せばお前も巻き込まれる」

計画をしようとしなかつても私は、アウラ・イェーガーはお兄さまが死ねば死ぬ。どうかあがいてもその結論から逃れられない中で、お兄さまは懊悩して、苦しんでいる。イエレナの言うことは本当だった。確かに壮大な計画だ。エルディア人から生殖機能を奪うなんて。歴史的事情を読み解くと《始祖の巨人》が記憶のみならず、肉体への干渉も可能であるという事実が存在することが恐ろしい。

というか、それができるなら、無限の可能性を感じざるを得ない。

だって、例えばアウラちゃんがメス♀からオス♂になることもできるということじゃないです

か。流石にしませんけどね。私は肉体も精神もお兄さま専用のメス豚奴隷なので。

まあ、男の子になったアウラちゃんもさぞかしイケメンでしょう。しかし
本^お兄^兄の^まイケメンの前では霞みます。

妹がろくでもないことを考えている横で、お兄さまは真剣な表情を浮かべる。

イエレナが私と接触したことも後々わかることでしょう。だから今のうち、話を進める材料に使っても問題ない。

彼女、私を恍惚と抱きしめて、ハア…ハア……していた気もしますが、それは全て夢です。

彼女が抱く私への感情は「心酔」であつてそれ以外ではないです。ただその度が過ぎるだけです。でなければあの時私はそのまま「アツ——！」となつていた。

ライナーの時と同様にイエレナについてはしくじつた部分がある。距離感を間違えたと言ふべきか。彼女とは境界線を引いて冷戦とすべきであつたのに、激情のあまり私
がその境界線を無視して進んで戦争を起こしてしまつたから、狂気を至近距離で見た彼女が悪魔を信仰するきつかけを作つてしまつた。

まあその代わり、今後利用しますけれど。

最終的に引き剥がした彼女とは、協力関係（私の方が有利の立ち位置）を結んだ。その壮大な計画とやらは、お兄さまの口から直接聞きたかったので説明を断って、イエレナと別れた。何か彼女個人に用がある場合は、指定の方法と、指定の場所でコンタクトを取ってください——と、言い残して。

また表面上は、お互い水と油な間柄を装うことにした。二者に関係性がないと思われる方が、双方動きやすいですから。

裏切ったら裏切ったで別に構わない。お兄さまさえ裏切らなければ、殺しはしません。

「イエレナ」という人物が偽名を使って私と接触してきたことをお兄さまに話すと、一瞬間に皺が寄った。

「その「計画」の見通しが心配で来たみたいなの。兄さんからいずれ話があるだろうから、途中で頓挫しないように説得して欲しいって。計画の内容については抽象的な表現だったから、詳細は知らなかったわ」

「……………大丈夫だったか？」

「何が？」

「多分、イエレナちゃんとお前じゃ相性が悪いだろ」

「大丈夫よ兄さん、私はね」

ニッコリ笑った私に、お兄さまの口角がひくついた。のちに彼女の包帯まみれな手を見たら、女同士のどんばちがあつたことがわかるでしょう。罪深いジークお兄さま。

「後でよく言っておく。悪かつた」

「兄さんが謝ることじゃないわ。あのお………イエレナさんが勝手に行動したことですもの」

うふふ、と笑う私に、お兄さまの顔から血の気が引く。

女つて怖い——などと思つていらつしやるのだろうか。

今のお兄さまは妹が生きていたことによつて、計画そのものが揺れ動く事態となつて
いる。

私が生きているから苦しんでいる。

私のことで苦しんでいる。

私のせいで苦しんでいる。

私はお兄さまを苦しめている。

私がお兄さまを苦しめている。



お兄さまを苦しめているのは私。私がお兄さまを苦しめている。

その事実が途方もない刺激となつて脳を犯し、うっかり絶頂した顔を晒しそうになる。

「お兄さまは、どうなさるおつもりなのですか？」

イエレナのことはあつたものの、あくまで私から強制するつもりはない。我が身が子を作れぬ体になろうが、構いません。どれだけお兄さまが私を想つて悩んで苦しんでくださろうと、意味がない。ただ私が気持ち良くなつてしまふだけです。

「まだ、わからない。…ただ」

「ただ？」

「俺がいくら悩んでも、最後に行き着く答えはわかつてるんだ」

「——え？」

お兄さまの顔は、空に向いている。

陽が傾いて、星がちらほらと浮かぶようになった空を見つめる兄の口が動く。

「俺は計画を実行するよ。それが——クサヴァーさんとの約束だから」

音が、聞こえなくなつた。

視界に映るお兄さまは空を見つめるばかりで、私を見ない。

兄の自室に飾つてあつたボールが脳裏によぎつて。

私の内側でグルグルと、黒いナニカが渦巻く。

自分の表情筋がビタ一文も動かない。お兄さまがこちらを向いたというのに。

「……………アウラ？」

ジーク・イエーガーの中に深く残っているのは、私じゃない。私じゃない。私じゃ、私じゃない？

私じゃなきゃダメなのに。お兄さまの中に存在するのは私だけでいいのに。それ以外何もいらぬお兄さまを構成するのは私だけでいい。私だけがお兄さまを構成してお兄さまになつてお兄さまになることでお兄さま私がお兄さま——。

「ははっ」

気づけば兄の上に覆いかぶさって——私は、
禁忌とか何だとか、その思考が回ってきたのはけれど、随分後のことで。
視界に映ったのは見開かれた青い瞳。キレイだった。

口元に感じたのは、タバコの苦い味。

愛の重機「口…」

戦争帰り。戦士アニ・レオンハートは義父といつもより豪華な食事をテーブルに並べて、穏やかな晩食を楽しむはずだった。

しかし食事の途中、家のノックが鳴りほろ酔いの父——娘が帰ってきたことで羽目を外している——の代わりに出れば、扉の前にいたのは松葉杖を突いた女。

腕には一升瓶の入った袋が複数ぶら下がっていて、それよりサイズの小さい口の開いた酒瓶が手に握られている。

女の顔は真っ赤で、目は虚。夜が更けてきた時間帯であり、ここに来るまでにかなり飲んだのだろう。

女の容貌は美しい。収容区内でも市街地でも治安の悪い場所は存在する。最悪そのままどこぞの男に目をつけられて、裏路地に連れ込まれる可能性さえある。アニの場合にはあり得ないが、今の隙しかない目の前の女ならば危険な目に遭う可能性があった。

「……何でここにいんだい、アンタ」

アニは少しの隙間を残して扉を閉じ、そこから顔を覗かす形で泥酔の酔っぱらいを見

る。家に入れたくはない。せつかくの家族の団欒だというのに。しかしこのまま放つておいて、翌日路地裏で全裸に剥かれて転がされているのを発見された暁には、始祖様によつて人類が滅ぼされるかもしれない。

結局どうしたものか、悩むこと数秒。

アニは一旦酔っぱらいを保護して、食事を終えたら別の人間に任せてしまおうと考えた。ピークはダメだ。彼女もアニと同様に、唯一の肉親である父と家族の時間を過ごしているはず。

ライナーゴリッラは論外。帰ってきた時にジークに抱きついていてる女への視線がガチだった。ヤロウ、本気でねらいに来ている。

そもそもなぜジークはこの女の手綱を離してしまったのだろうか。マトモに制御できるのは彼しかいないというのに。

兄と共にいないということは、それ関連で何かあり泥酔するまでに至ったのだろうか。

女の祖父母も考えたが、住む場所を知らない。女に聞こうと思えども、完全に酔いが回つて呂律すらうまく回らなくなっている。そしてわざわざここから軍事基地まで運ぶ労力も願ひ下げだ。

何度も言うが彼女は戦争帰り。疲れきっている。

「……いや、ゴリラでも大丈夫か。親戚が揃ってるだろうからガビもいる」

ひとまず今にも倒れそうな女を回収し、壁にもたれさせて食事を再開したア二。

迷惑料として一升瓶はもらい、(一応異物が混入してないか味見してから)父親に渡した。

ほろ酔い——いや、着実に酒に吞まれ始めた父は、女をア二の友人と思い哄笑する。「お前に友だちがいたのか!」と。

友だちくらい……いる——と、彼女が考えた脳内に、それらしい顔は浮かんでこなかった。ピークがギリギリ友人だと思ふものの。

そして食事を終えて食器を片づけ、酔いの回った父親が寝室に向かうのを見届けてから、水の入ったコップをもう一人の酔っぱらいに届ける。

それを飲んで少し正気に戻った女は半目で何度か瞬き、「しにてえ」と言った。

ここまでの経緯を聞けば祖父母と食事を共にして、その帰り際ジークと一悶着あり、酒場に寄って飲んだ後ア二の元へ来たらしい。心情的に家に帰ることもできず、かと

いって祖父母のもとではなくアニの家。女の中で祖父母よりも彼女の方が頼れるから来た。

帰れ。ツンドラハートは思った。

「何でジークと一悶着あったんだい」

「しにてえ、しにてえしにてえ……………」

「死んでもいいけど周囲は巻き込まないでよ」

「……………つんどら。この、つんどらはーと」

「ハ？」

ビキツと、アニのこめかみに青筋が浮かぶ。

今暴力を使つては世界が減ぶ。そう思い込ませ、深く息を吐いた彼女は身支度をし、この酔いどれブラコン女をさつきと他所へなすり付けようと決める。この女が何か失言しても、エルディア人用の収容区だ。後でいくらでも記憶をいじるなりできるだろう。

「どうしよ……………どうしたらいいとおもう、つんどらちゃん」

「……………フウ……………何が？」

「あうらちゃんってばいけないこ」

「だから、何が？」

「ちゅー」

「…………ちゅ、ちゅー？」

アニの頬が少し赤く染まる。別にそれは「ちゅー」の形をした女の唇が魅力的であったとかそういうわけではなく、そういうことを覚えるのはゴリラであって——、「ちゅー」の言葉に反応してしまったのだ。彼女を構成する因子に多く含まれるのが乙女属性である。

「ちゅー…………しちやった、おにーしやまに」

思い出したのか、酔いとは別で顔を真っ赤にしていく女。顔は嬉しそうで、しかし何かが決壊したように水滴がポロポロと瞳から溢れる。

事の重大さを理解したアニは他所へ押しつけることをやめ、仕方なく家に泊めることにするのだった。

??????

レオンハート家で一晚を過ごしたアウラはその後、アニに勧められたブラウン家（すでにライナーの恋路が伝わっているのか、快く受け入れてくれた）や祖父母の下、手伝いに行く病院で寝泊まるなどして過ごした。

最低限の物資をバックバックに詰め移動する様は完全に旅人のソレである。もちろんジークと出会さないよう配慮し、世話になる人々にも曇った美女を装って「兄とケンカして……」と話している。理由の追求はうまく躲した。

また自分がいることはなるべく兄に伝えなくて欲しい、とも告げている。

日が経つにつれ、ジークが妹のことを心配するだろう——と周囲も思ったものの、イエーガー家の複雑な家庭の都合上、無理に言うことはなかった。

ガビについては従兄の恋を応援しつつ、優しい姉ができた気分で、すっかり懐いた。最初こそ警戒心と、笑顔の裏の違和感を感じていたが。

アウラは「家族」として超えてはならない一線を越えた。

狂った頭で——いや、狂っている頭がより狂った中で——衝動のまま、理性を失って行動を起こした。

そして、放心した兄から逃げた。

元より家族間でタブーとする感情を兄に抱えていることは、幼き日に理解した。それと同時に家族愛を有しているのが、彼女の異常性の一つでもある。

“狂っている部分”の女は、自分のハジメテを捧げられたことにイかれて、兄の見開かれた青い瞳に興奮を覚えて、脳ぢるが瞳から耳から溢れてきそうなまでに逝き狂っている。

ただ——ただ、“人間の部分”の彼女は踏んでしまった禁忌の地雷に、文字どおり「死にてえ」となっている。

最高の最期を計画する中で、兄を曇らせながら、その距離を縮めていきたいとは思っていた。

肉体も精神も兄に犯されたいとも思う彼女はしかして、やはりその超えてはならない一線というものを越える勇氣はなく、越える気も本来ならなかった。絶対に、とは言えないが。

その一線を越えた暁には、極上のジークの曇った顔を見られる反面、彼女自身も、それこそかつて頬を叩かれたとき以上に傷つくことがわかつていた。

狂気と、人間性の部分で作られるアウライエーガーの精神は、絶妙なバランスを保っている。

絶妙がゆえに影響を受ければ崩れやすく、脆い。

彼女から言わせてみれば、傷ついた自分の感情に、兄の苦しみを純度100%で享受できなくなるから——と、言ったところだ。

ジークはアウラの全てで。

何より、兄の曇った顔を見ることに命を懸けるフェティシズムの究極系と称せる「変態」を、女は持っている。

そして後悔と思い出し絶頂と、喜怒哀楽を日々のスパイスに精神的に摩耗し続けるアウラは、図書館に赴いた。

再び戦士の出征ののちに、帰還。

そうして過ぎた日数は片手では足りない。一ヶ月、二ヶ月……と経ち、事情を相談されていたアニも、いい加減逃げ続けるのはやめろ、と女を蹴りたい気持ちでライナーにぶつけ、イラついている。彼女としてはさっさと気の迷いということと終わらせて欲しかった。その方が兄妹としてもよいだろう。

何せ『アニちゃん入れて——どうして開けてくれないの?』と、まるで歌うようにブラコン女が家にやって来る。

しかもレオンハート（父）だけでは気まずいからと、アニがいる時に限って。

戦争と精神負荷をかける女のダブルタッグ。サンドバックナーは、そろそろ理不尽な蹴りに尻が使い物にならなくなる。

ちなみにアニの中のタブーの認識としては、あのブラコン女ならばやる……という考えである。さすが一度変態の絶頂シーンを見てしまっただけはあつて、思考が達観している。

ジークも表面上はいつも通りだが、その内心は相当参っているに違いない。哀れに思いつつ、それを顔に出さないようにと、また彼女の疲労が増える。

「ハア……」

アウラは、兄とどう接していいのかわからなかった。

どう切り出して謝れば許してもらえるのか、元の関係に戻れるのか。だが彼女の話は妹を想う兄への「裏切り」に他ならず、到底許してもらえないと思えない。ジークの方から接触の気配が一切ないことも、その考えを加速させている。

このまま距離を置いて、また置かれ続けて、感情の壁が築かれていけば関係の修復は不可能になる。

——いや、もうダメかもしれない。

世界が巻き戻ればよかった。だが彼女の耳にはチクタクと、図書館に置かれた大きめの古時計の音が響く。一秒一秒進んで、「今」が過ぎ去って、過去になる。

戻れない。進むしかない。

ならアウラは、どうすればよいのか。やる事については概ね決まっている。そのためイエレナと接触し、一つお願いごとをした。

それがうまく行くかはわからないものの成功して、そして条件が揃えば、彼女は最高の期を迎えられるだろう。兄どころか、弟にも自分を刻みつける形で。

「相席、いいかしら」

頭を抱えていた彼女が顔を上げれば、そこにいたのは松葉杖を突いた女性。猫背とウエーブした長い黒髪が特徴的である。

手には何冊か本が握られており、一見すると調べ物か何かに来たらしい。

兵士の服と、赤い腕章を目に留めたアウラは思わず胸を凝視した。相変わらずデカイ。
い。

女性——ピーク・フィンガーは相席の許可をもらうと、相手の正面に座る。

テーブルの上に散らかっていた本はその犯人によって隅に追いやられ、ピークの本が載せられた。

静閑な図書館に本来ならかなり響くであろう松葉杖の音。それにアウラが気づかなかったということ、相当悩んでしまっていたようである。

「以前はごめんなさいね。上に乗ったまま寝ちゃって」

「いえ、驚きましたが大丈夫ですよ」

二人の対面は「ドキドキ♡ソファアの上で禁断の添い寝」ぶりだ。実際上に乗られていた当事者としては、薄暗い中に見えた黒髪はホラーであった。

「結構色々読むのね。ふーん、サスペンスに、歴史書に……」

「ええ、まあ……知らないことがたくさんあるので」

「大変だねえ、色々。じゃあこの本も読む？」

ピークがずっと差し出した数冊の本。積まれたその上の表紙に目をやって、アウラは固まる。最近貸りて読んだばかりの本だった。その下も、その下の本も。

どうやら、偶然の出会いではないらしい。まあ、他の席も空いているというのにわざわざ彼女の前に座ったのだから、何かあるのだろうとは思っていた。既読の本を持っているということは、貸出履歴でも図書館員に頼んだのだろう。

ちなみに本を借りる際は、住所や名前、個別番号が書かれた図書カード（発行する際は身分証を必要とする）と本を持ち込む。

図書館員はそれに合わせて、本の内部にあるブックカードに個別番号や貸し出し期限を記載する。同時にどの本を誰に差し出したかも、別に記録して保管しておく。

その別に保管したデータをピークは調べたのだろう。アウラが何を読んでいるのかを。王家の本ばかり読んでいたら怪しまれる可能性もあるが、彼女はバラバラに貸りて読んでいる。

どこでどう彼女、あるいは兄に不信を抱いている人間がいて、調べられるかわからな

い。気をつけるのは当然のことと言える。強いて言えば歴史書の割合が多いかもしれないが、誤差の範疇だろう。

だが今回はあまりに借りた本が露骨すぎた。そこまで気が回らなかった。

そんな中で、今彼女の状況と借りた本を照らし合わせると、アウラが何を思っていて、そしてピークがいかような目的で来たのか読めてくる。

『ソニー・ビーン』『滅んだフリッツ王家の分家とその血筋』『青肌の謎』——他に
もエトセトラ、一つのテーマに沿った本を借りたらしいね」

「…何が目的なの」

「何が目的」って……なんか私怪しまれてる？」

彼女の言葉の真意がわからない、とばかりに首を傾げるピーク。

「あの時、部屋に侵入して一騒動終わった後、あなたソファアの上で起きていたでしょう」

「あ、バレちゃった？」

テオ・マガトがジークを怪しんでいることはアニから聞いている。

そんな中で隊長殿がみすみす放つて置かないだろうことは想像につく。過去と今のジークに違いがあるとすれば、妹の存在。兄の弱みに自分なっていると思いたいが、弱みができれば自ずと隙も増える。そこを狙つて戦士長の企みをマガトが暴こうとするだろう、と。

その弱みの点を考えれば、彼女の存在を認可したことや、わざわざマーレ政府の管下——軍事基地内に住まいの許可を認めたことにも一理通る。アウラが政府の見える範囲にいれば、ジークも動きにくくなる。

そしてマガトの意図を読んだ先で考えられるのは協力者の存在。マガトのみではジークのことを調べるのは難しい。

ゆえに協力者——それも、戦士長の懐に違和感なくつけ入れる人材が必要となる。

アウラと仲の良いアニ（虚しくも周囲はそう認識している）やライナーは除外される。マガトとしても信用を置くには欠ける。ジーク云々の前に、壁内を裏切つた女を信頼できないと考えるのは当然であろう。

ポルコも「懐」を考えれば決定打に欠け、戦士を目指す少年少女は言わずもがな。

そうして協力者の候補を消していった中で、最後に残つた有力な候補がピークというわけである。

潜入など得意な部分を踏まえて、これ以上の適任はないだろう。彼女は始祖奪還計画が実行されている中、長年マーレで戦士長と共に行動してきた人物でもある。ジークも信頼を置いていると考えてよい。だからこそより近づきやすい。

そう考えていたアウラの読みは、兄妹が朝の騒動を終えてコーヒートを飲んでいる横で、タヌキ寝入りをしているピークを見て、「そういうもの」として認識されるようになった。

「どうして寝てないってわかったの？」

「人の上に乗っていた時と、ソファアで寝ている時の呼吸とか、腹の沈み方が少し違ったから」

「へえー…観察眼があるんだね」

「で、結局何が目的なんでしょうか」

「聞きたい？」

「別に言わなくてもいいですけど」

今の兄妹の状況を隙だとマガトが感じているなら、これ以上アウラは話すつもりはない。

席を立とうとする彼女に、少し慌てたピークが止める。

「私のおせっかいで来たようなものなの」

「……おせっかい？ おせっかい焼きのピーク・フィンガー？」

「二つ名みたいに言わないで欲しいな。あなたのお兄さんが……ね？」

アウラは口をつぐんで、席につく。

「ジーク戦士長の様子がいとも通りに見えて、変なことには気づいていたの。アニも本人の前じゃ顔に出さないようにしてたけど、裏でドツと疲れた顔してたし。勘のいい人とか、鋭い人は気づいていると思う。ライナーは気づいてなくて、「喧嘩してるんですか……？」ってデリカシーなく本人に聞いてたけど」

「ドベちゃん……」

「本当頼りになるんだか、ならないんだか、わからないドベちゃんだよ」

ライナーが前線で活躍していると、アウラは耳が痛くなるほどガビから聞かされている

「それでつい先日、いつものソファアで寝ようと思ったんだけど、戦士長に相談されたの」

「また……」

「不眠症なのは本当なの。許してって。で、何とも重い話を聞かされてしまったわけで

すよ」

「家族の距離感とは？」から始まり、最終的にピークは大分前に妹から明らかに「家族」の距離感でない接触——口づけをされてしまったことを聞いて、せつかく眠れると思つた中、思考が一気に浮上することになった。

その時浮かべていたジークの顔は、コーヒートの湯気でメガネが曇り感情が読み取れなかった。

しかし繕っていた表の「戦士長」の皮が剥がれて、心が外界に晒されていた。粉々に砕かれてしまったような、心の臓を。

「すぐに正気に戻ったのか、「忘れてくれ」って言われたけど、鈍器で殴られるような衝撃を受けたら、忘れられるわけじゃないじゃない？」

「だからって、どうしてあなたが兄妹の問題に顔を突っ込むのよ」

「キスに関してはそっちの問題だけど、その問題が私たちの方のままで被つたら困るから。仮にもジーク・イエーガーは戦士隊の戦士長。その判断ミスで、私たち戦士……いえ、マーレ政府が巨人の力を主戦力としていることを踏まえたら、マーレ全体の問題になつてくることだつて考えられる」

「……………そう」

「ねえ、ここは私に相談してみない？これでも恋愛経験は豊富なんだ」

「私だってモテます」

「お兄さん一筋じゃないの？ライナーのことも噂で一回断ろうとした、って聞いたけど。その分じゃ恋愛経験はないんじゃない？」

「……………ぐうの音も、出ない」

それこそ告白された回数は生涯すべてを数えたら、三桁は超えるだろう。兄のためならその身を他の男に利用することだって厭わない彼女はしかし、キッスが未経験（家族はカウントしないものとする。だがそれを言ったらジークも家族だが、今回はノーカンとする）だった。交尾は言わずもがな。

いくら一人で悩んでも仕方ない。アニは積極的な意見を出さず早期解決策しか提示してこないの、アウラとしての最善策が見つからない。

結局彼女は、おせっかい焼きのピーク・フィンガーに相談することにした。

「まず、どうして実の兄にキスなんかしちゃったの？」

「……………す、好きだから」

「それは家族として好きなのか、それとも禁断の愛？」

「……………全部、グチャグチャ」

「じゃあどの『好き』なのかはわからないのね？」

「……………いえ、どれもあつて、家族としても、その……………異性とかの、方……………でも」

「その感情が世間一般からしたら、異常って思われる自覚はある？」

「…あります」

「うーん、そつか。これはまた中々、難しいね」

アウラはどうすればよいのか、率直に聞いた。アニに相談した時揭示された、「なかつたことにした方がいい」という内容も踏まえて。

やはりアニに相談していたか——と瞳を閉じたピークは、深く息を吐く。

チクタクと響く、時計の針の音。

少しの静寂を待って、背もたれに深く寄りかかっていたピークは体を前のめりにし、顔を正面の女に近づける。

テーブルに押し付けられたそれに、アウラの目が向いた。まるで親の仇とも言わんばかりに。

「まあ、あなたの気持ちも共感できる。戦士長は今でこそヒゲ面のおじさんになつ——

「ハ？」……おっと、地雷だったか、ごめんね。貶してるわけじゃないから。今は実年齢より年上に見えるけど、候補生時代は格好よかったからね」

「お兄さまはずっとイケメンよ」

「……うん。話が逸れるような発言は少し控えてて。それで、ぶっちゃけると」

「…何」

「好きだった時期があります、私も」

「……………」

「そんな怖い顔しないでよ。飴ちゃんあげるから」

そう言い、ピークが上着のポケットから取り出した飴の包装が解かれ、白い色の楕円のそれが薄い口元に近づけられた。

何か入っていると怪しむアウラに、何も入っていない、と一度ピークは食べてみせて二回目を取り出す。

サスペンスでよくある手口、最初はフェイクで二回目が本命や——とまたもや訝しむ女。

それが繰り返され、ピークが意地汚いハムスターのようになったところで、ようやくアウラは飴を食べた。ミルクの味だ。悪くない。

「ふおれで……………ンンッ、ふおつと待つふえふえ」

ガリゴリと噛み砕く音が響く。飲食禁止の貼り紙の存在は、完全に意味をなしていなかった。

「それで、これは私の話になるけど、私が不眠症なのはあなたもすでに知っているでしょう？」

「ええ」

「今に限った話じゃなくて、どちらかというとき子供の頃の方が眠れなかったの。私は戦士だけど、周りよりも精神が弱めなのはわかってるから」

「でも、ドベちゃんほどじゃないでしょ」

「ドベちゃんはむしろ強い方よ。じゃなきゃドベのドベちゃんが戦士になるなんて、できなかつただろうから。マーレへの忠誠心や我慢強さ——言い換えれば強い心が評価されているもの、彼」

「……………」

「それでもボロボロになっちゃったのは、上手い避け方を持ってないからよ。全部受け止めようとしちゃうから、ドベちゃんは。そこが我慢強さの要因なのかもしれないけど、同時に弱点でもある。その点私は心の負荷を分散させる仕方を弁えている。だからドベちゃんより崩れにくいし、現に崩れていない、ずっと」

「……さすが、と云うべきなのでしょうね。ピークちゃんのその…頭の回転っていうのかな」

「でも、それでも眠れなくなる時がある。戦士な以上仕方ないことだとは思っている。候補生になる前とはかく戦士になることに意識を向けていたから、辛いことが多かった」

「ピークちゃんも家の事情が関係しているの？」

「そう。戦士のほとんどは、家族や親族関係で色々を抱えていることが多いと思うよ」

「……そっか」

「話を戻すけど、眠れないことが続いて精神的に参ってた時に、戦士長が膝を貸してくれたの」

「……………ホォー……」

「ちようど外で、ベンチの上で、お日さまが当たっていて…よく眠れたわ。それがきつかけだったかな」

「ソーナンダア…」

白銅色の瞳がより濁り、沸々と肌が栗立つような冷気が場に漂う。お兄さま至上主義の変態の地雷がいくつも爆破されていく中で、特大の地雷が踏まれた。メーデーメーデー、ただちに図書館から避難せよ。

「で、キスをしました」

瞬間、美女の口から長い間の後に、「ア、？」とドスの利いた声が漏れた。

内容はわからぬものの、種類の違う美女が気になり遠くから様子をうかがっていたモブ図書館員の男は、思わず柵に戻していた本を落とした。静かな館内に、響いた氷点下を知らせる声。二人の美女。翌日図書館員の間で壮絶な修羅場が話題で持ちきりになるのはまた、別の話。

「休憩中に寝てて、周りに誰もいなかったし、思わずね」

「……………」
「直後目を覚ました戦士長に想いを伝えたけど、断られちゃって」

「……………」
「子どもだからとか、年齢差だからとか、そういう理由で断ったわけじゃなくて。純粹に気持ちは嬉しい、って言った。でも恋はしないんだって、あの人。当時の私は戦士長の過去は知ってたからわかったんだ。きつと家族のことが関係してるんだろうな――」

「複雑な乙女心だね…」

テーブルに肘を置いて、両の手の甲に顎を乗せたピークは齒を少し覗かせて微笑する。

アウラ・イエーガーは確かにイかれたブラコン野郎であるが、同時に付随して人間の一面をしつかり持っているようである。その方向性は禁忌にズブズブ浸かっているが。

「結局のところ、話し合うしかないと思うよ。本で調べたりしてないで。そもそも自分の感情を知るために調べてそれがタブーだとわかったのか、その逆なのかはさて置き、逃げ続けるのは愚かだ」

「……わかってる」

「近親について調べていたのは、もしかしてその感情を正当化させるためでもあったの？ だとしたら、それはやっぱり逃げている」

「…わかってるって、言ってるじゃない」

「素直に謝るのも手だと思う。少なくとも行動に移したのはあなたなんだから。この場合被害者は戦士長の方。あなたのその感情が派生するに至った原因となったのが、かつて7歳のジーク・イエーガーの行動に起因していたとしても」

とある社会学者が提唱した内容によれば、幼い頃から同一の環境で育った者には性的興味を抱くことは少なくなるという。

それに基づく研究がいくつか行われた記録も存在する。

これに正当性があるなら、幼少期兄と別れてしまった幼女が成長して、性的な感情を抱くこともあり得るのだろう——と、そういう風にピークはいくらか知識を入れて、考えついた。

「謝れないわ」

「どうして?」

「……私の「好き」が本物だからよ。謝ったら自分の感情に嘘を吐くことになる。これまでいくらでも嘘を吐いてきたけど、そこは、それだけは……譲りたくない。こんな感情ない方が自分のためにもなるのに、ってわかってるのに。でも、捨てきれない」

「なら尚更話し合って、その感情を説明した上で、向き合わないと」

「………むり」

「けれどお兄さんは、きつとあなたに——妹に向き合ったんでしょ」

「………それは」

「最後にどうするのは、あなたが決めること。私はアドバイスをすることしかできな

「い」

ピークは最後の一個の飴を取り出して、固く閉じられている口元に押し込み、包装の紙をポケットに突っ込む。大量の屑が入ったそこは、彼女が動くたびにカサカサと音を立てた。

「後悔しない選択を取ってね。私はそろそろ行くから」

持ってきた本を置いたまま、席を立つピーク。

もだもだと、後ろに向かって突っ走っていたアウラの背を押したのは、接点のあまりなかった車力の少女。

口の中で転がるそのほのかな甘さにふと彼女は感じた。もしかしたらだが、いや、もしかするののか。

その考えが正解なら、ソファアで寝ていた件も、アウラの深読みのし過ぎとなる。

「……車力の恩返しってこと？」

松葉杖を持ったピークはその一言に目を丸くし、さあね、と首を傾げてみせた。

果たしてそれが囮ならずとも、戦士たちを救う結果になったア二の協力者への貸りを返したものだっただけか、アウラには分からなかった。

「後悔」という言葉が、前世のユミルを理解することのできなかつた狂つた少女と重なり、深い——深い息を吐く。

きつとこのまま今の問題を放置して、自分の目的を進めることはできる。

ただその果てに待ち受けるのが、ドス黒い腹をのたうち回る感情になってしまったらと思うと、やはり目を開けて進むしかなかつた。

今度は、前を向いて。

アウラ、逝（イ）つきまーす!!

「エプロン」とは、衣服の汚れを防ぐために使われる前掛けである。

調理や食事、手工業など、さまざまな用途で用いられる。

戦場に駆り出され、帰還しても仕事で忙しい男は、その日は珍しく夜が更ける前に自宅に帰ることができた。疲れた体と頭でカギを開けた先にいたのは、純白のエプロンを身につけている女。

丈の長さは膝上で、所々フリルのついているソレは世が世なら、メイドエプロンと呼ばれるものだった。

その女は男の妹であり、今会うには非常に気不味い——否、意図的に避けようとしていたほどには男にとって地雷である。

そんな妹は「お兄さま、ご飯にする？お風呂にする？」と宣ってきた。

彼女に想いを寄せるライナー・ブラウンであればきつと、オルガナーとなり左手を前に伸ばして倒れ、例の名言を聞かせてくれたことだろう。

問題は、女の肌が青白くなっていることだ。口元はうつすらと紫に染まり、体温が著しく下がっている。

では、何故体温が下がっているのか。それは側から見れば一目瞭然だ。

妹がマールレに来てからその奇行を度々目撃してきた兄であるが、その中でも中々にパUNCHの効いた衝撃である。

その、エプロンの下。覗くのはシャツでも何でも無い、地肌だ。

肌の上にエプロン。訂正すると裸の上にエプロン。くっ付けて「裸エプロン」。

馬鹿なのか？男は思った。

心配と同時に、呆れと怒りが沸々と沸いてくる。兄が帰ってくるまでキテレツな格好で待っていたことは想像に容易い。さらに言えば自分がいることを悟らせないため、カギをかけた上で暗闇の中で待っていたことも。

「それとも、わたし——と、お話し合い？」

男は先の一件からずっと悩んでいた感情がまるっと吹き飛んで、その時ばかりは体を氣遣わない妹に怒った。女に自身の着ていた上着を無理やり羽織らせ、ソファアーの上に正座させて。

た。 シュン…として見せている女はしかし、内心ビジョビジョになっていた。 変態だっ

???????

アウラちゃん。今コーヒーを飲んでいるの。

普通に会えば暗い雰囲気に含まれることはわかっていたので、それを打ち破るために
裸^強エプロン^硬に出た。

強硬策がソレでいいのかと疑問の声があるかもしれないませんが、全裸にエプロンだけの
姿でお兄さまの前に出る恥ずかしさを考えたら、これ以上なく私に相応しい方法でしょ
う。

むしろどうして今まで私は、裸エプロンという最上級のご奉仕スタイルを思いつかな
かったのか。きつとこの衣装は革命をもたらすはずです。

結果として、私は怒られてしまった。眉間に皺を寄せて「お前ねえ……」と一〇分ほどお怒りになられたお兄さまは私を殺す気でした。逝き殺す気でした。

そして私は昇天して、途中でソファアの上でぐんにやりと倒れたことでお説教タイムは強制終了した。

一応掴みとしては十分だったでしょう。気まずさは少しは払拭されていましたから。心底呆れてため息を吐きながら自室からブランケットを持ってきたお兄さまは、私の体を包んだ。

砂糖を入れ忘れたのか、本日のコーヒはかなり苦い。対し兄の方はいつも通り「熱ア」と怯んでから飲み始める。

豆知識ですが、猫舌の人は舌の使い方が下手なことが原因の場合が多い。特徴として苦手な人は神経の多い舌の先で熱い飲料を受け止めようとするため、熱さをピンカンに感じてしまう。飲むとするなら舌の中央や奥側で飲むことを意識すると、意外にあっさり飲めるようになります。もちろん生まれもつての舌の厚さや、神経の多寡で変わってもくる。

お兄さまも舌の先で飲まなければ、毎度熱さに不意打ちを食らわずに済む。しかし毛頭私に教える気はありません。当然だろ、苦しむ姿が見たいんだから。

「……で、話し合いに来たんだよな」

テーブルを挟んで私の対面のソファーに座ったお兄さまは、白い陶磁器に入った黒い水面を見つめながら口を開く。

少し、痩せた気もする。「お筋肉（＝お兄さまの筋肉）」も減少してしまったのだろうか。お筋肉が、ソナナ…。

「話すつて、何をだ」

「……前、のことを」

「前のこと？ 具体的にきちんと言え」

「………その」

兄は一切、私を見ない。湯気で曇ったメガネのせいで、その青い瞳がどんな色を孕んでいるかもわからない。今の現状を作り出したのは他でもない、私の責任で。

自分の軽率な行動が私自身を苦しめている。こんなはずじゃ、なかったただけだな。

腹の中で疼くこの「死にたい」は確実に、逃げから来ている。本当に嫌になってしまう。

「私アウラ・イエーガーは、実の兄に……キスを、してしまいました」

「そうだな」

「そのことについて、話をしに来たの」

「話ができると思っっているのか」

「……私は、したい」

「無かったことにするんだったら、もつと早く来ていただろうな。でもお前はずっと逃げていた。俺も逃げていた。なのに何で急に来たんだよ」

「このままじゃいけないと思ったから、だから……」

「どうして来たんだ、今頃」

「……ごめんな、さ」

「……………」

「ごめんな……さかい」

私がどう周囲に頼んでもやはり、兄に隠しきれないのはわかっていた。

一方的に被害を受けて、一方的に避けられて、そんな妹に会いに行く方がおかしい。妹の方から謝りに来るならまだしも。

ここまで冷えたお兄さまの雰囲気は初めてだ。戦場に行く前で、ピリピリしている時

と似ている。

結局とことん精神がえぐれた兄を前にして、私は謝ることしかできない。家族間以上の接触をしてしまったことに対して、そして、逃げたことに対して。

でも自分の感情にだけは嘘を吐きたくないから、そこは話さなきやいけない。

拒絶されてもいいから、話さないと私は後悔してしまうから。

もう二度と、悔いのある終わり方だけはしたくない。

「……………ア」

しかし上手く、言葉にできない。舌はあるはずなのにどうして発声できないのだろうか。

もしかしたら無くなってしまったのかと指で摘んでみても、そこには触った感触がリンクして伝わる私の舌が存在する。少し奥に指を入れすぎたせいで嘔吐き、目尻に涙が溜まった。

「…………ツ」

あれ？

「……………イ、」

あれ。

「……う……………」

あれ？

視界が歪んで、正常に機能しなくなる。涙は溢れないけど、頭が熱い。だのに体は寒い。

空気を吸おうとして、肺から溢れてくるのは自分の息だけ。喉元を思わず手で押さえ、苦しさに背を丸めた。その拍子に落ちたカップが割れて、床に広がる黒い液体が視界の隅に映る。

喘ぐ自分の声が、やけに冷静に耳に入った。どうしたというのだろう。

瞬間、腕に痛みが走った。手だ。お兄さまの手だ。

おかしな状態の妹を前にして、曇りが取れたレンズの奥では見開かれた瞳が見える。そのまま背をさすられて、自分の膝におでこをつけるように丸まった。

そうして暫くして、正常にできるようになった呼吸。暴れていた心音も緩やかになり、でも頭だけは中にマグマが入っているんじゃないかというほど煮えている。

そのままソファアの上に横にさせられて、胎児のように毛布に包まりながら、溢れた

コーヒーや割れたカップの後始末をしている兄の姿をぼんやりと見つめた。
室内を照らす灯りが眩しくて、ついと目が細まる。

（ああ…そっか）

そこでようやく自分が過呼吸を起こしたのだと気づいた。

発狂したことはあれど、過呼吸は初経験だ。精神的に相当参っていたのか。アウラちゃんたら自己管理が疎かなんだから。

声は出るのかと思い、「あ…あー」から始めて、「ゴリラ、あー、ゴリラ」と発声してきた。喋った妹に、布巾を持ったままお兄さまは何故か驚愕の表情を浮かべる。突然話した私に驚いたのでしょう。

このままお兄さまの上着と、お兄さまの毛布に包まれて永眠したい。

すべて夢ならよかった。前世も今世も何も無い。「私」という自我がない。ユミルの一部で、思考する必要のない存在でありたい。

どうしようもなく思考することが辛い。その本心は、生きることが辛い。

「大丈夫か？」

大きな手が伸びてきて、視界に影が差したと同時に頭を撫でられた。兄の手だ。兄の体温だ。

「……好き」

うわ言のように呟いた言葉に、横で屈んでいるお兄さまの目元が歪む。返事はないけれど。

兄として愛していて、家族として愛していて、同じ血を持つ人間だから愛していて、異性としても愛している。全部を混ぜた結果私の愛は「狂愛」となって、今お兄さまを苦しめて、私の首も絞めている。

——要約すればそんな内容を、ポツポツと話した。

お兄さまは何も言わない。ただ頭に触れている手は離れずに、優しく撫でてくれる。

静かに聞いてくれている。

「どれも持つてる。どの「愛」も持つてる。好きなの」

「……………」

「おかしいの、わかってる。でも本当の感情。好き。お兄さまが好き」

「家族愛と恋は、成り立たない」

「私は成り立つからおかしいの、お兄さま」

全部の「愛」を持ってはダメなのだろうか。ならば私はどうやって存在すればよいのか。

愛情がなければ私がお兄さまを曇らせることもなくなる。愛しているからこそ傷つきたい。曇らせたい。狂わせたい。

「……………どうしてあんなことしたんだ」

「一番じゃないから」

「……………は？」

「ジークお兄さまの一番が私じゃなくて、トム・クサヴァーだったから。そしたら自分の中の何かが切れて、気づいたらちゅーしてた」

「それで、したのか…？」

「私はお兄さまの一番になりたい。一番じゃなきゃ嫌だ」

「———さて、待て待て、ソレはどこから来る感情なんだ？性的感情ではないだろ」

「うん？……………そう言われればそうかもしれないけど、でも好きなのは本当だし、恋愛感情

もある」

お兄さまは頭を抱えてしまった。ブツブツと「いやでもやっぱり…」と、考え込む。

そうやって心と葛藤している兄の姿を凝視していたら、顔が上がった。漏れたため息はうわずつっている。口元は若干震えていた。目元は額に手を当てているので、レンズの光の反射と相まってよく見えない。

しかし確実にこれは……これは……!! (トウンク)

いえ、昂つちやダメよアウラちゃん。流石にこの場でトキメいては、最上級のクソ野郎の烙印を自分で押すことになってしまう。

「……俺はお前のことを妹として想っているし、正直、裏切られた気分だった」

でも、とお兄さまは続ける。

「愛」というのは変質する。普通家族は幼少期から共に育っているため、性的感情は抱かない。

逆に言えば、家族でも幼い頃に離れて暮らせば性的興味を抱く場合がある——というような仮説的な心理現象がある。

それが私に当てはまるなら、妹の歪んだ愛情を生み出したのは自分に他ならないと、

お兄さまは思った。

同時に調べた矢先で、図書館にある蔵書の裏のブックポケットに妹の名を見つけた。
…え？

ブワワつと、自分の顔が赤くなる。羞恥だ。羞恥の雨だ。

ということは、ピーク・フィンガーはお兄さまの名前があることも知った上で話していたのだろうか。お兄さまが本を借りていたら、の話だけど。もし本当なら冗談だと言ってくれよ、ドベちゃん。

「お前逃げた時泣いてただろ、傷ついた顔で。傷ついたのは俺の方なのに。兄妹仲良く揃ってバカ正直に悩んで、逃げてたってわけだ」

「……お兄、さま」

「気づいてたよ。お前がさ、家族愛や信仰心めいた感情とは別の感情を持つてるのを」

「——ッ」

「これでも戦士長なんだ。家族のことで、気が狂れそうになっているけど」

「黙ってたの？」

「言えるわけがないだろ。言って何になる？ 兄妹の関係が崩れるのが望みなのか？ ……違うだろ。お前も俺が気づいているのを薄々わかった上で、接してたんじゃないのか」

「そうだとしたら……どうするの？ 私が死んでいた方がよかった？」

「……冗談でもそういうこと、言うな。お兄ちゃん本気で泣きそうなんだから」

「でも、妹が生きていたからお兄さまは苦しいんじゃない」

「そうだよ。苦しいよ。けどお前が死ぬ方が嫌だよ」

大切な妹だから。

ジーク・イエーガーと血の繋がった兄弟の一人だから。

私だけでなく、エレンも愛していると言うお兄さま。

共に住んだこともない上に怒り心頭なエレンとのファーストミートだったにも関わらず、盲目的な愛情だった。私は比較対象にならないけれど、お兄さまの家族観というもの、かつてと比べて大きく歪んでいる。

両親と妹を「楽園送り」にした過去を、ずっと足枷として引きずり続けている。

これは言ってしまえば「依存」。

家族というものへの依存。

だからこそ私の感情を知りながら、拒むことが出来なかった。妹の接触到に性的な意図があればそりゃあ気持ち悪くなるでしょう。でも拒まない。拒めない。

だって私が妹だから。

悪魔の女が、ジークお兄さまの妹だから。

「アウラ、お前は勘違いしてるよ。俺の一番は家族で……お前だよ」

「嘘だ」

「嘘じゃない。何をどう勘違いしたのかわからないが、クサヴァーさんは確かに俺によくしてくれたし、今でも大切な恩人だ。父親のようにも思っている。その上で俺が進んでい、——戦士として進むのは、俺の今が恩人の命の上にあるからだ。もう止まらないし、止まってはならない。進むしかない」

「……じゃあ、何で飾ってないの」

「何をだ？」

「私の………絵、とか」

「覚えてるのか」

「…いや、やっぱりいい」

あんな絵（結構頑張ったのに、ゴミのような画力のせいで人間の形すらろくに描けなかった）、むしろ飾られていた方が私の精神値が下がる。無い方がいいんだ。無い、方が。

「紙は日光に当てると変色するだろ」

「えっ」

「……ああ、なるほど。あの時俺の部屋のボールでも思い出したのか」

何なら証拠の絵を持ってこようとする兄を止めた。あのハンジ・ゾエに引かれた画力など見たくない。せつかくのこの美貌が、描いた絵のせいでマイナス点をいただく程のある意味芸術的な絵を。

「…お兄さま、私は実の兄にクソデカな感情しか抱けません。それでも側に居たいです。あと五年しかないのなら尚更」

「女の子が『クソ』とか言うんじゃない」

「私もう成人してるんですけど……?とにかく、離れたくない。もう十分過ぎるほど離れた」

「………難しいよ」

「最低限ちゅーもしたい」

「最低のレベルがクソ高い」

「お兄さまが『クソ』なんて使わないでください」

「俺は別にいいだろ」

「最高セツ「言わせねえよ」……………ムウ」

仕方ありません。押してダメなら引いてみる。

交渉事は最初に無理難題を掲示して、後から本命をぶち込むものです。

「ちゅーだけでいいから」

「ダメ」

「ピーク・フィンガーとはしたのにな？」

「……………やっぱり、ピークちゃんの入れ知恵か」

「か、家族だつてちゅーぐらいするじゃないですか！」

「お前の言うキスの範囲がまず間違つてるからな」

「え？」

「……………え？もしかしてお前の普通の範囲がアレなのか…？」

「アレって？ちゅーはちゅーじゃないですか」

「待て、認識の相違だ。是正しなければならない問題が起きた」

まるで160cmの男のように手を前に出して、オイオイオイ…な雰囲気を出すお兄さま。いったいどうなされたのでしょうか。キスはキスです。キスはキス。大切なことなので二回言いますし、訂正することなんて何一つございませぬ。

「お前がしたの、ベロチューだから」

「……………」

「小首を傾げて「言っている意味がわからない…」って顔してもダメだよ。というか俺が許さねえよ。ピークちゃんにはボカさざるを得なかったけどさ」

「私が初ちゅーだったことも言った方がいいですか？」

「……………」それは、知りたくなかった情報だな……」

タガが外れている時のアウラちゃんは自分でも驚くほど馬鹿力です。人間のリミッターが外れた状態になるのでしょうか。

そんな私がお兄さまを——そう、もうお分かりですね。変態美女の逮捕案件です。幸いアニ・レオンハートはすでに憲兵ではありません。ピークちゃんが図書館で会った時に私に引いている様子はなかったので、お兄さまがちゅーの詳細について語っていないだろうことも想像が付いていた。

まあだからこそ、関係修復が無理だと思いう要因になっていたのですが。

「じゃ、じゃあ頬でいいから……」

「……………」

「ほんの先つちよだけでいいから……」

「暗にハードルを上げただろ」

「……つち、バレやがりましたか」

こつそり仕込んだ凸凹合休の件は見抜かれてしまった。さすお兄。

お兄さまは俯きがちに暫し黙って、への字にしていた口を開いた。

小さく、わかった、と話す。

「ただし次過剰な接触をしたら、俺は本当にお前と……どう接していいかわからなくなるからな」

「おかしくならなければ大丈夫です」

「地雷を踏んだ例がいくつか上がってるから怖いんだよ」

「き、気をつけましゆ」

「………ハア」

遅くまで仕事をして帰ってくる時より疲れた顔のお兄さまは、私を抱きしめてあやすように背を叩く。私の心音と精神が異常値を来していますが、我慢した。

先ほどの今でどうして過剰なスキンシップをなさるの死ぬ。

「十八年ぶりに妹に会って、少なくともあの時のアウラはちゃんと“妹”だったよ。泣いて、泣き疲れちゃったお前がな」

「……うん」

「兄妹のボーダーラインを守ろうともしていた。だから……ごめん」

「お兄さま？」

鼻を嚙る音がする。お顔、お顔が見たいのにガッツリ抱かれているせいで金髪とうなじしか見えない。

お兄さまの泣き顔が見れない……うわああああああ（シ○ジの絶叫感）

「受け止めるしかできない、俺^{兄貴}で……ごめん」

でもお声だけで十分絶頂できるくらい、お兄さまは曇っておられました……♡

【八章】 MADE—IN—ホニヤララ編 売れないロックバンド

天上下唯我独尊な兄を持ってしまった世界一ラッキーな妹は私、アウラ・イエーガーちゃん。

26歳になった私の美貌は衰えを知らず。髪もすつかり伸びて腰を優に超える長さになりました。毛先に行くほど明るい金色に近づきます。無論ダメージを受けて髪が傷んだ結果の色ではない。極上のキューティクルをお母さまから賜りしこの髪は、そう簡単に傷つかない。

ちなみに切らなかつた——というか切れなかつたのは、ユミル神から圧力がかかっているからです。髪だけに（激寒）

四年続いた中東連合との戦争もマーレ国の勝利で終わり、講和条約が締結された。号外の新聞で見た内容である。

お兄さまもご無事でよかったです。戦士が死ねば記事に載る事態になりますから。

偏にここまで時間がかかってしまったのは、「始祖奪還計画」に失敗し、国力（＝巨人）の一部をパラデイ島に奪われ弱体化したため。

失った《超大型巨人》は謂わば爆弾。それも通常の物と比較にならない威力の兵器だ。それが無くなった痛手は戦争を行った当事者らが一番体験したことだろう。

基本の戦闘では《獣の巨人》が投擲攻撃による“矛”で、《鎧の巨人》が“盾”。援護が《車力の巨人》。

そして、状況に応じてオールラウンダーに動くのが《女型の巨人》。仕事量が多いのは相変わらずアニのようだ。南無。

今回は勝利できましたが、対巨人用兵器がさらに発展を遂げれば、マーレの大国の地位も揺らぐでしょう。そう遠くない未来に。

ようやくジーク・イエーガーの「俺のターン（ドロー！）」がきたわけです。

お兄さまも戦争が長引くと分かっているけど、流石に四年もかかるとは思っていません。たのではありませんか。それは戦士長だけでなく、マーレ政府も同じに。

『安楽死計画』に向けてお兄さまは布石を打って行っている。そこら辺は私はノータッチなので、ガンバレ、としか言えません。

最初の調査船団でパラデイ島に向かったイエレナが、うまくやっていたらいいんです

けどね。

調査船団はすべて帰還していないため、義勇兵が潜入できたことはほぼ間違いないと思います。

一応言うとして、お兄さまの計画の邪魔になるようなことは彼女に頼んでいない。

あくまで、エレンくんが私へ抱く感情に対して多少のテコ入れを行ってほしい——といった具合だ。

忠犬かどうか百パーセントは信じられないレナ公は、悪魔なご主人にヨシペロしてもらいながら「がんばりまひゅう：♡」と言っていた。

まあ彼女が失敗しても、私自らエレンくんとお話し合いする機会を作って、感情を誘導してあげましょう。

私の出番は弟とお兄さまに挟まれた時。果たしてその場面にまで持ち込められるかわかりませんが、「最高の最期」に向けて頑張ります。

ただしお兄さまの中で、巨人の力を持つ王家の人間との接触なしでエレンが始祖の力を一時的に使った点や、人間であれど王家の血筋を引く私なら、エレンと接触して何かしら反応が起こる可能性があるにも関わらず特に何もなかった点を踏まえ、疑問を抱く箇所はいくつかあるようです。

いったいどこの金髪蒼目美少女ちゃんの仕業なんでしょうねえ…。

どの道残りの任期は一年しかないから、計画を実行せざるをないのでしょうけれど。あと一年です。あと一年。約365日。

365日後に死ぬお兄さま……この世なんていらねえな（本気^{ガチ}）

私の寿命はそれより短いですね。お兄さまより長く生きる気なんて、天変地異が起こつても絶対^{絶対}にあり得ないのでご安心ください。

進むしかないこの残酷な世界で、アウラちゃんは有終の曇らせを味わって、余生はユミルたそとキャツキャウフフ♡と過^ごごしてやります。

そして、戦争を終えた兵士らがマーレに帰還し、レベリオ収容区の外へ出る巨大な門の場所^{場所}で私含め多く^{多く}の人間が家族の帰りを待った。

祖父母と待つ^{待つ}ていつものフェイム^妹ープでお兄さまを曇らすのもよいですが、今日は二人から離れて後方で人々の姿を観察する。

そりゃあ誰よりも先に、それこそ門が開いた瞬間脱兎の如き勢いでジークお兄さまに

抱きつきたいですが、暫しの辛抱です。祖父母の後、絞殺する勢いで抱擁します。

門が開いて家族の元へ向かうエルディア人兵士。

私の目当ては知り合いの様子をうかがうこと。家族の対面を果たして早速家に帰り始めた人々の隙間を縫うように視線を巡らして、最初に発見したのはフィンガー家。

今回のスラバ要塞の作戦では巨人の次期継承者を見定める意味合いもあり、戦士候補生らも参加した。その中のウドくんやゾフィアちゃんも家族に抱きしめられている。

美しい光景ですね。家族が涙ながらに、生きて生還した兵士を抱きしめる。

これを見たいがために、最初にお兄さまの元へ向かって脳内がドロドロになる前に、後ろでスタンバっていたわけです。脳内絶頂モードでは他の不幸を享受できませんので。

お兄さまのお姿も見えた。というか、一番最初に私が群衆の中で見つけた人なんですけど。

首を傾げ周囲を見渡した後、祖父母を抱きしめた。

美しい……これ以上のゲイ術作品（宗教画）は存在し得ないでしょう。

グライス兄弟はなぜか兄の方が青白い顔で頭を抑え、父親に肩を持つてもらっている。戦士候補生になった子どもたちは、今や私の胸元に顔が迫るまでに大きくなった。それを言うと、コルトくんには抜かされてしまったんですが。

エレンやミカサちゃんですらで実感した子どもの成長というのをひしひしと感じている。

また、万年ドベだったファルコくんは努力の末、好成績を残して無事に戦士候補生入りした。

ガビについて色々とファルコ少年から聞かれる身としては、愛の力にニチャニチャしてしまいます。

アニちゃんの方はいつも通りで、父親を抱きしめている。彼女については髪が伸びた以外、何も変わっていません。ピークちゃんが少し背が伸びて、胸もさらに成長したにも関わらず（ギリイ）。

これを言うとなニ本人に殺されるので気をつけましょう（4敗）。

最後にブラウン家は……ガビちゃん的笑顔が眩しいです。

両親の元へ駆け寄った従妹と離れたライナーナイスガイの方はというと、視線を彷徨わせています。

未だに返事を聞かれて断り続けている美女ちゃんとしては、せつかくの家族との時間

を邪魔したくないのでね。こちらに視線が向きそうになったら、人の後ろに紛れて姿勢を低くします。戦争で活躍して「副戦士長」にまでなったのだから、早くイイ人を見つけてしまえばいいものを。

アウラセラピーで飴と鞭を使い追い込んであげていますが、「恋」の感情がそれを阻害してナイスガイの精神を奮い立たせる結果になっている。

物事とはなかなか上手くいかないものですね…。

そろそろ人もまばらになってきて、座り込む美女に気づくと顔を赤く染めたり、訝しむ。隠れられなくなってきたから観察タイムも終わりだ。

人間魚雷アウラ・イエーガーちゃんの出番である。

目標位置は「ON I I S A M A」。これから特攻作戦にかかる。

松葉杖で重心を取りながら立ち上がり、攻撃態勢に入ったところで、事前に目視していた目標の位置が大きく変わっていた。目の前……だと……？

祖父母は元の位置から変わっていない。こんな愚妹を探しにきてくださったとでもいうの？

——今日を命日にします。（我が人生の終わりに）乾杯。

「何をコソコソしてるのかな」

「おっと、こんなところに石がツ——！」

松葉杖がつかまらずいた拍子に手から滑り落ちてしまいました。自分から離れたように見えるって？気のせいです。

倒れた可愛い妹をまさか兄が助けられないわけがありません。

角度は完璧。このまま倒れれば兄の胸元へと顔が突っ込む。もし斯様な競技があるのだとしたら、私に勝てるものなどいないでしょう。

さあお兄さま、手を開いて「お筋肉」を堪能させろ（血眼）。

「えっ」

しかし事前に予期していたように、お兄さまは倒れる妹の両肩を掴んで転倒を防いでしまった。なぜ？私の策略が見抜かれていたというの？さすお兄。

「前に同じ手を使ったからな」

私としたことが、しくじってしまいました。倒れたフリをして、ラッキーすけべを敢行したツケが回ってきてしまった。

転んだまま前に突き出した手で胸筋に触れて、揉んでしまったことがダメだったんでしょうか。……いや、絶対ソレか。

色々とございしましたが、お兄さまはすっかり奇行が多い妹の扱いに慣れてしまわれた。

ドライな対応を取られる度に、アウラちゃんは毎度のことメス堕ちしてしまいます、

「祖父母には抱擁したのに、妹にはしてくれないんですね……」

「中身も可愛い妹だったら抱きしめてあげるよ」

「……じゃあ、いいもん」

自分の年齢はさておき、頬を膨らませて松葉杖を拾おうとしたら、大きなため息が聞こえた。「つたく、もおー……」と呟いたお兄さまの両手が自分のお腹あたりに回り、抱きしめられたまま持ち上げられる。

突然の事態に思考が停止した私は、大きく揺れた体を抑えようと兄の頭に抱きついた。

ナニが、とは言いませんが、大きければ押し付けられたのに。

「お、おお、おに、お兄ちゃん!？」

周囲の目が向いているんですけど。微笑ましそうだったり、驚いていたり。一部始終を見てしまった知り合いの視線が突き刺さるんですけど。ほらガビちゃんなんか、

ニッコニコしているぞ。

はず、恥ずか、し……（遺言）

「ようやく戦争が終わったぞ——アウラ！」

そのままグルグル回された私は、途中で気持ちが悪すぎて失神したのでした。

お兄さまも戦争が終結して嬉しかったのでしょう。でも公衆の面前で妹を絶頂死させるプレイは………好き♡♡

??????

戦争からジークお兄さまが帰ってくることは嬉しいです。しかしその都度銃声がパアンパアンと飛び交い、手榴弾がドピュドピュと舞う戦場で心的外傷を負った兵士も量産されるため、戦争帰りの後は仕事が忙しくなる。その分アウラちゃんのオカズが増えてしまうわけですが（ニチャ）

本職ではないにしろ、人手が足りなくなるので半ば無理やりな形で病院にお願いされる。

アウラセラピー（初心者向け）は中々評判が良いのです。

まあ当然ですね。美女が親身になってケアをしてくれるわけですから。むしろ元気にならない方が（息子♂さんを）疑ってしまいます。

そして、お兄さまの羞恥プレイを受けて私が失神した日のこと。

祖父母との食事も吹っ飛ばして、気づいたら夜、自分のベッドで目覚めた。お兄さまがずつと運んでくれたわけである。

こっそり兄の自室を窺いましたが、すでに寝ていた。酒瓶があったので飲んでから寝たと思われる。

流星に疲れ切っているお兄さまを邪魔をするわけにはいかないので、シャワーを浴びてから大人しく自分のベッドで寝ました。

それから翌日。

患者の皆さんの砕けた心のエサを求めて私は病院へ向かい、天使アウラ・イエーガーちゃんへと変身した。

一日があつという間に過ぎ去り、夕方。

屋上に干した洗濯物を取りこみにきた折、柵に身を預けて空を眺めている負傷兵を發見した。

何度か無理にでも高い柵を乗り越えようとするエルディア人を見たことがあり、そのたびに発狂する兵士を引きずり下ろしてきた。

落ちても死にはしない高さですけど、骨折でもしたら看護婦や医者の仕事が増えるんでね。逆に言うくと死ねないがゆえに、落ちてしまつたら痛みに苦しむ姿を見れてしまうというわけですが。

「こんにちは、新しく入院された患者さんですか？」

カゴを置いて負傷兵の元へ近づくと、負傷兵はゆつくりとこちらを向いた。

身長はお兄さまとほとんど変わらない。右足の膝から少し上が欠けていて、髪は男性にしては長い。伸ばしっぱなしか。左目と額を覆うようにして巻かれた包帯に、うっすらと生えたヒゲ。一瞬レナ公の線を疑っていましたが違ふようだ。

綺麗だった翡翠の瞳は、深い深い闇に沈んでいる。

私を捉える深い深淵にうっかり絶頂しないよう気をつけながら微笑むと、負傷兵は口を開いた。

「どうも……エレン・クルーガーです」

イエーガーさん、と続けたクルーガー。

私でさえ読み取れないほどの深い深淵の奥深くで彼が何を抱いているのか、楽しみで仕方なかった。

われわれは。

ウォール・マリア奪還作戦から一年後。

パラデイ島の巨人はすべて掃討され、ウォール・マリアへの入植許可が出されるとともに、およそ六年ぶりの壁外調査が行われた。

そして調査兵団は地平線まで広がる青い世界を、—— “海” を知る。

また同年、マールから送られてきた第一次調査船団がパラデイ島へ到着する。

その中にいたのが、ジーク・イエーガーの協力者である「反マール義勇兵」。

偶然船団と鉢合わせた調査兵団は、エレンの巨人の力を使い船を陸へ上げ、一部のマール兵を人質に取り話し合いを求めた。しかしそれは失敗に終わり、本格的な戦闘になりかけた。

その時組織のまとめ役である「イエレナ」ら、義勇兵の裏切りによつて、残りのマール兵は拘束された。

そして義勇兵らは、ジークの目的が「エルディア人救済計画」であることや、弱体化したマールが諸外国と戦争になっている現状。さらにパラデイ島が置かれている状況について説明した。

なぜ戦士長たる男が祖国を裏切るようなマネをするのかと問われれば、彼が父グリシャ・イエーガーの意志を継いだ真の「エルディア復権派」だからである——とした。この計画において、必要となるのは《始祖の巨人》と王家の血を継ぐ巨人の二つ。パラディ島を守るため、「抑止力」として「地ならし」の方法が打ち出されたのだ。

そして女王やザックレー總統、三兵団のトップを揃えて話し合いが行われることになつた。

ジーク・イエーガーと言えば《獣の巨人》であり、ラガコ村の一件を引き起こした張本人とされている。

当然そんな男を信じられる者は少なく、同様に義勇兵らに不信をいだく者が後を絶たない。

だが今の文化・文明の遅れた壁内人類にとつて、義勇兵らが提供せんとする世界事情や技術は、あまりにも目から鱗の話であつた。

ジークの要求は王家であり《獣の巨人》の継承者である自分を亡命させ、《始祖の巨人》を持つエレンを引き合わせる事。

対価としてパラディ島の安全の保障や、上記でも述べた武器や最新技術の提供。

さらに、エルディア友好国であるヒイズル国の橋渡しやマーレの情報工作の支援な

ど、多くの恩恵をパラディ島は受けることができる。

ジークの計画が本当であるかどうか、信頼に足りるかどうか、肯定する者は中々現れない。

ただこれからも続々と調査船が来る以上、エレンがワツシヨイした船の無線機が必要となる。

それを操作できるのは捕虜にしたマーレ兵を除いて、義勇兵のみだ。

今回最初の調査船団を止められたのは本当に偶然である。次からいつ、どのタイミングで現れるかわからない調査船を待ち受けるとなると、かなり難しい。

ずっと港周辺で、スタンパってました（ツラ感）をするわけにもいかない。

また、もし仮に「地ならし」の件が可能だとして、問題となるのは今後のパラディ島について。

仮に地ならしを行ったとして、その効果がどれだけ続くかわからない。

パラディ島の継続した安全性を考えるなら、ジークの寿命が短いと考えられる以上、その代わりに白羽の矢が立つとすればヒストリア。彼女の存在が必須となる。

これまでのレイス家のように、親から子へと巨人の力を継承させていくのか。それも十三年の期限付きで。

ヒストリアと同期だった104期生からすると、酷な話である。

女王と同様に王家の血を継ぐアウラ・イエーガーの存在もあつたが、それについては交渉の中に入っていなかった。

ハンジらが事前にイエレナに尋ねたが、ジークの信奉者らしき彼女は眉間に皺を寄せ、調査兵団の裏切り者たるアウラが介入すると交渉の軋轢を生む可能性があるため、その身柄も含めて計画には関わっていないことを明かした。

果たしてそのイエレナの反応が、アウラ・イエーガーが始祖ユミルの「寵愛の子」であることを知った上で、有用な手駒となるため隠しているのか――。

それとも単純にアウラがジークに打ち明けていないのか――判断がつかなかった。それに思いきって、真意を確かめたハンジ団長。

右にリヴァイが座り、左に腕を組んで仁王立ちしながら事の様子を見守るミケに挟まれ、紅茶を啜るイエレナを見やった。

結果、話を聞いたイエレナの反応は驚愕、といった様子。彼女の隣にいた、同じ義勇兵のオニャンコポンは咽せていたほど。

アウラが兄にも「寵愛の子」の件を話していないことは、百パーセントでないにしろ、

一定の確信が持てた。

まあ、一度巨人化した母親の腹の中から出てきたと知れば、大好きな兄はショックを受けてしまっただろう。あるいは恐れられる可能性もある。

そして「寵愛」の件を受けて、ウォール・マリア陥落当時。彼女がマリア内を重傷で移動したことにも一つ、仮説が立てられた。

それは一度だけでなく、二度——あるいはそれ以上に、アウラが始祖ユミルによって復活させられている、というもの。

これは超大型を継承したアルミンが前継承者のベルトルトの記憶の一部を見たことで分かったことであるが、アウラは一度ベルトルトとアニに遭遇している。それも、壁の上で。

その時のケガの様子から、到底マリア内を単騎で移動するのは不可能に近い、と判断されたのだ。

またベルトルトがアニの身を案じ、彼女に協力を打ち出した時の記憶も一部、アルミンは見た。

兄を、ジークを愛する女の姿。

それはエレンに見せた愛情の比ではなく、ドロドロと全てを溶かす酸のような——存

在が許されぬ「愛」の姿。

狂った愛、と言つてよいだろう。

即ち、「狂愛」。

そんな女を好きだったアルミンは鬱屈とした気持ちに追いやられ、エレンの内心の方はもはや想像もできなかつた。

ウォール・マリア奪還作戦以来、無自覚シスコンだった少年の姿は消えて、一切姉の話題を口にするには無くなつたのだから。

エレンの心のネジが取れて、そこからドロドロとした感情が漏れていることにアルミンは気づきつつ、具体的な解決策を見出せずにいた。

結局壁内人類は、有用すぎる条件を前にして、呑むことしかできなかつた。ただ相手の腹の底が知れない以上、完全に信頼はできない。無論信用も。

ゆえに表面上は友好をみせ、警戒を怠らぬ形で交渉はまとまつた。

ただし向こうの意図はともかく、ジークだけでなくアウラも確保する形で。

始祖ユミルに寵愛されし王家の子。今後の展開において、何かキーになる可能性は十分にあつた。

特異な存在であるとわかりながらマーレに置いておくのは危険である。

一度裏切った人間を回収するというのは、中々複雑な心境であるが。

アルミンが荒唐無稽であるとしつつ、エレンが一時的でも始祖の力を使ったのは何か姉の存在が関わっているのでは——？と思う中、話し合いは終わりを迎えた。

それから無線機を使って第二、第三の調査船団の兵士を無事に捕え、時が経ち、翌年パラディ島に港が完成し、ヒイズル国の特使であるキヨミ・アズマビトが訪れた。

そこで東洋の血を引くミカサの体にある刺青から、彼女がヒイズルの忘れ形見である將軍家の末裔であることも判明しつつ、キヨミはジークの「三つの秘策」を持ち出した。

一つ目は「地鳴らし」を実験的に行い、その脅威を世界に知らしめること。

二つ目はヒイズル国が介入し、パラディ島の軍事力を世界レベルに引き上げること。そして最後が《始祖の巨人》と、王家の血を引く巨人の二つの持続的な維持。

まずキヨミがパラディ島に訪れたのはジークの介入があったからであり、両者間で事前に話が行われている。

アズマビトの金の匂いに敏感な部分を利用し、ジークはパラダイ島の地下に眠る莫大な「氷瀑石」と呼ばれる資源と、ミカサの存在を持ち出してキヨミと取引を結んだのだ。ミカサの情報については、彼女が「アツカーマン家」ということもあり調べられた中、東洋の血を引く点とかつて將軍家の末裔が巨人大戦の混乱の中、壁内に置き去りにされてしまった事実を踏まえて、將軍家の可能性を見出したと思われる。

もちろん絶対な話ではない。あくまで可能性がある——というだけだ。

そしてやはりと言うべきか、ジークの《獣の巨人》を継承する話がヒストリアにきた。王家の血を引く彼女は十三年の任期を終えるまで、可能な限り子を産む。

なぜ、ヒストリアなのか。

それは別段、妹でもよいはずだ。

その理由にあるのが、アウラ・イエーガーが子を残すように幼い頃から告げられていた点である。

イエレナ曰く、ジークがそれとなく聞いた限りでは彼女に“子を残す意思”はない。

それは周囲が認める美貌を持ちながら、いぞ彼女が恋人を作らなかつたことを挙げると、一つの裏付けになる。

だからといって、ヒストリアのみにその重責を押し付けるのはどうなのか。女王はその運命を受け入れたが、簡単に首肯できない者も多い。

もし壁内に連れてきたアウラが協力を受け入れるなら、獣の継承の話は彼女に回る可能性もある。無論無理やり……ということはない。

(一部の過激派を除いて)その多くはいくら裏切り者といえど、非人道的な行いを強いるつもりはない。それにした場合、彼女を寵愛する始祖様がどのような反応をするか、想像にできない。

それを言い出したらなぜ彼女はユミルに愛されているのか——と、疑問の沼にズブズブと浸かってしまう。

そもそも計画に加わっていないというが、ジークは妹に計画を話したのか。残る疑問は多かった。

それでも人類は明日へ向けて進むしかなかった。

生きるためには、前へ進撃する他なかった。

それからさらに翌年。港に続き鉄道の開発が進む一方で、アズマビト家と貿易交渉が

うまく行かず、アズマビト家を介して他国と貿易を図る策は見送られることになった。そのためハンジはマーレに拠点を作る作戦を見出し、潜入調査が計画された。

姉の裏切りから三年。その間、瞳から光を失うことが増えたエレンに寄り添ったのは、ミカサ。

少女におせっかいを焼かれれば「やめろよ！」と怒っていた少年の姿はなく、世話を焼くミカサの言動を受け入れるがままのことが増えた。この変化にジャン以外は「おっ……？」といった反応である。

いよいよ鈍感ボーイもミカサの家族愛ではない感情や、エレン自身の感情に気づいたのか。

ともかく、二人の間で一つの転換点を迎えたのは周囲も気づいていた。

この時期どこかの金髪蒼目の少女が、変態美女よりもこちらを熱く観戦していたかもしれない。神のみぞ知る。

そして、鉄道もようやく完成した頃。

イエレンとの密会を経て、進撃する少年の一步は仲間から大きく外れる。

鮮やかな翡翠を失った、その闇を含んだ瞳は何を見つめるのか。

少年をこっそり眺める始祖様はそんな表情を見るたび、自分でもわからぬ奇妙な胸の高鳴りを覚えるようになってしまった。

変態女の歯牙が、いよいよ彼女に及んできてしまった瞬間である。合掌。

???????

「まず前提として、ここには盗聴器……音や声をこっそり聞ける機械とかはないから、安心して」

そう言い、ベンチに誘導した少年を隣に座らせるアウラ。

弟の方がわずかに低かった身長は、今やエレンの方が高い。

元より兵士にも関わらず華奢だった女の体は服の下からでもわかる、より細くなっている。列車用のレールを数本かつげるミカサと比べれば天と地の差だ。

突如現れた弟を前にして、姉は取り乱した様子はない。しかしエレンの登場を予期していたわけではないだろう。

まだ少年はジークにはおろか、自身がマーレにいることを仲間にも伝えていないのだ

から。

彼は視察に訪れた調査兵団に何も告げず行方をくらし、単独行動のままマーレに留まり潜伏している。

「老けたね。まだ19でしょ？ 四年どころか十年以上経ってしまった気分だよ」

久しぶりの弟の再会ゆえか、嬉しそうに語るアウラ。その内に何を思っているのかエレンは理解できず、姉もまた、すっかり闇に染まった弟の内心を量りあぐねている。

YOUユウは何しにマーレへ？との問いに、エレンは簡潔に「ジークのお持ち帰り」という内容を話した。

また、まだジークと接触していないことについても。

「私がここで働いているのは知っていたの？」

「いや。祖父がいるとは思っていた」

「ああ、なるほど。お祖父さまはレベリオ区の診療医だからね。見当としてはここになるか。それでミカサちゃんとは結婚した？」

「……………」

「何だい、ツレないな。前のエレンくんだったらツンツンしながら、デレつとしてくれた

のに」

グツピーも逃げ出す二人の温度差。弟は終始無機質な声のトーンである。

ここに三人兄弟の兄が召喚されれば、空気に耐えきれず胃を押さえて、その姿が妹のオカズになるだろう。

「まあその歳になつて、自分の感情に気づかない愚かな弟だとは思わないからね。ミカサちゃんの件は流そうか。ジーク・イエーガーを連れて行こうとしているということはつまり、義勇兵はしつかり仕事をしたんだね」

「お前はどこまで聞かされているんだ」

「お前、か……。兄さんからエルディア人の救済計画については聞いたよ」

「ソレじゃない。聞かされてるんだろ、ジークの妹なら」

「…と言つても、それじゃないつてなつたら、「エルディア人安楽死計画」しか、おねえちゃん知らないぞ」

計画については全貌を知っているのみで、関わってはいない——と続けるアウラ。反応のないエレンは「そうか」とだけ呟いて、姉の、白銅色の瞳を見つめた。

「なぜ、調査兵団を裏切つた」

オレを、とは言わない少年。アウラの口角は下がり、瞳を伏せて沈黙する。そして「兄のため」と返した。

「私は兄さんに、会いたかった」

「それが理由か」

「ええ。兄さんに会いたくて、兄さんに殺されたくて、兄さんに愛されたくて、兄さんと一緒になりたくて、私は兄さんで構成されていて、兄さんしか目が入らない。私の世界に区別があるとしたら、『兄』と『その他』。その二つに分けられる。エレンくんは後者よ」

「……そうか」

「お父さまの本は見たのでしょう？なら私の家族への固執——延いてはお兄さまへの執着も、書かれていたんじゃない？」

「全部知ってたんだな。壁外のこと、巨人のこと」

「概ねは、ね。十年以上いかなかったツケというのは大きくて、マーレに来てから知識を付けるのは大変だったけれど、同時に面白くもあつたわ」

「あの日、ウォール・マリアの奪還作戦の時、どうやって現れた」

「……うん。まあ、その話になるよねえ」

アウラとしては、マーレには私兵を作つて逃げる時に協力させた——と話している。だが当然、壁内で彼女の協力者がいないことはわかつているはず。

ゆえに持ち合わせる解答がない。矛盾点が露見し、事が大きくなる前には死ねる算段だったが、エレンの予期せぬ登場により、今「why?」の部分が突きつけられている。弟の死んだ表情を見ると、イエレナは彼女の思惑通り上手くやってくれたのは確かだ。

アウラがイエレナに頼んだのは至極シンプルなもので、壁内にいる間それとなくエレンに姉がジークと幸せそうに暮らしている——というような内容を、伝えてほしい、というものだった。

そのため敢えてイエレナとアウラの二人はジークの事で、互いに嫌悪し合う間柄とした。

一方は信奉者で、一方はブラコン女。

そうすればアウラの話が出た時、イエレナなら「ジークにベタベタしているブラコン野郎」、アウラなら「兄にベタベタするアバ〇レ女」——という風に、話すことができる。さらにアウラの企みも、イエレナを通してバレにくくなる。

イエレナの演技力を見抜いた上での、アウラの頼みだった。

そして弟を差し置いて、しかも人類を裏切った中で兄と楽しく過ごしている妹の図と
いうのは、当然弟には憎々しく映るだろう。

それをアウラは狙った。

全ては、最高の最期を迎えるために。

黒い感情を抑えきれなくなった愛しい弟が、姉と再会した後に、激情に任せて殺すよ
う仕向けるために。

もちろん激情を誘うためなら、彼女はその本性さえ見せて、人の苦しみに絶頂するク
ソ野郎として殺されただろう。

死ぬ舞台は無論主役であるジークがいなくては始まらない。

兄の前に殺され、弟によって殺される。

どんな表情を兄は浮かべてくれるのか。弟はどれほどの激情を見せて自身を殺すの
か。想像するだけで変態は脳内絶頂をキメる。

だが弟の出会いとは突然で、兄の居ない間に会ってしまった。予想外の事態であ
る。流石にこの場で殺されては元も子もない。

「——ユミル」

それにアウラは、瞳を見開く。

「私が王家の人間であることはバレていると思っていたけど、どうしてユミル・フリッツの名前が出るの？」

「とぼけるな。始祖ユミルの「寵愛の子」なんだから」

「…………お父さまの、記述にあったのか」

「母親の腹から再び生まれた寵愛の子。それがアウラ・イエーガー、26歳」

「何で年齢を言うのよ」

「26歳」

「お黙りなさい、老け顔小僧」

また可能性として立てられていたウォール・マリア陥落時の仮説について聞かれた姉は、存外簡単に認める。

「もう隠しても仕方ないことだものね。戦士が来たなら、お兄さまも来たと思ったのだけれどいなくてね。美味しく巨人の皆さんにただだかれたわ。復活……？というか目覚めたのはそれからしばらく後で、お母さまの時と同じように巨人のお腹から出てき

た。こちら辺は神のさじ加減というか、私も図りあぐねている部分ではある。ア二の時も少し手順は複雑になるけど、エルディア人が繋がる「道」のようなものを通って、気づいたらマリア内に居た」

「なぜア二も一緒に行つた?」

「マーレに行くにも何の土産もなしじゃ、遅かれ早かれ「楽園送り」から帰ってきた異例の、それもパラディ島育ちの兵士なんて殺されていたからね。始祖ユミルの粋な計らい、とでも言えばいいのかしら」

「……………」

「何て言えばいいのかな……………エレンくんだけでなく調査兵团も、「何でユミルがお前に寵愛を?」って感想なのだろうね。例えるなら彼女は私で、私は彼女なの」

「……………は?」

「見れば一目瞭然だよ。ユミルは私とそっくりなんだ。驚くくらいにね。初めて会ったのはお母さまに食べられて、意識を失った後。それからたまに夢の中に現れた。私は「血」の繋がりとはい別に、同じ容姿を持つ娘だから彼女がエゴ鼻肩しているんじゃないかと考えている」

「……………」

熟考し始めたエレンの長い沈黙が続き、それに耐えかねたアウラが洗濯物を取り込も

うとした矢先、立とうとした彼女の膝が重くなった。

太ももに置かれた弟の手が、これ見よがしに圧力をかけている。

「エレンくんのえつち♡」の言葉には流石に、絶対零度のヒスイ光線が女に突き刺さった。

「ユミルの……生まれ変わり?」

「そこは私もわからないから、ご想像にお任せするしかない。ただ「寵愛」の事実はホンモノ。……で、そんな寵愛の子をパラディ島の人たちはどうするつもりなのかしら?」

「持ち帰る」

「ふふ、そう。複雑だね、裏切り者を回収しなくちゃいけないなんて」

「ジークは知っているのか、寵愛のことを」

「知らないわよ。教えたら家族の溝が深くなってしまうから」

「……………」

「大丈夫よエレンくん。あなたも私の、家族だから」

ゆつくりと弧を描く口角。微笑んだ女の口元は柔らかい楕円を描き、慈悲を覗かせた瞳で弟を見た。

愛情をたつぷりと染み込ませて、弟の傷口に塩を塗る。さらにキズが悪化するよう

に。

「…ジークの計画も、ユミルを通せばすぐに叶いそうだな」

「叶うでしょうね」

「兄が好きなら、どうして計画を実行に移さない?」

「移さないわ。だってお兄さまの意思を私は肯定して協力もしたいけど、兄の目的≒私の目的ではないもの。それに自分の足でこの地獄を突き進まない者に、褒美を受ける資格はない」

「進む……か」

「エレンくんも進んでいる。ジークお兄さまも進んでいる。私も進んでいる。みなそれぞれ己の指針に沿って進んでいる。時に衝突しながらも。動かない者はずっと、止まっていたまなのよ」

「……オレは」

—— どうして、進んでいるのか。

わからない、とエレンは言う。

「『自由』のため、でしょう?」

「ああ、自由になりたい。だからオレは進み続けている。でもわからない」

「壁が壊されたその日から——いや、その前からエレン・イエーガーは巨人の家畜でしかない人間に辟易として、自由を求めていた。そこに否定のしようなんてないじゃない」

「親父はオレに脊髄液を注射する時に、「進みなさい、エレン」と言った。なぜ、言ったんだ? 継承したのが『進撃の巨人』だからか? 「進」んで他者を「撃」退していく。

『始祖の巨人』が分かれて九つになった内の一つが、オレの進撃。一つ一つの力に何が意味があるのだとしたら、オレの進んでいる道は本当に、オレ自身の意志で進んでいるものなのか? 親父もオレも、敷かれたレールの上を進んでいるだけなんじゃないのか?」

「じゃあ誰の意思だつていうの?」

「…ユミル・フリッツ。それが、お前」

「私の全ては兄だ、つて言つたじゃん。そうなるとエレンくんの行き着く場所も『自由』じゃなくて、ジーク・イエーガーになつちやうよ」

「じゃあ始祖ユミルなのか?」

「さあ、私に聞かれてもわからないよ。「私」はユミルじゃないんだから」

不意にアウラの膝に圧力をかけていた手が離れ、ベンチに置かれていた彼女の手の上に重ねられた。

熱い体温に一瞬引っ込みかけた彼女の手は、そのまま掴まり手を繋ぐ。

相変わらず、その犯人の無表情は変わらない。ユミルを相手にでもしている気分だ。

「冷たいな」

「女性より男性より体温が低いらしいよ」

「冷たいけど死体じゃないんだな」

「生きているからね」

「死体なら、よかつたのにな」

「随分と、怖いことをいう弟だねえ」

「ヒストリアに触れた時だ」

「うん？」

元「対人制圧部隊」に捕まりヒストリアとロッドに触れられた時、エレンは父親の記憶の一部を見た。

王家の血とは一種の「鍵」のような役目を果たしているのか、接触した場合巨人化能力者の「錠」が緩みやすくなる傾向が強いらしい。

ただそれとはまったく別口で、アルミンもベルトルトの記憶の一部を見た。

そのためか今のアルミンは、初恋拗らせミンから、ア二拗らせミンに進化している。

ベルトルトが彼女に想いを寄せていた影響だろう。

話を戻して、エレンがレイス親子に触れられた時に記憶の扉が開いたのは、〃王家の血筋〃が関係しているのだろう——ということとは、既に分かっているわけで。

それが正しいならば、エレンはなぜ始祖を持つている間に姉に触れた時、何も起こらなかったのだろうか。

それは巨人の力に目覚めなかった「五年」の時を含め、一つの疑問を残している。

開拓地で重労働をした中、ケガをしたことは何度もあった。訓練兵時代もだ。意図的にケガを留めておける方法を知らなかったにも関わらず、彼のキズが急速に治る——なんて、人間離れたことはなかった。

仮に訓練兵時代ライナーらにバレていれば、その時点でエレンは捕まっていただろう。

その不可思議な点や、王家の血を引く姉に触れてもヒストリアと違って何も起きない点。

何なら父親の記憶を覗いたのは一回きりで、アルミンのように何度も前継承者の記憶を見していない。

人によってバラつきがあるのかもしれないが、まるで意図的な何者かの介入が存在するように、彼には思えてならないのだ。

それこそ始祖ユミルの介入——そして、彼女が寵愛するアウラ・イエーガーの意思が絡んでいのではないかと。

「人を黒幕扱いしちゃうんだ。血も涙もない弟だ」

「ジークの内容が正しいとして、王家の血を継ぐ巨人と接触していないオレが一時的に始祖の力を使えたのも、お前の仕業なんじゃないのか」

「……私はそんな大それたことはできないよ。「神」ではないのだから」

「じゃあ何ができる」

「人を誑かすのは上手だよ？」

「何をしたいんだ、お前は」

「私の目的は兄さんと一緒にいる時点で叶っているようなものよ」

「…裏切った壁の人類には、仲間には、何も抱いていないのか」

「申し訳ないとは思っている。最初の頃は結構引きずっていたよ。調査兵団のこと、お世話になった人のこと、エレンくんのことだって考えていた」

「……オレはお前に…姉さんに……」

「愛」されて、いたのだろうか――。

無機質だった表情の中にその一瞬、エレンの感情が浮上する。

ずっと抱え続けていた感情。ずっと姉が兄を追いかけ続けていたとわかってしまった時、少年に笑いかけていた姉の像にはヒビが入って、粉々に砕けてしまった。

そして散らばったガラスの中を素足のまま歩き、体をボロボロに傷つけ、身も心も至るところから出血し始めた。

その傷を止めようとアルミンやジャンたちがフォローする中で、誰よりも親身になって接したのがミカサである。

仲間がいなければ今エレンはどうなっていたのか、想像すらできない。否、想像もしたくない。

「愛していたと私が言っつて、エレンは信じられるのか？」

「…わからねエ」

「自分の心を紛らわすためにウソでもいいから聞きたいっていうのなら、やめておきなよ」

「……それが、答えか」

「バカだね。まだ話の途中だから」

「でもジークが一番なんだろう」

「そうだよ。「愛」しているのは兄さんだけよ。私が「愛」の感情を抱けるのはジーク・イエーガーだけ」

「……は」

「で、エレンくんは大好きだ。お父さまもお母さまも大好きで、ミカサちゃんもカルラも好きだ。あの飲んだくれハンネスも好きだったし、キースおじさんも、妖怪メシくれ少女も、誠に遺憾ではありますがハンジという変人も好きだ。好きだけれど、私ほでも、裏切ってしまう。裏切れてしまう。大きな矛盾だ。…ふふ、おかしいねえ」

「…何だよ、それ」

「お姉ちゃんも頭のネジが数本外れてしまっているから、仕方ないと思って。私と距離を置いた方が、その方が幸せに生きられるのよ」

「……………」

「それに君はもう、自分の足で歩けるだろう」

物理的に、という意味ではない。欠けている少年の右足はこの際問題ではない。

激動の15歳という中でエレンは一人の訓練兵から、人類の希望を背負う存在へと変

わった。

正しく「主人公」なのだ。

いずれ雛は巣立って、空を己が羽で飛び回る。「自由」を手にして、時に自分を狙う脅威にさらされながらも生きる。

「君は15歳の時から、子どもではなく立派な大人だったよ。よっぽど私より、自分のためにしか生きられないアウラ・イエーガーより」

「……………」

「黒幕だなんだと疑うのは結構だが、君のやりたい事を私が一度でも否定したことがあったか？」

トイレを我慢しているのを知りつつ「やめろ」……………お日さまの匂いのする洗濯物の誘惑に負けて、寝てしまった時も。

刺さり具合が甘い「やめろおい」……………馬糞を振り回していた時も。

虫の卵をこっそり持ち込ん「やめ…」……………でいるのを見かけても黙ってあげて、その後怒髪天のカルラに正座させられてい——」

「——やめろって言ってんだろ!!!」

「つて、いう話を兄さんに」

「ハ？………殺す」

「…は、してないから安心してね」

負傷兵に胸ぐらを掴まれ、手加減なしに揺すられるナースという奇妙な光景。

姉の最後の一言で、一気に気が削がれたエレンは突き飛ばした。勢い余った彼女はそのままベンチをすり抜け、地べたに尻餅をつく。

ハア、ハアと顔を真っ赤にして、荒い息を上げる少年は痛みに呻いた姉に、わずかに表情を歪める。

「ふええん…負傷兵さんに乱暴されちゃった。アウラちゃんもうお嫁に行けない」

「何が「ふええん」だよ、キモ。……あ、謝らねえからな」

「えー反抗期？……いや、ずっと反抗期か」

真面目な顔でそう呟いたアウラは、地べたに転がった拍子に落ちた松葉杖を拾い立ち上がる。

「結局エレンくんってさ、私と会って何を話したかったの? …いや、何を一番に聞きたかったの?」

「……「愛」されていたのか、どうかについてだよ」

「そう。まあ、出会いが本当に偶然なのか否かにしろ、元気じゃなさそうでよかったよ」「あ?」

「むしろこれで元気いっばいで私に会っていたら、精神状態を疑ったからね」

「……………」

「私としてはエレンの邪魔をする気はないし、兄の計画に加担する気もないし、私は私として「生」きる。ただそれだけだよ」

「可愛い弟には協力できないってか」

「可愛くないからやだよ、今は。よく鏡を見てご覧? 映るのは目の死んだヒゲ面の不精な男の姿だから。本気で最初誰かわからなかったから」

「ツチ」

「ははあ、でもやつぱり、私を巻き込む算段でここに来た節もあつたのね。そりゃあ「寵愛の子」となつちや、引き入れたくもなるか」

「…オレの目的は聞かないんだな」

「聞かないよ。むしろ教えないで。これから弟が起こす『未来』というものが楽しみに

なつたからさ」

「……………死ね」

どこで覚えたのか、ジェスチャー付きで姉への思いを伝えたエレン。

それに対してアウラは、可愛くない見た目の弟のかわいい仕草に、キュン、としてしまった。

コピペしたような笑顔を貼り付けた彼女は、持っていた松葉杖を弟の右足に近づけ、縛つてある裾の部分の部分を先でつつく。

「カワイイなあ、エレンくんは」

普段の笑みとは違う、種類の違う微笑。

眉間に皺を寄せたエレンから離れ、アウラは弟の存在は誰にも他言しない事を伝え、そのまま洗濯物を取りこみに戻る。

その後ろ姿を見つめていたエレンは、無性な気持ち悪さを覚えた。

白銅色の瞳の中にうず巻く粘着質な、ナニカの存在を感じて。

距離を置いた中で見えた姉の一瞬の姿は、少年にはまるで別の生き物のように感じら

れたのだった。

キミが生まれたその日から。

「イエーガーさんは、ご家庭の都合で当分は病院にいらつしやらないそうですよ」

エレンが姉と話した翌日。

彼が看護婦から聞かされたのは、そんな内容だった。

曰く、昨日話した負傷兵の人間とまた話す約束をしていたものの、諸事情で暫くは病院で会えなくなるため伝えて欲しい——と、アウラから頼まれたと。

エレンは自身の名をグリシヤの本にあったフクロウの名前「エレン・クルーガー」から取り、偽名として使っている。

捻りもなくそのままだが、そこがエレンらしいと言えば、らしいとも言える。

現在は記憶障害だと偽り、病院に入院していた。

???????

ハンジの提案から、アズマビト家の力を借りてマーレへ視察に来た調査兵団の面々。エレンもまた同行し、父親の記述にあつた車など、未知のものに息を呑んだ。

はしやくサシャやコニー。目立つその二人を止めようと、大声を上げて逆に目立つジャン。アルミンも海を見た時のように瞳を輝かせる。

大人組（ちびっ子ギヤングとハンジ）はそんな彼らを諭しつつも見守り、案内役のオニヤンコポンは微笑ましげに彼らを見ていた。

知らない物が満ちあふれた世界。

好奇心をくすぐられると同時に、少年の中では仄暗い感情が回遊する。

父親が “この世の真実” —— 残酷な世界を知った場所。

あるいは、幼い叔母が理不尽に犬に食い殺された場所。

あるいは異母兄が「安楽死計画」などという、彼からすれば到底認められない計画を作るに至った、人生を強要させた場所。

あるいは、姉が狭い世界しか知らず、歪む結果を作り出した場所。

それがマーレ。巨人の力を使い、植民地を広げる軍事国家。

柵に寄りかかり新聞を読む男も、子供の手を引き歩いている女も、買い物途中の腰の曲がった老人も、壁内と同じありふれた人間が存在している。

未知のものを抜きにして、ヒトの在り方というものは同じだった。

そうして仲間から少し離れた場所で、憂鬱としていた彼の元に訪れたのはミカサ。

「アイスクリーム」という物に興奮しているサシャやコニーを尻目に。パタパタと駆けてきた彼女は、エレンの隣で一口食べ、その甘さに舌鼓を打つ。

そして食べかけのそれを、徐に彼の前に差し出す。

エレンも一口食べてみて、と。

興奮ぎみで目新しい物に食いついている同期と違い、ミカサの一番はやはりエレンだ。

暗い表情を察して彼女が差し出したアイスクリームは、翡翠の下にさらされる。

次の瞬間、大きく開いた口。

覗いた赤い舌に少女が思わず顔を真っ赤にした間に、渦を巻いた白い物体は消え、残ったのはコーンのみ。

あ、とミカサが声を漏らした時にはすでに、アイスの大部分は少年の口に吸い込まれていた。

頬をがめついリスのようにさせたエレンはしかし、「一口」を欲張りすぎた天誅が下り、キーンと痛む頭を押さえる。

呆然としていたミカサはすぐに彼の背をさすり、「アイスに異物が混入していたのでは？」と、凶悪な視線をアイス屋へ送った。それに気づいた店主は悲鳴を上げ、カオスな状況ができあがる。

周囲の視線が向きかけたが、その後スリの騒動が起こり、ミカサの件はうやむやに終わった。

そんな二人の光景を、不可視の存在がすぐ近くで見守っていたのだが、誰も知らないことである。

話が逸れたが、調査兵団がマーレへ来た理由には、和平の道を開拓する——という大義が存在する。

現在は、ジーク・イエーガーの「地鳴らし」の脅威をチラつかせて壁内の平和を守る策に肯定しているが、それ以外の方法も当然考えられた。

その中の一つが、諸外国へ友好を図る作戦である。

マーレの視察の傍ら、調査兵団は友好策の糸口をつかむ前哨戦として、「ユミルの民保護団体」という組織にアプローチをかける予定であった。

団体が国際討論会へはじめて登壇することを受け、その組織の理念を聞く。その上で、今後の友好策を見出していく方針で。

それから調査兵団はアズマビト家の屋敷に招かれ、キヨミと話した。

キヨミが語る、壁外のエルディア人の扱いというのは、正しくゴミを漁る野犬を追い払うような——そんな目も当てられない状況であると。

エルディア帝国時代は、ユミルの民の血をその家柄に取り込むことが高貴である証とされたが、今やその価値観は真逆のものと言ってよい。

それでもマーレの方がエルディア人への待遇が良いというのだから。その他諸外国となれば、想像以上の現実が待っているのだろう。

作戦自体困難なものキヨミはしつと、それでもアズマビト家は和平の協力を惜しまない、と。

一筋の光を頼りに暗闇を歩く術しか、調査兵団には——否、パラダイ島には方法がない。

エレンに残された道は和平か、ジークの真の計画である「エルディア人安楽死計画」のどちらかだ。

悩む中で再び視察タイムとなった時、一人輪から外れたエレン。

そして、その後を追いかけるミカサ。

歩く一人とその後を追う一人は、何の因果か、路地裏でサシヤの財布をスろうとした少年を見つける。

この件については周囲が敵国の移民か、または悪魔の民ではないかと制裁を加えようとして、リヴァイが助けに入った経緯がある。

そのため、その一連の出来事を目撃した一部の人間が少年を偶然見つけてしまったのだろう。

少年が複数の大人に胸ぐらをつかみ上げられていた中、その間に入ったエレン。

まるで、かつてアルミンを助けた時のような構図だった。

男たちが突然の乱入者に眉間にシワを寄せた直後、エレンの背後から泣く子もチビる絶対零度アツカーマンの鋭い眼光が向く。結果男たちは暴力の手段を放棄し、尻尾を巻いて逃げた。

その助けた二人が昼間スリをした人物の仲間だったことに気づくと、少年は深く頭を下げ、身振り手振りで何かを伝えた。

喋れないというわけではなく、純粹に言葉が違うため、相互のコミュニケーションを取るための方法らしい。

そして、少年の言わんとすることがおそらく「ついてきて」ということだと察すると、エレンはミカサの制止を無視して歩き出す。

ミカサは視線を彷徨わせ、結局駆け足で二人の後に続いた。

そうして着いたのは、難民用のテント。少年の方は手のひらを前に出して「まって」というジェスチャーの後、その中へと入って行く。

陽が傾き始めた中、テントからのぞく淡く光るランプの光は、儚く少年の目に映る。

その灯りに心をとらわれた二人はしばし、立ったままぼんやりとした。

ミカサは虚な瞳のエレンの手を握り、「大丈夫？」と声をかける。

調査兵団に入りたての当時はほとんど同じだった二人の身長は、ミカサが少し見上げるほどの違いができた。

それは周囲も同じだ。それこそ104期の同期が並びその中にリヴァイが入ると、三十路の男が一番若く見られることがあるほど。

さすがに壁内では斯様な命知らずはいないが、壁外では“ちびつ子ギャング”の異名が付けられてしまうほどに、兵士長の身長は低い。

ミカサにとってはその見上げる高さが妙に心臓を昂らせる。気恥ずかしい、と言うべきか。

二人で黙って立っていると、そんな感情を露骨に感じてしまう。

「…なあ、ミカサ」

先に話し出したのはエレンだった。

その言葉とともにミカサが握った手が、強く握り返される。

姉の裏切りの一件以来誰よりも神経が衰弱した少年。だがその時ばかりは、かつての強い意志を宿しているようであった。

カルラを失って、巨人を駆逐する、と叫んでいた時のように。

「オレは、仲間が大切だ」

「…うん」

「お前も、大切だ」

「……うん」

「お前にはいつも守られてばかりだな」

「当然。エレンは私が守る」

「何でオレを守るんだ？壁内の重要人物だからか？それとも家族だからか？」

「……かつ、家族だから！」

「家族なのか？」

「えっ？」

ミカサの瞳が、大きく見開かれた。

エレンの「家族なのか？」の部分はまるで、家族じゃない、とでも言っているようではないか。

思わぬ否定の言葉に彼女の視界がぐらついた中、エレンは合わせていた瞳を逸らし、再びテントを見つめる。

「……オレが守っちゃダメなのか」

「え？」

「オレがお前を守ったらダメなのか？」

「え？え、だ、ダメじゃないけど……いやでも、エレンは私が守らないと……」
「嫌なのかよ」

「い、イヤじゃないけど……!!」

「けど、何だ？」

「……………ッ……………」

一步ミカサが身を引こうとするが、繋がれた手がそれを阻む。マフラーがあれば顔を隠したが、今、のぼせたように赤い彼女の顔を隠すものはない。

その様子を表情ひとつ変えず見つめるエレンはゆっくりと、その距離を詰めた。

思考回路が停止した彼女に迫るのはエレン——の、顔。

心臓が過去一番に異常値を記録した中、彼女は瞳を強く瞑った。

だが、しかし。

いつまでも訪れない接触到うつすらと瞳を開ければ、エレンの顔は隣の斜め下に向けられている。若干驚いた様子にミカサが同じ場所に視線を向ければ、そこにいたのは帽子をかぶり髭を蓄えた老人。

熱い二人に微笑ましそうな老人の手には、盆の上に置かれた湯気の立つコップが二つ

ある。

一気に顔が熱くなったミカサがエレンを見れば、そこには唇を少し噛み、耳まで顔を赤くしている少年の姿があつた。

それから二人を探していた調査兵团も合流し、難民らのもてなしを受けた彼らは、飲めや歌えやの大騒ぎが始まる。

人種や言葉の壁がありながらまるで旧友のように接する両者には、溝などなく。

そんな中にいる一人の少年と、一人の少女の手は、周囲の目を盗んでこつそりと握られていた。

一方騒がしいテントの外では、顔を両手で覆い、地面に転がっている金髪蒼目少女の姿があつたそうなの。

そして訪れた国際討論会。

「ユミルの民保護団体」の内容とは、各国に散ったユミルの民の援助を求めるものであり、難民はエルディア人ではなく、エルディア帝国の危険思想——ひいては島の悪

魔どもとは無関係であるというもの。

難民はエルディア帝国に支配を強いられた哀れな被害者でしかない、としたのだ。

キヨミは団体の活動理念に不信感を抱いていたようであったが、それが事実のものとして当たってしまった。

当然これでは島の悪魔である調査兵団は団体との協力はおろか、接触すらできない。

エレンは討論会の内容を聞き、見えた光明が閉ざされていく感覚を覚えた。

このままではパラディ島は本当にジークの作戦に乘らざるを得なくなる。それ即ち、エルディア人の安楽死を意味する。

どの道マーレや全世界の脅威から島を守るためには「地鳴らし」が必須となる。

たとえ調査兵団が戦ったとして、幾千の兵士や兵器に勝てる道理はない。

何よりどこを見ても島の人間を「悪魔」としか見ない人間の有様が、エレンの心に深く突き刺さった。

同じ人間であるにも関わらず、あるいは同じ巨人化する人種であるにも関わらず、否定され、その存在を憎まれる。

エレンの母カルラは、かつて赤ん坊だった彼を抱きながら、シャーデイス元団長に命

の尊さを語った。

特別な人間でなくともいい。可愛らしい赤子を見つめ、そして微笑みながら。

「生」きているだけで偉いのだ——と。

だがエレンや仲間、パラディ島の間人は生きてることさえ否定されている。死ぬべき存在だと。

過去のエルディア帝国の罪は、今のユミルの民が背負わなくてはならないのだろうか？

——否、否、否。

違う。それを言ってしまうえば、誰にだって「罪」はある。

先祖を辿れば「死」に値する罪を成した人間も存在するだろう。

他者をそうして責め続けていけば、人間など全員が何かしらの「罪」を背負っていることになってしまうではないか。

ただ少なくともエレンにはこれまでの戦いの中で、自分を守るために死んでいった仲間の死という、「罪」がある。

何度も死にたいと思うことはあれど、それでもエレンは進み続けてきた。先の見えない暗闇の中を仲間とともに彷徨いながら。

そんな仲間もこのままでは未来がない。

不器用な彼は「生きて欲しい」とうまく言葉にできずとも、それでもアルミンやミカサ、調査兵団の面々などに思っている。

特にいつも自分を守り、支え続けてきたミカサには生きて欲しかった。幸せになつて欲しかった。

その感情が何なのか。家族愛ではないと気づいた時、答えはもう出ていた。

しかし、その気持ちを言葉として彼が告げることはない。きっとその言葉を告げてしまえば、二人の心は本当に結ばれてしまうから。十三年の寿命がある以上、エレンはミカサを縛りたくはなかったのだ。

——して、ミカサやアルミン、大切な人々を守るため一つの意思が決まった少年は仲間から離れ、そのまま歩いていく。

討論会があったその日。彼は仲間から姿を消したのである。

キーはジークと「地鳴らし」、そして始祖ユミルの寵愛を受けるアウラ。

異母兄はエレンと初めて会った時、「必ず救い出してやる」と言っていた。

その過去を踏まえて、父親が弟に自由を奪うような教育をしたと思っ込んでいる。

ゆえに最初は同調するそぶりを見せ、「その時」が来れば裏切り、エレンの意思を貫く。

あくまで人類の命運を決定するのはジークではなく、始祖を持つエレンなのだ。

だが懸念すべき存在はアウラだ。

始祖ユミルの「寵愛の子」という、不確定な存在。彼女は兄をこの世で一番愛している。またその兄が計画の内容を妹に話していない、とも考えにくかった。

ゆえにエレンがジークを裏切っても、兄の計画を肯定するだろうアウラ of 思想を読み取って、始祖ユミルが邪魔をする可能性がある。

だからこそエレンの心を病ませた姉を懐柔することが、少年のファーストミッション。

幸い政府の目につけながら調べれば、その存在の噂を耳にすることはできた。本当か否か、情報の正誤性に欠けるものがほとんどだったが。

それから戦場に紛れ込み、エルディア人の負傷兵を偽って潜り込んだエレン。

彼が姉を内輪に引き込み起こすのは、究極の排他行為である。

パラデイ島以外の全てが、言ってしまえば敵。

その敵を駆逐する術を彼はすでに知ってしまった。実の兄によって、もたらされていた。

それこそが「地鳴らし」。

そして、負傷兵としてレベリオ区にある病院に紛れ込んだエレンは、情報通りアウラ・イエーガーがいることを願った。

結論、姉は確かにいた。『片足の看護婦』として。

はたして女に怒りを持っているのか、憎しみを持っているのか、はたまた会えた嬉しさや悲しさを抱いているのか。

殺意さえ抱いていたのも本当であるし、抱きしめたい気持ちもあった。

すべての感情が相反せず彼の内側で渦を巻き、エレン自身も自分の感情を理解できない。

それでも「姉」と二度と表現しないと生きていた口は開き、アウラを「姉さん」と呼んでいた。そして目的とは本来関係のない内容を、聞いてしまった。

姉は文字通り壊れていて、壊れ切ってしまったていて、兄に並々ならない執着を抱えている。彼女の過去を鑑みても、壁内の裏切り行為は到底許されるものではない。

それでエレンだけでなく、ミカサやアルミン、サシャやハンジなど、多くの人間が心に傷を負った。その清算をきつちりつつけるべきである。

だが懐かしい微笑みを浮かべられてしまえば、エレンの奥底に眠らせようとしたポロポロの「弟」という存在は顔を出して、少年の心をさらに痛めつける。

結局彼は姉に「もうオトナだろ」として、見放されてしまった。

ただ、単純に突き飛ばされたわけではない。確かな愛情がアウラにはあり、少年から距離を取った。

26歳の姉に縋ろうとする19歳の弟というのは、確かに気色悪い。

それを言ったら、三十路に近い兄に縋る26歳の妹もどうかと思うが。

エレンは己の力でつかむしかなかった。仲間の未来を、島の将来を、世界の脅威から守るために。

本当かどうかはわからないが、アウラは兄にも弟にも不干渉を貫くとは言っている。ひとまずそれを信じるしか、今はないだろう。

同時に彼は負傷兵としてレペリオ区の収容所に入った時目撃した、妹を抱き上げて振り回す兄——ジークの姿を思い出し、一つの策を見出す。

その光景を見た時の少年の内情は察するにあまりあるとして、アウラがジークに、始祖ユミルがアウラへ同調するならば、その元となるジークの思想自体をどうにか動かすことができれば、不確定要素の多いアウラの存在があつても、エレンは自分の望む結末へ導くことができるのではないか——？と、思い至つた。

つまりジークを説得するのだ。エルディア人を殺すのではなく、その他を排除する。その引き合いに妹を出せば可能性があると、ジークの過去や嬉しそうに妹を振り回しているヒゲ面なオツサンの姿を踏まえ、エレンは感じた。

そも計画を行えば妹までも巻き込むことになる。そこを重点的に突けば、一つの活路を見出せる可能性は十分にある。

肝心のアウラは病院をしばらく休むと言つたが、姿を消したのは想像に難くない。

「寵愛の子」の内容はジークに言つていようといなかつたろうと、対面すればエレンはその話

は持ち出す。それを懸念して彼女は身をくramsめたのだろう。

おそらくは周囲にも偽って、どこかへと身を潜めているはずである。少なくとも、ジークに見つからない場所に。

ただし兄がマールレにいる以上は逃げることはない。そしてジークを連れて行く際は必ず現れるはずだ。その機をねらい姉は捕獲すればいい。

「……………」

屋上に一人立っているエレンは、昨日とは一転した曇り空を仰ぎ見た。雨が降りそう
だ。

今もどこかで流れている人の血も、彼が踏み潰せば世界は満遍なく平らになると同時に、赤く彩られるに違いない。その骸を作り出すのが、自分になるのだ。

「……………でもそれしか、方法はないだろ」

少年は大切な人間のために、悪魔になる。

本・当・の・悪・魔・に・エ・レ・ン・が・な・つ・た・時、仲間はそんな彼をどう思うだろうか。止めに入るかもしれない。エレンを否定して。あるいは全肯定エレンマンのミカサも。

もしそうなったとしたら、彼の心は引き裂かれるだろう。だが同時に安堵を覚える気もする。

それでもエレン・イエーガーは、進撃する。

望むべく未来を、切り開くために。

君はどうしてフリーダム。

ピスピース！

「寵愛の子」の二つ名が元仲間を広まってしまった私は、みんなの目の保養担当、アウラちゃんだぞ！

お父さまったらドジっ子なんですから。いくら何でも、始祖ユミルと関連があることをバラしてしまったらダメでしょうに。

これで晴れて私はおたずね者です。

ただ今のエレンはおそらく単独行動だ。でなければ、私はすでに元仲間に乗まっていたでしょう。

それに病院に見覚えのある顔もなかった。エレンが始祖を持っていると思われていることは変わっていないから、敵地で動く場合普通なら精鋭且つ、弟が信頼のおける104期生が同行するはず。

姉の知らない弟の協力者が紛れ込んでいる可能性もある。しかし私がまだ自由な身の以上、やはり弟は一人だろう。

まさかキャワゆいお顔にヒゲが生えるとは思いませんでしたが、身長は別によいのです。

ドブの上に発生した藻のような濁りきった翡翠の瞳も、想像以上にお姉ちゃんのせいで精神負荷がかかっていたことが窺えて、たいへん良い。

さらに私と同じ部位を欠損しているところなんか、うっかり絶頂^{アヘッ}してしま^ッいそうでしたもの。

ただしヒゲ、テメーはダメだ。エレンくんの可愛らしいお顔に生えてはいけない。巨人より駆逐対象にすべき存在です。

閑話休題。

負傷兵エレンさんと別れた後、仕事の都合で会えなかったジークお兄さまには『病院の方が忙しかったため……』と、当分は家に帰らない旨の手紙を残した。病院にも朝イチに休むと伝えている。

エレンの周囲にいれば、いずれ調査兵団が現れる可能性もある。まだ確保されるわけにはいかないのです。

できあがり具合として、今のエレンはすごくイイ。

裏切った姉に憎しみを抱いて、お兄さまへの嫉妬も窺えて。だのに私と接してた時、結局「弟」の部分が出てしまっていた。

心がグチャグチャにかき乱されている。あとはそこに劇薬を投与すれば、エレンくんは爆発してきつと私を殺してくれるだろう…♡

お兄さまに殺されるのが一番いいですが、絶対に私を殺してはくれないうでしよう。だって、一番に愛する妹ですから（ドヤア）

姉を殺す弟と、妹を弟に殺される兄。

兄弟そろって感情という渦の中でドロドロになれるなんて、最高じゃないですか。

その後に姉を殺したエレンくんは何を思うのだろうか。

妹を殺されたお兄さまはどうなって、そして弟にどんな感情を抱くのだろうか。

けれど結局お兄さまは、エレンを見限ることはないでしょう。腹違いの弟なのですから。

血のつながった存在で、「家族」というものに飢えたジーク・イーガーは妹の血で汚れた弟の手を取る。

きつとその光景は美しいに違いない。死んだ後だと見ることはできませんが、そこはユミルたそに頼みましょう。

また私をご臨終した後の世界がどんな結末を辿るのかも、彼女の世界で観戦する。

巨人化能力者の寿命はどうあがいても覆せないものだから、お兄さまをアニやユミルくんのように封印する。

ただし《鎧の巨人》と同じ配列を持つ結晶は、戦争でヨロイの装甲が砕かれてしまった事実がある。

そのため壊すことのみに重きをおけば、人体を包む結晶が砕かれて、お兄さまがバラバラになってしまう可能性があるのだ。

そのためにはどうしても、消す必要がある——人類を。

だって、あと一年しかない。あと一年。お兄さまのいない世界があと一年で訪れてしまふというんだもの。お兄さまのいない世界の存在の尊てさを見出そうとして、結局ずっと失敗し続けているんだもの、私。

「私」という存在はもうすぐに消えますが、お兄さまはあと一年？

狂おしい、狂おしい。罪深い。世界が罪深い。

存在する価値がないのですね？ ないのです。

世界の価値が存在しないのです。

存在しない世界は無へと帰すのです。

無は無です。

無はそこにいます。

無は私たちの――、

『 ！ 』

「ゆみる ばんちー」と、誰かが殴ってきて、その手が私の体をすり抜けた。

バッグを枕にして路地裏で寝転がっている私の目の前にいたのは、ユミルちゃんだ。

ちようど、人類さんをお掃除するしかないじゃないか……！と、考えていた折に現れた少女。私心配で出てきたらしい。

本当なら彼女に頼んで、収容区の独り身な人間に当たりをつけて、記憶改ざんしてもらいそこに留まる予定だった。

私の力では部分的なところまでしか記憶をいじれないので、始祖様の力が必要になつてしまうのです。

しかし、ユミルはつい先日までこねこね♡作業があったことを思い出し、疲れているだろうからとやめた。

「私が急に居なくなつたせいで、お兄さまにテオ・マガトの目が向くかもしれない。でもそれ以上に私が始祖様のトクベツである事が知れているから、どうしても身を潜めるしかないんだよ」

と、話すと、ユミルちゃんは怒った。

まあここ一週間、変なおじさんたちに襲われそうになったり、明らかに危ないクスリを勧められそうになった。

その度に、杖で急所を潰してあげたのです（ちなみに現在地は収容区の中でもホームレスな人間が集まる、壁内という所の「地下街」のような一角である）。

身なりは襲ってきた連中の身ぐるみを剥いで、場に相応しい小汚いアウラちゃんである。髪もボサボサにしています。

ここからの展開ですが、新聞で近くにレベリオ区で盛大な祭事が行われる——と記載されていた。

各国から主要人物が集まる。

内容の中にはあのタイバー家当主が取りしきる催し物もある、とのこと。

通常ならエルディア人が住まうレベリオ区で、各国のお偉い方が集まるなどあり得ない。

この点とタイバー家が絡むことを考えて、必然と導き出されるのは宣戦布告の流れ。イエレナがエレンに本当の計画の意図を話し、マールへ向かわせる。

その時の「舞台」を作り上げるのがお兄さまで、その舞台で踊る「主人公」がエレン。そしてこの舞台の語り手が、タイバー家。

練られた計画は一つでもズレれば大きく捻じ曲がってしまうだろう。トム・クサヴァーとの約束のためにアズマビト家さえ動かしてしまうお兄さまは策士だ。結婚して。

ただひとつだけ言わせていただくと、前提としてこの計画には問題がある。

エレン・イエーガーと暮らしていた姉からすると、エルディア人の安楽死に弟が賛同するわけがないということ。

世界のためにエルディア人が死ぬか、他人が死ぬか。

もし斯様な選択肢があるなら、ジーク・イエーガーは自分たちを犠牲にして、他を救う。

対しエレン・イエーガーは自分たちを生かして他を殺す。

厳密に言えば弟の根底の中でエレン自身の存在は薄く、もっぱらその対象はミカサやアルミンなど、仲間に向けられている。あの子は妙なところで自己認識が低い。

でも、そうやってエレンは進み続けてきた。

大切なものを守るために。そして自由を求めて生き、輝き続けてきた。

弟の性格をわかっているからこそ、ユミルが見届けたいエレンの未来というもの、おおよその見当はつくのだ。

エレンとお兄さまが接触した時、この世の決定権を持つのは兄ではなく弟。

パラディ島の敵が、巨人ではなく外の世界だと知ってしまった少年は、止まれないところまできている。

このままでは世界がパラディ島の悪魔を滅ぼさんとする以上、方法は限られている。

その限られた手段の中で、一番大切なものを守るために有用な方法が何であるかも、すでにわかっているだろう。

即ちそれは「地ならし」。

もちろん確定とは言わない。未だエレンくんは和平の道を探しているかもしれないし、もっと別の方法を探しているかもしれない。

それでもお兄さまの計画に賛同しないことだけは、ハッキリと言える。

もし計画を実行すればミカサちゃんも巻き込まれる。彼女は特異なアツカーマン家であるが、ユミルの民全体に影響を及ぼす大規模な変質を、絶対に受けないとは言いきれない。

エレンが選ぶのは減退するばかりの暗い未来じゃない、未来に自由が存在する世界だ。

そのためにその他の自由を奪ってでも進む。

本当に、どうして弟はユミルとここまで似ているのか。

その生き方が愛おしくて、少しばかり恨めしい。

一先ず、兄と会う前に私に会ってくれて幸いだった。

私が動くのは祭事がある日でいい。その前後で事が動く可能性もあるから、気を引き締めないと。

『 』
「ん、何？」

こちらを手招きするユミルちゃん。あざとい仕草に釣られて近づくと、壁にもたれ掛かって胡座をかくように頼まれた。ついでに顔は少し下げような形で。

そのままの体勢でしばらくいて欲しいとのことだが、何をする気なのだろうか、彼女。「えっ、待って、ユミルちゃんどこ行くの？」

焦った私を置き去りに、ユミルは背景に溶けこむように消えて行つた。

許可が出るまで私はこのままということ？お尻に伝わる地面の冷えた感じも、肌寒さも慣れないんですけど。

何より放置プレイって……興奮しちゃうじゃないですか（末期）

沈む夕日を見つめながら、一つ大きなくしゃみを溢して、少女の命令を聞く成人女性の図を思い浮かべてしまう私。

そんな濃厚なプレイが続き、夜も更け始めた頃。

眠気が襲ってきた中、耳に入ったのは女性の声。

顔を上げると隣——というか背後にはユミルが立っていて、前方には月明かりを受けて黒く映る人の姿があった。その人物はローブを羽織っており、フードをかぶってい

る。低めの身長から、聞こえた声の主がその女性で間違いないのだろうと思った。

「誰……」

その女性はフードを取ってかがみ込む。調査兵団の人間ではない。ローブの下に、何か武器を装備している様子はないためだ。

静寂な世界に精神を研ぎ澄ませると、ちらほら周囲に人間がいることがわかる。いつでも動けるように待機しているというわけですか。

「お初にお目にかかります。貴女が——フリッツ王の忘れ形見、でしょうか」

そう続けた女性は名を、「ラーラ・タイバー」と名乗った。

思わずユミルを見ると無表情ながら「ドヤ！」という顔をしている。何をしてくれはっているん？

女性にもユミルのことが見えているようで、少女を認識している私に何か納得したような表情を浮かべた。

家なきアウ子はどうして、始祖様の粋な計らいにより、タイバーさんのお家に拾われることになった。

だからあれほど報・連・相を大事にしろと……（白目）

ドンブラコンコッコ

ピスピース！疲れてるだろうと少女を氣遣つたら、逆に氣遣われたものの、その氣遣い方が予想の斜め上だった体験をした私はマーレの美女担当、アウラちゃんだゾ〜！

私はそのままラーラとその一味に秘密裏で輸送された。

何を言っているかわからねえと思うが、私も何をされたのかわからなかった。

催眠術だとか、巨人の力ですとか、そんなチャチなものじゃございません。本当に、恐ろしい（始祖様の）片鱗を味わったぜ…。

冗談はさておき、天井がオープンではない車に乗せられた後、対面式の座席の中で相手の前に座った。

ローブを脱いだラーラは詳しい内容について話し出す。
ちなみにローブの下はメイドの格好だった。年は私と然程変わらないでしょう。

曰く、一週間ほど前に彼女は地平線まで続く砂の大地と、巨大な光の柱がそびえ立つ世界で謎の少女と出会った。

そして『……ケテ……タ……ケテ』というような声が脳内に直接届き、子孫を助けてほしい、と頼まれた。

普通なら不可思議な夢を真に受けるはずがない。ただ透き通ったその少女が現実に来て現れ、ラーラ以外に見えないとなつて、彼女はその少女が「始祖ユミル」であると認識せざるを得なくなつた。

また調べた所、カール・フリッツがパラデイ島に王都を移した時、私の先祖にあたる移住を拒否した王族が一名のみいた——という事実が存在したことを知つた。

これはタイバー家に伝わる古い資料に記載されていたもので、政府なども知り得ない情報とのこと。

なぜそんな重大な事実がタイバー家に眠っているのか疑問に思いましたが、さらなる爆弾が投下される。

「それは、巨人大戦の真相に直結する内容でございます」

と言ひ、ラーラは当時のフリッツ王がタイバー家と結託し、巨人大戦を引き起こしたと語つた。

これを知つた私の命つて危ないんじゃないか？と思いましたが、この内容はのちの祭

事でも話されることらしい。

世界が驚愕する事実を一步先に知ってしまったというわけだ。

カール・フリッツは「不戦の契り」を生み出した通り、平和というものを誰よりも求めている。

そんな王はこれまでのエルディア帝国が行った虐殺の数々を憂いて、巨人の歴史に終止符を打とうと画策した。

その協力者がタイバー家。

また英雄ヘーロスは、仮初の英雄に過ぎないものである、と。

だが皮肉と言うべきか。パラディ島へ移り、つかの間の「楽園」を守るため幾千もの巨人の壁を作り出したレイス王の行いは、回りに回って世界を脅かす脅威として残っている。

平和どころか世界滅亡レベルの案件だ。

そして現在のタイバー家はカール・フリッツに協力した恩恵を受け、約百年経った現在でもエルディア人であるにも関わらず、腕章を必要としない———それどころか、敵国にさえ一定の敬意を抱かれる一族となっている。

密かにエルディア帝国の復権を願ひ生きていたお母さまとは対照的だ。華々しい人生。話を静かに聞く私に、ラーラはタイバー家を憎く思うか尋ねた。

現状はまだ、彼女は私の詳しい素性については知らないようである。

しかし「片足の美女」などと調べて行けば、すぐに何者であるか判明するだろう。そうなると、必然的にジーク・イエーガーの存在も明るみになる。

本当にユミルつちは何を考えているのか。

いくら私でもお兄さまを巻き込むなら、「あうら ばんちー」を繰り出さなければならなくなる。

まあ、タイバー家の人間はエルディア人ですので、いざという時は彼女に責任を取って記憶改ざんしてもらいましょう。

そもそもエルディア帝国の元貴族にしては、動かしている手駒の規模が大きい。

彼女は秘密裏に動いているようだが、通常エルディア人の収容区に入って人を運ぶとなると、いくら何でも誰かの目にはつく。

だがラーラに焦った様子はない。このような行動を勝手に起こせば政府も黙っていないだろう——と質問しても、「大丈夫」という返答のみ。

よってタイバー家は推測するに、政府を欺くだけの力か、あるいは黙らせるだけの力があるのだろうか。

そんなお家に誘拐されちゃったアウラちゃん。本当に大丈夫なのだろうか。

「前提として、私は自身の血筋について知っています。一族がエルディアの革命を待ち望んでいたことも。ですが一族のことなど、私にとつては些細な問題です。『血』に想うことは多けれど、抱える思想はどうでもよい。私は「私」であつて、何者にも染まる気はないのですから」

「…マーレに残った王家の人間は、その姿を晦ましたそうです。実際にその子孫が残つていたとなりますと、容易に看過できる問題ではありません」

私の先祖がレイス王と思想を違えたということがわかつているなら、今日のマーレ国こんにちを打ち倒し、エルディア帝国を取り戻そうとしている——と考えるのは当然だ。

だからこそ、私自身の思考を確かめる必要がある。

短い話でそれを為すのは難しいでしょう。

しかし『話す選択』の余地を今こうしてタイバー家が残しているのだから、十分にこちらにも応える意味はある。

ちなみにラーラはユミルに導かれてここにたどり着いたらしい。

時系列にすると、

①彼女の前に始祖様が現れて誘導。

②私有家なきアウ子を堪能している最中に、ユミルが登場する。

(この間ラーラの前から一時的に消えていたようである)

③突如アウラちゃんから逃亡するユミル。

④「た だ い ま (ドヤア)」

——というような、流れになる。

相当好き勝手に動いている始祖様。

そこまで動く力が残っていたなら、普通に一般家庭のお宅の記憶改ざんを頼んで、そこに居候しましたのに。

いや、大戦の真相を聞いた我が身としては、タイバー家につるんだ方が後々私の思うように動きやすいから——と、彼女は考えたのかもしれない。

当の少女は疲れたのか、ほぼ消えかけながら人の膝の上で寝ている。本当に好き勝手して……：イイ夢見ろよ。

「他の一族の者は、始祖ユミルのことが視えるのでしょうか」

「いえ、私にしか視えません。王家の血を持った母も視えませんでした」

「視えなかった——ということとはつまり、母君は亡くなられているのでしょうか」

「……さあ、どうでしょう。タイバー家ほどのお力があるのなら、時間を要さず私については調べられるのでしょうか?」

「そうでございますが…、貴女ご自身の信頼を勝ち取るために立ち回られる方が、賢明だと存じます」

「すべて自分の口から吐け、と?」

「強制は致しません。あくまで私はユミル・フリッツの意思を尊重したまでですから」

人の膝で口をモゴモゴと動かしながら眠りについてる少女。

そんな少女を見たラーラの表情は、少し微笑まじげだった。

向こうとしては、亡霊であるはずの始祖ユミルが普通の人のように動いているのだから、不思議なものだろう。

事実、私が最初に会った時の彼女と比べれば、よっぽど人間らしくなった。

それまでは初代フリッツ王の呪縛に囚われ続け、巨人生産機と化していたのだから。

ユミルは程よくアウラ色に染まって、私もまたユミル色に染まる。二つは決して混ざ

ることはないけれど、お互いがお互いを影響し合う。

これがあるべき人間としての、理想の形なのかもしれない。

前世では為せなかつたことを今できているのだと思うと、複雑な気持ちになる。でも、悪い気はしない。

「ユミル・フリッツと私が似ていることに、あなたは驚かないのですね」

「最初見た時は驚きましたが、始祖ユミルが貴女を特別に扱う理由にその容姿が入っているのだと思うと、少し納得がいったのです」

「…それで、私を回収してどうするおつもりなのでしょうか、そちらは」

「最終的な決定は現当主のヴィリー・タイバーが行いますが、危害を加えるつもりはございません」

「……一つ条件をいいですか」

「ええ、なんでしよう」

どうせ私の素性がバレるならば、その前に先手を打つしかない。

こちらの用件として、私の情報を明かす。無論すべては話さない。

自分の大まかな人生でよいでしょう。それこそ名前や家族について。それに「楽園送

り」など最低限話せば、あとは向こうが確認してそれが正しいとわかる。

うっかり話し過ぎててもどこで矛盾を暴かれるかわからないから、その方法が一番良いだろう。

そして代価として、ジーク・イエーガーの安全を保証してもらおう。

私も含めた兄の情報をタイバー家以外の外部に漏らさないこと。何らかの危害を被った暁には、俺のユミルつちが黙っていない。

完全に始祖様任せですが仕方ないね。むしろ少女をすでに知っているラーラなら、これだけでも十分な脅しになる。

結果としてユミルも少し動くだけで、タイバー家へ私を取り入れさせることができ。よつぼど路地裏で寝ているより安全である。

考えれば考えるほど、ユミルの手のひらで事が転がされているように思えてならない。
い。

「もし、条件を破った場合は……」

寝ている少女へ視線を向ける。すると私の言葉が続いている途中に開いた、蒼い瞳。

起き上がった少女は私の隣に座って——
微笑んだ。

瞬間、ラーラの顔が強張る。かくいう私も今まで見たことのない種類の異なるユミルの笑みに、固まった。

そうだ、忘れてはいけません。私がいつも「ちゃん」づけして構っている少女は、光るムカデ野郎に出会って強大な力を得てしまった人間で、その魂の理は私たちから外れているのだと。

単純に考えれば、ユミル・フリッツが亡くなってから約二千年が経つ。しかし現実世界での時間と、あの砂と光の柱の世界では時の進み方は大きく異なるのだ。

あちらの方が体感する時間としては長い印象を受ける。それこそ悠久に続くような。そんな世界で延々と巨人を作り続けていたら、そりゃあ感情も失ってしまう。

ある意味今の感情豊かになったユミルは、奇跡なのかもしれない。その奇跡が『私』と出会ったからなのだとしたら、純粹に嬉しい。

そんな、私をもビックリさせたユミルたそは、再び眠りの世界へと戻られてしまった。訪れる車内の静寂。とても、気まずい。

「……父曰く、特異な私の在り方は、それこそ「ユミルの寵愛」だそうですよ。始祖ユミルを前にして誓ってくださいるというなら、私はお話しします」

「貴女への行動一つで、恐ろしい末路もあり得る……ということでしょうか」

「もしそうならご覧の通り、足を失った段階で彼女が黙っていませんよ」

「……………それも、そうですね」

行き過ぎた牽制になったものの、ひとまず落ち着いた。

その後ラーラは私の条件を受け入れたので、大まかな素性について話した。

やはりジーク・イエーガーの部分には驚いた様子だった。歴代の《獣の巨人》が持たない特質した力の理由が見ついたことには、なるほど、といった様子。

自分の素性を語る場合、不利益が多いものの、一つの大きなアドバンテージはできる。

完全に——とは言わないけれど、私がエルディア帝国を取り戻さんとする先祖の思想を持つていないこと。それが証明できる。

私の人生をたどった中でわかるのは、「こいつブラコンやん」という内容だけだ。

そしてそのために何でも為せる異常者である、と。

仮にタイバー家が私を利用するとしてジーク・イエーガーを弱みに使うなら、始祖様が黙っていない。

逆にジーク・イエーガーを利用するために私を利用するとしても、ユミルガードが発揮される。

「兄の任期はあと一年。その任期が終わる頃には、私は死ぬつもりです。今更「楽園送り」となった両親の思想を継ごうなどという気はないですし……ただ、静かに兄と暮らしたい」

「そう……です、か。……ではなぜ現在は離れて居られるのですか？ それこそ始祖ユミルが助けを求めて……」

「……………それは」

どうしたらいいと思う、ユミルちゃん。どうせ狸寝入りなんだから。

しかしフリーダム少女は起きない。後の尻拭いは私が行えと……？

この場合事実を言うしかないでしょう。ただ弟と会った、などと言うわけにはいきません。始祖を宿す（嘘）彼はマールで最重要捕獲対象なのだから。

それこそいることがバレて上層部に情報が渡ったら、その瞬間から戦争開始である。

四年間お国のために働いた戦士たちに、もっと休む暇を与えたらどうなんですかね。ただでさえ戦争のせいで兄という時間が減ったのに。上層部の首を狩ってそれを並べ、苦痛に満ちた表情を眺める鑑賞タイムをとつても、全く割に合わない。

話すなら、「かつての仲間と遭遇した」と言うのがベストです。

エレンくんも同じ調査兵団の仲間でしたし、嘘は言っていないんだな、コレが。

壁内を裏切った身ですので、私が元仲間に出会ったらどうなるか、想像に容易いですね。本当は問答無用で捕まってパラデイ島に連れてかれてしまうのでしょうか、向こうが私を「寵愛の子」だと知っていることは話していません。

元仲間には遭ってねられたアウラちゃんは逃げた、という体だ。

当然、政府のお膝元である軍事基地にいるのが最善策だろ、とツツコまれる。

その点はパラデイ島にいるはずの調査兵団がマーレに潜入していた部分を踏まえ、彼らをここまで招いた「協力者」が内部にいる可能性を懸念したため、軍事基地に行けないことにした。

仮に政府の内部に「協力者」がいるなら、必然的にねらわれている自分が近づけば、兄を巻き込んでしまうかもしれない。

肝心のその協力者が兄なのですが。ここまでの矛盾も中々ないですね。

「……本当に、兄君が大切なのですね」

ラーラは一応納得してくれたようだった。

同時にマーレ内にすでにパラデイ島の人間が侵入していることを受け、調べる必要性

が出てきた——とも。

エレンの話が正しければ調査兵団はかなり前から、すでにマーレにたどり着いている。

それに未だ気づいていない政府。兵団自体もおそらく少人数で、できる限り隠密に行動したに違いない。

ただエレンが動き、お兄さまの用意した舞台が完成しつつある今、調査兵団も大きく動かざるを得なくなる。少人数ならともかく大きな動きを見せれば、流石に政府も勘づくだろう。

「——わかりました。当主にこの件は申しますが、貴女の身はこちらでお守りすることになるでしょう。ご安心ください。タイバー家には他の息のかかった人間はおりませんから」

「…それは政府も、ですか？」

「はい。むしろタイバー家は操作する側と言った方が、よろしいでしょう」

「え？」

マールはなんとタイバー家の権限下にあるらしい。統治自体はマール政府に委任しているが……え？

「今のマールの在り方はあくまでマール自身の意味。タイバー家の意思ではありません。ただ、我々が巨人の力を託した結果生まれた多くの犠牲を思えば、その贖罪は決して目を逸らせぬものにまで膨れ上がっています」

「……………」

「当主は……いえ、兄さんは、その贖罪を一身に背負っておられる。私ができることといえば、そのお勤めを最後まで見届けることくらいです」

「ヴェリー・タイバーの妹なのですか、あなたは……」

「はい。私の、自慢の兄さんですよ」

頬を少し赤く染めて微笑んだラーラは、私と同胞だった。

さすがに恋愛感情はないでしょうけれど、絶対にお兄ちゃん子ではある。私のブラコンセンサーが「YES!YES!」と喧しいもの。

「わ、私のお兄さまの方がカッコいいですから!!」

と、ジーク・イエーガーが国宝級の人間である事実を語ってしまったアウラちゃん。

私の言葉を受け、瞳を丸くしたラーラはにつこりと微笑んだ。両手を合わせて、ふふ、と息をこぼす。

「兄さんという存在は、格好いいですよね」——と。

それに私は無性に敗北感を味わったのである。

少なくとも彼女は言葉の矛を握らなかつた。

純粹に彼女は、同じ兄が好きなもの同士嬉しかつたようですが、それも敗北感を誘う結果になつた。

でも「愛」の大きさだけは、絶対に負けません。

「瞳を閉じなさい 手を握りなさい そして祈りなさい」

「驚異の子」ジーク・イエーガー。

7歳だった少年が両親を含めたエルディア復権派を密告したことは、当時大きな話題となった。

ドベだった少年はやがて候補生入りし、トム・クサヴァーの《獣の巨人》を継承した後、これまでの戦士とは一線を画す特異な能力を發揮した。

その脊髄液を摂取したエルディア人は、彼の「叫び」により巨人化する。

まさしく「驚異」を体現する彼は戦争で大きな活躍を果たし、戦士長にまで上り詰める。10年以上をかけて積み上げたその信頼は大きく、マール・元帥が会議にて彼の発言を聞き入れるほど。

そんな男に疑心を抱く者はテオ・マガトくらいであろうか。

付き合いだけで言えば、マガトとジークはそれこそ20年を超える。

両親の期待に応えようと、心も体も限界まで追い込む少年を見ては、「体を壊しては意味がない。そんなことも分からないのか！」などと、厳しい口調ながら見守っていた。

マーレ人であろうとエルディア人であろうと、差別しない価値観を持つマガトは政府の中でも稀有な存在である。

同時に九年前の「始祖奪還計画」を四人の子どもに託すことに、反対したのも彼だった。

いくら訓練を積み、そこらの兵士よりも洗練した力を持つとはいえ、まだ子ども。

マーレの命運を託すにはあまりにもその重責は重すぎたはずだ。

現マーレ政府は腐敗している。

だからこそ彼は巨人に頼らない兵器開発推進の提唱や、マーレ人の徴兵制の復活を上に提言している。

その反応はイマイチ、といった様子だ。

このままではマーレに未来がないことを、男は感じていたのである。

そんな彼に接触を図ったのがヴィリー・タイバー。現タイバー家の当主である。

マガト同様に、今のマーレ政府を憂へていたヴィリー。

彼は本来なら知らぬ、タイバー家がマーレを真に牛耳る存在であることを見抜いていたマガトの思慮深さに、やはりこの男しかない——と、改めて認識した。

再び必要となるマールレの英雄。

“協力者”としてマガトを選んだヴィリーの手が、握られる。

その後ヴィリーは一つ、マガトに頼み事をする。

それは“ネズミ”が潜り込んでいる——というもの。

マールレの裏のトップであるタイバー家には、政府とは別の直轄の近衛兵が存在する。その存在はタイバー家一行が来訪した際に、マガトも見ていた。

彼らは秘密裏に動き、タイバー家の護衛のほかに情報収集なども行うという。

そんな近衛兵が掴んだ情報というのが“ネズミ”の存在だった。

この場合比喩として“ネズミ”と呼んだが、その正体はパラディ島の脅威を指す。

ヴィリーは潜んでいる連中の調査を、マガトに依頼した。これからヴィリーは祭事に向けて動かなければならなくなり、必然とその護衛に近衛兵も当たる。

協力関係を結ぶ上で先に信用を勝ち取るという意味でも、この提案は双方にとって悪くないものだ。

「しかしネズミ……ですか」

マガトの脳裏に過ぎたのは、現在行方知れずとなっているジークの妹の存在。発端はファルコが彼女が勤める病院に行く機会があり、そこでアウラ・イエーガーが所用で休んでいることを知った。

その話をライナーにし、またその話がジークに伝わり発覚したのである。

どうやら病院には家の事情を理由に休み、対し兄には置き手紙で『仕事が忙しくなるため当分帰れない——』と説明してあったようだ。

突然姿を消した妹に、ジークは数年ぶりの鬱状態に差しかかっている。

兄妹間で色々あったことはマガトの耳にも入っている。しかし家族間の問題であると、空気を読み深入りはしなかった。

イエーガー兄妹の在り方は歪で、ボコボコと空いた穴を互いにうまく埋め合うようにして、絶妙なバランスを保っている。少なくとも彼にはそのように見えている。

相互依存———とすべきだろうか。

ジークはトム・クサヴァーを実の父親のように慕っていたように、「家族」に対しかなり歪んだ、盲目的な愛情を持っている。

対し妹の方はマガトでも表現しにくいが、例えるなら突貫する爆弾。究極のブラコン

モンスター。

アウラ・イエーガーの狂ったエピソードを聞いてしまった男は、残念ながらそのような感想しか抱けない。むしろそれ以外の感想を持たない。

だがしかし、イカれているにも関わらず人の懐に入ることには長けている。

戦士であれば、潜入を得意とする優秀な人材となつただろう。

壁内で私兵を作つていたという点は、戦士(あのアニとまで距離を詰められている)や候補生たちと友好的な関係を作つているところをみると、納得はいく。

それは逆に言えば、アウラ・イエーガーが戦士を取り込む可能性もある、ということ。彼女の両親が「復権派」であつたことを踏まえれば、いつ何時、牙を向けるかわからない。

あり得る可能性を予想しておくことも、戦争において必要な能力である。

無論マガトは、そんな軟弱者に戦士を育てた覚えはない。ただ幼少から刷り込まれた場合——ガビたちなどは、かなり危うい。

しかし彼女の首を繋ぐリードは存在する。ジークだ。

対しジークも妹の存在が有効な手綱となつている。

互いが互いを縛り合う。管理する側としては非常に扱いやすい。一方でその扱い方

を間違えれば、大変なことになる。しかし長年戦士を育ててきた男はそのラインを見極めていて、深入りしすぎると特に妹の方は爆発しやすい。

体をかすかに身震いさせて、部下が報告していたほどには。

だからこそ、一番よい方法は放っておくこと。もちろんバレない程度で一定の目は付ける。

その体制で四年間過ごしていたが、急転直下に動いた事態。消えたアウラ・イエーガーの存在にジークを訝しんでいたマガト。

彼が知らない裏で着実に事は動いている——と考えていた矢先の、ヴィリーの「ネズミ」の発言だった。

女は元パラディ島の兵士であり、仲間と接触した可能性が高い。

裏切り者と見せかけたスパイ。ジークの存在があり薄らいでいたその可能性が急浮上する。

だがマガトの考えを読み取っていたのか、ヴィリーは「そう言えば」と、少し大仰に語る。

曰く、タイバー家が調べていた中、偶然救った存在がいます。

どんな物語でも裏切り者の末路というのは悲惨だ。

それはしかして、因果応報である。

「襲われた彼女はネズミが入り込んだ事態を受けて、政府に協力者がいる可能性を考えました。一隻も戻ってきていない調査船団のことを考えれば、一理あるとは思いませんか」「……たしかに。船団に内通者がいたとすれば、一人や二人の規模ではなさそうだが」「ゆえに政府を信用できない彼女を、一時的に身を匿わせることになった。こちらにもネズミの情報を一つでも知りたかったのですね。芳しい情報は得られなかったが」

一先ずまだ、こちらで身柄は預かっておく——としつつ、ヴィリーは身柄を渡すことも検討に入れていた。

マガトは少し考え込み、首を振る。

政府内に敵の協力者がいるならば、身柄を預かったところで、百パーセント安全を保証できるとは限らない。

仮に女が殺されれば、ジーク・イエーガーのリードは外れる。

同時に彼の脳内では、家族を「楽園送り」にした後、生きたまま死んでいるようだった少年の姿が思い浮かぶ。少年の心の穴を少しづつ埋めたクサヴァーがいなければ、少年はとつくの昔に折れて……いや、その前に巨人になり楽園を彷徨い続けるバケモノに

なっていただろう。

この件はなるべく信頼のおけるものにだけ留めてほしい——ともヴィリーに告げられ、マガトは頷いた。

ライナーやアニには伏せておいた方がいいだろう。戦士であるが彼らは壁内にいた以上、協力者の可能性はある。

ピークは大丈夫だ。問題はジークであるが、話さないわけにはいかない。腑抜けにならないでも困る。疑惑はある反面、戦士長であることは事実だ。

敵が潜伏しているかもしれない今、いつ戦いが勃発してもおかしくはない。

いざという時戦えなければ、直結してその被害はマーレ国とその民が受ける。四年間の中東連合との戦争も相まって、より慎重な対応が必要とされる。

そうして二人の内談は終わりを迎える。

最後にヴィリーはマガトに問うた。

神を信じるか、否か。そして、仮に信じるなら。

神は罪深きエルデア人をどう思っているのだろうか——と。

奇妙なその内容にマガトは眉を寄せ、信じてはいない、と返す。
それを聞いたヴィリーは、自嘲げに笑った。

??????

祭事当日。

エルディア人収容区には普段では考えられない数の人間が入り、朝からさまざまに出店が開かれていた。

美味しそうな品物を目にした戦士候補生たちは、年相応にはしやぎながら食べ歩く。金は副戦士長払いだ。子どもたちはまだしも、ピークや彼女に連れられてきたポルコもライナーマナーを使う（アニは一人で回っている）。

財布の中身は減るものの、嬉しそうなガビやファルコたちの様子に、ライナーの口角も自然と上がった。

そして夜。いよいよタイバー家当主、ヴィリー・タイバーが初演出する劇が始まるという手前。

ライナーは知り合いを見かけたらしく、まだ戻って来ていないファルコを案じ、ウドとゾフィアとともに人の群れに揉まれながら探した。

ちなみにガビは「どうせセッションペンでしょ!」と、そっぽを向いてコルトに宥められていた。

少年がここ最近何度か病院へ赴いているという話は、ガビからも聞いている。

少し付き合いが悪くなり、しかも訓練で一時的ではあれどガビすら上回ったファルコに対して、少女はライバル心を燃え上がらせているようだ。

誰と会っているかファルコ本人は言っていない。だが恐らくは負傷兵だろう。見かけた知り合いというのも、その人物なのかもしれない。

まさか意中の相手が看護婦だから通っている——というわけではあるまいし。少年の想い人は変わらずガビだ。

ライナーの任期は後二年であり、その頃にはガビは14歳。次期ヨロイの継承者とし

てトップに立つポルコは20代前半。

そこから十三年の任期を担うとなると、ポルコの場合は終了の頃には三十を超える。元々巨人の力を子どもに継承させるようになったのは、「始祖奪還計画」に向けての他に、大人よりも洗脳がしやすくマーレの忠実なコマを作りやすい点。また巨人化において、身体面が若い頃のピークの時期に重なるように、という趣旨がある。

極端な話老人が継承したとして、巨人の力を百パーセント扱えるかどうかとなると、答えは「否」である。

巨人の力は相応しい人材を使うのが望ましい。

そのためポルコは現状だと花丸合格だが、年齢面を考慮した場合、十分にガビが継承できる可能性もでてきている。

それはファルコも同様だ。少年は少女に寿命の制限を作つてほしくないからと、懸命に訓練に励んでいる。

その少年の想いをライナーは肯定し、時に厳しく叱りながらも応援していた。しかしてこの裏には、妹のように思うガビを守りたいライナーの意思。

弟を守りたいコルトの意思（彼についてはすでに獣の継承が決まっている）。

そして、かつてポルコにヨロイを継承させまいと上司に印象操作をした、マルセルの

意思が存在する。

それぞれの思惑が絡み合い、今が存在する。

またポルコと同期のライナーからすれば、彼の心情を思うと、腹の底がグツと縮まり吐きたい気分になる。

ポルコ・ガリアードの首を絞めているのは《鎧の巨人》を継承したライナーだ。

何より兄マルセルを失うきっかけになったのが彼である。

そんな負い目から、たとえ「クソドベ」と言われようと、「ゴリラ」と言われようと、全て己の責任であるから——と、受け止めている。

…いや、「ゴリラ」と言っているのはアニであった。

彼女に関しても我が身のかわいさの余り、脅すようなマネをしてでも作戦の続行を強制したり、マルコの時もアニが兵士を助けたことを引き合いに出して、立体機動装置を外すよう命じた。

だからこそ、今の自分がアニのサンドバッグになるのは仕方のないことであり、むしろこれは「罰」の一つなのだ、考えている。

罰——そう、罰だ。

四年前、死を望むまでに精神的に追い込まれていたライナーに、彼の想い人が勧めた生き方。

「罪」で染まった自分を裁く「罰」。そしてその処刑を行う人間。

今でも時折悪夢として、彼の夢に激情に駆られたヒスイの瞳が出てくる。

己を殺すのはエレンである、と。

ア二よりもポルコよりも、ライナー・ブラウンを殺す資格を持つのがエレン・イエーガーなのである。

それほどのことを自分はした。

少なくとも彼はそういう風に考えて止まず、まるで神に祈りでも捧げるようにその時を待ち望んでいる。

多くのパラディ島の人間を殺した自分が。仲間を殺した自分が。戦争で敵兵を殺した自分が。殺して、殺し続けている、「罪」で穢れきった己が。

生きていいはずがない。

生きていいわけがない。

死ぬべきであり、今こうして生きていることすらも「罪」なのだ。

少しずつ少しずつ、彼が天使と思っている女の言葉によって歪められてきたライナーはすでに、悪魔の狂気に感染しているのだろう。

当の悪魔な女は現在行方不明である。

ファルコからその件が知れた。ガビたちが心配し、ライナーもその身を案じた。戦士長とはいえ隠しきれないほどの通夜ムードであり、アニだけは「戦士長が生きている限りはどつかで生きているでしょ」と、全く動じていなかった。

戦士の中（ジーク除く）で最もアウラと関わりの深い女は、ツラ構えが違かった。

「あつ、見つけた」

ゾフィアが群衆の中をかき分けて戻ってきたファルコを発見した。

同期に小言を言われる中、ファルコは小さく謝る。

「知り合いと話すのはいいが、開幕はもうすぐなんだ。行動は慎めよ」

「すみません、ブラウン副長……」

今回の演目のためにマーレ軍の中核だけでなく、各国の大使や名家の数々、さらに諸

外国の記者が一堂にそろろう。

そんな場で仕出かせば、どんな処分が下るかわからない。

「お前が会っていたのはもしかして、いつもココソコと会いに行っている奴か？」

「ギクツ」

「口で驚いた音を出すなよ……そんなに仲がいいんだな」

「はい。たまたま戦争から帰った時に会った方なんですけど、それ以来仲良くさせていたでいてるんです」

その人物とは「クルーガー」さんと言うらしい。その人物の代わりに手紙を運ぶなど、優しい少年は度々パシられていたようだ。

「クルーガーさんはご家庭の事情で、色々大変だったみたいです」

「そうか。他人に優しくするのもいいが、もう少し自分のことも気遣えよ」

「は、はいっ！」

敬礼したファルコはウドとゾフィアに挟まれ、ライナーの前方を歩いていく。

「どんな人なんだよ？」とニヤニヤしながら尋ねるウドは、その「クルーガー」を女性かと疑っているらしい。

それをスツパリと切るゾフィア。ガビの件を少女に持ち出されたファルコは、頓狂な

声を上げた。

ワイワイと楽しげな彼らの姿にふとライナーの中で、幼き頃の自分たちの姿が過ぎる。

自分を抜いた少年少女。その中の少年二人のうち一人は、骸も残さず死に、もう一人は安否不明となっている。

「だからその人はッ、「エレン・クルーガー」っていう男の人で!!」

聞こえたその言葉に、「えっ?」と呟いたライナー。思ったよりもその声が大きかったのか、振り返った子どもたちの視線が刺さる。

汗が唐突に吹き出し、浅い呼吸を繰り返しそうになるのを無理やり抑え、ライナーは恐る恐る聞いた。

きつと、気のせいだと思いつつ。

しかし今、まさに宣戦布告の狼煙がこの日、しかもこの場所で行われるという時に出た「エレン」という言葉は、決して無視できないものである。

「その男の瞳は……何色だった?」

ファルコは副長の様子の変化に心配そうな顔をしつつ、「緑っぽい色です」と答える。

震えた息を漏らしたライナーは、その人物が旧友であるかもしれないと告げ、先ほどまで男といたフアルコに案内を頼んだ。

ウドたちには先に戻ってもらい、自分たちが遅くなることを戦士長らに告げてもらうよう頼んで。

「クルーガーさんの向かう場所は聞いたのでだいたい知っていますけど、まさか副長の友人だとは知らなかったです……」

「……俺も、驚いてるよ」

ライナーは今自分が銃的に行っているのか、それとも「戦士」として行動しているのか、分からなかった。

さながら兵士か戦士か、自分が何者であるのか分からなくなっていたあの頃のように。

祭りの喧騒は彼の耳の中に入り、そのまま通り過ぎて行った。

鬱だナー

私アウラ・フリッツちゃん。フリーダム始祖様の子孫なの。

現在劇が始まり、私はそれをタイバー家の関係者という体で、各国のさまざまな名家がいる場所でコッソリと眺めている。

衣服は華美すぎないシンプルな漆黒のドレス。首元が広く見えるもので、袖部分は生地が薄いため肌が透ける。

浮かび上がる花の紋様と生地質感に「ゴツツ高いヤツやん」と実感する。

その上には白いカーディガンを羽織っており、金髪のウィッグを付けていた。これで瞳を青に変えられれば完全にユミルちゃんである。

車椅子に乗る美女ちゃんに、複数の男性に「お美しいですね」から始まって、どこの家の者か尋ねられる私。これだから美女って罪深い。その度に「お忍びですの、ですから」と言い、はぐらかす。

口元に手を当てて、クスリと微笑むだけで、相手は息を呑んでしまうのですから。

普段あまりしない化粧と高価な衣装の効果で、いつもの数倍アウラちゃんの魅力が増

してしまっていた。

ちなみに車椅子を押してくださっているのはタイバー家の近衛兵の方で、スーツを着ていらつしやいます。

ここに至るまで、ヴィリー・タイバーの協力を無事得られたのは幸いでした。

ユミルちゃんの存在は偉大なんやね。

歴史の転換点に現れた存在に、当主殿は運命を感じ、そして己の立場を悟った。

巨人大戦の真実を語る彼は、今宵タイバー家と英雄ヘーロスの名誉を捨て、その上で迫る脅威——始祖の力を持ったエレン・イエーガーの存在を明らかにする。

そして争い合う世界の人間たちに、武器を取らせるのだ。

すべては幾千もの壁を構成する、大型巨人の脅威から世界を守るために。

たとえ敵がマーレに侵入し、ねらわれることが分かっているとしても、己を犠牲にして世界に変革をもたらさんとする。

そんな男は本当の“英雄”となるのだろう。

その姿をヴィリー・タイバーは王家の血を継ぐ私と、始祖ユミルに見届けてもらいたいそうだ。

当日、敵の奇襲に遭う可能性が高いと知りつつ、それでも立ち会って欲しかった。

私としても是非でも行きかけたので、相互の意見は一致していた。もし危険でも「ユミルの寵愛があるから大丈夫」とごり押しすれば、問題ない。モーマンタイプ

ウィッグをしても既知の人間には見抜かれてしまう可能性はありますが、そこは仕方ないでしょう。

バレてもこちらは来賓客の席だ。来ると不自然なため近寄れない。

そしていよいよ壮大な音楽が鳴り響き、舞台が始まる。

こういった劇を鑑賞する機会は何気にはじめてなので、純粹に楽しめた。

一番の見どころは巨人の被害に遭った人間たちをイメージするため、役者たちが呻いていたところですね。少しわざとらしさも感じられました。

もつとりアルに叫んでもよかった。こちとら本当に巨人に食われる仲間たちの姿を経験しているのですね。採点は厳しいですよ。

それから順当に進んでいく劇。大戦の真実を明かされ騒然とする周囲は、ひとりの語

り手であるヴィリー・タイバーの重い決意からくる言葉に聞き入る。

彼の男は偽りの地位を抜きにして、純粋に人の上に立つ器量を持っている。

世界を滅ぼそうとする強大なエレン^敵を前にして、共に立ち上がることを呼びかけるヴィリー。

鼻を吸る音が聞こえて隣を見れば、男が泣いている。その他も、その他も。

感涙し、盛大な拍手を送る周囲を見て、私もゆつくりと手を叩いた。

美しい。一つの脅威を前にして、共に戦おうと呼びかけるヴィリー・タイバーの言葉も。その言葉に感銘を受け、手を取り合い武器を取ることを決める人間たちの姿も。

これが、お兄さまが用意した舞台。

涙を流す者たちとは対照的に顔が熱くなり、今自分の顔が恍惚としているのがわかる。

きっとエレンもすでにこの場に潜んでいるのだろう。この劇は一般のエルディア人も見ることができる。ゆえに負傷兵を偽っている彼も入り込むことは可能だ。

いつ戦いの狼煙が上がるのか。

そして混乱の中、どれだけ多くの無垢の命が消えて、死にゆく間際にその煌めきを見

せるのか。

知りたい。見たい。堪能して狂いたい。

私が「生」きていることを、実感させて欲しい。

死んではない証明を、してほしい。

「パラディ島勢力へ、宣戦布告を」———「!!」

その、瞬間。

爆発するような音とともに、ヴィリー・タイバーがいる舞台の頭上から、建物の瓦礫を吹き飛ばしながら巨人が生えてきた。

慟哭し、雄叫びを上げる巨人。まさしく今この時、「主人公」がそろったのだ。

タイバー家の件でフリーダムに動いて以来出てきていないユミルは、この光景を見ているのだろうか。見逃していたらもったいないですね。

瓦礫が遠くのこちらにも届く中、巨人に宙へ放り投げられたヴィリーは、その口の中へ消えて行った。

どうやら、タイパー家が戦鎚を保有していることもしつかり伝わっているらしい。でないとエレンがヴィリーを食らった理由にならないものな。

突然の事態に、周囲は悲鳴を上げて逃げ始める。近衛兵の方も「逃げましょう」とおっしやつたが、もう少し見ていたい。

どうせ車椅子ですと逃げる際に、どうしても周囲より遅れてしまい混乱に巻き込まれやすい。

ですので人の移動が落ち着いてから動いた方が安全でしょう。

《戦鎚の巨人》が誰であるかは聞かされていないものの、始祖ユミルが見えていたことからも、誰かはわかっている。

そして私が見当がついていることも、あちらは分かっているでしょう。

「んっ。」

ヴィリーを美味しくいただいたエレンが軍の人間の方へ視線を向けようとした時、一瞬動きを止める。こちらを見えていますね。

お姉ちゃんがより美女になっていることに気づいてしまったのでしょうか（建前）。
来るんじゃねえ（本音）。

すぐに視線を戻すと、エレンは驚異のスタートを決めて軍部の人間を潰した。そろそろ戦鎧の彼女も動くでしょうし、逃げるとしましょう。

と言つても、完全な安全圏に逃げる気はない。私をお持ち帰りしたいという話に嘘偽りがなければ、調査兵団は私を見つけ次第回収するでしょう。

四年が経てば私の容姿を知らない者も増えるだろうが、似顔絵なりなんなり、情報はもらっているだろう。

またジーク・イエーガーの側にいることも、大方予想はついているはずだ。少なくとも、私と会った負傷兵エレンくんは。

あとは事が終わり次第だ。兄弟が揃った時に、「私」をさらけ出して殺されましょう。ふひ。

車椅子を押されながらウィッグを捨てて、前髪をかき上げながら違和感のなくなった頭部の清涼感を味わう。同時に瓦礫に巻き込まれた人間や四方八方で聞こえる叫び声に、口元を隠しながら笑った。

みな死と生の間で、今の絶望を味わっている。

まさかこんな事態になるなんて、一部を除いて思いもよらなかつただろう。

「生」きているって素晴らしい。

だから早く、殺して。

??????

タイバー家の演説する広場にて起こった、エレン・イエーガーの強襲。

ヴィリー・タイバーとテオ・マガトが、マーレ国内に潜んでいる「ネズミ」の存在に気づきながらも、今宵の演目はとり行われた。

すべては腐敗したマーレ政府の打開と、「地ならし」の脅威を止めるため。

ヴィリー・タイバーは自らの命がねらわれることを理解した上で、舞台に立った。また軍部の中心を一気に抹消するために、わざと舞台の近くに配置して。

結果、タイバー家の当主は《進撃の巨人》に食い殺され、軍部の人間も殺された。

その後、兄の最期を見届けた当主の妹——ラーラが巨人化し、進撃VS戦鎚の火蓋が切られ、ラーラ側の援護としてマガトラが参戦する。

ヴィリーとマガトの思惑どおり、各国の主要人物がいた中起きた歴史的な大事件。

これで世界はパラディ島を人類の脅威とみなし、スムーズに戦いへ移行することができるとはわかってい

たはずだ。ただしパラディ島側も今ことを起こせば、戦いが避けられなくなることはわかっていたはずだ。

その意図を含め、慎重に行動する必要がある。

そして、広場から離れた場所。

大勢の人間が逃げまどい、押し合う群れがある程度おさまった中。

戦士候補生らの姿がそこにはあった。

演目が始まる前、マガトの呼び出しの命を伝えにきた兵士に付いていった戦士たち。そのためヴィリー・タイバーが襲われた際、広場に戦士はいなかった。

彼らもまたすでに敵の策にハマっていたのである。

パラディ島勢力の共謀者であるジークは正門へ。

対し、アニとピークは建物内へ。彼らを案内した兵士こそ、似合わないヒゲをつけた

イエレナだ。

床を踏んだ時、一部分だけ感触が違うと感じたアニは、すぐに後方にいた兵士の体壁に押さえつけ、腕を押し当てるようにして首を締めた。

一瞬のできごとにピークは驚いたが、その前から戦士二人は妙な違和感を抱いていた。

アニならばその生まれもつての勘で。ピークならば、その鋭い洞察力で。

しかしアニは兵士に耳元で何かを囁かれると、目を見開き数歩下がった。

その隙にイエレナはトラップにつながるヒモを切り、二人を床の底へ落とす。巨人化できないようにするための策である。

遠い天井を見上げるようになったピークは、やられた——と思いつつ、隣で拳を握りしめるアニを見つめる。

なぜ兵士を離れたのか問えば、青い瞳はゆらゆらと揺らいで、小さく「ごめん……」と呟くのみ。

兵士に言われた内容も、話せないらしい。

付き合いの長いピークであっても、見たことのないアニの表情だった。

ピークは状況を整理する傍ら、深い息を吐く。

見覚えのあるつけヒゲの兵士の件といい、戦士長のみ正門に向かわされた件といい、募る疑問は多い。アニの件も然りだ。

念のためにジークと別れ、建物へ来る途中で出会ったパンツァー隊（車力の巨人が機関銃を装備した時、それを操作するメンバーである）にかけ寄り、こつそりと後を追うよう頼んでいた。

ゆえに助けはそう時間を要さず来る。

「……………ねえアニ、「戦士」として戦う覚悟はあるわよね？」

そう呟いたピークの言葉に、見返したアニは小さくうなづく。

車力の女の瞳は変わらず彼女を、「仲間」と信じると、告げているようで。

同時にアニの中で、兵士がささやいた言葉がよぎった。

——あなたは悪魔のご慈悲に逆らう気ですか？

兵士の声色はゾツとするような、冷たさを内包していた。

悪魔のご慈悲。

なぜかその言葉を聞いた時彼女の中には、一人の女の笑みが浮かんだのである。見る者を魅了する女——アウラ・イエーガーの、その笑みを。

対し話を戻して、戦士候補生たちの現状。

エレンの強襲の直後、舞ったガレキから咄嗟に子どもたちを守るように動いたポルコ。

位置としてピークの前方におり、子どもたちは彼からみて右側にいた。

ポルコは隣にいたゾフィアとガビを抱きしめ、地面へ伏せさせるように転がった。

そのあと子どもたちやコルトにケガはなかったものの、ちょうどゾフィアが先程までいた位置に大きなガレキが落ち、ポルコの左足に当たってしまったのである。

激痛に叫びながら彼は潰れた足をブチブチと、無理やり引きずり出す。

骨が粉々に砕け、足の形を失ったそこは、靴とともに肉と皮がくつつくように平たくなり、引きずった場所には血が続く。

歩行は困難だと一目瞭然の様にガビは顔を歪め、ゾフィアは恐怖により言葉をなくす。

一步間違えれば少女の体全体が、ポルコの足のように潰れていただろう。

その間、広がった恐怖の波紋は周囲に広がり、ヒトの群れが一斉に動き出す。

それに巻き込まれないようにと、コルトはウドを、ポルコはガビと震えるゾフィアを抱きしめ、ガレキの後ろに身を寄せるように隠れた。

人の雪崩が収まったあとは、ポルコはコルトに背負われ、ウドとガビは「ヒツ、ヒツ」と、しゃっくりをあげるように息を漏らすゾフィアの背中に手を回して歩かせた。

ポルコをすぐにも病院に連れて行かねばならない。

そんな中、ガビは戻ってきていないライナーを、コルトはファルコを案ずる。

一行のスピードはあまり早くない。手負いのポルコをコルトがおぶっているためだ。

身長がコルトの方が5cm高いながら、両者のウエイト差は10kg以上ある。どちらが重いかは明白であろう。ピークの趣味が、筋トレ中のポルコの筋肉をつつくことからも。

道に転がる大小細かなガレキや、その下敷きになった死体。立ち込めるケムリに見通

しは不明瞭である。

出店を回っていた時とは一転した地獄のような光景に、ガビは喉から意味もなく声がもれそうになる。

泣いたところで、叫んだところで、この地獄は変わらない。終わらない。

悲惨な死体と血生臭い香りに、ゾフィアを挟んでガビの隣にいるウドは、込みあげた胃酸を飲み込んだ。

まさに天国と地獄。

一瞬にして世界は、進撃の足音をその耳にすることになったのである。

???????

「俺を……殺してくれ……!!」

時は少し遡り、ヴィリー・タイバーが強襲される前。

クルーガーの元ヘライナーを連れてきたファルコが見たのは、四つん這いになり死を

乞う男の姿だった。

クルーガーは最初、旧友であるはずのライナーを見た時、一瞬驚いた表情を浮かべた。彼はすぐに無機質さを宿す顔へと戻り、少しの間を置いてライナーに座るようにうながした。ファルコについては、その場に残るよう続けた。

幸いイスはクルーガーが座っている分ともう一つ、隅にあった。

それを引つ張り男の正面に座ったライナーは、ファルコが見たことのないほど、不安定に映った。

そして、いくつか言葉を交わしていった二人。クルーガーの様子は変わらなかったが、話が進むごとにライナーの震えがひどくなっていく。

ちょうど彼らのいる上は舞台となっており、話をしている最中、ヴィリー・タイバーの声や音楽の音がよく聞こえた。

「最近はどうだ？」やら、「相変わらずアウラ・イエーガーのことが好きなのか？」やら、他愛ない会話をするクルーガー。

だがそんな男の言葉に耐えかねたように、立ち上がったライナーは叫んだのだ。

お前がここへ来た目的は、俺なんだろ——と。

「お前らができるだけ苦しんで死ぬように努力するよ」と、お前はあの時、俺に言っただじやないか…!!」

ここにきてファルコが「古い友人」という言葉の違和感や、ライナーの普通ではない状態に一つの可能性——エレン・クルーガーの存在に疑惑を持ち始めた中、クルーガーは耳をかく。

「言っただけ、そんなこと…」

まるで今まで忘れていた、と言わんばかりの様子。

クルーガーの態度に「へ？」と頓狂な声を出し、ライナーは固まる。

クルーガーは——否、エレン・イエーガーは、マレーで見たことを語る。

壁の中で見ていた世界と、外で見た世界というのは「同じ」だった。

善人と悪人。虐げる者に、虐げられる者。支配する者と、管理される者。

そんな世界の同一の部分を目の当たりにした男は、ライナーたちが行った行為も、こ

れからエレンが起こそうとすることと同じなのだと思つた。

大切なもののために、誰かを傷つける。そうしなければ守れない何かがある。それは人それぞれ違うものの、作りは同じだ。

奪う側だったライナーたちの側に、今度はエレンが回る。

同じなのだ、どこまでも。

だがエレンの言葉に、ライナーは「違うんだ」と返す。

エレンの母親を含めて、多くの人間を殺してきたライナー。

重い十字架にすでに耐えきれなくなっていた男を裁くはずの「罰」はしかし、正常に執行されない。処刑人のはずのエレンに、ライナーを殺そうとする様子は窺えないのだ。

そうしてファルコの前で涙を流しながら「罰」を乞う、男の姿ができあがった。

少年もまたエレンに利用された件——送り届けていた手紙が、敵の仲間の元へ送られていた事実——を知り、深く項垂れる。

「顔を上げろよ、ライナー」

差し伸ばされたのは、エレンの手。

蒸気を発しながら再生していくその右足に息を呑みながら、ライナーは翡翠の瞳を見つめた。

「お前も辛かったんだな」

「ちがつ、違うんだ！」

「何も違わないだろ。オレたちは同じだ」

「俺はお前に、殺されないと……！」

「なぜそんなに殺されたいんだ、オレに？」

「だからそれは、俺がお前の母親を殺して——」

ライナーを引っ張りあげた手が不意に、強く握られた。

仕方がなかったんだろ、と呟いたのはエレン。

「進む中で犠牲は生まれる。母さんもその犠牲の一人だった。でも進むしか方法はないんだ。だから、仕方ない。そうだろ、ライナー」

濁った瞳はそのままに、エレンは微笑む。

ゾワゾワとした悪寒がライナーの背筋に走った中、部屋につながる階段の上から、人

の心配がした。

おそらくはマーレ兵士だ——と思ったところで、彼が視線を戻すと、目の前の男の口元にあつたのは手。

最後に、自身が止まらないことを告げたエレンは手を噛み切り、稲妻とともに発光した。

ライナーは咄嗟にファルコの元へかけ寄り、その体を抱きしめる。

そして進撃の咆哮が、舞台上に響くことになったのだった。

苦しいんだナー

私、アウラ・イエーガーちゃん。今広場からだいぶ離れた場所にいるの。

途中後方でまばゆい光が起こったため、戦鎚が登場したと思われる。

それから広場の方角は、まるで怪獣大乱闘のような大騒ぎだ。時折空へガレキが飛ぶ。

両者大暴れしているのだろう。特にエレン・イエーガーくん19歳児は。

無力化されるはずのお兄さま以外の戦士たちは、今頃どうなっているだろうか。

勘のいいアニならば、途中で罠の存在に気づいて無効化してしまいそうだ。そうなる
と多少の計画の誤差は生まれるかもしれない。そもそもエレンが広場にいる以上、他の
マーレ兵が集結する。

今は狭い路地裏に入って、息を潜めながら大通りを監視しているが、兵士を乗せた装
甲車が横切るのが何度か見えた。

マーレ兵がいるなら自ずと調査兵団も集まる。タイバー公からの情報で、マーレ国に

彼らが侵入していることは確かですから。

そしてアニが罫を無効化すれば、戦士長以外の戦士も広場につどう。

アニたそについては始祖の件を話さないなら、存分に暴れていただいて結構である。ベルトルトについてエレンから聞きそびれてしまったものの、後で聞けるでしょう。

仮にすでに死んでいるなら、その力を持った人物がマーレに侵入している可能性も大いにある。

ユミルの寵愛や王家の血筋の件において、前者はエレンたちにすでにバレているから、マーレ政府に伝わってもいい。

その政府すら重鎮たちはこぞつて殺されたから、指揮はテオ・マガトに回るだろう。

後者はジーク・イエーガーがマーレから逃亡すれば、もう明らかになっていい事実です。

まあアニも塩梅がわからないでしょう。どこまで話しているのか、ダメなのか。地雷を踏むリスクを考えたら、ほとんど話さないと思います。

「！」

——と、のんきに考えていた折、強風が襲った。

建物が揺れる衝撃。粉塵と、飛び散る窓ガラスから私をかばうように、お供の方が地面に伏せさせてくれた。

何が起こったのか、制止の声を無視して地面を這う形で、路地裏から顔をのぞかす。位置はちようど軍港がある方角。夜を照らす光源の正体は、凄まじい爆発である。

マーレは《進撃の巨人》の登場に合わせて、急いで兵士を集めているはずだ。陸だけでなく、海からも。それを踏まえて現状について考える。

おそらくは軍艦を排除するためにあの爆発は起こったのだろう。であれば、あの爆風の原因は何か。

間違いなく《超大型巨人》だろう。

まさか戦士であるベルトルト・フーバーが、マーレへ反旗を翻すような行為を起こすわけがない。

つまり超大型はパラディ島勢力に奪われた。

継承した人間が誰であるかはともかく、この事実にあニ・レオンハートが気づいたら、どうなるか。

——ええ、曇るでしょう（ニチャ）

ちよつと広場に行つてきていいですか？もしかしたらカノジョがいるかもしれないので。

しかし、お供の人に「正気ですか!!？」と言われてしまった。

見に行きたい。見に行きたいけれど、私が最高の最期を迎える前に巨人大乱闘に巻き込まれて、死んでしまう可能性が跳ねあがる。

……仕方ありません。ここは苦汁を飲んで諦めましょう。

アニちゃんが発狂していたらどうしよう。きつと可哀想で、可愛らしくて、発狂パワーを片手にエレンくんがフルボッコされているかもしれない。戦鎚もおりますのに。

まあ、大丈夫でしょう。アツカーマン二人に、ミケやハンジらもいるでしょうから。

こうして改めて考えると、巨人の力を人間ながらに發揮できるアツカーマン（うち一人はイコールで、単体で知性巨人を倒せる規格外の力を持つ）二名に、調査兵団No. 2の男、ミケ・ザカリアス。

それに104期生たちも相当強くなっているでしょう。新しく入った新兵も強いはず。

アウラちゃんも適度なトレーニングはしていましたが、すっかり体力が落ちてしまっ

た。頭に知識を詰め込んだ分だけ、失った力。

それでも立体機動装置を使いこなせない——とは思わない。七年慣れ親しんだ感覚は、そう簡単には忘れない。

「ヌウツ！」

その時間こえた、ワイヤーが巻かれる音。路地裏に引っこみ、なるべく姿勢を低くして、壁に張りつき息を殺す。

上から聞こえる音は間違いなく立体機動装置の音。頭上で兵士が動いているのだろう。

すると間もなく夜空の灯りしかなかった空に、光がついた。

何か照明のようなものを屋根に設置しているようである。

こちらに気づかれないように静かに動いて大通りへ近づくと、道を挟んだ向かい側の建物の上にも兵士が照明を取り付けている。

ついでに調査兵団の服が進化していることもうかがえた。しかも無数の長い筒状のものを、腕に複数セットしている。

お試しで始祖の力を試していた時に兵士の情報で得た、新兵器の内容と一致する。そ

れが正しいなら「雷槍」という名前だったはずだ。

ハンジ・ゾエがウォール・マリア奪還作戦に向けて、技術班に開発させていたもの。彼女がやたらと私の病室へ訪れていたのも、その武器について意見交換をしたかった旨もあつたのかもしれない。私の側に近寄るな（追真）

従来の武器と比べて、その総重量はさらに増えているだろう。榴弾の類の武器である。

「灯りね……」

なぜ調査兵団は、照明を取り付けているのだろうか。

その場所を制圧したことの証としては、少し違和感がある。明かりは一つの道に沿うようにして取りつけられていた。

——いや、待て。そもそもエレンたちが仕掛けてきたのはいいけれど、帰りはどうする気なのだ。

行きはアズマビト家の力を借りるなりし、船などを使った移動はできるだろう。

だが超大型が暴れた海上側は、そこに隣接する建物含めてぶつ飛んだはずだ。ゆえに立体物がない。立体機動で移動することはできまい。

ならば帰る手段は何を使うのか。

陸はダメ。で、あるなら後は……。

「——空、か」

アズマビト家なら飛行船の一つや二つ、提供することはできるだろう。あるいは混乱に乗じて、奪うこともできる。

立機動でそのまま乗り込めば、スムーズに逃げることもできますし。

とすると、照明は飛行船へ送る目印のようなものだろう。

この方法を思いついた人間は中々に上手いやり方を考える。エルヴィン団長だとは思いますが。それかトロスト区の大岩の案を編み出した、アルミンくんの可能性もある。

ひとまず飛行船が来るとしたら、タイミングを見て兵士に捕まっておいた方がいいだろう。

ここら辺でお供の方ともお別れだ。タイバー公もラーラも私の望みは知らない。私の最高の最期への望みを。

一時、逃げる際の車椅子の揺れで吐き気を覚えていた体で、路地裏へと隠れていた私。

ただ敵兵士が現れてこの場もまずいから——と、お供におぶるよう頼む。護衛を任されている男はうなずき、私を背負った。

最初から背負われなかったのは私が女性なので、過度な接触を避けるためです。タイバー公から任務を仰せつかった護衛相手に、そりやあ不埒なことをするわけにはいかない。

そして、自然な動作で背後から伸ばした両手で相手の頭をつかんで、そのまま横へと動かす。

グキツ、という音とともに「あ、えっ？」と声を漏らしたお供の方は、そのまま倒れた。これならば松葉杖も携帯させた方がよかったですね。

地面を四つん這いで移動するのは中々骨が折れそうですから、車椅子を杖代わりになしましょう。ドレスも動きが制限されて動きにくい。

そのため裾を太ももの際どいところまで裂いて、私は大通りへと向かった。

???????

広場では《戦鎧の巨人》の正体を見抜いたエレンが、ミカサの助力を得つつ、結晶に包まれ巨人を操っていた地中のラーラ・タイバーを引きずり出した。

その直後、パンツァー隊により助けられたアニが到着し、進撃VS女型の火蓋が再び切られたのだ。

ピークは武装をする必要があるため、少し遅れての登場となる。

広場には進撃のほかに、アッカーマンが二人にミケ班もいた。歴戦の精鋭ぞろいである。

特にリヴァイに関しては《獣の巨人》を単独で討ち取る、もはや人外じみた戦績を残している。

ただ女型はアニ・レオンハートの戦闘能力の高さも相まって、そう易々と勝てる相手ではないことは、調査兵団もまた女型の捕獲作戦や、ストヘス区での戦いで経験している。

リヴァイであっても勝てる相手ではない、と思わせる相手。

しかし彼らには鎧の装甲を打ち破った雷槍が存在する。

その新武器の脅威について、ライナーの報告によりマーレ側も認識していた。

ゆえにアニは前提として刺さらないように硬質化した手で雷槍をはらいのけながら、広場の周囲の建物を破壊しながら回る。

辺りには建物が多く存在する。一見パラディ島勢力だけでなくマーレ側も「何やつてんだ？」と思ったアニの行動は、立体物をなくす方法。

調査兵団が飛び回れないように。また、散らばるガレキを避けざるを得ない状況を作り、ヘタに動けないようにする意図があった。

この際建物の被害など、やすいものだろう。

この時の彼女の中には間違いなく、不在のライナーに対する怒りもあったに違いない。

当のナイスガイはファルコを守り、巨人化したまま地中に埋まっている。生きる意思を失った状態で。

広場中央で戦錘の本体を硬質化した手で殴り破壊しようとするエレンと、その周囲を回りながら建物を破壊するアニ。シユールな光景がしばし続いた。

だが、散らばるガレキがエレンにぶち当たり、戦況は動く。

あらかた調査兵団の立体物となる建物を、破壊し終えたアニが放った攻撃。

ちようどそこに武装を終えた車力も到着。

《獣の巨人》もついで現れ、戦士とパラディ島勢力の戦闘が始まった。

この際に矛となる獣を守るため、車力と女型は倒壊していない建物がある近辺にまで移動した。

そして起こった、軍港の大爆発。

超大型がパラディ島に奪われていたことが明らかとなった。

爆風の衝撃とともに突きつけられた事実にあの思考が止まった中、敵の総攻撃が襲来。

港の爆発に気を取られていた獣の隙をつき、リヴアイがうなじを削いだ後、そこに雷槍を爆破。

ピークもまた車力の上で武器を操作するパンツァー隊がねらわれ、彼女も雷槍の攻撃に遭い重傷を負った。

彼女は悲惨な状況を受けて、エレン・イエーガー絶対殺すマンと化していたガビを追って、戦場までできていたファルコに助けられた。それがなければ、死んでいた可能性が高い。

ちなみにトドメの雷槍を外したのはジャンである。彼は現れた子どもを前にして、判
断が鈍った。

またファルコについては、少年を守るようにして巨人化した鎧の隙間から、外へと脱
出していた。

鎧の体は確かに地中に埋もれていたものの、ファルコがいる部分は地上へと吐出して
いたのである。

相次いで戦士が倒され、残るはアニと、エレンとのハートフル面談で生きる意思を
失っているナイスガイ。

戦鎚はすでにエレンとの戦闘で戦う体力が残っていない。

硬質化によって武器を作るその力は強大であるが、同時に消耗も激しいのだ。

アニはそんな中、空を仰ぎ、咆哮した。

それは巨人を呼び寄せる叫びと似ているようで、違う。彼女の心の中で生まれた痛み
が、外へと漏れ出る。

涙は、不思議と出なかった。

彼女もまたベルトルト・フーバーが生きていると思いながら、その可能性を——この

世にはもういないかもしれないとを、わかっていたからかもしれない。

見舞いに定期的に通っていたベルトルトの母親が亡くなった時は、涙が出たというのに。

それとも彼女は知っているからだろうか。

世界が、残酷だということを。

自分と同じ形をしている生き物を潰していた彼女もまた、潰される側になる。奪う側が、奪われる側になる。

女型は叫んだ後、視線をエレンに向け、駆け出した。

四年前はストヘス区の時、進撃が女型へと殴りかかったが、今度は逆だ。

怒れる獅子アノはしかし、その瞳に理性を失わない。なぜなら彼女は「戦士」である。感情に流されず、使命にしたがう。

エレンとアニの戦いは、激化する。

体術を交えて戦う両者。リミッターが外れているのか、アニの動きはかつてエレンが体験したものとキレが違う。

しかしその周囲には、絶対エレン・イエーガー殺すマンの少女とは正反対の、セコム

が控えていることを忘れてはならない。

周囲の建物が破壊されている中で、巨人同士の戦いに巻き込まれないように瞬時に判断しながら、正確に、最大限の力をもって体を操る。

そうしてミカサは二者の巨人にアンカーをかけながら、縦横無尽に宙を翔ける。

“アツカーマン”でなければ、到底マネできない芸当だ。

女型はエレン一人に意識を集中させていけば雷槍を食らい、かといって周囲へ意識を向けていればエレンの攻撃が襲う。

そしてそんな状況が続けば、いくらアニとて隙はできる。

それをねらいエレンの決め技が入り、拘束された彼女の足の腱が、ミカサによつて切られる。

抵抗が弱くなるとさらにエレンが優位となり、大きく開かれた口が女型のうなじへと近づいた。

その時。

ひとりの寵愛を受けし者が、稲妻とともに立ち上がる。

絶望した状況の中で、助けを求めたガビやファルコの声を受け、彼は瞳を開けた。

—— 頼んでも、静かにさせてもらえない。

—— 願っても、死なせてもらえない。

そんな彼には守りたいと思う家族や仲間、そしてガビたちがいる。

拳を向け殴りかかった男はしかし、エレンの硬質化した拳を受けて吹っ飛び、建物へとぶつかる。

「ライナアアア」と叫んでいたガビとファルコも、一瞬固まった。

だがライナーはただ殴ったのではない。彼の放った拳は女型を掴んでいたエレンの手にブチ当たり、アニを離させることに成功した。

彼女はその間に切られた腱を再生させながら立ち上がり、青い瞳を向ける。

エレンは背後の彼女へ体を向けるように飛び退き、一旦地面へ転がっていた戦鎧の結

晶体の側へと移動した。

ライナーは力を使いきったのか、再起不能。あとはアニだが、すでに飛行船が着いている。

時間的にも残された体力的にも、撤退せねばならない頃合いとなっていた。

戦鎧を食らう算段がエレンにはあつたが、肝心の結晶が壊せず食らうに至っていない。

回収するにしても重量と大きさがあり、もし飛行船の中で巨人の力を使われた暁には、全員に危害が及ぶ。

そのため置いていくしかないか——と彼が考えた時。

女型の視線が彼より少し下の場所で、止まっていることに気づいた。

エレンが同じ場所へ視線を向けると、そこはちようど下。地面に転がっている結晶体の場所。

そこに一人のボロ切れのような服を身にまとった少女が、結晶の横に立っている。その後ろ姿はうつすらと透けており、その先に少女を見つめているであろう戦鎧の本体の姿が見える。

エレンは思わず、息を呑んだ。

それは少女が結晶に触れた瞬間、その硬質化がパシヤン、と一気に溶けたこともある。また少女が透けていることから、人間ではないとわかるところも。

しかしそれ以上に少女が振り返った際、見えた顔。

エレンを見上げるようにのぞいたその顔は、あまりにも姉と——アウラ・イエーガーと似ていた。それこそ同一人物と言ってもいいほどに。

異なるのは金の髪と蒼い瞳に、その身長くらいだ。

少女は大きなあくびを一つ溢すと、そのまま消えていく。

突然の事態にしかし、エレンの手は戦鎚の本体をつかみ上げる。チャンスは今しかない。い。

理解の追いつかないラーラは体を握りつぶされ、くの字に曲がり、進撃の口の中へと招かれた。

一連を目撃し固まっていたアニは行動を起こそうとしたが、不意をつく形でミカサに背後からうなじへ雷槍を叩き込まれる。

咄嗟に硬質化で防ごうとしたものの、不完全に終わり人体に爆撃を受ける結果になっ

た彼女は、地面へ倒れ込んだ。

最後まで立っていた巨人は、進撃のみ。

エレンはうなじから体を出し、小さく眩く。

始祖、ユミル？——と。

あああああああああ（文字数制限

飛行船を操縦するのはオニヤンコポン。その隣では団長であるハンジ・ゾエ、すでに回収されたアルミンやミカサ、リヴァイにミケなど幹部組の面々が並ぶ。

同室には死体を偽装するため、四肢を残してきたジークと、今回の惨劇を生み出すにあたったエレン・イエーガーもいる。

また、イエレナもダルマな男の傍に控えていた。

調査兵団の死者が六名だったのに対し、マール側は大きな打撃を受けた。少なくとも当分のパラディ島への侵攻は難しいだろう。「地ならし」を試験的に試す猶予期間は十分稼げた。

続々と兵士が飛行船へ帰還する中、コニーが大通りで回収した女も、また船に乗りこんだ。

曰く、車いすを支えにしながら歩いていたところを発見した——とのこと。

裏切り者、アウラ・イエーガー。

同時に始祖ユミルの寵愛を受けし女。

ウォール・マリア奪還作戦に参加したフロック・フォルスターも、間近で女を見るのははじめてであり、奪還作戦以降に調査兵団に入った兵士は言わずもがな。

なぜ女がドレスを身にまとっているかはともかく、「裏切り者」と知れている以上、兵士の心情は穏やかではない。

それは彼女を実際を知るコニーたちよりも、伝聞で得た情報が壁外への敵対心も相まって、新参者の方が純粹な憎しみを抱いている。

睨みつける視線をしかし、意にも介さない様子の女。

緊迫した中で兵士の一人がブレードを握る音が聞こえた直後、それを制するようにフロックが前に出た。

「裏切り者の、ご登場ですか」

皮肉の交じった言葉に、アウラはフロックへ視線を向ける。白銅色の瞳が何をとらえているか、窺い知れない。

「ジーク・イエーガーはどこだ」と言い出すとも思われた。しかし女は兵士の顔を確認するように見ているようだ。

「団長たちは奥にいらっしやるのですか？」

「ハンジ団長は奥にいるよ」

「ハンジ……………団長？」

どうやら、エレンと接触したであろうことは予想がついていたが、エルヴィンがすでに亡くなっている件などは伝えられていないらしい。

コニーの返答に、アウラは眉間にシワを寄せる。

ハンジ・ゾエよりもミケ・ザカリアスの方がよいだろう——と彼女が思った束の間、胸ぐらをつかまれる。

つかみかかった犯人の男は、激しい憎悪と怒りをにじませて、睨めつける。

至近距離になったフロックの瞳を女は見つめ、困ったように眉を下げた。

「貴様のエゴのために、どれだけの兵士が死んだと思っている!!」

「乱暴はよしてよ、怖いなあ」

「……………ツ、最初から情報を包み隠さず話していれば——」

「何か変わっていたかもしれないって？」

女の瞳がスウ、と細まる。

確かに壁外の情報を知る彼女がエルヴィンたちに話していれば、戦況は大きく変わっていたかもしれない。

中央憲兵の脅威についても、情報が漏れないようにエルヴィンが情報を伝える人間を信頼のおける人物に限れば、それで済む。

だが当のエルヴィン・スミスが知りたかった“世界の真実”を知ってしまったえば、進めなくなっていた。

四年前超大型が出現した時。

あるいは女型がエレンをねらった時。

あるいはストヘス区戦、あるいはライナーとベルトルトがエレンを攫った時。

人類は大きな節目で活路を見出してきたエルヴィン団長の推進力を失い、早くに滅びを迎えていたかもしれない。

改めてエルヴィン・スミスがどれほどパラディ島にとって必要不可欠な存在だったか、考えると枚挙に暇がない。

調査兵団は偉大な英雄を亡くした。

その場面がおそらくウォール・マリア奪還作戦時だろう——と、アウラも予想がついた。

だからこそ彼女の反応に、目の前の男の逆鱗に触れたのだろうとも、考えて。

深く、息を吐く。

「自分で進まぬ者に、夜明けは来ないんだよ」

現にエルヴィン団長が亡くなっても、調査兵団は進み続けている。一人一人が歩んでいるからこそ、機能し続けているのだ。

アウラの答えに胸ぐらを離れたフロックは、静かに「そうですか」と返す。

そして徐にブレードを抜いた。コニーが咄嗟に反応したが、フロックの周囲にいた兵士が肩をつかんで阻む。

「何考えてんだフロック!!」

「コニー、考えてみる。本当にこの女が「寵愛の子」っていうのなら、死んでも死なないはずだろ?」

「ハ!?ん、なの……………」

「普通なら死ぬだろうな。でも俺たちは実際にアウラ・イエーガーが寵愛を受けている様子なんて、見たことがないわけだ。つまり本当かどうかわからない。だから俺は試してみよう、って言うてるんだよ」

「お前の私情でか?それは……………間違ってるんだろ」

「お前はこの女の肩を持つのか?お前の母親を巨人にした男のためなら、パラディ島を

裏切れる女に？」

「……………ツ、でも、それと今のお前の行動とは…」

「関係がないって？俺たちは裏切られた者同士、同じなんだよコニー。同じ恨む相手を持つ仲間だ」

それに殺すわけじゃないと、フロックは女の左足へブレードを当てる。

「死なない程度に……………そうだな。足首を試しに切ってみるだけさ」

異質な空気が場を支配する。それは例えるなら、現代におけるいじめを肯定する教室の雰囲気、といったところか。

いじめの場面を見て悦ぶ者もいれば、その空気に耐えかねて表情を歪める者もいる。だが「裏切り」の事実が存在するからこそ、誰も止める者は現れない。それこそコニーを除いて。

当の彼もフロックの言葉を受け、感情が揺らいでいる。

ジークの被害に遭ったラガコ村唯一の人間の生き残りとして、人一倍ジーク・イエーガーに不信感を抱いている。

そんな男のために何でもするアウラの存在は、心象悪く映っても仕方のないことだ。

元より104期生の中で女と関わりが少なかったことから。直接話したのは今回がはじめてだろう。

「何しよんのか!!!」

だが異様な雰囲気にも包まれた中で聞こえた声に、一同の視線が出入り口へ向く。

そこにいたのは、今戻ってきたらしいサシャ。

四年の間にすっかり大人びた——見た目はビジョ、頭脳はハングリ。その名は………妖怪パアン女——彼女はフロックへ詰め寄ると、言葉を発そうとした彼を無視して、頬に拳を叩き込んだ。

周囲が騒然とする中、よろけて彼女へ物申そうとしたフロックに再度、肘打ちを食らわす。

とうとう彼は倒れ、理由のない二回目のエルボーに困惑した。

「な、何すんだよサシャ!!」

「女性に暴力をするような人は、私が許しません!!」

「お、お前だってこいつに裏切られたんだろ!」

「だからってあなたがブレードを抜く理由にはなりませんよ!」

「ちよ、ちよつと落ち着けよフロック、それにサシヤも——」

「コニーは黙っていてください!!」

サシヤのエルボーが、今度はコニーに炸裂した。吹き飛んだ彼は頬を押さえ、しばし固まる。

なぜ俺は今殴られたんだ……?と。

興奮収まらない彼女は周囲の兵士に睨みをきかせ、語る。

「恨むお気持ちもわかりますが、あなたたちより私やコニーたちの方が、よっぽど複雑な気持ちを抱いているんです。だから……だからこそ、軽率な行動は控えてください」

「……お、俺は今夢を見ているのか?あのサシヤがマトモなことを言っている……」

「失礼なことと言わないでください、コニー」

瞳をこするコニーに心外だ、と言わんばかりのサシヤ。

ついで彼女の向いた視線に、頬を押さえていたフロックは唇を噛み、「悪かった」と小さくこぼした。

そんな騒ぎがあつたためか、奥の部屋で話し合っていたリヴァイが顔を覗かす。

小汚い、と称したエレンを蹴ったばかりの男は、その姉を見るなり瞳孔を少し大きくして中へ戻った。

そのすぐ後現れたのは、ハンジ団長。一時的に指揮をアルミンに任せた彼女は、近くにいたサシャとコニーに事情を聞く。

そしてフロックを一瞥し深く息を吐いた彼女は、床に座り込んでいるアウラの前に立った。

「やあ、久しぶりだね、アウラ・イエーガー」

ニツコリと微笑んだハンジにアウラが言葉を返そうとした瞬間、顔へ強い衝撃が起こった。

床に手をつく形になった彼女は、ジン、と痛む頬を押さえる。

視線をハンジへ向ければ、握りこぶしが空中の中途半端なところで止まっている。

自分は殴られたらしい——と、理解したところで、彼女は口元を隠した。

歪みかけた、口角。それをハンジやその周囲に見られてはまずい。

依然微笑んだままのハンジは表情を消し、コニーとサシャに奥へ女を連れて行くよう命じ、中へ戻る。

団長の行為が兵士への牽制行為でありつつ、本気の感情だと、フロックたちも気づいた。

だからこそアウラは激ってしまったのだ。本当に、救えない変態である。

そして二人に肩を持たれる女。

その時ジャンも帰還し、あとは最後尾を担当する兵士だけとなった。

ジャンが戻ったため一旦止まった二人は、ジャンと一言二言言葉を交わす。

対し空気を変え、今回の勝利の余韻を味わおうと大声をあげたフロック。それに続き、周囲の兵士が拳を掲げた。

ジャンはアウラを見るなり、苦い顔をする。ついでサシャへ視線を向け、代わると申し出た。

「大丈夫ですよ、代わってもらわなくても。重くありませんし」

「バカ、そういう問題じゃねえよ。無理してんのが丸わかりだっつーの」

「む、無理なんかしてませんって！」

「いいからほら、代わった代わった」

サシャを横へ追い出し、アウラの肩を持ったジャン。だが男二人で両脇を固めるより、おぶつて連れて行った方が早いと判断し、コニーを外させる。

コニー、サシャ、ともに複雑な心境を抱いているとわかっているがゆえの、彼の判断。

馬面だなんだと言われていた少年は、間違いなく真のナイスガイである。

「やましいことを考えたら許しませんからね」

「そうだぜジャン、いくら思春期だからって」

「…………オメーらは俺の気遣いをなんだと思ってるんだよ!!」

女の肩を支えるように持ったジャンへ向く、コニーとサシヤの胡乱な目。コニーの方は冗談だが、サシヤの方はガチだ。彼が大声を上げると、二人はたまらず噴き出す。

その光景を見ていたアウラは瞳を伏せて、小さく微笑んだ。

（——えっ?）

そして、自分の口元が緩んでいることを、疑問に思った。

微笑んでいた笑みは自嘲に変わり、頭を押さえたい気持ちに駆られる。

ハンジに殴られたことも、パアン少女がパアン美女になって、自身へ複雑な思いを抱いていることも。

それに周囲から向く裏切り者への憎悪も、どれも彼女の心をかき回して、心地よくする。

そんな中で人間性の琴線にも触れて、複雑な感情を抱いてしまっている。

かなり賭けだった飛行船への搭乗も成功し、あとは最高の最期を飾るだけだ。

摩耗した精神と、「生」への余韻を感じる中で、彼女はため息を吐いた。「……ん？」

その時視界に入ったのは、出入り口の場所。息を吐いた拍子に見えたのは、子どもの手らしきもの。

つい先ほど、何か音がした、とサシャが振りかえっていた場所でもあった。その際は何もなかったはずだ。

——否、まだ見えていなかっただけか。

銃口の先が見えていることに気づいたアウラは、手を伸ばしていた。背中を晒している、サシャやコニーの背を押す。

自分で何をしているのか、アウラにもわからない。

はじめての感覚であった。体が考えるよりも先に、動くというのは。

いや、今まで何度かあったのかもしれないが、どれも彼女の意識が正常にはたらいていなかった時に起こったもののように思う。

ともかく「何をバカなことをしているのだろう」と自分で思った直後、腹に熱い感覚が走った。

ゆったりと時間が流れる中で、宙に舞うのは己の腹から漏れた鮮血。

倒れ込む間に押されて床に倒れたサシャとコニーは、瞳を丸くし固まっていた。その上に落ちるように彼女の体は倒れる。

対し、最後尾の兵士を殺し、船と繋がっていたアンカーを利用して飛行船へ侵入したガビは、撃った人間を見て硬直する。

同時に少女を守るため、兄の制止を無視して付いてきたファルコも言葉を失った。

「……………えっ」

腹から血をこぼしているのは、敵兵ではなく、アウラ。

ガビは持っていた銃を、思わず落とす。

レベリオ区襲撃を受け、悪魔の民が住む島で育った女と接する中で、少女が抱くようになっていた感情。

たしかにパラデイ島の人間は悪魔かもしれない。だがもしかしたら、思ったよりも普通なのかもしれない——と。

ガビの遊びにつき合い、微笑んでくれた女性はいつもやさしく、悪魔には見えなかった。

だが違ったのだ。

罪のないレベリオ区の人間が死んでいく様子。

大怪我を負ったポルコに、病院に着いた後、狂ったように笑い始めてしまったゾフィア。

多くの人間が呻き声をあげ、涙を流す。病院の外に並べられた死体だけではなく、道の至るところにもガレキに巻き込まれた死体があった。

少女と仲の良かった門兵の男たちも目の前で殺され、死体が彼女の中で積み重なって行く。

パラディ島の人間は悪魔だった。

アウラが悪魔でないのは、彼女が結局、マールで生まれたエルディア人だからである。

収容区の人間たちとは違う。ガビたちとは似て非なる生き物なのだ、悪魔の民は。

ゆえに殺さなければならない。殺して、殺し尽くさねばならない。

少なくともパラディ島勢力はガビから奪った。ならば奪われる覚悟も当然あるだろうと考え——そして、撃つたのは知り合いの女性。

少女が悪魔ではないとした、アウラ・イエーガー。

血だまりの中で倒れた女に、門兵を撃った女——サシヤが大声で呼びかけている。

周囲も突然の事態に固まっていたが、我に返ったフロックがすぐに二人を取り押さえるように命じ、ガビとファルコは床に押しさえつけられるように拘束された。その間にも、床に流れた鮮血が広がって行く。

誰の血だ？

誰の、血……。

そこまで考えたところで、少女は大声をあげた。

意味もなく叫び、終いには口を布で塞がれる。

なぜ彼女がここにいるのかわからない。その理由を思考する前に、殺された収容区の人間の姿と撃った感覚が脳を支配して、意味のある言葉を紡げない。

少女に声をかけるファルコも、「黙れ」と、より強く拘束される。

「ははっ！」

血を嘔きながらも、「は、はは」と、息をこぼすように笑い始める女。

静まり返った中でアウラはしとどに血をこぼしながら、床を這う。場所は通路の先にある奥の部屋だ。

誰も動けぬ中でズリズリと這っていき、扉を開けようとして、失敗する。

銃声は兵士たちが騒ぐ音に混じり、奥には正確に聞こえてはいない。また、出入り口から入る風などの外界の音もある。

そのためハンジたちがいる場所からすれば、突然静かになったように聞こえているだろう。

「ガリガリと扉が引つかかれていた矢先、開く。開けた主はサシヤだ。

アウラの血で汚れた服のまま背後から彼女を抱えると、サシヤはそのまま通路を通り、ハンジたちがいる操縦室まで連れて行く。

そのあとに一步遅れて、コニーとジャンも続いた。

そしてアウラは、望む元へとたどり着く。

兄弟そろって状況が理解できない中、ジークの膝に頭を乗せた彼女は仰向けになり、兄の瞳を見つめた。

その側にいたイエレナも、弟も、ハンジも、連れてきたサシャも、リヴアイやミケたちも。

すべて今の彼女の、アウラの世界には映らない。

その金の髪と蒼い瞳のみが心に染み渡り、彼女を揺るがす。

これはこれで、いい最期かもしれない。

そう思い、「もういい」と掠れた声で呟いた。もう、終わりにしてよい、と。

「……………て」

「……………アウラ」

「みて……………わたしを、みて」

「アウラッ!!」

妹に触れるための手が、今のジークにはない。

アウラは兄の中にあるその色を見つめながら、重くなる瞼を閉じた。

×××××
懐かしい感覚だった。

×××××
『××』が体験した感覚と同じだ。

××

もう生きることもない。

死ぬだけだ。終わって、そうして彼女は終わる。

——終わる？

「やっと、おわれ、る」

暗闇に吸い込まれるように、彼女は意識を飛ばした。

アウラ・イエーガーがその中で見たのは、深淵。
そして、回遊魚。

エビのような形をした、奇妙な回遊魚。

それと接触した時、彼女は口を開け、発狂した。

眠りのアンバサダー

レベリオ強襲作戦から凱旋した調査兵団。

兵士7名を失った戦いで、マーレに与えた大きな打撃。

その後、亡くなった兵士の葬式が執り行われ、英雄たちが眠る場所に彼らの名が刻まれた。

パラディ島では戦勝報道がなされ、民たちは歓喜に打ち震えたのである。

一方で単独行動を起こし、調査兵団の意にそぐわぬ形で事を起こしたエレン・イエーガーは、地下独房へ収監された。

彼が戦う道を選べば、調査兵団は始祖を持つ男をマーレから守るために、戦わなければならなくなる。

これによって、ハンジらが進めていた和平の道は完全に閉ざされた。

今回の一件を受けて、いずれ世界連合軍がパラディ島へ侵攻する。そのため、早急に“地ならし”の段階的実験を行わなければならない。

しかし政府はエレン、およびジーク・イエーガー。またその協力者である義勇兵に不

信感を抱いており、政府権によってイエレナたちも軟禁されることになった。

この際に、巨人を継承していく上で必要な脊髄液入りの注射器について、義勇兵がマーレから奪ったものが政府にわたっている。

同時にジークもまたリヴァイ監視の下、巨大樹の森へ移送されることになった。さらにガビとファルコも、飛行船で取り押さえられた後、地下牢に拘束された。

ちなみに現調査兵団の関係において、団長がハンジなのは変わらず。

その相談役として古参のミケが。兵士らの先陣を切るのはリヴァイである。

ウオール・マリアの一件で兵士は減ったが、四年の間にかかなりの数が増えた。人類を守る大任を担うことから、その人気は高くなっている。

104期生の面々は指折りの精鋭であり、ミカサもまたさらに強くなった。

アルミンも今回の飛行船の作戦を思いつくなど、頭脳としての頭角を現している。

対し、新兵のまとめ役として働いているのがペトラとオルオ。

ペトラの方は隊長に昇格している。みな頼れるお姉さん——と言ったところだろう。

レベリオの作戦では参加した多くは粒ぞろいの精鋭であり、新兵は参加していない。

目に見えた派閥が存在しているわけではないもの、ペトラたちに付いていく者がいる一方で、しばしば過激な一面を見せるフロックにしたがう者も多い。

世界からの敵視を受けるパラディ島で、平穏な思想より過激な思想が支持されやすいのもまた、仕方のないことであつた。

そして、ペトラとオルオに関しては作戦に参加していない。

理由として挙げられるのは、前者で述べたフロックの存在である。

新兵と接する機会の多いペトラは、ひとつの懸念を抱いていた。

マーレへ視察に向かう前から目立ち始めていたエレンの単独行動を受け、その姿に賛同を示す者が現れると考えたのだ。

現に新兵の中には、救世主とエレンをとらえる者もいた。

内部波乱の危険性は、義勇兵らを抱えている時点で兵団が可能性の中に入れていたものである。

ハンジにそれを相談した彼女は、団長らがマーレへ赴く間、反乱分子のリストアップを任された。

彼女はオルオとともに普段どおり新兵と接しながら、瞳を光らせていた。

また、ミケ班において。

四年前の一件で重傷を負ったゲルガーは、一線を引き、酒くさい教官として訓練兵の育成に尽力している。

ナナバについては現在育児中につき、実質退役している。

当初、彼女が結婚する話と、ついでに第一子を懐妊していることを聞いた団長と兵長は、スン、としている男へ視線を向けた経緯がある。

「何で黙ってたんだよおお!!もおおお!!」と、団長はその日叫んだそうなの。

またこちらは身分が異なる女王も、現在一般男性との子を身ごもっている。

兵団内では、すぐにジークの獣を彼女に継承させるべきだ——という意見も出た。しかし懐妊している以上、彼女を巨人にすれば子は死ぬ。

それもあり、ジークを一旦リヴァイの下で様子見させる状態となっていた。

???????

「……なあ、そんなに睨むなって」
道を走る馬車の中。

ジーク・イエーガーの前にいるのは、これから共に過ごさなければならぬリヴァイ。自身が兵長の監視下に置かれることを知った男としては、まさに絶望的状况。

なにせ身をもって、その人類最強たる力を一度味わっているのだから。

ジークはこのまま場所を移し、そこで違う意味のドキドキを味わいながらの共同生活を送るわけだが、その場所まではまだ知らされていない。

エレンや、自身が首謀者であると明かされたフアルコたちが心配であるが、それよりも。

「……妹に、会わせてほしいんだけど」

彼の妹。アウラ・イエーガー。

サシャ・ブラウスをその弾丸の軌道から外させ、ガビの撃ったそれが腹に当たった。

普通ならそのまま死ぬだろう。しかしエレンから「寵愛の子」の件を聞かされていたジークは、アウラが二度は蘇ったことを知っている。

巨人化したダイナの腹から出てきたのが一回目。

二回目は九年前、パラディ島が超大型によつて、絶望を味わった日。巨人に食われたという。

つまり、死んで生き返った。あるいは死にかけのところを、始祖ユミルによつて治された。

どちらにしろ、妹が特異な存在であることは変わらない。

紆余曲折を経て、その異常性をも受けとめて理解しようと努めていたジークだが、妹はまだ秘密を隠し持っていた。

疑問は多くある。

なぜ同じ王家であるにも関わらず、妹だけが特別なのか。

少なくともダイナは救ってもらえなかった。幼少期苦しんでいた自分に、始祖の手が伸ばされることもなかった。

また足の件もそうだ。始祖ならジークの巨人が妹の足を食わないようにすることも、できたはずではないのか。

ただこれは妹が兄に殺されたいと願っていたことから、その意志を尊重したのではないか——と、一応は考えられる。

エレンもアウラから伝え聞いた内容で、その寵愛の方向性は妹自身にもわからないと

いう。

まあ、九年前の時も巨人に食われている。結局神——もしくは悪魔の意志を、人間のものさしで測るのは難しいということなのだろう。

しかし、アウラがジークに黙っていたのはどの道事実。

「寵愛の子」の事実を聞かされたところで、もう数多くの爆撃を妹に食らってきた。

アウラ・イエーガーが何者であろうと、彼の妹であることに変わりない。

けれど、アウラが話さなかったということは、兄として見られていないのか。

歪んだ妹の気持ちに寄り添いながら、それでも兄になろうと努めたジークの行動も、想いも、すべて無駄だったのか。

「オイ、気色悪いヒゲツラで気持ち悪そうな顔をしてやがるが……吐くんじゃねえぞ」
「一言多いんだよ、お前。：馬車なんて慣れてないんだよ」

体を縄で繋がれて、そのまま馬車に引きずり回されている気分だ。

ジークの中にある感情が回る思考に追いつかない。溢れんばかりのそれは、身体に影響を及ぼすほどの苛烈さ。

その上妹がすぐ側で死にゆく様を見てしまつては、夢見も悪くなる。

ガビに撃たれた彼女はその後、ジークに身を預けるようにして目を瞑った。かすれた「もういい」という言葉は、もしかしたら、始祖へ向けられた言葉だったのだろう。

ジークに殺されたいと願って、愛されたいと願って、それでも生きて。

その根底にあったのは、その言葉も含めて、*“死”* だったのではないかと思う。

家族の—— 兄という狭い世界で構成されていた妹が、広い世界で生きる。そのことすら本人にとっては相当なストレスだったのかもしれない。

結局想像するしかないが。本人に聞かなくてはわからない。

その本人は今もきつと、眠っているのだろう。

「クソヒゲ」

「……何だよりヴァイ」

「お前の妹がなぜバカみてえな大声で叫んだか、わかるか？」

「…知らねえよ」

兄の膝の上で瞳を睨り、脱力したアウラ。その姿は人の命がこと切れる瞬間と同じ。肉体が命を無くしたことで、動かなくなる。無情な現実そのもの。

しかしその直後。見開かれた瞳は白銅色をのぞかさず、白眼をむき絶叫した。喉が潰れることなどお構いなしに。

もはやその調整すら失ったように意味のない言葉を叫んで、叫んで、叫び続けて。

その髪は、真っ白く変色していった。

例えば戦争に行っていた兵士が過度なストレスを受け、戦争帰りには髪が白くなってしまった——という話は、事例として存在する。

しかして目に見える速度で色が変わっていくというのは、誰が見ても異常であった。最終的に髪の色が変わりきった後、アウラは泡を吹いた状態で動かなくなった。

痙攣していた体も収まり、かろうじて息はあったのである。腹の傷については、血が止まって。

一応生きていることだけは、ジークも聞かされている。目を覚ます様子がないことも。

何がアウラに起こったのか、誰もわからない。異常な状態へ陥る何があったのか知る

うにも、その本人は意識を取り戻さない。

「面会くらいはさ、いいだろ」

「ダメだ。また発狂したらどうする。あの女がどうなつてるのか、誰もわからねえつてのに。それともやっぱり何か知つてて起こす気か、テメエ」

「…本当に、会いたいだけなんだけど」

ここでは心の慰みになるタバコもない。

頭を抱え、下を向いた彼にリヴアイは窓へ向けていた視線を外し、一瞥する。

「……………ダメだ」

そう呟くような男の声に、ジークは堪えるような吐息を一つ、こぼした。

???????

とある一室にて。

眠り姫となった女の元へ、見舞いに訪れている兵士——サシャ・ブラウスの姿があった。

病室として使われているその部屋には、常に見張りがいる。

ただしアウラ・イエーガーのワープ事件を受けて、拘束自体が難しいとされているため、気持ち程度の配置となっている。

見張る側としては恐ろしいものだろうが、監視をつけない訳にもいかない。

一番よいのは、信頼できる調査船団に乗っていたマーレ人に任せること。

しかしその多くは「悪魔の民」に対する差別心を抱いており、理解し合うことは難しい。

一方で就労許可を取りはたらいっている者など、パラディ島の人間と接する中で、認識を改めているマーレ人もいる。

その例に入るのが、サシャがよく通うレストランに勤める男、「ニコロ」。

彼は、自身ではなく彼の料理にハートを射抜かれているサシャに対し、想いを寄せている。側から見れば「ニコロ↓サシャ」の様子はあからさまだ。

だがごちそうにばかり目がいく女は、それに気づく様子がない。

彼女の両親や、その厩舎ではたらく孤児のひとりであるカヤという少女——サシヤに四年前、助けられた経緯がある——は、額に手をつけてため息を吐く思いだった。

そんなハングリー精神のサシヤの中で、眠る女は一言でいえば、憧憬の存在。はじめは、*“残す食事をくれる人”*。

それから『ある日 クマさんと 出会った』事件を経て、果敢にナイフ一本で狩人も恐れるクマを怯ませたところから、憧れるようになった。

そして女が記憶を取り戻し去った後、しばらくして送られてきた肉と、世話になったことへの謝礼を告げる手紙。

シャレた匂いづけされた手紙など、肉を前にした少女の眼中にはない。

ウォール・マリア陥落以前は狩人の家柄、食べる機会は多かった。

だが肉はいくら食べてもうまい。むしろ毎食肉でもいい。

この肉については、ブラウス家に助けられた女が事の経緯をエルヴィンに話し、生きて帰った褒美を踏まえて勝ち取ったものであった。

そしてその肉は、奪おうとするサシヤと両親の間で壮絶な戦いがくり広げられ、夕食のごちそうとなった。

食いものは争いを呼ぶ。ブラウス家の教訓である。

「……あなたは どうして、私を助けたんですか」

見舞いに持ってきた果物を皮ごとかじりながら、サシヤは眠る女を、アウラを見つめる。

目覚めなければ果物も腐る。だからといって、自分で持ってきた見舞いの品を食べるのはいかなものか。

ほかに人間がいれば、サシヤの行動にツッコんだ。

しかし今はミカサやアルミンたちはエレンの行動に悩み、ハンジらもパラディ島勢力を勝利に導いたエレン・イエーガーを監禁していることに対し、住民や報道陣から質問責めにあっている。

サシヤもまた勝利した事実よりも、多くの人間を殺したレベリオの一件で気を重くしている。

ニコロに家族共々レストランへ招かれたが、それでも気分は重い。

周囲から食べ物のごとしか考えていないと思われる彼女も、食事以外で悩み、苦しみ、

そのどうしようもない感情を払拭させようと、うまい物を食べたくなる。

「どうし、て……」

事情を知る一部の者は、一連の女の行動を自殺志願ととらえている。

所詮は兄の元で死ぬための都合のいいきっかけであり、そこに他意はないのだ、と。

ジーク・イエーガーがすべての女だ。

その行動や思考はすべて兄に直結する。ゆえにサシヤやコニーの背を押しした行動に、二人を助けよう、といった気持ちなど存在しない。

その裏付けになる証拠が、パラデイ島を裏切った一件。

その言葉にうなずく者もいた。憎ましい表情を浮かべる者も。本当にそうなのか、疑問に思う者も。

当のサシヤは、わからずにいる。

なぜ助けたのか。その理由は兄にまつわるものなのか。その感情が起因して、自分を助けたのか。それとも純粹にサシヤを助けたい気持ちがあり、アウラは背を押ししたのか。

聞きたいと思えども、その本人は眠ったまま。

しかし助けた事實は、確かに存在する。
それに――。

「ウドガルド城の時、あなたはヒストリアを助けたと聞きました。そのことのお礼を言えずじまいになっちゃったって、彼女は言っていましたよ」

またミケも《獣の巨人》を前にして、ブレードを抜いたアウラの様子を目撃している。その意図は果たして、兄と気づいた上でわざと殺されにいったのか。それとも気づかず戦おうとしたのか、わからない。

しかし7年間調査兵団にいた彼女が、仲間にもまったく感情を動かさないとも、サシヤは思えなかった。

確かに敵と共謀していた一件では、仲間を見殺しにしている。まるでヒトの心などないように思えてしまう。

でも、それでも。

仲間へ笑いかけていたすべてが偽りだったのか。

心から笑い、そして泣いたことなど一瞬もなかったのか。

否、ほんの一瞬でも仲間を“仲間”として想ったことはあつたはずだ。

きつと壁を壊したベルトルトやライナー、ア二たちも複雑な心境だったに違いない。捕虜となっているマーレ人を侮蔑するエルディア人も、エルディア人を「悪魔の民」と罵るマーレ人も、ニコロなどのように話し合えば距離を縮めることもできる。

「…そう。本当に、話し合わな何もわからん。何も始まらんのや」

だから早く、起きてほしい。

サシヤはそう呟き、持ってきた果物をすべて平らげたのだった。

永享・享受・受胎

『進みなさい、エレン』

もう何度聞いたかわからない父の幻聴。

地下独房の中、目を覚ましたエレンはベッドから起き上がる。

牢屋の外にある薄い光を頼りに、上裸な男は洗面台へ近づくと、髪をハーフアップにする。そして顔を乱雑に洗った。

鏡に映るのは、生やしていたヒゲが剃られた顔。年相応に戻っている。

母カルラに似た、キレイな顔立ち。エレン自身に美丈夫の意識はないが、少なくともかわいくはないだろう、とは感じる。

太い眉と鋭い目つきは、子どもに怖がられがちである。

数年前に孤児の施設をヒストリア指示のもと、仲間とともに手伝った時も、男は子どもから遠巻きにされていた。

精神からくる暗い雰囲気、子どもが臆していたこともあるだろうが。

「……………ねえ、さん」

そんなエレンを——弟を「かわいい」と言つてのける女、アウラ・イエーガー。

飛行船での一部始終が、脳裏に鮮明によぎる。

狂つたように叫んでいたその姿に、エレンはかつて姉が地下室で発狂した日の姿を思い出した。

アウラはたしかに、ジークのことになるとブレーキを失う。

しかして飛行船での狂つた様子や地下室での発狂は、もつと質が違うように思える。もつと、純度の濃い狂気。

それは弟の右足を松葉杖でつついた時に見せた、背筋が寒くなる微笑みを想起させる。

触れれば己まで狂つてしまいそうな、そんな感覚。

距離感が離れたこと見えた姉の姿。

近かつた頃のエレンはそれに気づかず接していたのかと思うと、少しゾツとする。

だが同時に、心配の気持ちもある。

銃創については、ハンジがキズ自体は塞がっていないものの、血が止まったことを確

認している。

エレンは異常な姉の姿に、終始動けずにいて。

固まったままの弟とは対照的に、兄は必死に妹の名を叫んでいた。

その後ジークはイエレナになだめられるようにして、別室へ運ばれていくアウラの姿を呆然と見ていた。

伸ばす手があつた青年に対し、伸ばす手がなかつた兄。

動けなかつたエレンと、動いたジーク。

その事実が、エレンの心のしこりになってしまつたらしい。

過去の青年なら——それこそ15歳の頃のエレン・イエーガーなら、自分の命も惜しまず姉を助けたに違いない。

でも今は姉と接するたびに、心の距離が開いていく感覚がする。

それは果たしてアウラがエレンを遠ざけているのか。それともエレンが遠ざけ、逃げているのか。

どちらでもあるのかもしれない。

浮かんでは消えず、浮かんでは消えない様々な考えを、青年は振り切るように鏡を見つめる。

——戦え、戦え。

自問自答のように繰り返される言葉。

それを突然現れたハンジに聞かれたエレンは、グツ、と息を飲み込んだ。

今回の一件で色々事情を聞きにきた团长殿は、「キミってまだ、男の子のそういう時期なのかい？」と、少し引きぎみに尋ねる。

エレンは唇を噛み、静かにハンジを睨みつけた。

???????

一方、地下牢に捕らえられているガビとファルコ。

ガビは姉のように慕っていたアウラを撃ってしまったから、精神的に不安定になっている。
いる。

撃ってしまったことへの罪悪感や後悔。

それに対し、悪魔の民への憎悪がこんがらがって、呼吸を乱す原因となっている。そんな少女に食事を勧め、励ましているのがファルコだ。

初期の少女は「楽園送り」から戻ってきた異例の女に、警戒心を持っていた。しかし女と接するうちにそのやさしさに触れ、すっかり懐いた。

エレンで培われた「おねえちゃん属性」が、存分にガビに発揮されたのである。

ジーク・イエーガーの裏切りを二人が知った今、その妹であるアウラ・イエーガーも怪しい。

ただ彼女が壁内を裏切っている手前、連れ戻したことに疑問がある。

ジークが何らかの取り引きを、パラディ島に持ちかけたのは確かだ。

でなければ、敵と協力を結ぶはずがない。

そして彼と調査兵団が組んでいた以上、その取り引きは成立している。その内容まではわからないもの。

ジークは取り引きの中に妹の身柄も入れたのか。それともアウラも最初から兄と組んでいたのか。

今思えば彼女が突然いなくなったのも、元仲間と接触したからなのではないか？――

とも考えられる。

実際ジークは妹の失踪を知り、本気で焦っていた。その焦りには、アウラがパラディ島勢力に襲われた可能性の「もしも」があったのかもしれない。

結局アウラが身を潜めた理由は、わからずじまい。

さらに二人は飛行船にたどり着いた後、中で大きな物音を聞いている。

女の頬が赤くなっていたことから、殴られた音だったのだろう。

だがもし計画に関わらず、アウラは兄に付いていつているだけなのだとしたら。

その可能性は十分ある。なにせジークと会うためにパラディ島勢力を裏切ってみせた女だ。

どの道アウラ・イエーガーがマーレを裏切っているにしろ、いないにせよ、兄が動けばそれにつきそう。

「大丈夫か、ガビ」

「……大丈夫よ」

ベッドの上で膝を抱えて座るガビ。少女の後ろで背をさするファルコは手に伝わる

体温に、はあ、とかすかな息をこぼした。

温かさを感じるということはつまりガビは生きていて、その熱を感じるファルコもまた、生きています。

そう。まだ、死んではない。

「これからどうしようか…」

「逃げるに……決まってるでしょ。やらなくちゃいけないことがたくさんある」

壁内の情報収集に、マーレへ戻る方法の調査。首謀者であったジーク・イエーガーの目的や、理由を明るみにするなど。

エレン・イエーガーについては、今にも少女は殺したいところ。

だが始祖の力を中途半端に失わせるわけにはいかない。その力を奪う術があるならまだしも。

ゆえにひとまず、見逃す他ない。

パラディ島勢力によって大打撃を受けたマーレ。

しばらく時間がかかるだろうが、やがて今回の一件を受けて立ち上がった世界連合軍が、この島を潰しにやって来る。それまでになるべく脱出する方法を考えなければならぬ。

「ねえ、ファルコ」

「…何だ？」

——ヒトの血つて、どうして赤いの。

ファルコは少女の背をさすっていた手を止める。

ゴクリと、意図せず鳴ったのは、少年の喉。

ガビもファルコも知らない。撃たれた女が、生きていることを。

敵にわざわざアウラが生きていることを、教える義理もないというものだが。

だからこそアウラ・イエーガーを殺したと信じてやまない少女は、己の震える手を見つめて言う。

撃つた時、銃から伝わった手の痺れる感覚。

部屋に広がる鉄くさい匂い。

視界に映る赤い色。

荒い呼吸と、女の狂ったような笑い声。

それと、奥から聞こえた絶叫。アウラのものだった。

時間が経つても消えない鮮烈な映像が、リアルに少女の脳内で再生される。

慕っていた女を撃った罪悪感が腹の中で渦巻いて。

マールレの裏切りものであるはずだと、願う気持ちがあり。

女の狂った姿は少女の理解を超えて、トラウマを残す。

すべてを抱えたガビ・ブラウンは、心臓の部分に手を強く押し当てて、背を丸めた。

「たすけてよ、ライナー……ッ」

少女の憧れるその人は、今はいない。幼少期からブラウン家の誇りとして、両親から教えられていた従兄。

むしろ拒絶されてしまうかもしれない。ガビはライナーの長年の想い人を、殺してしまつたのだから。

今、副戦士長の男の代わりにいるのは、一人の少年。

少女を守ると決めた、ファルコ・グライス。

「俺がいる」

「……………」

「だから大丈夫だ。俺が絶対に、お前を守る」

「……………何よ、それ」

「何って…意思表示だよ」

「なんか告白みたいじゃん」

「えっ?……………ば、ばっ、そんなんじゃねえよ!!!」

顔を真っ赤にした少年に、ガビは「何で急に顔を赤くしたんだ?」と、胡乱な目を向ける。

あくまで、告白みたい、という彼女の感想。

そこに少年の想いに気づいた上でからかおう——などという、まるで、性根の腐りきったどこぞのブラコン女のような意思はない。

そして、ガビがまったく自分の気持ちに気づいていないことを察したファルコは、深くうなだれる。

よかった、と思う反面、もだもだとした感情が燻った。

それから二人はガビが迫真の腹痛の演技をし、中に入った兵士の意識を刈り取り、地

下牢から脱出する。

逃げた先で二人が出会ったのは、彼らより年が少し上の金髪の少女。

その少女こそ、何の因果か、かつてサシヤが助けた少女だった。

そしてガビとファルコは少女を含めた孤児が住まう、「ブラウス厩舎」に引き取られることになる。

???????

壁内は着実に、内部波乱の動きを見せていた。

レベリオ区での勝利を導いたエレン・イエーガーが、独房へ収監された情報が世間に広まった件。

それをリークした、フロック含めた数名の兵士の存在。彼らはハンジの命令で処罰として、懲罰房へと入れられた。

フロックを抜いたその数名の兵士は新兵であり、ペトラたちがリストにあげていた中の一部队だった。

この反乱因子の見極めは難しく、フロツクのようにオモテに出している者もいれば、そういった発言を一切行わず、隠している者もいる。全体像をつかみ取るのは非常に困難とされた。

また、エレンが単独行動を行うようになった時期に、彼が義勇兵と接触した可能性が浮上するなど、付けられた導火線の火が、少しずつ進んでいる。

エレンと義勇兵の接触が明らかとなったことで、彼と会い話し合おうとする望みが、絶たれたミカサとアルミン。

ザックレーによると、現在エレンとの密会を企てた首謀者や、その近辺の調査中である——らしい。

ゆえにどのような可能性があるかわからない以上、総統も信頼を置く二人とて、今は面会を許可することができなかった。

現在はエレンがジークに操られている可能性が高いとみて、総統らは調査に及んでいく。

義勇兵から得た脊髄液入りの注射器が、兵団にわたっていることを知っているミカサとアルミンは、ひとつの可能性を思い至った。

それは《始祖の巨人》を、別の人間へ移す可能性。だからこそエレンの真意を聞くべく話し合いを求めたが、その方法ができない。

それから総統の部屋を二人が退室した後、起こった爆発。

これによりダリス・ザックレーと、居合わせた数名の憲兵が死亡した。

二人が総統の元を訪れる前に、本部で見かけた調査兵団の新兵。

そして爆発した本体と思われる、新調されたイスを運んだのが新兵であった——
——という内容をザックレー本人から聞かされていたアルミンの証言から、今回の犯行がエレンが捕まった情報を外部へ漏らした、フロックらによるものではないか——と判断された。

さらに訪れた、エレン・イエーガーが戦鎚の力を使い、地下牢から逃亡した一報。

兵士を総動員し搜索が始まる中、ミカサとアルミンはガラガラと、何か崩壊する音を聞いた。

それはかつての、自分たちの姿。

幼かった三人が過ごした時間。

馬車に揺られたミカサが空を見上げれば、そこにはあの頃と変わらない青空が広がっ

ている。

「エレン…どうして……」

二人を置いて、走って行ってしまふ少年の後ろ姿。
俯いたミカサの横でアルミンもまた、唇を強く噛む。
空の上では一匹の白い鳥が、木から羽ばたいた。

???????

対しマーレでも、両手足の肉片しか見つからない不自然なジークの遺体から、彼が敵の協力者である——と判断された。

死をよそおい、パラディ島勢力とともに逃げた、と。

立体機動装置についてはマーレの技術が取り入れられており、ピークがジークの信奉者であったイエレナをはじめの調査船団で目撃していたことから、ジークが同志を忍

ばせたのだろう——と推測できる。

さらに逃走用に敵に奪われた飛行船についても、訓練された人間でなければ操縦ができない。

壁内人類には不可能なものであり、これについても同志がおこなったのだろう、と考えられた。

ガビとファルコについては、パラデイ島に侵攻した際に保護する。

二名は特に優秀な戦士候補生である。候補生の育成に多大な時間と金がかかることを踏まえると、失うわけにはいかない。

そしてそれ以上に「元帥」の立場となったマガトとしては、大切な教え子をみすみす死なせるわけにはいかなかった。

現在ほかの候補生は、ポルコが重傷につき入院。ゾフィアもまた精神的なショックが大きく、しばらくは治療が必要とされる。

ウドはパラデイ島の侵攻作戦への同行を願っていたが、待機となる。ガビとファルコの身を案じての言葉だったのだろう。

また敵兵に何かしら言葉をかけられ、その内容を沈黙したままのアニ。

彼女はマガトに問い詰められても下を向くばかりで、答えなかった。

アニ・レオンハートの精神性を知るマガトは、尋問に切り替えても意味はない——と判断した。

だからといって拘束はしなかった。何か秘密を隠したままでも、彼女はマーレへの忠義をしっかりと示している。エレン・イエーガーの一件もそうだ。その身を呈して、戦いに臨んだ。

仮に彼女も裏切っていたならば、ジークとともにマーレを去っていただろう。しかし彼女は残っている。

ジークらに彼女がハメられた可能性も視野に入れ、元帥殿は思案する。

軍艦や兵士など大打撃を受けたマーレは、すぐにはパラディ島侵攻に乗り出すことができない。

戦力が大幅に削られている。だからこそマーレの戦力のカナメたる巨人の力を持つアニを、まだ疑惑は残れど失うわけにはいかないのだ。

一応戦士候補生に継承させる手はある。

だがすぐに戦力として使うとなると、やはり実戦経験を積んでから戦わせたい。そもそもパラディ島侵攻となれば、今回のレベリオ以上の激戦が予想される。超大型に引き続き

女型まで失えば、いよいよマールレの使える手駒はライナーのみとなる。

少なくとも、ア二の弱みが義父であるとわかつている内は、彼女も裏切らないだろう。

はたしてア二が隠し持つ秘密——話せない事情とは、何であるのか。

ふいにマガトの中でよぎったのは、故タイバー公の言葉。

聞いた時少し不自然に思った、その内容。

『神は罪深きエル^わデイア^れ人をどう思っているのだろうか——』

神、神。

エルデイア帝国の民族浄化の歴史があつたものの、現代でも宗教や民族によつて、信仰する神とはそれぞれ異なる。だからこそ戦争は起こるべくして起こってしまうのだが。

タイバー公が語る“神”を指すのは、おそらくユミル・フリッツ。

同時にマガトの脳裏に浮かぶ、戦鎚の結晶が不自然に溶けた事実。

結晶さえ砕ける顎のキバに砕かれたというわけでもないのにも関わらず、ひとりでに硬質化が溶けた。

それこそ戦鎚の本体が意思を持って操作しなければ、結晶は解除されないはずだ。

その後ラーラ・タイバーは側にいたエレン・イエーガーによって捕まり、捕食された。

不可解なこの一件は、タイバー公が残した「神」の発言も相まって、マガトに大きな引っかけを残す。

そしてタイバー家といえば、当日護衛を伴って訪れていたらしいアウラ・イエーガーも、護衛についていた男の死体と、使っていたであろう車椅子を残して消えている。

護衛の男の死体は、首を折られて殺された形跡があった。

彼女についても、ジークとともにパラディ島へ渡った可能性が高い。

しかし裏切り者の女を元仲間が受け入れるのだろうか。

あるいは兄が先に交渉の中で、妹の身柄の安全を含めて入れていたのか。

ならば女をタイバー家が保護した件はどうなる？

ヴィリー・タイバーが嘘をつくとも考えにくい。たかが一人の女を擁護する理由もないはずだからだ。

妹が失踪した時のジークの反応も、マガトが見るかぎり本物だった。

ゆえにジークを怪しみつつも、「協力者」の存在は彼ではないのだろう——と考えていた。

だが實際その協力者こそ、ジーク・イエーガーで。

まさかアウラ・イエーガーはタイバー家まで手中に入れてみせたのか。

——否、それはない。ヴィリー・タイバーと組んだマガトは、一人の人間の内情に彼が動かされないことを知っている。

利用する側であれど、利用される側にはなり得ない男であつた、と。

「神……か」

会議中、小さくつぶやいたマガト。

同席するのは。パラディ島侵攻作戦へ向け話し合つていた元帥や戦士に、候補生のコルト。

その後ライナーの提言により、早急のパラディ島奇襲の作戦が出された。

曰く、ジークはマーレが世界連合軍を待ち動くのを予想しているはずであり、マーレを出し抜いてみせた男が、何の策もなしに待っているはずはない。

そのため敵に準備をさせず、パラディ島へ侵攻する。

一時期誰より精神的に落ち込んでいた、ライナー・ブラウン。

彼はガビとファルコの身や、傷ついた仲間。

そして切斷せざるを得なかつた足で訪れた、「いつまで寝てんだ、クソドベ」というポルコの言葉を受け、拳を強くにぎった。

戦わなければならない——と。

このライナーの発言に、肯定をみせたマガトやピーク。

新たな戦いの火蓋が、切られようとしていた。

胎生

エレン・イエーガーの離反につき、反乱分子として捕らえられていた百名余りの兵士も、監視ごと逃走した。

彼らはエレンの脱獄と同時に離反したのだ。

イエーガー派の目的は、エレンが捕まったという情報を外部に漏洩させていたことから察せるとおり、エレンを中心とした兵団の改革である。

ザックレーがねらわれたのは、エレンの始祖を他のものへ移す考えが出ていたからだろう。

離反者は調査兵団から最も多く、その責任をハンジ・ゾエは問われた。

しかして彼女が責任を取ったとして、どの兵団に、どれだけのエレンを信奉する人間が潜んでいるかわからない今の現状。

ハンジが団長の座を退いたところで、調査兵団の統率が乱れより状況が悪化するだけだ。

エレンの目的はジークとの接触である。そのために居場所を探るべく動くだろう。

ジーク・イエーガーの居どころを知るのはハンジヤリヴァイ、そして兵長とともにジークを監視する約30名の兵士と、補給や連絡を担う3名の兵士だ。

また王家の血を継ぐ女王や、同じくエレンの姉もねらわれる可能性がある。

ヒストリア女王については、絶対的な守りの旧対人制圧部隊がいる。故に問題はな
い。

過去に何度か女王を脅かさんとする勢力が現れたが、ことごとく裏で暗殺されてきた。

対しアウラ・イエーガーに関しては、ジークと女王同様にその居場所を知る者は限られている。彼女についても護衛を増やす命令がピクシスによって出された。

此度の離反は徹底的にあぶり出したところで、多くの血が流れるだけだ。

エレン・イエーガーの行動の結果、世界がパラディ島を滅ぼそうと動き出している手前、内側で揉め合っている場合ではなかった。

命の天秤をはかるピクシスは、ザックレーの殺害を不当とする判断を下した。

それに反対する者もいたが、彼らも内輪で争っている状況でないことは重々承知だった。

だが、ただエレンを信奉する“イエーガー派”にこうべを垂れるわけではない。

連中にはジークの居場所を教える代わりに、交渉を図る。そして当初のとおり、「地ならし」の段階的な実験に臨む。

これに対しパラディ島に滞在しているアズマビト家は、一時港で待機することとなった。

それからそれぞれの兵士が、命令にしたがい動き始める。

ミカサやアルミンたちにも「イエーガー派ではないのか？」と疑惑の目が向く中、ハンジはジークやイエレナにより設置されていた保険が今になって発揮している旨を語る。

用意周到に準備されている布石に、他にも「保険」が存在するのでは——？と感じたハンジ。

イエレナのこれまでの動向を振り返れば、引つかかる点が存在する。

それは彼女が捕まったマーレ人捕虜の人権に対し、兵政権（クーデター後、ヒストリアを女王に掲げた調査兵団・憲兵団・駐屯兵団から成り立つ現政権のこと）に反発してまで譲らなかつた内容である。

この話し合いの前にピクシス司令がもつとも疑わしいイエレナと話していた裏で、ハンジはオニャンコポンと会っていた。

エレンとイエレナが密会していた件については、オニヤンコポンも知らなかった。つまり密会は、イエレナの単独行動によるものだった。

オニヤンコポン曰く、義勇兵を組織したのはイエレナらしい。

イエレナは当初、疑心暗鬼だったメンバーに自らの手を汚すことで、ジークや組織に忠義を示した。

寝食を共にした友であろうと、義勇兵を疑うマーレ人であろうと殺す。

冷徹な一面があることを、彼女の近くにいたオニヤンコポンはたびたび目撃していた。

彼らは彼女の行動が祖国を取り戻すためのものだど信じ、目を伏せてきたのである。その後、オニヤンコポンはハンジに同行を求められ、ともに行動している。

——ジークや組織のためにマーレ人を殺す。

一方で、マーレ人の人権を守ろうと兵政権に反発する。

このイエレナの矛盾に、ハンジは彼女が守ろうとしたマーレ人捕虜の場所が怪しいと感じ、調べることにした。

そして団長とミカサたちは、手始めにマーレ人が就労するレストランへと向かうこと

にしたのだった。

パラデイ島で内部波乱をみせる裏では、すでに戦士の一人が壁内に潜り込んでいることをまだ知らずに――。

???????

マーレ人捕虜が働くレストランへと訪れた調査兵団御一行。

彼らはオニヤンコポンのフォローを受けつつ、聞き込み調査を進めた。

現在レストランでは、そこに勤めるニコロの大切な客――ブラウス家が食事をとっている。

本来ならサシヤも招かれるはずだったが、連日の仕事で忙しく、彼女だけまた別の機会に……ということになっていた。

ニコロはサシヤを見るなり驚きながらも、苦笑いした。

というのも、眼前で練り広げられる光景。

そこにはよだれを野獣のように垂らしながら瞳を光らせるサシヤと、それを取り押さ

えるコニーとジャンの姿があったのである。

「ほんのつ、ほんのちよつとだけ食べるだけですから!!」

「お前の「ちよつと」は、ちよつとじゃねえだろ！」

「仕事中だろうが、このバカ野郎がッ！」

「ぐあああう、ううう……私の、私の家族は美味しいもの食べてるのに……!!」

レストランとサシャ・ブラウス。

そして惚れた弱みで、彼女にごちそうを振る舞いたいニコロ。

まさしく忙しい調査兵団にとっては、最悪の状況だ。レストランに来るとわかっていたのだから、サシャは連れて来るべきではなかった。

結局猛獣と化した女は柱に縄でくくりつけられ、調査が開始する。

ニコロは心配したが、コニーが「アイツ一度あなると、腹を満たすまでダメなんだよ」と話すと、苦笑いをした。コニーの表情は、完全に悟りの境地だった。

そしてその後、調査兵団のメンバーはニコロに中を案内され、部屋で待機するよう言われた。

その際に部屋の酒が並べられた棚で、あるワインを発見したジャン。それは上官たち

しか飲めないとうわさの酒である。

手に取られたワインはしかし、横から伸びた手に奪われる。

「何すんだよ、ニコロ。流星に仕事中に飲む気はねえって」

「……………」

「そう言っておいて、コツソリ味見する時だったんじゃねえの〜ジャン」

「なっ…………!!その坊主な頭をさらに刈り上げられたくなかったら黙れよ」

おちやらけた様子のコニーに呆れ混じりにジャンがため息を吐いた。

だがそんな二人の耳に、黙り込んでいたニコロの言葉が耳に入る。

「コレは、エルディア人のお前らにはもったいない代物だ」

この発言は、マーレ人であるもののニコロと信頼関係を結べていたと思っていたジャンたちにとつて、容易に見過ごせるものではなかった。

拗れた雰囲気のまま、ニコロはワインを抱えて逃げるように部屋を去った。

「え」

しかしニコロは途中で、柱にくくられていた女がいないことに気づく。

縄は女の腹の周囲を何重にも巻いてあった。肝心のその縄は、一ヶ所がボロボロに

なつてちぎれている。恐らく体をイモムシみたいに動かして、縄を噛みきれる位置にまで無理くり持つてきたのだろう。

「サシャ……………」

ニコロの中で、悟り顔のコニーの表情がよぎる。

急いで厨房に向かった男は、開いている扉と、その中で周囲の様子をうかがいながら、料理中の品物へ手を伸ばそうとする女を発見する。

女はしゃがんだ体勢で、手だけテーブルに伸ばしていた。

厨房に人がいないのは幸いだった。

調査兵団が突然来たことで、ほかのマーレ人捕虜も一旦料理の手を止めなければならなくなった。

仮に今の女の光景を見られでもしたら、誰も望まぬ形でエルディア人の株が下がることになる。そんな虚しいことがあつてたまるか。

「オホーン……………サシャ」

「っ!!」

ニコロが声をかければ、面白いように女の肩が跳ねる。

「え、えへへ……………」と、頬をかきながら、しかしもう片方の女の手は料理の皿をつかんで

いる。天使か何かだろうか（ニコロフィルター）。

だが彼も料理人。他人へ出す料理を食われるわけにはいかない。

ここで発揮されるのが、ニコロの料理を食べたことで、サシヤに刻まれた効果だ。それは例えるなら犬の「おて」や「ふせ」。

食べてはならない、とニコロに注意されたサシヤの体は、餌づけされた力がはたらきその皿をテーブルへと戻す。

この効果を知れば、104期生のメンバーは天変地異の前触れかと思うだろう。しかしその事実当事者のニコロもサシヤも、まったく気づいていなかった。

今にも死にそうな顔をするサシヤに、困った表情をニコロが浮かべていたその時。

二人の少年と少女が現れた。

ファルコ・グライスト、ガビ・ブラウンである。

二人はサシヤがかつて助けた少女カヤと出会い、ブラウス厩舎で働くことになった。

「悪魔の民」と食事をもにすることさえ耐えかねたガビだったが、ブラウス夫妻やカヤ、他の孤児の子どもたちと接することで、次第に悪魔の民への認識が変わっていった。

ちなみに戦士候補生二人が逃げたことをサシヤは知っていたものの、両親の元にいる

ことは知らなかった。

逆にカヤ以外の人間も、二人の素性は知らない。

カヤについては、ガビが付けていたマーレの腕章や二人の会話を聞くなど、厩舎へ誘う前から彼らが何者であるか知っていた。その上で助けたい、と思ったのだ。

ガビとファルコはカヤの助力もあり、マーレ人捕虜がいるレストランにたどり着くことができた。

二人はマーレへ戻る糸口を探すべく、捕虜を頼りに来たのである。

それから食事中。ワインを持ったマーレ人捕虜が駆け足で廊下を走っていく姿——扉はないため、人が通るとすぐにわかる——をとらえ、ファルコが腹痛のフリをして、ガビもその付き添いとして部屋を出た。

そしてサシャとガビは、遭遇することになってしまった。

???????

ガビが見たのは、マールで彼女たちと親しくしていた門兵の男たちを撃った、女の姿。兵士たちに「サシャ」と呼ばれていた女だった。

血を流すアウラに声をかけていたことから、二人が旧知の間柄であったことは知っている。

「アウラさんを撃った、子ども……」

お互い固まり、長い沈黙の後に、ポツリとつぶやかれた女の言葉。それを耳にしたガビの中で、プツンと、糸が切れた音がした。

——
そもそもこの話。

女が門兵の男たちを撃たなければ、彼らの死体から拾った銃でガビは撃たなかった。脳内にこびりつくのは死体の数々。

口を開けて悲痛に歪んだ顔のまま、事きれていた死体。

あるいはガレキに潰されて、はみ出していた腕や足の肉片。

地面を彩る新鮮な赤色に、爆発音。

鼻腔をかすめる鉄臭さと、鼻につくケムリの臭い。

どれをとつても、最悪の状況を作り出したのは悪魔の民だ。その民の一人である、サシャという女は。

その報復をガビは行わなければならない。傷ついた者たちのために。失つた者のために。

自身の行為は正当なものであると、ガビは信じて疑わない。

少女は万が一の時のため裾の中へ忍ばせていたフオークを手のひらに滑らせ、それを握りしめる。こつそりと、席を立つ時に持つて来ていたのだ。

所詮、鉄製の道具。

しかし厳しい訓練を行ってきた少女にかかれば、たちまち凶悪な武器へと変貌する。

「やめろガビ!!」

だが今にも女を殺さんと動こうとした少女を、ファルコが慌てて止めた。

背後から羽交締めされたガビの手からフオークが、カランと、音を立てて落ちる。

「なんで……なんで止めるのよ、ファルコ!!」

「止めるに決まってるだろ!」

「コイツらはエレン・イエーガーの仲間だ！門兵のおじさんたちを殺して、関係のないレベリオ区の間人を巻き込んで、ゾフィアを傷つけて、ガリアードさんも傷つけた!!」

「……ッ、女のひとの顔を見てくれよ!!」

少年により顔を無理やり正面に向けさせられた少女の目に映る、サシヤの顔。

サシヤは堪えるような表情で、まっすぐにガビを見つめている。

少なくとも、少女に撃たれたアウラに必死に声をかけていたのだ。ガビを憎く思っているはずなのだ。

なのに。

思わず少女は、「どうして」と、小さく声を漏らしていた。

長い沈黙が訪れる。

その静寂を打ち破ったのはやはりどうか、サシヤである。

サシヤはニコロへ視線を向けると、真剣な様子で口を開く。

「今から美味しいものを作ってください、ニコロさん」

直後、「えっ?」と、その場にいる三人の声が重なった。

卓を囲んで美味しいものを食べよう——という、サシヤの考えらしい。

状況を理解できない少年少女は困惑する。対しニコロは、サシヤの言動をうつすらと理解し始めたようだ。

「候補生のあなたたちが逃げ出した話は聞いています。ここにいるのも何か理由があるのでしょうか……ひとまずお腹を満たしませんか？」

「…サシヤ、この子たちはブラウスさんと共に今日レストランに来たんだぞ」

「エツ……じゃあ、私が食べるはずだったご飯を彼らが……？」

絶望しきった表情で床に手をついた女。

ニコロは一応釘を刺すように、二人に調査兵団がレストランに訪れていることを告げる。ただしガビたちのこととは別件で訪れている、と。

「もしサシヤに手を出せば、お前らには相応の処罰が下されるだろう。ブラウス夫妻や孤児の子供たちだつて許さない。それは……俺もな」

先ほどガビが殺意をむき出しにしサシヤへ襲いかかろうとした姿を思い出し、ニコロの眉間にシワが寄り、険しい顔つきになる。

一方でサシヤの家族がブラウス夫妻である事実を知ったガビとファルコは驚いていた。

同時に少女はあまりにも偶然なこの一連の出来事が、仕組まれていたものではないのか——と疑惑を持つ。

候補生の二人を懐柔させるための、パラディ島の策だったのだろうか。

そしてマールレの情報を抜き取るつもりだったのかもしれない。あるいはスパイとして仕立てるつもりだったのかもしれない。

「……………」

だが、そこまで思ったところでガビの脳裏によぎった、ブラウス夫妻やカヤの笑顔。自分やファルコに向けられたその表情が、ウソのものであるとは思えなかった。否、思いたくなかった。

心から心配し、喜び、世話をしてくれた彼らの姿が。

ガビにはいつからか、悪魔には、見えなくなっていたのかもしれない。

「——で」

少女の口から漏れたかすれた声。

サシヤは静かに、ガビを見つめる。

「なんで、憎くないの。私はアウラさんを撃つたのに……………!!」

「…あなたは、彼女の知り合いだったんですね」

「あんたは門兵のおじさんたちを撃つたくせに……なんで、なんでッ!!!」

天井を仰ぎ見、瞳を閉じたサシヤ。彼女は深く息を吐くと、ハッキリと「憎い」と答えた。

途端にヒユウと、か細い息がガビの口から漏れる。

「もちろんこの「にくい」は、お肉の方の意味じゃないです」

「「……………」」

「アウラさんは私にとって憧れの兵士だった。それは今も変わりません。でも同時に彼女は私たちを裏切った人で……言葉にするには少し難しい感情を、私は彼女に抱いていきます。」

あなたの——ガビさんの憎しみも元をたどれば、私が原因なのでしょう。

けれど私たちも、九年前に悲劇を経験した。……………そうして憎しみを持ち続けていたら、この真つ暗な連鎖は止まらない。

私が憎んで、あなたが憎んで、また私が憎んで。

だからこそ私は憎しみで武器を取りたくはない。仮にあなたが私を今殺そうとして、自分の身を守るために力を使うことはある。ただ、憎しみを理由にあなたを殺すことはない」

それだけはわかってほしい、とサシヤは続けた。

憎いなら殺していい、とキレイ事は吐かない。何故なら命の重さをサシヤは知っている。憎いなら殺していい、とキレイ事は吐かない。何故なら命の重さをサシヤは知っている。

あまりにも軽すぎるそれは、簡単に奪われてしまうことを。

死にたくはない。しかしガビとわだかまりを残したままにすることも、ヨシとできない。幸い、武器を取らずに話せる余地がある。

美味しいものを食べて、一步一步、歩み寄っていく。

話し合いの精神をサシヤ・ブラウスは求めたのである。

「……………」

ガビは震える拳を握りしめる。

脳内では、悪魔の民なのに、悪魔の民なのに、悪魔の民なのに——と、何度も呪いの言葉が反響する。

少なからず調査兵団がレストランにいる以上、二人が逃げることは不可能に近いだろう。

彼らが来た理由が、本当は候補生の二人であるかはわからない。

それでも歩み寄りの姿勢をみせた少女の一番の要因は、サシヤの両親やカヤ、孤児の子どもたちにやさしくされたことが大きかった。

もし、こんな自分が許されるのなら。

「…………アウラ・イエーガーの墓に、行かせて」

うつむき、呟いたガビ。

重々しい様子に、サシヤは首を傾げる。

「彼女は生きてますよ。知らなかったんですか？」

瞳を丸くした少女はサシヤの顔を凝視して、へなへなど、力が抜けたように座り込む。そして、これまで堰き止めていた感情が限界に至ったのか、顔を覆い静かに泣き始めた。

生子（うまれっこ）

サシヤとガビの一件の直後、厨房へと走って来たハンジ。

彼女はニコロが親しかったはずのジャンやコニーに向けた態度を不審に思ったようで、アルミンと意見を交わしていた。

そして酒が上官らへ優先して振る舞われていた事実を踏まえて、そのワインに大きな違和感を感じたのである。

ハンジがニコロに詰め寄れば、彼は持ったままだった酒を握りしめたじろぐ。

ジャンやコニー、またサシヤの向く視線に耐えきれなくなった男は、ついに口を開いた。

曰くその酒は、イエレナに高官たちに優先して振る舞うよう頼まれたらしい。

ワイン自体は第一次調査船から積まれていたもので、ニコロはイエレナの頼みから、それがジークの脊髄液入りだと察していたようである。

だからこそジャンたちがワインを手を取った時に奪ったのだ。

万が一彼らが飲んで、取り返しをつかないことになるから——と。

義勇兵であるオニヤンコポンも、イエレナのその命令をはじめて知ったようだった。

ここで疑問なのは、ワインを飲んでも体が一切硬直する、といった症状が出ていない点。

その情報の出どころはジーク・イエーガー本人によるものである。

仮にその内容が、嘘であるとしたら。

すでにジークの脊髄液入りのワインを摂取済みの人間が、兵団内に複数いることになる。

ラガコ村やウォール・マリア奪還作戦でその脅威を実感しているからこそ、そこらの武器よりよっぽど有効な脅しとなるだろう。

皆が衝撃の事実には騒然とする中。

一旦情報を整理しようと、彼らは手狭な厨房からロビーへと移った。

一般の客（と言ってもサシャの家族だが）から離れた一室を使って。

そんな折、新たな客が訪れる。イエーガー派だ。

ワインの事実が発覚して店内が騒がしかった間、ニコロと同じマーレ捕虜である男が有していた連絡手段を用いて、イエーガー派に調査兵団の居場所を密告したのである。

客を人質に取られ、調査兵団は手を上げざるを得なかった。

アルミンとミカサだけ別室へ移動させられる中、イエーガー派の中心であるフロックは、一派が兵団の取り引きに乗らないことを告げた。

この取り引きとはピクシス司令が提案した、ジークの居場所を教える代わりに交渉を図る——というもの。

なぜ交渉に応じないのか、ハンジは尋ねる。

するとフロックは、兵団がエレンの始祖を他者へ移す算段を立てていることを見抜いている旨を話した。

またその判断は、エレン自身のものであると。

どうにか彼らの説得を試みるハンジだが、フロックは聞く耳を持たない。それどころか彼の一言で、彼女は息を詰まらす。

酒を飲んだ、憲兵が——。

話の中でハンジは一言も、憲兵の人間が酒を飲まされたことは語らなかつた。しかし、フロックは知っていた。

それすなわち、彼らがジークの脊髄液入りのワインの存在を、以前から知っていたことに他ならない。

人差し指を口に当て歪んだ笑みを浮かべたフロックは、アルミンを上回るゲスを見せつけた。

そして団長であるハンジはジーク・イエーガーの居場所を知る存在として、フロックらに連行された。

また先にフロックがレストランを出た後、エレン・イエーガーもミカサとアルミンと会話し、二人との決別を示した。

二人が聞いたかったレベリオでの行動も、ジークに操られたものではなく、自分の意志で行ったものであるとして。

自由。エレンが選び、そして突き進む道。

超大型を継承して以来、アニ・レオンハートに想いを寄せるようになったアルミンは、ベルトルトに操られているのだと。

ミカサは「アツカーマン」という特殊な血が起因するからこそ、彼女の血が覚醒するきっかけとなったエレンに執着しているのだと。

つまりエレンでなくとも彼女のきっかけとなれば、それは誰でもいい。ミカサの想いは本能によるものでしかない。

さながらそれは、奴隷。

アツカーマンの血に縛られた、従うしか脳のない生き物。

ミカサをそう称し、エレンは続ける。

「自由に生きることができないお前が哀れで————オレはそんなお前が、大き^{……}らいいだった」

ポタリとテーブルに落ちた涙。それはミカサの色白な肌を伝い、落ちていく。

「……っ、エレンツツ!!」

アルミンは一瞬のうちに呼吸をすべて吐き出し、衝動的に目の前に座るエレンに掴みかかっていた。

だが、それを止めたのはミカサ。彼女は無意識に動き、アルミンを止めていた。

その事実が先に説明されたアツカーマンの性質と相まって、余計に彼女の頭を熱くす

る。

そして激情収まらぬアルミンがエレンに拳を繰り出したことで、ケンカが勃発する。しかしその拳は数度当たったのみで、本気を出したエレンには敵わない。

徹底的に殴られ、鳩尾を蹴られ、大量の血を嘔き出したアルミン。

彼にかけ寄ったミカサは、悲痛な目でエレンを見つめた。

長らく曇っていた翡翠の瞳は、鋭い色を放っていた。静かに二人を見下ろすその目に、ミカサは唇を震わせる。

「エレン、どうして…」

「……………」

「あの時エレンは私を守ってくれるって、言ってくれた」

「それが何だ」

「仲間が大切だとも、言っていた。なのに……………どうして？」

「……………」

「私は、あなたのことが——」

言葉を続けようとしたミカサの横を通り過ぎて、エレンは去っていく。

座り込む二人に、ケンカの騒音を聞き駆けつけていたイエーガー派の兵士は、ミカサ

とアルミンを立たせ連行する。

廊下を出た二人が見た、幼なじみの後ろ姿。

小さくなっていくその姿に、ミカサもアルミンも、それ以上言葉を紡ぐことができなかつた。

??????

とある地下へと続く階段。

その奥にあるかつて中央憲兵が使っていた尋問部屋にアウラ・イエーガーが収容されていた。その先頭を歩くのは、背後から銃を突きつけられたハンジである。

傍にランプが付けられているとはいえ、薄暗い道を進む一行。

ピクシス司令の命を受け、女王などの警備がより一層強化された今。眠り姫の警護に当たっていたのは、ミケ班。

部屋の前にはいた男はハンジとフロックたちが現れたのを見るなり、腰にあつたブレードに手をかける。

しかしハンジがそれを手で制し、武装を解くよう頼んだ。

「頼むミケ、私の指示に従ってくれ」

「……わかった」

それから武装を解いたミケが数名の兵士に銃口を向けられている間、ハンジはフロツクらと共に部屋に入る。

薄暗い部屋の中、ベッドの上で眠り続ける女の白い肌と髪が異様に目につく。

思わず男の兵士が、息を呑んだ。

例えるならその光景は、夜を照らす淡い月光であろうか。

ヒトを魅了するその蠱惑さは、アウラが元より持つもの。

しかししてそれは目覚めている時よりも、今死んだように眠っているこの時の方が、より如実に感じられる。

「……君たちがどういうつもりでアウラ・イエーガーを連れて行くのかわからないが、彼女はこうして寝たままだ。連れて行ったところで、何もすることができないんじゃないかな？」

「いや、エレンの命令だ。連れて行く」

「へえー…、エレンの命令なんだ」

「…ツチ、口が滑ったな」

眉を寄せアウラを見ていたフロックは、思わず舌を打つ。

しかしそのことがハンジに知れたところで、どうもすることもできまい。このまま連れていく算段だったが、まだ眠り続けていたのは予想外だった。

レベリオの一件から、それなりに日が経つ。

パラディ島も世界情勢も大きく動く中で、ひとり眠り呆けたままだとは。

「何をやっても起きないのか？」

「……………ナニをする気なんだい、君」

「は…？」

「いくら何でもエツチなことをしたら、許さないからね」

「……………」

そういうつもりで言ったわけではないフロック。

対し、そういうつもりでフロックが言っていなかったことに気づいたゾエ。

静寂……………。

身じろぎ一つがイヤに聞こえるほど部屋が静まり返った後、眠る女に近づいたフロックは銃口でその体をつついた。目覚める様子はない。

「無駄だと思うよ。くすぐったり色々しても起きなかったから」

「……何をしているのはあなたの方じやないですか、ハンジ・ゾエ」

「起きないんだから仕方ないだろう。私も団長として、事情聴取しなければならなかったんだ」

「ジークの名前を口にしても起きなかつたんですか？」

「アウラ・イエーガーを、「お兄ちゃん大好き狂人野郎」と思つてないかい、君？彼女の大好きな巨人の話をしても、なぜか唸るばかりで起きなかつたというのに」

巨人が大好きなのはハンジ・ゾエの方だろう。

全員の意見が一致したが、誰もこの状況で口にはしなかつた。代表の鈍感ボーイと違つて、空気の読める子イエーガー派である。

「でしたら……」

ベッドに近づいたフロックは、腰を屈めて女の耳元でボソボソと、何かを語る。

その一瞬アウラの表情が歪んだが、起きない。

「何を言つたんだい？」

「ハンジ・ゾエの巨人語りがこれから開催される——と」

「え、もしかしてイエーガー派のみんなは巨人について私と語り合いたい!?!」

「違います」

瞳を煌めかせたハンジは、すぐにその光を失う。

フロックはついでまた、何か耳元で話す。

するとアウラの閉じられていた瞳が、ゆっくりと開いた。

何かをつぶやいたフロックもハンジも、ウロウロとさまよう白銅色の瞳を目に留めて、固まる。

「な、何を話したんだ、フロック」

「……結婚する、と」

「ケツコン？誰と誰が」

「あなたとジークが」

「……………はあ？」

すつとんきような声を上げた団長殿の声が部屋に響いた中、アウラはベッドから起きあがろうとした。

しかしずっと寝たきりで体力が極端に落ちているようで、起き上がるのにも手こずっている。

見かけた兵士の一人が手を差し出し、体勢を起こさせる。

ゆっくりと彼女は瞬きすると、深い呼吸を何度か繰り返した。

そして部屋を見渡すように一周させ、その視線が最後にハンジで止まる。

無表情なアウラの顔に、ハンジは首を振った。彼女は無罪である。

《獣の巨人》の毛を採取したり、触れたり、舐めたりしたい気持ちはあれど、本体にはまったく興味が無い。

「——ゴホッ」

だがその視線は、女が咳き込んだことで逸れる。

そのまま何度か咳を繰り返すアウラにフロックは仲間に声をかけ、兵士が携帯する紐がついた平たい形の水筒を取り出させ、蓋をあけてゆつくりと飲ませる。

数口飲んだのちに、咳はおさまった。

ハンジは何とも言えない表情で、目を覚ました女へ視線を向ける。

「……アウラ」

視線はぼんやりと、宙をさまよっている。フロックが声をかけているが、反応する様子はない。

「名前は答えますか？」

「……………」

「ここがどこかは？今のご自分の状況を理解できていますか？」
「……………」

ベッドを椅子代わりにしている状態で、女の体は右へ左へ小さく揺れる。

ダメだな、とフロックは呟いた。先ほどの反応は偶然だったのだろう。

一方ハンジが無言ののち「ジーク」と呟けば、虚空を眺めていた視線が彼女へ向く。

「ジーク・イエーガー」

「……………」

「君のお兄さんだ、わかるかい？」

「……………」

「私のことはわかるかい？」

「……………」

「うーん……………一時的に記憶が混濁してるのかな」

ひとまず仕方ないと、ろくに立てない女は一人の兵士が背負い、次の目的地へ移動することになった。

ここからは二手に分かれ、兵団本部を制圧する人員と、ジークの元へ向かう兵士で行動する。

後者にはフロックと彼が選んだ仲間、そしてハンジとアウラが赴く。

幸いアウラ・イエーガーが監視されていた場所は、不穏分子を側に置いておきたい意図がはたらいたのか、さほど兵団本部から離れてはいない。

イエーガー派がハンジらを捕まえたことがピクシス指令に伝わり、時間を稼げれば、何かしらは打てるかもしれない。

——いや、ワインの件が明るみになった以上、すでに上官たちはエレンやジークに逆らえない。

（このままどうすることもできないのか？ 私はどうしたらいい、エルヴィン……）

背負われる時もされるがままのアウラを見ていたハンジは、深いため息を吐いた。自分が不甲斐ない団長であると、しみじみと感じながら。

子安

人類最強の男や約30名の完全武装した兵士と過ごすドキドキの巨大樹生活。

ジーク・イエーガーは常に視姦ブレイを受けながら、その時が来るのを切望していた。

マーレで負傷兵を装う弟と話したジーク。

妹の「寵愛の子」の事実を知らされる中、ジークもまたエレンに「安楽死計画」を行う上で、その意思の確認をとった。

少なくともイエレナに計画の真の全貌を明かされ、それに首肯したからこそ弟は兄と密会に及んだはずだ。

しかし当のエレンは、真つ向からジークを否定した。

「安楽死計画」に、到底賛同できないことを。

鋭い目つきで、射抜くように向けられた翡翠の瞳は、夕陽に照らされながらもそれに侵されぬ色を放っていた。

やはり——やはり、エレンはグリシャ・イエーガールの洗脳を受けていたのだ！
ジークはそう確信をもって言えた。

幼かった自分にエルディア復権派の思想を植え付けて、さらに娘を狭い家の中に閉じ込めた男。

ジークにとつての“父”はトム・クサヴァーであり、グリシャを「父さん」と呼ぶことは決してない。

そしてエレンもまた、父の思想を植え付けられたかわいそうな息子だった。

『違う』

だがエレンはそれすら否定して誰の思想にもとらわれていないことを強調し、自分が進んでいる道は自身の意志で選び進んでいるものだ、と語る。

『オレは自由なんだ、兄さん。グリシャでも、フクロウでも、あんたでも、姉さんでも……ましてや始祖ユミルでもない。これはオレが選んだ“道”で。オレが進むことによつて、はじめて切り開かれるものなんだ』

エレンはむしろジークの方が未だに父親に縛り付けられていると、キツパリと告げた。

父に反発して進んだ先に生まれたのが、「安楽死計画」であると。

『グリシヤを否定しようとするあまり、逆にあんたは自分を縛り付け、未来のない生き方を選んでる。その先にあるエルディア人の行く末はなんだ？ 少しずつ少しずつ、老いていくだけ。夢も希望もないじゃないか』

ジークは淡々と話す弟の言葉を黙って聞きながら、憐れんだ。

そして、弟を救い出す方法を考えた時耳に入った、とある言葉。

『兄さんは結局、アウラ・イエーガーを巻き添いにして死にたいんだろ』

瞬間ジークは声を荒げ、「違う！」と叫んでいた。

相手のウロコをわざと逆立てるように会話を進めていたエレンは、話の主導権を握る。

その時二人はどちらも己の道のために真剣で、本気だった。

『目でわかる。兄さんはオレを「可哀想でしょうがない」と思っている。だがオレからすればジーク、あんたの方が可哀想だよ。だってもうあんたは戻れないところに来てる。それについては、オレも同じだけどな』

『……………わかった風な口を利くな』

『あんたは姉さんとあんまり似てないが、やっぱり兄妹なんだな。似てるよ』

——死にたくて、仕方ない。

エルディア人は生まれてくるべきではなかったと、クサヴァーに話していた当時の少年。

裏を返せばそれはつまり、一種の自殺願望が透けて見える。

生まれてくるべきではなかった。

生まれない方がよかった。

自分の存在価値を見出すことができない。

家族を「楽園送り」にし、ずっと苦しみ続けていたジーク。来るところまできていた段階でもたらされたのが、クサヴァーの始祖の力にまつわる話。

それは記憶の改ざんどころか、エルディア人の肉体へ干渉することすらできる——というもの。

そこに一つの可能性を感じた時、ジークは自分自身に、“使命”を生み出した。

その使命は恩人が肯定してくれたことを受けて、より強固なものとなる。

「安楽死計画」とはクサヴァーとの約束であり、父親のしがらみから解放されるためのも

のでもあり、哀れなエルディア人を救済するための措置であり……。

そしてジーク・イエーガーが死ぬための、最良の選択である。

簡単に死ぬことは許されない。己は「罪」を持っているのだから。

だからこそ世界を救い、同時にエルディア人も救う。その上で死を果たす。でなければジークは生きることができなかった。

父を、母を、復権派の人間を、そして妹を殺したジーク・イエーガーが生きることができなかった。

エレンは兄の根底にある感情をめぐりとく見抜いていた。

恋愛話になればポンコツだが、元々その他の感情の機微には聡い。

ジークは歯を噛みしめ、思わず手が出そうになりながら拳を握りしめる。

王家の血を引く巨人の力を持つ兄と、始祖を持つ弟。接触すればひとたび事は動く。

準備が整っていない状況で接触を起こせば、世界はおろかパラディ島全土が混乱状態に陥る。

『酷だな。殴りたくても殴れない』

『……俺の計画を否定して、お前は何が目的なんだよ』

『オレはただ、兄さんに違う提案をしたいだけだ』

エル^{自分}テイア^{たち}人が犠牲になるのではない。

世界を犠牲にして、自分たちが生きる。

「地ならし」を用いた究極の排他行為の過去最悪の進撃脳な弟の提案に、ジークは絶句した。

人類のほとんどを殺す。

倫理観がどうかというレベルの話ではなく、もはや自然の理を完全に冒瀆するような行為である。

人間どころか多くの生き物が、自然が、その過程によって破壊される。

『お前は、何を……かなが、えて』

『オレたちがレベリオ区を襲撃しようとしなかつたら、いずれ世界の脅威はパラディ島の人間を殺し尽くした。将来はユミルの民自体が一人残らず駆逐されるかもしれない。なぜだ？なぜオレたちが死ななければならぬ？自由を奪われなければならない？オレには今の世界の在り方そのものが許せない。だからこそ壊すしかないんだ』

『バカ言うな。お前は正気じゃない。それもグリ——』
『すべて、オレの意志だつて、言つてんだろ』

長い前髪の隙間からのぞく大きく見開かれた翡翠の瞳。
有無を言わさぬその視線に、グツと、ジークは押し黙つた。この弟怖い。

『それに、あんたは妹を道連れにしたいと思ひながら、それ以上に生きてほしいと願つて
いる』

『…断言するような物言いだな』

『戦争帰りに姉さんを抱き上げて、振り回すくらいには好きだもんな』

『え?——あ、えつ、見つ……!!!』

しどろもどろになつた男は顔を真っ赤にして、どうにか弟へ弁明しようとする。しかし羞恥に染まつた脳は、都合のいい答えをそう簡単に与へはしない。

『……お前に罪の意識はないのか?』

兄の問いに、エレンは口を一瞬つぶむ。

『オレには大切な人がいる。守りたいと思う奴らがいる。オレの分だけアイツらに長生きしてほしい。幸せになつてほしい。誰にも侵害されることのない本当の自由を、掴ん

でほしい』

『……………』

『それにアウラ・イエーガーにも——姉さんにも、幸せになってほしい』

『…アイツはテコでも動かず、俺より先に死ぬ気だぞ』

『全身全霊でどうにかしろよ、ジーク』

『え、ええー……………?』

脳の処理が追いつかない男は新鮮な空気を肺に取り入れて、吐き出す。

このままではエレンの返答もままならないと察した。ゆえに一つの提案を持ち出す。

『……………先に、お前のお姉ちゃんに話をさせてくれ』

心の整理をつけてからでないと、ジークは本来の「安楽死計画」にも影響を受けると感じた。

一度妹と話し合う。そうして答えを導き出す。

エレンは兄の提案を呑み、異母兄弟の話し合いは幕を閉じた。

その一件から、ジーク・イエーガーは悩み続けている。

巨大樹での生活が続いた今、ついにエレンが動いた話を補給・連絡をつとめる兵士がリヴァイに話しているのを、耳にした。

ちょうど兵士長を「絶対アンタ、非モテ男ぢゃんww(ギャル感)」と称したばかりであり、目の前にいる男は気が立っている。

アッカーマンの恐怖に怯えるばかりの戦士長殿ではない。マーレに裏切りがバレた以上、「三元」をつけるのが正しいが。

エレンが自分の計画を進めるためにもアウラを救い出し、イエーガー派閥の人間とともにジークの元へ送らさだろう。

さすがにかなり日が経った今、妹も目覚めているはずだ。

まずはここから逃げ出すのがファーストミッション。

すでにジークの脊髄液入りのワインを監視を行う30名あまりの兵士が飲んでいり、意図的に兵士らにワインが渡るよう仕組んだのはイエレナだ。

巨人化実験の副産物であるアッカーマンには飲んだところで効かない。

しかし少なくとも、巨人にされた仲間には刃を向けることに抵抗を受けるはずだ。そんな中で巨人約30体VSリヴァイ。勝機はある。

向こうはイエーガー派にジークとエレンを引き合わせる交渉を持ち込むように見せかけ、その道中でエレンの始祖を他人へ奪わせる気だ。

だがそれに待ったをかけたのはリヴァイ。

兵士長はエレンではなく、ジークを巨人にしたイエーガー派の人間のエサにしようとしていた。

妹の救出時間を含めて、まだ動くタイミングではない。

リヴァイがジークを捕食させる旨を伝えるように補給・連絡人員に頼んだ後、ジークへ視線を向ける。

「自分が食われるつてのに随分余裕そうじゃねえか、クソヒゲ」

「冗談言えよ、リヴァイ。怖くて今にもシヨンベン漏らしそうさ」

パチパチと鳴る、焚き火の音。

高い木々に囲まれ、陽が出ていようと薄暗い森の中を淡く照らす光源。

己の真意を悟らせまいと、ジークは息を詰めながら文字の羅列を視線で愛撫する。

そんな男の様子を見ていたリヴァイは深緑のマントを翻し、離れていった。

???????

シガンシナ区の本部を訪れた、フロックとその一部を除くイエーガー派。

そこを占拠した彼らについては、シガンシナ区の防衛訓練に当たっていた訓練兵に同志を募った。エルディアの民を救う救世主の一員として。

その上で訓練兵らに、旧体制を象徴するキース・シャーデイスを肅清させた。

しかし幾人もの訓練兵が拳を血で染める中、教官は煽るような態度を取りながらも、一度として反撃を行わなかったのである。

その一方で、アウラ・イエーガーを加えた後、巨大樹へ向かったフロック含む数名のイエーガー派とハンジたち。

連れられたアウラは馬に乗れる状態ではないため、団長殿が前へ座らせるようにして乗せている。

最初は男の兵士が乗せる予定だった。

だがアウラに触れたのち生唾を飲みこんだ様子を見て、ハンジが回収した。

彼女がアウラを抱えたまま逃げる可能性もあったが、周囲は銃持ち。ハンジがアウラ

を連れて逃げたところですぐに撃たれる。ゆえに許されていた。

そして馬を走らせてから間もなくして、起こった異変。

ハンジの前でうなだれるように乗っていたアウラの体が突如、痙攣したのだ。

ぼんやりと虚空を眺めるのみだった女はうめき、痙攣の衝撃に耐えきれず落馬する。

持続的に体が震えたわけではない。一瞬、まるで雷に打たれたように体が跳ねた。

女が落馬した際に巻き込まれかけたハンジは、慌てて手綱を引き馬を止める。

異変に遅れて気づいたフロックたちも、その少し先で馬を制止させた。どうどう、となだめられた馬の足音が地面に響く。

落馬した女から一番距離の近いハンジはその時、仰向けの体勢で上半身を反らせ、口をうつつすらと開けているアウラを見た。

見開かれたその瞳は、白銅色ではない。

不思議な色だ。銀とも、白とも、薄紫とも取れる色。

その中に散りばめられた無数の光。さながらそれは夜空に浮かぶ星のようである。

あ、と声を漏らした直後、アウラ・イエーガーの体が発光した。

「ッ……………!？」

吹き荒れた強風が、ハンジのかぶったフードをはらう。

現れたのは、目測13m級の巨人。仰向けの体勢で転がる巨人に、ハンジは一瞬恋に落ちる。

腹は平たく、無数の長いあばらが皮膚を突きやぶつて飛び出ている。

顔は眼球と鼻がなく、ヒトの頭蓋骨をそのまま一部露出させたような造りをしている。顔を覆うバサバサとした髪は金色だ。

人間が側にも関わらず、その巨人は顔を向けるどころか、動く様子がない。

「何が、起き……………て」

興奮に早鐘を打つ鼓動とは裏腹に、状況を理解できないハンジの額から汗が吹き出す。

その後ろからポツリと聞こえたのは、フロックの声。側にいた彼女にしか聞こえないほどの微かなものである。

「まさか……………」

ハンジはとつきにフロックへ視線を向ける。

何が、「まさか」なのだろうか。アウライエーガーが巨人になったことに、思い当たる節でもあるというのか。

「君は何を知っているんだ、フロック。…いや、待て——何を、したんだ？」

ふと彼女の脳内でよぎったのは、アウラが起きたばかりの一場面。

フロックは咳き込む女に、水筒の中身を飲ませていた。アレはしかし、透明だった。ただの水だったはずだ。

だが何も混入していなかった、とは限らない。

ワインの色という先入観があったため、怪しむこともなく流してしまった。

もし数滴その中身が水に混じっていたとしたら？色はほとんど変わらない。

そもそも脊髄液入りのワインは、レストランを訪れたときにでも手に入れることができた。

しかしもし本当に飲ませたのだとしたら、理由がわからない。

眉を寄せた団長に、フロックは瞳を細める。

「そう睨まないでくださいよ、ハンジ団長」

空にはだんだんと、雲が増え始めていた。

安永

フロック・フォルスターはエレン及び104期生の同期である。

当初駐屯兵団に入ったフロックは、数多くの激戦を経て調査兵団に編入した。

その時はまだ、人類のためにウォール・マリア奪還を目指す兵士の一人に過ぎず、しかして彼は、悪夢を知る。

迫りくる投石。死んでいく仲間。大地に降る血の雨。

共に調査兵団に移った仲間も死に、最後に生き残ったのは自分だけ。

地獄の中、かろうじて生きていたエルヴィン・スミスをリヴァイの元へ運んだのもフロックだ。

地獄を作ったのは《獣の巨人》に他ならないが、兵士を地獄へ招いたのはエルヴィンである。

フロックの団長を救った行動は善意などではなく、むしろ悪意によるものだった。

多くの兵士が死ぬに至った理由を作り出した男への、報復。

それは結局リヴァイの苦渋の決断の末、超大型を仕留めるに至り、全身にヤケドを負ったアルミンに使われることになった。

以来、いち兵士でしかなかったフロック・フォルスターの人格は、大きく歪むことになる。

そのきつかけが兵士を死地へ赴かせたエルヴィンの行動や、仲間の死であったことは言うまでもない。

彼の憎悪の矛先は、マーレに向いている。

同時に過剰すぎる愛国心を、フロックは抱えているのだ。

その意志を見抜いた上で、エレンはイエレナと密会した後、彼に「本・当・の・計・画」について話した。

パラディ島以外の人間を駆逐していく、究極の排他行為。

おそろしい考えにしかし、フロックは絶句しつつも協力の申し出を飲んだ。

エレンがこのままではユミルの民に未来がないと思っていたように、彼もまた、今後の展望を見据えていたのであろう。

そんなフロックにとって仲間を殺したジーク・イエーガーの妹で、信奉するエレン・イエーガーの姉——アウラ・イエーガーとは、どのような存在であろうか。

ジークと同じく、憎悪を向ける対象であることは確かである。パラデイ島を裏切った点を踏まえても。

仮に始祖ユミルの寵愛を受ける女が、兄ではなくパラデイ島を愛していれば、もっと多くの人間が救われたはずだ。

しかしアウラ・イエーガーは兄を愛している。

正直言つて、アウラの人間性をフロックも理解できていない。

狂った思考を理解しようとしたところで、普通の人間が理解できるわけがなく、ただひたすらの嫌悪感を味わうだろう。

殺すべきなのだ、狂った女は。

だが始祖ユミルは趣味が悪いのか、イかれた女を寵愛している。

アウラ・イエーガーを殺すことはきつと難しい。そもそも飛行船でフロックがアウラにつかみかかったことを知ったエレンは、イエーガー派を脱出させた際に彼に念を押し

た。

余計なマネはしないように、と。

エレン・イエーガーは姉にひどい仕打ちを受けたにも関わらず、未だ好いていること

をフロックは悟った。

エレンが元々シスコンであったことは仲間から聞かされている。調査兵团を目指す中、姉を守る目的があつたことも。

だが愛する姉は弟を見ず、兄しか見ていなかった。

「弟のため」と言っていたのも、すべては兄のための虚言でしかない。

エレンがどう考えているかは省くとして、フロックはアウラが弟を愛していなかった——と、思っている。

本当に愛しているなら、エレンを苦しませなかつたはずだ。

ウオール・マリア奪還作戦の後、だれよりも苦しんでいた少年。もし上手いやり方になかつたのだとしても、もっと弟を苦しませない方法があつたはずである。

仲間を長年欺く演技力や思考があつたのだ、そのくらいの芸当はできただろう。

『もし姉さんを殺したら、その時は、オレが——お前を殺す』

エレンは言った。

面と向かつて、ジークに妹を引き合わせることをフロックに任せられた時に。

ジークを騙し「地ならし」を利用する予定だったが、エレンはそれを変更して、兄を

説得する方向に出た。その方が計画を遂行する上で、成功率が高いと判断した。

ジークが条件として持ち出したのは、妹との対話。それからエレンへ答えを出す。

フロツクの目的は、エレンと概ね一致している。

むしろ「悪魔」の手助けがなければ、パラディ島の未来はないとさえ確信している。だからこそ、邪魔者が疎ましい。

その邪魔者は言わずもがな、アウラ・イエーガーだ。

もしジークが妹と話し合い考えをまとめ、出た答えが「安楽死計画」の続行だったとしよう。

妹はそれに賛同するだろう。

問題は「寵愛の子」という不確定な要素。

始祖ユミルはアウラを寵愛し、アウラは兄を狂愛する。

このプロセスの行き着く場所は、ジーク・イエーガーだ。ゆえにエレンも兄を説得しようとして画策した。

これを踏まえてアウラ・イエーガーを殺すなら、どうすればよいだろうか。

一歩間違えれば始祖ユミルの地雷を踏む。本当にそのような存在がいるかは不明で

あるが、前提として信じなければ話は進まない。

フロツクは考え、そして、一つの案を見出す。

別段殺すのは自分でなくともよい。もつと適任者がいる。

アウラが殺してほしい——と望む相手。ジーク・イエーガーに妹を殺させれば、アウラの望みが叶うことになり、始祖の地雷も踏まないと考えた。

無論、直接ジークに妹を殺させることは不可能だろう。

飛行船で発狂する声を聞き、妹を心配する一部始終を見た感想として、エレン以上に兄は妹を愛している。

であれば、間接的な手段を用いるのだ。

幸い、これ以上なく都合の良い道具があつた。ジークの脊髄液入りのワインである。

フロツクはワインをレストランでくすねた後、数滴ほど水の入った水筒に混入させた。

それを部下に持たせ（飲まないように念を押して）必要となつた時、アウラに飲ませられるようにした。

結果、ハンジに怪しまれることなく、咳き込んだ女に脊髄液入りのワインを飲ませることができた。もし女が起きていなければ、ハンジの目が届いていない移動中にも

こっそりと飲ませただろう。

愛してやまない兄の脊髓液を飲めた上に、それが原因となって死ぬるのだ。アウラ・イエーガーも本望だろう。

ただいつ巨人化するかは、状況と、ジーク次第。

しかし遠からず、“叫び”を使わざるを得ない状況がくる。大打撃を受けたマーレが、そのまま黙っているとも思えない。

否、すでにその前兆は現れている。

連日の騒動でその調査どころではないが、巨人の足跡が調査兵団の兵士によって発見されている。

また詳しい調査はできずとも、特徴的な四足歩行の痕跡から、『車力の巨人』が壁内に侵入している可能性が高い。

そのため、事は性急に運ばねばならない。

アウラがワインを飲んだことを知る者はごく一部であり、もしジークが叫びそのことが明るみになったとしても、アウラ・イエーガーは巨人化済み。巨人化能力者を食わせる以外、人間に戻る方法はなくなる。

始祖の力と王家の関係を考えればエレンの力を継承させることはできず、ジークの力を継承させたとして、兄を食った事実を知った女が自死の道を選ぶことは想像に難くない。

また、アルミンを差し出すわけにもいくまい。

超大型の力はアルミンだからこそ信頼を置いて任せることができるとの、脅威的な力を持つ。

それをわざわざ裏切り者に継承させるなど、納得できるわけがない。

エルヴィン・スミスの死を代償に生き残ったのが、アルミンであることを知っているなら尚更。

一連のフロックの行いは、大きなリスクを伴うものである。

そもそもエレンの牽制をまるつきり無視してまで、なぜ彼は殺害を目論むのか。理由を挙げれば、それこそたくさん出てくるだろう。仲間の死に、裏切り。

だが何より彼は、狂った女の姿を見て、思った。

女の叫び声を聞き目にした、発狂するアウラの姿。

殺さなければならぬ。

漠然としたそんな考えが、フロック・フォルスターの内によぎったのである。

生かしてはならないと、死体に帰さなければならぬと思った。

その息の根を、一分一秒でも早く止めなければならぬ。

一種の強迫観念じみた感情を抱え、そして、行動に移したフロック。

企みはほぼ成功した。失敗点——というより予想外の事態は、女が突如巨人化したことだ。

ジークが叫んだ事は間違いない。しかしその叫びにも、ある程度効果の範囲があった。巨大樹の森までにはまだかなり距離がある。仮に現在地の場所で効果があるなら、その他の脊髄液を摂取した人間にも反応が起こりかねない。それもワインを飲んだ人間は複数いる。

一度フロックが目にしたことのある、同時多発的に出現した巨人。

眩い光が起こってもおかしくはないが、空に変化はなかった。

ハンジも状況が掴めていないが、フロックもまた状況を理解できていない。

巨人の様子を見るが、動く気配はない。その巨体は空を仰ぐような体勢で、地面に転がっている。

巨人化したのは、王家の血筋が関係しているのか。はたまた始祖ユミルの所業であるのか。

疑問は尽きぬまま、一行は一旦その巨人を置き去りに、巨大樹の森へ急いだ。

異変が起こっていることはまず間違いない。ハンジの鋭い視線が向く中で、フロックは深いため息をつく。

「俺を疑うのは別にかまいません。ですが裏切り者に、あなたは同情でもしているというのですか？」

フロックは、アウラが兄以外に向ける感情に、中身はないものだ——と考えている。

だがその他の他の中では、未だに女に“正”の感情を向ける者もいる。サシヤを助けた点で、よりアウラの人物像が不明瞭となった。

隣で並走するハンジは前を向いたまま瞳を伏せ、沈黙を選ぶ。

彼女もまたアウラ・イエーガーと長く共に戦った人間であり、悩むところは多い。

「こんな時エルヴィン団長なら……どうしたでしょうね」

た。
皮肉を混じえて眩かれたフロックの言葉に、ハンジは小さく「…わからない」と答え

??????

空の色。

空。

そこにある。

知っている。遠い。届かない。

なぜ空が青いのか、わからない。

赤い。

体にまわりつく赤い色。

肌を、肉を、骨を、内臓を、侵すおびただしい赤色。

それに浸って、感じる痛みに意図せず口から声が漏れて。

その時私は、「私」が生きているのだと知る。

「私」ではない私は死んでいる。

私である私たちは悲劇の中で死ぬ。

痛みに溺れて、苦痛の中で生より死を望んで、そしてその死すら果てがないことを知る。

不幸が降りかかるのではなく、不幸が私を中心に回っている。

私のはじまりがなんだったのか、わからない。

私の終わりがどこにあるのかわからない。

死にたい。死にたくない。生きたい。生きたくない。

死んでも絶望で死ぬ思いがして、生きても絶望で死ぬ思いがする。

飽和する絶望。

呼吸ができない。

私がない存在するのか聞いた。

上で回っているヤツに聞いた。

上で回っているヤツはクソヤロウだ。

理由はわからない。けれど私の本能が言っている。

きつとこれまで不幸を刻み込まれて、肉塊になった私たちが言っていた。

おなががすいた——。

言っていた。回るクソヤロウは言っていた。

クソヤロウは教えてくれる。

クソヤロウは捕食者で。

無機質の中にしか生きられない不完全な生き物で。

ニンゲンとは違うベクトルで存在していて。

厳密に言えば、生きても、死んでもいない。

ただ、存在するだけ。

いや、存在さえしていないのかもしれない。

だってクソヤロウは無機質な物体だから。

文字どおり、「ない」。

コイツがかわいそうだとは思わない。

だって私の下には、私たちが転がっているから。

私たちは死んでいる。

クソヤロウは求めてきた。

私に求めることを求めてきた。

何を求めればいいというのだろうか。

私は私たちの中へ還つて、私はまた私であることをはじめる。

そんな私が求めることなどない。

クソヤロウは言う。

新たな望み。

——新たな望み？

私の願いは、叶つたのだと言う。

私に願いなどあつたのだろうか。

それはいったいどんな願いだったのだろうか。

それは「私」がはじまつたことのキツカケだったのだろうか。

ともかく、私は還らなければならない。

“無”に、還らなければならない。

ソイツはけれど、還してくれないようだった。

お腹が空いているから、還してくれないそうだ。

なら私を食べれば私もクソヤロウも、ワインワインだと思つた。

けれど私はもう飽きたらしい。

同じものは流石に、飽きるらしい。

コイツは私を食べていたのか？

だから私たちは転がっているのだろうか。

わからなかった。

そもそもどうして私がクソヤロウがいるこの場所にいるのか、わからない。

私は私の願いをわからないけれど、願わなければならないそうさ。

私は何を願おうか。

私は私の願うことの私の願いを私は私願う。

私は。

私は？

『——アウラ、死なないで』

誰かが泣いていた。

いったい誰が、泣いているのだろう。

??????

ポツポツと降り始めた雨。

葉の上に落ちた水滴は緑の表面をすべり、地面へ落ちてゆく。

馬が荷車を引く中、顔に落ちた雨粒を受けて男の意識が戻った。

その側で監視をしていたのはリヴァイ。フードをかぶった兵長はいつでも男を殺せるように、ブレードを握りしめたままである。

ところどころ血が付着し、刃こぼれの目立つそれは、荷車の上で上裸で寝転がる男に振る舞われた。

すでにリヴァイ以外の仲間は死んだ。

彼が殺した、という表現が正しいが。

巨大樹の森で一つの貴重な娯楽として、兵士らが兵長に飲酒の許可を求めたワイン。

そこにジークの脊髄液が入っているなど、誰も想像だにできなかった。

隙をついて逃走したジーク・イエーガーが叫び兵士が巨人化して、そんな彼らを自らの手でリヴァイは殺した。そして兵士長は巨人化した男を雷槍で打ち倒し、今に至る。

一度ジークが目覚めた時、静かな激情をたぎらせた兵士長は、男の足を細切れにしている。

四年前の雪辱が、ようやく果たされた。

亡きエルヴィンとの約束。

《獣の巨人》を倒した男の内によぎるのは、底の見えない怒りと、空虚。

何度も仲間を失ってきた。その穴の溝が埋まったことなど、一度とてない。それでもリヴァイが進み続けるのは、ひとえに死んでいった仲間たちのためである。

人類の希望のために、進み続ける。

だが肝心のエレンに、その希望暗雲が立ち込めている。

ピクシスらは、エレンがジークに利用されていると考えている。その上でレベリオ区の襲撃を実行させたエレンの始祖を、他の者へ移す案がまさに今、進んでいる。

兵長はしかしエレンを犠牲にするならば、ジークの命を差し出すことを選ぶ。

イエーガー兄弟の計画が何であれ、王家の血を引く巨人を奪ってしまえばすべてが頓挫する。

「地ならし」も行えなくなってしまうが、その時はその時。今はまず、目先の脅威を摘まねばならない。

「汚ねえツラだ……」

ジークの腹には現在、行動を制限させるための雷槍が突き刺さっている。

当の男は足を切られた痛みで、気を失っていた。意識が戻った顔の周囲では、吐いた跡がある。普段かけていたメガネは、戦いの最中で無くなってしまうていた。

「ううっ……」

青い瞳が開き、朦朧と辺りをさまよう。

意識を取り戻したジークはメガネを探し、無いとわかるとリヴァイ——ではなく、雨粒を降らす空を見上げた。

「デメエ、どこを見てやがる」

走馬灯、という奴なのかもしれない。

人類最強たる男も、人生で何度も体験したことがある。

ジークの瞳は正確に外界を認識できていないように見える。だがそれでも死ぬことはない。巨人化能力者なのだから。

「そ、ら」

「ア？」

「いろ……ウ、ラ」

焦点の合わない瞳は、フラフラと揺れ動く。

ついで漏れた、死にたい、という言葉。

その内容がリヴァイの逆鱗に触れた。

多くの兵士の命を奪っておきながら、簡単に死なせるわけがない。

最低でも自分が食われる咀嚼音を聞かせながら、巨人のエサにする。

「安らかな死を、テメエが送れると思うなよ」

「やすら、か……死」

「……さつきからテメエ、何をブツブツと言ってやる」

「うまれな……うが、よかった？」

「生まれない？」

「しめい……クサヴァー、さん」

クサヴァーとは、ジークと関わりのある人間だろうか。

思考を回しながら、リヴァイはブレードを伸びてきた足へ向ける。

「ぼくは……わからないよ」

再び振り落とされた刃は、まるでそれが元の形だと言わんばかりに切り刻んでいく。先ほどの激痛でもはや絶叫する力も弱まっているジークは、とぎれとぎれに落ちる意識の中、曇天を眺めた。

妹の色だ。白銅色の、濁った瞳。

痛みによる生理的なものなのか、はたまたただの雨の雫なのか。彼のこめかみを伝って、水滴が落ちる。

この残酷な世界で生きるとは、それだけで苦痛だ。

苦痛から逃れる方法は、「死」しかない。

そうして彼はどれだけの数の人間を殺して——救ってきただろう。

エルディア人でなければもつと違う、幸福に満ちた人生を送ることができたかもしれない。誰かと結婚して子を作り、ありふれた幸せを手に入れる。

だがその「もしも」は叶うことがなく。

非情な現実にはエルディア人でなくとも争い合うということを、戦争を通して彼は嫌というほど学んだ。

どうすればよいのかわからず、このまま死んだ方がラクだと思える。

使命も果たさず死ぬことは許されない。

しかし彼はとつくの昔から、限界を迎えている。ずっともう無理であることを騙して、騙し続けて生きてきた。

「い、めん」

ジークの首に付けられていた、雷槍の信管につながるワイヤー。

それが引つ張られ、大きな爆発が起こった。

雨が降っている。

雨は、降り続けている。

永永（エーンエーン）

静寂。

白い花が雨粒をはね返す。

しかし聞こえるはずのサアサア、という音は聞こえない。

意識が沈んでいく中でジークが見たのは、不思議な世界だった。

天上に広がる無数の星。それと実物は見たことないが、まるでオーロラの如き白い光。

その光をたどった先にある、光の柱。そこから無数の光が、まるで枝のように空に広がっている。

ここはいつたいたいどこなのかと、空ばかりに気を取られていた男は、ふと気配を感じた。気配のある場所にいたのは一人の少女。

光に照らされて淡く浮かび上がる金髪に、顔を覆う影の奥に存在する蒼い瞳。

ジークは思わず息を呑む。あまりにもその少女は、妹と似ていた。

妹——アウラ・イエーガーに。

「…………アウラ？」

少女は男の言葉に反応せず、地面の土のような——しかし色としては砂のようにも見える——を両手で掬いあげると、男の体の上にかける。そして側にある桶の水を掬って、ジークの体に触れる。

「俺の……体？」

上半身はかろうじて動く。体を少し起こしてみてもわかったが、骨盤から下がない。

正確に言うると左足がなく、右足の太もも部分を少女が現在進行形で作っている。自由なのは右手と、上半身だけ。あとは感覚がなく、欠けている部分は地面の土と混ざり合うようにして欠けている。

もし無理に動けば、制作中の部分からボロボロと崩れてしまいそうだ。さながら砂浜に作られた城のように。

いや、それよりも、少女を認識してから気になってやまないことがジークにはある。

「何で、泣いてるんだ？」

堪えようとして失敗し、涙を流している少女。

悲痛なその表情にジークが思わず手を伸ばせば、叩かれる。それは、明確な拒絶である。

「お前は……始祖ユミルなのか？」

瞳を伏せ、少女の手を見つめながら、男は呟いた。

エレンが兄に語っていた内容。妹の話を伝え聞いた話によれば、始祖ユミルはアラ・イエーガーにそっくりだという。

状況が理解できずその話を忘れていたが、現状を整理する中で唐突に彼は思い出した。

妹の寵愛の件や、始祖の目的など、聞かなければならないことは山ほどある。

しかし少女の涙を前にして、その考えはジークの中で雲散霧消した。

大声をあげて泣けばいいものを、必死に堪えようとする。とてもではないが見ていられた。こちらまで胸が苦しくなる。

その感情はひとりの兄としての思い。始祖ユミルを妹と重ねて、その上でジークは慰めてやりたかった。

「作るよりほら、お兄ちゃ……俺の胸貸してやるぞ？」

『…………』

ジークが伸ばした手はしかし、また叩き落とされる。妹であつたらこれで一発で機嫌が直るといふのに。

「…………というかその前に……、どこなんだ？」

ようやくと彼ははじめの疑問に行きつく。答えを知っている少女は泣きながら自分の体を作るばかり。

そうして、途中少女が水を汲みに行く様子を眺めたり、ウネウネとミミズのように蠢く空の光を見たり、中心（意味深）に伸びる少女の手を反射的に掴んだり。

一瞬のような、はたまた悠久のような。奇妙な時間の流れだった。

元よりおしやべり好きな男は、暇つぶしとばかりに少女に話しかけた。質問をしたところでも何も返つてこないため、一方的な思い出話に留めて。

その間何度も手を伸ばしたが、やはり拒絶される。その度にジークは感じた。

——人間のようだ、と。

始祖ユミルはとつくの昔に死んだ存在である。

その少女がジークの体を作っている。あるいは生成される巨人も少女が作っている

のではないのかと、長い思考の中で彼は思った。

ずっとここにいたのであろうか、一人で。

孤独に、巨人を作り続けながら？

なぜこの不思議な場所にユミルが居続けるのかジークにはわからない。否、この場所の正体には、気づき始めていた。

道。クサヴァアが語っていた、エルディア人をつなぐ座標。

それこそがこの世界ではないのか、と。

そんな場所で孤独であり続ける存在は、きっと人間ではない。あるいは、人間ではない。られない。

人間としての感情があるなら、殺風景もいところな場所で奴隷のように続けるなど、到底耐えられるわけがない。

しかし、ジークにはユミルが一人の人間にしか見えなかった。

泣いて、睨みつけて、鼻水が出ている少女が。

「鼻水で顔ぐしよぐしよにすると、アウラと似てるんだな」

『……………』

「……なあ、ユミルちゃん」

『……………』

「お前は どうして、俺の妹を特別に想っているんだ？」

男の左足を作っていたユミルの手が止まる。

少女はうつむき、はじめて口を開く。そこから音が紡がれることはない。パクパクと動いたその口に対して、原理は不明だがジークは正確にその意味を理解する。奇妙な感覚だ。脳内に直接言葉が送られているような。

その声はジークの補正がかかっているのかもしれないが、妹のものと酷似している。

——わたしを最初に、「愛」してくれたから。

???????

ユミルを愛した。

世界中の誰よりも彼女を愛して、愛し続けてくれた。

「愛」を捧げて、捧げ続けた。

それを理解できなかつたユミル。わかつたのは彼女が死ぬ時だつた。

自分を愛してくれていると思つていたフリッツ王が、彼女をただの「奴隸」としてしか最期まで見ていなかつた現実。

彼女がはじめて愛したのが王だつた。その「愛」はけれど、どこまでも一方通行だつた。

彼女が死に、そしてその遺体の周りで泣いていた娘たちは、ユミルを愛していただろう。

だがそれは、最初ではない。

生きることに絶望し、死を選んだ女。

その果てに待つていたのは、王の命令に従いつづける虚無な存在としての在り方である。

奴隸「ユミル」。

彼女はそれ以上にも、それ以下にもなれない。

誰かの下で、自由なき人生を歩む。

それは人間に食われるためだけに存在する家畜と、何が違うのだろうか。搾取さ

れるだけで、自分で羽ばたくことが許されない。

だからこそ彼女は「自由」を欲した。

あの日——家畜の柵に手を伸ばしたことは、ユミルが起こした世界への小さな反逆だった。

その反逆は大きな代償を伴い、少女の自由をより奪う。

彼女の人生の中で同じ姿、形をした少女の存在は、忌まわしいものでしかなかった。みな、気色の悪い少女を嫌っていた。ユミルもまた、嫌いだった。

ずっと、ずっとずっと、付いてくる存在。物心ついた時から側にいた。離れることはなく、離そうと思っても離れない。

それは、ユミルの自由を奪う存在だった。

ユミルから自由を、奪った存在だった。

そんな存在が王の「自由」の言葉を受けて笑った時、ユミルは人生ではじめて人を殺したいと思った。

両親が殺されても抱かなかった感情を、同じ存在きょうだいに抱いた。

だが誰よりもユミルを愛してくれたのは、『×××××』で。

×××××

王の愛がなかったことを知り、そして『X』の愛を自覚したときにはすでに、その少女はいなかった。

死んでいた。もうこの世に、いなかった。

殺したのはきつと、ユミルに他ならない。

自由を求めて家畜を逃さなければ、その少女は死なず。

腹の中のたうち回るような激情を抑えて生きるために走っていれば、その少女が自分を助ける状況はできず。

そもそも『X』がユミルへ向けるものが「愛」であると理解できていれば、もつと違った人生だったはずだ。

あるいは二人とも幸せに暮らして、生きられたかもしれない。

後悔しきれない感情を抱えて、奴隷として束縛され続けた長い長い時間。

自分の自我さえ薄れ、その先で見出した解放。

少年と少女が彼女を呪縛の時から解き放つ前にしかし、現れる。

『』と似た存在。

『』が「奴隷」として呼ばれていた名を持つ「アウラ」。

少女は道を通して、その存在を観察した。

そして自我が育たぬ幼児を不思議に思いのぞいた時、見てしまった。

死体。死体。死体。

『×』の死体。地平線の果てまで狂ったように世界を覆う、死体。

真つ暗な世界。その上で回るエビのような、奇妙な回遊魚。

ユミルは知った。幼児が『×』と似た存在ではなく、『×』そのもので。

奇妙なエビのようなものが、彼女と接触した光るムカデと似た存在であることを。

否、似ていると言つても、それは人間を超越したものである——という意味で、その二つはまったく似て非なる生き物なのだ。

何が異なるのかは、ユミルにもわからない。

だがその奇妙なエビが『×』を束縛し続けているのはわかった。

ゆえに最初のテコ入れと、ダイナ巨人に食われた時、アウラを自分のなるべく近い場所におけるよう改造した。

二回目は死に急ぎ野郎より死に急ぐ女を考慮しての魔改造だった。

さまざまな手回しを経て、万が一ユミルの意識が向いていない時でも、死にかけた場合ソレが起動できるようにした。

アウラが一部分でも始祖の力を使えるのは、これが関係している。

だが、長らく動きをみせなかった回遊魚が動いた。

あつという間にアウラをたぐり寄せ、暗闇に導いた。ユミルの、一瞬の隙をついて。

元よりそれはどうにもならないことだったのだ。いくら彼女がアウラを助けようとしたところで、ずっと女と回遊魚はつながっている。切り離せない。それはまるで、ユミルと光るムカデの關係のように。

彼女はアウラの腹のキズを、治していかない。

治したのは回遊魚。

いや、違う。殺したのが回遊魚。

そうしてきつとアウラは、『××』は、死に続けている。

なぜ死んだはずの『××』が蘇ったのか、ユミルは知らない。

奇妙なエビの目的も××わからない。

そもそもエビに目的があるかどうかもわからない。

ただ、ユミルは救いたかったのだ。狂ったように殺されて、捨てられ続ける『××』を救いたかった。

どうすれば『××』は地獄を見ずに済んだのだろうか。

××××

××××

どうすればエビに再び捕まってしまった『××』を、救えるのだろうか。

回避魚と接触して以降、アウラとのリンクは取れない。この道へ導くことも、アウラが何を思っているかもわからない。

わからない。

ユミルはあの時——『××』が死んだ時、どうすればよかったのだろうか。

××××

ポロポロと、少女の瞳から涙がこぼれる。

男を直していた手も止まり、涙を拭う。

ジークは困ったように頬をかき、そつと手を伸ばした。払われることを覚悟の上で。

しかし今度は少女の髪に触れることができた。そのまま撫でれば、柔らかい撫心地とともに、指にからまった金の糸が輝きながら落ちてゆく。

「もしかして、何かケンカしたのか？アウラと」

『……………』

「俺困っちゃうんだよ、妹に泣かれてるみたいで」

『 ！ 』

少女の拳がジークの顔面に炸裂する。小さな体格から繰り出されるその拳は大した威力にもならないが、より男の心臓をえぐる。

何度も何度も、その拳が体に当たる。少しのこそばゆさを覚えつつ、ジークは少女の体を抱きしめた。

瞬間、男の脳内で流れた「憲兵さん（アニたそ）コイツです!!!」という言葉。たいへん遺憾である。

「俺は少女趣味じゃないから。というか、どこでそんな言葉覚えたんだ……」

『 』

『 あ……………アウラかツツ!! 』

アウラ・イエーガーはろくな知識を始祖ユミルに与えていないらしい。これは現実に戻ったら問い詰めなければならぬ。

というより、ジークは自分がここへ来た経緯もイマイチ覚えていない。

戻ってから何が起こったのか思いつくさう。ここへ来る前に起こったことを。そして夢のように、少女との奇妙な邂逅は、虫食いの記憶になるに違いない。

だが不思議と少女の涙は忘れないだろうと、彼は思った。

???????

ハンジたちが移動する中、その足音は聞こえた。

雨が今にも降りそうな天気の下、揺れる地面。おそろしいスピードで近づくとそれに、一度女型の速度を経験したことのあるハンジは目を見開く。

例えば他の足止めがなければ、簡単に追いつかれてしまう巨人の速度。その主はまっすぐに、巨大樹のある方角へ向かって走った。

全体一度、ねらわれる可能性を感じた兵士らは、馬に指示を出し周囲へと散らばる。巨人がいる中で壁外調査を行っていた時代ならまだしも、今はわざわざ長距離索敵陣形をとる必要性もない。

そのためハンジは連携の取れないイエーガー派の移動に、思わず眉を寄せた。

しかしそれよりも気にかかるのは、頭蓋の巨人体。

その元が王家の血であるがゆえか、他の巨人とは異なる体つきである。

助骨の飛び出た巨人は、ハンジも何度か見たことがある。だが顔の骨が出ているのは初だ。厳密に言えば耳元や首元へいくと、肉がうつすらと付き始める。

また女型と同様に、胸がある。本人には失礼かもしれないが、人間の時よりその胸囲はあった。同室であつたゾエは何度か、恨みがましげな視線をアウラから受けたことがある。自身の胸に向かつて。

「ジークの命令で動いているのか……？」

先ほどまでは反応がなかった頭蓋の巨人。

それに動きがあつた以上、何かしらジークが命令を出したと考えるのが自然である。

巨人はみるみるうちにその姿が見えなくなる。

驚き体勢を崩した兵士らは立て直し、馬を走らせた。連日の不安定な天気でぬかるんでいたため、残っていた巨人の足跡を追跡するようにして。

それから雨が降り始め、しばらくして聞こえた爆発音。

音の元をたどると、そこには重体と見られるリヴァイヤ、体にキズを負った馬。また爆発の衝撃で壊れた荷車に、巨人の姿があった。足の跡がここまで続いていたりとおおり、アウラ巨人体である。

その巨人は顔を上に向け、佇んでいる。

奇妙な体勢にハンジが疑問に思いながら、周囲にいるはずのジークを探した。音の爆発音から、その正体が雷槍のものであることはわかっている。

そして直後、起こった爆風。

巨人は倒れ、そこから出てきたのは マッ パ の男。巨人がうなじを削がれていないのにも関わらず蒸発して消えていく異常事態に、その中から出てくるジークという光景。

彼は腹の部分の骨あたりから落ち、転がる。そして側の骨をつかみ、ふらつきながら立ち上がった。

何度も言うが、全裸である。

「……………」

ジークは状況を理解できていないようだった。それはイエーガー派も同様に。

ハンジは一同ジークへ視線が向いている隙に、重体のリヴァイを抱え川へ飛び込んだ。彼女はフロックに兵長が死んだ——と言っていたものの、脈を見た時一応まだ息があった。

人類最強の男は生きています。それだけで今のハンジには十分である。

銃声とともに弾丸が川へ向けられる間、フロックはジークへ近寄った。

「いったい……何があつたんですか？」

「……わから、ない」

ジークは返事もおさなりに、周囲を見渡す。

エレンとの約束であれば妹も来ているはずだ。しかし姿がない。

それにフロックは重々しく口を開く。

元より今いるイエーガー派は、少なからずアウラ・イエーガーに憎しみを抱く面々で構成されている。意図的に選んだのはフロックだ。

憎まれる理由を作ったのはアウラ本人。ゆえにフロックは手にかけて。それはひとえに姉のせいで苦しみ続けたエレンを、側で見ていたことも理由として。

フロックの行いを正当化する。当然それをジークが納得するかどうかはわからない。だが難しければ、彼はアウラ・イエーガーが狂った理由の元凶が兄であることを引き合

いに出して話す。

そこまで言われればジークも反論はできまい。なにせ男が妹を「楽園送り」にしたことは、まごう事なき事実であるのだから。

無論エレンに知れば、かなりの確率で殺される。

だがそれを覚悟の上で、フロックは行った。行わなければならなかった。

狂った女を、殺すことを。誰かがやらなければならなかった。

そう信じてやまない彼もどこか、狂っているのかもしれない。

まさしく、感染する狂気——と、言ったところか。

「アウラ、イエーガーは……」

その時。蒸気が辺りに蔓延する中で、音がした。

音に反応したジークとフロックが、視線を向ける。瞳を凝らしてその正体を探り、そして見えた、黒い人影。

巨人のうなじの部分にいるその人影は、また何か音を立ててうごめく。ブチブチという音に、ジークは聞き覚えがあった。

巨人のうなじに潜む人間が体を出す時に、つながる巨人体と自身の体を引き剥がす時

に聞こえる音。

それにひどく似ていた。

「エレン？ いや、違……………」

壁内にいる知性巨人はジークとエレンのみのはず。無知性巨人についても、すべて討伐されている。

ならば、いったい……………。

立ち込める蒸気の中で見えたのは、見覚えのある髪色。それが蒸気に吹かれて揺らめく。

いつも付けていた純白のバンダナは見当たらない。

腕を出し、そして下半身も取り出したその人物は、うなじの部分に立ち上がる。白いシャツと、紅い血のような長いスカートが覗く。

そのまま右足へ重心をかけてフラついた女は、つまずき、骨の上を転がって地面に落ちる。

ジークはしかしその髪の色が見えてから、すでに駆け出していた。

「アウラ!!」

腕の中に妹を捕まえた兄は、地面を転がる。

妹の名を呼ぶ声に閉じていたまつ毛が震えると、その瞳がのぞく。

それはかつて、ジークが見た色。

薄い紫のような、銀のような——不可思议な色の中で無数の光が散らばる。

さながら星を集めたような瞳が、そこにあつた。

思わず息を呑んだ男の頬に触れる手。その手はひどく冷たい。

「じーく」

うつそりと、微笑んだアウラ。

彼女はジークに抱きつく。

そして愉しそうに、狂ったように。

笑った。

【九章】「神聖悪魔ちゃん」編

私は私の選択をするとき、私ではない他人の選択を見て私の選択を選ぶようだ。

「私」は知っている。

私が狂う理由を知っている。

私は人の狂気で「私」ができあがったことを知っている。私たちの肉塊がその証拠。狂ったように殺されて狂うことを知っている。

「私」は知っている。

私が人を狂わせることを知っている。

人を私が狂わせて狂った人が私を殺すことを私は知っている。

「私」は知っている。

回るあのクソヤロウが狂っていることを知っている。

狂ったように回り続けて、すべてを狂わす狂気そのものだと知っている。そのクソヤロウは人間の狂気を食べて狂い、そして狂ったクソヤロウが人間を狂わせることを知っ

ている。

「私」は知っている。

誰かが誰かを狂わせて、その誰かがまた誰かを狂わせて、そうして狂気が回り続けていることを知っている。

クソヤロウはだからこそ回る。

終わりのない回遊。

だからこそ終わりを求めて。

「私」もクソヤロウも、回っている。

ぬくぬくとした、狂気の中で。

???????

……あ、ありのまま今起こったことを話すぜ！

この私、アウラ・イエーガーちゃんが目を覚ましたと思ったら、目の前に素っ裸のジ―

ク・イエーガーがいた。

な：何を言っているのかわからないと思いますが、私も何をされたのかわからなかった。元々どうにかなっている頭がさらにどうにかなりそうだった。

なぜかお兄さまに全力で抱きついていた私は我に返って、まずその上半身を凝視した。「お筋肉」が丸出した。もうこの時点で鼻血が出ていた。

そしてそのまま視線がゆつくり下に行き、臍のところはまだ向かい、あるはずのポトムスがないことに気づいた。丹田に浮き出ている血管がえつつ。

つまり、お兄さまのお兄さまが少し視線をずらせば見えるということ。

四年の共同生活でも、難攻不落の防御力を誇っていた、お兄さまがしかしついに拝む時がきたわけです。

驚異の子の、驚異の子♂をなア—— ツ!!

「ふひゃんっ」

が、物事とはそう上手くいくものではありません。というか私が限界でした。

興奮のあまり私は気絶した。気を失った時間は一瞬のことではしたが。

終始固まったままだったお兄さまは、反射的にこの愚妹の体を支えてくださった。

その接触だけで甘逝^イきしてしまう私はピンカン処女。兄様、私のバーズンをもらえ。気が戻った時視界に入ったのは、逆さまになった兵士の顔です。

背中を支えられた私はのけぞるようにして後ろを向き、その体勢で彼らの顔を見た。

蒼白する者や、口を開けたまま固まっている人間。総合すると怯えと、ドン引く視線がこちらに向いている。

公衆の面前で逝^イつてしまったことに羞恥と更なる興奮を覚えつつ、フラつく体を支えようと兄の肩をつかんだ。

「大丈夫か……？」と屈んで、こちらの顔を覗き込み、本気で心配するお兄さまはイケメンで。

私はまた、ブツ倒れそうになった。

その後顔を覆いながら、ガチ目に泣きつつ服を着てもらおうよう懇願して、お兄さまはようやく何一つ身に纏っていないことに気づかれた。そして私の顔が真っ赤な理由を察し、頬をかきながら小さく謝る。

しかし兵士らの面々が急きよ取りつくろった服は、ボトムスのみ。アウラちゃんはお

うお兄さまを直視できません。

く完く

「悪いが、約束どおり少し時間をもらおう」

ジークお兄さまは「フロック」と呼ばれる兵士にそう告げ、彼らから距離を置いた森に移動した。

妹の手を引っ張る兄は上裸。まともに前を見れない上、いつの間にか生えていた右足の感覚に慣れずつまずき、結局抱えられた。お姫さまだっこのです。これが天国か………

(享年、26歳)

???????

ジーク・イエーガーの前には今、美人な容貌を台無しにしたばかりの妹がいる。

人目を忍び移動したジークは妹を木に寄りかかるように座らせ、自身も屈み視線を合

わせる。

未だほんのりと赤い妹の顔が、逃げるように逸らされた。

側から見て明らかに異常だったアウラの様子は、兄の知るいつも通りの姿に戻っている。ジークを好きすぎるがあまり狂う、そんな妹。

聞きたいことはたくさんある。だが、時間はあまりない。すでに兵団はイエーガー兄弟を阻止すべく動いている。

まず彼はマーレ国で共に暮らしていた間、始祖ユミルの寵愛の件をなぜ黙っていたのか尋ねた。

すると予想通りというか、アウラは兄との関係性の悪化を懸念して、話さなかったことを明かした。

失踪したのも、接触してきたエレンがこの事をジークに知らせた後のことを考え、逃げたため。

タイバー家の擁護下にいたのは、始祖ユミルがモブおじさんたちから危険な目に遭う彼女を心配して、意図的に取り入れさせたから。またタイバー家ならその権力もあり、愛する子が動きやすいだろう、と。

さらにアニ・レオンハートを利用したことも、アウラは語った。

彼女については、マーレに来た時アウラ自身の身の安全を確保するために、用意した存在である。

エレンにアニの件も聞かされていたジークだが、どれも始祖の力をゴリ押しした案件ばかりで、頭の痛む思いがした。

というよりさらつと強姦に遭いかけていたことを知り、兄の情緒がさらに死んだ。

「…飛行船で撃たれた時のことは、覚えているか？ 発狂したことも」

「撃たれた？ 発狂？ ……あ、そうだ、撃たれてた」

今思い出したと言わんばかりに、アウラは服の上から腹を触る。それからシャツをめくり上げると、白い肌が見え、細い体が現れた。

そしてあるはずのキズが無いことを確認し、「おう…」と、何とも言えない声を上げた。

「お前な、俺の前だからつて平然と腹を出すな」

「全裸だったお兄ちゃんが言わないで」

「うっ」

ぐうの音も出ない。いや、そんな兄に鼻血を出した妹の方こそどうなのだ。

しかしジークが全裸になった経緯をかいつまんで話すと、途端に逸らされていた白銅

色の瞳が兄をとらえ、朱に染まっていた顔が青白くなる。

雷槍を爆発させた理由については、リヴアイから逃れるための賭けだった、と彼は話した。

本当のことを言えば、妹が発狂するかもしれない。

「あ、う、い、生き……生きてる?」

「生きてるだろ」

「じ、ジーク、ジーク・イエーガーは生きてる?」

「…生きてるよ」

アウラは兄の胸に手を回し、心臓の位置に耳を当てた。

ジークは異常なほど震える妹の背を宥めるように叩いて、落ち着かせる。その間白銅色の瞳はチカチカと不安定な灯りのように、その色を何度も変えた。

「死んじやダメ死んじやダメ死んじやダメ」

「……ごめんって」

「だめ、いやだいやだ、だめ、だめだめだめ……!!!」

「…苦しい、アウラ」

細い腕はあばらを折って内臓に食い込まずんとするほどに、男の腹に巻きつく。

鈍い痛みが積み重なっていき、うめいたジーク。止めようと動かした手で妹の横腹を

くすぐると、途端にすつとんきような声を出したアウラは地面に倒れた。

「は、はひい……♡」

ヤムチャしやがった体勢の女の、めくれたスカートから細い右足が覗く。

それを徐にジークがつかむと、一瞬大きく体が跳ねたのち妹は動かなくなつた。手羽先感覚でいいようにその足が動かされていると、黄泉の国から戻つてきたアウラの瞳が開く。

「お前、巨人のうなじから出てきたんだけど、覚えてるか？」

「は、ふっ……え？」

「正直に答えないと、後悔することになるぞ」

「え？え、え？」

「……………」

「あ、しよ、しよこはらめえ……！」

靴が脱がされ、晒された足の裏に無骨な手が伸びる。

髪を振り乱しこそばゆい尋問を受けつつ、妹は涙ながらに何も知らないことを語つた。

「本当に何も知らないのか？」

「し、しら、んんっ……ない!!」

「じゃあ何で俺がお前が出てきた巨人の中から出てきたんだよ」

「わ、わかん、な、い！」

「嘘ばかりで、お兄ちゃんお前のこと信用できないんだけど」

「ほ、本当にしらな、おっ、おか……っ、おかしくなっひやうう……♡♡」

本当にアウラは何も知らなさそうである。兄が手を離すと、荒い息を吐きながらよだれを垂らし、放心する妹ができあがった。

妹がへブン状態の中ジークは、やりすぎたか？と、心配の色を覗かす。

フロックが見れば、完全にヒゲ面の男、現行犯逮捕案件だった。

当の男は妹の脳内に「♡」が乱舞していることに気づいていない。そこで鈍感系ヒロインを發揮するのか(ボブ訝)

「……え？つていうことは、お兄さまが言ってた巨人が私だったの？」

「……本当に覚えてないんだな」

「産んだの？アウラちゃんが??処女懐胎？」

「しょ……俺蒸発した巨人から出てきた、って言ったよね」

「何で私が巨人になつてたの？」

「俺が聞きたい」

「ユミルちゃんが私を巨人にしたの??」

「だから、俺が知らないって」

「ま、待つてね。こういう時は巨人の数を数えればいいってゾエが言つてた。ソニーが一匹、ビーンが二匹、ハンジ・ゾエが三匹——」

「人間が混ざつてるけど」

「私が巨人化してお兄さまを体内に取り込んで、そこから蒸発してお兄さまが全裸？」

「落ち着け」

ケモノのように唸りながら、アウラは頭を抱える。

そしてふと、止んだ雨の後にできた水たまりに映る己の姿を見て、固まった。

その瞳は夜の世界を照らす小さな灯りを、かき集める大罪を犯して作られたような、不可思議な色。

目を瞬かせ己の瞳を見ていた女は、そのままゆつくりと、水たまりに顔を近づける。

「ん」

「何がいるんだ？」

「私たち」

「私たち？」

「私」になれない、終わったまま終われない私たち」

「……………は？」

水滴が地面に落ち、シミを作る。雨ではない。女の瞳からポロポロと、蛇口を少しずつ緩めていくように水が溢れているのだ。ただ、涙を流す女の口角は、わずかに上がっていた。

呼吸を忘れて妹を見ていたジークは、思い出したように息を吸い込む。

おかしい。その四文字で表せられる今の、アウラ・イエーガーの様子。

「瀕死の兄を私は食べて、ジーク・イエーガーは死の淵から蘇った。私の時と同じだ。私も食べられて、復活した」

その行いはユミルによるもの。ジークはそこで夢のような世界——と言っても、土の感触や視界に入る情報があまりにリアルだった——を思い出し、あ、と声を漏らす。

エレンの言うとおり、始祖ユミルと瓜二つだった妹。

寵愛の理由を裏付けるような発見が、今の今まで頭から抜けていた。

「ジーク・イエーガーはユミルを見た？ 『奴隷』のユミル。王の束縛から逃れられない、かわいそうな少女。王に愛されなかった女。彼女は「自由」の奴隷。自由になろうとして、さらに地獄を見続けている」

アウラはジークの知らぬ内容まで、ユミルから聞かされているらしい。

それはきつとどの文献にも残っていない、歴史の真実に他ならないのだろう。

男の中で『奴隷』の言葉が反響する。ふいに「自由」と聞いて思い浮かべたのは、エレンの姿だった。

「あれが『道』で正しいなら……お前にそっくりな女の子が、泣いていた気がする」
「泣いていた？」

「お前とケンカでもしたんじゃないのか？」
「会ってないよ。私はあの子に会ってない」

相変わらずアウラの視線は水たまりの中に固定されていて、お世辞にもキレイとは言えない水面が些細な衝撃で波紋を作り、それが全体に広がると女の顔も歪む。

ブヨブヨと、あるいはドロドロと、悍ましい形に変わる。

「ユミルがジーク・イエーガーを治したんだ」

「…ああ」

「私の願いだから聞いたのかな？それとも私が王家の人間だから逆らえないのかな？まあどれでもいい。だって治すしかないんだから。私にとつての一番はジーク・イエーガーなんだもん。ユミルじゃないんだもん。やっぱりあの子は奴隷だね」

くすくすと、息をこぼすように、女は笑う。

少女のような、無邪気さで。

そして瞳をかすかに伏せて、彼女は立ち上がった。

「お兄ちゃん戻ろうよ。みんなが首を長くして待つてるよ」

「待て、まだ本題を話し合えてない」

「本題？」

「計画の件だ。エレンに「地ならし」を利用した、人類の大多数を殺す選択を迫られていてる」

「何を迷うことがあるの？ジーク・イエーガーの本願は、トム・クサヴァーとの約束を果たすことですよっ！」

「そう……だが、……わからないんだ」

結論が出せないからこそ、ジークがが悩む根幹にある妹の生死の答えを見出すべく、アウラと話し合おうと思った。

妹はけれど、兄の出す答えに従うと言う。

どの道ジークより先に死ぬ気で、兄の寿命の延命が不可能な以上、あがいてもどうにもならない死。

「ギリギリまで悩むしかないよ。幸い、二人が接触して行き着くのは『道』。一瞬が悠久のあの場所ならいくらでも時間はある。それより早く行こう。兵士の一人も敵が迫っているって、言ってた」

「……俺は」

「大丈夫だよ、ジークお兄・イエーガーちゃん」

——私はずっと、いっしょにいるよ。

兄を引くように握られた、妹の手。

冷たい感触が伝わり、自分の手の脈の音を、ジークは感じた。

アウリンTV

ピスピース！

シガンシナ区の兵団本部に向かうことになった私は悪魔ちゃんな美女、アウラ・イエーガーちゃんだゾ〜！

ジーク・イエーガーのせいで、情緒のアップダウンが激しすぎる私。そんなに緩急をつけられたらおかしくなってしまう。

いえね、まあ、くすぐりプレイを受けた時は、本気で痴態を晒したんですけど。

明らかに絶頂している妹の様子を見ても平常心を保っているって、お兄さまの精神はどうなっているのでしょうか。

しかし、アウラちゃんが巨人になっていたのは驚きでした。ユミルが何か細工をしていたのかもしれない。

状況を確かめるべく戻った時に、“イエーガー派”なるエレンをヨインヨ信奉する組織から、私が巨人化した様子を見たのか尋ねた。

いや、その前に、ガビに撃たれてそのまま意識を失った私が、正気を取り戻した時に見たのがジーク・イエーガーの全裸って、一体全体どういことなんでしよう。

ユミルによるサービスタイトムということか？あ、り、がどうつ……（血涙）

きつとお兄さまの体を治したのも彼女だ。コレは今度会ったら、メイド服でも着てご奉仕しないとなりません。

肝心の目撃情報はというと、兵士たちが巨人化する私を見たらしい。

案内役としてハンジもいたようですが、お兄さまの爆発に巻き添えになったリヴァイを連れて、どんぶらこと川下へ流れていったそうです。ヒイズル国の童話で有名な『もも太郎』かな？

イエーガー派の中心人物は「フロック」という兵士のようです。飛行船の時に私に悪感を露骨に出していた男ですね。

私を見ると、苦虫でも噛み潰したような表情を浮かべる。まあ仕方ないね、私は裏切り者ですから。

本当ならここで「ねえ、今どんな気持ち？調査兵団を裏切った女がいてどんな気持ち？（Yyutニキ並感）」と、煽って差し上げたいところですが、私も鬼ではないのでね。また今度にしましょう。

ちなみに私についてはエレンの指示があったため、收容されていた場所から連れてきたらしいです。

そのことについては全く覚えていません。私のリアクションにフロックは、やはり、という顔をした。

目覚めた時も意識はあったものの、魂だけ抜け落ちたような状態だったらしい。

そしてその後、馬で移動中に私が巨人化した。

ユミルがお兄さまのピンチを察して巨人化させたのだと思う一方で、私の必要性があったのか？とも思っています。

「うーん……」

私が考えている最中だった。視線を感じて其方を向くと、フロックがこちらを見ている。ついで彼はお兄さまを見て、ゲロった。

フロックが明かしたのは、私にジーク・イエーガーの脊髄液を飲ませたことでした。

ふえええ……？（歓喜）

「どどどど……」とだ？」

お兄さまはフロックを睨んだ。

フロックは、自分が行った行動がエレンの指示ではなく、自身の独断であるものである、と語る。

さらに続けて、私を恨んでいることを本人を前にして語り、その兄もまた、憎んでいる——と告げた。

「俺の仲間はあるに殺された、ジーク。アイツらの犠牲は仕方なかったものかもしれないが、納得はいかない。それでも今の俺は、"イエーガー派"として、エルディアの未来のために動いている。それもまた、事実なんです」

「……………」

「お前もだ、アウラ・イエーガー。俺たちを裏切ったがゆえに、憎い。何より異常なんだ、お前は」

お兄さまが庇うように私の前に立った。今トキメキで膝がガクガクして、すぐにでも倒れそうなんですけど。

ただ、協力関係なのに争われても困るんですよね。

お兄さまはただでさえ、リヴァイ・アッカーマンに陵辱（語弊）されたばかりだといふのに。その結果服も無くなって全裸になっているんですよ？

身も心も疲れ切っているお兄さまに、これ以上の疲労は可哀想、というもの。

そもジーク・イエーガーを精神的にフルボッコにしているのは妹たる私だけです。

でも、他人が曇らせたお兄さまもステキなのでやはり許します。

ですがリヴァイの件は許しません。ユミルに頼んで、何が何でもさらにヤツの身長を10センチ縮めさせてやります。

話を戻して、ここは私が一肌脱ぎましょう。安心してください、シャツは脱ぎません。

「お兄しやまのせきずいえきい……」

と、メス堕ち待ったなしの発情を見せるアウラちゃん。

顔全体ウツトリとさせるイメージで口角を少し上げて、吐息を少し漏らすような感じで、人差し指を口元に押し当てます。

惚けきった私の様子に、数人の兵士が目を丸くして息を呑みました。美女の恍惚とした表情は堪らないでしょう。

例外は一樣にドン引きしている。それでもあなただち棒[♂]を持つている方々ですか？アウラちゃんの魅力に堕ちろ！特にお兄さま。

「……………」

「ひゃんっ！」

半目になったお兄さまが、アウラちゃんのようなじを徐につかんだ。不意打ちすぎて変な声を出してしまいました。が仕方ないね。

フロックの、まるでもう助からない重体の患者を見るような視線がこちらに突き刺さります。

人を変態扱いするのやめてもらっていいですか？（あうゆき）

ですがこれで険悪ムードだった雰囲気やうやむやになり、場を仲裁することができました。

「あ、そう言えば……………」

そして馬での移動になった時、不意に思い出した。結局なぜ私が連れてこられたのか、その理由がわかっていない。

アウラ・イエーガーを嫌悪しているフロックが連れてくる義理もないですし、何かしらエレンに頼まれたのか。それともジーク・イエーガーに頼まれたのか。

「お兄さま、お兄さま」

小声で兄の肩をつくと、こちらに視線を向け、お兄さまは眉を寄せつつも耳を近づ

けてくださる。しゆき（即オチ）

「…なんだよ」

若干嫌そうな顔の兄に耳打ちするように、なぜ私が連れてこられたのか尋ねた。

正直言うと、くすぐりプレイを受けてから記憶が飛び飛びになつて、よく覚えていません。

「は？」

不思議そうな顔をするならまだしも、兄は本気で私の言っていることがわからない様子。無意識の内に大きな声が出ていたお兄さまは周囲から集まった視線に気づいて、何でもない——と返す。

先ほどの今で、周りは私がまた頓狂な事を兄に言ったと思つたのか、馬の手綱を引く。唯一フロックの視線だけ外れぬ中、お兄さまは今度顔ごと近づける。

ちゆうーかと思つて瞳を閉じて背伸びをしたら、片手で頬をつかまれた。冷えきつた視線がご褒美です。

そう言えばこうして見ると、トム・クサヴァーのメガネが無くなっている。

爆発の衝撃で喪失してしまったのか。長い時間の直視は私がキャパオーバーしてし

まうため、程々で視線を逸らします。

「話しただろ、俺」

「話したって、何を？」

「だから、お前との話し合いでだ」

兄の下げた声のトーンに合わせて会話をすれども、一向に意味がわからない。

確かに話し合ったけれど、それはお兄さまが色々と私に聞いたことについてではない
ようで、その後、くすぐりプレイの後のことを尋ねている。

何か話しただろうか？くすぐられた後に息も絶え絶えで話して、そして水たまりを見
て————見て？

何か見た気がするけれど、私は何を見たのだろう。

自分の瞳を見たような気もする。もっと別の何かだったのかもしれない。自分で表
現しておいて、ひどく曖昧な表記になる。

なんだか雲でも見ている気分だ。思い出す度に、自分の体験した内容が形を変えてし
まう。結果自分が何を見たのか、上手く思い出せない。

「あれ？」

待て、私の瞳が奇妙な色に変わっていないか？死体の濁った瞳のような色ではなく、星のような色。例えるのが難しいですが、似た瞳を私は一度見たことがある。

それは、グリシャ・イエーガーがレイス家を強襲した時。

家族を守るように立っていた女性、フリーダ・レイス。

彼女が瞳に宿していたものと、酷似している。

四年前たしかケニー・アッカーマンが、瞳のことについては言及していた。私の瞳は、「王である証」だったと。

この場合の「王である証」とは、フリッツの血筋の話ではなく、始祖の力を持つことを意味する。

私もそれをわかっていたからこそそうっかりユミルの名を口にして、ケニーに詰め寄られることになった。

その時点でもっと、深く考えるべきだったのかもしれない。

私はずっと、ユミルから力を借りているのだと思っていた。けれど流石に巨人化するのをおかしいだろう。度を越えている。

もちろん巨人化した原因が、お兄さまの“叫び”がきっかけであるのだとは思いますが。

しかし“叫び”の効果範囲はアニに聞いていた範囲と、お兄さまが叫んだ場所を想定して、せいぜい巨大樹の森の中が限度のはず。その外になると、効果は期待できない。

ただし効果範囲を抜きにして、お兄さまの脊髄液を摂取している人間には何かしら影響があったかもしれない。

エルディア人が“道”でつながっている以上、あり得なくはない。仮に影響があるなら、その症状や効果はわかりません。

「私……が？」

ユミルから借りているのではなく、私が始祖そのものなのだとしたら？

あり得ないと思う。だって王家が始祖を継承した場合、その思想はカール・フリッツの“不戦の契り”に支配されるのだから。

でもユミルがわざわざお父さまに、フリーダを殺させたことにも違和感があった。それに、私が巨人に食われたことも。

すべてはお父さまの発狂を見るために用意されたものだと思っていた。

けれど、その悲劇が偶発的に起こったものなのだとしたら？ユミルの目的はグリシャの発狂ではなく、始祖の力に関するものだったとしたら？

レイス家強襲と、私が食われた出来事の前後は定かではない。

しかし私がお母さまに食われた時と巨人におどり食いされた時を比べて、後者の方がなぜか日数が経ってから目覚めた。よく考えてみればそこも違和感を覚える。

ユミルがもし私に始祖を宿らせたとして、その作業に時間がかかったのだとしたら、辻褃は合うのかもしれない。

アウラちゃんが部分的に始祖の力を使ったのも、もしかしたら「使えた」ではなく、「使えなかった」のかもしれない。

私が「不戦の契り」の影響を受けないように、ユミルが意図的に調整していたのだとしたら？

それがもしだ、もし正しいとして、私に宿らせた理由は何なのだろう。

手元に置いておくためか？それとも別の理由があるのだろうか。

「……………」

でも始祖が私なら、もしかして先程から私が部分的に記憶を覚えていないのは、「不戦の契り」が影響し始めたから——という可能性も考えられる。

腹の中が髪の毛でも詰まって消化不良を起こしているような——ゾワゾワとした、気持ちの悪い感覚がうずまき。

うずをまく？ま……………？

マワ、マ、

「アウラ？！」

怪訝な兄の顔が至近距離で見えて、視界に映る青色に息がたった。

一気に吸い込んだ空気を細々と出して、妙にチカチカと光る景色に自然と眉間にチカラが入る。

気づけば額には汗が滲んでいた。その気持ち悪さに手で拭うと、すべった滴が宙を舞って、鉛色の空を反射する。

「…覚えてないんだな？」

「う、ん…」

「……………そうか、わかった」

お兄さまはそれ以上、深くは聞いてこなかった。代わりに手を強く握ってくれる。そのまま引つ張るように歩いた姿がなんだか、古い古い、少女の姿と重なった気がした。

その在り方は逆だった。あの時は『×××××』が彼女の手を引いたのだから。手に伝わる感触だつて、まったく違う。彼女の手は×××と細くて骨の感触がする。それはでも、『×××』も似たり寄つたりな形だ。

でもお兄さまの手はゴツゴツしている。男と女の違い。大人と子供の違い。

それを全部ひつくるめて今の私が覚えたのは、無性な安心感。そこから込み上げてくるのは、自分でも形容しがたい感情である。

溢れてきた感情は眼球のある場所から滲み出てくる。自分の表情がバレないように下を向くと、またそこには水たまりがあつて。

私がいる。私がついて、私がついて、私がついて私がついて私がついて

私がいる。

私は知っている。

私これから、すべきことを。

“私たち”が教えてくれる。

×××× 私たちが教えてくれた。

×××× 『××』——「アウラ」の、存在の仕方を。

×××× 向かう先はシガンシナ区。

エレンがどうなっているか、会いたいね。

地雷系ビジヨ

場所はシガンシナ区。

イエーガー派とイエレナにより、全兵団がシガンシナ区へ招集されることになった。ピクス司令はジークの脊髓液とイエーガー派に回った兵士に銃を向けられ、逆らっても無駄であると判断し、一切の抵抗を禁じた。

兵士については腕に色違いの布を巻くことになった。区分は、イエーガー派が「白」、脊髓液を摂取した上で服従した者が「赤」、脊髓液を摂取した上でワインの事実を知ったばかりの者は「黒」——といった具合である。

一方連れて来られたアルミンやブラウス家、ニコロも監禁されることになり、地下牢から脱出し逃亡していた戦士候補生二人は、また地下に幽閉されることになった。

そしてアルミンたちの元へ、イエレナやオニヤンコポンが現れる。

その中にはハンジたちの居場所をイエーガー派に密告したニコロと同僚、「グリーンズ」という男もいた。グリーンズは膝を抱えて空腹に唸るサシヤを見るなり、鼻で笑い、ニコロを嘲笑った。

マーレ人のクセに、売女ばいたになんぞうつつを抜かされやがって——と。

険悪なムードが辺りに漂う。尚もガメツイ女のどこがいいのか、などと語る男に、二コ口の顔が少しずつ赤くなっていった。

そんな、震え、拳を握りしめ、今にも掴みかかろうとする男を止めたのはサシヤだった。

「二コロさん、その手は人を殴るためじゃなくて、美味しいものを作るためにあるんですよ」

サシヤは続けて牢の前に立っているイエレナに近づき、メシを催促する。一瞬、敵味方問わず「は？」という声が漏れた。

レストランでの騒動から移動、そして地下に捕らわれるまでの間、長い時間パアン女はメシにあり付けていない。

それは仲間も皆同じだが、彼女の場合は死活問題になっている。レストランでごちそうの匂いを嗅ぐだけで終わってしまったため、殊更にある。

檻をつかみよだれを垂らす女にイエレナは瞳を丸くし、わかりました、と返した。

むしろ今の状況にアルミンたちをしていることを、申し訳ありません——とも告げ

る。

「どうかジークとエレンが接触するまで、もう暫しお待ちください」

そう言い残し、踵を返すイエレナ。その後にはダリーズと、ジャンたちを複雑な表情で見つめていたオニヤンコポンも、少し遅れて続いた、その時。

叛逆の指揮を執る女の耳に、微かな声が聞こえた。

その内容は、前方にいた彼女にしか聞こえないほど小さなもの。

「まだ抱くんだったら、ビジンってうわさのアウラ・イエーガーのほ——」

男の、ダリーズの言葉が、最後まで続くことはなかった。

硝煙が辺りに漂い、狭い空間の中で反響した発砲音に子どもたちの悲鳴が上がった。

幼い少年少女はサシャの両親に抱きつき、ギユウと目を瞑る。

撃った犯人であるイエレナは、頭をぶちぬかれ倒れた男の死体を、無表情で見つめる。

そして突然の事態に驚く面々に詫びた。

まだサシャのことを貶すような発言を取ったため、私の堪忍袋の緒が切れました、と。

「このような状況ではありませんが、私はあなたたちと四年間共に過ごしてきました。

マーレ人であろうとエルディア人であろうと、そこに存在する溝が深いだけで、理解し合えることを知っています。また、分かち合う喜びも。それを侮辱するような発言を……どうしても許せませんでした。誠に申し訳ありません」

唇を歪め、そう語ったイエレナ。

本心からの言葉のように見えて、どこか違和感を一部の者は感じた。

薄っぺらいピエロのメイクのような。うっかりその化粧を落としたり、鳥肌が立つようなチグハグさである。

「……すみません。本当なら簡易的ではありますが、軽食でも召し上がってもらいながらお話しようと思ったのですが、私の方が気分を害してしまい……やはり今、お話させていただきます」

「……その話ってというのは、なんだい？」

「それは、ジ——」

「すらごとやろ!!? わしんご飯!!!」

（嘘でしょう!!? 私のご飯!!!）」

一名メシの供給が絶たれ絶望する女は、ニコロに回収される。

死体の方はオニャンコポンが険しい表情を浮かべながら、ズルズルと地上へ運んでいった。

気を取り直しイエレナは、ジークの本当の計画——「安楽死計画」について、語り始めるのだった。

また同時刻、戦士候補生が捕らえられている部屋にて。

ガビとファルコの前に現れたのは、エレン・イエーガーだった。

青年はレストランではじつくりと話す機会のなかつたガビを見やり、目を細めた。途端に少女は肩を跳ねさせる。

それは恐れ——から来るものではなく、罪悪感の延長線上による感情だ。

エレンの姉がアウラだということは知っている。

始祖を保有する人間Ⅱエレン・イエーガーであることは、これまで上層部のみが知るトップシークレットな情報であり、一介の戦士候補生であるガビが知り得る情報ではなかった。

しかしヴィリー・タイバーがその名を明かしたことで、全世界にエレン・イエーガーの名が知れ渡ることになる。

少女はアウラと接する上で、名前は知らなかったが、弟がいることは聞かされていた。可愛い弟で、ガビと似ているところがあり、そんな少女を構いたくなってしまうのだと。

やさしい微笑みを浮かべた少女の頭を撫でる度、幾度「私にも姉がいたらなあ」と、思い描いたことだろう。

ただ「イエーガー」だけでは、本当に兄弟であるかどうかはわからない。

しかし飛行船でアウラが別室へ移され、首謀者たる男の元——ジークのいる部屋へ案内された時、ガビはじめてエレン・イエーガーを見た。

二人が兄弟ということが周囲の言葉によつて知らされたのである。

兄、妹、弟、並べてみると三者三様で、全く似ていない容姿。

兄と弟の類似点は見受けられず、兄と妹も似ていることが見つからない。だが妹と弟には似ているところがあった。髪の色だ。

「……私に、何の用」

震えるガビを隠すように、ファルコが前に出る。ガビも気付かぬうちに縋るように、

少年の服を掴んでいた。

そんな二人にエレンは、協力を求めた。

そこには省略されているが、「(敵を炙り出すために)協力しろ」という意味が込められている。青年は二人を囿に使う気である。

エレンの意図を理解したファルコはどうするべきか、悩む。

二人が戦士候補生だとしても、巨人化能力者の前ではその鍛え上げられた力も役に立たない。

ただエレンの不可解な言葉の裏を読みとつて導いた可能性————マーレ軍が来ているのだとしたら、このまま助けが来るまで待つた方がいい。だが、エレンはそれを許さないだろう。

となると、どうにか相手の一瞬の隙を突き、逃げるしかない。

仲間の近くにまで来れば、助力をもらい逃げることも可能になるかもしれない。

失敗した時のリスクは高いが、しかしそれ以外に方法は無さそうだった。

「ガビ・ブラウン、ライナーの従妹」

「ツ！」

思考するファルコをよそに、エレンに声をかけられた少女はさらに少年の服を掴む力

を強める。

翡翠の瞳は、見ているだけでその奥へ誘うような、恐ろしさがあつた。

「協力すれば、アウラ・イエーガーに会わせてやる」

「……アウラ、さんに……」

「姉さんは謝られたら、お前のこと許しちまうだろうな」

「そんな、わけない。だって私が……」

「許すさ。お前に撃たれたことはきつと、アウラ・イエーガーにとって些細な問題でしかない」

「……え？」

「もしかしたら、気にも留めてないかもしれねえな」

「そんなはずない！撃つた人間を許せるわけがないじゃないッ!!」

「許す、絶対に」

——ガビ・ブラウンという存在は所詮、姉さんにとってそれだけの存在でしかない。

さながら人間の下でせつせと食料を運んでいる、アリのように。

目に留まることはあれど、そのちっぽけな存在がアウラの中で溜まる事はない。

「姉さんにとってはジーク・イエーガーがすべてで」

「ちが…」

だって、女はいつも、ガビだけでなく他の戦士候補生たちにも優しく接していた。

「お前のことを何とも思っちゃいない」

「違う！」

辛い訓練の中で励まし、応援の言葉をかけ、時には菓子を差し入れる女に、彼女たちは救われてきたのだ。だから。

「それが真実だ。俺のように」

「……え」

「愛」されていない。愛していても、愛されない。虚しいな」

レベリオ区を強襲し、多くの人間を殺した青年。

その青年の表情は歪むでもなく、ただ風いだ水面のように静けさをもつて、ガビを見つめている。

その感情はアウラを撃ち、悩み続けていた少女よりもよっぽど粘ついていて、底が見えない。

足を取られたらそのまま溺死してしまいそうな闇が垣間見え、ガビは釘付けになってしまった。ファルコもまた呼吸をするのも忘れて、眉間に冷や汗を垂らす。

「……？」

息をするのも憚れるような空気が場を支配した時、ふいにエレンは背後に人の気配を感じ、振り向く。

「ピークさん!!」

ファルコが声を上げる。

エレンの背後の扉から現れたのは、ピーク・フィンガーだった。

彼女はナイフで扉の側に控えていた兵士の首を突き刺し、銃の照準をエレンに合わせる。

突然のピークの登場にガビとファルコは安堵に包まれたが、まさかの事態が起きる。

優位に立っていたはずのピークはエレンに撃つよう煽られた上、始祖を殺してはピークに責任がいく『軍機違反』の内容を述べられ、逆に脅される形になった。

そしてエレン側に寝返ろうとする姿勢を見せた彼女に、ファルコたちは固まる。

父を救うために、マーレ人を殺したい——と、ピークは語った。

「何、言ってるの？ピークさ……」

「……………よく考えて、ガビ」

四年の歳月を経て集結した戦争。その戦いで巨人の力が通用しなくなっていることは、マーレだけでなく他国も知る「事実」となった。

兵器の発達はより進んでいく。さすればエルディア人の命が危うくなることは明白である。

巨人になれるバケモノ。人間ではない者たちを、黙って見ているはずがない。

力を失くしたように下を向いてしまった少女。ガビに視線を合わせていたピークと、フアルコの視線が一瞬絡む。

「……………」

その時、少年は何かピークに含むような意図があつたのを見逃さなかった。

何か——何かある。

ピークはエレンから協力する証明を求められ、仲間の居場所を伝えることを告げた。すでに仲間はピーク以外にも潜んでいる——と。

ずっとポケットに入れていた男の指先からは、血が一滴一滴、したたり落ちている。

やはり何の準備も無しに行動しないのは、エレンも同じ。

「指すわ、仲間の居る場所を。…そうね、でも、どこから指した方が……」

「…だったら、屋上とかなら、見やすいんじゃないんですか？」

ファルコはピークの言葉の後にそう続け、エレンは少年へ視線をやった後、同意した。

それから場所を移動し始めた彼らは、今いる建物の屋上へと向かい始める。

その道中。後ろから腕に白い腕章をつけた数名の兵士が続く中、階段を登っていたファルコは一瞬、その姿をとらえる。

まるでファンサするアイドルのように兵士たちへ手を振るピーク。その笑顔に少ない数の男たちがざわざわとしながら、頬を染めた。

彼女が手を上げた拍子に、つられて上がったガビの左手。少女は困惑の表情を浮かべる。対してガビの右手は、ファルコの左手と繋がっていた。

「……っ！」

少年はピークが笑顔で視線を向けた方角に、アニがいるのを発見した。

ものすごく嫌そうな顔で、「何やってんだアイツ」とでも言いたげな表情の女を。

しかしアニ・レオンハートは憲兵に一度入っていた手前、その素性を知る者はいらる。

そのためか、もっさりとした黒髪のウィッグを付けていた。目元を隠すため前髪は長く、メガネも付けており、兵士の中に上手く紛れ込んでいる。胸元が服の上から強調されていなかったため、そこもサラシを巻くなりしているのだろう。

前方を歩くピークの背中が、少年には大きく感じられた。頼りになる仲間である。

一方、まったく気づかず暗い表情を浮かべるガビの手を握り、少年は「大丈夫だ」と小さく声をかけた。

「何があっても、俺がお前を絶対守るから」

ガビは目頭が熱くなると同時に、妙な胸の高鳴りを覚えた。

そして辿り着いた屋上で、ピークが味方の位置を指し示す。その場所——正確には下から建物を破壊しつつ現れたのは、女型の巨人。

104期生に「安楽死計画」の全貌を話し、アルミンに感激の涙を受けた後屋上へ訪れていたイエレナたちも、突然の事態に動転する。

女型がかるうじてエレンの捕食に失敗したが、戦いの場はそろった。

吹き飛ばされた直後巨人化したエレンは、空から迫りくる物体に視線を向けた。

泳ぐ飛行船。そしてその中にいる男、ナイスガイ・ブラウン。
レベリオの雪辱を果たすべく今ここに、新たな火蓋が切られたのであった。

私になれなかった私を愛してくれる男を愛している私は私の名前を知っている。

シガンシナ区にて切られた火蓋。

戦士たちはレベリオで受けた雪辱を果たすため、エレン・イエーガーやパラディ島勢力と対峙した。

一方候補生二人も助けに来たコルトと再会を果たし、その上で候補生として残ることを決意する。

頑なな意志を示すガビとファルコに、なるべく安全な位置で待機するようマガトは命じた。

また、ファルコが飛行船で聞いたパラディ島の兵士の「始祖と王家の血を引く巨人がそろった：」という内容から、その「王家の血を継ぐ巨人」に該当する人物が、ジーク・イエーガーであることが考えられた。

さらに敵の情報とジークが現場に不在であることを調べていたピークは、現状「始祖の力」を使われる可能性は著しく低い——と見解を述べた。

王家の血の情報 が正しいなら、アウラ・イエーガーもまた王家の血を継ぐ人間という

ことになる。

それを踏まえ、マガトはヴィリー・タイバーの不可解な発言を思い出し、やはり何かしらこの二者に関わりがあつたのだろう、と思ひ至つた。

戦場では民家を破壊しながら、鎧&女型VS進撃の戦いが繰り広げられる。

通常なら単独でも十分すぎる力を発揮するアニが協力して戦うと、より強い。

エレンが戦鎚の能力を使い、地面から杭状の物体を無数に生やして女型の動きを止めれども、できた隙を許さないとばかりに鎧の装甲を活かしたライナーのタックルが炸裂する。

ミカサたちがいればもう少し戦況は変わったかもしれないが、104期生の面々は現在拘束されている。

敵はしかも対巨人用の砲弾を用いて狙撃してくる、遠距離担当の車力の巨人も存在する。さらに飛行船から舞い降りたマーレ兵もだ。

イエーガー派が雷槍を使いエレンの助力やマーレ兵の掃討に躍起になるが、戦況はエレン側が押されている。

仮に進撃が戦鎚の力を奪っていなければ、早々にエレンは女型なり鎧なりに食われて、その力を奪われていただろう。

そして、マーレ軍の中で普段以上に殺意が高いのが、女型と車力である。

女子力(?)が発揮される中、その間にヌルつと交ざっているライナーに、格好のチャンスが訪れる。

車力に搭載された武器を操縦するマガト。その弾が進撃の巨人の頭に被弾し、脳に著しい損傷を負ったことで、エレンの動きが停止した。

その隙を狙い、後方から顔面の右半分に大きな損傷を負った鎧の巨人が、進撃のうなじをねらう。

ここまでか———と思われたその時、鎧の頭にぶち当たった、投石。

それを投げた主は壁の上に立ち、街の至る所で立ち込めるケムリに目を細めながら、弟へと視線を向けた。

???????

放置プレイだ。

失礼、自己紹介が遅れました。私はアウヌンテイウスと申す。

私は友人が邪智暴虐の王にカチコミをかけてあつけなく捕まり、奴が処刑される代わりに王に差し出されてしまった悲劇の人間である。

奴は妹の結婚式に赴くとかで、必ず3日以内に帰ってくると言っていたが、到底私は信じられぬ。人間不信だからだ。

まるでそう、王のように。むしろ王の方に共感ができてしまうくらいには人を信頼できぬ。

そんな私は周囲の人間の「友人の代わりに身を差し出すなど、なんてイヤツなんだ」という、すでに私が奴の代わりに捕らえられることが前提のような視線に、「ノー」とも言えず、捕らえられることになってしまった。空気の読めない人間は社会で淘汰されてしまうのだ。私が人間不信になる理由の一つである。

きつとこれも私が断れないようにする、奴の策略だったに違いない。「絶対に帰って来る」の宣っていた奴が信じられぬ。

そんな、夜な夜な奴の暴言を吐く私の言葉に王はシンパシーを感じ、以来私たちは意

気投合した。

そして最終的に奴は、ギリギリ間に合わず帰ってきた。

きつと民衆の前で処刑された私の死体を見ながら嘆き、悲劇の主人公ヅラを浮かべ、民衆に哀れみを向けられるよう役者を演じたに違いない。

まあよいのだ。結果として私は死なず、それどころか生涯の友を得たのだから。

王と共にいる私を見て、奴は絶望したような顔を浮かべ、この話は幕を閉じ——
——え？アウヌンティウスじゃないだろうお前、つて？

そうです。アウヌンティウスではない私の本当の名前は、アウラ・イエーガーちゃんです。

だっふんだ！

話を戻しましょう。

放置プレイを受けているのは本当です。久々の騎乗に調査兵団に入っていた当時を思い出していたら、シガンシナ区が視界に入った時に異変が起きました。

上空に見えた数隻の飛行船。それがマーレの物であるとわかり、馬を急がすことに。

そして受けた、放置プレイです。

イエーガー派が立体機動で壁面上に向かい、ジーク・イエーガーも巨人化して登っていった。

危険なため、絶対に私は来ないよう念を押して。

俺も行くぜえ！と意気揚々と向かいたところですが、今の私には生えた右足があるものの、立体機動装置がありません。

側にいるのは置いて行かれた馬のみ。内門も閉じているので入れません。詰みかな？

アウラちゃんは未だに「最高の最期」を諦めていません。

自分が始祖の力を持っているかもしれないという可能性に至った以上、殊更にこの力をエレンに渡さなければならぬ。

ユミルも流石にできることと、できないことがある。

今まで彼女は、エレンに始祖があるように見せかけるため手回しをしていましたが、「地ならし」を行うとなると、難しくなるでしょう。

というより地ならしが始まってしまったら、エレンに殺されてお兄さまに看取られて

——の機会がいつ訪れるかわからなくなる。

ガビ・ブラウンに撃たれて、そのままお兄さまの膝の上で終わってもよかったんですけどね。

やはりユミルも「本願をなさずに終わっていいのか、アウラツ——!!」という心境だったのでしょうか。

ユミルに背を押されて、また目覚めてしまったのですから、自分の最高のエンドに向けて私も突き進まなければなりません。

肝心のユミルの方は史上最高に疲れているのかもしれない。

普段なら私が撃たれた後に彼女の世界に招いて、お兄さまの反応をじっくり堪能させてくれそうなものを、ずっと会っていない。

それに加えて彼女が制御していたはずの始祖の力が緩んで、「不戦の契り」の影響を受ける結果、私の意識が飛び飛びになる状態が続いている。

「……そうか、自傷すればワンチャン行けるかも」

受験料が精神疲労のハンジ講座で、巨人になるために必要なことは知っています。

自傷の他に巨人化するには、「目的」が必要。その内容は大きくとも小さくともよい

のです。極端に言うところ「アイツを殺してやりたい」でも「棒を握る」でも巨人化する。

問題は自傷の範囲についてです。

エレンは手を噛みちぎるといふ正気を疑う方法を使いがちだったのに対し、戦士たちは戦争の中で巨人化する時、ナイフなどを使うことが多いそうです。

特にアニは最小限のキズ、指を少し切った程度で巨人化できるといいます。

その関連について、自傷行為には文字どおり自分を傷つける行為として、その人間に相応の覚悟が必要となるのだと思います。

それは直結して、「目的」をなす上での意思に比例するのでしょうか。

例えば明確な意思をもって人を殺す時、殺す側には相当な精神的ストレスがかかる。

その目的を果たす上で行う自傷行為が些細な痛みでは、その目的に対して釣り合わないものであると、本能的に感じてしまうのかもしれない。

そう考えていくと、巨人化することに不可欠なのは目的を果たす「覚悟」に、痛みを享受する「覚悟」。

そしてその二つの「覚悟」が釣り合ってこそ、巨人化が行えるのかもしれないね。

所詮、私の憶測に過ぎませんが。それこそ、巨人に詳しいハンジと意見を交わして
ないことにはどうにも——あれ？私今、自分で地獄を見に行こうとしていた
……？（洗脳・調教済み）

ただ、人によつて感情のコントロールや覚悟の決め方など異なるわけであり、その点
を考えるとアニは相当その類が上手いのでしょう。

また巨人化は「慣れ」もあるはずです。

手を噛みまくっていたエレンも今は過剰に自傷せずとも、巨人化できるようになつて
いるかもしれない。

ともかく、どの道私が巨人化できたとして、必要なのは自傷と目的。

痛いのは嫌ですね。散々足を折るなりしてきた奴が何を言っているんだ、と思われる
かもしれません。

目的は「最高の最期を送りたい」で十分な気がします。

しかし、本当に巨人化できるのでしようか。

お兄さまの脊髄液を摂取したのは本当のようですし、始祖を有していない可能性も捨
てきれない。

そもそもお兄さまが叫んだから巨人化できただけかもしれないし、巨人化した時の

記憶は一切ない。

エレンもトロスト区ではじめて巨人化した時は、記憶がなかったと言いますし。単純にその例に私が当てはまるのか、それとも無知性巨人になっただけなのか。

それにお兄さまを私に食わせたのは、兄を助けるための私自身の意思だったのか、ユミルの計らいだったのか。

まあどちらせよ、彼女がフォローしてくれることを願い、やるしかありません。

考えている最中にも中からはこんこんと黒いケムリが立ち込め、轟音がひっきりなしに響き渡る。

壁の上に立っているお兄さまはつかんだ壁を破壊して、その破片を次々と投げては頭上の飛行船に命中させるに留まらず、壁内目がけて投擲する。ぜひ私にもぶち当てて、肉片にしてください。

頬を蒸気させてウツトリと魅入っていたら、獣おの巨人さまの体勢が大きく崩れた。小さくて詳しくは見えませんが、右の鎖骨より上部に砲弾が当たったらしい。

お兄さまが落ちて行く、下に。見えなくなる。

まるでブラウス家で狩猟に付き合った時に見た、鳥が撃ち落とされる様と似ていた。

「…ああ」

気づけば私の口内に広がっていた鉄臭い味。それと、肉。親指に食らいついていたよ
うで、骨が見えていた。そのまま咀嚼して飲み込んでみると、美味しいのかまずいのか、痛
みにまぎれてよくわからない。

ただ、己の肉体が発光したのはわかった。

「私」はお兄さまのためだけに存在して。

あなたの涙が、愛おしい^私
ユミルになれなかった『X^私』を愛してくれるジーク・イエーガーを愛しているアウラは
私の名前を知っている。X X

アウズンブラ。

だから「アウラ」。

私は雌牛の奴隷。

???????

イエーガー派、そしてオニヤンコポンの救援を求める声と、イエレナから「安楽死計画」の全貌を聞いたアルミン。

彼は、エレンの行動の裏にあるのがエルディア人の犠牲ではなく、ジークを利用して仲間を守るために「地ならし」を行おうとしていると察し、発言した。

それによって、エレン側に力を貸すことを決めた104期生のメンバーの加勢を受け、今度はマーレ側は押され始めた。

しかしイエーガー派の猛攻を受けやられた——と見せかけていたピークとマガトにより、ジークに不意打ちを食らわすなど、一進一退の状況が続く。

また過剰な戦鎚の力の行使によってガス欠になっていたエレンは、女型と鎧に大きなキズを与えているものの、戦闘不能に追い込む明確な一手を決めることができずにいる。

どうにか隙をつき地面に落ちた獣の巨人の元へ近づきたいが、そう簡単にライナーた

ちが許すはずもなかった。

時間が経つにつれて、鎧&女型V S 進撃の構図は前者に軍配が傾いていく。

だがその女型の視線がふいに、頭上へと向く。

アニの向いている場所はエレンの後方。そこはジークが倒れている場所の上——
——ちようど内門がある壁上の場所。

そこに大きな手が二つ肘から先がのぞいており、壁を掴んでいる。

そしてその二つの手がある中央の位置に、首がある。

人骨の頭のようなのであるが、肩につかないほどの金髪を壁の上にばら撒いて、小首をか
しげるように、「ソレ」はいた。

不気味なその巨人は一直線にエレンを見つめている。途中笑うように何度もカタカタと、上下の歯が付いたり離れたり——を繰り返した。

異質な巨人の様子を目に留めた者たちの一部に浮かんでくるのは、なぜウオール・マ
リア内に巨人がいるのか、という疑問である。

すでに三年前にパラディ島の巨人は掃討された。

巨人はそのまま壁の上を這い上がると、ケモノのようにジャンプし、地面に落ちた。

突如現れた巨人に、敵味方関係なくチラホラと気づき始める者が現れる。

ソイツは地面を這って、ゆっくりとエレンに近づく。

対し、我に返ったライナーが攻撃の手を加えようとするが、アニの方は動かなくなつた。彼女の体は微かに震えている。

歯を鳴らして笑つた巨人の笑みにアニは、一人の女を想起せざるを得なかつた。ゆえに、動けない。動かないのではなく。

異常を察知したイエーガー派が投げた雷槍。それがその巨人のうなじに当たりかけた。しかしソイツは関節を無視して首を180度動かすと、口を開け噛み砕いた拍子に爆発する。目元のくぼみや顎が完全に破壊されたが、蒸気を振りまきながらソイツはまた進み出す。

そしてナイスガイがエレンに馬乗りになされ、顔面を何度も殴打され動かなくなつた頃、その巨人はエレンの元にたどり着いた。

正体のわからぬその巨人にエレンが手を伸ばした時、ソイツもまた手を伸ばし——
——人差し指同士が、触れあつた。

「ざあ——♡♡♡」

エレン・イエーガーは見る。

人は死の間際、今生の出来事が一瞬のうちに蘇るといいうが、それと似た状況なのだろう。

ただし自分が死んだという自覚はなく、意識のみがどこか遠くへと引きずり込まれるような感覚だ。

それは、稚児が少年の涙を認識するところから始まる。

エレンはその少年を見たことがあった。父が残した手記に挟んであった写真の子どもとそっくりである。即ちその人物は、腹違いの兄、ジーク・イエーガーその人。

今でこそヒゲヅラのおっさんな外見だが、幼少期はふくふくとした頬が特徴的な、愛嬌のある子どもだったらしい。

ついで場面は、少年が妹の発言に激情あまって叩いてしまったところに変わる。

両親は娘へ駆け寄る。一方で息子の元にその手が伸びることはなく、少年は両親が見

ていないほんの一瞬、表情を死にそうなものに変え、外に飛び出して行った。

その後、母に寝かしつけられた少女の寝室。

窓から差し込む月夜が当たるベッド。そこから、吐息を零すような声が聞こえる。

ふ、ふふ、と笑い声らしいものは断続的に続き、それに合わせるようにしてベッドの膨らみも蠢いた。

窓のそばで月明かりを一心不乱に浴びていた男は、ジツトリとした汗が額から頬に流れていくのを感じながら、一步、近づく。

膨らみの場所は境界線ができていて、それを踏み越えれば、暗い世界が覗き見える。ハツと、男の口から漏れた短い息。まるで酸欠の魚のようだ。

闇の世界に溶け込むようにして存在するのは、エレンと似た色の焦茶に近い髪。背を向けて丸まっている少女の顔を覗き込むと、首元から上の顔が見える。

少女は口元を押さえて泣いていた。それだけ切り取れば、兄に叩かれたシヨックで泣いているのだろう——と思える。

しかしまるで堪えきれないというように、少女は泣きながら笑う。

心から嬉しそうに口角を三日月にして、本気で泣いている。

両立し得ないはずの感情が、同時に幼い体の中に存在していた。

なぜ嬉しそうなのか、エレンにはわからなかった。

ただ、その笑顔の意味が悍ましいものであると、本能的に察した。

そして場面は変わり、両親を指差す少年と、連れられて行く両親の姿になる。

官憲の人間に抱かれて現れた少女は、兄の止める声を無視して両親の元へ駆けて行つた。

その後を追おうとした少年はメガネの男に止められ、家族が乗せられた車を呆然と見つめる。

一方で少女の視点を客観的に眺め続けている男は、娘を抱きしめている父と前妻を、向かい合う反対側の座席に座って眺めた。

彼の隣にいる銃を持った官憲は、いくらエルディア人でマーレに反逆を企てた人間だとしても、少女まで犠牲になった光景が見ていられないのだろう、険しい表情を浮かべ、彼らから視線を逸らしている。

その時、エレンは見た。

両親から抱きしめられている中、顔を覆って泣いている少女のスキマから、覗いた紅い口元を。

うつすらと上がった口角。不気味な声こそ漏らしていないが、その笑みは男が先ほど見たものと同じだった。

エレンはその笑顔の意味を、理解してしまふ。

まだ3歳という年齢とは思えない言動を取る少女。

他人の目を欺くのが上手いところは、昔も今も変わらないらしい。

そんな少女が「愛」しているはずの兄に対し見せる、常軌を逸した狂気の笑み。

愛しているのならば、傷つけることはしないだろう。しかし少年は妹の意図的な言動によつて、怒り、泣き、苦しめられた。

四年間姉によつて苦しみ続けた男は、ああ、と声を漏らす。ついでギシリと、歯が軋む。

『それが本当の、アウラ・イエーガーか』

さらに場面は変わり、少女とその父が壁内へ移り住んだところまで進む。

慎ましい幸せを送る二人の家族。そこに兆す、一人の女性の存在。

九年前に巨人に喰われて死んだエレンの母、カルラ。

まだ口元に小ジワもなく、若々しい。居酒屋の場面でウエイトレスを務める彼女のそばに立っていたエレンは、カルラとの身長差に目を見張った。当時は胸元あたりに自分の顔がきていたというのに、ツムジが見える。

カルラはエレンをすり抜けると、少女と、こちらもまた驚くほど若いハンネスに食事を運ぶ。

他愛ないやり取りをしつつ、途中で父親の酒の失態を耳にした少女は、やけに真剣に聞いていた。

その後、娘は失態話を父親本人にし、強く抱きしめられる。

笑った姿は普通の嬉しそうな表情に見えたが、何度もその異質な笑顔を見たエレンは、にじみ出る狂気に眉を寄せた。

それからカルラに懐いていた少女は、一度流行病にかかり死のフチをさまよう。助かった後は流行病の一件で親密になった父とカルラが結婚し、彼らは三人家族になった。

少女のまるで、両親を意図的に意識させるような場面を見た男は、父親からカルラと付き合う話を持ち出され、「ありがとう」と言葉をかける姉を凝視する。

やはり、その笑みは狂っていた。

普通のように、まったく普通には見えない。

もしかしたらもう、エレンは姉が本当に心から笑ったとしても、狂気に染まった笑みにしか見えないかもしれない。

キースの件も悟った男はそして、顔のパーツを中心にぎゅつ、と縮める赤子の自分を抱く少女を見る。

食べたいほどかわいい——そんなことを、少女は言う。

鳥肌が立つと同時に、男の中で焚べられた大量の薪が着火した。

少女の人生の中心には兄と、そして人の苦しみが存在する。

兄が最低最悪のその行為の、最大の被害者で、父親もまた、被害者。

その他も見えていないだけで、数多くいるのだろう。

父親を苦しめる過程で生まれたのがエレン自分なら、彼はもう己の人生であるとか、幸福であるとか、すべてが激しい憎悪に吞まれてしまいうさ——否、もうすでに火は

ついでに。

もし壁が壊されたあの日弟を、そしてミカサやグリシヤを苦しめるために、女がカルラを見殺しにしたのだとしたら。

思い出すのは三人で母を救おうと、ガレキを持ち上げていた瞬間。

本当は持ち上げられたのではないのか？

もしそうなら、エレンは。

エレンは——！！

それでも彼には仲間という繋がりがあからこそ、道を踏み外すわけにはいかない。
ミカサやアルミンと決別し別の道を歩んでいるが、その道から逸れるわけにはいかな
い。

エレンはでも、ダメかもしれない。

グリシヤがレイス家を殺す。ロッド以外を皆殺しにする。それはしかし、フリーダも例外ではなかった。

ロッドが逃げた後に始祖の巨人の首がもがれ、うなじから飛び出ていた彼女の意識が戻った時、つかまれた細い体は簡単に折れて、大量の血を口や体から溢れさせて絶命した。

死んだ。グリシヤは始祖の力を手に入れていなかった。

その指示を出したのはユミルである。

父から《進撃の巨人》を継承したエレンはその時の父の記憶と混線し、脳内にユミルが出した指示を聞いた。

グリシヤはその前に、娘の死に際を見せられていた。

巨人に食われていく娘。エレンたちと別れた後、死んだ姉。

それを見せられた時にはすでに、父親の心は壊れてしまっていた。

場面が移る。エレンの中で自身の記憶と、グリシヤの記憶が混濁する。

レイス家と接触した時には見なかった内容。あるいはこの記憶は、意図的に始祖ユミルによって押さええられていたのかもしれない。いや、きっとそうなのだろう。

心が壊れ切った父の姿は見るに堪えず、そんなグリシヤを見て狂ったように笑う姉。

そこは一面に砂が広がり、光の柱が聳え立つ世界。

不思議なその場所で一糸まとわぬ女は、ユミルのそばで狂ったように笑って、狂っていた。

幸せそうだった。同時に泣いていた。

エレンはずっとその本質を理解してから、狂っている姉を理解することができなかつた。

グリシヤを苦しめながら「大好き」と言う姿が。

自身が体験した女の「大好き」から来る、苦しみの味が。

そしてそんな女に「愛」されてしまった、兄の人生が。

硫酸でも無理やり飲まされてしまったかのように、ただただ気持ち悪さだけが、エレンの内に渦巻く。

同時に混濁する激情の中で肥大していった火が、臨界点を迎えた。

四年前までは守りたいと思っていた姉。

それ以降は複雑な感情を抱きながら、苦しみ。

そして今は、殺そうと思う。

殺す以外に方法がない。

それ以外の選択はすべて燃え尽きてしまった。

なぜ始祖ユミルがグリシヤにフリーダを殺させたのか。

なぜエレンがその力を継承していないにも関わらず、使えたのか。その力は今どこにあるのか。

さまざまな疑問がよぎり、そして自分と接触したガイコツの巨人の存在に至り、その巨人が姉なのだとエレンは気づいた。

父親が見た娘の最期。その後起こったフリーダの殺害。

点と点で繋がっていくとは、まさにこの事で。彼は始祖を今誰が有しているのか、たどり着く。

ずっと隠していたのか。有しているならなぜ王家の人間であるはずの女が、不戦の契り”に縛られていないのか。

尽きぬ疑問。しかしそれも始祖の寵愛を前にすれば、薄れてしまう。

わざと接触して彼女自身の記憶を見せたのも、エレンに殺させて、苦しませるためなのかもしれない。

でなければずっと他人に隠し続けた女の本質を、悟らせるようなマネをするわけがない。

彼が姉を殺せばどんなにクソ野郎と思っても、苦しんでしまうだろう。女を殺した弟を見たら、兄はもつと苦しむに違いない。その他の人間も苦しむに違いない。

でも、そのすべてを放棄しなければならぬ。なぜなら、殺さなければならぬのだから。

エレンは女を——
アウラ・イエーガー 本当の悪魔をこの世から、駆逐しなければならない。

現実に戻った瞬間、進撃の咆哮が、シガンシナ区に轟いた。

???????

シガンシナ区に何重にも反響するようにして響いた、進撃の叫び。

マーレ兵やイエーガー派、義勇兵などその声を耳にした者たちの視線が向く中で、エレン・イエーガーは突如現れた巨人の顔を殴り、足を潰し、腕をもぎ取り、腹を裂く。その拍子に漏れ出た肉片や内臓が、周辺の建物や地面に飛び散った。

固まったままのアニや回復中のライナーが見つめるしかない中、最後に首をもぎ取り口を開けた進撃は、そのうなじへと、食らいつく。

そしてエレンが叫んだ声を聞き、意識を取り戻していたジーク。

彼は心の整理がつかぬ中、それでも弟を救おうと戦いに参戦した。

投石攻撃でマーレ勢力を追い込んでいたものの、マガトの狙撃を浴びることになり、本体が背中と右腕を大きく損傷する重傷を負った。通常の間人なら即死である。

ジークが体を起き上がらせた時見たのは、エレンが巨人の首をもぎ取る姿。

ボロボロになったその巨人はもはや見る影もない。しかし弟が投げ捨てた巨人の特徴的な頭部のガイコツを目の当たりにして、ジークの思考が止まった。

『「や、めっ」』

重なった本体と、獣の巨人の声。

伸ばした長い手はしかし、届かない。

うなじを噛みちぎった進撃の喉元が、上下する。

視界が歪んでいく光景に、ジークはそれ以上、言葉を紡ぐことができなかつた。

空前絶後のオ、超絶怒涛のヒゲ面ヒロインン

建物から上がるケムリが。風に吹かれて踊る木の葉が。地面に倒れ行く兵士が。そこから噴き出た赤い血潮が。

ゆつくりと、緩慢に移ろう。

体を修復した鎧の巨人がエレンにつかみかかる一方で、その近くにいた女型の巨人は呆然と立ち尽くす。

マーレ兵は建物から敵の頭部に照準を当て、イエーガー派や104期生は雷槍を用いて迎撃し、義勇兵の一人の女はこの戦場で指揮者となり、悪魔の行進曲を奏でる。

エレンに想いを寄せる一人の女は、複雑な思いを抱えながら戦って。

ナイスガイは何度も死にたいと願った先で、仲間のために戦い。

マーレの総帥と車力の女は敵の攻撃に遭いながら、私兵となる巨人を量産しうる獣の巨人を狙い。

戦士候補生の少年少女は、獣の巨人の「叫び」の脅威を止めるべく、一芝居打つことを決め。

そして弟を守りたいがため、二人に付きしたがう青年。

さまざまな思惑が交差し、この戦いが紡がれる。

かつて巨人の脅威を受けたシガンシナ区に、今度は人間の脅威が刻み込まれていた。

そんな中でジーク・イエーガーは、砲弾でえぐり取られた背中とは別にポツカリと腹に穴を空けられた気がしていた。

鳴り響く轟音が、異様に遠くに聞こえる。

眼前で起こった光景。弟が、巨人化した妹を食った。食い殺した。

なぜジークが「叫び」を使っていないものにも関わらず、アウラは再び巨人化したのか。

ジークの脊髄液とは関係なく、始祖ユミルが巨人化させたのか。

巨人となった妹は一度、うなじから出てきた。巨人化能力者ではないというのに。それもまた、ユミルの寵愛の賜物なのだろうか。

しかししてもし始祖ユミルの仕業なら、アウラを巨人にさせた理由がつかない。

普段の様子と比べて、水たまりを見た直後の妹は明らかにおかしかった。

アウラが言っていたことをまとめると、「私の願いを聞いた」「始祖ユミルは王家の間であるアウラ・イエーガーに逆らえない」「私の一番はユミルではなく、ジーク・イエーガー」「ユミルは奴隷」と、大まかに分けられる。

願いについては、ジークを治すことだろう。

ユミルが寵愛するアウラが、ジークが死ぬことをヨシとしないために、妹の意思を汲み取って治した。

ただし、夢現な中でユミルに拒絶の意思が見て取れたことから、ユミル自体はジークのことを嫌っているのだろう。まるで人間のようなのである。

愛しているはずのアウラ子が自分ではなくジークを愛しているがゆえに、嫉妬に近い感情を抱いている。

ここから来る疑問こそが、巨人になる必要性が妹にあったのか、というもの。真相はアウラも知らなさそうであったゆえ、始祖ユミルのみぞ知る——のだろうか。

次に、始祖ユミルが王家の人間に逆らえない点について。

これは恐らく「ユミルⅡ奴隷」という話にも関わる。

ユミルが逆らえない存在が王家の人間であり、彼女は元々奴隷だった。

この事実が本当であれば推測できるのは、ユミル・フリッツが初代フリッツ王の奴隷であった——という可能性。

これが本当であれば、歴史が大きくひっくり返る。

かつて世界を巨人の力によって恐怖で縛りつけたエルディア人が、奴隷の子孫。

始祖が「道」に居続けるのも子孫のためなのか、はたまた王のためなのか。

いや、アウラが「奴隷」を多用していたことから、ユミルを縛り付けているのは文字どおり「奴隷」の在り方なのかもしれない。

また王家の人間に逆らえないならば、ジークにも逆らえないということである。

逆らえない。このワードを切り取った際ジークの中で浮かんだのは、彼の命令に従う巨人だった。

通常なら命令に従うはずのない無知性巨人。それが自分の命令は聞く。さながらジークの脊髄液を摂取して巨人化した人間が、奴隷のようではないだろうか。

ゆえにジークは、この二つに関連性を見出す。

ユミルが王家の人間に逆らえないという構図が、自分の巨人にも適応されているのではないか——と。

元よりジーク・イエーガーの「驚異」たる部分は、「叫び」を使い彼自身の脊髓液を摂取した人間を巨人化させることと、その巨人を意のままに操れることにある。無論、投石攻撃による圧倒的な「矛」としての攻撃性もあるが。

脊髓液で言ってしまうえば、例えば他の知性巨人から作られた巨人化薬でもエルディア人は巨人化する。

ジークの特異な点は脊髓液を摂取した段階では巨人にならず、彼の意図的なタイミンで巨人化させられる——という点だ。

以上を踏まえ、過去の疑問に焦点を当てよう。

アウラがジークの巨人に右足を食われた時、ユミルが間に入らなかったのは、助けなかった——のではなく、助けられなかったのではないだろうか。

王家の人間の命令で動く巨人だからこそ、ユミルは逆らうことができなかった。そう考えていくと、かつての罪悪感でジークの精神に追い討ちがかかる。

残ったのは、アウラの一番がジーク・イエーガーという話だが、これについては言うべくもない。

妹のど直球デッドボールをエブリデイ受けていた兄だ。最初こそデッドボールの痛みに死にかけていたが、回数を重ねれば流石に慣れる。軽い刺激を与えてやる方が妹が黙ることも兄は学んだ。(それはしかし、ただの賢者タイムである)

つらつらと思考を重ねた中で、現実が変わらない。

迫り上がる胃酸。巨大樹生活での食事はジークだけ……というわけではなく、兵士も含めてみな質素だった。

吐くものも別段胃の中にはなし。だが、強烈な気持ち悪さは消えない。

外界の音が今度は耳の鼓膜をブチ破らんとするほど、鋭敏に突き刺さる。

細長い棒が耳に侵入し、そのまま脳みそをブチユブチユと貫いて、反対側の耳から抜け出しているような気分だ。

なぜエレンはアウラを食ったのだろう。

ジークは、わからない。

愛する弟が愛する妹を殺した。

わからない。

自分の進むべき道がわからない。

うつ伏せになつたまま上体だけ起こすようにして、なぜ己が今この場所にいるのかわからない。

ジーク・イエーガーはなぜ生きているのだろう。

彼はクサヴァーアとの使命を果たすため生きているはずなのに、どうして迷い続けているのか。恩人の——、父——のために、世界を救うことが彼自身が課した使命であるというのに。

わからない。なぜ死んでいないのか、わからない。

呼吸を止めれば、苦しさに負けて酸素を取り入れてしまう。子どもの頃はそうして息を止めて、その息苦しさに涙が出て、また呼吸をしなければならなかった。呼吸をしたくないのにも関わらず、体は勝手に「生」に向けて舵を切る。本人の意思など、知らないと言わんばかりに。

わからなかった。ジークは自分が存在している理由を見出したにも関わらず、自分が存在する理由の根底が揺らぎ、もうどうすればいいのかわからない。

話し合えばいいのだろうか。道で接触したエレンと？

愛する妹を殺した、愛する弟と？

彼はでも、エレンを拒絶することができない。

両親の愛に飢えて、飢え続けて、その両親を殺す選択をした幼少期。彼は悪くないのだと、クサヴァーは言う。

そうだ、ジークは何も悪くないと、当時の少年は思った。

しかし心の奥底に住み着いた罪悪感や、後悔など、重くて真つ黒な感情は彼に苦しみばかりを与えた。

よくもまあ、まだ生きています。ジーク自身がたつぷりと皮肉をまじえて、斯様に思う。クサヴァーに支えられて、ジークの精神状態を知った祖父母に支えられて、戦士候補生を目指す幼い子どもたちの姿に救われて、陰の功労者たるマガトにも支えられた。知らず知らずのうちに、支えられてばかりの人生だった。

「ぐつ、う……ハアー……ッ」

巨人体の中で漏らす息はひどく熱い。背骨までえぐり取られた背中と左腕の痛みも、もうよくわからない。

視界が歪む。溢れては落ちる水滴の感覚に気を取られ、外界の認識がおろそかになる。

そんな状態のジークをねらい、獣の巨人のうなじに着弾したマガトの狙撃。

しかしして前方から当たったそれは、獣の巨人が上体だけ起き上がりさせた体勢だったためか、中のジークを削ったものの頭部を破壊するには至らなかった。

リヴァイといい、いったい何度激痛を味わえばよいのだろう。

戦争で負傷慣れしているとはいえ、精神的にも肉体的にも疲労する。

「クサヴァーさん……」

もう、いいだろうか。これ以上進むことはできそうにない。

肉体の余裕はまだあるかもしれないが、心がどうにも先ほど妹が食われてしまった姿を見て、バキバキと、ぶっ壊されてしまったらしい。

何も考えたくない。

けれど、男の思考はその意に反して回り続ける。最適解を見出そうと動いてしまう。

地面に倒れ込んだ獣の巨人を見て、エレンは自身に馬乗りになっている鎧の動きを全身を硬質化させて止め、走り出す。

瞳だけ弟の姿を追っていたジークは、よぎった感情に震える息をこぼす。

「守らなきや、なんて……………は、ははっ」

愛する妹を食ったエレン。その弟をジークは守らなければならない。

なぜなら彼は、弟を妹と同じように「愛」しているから。

エレンはジークの腹違いであれど、兄弟であり、家族だから。

何よりお兄ちゃんとして弟を守るのは、当然の義務である。

もはや病的なその思考にジークはから笑いし、蒸発していた巨人体の煙にまぎれて匍匐前進する。

もう終わってよいと巨人を動かす気力も、キズを治す気力もなくしていた。

しかし懸命に自分に向かって走る弟の姿を見てしまつては、助けざるを得ない。

エレンは接触を目論んでいるのだろう。ならばジークは接触しやすいように巨人の体外に出て、スタンバイしておく。

話し合つたところで妹を殺した弟と意思疎通を図れるか、自信はない。

そもそも今のジーク自身、自分がどうすればよいのかわからない。

それでも駆け寄る家族を抱きとめてやるのが、「おにーたん」としての役目だ。

硬化化に巻き込まれたライナーがエレンへ手を伸ばすが、ジャンたちの雷槍によって止められ、進撃の歩は進む。

それを阻まんとするのは、一丁のライフル。

コルトから借り受けた銃を握りしめ、静かに息を潜めるはガビ・ブラウン。

ブラウン家やファルコたちによって再起を果たした少女。彼女は得意とする狙撃を用いて、照準を定める。

ねらう場所はエレン・イエーガーの足。

鎮まる心には、レベリオ区で燃え滾った憎悪の何もかもが沈澱される。

エレンはジークと接触する気である。「地ならし」が始まってはすべてが終わる。

兄の方は蒸気によって視認できないため、ねらう的は自ずとエレンに搾られる。

「えっ」

トリガーを引く、ガビの目に映った物体。

走る男に絡みつくようにして、透けた何かがあった。まるで、人間の体を限界まで引き伸ばしたような何か。

人間とわかるのも肌色がかろうじて認識できるためで、視界に入れるだけでその形の悍ましさに吐き気がしてくる。

ソイツは渦を描くように、男の胴や、手や足に絡み付いていた。

その首から上が、男のうなじの後ろからのぞいて見える。

顔らしき部分は一直線にガビの方に向いていて、口元は三日月の形。赤いはずのその中は、真つ暗に染まっていた。

直後響いた、発砲音。

軌道が狂った弾は、エレンの首に当たる。

そして、落ちゆく生首。

それは伸ばしたジークの手の上へと、落ちたのだった。

??????

次にジークが目を覚ました時、彼は地面に転がっていた。

辺りを見回すと、そこには一面に砂と光の柱の世界が広がっている。

寝転がっていた男は体を起こそうとして、途中で首に衝撃が走り尻もちをつく。

手で探ると、首についていたのは首輪のようなもの。そこから無数の鎖が繋がってお

り、それは地面から生えていた。動くたびにジャラジャラと、大きな音を立てる。

「……なるほど、これが「不戦の契り」か」

王家の人間に作用しているとすると、それしかあるまい。

ただジークの思想自体に変化が起きているわけではないため、思想がカール・フリツ

ツに縛られていないからこそ、枷が繋がれているのだろう——と、判断した。

「よお、ジーク」

背後から声が聞こえた。ジークが振り向くとそこにいたのは、弟だった。

髪が少し伸びており、負傷兵を偽っていた時のようなスタイルに戻っている。

その側では始祖ユミルが横たわっている。

心配し、ジークは少女の元へ向かおうとするものの、自由を奪う枷がそれを阻む。

「安心しろよ、寝てるだけだ」

どうやらユミルは、泣き疲れて寝ているらしい。エレンが目覚めた時からずっと眠っているようだ。少女の目元からは時折うつすらと、涙が溢れる。

「ここがどこかは予想が付いてるだろ」

「……座標だろ。すべてのエルディア人が繋がる場所」

「ああ、そうだ。ずっとあんたが起きるのを待ってたんだけ」

「……………」

「そう怖い顔するなよ、ジーク」

妹を食い殺した弟。

そんなエレンに話しかける言葉が見つからない。ユミルがジークを治してからずっと泣いていたのかはわからないが、ともかく、弟は話し合いを求めているようだ。

「……………何でだよ、エレン」

「なぜアウラ・イエーガーをオレが殺したか、って話か？」

「……………！どうしてあの巨人がアウラだって……………わかったんだ？」

「あの女の記憶を見た」

「アウラの？」

「始祖を持つのがあの女だった」

「は？」

エレンは兄へ近寄ると、青い瞳を見つめた。誰よりも悪魔アウラに傷つけられてきた男。そしてそれ以上に、「愛」されてきた。

これからエレンが起こす行動さえ、女の思う壺なのかもしれない。

壊して、壊して、壊し尽くす。その果てにジークは狂うかもしれない。

それでもエレンは伝える。アウラ・イエーガーがこの世で最も恐れることはきっと、兄に嫌われることに他ならないから。

ジークが苦しむ姿によって一瞬の享樂を得ても、その先は一生のヘイトが待つ。

その女はすでに殺された。エレンが殺した。

もしかしたらユミルが生き返らせるかもしれないし、グリシャの時のように、死んだ後から堪能するのかもしれない。

どの道、エレンは女が最も傷つく選択をとる。

憎んでいて、恨んでいて、殺した上でさらに殺したくて、そしてまだ「愛」している自分に、吐き気がした。

「本当のアウラ・イェーガーが何だったのか教えてやる、兄さん」

エレンは笑う。

ジークはそんな弟のネジの外れた表情を見て顔がこわばったと同時に、両者の額がコツンと、音を立てて合わさる。

瞬間電流が、二人の間に走った。

お前が大きらいな私が大すきなお前が大きらい。

ジークとエレンが消えた中、砂と光の柱の世界に取り残されたひとりの少女。

眠りにつく少女の側で、ボロボロのキトンのような服を身にまとった子どもが、ジツとユミルを見つめていた。

その子どももの身体には複数の矢が刺さっており、また体中の至る所が、まるでケモノに食いちぎられたように欠けている。

特に顔は右半分が欠損し、食い漁られたそこからは脳が漏れ出ていた。

『ゆみる』

少女はユミルを指で突く。笑いながら、何度も。

それが続き、ようやく金色のまつ毛がふるふると震え、蒼い瞳が覗いた。

少女は上から蒼い瞳を凝視すると、さらに口角を吊り上げる。

『ゆみるゆみる』

『……………？』

『ゆみるあいたかった、ゆみる』

体中を自分の血と肉で汚している少女に抱きつかれながら、ユミルはしかし、拒まない。拒めないのではない。

むしろ少女の胸に手を回して、その名を呟く。この少女は「アウラ」ではない。『××』
だと、ユミルはすぐにわかった。××

『わたしがしんだとおもってないでたんだね、わかるよ』

『

『ゆみるのことわからないけど、わかるよ』

『………』

ユミルの手から離れて、完全に回避魚の手へと堕ちたアウラ。

万が一のために宿した始祖の力を回避魚に利用され、その力はエレンへと渡った。アウラが自身を食わせたことよって。

アウラの目的が“最高の最期”である以上、エレンに食わせることはユミルにとって予想の範囲内だった。

そしてそのまま、アウラの魂を保管しておく。

普通のエルディア人なら死んでしまえば、蘇らせることはたとえ始祖ユミルであつて

も「命」というものの理から外れるため、行うことはできない。

人が死ねば魂は座標の大いなる本流に還り、肉体はやがて朽ちる。

魂だけならば、あるいははできる可能性もあるが。

これはアウラ・イエーガーだからこそ、息を吹き返すことができるのだ。

彼女の性質。奇妙なエビに取り憑かれている女は、生き返る。何度でも。

この詳しい仕組みについて、ユミルは知らな^x。

ただ、回遊魚の世界に転がっていた無数の『^x』の死体から、ソレが生き返ることに
 関係しているのだと推測することはできる。
 ××

ユミルがその性質をはじめて理解したのは、アウラがダイナ巨人に食われた時である。

この時のユミルはまだ、アウラに生きてほしいとは思っていなかった。

無論、死んでほしいとも思っていない。

アウラが望むべく死を遂げられた以上は、これでよいだろう——と。

その後はエレンとミカサの純愛ラブストーリーで心を浄化しつつ、二人で過ごす気であった。

アウラがそのまま死を望むなら、「おやすみ」を言うつもりで。

しかしアウラ・イーガーは死ななかつた。

正しくは、死ねなかつた。

母親の胃の中で死んでは肉体が再生し、死んでは再生し、死んでは再生し。

酸の中で再生と溶解のさるかに合戦が開幕したことで、慌てて回収する羽目になつた。

そして回遊魚の世界にあつた無数の『××××』の意味を、ユミルは理解することになる。

そのため、最初はユミルがアウラに干渉しやすいよう改造し。

二回目は始祖の力を宿らせ、「不戦の契り」の影響を避けるために制限をかけた。制御担当はユミル本人である。

未来についてあえて情報を与えなかつたのも、知らせること自体にリスクが伴つたがゆえだ。

アウラは回遊魚と繋がっている。

そのリンクをユミルが断ち切ることはできない。

つまり彼女が流した情報が、そのまま回遊魚に流れてしまう可能性がある。

ユミルと繋がる光るムカデは、本能のままに生きている。
 原初的な人間の欲求。もつと言えば、生物のシステムの根幹に存在するもの。

「増殖」——それが光るムカデの本質。

思考というものを、彼の生物は有していない。

対し奇妙なエビは、おそらく人間的な思考を持つ。少なくともユミルはそう考えてい

る。
 『X』と「アウラ」は姿こそ同じだが、その中身が大きく違う。

歪みきつっている点では似ていても、人を苦しめて至上の喜びを得るような精神を、

『X』は持つていなかった。

それこそアウラの精神と無数に死んでいた『X』の死体を考えたら、アウラが奇妙なエビの影響を受けているからこそ、人を曇らせ悦に浸る精神ができあがったのだ——と、考えるのが妥当だろう。

そして本来ならアウラの魂を保管しておき、奇妙なエビの性質を利用してすべてが終わった後にこつそりと現世に戻す予定だった。

そのすべてが終わった後というのは、文字どおり「最後」。

エレンとミカサの純愛ラブストーリーの、クライマックスシーンの後である。

光るムカデが消えて巨人の脅威が無くなった世界で、アウラに生きてもらう。

そうすればユミルとアウラの繋がりは消え、もう二度と会えなくなる。

そもそもユミル自体、最高のエレン&ミカサの余韻に浸ってスナアア……（昇天）になる予定なのだ。

問題はジークであるが、ユミルが全面協力すれば、ジークを使わずともエレンを最終形態にすることができ。

むしろアウラが生きるためにはジークが必要不可欠な以上、絶対に死なせるわけにはいかない。

しかし着火するための「キツカケ」はどうしても必要になる。

そのためエレンとジークの接触は、必須事項だった。

現在の思想違いを引き起こしているイエーガー兄弟の状況は、ユミルにとって格好のチャンスである。

仮にジークがエレンの計画に従おうとするなら、クサヴァーを召喚すればそれで全て

解決する。

「ジーク……」と恩人の言葉を聞けば、あのヒゲチヨ面ロイな男など一発で即墮ちするに決まっている。

そう考えてしまう始祖様は完全に、手遅れなまでにアウラに毒されていた。

その後はエレンと組んだユミルが予定どおり事を行う。

ジークが紆余曲折を経てミカサたちに協力するかもしれないが、その時はその時。どの道、ジーク・イエーガーが世界から除外される可能性は薄い。

なぜなら、ジークが進めていた「安楽死計画」。

マーレ側からすると裏切りが発覚した時点で敵認定されているものの、そのジークの行為は最終的に世界を救うことにつながる。

またこの思想は、ヴィリー・タイバーによつて明かされた、当時のカール・フリッツの意向に則している。

歴史の中で無数に繰り返されてきた争いを憂え、壁の内側で束の間の平穏を享受したいと願つたかつての王。

「地ならし」が利用されはするものの、やがてエルディア人は世界から消える。

イエレナの言うとおり、世界の救済に繋がる行為である。

よって、ジークの本当の計画が明らかになれば、世界を救おうとした人間として認められる可能性が高い。

そのままアルミンたちと上手く和解できるならよし。できないのならば、アウラとひっそり過ごすのもよし。

器量良くたち回れる点については、信頼の高い兄妹である。

しかし、回遊魚はユミルの思惑どおりに事を運ばせる気は毛頭ないらしい。

奇妙なエピソードの目的がいったい何なのか。

アウラを取り込んで、始祖をエレンに引き渡させて。

そして『××』を、ユミルの元に寄越させて。

××

『ゆみるずつといっしょ、わたしといっしょ』

ギユウギユウと抱きつくその姿はやはり、ユミルが知る『××××』だ。
ユミルが大嫌いだった、『××』だ。

××

××××

少女はそのままユミルを押し倒し、ニンマリと笑う。

開いた少女の口は奇妙なエビが住まう深淵のように真つ暗で、白い歯も、紅い口内も見えない。

××人間ではないかのようだった。

『××』が人間でなくとも、ユミルは拒まないが。

××ほとりと、あるいはボタ×タと、赤い肉や血がユミルの顔に落ちる。

心から幸せそうに笑う『××』は、手を伸ばす。

そしてそのまま少しずつ××ユミルの首をしめていった。

『だーいすき』

『おまえのせい』

『おまえのせいだ』

『おまえのせい』

『おわらないおわれないわたしおわらないわたしおわらないわたしおわらないわたし』

『ずっとまわってる』

『おまえのせい』

『あいしてるよ』

『おまえにくい』

『おまえしね』

『おまえがしね』

『おまえがまわりつづける』

『おまえがしにつづける』

『おまえをころしたい』

『いっぱいすき』

『しねしねしねしねしねしね』

『おまえのせいでおまえのせいでおまえのせいで』

『ころしてやる』

『しね』

『だいすきだよゆみる』

開いたままの口から、まるでその中に複数の人間が住んでいるかのように、憎悪に満ちた声[×]が漏れ続ける[×]。

だのに深い深い、『××』[×]が向けていたユミルへの愛情も存在する。

×[×]ユミルは、何も返せなかった。

恨まれて当然であると、わかっているから。

だから涙を流しながら、黙って首を絞められ続ける。

心はでもどうしてか、四方八方に引つ張られているように痛む。

今ユミル自身が抱いている感情の正体がわからない中、ずっと笑っていたアウラの表情が消えた。

『ゆみる、だいきらい』

おまえがだいきらいなわたしがだいきらいなおまえがだいきらいなわたしがだいきらいなわたし……。――。

延々と続く、その言葉。

ユミルは聞いた。自身の内側でボロボロと、何かが崩落していく音を聞いた。

それは今までアウラと接する中で取り戻した、人間らしさだったのかもしれない。

嬉しさや楽しさ、自分を酷使するヒゲ面な男への怒りや、その比にならないあの初代^クレイス^ャ王^ロへの殺意——世界を更地にできる三重の壁を彼女に築かせたのがカール・フリッツであることを考えると、ユミルの感情も妥当であろう――。

あとは大切な人が死んだ時に感じる、悲しさ。

その一つ一つが首を絞められていく感覚と、心の張り裂けそうな痛みに混じって、壊れていく気がする。

ただただ、苦しかった。

『
』
×××

ユミルは名を呼ぶ。それはけれど『×××』の名前ではない。

「アウラ」と彼女が呼んだ瞬間、白銅色~~の~~の瞳から一滴、しずくが溢れた。

「お前は奴隷。「自由」を求めて、自由を奪われた奴隷。フリッツ王への「愛」に縛られて、囚われ続けているかわいそうな奴隷。そんなお前が『アウズンブラ』は大嫌い」

ユミルは静かに、瞼を閉じた。

???????

追憶旅行からようやく戻ってきたイエーガー兄弟。

お兄さま前が苦しんで、それを私が堪能できるよう努力するよ——な、アウラ・イエーガーの本性を知ってしまったジークである。

エレンもまた自分が見たものをもう一度辿ったことで、精神的に疲労した。

互いに付けていた額が離れ、そのままジークは砂の上に尻もちをつく。

エレンもフラつき、二、三步後退した。

ジークは完全に放心した状態で、固まっている。

「お前の妹は、人が苦しむのを見て喜ぶような、そんなどうしようもないクソ野郎だったんだよ」

「……………」

「その中でも一番愛していて、苦しめたいのがアンタだったんだ、ジーク」

「……………」

「オレは巨人化したアウラ・イエーガーと接触して、さつきと同じものを見させられた。ははっ、一体どれだけの人間があの子の不幸餌じになつて来たんだろうな……。きつと、オレが始祖を奪うことも、奴の企みどおりだったんだらうよ」

「……………」

「アンタがずっと加害者だと思っていたグリシャもまた、あの女の被害者だった」
俯いたジークの瞳は曇っている。

澀んで、注がれ続けた妹の歪んだ愛情の正体を明かされて、思考が動くことを拒む。

「……「姉さん」とは、言わないんだな」

「もう兄弟とも、思いたくねえ」

「……そうか」

ジークはゆっくりと顔を上げて、弟を見つめる。

翡翠の瞳はまっすぐに兄に向けられていた。同時に手も、伸ばされている。

「オレに協力してくれ」

「……」

「オレはジークの計画に賛同できないし、アンタもオレの計画に賛同できない。だからこそ、どちらかが歩み寄らなきゃならない」

「兄貴の俺が、お前に歩み寄れってか？」

「現にアンタは巨人化して、オレを助けた。首を撃たれた時も手を伸ばしてだだろ、それも必死な顔で」

「……しようがないだろ、兄弟を守るのが兄貴の役目なんだから」

「頼むよ、兄さん」

「……………」

「……………お兄ちゃん」

「別に「お兄ちゃん」つて一声を待つために、黙つたわけじゃねえからな」

「おにーた「やめろ、自棄になるな」……………」

そもそも「お兄ちゃん」呼びは妹だからそれなりの威力を伴うのであつて、弟の、それも負傷兵ルツクのエレンでは、精神疾患を疑うものにしかない。

両者精神にダメージを負つた兄弟の間に、静寂が生まれた。

その、長い沈黙を破つたのは、兄の方だった。

「……………やつぱり俺には無理だ、エレン。人類のほとんどを殺すなんて、恐ろしいこと」

「どうしてだ」

「そんな勇氣、俺にはない。——いや、それを「勇氣」と称するのは違うか。「覚悟

がないんだ」

「……………どの道決定権はオレにある。兄さんの意思を尊重しなくとも、ここまで来れば後は関係ない」

「それでもこうして俺と話し合ってるってことは、お前に同意を求める意思があるってことだろ、エレン」

「……なら答えをハッキリさせろ、ジーク・イエーガー」

ジークはエレンを見て、砂を見て、空を見て——そして、始祖ユミルへと視線を向ける。だが、眠っていたはずの少女は消えていた。

「まだ、話し合えてない」

「何をだ？」

「妹とだよ、エレン」

「………は？」

意図せず上がる口角に眉を下げつつ、ジークはどうしたものか、と思考を巡らす。その笑みの感情は何からくるのか、彼自身理解できない。

もうわからないを通り越して、自暴自棄になってしまいたい。

それでもエレンが見せたものをひっくるめて、妹に聞かねばならない。

それに。

「どんなに歪んでも、ちゃんとアイツが一人の人間だって、俺は知ってるからさ」

笑って、泣いて、愉悦して楽しんで、即墮ちして。

狂っているけれど、歪んでいるけれど。

ジークはアウラの愛情が本物であることを知っている。

それは種類の違う「愛」を交えて狂気じみているが、それでも兄が時折驚くほど、透明でまっすぐな感情を向けてくることもある。

そんな兄の言葉を、エレンは「愛」されている者だからこそ言える言葉だ」と、感じた。

「……そうか、残念だジーク」

「俺が話し合いを求めている間は無理なんじゃないか、エレン」

「……………」

【ユミル↓アウラ↓ジーク】の図は始祖をエレンが有しているとて、覆せない。両者、視線の刺し合いになる中、ふいにエレンの背後から人影が現れた。

「……………ユミル？」

兄弟そろって似たように驚いた直後、少女が手を握る。

—— エレンの、手を。

瞬間、ジークの意識が遠のいていく。

彼が最後に見たのはユミルを凝視している弟と、悲しみに歪んだ、少女の顔だった。

さあ、行進が始まる。

世界を平らにする、悪魔の行進だ。

【十章】 丹碧の境界線編

帰るときによく泣いていた子どもの手は、小さかった。

壁に入った無数の亀裂は、シガンシナ区だけでなく壁全域に引き起こされる。

アルミンが当初考えていた。エレン・イエーガーの目的。

誰よりも付き合いは長いたため、エレンの人間性はよく知っている。

だからこそ『安楽死計画』に賛同するとは思えず、エレンがジークやイエレナに賛同すると見せかけ裏切ると考えていた。

「地ならし」は、すべての巨人の硬質化を解く必要はない。

世界最強の軍事を誇るマールがシガンシナ区に集結しているのだ。その周囲の壁の硬質化を解いて襲われればよい。

さすればパラディ島は、数十年の間は他国に手を出されずに済む。

しかし、壁はウォール・マリアまで壊れている。

そこから覗くのは巨人の頭。そして、胴体。

エレン・イエーガーの首の切断面から飛び出たのは、触手のようなものだった。

長いそれはヒトの脊髄のようでもあり、うごめく様はミミズとでも言える異様さ。

そして巨人化が始まると、巨大な骨組みが浮かび上がっていく。

超大型はおろか、推定約120メートルとされたロッド・レイスを優に凌ぐ、圧倒的な大きさ。

アルミンたちはエレンが始祖を掌握したことを認識したと同時に、ウォール・マリアの壁の異変に気づいた。

直後アルミンとミカサ、そして二人だけでなく、すべてのユミルの民の意識が座標へと引き込まれた。

そこで耳にしたのは、エレン・イエーガーの宣言。

すべてのユミルの民を殺すまで、止まらない世界。

だからこそ彼は数多の巨人を引き連れ、世界に侵攻する。

壁の中をおびやかす脅威を、駆逐する。

空を仰いで悠々と青い世界を泳ぐ鳥に、思いを寄せていた少年は。

本当の悪魔へと、その身を昇華させた。

人々は耳にすることだろう。
進撃の、その轟を。

???????

場所は変わり、マーレ。

同時刻、収容区の人々がエレンの“人類駆逐放送”を聞き、騒然となった。

この放送はユミルの血を継ぐ者にしか聞こえない。

アニの父やライナーの母、戦士隊の親族たちもその言葉を耳にしたのである。

一方でこの言葉をベッドの上で逆立ちになり、その重心を親指のみで一身に受け止めていた男も聞いていた。

白いタンクトップの上からでもわかる、隆々としたその筋肉。

まるで彫刻家が美しい人間の筋肉像を作らんとして、掘り続けた末に生み出された作品のような肉体が、呼吸ひとつで躍動する。

足に大ケガを負い、切断したばかりだというのにこの男、医者が止めてもまったく言うことを聞かず鍛錬を怠らない。

シーツに汗を染み込ませ、それを頻繁に片づけなければならぬ看護師の小言もまた、仕方のないことだった。

逆さになっていた体を正位置に戻したボルコ・ガリアードは深く息を吐く。

頭に溜まっていた血が下へ降りてゆく感覚を味わいながら、サイドテーブルにあった水に手を伸ばして渴いた喉を潤した。

「そこにある命を駆逐するまで……ねえ」

エレン・イエーガーが語っていた言葉。

「地ならし」が始まると、瞬時にボルコは察した。マール側がジークやエレンを止めることに失敗したのだろう、とも。

数日のうちに、マールにも地をならす進撃の足音が響くのだろう。

その後に残されるものは何もない。

「つま、アニアピークでもダメだったんだろ？俺にできることなんて何もねえしな……」

世界連合軍が集まったところで、飛んで火に入る夏の虫。

大型巨人によって、あつという間にペシャンコにされて終わる。

ポルコの中で一瞬ライナーの顔が脳裏によぎり、「何してんだあの野郎は」と、悪態づいた。

ポルコに代わってヨロイを継承した、ライナー・ブラウンという男。

兄のマルセルが、ライナーをかばって死んだことも。

アギトを失わせておきながら己の保身のために、ベルトルトやアニを脅迫して「始祖奪還計画」を続行させたことも。

それが失敗して、最終的に超大型まで奪われたことも。

アギトを継承していた女が結晶化し、「戦士」にまたなれなかったポルコに、同情心であれ何であれ、ヨロイを託したいと考えていたことも。

ウダウダと悩んで自分を追い込み、苦しんでいる……と思っていれば恋をして、精神的に立ち直ったことも。

ライナー・ブラウンのすべてが、ポルコの逆鱗に触れる。

とにかく気に食わなかった。

しかし結局、「戦士」に選ばれたのはライナーで。
選ばれなかったのが、ポルコ。

その線引きは彼の中で、あまりにも大きなものになり過ぎていた。
現状の足では多少の不自由はあるが、巨人の力を継承すれば問題ない。肝心の鎧が誰に継承されるかはわからないが。

すでに軍部の中枢の人間はレベリオ区の一件で一掃された。判断はマガトによる。
戦士を目指す気持ちはある一方で、合理的に継承した後のことを考えると、ガビたち
に継承させた方がよいのだろう。

そこらの感情に区切りをつけるにせよ、あまりにも複雑で、脳を動かすより先にポル
コは肉体を動かすようにしている。考え過ぎれば先に精神の方が参るからだ。

「全部殺されたら、名誉マーレ人もクソもねえよ…」

マルセルが一度戦士になった手前、ガリアード家には名誉マーレ人の称号がある。
それでも戦士を目指すのはもはや意地なのだろう。

11年前、場を共にした7人の子どもの中で、唯一選ばれなかったポルコ。選ばれなかった者の努力や思いが、報いを受けることはない。

名誉マーレ人になれたのだから、と簡単に片づけられる感情でもないのだ、ポルコの抱くものは。

「……どうすつかなあ……」

現在彼がいる場所は、軍事基地内にある医療施設。そこでリハビリと療養を行っている。

兵はレベリオでの戦いに続き、パラディ島侵攻作戦で多くが投入されているため、マーレの守備は薄っぺらだ。

しかしその状況を見てマーレに侵攻する国もない。

今は全世界の共通の敵が、エレン・イェーガーとして認識されているのだから。「最後まで家族といえるか、それとも……」

ピークは死んでしまっただろうか。ポルコにやたらと絡んでくる女は。

もしかしたらまだ生きており、エレンの侵攻を止めるべくあがいているかもしれない。アニや、ドベ野郎も。

何も行動に起こさず終わるのはどうにも腑に落ちない。

ただ今の状態の自分が何かの役に立てるとも、思えない。

「……………」

何をするべきか悩んでいた時、ポルコの脳裏に不意によぎったのは、そばかすの女だった。

軍事関係者の、しかも限られた者のみしか入れない場所に保管されている少女。名は皮肉にも、始祖と同じ名前の「ユミル」。

力を継承することになったあの日、注射器を握りしめた感覚をよく覚えている。周りの空気の冷たさも。

それに、女が己に投げかけた言葉も。

『ただいま』

その意味はいつたい何であったのか。

元々少女は「楽園送り」にされた人間であるため、故郷マーレに帰ったことに対する言葉だったのかもしれない。

あるいは、故郷に残してきた者たちへの言葉であったのかも。

しかし、ポルコは不思議とその言葉が自分に向けられたものであると感じていた。まっすぐに彼を見つめていたユミル。そして、言った。

ポルコとユミルは面識がない。

うつすらと考えられるのは、女がマルセルの記憶に影響されて、言葉を発した可能性である。

だからこそ彼は、打とうとした注射器の手を止めてしまったのかもしれない。

「兄貴……」

なぜ女は結晶に包まれたのか。『ただいま』の真意が何だったのか。

巡る思考にポルコが唸りはじめた中間こえた、部屋をノックする音。

「ハア、ハア……ッ」

「よう、ウド」

入ってきたのはウドだった。ちょうどポルコやソフィアの様子を見にきていた最中だったらしい。

少年は顔を真っ青にしてエレン・イエーガーの件を話し出す。

「ど、どうすればいいですか、ガリアードさん!!」

「落ち着け、まず先にゾフィアの様子を見てこい」

「は……はい！」

ドアも開けつばなしのまま、嵐のようにウドは走り去っていった。

ポルコは深く息を吐いて、立てかけておいた松葉杖を取り歩き出す。

今なら結晶が保管されている地下へ行くことも可能だろう——と、考えて。

ちょうどその頃、一人の少女もまた激しく咳き込みながら、目を覚ました。

???????

四方がレンガで囲まれた部屋の中、壁に取り付けられたランプの光が揺れる。

意識がおぼつかないまま床に倒れていた少女は、上の灯りをぼんやりと眺めた。

段々と現状を理解するまでに数分。外気に晒され、濡れた体が冷えていく。

「あ……」

少女——ユミルは目を覚ます前に見た、聞き覚えのある声を思い出す。

エレン・イエーガーと、聞き覚えのあるその声の主は名乗った。

その者がパラディ島以外の人間を皆殺しにしようと言う。

ヒストリアが生きられるならよかつた、と己のことは二の次に彼女は思った。

継承儀式の前に着せられた白いワンピースのような服は、ビシヨビシヨに濡れている。

両手両足を拘束していた鎖は中途半端に切れたまま残っていて、ユミルが少し動く度にジャラジャラと煩わしい音を立てた。

「……………ポルコ、ガリアード」

空気に溶けるように呟かれた男の名前。マルセル・ガリアードの、弟。

食われる覚悟は決まり、それでもヒストリアと結婚したいと切に思いながら、瞳を閉じたユミル。

処刑台をカタチ取った高台の下には、注射器を持った少年がいた。

最期に愛しの少女を脳裏に思い浮かべようとして、しかしユミルが視界に入れたの

は、マルセルの弟だった。

袖をまくった腕に注射器を近づけながら、その針の先を見ていた男。かすかに震えるその姿を見て、直後二人の視線が交差した。

その時ユミルは、不思議な感慨を抱いたのである。

温かいような、泣きたいような、心に注がれる今まで経験したことのない感情。その出所はきつと、マルセルのものだったのだろう。

彼女が抱いたのは、「家族」への想い。

孤児だった少女が今まで得られなかったもの。その感情がマルセルを通して、彼女の中に流れ込んだ。

そして気づけば「ただいま」と、声を漏らしていた。

果たしてその言葉を言ったのはユミルだったのか、それともマルセルだったのか。

「余計なことしてくれんじやねえかよ、あの弟大好き野郎……」

ヒストリアよりも、ベルトルトやライナーの顔を立てることを選び、その果てに起こったのは結晶化。

夢を見ていた気がする。内容は詳しく思い出せない。

その感覚は長いこと巨人としてパラディ島を彷徨っていた時のものと、似ている気がした。

しかし不思議と自分が結晶に包まれていた、という認識はある。

床に広がる水溜まりを見る限りでは、ユミルの容姿は変わっていないようだ。

エレンが生きているということはつまり、彼女が眠ってから驚くほど時が経っている——ということでもないだろう。

ユミルの中に過ぎった、結晶化直後に聞いた声。それと、その人物の表情。

視界が氷越しに世界を見ているかのようになり、体の自由が一切きかなくなる。そして意識が暗闇へと引つ張られていく。

結晶の中でもわずかに動く瞼は閉じて、視界も真っ黒く染まった。

その時間聞いた声。正確には、言の葉。

『いめんな……いめんな』

マルセルは謝っていた。

弟に謝っていて、そして彼女の感覚的に、ユミルにも謝っていた。

それで、彼女は察したのだ。

一度は弟に自身の力を渡してほしいと願っていた様子で、それが長年「戦士」になれず苦しんでいたポルコへの罪滅ぼしになるのだと、マルセルは考えていた。

しかしして継承を間近にして、やはり嫌だと思った。

弟に巨人の力を継承させたくない、と。

普通の幸せを掴んでほしい、と。

なんとも甘ったれた男だと、彼女は思った。

さらにその甘い矛先が自分にも向いていることに、無性な腹立たしさを覚えて。

マルセルはきつとユミルにも、偽りの「始祖様^{ユミル}」として生きるしかなかった過去や、自由を手に入れた上でそれを自分から返納した姿に、同情したのだろう。

そしてユミルを死なせたくない、と思った。

ユミルとマルセルは今も繋がっている。だからこそ相手の感情が伝わった。

その結果、起きた結晶化だったのだ。

きつとまた力を継承できなかつた弟は苦しんでいるはずで、ヒストリアも深く傷ついたらに違いない。

「……ヒストリア」

会いに行かなければならない。ユミルは、愛しの少女に。

その笑みをまた向けられたいのために、彼女は行動を起こすことを決めた。

しかし場所はマール。その上彼女の祖国の知識は、数十年遅れのもの。

脱出することもまず難しいと悩んでいた折、引き合う磁石のようにユミルはポルコと接触する。

そして互いに警戒しつつ、それでも多少の歩み寄りをみせた。

ユミルが結晶化した件や、「ただいま」の意味。

また、マルセルがわざと上官への印象操作を行って弟を「戦士」の継承権から外させ、それがきっかけで長年ポルコが苦しむ原因となり、そのことを悔いていた——など
を、話し合った。

「……………ふ、ははっ！」

兄が印象操作を行っていた内容を聞いた後、ポルコは今までの感情が噴き出したよう

に笑い出し、涙をこぼす。

ユミルは口を引き結んで、静かにその様子を見つめた。

「やっぱり、やっぱり俺が上だったんだ！あのドベよりも、ライナーよりも……!!」

「へえー……あの淫獣って昔ドベだったのか」

「いん……何だって？」

「あれ、知らないのか？」

4年越しに明かされる、ウドガルド城で起こった^ラライナー・ブ^ラウ^ンン
どすけベ^ラマ^タギ^ムツ^ワア^ア事件

(?)
“

この事件で二人の女性が被害に遭っている。

「ああー………思い出すだけでムカついてきた。あの野郎のイチモツを切り取って、汚ねえケツにブチ込んでやる……」

「………」

「何だよ、黙り込んで？」

「………」

この女ならやりかねない、そんなスゴ味を感じたポルコ。「どうせ治るんだしよ……」と

続いた言葉に、タマがヒュンとした。

「まあ話はこれくらいにして、私はパラデイ島に行きたいんだけどさ、何かいい方法ってないか？」

「その前にお前は今世界がどんな状況なのかわかってるのか？」

「エレンが壁内以外をぶっ壊そうとしてんだろ、聞いたよ。…それ以外はよくわからない」

「何で行く必要があるんだ。まさか自分だけでも助かりたいのか？」

「ツハ、バカ言え。私は愛しのヒストリアに会いに行くだけだ」

「…ソイツと会ってどうするんだよ」

「結婚する」

「……………ン？おい、待て、そのヒストリアって名前からして女じゃ…」

「『愛』は自由の時代だよ、ポルコ。…で、簡易的に今の状況を説明して欲しんだけど」

それから大まかな世界の状態を知ったユミルは、マーレの兵士がパラデイ島に招集され守りが薄くなっている部分に目をつけ、脱走ルートを考える。

ポルコの戦士候補生という地位と、ユミルの《顎の巨人》を継承していることを利用

すれば、マガトの隠し戦力として騙せるかもしれない。

無理なら巨人の力を使って脅し、無理やり逃げる。

移動手段には飛行船を使えばよいだろう。そもそも世界が終わるか否かの瀬戸際だ。

エレンの宣言を聞いたユミルの民が今マーレ国内で騒ぎ始めているだろうし、その混乱もマーレ兵の目を盗む手段となる。

「お前つて操縦できるか、飛行船」

「無理だ、さすがに」

「じゃあできるヤツを見つけないとな」

「……本当に行く気なのか？」

「行く。お前の仲間だって、今パラダイ島で戦ってるんだろ？ だったら十分行く理由になる」

「……………」

「その足じゃ……って話かもしれないが、もしもの時は私を食えよ。脊髄液入りの注射器も、マーレが強襲された時に盗まれたんだろ？ だからできるはずだ。私ももう腹は括つてある。ただ……今のヒストリアに会ってから頼みたい」

「兄貴の気持ちを聞いた後で、俺にアギトを継げってか？……ふざけんな」

「大まじめだよ、私は。決めるのは私でもマルセルでもダメなんだ。やっぱりさ、物事は流されず、最後は自分で決めるべきなんだって……私は思うぜ」

「……………」

「ほら、他にも戦士候補生がいるんだろ？仲間になるヤツを集めてさっさと行くぞ。ついでに兵士用の服と、この枷も頼む」

軍事基地内ならば、パラディ島作戦に使われているものとは別に、飛行船が残っていないはずだ。

問題はポルコやその他の親族だが、レベリオ区へわざわざ向かっている暇はない。

そも動けば動くほど、兵士に見つかるとはリスクは高まる。

その危険性やレベリオ区が混乱状態にある事を考えれば、今集められる仲間内で行動する方が、より安全に事を進められる。

「まあどうしてもっていうなら、両親を連れて来るまで待つ」

「…………その前について行くって、俺は一言も言つてねえ」

「いや、お前は連れて行く、絶対に。死なせるわけにはいかない」

「…それはお前の意思じゃないだろ」

「そうかもな。でもそれが今の私なんだから、仕方ないだろ」

ユミルはポルコに手を差し出した。

「私と来い、ポルコ」

「……………ふざけんじゃねえよ。人の気持ちも、知らねえで」

ポルコはしかし、女の手を取る。

ユミルは握られたその感触に目を見開いて、ジッと、その手を見つめた。

「あれ……………こんなにお前の手って、大きかったっけ？」

マルセルの体験した感覚が、彼女の中によぎる。

時折のぞく兄の面影に、ポルコは目を伏せた。

死んだはずの兄は、ユミルの中で生きている。そんな風に感じられて、なぜだかひどく、泣きたい気持ちになった。

チキチキ☆ラブマシーン

「地ならし」が始まって、地上での争いは続いていった。

マーレ側に当初の勢いはなく、どんどんパラデイ島勢力に押されている。

それも当然だろう。世界を平らにするエレンの進行は、すでに始まってしまった。

もう止めることは不可能であると、兵士たちの顔には諦念の色が浮かぶ。

また《鎧の巨人》も、壁の崩落に巻き込まれそうになったガジたちを庇ったのち、エレンがすべての硬質化を解いたことが災いしてヨロイが剥がれ、本体に大きなケガを負った。

さらに戦いの合間でアルミンたちも、エレンの選択に混乱を見せる。

104期生は幼なじみを非難するアルミンや、エレンの行動を肯定するジャンなど、仲間内でも亀裂が生じた。

そんな中、「地ならし」の発動でマーレ軍の生存を絶望視し、撤退する飛行船。

地上からその様子を見ていたのは、マガトとピーク。

すべての硬質化が解かれた時に壁の上で戦っていた彼らは、ピークがマガトを啜え内

側の建物に飛び乗ることで事なきを得た。

「賢明な判断だろう。今はマーレにこの事態を一刻も早く知らせることが先決だ」

「マガト隊長、地^アならし^レを止める術はないのでしょうか……」

「…無理だろうな。その前にまだ、こちらの戦いは続いている」

銃を持ち戦うマーレ兵と、雷槍を打ち込むパラディ島勢力。

どちらかが全滅するまで、このまま殺し合わなければならぬのか。

——否、「地ならし」を止められなかった以上、今のマーレ軍がこのまま戦うのは得策

ではない。無駄に死人を増やすだけだ。

であれば降伏も視野に入れなければならぬと、マガトは判断した。

???????

「ハア、ハア……!」

地を鳴らし、血で均される世界。

始まった悪魔の行進を聞きながら、アニは荒い息を吐いた。その側では巨人体が蒸発している。

戦鎚の力を手に入れたエレン・イエーガーと戦い、体力的にも限界を迎えていた彼女。そんなアニが目にしたのは、エレンが撃たれ、その生首がジークと接触する姿だった。そしてその直後、撃たれた男の首の断面から伸びていった、白いゲジのようなもの。エレンの瞳がギョロリと動くと、そのゲジは視線の先にいたジークを補食するように蠢き、眩い光が地を覆った。

我に返ったアニは、どんどん巨大化していくエレンから逃れるように移動した。

生首がジークと接触してその大きさを増していくまで、針に糸を通すような、ごくわずかな間に起きた出来事である。

彼女はそして、大型巨人の隙間を縫うように内側から抜け出し、外側へと逃れた。幸いにも街を囲うようにして一列ずつ並び進み出したその間にはまだ、逃走できる余地があった。

わざわざ巨人に踏みつぶされるリスクを負ってまで逃げた理由は複数あるが、一つはこれ以上の争いが無意味だと判断したためである。

マーレ側の目的は「地ならし」の阻止である。しかしそれができなかった以上、たどる未来はパラディ島以外の壊滅。

世界連合軍が今更立ち向かったところで、幾千もの大型巨人に勝てる見込みなど毛頭ない。

しかし、巨人の行進に閉じ込められたマーレ兵とパラディ島勢力はまだ戦っている。

内門側も崩落した壁により、その先へ立体機動があればともかく、容易に逃げられなくなった。そもそも敵がまだ残っている以上、どちらかが壊滅するまで戦い続けるだろう。

戦う理由がなくなったというのに、これ以上争うのはアニはごめんだった。

「……本当に、わけがわからない……」

そう言うアニの横で、眠っている人間。

見つけた時は全裸だったため、今は戦士服の上着を体にかけている。

その人間がいたのは、エレンに食い散らかされた巨人の肉片の場所。蒸発するそのすぐ近くに横たわっていた。

アニがガイコツの巨人を見た時、脳裏に過ぎたのはアウラ・イエーガーである。笑う姿に既視感を覚え、見覚えのあるその正体に気づいたとき、背筋を震わすことになった。

そして彼女が内側から逃げだした理由のもう一つにあるのが、このアウラの存在。

見つけた際、女の目元に巨人化の跡はなかった。しかし確かな証拠はないが、アニの勘はガイコツの巨人Ⅱアウラ・イエーガーであると告げている。

なぜアウラが巨人化していたのかは不明である。ただし、無知性巨人ではなかったはずだ。

ガイコツの巨人は人を襲うことなく、エレンにまるで接触する意図があるように移動していたのだから。

最初は驚いたようにガイコツの巨人を見つめていた進撃がキバを剥いたのも、その巨人と接触してからだだった。

何かアウラが弟に行ったのだろう、とは推測できる。

「ハア……訳がわかんない」

巨人化できたのは、やはり始祖ユミルが関わっているのか。

10個目の巨人の力を生み出すくらいはやりそうである。

もしくはすでに存在する巨人の力、例えばアギトを盗んでくる——だとか。

案外ユミルが硬質化したのも、これがねらいだったかもしれない。

「あの、脳内クソ進撃野郎もふざけんじやないよ……ッー」

アニも聞いた、エレンラジオ。ユミルの民の皆さんがお呼びされた回だった。

そこでのエレン・イエーガーの発言どおり、パラディ島以外の人間は殺される。一匹残らずこの世から駆逐されるのだ。

つまりアニの父親も死ぬ。

ちやうどエレンが進み始めた方角は、マーレがある大陸である。

進撃を止めることはできないだろう。だが正攻法以外の道を、彼女は転がっていたアウラを見つけた時思いついた。

ユミルに「寵愛」を受ける女。そんな女に頼めば、父親だけでも救ってもらえる可能性はある。

ただしこの方法は「禁忌」であると、アニは感じ始めていた。

それはレベリオ区襲撃の時に現れた、始祖ユミルを見てから。

くたばっていたライナーはともかく、あの時エレンにも少女が見えていたようだった。

しかしその他は、その存在にまったく気づいていなかったのである。

多くの兵士がその現場を目撃していたのだ。突然少女が現れれば騒ぎになっていただろう。

剩えその少女が戦鎧の本体に触れた直後に硬質化が解かれたのだから、自ずとその存在が「ユミル・フリッツ」であるとわかりそうなものであるというのに。

結論、あの時始祖の少女が見えていたのは、巨人化能力者だけだった。

そしてその一件以来、アニは世界が始祖ユミル、あるいはアウラ・イエーガーの計画どおりに動かされているのではないか？——と、思い始めた。

それから度々、背筋に悪寒を覚える。

まるで、自分が悪魔にでも魂を売ってしまったように思えて、仕方ないのだ。

「もう、今更だけど…」

4年前アニは、自分の意思で悪魔の誘惑にノったのだ。もはやこれ以上失うものがない。

失いたくないものは二つ（正確には「二人」）あつたが、内一つは失つて、残るはあと一つだけ。それが父親。

彼女は父親を救えるなら、自分の命を犠牲にしても構わない。失う苦しみはもうたくさんだった。

最後に自分に微笑んだ少年をなくして、その母親が息子の帰還を信じながら静かに息を引き取る姿を看取つて。

そして、多くの人間が彼女自身の手で殺されていく姿を見て。

「ねえ、起きてよ」

アニは女の顔をのぞき見て、低い声で言う。その声はかすかに震えていた。

「お父さんを助けてよ……。ねえ、アウラ……」

エレンから奪つたアニたちは今度、奪われる側になる。自業自得なのかもしれない。それでも黙つて父親が死ぬことだけは、許せなかつた。

「んう……」

女のまつ毛が震える。その瞬間、アウラの肩をつかんだアニはお構いなしに揺すつた。

その衝撃にカツ、と開いた瞼からのぞく、白銅色の瞳。

至近距離にある歪んだアニの表情を見たアウラは、自分の格好を見て、もう一度顔を上げて、口を開いた。

「ご……ごめん、私ジーク・イエーガーひと筋だから……」

アニちゃんの気持ちには答えられな——まで女の言葉が続いたところで、ゴオンと、激しい衝撃が起こる。

アウラは左頬をかすった拳と、その背後にある拳がめり込んだ木。

そしてさらに近くにある今にも人を射殺さんばかりのアニの凶悪顔を見て、とつさにブラコン女は両足を閉じる。

体がこわばった直後に全身が一気に弛緩して、危うくイイ歳で痴態を晒すところだった。

「おはよう、話、いいよね……?」

「……は、はこ」

???????

それから、アニから事情を聞いたアウラ。

彼女はイエーガー派に連れられ、巨大樹の森へ向かったこと。

またジークの脊髄液入りワインを飲まされてしまった件や、巨人化した後に一度ジークを救ったこと。

そしてそのあとにシガンシナ区へ向かい、放置プレイを受けていた最中に、倒れる《獣の巨人》を見て巨人化したことなど、順々に話す。

さらに目覚めてからや、巨人化している最中など、所々記憶がないことも。

その一連の原因が、アウラ自身が「始祖」そのものの可能性が高いため………ということを知ったアニは、固まる。

巨人化したことなど一応の辻褄がそれで合うが、アウラ自身が「始祖ユミルに力が戻っている」と嘘をついていたことになる。

「まあそれも、複雑な理由があつてね——」

アウラは「不戦の契り」の件を持ち出し、事情を語る。

「……要は、あんた自身も知らなかつたつてわけ？ ていうか、始祖の力が王家にしか使えないことも、「不戦の契り」によつて王家の人間がカール・フリッツの思想に縛られることも、はじめて知つただけだ」

「だろうね。だつて、マールに「不戦の契り」に関する本当の詳細はないわけだから。それこそ壁内でも王家の人間、レイス家の当主しかこの内容を知らなかつた」

ただしジークはトム・クサヴァーから「不戦の契り」の効果を知らされていた。

クサヴァーが巨人学の研究者であつたからこそ、知り得た情報であつたのだろう。

「じゃあずつとマールの探し物はマールにいたつてわけ？ 四年間も？……ハア、呆れた……」

「イエーイ、ピースピース」

「殺すよ」

「アニちゃんはキメ顔でそう言った」

「殺す」

豪速球で放たれた蹴り技は先ほどの被害者、木へとめり込む。

寸前で避けたアウラは地面に尻もちをついて、羽織った上着の上から腕をさすった。

「……で、始祖の力は今もあんたにあるの?」

「え? ああ……多分それはないんじゃないかな。アウラちゃんってエレンに食われちゃったんでしょ? その段階で力は渡ってると思う」

「でもあんた、生き返ってるだろ」

「それは恒例のユミルの仕業だよ。私は何度だって蘇る、さながらヒーローのようにね」

「悪魔」の間違いでしょ」

「あつ、熊?」

「……もういい」

普段以上におふざけに磨きがかかっているアウラに、アニは頭を押さえた。真剣に話している自分がバカらしくなってくる。

「そもそも何でジークを助けるはずが、エレンに食われたんだよ」

「それはわからない。巨人化した時の記憶ないし。ユミルが操作したんじゃないかな?」

「……それって、始祖をエレンに託させるのが、ユミル・フリッツの意思だったってこと

「？」

「アウラちゃんはおくまでジーク・イエーガーの前で、華々しい最期を飾ればそれでいいからね。何だかまた生き返ってしまっているわけですが」

「……じゃあ、何？待ってよ……始祖ユミルはエレンが「地ならし」を起こすのも、始祖ユミルは肯定してらつてわけ？」

「そうかも」

「ッ……!!」

アニはアウラの襟を掴み、木に叩きつける。

「地ならし」が始まって少しは驚いていいものだというのに、まったくアウラは取り乱していない。

少なくとも、エレンがジークに取り込まれてしまったのだ。その時点でもっと取り乱しておかしくない。否、取り乱さない方がおかしい。

まさか、と思う。

アウラ・イエーガーはこうなることを、予め知っていたのではないのか？——と。まるでその疑問に答えるように、アウラは口を開く。

「ユミルの目的は知っている。彼女にとっての「主人公」がエレンで、「ヒロイン」がミカサ」

「……は？」

「彼女はずっと初代フリッツ王に縛られている、哀れな“奴隸”でしかない。王を愛し、そして王から愛されず彼女は“奴隸”のまま王を守って死んだ。それから“道”で彼女は孤独に、巨人を作るだけの存在となっている」

「ま、待つて、何を…言うて……」

「ユミルの民はね、そんな“奴隸”の子孫。何かに囚われ続けているのは同じ。現代のわれわれは「巨人」というものに縛られて、世界の悪意を向けられている。自由なんてない。自由になることなんてできない。ふふ、哀れな民だと思おうでしょ？」

瞳を細めて、アウラは笑う。

「あんたは、一体……」

マールでジークを除き一番彼女と接してきたアニは、目の前にいる女が別人に見えた。

アウラ・イエーガーでは、ないような。しかし何が違うのか、ハッキリとわからない。「ユミルは「愛」の束縛から逃れたい。だからこそ今起こっている「地ならし」も、その大詰めに起こっている出来事である」

「……じゃあ、世界は滅ぶの？ 私の、お父さんは……」

「このまま行けば、パラダイ島以外は滅ぶね」

「……どうにか、してよ」

「どうにかって？」

「あんたがっ、どうにかしてよ……!!!」

再度襟首をつかまれたアウラは、苦しげに息を詰める。

アニは泣きそうになりながら、怒りと悲しみと、さまざまな感情でごちゃごちゃになった頭で、女の胸元に頭を押しつけた。

その時また、ふふ、と息をこぼすような笑い声が聞こえた。

「……………え」

アニが見たのは、笑っているアウラ。

心底嬉しそうに口角が上がっていて、目元からはぼたぼたと涙が溢れている。

笑い声は次第に嗚咽が交じっていき、そのままアウラはうずくまってしまった。

「………何で、あんたが泣くのよ」

「おに、いさまが、がじんでほじぐない、いからあ、あ、………!!!」

「汚い声出さないで」

「美声びせいでじよ、う、う、があ、あ…!!」

「うるさい」

美女の顔が鼻水と涙と、散々に汚れていく。

その顔を見ていたアニはかえって冷静になっていき、息を吐いたところで顔を逸らす。

「……………」

尚も続く巨人の騒々しい行進の音で意識が霧散してしまうが、人の気配を感じる。

後方から感じたその場所は転々と木が立ち、草が生い茂っている。

その場所をアニが睨みつけていれば、両手を上げて誰かが立ち上がった。片目を眼帯で覆った姿に、アウラもアニも目を見開く。

その人物は頭に葉っぱをつけたまま、「いやあ〜」と間伸びした声で話す。

「たまたま通りがかった時、声が聞こえたものでつい……………ね？」

「……………ハンジ・ゾエ……………」

「こうして女型のあなたと会えたのも何かの縁なのかな？それに……………アウラ・イエーガー、生きてたんだね」

「オツス！オラ、アウラ・イエーガーちゃん！」

「えつと……君ってそんな感じだったっけ？」

「ハンジ、私は元々こういう人間ですよ」

訝しんだ表情のハンジは、アニへと視線を向ける。

アニは無言で首を縦に振り、肯定を示した。

「それよりいつからそこにいたんだ、あんた」

「ええ……アニ、君が「あの、脳内クソ進撃野郎……ッ」って言ってたところからかな」

ほとんど最初からだ。アニは余裕のなかった状態だとはいえ、人の気配に気づかなかつた己に苦い表情を浮かべる。

ハンジは笑っていた表情を消し目を細めながら、二人を見た。

「色々と聞きたいところではある。ユミル・フリッツの目的のところや、想像以上に始祖について、アウラ・イエーガーが情報を持っているところもね。始祖の件も驚いちゃったよ」

アウラが巨人化した点については、本人の口から語られていたことゆえ謎が解けた。

その上で、ユミルの深い情報まで知り得るアウラと始祖の関係が「寵愛」で済むもの

なのか、疑問なところである。

まあそれも、アウラに尋ねればよいだろう。話し合いができれば、の話だが。

今のところ父を助きたいアニと、ジークを救いたいアウラ、そしてエレンを止めたいハンジたちの目的は一致している。これを利用しない手はない。

「どうかな？ここは一つ穩便に、話し合いと行かないかい？もう一人死に損ないを呼んできて」

「……死に損ない？」

アニが眉を寄せたのに対し、何か察したアウラの表情に殺気が混じっていく。

「私たちは「地ならし」を止めたい。それはアニもアウラ、君も同じはずだ」

「あのクソチビが何をしたのか、お兄さまから聞いてる」

「……絶対リヴァイの前で「クソチビ」って言わないでね？」

「160cmの男」

「それもダメ」

アニの方は少し悩んだ様子を見せたものの、ハンジの提案に乗るようだ。

アウラはハンジに説得され、結局リヴァイ抜きでの話し合いに承諾した。

【オイオイオイ…】（1年E組！クサヴァーせんせい!!）

意識が遠くに沈んでいったリヴァイ。

雷槍を受けた彼はいつの間にか、机と椅子が等間隔に並ぶ不思議な空間にいた。

「何だ、コレは…」

顔を顰めている彼の隣で、一人の黒い軍服？のようなものをまとった男が、高く手を挙げる。

その男が「クサヴァー先生」と呼ばれる人物に指され、立ち上がった。

「先生、教科書3026ページのこの部分について質問なのですが…」

「……エル、ヴァイン……？」

リヴァイに声をかけられた男、襟詰・スマスは目を丸くし、隣を見る。

よく見ればエルヴァインの頭には、何か輪っかのようなものがある。

「ア…？」

そして理解できない状況に無意識に頭をかこうとすれば、自分にも何か輪っかのようなものがついていた。頭とその間には何かつながるものは付いておらず、宙に浮いている。

「おや、リヴァイ。君もクサヴァー先生の授業を受けにきたのか？」

「……………」

「ハハ、これが結構楽しいぞ」

訳もわからぬまま、授業を受けることになったリヴァイ。後から気づいたが、見知った顔も複数いる。その誰もが死にそうな顔をしていた。

1時間受けただけで頭の痛くなった彼はしかし、子どものように笑う男を見て拍子抜けしたような、でも悪くない気分を感じたのだった。

しかし眠気には勝てず、だんだんと瞼が落ちてくる。

「まだお前は死ぬなよ、リヴァイ」

最後にそんな言葉を、聴いた気がした。

実に、美しい……（絶頂）

兵士長を除いて、座り込む三人。

アウラの方はアニの上着だけだったため、ハンジが身につけていた調査兵団のマントを渡した。

自由の羽が刺繍されたその部分を、アウラはジツと見つめてから羽織る。

壁の規模を考えて、今日中に巨人の進行が終わることはないだろう。

その前に三人も疲労しており、話し合うと決めた以上、無為に争うことはしない。少なくとも、現状においては。

「まず聞きたいんだが……アウラ、君が始祖の力を入れたのは、時系列的にレイス家がグリシャ・イエーガーに襲われた時で間違いないね？」

「ええ、その前後かはわかりませんが、シガンシナ区で巨人に食い殺されて、数日後に目覚めた時にはすでに始祖の力があつたと思います」

「食い、殺……??」

「ハンジ、これから私と話す場合は、頭を空っぽにされた方がいいですよ」

ハンジはその言葉に一つ咳払いをして、「…わかった」と返す。

「…で、自分が始祖の力を持っているかもしれないと気づいたのはいつなんだ？」

「片鱗はありましたよ。王政の件で外が騒がしい時に、ロッド・レイスや彼の護衛だったケニー・アッカーマンと会いましたね。——あつ、その前に、ケニーとは組んでいたわけですが」

「……………」

「その時彼に言われたんです、「目が王の証である」——と。その王とは、始祖を持つ人間を意味する。この言葉がきっかけで、私はその力を使えるのではないかと思った。けれど完全には使えなかったのです、この時は「始祖ユミルから力を借りている」と解釈していました。始祖の力そのものを持っていると気づいたのは、今日のことですよ」

巨人化して人間に戻った点を挙げて、度を越した変化が始祖を自分が持っている、半ば確信を抱く理由になった——と話すアウラ。

「力って、どの程度の範囲で使えたんだい？」

「できて、他人の記憶をのぞくとかくらいですよ。人を巨人にするとか、ましてや「地ならし」を起こすとかはできません。それに一人の記憶をのぞくだけでも、精神がすり

滅ります。ねっ、アニたそ」

「…もしかして、君は記憶をのぞかれたのかい？アニ・レオンハート」

「ああ、そうだよ。ついでにその変態は私の記憶の中の兄貴を見て、発情してたからね」

「……………」

ブラコン畜生女を見て、露骨に引いた顔を浮かべたハンジ。

心外だ、とアウラは訴えた。

しかし彼女が変態であることは誰も覆せない。世界の真理である。

「……………それでユミル・フリッツの過去や、始祖の目的も知っていたんだね？」

「そうですよ。ジーク・イーガーがエレンに取り込まれて、どうしよう、って状態ですけど」

「それは始祖ユミルが君の意思に反して、行動を起こしてる……………って、ことかな？」

「…わかりませんよ。私は、彼女の何を何でも知っているわけじゃない」

「ではジークを助けたい、と思う気持ちはあるんだね？」

「それしかありませんよ。むしろお兄さまが助かるなら、全人類が滅んでも構わない」

「……………そうか」

ハンジが顔を下げた拍子に、ゴーグルが光を反射して、その奥の瞳が見えなくなる。三人の意思は各々の目標は違えど、「地ならし」を止めたいという点でおおむね一致している。

しかしハンジの中で現在エレンを止める有効な手は、一つしか見出せていない。

50mの大型巨人がかわいらしく見えるほどの、エレンの巨人体。

たとえば超大型の力を使っても、物理的に倒すのは難しいように思える。どうやって接近するのか、という問題もあるが。

そしてエレン本体を狙うのが難しいなら、ジークを狙う手もある。

それが今のところハンジが考えている方法である。

エレンがジークを取り込んだということはつまり、あの規格外の巨人が動くには、王家の血を継ぐ巨人が必要ということ。

その元を探して倒せば、止まる可能性はある。引きずり出すのは囚われている以上、難しいだろう。

だがこの手段を、アウラが認めるはずがない。

現に、恐々とした感情をオモテに出さないようにしながらハンジが話せば、白銅色の瞳がドロついた。背筋が凍るような、容赦のない殺気がハンジに刺さる。

「……ハンジ、私言いましたよね？お兄さまが助かるなら、全人類が滅んでもいいって。お兄さまが死んだなら、全人類を滅ぼすくらいの気狂いを、私はきつと起こしますよ」

「できないだろ、君はただの人間だ。始祖の力を今、本当に持つていないなら」

「それぐらい狂う、と言っているだけです。実際に滅ぼせるとは思っていない。でも……でも、ジーク・イエーガーが死ぬことだけは許せない」

「……じゃあ、どうしろって言うんだよ」

「………方法があります」

「「え？」」

アニと、ハンジの声が重なる。

アウラは自分がユミルと話し合えば、止められる可能性が高いと語る。

「あの巨人に接触さえできれば、ユミルと話し合えるかもしれない」

「……君を、一緒に連れて行けってことかい？」

「絶対とは言えない。でも、可能性はゼロじゃない」

ハンジは考えこんだ。確かにこれまでのユミルの寵愛の件を考えれば、可能性はあるかもしれない。

だが、矛盾はある。

始祖ユミルは今、アウラが愛してやまない兄を犠牲にするようにして、ユミルの目的とやらを成し遂げようとしている。

ならばいくら「寵愛の子」と言えども、ユミルがその言葉に耳を貸すだろうか。しかし、アウラの提案以上の有効打も思いつかない。

「…わかった。君を連れて行こう。ただし、難しかったら私たちはジークを殺すことも吝かでない。無論、エレンを殺すことも」

「絶対、ユミルを説得します」

「頼むよ。…まあその前に、色々課題は残っているだろうがね」
地ならしは続いている。

そしてその内側では、マールとパラディ島勢力の戦いが続いているのだろう。

それを収めて——あるいは、その混乱に紛れてアルミンといったエレンの行動に反対を示す者を集め、裏で行動する。移動の頼りになるのはアズマビト家しかない。

ヒイズル国が「地ならし」のターゲットに入っているかは不明だが、エレンは壁外以外を踏みならす旨を話した。

ならばキヨミの説得も、そこまで難しくはないだろう。

「……できればマールを、こちら側に付けたいね」

「マガト隊長を？」

「アニがどうか説得できないかな？」

「…向こうが戦っている中で難しいんじゃないの。流石にマーレ側が動けば、イエーガー派にもこっちの動きが勘付かれちまうと思うよ」

「そうだよねえー…」

やはり、最善は争いを収めた上で、行動することだろう。

しかし「地ならし」が起こっている以上、そう長く時間はかけていられない。

「ひとまず我々が動くのは、この巨人たちが過ぎ去ってからだな…」

アニに巨人化する力はもう残っていない。

回復するにも時間を要するし、純粹に大型巨人の間を通るのは危険である。

さらにエレンを止めるなら、なるべく戦力となる巨人化能力者は、体力を温存させなければならぬ。

「おなか、空いたなあ…」

ハンジとアニの視線が巨人の進行に向いている中で、空を仰ぎ見たアウラ。

彼女がポツリとつぶやいた声は響く足音にまぎれ、二人に聞こえることはなかった。

???????

シガンシナ区では変化が起き始めていた。
時は壁が崩壊し、ガビたちがそれに巻き込まれた場面にまで遡る。

瓦礫から咄嗟に子どもたちを守ろうとしたのは、コルトだった。しかし破片は三人を容易く潰せる大きさを誇る。

もうダメか、そう思われた時。彼らを救ったのが《鎧の巨人》であった。

しかしその鎧は、壁の硬化が解かれたと同時に剥がれていた。ライナーは三人を守れたものの、本体に大きなケガを負うことになる。

彼らはひとまず気を失った眠り^{ライナー}姫が戦いに巻き込まれないよう、人気のない民家へと移した。

比較的、コルトたちと近い場所にいたはずの女型については姿を消していた。

混乱の中で彼女がどうなったのかわからずどうすべきか話し合った結果、マガトの元

へ向かおう、という話になったのである。

そして、戦士候補生三人が向かっていた中遭遇したのが、アルミンだった。

屋根の上にはいた彼が、下で敵に見つからないよう行動していた三人を見つけたのだ。

「動かないで！」

銃口を向けるガビ。

対し、武装し、雷槍を含めれば優位な立ち位置にいるはずのアルミンは手を挙げ、三人の元に降り立った。

「こんなことを言われて信じられないと思うけど、君たちと話がしたいんだ」

青年の顔は、鬼気迫るものだった。

さらに上でワイヤーの音が響き、ジャンやコニーなど、104期の面々が突如下に降りたアルミンを不審に思い駆けつけた。この時点でガビたちに勝ち目はないと言っている。

「……話って、なんだ」

ガビとファアルコを背に隠し、コルトは一步前に出た。ガビが驚いた表情を浮かべた

中、手で銃口を下げさせる。

争えば確実に命はないと判断しての、コルトの行動である。

「…ありがたい、話を聞いてくれて。ジャンたちも武器をしまつてくれないか？」

アルミンの頼みに仲間たちが戸惑う中、誰よりも先に武器を納めたのが、一步遅れて到着したサシヤである。

その瞬間、サシヤとガビの視線が交差した。

「アルミンの言うとおりにしませう、ジャン、コニー」

二人はサシヤを視界に入れ、敵の三人を見た後、ブレードをしまい両手を挙げた。ずっと思いつめた表情を浮かべているミカサについても、武器をしまった。

「話っているのはね——」

そう言いアルミンが切り出したのは、エレンを止めたい、という内容だった。

未だ104期生の中で、意見はまとまっていない。

エレンを止めなければならぬ、と考えているのがアルミンで、ジャンは苦渋の判断ながらエレンの行動に賛成派にいる。

対しコニーは迷っており、サシヤも迷いながら、アルミンの意見に賛成の考えを強め

ていた。

そしてミカサは、おそらく誰よりも悩み、苦しんでいる。

「僕らの方も、まだ意見が纏まっているわけじゃない。エレンはパラディ島の人間を救おうとしているけれど、そのために大量の人間が死ぬことは看過できない。決して、許されるべきものではない…!!」

「……それで、私たちにどうしろって言うの」

「協力…できないだろうか。僕らと、マーレ側で」

まずはアルミンたちがマーレ側と組む。そして戦いの矛先を、イエーガー派に向ける。

その後に味方につけるべきなのが、ピクシス司令。彼もまた、エレンの行動を容認しないだろう。

ピクシスはヒトの命を天秤にかけられる男であるが、その天秤はいつも、より多くを助ける選択に向く。

その天秤はこれまで、壁内人類を乗せてきた。

だがエレンの行動で、その天秤の中に世界の人間も含まれることになった。

必ずピクシスは自分の考えに賛同してくれると、アルミンには確信があった。

だからこそ、まずはマーレ側から。

「今中央を仕切っているのはイエーガー派だ。彼らを押さえるには数が必要になる。その点、彼らが脅しに使っていたジークの脊髓液は、今効力がない」

「……なぜ言いきれるんだ？」

コルトがアルミンに尋ねる。

アルミンは瞳を伏せて、一つの考えを示した。

「そもそもジークはどうして『叫び』を使わなかったのか、って話になるんだ」

使うタイミングはいくつもあつた。

エレンがヨロイと女型に追い込まれている時。あるいは、車力とマガトのコンビが放った攻撃が命中した後などだろうか。

ともかくピンチの場面で使うべき『叫び』だつたはず。そのためにも、脊髓液入りのワインが用意されていたはずなのだ。

「心情的に『叫び』を使えなかったのか。もしくは……使えない状況ができていたのか。わからないけれど、必要な場面がいくつもあつたのに、結局ジークは叫ばなかった」
ゆえにワインの脅しは、効力をなさないと考えた方がいいと、アルミンは言う。

その上でピクシスとワインを飲まされた兵士たちを加えることができれば、イエーガー派を押さえ込める可能性は高まる。

「…あの、ちよつといいですか？」

「何かな？」

恐る恐る、といった様子で手を挙げたのはファルコ。

ガビがエレンを狙撃し、その銃撃の反動でひっくり返った少女をコルトが受け止めたその間に、少年はエレンの一部始終を目撃していた。

ほんの一瞬の中の出来事。

エレンの首から伸びた脊髄のようなものと、それがジークに絡みついたこと。

そして、その事を知らされていなかったガビとコルトは、ファルコに詰め寄る。

「何でそんな大切なこと教えなかった（のよ・んだ）!!」

「いや、アレが何だったのか、ずっと考えてて…」

白く、脊髄液のような、奇妙な物体。それが少年の心を引きつけ、離さなかったそう
だ。

ファルコの発言で、ジークの「叫び」の脅威は、今のところ発現しないとの考えが強まった。

この間にガビがエレンを狙撃したこと（首を狙うつもりはなかったことを踏まえて）が明らかになり、ミカサがプッツンして同期全員がかりで取り押さえるなどしつつ、仮のアルミンたちと、戦士候補生たちの共同戦線が組まれることになった。

スムーズにいったのは、斯様な場面でもっとも拒否反応を起こしうるガビがすんなりとOKしたからだろう。

その理由に、アルミンたちの中にサシャがいたことが大きいのは言うまでもない。

ちなみに義勇兵については、そこまでの脅威にはならない、と判断された。

中心のイエレナはジークの計画がエレンに阻止された以上混乱しているはずであり、その時点で義勇兵の力は半減する。

それだけイエレナが、恐ろしい人物の裏付けにもなっている。

彼らは兵士であるが、立体機動を駆使するパラダイ島の勢力と比べると、相性が悪い。仮に戦うことになっても、押さえることは簡単である。

そのため脅威の度合いが、「イエーガー派」<<<義勇兵」となっているのだ。

そして、それから戦士候補生は説得も含め、マガトたちの元へ向かった。対しアルミンたちはピクシスの元へ向かうことになった。

「表情が暗いけど……どうしたんだ、ガビ」

「……うん、大丈夫だよ、ファルコ」

104期生の面々と別れた後、少女は少し顔色を悪くした。

ガビの中でよぎったのは、エレンに巻きついていた奇妙な人間らしき物体。

アレが何なのか、わからずにいた。少なくともファルコやコルトに見えていれば、話に出たはずだ。

しかし出ていないということは、あれは、あの不気味なものは、ガビにしか見えていなかったということになる。

「フウ……」

ゾワゾワとした感覚を断ち切るように、ガビは首を振った。

どこか見覚えのある不気味な物体を、頭の外へ出そうと努めながら。

そして内部では戦士候補生の話を受け、マガトはアルミンたちに協力することを決める。

また事情を聞いたピクシスも、頷いた。

彼としてはマーレとこのまま戦い続け、仲間が死ぬことを憂慮していたこともある。

「なら、あの男も必要になるじやろうな」

すでに逃られる状態のはずだが姿の見えない男、キース・シャーデイス。

人には——それも仲間には、ブレードを抜かまいとしているに違いない。

ピクシスはやれやれ、という風に頭を押さえる。

訓練兵の安全を考え、あえて彼らをイエーガー派に付かせたのだらうとも、容易に想像できる。

シャーデイスの拳に傷がなかったことも踏まえ、雄弁なアルミンが事情を語れば、それだけでイエーガー派の一部を仲間にできるに違いない。

「しかし本当にエレンを止める気が、アルミン」

ピクシスに尋ねられたアルミンは瞳を大きくさせ、唇を嚙む。

「……一人で勝手に行くバカを止めるのが、幼なじみの役目ですよ」

ああ、とピクシスは息をこぼした。

エレン・イエーガーは、この上ない友人を持ったに違いない。

同時に彼はおっさんを逆さにして、その隠部に繋がるホースを元貴族の男の口に突っ込み、「美しい……」と絶頂する友人の姿を思い出した。

「いや、もっと友情に満ちた思い出もあったはずなんじゃが……」

どうにも拷問しながら笑っている姿しか思い出せない。

顔色を悪くしていくピクシスに、アルミンは心配の表情を見せた。

今宵は、ザックレー^美の星が見えるかもしれない。

それは正直見たくないな、とピクシスは冷静に思った。

んんんん (8)

「地ならし」が始まってから一夜明けても、大型巨人の進行は続いていた。

夜になってからはマーレ側が歩哨を立て一時戦闘を中止したことで、イエーガー派も戦闘の疲れを回復させるため、同様に歩哨を立て休息に入った。この間敵前逃亡を「否」とする流れも、イエーガー派の中にはあった。

そしてイエーガー派に気づかれないよう動いた、マーレ側とアルミンたち。

数名で密かに合流した彼らは作戦を組み、翌日の陽が上がって間もない頃、イエーガー派を取り押さえることに成功したのである。

義勇兵については、一部以外は念のため拘束された。

ジークの真の計画を知っていたイエレナについては、言わずもがな。

また、彼女についてはエレンが向かう行き先を知っている可能性があるため、情報を吐かされている。これについてはイエーガー派も同じである。

この際イエレナの尋問——否、拷問を行ったのは、マガトだった。

そんな中、懸念視されたのは、エレンやイエーガー派を推す住民たちの声。

しかし壁内でも壁の崩壊に巻き込まれ、少なくない被害が出ていると予想でき、エレンに不信を募らせている者も現れていると推測できる。

どの道エレンを止めれば、世界の悪意がパラディ島に向く。さすれば混乱も当然起きる。

要は、遅いか早いかの話だ。それでも彼らはエレン・イエーガーを止めようと動く。島の人間の命の代わりに、その外にいる種や生命が淘汰されることを、「否」として。

ひとまず巨人の行進が止まるまでは、動くことができない。

超大型を持つアルミンなら別かもしれないが、彼が巨人化すればシガンシナ区にいる人間を危険に晒す。

そのあと動く場合、アルミンたちはアズマビト家の力を貸る必要がある。

彼らについては、エレンがユミルの民に告げた「壁内以外が地ならしによつて踏みならされる」事実を告げれば、十分力を得られるだろう。

ただし、硬質化が解かれたことによつてライナーのヨロイ（ガビ談）も剥がれたり、バラバラに進むのではなく列を成して巨人が進んでいる点から、エレンの意思が反映されている可能性がある。

そのため、パラディ島の味方であるヒイズルが地ならしの標的にそもそも入っていない可能性も考えられた。

「…ミカサ?」

各々が一時の休息を取っている中、ノックの音とともに、アルミンの声が響く。

返事がないため彼が部屋の中に入れば、部屋の隅でうずくまっているミカサの姿が目に入った。ミカサは赤いマフラーに顔を埋めている。

「パン……持ってきたんだ。何か食べないと、体が保たないよ」

「……………」

「…マフラー、付けたんだね」

その言葉に、ミカサが少し顔を上げる。

彼女の隣に座ったアルミンは、半分パンをちぎり、ミカサの手に握らせた。

「マフラー……ルイーゼが付けてた」

「ルイーゼが?」

ルイーゼとは、四年前トロスト区の壁が壊された時、ミカサが助けた少女の名前であ

る。

彼女に憧れ調査兵団に入った少女はしかし、イエーガー派の一員となる。

どのような心境の変遷があり一派に加わったのか、ミカサにはわからない。そこまで興味がないと言つてしまえば薄情になつてしまうが。

でも、事実なのだ。

彼女の中の世界は両親が死んでからエレンでできていて、その中にいつの間にかアルミンやイエーガー夫妻、104期生など、エレンを押しやつて彼女の中に入ってきた。

それが心地いいと思うミカサは、精神的に大きく成長している。

それでもエレン・イエーガーに依存しているのは、変わっていない。

エレンがどのような感情を抱いているのか、彼女はわからずにいる。

少なくともミカサは彼のことが好きだ。家族として、異性として。

エレンも自分のことを好いていてくれれば、嬉しいと思う。

向こうがキスをしようと顔を近づけてきた経験があるにも関わらず、自信を持って「エレンは私のことが好き」と言えないのは、ひとえにミカサの精神性のせいである。ちゅーと、好きの回路が繋がっていない。これを繋げるにはお互い言葉として、「愛」を表現する必要がある。

少し話は逸れたが、件のルイーゼは、今回の戦いで雷槍の破片が腹に当たり、もう長くは生きられない状態となった。

ルイーゼがマフラーを持っていた経緯については、マーレの襲撃が起こる前に、エレンが彼女にマフラーを捨てるよう頼んだ。

そしてその持ち主が恩人のミカサのものであったこともあり、捨てられずに身につけていた結果、マフラーがミカサの元に戻ってきたのである。

ちばみにミカサがマフラーを持っていなかったのは、イエーガー派に捕らえられた後に、武器と共に取られたからだった。

「…エレンはこのマフラーを、捨てようとしていた」

その内容が、ミカサとアルミンに突き放すようなマネをした、エレンの姿と重なる。アルミンの言うとおり、エレンがジークに従うフリをしていたのは確かだ。

その理由は仲間を、ひいてはパラディ島を守るためである。

その気持ちは嬉しい。けれどその過程で多くの人間が死ぬことは、あつてはならない。

「私たちを拒絶しなくても、よかつたはず。でもエレンは言った。私のことが「大きい」だ……って……」

「……ミカサ」

「私は、私はエレンのことが好き……でも、でもっ……」

ミカサはまた顔を埋め、肩を小さく震わす。

「…エレンはきつと、僕たちをわざと遠ざけたんだよ」

「……」

「言っておくけど、ミカサ。僕だけじゃなくて104期生のみんなも、二人が互いを想い合ってるって気づいてるからね。もちろんこれは“ライク”じゃなくて、“ラブ”の方だよ」

「……え？」

「マールレの難民キャンプの場所で、二人がキスしそうになってたのも知ってるからね」
「えっ……!?!」

「二人が居なくなつたから探して、そしたらスリをした子どもについて行く姿を発見してね。その後をみんなでコッソリ追つたら……ね？」

「……ッ、ッ!!」

「そういうわけだよ。ミカサが違うと思つていても、側から見た10人中10人、キミらを恋人同士つて思うよ」

イイ雰囲気になつた二人を目の当たりににし、一人のイケメンが血涙を流しながら沈んだ地平線に駆けていきそうになつたが、それはまた別の話である。

アルミンはトドメに、テントで二人が手をつないでいた件を話そうと思つた。

ただミカサは顔を真つ赤にして呆けてしまつてゐる。これ以上追い詰めれば、倒れてしまふかもしれない。

しかし彼は話した。ゲス顔で。

「……………」

ハニワのようになつたミカサは、ズシヤリと横に倒れる。

アルミンが「多分テントのやつに気づいたのは僕だけだよ」と言うが、今のミカサには何の慰みにもならない。

「…ねえ、ミカサ。ここまできて、エレンが本当にキミのことを嫌いだと思ふかい？」

「……………ううん」

「その言葉が聞けてよかつたよ」

アルミンはミカサを引つ張り起こし、二人並んでもそもそとパンをかじる。

ここにいるべきはずのもう一人は、いない。その無視できない居心地の悪さを、二人は感じている。

「…アルミン、エレンはどうして、私たちを遠ざけるようなマネをしたんだろう」

「……これは、僕の憶測でしかないよ」

大切に思うからこそ、突き放したのではないのか、と。

エレンの言葉の一部にその真意が出ていたと、彼は言う。

「アッカーマン家の性質について、エレンは語っていたでしょ？一人の主君に云々……つて」

「…うん」

「その性質の真偽についてはさておいて、ミカサは実際エレンに依存している。それを見越しての発言だったんじゃないかな」

エレンもアルミンも、寿命が限られている。特にエレンはあと四年の命である。

それだけでなく「地ならし」を行った後、エレンは止めようとする勢力は現れる。

それにミカサを巻き込みたくなかったのかもしれない。

仮に地ならしを終えても、壁内に反イェーガー派を掲げる人間も現れるはずである。

「もしくは……止めて欲しいのかもね」

「止めて……ほしい？」

「わからないけど、エレンは少なくとも「もうこの方法しかない」と思つて、その上で地ならしを行つたんだ。僕がもし同じ状況に追い込まれて、そして命を冒険する行為を行わざるを得なくなつたなら、救いを求める」

「……それが、私たちつてこと？」

「わからない。わからないんだ……でも、僕はそう信じたい。エレンが心のどこかで、僕らに止めて欲しいと、願つてゐるって」

残つたパンを口に詰め込んだアルミンは、持つていた水筒の水を胃に流し込んで立ち上がると、背筋を伸ばし、右手を心臓に当てる。そして、ミカサに向き直つた。

「4年前にトロスト区襲撃が起こつた時、エレンは僕をかばつて巨人に食われた。そのあと腑抜けになつた僕をミカサ、キミが立たせてくれた。戦意を失つたみんなに刃を掲げて、己の力を示した。ミカサは強い。それは、間違いない」

「……………」

「でもキミは人間だ。僕も人間だ。そしてエレンだつて……人間だ」

強さばかりじゃない。弱さも持ち合わせるこそ人間なのだ。

だからこそアルミンは戦う。仲間のために、壁外の人間のために、そしてエレンのため。
めに。

「僕たちといっしょにエレンを止めてくれ、ミカサ。あのバカを止めるには、絶対にキミが必要だ」

差し伸ばされた、アルミンの手。

それを見つめていたミカサはパンを口に詰め込み、アルミンから水筒を引ったくる。咽せるのも構わず胃に水を流し込みと、アルミンの手を握った。

その漆黒の瞳はまっすぐな意志を伴い、彼女に剣を握らせる。

???????

シガンシナ区側ではエレン阻止に向け、メンバーが決まっていた。

メンバーはまず、巨人化能力者は参加必須である。

その他については、一歩間違えればエレンを阻止しようと動く彼らがパラディ島にとつての「反逆者」となり得るため、メンバーの人選も言い方としては変だが、すべてを捨て去る勇氣がある者——に、限られた。

そして、一夜経つてぐっすり寝ていたナイスガイも話し合いに加わり、本当にどうしようもない男にジャンの「んんんん」が決まった。マルコの死の真相をジャンが知つたためである。

マルコを殺した巨人を、怒りに任せて殺した兵士ライナー。

対し、マルコを巨人に食い殺させたのが戦士ライナー。

一回聞いただけでは意味がわからないが、これが事実なのだから本当にどうしようもない。

過呼吸ぎみに「俺を許さないでくれ……」と語つた彼の望みは叶つただろう。

どんな形であれ、ジャンがマルコのことについて、戦士たちを許すことはないのだから。

それとはまた別で、共同戦線を行うメンバーとして歩み寄りを見せたものの。

して、巨人化能力者の他に、104期生の面々も参加。

戦士候補生については、生き残ったマーレ兵同様、ピクシスにより安全を保障された上でパラデイ島に留まることになった。

マーレ人にとっては複雑な心境だが、彼らが「悪魔の民」と称するこの場所が、皮肉にも今世界で一番安全な場所なのだ。マガトの判断に否定する者はいなかった。

またマガトも参加し、オニヤンコポンも自らの意志で参加を選んだ。

対しハンジと兵長についてはフロツクの証言で、生存が望み薄とされている。特に雷槍を受けたリヴァイに関しては。

エレンの目的地については結局、イエレナもフロツクも吐かなかった。

さらにアニが混乱のどさくさに紛れて行方をくらませたため、マガトらは彼女への不審も強めていた。

そしてようやく、巨人の足音が止んだ頃。

被害の状況確認やガレキの撤去作業に向けて、シガンシナ区に集められていた憲兵や駐屯兵団が、目まぐるしく働く中。

ハンジたちが、アルミンたちに合流する。

ちやうど彼らがキヨミがいる港へ向かうべく、列車の準備をしていた時だった。

イエーガー派がすでに全員取り押さえられていた事実を知り、驚いたハンジたち。さらにその中にしれつと混ざっているアニ&アウラ。

ちなみにフロックから、アウラ・イエーガーにジークの脊髄液を飲ませた件や、ジークの“叫び”に反応して(?)彼女が巨人化したのち、腹から兄を生み出してうなじから出てきたこと。

また、シガンシナ区に現れたガイコツの巨人Ⅱアウラであることは、語られている。

ということとは、エレンが姉を食い殺したことに他ならない。

この情報についてはアルミンやピクシスに、フロックを尋問した兵士など、ごく一部の者しか知らなかった。

事前に事情を知っていたアルミンとしては、本当にわけがわからない。

しかしそれ以上にアニを前にして、彼は心臓を抑えるハメになった。

互いに情報交換が必要となり、一同がアウラが語る内容に衝撃を受ける中。

アニを見つめ、もじもじとするアルミンにアニが煩わしそうにしつつ、話が進む。

そして参加する巨人化能力者の中にアルミンが入っていたことで、アニは消去法で彼が超大型を継承していることに気づいてしまった。

本日二回目の、「んんん」が起こった。

ライナーの時以上の暴力がアルミンを襲う。

血で溺れかけ、息ができず、理性を失ったアニを止めようとジャンやコニーが動いて、吹っ飛ばされる始末。

最終的にミカサが動き止めることができたが、一歩間違えればアルミンは死んでいた。いや、むしろ死ななかつたのが奇跡というほどである。

激昂するアニ・レオンハートをしかし、誰も咎めることはできなかつた。

誰もきつと、見たことがなかつた。それこそ付き合ひの長いライナーやピーク、マガトでさえ。

そこにあつたのは、ミカサに羽交締めにされ、涙を流すひとりの女の姿。

アルミンは「……ごめん」とつぶやいた。

その姿さえアニには、
ベルトルトと重なって見えた。

*

日もまだ高い中、おおむねの準備が整い走り出した列車。

ここから港までしばしの旅路である。

敵と味方が入り交じる奇妙な相席だった。

当然と言えば当然だが、みな口数が少なく中には疲れのせいで船を漕いでいる者や、持ってきた食料を口に入れたまま大の字で眠っている猛者もいる。

その中に、隅で空を仰いでいる女がいた。

アウラ・イエーガー、残念ブラコン美女である。

アニの件に内心ニコニコしているこの畜生女もまた、作戦に参加する流れとなった。ユミルの「寵愛」を受けし女。彼女が語った始祖の本当の保有者や、ユミル・フリッツの目的は全員を驚愕させた。

マール側からすれば、目と鼻の先に目的の人間がいたことになる。

この際アニがアウラと組んでいたことも、明らかになっている。

しかしてアウラ本人が彼女を利用したことを強調して告げたため、アニへの批判的な

視線は少なかった。

また、マガトが疑問に思っていたヴィリー・タイバーの件。それについてもアウラは語った。

歴史の転換点になる場面で現れた、始祖ユミルと王家の血を継ぐ女。

これをひとつの「運命」としてヴィリーは受け取ったのだろうと、マガトは推察した。

だからこそその、『神は罪深きエルデア人をどう思っているのだろう』という発言だったのだろう、と。

無論アウラが作戦に参加するに至って、難色を示した者もいる。

そもそも、多くの人間を騙してきた女の発言を信用することができない。

しかしユミルの「寵愛」という事實はホンモノであり、気になる矛盾を除いても彼女がユミルを説得すれば始祖を止められる可能性は十分にあった。

そして、アウラがエレンたちを止める理由もある。

——ジークを助ける。

その一点のみを鑑みれば、これ以上に彼女を信頼できる理由があるだろうか。

逆に言えば、それしか難色を示すメンバーを説得できる理由がなかったのだが。

この説得を行ったのはやはりとうか、アルミンだった。
エレン・イエーガーを止めるべく、短期間の間に彼はもやしのような成長速度で育っている。

「何を見ているんだい？」

体育座りをし、縁に頭を乗せて上を見ていたアウラ。

彼女の隣に腰かけたのはハンジだった。

「思い返せば君つてき、よく空を眺めていることが多かったよね。壁外調査中なんかも
や」

「……ずいぶんフレンドリーに、話されるんですね」

「なに、もうムカムカしていた分は殴ったからさ。何なら着くまで巨人について「嫌です」
……」

しかめっ面を隠さず、「NO」とアウラは告げる。

頬をかいたハンジは複雑な心境ながら、今は不思議と懐かしさの方が勝っていた。

なぜだか考えて、彼女の服を見て、ああ、と独りごちる。

アウラが着ている服。急きよ用意された末に彼女が着たのが、調査兵団の服。新式のそれに袖を通した姿に、仲間だった頃のことを思い出してしまったのだろう。

片や副分隊長で、片や分隊長。

それが今や、パラディ島とマーレの裏切り者と、調査兵団団長。

しかしその距離感は、変わっていないように思えた。少なくともハンジは遠ざけていたが、アウラは変わっていない。だからこそハンジはその距離を縮めてみようと思ったのだ。

知りたいこともまだ、あったため。

「これまでのことをすべて水に流そうとは思わない。けれどその上で私は、今の君と話がしたい」

「巨人の話はしませんからね」

「わ、わかったって」

どうやら相当アウラ・イエーガーにとって、ハンジとの楽しい（語弊）巨人トークはトラウマを残すものだったようだ。

畜生女の顔色が若干悪くなっている。ゾエは悲しんだ。

「まあ、質問になってしまふのだけれど、君は四年前の《獣の巨人》が威力偵察に来たとき、右足を食われたそうじゃないか。始祖ユミルなら、普通止めそうだと思つただけだ」

それにアウラは「個人の推測である」と前置きして、ユミルが初代フリッツ王の奴隷だったことを挙げ、似たような構図がジークにも起こっていたのだらう、と語る。

要約すればジークが命令を下した巨人に、ユミルが介入できなかった——ということなの。

なるほどねえ、とハンジはつぶやいた。

「というか、ミケ・ザカリアスはいないんですね」

「ミケかい？彼については参加する話もあつたが、妻がいるからね。死ぬ可能性の高い旅路に、巻き込むわけにはいかないからって、私たちが合流する前に参加させないことになつたみたいだよ。その代わりとして団長の私が抜けるから、その間に代理団長として調査兵団の指揮を頼んだ」

「ツマ……………」

「あれ、知らなかったかい？……いや、知らないか。結婚したんだよ、ナナバと」

「……………え、っ!!？」

「子どももいるよ」

「ふええ……………」

驚いたまま固まったアウラ。

ミケ本人から衝撃の事実を聞かされた時のハンジと、同じリアクションをしている。

「それと、ヒストリア・レイスを助けた件だ。あの場面については、君の利点になることは一切なかったように思える」

「……………似ていたからですよ」

「ジーク・イエーガーと？」

「私の思考回路がすべてお兄さまに直結すると思うなよ」

「じゃあ空を見るのは？」

「お兄さまを感じるからです」

「……………」

ハンジの胡乱な視線を無視し、アウラは話す。

彼女曰く、意識が朦朧としていたこともあり、ヒストリアをユミルと勘違いしたそう
だ。

それならばまだ納得が行くのかも知れない。ハンジはユミル・フリッツを見たことが
ないため、比較できないが。

「では、サシャ・ブラウスを助けたのは、なぜだい？」

ゴーグルを付けた顔が近づくと、まるで逸らすことを許さないというように。

白銅色の臉がゆつくりと瞬いて、ハア、と息をこぼした。

「撃たれて、それで、お兄さまのすぐそばで死のうとしたからですよ」

「本当かい？」

「ええ」

「じゃあ君は首尾一貫として、これまでずっとジーク・イエーガーのために生きてきて、
他の人間には見向きもしなかったってことかい？ 私たちのことをなんとも思っていな
かったと？」

「…さあ」

「はぐらかすな」

「……あなたやつぱり、まだ根に持っているじゃないか。私が裏切ったこと」

ハンジは口を噤み、距離を離す。

例えばフロツクの言っていた通り、アウラがジーク・イエーガー以外に何の感情も抱かない人間であつたのなら、彼女も線引きできただろう。

だが共に過ごした期間が長いからこそ、うまく否定することができない。

いつものようにキツパリと、切り捨てることができな。情けない話だった。

エルヴィンであれば、自身の感情ひとつ、強靱な精神力をもつてして抑えることができただろう。

「正直に言ってあげましょうか？ 気持ち悪くなると思いますが」

「……ああ」

「友人と思っていましたよ、一応。その上であなたや仲間、そしてエレンを切り捨てた美女がこの私、アウラ・イエーガーちゃんです」

「……」

一応、友人だったのか。それに自分を美女と形容する美女がいるのか。

「あのがめつい少女を助けたのは、助けたいと思ったから。それだけですよ」

「……………それ、サシヤ本人には絶対言つてないだろ？」

「言いませんよ。言いたいなら勝手にあなたが言つてください」

もういいですか？——と、アウラはまた顔を上げる。

「最後にもう一つだけ、いいかな」

「…まだ何か？」

「ウオール・マリア奪還作戦のとき、私と目が合つただらう？何をその時思つたんだい、君は」

「そうですね…」

白銅色の瞳はぼんやりと、どこか遠くを捉えている。

「あなたが片つぽになった瞳で私を見ている事実が、嬉しくて、さみしかったですよ」

そう言い、アウラは自嘲げに笑った。

???????

港へと到着した一行。

キヨミの協力を得られたものの、沖では大量の蒸気が上がっていた。巨人の熱が海水を蒸発させているせいである。

また飛行船の整備には半日かかるとし、その進行速度から「地ならし」によりすべての大陸は踏み潰されるまで、4日程度しかかからないとされた。

時刻は夕暮れを間近としており、そこから夜を跨いで急ピッチで用意したとして、朝になつてしまうだろう。

つまり地ならし開始から3日目の朝となる。

さらに準備ができ、観測できる巨人の進行方向の先を割り出した上で言えることは、彼らがマーレ大陸に向かった頃にはすでに、巨人が上陸しているだろう、ということ。

巨人が向かう先はパラディ島から南西。

マーレに巨人がたどり着いた場合最初に被害を受けるのは、北東部である。

マーレ——特に戦士らは、沈黙した。

大陸の北東部には、レベリオ区もある。突きつけられた現実は、「今向かったところで、家族は死んでいるだろう」というもの。

「…それでも、俺は行く」

ライナーが言う。

その言葉に「私も」と、ピークが続いた。

マガトは険しい表情ながら、戦士たちの顔を順々に見つめた。男が最後に視界に入れたのは、アニ。

アルミンの顔だけでなく、腕や足、腹まで蹴りつけていた彼女。その後は一人、ずっと思いつめた様子で黙ったままだった。

アニを幼少期から見えてきたマガトは、肉親を救えないと知った彼女が、戦いに不参加を示す可能性を考えていた。

彼女は誰よりも肉体的戦闘に長け、その手や足で人間を壊し、殺してきた。

だからこそ戦士の誰より戦いに辟易としていることは、隊長たる男もわかっていた。しかし戦士が戦争への出兵を拒もうものなら、戦士候補生に食われるだけ。

しかし今は彼女が拒んでも、それを理由に彼女を殺すことはない。

「……………私も、行くよ」

アニは言った。それを聞いた瞬間、戦士やマガトが目を見開く。三人が三人、予想外の返答だったのだ。

「何、面食らった顔してんだい。私が参加しないとでも思ったわけ？ エレンをこの手で
あの野郎
蹴るまでは、私も止まらないから」

殴るではなく、蹴る。その違いに彼女の殺意が透けて見えた。

マーレ側が思い描いた、アニの反応との差異。

それが引き起こされた原因がアウラかもしれないと行き着くのは、そう難しいことではなかった。少なくともアニは父親を引き合いに出して、脅されている。

四年前から精神的に暴力性が増していたのも、これが所以なのかもしれない。

「……………」

ライナーは無意識に、ケツを押さえた。

半シンの母体

夜も更けてきた中、港で話し合われたのはエレン・イエーガーがマーレに上陸した際、最初に狙う場所についてである。

イエレナもエレンの腹心と思われるフロツクも、ついで情報を吐くことはなかった。爪を剥がされようが腕を折られようが、決して話さない。

リヴァイ論で言う、拷問を受けて爪一枚剥がされても情報を吐かないヤツは、二枚三枚剥いでも同じ、といったところだろう。

予想として、まず最初にねらわれると考えられるのは、マーレの北部にある「カリファ軍港」。

そこにはマーレ組の情報によると、世界連合艦隊が集まる場所であるという。地図から見てその軍港がある場所は、巨人が進んでいる方角と一致している。

また他に攻撃目標となる場所がないか、ないならそのままマーレ国が踏み鳴らされ、陸続きの中東に被害が出るのか——など議論される。

「ちよつと待つてください」

と、手を出し、話を一旦止めたのはピーク。

彼女が目につけたのは、マール大陸の南にある砦、「スラトア要塞」。

この場所は飛行艇の研究基地が存在する。

エレン・イエーガーはパラディ島以外の人間を全員駆逐しようとしている。

そうなった場合、彼が手出しできない物がある。それが空に逃げた人間だ。

世界連合軍を倒しても、そのスラトア要塞に兵を集め、空から攻撃をしかけてくる可能性もある。

以上を踏まえ、スラトア要塞がカリファ軍港に次ぐ、第二の攻撃目標となり得るかもしれないとピークは結論づけた。

「エレン・イエーガーの進行経路としては、ここから北西に向かって第一攻撃目標へ。その次に大陸と海をまたいでやや南西よりの南に進み、第二攻撃目標に到達すると考えられます」

時間を考慮した場合カリファ軍港には間に合わないと考えられるため、彼らが向かう

のはスラトア要塞。

そこにエレンが到達するまでには、先回りすることができる。

「アウラ・イエーガー」

「何でしようか」

卓に置かれた地図を囲んでいる人々。

ランプの光が部屋をゆらゆらと照らす中で、ピークはアウラに問いかける。

「この際余計な疑惑は捨て去った上で、あなたをエレン・イエーガーに接触させるとしましよう。して、具体的にその『接触』とは、物理的にあの巨大な巨人に触れたことを「接触」と言っているんですか？」

「ええ、触れれば何かしらアクションは起きると思います」

「確信を持って言えるのは、なぜですか？」

その疑問を他の人間も抱いていたようで、無数の目がアウラに向く。
視線の中心の女はジッと、地図を見つめた。

「信じてもらえないと思いますけど、よろしいですか？」

そう言いアウラは、みながなぜアウラ・イエーガーが始祖ユミルの「寵愛」を受けているのか、疑問に思っているだろうと前振りする。

実際に、王家の人間であるから、では済まない度を越したその「寵愛」に、^{コッ}ニーと^バサシャを除いた者が首を傾げている。

その疑問を含めてアウラは、答えるという。

「『前世』——と、言えればいいのでしょうか」

その記憶自体は最初から思い出していたものではないとして、彼女は語る。

ユミルと『×××』。

双子だった×××人は当時：…と言っても恐ろしく古い時代だが、民族浄化を行うエルデイア人によって両親が殺され、奴隷にされた×××

そして自由を求めていたユミルと共に『×××』も逃げたものの、追ってきた人間によりアウラの方が先に×××死んでしまった。

ここまでが、『×××』の記憶。

×××

×××

その中に内包されている『×』の欠陥した異常性や、ユミルが『×』を嫌っていた真実は伏せられた。

前世であるからと、完全には覚えていないという体でアウラは端的に話した。

かいつまんで語ったそれは事実だが、例えるなら物の表面を説明しただけで、肝心の中身については触れていない。

アウラやユミルがお互いをどう思っていたか話されていない彼らは、「いつも一緒にいた」「手をつないで逃げた」と、まるで物語の文章の問題で、該当する人物の行動や様子からその人間の気持ちを読み取れ——と言わんばかりのアウラの語りには、「二人はお互いにとって唯一無二の存在であった」というような印象を植え付けられたのである。

そもそもユミルとアウラの関係性を知るのは、その二人だけである。

ユミル・フリッツの過去について、歴史に残っているわけでもない。

伝えられた彼らがそれを「真実」として認識してしまえば、それが正しいということになる。

この場でアウラの話に誰よりも先に、「誘導された真実」に納得したのがア二だった。彼女はの中で唯一ユミルと「座標」で会った人物であり、少女の容姿がアウラと

そっくりであることを知っている。

「あつ」と声を漏らした彼女にみな視線が向き、しまった、と言わんばかりにアニは口を押さえた。

そもそも彼女はユミルを見たことがあることを、誰にも話していなかった。
(それを言ったら、レベリオ区でユミルを見たことも黙っていたのだが)

そしてアニの証言を受け、アウラの話は信憑性の高いものとして確立し、信じられることになる。

なにせ双子は容姿が似る。一卵性ならば尚更。

自由になりたかったユミルの望みは今、エレンに託されているのだろう。

そして少女を「愛」の呪縛から解き放つ存在こそ、「ヒロイン」のミカサであるのだ。

しかしなぜアウラが再び転生したかについては、疑問が残る。

そもそも『X』が生まれ変わったとして、かつての容姿とそっくりな赤子として生まれたのは、~~やはり~~にも出来すぎた話ではないだろうか、と。

それについてはアウラ本人も、「わからない」と答えた。

「とりあえず接触させるなら、上から落とすのがベストと思うんですけど、どうでしょう」

ピークは用意した白紙の紙に巨人や飛行船の図を描いて、矢印を書き足す。

わかりやすく、かつ中々上手い絵を見たハンジは、無言でアウラを見た。

「何ですか、その目は」

「いやあ………何でもないよ」

落とす場合——いや、落ちる場合は飛行船の高度を落とし、立体機動を駆使すればエレンの元へ到着することも可能である。

目標の始祖は規格外の大きさのため、その上に乗ること自体は造作ない。

鎧や女型と比べても、明確な差があるだろう。

「わかつちやいると思うが、テメエが無理なら俺がジークを殺す」

皆の一步後ろで、椅子に座りながら話を聞いていたりヴァイ。

三白眼の瞳と、白銅色の瞳が交差する。アウラの方は瞳孔が完全に開ききつているが、一瞬間を兵長に向けたのみで、すぐに視線を地図に戻した。

この二人、行動を共にしてからこれまで一度も会話を交わしていなかった。

アウラ・イエーガーがユミルを説得できないなら、ジークを殺してエレンを止めることも念頭に置かれている。

それを誰より殺る^キ気でいるのが、リヴァイ・アッカーマンである。

重体であつたにも関わらずこの男、驚異的な回復力をみせ、他人の手を借りてではあるが歩けるようになつた。

右手の人差し指と薬指を失つてもなお、ブレードを震わせながら握るほど残つていゝる、ジーク^{エモン}への執着心。

リヴァイを残す話も出たが、頑として彼は拒んだ。

エルヴィン・スミスに託された最後を見届けるまでは、戦い続けなければならない。たとえそれで四肢をすべて失つたとしても、である。

「私が絶対にユミルを説得するので、兵士長の出番はないでしょう」

「お前の言葉は甚だ信じられねエがな」

「だまれこの、チツ、もごっ」

「はいはい、イイ子にしましよーね、アウラちゃん」

もごっ、と不満たらたらな唸り声上がる。

アウラの口を押さえたハンジは、気にせず話を続けるよう言った。

それから燃料についてはスラトア要塞まで保たないと判断され、キヨミの発案によってアズマビトが所有する格納庫へ一度寄ることに決まった。

場所はここから南にある、マーレ海岸都市オデイハ。そこで燃料を補給して、スラトア要塞に向かう。

時間的にオデイハに向かうまでにエレンの侵攻が迫るかもしれないが、致し方ない。そしてアウラ・イエーガーの説得が失敗した場合は、ジークを探し出して殺害。

もしくは頭部部分に在るであろうエレンを、アルミンの《超大型巨人》を使い吹き飛ばす。そのような方法が考えられた。

しかしアルミンとしては、大型巨人の力を使うのは最終手段で、その前にエレンとの対話を望みたかった。

だがアウラもアルミンも、実際に対話ができるかわからない。それでもアルミンは、胸中にある一つの考えを信じて突き進む。

「エレンが止めて欲しいと願う気持ちがあるのかどうか、何で勝手に一人で行動を起こしてしまったのか、聞かなくちゃいけないことがたくさんある。ミカサやジャンたちも、そうだろうか？」

104期生のメンバーは、静かに首を縦に振る。

また、エレンが内心止めてほしい——と願っているかもしれない裏付けとして、始祖を掌握したエレンが、他の巨人化能力者の力を奪っていない例が挙げられた。

始祖は文字通り、何でも可能とする。それこそ九つの巨人の継承者が巨人化できないよう、手を回すこともできるはずなのだ。

しかしエレンが巨人化した後起こったのは、ライナーのヨロイが剥がれたことのみ。

現状の行き過ぎた被害を踏まえれば、元々の計画にあった50年はおろか、さらに長期間パラディ島へ害をなそうとする人間は現れなくなるだろう。

まだ、止まることができる、きっと。

そして止めることができると、信じて。

相入れないはずのメンバーは、手を取り合う。

「……………」

そんな彼らの光景を見ていたアウラ。

ふと脳裏に過ぎつたのは、血に塗れたユミルと、^X初代フリッツ王の姿。
 その映像が次第に歪んで、血に塗れているのは『^X』、^Xそれを見ているのがユミルに
 変わる。

理解し合えない者と、理解し合える者の違いが何なのか、彼女にはわからない。
 ゆえに、不思議に思った。

???????

陽が地平線にのぞき始めた頃、アルミンたちはパラデイ島を出た。

大騒ぎの末、大陸から東に進む経路を経て、一つの飛行船がパラデイ島西部に到着し
 ていたことを知らずに。

ウォール・マリアから大きく外れる形で、到着したその一行である。

アルミンたちはその後、まだ地ならしの脅威が届いていなかったオデイハで無事、燃
 料を補給。

そしてすぐにそこを発ち、スラトア要塞へ向かった。

すでに巨人の進行は届いており、この時点でレベリオ区が巨人に踏み均された後であるとわかった。

彼らがオデイハを出発し空から見た景色で、北側に大型巨人の姿が見えたのだから。戦士たちはその光景を見て、すぐに前を向いた。泣き言をいう軟弱者はいない。

そんな部下たちの姿を、マガトは静かに見つめていたのである。

それから進んだ飛行船は、右手に見える地平線の奥でその姿をとらえた。

巨人の進みは場所によってまちまちであったが、南西に進むごとに巨人との距離は近づいていき、やがて眼下一面に巨人を一望できるまでになった。

そんな中、現れた小さな物体。

下が巨人の赤い色で覆われている中で、白いその姿はよく映える。

ムカデやゲジなどの、多足類の虫の体を骨にしてできあがったような、異様な見た目。悍ましい姿の巨人こそ、エレン・イエーガーその人である。

立体機動装置を身につけたアウラは、その異形の姿を静かに見つめた。

「四年のブランクがあるけど……大丈夫だろうね、アウラ？」

「ええ、ご心配なく、ハンジ。イけますよ」

エレンも船の存在に気づいたようで、首を動かす。

直後、始祖の巨人の背骨から突き出たトゲのような部分の先が発光する。そしてそのトゲから生まれる、巨人。

「ふふっ」

その姿を目にしたアウラは、笑った。

その笑みを間近で見っていたハンジは、ヒュツと、息を漏らす。

あまりにもその時の、アウラ・イエーガーの表情は、柔らかかった。

まるで、そう——まるで。

寝棺に入れられた、死体のように。

「待てッ、攻撃される可能性が——!!」

ハンジの制止を無視し、アウラは構わず、開けていたハッチから飛び降りる。

地上は踏みつぶされた人間の血と、巨人の赤い色で覆われている。

空はしかし、青空だ。

青と赤の境界線は、うっすらと白んで存在している。

彼女を祝福するように、存在している。

「イイ天気だよ、ユミル」

落ちて行く人間めがけて振るわれた、エレンが作り出した《獣》の巨人の投石攻撃。

飛行船と距離があつたため、中にいた人間たちはその攻撃を免れた。

地上の紅いシミに混じるようにして、大型巨人の中へと石にぶち当たったアウラの姿が消えてゆく。

その直後、彼女が落ちた場所から、白・い・ナ・ニ・カが現れた。

まるで飽和するようにその白い物体は大きさを増していき、やがて大型巨人を優に超える大きさとなり、一見すれば現状のエレンと遜色ない大きさへと変わる。

飛行船に乗っていた者たちはその白い物体を見て、息を呑んだ。

白い物体には、人間のような頭と胴体が存在する。

足は股関節部分から下がなく、地面に癒着している。

異様なのはその胴体。本来ある二本の腕のほかにその下、縦一列に無数の腕が生えて
いることである。

下の二本の腕はバランスが心もとない体を地面に固定するように押さえていて、その他はゆらゆらと蠢いている。また異形には柔らかな曲線と胸があり、女性の姿をしている。
た。

前のめりの姿勢で下を向いている頭から生えた白い髪は長く、地面に付いている。
しかし、その異形の目は見えるのだ。

まるでカタツムリのように、顔のこめかみから飛び出た巨大なそれは、ギョロギョロ
と蠢いている。

その異形はエレンの巨人体に目を留めると、地を無数の手で這いながら動き出す。

同時にその白い質量は増え続ける。異形の下からは小さな人らしきものが次々と生まれ、周囲の巨人にまわりついて行つた。

その増加のスピードは目に見えてわかるほどで、どんどんと巨人を——食らつていく。

その小さな一つ一つ、……否、一人一人が同じ形をし、あまつさえ見覚えのある人間だと望遠鏡越しに気づいたハンジは、言葉を失う。

「アウ、ラ………なのか……？」

それは決して、人間と呼べる代物ではない。

それだけは全員、理解できた。

少年少女のラプソディー

巨人を次々と呑み込んでいく白い群衆。

それは、接触した肉体の部分から巨人を取り込んでいく。

白い異形は始祖に食らいつこうとするが、それに抵抗するエレンが無数の巨人を生成し、攻撃をしかける。

しかしその攻撃をもろともせず、ついに白いバケモノは始祖にたどり着いた。



大気を震わせ、大地を轟かし、白いバケモノの狂ったような笑い声が響く。

音は飛行船に乗っていた者たちにも届き、耳から入った声が脳を溶かすように彼らの頭の中で反響した。数人が堪えきれず口を押さえる。

白いバケモノは始祖の背骨をつかみ、口を近づける。

長い白髪からのぞいた口内には、放射状に無数の鋭い歯が生えている。さらにその奥には、白とは対照的な暗闇が鎮座していた。

『!!』

抵抗する始祖の声が響く。

その瞬間、ミカサが外へ飛び出そうとした。とつさにアルミンは彼女の腕を掴む。

「ミカサ、ダメだ!」

「でも、エレンがッ!!」

「今行ったら巻き込まれる!!」

しかし彼一人で、アッカーマン家の筋力に勝てるはずもなく。

逆にミカサが腕を振り解いた衝撃で後ろに吹っ飛んだアルミンは、ぶつかった頭を押さえた。

正気に戻った他の面々も二人に気づき、止めようと動く。

「……ごめん」

ミカサは手を伸ばしたアルミンに背を向け、ハッチから飛び降りた。

そしてアンカーを射出し、大型巨人を伝って、始祖を食らおうとする白いバケモノの

口に雷槍をぶち込んだ。

「えっ」

だが口の中に入ったはずのそれは、爆発した様子がない。

いくら大きさがあつたとしても、わずかでも異形にダメージを負わせられるはずだ。体内に入ったのなら、殊更。

「あ」

宙を移動する中で、異形の手の一つがミカサの頭上に現れる。

避けようにもそのサイズから、ガスを著しく消費させたところで間に合わない。

次の瞬間訪れる、激しい衝撃を覚悟したミカサ。

しかし、衝撃は起こらなかった。目を開いた彼女の目前に映つたのは、視界全てを覆う白。直後、意識が奪われる。

そのまま吸い込まれるように、異形の中へミカサの姿が消えた。

???????

お——サ。

風の音が聞こえる。

髪が顔にかかる感触を感じながら、ミカサはマフラーに顔を埋めた。草木の匂いがなぜかひどく懐かしく感じられて、小さく鼻を嚙る。

「おい、ミカサ」

「……え？」

背を丸めるようにして座っていた彼女が顔を上げた時、正面に人がいた。

周りにはかつてよく薪拾いに行つたシガンシナ区の景色が広がっているのだが、それすら驚きの人物を前にして、意識に入らない。

その人物はいわゆるヤンキー座りで、ミカサの顔を覗き込んでいる。途端に彼女の顔がボボボ、と赤くなつた。

「え、ええ、エレン…!？」

エレン・イエーガー。今現在、「地ならし」を行っている人間——とまで考えたところで、ミカサは目を見開いた。

そう言えば、自分はこの青年を止めようと動いていたのだと、思い出して。

そして無意識に体が動き、仲間の制止を無視した挙句、白い異形におそらく食われて（？）しまったのだ。

そこまで考えた時ミカサは、ツバを飲み込んだ。

ここにエレンがいるということはつまり、彼も白いバケモノに食われてしまったのではないのか、と。

「エレン、は…」

「……食われたよ、お前と同じで」

「……っ!」

「そんな泣きそうな顔すんなよ、めんどくせえな…」

徐に、エレンはミカサの右隣に座った。

青年は耳をかいて、左手を所在なくウロウロとさせ、そつと、ミカサの左肩に置く。

そのまま抱き寄せられた少女は、いよいよ心臓が誤作動を起こし、バクバクと言いだし始めた。

しかし、ここはもう流れに身を任せるしかない。腹を決め、瞳を強く瞑ったミカサはエレンの肩に頭を乗せた。

「……………え？」

そして、彼女の耳に、早鐘を打つ自分のものではない音が耳に入った。

「エ、エレン……………？」

「……………」

「……………」

まるで中学生のような、「ド」が10個ほどつくほどのピュアさを発揮させる両者。エレミカチャートを爆走する某実況者の金髪蒼目ネギが見れば、机にあるパソコンやマウスをすべて吹き飛ばし、そのままひっくり返ってブリッジをかます勢いで悶えるだろう。

そのまましばし二人は、無言になった。

長いことそうして、先に口を開いたのはミカサだった。

「ねえ、エレン」

「…何だ」

「エレンはどうして、「地ならし」を行ったの？多くの人間を殺す必要は、なかったはず」
「……お前たちを、守りたかったから」

「他に方法はなかった？きつと探せば道はあったと、私は思う」

「ねえよ。オレだって悩んだ。悩んで、悩んで、それでもお前やアルミンたちが幸せに生きるには——絶対的な自由を手に入れるためには、多くの犠牲を生み出さずして、なし得なかった」

「……………エレンはお姉さんが「始祖」だったこと、知ってた？」

瞬間、翡翠の瞳が大きく開いた。ドロドロとした負の感情が、今にもそこから噴き出して来そうだ。

エレンはアウラ・イエーガーの本性と、彼女が彼に何を行ったのかミカサに教えた。当然それを聞かされたミカサは呆然とする。

「けどあの女は生きてたツ!!オレが、殺したのに……」

「……エレン」

「殺しても、殺しても殺してもどうしようもなく……でも、やっぱり……」

弟に向けていた柔らかい姉の笑顔、エレンは忘れることができなかつた。

憎しみの裏でその笑顔がこびりついて、取れない。気がどうにかなつてしまいそんなほどこに。

「……お姉さんは “白いナニカ” になつていた。アレが何なのか、エレンは知っている?」

「知らねえよ。でも、もしかしたら……」

「もしかしたら?」

エレン曰く、彼はユミルがジークではなくエレンを選んだ後、少女の記憶にほんの少しだけ触れたのだという。

その中で青年は暗闇の中に浮かんでいた、光るムカデのようなものを見た。

暗い水底に落ちていったユミルはそれと接触し、巨人の力を手に入れる。

その光るムカデこそ、エルディア人がつながらる元凶であり、「悪魔」なのだろうと彼は察した。

そして光るムカデと白い異形が似た存在であることを、感じ取つた。

その類似性を言葉で表現するのは難しい。だが自分とは別の次元にあるのだと、理解

したのだ。

「あの女はきつと、人間じゃなかったんだ。人間のフリをした、バケモノだった」
「そうかな？」

「……ミカサもジークと同じで、アウラ・イエーガーのことを肯定するのか？」

「……正直、お姉さんとはあまり関わりがなかったから、もし死んでもカルラさんの時みたいに、そこまで悲しくはならないと思う」

「……………」

「でも、お姉さんがひどい人だったとしても、エレンと過ごしている時はすごく、幸せそうな顔をしていた。二人ともすごく楽しそうで、私は少し、居心地が悪かった」

「……わ、悪かった」

「謝ってほしいわけじゃない。でもお姉さんが家に療養していた時は、エレンは「姉さん、姉さん」って、ずっとお姉さんの事ばかり考えてた」

「……怒ってるのか？」

「怒ってない」

そっぽを向いてしまったミカサ。

エレンがその顔を見ようとするが、少女がその度に体を動かさずいで叶わない。

「どつ、どうしたら許してくれんだよ……」

「みんなの元に戻ってきてくれたら、許す」

「無理だろ、オレたち死んだんだから」

「死んだのならどうして今、私とエレンは会話しているの？」

「……？それは…何でだ？」

「あの白いバケモノがお姉さんの意思で動いてるかわからないけど、私とエレンの意識はまだある。だから、死んでないかもしれない」

「………それでもオレは戻らねエよ」

「何で……!!」

「戻れねえよ。オレはもう後戻りできないところまで、進んじまったんだから」

大勢の人間を「地ならし」で殺した。

仲間を救う上でこの方法を選んだ時、エレンは死ぬ覚悟を持って行つた。むしろ「地ならし」＝エレン・イエーガーの死であると、決めていた。

大罪人はどんな形でも裁かれなければならぬ——と、彼が考えた時。

「エレンは私たちに、止めて欲しかったの？」

ミカサが、言う。

「だからアルミンやライナーに、巨人化できる余地を残した。《獣の巨人》を生成させてお姉さんを攻撃した時だって、そのあと白いバケモノと戦っていた時だって、飛行船には攻撃が当たらないようにしていた」

「……………」

「エレン、答えて」

「……………やだよ」

「こつ、答えないと……………」

「…ツハ、どうするっていうんだ、オレに？」

ミカサはエレンの正面に向きやり、瞳を閉じて翡翠の瞳に距離を詰め——ようと
して、すぐに戻った。むしろ十歩ほど下がって、そのまま逃げ出す。

煽るような視線を先ほどまで送っていた青年も、これには堪らず追いかけた。

「何で逃げんだよ!!」

「エレンだって難民キャンプにいた時、途中でやめた!」

「生殺しにすんなよッ……!」

「アルミンたちにだつて見られてた!!!」

「えっ………ハア!!?」

ひとしきり走つた二人は、たどり着いた花畑に寝転ぶ。

随分走らされたエレンは息も絶え絶えで、ミカサは呼吸一つ乱していないものの、顔が真っ赤である。

「さっきの話つてもしかして、リヴァイ兵長やハンジさんにも見られてたつてことか……?」

「そう……らしい」

「………死にてえー……」

顔を両手で覆い意気消沈した青年の頭上には、ゲスミン型の雲が浮かんでいた。

「………お前たちが止めればさ」

「え?」

「だから、止めて欲しい云々の話だ。お前らがオレを止めれば、「英雄」になるつて思つたんだ」

それはヴィリー・タイバーの演説を聞いた中で、エレンの中に生まれた考えである。当時「地ならし」を行うことは決めていた。しかしその後のことまでは、まだどうすればよいか決め悩んでいた。

しかしタイバー公の「英雄」を必要とする言葉で、彼は閃いた。

世界の敵がエレンになるのなら、その彼を止めた人間は自ずと「英雄」になる。タイバー公はこの英雄の座に据える人間を、マガトにすべく目論んでいた。

だがそれを利用して、アルミンたちを「英雄」に仕立て上げようとエレンは考えたのだ。

無論自分が事を起こせば、親友のアルミンなら必ず止めると理解した上で。

だからこそ、ミカサやアルミンに突き放すような行動を取った。

その上で彼は、その衷心を語る。

「お前たちに長生きして欲しい。前に夕暮れの中でさ、列車に乗って……お前らと話しただろ？あの時は恥ずかしくて、言えなかつたけど……」

「……………」

「そんで、お前に一番幸せになつて欲しい。オレがいない世界で——つていうのは、すげえ嫌だけど。つーかオレ以外のヤツと幸せになるのが嫌だ。それでも……それでもやっぱり、ミカサ、幸せになつてくれ」

「エレンがいなきや、イヤ」

寝転がっていたミカサは、エレンの腕を握りしめる。

エレン・イエーガーのいない世界など、彼女には考えられない。想像もしたくない。

「お前が好きだ」

翡翠の瞳が近づいて、黒い瞳と交わる。

距離が離れ、少しぼんやりとした目でミカサはエレンを見つめた。

「だから、幸せになれよ」

「………私も」

「ああ」

「私も、エレンのことが好き……っ、大好き……!!」

「…オレもだ、ミカサ」

ボロボロと涙をこぼし、ミカサはエレンのうなじに腕を回す。
青年もまた微笑みながら泣いて、二人は微睡の中で、意識を手放した。

???????

そして少年が目を覚ました時にはすでに、ミカサの姿はなかった。
夕暮れに色づく世界を眺めながら、エレンは風に吹かれ、頭上に舞い上がる花を眺める。

「…………オレ、何してたんだっけ」

心地よい夢を見ていた気がするが、何も思い出せない。

そろそろ家に帰らなければならぬと、そばに置いてあつた背負子を背負う。その隣を歩くのは、姉だった。

「姉さん、オレなんか優しい夢を見てた気がするんだ。…よく、覚えてねエけど」

『？』

「赤いマフラーを巻いた女の子と、一緒にいた気がするんだ。でもまあ…いいよ。帰るんだ、これから」

段々と世界が、暗くなっていく。

そう言えばと、エレンはなぜか真つ白な姉に、首を傾げた。肌はおろか、服も真つ白だ。

姉は少年に近づくと、小さな体を抱きしめる。

——ごめんね。

そう、アウラは言っていた。

「…何で、謝るんだ？今日の姉さんはヘンだな」

『 ？ 』

「ん？うん。ちよつと、眠くなってきた……なあ」

『 』

「うん………おやすみ、ねえさん」

ゆつくりと、エレンの瞼が降りていく。すると少年の体は白い中へ、吸い込まれていった。

白いその人間は膨らんだ腹をさすると、愛おしげに、笑ったのだった。

おにいちゃん

白。白。白。

飽和する白。始祖のエレンを喰らい、それでもなおその白は増え続ける。

地上にばら撒かれ続ける狂気を中心におはすのは、白い母体。

始祖の首を食いちぎったのち、始祖の体の切断面の部分から飛び出した光るムカデのようなものも、その白いバケモノがつかみ食らった。

その直後、白い人間の数はさらに増殖のスピードを増し、それまで上半身しかなかったバケモノに、下半身が生えた。

天にもそびえんとする、その巨体。また顔や腕も変化し、完全なヒト型へと変わった。

白い姿は豊満な胸と、地にまでつく髪の毛の長さを除き、アウラ・イエーガーそのもの。

そのバケモノは瞳を閉じたまま天をあおぐ形で、動きを止めた。

しかして、地面に落ちたエレンの首が呑まれたにも関わらず、一向に大型巨人は止まらない。

このままでは地上にある赤色が、白色に変わるまでそう時間はかからない。

アルミンらは頭上から、その光景を眺めることしかできなかつた。

???????

その世界の時間は一瞬にして、悠久。

矛盾した言葉であるが、実体験する側としては、そのように感じられる。

目覚めてから、砂と光の柱の世界で囚われたままのジーク。

その側にはユミルがおり、途中せつせと巨人を作っていた。しかしそれも無くなってから、小さな砂の城を作っている。

二人だけの世界で、少しずつ少しずつ、ジークはユミル・フリッツのことを理解し始めていた。

この世界はすべてのユミルの民と繋がっており、それは死んだ人間も例外ではない。彼らの記憶や感情などが、目に見えた物体であるわけではないもの、ここに存在する。それを自由に読み取ることではできないものの、

ということつまり、ユミルの記憶や感情も存在するということ。

不思議ではあるが、少女とともにずっといるためか、その記憶が時折ジークの中に流れ込んでくる。

そうして、気の遠くなるような時間を過ごした。

おおむねわかったことは、ユミルの過去。

『アウズンブラ』という双子の少女についても、ジークは知った。

ユミルが大嫌いだった『アウズンブラ』。そして今は、大好きなアウラ。

何ならユミルが『アウズンブラ』に「大きい」と、言われたことも。

始祖がエレンごと白い異形に食われたことも知っている。

そして、エレンの気配が完全になくなったことも。

おそらく先に旅立ったのだろう。

しかし座標はまだ消えていない。ユミルが接触した光るムカデが、白い異形に食われたというのに。

光るムカデは謂わば、ユミルの民の根源だ。その存在がいなくなれば何が起ころのか、ジークは長い思考の末にたどり着いた。

それは、巨人からの解放である。

ユミルの民はバケモノではなくなり、普通の人間となる。

「アウラは何であんなひどいこと、ユミルちゃんに言ったんだろな」

『……………』

「ずっと答えてくれないな、ユミルちゃん。「ちゃん」をつけたら最初は睨んできたのに」

『……………』

「ユミルちゃんの記憶はわかってても、心まではわからない。…なんだか皮肉だよ」

ユミルは『アウズンブラ』の気持ちをし、最後まで理解できなかつた。

同時に『アウズンブラ』も、ユミルの気持ちを最後までわからなかつた。

あるいはジークがユミルの記憶のみわかるのは、彼女が心を閉ざしているからかもしれない。

むしろ記憶が見れるのは、始祖によって、エレンとジークが繋がっていたせいなのかもしれない。

「エレンは先に行っちゃったみたいだし、俺も死ぬ流れだよな」

始祖が食われて以降の世界がいったいどうなっているのか。

ユミルが見た奇妙なエピソードが、世界を侵略しているのかもしれない。

思い返せばガビに撃たれて発狂してから、妹は「アウラ」ではなくなっていたのか

もしれない。

兄の全裸を見て鼻血を流していたのは、間違いなくアウラだと思うが。むしろ残念な妹以外あり得ない。

「死ぬ前にクサヴァーさんに会いたいよ、ユミルちゃん」

『……………』

「会わせてくれないと、妹みたいに駄々をこねるぞ」

『……………』

ジークは砂の上に転がり、手足をバタつかせた。ギャン泣き幼女のマネで、「やだやだー、クサヴァーさんに会わせてよー!!」と宣ってみるが、少女は無反応。

ただただ、アラサーの尊厳が破壊されただけである。

長い拘束の中で、ジークの精神もイカれ始めているのは確かだった。

——ま。

そんな折聞こえた、何者かの声。

だんだん近づいてくる声にジークが耳を澄ませば、その声はさらに近づいてくる。

そしてその声が聞こえる方角が上からだど気づいた時、彼は目の当たりにした。

「アウラ?!」

親方、空から変態ブラコン女がッ!——襲来した。

「ジークお兄しやまああんっ!!」

瞬間ジークは、落ちてきた調査兵団の服を身にまとった妹に潰されることになる。

クレーターができた中で、狙うようにして貧相な胸を顔に押しつけられた男は、気を失った。

???????

「ユミル」

伸びたジークから離れたアウラは、ユミルの元に向かい抱きつく。

そのまま少女の頬をすり寄せたと思えば、頭に顔を押し付けて呼吸し、ひたすらに抱きしめて、ともに砂の上に転がる。

それでもユミルは、無反応のままだ。

アウラはジツと、その様子を見つめる。

そして少女の上に覆いかぶさると、額同士をコツンと押し当てた。

ユミルが見たのは、エレミカのイチヤイチャシーン。

とうとう両片想いではなく両想いになった、普段の始祖様なら地平線の果てまで転がっていきそうなシーンを見ても、表情一つ変えない。

額を離れたアウラは、「あれ……？」と、戸惑いの声を上げる。

「ゆ、ユミルの大好きなエレミカだよ!? しっっかりしてユミル、ユミルウ——ツ!!」

なすがままにアウラに肩を揺さぶられているが、心ここにあらずといった風に、ユミルは反応を示さない。

どうしたものか、アウラは頬をかく。

「えつと……なんて言うの? 「大きい」って言うのは、本当だけど、本当じゃないって
いうか……。それ以上に大好きの方が「私たち」は強いよ」

『……………』

「……………ごめんね」

お互い、無言になった。

その中で、意思を持って動かなかった少女の手が動き、アウラの手を掴む。影になった顔からは、表情をうまく読み取ることができない。

「私たち」はもう一度キミに会いたかった。ただそれだけだった。あの回遊魚クソヤロウと契約しても」

それから、彼女たちは回り続けた。

『アウズンブラ』が愛したユミルにたどり着くまで、彼女は死に続けた。死体へと還り続けた。

そしてようやく彼女は、ユミルのもとにたどり着いた。

もう『自分』の名前だけでなく、彼女が愛したユミルのことも、すべて忘れてしまつても。

ユミルのためだけに捧げたその回遊人生で死に続けた彼女たちは、だからこそユミルを憎んでいるし、それ以上に狂気の「愛」をひしめき合わせている。

「でも「私たち」はキミに会えた。もう終わっていい」

『……………』

「けど最後のお願いがね、一つだけあったの。だからもう一度だけ、回遊魚クッヤロウと契約した」

『……………?』

「私」は『アウズンブラ』じゃない。「アウラ」として、アウラ・イエーガーとして死ぬ。あの回遊魚クッヤロウが光るムカデクッソツを食う代わりに、私がこの世で一番愛している人間を、救う」

『……………』

ユミルが指したのは、彼女ユミル自身。

アウラはモゴモゴと、「キミも大切なんだけど…」と口ごもり、少し頬を赤くさせながら一つ咳払いをこぼした。

「名づけて、「ジークお・イエー兄ガーまは絶対死なせねえ作戦」です！」

その壊滅的ネーミングセンスの作戦のために、アウラはユミルに「大きらい」と言うてでも、事を起こした。

すべては光るムカデを引きずり出すために。

そしてムカデを捕食し終えたエビは、進化を果たす。

「光るムカデが『有』ならば、あのクソヤロウは『無』。二つが合わさって奇妙なエビはようやく『命』を手に入れることができる。そして生きて、——死ねるんだ」

『……………』

「ユミルは光るムカデと遭遇して、『アウズンブラ』は奇妙なエビに出会った。これが偶然だとしても、仕組まれた運命だとしても、どうだっていい。やつぱり私たちは唯一無二なんだ。ふふふ……それにキミと一緒になることも、こうしてようやくできた」

嬉しそうにユミルを抱きしめるアウラは、泣いていた。

彼女自身、今自分が『アウズンブラ』なのか、「アウラ」なのか、それともこれまで死んでいった自分たちの中のものか、誰かなのか、わからない。

「キミが意思を持つちやダメなんだ。何かを成し遂げようとしちや、ダメなんだ。だって光るムカデは「命そのもの」であって、感情を持つことは許されないのだから。その本質と異なる在り方をしたら、光るムカデが出てこなくなってしまう」

逆にその「感情」を司るものこそ、奇妙なエビ。

それはいわゆる、『理』というものなのかもしれない。かく言うアウラとて、奇妙なエビの内側をすべて理解しているわけではない。

ただ彼女は契約して、そのコマとして動くだけの人形である。
その先でユミルと出会えたように、ジークを助けられるなら、本望なのだ。

「ずっと、ずっと………会いたかったよ」

『……………』

「私のユミル。私だけのユミル……」

ユミルの姿が、変化する。

背丈が伸び、少女から妙齡の女性の姿へと。

並んだ二人は見た目も、身長も、すべて同じ。違うのはその胸の大きさと、髪の色と、瞳の色である。

アウラを抱きしめ返したユミル・フリッツは、安らかな表情を浮かべ、その肩元に顔を埋めた。

『…アウラ』

瞬間、目を丸くしたアウラ。

唇を震わせ、顔を伏せ、嗚咽をこぼす。

ずっと聞きたかったその声を、ようやく聞くことができた。

それはつまり、ユミルの舌が治ったことに他ならなくて。

これの意味するところは、彼女が王の呪縛から完全に解放されたということであつた。

ユミルの体が少しずつ、空気に溶けていく。

それに従つて、柱を作っていた光が失われていく。

『だいすき、アウラ』

そして、穏やかな表情を浮かべていたユミルの姿が、完全に消えた。

「……………つ、……………!!」

下の砂が地面に吸い込まれるようにして消失していく中、アウラは涙を拭いて、兄の

元へ駆ける。

一方ジークはというと、クレーターの中で大の字になって仰向けに転がっていた。青い瞳はぱつちりと開いており、斜面を滑る妹を視界に入れると目を留める。

そこで兄が起きていたことを知ったアウラは、急ブレーキをかけて固まった。

ジークは半目になっており、彼女は先ほどのユミルとの話を全て聞かれていたことを察する。

とつさにアウラはUターンを決めようとして、強制力に物を言わず兄の声が届いた。

「来い」

「ひゃ、ひゃいっー」

アウラがジークに勝てるわけがない。

自分が何者なのかひどく曖昧になっていたはずが、兄の一言で一気に「アウラ・イエーガー」へと引き戻された。これがジークに全てを捧げている変態女の力であり、末路である。

「なに、勝手に死のうとしているんだ？」

「え……？だ、だつて死にたいから……」

「始祖ユミルと死ぬつてことか？散々好き勝手していたお前が？ふざけるなよ……」

「お兄さまの頼みでも、こればかりは。やつと死ぬるのに……」

「……………」

これまで連続して衝撃的な内容を暴露されてきた中で、元戦士長殿の頭はすでに考えることを放棄している。

ただ純粹に今あるのは、妹を死なせたくない思いと、ついでにこれまで受けてきた被害への怒りやら、悲しみやら。感情がメツタメタのバッキバキである。

「世界をメチャクチャにしても、お前が助けたかったお兄ちゃんの“お願い”を聞けないわけだ、へえ……？」

「ま、まあ、今後のミカサちゃんたちのためにも、人類の大半は死ぬ必要があつたつていうか……」

「……………」

「貴方は知らないだけ。本当の世界はもつと、残酷なのだから」

——と、言ったアウラは、途端に口を押さえて自分の発言に眉を寄せる。

思わず話してしまったというより、アウラではない方の“彼女たち”が出てきてしまったらしい。

「…何だ、本当の世界って」

「……ユミルが、見ていた世界。あるいは「私たち」が生きた中の一つにあった、ユミルが見ていた内容と同じ世界線。詳細は言う時間がないけど、お兄さまは死んじやうの。そんなの絶対許せるわけないじゃん」

「……………」

「私というイレギュラーが現れたから、世界は大きく変わった。ユミルでさえわかっていた未来が予想がつかなくなって、結構彼女に迷惑をかけちゃった」

崩落する世界は、砂の上にいる二人をも巻き込む。

手や足の一部が砂に巻き込まれていく中、ジークは妹の手を強く握った。

「どうしたら、生きようって思える。俺が生きていても“死”を選ぶくらいには、死にたいのはわかったから」

「セツ」「ダメ」——じゃあお兄さまの」

「……何だよ」

「赤ちゃ」「ダメ」……………」

どこまでも、歪みない妹だ。

これが二人の最後になるかもしれないのに、なぜ斯様な会話をしなければならないのか。ジークの頭が痛む。

「お前はツ、お前というヤツは本当に……」

「ふふふ、兄のことが好きすぎる妹を持って大変だね、おにーちゃん」

「……………」

妹が望むことをシたら、本当に生きようと思ってくれるのか——。

一瞬よぎった血迷った考えにジークがこれでもかと唸っていれば、アウラは嬉しそうにする。

今の兄の苦しむ表情さえ、好きで好きでしようがないという顔だ。

「アウラちゃんはね、ジーク・イエーガーの涙からはじまったの。だからお兄ちゃんをいっぱいいっぱい苦しめて、苦しめたかった」

「最悪な妹だな……」

「それで、これまでもこれからも、そんな最悪な妹がお兄さまの中の大半を占めてくれたら、すごく嬉しい」

「……………アウラ」

「今、泣きそうなお兄さまの顔も、ステキだよ」

幸せそうに、アウラは笑った。
手を繋いだまま、二人の体は沈んでいく。

「私のお兄ちゃんできてくれて、ありがとう」

ジークの意識は、暗闇へと沈んでいった。

ライナー曇らせ？…いや、曇らせお兄さまだ！

空を仰いでいた白いバケモノの瞳が開く。

のぞいたその奥に宿るのは、深い深淵。眼球のすべてが黒く、三日月を描いた口内も黒い。

眩い太陽に手を伸ばした異形は狂ったように笑いながら、そのままゆつくりと地面に倒れていった。

そのバケモノをアルミンの超大型によって吹き飛ばすべきか、と作戦が立てられていた中、飛行船は急きよ高度を上げる。

巨大な物体が倒れば必然、爆風が起こるからだ。

全員が側の物につかまった中、ソイツは地面にぶつかり、まるで液体のようにドブんとその形を崩した。

しかし生じるはずの爆風は起きず、おろか音さえ生まれない。

異様なほど辺りは静寂に包まれる。

聞こえるのは飛行船が宙を飛ぶ中で生み出す、外の空気を揺るがす音だけ。

白いバケモノが波打った瞬間、地に広がっていた白い群れも次々にその姿を溶かして

いく。

そして、あつという間に白い姿は無くなり、残ったのは蒸発し始めた大型巨人だけになった。

何が起こったのかわからない。

だが一同は「地ならし」が終わったことは理解した。

同時について先ほどまでそこにいた白いバケモノが、静寂の中で消えたことも。

狐につままれたようです——と、乗船していたキヨミは思わず呟く。

そんな中、地上では一人の男が体を起こし、またエレン^{その姿}を探していた一人の女が、生首を発見する。

??????

この「地ならし」により、およそ7割の人類が虐殺されるに至った。
この主犯である、エレン・イエーガーは死亡。

そしてその男を止めたのが、テオ・マガトが率いる戦士と、彼らと手を組んだパラディ島の英雄たち。

ミカサによつてエレンの真の目的を聞いたアルミンが、自分たちがエレンを殺したことにしよう——と、打ち出したのである。

この意見にマガトも賛同し、これによつてエレン討伐に向かった彼らは英雄として、歴史にその名を刻むこととなつた。

しかしアウラ・イエーガーと思しき光るムカデ(?)を食つた白いバケモノなど、疑問はいくつか残る。

その「光るムカデ」の正体を知る男こそ、ミカサとともに白いバケモノの中から生還した、ジーク・イエーガーその人。

彼曰く、光るムカデとは、はるか昔に有象無象の「何か」が生じては消えて——を繰り返し、やがて生き残つたものだという。

それこそが「生命」。

その正体はユミル・フリッツが出会つたとされる、「悪魔」であるのだ、と。

そして光るムカデは、白いバケモノにより食われた。

ユミルの民は、ただの人間になつたのだ——と。

にわかには信じがたい話である。一方でジークの話聞き、巨人化能力者たちが感じていた違和感に説明がついた。

彼らは「喪失感」ないし、自身の体の変化を感じ取っていたのである。

その変化は同時に、「巨人科学の副産物」たるアツカーマンにも起こっていた。

巨人の力を人間でありながら使いこなすことができる特異な一族。

彼らはその力の代わりに、巨人化の影響を受けない。

そんなミカサやリヴアイは、目に見えて体の変化を感じていた。

今まで自身の中にあつた、体の内側からあふれる「力」。その感覚がなくなったので

ある。

それがもし本当であるなら、血液検査を行えば確実にわかる。

ユミルの民に存在する彼らが「バケモノ」であると明確に区別される、特有の血の構造。それが変わっていれば、物理的な証拠になる。

「何があつたのだ、ジーク」

飛行船を着陸させ、話し合いに至った中、呆けたツラのまま座っていた男に容赦のない蹴りを入れたのは、テオ・マガト。

それからジークによって、これまた衝撃的な内容が語られたのだ。

「……………」

ジークは、ミカサの腕の中で安らかな表情で眠る生首を見る。

その瞳が開き翡翠の色をのぞかすことは、もう二度とない。ミカサの周囲には調査兵団のメンバーが集まり、みな堪えきれず、涙を溢していた。

道を違え、あるいはすれ違ってしまったとしても。到底、積み重ねてきたエレン・イエーガーと仲間たちの思い出が、なかったものになるはずがなかった。

「……………いい天気ですね、マガト隊長」

「…貴様は裏切り者の身だ。相応の処罰があることは、覚悟しておけ」

とは言いつつ、一周回ってジークの行動は、カール・フリッツの意志を踏襲した計画であったことは間違いない。

『エルディア人安楽死計画』について、マガトはアルミンから知らされている。

そのラインは微妙だった。

ジーク・イエーガーの行動は世界から見れば“救い”であり、対しパラディ島側から

すれば、決して容認できない計画である。

そもそもそのような計画に至るまでの男の人生に同情しきれない部分があることを、ジークが少年だった頃から知る元帥殿は理解している。

現状マールレのトップはマガトだ。ゆえにジークの処罰は、彼の手中にある。

「アウラ・イエーガーはどうした」

「……アイツは……」

と、二人が話していた折、感じた殺気にジークは肩を跳ねさせた。

その出どころはやはり、無愛想な顔をはりつけた160センチの男である。男の三白眼がより細まり、手にはブレードを握られている。ただその足取りは、ひどくおぼつかない。

「元氣そうじゃねエか、リヴァイ」

「よお、クソヒゲ」

「俺を殺しにあの世から戻ってきたってわけか。おつかないねえ」

「ちよ、ちよ、リヴァイ!!」

ハンジが慌てて背後からリヴァイを羽交締めにする。

その勢いでわずかに足が地面から離れた兵長殿は、射殺さん目つきでハンジを睨めつけた。

「テメエから先に殺すぞ、クソメガネ」

「ごめんって、でも落ち着こう？ ジーク・イエーガーは後でいくらでも斬ったり殴ったり、蹴ったりしていいから」

「え……？」

完全に兵長を止めてくれるかと思っていたジークは、豆鉄砲を食らった顔をさらす。

かく言うハンジの目も笑っておらず、そこに深い私怨があることに気づいた男は、静かに目を伏せた。

「あなたが私たちの仲間を大勢殺したことは事実だからね。……大事な副分隊長も、あの時私は失っているから。まあそれは、ベルトルトの爆風が原因で、死んだんだけど……」

ベルトルト、の部分に反応したアニが、それぞれの輪から離れた場所から視線を向けた。

彼女の周囲には、104期生を見つめているライナーと、あくびをしているピークもいる。

「だが元々作戦を立てたのは、我々マーレの上層部だ」

ピリついた雰囲気の間に入ったのは、マガト。

マガトは反対したものの、子どもたちに「始祖奪還計画」を託したのは今は亡きマーレの上層部である。

無垢な幼子を洗脳するようなマネをして、人間兵器としての有用性を作り出した。

「もつとも咎められるべきは、私にある」

言い切った元帥に、ジークは耳をかけた。ひどく居心地が悪い気分になったのだ。

戦士と戦士候補生たちに向くマガトの「親心」が、透けて見えていた。

「……ハア、責め合っているもしようがないね。私たちだって「地ならし」が始まる前の段階で、エレンを止めることができなかつたんだから。むしろ私がマーレに視察に行くことを決定しなければ、エレンは和平の道に見切りを付けなかつたのかもしれない……。ということだ、リヴァイ。今は一旦、抑えようか。私も、あなたも」

「……………ツチ」

団長命令ならば、仕方ない。

そう続けたリヴァイは、ブレードをしまった。ジークはホッと、胸を撫で下ろす。目の先の脅威は一時去った。

「それで、結局アウラ・イエーガーはどこに行ったんだい?……いや、そもそも彼女は何だっただったんだ?」

光が反射したレンズの奥で、難しい表情を浮かべるハンジ。
ジークは今一度、空を見る。

青い空。晴朗な日和だ。血生臭い地上など、我知らずというように存在する。

胸のうちに存在するポツカリと空いた感覚は拭えず、心が開いた口から漏れてしまいで。
そう。

それを止めようと、ジーク・イエーガーは口を閉じた。

「アイツはようやく、眠れたんだ」

その全貌を語るには、途方もなく時間がかかってしまうだろう。心の整理をしながら、事実を語らなければならないのだから。

ジークが見上げた空は遠く、とても、蒼かった。

???????

「天と地の戦い」と呼ばれたその戦いから、3年の月日が経った。

アルミンやジャン、サシャやコニーに、ハンジ。そしてライナーやアニ、ピークたちは連合国の大使となった。

スムーズに彼らが——いや、彼らが連合国の大使となるまで途方もない苦労があつたものの、元敵国側に身を置き、現在彼らはパラディ島に和平条約に赴くという、奇妙な構図ができあがっていた。

多忙を極める彼らの一方で、リヴァイ・アツカーマンはオニャンコポンと世界を巡っている。

仲間の想いや死を見続けボロボロになった男は、エルヴィン・スミスが求めた先の世界を見ることができた。

この輪の中にハンジも一息ついたら合流しようと考えている。

またパラディ島ではピクシスやヒストリアが中心となり、民衆をうまくまとめてい

る。

しかし、尚もエレン・イエーガーを信奉する民衆による「イエーガー派」がいる。彼らは世界の報復を恐れ、戦うことを切望しているのだ。

交渉についてはマーレ側が取り仕切り、両者は一度、連合国外交官の仕事を賜物で停戦協議を行った。

協議には複数の内容があった。そのひとつに義勇兵の身柄や、パラデイ島に駐留せざるを得なかったマーレ人兵士の身柄を引き渡す、というものがあつた。

そのかわり、マーレは一方的な軍事侵攻をパラデイ島に行わない——など。

その前に起こつたマーレとパラデイ島の戦いの勝敗については、形式上マーレの勝利とし、パラデイ島を管理するという形で落ち着いた。

地ならしの影響で滅亡をたどつた国が多い中、かろうじて滅びを免れた国も再建に向け四苦八苦している現状。国内の問題で手いっぱい。パラデイ島に戦争をけしかける可能性は限りなく低い。パラデイ島の安全を確実に保障するという上ではやはり、マーレ側の勝利にした方が余計な軋轢を生まずに済む。

戦士候補生たちも無事マーレに帰還し、スラトア要塞に飛行艇を求めて逃げ込んでいた家族と再会することができた。

アニやライナー、ピークたちの家族も生きのびていた。

対し、キヨミらについては停戦交渉をする際、マーレとパラディ島の架け橋を担う立場で、ヒイズル国を牽引している。

停戦協議についても、ヒイズル国で行われている。

というのも、ヒイズルは地ならしの影響を受けなかったのだ。エレン・イエーガーの意思によって滅亡を免れたのは想像に難くない。

かの国もまた、微妙な立ち位置であるが、マーレと不戦を結んだ。

ちなみに紆余曲折を経てヒストリアと再会したユミルは、その旦那の顔面にドロップキックを食らわす、ちよつとした事件を起こしている。

側にいた護衛部隊は女王が危険だと察知すれば動く。その旦那も守る対象ではあるが、何せほんのちよつとした事件ゆえ、動くことはなかった。

むしろこの一件を、一番腹を抱えて笑っていたのがケニーだった。

そしてユミルは自分の手紙が、ヒストリアにきちんと渡っていたことにライナーイイ男に感謝するとともに、悶絶した。

純粹に恥ずかしかったのだ。「結婚できなくてごめんね、ユミル…」とマジレスされたことが。

でも、少し頬を赤らめて視線を逸らしたヒストリアはやはり、かわいかった。結婚しよう。

その時はまだ膨れていた腹をいとしげに撫でるヒストリアを見て、ユミルは来世は必ず男に生まれると誓ったとか、誓わなかったとか。

その間ウドやゾフィアも、ガビたちと再会している。

この件でおそらく一番驚くべきことは、ユミルとポルコがイイ霧囲気になっていたことだろう。

これを聞いたピークは、邪智暴虐の王にブチギレたメロスレベルに激怒した。

先ほどの「紆余曲折を経て」の中には、二人がイイ霧囲気になるまでのエピソードも含まれているのだが、詳細に語ると長くなるため、今回は省くでしょう。

後日、ピークに詰め寄られたポルコ曰く、ピークのことは「大切な友人」と認識していたようだ。結婚の話も、冗談だったんだろう、と。

「だってお前が嫁にくるならまだわかるけど、俺は男だから、「嫁」には行けねえだろ」

こちらもまたマジレスだった。脳内まで筋肉でできているんじゃないかと、ピークは

また激怒した。

しかし結局、ポルコの恋を応援することにしたのである。

ユミルと共にいる男の姿は、色々と吹っ切れたように幸せそうであったから。

その二人については現在、マーレで暮らしている。

??????

「ミカサは元気にしてるかなあ…」

船の外で潮風を浴びながら、そう呟いたのはアルミン。彼の横にはアニがいる。

現在彼らは和平条約の締結のため、パラディ島に向かっていた。

「アイツなら大丈夫だろう」

「…うん、そうだね」

3年前は、一方は死にかけて、一方はその一方を殴り殺さんとしていた間柄の二人。

今は時間も過ぎ、アニの中のわだかまりも次第に解けていった。ライナーに対しては

今でも容赦のない蹴りを入れるくらいには嫌いだが。

「……ねえ、アニ」

「何だい」

「その………ううん、やっぱり何でもない」

「…そう」

何か言おうとして、口をつぐんだアルミン。

もう何度目かのこのやりとり。頬を赤くしながら海へ視線を向けた青年に、アニは深く息を吐いた。

まどろっこしいうちは、答えてやる義理はない。

もし「好きだ」と言ってきた時は、盛大に、それもみんなの前でフってやろう——という気持ちで。

「………」

ふと思いつくのは、3年前のこと。

果たしてアルミンが覚えているかはわからないが、飛行船から蒸発していく大型巨人をアニが眺めていた中、声がかげられた。

——アニ。

声の主はアルミンだった。

ただ、その浮かべる表情が、口調が、そして自身に向かう既視感のあるものが、まるでそこにベルトルト・フーバーがいるように、感じられた。

その一言だけを眩き、すぐにハツとした様子でアルミンは地上を見た。

アレが何だったのか、アニにはわからない。しかし、もしかしたら消える前に、ベルトルトが彼女に会いに来たのではないかも、思うのだ。

「…ふふっ」

「ど、どうしたの、アニ?急に笑って」

「何でもないよ、ばーか」

「え、ええー…」

アニ・レオンハートはかすかに口角を上げ、今の安穩とした気持ちを楽しむ。二人の頭上では、一匹の白い鳥が羽ばたいていった。

そして、飛んでいったその白い鳥が羽休めに選んだ木の上。

その下では、花が飾られた小さな墓石の隣で、赤いマフラーを首に巻いた女性が座っている。

もうすぐアルミンたちが来る。彼女は——ミカサは、墓石をそつと撫でた。

「あつ、ここにいたのね、ミカサ！」

その時、彼女の元にやって来た人物。

子どもを抱えながら歩いてきたのはヒストリア。側では護衛隊も控えている。

どうやらもうすぐアルミンたちが来るため、ここ、シガンシナ区まで女王は足を運んでいるようだ。そのついでとヒストリアは久しぶりにミカサに会いに来た。頭に冠も置かず、そこらの庶民と変わらぬ出立で。

「…不用意に動いたら、危ない」

「大丈夫、護衛がいるもの」

「……なんかヒストリア、カルラさんみたいになった」

要は、「お母さん」のようになった、と。

久しぶりの会話ということもあり、二人の話も弾む。

その声につられて、うう、と声が上がった。ヒストリアの腕の中にいた子どもは周囲をキョロキョロと見渡して、ふいにミカサに目を留める。

「あら、この子が泣かないなんて珍しい」

「……か、かわいい」

「ミカサと会うのははじめてだよ。ほら、私のお友だちだよ」

もう少して3歳になろうという子どもは髪の色こそヒストリアと似ていないが、くりくりとした大きな目は似ている。少し濃い目の眉も。

ジツと、ミカサを見つめていた子どもは、徐に手を伸ばす。

その意思を汲み取ったヒストリアがミカサへ子どもを渡した。ミカサは戸惑いの声を上げたものの、恐る恐る受け取る。

「おもしろい、結構……」

「ふふ、こう見たらミカサがお母さんになったみたいだね。持ち方はもう少しこうするの」

「う、うん」

指を咥えていた子どもの手がペタペタと、ミカサに触れる。ついたよだれで汚れる顔

に反射的に彼女はうめきつつ、子どもを下ろすことはない。

不思議とその幼子の瞳に、心が吸い込まれる気がした。

「みかちや」

「……！か、かわいい……」

「みかちや！」

「かわいいばかり言ってるね、ミカサ」

「でも、本当にかわいい……」

「みかちや、ちやつちやーまん」

「ちやつちやーまん……？」

「ちやつちやーまん」とは、何だろうか。首を傾げたミカサにヒストリアは、「アツカーマンって言いたいんじゃない？」と告げる。しかし言った側で、ヒストリアは首を傾げる。

「あれ、この子にミカサの苗字は教えてないはずなのに……」

子どもはぎゆう、と抱きついて、至近距離で黒い瞳をのぞき込んだ。

「みかちやはね、オレがちあわちえにしゆるの！」

キラキラと輝く翡翠の瞳に、ミカサは固まっつて。
そして思わず、聞き返した。

「あなたの名前を……教えて?」

マフラーをつけた、震えるその体。我が子の名前を言おうとしたヒストリアも、そのただならぬミカサの様子に出かけた言葉を飲み込んだ。

「オレのなまえは、エリエン・イエーガー!!」

ミカサは腰を抜かしたように子どもを抱きしめたまま、座り込み。
そして声を上げて、泣き始めた。

???????

これは和平交渉があつた日から随分と遡つた、とある某日。

仕事で疲れ果てた一人の男は家に帰宅した直後、そのまま玄関で倒れ夢の世界へ旅立とうとした。

件の一件で極刑も免れないと腹を括っていた男——ジーク・イエーガーは、マガトの采配により、再びマール軍に拝任された。

当然、ジークの存在はマール兵士の反感を買つた。だが裏切りの事実を、マガト元帥は「ジーク・イエーガーは裏でエレン・イエーガーを止めるため動いていた」という風に変えたのである。義勇兵についても同様に。ただしイエレナは、しばし牢屋行きになつていた。

マールを裏切つたと見せかけ、実は裏切っていないかつた。

ややこしい設定を背負わされたジークだが、すでにそれ以上にややこしい妹の被害に遭つてきたため、そこまで苦勞することはなかつた。

——いや、苦勞はしている。マール復興に尽力するマガトに馬車馬のように働かされ、まだ戦士時代の方が数倍ラクだつた目に遭わされている。

これまで多くの人間を殺してきた男には、甘すぎる罰だろう。毎日「過勞死」の言葉が脳裏をよぎっているが。

マガトがジークへ処罰を下さなかったのは、もしかしたら彼がすべてを語り終え、アウラ・イエーガーにヘイトが向いたのが原因だったのかもしれない。

まあ、最たる理由は別にある。それはレベリオ区襲撃事件でマールの上層部が掃き、トップの地位にマガトが就任したが、その下がほぼ並の兵士しか残っていなかったためだ。

その点、ジークは「戦士長」として培われた能力がある。

その力がマガトのお眼鏡にかなった。マールを裏切った罪人として処理するより、再利用した方が有用性が高いと判断したのだ。

ちなみに、「お兄さまができるだけ苦しんで、それを私が堪能できるように努力するよ……」な人間だった妹。改めて文字にするとひどい。

この一件で、どうやら戦士とパラディ勢力のジャン・キルシュタインという男の間で、マルコ・ボットの死に関してひと悶着あったらしい。

最終的に「あのマルコが本当にライナーたちに「悪魔」と言ったのか……?」と疑問に思っていたジャンは、アウラに対し「人間じゃねエ……!」と、憎悪マシマシに憤りを見せていた。

新たに知った妹のクズエピソードに、ジークは死ぬ思いがした。

とまあ、度々胃が死につつも、彼はまだ生きている。

祖父母もほかの戦士の家族に連れられ、列車でスラトア要塞に逃げおおせていた。そのためジークと無事再会を果たした。

詳細を省き端的にアウラが死んだことを二人に話せば、膝から崩れ落ちていたが。どの道隠しておくことも、ジークの精神状態からしてできなかつた。

「アウラは元氣？」などと微笑まれながら聞かれた瞬間、銃口を口に突っ込んで、引き金を引く自信がある。

であれば先に事実を告げて、その痛みを分かち合った方がまだ遥かにマシだった。

「あら、そんなところでぶっ倒れてどうしたんですか、ジーク戦士長。：いや、もう戦士長じゃなかつたですね」

「……また勝手に入ってたの、ピークちゃん」

ピーク・フィンガー。ポルコとユミルの熱愛報道で史上最大級に荒れ、その怒りの矛先がなぜかジークに向かった女である。

仕事終わりに酒を浴びるように飲み、彼女はしよっちゅうこの部屋に入り浸った。それを介抱してやるのが、もっぱらジークの役目になっていた。

連合軍の大使となったピークは未だマーレ軍部と深い繋がりがあり（まあ、マガト関連だろう）、こうして新しく建設された軍事基地内にある兵士用の住居にも、難なく侵入することができる。

最近はそのままで荒れなくなったが、それでも酒を飲むと毎回ポルコの話題が出る。今日は酒を飲んでおらず、シラフだった。

「仕方ない、運んであげますよ」

「うん、ありが……押しつけないでくれるか」

「何をですか?」

ジークの背後に質量のものすごい二つのそれが、存在感を放って押し当てられている。

そのままピークは素知らぬ顔でジークをベッドに引きずって行った。

嫌な予感しかしないが、チャクラ切れを起こしたKKS先生の如き男は指一本すら動かすことが億劫になっている。

「そう言えばジークさん、ヒゲ剃りましたよね」

「俺にも色々、心境の変化があつたからね」

「頬も痩けてましたけど、ライナードベちゃんみたいに健康的になつたつていうか」

「ピークちゃん……?」

うつ伏せの形で、ベッドに乗せられた男。

ベッドの隅にもう一人分の体重が乗り、音を立てて軋んだ。

「メガネもつけないで、飾っておくようになりましたね」

そう言ったピークの視線の先に映っているのは、棚の上に飾られたボールの傍にあるメガネ。クサヴァアの遺品だ。

おそらくアウラの仕業だろうが、ジークが元に戻った時に、無くしたはずのそれをかけていたのである。

「どうしよう、俺なんかドキドキしてきちゃったんだけど。色んな意味で」

「私もドキドキしてますよ、ジークさんが10歳ぐらい若返つたみたいで」

ジークは、キヤー助けてエー!!と、生娘のように叫ぼうとして、自分が三十路のおっさんだったことを思い出した。おっさんは生娘のように叫ばない。そんなことを考え

ている頭は、明らかに疲れている。

ポルコの件で親身になって話を聞いていた時点で、ピークの視線が昔の——戦士候補生時代に向けられていたものに変わったことには、気づいていた。

しかしここまで肉食系であったのか。

いや、奥手のおっとり女子に見せかけて、実際かなりの肉食だった。むしろよくポルコは貞操を守れたと思う。アレはアレで究極に鈍い男だ。

「……ダメですか、ジークさん」

ジークは首だけ動かし、ピークを見た。ジャケットを脱いだ彼女がじつと見ている。

ゴクリと、喉が鳴る。出どころは喉仏のある逞しい首からで。肝心の青い瞳は揺れていた。

それは情慾に浮かされたものではなく、例えるなら帆を失い大海原を漂流する羽目になつたような色を孕んでいる。

「ハア………ピークちゃんはさ、俺を絶対幸せにしてくれる?」

「します。何なら今から天国を見せてあげますよ」

「それ俺のセリフな気もするけど………それでさ」

「はい」

「俺の一番にはなれないけど、それでもいい？」

「ええ、いいですよ」

「……本当に？俺たぶん、人間の愛し方とかスゲエ下手になっちゃったと思うよ？つか、分かんないかも」

「なら、また誰かに教えて貰えばいいんですよ、ジークさん。あなたを愛してくれる人間は別に、この世に一人しかいないわけじゃないんですから」

ピークは目に弧を描いて、笑う。

両親の愛を十分に受けられず、クサヴァーにしかし本当の子のように愛され、安楽死計画の中で情愛を切り離していた男。特に、性愛とは程遠かった。そして妹の人類を滅ぼすレベルの狂愛にフルボッコにされた結果、もう立ち直れないところまで来ている。

愛って、何だったっけか。

今のジークはずっと、そんな感じだ。

「怖いですか？誰かを愛するのも、愛されるのも」

「……ああ、おっかないね。でも、ずっとこのままってわけにもいかないんだよ」

「…何だ、分かっているんじゃないんですか」

「そりやあ生きちまったんだから、ビクビク怯えてるわけにもいかんでしょ」

「ジークさんはドベちゃんみたいに、もう少し可愛げがあってもいいと思いますけどね」
「ハハ、面白いジークだな」

重い体を動かし、仰向けになったジークは耳をかく。

それでさ、と続けて。

「もし俺の妹みたいなの人間でも、幽霊でも、現れて殺されたとしても文句は言わないな
?」

「もちろん」

「…うん、そっか」

じゃあと、手を広げたジーク。

その中にピークは思い切り飛び込んで、その勢いに「うぐつ」と、彼はうめいた。

ベランダの奥では、夜空がキラキラと光っているのが見える。

不意にその色を目に留めたジークは、妹を思い出し小さく笑う。

最後にジーク・イエーガーが、アウラ・イエーガーの兄であったことに感謝した妹。ジークの意識が落ちる中でもう一言、彼女は言葉を残していた。

『来世は私がもつと、幸せにするから』

その言葉の裏に、「今世を幸せに生きて欲しい」という意味があったのを、兄は理解した。

ついでに、「来世も絶対に付きまとしてやるぜ!!!」という意味の宣言も。

だから、ジークは幸せになろうと思う。時折、死にたい気持ちに駆られながら。その中には、自分を残して死んだ妹への皮肉も込めて。

「本当に、イヤな妹だよ」

そんな妹を、ジークは忘れない。忘れようと思っても、忘れられないだろう。

ジーク・イエーガーは、アウラ・イエーガーを「愛」している。

大切な妹として、これまでも、この先も。

—END—

【小話とあとがき】

—小話（簡条書き）—

・エレン&ミカサ

アウラの粋な計らい(?)によつてヒストリアのお腹に召喚されたエレン。記憶についてでは部分的にしか思い出していない。仲間の前では「エレン」になるが、そのほかの前では普通の子どもになる。ヒストリアには基本普通。彼女が「エレン」と言った場合は、エレンになる。そう遠くないうちにミカサにプロポーズする。ミカサも受け入れる。でも年齢差が約20歳なんじゃあ:(ノブ感)周囲は混乱したけど、かなり寛容的。

両親も。今は温かな目で見守っておこうスタイル。

・アルミン&アニ

アルミンが諦めずアタックし続ければ道はある。何だかんだでアニも絆されつつある。

・コニー・サシャ・ジャン

いつもの三人。コニーはカーチャン戻ってよかったね。

サシャも「お前のために美味しいご飯を作るから、俺と…」な感じでニコロにその内プロポーズされた。でも「美味しいご飯」のところしか聞かずに頷いた。まあ、いいかな様子のサシャだった。

ジャンは血涙を流した。

・リヴァイ&ハンジ

雷槍でリヴァイが大怪我を負ってイエーガー派から逃げた時、「二人で暮らそうか」の言葉を聞いていたリヴァイ。ハンジが合流した時に何か話があるそうだ。え、アレってプロポーズじゃなかったんですか…？

・パラディ島

みんな常通り働いている。進展があつたのはオルオとペトラ。

・ライナー

アウラの本性知った後でも、まだ想いを引きずっている。でもヒストリアの手紙の匂いは嗅ぐ。アニはいつまで俺の尻を蹴るんだ……?。

・ピーク

荒れた。でも復活した。男にはモテるけど男運がない。

・戦士候補生

コルトはそのまま軍に入る。ジークとの距離感は微妙。

その他は戦士自体がなくなったため、普通に生活。ファルコとガビはいい感じ。けど将来はマガトへの想いもあるだろうし、支えたいという気持ちでいずれ軍に入るかもしれない。

・ポルコとユミル

ユミルのお兄ちゃんオーラにいつの間にか惹かれていたポルコ。この二人結構倒錯した感情抱いてそう。

・イエレナ

自由の身になった後は、「悪魔教」を作りたいそうです。

・ジーク

これからも妹のことで苦しんで生きてもろて、ドゾ。

でもまあ幸せになれ。来世は(スクカー時空)は一切容赦のなくなった妹が襲来する。

多分。

・奇妙なエビ（回遊魚）

元イメージはアノマロカリス。引きこもり。片想いしてた光るムカデにアタック（捕食）して、無事幸せになりました。よかったね。

・光るムカデ

「えっ?！」

・ユミル

エレミカチャートを堪能できてよかったね。何だかんだで最後は幸せになった。おやすみ。

・アウラ

（ニッコリ）